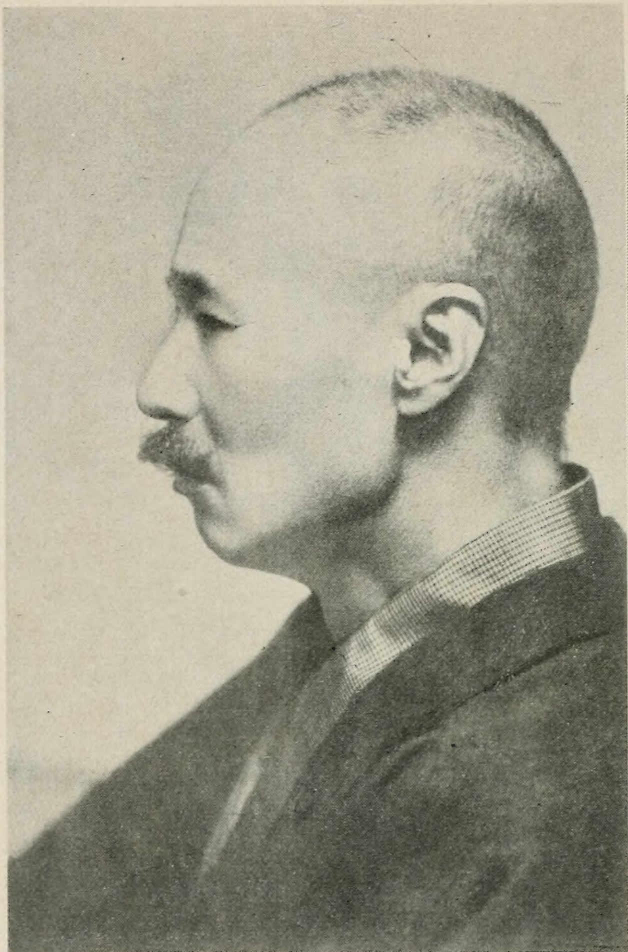
現代日本文學全集

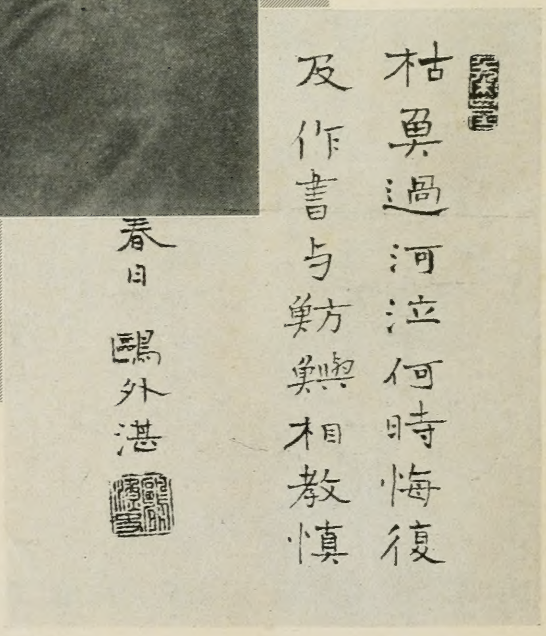


杉浦非水裝幀

森鷗外集

改造社版





晩年の森鷗外氏と
その筆蹟

「森鷗外集」目次

森鷗外小傳

鷗外森林太郎、諱は高湛、源姓、鷗外漁史はその號、別に觀潮樓主人、千朶山房主人、歸休庵と號す。石見國津和野藩主龜井家の臣で、家代々醫を業とし、祖父の頃まで多く藩の典醫に任ぜられた。林太郎は文久二年正月生れ、幼時は國で漢學と蘭學とを受け、明治五年十一歳の時上京して獨逸語を修め、六年東京醫學校に入り、十四年卒業して醫學士となり、その冬陸軍に出仕し、十七年衞生學研究のため獨逸國留學を命ぜられ、ライプチヒ、ミュンヘン、伯林の大學に學び、二十一年九月歸朝した。その間專門醫學の外に、文學、哲學、美術、戲曲等に就ても深い研究を積み、歸朝後は軍醫學校及び陸軍大學校の教官として衞生學を講じ、兵士の食物と日本の家屋に關する實驗に從ひ、傍ら東京美術學校、慶應義塾に於て美術解剖學審美學を講じ、又小說『舞姬』『うたかたの記』『文づかひ』等を發表し、或は『衞生新誌』『醫事新論』等を創刊しては醫學上の意見を吐露し、『しがらみ草紙』を發刊しては文學評論及び歐洲文藝の飜譯紹介に力めた。二十四年醫學博士となり、日淸戰役より臺灣の征討に從ひ、軍醫學校長、近衞師團軍醫部長を經て、豐前國小倉の第十二師團軍醫部長に轉じ、居ること四年第一師團軍醫部長に轉じて東京に歸つた。

日露戰役には第二軍軍醫部長として出征し、金州から奉天まで大小の戰鬪に參加し、凱旋後軍醫學校長事務取扱から、四十年遂に陸軍軍醫總監に進み、醫務局長に補せられた。小倉赴任以來久しく文壇と遠ざかつたが、これより以後創作に、飜譯に、評論に捲土重來の勢を以て活躍を開始し、次で文學博士の學位を受け、文藝委員會委員となり、又每年、文部省美術展覽會審査委員を囑託せられ、大正三年以後は專ら歷史、傳記の方面に筆を執り、無聞の人物を闡明するに努めた。五年醫務局長を辭して豫備に入り、翌年帝室博物館總長兼圖書頭に任ぜられ、帝國美術院長、臨時國語調査會長等を兼ね、十一年七月九日六十一歲で薨去するまで、我邦文化のため努力した。

『キタ・セクスアリス』は幼年より留學までの事を性慾方面から書いたものであり、『舞姬』『うたかたの記』『文づかひ』等は留學中の記念作品といふべく、又『妄想』にもこの頃の事は現れて居る。小倉時代の事は『獨身』『鷄』『二人の友』などに書かれて居るが、本集には收められぬ。猶やゝ詳しい履歷と、本集所收小說の著作年代は、卷尾の年譜を參照せられたい。

林太郎が初て國から出た時は向島小梅町の父の家に同居し、十五年頃父に隨つて北千住に轉じ、獨逸から歸つた年に下谷中根岸に一戶を構へ、幾もなく下谷花園町東照宮裏坂下に徙つた。「しがらみ草紙」を出したのは此時代の事で、幸田露伴、井上通泰、賀古鶴所の諸氏が每夜一時二時頃までも集會して痛飮淋漓文學藝術を論じた。それから二三年して本鄕駒込千駄木町五十七番地、當時太田の原というた處へ引越し、終に團子坂上の千駄木町二十一番地、所謂觀潮樓に移つたのであるが、面白い事はその五十七番地の跡に越して來られたのが漱石先生で、『吾輩は猫である』を書かれた家がそれである。團子坂の家は今紀文と稱せられた細木香以の取卷きの一人小倉是阿彌の舊宅で、それを崩した跡に觀潮樓を建築したのである。日露戰役凱旋後、千葉縣夷隅郡日在に別莊を作り、和漢の詩文集、新刊寄贈の小說類を置いて、時々休息の所として居つた。『妄想』の初めに書かれてゐるのは其處の事であり、八十八といふのも實在の別莊番である。

昭和二年十二月　森潤三郎

即興詩人

初版例言

一、即興詩人は璉馬の人 HANS CHRISTIAN ANDERSEN（1805—1875）の作にして、原本の初板は千八百三十四年に世に公にせられぬ。

二、此譯は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。殆ど九星霜を經たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を屬するは、大抵夜間、若くは大祭日日曜日にして家に在り客に接せざる際に於てす。予は既に、歳月の久しき、嗜好の屢〻變じ、文致の畫一なり難きを憾み、又筆を擱くことの頻にして、興に乘じて揮灑すること能はざるを惜みたりき。世或は予其職を曠しくして、縱に述作に耽ると謂ふ。寃も亦甚しきかな。

三、文中加特力敎の語多し。印刷成れる後、我國公教會の定譯あるを知りぬ。而れども遂に改删すること能はず。

四、此書は印するに四號活字を以てせり。予の母の、年老い目力衰へて、毎に予の著作を讀むことを嗜めるは、此書に字形の大なるを選みし所以の一なり。夫れ字形は大なり。然れども紙面殆ど餘白を留めず、段落猶且連續して書し、以て紙數をして太だ加はらざらしむることを得たり。

明治三十五年七月七日下志津陣營に於いて

譯者識す

第十三版題言

是れ予が壯時の筆に成れる IMPROVISATOREN の譯本なり。國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし、放膽にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を論ずることを須ゐざるべし。初めこれを縮刷に付するに臨み、予は大いに字句を削正せむことを期せしに、會〻歐洲大戰の起るありて、我國も亦其旋渦中に投ずるに至りぬ。羽檄旁午の間、予は僅に假刷紙を一閲することを得しのみ。

大正三年八月三十一日觀潮樓に於いて

譯者又識す

わが最初の境界

羅馬に往きしことある人はピアツツア、バルベリイニを知りたるべし。こは貝殼持てるトリイトンの神の像に造り做したる、美しき噴井ある、大なる廣こうぢの名なり。貝殼よりは水湧き出でゝその高さ數尺に及べり。羅馬に往きしことなき人もかの廣こうぢのさまをば銅板畫にて見つることあらむ。かゝる畫にはヰア、フエリチエの角なる家の見えぬこそ恨なれ。わがいふ家の石垣よりのぞきたる三條の樋の口は水を吐きて石盤に入らしむ。この家はわがためには尋常ならぬおもしろ味あり。そをいかにといふにわれはこの家にて生れぬ。首を回してわが穉かりける程の事をおもへば、目もくるめくはかりいろ／＼なる記念の多きことよ。我はいづこより語り始めむかと心迷ひて爲むすべを知ら

ず。又我世の傳奇の全局を見わたせば、われはいよ／＼これを寫す手段に苦めり。いかなる事をか緊要ならずとして棄て置くべき。いかなる事をか全畫圖をおもひ浮べしめむために殊更に數へ擧ぐべき。わがためには面白きことも外人のためには何の興もなきものあらむ。われは我世のおほいなる夢物語をありのまゝに僞り飾ることなくして語らむとす。されどわれは人の意を迎へて自ら喜ぶ性のこゝにもまぎれ入らむことを恐る。この性は早くもわが穉き時に、畠の中なる雜草の如く萌え出でゝ、やうやく聖經に見えたる芥子の如く高く空に向ひて長じ、つひには一株の大木となりて、その枝の間にわが七情は巣食ひたり。わが最初の記念の一つは既にその芽生を見せたり。おもふにわれは最早六つになりし時の事ならむ。われはおのれより穉き子供二三人と向ひなる尖帽僧の寺の前にて遊びき。寺の扉には小さき眞鍮の十字架を打ち付けたりき。その處はおほよそ扉の中程にてわれは僅に手をさし伸べてこれに達することを得き。母上は我を伴ひてかの扉の前を過ぐるごとに、必ずわれを搔き抱きてかの十字架に接吻せしめ給ひき。あるときわれ又子供と遊びたりしに、甚だ穉き一人がいふやう。いかなれば耶蘇の稚子は一たびもこの群に來て、われ等と共に遊ばざるといひき。われさかしく答ふるやう。むべなり、耶蘇の稚子は十字架にかゝりたればといひき。さてわれ等は十字架の下にゆきぬ。かしこには何物も見えざりしかど、われ等は猶母に教へられし如く耶蘇に接吻せむとおもひき。さるを我等が口はかしこに屆くべきならねば、我等はかはる／＼抱き上げて接吻せしめき。一人の子のさし上げられて僅に脣を尖らせたるを、抱いたる子力足らねば落しつ。この時母上通りかゝり給へり。この遊のさまを見て立ち住まり、指組みあはせて宣ふやう。汝等はまことの天使なり。さて汝はといひさして、母上はわれに接吻し給ひ、汝はわが天使なりといひ給ひき。

母上は隣家の女子の前にて、わがいかに罪なき子なるかを繰り返して語り給ひぬ。われはこれを聞きしが、この物語はいたくわが心に協ひたり。わが罪なきことは固よりこれがために前には及ばずなりぬ。人の意を迎へて自ら喜ぶ性の種は、この時始めて日光を吸ひ込みたりしなり。造化は我におとなしく軟なる心を授けたりき。さるを母上はつねに我がこゝろのおとなしきを我に告け、わがまことに持てる長處と母上のわが持てりと思ひ給へる長處とを我にさし示して、小兒の罪なさはかの醜き「バジリスコ」の獸におなじきをおもひ給はざりき。かれもこれもおのが姿を見るときは死なでかなはぬ者なるを。

彼尖帽宗の寺の僧にフラア、マルチノといへるあり。こは母上の懺悔を聞く人なりき。かの僧に母上はわがおとなしさを告げ給ひき。祈のこゝろをばわれ知らざりしかど、祈の詞をばわれ善く諳じて漏らすことなかりき。僧は我をかはゆきものにおもひて、あるとき我に一枚の圖をおくりしことあり。圖の中なる聖母のこぼし給ふおほいなる涙の露は地獄の燄の上におちかかれり。亡者は爭ひてかの露の滴りおつるを承けむとせり。僧は又一たびわれを伴ひてその僧舍にかへりぬ。當時わが目にとまりしは、方なる形に作りたる圓柱の廊なりき。廊に圍まれたるは小き馬鈴薯圃にて、そこにはいとすぎ（チプレッソオ）の木二株、檸檬の木一株立てりき。開け放ちたる廊には世を逝りし僧どもの像をならべ懸けたり。部屋といふ部屋の戸には獻身者の傳記より撰び出したる畫圖を貼り付けたり。當時わがこの圖を視し心は、後になりてラフアエロ、アンドレア、デル　サルトオが作を

観る心におなじかりき。

　僧はそちは心猛き童なり、いで死人を見せむといひて、小き戸を開きつ。こゝは廊より二三級低きところなりき。われは延かれて級を降りて見しに、こゝも小き廊にて、四圍悉く髑髏なりき。髑髏は髑髏と接して壁を成し、壁はその竝びざまにて許多の小龕に分れたり。おほいなる龕には頭のみならで、胴をも手足をも具へたる骨あり。こは高位の僧のみまかりたるなり。かゝる骨には褐色の尖帽を被せて、腹に縄を結び、手には一巻の經文若くは枯れたる花束を持たせたり。贄卓、花形の燭臺、そのほかの飾をば肩胛、脊椎などにて細工したり。人骨の浮彫あり。これのみならず忌はしくも、又趣なきはこゝの拵へざまの全體なるべし。僧は祈の詞を唱へつゝ行くに、われはひたと寄り添ひて從へり。僧は唱へ畢りていふやう。われも早晩こゝに眠らむ。その時汝はわれを見舞ふべきかといふ。われは一語をも出すこと能はずして、僧と僧のめぐりなる氣味わるきものとを驚き眙たり。まことに我が如き稚子をかゝるところに伴ひ入りしは、いとおろかなる業なりき。われはかしこにて見しものに心を動かさるること甚しかりければ、歸りて僧の小房に入りしとき纔に生き返りたるやうなりき。この小房の窓には黄金色なる柑子のいと美しきありて、殆ど一間の中に垂れむとす。又聖母の畫あり。その姿は天使に擔ひ上げられて、日光明なるところに浮び出でたり。下には聖母の息ひたまひし墓穴ありて、もゝいろちいろの花これを掩ひたり。われはかの柑子を見、この畫を見るに及びて、わづかに我にかへりしなり。

　この始めて僧房をたづねし時の事は、久しき間わが空想に好き材料を與へき。今もかの時の事をおもへば、めづらしくあざやかに目の前に浮び出でむとす。わが當時の心にては、僧といふ者は全く我等の知りたる常の人とは殊なるやうなりき。かの僧が褐色の衣を着たる死人の殆どおのれとおなじさまなると共に棲めること、かの僧があまたの尊き人の上を語り、あまたの不思議の蹟を話すこと、かの僧の尊さをば我母のいたく敬ひ給ふことなどを思ひ合する程に、われも人と生れたる甲斐にかゝる人にならばやと折々おもふことありき。

　母上は未亡人なりき。活計を立つるには、鍼仕事して得給ふ錢と、むかし我等が住みたりしおほいなる部屋を人に借して得給ふ價とあるのみなりき。われ等は屋根裏の小部屋に住めり。かのおほいなる部屋に引き移りたるはフェデリゴといふ年少き畫工なりき。フェデリゴは心敏く世をおもしろく暮らす少年なりき。かれはいともいと遠きところより來ぬといふ。母上の物語り給ふを聞けば、かれが故郷にては聖母をも耶蘇の稚子をも知らずとぞ。その國の名をば嗹馬といへり。當時われは世の中にいろ〳〵の國語ありといふことを解せねば、畫工が我が言ふことを曉らぬを耳とほきがためならむとおもひ、おなじ詞を繰り返して聲の限り高くいふに、かれはわれを可笑しきものにおもひて、をりをり果をわれに取らせ、又わがために兵卒、馬、家などの形をゑがきあたへしことあり。われと畫工とは幾時も立たぬに中善くなりぬ。われは畫工を愛しき。母上もをり〳〵かれは善き人なりと宣ひき。さるほどにわれはとある夕母上とフラア、マルチノとの話を聞きしが、これを聞きてよりわがかの技藝家の少年の上をおもふ心あやしく動かされぬ。かの異國人は地獄に墜ちて永く浮ぶ瀬あらざるべきかと母上問ひ給ひぬ。そはひとりかの男の上のみにはあらじ。異國人のうちにはかの男の如く惡しき事をば一たびもせざるもの多し。かの輩は貧き人に逢ふときは物取らせて吝むことなし。かの輩は債ある

ときは期を愆たず額をたがへずして拂ふなり。然のみならず、かの輩は吾邦人のうちなる多人數の作る如き罪をば作らざるやうにおもはる、母上の問はおほよそ此の如くなりき。

フラア、マルチノの答へけるやう。さなり。まことにいはるゝ如き事あり。かの輩のうちには善き人少からず。されどおん身は何故に然るかを知り給ふか。見給へ。世中をめぐりありく惡魔は、邪宗の人の所詮おのが手に落つべきを知りたるゆゑ、強ひてこれを誘はむとすることなし。このゆゑに彼輩は何の苦もなく善行をなし、罪惡をのがる。善き加特力教徒はこれと殊にて神の愛子なり、これを陥れむには惡魔はさまざまの手立を用ゐざること能はず。惡魔はわれ等を誘ふなり。われ等は弱きものなればその手の中に落つること多し。されど邪宗の人は肉體にも惡魔にも誘はるゝことなしと答へき。

母上はこれを聞きて復た言ふべきこともあらねば、便なき少年の上をおもひて大息つき給ひぬ。かたへ聞せしわれは泣き出しつ。こはかの人の永く地獄にありて燄に苦められむつらさをおもひければなり。かの人は善き人なるに、わがために美しき畫をかく人なるに。

わが稚きころ、わがためにおほいなる意味ありと覺えし第三の人はペッポのをぢなりき。惡人ペッポといふも西班牙磴の王といふも皆その人の綽號なりき。此王は日ごとに西班牙磴の上に出御ましましき。（西班牙廣こうぢよりモンテ、ピンチョオの上なる街に登るには高く廣き石級あり。この石級は羅馬の乞兒の集まるところなり。西班牙廣こうぢより登るところなればかく名づけられしなり。）ペッポのをぢは生れつき兩の足痿えたる人なり。當時そを十字に組みて折り敷き居たり。されど稚きときよりの熟練にて、をぢは兩手もて歩くこといと巧なり。其手には革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をぢがこの道具にて歩む速さは健かなる脚もて行く人に劣らず。をぢは日ごとに上にもいへるが如く西班牙磴の上に坐したり。さりとて外の乞兒の如く憐を乞ふにもあらず。唯ゞおのが前を過ぐる人あるごとに、詐ありげに面をしかめて「ボン、ジョオルノオ」（我俗の今日はといふ如し）と呼べり。日は既に入りたる後もその呼ぶ詞はかはらざりき。母上はこのをぢを敬ひ給ふことさまでならざりき。あらず。親族にかゝる人あるをば心のうちに恥ぢ給へり。されど母上はしばしば我に向ひて、そなたのためなれば、彼につきあひおくとのたまひき。餘所の人の此世にありて求むるものをば、かの人皆その底に藏めて持ちたり。若し臨終に、寺に納めだにせずば、そを讓り受くべき人、わが外にはあらぬを、母上は恃みたまひき。をぢも我に親むやうなるところありしが、我は其側にあるごとに、まことに喜ばしくおもふこと絶てなかりき。或る時、我はをぢの振舞を見て、心に怖を懐きはじめき。こは、をぢの本性をも見るに足りぬべき事なりき。例の石級の下に老いたる盲の乞兒ありて、往きかふ人の、バヨッコ（我一錢許に當る銅貨）一つ投げ入れむを願ひて、薄葉鐵の小筒をさらさらと鳴らし居たり。我がをぢは、面にやさしげなる色を見せて、帽を揮り動しなどすれど、人々その前をばいたづらに過ぎゆきて、かの盲人の何の會釋もせざるに、錢を與へき。三人かく過ぐるまでは、をぢは傍より見居たりしが、四人めの客かの盲人に小貨幣二つ三つ與へしとき、をぢは毒蛇の身をひねりて行く如く、石級を下りて、盲の乞兒の面を打ちしに、盲の乞兒は錢をも杖をも取りおとしつ。ペッポの叫びけるやう。うぬは盜人なり。我錢を竊む奴なり。立派に癈人といはるべき身にもあらで、たゞ目の見えぬを手柄顏に、

わが口に入らむとする「パン」を奪ふこそ心得られねといひき。われはこゝまでは聞きつれど、こゝまでは見てありつれど、この時買ひに出でたる、一「フォリエッタ」(一勺)の酒をひさげて、急ぎて家にかへりぬ。

大祭日には、母につきてをぢがり祝にゆきぬ。その折には苞苴もてゆくことなるが、そはをぢが嗜めるおほ房の葡萄二つ三つか、さらずば砂糖につけたる林檎なんどなりき。われはをぢ御と呼びかけて、その手に接吻しき。をぢはあやしげに笑ひて、われに半「バヨッコ」を與へ、果子をな買ひそ、果子は食ひ畢りたるとき、迹かたもなくなるものなれど、この錢はいつまでも貯へらるゝものぞと教へき。

をぢが住めるところは、暗くして見苦しかりき。一間には窓といふものなく、また一間には壁の上の端に、破硝子を紙もて補ひたる小窓ありき。臥所の用をもなしたる大箱と、衣を藏むる小櫃二つとの外には、家具といふものなし。をぢがり往け、といはるゝときは、われ必ず泣きぬ。これも無理ならず。母上はをぢにやさしくせよ、と我にをしへながら、我を嚇さむとおもふときは、必ずをぢを案山子に使ひ給ひき。母上の宣たまひけるやう。かく惡劇せば、好きをぢ御の許にやるべし。さらば汝も磴の上に坐して、をぢと共に袖乞するならむ。歌をうたひて「バヨッコ」をめぐまるゝを待つならむとの給ふ、われはこの詞を聞きても、あながち恐るゝことなかりき。母上は我をいつくしみ給ふこと、目の球にも優れるを知りたれば。

向ひの家の壁には、小龕をしつらひて、それに聖母の像を据ゑ、その前にはいつも燈を燃やしたり。「アヱ、マリア」の鐘鳴るころ、われは近隣の子供と像の前に跪きて歌ひき。燈の光ゆらめくときは、聖母も、いろ〳〵の紐、球、銀色したる心の臓などにて飾りたる耶蘇の子も、共に動きて、我等が面を見て笑み給ふ如くなりき。われは高く朗なる聲して歌ひしに、人々聞きて善き聲なりといひき。或る時英吉利人の一家族、我歌を聞きて立ちとまり、歌ひ畢るを待ちて、長らしき人われに銀貨一つ與へき。母に語りしに、そなたが聲のめでたさ故、とのたまひき。されどこの詞はその後我祈を妨ぐることゝいふばかりなりしを知らず。それよりは、聖母の前にて歌ふごとに、聖母の上をのみ思ふこと能はずして、必ず我聲の美しきを聞く人やあると思ひ、かく思ひつゝも、聖母のわがあだし心を懐けるを嫉み給はむかとあやぶみ、聖母に向ひて罪を謝し、あはれなる子に慈悲の眸を垂れ給へと願ひき。

わが餘所の子供に出で逢ふは、この夕の祈の時のみなりき。わが世は靜けかりき。わが自ら作りたる夢の世に心を潛め、仰ぎ臥して開きたる窓に向ひ、伊太利の美しき青空を眺め、日の西に傾くとき、紫の光ある雲の黄金色したる地の上に垂れかゝりたるをめで、時の遷るを知らざることしば〳〵なりき。ある時は、遠くクヰリナアル(丘の名にて、其上に法皇の宮居あり)と家々の棟とを越えて、紅に染まりたる地平線のわたりに、眞黑に浮き出でゝ見ゆる「ピニヨロ」の木々の方へ、飛び行かばや、と願ひき。我部屋には、この眺ある窓の外、中庭に向へる窓ありき。我家の中庭は、隣の家の中庭に並びて、いづれもいと狹く、上の方は木の「アルタナ」(物見のやうにしたる屋根)にて鎖されたり。庭ごとに石にて甃みたる井ありしが、家々の壁と井との間をば、人ひとり僅かに通らるゝほどなれば、我は上より覗きて、二つの井の内を見るのみなりき、緑なるほうらいしだ(アヂアンツム)生ひ茂りて、深きところは唯ゞ黑くのみぞ見えたる。俯してこれを見るたびに、われは地の底を見おろすやうに覺えて、こゝにも怪しき境あ

りとおもひき。かゝるとき、母上は杖の尖にて窓硝子を浄め、なんぢ井に墜ちて溺れだにせずば、この窓に當りたる木々の枝には、汝が食ふべき果おほく熟すべしとのたまひき。

隧道、ちご

我家に宿りたる畫工は、廓外に出づるをり、我を伴ひゆくことありき。畫を作る間は、われかれを妨ぐることなかりき。さて作り畢りたるとき、われ穉き物語して慰むるに、かれも今はわが國の詞を解して、面白がりたり。われは既に一たび畫工に隨ひて、「クリア、ホスチリア」にゆき、昔游戯の日まで猛獸を押し込めおきて、つねに無辜の俘囚を獅子、「イエナ」獸なんどの餌としたりと聞く、かの暗き洞の深き處まで入りしことあり。洞の裡なる暗き道に、我等を導きてくゞり入り、燃ゆる松火を、絶えず石壁に振り當てたる僧、深き池の水の、鏡の如く明にて、目の前には何もなきやうなれば、その足もとまで湛へ寄せたるを知らむには、松火もて觸れ探らではかなけざるほどなる、いづれもわが空想を激したりき。われは怖をば懐かざりき。そは危しといふことを知らねばなりけり。

街のはつる處に「コリゼエオ」(大戯棚)の頂見えたるとき、われ等はかの洞の方へゆくにや、と畫工に問ひしに、否、あれよりは遙に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたをも景色と倶に寫すべし、と答へき。葡萄圃の間を過ぎ、

古の混堂の址を圍みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。緑の枝を手折りて、車の上に插し、農夫はその下に眠りたるに、馬は車の片側に吊り下げたる一束の秣を食ひつゝ、ひとり徐に歩みゆけり。やうやう女神エジェリアの洞にたどり着きて、われ等は朝餐を食べ、岩間より湧き出づる泉の水に、葡萄酒混ぜて飲みき。洞の裏には、天井にも四方の壁にも、すべて絹、天鵞絨なんどにて張りたらむやうに、緑こまやかなる苔生ひたり。露けく茂りたる蔦の、おほいなる洞門にかゝりたるさまはカラブリア州の谿間なる葡萄架を見る心地す。洞の前數歩には、その頃いと寂しき一軒の家ありて、「カタコンバ」のうちの一つに造りかけたりき。この家今は潰えて斷礎をのみぞ留めたる。「カタコンバ」は人も知りたる如く、羅馬城とこれに接したる村々とを通ずる隧道なりしが、半はおのづから壞れ、半は盜人、ぬけうりする人なんどの隱家となるを厭ひて、石もて塞がれたるなり。當時猶存じたるは聖セバスチアノ寺の内なる穹窿の墓穴よりの入口と、わが言へる一軒家よりの入口とのみなりき。さてわれ等はかの一軒家のうちなる入口より進み入りしが、おもふに最後に此道を通りたるはわれ等二人なりしなるべし。いかにといふに此入口はわれ等が危き目に逢ひたる後、いまだ幾もあらぬに塞がれて、後には寺の内なる入口のみ殘りぬ。かしこには今も僧一人居りて、旅人を導きて穴に入らしむ。

深きところには、軟なる土に掘りこみたる道の行き違ひたるあり。その枝の多き、その樣の相似たる、おもなる筋を知りたる人も踏み迷ふべきほどなり。われは穉心に何ともおもはず。畫工はまた豫め其心して、我を伴ひ入りぬ。先づ蠟燭一つ點し一つをば猶衣のかくしの中に貯へおき、一卷の絲の端を入口に結びつけ、さて我手を引きて進み入りぬ。忽ち天井低くなりて、われのみ立ちて歩まるゝところあり、忽ち又岐路の出づるところ廣がりて方形をなし、見上ぐるばかりなる穹窿をなしたるあり。われ等は中央に小き石卓を据ゑたる圓堂を過りぬ。こゝは始て基督教に歸依したる人々の、異教の民に逐はるゝごとに、ひそかに集りて神に仕へまつりしところなりとぞ。フェデリゴはこゝに

て、この壁中に葬られたる法皇十四人、その外數千の獻身者の事を物語りぬ、われ等は石龕のわれ目に燭火さしつけて、中なる白骨を見き。（この墓には何の飾もなし。拿破里に近き聖ヤヌアリウスの「カタコンバ」には聖像をも文字をも彫りつけたるあれど、これも技術上の價あるにあらず。基督教徒の墓には、魚を彫りたり。希臘文の魚といふ字は「イヒトユス」なれば、暗に「イエソウス、クリストス、テオウ、ウイオス、ソオテエル」の文の首字を集めて語をなしたるなり。此希臘文はこゝに耶蘇基督神子救世者と云ふ。）われ等はこれより入ること二三歩にして立ち留りぬ。ほぐし來たる絲はこゝにて盡きたればなり。畫工は絲の端を搭鈕の孔に結びて、蠟燭を拾ひ集めたる小石の間に立て、さてそこに蹲りて、隧道の模樣を寫し始めき。われは傍なる石に踞けて合掌し、上の方を仰ぎ視るたり。燭は半ば流れたり。されどさきに貯へおきたる新なる蠟燭をば、今取り出してその側におきたる上、火打道具さへ帶びたれば、消えなむ折に火を點すべき用意ありしなり。

われはおそろしき暗黑天地に通ずる幾條の道を望みて、心の中にさま〴〵の奇怪なる事をおもひ居たり。この時われ等が周圍には寂として何の聲も聞えず、唯ゝ忽ち斷え忽ち續く、物寂しき岩間の雫の音を聞くのみなりき。われはかく由なき妄想を懷きてしばしあたりを忘れ居たるに、ふと心づきて畫工の方を見やれば、あな訝かし、畫工は大息つきて一つところを馳せめぐりたり。その間かれは頻に俯して、地上のものを搜し索むる如し。かれは又火を新なる蠟燭に點じて再びあたりをたづねたり。その氣色たゞならず覺えければ、われも立ちあがりて泣き出しつ。

この時畫工は聲を勵まして、こは何ごとぞ、善き子なれば、そこに坐りゐよ、と云ひしが、又眉を顰めて地を見たり　われは畫工の手に取りすがりて。最早登りゆくべし、こゝには居りたくなし、とむつかりたり。畫工は、そちは善き子なり、畫かきてや遣らむ、菓子をや與へむ、こゝに錢もあり、といひつゝ、衣のかくしを探して、財布を取り出し、中なる錢をば、ことごとく我に與へき。我はこれを受くるとき、畫工の手の氷の如く冷になりて、いたく震ひたるに心づきぬ。我はいよ〳〵騷ぎ出し、母を呼びてます〳〵泣きぬ。畫工はこの時我肩を摑みて、劇しくゆすり搖かし、靜にせずば打擲せむ、といひしが、急に手巾を引き出して、我腕を縛りて、しかと其端を取り、さて俯してあまたたび我に接吻し、かはゆき子なり、そちも聖母に願へ、といひき。絲をや失ひ給ひし、と我は叫びぬ。今こそ見出さめ、といひ〳〵、畫工は又地上をかいさぐりぬ。

さる程に、地上なりし蠟燭は流れ畢りぬ。手に持ちたる蠟燭も、かなたこなたを搜し索むる忙しさに、流るゝこといよ〳〵早く、今は手の際まで燃え來りぬ。畫工の周章は大方ならざりき。そも無理ならず。若し絲なくして歩を運ばば、われ等は次第に深きところに入りて、遂に活路なきに至らむも計られざればなり。畫工は再び氣を勵まして探りしが、こたびも絲を得ざりしかば、力拔けて地上に坐し、我頭を抱きて大息つき、あはれなる子よ、とつぶやきぬ。われはこの詞を聞きて、最早家に還られざることぞ、とおもひければ、いたく泣きぬ。畫工にあまりに緊しく抱き寄せられて、我が縛られたる手はゐざり落ちて地に達したり。我は覺えず塵の間に指さし入れしに、例の絲を撮み得たり。こゝにこそ、と我呼びしに、畫工は我手を摻りて、物狂ほしきまでよろこびぬ。あはれ、われ等二人の命はこの絲にぞ繫ぎ留められける。

われ等の再び外に歩み出でたるときは、日の

暖に照りたる、天の蒼く晴れたる、木々の梢のうるはしく緑なる、皆常にも増してよろこばしかりき。フェデリゴは又我に接吻して、衣のかくしより美しき銀の錶を取り出し、これをば汝に取らせむ、といひて與へき。われはあまりの嬉しさに、けふの恐ろしかりし事共、はや悉く忘れ果てたり。されど此事を得忘れ給はざるは、始終の事を聞き給ひし母上なりき。フェデリゴはこれより後、我を伴ひて出づることを許されざりき。フラア、マルチノもいふやう。かの時二人の命の助かりしは、全く聖母のおほん惠にて、邪宗のフェデリゴが手には授け給はざる綫を、善き神に仕ふる、やさしき子の手には與へ給ひしなり。されば聖母の恩をば、身を終ふるまで、ゆめ忘るゝこと勿れといひき。

フラア、マルチノがこの詞と、或る知人の戯に、アントニオはあやしき子なるかな、うみの母をば愛するやうなれど、外の女をばことごとく嫌ふと見ゆれば、あれをば、人となりて後僧にこそすべきなれ、といひしことあるとにより、て、母上はわれに出家せしめむとおもひ給ひき。まことに我は奈何なる故とも知らねど、女といふ女は側に來らるゝだに厭はしう覺えき。母上のところに來る婦人は、人の妻ともいはず、處女ともいはず、我が稚き詞にて、このあやしき小僧の心を語るを聞きて、いとおもしろき事におもひ做し、強ひて我に接吻せむとしたり。就中マリウチアといふ娘は、この戯にて我を泣かすること屢なりき。マリウチアは活潑なる少女なりき。農家の子なれど、裁縫店にて雛形娘をつとむるゆゑ、華靡やかなる色の衣をよそひて、幅廣き白き麻布もて髮を卷けり。この少女フェデリゴが畫の雛形をもつとめ、又母上のところにも遊びに來て、その度ごとに自らわがいひなづけの妻なりといひ、我を小き夫なりといひて、迫りて接吻せむとしたり。われ諾はねば、この少女しばしば武を用ゐき。或る日われまた脅されて泣き出しゝに、さても猶稚兒なりけり、乳房啣ませずては、啼き止むまじ、とて我を掻き抱かむとす。われ慌てゝ迯ぐるを、少女はすかさず追ひすがりて、兩膝にて我身をしかと挾み、いやがりて振り向かむとする頭を、やうやう胸の方へ引き寄せたり。われは少女が插したる銀の矢を拔きたるに、豐なる髮は波打ちて、我身をも、露れたる少女が肩をも掩はむとす。母上は室の隅に立ちて、笑みつゝマリウチアがなすわざを勸め勵まし給へり。この時フェデリゴは戸の片蔭にかくれて、竊に此群をゑがきぬ。われは母上にいふやう。われは生涯妻といふものをば持たざるべし。われはフラア、マルチノの君のやうなる僧とこそならめといひき。

夕ごとにわが怪しく何の詞もなく坐したるを、母上は出家せしむるにたよりよき性なりとおもひ給ひき。われはかゝる時、いつも人となりたる後、金あまた得たらむには、いかなる寺、いかなる城をか建つべき、寺の主、城の主となりなむ日には、カルヂナアレの僧の如く、赤き馬車に乘りて、金色に裝ひたる僕あまた隨へ、そこより出入せむとおもひき。或るときは又フラア、マルチノに聞きたる、種々なる獻身者の話によそへて、おのれ獻身者とならむをりの事をおもひ、世の人いかにおのれを責むとも、おのれは聖母のめぐみにて、つゆばかりも苦痛を覺えざるべしとおもひき。殊に願はしく覺えしは、フェデリゴが故郷にたづねゆきて、かしこなる邪宗の人々をまことの道に歸依せしむる事なりき。

母上のいかにフラア、マルチノと謀り給ひて、その日とはなりけむ。そはわれ知らでありしに、或る朝母上は、我に小き衣を着せ、其上に白衣を打掛け給ひぬ。此白衣は膝のあたりまで屆き

て、寺に仕ふる兒の着るものに同じかりき。母上はかく爲立てゝ、我を鏡に向はせ給ひき。我は此日より尖帽宗の寺にゆきてちごとなり、火伴の童達と共に、おほいなる吊香爐を提げて儀にあづかり、また贄卓の前に出で、讃美歌をうたひき。總ての指圖をばフラア、マルチノなしつ。われは幾程もあらぬに、小き寺のうちに住み馴れて、贄卓に畫きたる神の使の童の額を悉く記え、柱の上なるうねりたる模様を識り、瞑目したるときも、醜き龍と戰ひたる、美しき聖ミケルを面前に見ることを得るやうになり、銷床に刻みたる髑髏の、緑なる蔦かづらにて編みたる環を戴けるを見てはさま／＼の怪しき思をなしき。（聖ミケルが大なる翼ある美少年の姿にて、惡鬼の頭を踏みつけ、槍をその上に加へたるは、名高き畫なり。）

美小鬟、即興詩人

萬聖祭には亡人と倶に骨龕にありき。こはフラア、マルチノの嘗て我を伴ひて入りにしところなり。僧どもは皆經を誦するに、我は火伴の童二人と共に、髑髏の贄卓の前に立ちて、提香爐を振り動したり。骨もて作りたる燭臺に、けふは火を點したり。僧侶の遺骨の手足全きは、けふ額に新しき花の環を戴きて、手に露けき花の一束を取りたり。この祭にも、いつもの如く、人あまた集ひ來ぬ。歌ふ僧の「ミゼレエレ（「ミゼレエレ、メイ、ドミネ」、主よ、我を愍み給へ、と唱へ出す加特力教の歌をいふ）唱へはじむるとき、人々は膝を屈めて拜したり。髑髏の色白みたる、髑髏と我との間に渦卷ける香の烟の怪しげなる形に見ゆるなどを、我は久しく打ち目守り居たりしに、こはいかに、我身の周圍の物、皆獨樂の如くに廻り出しつ。物を見るに、すべて大なる虹を隔てゝ望むが如し。耳には寺の鐘百ばかりも、一時に鳴るらむやうなる音聞ゆ。我心は早き流を舟にて下る如くにて、譬へむやうなく目出たかりき。これより後の事は知らず。我は氣を喪ひき。人あまた集ひて、鬱陶しくなりたるに、我空想の燃え上りたるや、この眩暈のもととなりけむ。醒めたるときは、寺の園なる檸檬の木の下にて、フラア、マルチノが膝に抱かれ居たり。

わが夢の裡に見きといふ、首尾整はざる事を、フラア、マルチノを始として、僧ども皆神の業なりといひき。聖のみたまは面前を飛び過ぎ給ひしかど、はかなき童のそのひかり耀けるさまに堪へで、卒倒したるならむといひき。これより後、われは怪しき夢をみること頻なりき。そを母上に語れば、母上は又友なる女どもに傳へ給ひき。そが中には、われまことにさる夢を見しにはあらねど、見きと詐りて語りしもありき。これによりて、我を神のおん子なりとする、人々の惑は、日にけに深くなりまさりぬ。

さる程に嬉しき聖誕祭は近づきぬ。つねは山住ひする牧者の笛ふき、ピッフェラリとなりたるが、短き外套肩に、紐あまた下げ、尖りたる帽を戴き、聖母の像ある家ごとに音信れ來て、救世主の誕れ給ひしは今ぞ、と笛の音に知らせありきぬ。この單調にして悲しげなる聲を聞きて、我は朝な／＼覺むるが常となりぬ。覺むれば說教の稽古す。おほよそ聖誕日と新年との間には、「サンタ、マリア、アラチエリ」の寺なる基督の像のみまへにて、童男童女の說教あること、年ごとの例なるが、我はことし其一人に當りたるなり。

吾齡は甫めて九つなるに、かしこにて說教せむこと、いとめでたき事なりとて、歡びあふは、母上、マリウチア、我の三人のみかは。わがありあふ卓の上に登りて、一たびさらへ聞かせたるを聞きし、畫工フェデリゴもことなうめでたがりぬ。さて其日になりければ、寺のうちなる

卓の上に押しあげられぬ。我家のとは違ひて、この卓には毯を被ひたり。われはよその子供の如く、諳じたるまゝの説教をなしき。聖母の心より血汐出でたる、幼き基督のめでたさなど、説教のたねなりき。我番になりて、衆人に仰ぎ見られしとき、我胸躍りしは、恐ろしさゆゑにはあらで、喜ばしさのためなりき。これ迄の小兒の中にて、尤も人々の氣に入りしもの、即ち我なること疑なかりき。さるをわが後に、卓の上に立たせられたるは、小き女の子なるが、その言ふべからず優しき姿、驚くべきまでしをらしき顏つき、調清き樂に似たる聲音に、人々これぞ神のみつかひなるべき、とさゝやきぬ。母上は、我子に優る子はあらじ、といはまほしう思ひ給ひけむが、これさへ聲高く、あの女の子の贄卓に畫ける神のみつかひに似たることよ、とのたまひき。母上は我に向ひて、かの女子の怪しく濃き目の色、鴉青いろの髮、をさなくて又怜悧げなる顏、美しき紅葉のやうなる手などを、繰りかへして譽め給ふに、わが心には妬ましきやうなる情起りぬ。母上は我上をも神のみつかひに譬へ給ひしかども。

鶯の歌あり。まだ巣ごもり居て、薔薇の枝の緑の葉を啄めども、今生ぜむとする蕾をば見ざりき。二月三月の後、薔薇の花は開きぬ。今は鶯これにのみ鳴きて聞かせ、つひには刺の間に飛び入りて、血を流して死にき。われ人となりて後、しば／＼此歌の事をおもひき。されど「アラチェリ」の寺にては、我耳も未だこれを聞かず、我心も未だこれを會せざりき。

母上、マリウチア、その外女どもあまたの前にて、寺にてせし説教をくりかへすこと、しばしばありき。わが自ら喜ぶ心はこれにて慰められき。されど我が未だ語り厭かぬ間に、かれ等は早く聽き倦みき。われは聽衆を失はじの心より、自ら新しき説教一段を作りき、その詞は、まことの聖誕日の説教といはむよりは、寺の祭を敍したるものといふべき詞なりき。そを最初に聞きしはフェデリゴなるが、かれは打ち笑ひ乍らも、そちが説教は兎も角もフラア、マルチノが教へしよりは善し、そちが身には詩人や舍れる、といひき。フラア、マルチノより善しといへる詞は、わがためにいと喜ばしく、さて詩人とはいかなるものならむとおもひ煩ひ、おそらくは我身の内に舍れる善き神のみつかひならむと判じ、又夢のうちに我に面白きものを見するものにやと疑ひぬ。

母上は家を離れて遠く出で給ふこと稀なりき。されば或日の暮すぎ、トラステエエル（テエエル河の右岸なる羅馬の市區）なる友だちを訪はむ、とのたまひしは、我がためには祭に往くごとくなりき。日曜に着る衣をきよそひぬ。中單の代にその頃着る習なりし絹の胸當をば、針にて上衣の下に縫ひ留めき。領巾をば幅廣き襞に摺みたり。頭には縫とりしたる帽を戴きつ。我姿はいとやさしかりき。

とぶらひ畢りて、家路に向ふころは、はや頗る遲くなりたれど、月影さやけく、空の色青く、風いと心地好かりき。路に近き丘の上には、「チプレッソオ」「ピニヨロ」なんどの常磐樹立てるが、怪しげなる輪廓を、鋭く空に畫きたり。人の世にあるや、とある夕べ何事もあらざりしを、久しくえ忘れぬやうに、美しう思ふことあるものなるが、かの歸路の景色、また然る類なりき。國を去りての後も、テエエルの流のさまを思ふごとに、かの夕の景色のみぞ心には浮ぶなる。黄なる河水のいと濃けに見ゆるに、月の光はさしたり。碾穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる橋柱、黒き影を印して立てり。この景色心に浮べば、あの折の心輕げなる少女さへ、扁鼓手に把りて、「サルタレルロ」舞ひつゝ過ぐらむ心地す。（「サルタレルロ」の事をば聊註す

べし。こは單調なる曲につれて踊り舞ふ羅馬の民の技藝なり。一人にて踊ることあり。又二人にても舞へど、その身の相觸るゝことはなし。大抵男子二人、若くは女子二人なるが、跳ぬる如き早足にて半圏に動き、その間手をも休むることなく、羅馬人に產れ付きたる、しなやかなる振をなせり。女子は裳裾を搴ぐ。鼓をば自ら打ち、又人にも打たす。其調の變化といふは、唯遲速のみなり。」サンタ、マリア、デルラ、ロツンダの街に來て見れば、こゝはまだいと賑はし。魚蠟の烟を風のまに／＼吹き靡かせて、前に木机を据ゑ、そが上に月桂の青枝もて編みたる籠に貨物を載せたるを飾りたるは、肉鬻ぐ男、果賣る女などなり。剝栗竝べたる釜の下よりは、火燄立昇りたり。賈人の物いひかはす聲の高きは、伊太利ことば知らぬ旅人聞かば、命をも顧みざる爭とやおもふらむ。魚賣る女の店の前にて、母上識る人に逢ひ給ひぬ。女子の間とて、物語長きに、店の蠟燭流れ盡きむとしたり。さて連れ立ちて、其人の家の戶口までおくり行くに、街の上はいふもさらなり、「コルソオ」の大道さへ物寂しう見えぬ。されど美しき水盤を築きたるピアッツア、チ、トレヰイに曲り出でしときは、又賑はしきさま前の如し。

こゝに古き殿づくりあり。意なく投げ疊ねたらむやうに見ゆる、礎の間より、水流れ落ちて、月は恰も好し棟の上にぞ照りわたれる。河の神の像は、重き石衣を風に吹かせて、大なる瀧を見おろしたり。瀧のほとりには、喇叭吹くトリイトンの神二人海馬を馭したり。その下には、豐に水を湛へたる大水盤あり。盤を繞れる石級を見れば農夫どもあまた心地好げに月明の裡に臥したり。截り碎きたる西瓜より、紅の露滴りたるが其傍にあり。骨組太き童一人、身に着けたるものとては、薄き汗衫一枚、鞣革の袴一つなるが、その袴さへ、膝鈕脱れて膝のあたりに垂れかゝりたるを、心ともせずや、「キタルラ」の絃、おもしろげに搔き鳴して坐したり。忽にして歌ふこと一句、忽にして又奏づること一節。農夫どもは掌打ち鳴しつ。母上は立ちとまり給ひぬ。この時童の歌ひたる歌こそは、いたく我心を動かしつれ。あはれ此歌よ。こは尋常の歌にあらず。この童の歌ふは、目の前に見え、耳のほとりに聞ゆるが儘なりき。母上も我も亦曲中の人となりぬ。さるに其歌には韻脚あり、其調はいと妙なり。童の歌ひけるやう。青き空を衾として、白き石を枕としたる寢ごゝろの好さよ。かくて笛手二人の曲をこそ聞け。童は斯く歌ひて、「トリイトン」の石像を指したり。童の又歌ひけるやう。こゝに西瓜の血汐を酌める、百姓の一群は、皆戀人の上安かれと祈るなり。その戀人は今は寢て、聖ピエトロの寺の塔、その法皇の都にゆきし、人の上をも夢みるらむ。人々の戀人の上安かれと祈りて飮まむ。又世の中にあらむ限の、箭の手開かぬ少女が上をも、皆安かれと祈りて飮まむ。（箭の手開かぬ少女とは、髮に插す箭をいへるにて、處女の箭には握りたる手あり、嫁ぎたる女の箭には開きたる手あり。）かくて童は、母上の脇を捫りて、さて母御の上をも、又その童の鬚生ふるやうになりて、迎へむ少女の上をも、と歌ひぬ。母上善くぞ歌ひしと讚め給へば、農夫どももジヤコモが旨さよ、と手打ち鳴してさゞめきぬ。この時ふと小き寺の石級の上を見しに、こゝには識る人ひとりあり。そは鉛筆取りて、この月明の中なる群を、寫さむとしたる畫工フェデリゴなりき。歸途には畫工と、母上と、かの歌うたひし童の上につきて、語り戲れき。その時畫工は、かの童を即興詩人とぞいひける。

フェデリゴの我にいふやう。アントニオ聞け。そなたも即興の詩を作れ。そなたは固より詩人なり。たゞ例の說教を韻語にして歌へ。こ

れを聞きて、我初めて詩人といふことあきらかにさとれり。まことに詩人とは、見るもの、聞くものにつけて、おもしろく歌ふ人にぞありける。げにこは面白き業なり。想ふにあながち難からむとは思はれず、「キタルラ」一つだにあらましかば。わが初の作の料になりしは、向ひなる枯肉舖なりしこそ可笑しけれ。此家の貨物の排べ方は、旅人の目にさへ留まるやうなりければ、早くも我空想を襲ひしなり。月桂の枝美しく編みたる間には、おほいなる駝鳥の卵の如く、乾酪の塊懸りたり。「オルカノ」の笛の如く、金紙巻きたる燭は竝び立てり。柱のやうに立てたる腸づめの肉の上には、琥珀の如く光を放ちて、「パルミジヤノ」の乾酪据わりたり。夕になれば、燭に火を點ずるほどに、其光は腸づめの肉と「プレシチウットオ」(らかん)との間に燃ゆる、聖母像前の紅玻璃燈と共に、この幻の境を照せり。我詩には、店の卓の上なる猫兒、店の女房と價を爭ひたる、若き「カップチノ」僧さへ、殘ることなく入りぬ。此詩をば、幾度か心の内にて吟じ試みて、さてフェデリゴに歌ひて聞かせしに、フェデリゴめでたがりければ、つひに家の中に廣まり、又街を踰えて、向ひなるひものやの女房の耳にも入りぬ。女房聞きて、げに珍らしき詩なるかな、「ダンテ」の神曲とはかゝるものか、とぞ稱へける。

　これを手始に、物として我詩に入らぬはなきやうになりぬ。我世は夢の世、空想の世となりぬ。寺にありて、僧の歌ふとき、提香爐を打ち振りても、街にありて、叫ぶ賈人、轟く車の間に立ちても、聖母の像と靈水盛りたる瓶の下なる、小き臥所の中にありても、たゞ詩をおもふより外あらざりき。冬の夕暮、鍛冶の火高く燃えて、道ゆく百姓の立ち倚りて手を温むるとき、我は家の窓に坐して、これを見つゝ、時の過ぐるを知らず。かの鍛冶の火の中には、我空想の世の如き殊なる世ありとぞ覺えし。北山おろし劇しうして、白雪街を籠め、廣こうぢの石の「トリイトン」に氷の鬚おふるときは、我喜限なかりき。憾むらくは、かゝる時の長からぬことよ。かゝる日には、年ゆたかなる兆とて、羊の裘きたる農夫ども、手を拍ちて「トリイトン」のめぐりを踊りまはりき。噴き出づる水に雨は、晴れなむとする空にかゝれる虹の影映りて。

花祭

六月の事なりき。年ごとにジェンツァノにて執行せらるゝ、名高き花祭の期は近づきぬ。(ジェンツァノはアルバノ山間の小都會なり。羅馬と沼澤との間なる街道に近し。)母上とも、マリウチアとも仲好き女房ありて、かしこなる料理屋の妻となりたり。(伊太利の小料理屋にて「オステリア、エエ、クチイナ」と招牌懸けたる類なるべし。)母上とマリウチアとが此祭にゆかむと約したるは、數年前よりの事なれども、いつも思ひ掛けぬ事に妨けられて、えも果さゞりき。今年は必ず約を履まむとなり。道遠ければ、祭の前日にいで立たむとす。かしまだちの前の夕には、喜ばしさの餘に、我眠の穩ならざりしも、理なるべし。

　「エッツリノ」といふ車の門前に來しときは、日未だ昇らざりき。我等は直に車に上りぬ。是れより先には、われ未だ山に入りしことあらざりき。祭の事を思ひての喜に胸さわぎのみぞせられたる。身の邊なる自然と生活とを、人となりての後、當時の情もて觀ましかば、我が作る詩こそ類なき妙品ならめ。街道の靜けさ、鐵物いかめしき閭門、見わたす限遙なるカムパニアの野邊に、物寂しき墳墓のところ〴〵に立てる、遠山の裾を罩めたる濃き朝霧など、我がためにはこたび觀るべき、めでたき祕事の前兆の

如くおもはれぬ。道の傍に十字架あり。そが上には枯髏殘れり。こは幸なき人を脅したる報に、こゝに刑せられし強人の骨なるべし。これさへ我心を動すことたゞならざりき。山中の水を羅馬の市に導くなる、許多の筧の數をば、はじめこそ讀み見むとしつれ、幾程もあらぬに、倦みて思ひとゞまりつ。さて我は母上とマリウチアとに問ひはじめき。壞れ傾きたる墓標のめぐりにて、牧者が焚く火は何のためぞ。羊の群のめぐりに引きめぐらしたる網は何のためぞ。問はるゝ人はいかにうるさかりけむ。

アルバノに着きて車を下りぬ。こゝよりアリチアを越す美しき道の程をば徒にてぞゆく。木犀草(レセダ)又はにほひあらせいとう(ヘイランツス)の花など道の傍に野生したり。綠なる葉の茂れる橄欖樹の蔭は涼しくして、憩ふ人待貌なり。遠き海をば、我も望み見ることを得き。十字架立ちたる山腹を過ぐるとき、少女子の一群笑ひ戯れて過ぐるに逢ひぬ。笑ひ戯れながらも、十字架に接吻することをば忘れざりき。アリチアの寺の屋根、黑き橄欖の林の間に見えたるをば、神の使が戯に据ゑかへたる聖ピエトロ寺の屋根ならむとおもひき。索にて牽かれたる熊の、人の如くに立ちて舞へるあり。人あまた其周につどひたり。熊を牽ける男の吹く笛を聞けば、こは羅馬に來し聖母の前に立ちて吹く、「ピッフェラリ」が曲におなじかりき。男に軍曹と呼ばるゝ猿あり。美しき軍服着て、熊の頭の上、背の上などにて翻筋斗す。われは面白さにこゝに止らむとおもふほどなりき。ジェンツァノの祭も明日のことなれば、止まればとて遲るゝにもあらず。されど母上は早く往きて、友なる女房の環飾編むを助けむとのたまへば、甲斐なかりき。

幾程もなく到り着きて、アンジェリカが家をたづね得つ。ジェンツァノの市にて、ネミといふ湖に向へる方にありき。家はいとめでたし。壁よりは泉湧き出でゝ、石盤に流れ落つ。驢馬あまたそを飲まむとて、めぐりに集ひたり。

料理屋に立ち入りて見るに賑しき物音我等を迎へたり。竈には火燃えて、鍋の裡なる食は煮え上りたり。長き卓あり。市人も田舎人も、それに倚りて、酒飲み、醃藏にせる肴を食へり。聖母の御影の前には、青磁の花瓶に、美しき薔薇花を活けたるが、其傍なる燈は、棚引く烟に壓されて、善くも燃えず。帳場のほとりなる卓に置きたる乾酪の上をば、猫跳り越えたり。鷄の群は、我等が脚にまつはりて、踏まるゝをも厭はじと覺ゆ。アンジェリカは快く我等を迎へき。險しき梯を登りて、烟突の傍なる小部屋に入り、こゝにて食を饗せられき。我心にては、國王の宴に召されたるかとおぼえつ。物として美しからぬはなく、「フォリエッタ」の葡萄酒さへ其瓶に飾ありて、いとめでたかりき。瓶の口に栓がはりに挿したるは、纔に開きたる薔薇花なり。主客三人の女房、互に接吻したり。我も否とも諾とも云ふ暇なくして、接吻せられき。母上片手にて我頰を撫り、片手にて我衣をなほし給ふ。手尖の隱るゝ迄袖を引き、又頸を越すまで襟を揚げなどして、やうやう心を安じ給ひき。アンジェリカは我を佳き兒なりと讃めき。

食後には面白き事はじまりぬ。紅なる花、綠なる梢を摘みて、環飾を編まむとて、人々皆出でぬ。低き戸口をくゞれば庭あり。そのめぐりは幾尺かあらむ。すべてのさま唯ゞ一つの四阿屋めきたり。細き欄をば、こゝに野生したる蘆薈の、太く堅き葉にて援けたり。これ自然の籬なり。看卸せば深き湖の面いと靜なり。昔こゝは火坑にて、一たびは焔の柱天に朝したることもありきといふ。庭を出でゝ山腹を歩み、大なる葡萄架、茂れる「プラタノ」の林の

ほとりを過ぐ。葡萄の蔓は高く這ひのぼりて、林の木々にさへ纏ひたり。彼方の山腹の尖りたるところにネミの市あり。其影は湖の底に印りたり。我等は花を採り、枝を折りて、且行き且編みたり。あらせいとうの間には、露けき橄欖の葉を織り込めつ。高き青空と深き碧水とは、乍ち草木に遮られ、乍ち又一様なる限なき色に現れ出づ。我がためには、物としてめでたく、珍らかならざるなし。平和なる歡喜の情は、我魂を震はしめき。今に到るまで、この折の事は、埋沒したる古城の彩石壁畫の如く、我心目に浮び出づることあり。

日は烈しかりき。湖の畔に降りゆきて、葡萄蔓纏へる「プラタノ」の古樹の、長き枝を水の面にさしおろしたる蔭にやすらひたる時、我等は纔に涼しさを迎へて、編みものに心籠むることを得つ。水草の美しき頭の、蔭にありて、徐に頷くさま、夢みる人の如し。これをも折りて編み込めつ。暫しありて、日の光は最早水面に及ばずなりて、ネミとジェンツァノとの家々の屋根をさまよへり。我等が坐したるところは、次第にほの暗うなりぬ。我は遊ばむとて、群を離れたれど、岸低く、湖の深きを母上氣づかひ給へば、數步の外には出でざりき。こゝには古きヂアナの祠の址あり。その破壞して形ばかりになりたる裡に、大なる無花果樹あり。蔦蘿は隙なきまでに、これにまつはりたり。われは此樹に攀ぢ上りて、環飾編みつゝ、流行の小歌うたひたり。

"—Ah rosi, rosi fiori,
Un mazzo di violi
Un gelsomin d'amore—"

(あはれ、赤き、赤き花よ。
菫の束よ。
戀のしるしの素馨「ジェルソミノ」の花よ。)

この時あやしく咳枯れたる聲にて、歌ひつぐ人あり。

"—Per dar al mio bene!"

(摘みて取らせむその人に。)

忽ちフラスカアチの農家の婦人の裝したる嫗ありて、我前に立ち現れぬ。その背はあやしき迄直なり。その顏の色の目立ちて黑く見ゆるは、頭より肩に垂れたる、長き白紗のためにや。膚の皺は繁くして、縮めたる網の如し。黑き瞳は眶を塡めむ程なり。この嫗は初め微笑みつゝ我を見しが、俄に色を正して、我面を打ちまもりたるさま、傍なる木に寄せ掛けたる木乃伊にはあらずや、と疑はる。暫しありていふやう。花はそちが手にありて美しくぞなるべき。彼の目には福の星ありといふ。我は編みかけたる環飾を、我脣におし當てたるまゝ、驚きて彼の方を見上げたり。嫗またいはく。その月桂の葉は、美しけれど毒あり。飾に編むは好し。脣にな當てそといふ。此時アンジエリカ籬の後より出でゝいふやう。賢き老嫗、フラスカアチのフルヰヤ。そなたも明日の祭の料にとて、環飾編まむとするか。さらずは日のカムパニヤのあなたに入りてより、常ならぬ花束を作らむとするかといふ。嫗はかく問はれても、顧みもせで我面のみ打ち目守り、詞を續ぎていふやう。賢き目なり。日の金牛宮を過ぐるとき誕れぬ。名も財も牛の角にかゝりたりといふ。此時母上も步み寄りてのたまふやう。吾子が受領すべきは、緇き衣と大なる帽となり。かくて後は、護摩焚きて神に仕ふべきか、棘の道を走るべきか。そはかれが運命に任せてむ、とのたまふ。嫗は聞きて、我を僧とすべしといふ意ぞ、とは心得たりと覺えられき。されど當時は、我等悉く嫗が詞の顚末を解することは能はざりき。嫗のいふやう。あらず。此兒が衆人の前にて説くところは、げに格子の裏なる尼少女の歌より優しく、アルバノの山の雷より烈しかるべし。さ

れどその時戴くものは大なる帽にあらず。福の座は、かの羊の群の間に白雲立てる、カヲの山より高きものぞといふ。この詞のめでたげなるに、母上は喜び給ひながら、猶訝しげにもてなして、太き息つきつゝ宣給ふやう。あはれなる兒なり。行末をば聖母こそ知り給はめ。アルバノの農夫の車より福の車は高きものを、かゝるをさな子のいかでか上り得むとのたまふ。嫗のいはく。農車の輪のめぐるを見ずや。下なる輻は上なる輻となれば、足を低き輻に踏みかけて、旋るに任せて登るときは、忽ち車の上にあるべし。（アルバノの農車はいと高ければ、農夫等かくして登るといふ。）唯ゝ道なる石に心せよ。市に舞ふ人もこれに躓く習ぞといふ。母上は半ば戯のやうに、さらばその福の車に、われも倶に登るべきか、と問ひ給ひしが、俄に打ち驚きてあなやと叫び給ひき。この時大なる鷙鳥ありて、さと落し來たりしに、その翼の前なる湖を撃ちたるとき、飛沫は我等が面を濕しき。雲の上にて、鋭くも水面に浮びたる大魚を見付け、矢を射る如く來りて摑みたるなり。刃の如き爪は魚の背を穿ちたり。さて再び空に揚らむとするに、騷ぐ波にて濺るにも、その大さはよの常ならぬ魚にしあれば、力を極めて引かれじと爭ひたり。鳥も打ち込みたる爪拔けざれば、今更にその獲ものを放つこと能はず。魚と鳥との鬪はいよ〳〵激しく、湖水の面ゆらぐまにまに幾重ともなき大なる環を畫き出せり。鳥の翼は忽ち斂まり、忽ち放たれ、魚の背は浮ぶかと見れば又沈みつ。數分時の後、雙翼靜に水を蔽ひて、鳥は憩ふが如く見えしが、俄にはたゝく勢に、偏翼摧け折るゝ聲、岸のほとりに聞えぬ。鳥は殘れる翼にて、二たび三たび水を敲き、つひに沈みて見えずなりぬ。魚は最後の力を出して、敵を負ひて水底に下りしならむ。鳥も魚も、しばしが程に、底のみくづとなるならむ。我等は詞もあらで、此光景を眺め居たり。事果てゝ後顧みれば、かの嫗は在らざりき。

我等は詞少く歸路をいそぎぬ。森の木葉のしげみは、闇を吐き出だす如くなれど、夕照は湖水に映じて纔にゆくてに迷はざらしむ。この時聞ゆる單調なる物音は粉碾車の轢るなり。すべてのさま物凄く恐ろしげなり。アンジエリカはゆく〳〵怪しき老女が上を物語りぬ。かの嫗は藥草を識りて、能く人を癒し、能く人を惑はしむ。オレワアノといふ所に、テレザといふ少女ありき。ジユウゼツペといふ若者が、山を越えて北の方へゆきたるを戀ひて、日にけに瘦せ衰へけり。嫗さらば其男を喚び返して得させむとてテレザが髮とジユウゼツペが髮とを結び合せて、銅の器に入れ、藥草を雜へて煮き。ジユウゼツペは其日より、晝も夜も、テレザが上のみ案ぜられければ、何事をも打ち棄てゝ歸り來ぬとぞ。我は此物語を聞きつゝ、「アエ、マリア」の祈をなしつ。アンジエリカが家に歸り着きて、我心は纔におちゐたり。

新に編みたる環飾一つを懸けたる、眞鍮の燈には、四條の心に殘なく火を點し、「モンツアノ、アル、ポミドロ」といふ旨きものに、善き酒一瓶を添へて供せられき。農夫等は下なる一間にて飲み歌へり。二人代る〴〵唱へ、末の句に至りて、座客齊しく和したり。我が子供と共に、燃ゆる竈の傍なる聖母の像のみまへにゆきて、讚美歌唱へはじめしとき、農夫等は聲を止めて、我曲を聽き、好き聲なりと稱へき。その嬉しさに我は暗き林をも、怪しき老女をも忘れ果てつ。我は農夫等と共に、即興の詩を歌はむとおもひしに、母上とゞめて宣給ふやう。そちは香爐を提ぐる子ならずや。行末は人の前に出でゝ、神のみことばをも傳ふべきに、今いかでかさる戲せらるべき。謝肉の祭はまだ來ぬものを、とのたまひき。されど我がアンジエ

リカが家の廣き臥床に上りしときは、母上我枕の低きを厭ひて、肱さし伸べて枕せさせ、頼ある子ぞ、と胸に抱き寄せて眠り給ひき。我は旭の光窓を照して、美しき花祭の我を喚び醒すまで、穩なる夢を結びぬ。

その旦先づ目に觸れし街の有樣、その彩色したる活畫圖を、當時の心になりて寫し出さむには、いかに筆を下すべきか。少しく爪尖あがりになりたる、長き街をば、すべて花もて掩ひたり。地は青く見えたり。かく色を揃へて花を飾るには、園生の草をも、野に茂る枝をも、摘み盡し、折り盡したるかと疑はる。兩側には大なる綠の葉を、帶の如く引きたり。その上には薔薇の花を隙間なきまで竝べたり。この帶の隣には又似寄りたる帶を引きて、その間をば暗紅なる花もて塡めたり。これを街の氈の小縁とす。中央には黄なる花多く聚めて、その角立ちたる紋を成したる群を星とし、その輪の如き紋を成したる束を日とす。これよりも骨折りて造り出でけむと思はるゝは、人の名頭の字を花もて現したるにぞありける。こゝにては花と花と聯ね、葉と葉と合せて形を作りたり。總ての模樣は、まことに活きたる五色の氈と見るべく、又彩石を組み合せたる牀と見るべし。されどポムペイにありといふ床にも、かく美しき色あるはあらじ。このあした、風といふもの絶てなかりき。花の落着きたるさまは、重き寶石を据ゑたらむが如くなり。窓といふ窓よりは、大なる氈を垂れて石の壁を掩ひたり。この氈も、花と葉とにて織りて、おほくは聖書に出でたる事蹟の圖を成したり。こゝには聖母と穉き基督とを騎せたる驢あり、ジュウゼッペその口を取りたり。顏、手、足なんどをば、薔薇の花もて作りたり。こあらせいとう(マチオラ)の花、青き「アネモネ」の花などにて、風に翻りたる衣を織り成せり。その冠を見れば、ネミの湖にて摘みたる白き睡蓮(ニュムフェア)の花なりき。かしこには尊きミケルの毒龍と鬪へるあり。尊きロザリアは深碧ある地球の上に、薔薇の花を散らしたり。いづかたに向ひて見ても、花は我に聖書の事蹟を語れり。いづかたに向ひて見ても、人の面は我と同じく樂しげなり。美しき衣着裝ひて、出張りたる窓に立てるは、山のあなたより來し異國人なるべし。街の側には、おのがじし飾り繕ひたる人の波打つ如く行くあり。街の曲り角にて、大なる噴井のあるところに、母上は腰掛け給へり。我は水よりさしのぞきたるサチロ(羊脚の神)の神の頭の前に立てり。

日は烈しく照りたり。市中の鐘ことごとく鳴りはじめぬ。この時美しき花の氈を踏みて、祭の行列過ぐ。めでたき音樂、謳歌の聲は、その近づくを知らせたり。贊欄の前には、兒あまた提香爐を振り動かして歩めり。これに續きたるは、こゝらあたりの美しき少女を撰り出でて、花の環を取らせたるなり。もろ肌ぬぎて、翼を負ひたる、あはれなる小兒等は、高卓の前に立ちて、神の使の歌をうたひて、行列の來るを待てり。若人等は尖りたる帽の上に、聖母の像を印したる紐のひら〳〵としたるを付けたり。鎖に金銀の環を繋ぎて、頸に懸けたり。斜に肩に掛けたる、彩りたる紐は、黑大鵝絨の上衣に映じて美し。アルバノ、フラスカアチの少女の群は、髮を編みて、銀の簪にて留め、薄き面紗の端を、やさしく髻の上にて結びたり。エルレトリの少女の群は、頭に環かざりを戴き、美しき肩、圓き乳房の露るゝやうに着たる衣に、襟の邊より、彩りたる巾を下げたり。アプルッチイよりも、大澤よりも、おほよそ近きほとりの民悉くつどひ來て、おの〳〵古風を存じたる打扮したれば、その入り亂れたるを見るときは、餘所の國にはあるまじき奇觀なるべし。花を飾りたる天蓋の下に、華美なる式

の衣を着けて歩み來るは、「カルチナアレ」なり。さま〴〵の宗派に屬する僧は、燃ゆる蠟燭を取りてこれに隨へり。行列のことごとく寺を離るゝとき、群衆はその後に跟いて動きはじめき。我等もこの間にありしが、母上はしかと我肩を按へて、人に押し隔てられじとし給へり。我等は人に揉まれつゝ歩を移せり。我目に見ゆるは、唯ゞ頭上の靑空のみ。忽ち我等がめぐりに、人々の諸聲に叫ぶを聞きつ。我等は彼方へおし遣られ、又此方へおし戻されき。こは一二頭の佚馬の物に怯ぢて駈け出したるなり。われは纔にこの事を聞きたる時、騷ぎ立ちたる人に推し倒されぬ。目の前は黑くなりて、頭の上には瀑布の水灑り落つる如くなりき。

あはれ、神の母よ、哀なる事なりき。われは今に至るまで、その時の事を憶ふごとに、身うち震ひて止まず。我にかへりしとき、マリウチアは泣き叫びつゝ、我頭を膝の上に載せ居たり。側には母上地に横り居給ふ。これを圍みたるは、見もしらぬ人々なり。馬は車を引きたる儘にて、仆れたる母上の上を過ぎ、轍は胸を碎きしなり。母上の口よりは血流れたり。母上は早や事きれ給へり。

人々は母上の目を瞑らせ、その掌を合せたり。この掌の溫きをば今まで我肩に覺えしものを。遺體をば、僧たち寺に舁き入れぬ。マリウチアは手に淺痍負ひたる我を伴ひて、さきの酒店に歸りぬ。きのふは此酒店にて、樂しき事のみおもひつゝ、花を編み、母上の腕を枕にして眠りしものを。當時わがいよ〳〵まことの孤になりしをば、まだ熟くも思ひ得ざりしかど、わが穉き心にも、唯ゞ何となく物悲しかりき。人々は我に果子、くだもの、玩具など與へて、なだめ賺し、おん身が母は今聖母の許にいませば、日ごとに花祭ありて、めでたき事のみなりといふ。又あすは今一度母上に逢はせむと慰めつ。人々は我にはかく云ふのみなれど、互にさゝやきあひて、きのふの鷙鳥の事、怪しき媼の事、母上の夢の事など語り、誰も〳〵母上の死をば豫め知りたりと誇れり。

暴馬は街はづれにて、立木に突きあたりて止まりぬ。車中よりは、人々齡四十の上を一つ二つ踰えたる貴人の驚怖のあまりに氣を喪はむとしたるを助け出だしき。人の噂を聞くに、この貴人はボルゲエゼの族にて、アルバノとフラスカアチとの間に、大なる別墅を構へ、そこの苑にはめづらしき草花を植ゑて樂とせりとなり。世にはこの翁もあやしき藥草を知ること、かのフルヰアといふ媼に劣らずなど云ふものありとぞ。此貴人の使なりとて、「リフレア」着たる僕盾銀(スクヂイ)二十枚入りたる嚢を我に貽りぬ。

翌日の夕まだ「アヱ、マリア」の鐘鳴らぬほどに、人々我を伴ひて寺にゆき、母上に暇乞せしめき。きのふ祭見にゆきし晴衣のまゝにて、狹き木棺の裡に臥し給へり。我は合せたる掌に接吻するに、人々共音に泣きぬ。寺門には柩を擔ふ人立てり。送りゆく僧は白衣着て、帽を垂れ面を覆へり。柩は人の肩に上りぬ。「カップチノ」僧は蠟燭に火をうつして挽歌をうたひ始めたり。マリウチアは我を牽きて柩の旁に隨へり。斜日は蓋はざる棺を射て、母上のおん顏は生けるが如く見えぬ。知らぬ子供あまたおもしろげに我めぐりを馳せ廻りて、燭涙の地に墜ちて凝りたるを拾ひ、反古を捩りて作りたる筒に入れたり。我等が行くは、きのふ祭の行列の過りし街なり。木葉も草花も猶地上にあり。されど當時織り成したる華紋は、吾少時の福と倶に、きのふの祭の樂と倶に、今や跡なくなりぬ。幽堂の穹窿を塞ぎたる大石を推し退け、柩を下しゝに、底なる他の柩と相觸れて、かすかなる響をなせり。僧等の去りしあとにて、マリ

ウチアは我を石上に跪かせ、「オオラ、プロオ、ノオビス」（禱爲我等）を唱へしめき。

ジェンツァノを立ちしは月あかき夜なりき。フェデリゴと知らぬ人ふたりと我を伴ひゆく。濃き雲はアルバノの巓を繞れり。我がカムハニアの野を飛びゆく輕き霧を眺むる間、人々はもの言ふこと少かりき。幾もあらぬに、我は車の中に眠り、聖母を夢み、花を夢み、母上を夢みき。母上は猶生きて、我にものいひ、我顏を見てほゝゑみ給へり。

蹇丐

羅馬なる母上の住み給ひし家に歸りし後、人々は我をいかにせむかと議するが中に、フラア、マルチノはカムハニアの野に羊飼へる、マリウチアが父母にあづけむといふ。盾銀二十は、牧者が上にては得易からぬ寶なれば、この兒を家におきて養ふはいふもさらなり、又心のうちに喜びて迎ふるならむ。さはあれ、この兒は既に半ば出家したるものなり。カムハニアの野にゆきては、香爐を提げて寺中の職をなさむやうなし。かくマルチノの心たゆたふと共に、フェデリゴも云ふやう。われは此兒をカムパニアにやりて、百姓にせむこと惜しければ、この羅馬市中にて、然るべき人を見立て、これにあづくるに若かずといふ。マルチノ思ひ定めかねて、僧たちと葬らむとて去る折柄、ペッポのをぢは例の木履を手に穿きてゐざり來ぬ。をぢは母上のみまかり給ひしを聞き、又人の我に盾銀二十を貽りしを聞き、母上の追悼よりは、かの金の發落のこゝろづかひのために、こゝには訪れ來ぬるなり。をぢは聲振り立てゝいふやう。この孤の族にて世にあるものは、今われひとりなり。孤をばわれ引き取りて世話すべし。その代りには、此家に殘りたる物悉くわが方へ受け收むべし。かの盾銀二十は勿論なりといふ。

マリウチアは臆面せぬ女なれば、進み出でゝ、おのれフラア、マルチノ其餘の人々とこゝの始末をば油斷なく取り行ふべければ、おのが一身をだにもてあましたる乞丐の益なきこと言はむより、疾く歸れといふ。フェデリゴは席を立ちぬ。マリウチアとペッポのをぢとは、跡に殘りてはしたなく言ひ罵り、いづれも多少の利慾を離れざる、きたなき爭をなしたり。マリウチアのいふやう。この兒をさほど欲しと思はゞ、直に連れて歸りても好し。若し肋二三本打折りて、おなじやうなる畸形となし、往來の人の袖に縋らせむとならば、それも好し。盾銀二十枚をば、われこゝに持ち居れば、フラア、マルチノの來給ふまで、決して他人に渡さじといふ。ペッポ怒りて、頑なる女かな、この木履もてそちが頭に、ピアッツァ、デル、ポヽロの通衢のやうなる穴を穿けむと叫びぬ。われは二人が間に立ちて、泣き居たるに、マリウチアは我を推しやり、をぢは我を引き寄せたり。をぢのいふやう。唯ゝ我に隨ひ來よ。我を賴めよ。この負擔だに我方にあらば、その報酬も受けらるべし。羅馬の裁判所に公平なる沙汰なからむや。かく云ひつゝ、強ひて我を扯きて戸を出でたるに、こゝには襤褸着たる童ありて、一頭の驢を牽けり。をぢは遠きところに往くとき、又急ぐことあるときは、枯れたる足を、驢の兩脇にひたと押し付け、おのが身と驢と一つ體になりたるやうにし、例の木履のかはりに走らするが常なれば、けふもかく騎りて來しなるべし。をぢは我をも驢背に抱き上げたるに、かの童は後より一鞭加へて驅け出させつ。途すがらをぢは、いつもの厭はしきさまに賺し慰めき。見よ吾兒、よき驢にあらずや。走るさまは、「コルツオ」の競馬にも似ずや。我家にゆき着かば、樂しき世を送らせむ。神の使もえ享けぬやうなる饗應すべし。この話の末は、マリウチアを罵る千言

萬句、いつ果つべしとも覺えざりき。をぢは家を遠ざかるにつれて、驢を策たしむること少ければ、道行く人々皆このあやしき兩騎に目を注けて、美しき兒なり、何處よりか盜み來し、と問ひぬ。をぢはその度ごとに我身上話を繰り返しつ。この話をば、ほと／＼道の曲りめごとに淺へ行くほどに、賣漿婆はをぢが長物語の酬に、檸檬水一杯を白にて與へ、をぢと我とに分ち飲ましめ、又別に臨みて我に核の落ち去りたる松子一つ得させつ。

まだをぢが栖にゆき着かぬに、日は暮れぬ。我は一言をも出さず、顔を掩うて泣き居たり。をぢは我を抱き卸して、例の大部屋の側なる狹き一間につれゆき、一隅に玉蜀黍の葉敷きたるを指し示し、あれこそ汝が臥所なれ、さきには善き檸檬水呑ませたれば、まだ喉も乾かざるべく、腹も減らざるべし、と我頬を撫でゝ微笑みたる、その面恐しきこと譬へむに物なし。マリウチアが持ちたる嚢には、猶銀幾ばくかある。駁者に與ふる錢をも、あの中よりや出しゝ。貴人の僕は、金もて來しとき、何といひしか。かく問ひ掛けられて、我はたゞ知らずとのみ答へ、はては泣聲になりて、いつまでもこゝに居ることにや、あすは家に歸らるゝことにや、と問ひぬ。勿論なり。いかでか歸られぬ事あらむ。おとなしくそこに寐よ。「アヱ、マリア」を唱ふることを忘るな。人の眠る時は鬼の醒めたる時なり。十字を截りて寐よ。この鐵壁をば吼る獅子も越えずといふ。神を祈らば、あのマリウチアの魔女が、そちにも我にも蠱伎を掛けたるを訴へて、毒に中り、惡瘡を發するやうに呪へかし。おとなしく寐よ。小窓をば開けておくべし。涼風は夕餉の半といふ諺あり。蝙蝠をなおそれそ。かなたこなたへ飛びめぐれど、入るものにはあらず。神の子と共に熟寐せよ。斯く云ひ畢りて、をぢは戸を鎖ざして去りぬ。

をぢの部屋には久しく立ち働く音聞えしが、今は人あまた集へりと覺しく、さまざまの聲して、戸の隙よりは光もさしたり。部屋のさまは見まほしけれど、枯れたる玉蜀黍の葉のさわさわと鳴らば、おそろしきをぢの又入來ることもやと、いと徐に起き上りて、戸の隙に目をさし寄せつ。燈心は二すぢともに燃えたり。卓には麪包あり、萊菔あり。一瓶の酒を置いて、丐兒あまた杯のとりやりす。一人として畸形ならぬはなし。いつもの顔色には似もやらねど、知らぬものにはあらず。其はモンテ、ピンチョオの草を褥とし、繃帶したる頭を木の幹によせかけ、僅に脣を搖すのみにて、傍に侍らせたる我妻といふ女に、熱にて死に垂んとしたる我夫を憐み給へ、といはせたるロレンツォは、高趺かきて面白げに饒舌り立てたり。（註。モンテ、ピンチョオには公園あり。西班牙磴、法蘭西大學院よりポルタ、デル、ポヽロに至る。羅馬の市の過半とヰルラ、ボルゲエゼの內苑とは、こゝより見ゆ。）十指墮ちたるフランチアは盲婦テレチナが肩を叩きて、「カワリエ、レ、トルキノ」の曲を歌へり。戸に近き二人三人は蔭になりて見えわかず。話は我上なり。我胸は騷ぎ立ちぬ。あの小童物の用に立つべきか、身內に何の畸形なるところかある、と一人云へば、をぢ答へて。聖母は無慈悲にも、創一つなく育たせしに、丈伸びて美しければ、貴族の子かとおもはるゝ程なりといふ。幸なきことよ、と皆口々に笑ひぬ。瞽たるカテリナのいふやう。さりとて聖母の天上の飯を賜ふまでは、此世の飯をもらふすべなくては叶はず。手にもあれ、足にもあれ、人の目に立つべき創つけて、我等が群に入れよといふ。をぢ。否々母親だに迂闊ならずば、今日を待たず、善き金の蔓となすべかりしものを。神の使のやうなる善き聲なり。法皇の伶人には恰好なる童なり。人々は我齡を算へ、

我がために作さでかなはぬ事を商量したり。その何事なるかは知らねど、善きことにはあらず。奈何してこゝをば遁れむ。われは稚心にあらむ限りの智慧を絞り出しつ。固よりいづこをさして往かむと迄は、一たびも思ひ計らざりき。鋪板を這ひて窓の下にいたり、木片ありしを踏臺にして窓に上りぬ。家は皆戸を閉ぢたり。街には人行絶えたり。遁るゝには飛びおるより外に道なし。されどそれも恐ろし。とつおいつする折しも、この狹き間の戸ざしに手を掛くる如き音したれば、覺えず窓緣をすべりおちて、石垣づたひに地に墜ちぬ。身は少し痛みしが、幸にこゝは草の上なりき。

跳ね起きて、いづくを宛ともなく、狹く曲りたる巷を走りぬ。途にて逢ひたるは、杖もて敷石を敲き、高聲にて歌ふ男一人のみなりき。しばらくして廣きところに出でぬ。こゝは見覺あるフォオルム、ロマアヌムなりき。常は牛市と呼ぶところなり。

露宿、わかれ

月はカピトリウム(羅馬七陵の一)の背後を照せり。セプチミウス、セエルス帝の凱旋門に登る礎の上には、大外套被りて臥したる乞兒二三人あり。古の神殿のなごりなる高き石柱は、長き影を地上に印せり。われはこの夕まで、日暮れてこゝに來しことなかりき。鬼氣は少年の衣を襲へり。歩をうつす間、高草の底に横はりたる大理石の柱頭に躓きて倒れ、また起き上りて帝王堡の方を仰ぎ見つ。高き石がきは、纏はれたる蔦かづらのために、いよゝおそろし氣なり。青き空をかすめて、ところどころに立てるは、眞黒におほいなるいとすぎの木なり。毀れたる柱、碎けたる石の間には、放飼の驢あり、牛ありて草を食みたり。あはれ、こゝには猶我に迫り、我を窘めざる生物こそあれ。

月あきらかなれば、物として見えぬはなし。遠き方より人の來り近づくあり。若し我を索むるものならば奈何せむ。われは巨巖の如くに我前に在る「コリゼエオ」に隱れたり。われは猶きのふ落したる如き重廊の上に立てり。こゝは暗くして且冷なり。われは二あし三あし進み入りぬ。されど谺響にひゞく足音おそろしければ、徐に歩を運びたり。先の方には焚火する人あり。三人の形明に見ゆ。寂しきカムパニアの野邊を夜更けては過ぎじとて、こゝに宿りし農夫にやあらむ。さらずばこゝを戍る兵士にや。はた盜にや。さおもへば打物の石に觸る音も聞ゆる如し。われは卻歩して、高き圓柱の上に、木梢と蔦蘿とのおほひをなしたるところに出でぬ。石がきの面をばあやしき影往來す。處々に抽け出でたる截石の將に墜ちむとして僅に懸りたるさま、唯ゞ蔓草にのみ支へられたるかと疑はる。

上の方なる中の廊を行く人あり。旅人の此古跡の月を見むとて來ぬるなるべし。その一群のうちには白き衣着たる婦人あり。案内者に續松とらせて行きつゝ、柱しげき間に、忽ち顯れ忽ち隱るゝ光景今も見ゆらむ心地す。

暗碧なる夜は大地を覆ひ來たり。高低さまざまなる木は天鵝絨の如き色に見ゆ。一葉ごとに夜氣を吐けり。旅人のかへり行くあとを見送りて、ついまつの赤き光さへ見えずなりぬる時、あたりは闃として物音絶えたり。この遺址のうちには、耶蘇教徒が立てたる木卓あまたあり。その一つの片かげに、柱頭ありて草に埋もれたれば、われはこれに腰掛けつ。石は氷の如く冷なるに、我頭の熱さは熱を病むが如くなりき。寐られぬまゝに思ひ出づるは、この「コリゼエオ」の昔語なり。猶太教奉ずる囚人が、羅馬の帝の嚴しき仰によりて、大石を引き上げさせられしこと、この平地にて獸を鬪はせ、又

人と獸と相搏たせて、前低く後高き廊の上より、あまたの市民これを觀きといふ事、皆我當時の心頭に上りぬ。

そも〳〵この「コリゼエオ」は楕圓なる四層のたてものにして、「トラエルチイノ」石もてこれを造る。層ごとに組かたを殊にす。「ドロス」、「イオン」、「コリントス」の柱の式皆備はりたり。基督生れてより七十餘年の後、ヱスパジアヌス帝の時、この工事を起しつ。これに役せられたる猶太教徒の數一萬二千人とぞ聞えし。櫛形の迫持八十ありて、これをめぐれば千六百四十一歩。平地の周匝には八萬六千座を設け、頂に二萬人を立たしむべかりきといふ。今はこゝにて基督教の祭儀を執行せしむ。バイロン卿詩あり。

　この場のあらむ限は
　内日刺す都もあらむ
　このにはのなからむ時は
　うちひさす都もあらじ
　うちひさす都あらずば
　あはれ〳〵この世間もあらじとぞお
　　もふ

頭の上にあたりて物音こそすれ。見あぐれば物の動くやうにこそおもはるれ。影の如き人ありて、椎を揮ひ石をたゝむが如し。その人を見れば、色蒼ざめて黑き髯長く生ひたり。これ話に聞きし猶太教徒なるべし。積み疊ぬる石は見る見る高くなりぬ。「コリゼエオ」は再び昔のさまに立ちて、幾千萬とも知られぬ人これに滿ちたり。長き白き衣着たるヱスタの神の巫女あり。帝王の座も設けられたり。赤條々なる力士の血を流せるあり。低き廊の方より叫ぶ聲、吼ゆる聲聞ゆ。忽ち虎豹の群ありて我前を奔り過ぐ。我はその血ばしる眼を見、その熱き息に觸れたり。あまりのおそろしさに、かの柱頭にひたと抱きつきて、聖母の御名をとなふれども、物騷がしさは未だ止まず。この怪しき物共の群りたる間にも、幸なるかな、大なる十字架の屹として立てるあり。こはわがこゝを過ぐるごとに接吻したるものなり。これを目當に走り寄りて、緊と抱きつくほどに、石落ち柱倒れ、人も獸もあらずなりて、我は復た人事をしらず。

　人心地つきたる時は、熱すでに退きたれど、身は猶いたく疲れて、われはかの木づくりの十字架の下に臥したり。あたりを見るに、怪しき事もなし。夜は靜にして、高き石垣の上には鶯鳴けり。われは耶蘇をおもひ、その母をおもひぬ。わが母上は今あらねば、これよりは耶蘇の母ぞ我母なるべき。われは十字架を抱きて、その柱に頭を寄せて眠りぬ。

　幾時をか眠りけむ。歌の聲に醒むれば、石垣の頂には日の光かゞやき、「カップチノ」僧二三人蠟燭を把りて卓より卓に歩みゆきつゝ、「キュリエ、エレイソン」(主よ、憫め)と歌へり。僧は十字架に來り近づきぬ。俯して我面を見るものは、フラア、マルチノなりき。わが色蒼ざめてこゝにあるを訝りて、何事のありしぞと問ひぬ。われはいかに答へしか知らず。されどペッポのをぢの恐ろしさを聞きたるのみにて、僧は我上を推し得たり。我は衣の袖に縋りて、我を見棄て給ふなと願ひぬ。連なる僧もわれをあはれと思へる如し。かれ等は皆我を知れり。われはその部屋をおとづれ、彼等と共に寺にて歌ひしことあり。

　僧は我を伴ひて寺に歸りぬ。壁に木板の畫を貼したる房に入り、橄欖樹の枝さし入れたる窓を見て、われはきのふの苦を忘れぬ。フラア、マルチノは我をペッポが許へは還さじと誓ひ給へり。同寮の僧にも、このちごをば蹇へたる乞兒にわたされずとのたまふを聞きつ。

午のころ僧は菜蔬、麪包、葡萄酒を取り來て我

に飲啖せしめ、さて容を正していふやう。便なき童よ。母だに世にあらば、この別はあるまじきを。母だに世にあらば、この寺の内にありて、尊き御蔭を被り、安らかに人となるべかりしを。今は是非なき事となりぬ。そちは波風荒き海に浮ばむとす。寄るところは一ひらの板のみ。血を流し給へる耶蘇、涙を墮し給ふ聖母をな忘れそ。汝が族といふものは、その外にあらじかし。此詞を聞きて、われは身を震はせ、さらば我をばいづかたにか遣らむとし給ふと問ひぬ。これより僧は、われをカムハニアの野なる牧者夫婦にあづくること、二人をば父母の如く敬ふべき事、かねて教へおきし祈禱の詞を忘るべからざる事など語り出でぬ。夕暮にマリウチアと其父とは寺門迄迎へに來ぬ。僧はわれを伴ひ出でゝ引き渡しつ。この牧者のさまを見るに、衣はベッポのをぢのより舊りたるべし。塵を蒙り、裂けやぶれたる皮靴を穿き、膝を露し、野の花を插したる尖帽を戴けり。かれは跪きて僧の手に接吻し、我を顧みて、かゝる美しき童なれば、我のみかは、妻も喜びてもり育てむと誓ひぬ。マリウチアは財嚢を父にわたしつ。われ等四人はこれより寺に入りて、人々皆默禱す。われも共に跪きしが、祈禱の詞は出でざりき。我眼は久しき馴染の諸像を見たり。戸の上高きところを舟に乘りてゆき給ふ耶蘇、贄卓の神の使、美しきミケルはいふもさらなり、蔦かづらの環を戴きたる髑髏にも暇乞しつ。別に臨みて、フラア マルチノは手を我頭上に加へ、晩餐式施行法(モオドオ、ヂ、セルヰレ、ラ、サンクタ、メッサア)と題したる、繪入の小册子を贈りぬ。

既に別れて、ピアッツァ、バルベリイニの街を過ぐとて、仰いで母上の住み給ひし家をみれば、窓といふ窓悉く開け放たれたり。新しきあるじを待つにやあらむ。

曠野

羅馬城のめぐりなる大曠野は、今我すみかとなりぬ。古跡をたづね、美術を究めむと、初てテヱエル河畔の古都に近づくものは、必ずこの荒野に歩をとゞめて、これを萬國史の一ひらと看做すなり。起てる丘、伏したる谷、おほよそ眼に觸るゝもの、一つとして史册中の奇怪なる古文字にあらざるなし。畫工の來るや、古の水道のなごりなる、寂しき櫛形迫持を寫し、羊の群を牽ゐたる牧者を寫し、さてその前に枯れたる薊を寫すのみ。歸りてこれを人に示せば、看るもの皆めでくつがへるなるべし。されど我と牧者とは、おの〳〵其情を殊にせり。牧者は久しくこゝに住ひて、この焦れたる如き草を見、この熱き風に吹かれ、こゝに行はるゝ疫癘に苦められたれば、唯ゝあしき方、忌まはしき方のみをや思ふらむ。我は此景に對して、いと面白くぞ覺えし。平原の一面なる山々の濃淡いろいろなる綠を染め出したる、おそろしき水牛、テエルの黃なる流、これを溯る舟、岸邊を牽かるゝ軛負ひたる牧牛、皆日新しきもののみなりき。われ等は流に溯りて行きぬ。足の下なるは丈低く黃なる草、身のめぐりなるは莖長く枯れたる薊のみ。十字架の側を過ぐ。こは人の殺されたるあとに立てしなり。架に近きところには、盜人の屍の切り碎きて棄てたるあり。隻腕、隻脚は猶その形を存じたり。それさへ心を凄からしむるに、我栖はこゝより遠からずとぞいふなる。

此家は古の墳墓の址なり。この類の穴こゝらあれば、牧者となるもの大抵これに住みて、身を戍るにも、又身を安んずるにも、事足れりとおもへるなり。用なき窪をば塡め、いらぬ罅をば塞ぎ、上に草を葺けば、家すでに成れり。我牧者の家は丘の上にありて兩層あり。隘き戸口なるコリントスがたの柱は、當初墳墓を築き

しときの面影なるべし。石垣の間なる、幅廣き三條の柱は、後の修繕ならむ。おもふに中古は砦にやしたりけむ。戸口の上に穴あり。これ窓なるべし。屋根の半は葦簾に枯枝をまじへて葺き、半は又枝さしかはしたる古木をその儘に用ゐたるが、その梢よりは忍冬(カプリフォリウム)の蔓長く垂れて石垣にかゝりたり。

　こゝが家ぞ、と途すがら一言も物いはざりしベネデットオ告げぬ。われは怪しげなる家を望み、またかの盜人の貌をかへり見て、こゝに住むことか、と問ひかへしつ。翁にドメニカ、ドメニカと呼ばれて、荒栲の汗衫ひとつ着たる媼出でぬ。手足をばことごとく露して髮をはふり亂したり。媼は我を抱き寄せて、あまたゝび接吻す。夫の詞少きとはうらうへにて、この媼はめづらしき饒舌なり。そなたは薊生ふる沙原より、われ等に授けられたるイスマエル(亞伯拉罕の子)なるぞ。されどわが饗應には足らぬことあらせじ。天上なる聖母に代りて、われ汝を育つべし。臥所はすでにこしらへ置きぬ。豆も煮えたるべし。ベネデットオもそなたも食卓に就け、マリウチアはともに來ざりしか。尊き爺(法皇)を拜まざりしか。醃豚をば忘れざりしならむ。眞鍮の鉤をも。新しき聖母の像をも。舊きをば最早形見えわかぬ迄接吻したり。ベネデットオよ。おん身ほど物覺好き人にはあらじ。わがかはゆきベネデットオよ。かく語りつゞけて、狹き一間に伴ひ入りぬ。後にはこの一間、わがためには「ワチカアノ」(法皇の宮)の廣間の如く思はれぬ。おもふに我詩才を產み出しゝは、此ひとつ家ならむか。

　若き棕櫚は重を負ふことといよ〱大にして、長ずることといよ〱早しといふ。我空想も亦この狹き處にとぢ込められて、却りて大に發達せしならむ。古の墳墓の常とて、此家には中央なる廣間あり。そのめぐりには、許多の小龕竝びたり。又二重の幅闊き棚あり。處々色かはりたる石を甃みて紋を成せり。一つの龕をば食堂とし、一つには壺鉢などを藏し、一つをば厨となして豆を煮たり。

　老夫婦は祈禱して卓に就けり。食畢りて媼は我を率きて梯を登り、二階なる二龕にいたりぬ。是れわれ等三人の臥房なり。わが龕は戸口の向ひにて、戸口よりは最も遠きところにあり。臥所の側には、二條の木を交叉はせて、其間に布を張り、これにをさな子一人寢せたり。マリウチアが子なるべし。媼が我に「アエ、マリア」唱へしむるとき、美しき色澤ある蜥蜴我が側を走り過ぎぬ。おそろしき物にはあらず、人をおそれこそすれ、總てものそこなふものにはあらず、と云ひつゝ、かの裸兒をおのが龕のかたへ遷しつ。壁に石一つ抽け落ちたるところあり。こゝより青空見ゆ。黑き蔦の葉の鳥なんどの如く風に搖らるゝも見ゆ。我は十字を切りて臥に就きぬ。亡き母上、聖母、刑せられたる盜人の手足、皆わが怪しき夢に入りぬ。

　翌朝より雨ふりつゞきて、戸は開けたれどいと闇き小部屋に籠り居たり。わが棉木綿の上なる孺子をゆすぶる傍にて、媼は苧うみつつ、我に新しき祈禱を敎へ、まだ聞かぬ聖の上を語り、またこの野邊に出づる剽盜の事を話せり。剽盜は旅人を覘ふのみにて、牧者の家を訪へば來ることなしとぞ。食は葱、麵包などなり。皆旨し。されど一間にのみ籠り居らむこと物憂きに堪へねば、媼は我を慰めむとて、戸の前に小溝を掘りたり。この小テヱエル河は、をやみなき雨に黃なる流となりて、いと緩やかにながるめり。さて木を刳み蘆を截りて作りたるは羅馬よりオスチア(テヱエル河口の港)にかよふなる帆かけ舟なり。雨あまり劇しきときは、戸をさして闇黑裡に坐し、媼は苧をうみ、われは羅馬なる寺のさまを思へり。舟に乘りたる耶蘇

は今面前に見ゆる心地す。聖母の雲に駕りて、神の使の童供に舁かせ給ふも見ゆ。環かざりしたる髑髏も見ゆ。
　雨の時過ぐれば、月を踰ゆれども曇ることなし。われは走り出でゝ遊びありくに、嫗は戒めて遠く行かしめず、又テエエルの河近く寄らしめず。この岸は土鬆ければ、踏むに從ひて頽るゝことありといへり。そが上、岸近きところには水牛あまたあり。こは猛き獸にて、怒るときは人を殺すと聞く。されど我はこの獸を見ることを好めり。蟒蛇の鳥を呑むときは、鳥自ら飛びて其喉に入るといふ類にやあらむ。この獸の赤き目には、怪しき光ありて、我を引き寄せむとする如し。又此獸の馬の如く走るさま、力を極めて相鬪ふさま、皆わがために興ある事なりき。我は見たるところを沙に畫き、又歌につゞりて歌ひぬ。嫗は我聲のめでたきを稱へて止まず。
　時は暑に向ひぬ。カムパニアの野は火の海とならむとす。潴水は惡臭を放てり。朝夕のほかは、戸外に出づべからず。かゝる苦熱はモンテ、ピンチョオにありし身の知らざる所なり。かしこの夏をば、我猶記えたり。乞兒は人に小銅貨をねだり、麪包をば買はで 氷水を飲めり。二つに割りたる大西瓜の肉赤く核黑きは、いづれの店にもありき。これをおもへば唾湧きて堪へがたし。この野邊にては、日光ますぐに射下せり。我が立てる影さへ我脚下に沒せむばかりなり。水牛は或は死せるが如く枯草の上に臥し、或は狂せるが如く驅けめぐりたり。われは物語に聞ける亞弗利加沙漠の旅人になりたらむやうにおもひき。
　大海の孤舟にあるが如き念をなすこと二月、闃、何の用事をも朝夕の涼しき間に濟ませ、終日我も出でず人も來ざりき。烘く如き熱、腐りたる蒸氣の中にありて、我血は湧きかへらむとす。沼は涸れたり。テエエルの黃なる水は生温くなりて、眠たげに流れたり。西瓜の汁も温し。土石の底に藏したる葡萄酒も酸くして、半ば烹たる如し。我喉は一滴の冷露を嘗むること能はざりき。天には一纎雲なく、いつもおなじ碧色にて、吹く風は唯ゝ熱き「シロッコ」(東南風)のみなり。われ等は日ごとに雨を祈り、嫗は朝夕山ある方を眺めて、雲や起ると待てども甲斐なし。蔭あるは夜のみ。涼風の少しく動くは日出る時と日入る時とのみ。われは暑に苦み、この變化なき生活に倦みて、殆ど死せる如くなりき。風少しく動くと覺ゆるときは、蝙蝠なんど群がり來りて人の肌を刺せり。水牛の背にも、昆蟲聚りて寸膚を止めねば、時々怒りて自らテエエルの黃なる流に躍り入り、身を水底に滾して これを攘ひたり。羅馬の市にて、闃然たる午時の街を行く人は、綫の如き陰影を求めて夏日の烈しきをかこつと雖、これをこの火の海にただよひ、硫黃氣ある毒燄を呼吸し、幾萬とも知られぬ惡蟲に膚を嚙まるゝものに比ぶれば、猶是れ樂土の客ならむかし。
　九月になりて氣候やゝ温和になりぬ。フェデリゴはこの燒原を畫かむとて來ぬ。我が住める怪しき家、剽盜の屍をさらしたる處、おそろしき水牛、皆其筆に上りぬ。我には紙筆を與へて畫の稽古せよと勸め、又折もあらば迎へに來て、フララ、マルチノ、マリウチア其外の人々に逢はせばやと契りおきぬ。惜むらくはこの人久しく約を履まざりき。

水牛

　十一月になりぬ。こゝに來しより最快き時節なり。爽なる風は山々よりおろし來ぬ。夕暮になれば、南の國ならでは無しといふ、たゞならぬ雲の色、目を驚かすやうなり。こは畫工のえうつさぬところなるべく、また敢て寫さ

ぬものなるべし。あめ色の地に、橄欖（オリワ）の如く綠なる色の雲あるをば、樂土の苑囿に湧き出でたる山かと疑ひぬ。又夕映の赤きところに、暗碧なる雲の浮べるをば、天人の居る山の松林ならむと思ひて、そこの谷かげには、美しき神の童あまた休みゐ、白き翼を扇の如くつかひて、みづから涼を取るらむとおもひやりぬ。

或日の夕ぐれ、いつもの如く夢ごゝろになりてゐたるが、ふと思ひ付きて、鍼もて穿ちたる紙片を目にあて、太陽を覗きはじめつ。ドメニカこれを見つけて、そは目を傷ふわざぞとて日の見えぬやうに戸をさしつ。われ無事に苦みて、外に出でゝ遊ばむことを請ひ、許をえたる嬉しさに、門のかたへ走りゆき、戸を推し開きつ。その時一人の男遽だしく駈け入りて、門口に立ちたる我を擠きまろばし、扉をはたと閉ぢたり。われは此人の蒼ざめたる面を見、その震ふ脣より洩れたる「マドンナ」（聖母）といふ一聲を聞きも果てぬに、おそろしき勢にて、外より戸を衝くものあり。裂け飛んだる板は我頭に觸れむとせり。その時戸口を塞ぎたるは、血ばしる眼を我等に注ぎたる、水牛の頭なりき。ドメニカはあと叫びて、我手を握り、上の間にゆく梯を二足三足のぼりぬ。逃げ込みたる男は、あたりを見廻はし、ベネデットオが銃の壁に掛かりたるを見出しつ。こは賊なんどの入らむ折の備にとて、丸をこめおきたるなり。男は手早く銃を取りぬ。耳を貫く響と共に、烟は狹き家に滿ちわたれり。われは彼男の烟の中にて、銃把を擧げて、水牛の額を撃つを見たり。獸は隘き戸口にはさまりて前にも後にもえ動かざりしなり。

こは何事をかし給ふ。君は物の命を取り給ひぬ。この詞はドメニカが纔にわれにかへりたる口より出でぬ。かの男。否聖母の惠なりき。我等が命を拾ひぬとこそおもへ。さて我を抱き上げて、されどわがために戸を開きしはこの恩人なりといひき。男の面は獰猛く、額の汗は玉をなしたり。その語を聞くに外國人にあらず。その衣を見るに羅馬の貴人とおぼし。この人草木の花を愛づる癖あり。けふも採集に出でゝ、ポンテ、モルレにて車を下り、テエエル河に沿ひてこなたへ來しに、圖らずも水牛の群にあひぬ。その一つ、いかなる故にか、群を離れて衝き來たりしが、幸にこの家の戸開きて、危き難を免れきとなり。ドメニカ聞きて。さらばおん身を救ひしは疑もなく聖母のおんしわざなり。この童は聖母の愛でさせ給ふものなれば、それに戸をば開かせ給ひしなり。おん身はまだ此童を識り給はず。物讀むことには長けたれば、書きたるをも、印したるをも、え讀まずといふことなし。畫かくことを善くして、いかなる形のものをも、明にそれと見ゆるやうに寫せり。「ピエトロ」寺の塔をも、水牛をも、肥えふとりたるハアテル、アムブロジオ（僧の名）をもゑがきぬ。聲は類なくめでたし。おん身にかれが歌ふを聞かせまほし。法皇の伶人もこれには優らざるべし。そが上に性すなほなる兒なり。善き兒なり。子供には譽めて聞かすること宜しからねば、その外をば申さず。されどこの子は、譽められても好き子なりといふ。客。この子の穉きを見れば、おん身の腹にはあらざるべし。ドメニカ。否、老いたる無花果の木には、かゝる芽は出でぬものなり。されど此世には、この子の親といふもの、われとベネデットオとの外あらず。いかに貧くなりても、これをば育てむと思ひ侍り。そは兎まれ角まれ、この獸をばいかにせむ。（頭より血流るゝ、水牛の角を握りて。）戸口に挾まりたれば、たやすく動くべくもあらず。ベネデットオの歸るまでは、外に出でむやうなし。こを殺しつとて、咎めらるゝことあらば、いかにすべき。客。そは心安かれ。あるじ

の老女も聞きしことのあるべきが、われはボルゲエゼの族なり。媼。いかでか、と答へて衣に接吻せむとせしに、客はその手をさし出して吸はせ、さて我手を兩の掌の間に挾みて、媼にいふやう。あすは此子を伴ひて、羅馬に來よ。われはボルゲエゼの館に住めり。ドメニカは忝しとて涙を流しつ。

ドメニカはわが日ごろ書き棄てたる反古あまた取り出でゝ、客に示しゝに、客は我頰を撫で、小きサルワトル、ロオザ(名高き畫工)よと讃め稱へぬ。媼。まことに宣ふ如し。穉きものの業としては、珍しくは候はずや。それ〳〵の形明に備はりたり。この水牛を見給へ。この舟を見給へ。こはまた我等の住める小家なり。こは我姿を寫したるなり。鉛筆なれば、色こそ異なれ、わが姿のその儘ならずや。又我に向ひて、何にもあれ、この御方に歌ひて聞せよ。自ら作りて歌ふが好し。この童は長き物語、こまやかなる法話をさへ、歌に作りて歌ひ侍り。年長けたる僧にも劣らじと覺ゆ。客は我等二人のさまを見て、おもしろがり、我には疾く歌ひて聞せよ、と勸めつ。われは常の如く遠慮なく歌ひぬ。媼は常の如くほめそやしつ。されど其歌をば記憶せず。唯〻聖母、貴き客人、水牛の三つをくりかへしたるをば未だ忘れず。客は默坐して聽きゐたり。媼はそのさまを見て、童の才に驚きて詞なきならむと推し量りつ。

歌ひ畢りしとき、客は口を開きていふやう。さらば明日疾くその子を伴ひ來よ。否、夕暮のかたよろしからむ。「アヱ、マリア」の鐘鳴る時より、一時ばかり早く來よ。さて我は最早退るべきが、いづくよりか出づべき。水牛の塞ぎたる口の外、この家には口はなきか。又こゝを出でゝ車まで行かむに、水牛に追はるゝやうなる虞なからしめむには、いかにして好かるべきぞ。媼。かしこの壁に穴ありて、それより這ひ出づるときは、石垣も高からねば、すべりおりむこと難からず。わが如き老いたるものも、かしこより出入すべく覺え侍り。されど貴きおん方を案内しまゐらすべき口にはあらず。客は聞きも果てず、梯を上りて、穴より頭を出し、外の方を覗きていふやう。否、善き降口なり。「カピトリウム」に降りゆく階段にも讓らず。水牛の群は河のかたに遠ざかりぬ。道には眠たげなる百姓あまた、籐の束積みたる車を、馬に引かせて行けり。あの車に沿ひゆかば、また水牛に襲はるとも身を匿すに便よからむ。かく見定めて、客は媼に手を吸はせ、わが頰を撫で、再びあすの事を契りおきて、茂れる蔦かづらの間をすべりおりぬ。われは窓より見送りしが、客は間もなく籐の車に追ひすがりて、百姓の群と倶に見えずなりぬ。

みたち

牧者二三人の扶を得て、ベネデットオは戸口なる水牛の屍を取り片附けつ。その日の物語は止むときなかりしかど、今はよくも記えず。翌朝疾く起きいでゝ、夕暮に都に行かむと支度に取り掛りぬ。數月の間行李の中に鎖されゐたる我晴衣はとり出されぬ。帽には美しき薔薇の花を插したり。身のまはりにて、最も怪しげなりしは履ものなり。靴とはいへど羅馬の鞋に近く覺えられき。

カムパニアの野道の遠かりしことよ。その照る日の烈しかりしことよ。ポヽロの廣こうぢに出でゝ、記念塔のめぐりなる石獅の口より吐ける水を掬びて、我渇れたる咽を潤しゝが、その味は人となりて後フアレルナ、チプリイの酒なんどを飲みたるにも增して旨かりき。「北より羅馬に入るものは、ポルタア、デル、ポヽロの關を入りて、ピアッツア、デル、ポヽロといふ美しく大なる廣こうぢに出づ。この廣こうぢテ

ヱエル河とピンチヨオ山との間にあり。両側にはいとすぎ、亜刺比亜護謨の木（アカチア）茂りあひて、その下かげに今様なる石像、噴水などあり。中央には四つの石獅に囲まれたる、セソストリス時代の記念塔あり。前には三條の直道あり。即ちヰア、バブヰノ、イル、コルソオ、ヰア、リペッタなり。イル、コルソオの両角をなしたるは、同じ式に建てたる両伽藍なり。欧羅巴に都會多しと雖、古羅馬のピアッツア、デル、ポポロほど晴やかなるはあらじ。」

我は熱き頬を獅子の口に押し當て、水を頭に被りぬ。衣や潤はむ、髪や亂れむ、とドメニカは氣遣ひぬ。ヰア、リペッタを下りゆきて、ボルゲエゼの館に近づきぬ。我もドメニカも、此館の前をば幾度となく過りしかど、けふ迄は心とめて見しことなし。今歩を停めて仰ぎ見れば、その大さ、その豐さ、その美しさ、譬へむに物なしと覺えき。殊に目を駭かせるは、窓の裡なる長き絹の帷なり。あの内にいます君は、いま我等が識る人となりぬ。きのふその君の我家に來給ひし如く、いま我等はそのみたちに入らむとす。斯く思へば嬉しさいかばかりならむ。

中庭、部屋々々を見しとき、身の震ひたるをば、われ決して忘れざるべし。あるじの君は我に親し。彼も人なり。我も人なり。然はあれどこの家居のさまこそ譬へても言はれね。聖と世の常の人との別もかくやあらむ。方形をなして、いろ／＼なる全身像、半身像を据ゑつけたる、白塗の廻廊のいと高きが、小き園を繞れるあり。（後にはこゝに瓦を敷きて中庭とせり。）高き盧薈、覇王樹なんど、廊の柱に攀ぢむとす。檸檬樹はまだ日の光に黄金色に染められざる、緑の實を垂れたり。希臘の舞女の形したる像二つあり。力を併せて、金盤一つさし上げたるがその縁少しく欹だちて、水は肩に迸り落ちたり。丈高く育ちたる水草ありて、露けき緑葉もてこの像を掩はむとす。烈しき日に焼かれたるカムパニアの瘠土に比ぶるときは、この園の涼しさ、香しさ奈何ぞや。

濶き大理石の梯を登りぬ。龕あまたありて、貴き石像立てり。其一つをば、ドメニカ聖母ならむと思ひ惑ひて、立ち停りてぬかづきぬ。後に聞けば、こはエスタの像なりき。これも人間の奇しき處女にぞありける。（譯者のいはく。希臘の竈の神なり。男神二人に挑まれて、嫁せずして終りぬと云ひ傳ふ。）飾美しき「リフレア」着たる僮出で迎へつ。その面持の優しさには、こゝの間ごとの大さ、美しさかくまでならずば、我胸の躍ることさへ治りしならむ。床は鏡の如き大理石なり。壁といふ壁には、めでたき畫を貼したり。その間々には、玻瓈鏡を嵌め、その上に花束、はなの環など持ちたる神童の飛行せるを畫きたり。又色美しき鳥の、翼を放ちて、赤き、黄なる、さま／″＼の木の實を啄めるを畫きたるあり。かく華やかなるものをば、今まで見しことあらざりき。

暫し待つほどに、あるじの君出でましぬ。白衣着たる、美しき貴婦人の、大なる敏き目を我等に注ぎたるを、伴ひ給へり。婦人は我額髪を撫で上げ、鋭けれども優しき目にて、我面を打ち守り、さなり・君を助けしは神のみつかひなり、この見ぐるしき衣の下に、翼はかくれたるべしと宣ひぬ。主人。否、この兒の紅なる頬を見給へ。翼の生ゆるまでにはテヱエルの河波あまた海に入るならむ。母もこの兒の飛び去らむをば願はざるべし。さにあらずや。この兒を失はむことは、つらかるべし。嫗。げにこの兒あらずなりなば、我小家の戸も窓も塞がりたるやうなる心地やせむ。我小家は暗く、寂しくなるべし。否、このかはゆき兒には、われえ別れざるべし。婦人。されど今宵しばらくは、別るとも好からむ。二三時間立ちて迎へに來よ。

歸路は月あかゝるべし。そち達は盜を恐るゝことはあらじ。主人。さなり。兒をばしばしこゝにおきて、買ふものあらば買ひもて來よ。斯く云ひつゝ、主人は小き財嚢をドメニカが手に渡し、翁何事をか語り給ふに、我は貴婦人に引かれて奥に入りぬ。

奥の座敷の美しさ、賓客の貴さに、我魂は奪はれぬ。我はあるは壁に畫ける神童の面の、綠なる草木の間にほゝゑめるを見、あるは日ごろ半ば神のやうにおもひし、紫の襪穿ける議官、紅の袴着たる僧官達を見て、おのれがかゝる間に入り、かゝる人に交ることを訝りぬ。殊に我眼をひきしは、一間の中央なる大水盤なり。醜き龍に騎りたる、美しきアモオルの神を据ゑたり。龍の口よりは、水高く迸り出でゝ、又盤中に落ちたり。

貴婦人のこはをぢの命を救ひし兒ぞ、と引き合せ給ひしとき、賓客達は皆ほゝゑみて、我に詞を掛け、議官僧官さへ頷き給ひぬ。法皇の禁軍の號衣を着たる、少く美しき士官は我手を握りぬ。人々さま〴〵の事を問ふに、我は臆することなく答へつ。その詞に、人々或は讃めそやし、或は高く笑ひぬ。主人入り來りて、我に歌うたへといふに、我は喜んで命に從ひぬ。士官は我に報せむとて、泡立てる酒を酌みてわたしゝかば、我何の心もつかで飲み乾さむとせしに、貴婦人快く傍より取り給ひぬ。我口に入りしは少許なるに、その酒は火の如く燄の如く、脈々をめぐりぬ。貴婦人はなほ我傍を離れず、笑を含みて立ち給へり。士官我にこの御方の上を歌へと勸めしに、我又喜んで歌ひぬ。何事をか聯ねけむ、いまは覺えず。人々はわが詞の多かりしを、才豐なりと稱へ、わが臆せざるを、心敏しと譽めたり。カムパニアなる貧きものゝ子なりとおもへば、世の常なる作をも、天才の爲せるわざの如く、愛でくつがへるなるべし。人々は掌を鳴せり。士官は座の隅なる石像に戴かせたりし、美しき月桂冠を取り來りて、笑みつゝ我頭の上に安んじたり。こは固より戲謔に過ぎざりき。されどわが幼き心には、其間に眞面目なる榮譽もありと覺えられて、又なく嬉しかりき。我は侑席上にて、マリウチア、ドメニカ等に敎へられし歌をうたひ、又曠野の中なる古塚の栖家、眼の光おそろしき水牛の事など人々に語り聞せつ。時は惜めども早く過ぎて、我は嫗に引かれて歸りぬ。くだもの、果子など多く賜り、白銀幾つか兜兒にさへ入れられたるわが喜はいふもさらなり、嫗は衣服、器什くさ〴〵の外、二瓶の葡萄酒をさへ購ひ得て、幸ある日ぞとおもふなるべし。夜は草木の上に眠れり。されど仰いでおほ空を見れば、皎々たる望月、黃金の船の如く、藍碧なる靑雲の海に泛びて、焦れたるカムパニアの野邊に涼をおくり降せり。

家に還りてより、優しき貴女の姿、賑はしき拍手の聲、寤寐の間斷えず耳目を往來せり。喜ばしきは折々我夢の現になりて、又ボルゲエゼの館に迎へらるゝ事なりき。かの貴婦人はわが人に殊なる性を知りておもしろがり給へば、我も亦ドメニカに對する如く、これに對して物語するやうになりぬ。貴婦人はこれを興あることに思ひて、主人の君に我上を譽め給ふ。主人の君も我を愛し給ふ。この愛は、曩に料らずも我母上を、おのが車の轍にかけしことありと知りてより、愈ゝ深くなりまさりぬ。逸したる馬の母上を踏仆しゝとき、車の中に居たるは、この主人の君にぞありける。

貴婦人の名をフランチェスカといふ。我を率て宮のうちなる畫堂に入り給ひぬ。美しき畫幀に對して、我が穉き問、癡なる評などするを、面白がりて笑ひ給ひぬ。後人々に我詞を語りつぎ給ふごとに、人々皆聲高く笑はずといふことな

し。午前は旅人この堂に滿ちたり。又畫工の來ていろ／＼なる畫を寫し取れるもあり。午後になれば、堂中に人影なし。此時フランチェスカの君我を伴ひゆきて、畫ときなどし給ふなり。

特に我心に愜ひしは、フランチェスコ、アルバニが四季の圖なり。「アモレットオ」といふ者ぞ、と敎へられたる、美しき神の使の童どもは、我夢の中より生れ出でしものかと疑はる。その春と題したる畫の中に群れ遊べるさまこそ愛でたけれ。童一人大たる砥を運ぶあれば、一人はそれにて鏃を研ぎ、外の二人は上にありて飛行しつゝも、水を砥の上に灌げり。夏の圖を見れば、童ども樹々のめぐりを飛びかひて、枝もたわゝに實りたる果を摘みとり、又淸き流を泳ぎて、水を弄びたり。秋は獵の興を寫せり。手に續松取りたる童一人小車の裡に坐したるを、友なる童子二人牽き行くさまなり。愛はこの優しき獵夫に、共に憩ふべき處を指し示せり。冬は童達皆眠れり。美しき女怪水中より出で、眠れる童たちの弓矢を奪ひ、火に投げ入れて焚き棄つ。

神の使の童をば、何故「アモレットオ＝愛の神童」といふにか。その「アモレットオ」は、何故箭を放てる。こは我が今少し詳に知らむと願ふところなれど、フランチェスカの君は敎へ給はざりき。君の宣ふやう。そは文にあれば、讀みて知れかし。おほよそ文にて知らるゝことは、その外にもいと多し。されど讀みおぼゆる初は、あまり樂しきものにはあらず。汝は終日榻に坐して、文を手より措かじと心掛くべし。「カムパニア」の野にありて、山羊と戲れ、友達を訪はむとて走りめぐることは、叶はざるべし。そちは何事をか望める。かのファビアニの君のやうなる、美しき軍服に身をかためて、翎つきたる帽を戴き、長き劍を佩きて、法皇のみ車の傍を騎りゆかむとやおもふ。さらずば美しき畫といふ畫を、殘なく知り、はてなき世の事を悟り、我が物語りしよりも、逈に面白き物語のあらむ限を記えむとや思ふ。我。されど左樣なる人になりては、ドメニカが許には居られぬにや。また御館へは來られぬにや。フランチェスカ。汝は猶母の上をば忘れぬなるべし。初の栖家をも忘れぬなるべし。亡き母御にはぐゝまれ、かの栖家にありしときは、ドメニカが事も、我上をも思はざりしならむ。然るに今はドメニカと我と、そちに親きものになりぬ。この交もいつか更ることあらむ。かく更りゆくが人の身の上ぞ。我。されどおん身は、我母上の如く果敢なくなり給ふことはあらじ。斯く云ひて、我は涙にくれたり。フランチェスカ。死にて別れずば、生きながら分れむこと、すべての人の上なり。そちが我等とかく交らぬやうにならむ折、そちが上の樂しく心安かれ、とおもひてこそ、我は今よりそちが發落を心にかくるなれ。我涙は愈〻繁くなりぬ。我はいかなる故と、明には知らざりしが、斯く諭されたる時、限なき幸なさを覺えき。フランチェスカは我頬を撫でゝ、我が餘りに心弱きを諫め、かくては世に立たむをり、いと便なかるべしと氣づかひ給ひぬ。この時主人の君は、嘗て我頭の上に月桂冠を載せたるファビアニといふ士官と倶に一間に步み入り給ひぬ。

ボルゲエゼの別墅に婚禮あり。世に罕なるべき儀式を見よ。この風說は或る夕カムパニアなるドメニカがあばら屋にさへ洩れ聞えぬ。フランチェスカの君はかの士官の妻になるべき約を定めて、遠からずフィレンチェなるファビアニ家の莊園に遷らむとす。儀式あるべき處は、羅馬附近の別墅なり。樫いとすぎ桂など生ひ茂りて、四時綠なる天を戴けり。昔も今も、羅馬人と外國人と、恆に來り遊ぶ處なり。麗しく飾りたる馬車は、綠しげき櫧の竝木の道を走

り、白き鷗鳥は、柳の影うつれる靜けき湖を泳ぎ、幾、泉は積み累ねたる巖の上に迸り落つ。道傍には、農家の少女ありて、鼓を打ちて舞へり。胸(乳房)ゆたかなる羅馬の女子は、縦く限にこの様を見下して、車を驅れり。我もドメニカに引かれて、恩人のけふの祝に、蓋はがら與らばやと、カムパニアを立出で、別墅の苑の外に來ぬ。燈の光は窓々より洩れたり。フランチェスカとファビアニとは、彼處にて悉を卒へつるなり。家の内より、樂の聲響き來ぬ。苑の芝生に設けたる棧敷の邊より、烟火空に閃き、魚の形したる火は青天を翔りゆく。偶〻とある高き背後に、男女の影うつれり。あれこそ夫婦の君なれと、ドメニカ耳語きぬ。二人の影は相依りて、接吻する如くなりき。ドメニカは合掌して祈禱の詞を唱へつ。我も嗜きいとすぎの木の下についゐて、恩人の上を神に祈りぬ。我傍なるドメニカは二人の御上安かれとつぶやきぬ。烟火の星の、數知れず亂れ落つるは、我等が祈禱に答ふる如くなりき。されどドメニカは泣きぬ。こは我がために泣くなり。我が遠からず、分れ去るべきをおもひて泣くなり。ボルゲエゼの主人の君は、「ジェスヰタ」派の學校の一座を買ひて我に取らせ給ひしかば、我はカムパニアの野と牧者の嫗とに別れて、我行末のために修行の門出せむとす。ドメニカは歸路に我にいふやう。我目の明きたるうちに、おん身と此野道行かむこと、今日を限なるべし。ドメニカなどの知らぬ、滑なる床、華やかなる氈をや、おん身が足は踏むらむ。されどおん身は優しき兒なりき。人となりてもその優しさあらば、あはれなる我等夫婦を忘れ給ふな。あはれ、今は猶果敢なき燒栗もて、おん身が心を樂ましむることを得るなり。おん身が籐を焚く火を煽ぎ、栗のやくるを待つときは、我はおん身が目の中に神の使の面影を見ることを得るなり。かく果敢なき物にて、かく大なる樂をなすことは、おん身忘れ給ふならむ。カムパニアの野には薊生ふといへど、その薊には猶紅の花咲くことあり。富貴の家なる、滑なる床には、一本の草だに生ひず。その滑なる上を行くものは、躓き易しと聞く。アントニオよ。一たび貧き兒となりたることを忘るな。見まくほしき物も見られず、聞かまくほしき事も聞かれざりしことを忘るな。さらば御身は世に成りいづべし。我等夫婦の亡からむ後、おん身は馬に騎り、又は車に乗りて、昔の破屋をおとづれ給ふこともあらむ。その時はおん身に揺られし籃の中なる兒は、知らぬ牧者の妻となりて、おん身が前にぬかづくならむ。おん身は人に驕るやうにはなり給はじ。その時になりても、おん身は我傍に坐して栗を燒き、又籃を揺りたることを思ひ給ふならむ。言ひ畢りて、嫗は我に接吻し、面を掩ひて泣きぬ。我心は鍼もて刺さるゝ如くなりき。この時の苦しさは、後の別の時に增したり。後の別の時には、嫗は泣きつれど、何事をもいはざりき。旣に園を出でしとき、嫗走り入りて、薫に半ば黑みたる聖母の像を、扉より剝ぎ取りて贈りぬ。こは我が屢〻接吻せしものなり。まことにこの嫗が我におくるべきものは、この外にはあらぬなるべし。

學校、えせ詩人、露肆

フランチェスカの君は夫に隨ひて旅立ち給ひぬ。我は「ジェスヰタ」派の學校の生徒となりたり。わが日ごとの業もかはり、われに交る人の面も改まりて、定なき演劇めきたる生涯の端はこゝに開かれぬ。時々刻々の變化のいと繁きに、歳月の遷りゆくことの早きことのみぞ驚かれし。當時こそ片々の畫圖となりて我目に觸れつれ、今に至りて首を囘せば、その片々は一幅の大畫圖となりて我前に横はれり。是れ

わが學校生活なり。旅人の高山の巓に登り得て、雲霧立ち籠めたる大地を看下すとき、その雲霧の散るに從ひて、忽ち隣れる山の尖あらはれ、忽ち日光に照されたる谿間の見ゆるが如く、我心の世界は漸く開け、漸く擴ごりぬ。カムパニアの野を圍める山に隔てられて、夢にだに見えざりける津々浦々は、次第に浮び出で、歷史はそのところどころに人を住はせ、そのところどころにて珍らしき昔物語を歌ひ聞せたり。一株の木、一輪の花、いづれか我に興を與へざる。されど最も美しく我前に咲き出でたるは、わが本國なる伊太利なりき。我も一個の羅馬人ぞとおもふ心には、我を興起せしむる力なからむや。我都のうちには、寸尺の地として、我愛を引き、我興を催さゞるものなし。街の傍に棄てられて、今は界の石となりたる、古き柱頭も、わがためには、神聖なる記念なり、わがためには、めでたき音色に心を惱ますメムノンが塔なり。（昔物語にアメノフィスといふ王ありき。エチオピアを領しつるが、希臘のアヒルレエスに滅されぬ。その像を刻める塔、埃及なるヂオスポリスに立てり、日出日沒ごとに鳴るといひ傳ふ。）テエエル河に生ふる蘆の葉は風に戰ぎて、我にロムルスとレムスとの上を語れり。凱旋門、石の柱、石の像は、皆我心に本國の歷史を刻ましめむとす。我心はつねに古希臘、古羅馬の時代に遊びて、師の賞譽にあづかりぬ。

凡そ政界にも、教界にも、旗亭に集まるものも、富豪の骨牌卓のめぐりに寄るものも、社會といふ社會の限、必ず太郎冠者のやうなるものありて、もろ人の嘲戲は一身に聚まる習なり。學校にも亦此の如き人あり。我等少年生徒の眼は、早くも嘲戲の的を見出したり。そは我等が教師多かる中にて、最眞面目なる、最怒り易き、最可笑しき一人なりき。名をば「アバテ」ハッバス、ダアダアとなんいひける。元と亞拉伯の產なるが、穉き時より法皇の教の庭に遷されて、こゝに生ひ立ち、今はこの學校の趣味の指南役、テエエル大學院の審美上の權者となりぬ。

詩といふ神のめづらしき賜につきては、われ人となりて後、屢々考へたづねしことあり。詩は深山の裏なる黃金の如くぞおもはるゝ。家庭と學校との教育は、さかしき鑛掘、鎔鑄などのやうに、これを索め出だし、これを吹き分くるなり。折々は初より浮き黃金にいで逢ふことあり。自然詩人が卽興の抒情詩これなり。されど鑛山の出すものは黃金のみにあらず。白銀いだす脈もあり。錫その外卑き金屬を出す脈もあり。その卑きも世に益あるものにしあれば、只管に言ひ腐すべきにもあらず。これを磨き、これに鏤むるときは、金とも銀とも見ゆることあらむ。されば世の中の詩人には、金の詩人、銀の詩人、銅の詩人、鐵の詩人などありとも謂ふことを得べし。こゝに此列に加はるべきならぬ、埴もて物作る人ありて、强ひて自ら詩人と稱す。ハッバス、ダアダアは實にその一人なりき。

ハッバス、ダアダアは當時一流の埴輪つくりはじめて、これを氣象情致の廻に優れたる詩人に擬げ付け、自ら恥づることを知らざりき。字法句法の輕捷なる、韻制音調の流麗なる、詩にあらねども詩とおもはれ、人々の喝采を受けたり。平生ペトラルカを崇むも、その「ソネット」の音調のみ會し得たるにやあらむ。さらずば、矮人劇場なりしか。又狂人にありといふなる固執の妄想か。兎まれ角まれ、ペトラルカとハッバス、ダアダアとは似もよらぬ人なるは、爭ひ難かるべし。ハッバス、ダアダアは我等にかの亞弗利加と題したる、長き敍事詩の四分の一を暗誦せしめむとせしかば、幾

下の鞭か、我等が世々のスチヒオを怨む謂をなしたりけむ。

ペトラルカは基督暦千三百四年七月二十日アレッツォに生れき。いにしへの希臘羅馬時代にのみ眼を注ぎたりしが、千三百二十七年アヰニヨンにてラウラといふ婦人に逢ひ、その戀に引かれて、又現世の詩人となりぬ。おのが上と世々のスチピオ（羅馬の名族）の上とを、千載の下に傳へむと、長篇の敍事詩亞弗利加を著しつ。今はその甚だ意を經ざりし小抒情詩世に行はれて、復た亞弗利加を說くものなし。

我等は日ごとにペトラルカの深邃なる趣味といふことを敎へられき。ハッバス、ダアダアの云ふやう。膚淺なる詩人は水彩畫師なり、空想の子なり。凡そ世道人心に害あること、これより甚しきものあらじ。その群にて最大なりとせらるゝダンテすら、我眼より見るときは、小なり、極めて小なり。ペトラルカは抒情詩の寸錦のみにても、倘朽ちざることを得べきものなり。ダンテは不朽ならむがために、天堂人間地獄をさへ擔ひ出しゝものなり。さなり。ダンテも韻語をば聯ねたり。そのバビロン塔の如きもの、後の世に傳はりたるは、これが爲なり。されど若しその詞だにも拉甸ならましかば、後の世の人せめては彼が學殖をおもひて、些の敬をば起すなるべし。さるを彼は俚言もて歌ひぬ。ボッカチョオの心醉せる、これを評して、獅の能く泳ぎ、羊の能く踏むべき波と云ひき。我はその深さをも、その易さをも見ること能はず。通篇脚を立つべき底あることなし。唯ゝ昔と今との間を、ゆきつ戻りつするを見るのみ。我が眞理の聖使たるペトラルカを見ずや。既往の天子法皇を捉へて、地獄に墮すを、手柄めかすやうなる事をばなさず、その生れあひたる世に立ちて、男性のカッサンドラ（希臘の昔物語に見えたる巫女）となり、法皇王侯の嗔を懼れずして預言したるは、希臘悲壯劇の中なる「ホロス」の群の如くなりき。嘗て面り査列斯四世を刺りて、德の遺傳せざるをば、汝に於いてこれを見ると云ひき。羅馬と巴里とより、月桂冠を贈らむとせしとき、ペトラルカは敢て輒ち受けずして、三日の考試に應じき。その謙遜なりしこと、今の兒曹も及ばざるべし。考試畢りて後、彼は「カピトリウム」の壇に上りぬ。拿坡里の王は手づから濃紫の袍を取りて、彼が背に被せき。これに月桂の環をわたしたるは、羅馬の議官なりき。此の如き光榮は、ダンテの身を終ふるまで受くること能はざりしところなり。

ダンテは千二百六十五年フィレンチェに生れぬ。そのはじめの命名はヅランテなりき。神曲に見えたるベアトリチェとの戀は、夙く九歲の頃より始りぬ。千二百九十年戀人みまかりぬ。是れダンテが女性の美の極致にして、ダンテはこれに依りて、心を浄め懷を崇うせしなり。アレッツォとピザとの戰ありしときは、ダンテ軍人たりき。後政治家となりて、千三百二十一年ラエンナにて歿す。

ハッバス、ダアダアが講說は、いつも此の如くペトラルカを揚げダンテを抑ふるより外あらざりき。この兩詩人をば、匂ふ菫花、燃ゆる薔薇の如く竝び立たせてもあるべきものを。ペトラルカが小抒情詩をば、悉く諳んぜしめられき。ダンテが作をば生徒の目に觸れしめざりき。我は僅に師の詞によりて、そのおもなる作は、地獄、淨火、天堂の三大段に分れたるを知れりしのみ。この分けかたは、既に我空想を喚び起して、これを讀まむの願は、我心に溢れたり。されどダンテは禁斷の果なり。その味は竊むにあらでは知るに由なし。

或る日ピアッツァ、ナヲネ（大なる廣こうぢにて、夏の頃水を湛ふることあり）を漫歩して、積み疊ねたる柑子、地に委ねたる鐵の器、破衣、その外いろ〳〵の骨董を列ねたる露肆の側に、古書古畫を賣るものあるを見き。こゝに卑き戲畫あれば、かしこに刃を胸に貫きたる聖母の圖あり。似も通はぬものゝ伍をなしたる中に、ふとメタスタジオが詩集一卷我目にとまりぬ。我懷には猶一「パオロ」ありき。こは半年前ボルゲエゼの君が、小遣錢にせよとて賜りし「スクディ」の殘にて、わがためには輕んじ難き金額なりき。（一「スクウド」は約我一圓五十錢に當る。十「パオリ」に換ふべし。一「パオロ」は十五錢許なり。十「バヨッチ」に換ふべし。「スクウド」、「パオロ」は銀貨、「バヨッチ」は銅貨なり。）幾個の銅錢もて買ふべくば、この卷見逭すべきものならねど、「パオロ」一つを手離さむはいと惜しとおもひぬ。價を論ずれども成らざりしかば、思ひあきらめて立ち去らむとしたる時、一書の題簽に「デキナ、コメヂア、ヂ、ダンテ」（ダンテが神曲）と云へるあるを見出しつ。嗚呼、これこそは我がために、善惡二途の知識の木になりたる、禁斷の果なれ。われはメタスタジオの集を擲ちて、ダンテの書を握りつ。さるに哀しきかな、この果は我手の屆かぬ枝になりたり。その價は二「パオリ」なりき。露肆の主人は、一錢も引かずといふに、わが銀錢は掌中に熱すれども、二つにはならず。主人、こは伊太利第一の書なり、世界第一の詩なりと稱へて、おのれが知りたる限のダンテの名譽を說き出しつ。ハッバス、ダアダアには無下にいひけたれたるダンテの名譽を。

露肆の主人のいふやう。この卷は一葉ごとに一場の說敎なり。これを書きしは、かう〳〵しき預言者にて、その指すかたに向ひて往くものは、地獄の火燄を踏み破りて、天堂に抵らむとす。若き華主よ。君はまだ此書を讀み給ひし事なきなるべし。然らずば君一「スクウド」をも惜み給はぬならむ。二「パオリ」は言ふに足らざる錢なり。それにて生涯讀み厭くことなき、伊太利第一の書を藏することを得給はゞ、實にこよなき幸ならずや。

嗚呼、われは三「パオリ」をも惜まざるべし。されど我手中にはその錢なきを奈何せむ。かの伊蘇普が物語に、おのがえ取らぬ架上の葡萄をば、酸しといひきといふ狐の事あり。われはその狐の如く、ハッバス、ダアダアに聞きたるダンテの難を囀り出し、その代にはいたくペトラルカを讃め稱へき。露肆の主人は聞畢りて。さなり〳〵。おのれの無學なる、固より此の如き大家を回護せむ力は侍らず。されど君もまだ歲若ければ、此の如き大家を非難すべきにあらざるべし。おのれはえ讀まぬものなり。君は未だ讀まざるものなり。されば褒むるも貶すも、遂に甲斐なき業ならずや。唯ゞ訝かしきは、君はまだ讀まぬ書をいひおとし給ふことの苛酷なることぞといふ。われは心に愧ぢて、我詞の全く師の口眞似なるを白狀したり。主人も我が樸直なるをや喜びけむ、書を取りて我にわたしていふやう。好し、一「パオロ」にて君に賣らむ。その代には早く讀み試みて、本國の大詩人をあしざまに言ふことを止め給へ。

神曲、吾友なる貴公子

何等の快事ぞ。神曲は今我書となりぬ。我が永く藏することを得るものとなりぬ。ハッバス、ダアダアが非難をば、我始より深く信ぜざりき。わが奇を好む心は、かの露肆の主人が言に挑まれて、愈ゝ熾になりぬ。われは人なき處に於いて、はじめて此卷を繙かむ折を、待ち兼ぬるのみなりき。

われは生れかはりたる如くなりき。ダンテは

實にわがために、新に發見したる亞米利加なりき。我空想は未だ一たびも斯く廣大に、斯く豐饒なる天地を望みしことなかりしなり。その岩石何ぞ峨々たる。その色彩何ぞ奕々たる。我は作者と共に憂へ、作者と共に樂み、作者と共に當時の生活を閲し盡したり。地獄の關に刻めりといふ銘は、全篇を讀む間、我耳に響くこと、世の末の裁判の時、鳴りわたるらむ鐘の音の如くなりき。その銘に云く。

こゝすぎて　うれへの市に
こゝすぎて　歎の淵に
こゝすぎて　浮ぶ時なき
群に社　人は入るらめ
あたゝかき　情はあれど
おぎろなき　心にたづね
きはみなき　ちからによりて
いつくしき　法をうき世に
しめさむと　この關の戸を
神や据ゑけむ

われは飃風に捲き起さるゝ沙漠の砂の如き、常に重く又暗き空氣を見き。われは亡魂の風に向ひて叫喚するとき、秋深き木葉の如く墜ちゆく亞當が族を見き。而れども言語の未だ血肉とならざりし世にありし靈魂の王たる人々のこゝにあるを見るに迨びて、我眼は千行の涙を流しつ。ホメロス、ソクラテエス、ブルッス、ヰルギリウス、これ皆永く樂土の門に入ること能はずしてこゝに留りたるものなりき。ダンテが筆は、此等の人に、地獄といふに負かざらむ限の、安さ樂しさを與へたれど、そのこゝにあるは、呵責ならぬ苦、希望なき恨にして、長く浮ぶ瀬なき罪人の陷いるなる、毒泡迸り、瘴烟立てる、深き池沼に圍まれたる大牢獄の裡なること、よその罪人に殊ならず。われはこれを讀みて、平なること能はざりき。基督の一たび地獄に降りて、又主の傍に昇りしとき、彼は何故にこゝの谿間の人々を隨へゆかざりしか。彼は當時同じ不幸にあへるものに、同じ憐を垂れざることを得たりしか。われは讀むところの詩なるを忘れつ。沸きかへる膠の海より聞ゆる苦痛の聲は、我胸を衝きたり。われは「シモニスト」の群を見き。その浮き出でゝは、鬼の持てる鋭き鐵搭にかけられて、又沈めらるゝを見き。ダンテが敍事の生けるが如きために、其狀深くも我心に彫りつけられたるにや、晝は我念頭に上り、夜は我夢中に入りぬ。我囈語の間には、屢々「パペ、サタン、アレップ、サタン、パペ」といふ詞聞えぬ。こはわが讀みたる神曲の文なるを、同房の書生はさりとも知らねば、我魂まことに惡魔に責められたるかと疑ひ惑ひぬ。教場に出でゝも、我心は課程に在らざりき。師の聲にて、「アントニオよ、又何事をか夢みたる、」と問はるゝ毎に、われは且恐れ且恥ぢたり。されどこの儘に神曲を擲たむことは、わがなすこと能はざるところなりき。

我が暮らす日の長く又重きことは、ダンテが地獄にて負心の人の被るといふ鍍金したる鉛の上衣の如くなりき。夜に入れば、又我禁斷の果に偭ひ寄りて、その惡鬼に我妄想の罪を數めらる。かの人を螫しては燄に入り、一たびは烟となれど、又「フヨニックス」(自ら焚けて後、再び灰より生るゝ怪鳥)の如く生れ出でゝ、毒を吐き人を傷るといふ蛇の刺をば、われ自ら我膚の上に受くと覺えき。」

わが夢中に地獄と呼び、罪人と叫ぶを聞きて、同房の書生は驚き醒むることしば〳〵なりき。或る朝老僧の舍監を勤むるが、我臥床の前に來しに、われ眠れるまゝに眼を睜き、おのれ魔王と叫びもあへず、半ば身を起してこれに抱きつき、暫し角力ひて、又枕に就きしことあり。

わがよな〳〵惡魔に責めらるといふ噂は、やうやう高くなりぬ。我床には呪水を灑ぎぬ。わ

が眠に就くときは、僧來りて祈禱を勸めたり。此處置は益〻我心を妥ならざらしめき。囈語の由りて出づるところは、われ自ら知れり。これを隱して人を欺くことの快からぬために、我血はいよ〳〵騷ぎ立ちぬ。數日の後、反動の期至り、我心は風の吹き荒れたる迹の如くなりぬ。

學校の書生衆しといへども、その家世、その才智、竝に人に優れたるは、ベルナルドオといふ人なりき。遊戲に日をおくるは咎むべきならねど、あまりに情を放ちて自ら恣にするさまも見えき。或ときは四層の屋の棟に騎り、或ときは窓より窓にわたしたる板を踐みて、人の膽を寒からしめき。凡そこの學校國に、内訌起りぬといふときは、其責は多く此人の身に歸することとなり。しかもベルナルドオこれを冤とすること能はざるが常なりき。舍内の靜けさ、僧尼の房の如くならむは、人々の願なるに、このベルナルドオあるがために、平和はいつも破られき。されど彼が戲は人を傷ふには至らざりしが、獨りハッバス、ダアダアに對しての振舞は、やゝ中傷の嫌ありとおもはれぬ。ハッバス、ダアダアはこれを憎みてあはれ福の神は、直なる「ピニョロ」の木を顧みで、珠を朽木に抛げ與へしよ抔いひぬ。ベルナルドオは羅馬の議官の甥にて、その家富みさかえたればなるべし。

ベルナルドオは何事につけても、人に殊なる見を立て、これを同學のものに說き聞かせて、その聽かざるものをば、拳もて制しつれば、いつも級中にて、出色の人物ともてはやされき。彼と我とは性質太く異なるに、彼は能く我に親みき。唯〻わがあまりに爭ふ心に乏きをば、ベルナルドオ嘲り笑ひぬ。

或時ベルナルドオの我にいふやう。われ若し我拳の、一たび爾を怒らしむるを知らば、われは必ず爾を打つべし。汝は人に本性を見することなきか。わが汝を嘲るとき、汝は何故に拳を揮ひて我面を撲たむとせざる。その時こそ我は汝がまことの友となるならめ。されど今はわれこの望を絕ちたりといひき。

わがダンテの熱の少しく平らぎたる頃なりき。ひと日ベルナルドオは我前なる卓に腰掛けて、しばし故ありげなる笑をもらしつゝ我顏を見つめ居たるが、忽ち我にいふやう。汝は我にもまして橫着なる男なり。善くも狂言して人を欺くことよ。床は呪水に濡らされ、身は護摩の烟に薰さるゝは、これがために非ずや。我知らじとやおもふ、汝はダンテを讀みたるを。

血は我頰に上りぬ。われは爭でかさる禁を犯すべきと答へき。ベルナルドオのいはく。汝が昨夜物語りし惡魔の事は、全く神曲の中なる惡魔ならずや。汝が空想はゆたかなれば、わが說くを厭かず聽くならむ。地獄に火燄の海、瘴霧の沼あるは、汝が早くより知るところならむ。されど地獄には又深き底まで凍りたる海あり。その中に閉ぢられたる亡者も亦少からず。その底にゆきて見れば、恩に負きし惡人ども集りたり。「ルチフェエル」（魔王）も神に背きし報にて、胸を氷にとぢられたるが、その大なる口をば開きたり。その口に墮ちたるは、ブルッス、カッシウス、ユダス、イスカリオットなり。中にもユダス、イスカリオットは、魔王が蝙蝠の如き翼を振ふ隙に、早く半身を喉の裡に沒したり。この「ルチフェエル」が姿をば、一たび見つるもの忘るゝことなし。われもダンテが詩にて、彼奴と相識になりたるが、汝はよべの囈語に、その魔王の狀を、詳に我に語りぬ。その時われは今の如く、汝はダンテを讀みたるかと問ひぬ。夢中の汝は、今より直にて、我に眞を打ち明け、ハッバス、ダアダアが事をさへ語り出でぬ。何故に覺めたる後には我を隔てむとする。我は汝が祕事を人に告ぐるものにあらず。

汝が禁を犯したるは、汝が身に取りて譽となすべき事なり。我は久しく汝が上にかゝることあらむを望みき。されど彼書をば、汝何處にてか獲つる。我も一部を藏したれば、汝若し蚤く我に求めば、我は汝に借しゝならむ。我はハッバス、ダアダアがダンテを罵りしを聞きしより、その良き書なるを推し得て、汝に先だちて買ひ來りぬ。われは長く机に倚ることを好まず。神曲の大いなる二卷には、我ほと〳〵厭みしが、これぞハッバス、ダアダアが禁ずるところとおもひおもひ、勇を鼓して讀みとほしつ。後にはかのふみ我にさへ面白くなりて、今は早や三たび閲しつ。その地獄のめでたさよ。汝はハッバス、ダアダアの墜つべきを何處とか思へる。火のかたなるべきか、冰のかたなるべきか。

わが祕事は訐かれたり。されどベルナルドオはこれを人に語るべくもあらず。ベルナルドオとわれとの交は、この時より一際密になりぬ。旁に人なき時は、われ等の物語は必ず神曲の事にうつりぬ。わがこれを讀みて感じたるところをば、必ずベルナルドオに語り聞かせたり。この間にわが文字を知りてよりの初の詩は成りぬ。その題はダンテと其神曲となりき。

わが買ひ得たる神曲の首には、ダンテが傳を刻したりき。そはいたく省略したるものなりしかど、僅わが詩材とするに堪へたれば、われはこれに據りて、此詩人の生涯を歌ひき。ベアトリチエとの淨き戀、戰爭の間の苦、逐客となりてアルピイ山を踰えし旅の憂さ、異鄉の鬼となりし哀さ、皆我詩中のものとなりぬ。わが最も力を用ゐしは、ダンテが靈魂天翔りて、人間地獄を見おろす一段なりき。その敍事は省筆を以て、神曲の梗概を摸寫したるものなりき。淨火は又燃え上れり。果實累々たる、樂園の木のこずゑは、漲り落つる瀑布の水に浸されたり。ダンテが乘りたる、そら行く舟は、神童の白く大なる翼を帆としたり。その舟次第に騰りゆく程に、山々は搖り動されたり。太陽とそのめぐりなる神童の群とは、明鏡の如く、神の光明を映じ出せり。この時に遇ふものは、賢きも愚なるも、こゝろ〳〵に無上の樂を覺えたり。

誦してベルナルドオに聞せしに、彼はこれを激稱せり。彼のいはく。アントニオよ。次の祭の日には、汝其詩を讀み上けよ。ハッバス、ダアダアいかなる面をかすらむ。面白し面白し。汝が讀むべき詩は、その外にはあらじ。斯く勸めらるゝに、われは手を揮りて諾はざりき。ベルナルドオ語を繼ぎていふやう。さらば汝はえ讀まぬなるべし。我にその詩を得させよ。われダンテの不朽をもて、ハッバス、ダアダアを苦めむとす。汝はおのが美しき才を拔きて、このおほおそ鳥を飾らむを惜むか。讓るは汝が常の德にあらずや。いかに〳〵と、勸めて止まざりき。我もその日のありさまいかに面白からむとおもへば、詩稿をば直にベルナルドオにわたしつ。

今も西班牙廣こうぢの「プロパガンダ」といふ學校にては、毎年一月十三日に、祭の式行はる事なるが、當時は「ジェスヰタ」學校に、おなじ式ありき。諸生徒はおの〳〵その故鄕の語、若くはその最も熟したる語にて、一篇の詩を作り、これを式場に持ち出でゝ讀むことなりき。題をば自ら撰びて、師の認可を請ひ、さて章を成すを法とす。

題の認可の日に、ハッバス、ダアダアはベルナルドオにいふやう。君は又何の題をも撰び給はざりしならむ。君は歌ふ鳥の群にあらねば。ベルナルドオのいはく。否。ことしは例に違ひて作らむとおもへり。伊太利詩人の中にて題とすべきものを求めたるが、その第一の大家を歌はむは、わが力の及ばざるところなり。さればわれは稍ゝ小なるものをとて、ダンテを撰びぬ。

ハッバス、ダアダア冷笑ひていふ。ダンテを詠ずとならば、定めて傑作をなすなるべし。そは聞きものなり。さはあれ式の日には、僧官たちも皆臨席せらるゝが上に、外國の貴賓も來べければ、さる戲はふさはしからず。謝肉の祭をこそ待ち給ふべけれ。この詞にて、他人ならば思ひとゞまるべきなれど、ベルナルドオはなかなか屈すべくもあらず。別の師の許を得て、かの詩を讀むことゝ定めき。われは本國を題として、新に一篇を草しはじめつ。

學校の規則には、詩賦は他人の助を藉ることを允さずと記したり。されどいつも雨雲に蔽はれたるハッバス、ダアダアが面に、此の日光を見むと願ふものは、先づ草稿を出して閲を請ひ、自在に塗抹せしめずてはかなはず。大抵原の語は、纔にその半を存するのみなり。さて詩の拙さは、すこしも始に殊ならず。その始に殊なるは、唯ゞその癖、その手段のみなるべし。斯く改めたる作、他日よそ人に譽めらるゝ時は、ハッバス、ダアダアは必ずおのれが刪潤せしを告ぐ。このたび讀むべき詩も、多く一たびハッバス、ダアダアが手を經たるが、ひとりベルナルドオが詩のみは、遂にその目に觸れざりき。

兎角する程にその日となりぬ。馬車は次第に學校の門に簇りぬ。老僧官たちは、赤き法衣の裾を牽きて式場に入り、美しき椅子に倚り給ひぬ。詩の題、その國語、その作者など列記したる刷ものは、來賓に頒たれぬ。ハッバス、ダアダア先づ開場の演說をなし、諸生徒は次を逐ひて詩を讀みたり。シリア、カルデア、新埃及、其外梵文英語の作さへありて、その耳ざはり愈ゝあやしうして、喝采の聲は愈ゝ盛なりき。但ゞ喝采の聲には、拍手なんどのみならで、高笑もまじるを常とす。

われは胸を跳らせて進み出で、伊太利を頌したる短篇を讀みき。喝采の聲は幾度となく起りぬ。老いたる僧官達も手を拍ち給ひぬ。ハッバス、ダアダア出來る限のやさしき顏をなし、手中の桂冠を動かしつ。伊太利語の詩もて、我後に技を奏すべきは、獨りベルナルドオあるのみにて、其次なる英語は固より賞を得べくもあらねば、あはれ此冠は我頭の上に落ちむとぞおもはれける。

その時ベルナルドオは壇に登りぬ。我はあやぶみながら友の言動に耳を傾け目を注ぎつ。友は些の怯れたる氣色もなく、かのダンテを詠ずる詩を誦したり。式場は忽ち水を打ちたるやうに鎭まりぬ。讀誦の力あるに、聽くもの皆感動したるなり。われは初より隻句を遺さず諳じたり。されど今改めてこれを聽けば、ほとほとダンテ其人の作を聞くが如くおもはれぬ。誦し畢りし時、場に臨みたる人々は、悉く喝采せり。僧官達は席を離れ給ひぬ。式はこゝに終れるが如く、桂冠はベルナルドオがものと定りぬ。次なる英語の詩をば、人々止むことを得ずして聽き、又止むことを得ずして拍手せしのみ。その畢るや、滿場の話柄はベルナルドオがダンテの詩の上にかへりぬ。

我頰は火の如くなりき。我胸は擴まりたり。我心は人々のベルナルドオがために焚ける香の烟を吸ひて、ほと／＼醉へるが如くなりき。この時われは友の方を打ち見たるに、彼が容貌はいたく常にかはりて見えき。その面色土の如く、目を床に注ぎて立てるさまは、重き罪を犯したる人の如くなりき。ハッバス、ダアダアも亦いたく不興げなるおも持して、心こゝにあらねばか、その手にしたる桂冠を摘み碎かむとする如くなりき。僧官のうちなる一人、進みこれを取りて、ベルナルドオが前に進み給ひぬ。我友は此時跪きたるが、もろ手に面を掩ひて、この冠を頭に受けたり。

式畢りて後、われは友の側に歩み寄りしに、

彼は明日こそと云ひもあへず、走り去りぬ。翌日になりても、彼は我を避けて、共に語らざりき。我は唯ゝ一人なる友を失へるやうに覺えて、憂きに堪へざりき。二日過ぎて、ベルナルドオは我頸を擁き、我手を把りていふやう。アントニオよ。今こそは我心を語らめ。桂冠の我頭に觸れたる時は、われは百千の棘もて刺さるゝ如くなりき。人々の我を譽むる聲は、我を嘲るが如くなりき。この譽を受くべきは、我に非ずして汝なればなり。我は汝が目のうちなる喜の色を見き。汝知らずや。この時われは汝を憎みたり。おもふに我はこゝにありて、今迄の如く汝に交ることを得ざるべし。この故に我はこゝを去らむとす。試におもへ。明年の式あらむとき、われ又汝が羽毛を借らずば、人々の前に出づることを得ざるべし。我心爭でかこれに堪へむ。我に勢あるをぢあり。我はこれに我上を頼みき。我は身を屈して願ひき。こはわが未だ嘗て爲さゞることなり。わが敢てせざるところなり。我はその時又汝が事をおもひ出しつ。斯くわが心に負きて人に頼るも、その原は汝に在るらむやうにおもはれぬ。この故に我は汝に對して、忍びがたき苦を覺ゆるなり。我は一たびこゝを去りて、別に身を立つるよすがを求め、その上にて又汝が友とならむ。アントニオよ。願はくはその時を待て。吾は去らむ。

　この夕ベルナルドオは晩く歸りて床に入りしが、翌朝は彼が退校の噂諸生の間に高かりき。ベルナルドオは思ふよしありて、目的を變じたりとぞ聞えし。

　ハッバス、ダアダアは冷笑の調子にていはく。彼男は流星の如く去りぬ。その光を放てると、その影を隱しゝとは、一瞬の間なりき。その學校生涯は爆竹の遽に耳を駭かす如くなりき。その詩も亦然なり。彼草稿は猶我手に留まれり。何等の怪しき作ぞ。熟ゝこれを讀むときは、畢竟是れ何物ぞ。斯くても猶詩といはるべき歟。全篇支離にして、絕て格調の見るべきなし。看て瓶となせば、これ瓶。盞となせば、是れ盞。劍となせば、これ劍。その定まりたる形なきこと、これより甚しきはあらず。字を剩すこと凡そ三たび。聞くに堪へざる平字の連用（ヒアツス）あり。神といふ字を下すことおほよそ二十五處。それにて詩をから〳〵しくせむとにや。性靈よ。性靈よ。誰かこれのみにて詩人とならむ。このとりとめなき空想能く何事をか做し出さむ。こゝに在りと見れば、忽焉としてかしこに在り。汝は才といふか。才果して何をかなさむ、眞の詩人の貴むところは、心の上の鍛錬なり。詩人はその題のために動さるゝこと莫れ。その心は冷なること氷の如くならむを要す。その心の生ずるところをば、先づ刀もて截り碎き、一片々々に査べ視よ。かく細心して組み立てたるを、まことの名作とはいふなり。厭ふべきは熱なり、激興なり。誰かその熱に感じて、桂冠を乳臭兒の頭に加へし。その詩に史上の事實を矯め、聞くに堪へざる平字の連用をなしたるなど、皆笞ち懲すべき科なるを。我けまことに甚しき不快を覺えき。かゝる事に逢ふごとに、我は健康をさへ害せられむとす。ベルナルドオのこわつぱ奴。ハッバス、ダアダアが批評は大抵此の如くなりき。

　學校の中、ベルナルドオが去りしを惜まざるものなかりき。されどその惜むことの最も深きは我なりき。身のめぐりは遽に寂しくなりぬ。書を讀みても物足らぬ心地して、胸の中には遣るに由なき悶を覺えき。さて如何してこれを散ずべき。唯ゝ音樂あるのみ。我生活我願望はこれを樂の裡に求むるとき、始めて殘るところなく明なる如くなりき。こゝを思へば、詩には猶飽き足らぬところあり。ダンテが雄篇にも猶我心を充たすに足らざるところあり。詩は我

魂を動せども、樂はわが魂と共に、わが耳によりてわが魄を動せり。夕されば我窓の外に、一群の小兒來て、聖母の像を拜みて歌へり。その調は我にわが穉かりける時を憶ひ起さしむ。その調はかの笛ふきが笛にあはせし搖籃の曲に似たり、又或時は野邊送の列、窓の下を過ぐるを見て、これをおくる僧尼の挽歌を聽き、昔母上を葬りし時を思ひ出しつ。我心はこしかたより行末に遷りゆきぬ。我胸は押し狹めらるゝ如くなりぬ。昔歌ひし曲は虚空より來りて我耳を襲へり。その曲は知らず識らず我脣より洩れて歌聲となりぬ。

ハッバス、ダアダアが室は、我室を去ること近からぬに、我聲は覺えず高くなりて、そこまで聞えぬ。ハッバス、ダアダア人して言はしむるやう。こゝは劇場にもあらず、又唱歌學校にもあらず、讃美歌に非ざる歌の聞ゆるこそ心得られねとなり。われは默して答へず。頭を窓の縁に寄せつけて、目を街のかたに注ぎたれど、心はこゝに在らざりき。

忽ち街上より「フェリチッシイマ、ノッテェ、アントニオ」(幸あらむ夜をこそ祈れ、アントニオよといふ事なり、北歐羅巴にては善き夜をとのみいふめれど、伊太利の夜の樂きより、かゝる詞さへ出來ぬるなるべし)と呼ぶ人あり。窓の前にて、美しく猛き若駒に首を昂げさせ、手を軍帽に加へて我に禮を施し、振り返りつゝ馳せ去りしは、法皇の禁軍なる士官なりき。嗚呼、我はその顏を見識りたり。これわがベルナルドオなり。わが幸あるベルナルドオなり。

我生活は今彼に殊なること幾何ぞ。われは深くこれを思ふことを好まず。われは傍なる帽を取りて、目深にかぶり、惡魔に逐はるゝ如く、學校の門を出でぬ。おほよそ「ジェスキタ」學校、「プロパガンダ」學校、その外この教國の學校生徒は、外に出づるとき、おのれより年長けたる、若くはおのれと同じ齡なる、同學のものに伴はるゝを法とす。稀に獨り行くには、必ず許可を請ふことなり。こは誰も知りたる掟なるを、われはこの時少しも思ひ出でざりき。老いたる番僧はわが出づるを見つれど、許可を得たるものとや思ひけむ、我を誰何めざりき。

めぐりあひ、尼君

大路に出づれば馬車ひきもきらず。羅馬の人を載せたるあり、外國の客を載せたるあり。往くあり、還るあり。こは都の習なる夕暮の遊乘といふものにいでたる人々なるべし。銅版畫を掛けつらねたる技藝品舖の前には、人あまた立てり。その衣にまつはりて錢を得むとするは、乞兒の群なり。されば車の間を馳せぬくることを厭ひては、こゝを行くべくもあらず。我が車の隙を覗ひて走りぬけむとしたる時「ボン、ジョオルノオ、アントニオ」(吉日をこそ、アントニオ)と呼ぶは、むかし聞き慣れたる忌はしき聲なり。見卸せば、ペッポのをぢ例の木履を手に穿きて、地上にすわり居たり。この人にかく近づきたることは、この年頃絶てなかりき。西班牙の磴を避けてとほり、道にて逢ふときは面を掩ひて知らしめず、式の日などに諸生の群にありてこれに近づくときは、女の身を盾に取りて見付けられぬ心がまへしたりき。ペッポは我裳裾を握りて離たずしていふやう。血を分けたるアントニオよ。そちがをぢなるペッポを知らぬ人のやうになあしらひそ。尊きジュウゼッペ(ペッポはこの名を約めたるなり)の上を思はば、我名を忘るゝことなからむ。暫く見ぬ隙に、おとなびたることよ。かく親しく物言はるゝ程に、道行く人は怪みて我面を見たり。我は放ち給へと叫びて裾を引けども、ペッポは容易く手をゆるめず。アントニオよ。共に驢に乘りし日の事を忘れしか。善き兒なるかな。今は丈

高き馬に乘れば、最早我を顧みざるならむ。母の同胞の西班牙の磴にあるを訪はざるならむ。そちも我手に接吻せしことあり。そちも我宿の一束の藁を敷寢せしことあり。昔をわすれなせそ。かくかきくどかるゝうるさゝに、我は力を極めて裾ひきはなち、車の間をくゞりぬけて、横街に馳せ入りぬ。

我胸は跳れり。こは驚のためのみにはあらず、辱のためなりき。我はをぢがもろ人の前に我を辱めたりとおもひき。されど此心は久しからずして止み、これに代りて起りしは、これよりも苦しき情なりき。をぢが詞は一つとして僞ならず。われはまことにペッポが一人の甥なり。わがこれに對して恩すくなかりしは、そも〳〵何故ぞ。若し餘所に見る人なくば、我は昔の如くをぢの手に接吻せしならむ。さるを今かく殘忍なる振舞せしは、わが罪深き名譽心にあらずや。われは自ら愧ぢ、又神に恥ぢて、我胸は燃ゆる如くなりき。

この時聖アゴスチノ寺の「アエ、マリア」の鐘の聲響きしかば、われは懺悔せむとて寺の内に入りぬ。高き穹窿の下は暗くして人影絶えたり。卓の上なる蠟燭は僅に燃ゆれども光なかりき。われは聖母の前に伏し沈みて、心の重荷をおろさむとしつ。忽ち我側にありて、我名を呼ぶ人あり。アントニオの君よ。館も御奧もフィレンツェより歸り來ませり。かしこにて設け給ひし穉き姫君をも伴ひ給ひぬ。今より共に往きて喜をのべ給はずやといふ。寺の内の暗さに見えざりしが、かく言はれてその人を見れば、我恩人の館なる門者の妻にてフェネルラといふものなりき。年久しく相見ざりし人々に逢はせむといふが嬉しさに、われは共に足を早めてボルゲエゼの館にゆきぬ。

ファビアニの君はやさしく我をもてなし給ひ、フランチェスカの君は又母の如くいたはり給ひぬ。姫君にも引きあはせ給ひぬ。名をばフラミニアといふ。目の美しく光ある穉子なり。我に接吻し、我側に來居たるが、まだ二分時ならぬに、はや我に昵み給へり。かき抱きて間のうちをめぐり、可笑しき小歌うたひて聞せしかば、面白しと打笑ひ給ひぬ。館は微笑みつゝ。穉き尼君を世の中の少女の樣になせそ。法皇の手づから授けられし壻君をば、今より胸にをさめたるをとのたまふ。げにこの姫君は、白かねもて造りたる十字架に基督の像つきたるを、鎖もて胸に懸け給へり。（伊太利の俗、尼寺に入れむと定めたる女兒をば、夙くより小尼公など呼ぶことあり。）夫婦の君は婚禮の初、喜のあまりに始て生るべき子をば、み寺に參らせむと誓ひ給ひしなり。勢ある家の事とて、羅馬に名高き尼寺の首座をば、今よりこの姫君の爲めに設けおけりとぞ。されば此君には、苟且の戲にも法の掟に背かぬやうなることのみをぞ勸め參らせける。小尼公は偶人いれたる箱取り出でゝ、中なる穉き耶蘇の像、またあまたの白衣きたる尼の像を示し給ふ。さて尼の人形を二列に立てゝ、日ごとにかく歩ませて供養のにはに連れゆくとのたまひぬ。又尼どもは皆聲めでたく歌ひて、穉き耶蘇を拜めりとのたまひぬ。こは皆保母が敎へつるなり。我は畫かきて小尼公を慰めき。長き毳衣を着て、噴水のトリイトンの神のめぐりに舞ふ農夫、一人の匍匐ひたるが上に一人の跨りたる侏儒抔、いたく姫君の心にかなひて、始はこれに接吻し給ひしが、後には引き破りて棄て給ひぬ。兎角する程に、はや常に眠り給ふ時過ぎぬとて、うば抱きて入りぬ。

夫婦の君は我上を細に問ひて、今より後も助にならむと契り、こゝに留らむ間は日ごとに訪へかしとのたまひぬ。カムパニアの野邊に住める媼が事、語り出で給ひしかば、我は春秋の

天氣好き折、かしこに訪ねゆきて、我臥床の跡を見、媼が經卷珠數と共に藏したる我畫反古を見、また爐の側にて燒栗を嚙みつゝ昔話せばやとおもふ心を聞え上げぬ。暇乞して出でむとせしとき、夫人は館を顧みてのたまふやう。學校は智育に心を用ゐると覺ゆれど、作法の末まではゆきとゞかぬなるべし。この子の禮するさまこそ可笑しけれ。世の中に出でむ後は、これをも忽にすべからず。されど、アントニオよ、心をだに附けなば、そはおのづから直るべきものぞ。

學校に還らむとて館を出でしは、まだ宵の程なりしが、街はいと暗かりき。羅馬の市に竿燈を點くるは近き世の事にて、其の頃はまださるものなかりしなり。狹き枝みちに歩み入れば、平ならざる道を照すもの唯ゞ聖母の像の御前に供へたる油燈のみなり。われは心のうちに晝の程の事どもを思ひめぐらしつゝ、徐にあゆみを運びぬ。固より咫尺の間もさやかには見えねば、忽ち我手に觸るゝものあるに驚きて、われはまだ何とも思ひ定めぬ時、耳慣れたる聲音にて、奇怪なる人かな、目をさへ撞きつぶされなば、道はいよ／＼見えずやならむといふ。われは喜のあまりに聲高く叫びて、さはベルナルドオなるよ、嬉くも逢ひけるものかなといひぬ。アントニオか、可笑しき再會もあるものよと、友は我を抱きたり。さるにても何處よりか來し。忍びて訪ふところやある。そは汝に似合はしからず。されど我に見現されぬれば是非なし。例の獄丁はいづくに居る。學校よりつけたる道づれは。我。否けふはひとりなり。ベルナルドオ。ひとりとは面白し。汝も天晴なる少年なり。我と共に法皇の護衞に入らずや。

我は恩人夫婦のこゝに來ませし喜を告げしに、吾友も亦喜びぬ。これよりは足の行くに任せて、暗路を辿りつゝ、別れての後の事どもを語りあひぬ。

猶太の翁

途すがらベルナルドオの云ふやう。我は今こそ浮世の樣をも見ることを得つれ。そなた等が世にあるは、唯ゞ世にありといふ名のみにて、まだ襁褓の中を出でざるにひとし。冷なる學校の榻に坐して、黴の生えたるハッバス、ダアダアが講釋に耳傾けむは、あまりに甲斐なき事ならずや。見よ、我が馬に騎りて市を行くを。美しき少女達は、燃ゆる如き眼なざしして、我を仰ぎ瞻るなり。わが貌は醜からず。われには號衣よく似合ひたり。此街の暗きことよ、汝は我號衣を見ること能はざるべし。我が新に獲たる友は、善く我を導けり。彼等に汝が如き窮措大めきたる男にあらず。我等に劍を佩ひて、盃を傾け、又折に觸れてはおもしろき戲をもなせり。されど其戲をもの語らむは、汝が耳の聽くに堪へざるところならむ。そなたの世を渡るさまをおもへば、男に生れたる甲斐なくぞおもはるゝ。我はこの二三月が程に十年の經驗をなしたり。我はわが少年の血氣を覺えたり。そは我血を湧し、我胸を張らしむ。我は人生の快樂を味へり。我脣はまだ燃え、我咽はまだ渇きに、我身はこれを受用すること醉ひたる人の水を飲むらむやうなり。斯く說き聞せられて、我はいつもながら氣沮みて聲も微に、さらば君が友だちといふはあまり善き際にはあらぬなるべしと答へき。ベルナルドオはこらへず。善き際にあらず、とは何をか謂ふ。我に向ひて道德をや說かむとする。吾友だちは汝にあしざまに言はるべきものにはあらず。吾友だちは羅馬にあらむ限の貴き血統にこそあなれ。われ等は法皇の禁軍なり。縱ひわづかの罪ありとも、そは法皇の免除するところなり。われも學校を出でし初には、汝が言ふ如き感なきにあ

らざりしが、われは敢て直ちにこれを言はず、敢て友等に知らしめざりき。われは彼輩のなすところに傚ひき。そは我意志の最も強き方に從ひたるのみ。我意馬を奔らしめて、その往くところに任するときは、我はかの友だちに立ち後るゝ憂なかりしなり。されど此間我胸中には、猶少しの寺院教育の滓殘りゐたれば、我も何となく自ら安ぜざる如き思をなすことありき。我はをり〳〵此滓のために戒められき。我は生れながらの清白なる身を潰すが如くおもひき。かゝる懸念は今や名殘なく失せたり。今こそ我は一人前の男にはなりたるなれ。彼教育の滓を身に帶びたる限は、その人小兒のみ、卑怯者のみ。おのれが意志を抑へ、おのれが欲するところを制して、獨り鬱々として日を送らむは、その卑怯ものゝ擧動ならずや。餘に饒舌りて途のついでをも顧みざりしこそ可笑しけれ。こゝはキヤヰカの前なり。類なき酒家にて、羅馬の藝人どもの集ふところなり。我と共に來よ。切角の邂逅なれば、一瓶の葡萄酒を飮まむ。この家のさまの興あるをも見せまほしといふ。われ。そは思ひもよらぬ事なり。若し學校の人々、わが禁軍の士官と倶に酒店にありしを聞かば奈何。ベルナルドオ。現に酒一杯飮まむは限なき不幸なるべし。されど試に入りて見よ。外國の藝人等が故鄕の歌をうたふさまいと可笑し。獨逸語あり。法朗西語あり。英吉利語あり。またいづくの語とも知られぬあり。これ等を聞かむも興あるべし。われ。否。君には酒一杯飮まむこと常の事なるべけれど、我は然らず。强ひて伴はむことは君が本意にもあらざるべし。斯く醉ふほどに、傍なる細道の方に、許多の人の笑ふ聲、喝采する聲いと賑はしく聞えたり。われはこれに便を得て、友の臂を把りていはく。見よ、かしこに人あまた集りたるは何事にかあらむ。想ふに聖母の御龕の下にて手品使ふものあるならむ。我等も往きてこそ觀め。

我等が往方を塞ぎたるは、極めて卑き際の老若男女なりき、この人々は聖母のみほごらの前にて長き圈をなし、老いたる猶太敎徒一人を取り卷きたり。身うち肥えふとりて、肩幅いと廣き男あり。手に一條の杖を持ちたるが、これを翁が前に橫へ、翁に跳り超えよと促すにぞありける。

凡そ羅馬の市には、猶太敎徒みだりに住むことを許されず。その住むべき廓をば嚴しく圍みて、これを猶太街といふ。（我國の××まちの類なるべし。）夕暮には廓の門を閉ぢ、兵士を置きて人の出入することを許さず。こゝに住める猶太敎徒は、歲に一たび仲間の年寄をカピトリウムに遣り、來む年もまた羅馬にあらむことを許し給はゞ、謝肉祭の時の競馬の費用をも償ひ如く辨へ、又定の日には加持力敎徒の寺に往きて、宗旨がへの說法をも聽くべし、と願ふことなり。

今枚の前に立てる翁は、こよひ此街のをぐらき方を、靜に走り過ぎむとしたるなり、「モルラ」といふ戲せむと集ひたりし男ども、道に遊び居たりし童等は、早くこれを見付けて、見よ人々、猶太の爺こそ來ぬれと叫びぬ。翁はさりげなく過ぎむとせしに、群衆はゆくてに立ちふさがりて通さず。かの肥えたる男は、杖を翁が前に橫へて、これを跳り超えて行け、さらずは廓の門の閉ぢらるゝ迄えこそは通すまじけれ、我等は汝が足の健康を見むと呼びたり。童等はもろ聲に、超えよ〳〵、亞伯罕の神は汝を助くるならむといと喧しく囃したり。翁は聖母の像を指ざしていふやう。人々あれを見給へ。おん身等もかしこに跪きては、慈悲を願ひ給ふならずや。我はおん身等に對して何の辜をもおかししことなし。我髮の白きを憫み給はゞ、恙なく家に歸らしめ給へといふ。杖持ちたる男冷笑ひ

て、聖母爭でか猶太の狗を顧み給はむ、疾く跳り超えよといひつゝいよ〳〵翁に迫る程に、群衆は次第に狹き圈を畫して、翁の爲むやうを見むものをと、息を屛めて覗ひ居たり。ベルナルドオはこの有樣を見るより、前なる群衆を押し退けて圈の中に躍り入り、肥えたる男の側につと寄せて、その杖を奪ひ取り、左の手にこれを指し伸べ、右の手には劍を拔きて振り翳し、かの男を叱して云ふやう。この杖をば、汝先づ跳り超えよ。猶與ふことかは。超えずは、汝が頭を裂くべしといふ。群衆は唯ゞ呆れてベルナルドオが面を打ち眺めたり。彼男はしばし夢見る如くなりしが、怒氣を帶びたる詞、鞘を拂ひし劍、禁軍の號衣、これ皆膽を寒からしむるに足るものなりければ、何のいらへもせず、一跳して杖を超えたり。ベルナルドオは男の跳り超ゆるを待ちて杖を擲ち、その肩口をしかと壓へ、劍の背もて片頰を打ちていふやう。善くこそしつれ。狗にはふさはしき擧動かな。今一たびせよ、さらば免さむといふ。男は是非なく又跳り超えぬ。初呆れ居たる群衆は、今その可笑しさにえ堪へず、一度にどつと笑ひぬ。ベルナルドオのいはく。猶太の翁よ。邪魔をば早や拂ひたれば、いざ送りて得させむといふ。されど翁はいつの間にか逃げゆきけむ、近きところには見えざりき。

我はベルナルドオを引きて群衆の中を走り出でぬ。來よ我友。今こそは汝と共に酒飮まむとおもふなれ。今より後は、たとひいかなる事ありても、われ汝が友たるべし。ベルナルドオ。そなたは昔にかはらぬ物ずきなるよ。されど我が知らぬ猶太の翁のかた持ちて、かの癡人と爭ひしも、おなじ物ずきにやあらむ。

我等は酒家に入りぬ。客は一間に滿ちたれども、別に我等に目を注くるものあらざりき。隅の方なる小卓に倚りて、共に一瓶の葡萄酒を酌み、友誼の永く渝らざらむことを誓ひて別れぬ。

學校の門をば、心やすき番僧の年老いたるが、仔細なく開きて入れぬ。あはれ、珍しき事の多かりし日かな。身の疲に酒の醉さへ加はりたれば、程なく熟睡して前後を知らず。

猶太をとめ

許をも受けで校外に出で、士官と倶に酒店に入りしは、輕からぬ罪なれば、若し事露れなば奈何にすべきと、安き心もあらざりき。さるを僥倖にもその夕我を尋ねし人なく、又我が在らぬを知りたるは、例の許を得つるならむとおもひて、深くも問ひ糺さで止みぬ。我が日ごろの行よく謹めるかたなればなりしなるべし。

光陰は穩に遷りぬ。課業の暇あるごとに、恩人の許におとづれて、そを無上の樂となしき。小尼公は日にけに我に昵み給ひぬ。我は稚かりしとき寫しつる畫など取り出でゝ、み館にもて往き、小尼公に贈るに、しばしはそれもて遊び給へど、幾程もあらぬに破り棄て給ふ。我はそをさへ拾ひ取りて、藏めおきぬ。

その頃我はヰルギリウスを讀みき。その六の卷なるエネエアスがキユメエの巫に導かれて地獄に往く條に至りて、我はその面白さに感ずること常に超えたり。こはダンテの詩に似たるがためなり。ダンテによりて我作をおもひ、我作によりて我友をおもへば、ベルナルドオが面を見ざること久しうなりぬ。恰も好しワチカアノの畫廊開かるべき日なり。且は美しき畫、めでたき石像を觀、且はなつかしき友の消息を聞かばやとおもひて、われは又學校の門を出でぬ。

美しきラファエロが半身像を据ゑたる長き廊の中に入りぬ。仰塵にはかの大匠の下畫によりて、門人等が爲上けたりといふ聖經の圖あり。壁を掩へるめづらしき飾畫、穹窿を塡めた

る飛行の童の圖、これ等は皆我が見慣れたるものたれど、我は心ともなくこれに目を注ぎて、わが待つ人や來るとたゆたひ居たり。欄に凭りて遠く望めば、カムパニアの野のかなたなる山山の華々しき姿をなしたる、固より厭かぬ眺なれど、鋪石に觸るゝ劍の音あるごとに、我は其人にはあらずやとリチカアノの庭を見おろしたり。されどベルナルドオは久しく來ざりき。

　間といふ間を空くめぐり來ぬ。ラオコオンの群の前をも徒に過ぎぬ。我はほと〳〵興を失ひて、「トルソオ」をも「アンチノウス」をも打ち棄てゝ、家路に向はむとせしとき、忽ち羽つきたる盔を戴き、長靴の拍車を鳴して、輕らか。に廊を歩みゆく人あり。追ひ近づきて見ればベルナルドオなり。友の喜は我喜に讓らざりき。語るべき事多ければ、共に來よと云ひつゝ、友は我を延きて奧の方へ行きぬ。

　汝はわが別後いかなる苦を嘗めしかを知らざるべし。又その苦の今も猶止むときなきを知らぬなるべし。譬へば我は病める人の如し。そを救ふべき醫は汝のみ。汝が採らむ藥草の力こそは、我が唯一の賴なれ。斯くさゝやきつゝ、友は我を延いて大なる廳を過ぎ、そこを護れる禁軍の瑞西兵の前を歩みて、當直士官の室に入りぬ。君は病めりと云へど、面は紅に目は輝けるこそ許しけれ。さなり。我身は頭の頂より足の尖まで燃ゆるやうなり。我はそれにつきて汝が智惠を借らむとす。先づそこに坐せよ。別れてより後の事を語り聞すべし。

　汝はかの猶太の翁の事を記えたりや。聖母の龕の前にて、惡少年に窘められし翁の事なり。我はかの惡少年を懲して後、翁猶在らば、家まで送りて得させむとおもひしに、早やいづち往きけむ見えずなりぬ。その後翁の事をば少しも心に留めざりしに、或日ふと猶太廓の前を過ぎぬ。廓の門を守れる兵士に敬禮せられて、我は始めてこゝは猶太街の入口ぞと覺りぬ。その時門の内を見入りたるに、黑目がちなる猶太の少女あまた群をなして佇みたり。例のすきごゝろ止みがたくて、我はそが儘馬を乘り入れたり。こゝに住める猶太教徒は今も宗門の組合をなして、その家々軒を連ねて高く聳え、窓といふ窓よりは、「ベレスヒット」、「パラ」、「エロヒム」といふ祈の聲聞ゆ。街には宗徒簇りて、肩と肩と相摩するさま、むかし紅海を渡りけむ時も忍ばる。簷端には古衣、雨傘その外骨董どもを、懸けも陳べもしたり。我駒の行くところは、古かなもの、古畫を鬻ぐ露肆の間にて、目も當てられず穢れたる泥濘の裡にぞありける。家々の戸口より笑みつゝ仰ぎ瞻る少女二人三人を見るほどに、何にても買ひ給はずや、賣り給ふ物あらば價貴く申し受けむと、聲々に叫ぶさま堪ふべくもあらず。想へ汝、かゝる地獄めぐりをこそダンテは書くべかりしなれ。

　忽ち傍なる家より一人の翁馳せ出でゝ、我馬の前に立ち迎へ、我を拜むこと法皇を拜むに異ならず。貴き君よ、我命の親なる君よ。再び君と相見る今日は、そも〳〵いかなる吉日ぞ。このハノホ老いたれども、恩義を忘れぬほどの記憶はありとおぼされよ。かく語りつゞけて、末にはいかなる事をか言ひけむ、悉くは解せず、又解したるをも今は忘れたれば甲斐なし。これ去ぬる夜惡少年の杖を跳り超ゆべかりし翁なり。翁は我手の尖に接吻し、我衣の裾に接吻していふやう。かしこなるは我破屋なり。されど鴨居のいと低くて君が如き貴人を入らしむべきならぬを奈何せむ。かく言ひては拜み、拜みては言ふ隙に、近きわたりの者共は、我等二人のまはりに集ひ、あからめもせず打ち守りたるそのうるささにえ堪へず。我は早や馬を進めむとしたり。この時ふと仰ぎ見れば、翁が家の樓上よりさし覗きたる少女あり。色好なる我すら

かゝる女子を見しことなし。大理石もて刻めるアフロヂテの神か。されど亞剌伯種の少女なればにや、目と頰とには血の温さぞ籠りたる。想へ汝、我が翁に引かれて、辭はずその家に入りしことの無理ならぬを。

廊の闇さはスチピオ等の墓に降りゆく道に讓らず。木の欄ある梯は、行くに足の尖まで油斷せざる稽古を、怠りがちなる男にせさするに宜しかるべし。部屋に入りて見れば、さまで見苦しからず。されど例の少女はあらず。少女あらずば、われこゝに來て何をかせむ。技癢に堪へざる我心をも覺らず、かの翁は永々しき謝恩の演説をぞ始めける。その辭に綴り込めたる亞細亞風の譬喩の多かりしことよ。汝が如き詩人ならましかば、そを樂みて聞きもせむ。我は恰も消化し難き饌に向へる心地して、肚のうちには彼女子今か出づるとのみおもひ居たり。此時翁は感ずべき好き智慧を出しぬ。あはれ此智慧、好き折に出でなば、いかにか我を喜ばしめしならむ。翁のいはく。貴きわたりに交らひ給ふ殿達は、定めて金多く費し給ふならむ。君も卒かに金なくてかなはぬ時、餘所にてそを借り給はゞ、二割三割などいひて、夥しき利息を取られ給ふべし。さる時あらば、必ず我許に來給へ。利息は申し受けずして、いくばくにても御用だて侍らむ。そはイスラエルの一枝を護りたる君が情の報なりといひぬ。我は今さる望なきよし答へぬ。翁さらに語を繼ぎて。さらば先づ平かに居給へ。好き葡萄酒一瓶あれば、そを獻らむといふ。我は今いかなる事を答へしか知らず。されどその詞と共に一間に入り來りしは彼少女なり。いかなる形ぞ。いかなる色ぞ。髮は漆の黑さにてしかも澤あり。こは彼翁の娘なりき。少女はチプリイの酒を汲みて我に與へぬ。我がこれを飮みて、少女が詞をなしゝとき、その頰にはサロモ王の餘波の血こそ上りたれ。汝はいかにかの天女が、言ふにも足らぬ我贈立を謝せしを知るか。その聲は世にたぐひなき音樂の如く我耳を打ちたり。あはれ、かれは斯世のものにはあらざりけり。されば其姿の忽ち見えずなりて、唯ゞ翁と我とのみ座に殘りしも宜なり。

この物語を聞きて、我は覺えず呼びぬ。そは自然の詩なり。詩語にせばいかに面白からむ。

媒

士官のいふやう。この時よりして我がいかばかり戀といふものゝ苦を嘗めたるを知るか。我が幾たび空中に樓閣を築きて、又これを毀ちたるを知るか。我が彼猶太をとめに逢はむとていかなる手段を盡しゝを知るか。我は用なきに翁を訪ひて金を借りぬ。我は八日の期限にて、二十「スクディ」を借らむといひしに、翁快く諾ひて燦然たる黃金を卓上に並べたり。されど少女は影だに見せざりき。我は三日過ぎて金返しに往きぬ。初め翁は我を信ぜること厚しとは云ひしが、それには世辭も雜りたりしことなれば、今わが斯く速に金を返すを見て、翁が喜は眉のあたりに呈れき。我は前の日の酒の旨かりしを稱へしかど、翁自ら瓶取り出して、顫ふ瘦手にて注ぎたれば、これさへあだなる望となりぬ。この日も少女は影だに見せざりき。たゞ我が梯を走りおりしとき、半ば開きたる窓の帷すこしゆらめきたるやうなりき。是れ我少女なりしならむ。さらば君よ、とわれ呼びしが、窓の中はしづまりかへりて何の應もなし。おほよそ其頃よりして、今日まで盡しゝ我手段は悉くあだなりき。されど我心は決して撓むことなし。我は少女が上を忘るゝこと能はず。友よ。我に力を借せ。昔エネエアスを戀人に逢せしサツルニアとエヌスとをば、汝が上とこそ思へ。いざ我をあやしき巖室に誘はずや。

われ。そは我身にはふさはしからぬ業なりと覺ゆ。さはれおん身は猶いかなる手段ありて、我をさへ用ゐむとするか。かゝる筋の事に、この身用立つべしとは、つや〳〵思ひもかけず。士官。否々。汝が一諾をだに得ば、我事は半ば成りたるものぞ。ヘブライオスの語は美しき詞なり。その詩趣に富みたること多く類を見ずと聞く。汝そを學びて、師には老いたるハノホを選べ。彼翁は廓内にて學者の群に數へられたり。彼翁汝がおとなしきを見て、娘にも逢はせむをり、汝我がために娘に說かば、我願何ぞ協はざることを憂へむ。されど此手段を行はむには、決して時機を失ふべからず。駈足にせよ歩度を伸べたる駈足にせよ。燃ゆる毒は我脈を循れり、そは世におそろしき戀の毒なり。異議なくば、あすをも待たで猶太の翁を訪へ。われ。そは餘りに無理なる囑なり。我が爲すべきことの面正しからぬはいふも更なり、汝が志すところも卑しき限ならずや。その少女縱令美しといふとも、猶太の翁が子なりといへば。士官。それ等は汝が解し得ざる事なり。貨だに善くば、その產地を問ふことを須ゐず。友よ、善き子よ。我がためにヘブライオスの語を學べ。我も諸共に學ばむとす。たゞその學びさまを殊にせむのみ。想へ、我がいかに幸ある人となるべきかを。我。わが心を傾けて汝に交るをば、汝知りたるべし。汝が意志、汝が勢力のおほいなる、常に我心を左右するをも、汝知りたるべし。汝若し惡人とならば、我おそらくは善人たることを得じ。そは怪しき力我を引きて、汝が圈の中に入るればなり。我は素より我心を以て汝が行を匡さむとせず。人皆天賦の性あり。そが上に我は必ずしも汝が將に行はむとする所を以て罪なりとせず。汝が性然らしむればなり。されど此事は、縱令成りたらむも、汝が上にまことの福を降すべきものにあらずとおもへり。士官。善し善し。我はたゞ汝に戲れたるのみ。我がために汝を驅りて懺悔の榻に就かしめむは、初より我願にあらず。たゞ汝がヘブライオスの語を學ばむに、いかなる障あるべきか、そは我に解せられず。況んやそを猶太の翁に學ぶことをや。されどこの事に就きては、我等また詞を費さゞるべし。今日は善くこそ我を訪ねつれ。物欲しからずや。酒飲まずや。

友なる士官がかく話頭を轉じたるとき、我はその特なる目なざしを見き。こはベルナルドオが學校にありしとき屢〻ハッバス、ダアグアに對してなしたる目なざしなりき。友の擧動、その言語、一つとして不興のしるしならぬはなし。我も快からねば程なく暇乞して還りぬ。別るるときは友の恭しさ常に倍して、その冷なる手は我が溫なる手を握りぬ。我はわが辭退の理に愜へる、友の腹立ちしことの我儘に過ぎざるを信じたりき。されど或時は無聊に堪へずしてベルナルドオなつかしく、我詞の穩ならざるところありしを悔みぬ。一日散步のついで、吾友の上をおもひつゝ、かの猶太廓に入りぬ。若し期せずして其人に逢はゞ、我友の怒を霽す便にもならむとおもひき。されど我は彼翁をだに見ざりき。門よりも窓よりも、知らぬ人面を出せり。街の兩側なる敷石の上には、例の古衣、古かねなど陳べたるその間には見苦き子供遊べり。物買はずや、物賣らずやと叫ぶ聲は、我を聾にせむとする如し。少女あり。向ひの家なる友と、窓より窓へ毬投げつゝ戲れ居たり。そが一人は頗美しと覺えき。吾友の戀人はもしこれにはあらずや。我は圖らず帽を脱したり。嗚呼、おろかなる振舞せしことよ。我は人の思はむ程も影護くて、手もて額を拭ひつ。こは帽を脱したるは、少女のためならで、暑に堪へねばぞと、見る人におもはしめむとて

なりき。

一とせの月日は事なくして過ぎぬ。稀にベルナルドオに逢ふことありても、交情昔のごとくならず。我はそのやさしき假面の背後に、人に傲る貴人の色あるを見て、友の無情なるを恨むのみにて、かの猶太郎の戀のなりゆきを問ふに遑あらざりき。ボルゲエゼの館をば頻におとづれて、主人の君、ファビアニ、フランチエスカの人々のやさしさに、故郷にある如き思をなしつ。されどそれさへ時としては胸を痛むる媒となることありき。我胸には慈愛に感ずる情みち〳〵たれば、彼人々の一たび顰めることあるときは、徑に我世の光を蔽はるゝ如く思ひなりぬ。フランチエスカの我性を譽めつゝも、强ひて備はらむことを我に求めて、わが立居振舞、わが詞遣の疵を指すことの苛酷なる、主人の君のわが獨り物思ふことの人に踰えたるを戒めて、わが草木などの細かなる區別に心入れぬを咎め、我を自ら卷きて終には萎るゝ葉に比べたる、皆我心を苦むるものなりき。我齡は早く十六になりぬ。さるを斯ばかりの事に逢ひて、必ず涙を墮すは何故ぞや。主人の君は我が憂はしげなるさまを見るときは、又我頬を撫でゝ、聖母の善き人を得給はむためには、美しき花の壓さるゝ如く、人も壓されではかなはぬが浮世の習ぞと慰め給ひぬ。獨りファビアニの君のみは、何事をもをかしき方に取りなして、舅翁と夫人との敎の嚴なることよと打笑ひ、さて我に向ひてのたまふやう。君は父上の如き學者とはならざるべし。はた妻のやうに怜悧なる人ともならざるならむ。されど君が如き性もまた世の中になくて協はぬものぞと宣ふ。斯く裁判し畢りて、小尼公を召し給へば、我はその遊び戲れ給ふさまのめでたきを見て、身の憂きことを忘れ果てつ。人々は來む年を北伊太利にて暮さむとその心構し給へり。夏はジエノワにとゞまり、冬はミラノに往き給ふなるべし。我は來む年の試驗にて、「アバテ」の位を受けむとす。人々は首途に先だちて、大いなる舞踏會を催し、我をも招き給ひぬ。門前には大篝を焚かせたり。賓客の車には皆松明とりたる先供あるが、おの〳〵其火を石垣に設けたる鐵の柄に插したれば、火の子迸り落ちて赤き瀑布を見る心地す。法皇の兵は騎馬にて門の傍に控へたり。門の内なる小き園には五色の紙燈を吊り、正面なる大理石階には萬點の燭を點せり。階を升るときは奇香衣を襲ふ。こは級ごとに瓶花、盆栽の檸檬樹を据ゑたればなり。階の際なる兵は雙銃の禮を施しつ。「リフレア」着飾りたる僕は堂に滿ちたり。フランチエスカの君は指さきまで美かりき。珍らしき樂土鳥の毛、組紐多くつけたる白き「アトラス」の衣はこれに一層の美しさを添へたり。そのやさしき指に觸れたるときの我喜はいかなりし。廣間二つに樂の群を居らせて、客の舞踏の場としたり。舞ふ人の中にベルナルドオありき。金絲もて飾りたる緋羅紗の上衣、白き細袴、皆發育好き身形に適ひたり。その舞の敵手はこよひ集ひし少女の中にて、すぐれて美しき一人なるべし。纖き手をベルナルドオが肩に打ち掛けて秋波を送れり。我が舞を知らざることの可惜かりしことよ。客に相識る人少ければ、我を顧みるものなし。ベルナルドオが舞果てゝ我傍に來たりしとき、我憂は忽ち散じたり。紅なる帷の長く垂れたる背後にて、我等二人は「シャムパニエ」酒の杯を傾け、別後の情を語りぬ。面白き樂の調は耳より入りて胸に達し、昔日の不興をば少しも殘さず打ち消しつ。われ遠慮せで猶太少女の事を語り出でしに、友は唯ゝ高く笑ひぬ。その胸の内なる疵は早くも愈えて跡なきに至りしものなるべし。友のいはく。われはその後摩めでたき小鳥を捕へたり。この鳥我戀の病を歌

ひ洽しき。これある間は、よその鳥はその飛ぶに任せむのみ。その猶太廓より飛び去りしは事實なり。人の傳ふるが信ならば、今は羅馬にさへ居らぬやうなり。友と我とは又杯を擧げたり。泡立てる酒、賑はしき樂は我等が血を湧しつ。ベルナルドォは又舞踏の群に投ぜり。我は獨り殘りたれど、心の中には前に似ぬ樂しさを覺えき。街のかたを見おろせば、貧人の兒ども簇りて、松明より散る火の子を眺め、手を打ちて歡び呼べり。われも昔はかゝる兒どもの夥伴なりしに、今堂上にありて羅馬の貴族に交るやうになりたるは、いかなる神のみ惠ぞ。われは帷の蔭に跪きて神に謝したり。

謝肉祭

その夜は曉近くなりて歸りぬ。二日たちて人人は羅馬を立ち給ひぬ。ハッバス、ダアダアは日ごとに我を顧みて、ことしは「アベテ」の位受くべき歳ぞと、いましめ顔にいふ。されば此頃は文よむ窓を離れずして、ベルナルドオをも外の友をも尋ぬることなかりき。週を累ね月を積みて、試驗畢る日とはなりぬ。

黒き衣、短き絹の外套。是れ久しく夢みし「アベテ」の服ならずや。目に觸るゝもの一つとして我を祝せざるなし。街を走る吹聽人はいふも更なり、今咲き出づる「アネモオネ」の花、高く聳ゆる松の末より空飛ぶ雲にいたるまで、皆我を祝する如し。恰も好しフランチェスカの君は、臨時の費もあるべく又日ごろの勞をも忘れしめむとて、百「スクデイ」の爲換を送り給ひぬ。我はあまりの嬉さに、西班牙磴を驅け上りて、ペッポのをぢに光ある「スクウド」一つ抛げ與へ、そのアントニオの主公と呼ぶ聲を後に聞きて馳せ去りぬ。

頃は二月の初なりき。杏花は盛に開きたり。柑子の木日を逐ひて黄ばめり。謝肉祭は既に戸外に來りぬ。馬に跨り天鵞絨の幟を建て、喇叭を吹きて、祭の前觸をする男も、ことしは我がためにかく晴々しくいでたちしかと疑はる。ことしまでは我この祭のまことの樂しさを知らざりき。穉かりし程は、母上我に怪我せさせじとて、とある街の角に佇みて祭の盛を見せ給ひしのみ。學校に入りてよりは、「パラッツォオ、デル、ドリア」の廂作り平屋根より笑ひ戯るゝ群を見ることを許されしのみ。すべて街のこなたよりかなたへ行くことだに自由ならず。剩や「カピトリウム」に登り、「トラステエエル」(河東の地なり、テエエル河の東岸に當れる羅馬の一部を謂ふ)に渡らむこと思ひも掛けざりき。かゝれば我がことしの祭に身を委ねて、兒どもの樣なる物狂ほしき振舞せしも、無理ならぬ事ならむ。唯ゝ怪しきは此祭我生涯の境遇を一變するに至りしことなり。されどこれも我がむかし蒔きて、久しく忘れ居たりし種の、今緑なる蔓草となりて、わが命の木に纏へるなるべし。

祭は全く我心を奪ひき。朝にはポヽロの廣こうぢに出でゝ、競馬の準備を觀、夕にはコルソオの大道をゆきかへりて、店々の窓に曝せる假粧の衣類を閲しつ。我は可笑しき振舞せむに宜しからむとおもへば、狀師の服を借りて歸りぬ。これを衣て云ふべきこと爲すべきことの心にかゝりて、其夜は殆ど眠らざりき。

明日の祭は特に珍きものゝ如く思はれぬ。我喜は兒童の喜に遜らざりき。横街といふ横街には「コンフェッチイ」の丸賣る浮鋪簷を列べて、その卓の上には色美しき貨物を盛り上げたり。(「コンフェッチイ」の丸は石灰を豌豆の大さに煉りなるなり。白きと赤きと彩りたり。中には穀物の粒を石膏泥中に轉して作れるあり。謝肉祭の間は人々互に此丸を擲ちて戲るゝを習とす。)コルソオの街を灑掃する役夫は夙に

業を始めつ。家々の窓よりは綵氈を垂れたり。佛蘭西時刻の三點に我は「カピトリウム」に出でて祭の始を待ち居たり。(伊太利時刻は日沒を起點とす。かの「アエ、マリア」の鐘鳴るは一時なり。これより進みて二十四時を數ふ。毎日一度日景を隨ひて、時計を進退すること四分一時。所謂佛蘭西時刻は羅馬の人常の歐羅巴時刻を指してしかいふなり。)出窓には貴き外國人多く竝みゐたり。議官は紫衣を纏ひて天鵝絨の椅子に坐せり。法皇の禁軍なる瑞西兵整列したる左翼の方には、天鵝絨の簾を掛けたる可愛らしき外人ども群居たり。少時ありて猶太宗徒の宿老の一行進みきて、頭を露して議官の前に跪きぬ。その眞中なるを見れば、美しき娘持てりといふ彼ハノホにぞありける。式の辭をばハノホ陳べたり。我宗徒のこの神聖なる羅馬の市の一廓に栖まむことをば、今一とせ許させ給へ。歳に一たびに加特力の御寺に詣でゝ、尊き説法を承り候はむ。又昔の例に沿ひて、羅馬人の見る前にて、コルソオを奔らむことをば、今年も免ぜられむことを願ふなり。若しこの願かなはば、競馬の費、これに勝ちたるものに與ふる賞、天鵝絨の幟の代、皆法の如く辨へ候はむといふ。議官は頷きぬ。(古例に依れば、この時議官足もておも立ちたる猶太の宿老の肩を蹴むことありき。今は廢れたり。)事果つれば、議官の一列は隨從と倶に階を下り、伶人等を隨へて、美しき車に乗り遷れり。是を祭の始とす。「カピトリウム」の巨鐘は響き渡りて、全市の民を呼び出せり。我は急ぎ歸りて、かの獸師の服に着換へ、再び街に出でしに、假裝の群は早く我を遶りて目眩す。この時は祭の間のみ王侯に同じき權利を得たる工人と見えたり。その假裝には價極めて卑きものを擇びたれど、その特色は奪ふべからず。常の衣の上に短袴の汚衫を被りたるが、その衫の上に縫附けたる紙の鏡は大いなる錨に擬へたるなり。頭と顎とには青菜を結びつけたり。頭に戴けるはフイノッキイ(茴香中にて無法なる公民を代表したる役なり)の假髪にて、目に懸けたるは柚子の皮を刳りぬきて作りし眼鏡なり。我は彼等に向ひて立ち、手に持ちたる刑法の卷を開きさし示し、見よ、分を踰えたる衣服の者は國法の許さゞるところなるぞ、我が告發せむ折に臍を噬む悔あらむと喝したり。工人は拍手せり。我は進みてコルソオに出でたるに、こゝは早や變じて假裝舞の廣間となりたり。四方の窓より垂れたる彩氈は、唯ゞおほいなる幕の如く見ゆ。家々の簷端には、無數の椅子を竝べて、善き場所はこゝぞと叫ぶ賣物師あり。街を行く車は昔しき往還の二列をなしたるが、これに乘れる人多くは假裝したり。中にも月桂の枝もて車輪を飾りたるあり。そのさま四阿屋の行くが如し。家と車との間をば、紛しげなる人埋めたり。窓には見物の人々充ちたり。その間には軍服に假裝したる羅馬貴人ありて、街上なる婦人に「コンフェッチイ」の丸を擲てり。我これに向ひて、「コンフェッチイ」もて人の面を撃つは、國法の問ふところにあらねど、美しき目より火箭を放ちて人の心を射るは、容易ならぬ事なれば許し難しと宣告せしに、喝采の聲と倶に、花の雨は我頭上に降り灑ぎぬ。公民の妻と覺しき婦人の際立ちて飾り衒へるあり。權夫(夫に代りて婦人に仕ふる者、「チチスベオ」)と覺しき男これに扈從したり。この時我はぬけ道の前に立ちたるが、道化役に打扮ちたる一群戲に相鬪へるがために、しばし往還の便を失ひて、かの婦人と向きあひゐたり。我は進みてこれに對して詠じていはく。君よ。かくても美に負かざることを得るか。かくても羅馬の俗、加特力の教に背かざることを得るか。嗚呼、タルクヰニウス、コルラチニウスが妻なるルクレチア(婦

を受けて自殺す、事は羅馬王代の末、紀元前五百九年に在り）は今安にか在る。君は今の女子の爲すところに倣ひて、謝肉祭の間、夫を河東に遣りて、僧と倶に精進せしめ給ふならむ。君が良人は寺院の垣の内に籠りて日夜苦行し、復た滿城の士女狂せるが如きを顧みず、其心には、あはれ我最愛の妻も家に籠りて齋戒するよとおもふならむ。さるを君は何の心ぞ。この時に乘じて自在に翼を振ひ、權夫に引かれてコルソオをそゞろありきし給ふ。君よ。我は刑法第十六章第二十七條に依りて、君が罪を糺さむとす。語未だ畢らざるに、婦人は手中の扇をあげてしたゝかに我面を撃ちたり。その撃ちかたの強さより推すに、我は偶〻女の身上を占ひて善く中てたるものならむ。友なる男は、アントニオ、物にや狂へると私語きて、急に婦人を扯きつゝ、巡査、希臘人、牧婦などにいでたちたる人の間を潛りて逃れ去りぬ。その聲を聞くに、ベルナルドオなりき。さるにても彼婦人は誰にかあらむ。椅子を借さむとて、觀棚々々（ルオジ、ルオジ、パトロニ）と呼ぶ聲いと喧し。われは思慮する遑あらざりき。されど謝肉祭の間に思慮せむといふも、固より世に儚なき好事にやあらむ。忽ち肩尖と靴の上とに鈴つけたる戲奴（アレッキノ）の群ありて、我一人を中に取卷きて跳ね廻りたり。忽ち又いと高き踊したる狀師あり。我傍を過ぐとて、我を顧みて冷笑ひていはく。あはれなる同業者なるかな。君が立脚點の低きことよ。おほよそ地上にへばり着きたるものは、正を邪に勝たしむること能はず。我は高く擧りたり。我に代言せしむるものは、天の祐を得たらむ如し。かく誇りかに告げて大踏歩に去りぬ。ピアッツア、コロンナに伶人の群あり。非常を戒めむと、徐にねりゆく兵隊の間をさへ、學士、牧婦などにいでたちたるもの踊りくるひて通れり。我は再び演說を始めしに、書記の服着たる男一僕を隨へたるが我前に來て、僕に鐸を鳴さする其響耳を裂くばかりなれば、われ我詞を解し得ずして止みぬ。この時號砲鳴りぬ。こは車の大道を去るべき知らせなり。我は道の傍に築きたる壇に上りぬ。脚下には人の頭波立てり。今やコルソオの競馬始らむとするなれば、兵士は人を攘はむことに力を竭せり。街の一端に近きポポロの廣こうぢに索を引きて、馬をば其後に竝べたり。馬は早や焦躁てり。背には燃ゆる海綿を貼り、耳後には小さき烟火具を裝ひ、腰には拍車ある鐵板を懸けたり。口際に引き傍ひたる卅丁はやうやくにして馬の逸るを制したり。號砲は再び鳴りぬ。こは埒にしたる索を落す合圖なり。馬は旋風の如く奔りて、我前を過ぎぬ。幣の如く束ねたる薄金はさら／＼と鳴り、彩りたる紐は鬣と共に飄り、蹄の觸るゝ處は火花を散せり。かゝる時彼鐵板は腋を打ちて、拍車に攖ると聞く。群衆は高く叫びて馬の後に從ひ走れり。そのさま艫打つ波に似たり。けふの祭はこれにて終りぬ。

歌女

衣脫ぎ更へむとて家にかへれば、ベルナルドオ訪ひ來て我を待てり。われ。いかなれば玆には來たる。さきの婦人をばいづくにかおきし。友は指を竪てゝ我を威すまねしていはく。措け。我等は決鬪することを好まず。さきに邂逅ひたるときの狂態は何事ぞ。言ふこともあるべきにかゝることをばなど言ひたる。然れどもこのたびは釋すべし。今宵は我と倶に芝居見に往け。「チド」（カルタゴ女王の名にて又樂劇の名となれり）を興行すといふ。音樂よの常ならず。女優の中には世に稀なる美人多し。加旃主人公に扮するは、嘗てナポリに在りしとき、闔府の民をして物に狂へる如くならしめきとい

ふ餘所の歌女なり。その發音、その表情、その聲調、みな我等の夢にだに見ざるところと聞く。容貌も亦美し、絶だ美しと傳へらる。汝は筆を載せて從ひ來よ。若し世人の言半ば信ならむには、汝が「ソネットオ」の工を盡すも、これに贈るに堪へざらむとす。我はけふの謝肉祭に賣り盡して、今は珍しきものになりたる菫の花束を貯へおきつ。かの歌女もし我心に協はゞ、我はこれを贄にせむといふ。我は共に往かむことを諾ひぬ。すべて謝肉祭に連りたる樂をば、つゆ遺さずして嘗みむと誓ひたればなり。

今は我がために永く諼るべからざる夕となりぬ。我羅馬日記を披けば、けふの二月三日の四字に重圈を施したるを見る。想ふにベルナルドオ如し日記を作らば、また我筆に倣はざることを得ざるならむ。そも〳〵「アルベルトオ」座といへるは、羅馬の都に數多き樂劇部の中にて最大なるものなり。飛行の詩神を畫ける仰塵、オリユムポスの圖を寫したる幕、黄金を鏤めたる觀棚など、當時は猶新なりき。棚ごとに壁に鈎して燭を立てたれば、場内には光の波を湧かしたり。女客の來て座を占むるあれば、ベルナルドオ必ずその月旦を怠ることなし。開場の樂(ウエルチュウル)は始りぬ。こは音を以て言に代へたる全曲の敍と看做さるべきものなり。狂飆波を擲ちてエネエアスはリユビヤの灘に漂へり。風波に駭きし叫號の聲は神に謝する祈禱の歌となり、この歌又變じて歡呼となる。忽ち柔なる笛の音起れり。是れチドが戀の始なるべし。戀といふものは我が未だ知らざるところなれど、この笛の音は、我に髣髴としてその面影を認めしめたり。忽ち角聲獵を報ず。暴風又起れり。樂聲は我を引いて怪しき巖室の中に入りぬ。是れ溫柔郷なり。一呼一吸戀にあらざることなし。忽ち裂帛の聲あり。幕は開きたり。

エネエアスは去らむとす。去りてアスカニウス(エネエアスの子)がために、ヘスペリヤ(晩國の義、伊太利を略せむとす。去りてチドを棄てむとす。憐むべしチドはおのれが榮譽と平和とを捧げて、これを無情の人におくり、その夢猶未だ醒めざるなり。エネエアスが歌にいはく。その夢は早晩醒むべし。トロアスの兵黒き蟻の群の如く[illegible]を載せて岸に達せば、その夢いかでか醒めざることを得む。

チドは舞臺に上りぬ。その始めて現はるゝや、萬客屏息してこれを仰ぎ瞻たり。その態度、その嚴なること王者の如くにして、しかも輕らかに優しき態度には、人も我も徑に心を奪はれぬ。初めわれこのチドといふ役を我心に畫きしときは、その姿いたく今見るところに殊なりしかど、この歌女の意外なる態度はすこしも我興を損ふことなかりき。その優しく愛らしく、些の塵滓を留めざる美しさは、名匠ラフアエロが空想中の女子の如し。烏木の光ある髮は、美しく凸なる額を圍めり。深黒なる瞳には、名狀すべからざる表情の力あり。忽ち喝采の聲は柱を撼さむとせり。こは未だその藝を讃むるならずして、先づ其色を稱ふるなり。所以者何といふに、彼は今纔に場に上りて、未だ隻音をも發せざればなり。彼は面に紅を潮して輕く會釋し、その天然の美音もて、百錬千磨したる抑揚をその宣敍調の上にあらはしつ。

友は遽に我臂を把りて、人にも聞ゆべき程なる聲していはく。アントニオよ。あれこそ例の少女なれ、飛び去りたる例の鳥なれ。その姿をば忘るべくもあらず。その聲さへ昔のまゝなり、われ心狂ひたるにあらずば、わがこの目利は違ふことなし。われ。例のとは誰が事ぞ。友。猶太廓の少女なり。されど彼の少女いかにしてこの歌女とはなりし。不思議なり。有りとしも思はれぬ事なり。友は再び眼を舞臺に注ぎて

詞なし。ヂドは戀の歡を歌へり。清き情は聲となりて胸臆より迸り出づ。是時に當りて、我心は怪しく動きぬ。久しく心の奥に埋もれたりし記念は、此聲に喚び醒されむとする如し。この記念は我が全く忘れたるものなりき、この記念は近頃夢にだに入らざるものなりき。さるを忽ちにして我はその目前に現るゝを覺えき。今は我も亦ベルナルドオと倶に呼ばむとす。あれこそ例の少女なれ。あれこそ例の少女なれ。われ穉かりし時、「サンタ、マリア、アラチエリ」の寺にて聖誕日の說教をなしき。その時聲めでたき女兒ありて、その人に讃めらるゝこと我右に出でき。今聞くところは其聲なり。今見るところ或は其人にはあらずや。

エネエアスは無情なる詞を出せり。我は去りなむ。我は嘗ておん身を娶りしことなし。誰かおん身が婚儀の松明を見しものぞ。この詞を聞きたるときの心をば、ヂドいかに巧にその眉目の間に畫き出しゝ。事の意外に出でたる驚、ことばに現すべからざる痛、負心の人に對する怒、皆明かに覩る人の心に印せられき。ヂドは今狂なる單吟に入りぬ。譬へば千尋の海底に波起りて、倒に雲霄を干さむとする如し。我筆いかでか此聲を畫くに足らむ。あはれ此聲、人の胸より出づとは思はれず。姑く形あるものに喩へて言はむか。大いなる鵠の、皎潔雪の如くなるが、上りては雲を裂いて灝氣ただよふわたりに入り、下りては波を破りて蛟龍の居るところに沒し、その性命は聲に化して身を出で去らむとす。

喝采の聲は屋を撼せり。幕下りて後も、アヌンチヤタ、アヌンチヤタと呼ぶ聲止まねば、歌女は面を幕の外にあらはして、謝することあまたゝびなりき。

第二齣の妙は初齣を踰ゆること一等なりき。これヂドとエネエアスとの對歌なり。ヂドは無情なる夫のせめては啓行の日を緩うせむことを願へり。君が爲めにはわれリユビアの種族を辱めき。君がためにはわれ亞弗利加の侯伯に負きぬ。君がために恥を忘れ、君がために操を破りたるわれは、トロアスに向けて一隻の舟をだに出さゞりき。我はアンヒイゼス（エネエアスの父）が靈の地下に安からむことを勉めき。これを聞きて我涙は千行に下りぬ。その時萬客聲を呑みてその感の我に同じきを證したり。

エネエアスは行きぬ。ヂドは色を喪ひて凝立すること少らくなりき。その狀ニオベ（子を鏖殺されて石に化せし女神）の如し。俄にして渾身の血は湧き立てり。これ最早ヂドならず。戀人なるヂド、薄命なるヂドならず。彼は生ながら怨靈となれり。その美しき面は毒を吐けり。その表情の力の大いなる、今まで其に嘆きし萬客をして忽ち又其に怒らしむ。フィレンツエの博物館に、レオナルド、ダ、ヰンチが畫きたるメヅウザ（おそろしき女神）の頭あり。これを覩るもの怖るれども去ること能はず。大瀛の底に毒泡あり。能くアフロヂテを作りぬ。その目の狀は言ふことを須たず、その口の形さへ、能く人を殺さむとす。

エネエアスが舟は波を蹴て遠ざかりゆけり。ヂドは夫の遺れたる武器を取りて立てり。その歌は沈みてその聲は重く、忽ちにして又激越悲壯なり。同胞なるアンナアが彼を焚かむとて積み累ねたる薪は今燃え上れり。幕は下りぬ。喝采の聲は暴風の如くなりき。歌女はその色と聲とを以て滿場の客を狂せしめたるなり。棧敷よりも土間よりも、アヌンチヤタ、アヌンチヤタと呼ぶ聲頻なり。幕上りて歌女出でたり。その羞を含める姿は故の如くなりき。男は其名を呼び、女は帕巾を振りたり。花束の雨はその頭の上に降れり。幕再び下りしに、呼ぶ聲いよいよ劇しかりき。こたびはエネエアスに扮せし

男優と竝びて出でたり。幕三たび下りしに、呼ぶ聲いよ／＼劇しかりき。こたびはすべての俳優を伴ひ出でぬ。幕四たび下りしに、呼ぶ聲猶劇しかりき。こたびはアヌンチヤタ又ひとり出でゝ短き謝辭を陳べたり。此時我詩は花束と共に歌女が足の下に飛べり。呼ぶ聲は未だ歇まねど、幕は復た開かず。この時アヌンチヤタは幕の一邊より出でゝ、舞臺の前のはづれなる燭に沿ひて歩みつゝ觀客に謝したり。その面には喜の色溢るゝごとくなりき。想ふにけふは歌女が生涯にて最も嬉しき日なりしならむ。されどこは特り歌女が上にはあらず。我も亦わが生涯の最も嬉しき日を求めば、そは或はけふならむと覺えき、わが目の中にも、わが心の底にも、たゞアヌンチヤタあるのみなりき。觀客は劇場を出でたり。されど皆未だ肯て散ぜず。こは樂屋の口に廻りゆきて、歌女が車に上るを見むとするなるべし。我も衆人の間に介まりて、おなじ方に歩みぬれど、後には傍へなる石垣に押し付けられて動くこと能はず。歌女は樂屋口に出でぬ。客は皆帽を脱ぎてその名を唱へたり。われもこれに聲を合せつゝ、言ふべからざる感の我胸に滿つるを覺えき。ベルナルドオはもろ人を押し分けて進み、早くも車に近寄りて、歌女がためにその扉を開きぬ。少年の群は轅にすがりて馬を脱したり。こは自ら車を輓かむとてなりき。アヌンチヤタは聲を顫せてこれを制せむとしつれど、その聲は萬人のその名を呼べるに打ち消されぬ。ベルナルドオは歌女を車に載せ、おのれは踏板に上りて說き慰めたり。我も轅を握りてかの少年の群と共に喜びぬ。惜むらくは時早く過ぎて、たゞ美しかりし夢の痕を我心の中に留めしのみ。

歸路に珈琲店に立寄りしに、幸にベルナルドオに逢ひぬ。羨むべき友なるかな。彼はアヌンチヤタに近づき、アヌンチヤタともの語せり。友のいはく。アントニオよ。奈何なりしぞ。汝が心は動かずや。若し骨焦がれ髓燃えずば、汝は男子にあらじ。さきの年我が彼に近づかむとせしとき、汝は實に我を妨げたり。汝は何故にヘブライオス語を學ぶことを辭みしか。若し辭まずば、かゝる女と竝び坐することを得しならむ。汝は猶アヌンチヤタの我猶太少女なることを疑ふにや。我にはかく迄似たる女の世にあらむとは信ぜられず。アヌンチヤタはたしかに猶太をとめなり。我にチプリイの酒を飮せし少女なり。少女は巢を立ちし「フョニックス」鳥の如く、かの穢はしき猶太廓を出でつるなり。われ。そは信じ難き事なり。我も昔一たびかの女を見きと覺ゆ。若し其人ならば、猶太教徒にあらずして加特力教徒なること疑なし。汝も熟々彼姿を見しならむ。不幸なる猶太教徒の皆負へるカイン（亞當の子）が印記は、一つとしてその面に呈れたるを見ざりき。又その詞さへその猶太の民にあるまじきものなり。ベルナルドオよ。我心はアヌンチヤタが妙音世界に遊びて、ほと／＼歸ることを忘れたり。汝は彼少女に近づきたり。汝は彼少女ともの語せり。彼少女は何をか云ひし。彼少女も我等と同じくこよひの幸を覺えたりしか。友。アントニオよ。汝が感動せるさまこそ珍らしけれ。「ジェスヰタ」の學校にて結びし氷今融くるなるべし。アヌンチヤタが何を云ひしと問ふか。彼少女は粗暴なる少年に車を挽かれて、且は懼れ且は喜びたりき。彼少女は面紗を緊しく引締めて、身をば車の片隅に寄せ居たり。我は途すがらかゝる美しき少女に言ふべきことの限を言ひしかど、彼は車を下るとき我がさし伸べたる手にだに觸れざりき。われ。汝が大膽なることよ。汝は歌女と相識れるにあらずして、よくもさまで馴々しくはもてなしゝよ。こは我が決して敢てせざる所ぞ。友。我もさこそ思へ。

汝は世の中を知らず、又女の上を知らねばなり。今日はかの女いまだ我に答へざりしかど、我には猶多少の利益あり。そは少女が我面を認めたることなり。我友はこれより我にさきの詩を誦せしめて聞き、頗る妙なり。羅馬日記に刻するに足ると稱へき。我等二人は杯を擧げてアヌンチヤタが壽をなしたり。我等のめぐりなる客も皆歌女の上を語りて口々に之を讃め居たり。

我がベルナルドオに別れて家に歸りしは、夜ふけて後なりき。床に上りしかど、いも寐られず。われはこよひ見し阿百拉の全曲を繰り返して心頭に畫き出せり。チドが初めて場に上りし時、單吟に入りし時、對歌せし時より、曲終りし時まで、一々肝に銘じて、其間の一節だに忘れざりき。我は手を被中より伸べて拍ち鳴らし、聲を放ちてアヌンチヤタと呼びぬ。次に思ひ出したるは我が心血を濺ぎたる詩なり。起きなほりてこれを寫し、寫し畢りてこれを讀み、讀みては自ら其妙を稱へき。當時はわれ此詩のやゝ情熱に過ぐるを覺えしのみにて、その名作たることをば疑はざりき。アヌンチヤタは必ず我詩を拾ひしならむ。今は彼少女家に歸りて半ば衣を脱ぎ、絹の長椅の上に坐し、手もて頤を支へて、ひとり我詩を讀むならむ。

きみが姿を仰ぎみて、君がみ聲を聞くと
きは、おほそら高くあま翔り、わたつみ
ふかくかづきいり、かぎりある身のかぎ
りなき、うき世にあそぶこゝちして、う
た人なりしいにしへのダヌテがふみをさ
ながらに、おとにうつしてこよひこそ、
聞くとは思へ、うため(歌女)の君に。

我は嘗てダンテの詩をもて天下に比なきものとなしき。さるを今アヌンチヤタが藝を見るに及びて、その我心に入ること神曲よりも深く、その我胸に迫ること神曲よりも切なるを覺えたり。その愛を歌ひ、苦を歌ひ、狂を歌ふを聞けば、神曲の變化も亦こゝに備はれり。アヌンチヤタ我詩を讀まば、必ず我意を解して、我を知らむことを願ふならむ。斯く思ひつゞけて、やうやうにして眠に就きぬ。後に思へば、我は此夕我詩を評せしにはあらで、始終詩中の人をのみ思ひたりしなり。

をかしき樂劇

翌日になりて、ベルナルドオを尋ね求むるに、何處にもあらざりき。ピアッツア、コロンナをばあまたゝび過ぎぬ。アントニウスの像を見むとてにはあらず。アヌンチヤタの影を見る幸もあらむかとてなり。彼君はこゝに住へり。外國人にして共に居るものもあり。いかなる月日の下に生れあひたる人にか。「ピアノ」の響する儘に耳聳つれど、彼君の歌は聞えず。二聲三聲試みる様なるは、低き「バッソオ」の音なり。樂長ならずば彼群の男の一人なるべし。幸ある人々よ。殊に羨ましきはエネエアスの役勤めたる男なるべし。かの君と目を見あはせ、かの君の燃ゆる如き目なざしに我面を見させ、かの君と共に國々を經めぐりて、その譽を分たむとは。かく思ひつゞくる程に、我心は怏々として樂まずなりぬ。忽ち鈴つけたる帽を被れる戯奴、道化役者、魔法つかひなどに打扮ちたる男あまた我圍を跳り狂へり。けふも謝肉の祭日にて、はや其時刻にさへなりぬるを、われは心づかでありしなり。かゝる群の華かなる粧、その物騒がしき聲々はます／＼我心地を損じたり。車幾輛か我前を過ぐ。その御者はことごとく女装せり。忌はしき行装かな。女帽子の下より露れたる黒髯、あらあらしき身振、皆程を過ぎて醜し。我はきのふの如く此間に立ちて快を取ること能はず。今しも最後の眸を彼君の居給ふ家に注ぎて、はや踵を回さむとしたるとき、その家

の門口より馳せ出る人こそあれ。こはベルナルドオなり。滿面に打笑みて。そこに立ち盡すは何事ぞ。疾く來よ。アヌンチヤタに引きあはせ得さすべし。彼君は汝を待ち受けたり。こは我友誼なれば。なに彼君が。と我は言ひさして、血は耳廓に昇りぬ。戲すな。我をいづくにか伴ひゆかむとする。友。汝が詩を贈りし人の許へ、汝も我も世の人も皆魂を奪れたる彼人の許へ、アヌンチヤタの許へ。かく云ひつゝ、友は我手を取りて門の內へ引き入れたり。我。先づわれに語れ。いかにして彼君の家に往くことはなしたる。いかにして我を紹介するやうにはなりし。友。そは後にゆるやかにこそ物語らめ。先づその沈みたる顏色をなほさずや。我。されどこのなよびたる衣をいかにせむ。かの君にあまりに無作法なりとや思はれむ。かく言ひつゝ我は衣など引き繕ひてためらひ居たり。友。否々その衣のまゝにて結構なり。兎角いひ爭ふほどに我等ははや戶の前に來ぬ。戶は開けり。我はアヌンチヤタが前に立てり。

衣は黑の絹なり。半紅半碧の紗は肩より胸に垂れたり。黑髮を束ねたる紐の飾は珍らしき古代の寶石なるべし。傍に、窓の方に寄りて坐りたるは、暗褐色の粗服したる媼なり。彼君の目の色、顏の形は猶太少女といはむも理なきにあらずと思はる。我友がむかし猶太廓にて見きといふ少女の事は、忽ち胸に浮びぬ。されど我心に問へば、この人その少女ならむとは思はれず。室の內には、何一人の男居あはせたるが、わが入り來るを見て立ちあがれり。アヌンチヤタも亦起ちて笑みつゝ我を迎へたり。友はわざとらしき聲音にて。これこそ我友なる大詩人に候へ。名をばアントニオといひ、ボルゲエゼの族の寵兒なり。主人の姬は我に向ひて。許し給へ。おん目にかゝらむことは、實に喜ばしき限なれど、かく强ひて迎へまつらむこと本意なく、二たび三たび止めしに、ベルナルドオの君聽かれねば是非なし。さきにはめでたき歌を賜はりぬ。その作者は君なること、おん友達より承りて、いかでおん目にかゝらむと願ひ居りしに、窓より君を見付けて、わが詞を聞かで呼び入れ給ひぬ。禮なしとや思ひ給ひけむ。されどおん友達の上は、我より君こそよく知りておはすらめ。ベルナルドオは戲もて姬がこの詞に答へ、我は僅にはじめて相見る喜を述べたり。我頰は燃ゆる如くなりき。姬のさし伸べたる手を握りて、我は熱き脣に當てたり。姬は室にありし男を我に引き合せつ。すなはちこの群の樂長なりき。又媼は姬のやしなひ親なりといふ。その友と我とを見る目なざしは應ある如く覺えらるれど、姬が待遇のよきに、我等が興は損はるゝに至らざりき。

樂長は我詩を讚めて、われと握手し、かゝる技倆ある人のいかなれば樂劇を作らざる、早くおもひ立ちて、その初の一曲をば、おのれに節附せさせよと勸めたり。姬その詞を遮りて。彼が言を聞き給ふな。君にいかなる憂き目をか見せむとする。樂人は作者の苦心をおもはず、聽衆はまた樂人よりも冷淡なるものなり。こよひの出物なる樂劇の本讀といふ曲はかゝる作者の迷惑を書きたるものなるが、まことは猶一層の苦界なるべし。樂長の答へむとするに口を開かせず　姬は我前に立ちて語を繼ぎたり。君こゝろみに一曲を作りて、全幅の精神をめでたき詞に注ぎ、局面の體裁人物の性質、いづれも心を籠めてその趣を盡し、扨これを樂人の手に授け給へ。樂人はこゝにかゝる聲を插まむとす。君が字句はそのために削らるべし。かしこには笛と鼓とを交へむとす。君はこれにつれて舞はしめられむ。さておもなる女優は來りて、引込の前に歌ふべき單吟の華かなるを一つ作り添へ給はでは、この曲を歌はじといふべし。全

篇の布置は善きか惡きか。そは俳優の責にあらず。「テノオレ」うたひの男も、これに讓らぬ我儘をいはむ。君は男女の役者々々を訪ひて項を曲げ色を令くし、そのおもひ附く限の註文を聞きてこれに應ぜざるべからず。次に來るは座がしらなり。その批評、その指摘、その删除に逢ふときは、その人いかに愚ならむも、枉げてこれに從はでは協はず。道具かたはそれの道具を調へむは、我座の力の及ぶところにあらずといふ。かゝる場合に原作を改むることを、芝居にては曲を曲ぐといふ。畫工は某の畑、某の井、某の積み上げたる芻秣をばえ寫さじといふ。これがためにさへ曲ぐべき詞も出來たるべし。最後におもなる女優又來りて、それの詞の韻脚は囀りにくし、あの韻をば是非とも阿のこゑにして賜はれといふ。これがためにいかなる重みある詞を削り給はむも、又いづくより阿のこゑの韻脚を取り給はむも、そは唯ゞ君が責に歸せむ。かくあまたゝび改めて、ほと〳〵元の姿を失ひたる曲を革に掛けたるとき、看客のうけあしきを見て、樂長はかならず怒りて云はむ。拙劣なる詩のために、いたづらなる骨折せしことよ。わが譜の翼を借したれども、癡重なるかの曲はつひに地に墜ちたりと云はむ。

外よりは樂の聲おもしろげに聞えたり。假面着けたる人はこゝの街にもかしこの辻にもみちみちたり。たちまち拍手の音と共に聞ゆる喝采の響いとかしましきに、一座の人々みな窓よりさし覗きぬ。いまわれ意中の人の傍にありて見れば、さきに厭はしと見つるとは樣かはりて、けふの祭のにぎはひ又面白く、我はふたゝびきのふ衆人に立ち雜りて遊びたはぶれし折に劣らぬ興を覺えき。

道化役者にいでたちたるもの五十人あまり、われ等のさし覗ける窓の下につどひ來て、おのれ等が中より一人の王を選擧せむとす。これに中りたるものは、彩りたる旗、桂の枝の環飾、檸檬の實の皮などを懸けたる小車に乘り遷りぬ。その旗のをかしく風に飜るさま、衣の紐などの如く見えき。王の着座するや、其頭には金色に塗りて更にまた彩りたる鷄卵を竝べて作れる笠を冠として戴かせ、其手には「マケロニ」(麪類の名)つけたる大いなる玩具の柄つきの鈴を笏として持たせたり。さて人々その車をめぐりを踊りめぐれば、王はいづかたへも向ひて頷きたり。やゝありて人々は自ら車の綱取りて挽き出せり。この時王は窓にアヌンチヤタあるを見つけ、親しげに目禮し、車の動きはじむると共に聲を揚げ。きのふは汝、けふは我。羅馬の牧のまことの若駒を轅に繫ぐ快さよ、とぞ叫びける。姫は面をさと赤めて一足退きしが、忽ち心を取直したる如く、兩手を欄にかけて、聲高く。我にも汝にも過分なる事ぞ。かりそめにな思ひそといふ。群集も亦きのふの歌女を見つけたりけるが、今その王との問答を聞きて、喝采の聲しばしは鳴りも止まず、雨の如き花束は樓の上なる窓に向ひて飛びぬ。その花束の一つ、姫が肩に觸れて我前に落ちたれば、我はそを拾ひて胸におしつけ、何物にも換へがたき寶ぞと藏めおきぬ。

ベルナルドオは祭の王のよしなき戲を無禮しといきどほり、そのまゝ樓を走り降りて笞ち懲らさばやといひしを、樂長は徐のひと〳〵と共になだめ止むるほどに、「テノオレ」うたひの頭なる男おとづれ來ぬ。その男は歌女に初對面なりといふ。アバテ一人と外國うまれの樂人一人とを伴へり。續いて外國の樂人あまた打連れ來りて對面を請ひぬ。これにて一間に集ひし客の數俄に殖えたれば、物語さへいと調子づきて、さきの夕「アルジェンチナ」座にて興行したる可笑き假粧舞の事、詩女の導者たるアポ

ルロン、古代の力士、闘鐵投ぐる男の像等に肖せたる假面の事など、父を逐ひて淫樂となりぬ。獨りかの猶太種と覺しき老女のみはこの戲しき物語に與らで、をり〳〵姫がことさらに物言掛けたる時、僅に輕く頷くのみなりき。この時姫の態度に心をつくるに、きのふ芝居にて思ひしとは、甚しき相違あり。その家にありてのさまは、世を面白く渡りて、物に拘ることなき尋常の少女なり。されどわが姫を悦ぶ心はこれがために毫しも減ぜず。この偉き舞姫は却りてあやしく我心に協ひき。姫は謂もなき戲言をも、面白くいひ出でゝ、我をも人をも興ぜさせたりしが、俄にこゝろ付きたるやうに錶を見て、はや化粧すべき時こそ來つれ、今宵は樂劇の本讀のうちなる役に中り居ればとて座を起ち、側なる小房のうちに入りぬ。

門を出でたるとき。われ。汝が惠によりてゆくりなき幸に逢ひしことよ。舞臺なるを見し面白さに勝らぬ面白さなりき。さはれ汝はいかにして彼君とかく近親くはなりし。又いかにして我をさへ紹介しつる。我は猶さきよりの事を夢かと疑はむとす。友。わが少女の許を訪れしは、別にめづらしき機會を得しにあらず。羅馬貴族の一人、法皇禁軍の一將校、すべての美しきものを愛する人のひとりとして、姫をば見舞つるなり。若し父親といふものゝ上より云はば、この理由の半はをだに領ゐざるならむ。されば我が姫を訪ひて、汝が前に見つる如き紹介なき客に劣らぬ、善き待遇を得しこと、復た怪むに足らざるべし。且戀はいつも我交際の技倆を進む。彼と相對するときは倦怠せしめざる程の事我掌中に在り。相見てよりまだ半時間を經ざるに、我等は頗る相識ることを得き。さてかくは汝をさへ引合せつるなり。我。さては汝彼君を愛すといふか。眞心もて愛すといふか。友。然り、今は昔にもまして愛するやうになりぬ。さきに猶太廓にて我に酒を勸めし少女の、今のアヌンチヤタなることは、最早疑ふべからず。わが始て向ひゐしとき、姫は分明に我を認むるさまなりき。かの老いたる猶太婦人の詞すくなく、韈編めるも、わがためには一人の識人なり。されどアヌンチヤタは生れながらの猶太婦人にあらず。初め我がしかおもひしは、其髮の黑く、其瞳の暗きと其境界とのために惑はされしのみ。今思へば姫は矢張基督教の民なり。終には樂土に生るべき人なり。

この夕ベルナルドオと芝居にて逢ふことを約しき。されど餘りの大入なれば、我はつひに舊友を見出すこと能はざりき。我は辛く一席を購ふことを得き。いづれの棧敷にも客滿ちて、暑さは人を壓するやうなり。演劇はまだ始まらぬに、我身は熱せり。きのふけふの事、わがためには渾て夢の如くなりき。かゝる折に逢ひて、我心を鎭めむとするに、最も不恰好なるは、蓋し今宵の一曲なりしならむ。世に知れわたりたる如く、樂劇の本讀といふは、極めて放肆なる空想の産物なり。全篇を貫ける脈絡あるにあらず。詩人も樂人も、只管觀客をして絕倒せしめ、兼ねて許多の伶人に喝采を博する機會を與へむことを勉めたるなり。主人公は愛にして動き易き性なる男女二人にして、これを主なる歌姫、樂譜を作る樂人とす。細目なき可笑しさは、盡る期なき滑稽の葛藤を惹起せり。主人公の外なる人物には人のおのれを取扱ふこと一種の毒藥の如くならむことを望める俳優をのみ多く作り設けたり。かくいふをいかなる意ぞといふに、そは能く人を殺し又能く人を活す者ぞとなり。此劇に雜れる憐むべき詩人は、始終人に制せられ役せられて、譬へば猶太牲となるべき價なき小羊のごとくなり。

喝采の聲と花束の閃は場に上りたるアヌンチヤタを迎へき。その我儘にて興ある振舞、何

事にも頓着せずして面白げなる擧動を見て、人人は高等なる技といへど、我はそを天賦の性とおもひぬ。いかにといふに、姫が家にありてのさまはこれと殊なるを見ざればなり。その歌は數千の銀の鈴齊く鳴りて、柔なる調子の變化極なきが如く、これを聞くもの皆頭を擧げて、姫が目より漲り出づる喜をおのが胸に吸ひたり。姫と作譜者と對して歌ふとき相代りて姫男の聲になり、男姫の聲になる條あり。この異なる技は、聽衆の大喝采を受けたるが、就中姫が最低の「アルトオ」の聲を發し畢りて、最高の「ソプラノ」の聲に移りしときは、人皆物に狂へる如くなりき。姫が輕く艶なる舞は、エトルリアの瓶の面なる舞者に似て、その一擧一動一として畫工彫工の好粉本ならぬはなかりき。われはこのすべての技藝を見て姫の天性の發露せるに外ならじとおもひき。アヌンチヤタがチドは妙藝なり、その歌女は美質なり。曲中には間何の緣故もなき曲より取りたる、可笑しき節々を插みたるが、姫が滑稽なる歌ひざまは、その自然ならぬをも自然ならしめき。姫はこれを以て自ら遣り又人に戲るゝ如くなりき。大團圓近づきたるとき、作譜者、これにて好し、場びらきの樂を始めむとて、舞臺の前なるまことの樂人の群に譜を頒てば、姫もこれに手傳ひたり。樂長のいざとて杖を擧ぐると共に、耳を裂くやうなる怪しき雜音起りぬ。作譜者と姫と「旨し〱」と叫びて掌を拍てば、觀客も亦これに和したり。笑聲は殆ど樂聲を覆へり。我は半ば病めるが如き苦悶を覺えき。姫の姿は驕兒の恣まゝに戲れ狂ふ如く、その聲は古の希臘の祭に出できといふ狂女の歌ふに似たり。されどその放縱の間にも猶やさしく愛らしきところを存せり。我はこれを見聞きて、ギドオ、レニイ（伊太利畫工）が仰塵畫の朝陽と題せるを想出しぬ。その日輪の車を繞りて踊れる女のうちベアトリチエ、チエンチイ（羅馬に刑死せし女の名）の少かりしときの像に似たるありしが、その面影は今のアヌンチヤタなりき。我もし彫工にして、この姿を刻みなば、世の人これに題して清淨なる歡喜となしたるなるべし。あらあらしき雜音は愈ゝ高く、作譜者と姫とは之に連れて歌ひたるが、忽ち旨し旨し、場びらきの樂は畢りぬ、いざ幕を開けよといふとき幕閉づ。これを此曲の結局とす。姫はこよひもあまたゝび呼ひ出されぬ。花束、綠の環飾、詩を寫したるむすび文、彩りたる紐は姫が前に翻りぬ。

即興詩の作りぞめ

この夕我と同じ年頃なる人々にて、中には我を知れるものも幾人か雜りたるが、アヌンチヤタが家の窓の下に往きて絃歌を催さむといふ。我は崇拜の念止み難き故をもて、膽太くもまたこの群に加りぬ。唱歌といふものをば止めてより早や年ひさしくなりたるにも拘らで。一群はピアッツア、コロンナに至りぬ。姫が歸りてより一時間の後なりき。出窓の内よりは猶燈の光さしたり。樂器執りたる人々は窓の前に列びぬ。我心は激動せり。我聲は臆することなく人々の聲にまじりたり。歌の一節をば、われ一人にて唱へき。この時我は唯ゝアヌンチヤタが上をのみ思ひて、すべての世の中を忘れ果てたり。さて深く息して聲を出すに、その力、その柔さ、能くかく迄に至らむとは、みづからも初より思ひかけざる程なりき。火伴のものは覺えず微なる聲にて喝采す。その聲は微なりと雖、猶我耳に入りて、我はおのが聲の能く調へるに心付きたり。喜は我胸に滿ちたり。神は我身に舍り給へり。アヌンチヤタが出窓よりさし覗きて、身を屈し禮をなしたるときは、その禮を受くるもの殆ど我一人なる如くおもは

れき。我は我輩の一群を左右する力ありて、譬へば靈魂の肢體を役するが如くなるを覺えき。事果てゝ後家に歸りしが、身は唯ゞ夢中に起ちてさまよひありく、怪しき病ある人の如くにして、その夜枕に就きての夢には始終アヌンチヤタが我歌を喜べるさまをのみ見き。

翌日姫をおとづれぬ。ベルナルドオ、昨夜の火伴の二人三人は我に先だちて座にありき。姫のいはく。きのふ絃歌の中にて「テノオレ」の聲のいと善きを聞きつといふ。我面はこの詞と共に火の如くなりぬ。それこそアントニオなれと告ぐるものあり。姫は直ちに我を引きて「ピアノ」の前に往き、倶に歌へと勸む。我は法廷に立てるが如き心地して、再三辭みたるに、人々側より促して止まず、又ベルナルドオは聲を勵まして、さては汝切角の姫の聲をさへ我等に聞せざらむとするかと責めたり。姫に手を扯かれたる我は、捕られし小鳥に殊ならず。縱ひ羽ばたきすとも、歌はでは叶はず。姫の歌はむといふは、わが知れる雙吟なり。姫は「ピアノ」に指を下して、先づ聲を擧げ、我は震ひつゝもこれに和したり。この時姫の目なざしは、我に瞻々とさゝやきて、我をその妙音界に迎ふる如くなりき。わが怯は已みて、我聲は朗になりぬ。一座は喝采を吝まず、かの猶太おうなさへやさしげに頷きぬ。

このときベルナルドオは汝はいつも人の意表に出づる男ぞとつぶやきて、さて衆人に向ひ、吾友には猶かくし藝こそあれ、そは即興の詩を作ることなり、作らせて聞き給はずやといひき。喝采に醉ひたる我は、アヌンチヤタが一言の囑を待ちて、大膽にも即興の詩を歌はむとせり。この技は人と成りての後未だ試みざるものなるを。我は姫の「キタルラ」を把りぬ。直に不死不滅といふ題を命ぜり。材には豐なる題なりき。しばしうち案じて、絃を撥くこと二たび三たび、やがて歌は我肺腑より流れ出でたり。詩神は蒼茫たる地中海を渡り、希臘の綠なる山谷の間にいたりぬ。雅典は荒草斷碑の中にあり。こゝに野生の無花果樹の摧け殘りたる石柱を掩へるあり。この間には鬼の欷歔するを聞く。

むかしペリクレスの世には、この石柱の負へる穹窿の下に、笑ひさゞめく希臘の民往來したりき。そは美の祭を執り行へるなり。ライス(名娼の名)の如く美しき婦人は環飾を取りて市に舞ひ、詩人は善と美との不死不滅なるを歌ひぬ。忽ちにして美人は黃土となりぬ。當時の民の目を悅ばしたる形は世の忘るゝ所となりぬ。詩神は瓦礫の中に立ちて泣くほどに、人ありて美しき石像を土中より掘り出せり。こは古の巨匠の作れるところにして、大理石の衣を着けて眠りたる女神なり。詩神はこれを見て、さきの希臘の美人の俤を認めき。あはれ古人が美をかうぐしき迄に進めて、雪の如き石に印し、これを後昆に遺したるこそ嬉しけれ。見よや、死滅するものは浮世の權勢なり。美いかでか死滅すべき。詩神は又波を踏みて伊太利に渡り、古の帝王の住みつる城趾に踞して、羅馬の市を見おろしたり。テヱエル河の黃なる水は昔ながらに流れたり。されどホラチウス、コクレスが戰ひし處には、今筏に薪と油とを積みてオスチアに輸るを見る。されどクルチウスが炎火の喉に身を投ぜし處には、今牧牛の高草の裡に眠れるを見る。アウグスツスよ。チツスよ。汝が雄大なる名字も、今は破れたる寺、壞れたる門の稱に過ぎず。羅馬の鷲、ユピテルの猛き鳥は死して巢の中にあり。あはれ羅馬よ。汝が不死不滅はいづれの處にか在る。鷲の眼は忽ち耀きて、その光は全歐羅巴を射たり。既に倒れたる帝座は、又起ちてペトルスの椅子(法皇座)となり、天下の王者は徒跣してこゝに來り、その下に羅拜せり。おほよそ手

の觸るべきもの、目の視るべきもの、いづれか死滅せざらむ。されどペトルスの刀いかでか鏽を生ずべき。寺院の勢いかでか墮つる期あるべき。縱ひ有るまじきことある世とならむも、羅馬は猶その古き諸神の像と共に、その無窮なる美術と共に、世界の民に崇められむ。東よりも西よりも、又天寒き北よりも、美を敬ふ人はこゝに來て、羅馬よ、汝が威力は不死不滅なりといはむ。この段の畢るや、喝采の聲は座に滿ちたり。獨りアヌンチヤタは靜座して我面を見たるが、其姿はアフロヂテの像の如く、其眸には優しさこもれり。我情は猶輕き詩句となりて、脣より流れ出でたり。詩境は廣き世界より狹き舞臺に遷れり。こゝに技倆すぐれたる俳優あり。その所作、その唱歌は滿客の心を奪へり。歌ひてこゝに至りたるとき、姫は頭を低れたり。そは我上とおもへばなるべし。座中の人々も、亦我敍述する所によりて我意の在るところを認めしならむ。かゝる俳優も歌歇み幕落ちて、喝采の聲絶ゆるときは、其藝術は死なむ。死して美き屍となりて、喝采の胸に葬められたるのみならむ。されど詩人の胸は衆人の胸に殊なり。譬へば聖母の墓の如し。こゝに瘞めらるゝものは、悉く化して花となり香となり、死者は再びこれより起たむ。しかしてその詩は一たび死したる藝術をして不死不滅の花を開かしめむ。我目はアヌンチヤタが顏を見やりたり。我心は吐き盡したり。われは起ちて禮をなしたるに、人々は我を顧みて謝したり。姫は我を視て、君は深く我心を悅ばしめ給ひぬといひぬ。我は僅に脣をやさしき手に押し當てたり。

そも／＼劇は虹の如きものなり。彼も此も天地の間に架したる橋梁なり。彼も此も人皆仰いで其光彩を喜ぶ。然はあれどその倏忽にして滅するや、彼も此も迹の尋ぬべきなし。アヌンチヤタとアヌンチヤタが技とは、其運命實にかくの如し。姫はわがこれを不朽にせむとする心を、この時能く曉り得たり。姫が我を解することの斯く深かりしことは、當時我未だ知ること能はざりしが、後に至りて明かになりぬ。

我は日ごとに姫をおとづれき。わづかに殘れる謝肉祭の日はいつしか夢の如くに過ぎ去りぬ。されどこの間われは遺憾なくこのまつりの興を受用し盡せり。そはアヌンチヤタが我に賦したる樂天主義の賜なりき。或時ベルナルドオのいふやう。汝はやうやくまことの男とならむとす。われ等に變らぬ眞の男とならむとす。されど汝はまだ脣を杯の緣にあてしに過ぎず。我は明かに知る、汝が脣の未だ曾て女子の口に觸れず、汝が頭の女子の肩に倚らざるを。今若しアヌンチヤタまことに汝を愛せばいかに。我。思ひも掛けぬ事かな。アヌンチヤタは我が僅に能く仰ぎ見るものゝ名にして、我手の屆くべきものゝ名にあらず。彼。あらず。高くもあれ低くもあれ、アヌンチヤタとは女子の名なり。汝は詩人にあらずや。詩人は測るべからざる性あるものなり。その女子の胸の片隅を占むるや、その奥に進むべき鍵は、詩人の手にあるものぞ。我。姫がやさしさ、賢しさ、姫が藝術のすぐれたるをこそ慕へ。これに戀せむなどとは、われ實に夢にだにおもひしことなし。彼。汝が眞面目なるおも持こそをかしけれ。好し好し、我は汝が言を信ぜむ。汝は素より蛙なんどに等しき水陸兩住の動物なり。現の世のものか、夢の世のものか、そを誰か能く辨ぜむ。汝はまことに彼君を愛せざるべし、わが愛する如く、世の人の戀するときに愛する如く愛せざるべし。されど汝が姫に對する情果して戀に非ずば、今より後彼に對して面をあかめ、火の如き目なざしゝて彼に向ふことを休めよ。そは彼君のためにあしかりなむ。傍より見む

人の心のおもはれて。されど姫はあさて此地を立つといへば、最早その憂もあらざるべし。基督再生祭の後には歸るといへど、そも恃むべきにはあらず。これを聞きたるとき、我胸は躍りぬ。アヌンチヤタを見るべからざること五週に亙るべし。彼君はフイレンツエの芝居に傭はれ、斷食日の初にこゝを立つなりとぞ。ベルナルドオは語を繼ぎていはく。かしこに至らば崇拜者の新なる群は姫がめぐりに集ふべし。さらば舊きは忘れられむ。譬へば汝が即興の詩の如きも、その時こそ姫のやさしき目なざしに、汝に謝する色現れつれ、かしこにては思出さる暇なからむ。さはあれ一個の婦人にのみ心を傾くるは癡漢の事なり。羅馬には女多し。野に遍き花のいろ〱は人の摘み人の采るに任するにあらずや。

この夕我はベルナルドオと共に芝居に往きぬ。アヌンチヤタは再びチドとなりて出でぬ。その歌、その振、始に讓らざりき。完備せるものゝ上には完備を添ふるに由なし。姫が技藝はまことに其域に達したるなり。こよひは姫また我理想の女子となりぬ。その本讀の曲にての役、その平生の擧動は、例へば天上の仙の暫くこの世に降りて、人間の態をなせるが如くぞおもはるゝ。その態も好し。されどチドの役にては、姫が全幅の精神を見るべし。觀客は又狂せり。想ふにこの羅馬の民のむかし該撒とチッスを迎へけむ歡も、おそらくは今宵の上に出でざるならむ。曲畢りて姫は衆人に向ひて謝辭を陳べ、再びこゝに來むことを約せり。姫はこよひもまたゝび呼出されぬ。歸途に人々の車を挽けるも亦同じ。我もベルナルドオと共に車に附き添ひて、姫がやさしき笑顏を見送りぬ。

謝肉祭の終る日

翌日は謝肉祭の終る日なりき。又アヌンチヤタが滯留の終る日なりき。我は暇乞におとづれぬ。市民がその技能に感じて與へたる喝采をば、姫深く喜びたり。フイレンチエはその自然の美しき、その畫廊の備れる、居るに宜しきところなれど、再生祭の後こゝに歸らむことは、今より姫の樂むところなり。姫はかしこの景色を物語りぬ。アペンニノの森林、豪貴の人人の別莊の其間に碁布せるピアッツア、デル、グランヅカ、其外美しき古代の建築物など、その言ふところ人をして目のあたりに見る心地せしめき。

姫のいはく。我は再び畫廊に往かむ。我に彫刻を喜ぶこゝろを生ぜしめしは彼處なり。プロメテウスが死者に生を與ふるに同じく、人間の心の偉大なるを、わが悟りしは彼所なり。彼廊に一室あり。そは最も小なる室にして、わが最も好める室なり。今若し君をかしこに在らしむることを得ば、君は能くわがむかしの喜を解し、又能くわが今日そを想起す喜を解し給はむ。この八角に築きたる室には、實に全廊の尤物を擢でゝ陳列せり。されどその尤物の皆けおさるゝは、メヂチのヱヌスの石像あればなり。かくまでに生けるが如き石像をば、われこの外に見しことなし。その目は人を視る如し。石像の背後には、チチアノの畫けるヱヌスの油畫二幅を懸けたり。その色彩目を奪ふと雖、こゝに寫し得たるは人間の美しさにして、彼石の現せるは天上の美しさなり。ラフアエロがフオルナリイナ（作者意中の人）は心を動すに足らざるにあらず。されどヱヌスの生けるをば、われあまたゝび顧みざること能はず。否々、おほよそ世に彫像多しと雖、いづれか彼ヱヌスの右に出づべき。ラオコオンにてはまことに石の痛楚のために泣くを見る。しかも猶及ばざるところあ

り。獨我ヱヌスと美を媲ぶるは、君も知り給へるソチカアノのアポルロンならむ。その詩神を摸したる力量は、彼ヱヌスに於きてやさしき美の神を造れるなり。我答へて。君の愛で給ふ像を石膏に寫したるをば、我も見き。姫。否、われは石膏の型ばかり整はざるものはなしと思へり。石膏の顔は死顔なり。大理石には命あり靈あり。石はやがて血肉となり、血は其下を行くに似たり。フイレンチェまで共に行き給はずや。さらばわれ君が案内すべし。我は姫が志の厚きを謝して、さていひけるは、さらば再生祭の後ならでは、又相見むこと難かるべしといふ。姫こたへて。さなり。聖ピエトロ寺の燈を點し、烟火戯を上ぐる折は、我等が相逢ふべき時ならむ。それまでは君われを忘れ給ふな。我はまたフイレンチェの畫廊に往きて君とけふ物語れることを想ふべし。われは常に面白きことに逢ふごとに、我友のその樂を分たざるを恨めり。これも旅人の故郷を偲ぶたぐひなるべし。我は姫の手に接吻して、戯に。この接吻をばメヂチのヱヌスに傳へ給へ。姫。さては我にとてにはあらざりしか。我は決して私することなかるべしといひぬ。我は分れて一間を出でしとき夢みる人の如くなりき。戸の外にて家の媼に出で逢ひ、心の常ならぬけにやありけむ、われその手を取りて接吻せしに、これは善き性の人なるよとつぶやくを聞きつ。

最後の謝肉祭の日をば、飽く迄樂まむと思ひぬ。唯〻アヌンチヤタと別れむことは、猶現とも覺えず。又逢はむ日は遙なる後にはあらで、明日の朝にはあらずやとおもはる。假面をば被りたらねど、「コンフェッチイ」の粒擲ぐることは、人々に劣らざりき。道の傍なる椅子には人滿ちたり。家ごとの窓よりも人の頭あらはれたり。車のゆきかふこと隙間なく見ゆるに、その餘せる地にはうれしげなる面持したる人、摩るほどに集へり。歩まむとする人は、車と車との隙を行くより外すべなし。音樂の聲は四面より聞ゆ。車の内よりも「イル、カピタノ」(大尉)の歌洩りたり。陸に海に立てたる勳とぞ歌ふなる。腰に木馬を結びたる童あり。首と尾とのみ見えて、四足のところは膝かけの色ある巾にて掩はれたり。童の足二つにて、馬の足の用をなせるなり。かゝるものさへ車と車との間に入れば、混雜はまた一入になりぬ。われは楔の如く車の間に介まりて、後へも先へも行くこと叶はず。後なる車挽ける馬の沫は我耳に濺げり。わがこれにえ堪へで、前なる車の踏板に飛び乗りたるを、これに乘れる寢衣着たる翁と、やさしき花賣娘とは、早くも惡劇のためよりは避難のためと見て取りぬと覺しく、娘は輕く我手背を敲き、例の玉のつぶこ二つ投げかけしのみなれど、翁の打つ飛礫は雨の如くなりき。娘もこの攻撃を興あることにや思ひけむ、遂には翁の所爲に傚ひて、持てる籠の空しくならむとするをも厭はで唯々打ちに打つ程に、我衣は斑々として雪を被れる如くぞなりぬる。われはこの地點を守りかねて、飛びおるれば、戯奴にいでたちたる男走り來て、手に持てる采配もて、我衣を拂ひ呉れたり。

暫し避けて佇む程に、さきの車又かへり路に我を見て、再び「コンフェッチイ」を投げかけたり。わが未だ迎へ戰ふに遑あらざる時、砲聲地に震ひて、くらべ馬始まるをしらせしかば、車は皆狹き横道に入りて、翁と娘とも見えずなりぬ。二人は我を識りたりと覺し。奈何なる人にかあらむ。ベルナルドオは今日街に見えざりき。かの翁は其人にて、娘はアヌンチヤタにはあらずや。

我は街の角に近き椅子に倚りぬ。砲は再び響きて、競馬は街のたゞ中をヱネチヤの廣こう

おさして馳せゆき、荒浪の寄するが如き群衆はその後に隨ひぬ。わが踵を旋して還らむとするとき、馬よ〳〵と呼ぶ聲俄に喧しく、競馬の内なる一頭の馬、さきなる埒にて留まらず、そが街を引きかへし來れるに、最早馬過ぎたりと心許しゝ群衆は、あわて騷ぐこと一かたならず。吾心頭には稻妻の如く昔のおそろしかりしさま浮びたり。瞬くひまに街の兩側に避けたる人の黒山の如くなる間を、兩脇より血を流し、鬣聳ぎ、口より沫出でたる馬は馳せ來たり。されど我前を過ぐるとき、いかにかしけむ躓きて斃れたる如く打ち倒れぬ。怪我せし人やあると、人々しばし安き心あらざりしが、こたびは聖母やさしき手を信者の頭の上に擴げ給ひて、一人をだに傷け給はざりき。

危さの容易く過ぎ去りしは、祭の興を損ぜずして、却りて人の心を亂し、人の歡を助けたり。これよりは謝肉祭の大詰なる燭火の遊(モツコロ)始まらむとす。今まで列を成したりし馬車は漸く亂れて、街上の雜遝は人聲の噪しさと共に加はり、空の暗うなりゆくを待ち得て、人々持ちたる燭に火を點せり。中には一束を握りて、ことごとく燃せるもあり。徒なるも車なるも燭を把りたるに、窓のうちに坐したる人さへ火持たぬはあらねば、この美しき夜は地にも星ある如くなり。家々より街の上へさし出せる火には、いろ〳〵なる提灯、燈籠ありて、おの〳〵功を爭へり。さて人々皆おのが火を護りて、人のを消さむとす。火持たぬ人は死ね(リア、アムマツアトオ、キイ、ノン、ポルタア、モツコオリ)と叫ぶ聲は、次第に喧しくなりまされり。我が持てる燭も、人に觸れさせじとする情折は其甲斐なくて、打ち滅さるゝこと頻なりければ、われ餘りのもどかしさに、智慧ある人は我に傚へよと叫びつゝ、柄ながらに投げ棄てつ。道の傍なる婦人數人はその燭を家々の窖の窓にさし込みて、これをば誰もえ消さじと心安んじ、我を指ざして燭なき人の笑止さよと嘲るほどに、家の童どもいつか窖に降り行きて、その燭を吹き滅したり。又高き窓なる人々は竿に着けたる提燈さし出して誇貌なるを、屋根に這ひ出でたる男ども竿の尖に紛帨結びたるを揮ひて、これをさへ拂ひ消すめり。

異國人にて此祭見しことなきものは、かゝる折の雜遝を想ひ遣ること能はざるべし。立錐の地なき人ごみに、燃やす燭の數限なければ、空氣は濃く熱くのみなり勝りぬ。忽ち街の角を曲らむとする馬車二三輛あるを認めて頭を回しに、かの覆面したる翁と娘とを載せたる車は我側に來りぬ。寢衣纏ひたる老紳士の燭は早や消えたり。花賣に扮したる娘は猶四五尺許なる籐の竿に蠟燭幾本か束ねたるを着けて高く翳せり。彼の紛帨結びたる竿の長足らで、我火をえ消さゞるを見て、娘は嬉し氣に笑ひぬ。老紳士は又娘の火に近づくものありと見るごとに、容赦なく「コンフェッチイ」の霰を迸らせたり。われはこれをこそと思ひければ、車の背後に飛び乘り、籐の竿をしかと握るに、娘はあなやと叫び、男は石膏の丸を放つこと雨より繁かりしかど、屈せずしてかの竿を撓ませむとせしに、竿は半ばよりほきと折れて、燭の束ははたと落つ。群衆は喝采せり。娘はアントニオ、餘りならずやと怨じたり。その聲は我骨を刺すが如く覺えぬ。そはアヌンチヤタが聲なればなり。娘は籠の内なる丸の有らむ限を我頭に擲げ付け、續いて籠を擲げ付けしに、われ驚きて跳り下るれば、車ははや彼方へ進み、和睦のしるしなるべし、娘のうしろざまに投じたる花束一つ我掌に留りぬ。われは車を追はむとせしが、雜沓甚しきため其甲斐なく、遂にとある横街に身を避けつ。

身の周圍の混雜收りて心落つくと共に、心

に懸かるはアヌンチヤタが同乘したる男の上なり。察するにベルナルドオが故意と翁に扮したるなるべし。いで二人の家に歸るを待ち受けて確めばやと人通り少かるべき横街を駈け拔けて、姫が住めるコロンナの廣こうぢに出で、戸口に立ちて待つほどに、車は果して歸り着きぬ。われは家の僮僕などの如き樣して走り寄りつゝ、車より下る二人を援けむとするに、姫は我手に縋らで先づおり立ちぬ。さて彼老紳士に心を着くるに、その立ちあがりゐざりおるゝ樣にて、わが推せし人ならぬは早く明かになりたりしが、寢衣の裾より出でたる褐色の裳を見るに及びて、姫が家の媼なることは漸く知られぬ。媼はわがさし伸ばす手に縋りて下りぬ。われは姫の供したる人の男ならざりし嬉しさに、幸あらむ夜をこそ祈れと聲高く呼びて去らむとせしに、姫進み寄りて、惡しき人かな、早くフィレンチェに遁れ行かばやといひつゝも、手さし出せるを握るに、かなたも親く握り返しつ。嬉しさに嬉しさの重なりたる我は、火持たぬ手うち振りて、火持たぬ人は死ねと叫び行きぬ。我心の中には姫が徳を頌する念滿ちたり。その車の傍なる座をば樂長にも許さず、吾友にも許さで、彼媼を伴ひしこそ、姫が心の淸き證なれ。彼媼は又かゝる遊を喜ぶべき人とも見えぬに、男寢衣を身に着けて供せしを思へば、專ら姫を悅ばせむがために心を竭せるものなるべし。唯ゝ姫が側なる人をベルナルドオならむと疑ひしとき、我心の噪がしかりしは、妬なるか否ざるか、そはわが考へ定めざるところなりき。

われは殘れる謝肉祭の時間を面白く過さむとて、假粧舞の場に入りぬ。堂の内には處狹きまで燈燭を懸け列ねたり。假粧せる土地の人、素顏のまゝなる外國人と打ち雜りて、高き低き棧敷を占めたり。平土間より舞臺へ幅廣き梯をわたしたるが、樂人の群の座はその梯の底となりたり。舞臺には畫紙を貼り、環飾紐飾を掛けて、客の來り舞ふに任せたり。樂人は二組ありて、代る〴〵演奏す。今は酒の神なるバッコスとその妻なる女神アリアドネとの姿したる人を圍みて、貸車の御者に扮したる男あまた踊り狂ふ最中なりき。われは梯を踏みてその群に近づき、引かるゝまゝに共に舞ひしが、心樂しく身輕きに、曲二つまで附き合ひて、夜更けたる後塒に歸りぬ。

眠りしは短き間にて、翌朝は天氣好かりき。姫は今羅馬を立つにやあらむ。華かにして賑はしく、熱して騷がしかりし謝肉祭は、今我を殘して去りぬ。外に出でゝ風に吹かれなば、心寂しきけふを慰むるに足ることもやと思ひて、獨り街に立ち出でぬ。家々の戸は閉されたり。物賣る店もまだ起き出でざりき。昨日は人の波打ちしコルソオの大道には、往き交ふ人疎にして、白衣に藍色の縁取りしを衣たる懲役人の一群、霰の如く散りぼひたる石膏の丸を掃き居たり。塵を積むべき車の轅には、骨立したる老馬の繋がれつゝ、側なる一閑の芻秣を嚙めるあり。とある家の戸口には、貸車の御者立ちて、あき箱あき籠あまた車の上に載せ、その上をば毛布もて覆ひ、背後に結び附けたる革行李の闕くるまで鐵の鎖を引き締め居たり。この車は横街より出でたる、同じ樣に梱載せる車と共に去りぬ。ナポリにや行くらむ。フィレンチェにや行くらむ。耶蘇更生祭の來む日まで、羅馬は五週間の長眠をなさむとするなり。

精進日、寺樂

事なくして靜に日を暮せば、その永さの常にもあらで覺えらるゝと共に、謝肉祭の間の珍らしかりし事、その事の中心をなせる姫が上のみ心頭に往來せり。墳墓の如き靜けさは日ごとに

甚しくなりぬ。わが胸の空虚は書卷の能く塡むるところにあらざりき。ベルナルドオはわが無二の友なり。然るに今はその音容に接することの厭はしくなれるぞ怪しき。嗚呼我等二人の間にはアヌンチヤタの立てるなり。縱ひ友を失はむも、彼君のためには惜からじと一たびは思ひぬ。されどつら〳〵思ひ返せば、友は我に先だちて姫と交を結びぬ。わが姫と相識ることを得しは、全く友の紹介の賜なり。われは友に對して、我が姫に運ぶ情の戀にあらず、藝術上の感歎なるを誓ひたり。ベルナルドオはわが無二の友なり。われは今これを欺かむとす。悔恨の棘は我心を刺せり。されどわれは遂にアヌンチヤタを忘るゝこと能はず。

アヌンチヤタを懷ふはアヌンチヤタの我に與へたる歡喜を懷ふなり。されどその歡喜をなしゝは昔日の事にして、今これが記念を喚び起せば、一として悲痛に非ざるものなし。譬へば亡人の肖像の笑へるが如し。その笑はたま〳〵以て我を泣かしむるに足る。學校にありしころ人の世途の難を說くを聞きては、或課題のむづかしき、或師匠の意地わるきなどに思ひ比べて、我も亦早く其味を知れりといひしことあり。今やその非なるを悟りぬ。われ若し能く此戀に克つにあらずば、此力以て世途の難を排するに足るとはいふべからず。試に此戀の前途を思へ。アヌンチヤタは尋常の歌妓に非ずして、その妙藝は現に天下の仰ぎ望むところなりと雖、われ往いてこれに從はゞ、その形迹世の蕩子と擇ぶことなからむ。我友はこれを何とか言はむ。加之ず若し心術の上より論ぜば、我守護神たる聖母もこれよりは復我を憐み給はざるべし。況や此戀は果して能く成就せむや否や。我は口惜しきことながら、實に未だアヌンチヤタの心を知らざりき。我は寺に往きて聖母の前に叩頭き、いかで我に己に克つ力を授け給はれと祈りて、さて頭を擧けしに、何ぞ料らむ聖母の面は姫が面となりて我を悅ばせ又我を苦めむとは。我は縱ひ姫再び來むも、誓ひて復た逢はじとおもひ定めつ。

我は嘗て古の信徒の自ら笞ち自ら傷けしを聞きて、其情を解せざりしに、今や自らその爲す所に倣はむと欲するに至りぬ。燃ゆるが如き我血を冷さむとて、我は聖母の像の下に伏して、我脣をその冷なる石の足に觸れたり。憶ひ起せば、わがまだ稚き時の心安かりしことよ。母の膝下にて過す精進日は、常にも增して樂き時節なりき。四邊の光景は今猶昨のごとくなり。街の角、四辻などには金紙銀紙の星もてりたる常盤木の草寮あり。處々に懸けし招牌には押韻したる文もて精進食の名を列べ擧げたり。夕になれば綠葉の下に彩りたる提燈を吊れり。雜食品賣る此頃の店は我稚き目に空想界を現ぜる如く見えにき。銀紙卷きたる腸詰肉を柱とし、ロヂイ産の乾酪を穹窿としたる小寺院中にて酪もて塑ねたる羽ある童の舞ふさまは、我最初の詩料なりき。食品店の妻は我詩を聞きて、ダンテの神曲なりと稱へき。當時われは不幸にして未だこの譽ある歌人のいかに世を動かしゝかを知らず、又幸にして未だアヌンチヤタが如き才貌ある歌妓のいかに人を動かすかを知らざりしなり。嗚呼、われは奈何してアヌンチヤタを忘るゝことを得べきぞ。

われは羅馬の七寺を巡りて、行者と偕に歌ひぬ。吾情は眞にして且深かりき。然るをこれに出で逢ひたるベルナルドオは、刻薄なる語氣もて我に耳語していふやう。コルソオの大道にて戲謔能く人の頤を解きしは誰ぞ。アヌンチヤタが家にて卽興の詩を誦んじ座客を驚しゝは誰ぞ。今は目に懺悔の色を帶び頰に死灰の痕を印して、殊勝なる行者と伍をなせり。汝はいかなる役をも辭せざる名優なるよ。此の如きは

我が遂にアントニオに及ばざるところぞといひぬ。吾友の言ふところは實錄なりき。されど當時我を傷ること此實錄より甚しきはあらざりしなり。

精進の最後週は來ぬ。外國人は多く羅馬に歸り集ひぬ。ポヽロ門よりもジョワンニ門よりも、馬車相驅逐して進み入りぬ。水曜日午後にはワチカアノのシクスツス堂にて「ミゼレエレ」（ミゼレエレ、メイ、ドミネ、憐を我に垂れよ、主よの句に取りたるにて、第五十頌の名なり）の樂あり。われは樂を聽きて悶を遣らむがために往きぬ。聽衆は堂の內外に押し掛け居たり。前なる椅榻には貴婦人肩を連ねたり。色絹、天鵞絨もて飾れる觀棚の彫欄の背後には、外國の王者竝び坐せり。法皇の護衞なる瑞西隊は正裝して、その士官は盔に唐頭を插めり。この裝束は若き貴婦人に會釋せるベルナルドオには殊に好く似合ひたり。

われ裏面より壇に近き處に席を占めしに、こは歌者の席なる斗出せる棚に遠からざりき。背後には許多の英吉利人あり。この人々は謝肉祭の頃假粧して街頭を彷徨ひたりしが、こゝにさへ假粧して集ひしこそ可笑しけれ。推するにその打扮は軍隊の號衣に擬したるものならむ。されど十歲許の童までこれを着けたるはいかにぞや。その華美ならむことを欲することの甚しきを證せむがために、こゝに一例を舉げむに、其人の上衣は淡碧にして銀絲の縫ひあり、長靴には黃金を鏤め、扁圓なる帽には羽毛連珠を着けたり。英吉利人のかゝる習をなしゝは、美しき號衣の好き座席を得しむる利益を知りたるためなるべし。我傍よりは笑を抑ふる聲洩れたり。されどわがそを可笑しと見しは、唯ゞ一瞬間なりき。

老いたる僧官達は紫天鵞絨の袍の領に貂の白き毛革を附けたるを穿て、壇の內に半圈狀をなして列び坐せり。僧官達の裾を捧げ來し僧等は其足元に蹲りぬ。贄卓の傍なる小き扉は開きぬ。そこより出でたるは、白帽を戴き濃赤色の袍を纏へる法皇なりき。法皇は交椅に坐したり。侍者等は香爐を搖り動したり。紅衣の若僧の松明取りたるもの數人法皇と贄卓との前に跪けり。

讀誦は始まりぬ。（絃歌に先だちて十五章の讀誦あり。壇上に巨燭十五枝を燃やしおきて、一章終るごとに一燭を滅す。）われは心を死せる文字の間に潛むること能はず、魂を彼のミケランジェロが世に罕なる丹靑の力もて此堂の天井と四壁とに現ぜしめたる幻界に馳せたり。その活けるが如き預言者等の形は一個々々皆大冊の藝術論の資をなすに餘あるべし。その力量ある容貌風采とこれを圍める美しき羽ある兒の羣とは、我眼を引くこと磁石の鐵を引く如くなりき。こは畫にあらず。活ける神人なり。エワが果を夫に贈りし智慧の木は鬱蒼として彼處に立てり。父なる神は、古の畫工の作れる如く羽ある童に擔はれたるにはあらで、その肢體の上、その風に翻る衣裳の上に、許多の羽ある童を載せつゝ、水の上を天翔り給ふ。われはけふ始めて此畫を觀たるにあらず。されど此畫の我心を動かすこと今日の如きは未だ有らず。われはけふの群集のためにや、わが熱したる情のためにや知らねど、此畫中に限なき詩趣あるを認めたり。或は想ふにこは我が抒情の興多き心を畫中に投じ入れたるにはあらずや。そは兎まれ角まれ、此畫に對して此情をなすは、恐らくは獨り我のみならず、こは我に先たてる幾多の詩人の亦免れざるところなりしなるべし。

險しきを行くこと夷なる如き筆力、望み瞻る方嚮に從ひて無遠慮なるまで肢體の尺を縮めたる遠近法は、個々の人物をして躍りて壁面を出でしめむとす。昔基督の山上に在りて言

語もて說き給ひし法（馬太五至七）は、今此大匠によりて色彩と形象ともて現されたるなり。吾人はラファエロと共に膝を此大匠の技倆の前に屈せむとす。此數多き預言者は、一つとして同じ人の石もて刻める摩西に劣ることなし。何等の魁偉なる人物ぞ。堂に入るものゝ心目は先づこれがために奪はるゝなり。

吾人はこゝに心目を淨め畢りて、さて頭を擧げて堂の後壁に向ふなり。下は大床より上は天井に至るまで、立錐の地を剩さゞるこの大密畫は、卽ち是れ一顆の寶玉にして、堂內の諸畫は悉くこれを塡めむがために設けし文飾ある枠たるに過ぎず。これを世の季の審判の圖となす。

判官たる基督は雲中に立てり。使徒と聖母とは不便なる人類のために憐を乞はむとて手をさし伸べたり。死人は墓碣を搖り上げて起たむとす。惡に逢へる精靈は拜みつゝ高く翔り、地獄はその腭を開いて犧牲を吞めり。宣告を受けたる同胞の早く毒蛇に卷かれたるを、雲に駕せる靈の援け出さむとするあり。悔い恨める罪人の拳もて我額を擊ちつゝ、地獄の底深く沈み行くあり。天堂と地獄との間には、或は登り或は降る神將力士あまたありて、例の大膽なる遠近法もて寫し出されたり。優しく人を憫みがほなる天使、再會して相悅べる靈ども、金笛の響に母の懷に俯したる稚子など、いづれ自然ならざるなく、看るものは覺えず身を圖中に寘きて、審判のことばに耳を傾く。ミケランジェロは蓋し能くダンテの歌ひしところを畫けるなり。

恰も好し將に沒せむとする夕日はそのなごりの光を最高列の窓より射込みたり。圖の下の端なる死人の起つあたり、蟠せる羅刹の罪あるものを拉き去るあたりは、早や暗黑裡に沒せるに、基督とその周匝なる天翔る靈とは猶金色に照されたり。日の入ると共に最後の燭は吹き滅されて、讀誦は全く果てたり。暗黑は審判の圖の全面を覆へり。絲聲肉聲は又湧きて、世の季の審判の喜怒哀樂皆洋々たる音となりつゝ、われ等の頭上を漲り過ぐ。

法皇は式の衣を脫ぎて、贊卓の前に立ち、十字架を拜せり。金笛の響凄じく、「ポプルス、メウス、クキット、フェチイ、チビイ」の歌は起りぬ。低階の調に雜る軟なる天使の聲は、男の胸よりも出でず、女の胸よりも出でず、こは天上より來れるなり。こは天使の涙の解けて旋律に入りたるなり。

われはこれを聽きて、力づき甦り、この頃になき歡喜は胸に滿ちたり。われはアヌンチヤタを愛し、ベルナルドオを愛せり。この瞬時の愛はかの天上の靈の相愛するに殊ならざるべし。祈禱の我に與へざりし安慰は、今音樂にて我に授けられたるなり。

友誼と愛情と

式終りてベルナルドオが許を訪ひぬ。手を握り襟を披きて語るに、高興は能辯の母なるを知りぬ。けふ聞きつるアレエグリイ（寺樂の作者）が曲、我が夢物語めきたる生涯、我と主人との友誼は我に十分なる談資を與へたり。けふの樂はいかに我憂を拂ひし。未だ聽かざりし時の我疑懼、鬱悶、苦惱は幾何なりし。われは此等の事を殘なく物語りしが、唯ゞこれが因緣をなしゝものゝ主に我友なりしか、又はアヌンチヤタなりしかをば論じ究めざりき。我が今友に對して展べ開くことを敢てせざる心の襞はこれ一つのみなりき。友は打ち笑ひて、さて／＼面倒なる男かな、カムパニアの羊かひの頃よりボルゲエゼの館に招かるゝまで、女子の手して育てられしさへあるに、「ジェスヰタ」派の學校に在りしなれば、斯くむづかしき性質にはなりしならむ、切角の伊太利の熱血には山羊の乳を雜ぜ

られたり、「ラ、トラップ」派の僧侶めきたる制欲は身を病ましめたり、馴れたる小鳥一羽ありて、美しき聲もて汝を喚び、夢幻境を出で現實界に入らしめざるこそ憾なれ、汝が心身の全く癒えむは人なみになりたる上の事ぞといひぬ。われ。我等二人の性は懸隔すること餘りに甚し。然るを我は怪しきまで汝を愛せり。折々は共に棲まばやとさへ思ふことあり。友。そは嗇に我等を温めざるのみならず、却りて何時ともなくこの交を絶つべし。友誼と戀情とは別離によりて長ず。我は時に夫婦の生活のいかに我を倦ましむべきかを思へり。斷えず相見て互に心の底まで知りあはむ程、興なき事はあらざるべし。さればおほかたの夫婦は幾もあらぬに厭き果つれども、名聞を憚ると人よきとにて、其緣の絲は猶繋がれたるなり。我は思ふに、我情いかに一女子のために燃えむも、その女子の情いかに我に過ぎたらむも、その燄の相合ふ時は即ち相滅する時ならむ。愛とは得むと欲する心なり。得むと欲する心は既に得て止むべし。われ。若し汝が妻アヌンチヤタの如く美しく又賢からむには奈何。友。其薔薇花の美しき間は、わが愛づべきこと慥なり。されど色香一たび失せたらむ日には、われは我心のいかになり行くべきを知らず。汝はわが今何事を思ひしかを知るや。この念は忽ち生じ忽ち滅すれど、今始て生ぜるにはあらず。われは汝の血のいかに赤きかを見むと願ふことあらむも計られず。されどわれには智あり。汝は我友なり。わが潔白なる友なり。縱令われ等二人同じ女に懸想することあらむも、相鬪ふには至らざるべし。斯く言ひつゝ友は聲高く笑ひ、我首を抱きて戲れながらにいふやう。我に馴れたる小鳥ありて、その情はいと濃かなれど、この頃は些し濃かなるに過ぎて厭はしくなりぬ。思ふに汝には氣に入るべし。こよひ我と共に來よ。親友の間には隱すべきことなし。面白く一夜を遊び明さむ。さて日曜日にならば、法皇は我等が罪を洗ひ淨め給ふべきぞ。われ。否、我は共に往かざるべし。友。そは卑怯なり。汝は汝の血を傾け盡して、只だ山羊の乳のみを留めむとするか。汝が目は我目に等しく輝くことあり。われは嘗てこれを見き。汝が鬱悶、汝が苦惱、汝が懺悔、是れ畢竟何物ぞ。われあからさまに言ふべきか。是れ得むと欲して得ざるところあるなり。その得ざるところのものは、赤き脣なり、軟なる膚なり。汝が假面の被りざま拙ければ、われは明白に看破せり。いざ往いてその得むと欲する所のものを得よ。汝否といはば、そは卑怯なり、臆病なり。われ。止めよ。そは餘りなる詞なり。そは我を辱むる詞なり。友。されど汝はその辱を甘んじ受けざること能はざるべし。これを聞きしとき、我血は上りて頭を衝きしが、我涙も亦湧きて目に溢れたり。いかなれば汝はかくまでに無情なる。我は汝を愛し汝は我を弄ぜむとす。アヌンチヤタと汝との間にわれ立てりと思へるにはあらずや。アヌンチヤタの我を視ること汝より厚しとおもへるにはあらずや。友。否、決して然らず。わが空想家ならずして思遣少きは汝も知りたらむ。されど女の事をば姑く置け。唯ゞ心得がたきは、汝がいつも愛々といふことなり。我等二人は手を握りて友となりたり。その外には何も無し。我は汝と共に夸張すること能はず。我をばたゞ此儘にてあらせよ。對話はおほよそ此の如くなりき。ベルナルドオが毒箭は痛く我胸を傷けしが、別に臨みて我に握らせたる手は、遂にわれ等が交情を滅するに至らずして止みぬ。

をさなき昔

翌日は木曜の祭日なりき。鐘の音は我を聖ピー

エトロの寺に誘ひぬ。嘗て外國人ありて此寺の堂奥はこゝに盡きたりとおもひぬといふ、いと廣き前廳に、人あまた群れたるさま、大路の上又天使橋の上に殊ならず。羅馬の民はけふ悉くこゝに集へるなり。されば彼外國人ならぬものも、おなじ迷を起すべう思はる。何故といふに、人愈〻衆くして廳は愈〻濶しと見ゆればなり。

歌は頭の上に起りぬ。伶人の群をば棚の二箇處に居らせて、其聲相應ずるやうにせり。群衆は洗足の禮の今始まるを見むとて押し合へり。(此日法皇老若の僧徒十三人の足を洗ひ、僧徒は法皇の手に接吻して、おの〳〵「マチオラ」の花束を賜り退くことなり。)偶〻貴婦人席より我に目禮するものあり。誰ぞと視ればアヌンチャタなりき。彼君は歸りぬ。彼君は此堂にあり。我胸はいたく騷げり。その席幸に遠からねば、我等は詞を交すことを得たり。姫は昨日歸りしかど、樂ははや果てし後にて、僅に「アエ、マリア」の時此寺には來ぬとなり。

姫。此寺の光景はきのふ暗くて見しかた、けふのめでたきにも增してめでたかりき。聖ピエトロの墓の前なる一燈の外には何の光もなく、その光さへ最近き柱を照すに及ばざる程なるに、人々跪きて祈れば、われも亦跪きぬ。緘默の裡に無量の深祕あるをば、その時にこそ悟り侍りしかといふ。側にありし例の猶太婦人は、長き紗もて面を覆ひたれば、今までそれと知らざりしに、優しく我に會釋しつ。式は早や終りぬれば、姫はおのれを車に導くべき從者や來ると顧みたれど、その影だに見えず。若き人々の姫を認めて耳語き合ふもあれば、姫は早くこの堂を出でむとおもへる如し。われは車に導かむことを請ひしに、猶太婦人は直ちに手を我肘に懸け、姫は我と竝びて行けり。我は姫に我肘に倚らむことを勸むる膽なかりき。されど表口の戸に近づきて、人の籠み合ふこと甚しかりしとき、姫は手を我肘に懸けたり。我腋には火の循り行くを覺えき。車をば直ちに見出だしつ。わが暇を告げむとせしとき、姫今は精進の時なれば何もあらねど、夕餉參らすべければ來まさずやと案内したるに、嫗は快くおのれが座の向ひなる榻に外套、肩掛などあるを片付け、こゝに場所あり、いざ乘り給へと、我手を把りぬ。共に車に載せむといひしならぬを、嫗の耳疎くしてかく聞き謬りたるなれば、姫ははしたなくや思ひけむ、顏さと赧めたり。されど我は思慮する遑もあらで乘り遷り、御者も亦早く車を驅りぬ。

膳は豐なるにはあらねど、一として王侯の口に上すとも好かるべき贅澤品ならぬはなし。姫はフィレンチェにての事細かに語りて、さて精進日の羅馬はいかなりしと問ひぬ。こは我がためにはあからさまに答ふべくもあらぬ問なりき。

われ。土曜日には猶太教徒の洗禮あるべし。君も往きて觀給ふべきか。此詞は料らず我口より出でしが、われは忽ち彼嫗の側にあるを思ひ出だして、氣遣はしげにかなたを見き。姫。否、心に掛け給ふな。御身の詞は聞えざりき。されど聞ゆとも惡しく聞くべうもあらず。唯〻彼人の往かむは穩ならねば、我もえ往かざるべし。そが上コンスタンチヌスの寺なる彼儀式は固より除り愛でたからぬ事なり。(この儀式は歲ごとに基督再生祭に先だつこと一日にして行へり。猶太教徒若くは回々教徒數人をして加特力教に歸依せしめ、洗禮を行ふなり。羅馬年中行事に「シイ、アフ、イル、バッテシイモ、ディ、エブレイ、エ、ツルキイ」と記せり。)僧侶は異教の人の歸依せるをもて正法の功力の所爲となし、看る人に誇れども、その異教の人のまことに心より宗旨を改むるは稀なり。われもをさ

なき時一たび往きて觀しことあり。その折の服ふべき模樣は今に至るまで忘られず。拉き來りしは六つ七つばかりの猶太人の童なりき。櫛の痕なき頭髮の蓬々たるに、寺の贈なる麗しき素絹の上衣を纏へり。靴と襪とは汚れ裂けたるまゝなり。後に跟きて來たるは同じさまに汚れたる衣着たる父母なりき。この父母はおのれ等の信ぜざる後世のために、その一人の童を賣りしなるべし。われ。君はをさなき時この羅馬にありてそを見きとのたまふか。姫。然なり。されど我は羅馬のものにはあらず。われ。我は始て君が歌を聴きしとき、直ちに君のむかし識りたる人なることを想ひき。そを何故とも言ひ難けれど、この念は今も猶失することなし。若しわれ等輪廻應報の教を信ぜば、われも君も前生は小鳥にて、おなじ梢に飛びかひぬともいひつべし。君にはさる記念なしや。何處にてか我を見しことありとはおぼさずや。姫は我と目を見あはせて、絶てさる事なしと答へき。われ詞を繼ぎて。初めわれ君は稚きときより西班牙に居給ひぬと思ひしに、今のおん詞にては羅馬にも居ましゝなり。我惑はいよ〳〵深くなりぬ。君既にをさなくして此都に居給ひきといへば、若しこゝの稚き子等と共に、「アラチェリ」の寺にて說教のまねし給ひしことあらずや。姫。あり〳〵。まことにさやうなる事侍りき。さてはかの折人々の目に留まりし童はアントニオ、おん身なりしか。われ。いかにも初め目に留まりしは我なりき。されど勝をば君に讓りしなり。姫はげに思ひも掛けぬ事かなと、我兩手を把りて我面を見るに、媼さへその氣色の常ならぬを訝りて、椅子をゐざらせ、我等が方をうちまもりぬ。姫は珍らしき再會の顚末を媼に說き聞せつ。われ。我母もその外の人々も暫くは君が上をのみ物語りぬ。その姿のやさしさ、その聲の軟さをば、穉き我心にさへ妬ましきやうに覺えき。姫。その時君は余の捺鈕附きたる短き上衣を着たまひしこと今も忘れず。その衣をめづらしと見しゆゑ、久しく記憶に殘れるなるべし。我。君は又胸の上に美しき赤き鈕を垂れ給ひぬ。されど最も我目に留まりしはそれにはあらず。君が目、君が黑髮なりき。人となり給へる今も、その俤は明に殘れり。始て君がヂドに扮し給へるを見しとき、われは直ちにこの事をベルナルドオに語りぬ。さるをベルナルドオはそを我迷ぞといひ消して、却りておのれが早く君を見きと覺ゆる由を語りぬ。姫、そは又いかにしてと問ひしが、その聲うち顫ふ如くなりき。われ。ベルナルドオが君を見きといふは、いたく變りたる境界なり。惡しくな聞き給ひそ。ベルナルドオも後に誤れることを覺りぬ。君が髮の色濃きなど、人にしか思はるゝ端となりしなるべし。君は、君はわが加特力教の民にあらず、されば「アラチェリ」の寺にて說教のまねし給ふ筈なしとの事なりき。姫は媼の方を指ざして、さては我友とおなじ教の民ぞといひしなるべしといふ。われは直にその手を取りて、わが詞のためしを咎め給ふなと謝したり。姫微笑みて、君が友の我を猶太少女とおもひきとて、われ爭でか心に掛くべき、君は可笑しき人かなといひぬ。この話は我等の交を一と際深くしたるやうなりき。わが日頃の憂さは悉く散じたり。さてわが再び見じとの決心は、生憎にまた悉く消え失せたり。

姫はふと基督再生祭前のこの頃閉館中なる羅馬の畫廊の事を思ひ出でゝ、かゝる時好き傳を得て往き看ば、いと面白かるべしといふに、姫の願としいへば何事をも協へむとおもふわれ、幸にボルゲエゼの館の管守、門番など皆識りたれば、そは容易き事なりとて、あくる朝姫と媼とを伴ひ往かむことを約しつ。かの

館は羅馬の畫廊のうちにて最も備れる一つなり。フランチェスカの君の穉き我を伴ひ往き給ひしはかしこなれば、アルバニが畫の羽ある童は皆わが年ごろの相識なり。

靜なる我室に歸りて、つら〳〵物を思ふに、ベルナルドオはまことに彼君を戀ふるに非ず。卑しき色慾を知りて、高き愛情を解せざる男の心と、深けれども能く澹泊に、大いなれども能く抑遜せる我心とは、日を同じくして語るべからず。さきの日の物語の酷かりしことよ。彼はたゞ驕慢なり。彼はたゞ放縱なり。かくて傷くまで我を嘲けたり。そはアヌンチヤタの我に優しきを妬みてなるべし。初め我を紹介せしは、いかにも彼男なりき。されど今その心を推すれば、好意とはおもはれず。おのが風采態度のすぐれたるを彼君に見するとき、その側に世馴れぬ我を居らせて反映せしめむためにはあらずや。さるを我歌我詩は端なく彼君の心にかなひぬ。妬の心はこれより萌せるならむ。さて我を又姫に逢はせじとて、かくは我を脅ししなるべし。幸にわれ好き機會を得て、今は姫との交いと深くなりぬ。姫は我を憐めり。加之ず姫は我才を知りたり。かく思ひつゞけつゝ、我は枕に接吻せり。さるにても口惜しきは、わが意氣地なき性質なり。いかなれば我は先の日直ちに彼の無禮を責めざりしぞ。かの詞にはかく答ふべかりしなり。かの辱をばかく雪ぐべかりしなり。我血は湧き上りたり。無上の快樂に無比の慙恨打ち雜りて、我は睡ること能はざりしが、曉近くおもひの外に安なる夢を結びぬ。

翌朝は夙く起き、管守を訪ひて預めことわりおき、さて姫と媼とを急がせつゝ共にボルゲエゼの館に往きぬ。

畫廊

畫廊はわが穉かりしとき、惠深き貴婦人の我を伴ひ往きて、おろかなる問、いまだしき感の我口より出で我言に發するごとに、面白しと樂み笑ひ給ひしところにして、又わが獨り入りて遊び暮らしゝところなれば、今アヌンチヤタを導き往くことゝなりたる我胸には、言ひ知らず怪しき情湧り起れり。既に入りて畫を看れば、幅ごとに舊知なるごとく思はる。されど姫は却りてこれを知ること我より深かりき。姫は生れながらの官能に養ひ得たる鑑識をさへ具へたれば、その妙處として指し示すところは悉く我を服せしめ、我にその神會の尋常に非ざるを歎ぜしめたり。

姫はジェラルドオ、デル、ノッチイの名ある作なるロオト、ソドムに住みしハランの子）とその女兒との圖の前に立てり。われはをゝしき父の面、これに酒を勸むる樂しげなる少女の姿、暗く繁りあひたる木立のあなたに見ゆる夕映の空などめでたしと讃へしに、姫我ことばを遮りて、げに〳〵奇なる激せる情も畫けるものと覺し、作者の筆の傳色、表情の一面は寔に貴むべし、さるを此の如き題（ロオトは其女子と通じたり）を選みしこそ心得られね、畫にも禮儀あり、品性あらむは我がつねに望む所なり、コルレジョオがダナエなども、己れは人の愛づらむやうには愛でず、少女ダナエを謂ふ、希臘諸神の祖なるチェウス黄金の雨となりて遘き給ひ、ペルセウスを生ませ給ふこの貌はいかにも美しく、臥床の上にて黄金掻き集むる羽ある童の形もいと可笑しけれど、その事餘りにみだりがはしくして、興さむる心地す、ラファエロの大なるはこゝにあり、わが知れる限は、その採るところの題、毎に高尚にして些の穢れだになし、かくてこそめでたき聖母の面影をば傳ふべかりしなれといふ。われ。仰せは理あるに似たれども、畫の妙は題の穢を忘れしむること

もあるべし。姫。そはきはめて有るべからざる事なり。藝術はその枝その葉の末までも、清淨醇白なるべきものにて、理想の高潔は人を動かすこと形式の美麗に倍す。古の作者の手に成りし聖母の像を視るに、すべて硬く鋭くして、支那人の畫もかくやとおもはるれども、我はこれに打ち向ふごとに、必ず心の底に徹する如き念をなせり。この高潔といふものは、その作畫者のために缺くべからざること、度曲者に於けると同じ。名作中こゝかしこに稍々過ぎたりと見ゆる節あるをば、その作者の一時の出來心と看做して、恕すこともあるべけれど、その疵瑕は遂に疵瑕たることを免るべからず。わがまことに愛づるは無瑕の美玉にこそ。われ。さらば君は變化を命題の間に求めむことをば是とし給はずや。いかなる大家鉅匠にても、幅ごとに題を同うせば人の厭倦を招くなるべし。姫。否々、そは我が言はむと欲せしところにあらず。わが本意は畫工に聖母のみ畫かせむとにはあらず。めでたき山水も好し。賑はしき風俗畫、颶風に抗ふ舟の圖も好し。サルワトオレ、ロオザが山賊の圖もいかでか好からざらむ。われは唯々藝術の境に背徳を容れじとこそ云へ。わが趣味より視れば、かの「シャリア」宮なるシドオニイの畫の如きすら、その巧緻その汚穢を掩ふに足らず。君は猶彼圖を記し給ふや。驢に騎りたる農夫二人石垣の下を過ぐ。垣の上に髑髏ありて、一鼷鼠、一蚯蚓、一木蝨これに集り、石面には「エット、エゴオ、イン、アルカヂア」と云ふ四つの拉甸語を書したり。われ。その畫はラファエロの「ヰオリン」彈きの隣に懸けられたるを、われも記憶す。姫。さなり。そのラファエロが落欵の見苦しき彼圖の上邊にあるこそ憾なれ。

既にしてわれ等はフランチェスコ、アルバニイが四季の圖の前に來ぬ。われは昔穉かりし日にこゝに遊び、この圖の中なる羽ある童を見て感ぜし時の事を語りぬ。姫は君が穉くて樂しき日を送り給ひしこそ羨ましけれといひて、憂をかくすやうなるさまなり。昔の身の上にや思ひ比べけむと、あはれに覺ゆ。われ。君とても樂しき日少なからざりしならむ。わが初めて相見しときは、君は幸ありげなるをさな子なりき、人々に感覆られたるをさな子なりき。わが再び相逢ふ日は、羅馬全都の君がために狂するを見る。餘所目には君、まことに樂しく見え給へり。さるを心には樂しとおもひ給はずや。かく問ひつゝ、我は頭を傾けて姫の面を俯し視たるに、姫はそのそこひ知られぬ目なざしもて打ち仰ぎ、そのめでくつがへられたるをさな子は、譬へば父もなく母もなきあはれなる身となりぬ、木葉落ち盡したる梢にとまる小鳥の如し、そを籠の内に養ひしは世の人にいやしまれ疎まるゝ猶太教徒なり、その翼を張りておそろしき荒海の上に飛び出でたるはかの猶太教徒の惠なりといひかけて、忽ち頭を掉り動かし、あな無益なる詞にもあるかな、由縁なき人のをかしと聞き給ふべき筋の事にはあらぬをといふ。由縁なき人とはわれかと、姫の手首とりてさゝやくに、暫しあらぬ方打ち目守りてありしが、その面には憂の影消え去りて、微笑の波起りぬ。否々、われも樂しかりし日なきにあらず。その樂しかりし日をのみ憶ひてあるべきに、君が昔語を聞きて、端なくもわが心の裡に離られたる圖を繰りひろげつゝ、身のめぐりなるめでたき畫どもを忘れたりとて、姫は我に先だちて歩を移しき。

わがアヌンチヤタと老媼とを伴ひて旅館にかへりしとき、門守る男はベルナルドオが留守におとづれしことを告げたり。我友はこの男の口より二婦人を連れ出だしゝもの、我なるを聞けりといふ。友の怒は想ふに堪へたり。かゝる

事あるごとに、我は前の日には必ず氣遣ひ憂ふる習なりしが、アヌンチヤタに對する戀は我に彼女に抗する心を生ぜしめき。さきには女我を性格なし、意志なしと罵りき。今はわれ女に見すに我性格と我意志とをもてすべしとおもひぬ。

　姫が猶太教徒の籠の内に養はれきといふ詞は、絶ず我耳の根にあり。依りておもふに、女がハノホの許にて見きといふ少女はアヌンチヤタなりしならむ。されど又姫にそを問ふ機會あるべきか、心許なし。

　あくる日往きしときは、姫は一間にありて某の役を浚ひ居たり。われはおうなに物言ひこゝろみしに、この人はおもひしよりも耳疎かりき。されどそのさま我が詞を交ふるを喜べる如し。われは前の日即興の詩を歌ひしとき、この人の嬉み聽けるさまなりしをおもひ出でゝ、その故をたづねしに、あやしとおもひ給ひしも理りなり。君の面を見、君の詞の端々を聞きて、おほよそに解したるなり、さてその解したるところはいとめでたかりき。平生アヌンチヤタが歌うたふを聽くときも亦同じ、耳の遠くなりゆくまゝに、目もて人の聲を聞くすべをば、やうやう養ひ成せりといふ。媼はベルナルドオが上を問ひ、そのきのふ留守の間におとづれて、共に畫廊に往くこと能はざりしを惜みき。われ媼がベルナルドオを喜べるゆゑを問ふに、かの人の心ざまには優れたるふしあり、われその證を見しことあればよく知りたり、猶太の徒も基督の徒も、神の目より視ば同じかるべければ、彼人の行末を護り給ふならむといふ。やうやくにして媼はことば多くなりぬ。その姫を愛でいつくしむ情はいと深しと見えたり。物語のはし〴〵より推するに、姫が過ぎ來し方のおほかたは明かになりぬ。姫は西班牙に生れき。父も母も彼國の人なり。穉くて羅馬に來つるに、ふた親はやく身まかりて、頼るべき方もなし。猶太の翁ハノホは西班牙に旅せしころ、彼親達を識りつれば、孤兒を引き取りて養へりしに、故ある某の貴婦人あはれがりて迎へ歸り、音樂の師に就きて學ばしめき。その頃某の貴公子この若草手に摘まばやとてさま〴〵のてだてを盡しゝに、姫の餘りにつれなかりしかば、公子その恨にえたへで、果はおそろしき計をさへ運らしつ。その始末をば媼深く祕めかくす樣なれど、姫の命も危かるべき程の事なりきとぞ。姫は彼公子に索ね出されじとて、再び羅馬に逃れ來たり。かくて昔のやしなひ親にたよりて、人目少き猶太廓に潛み居たるは、一年半ばかり前の事といへば、ベルナルドオが逢ひしは此時なり。幾もなくして彼公子身まかりぬ。姫はこれより一身をミネルワの神（藝術の神）に捧げまつりて、その始て桂冠を戴きしはナポリにての催しなりき。媼はその頃より姫のほとりを離れずといふ。語り畢りて媼は、姫の才あり智ありて、敬神の心いよ〳〵深きを稱ふること頻りなりき。

　旅館を出でしは祝射の眞盛なりき。玄關よりも窓よりも、小銃拳銃などの空射をなせり。こは精進日の終を告ぐるなり。寺々の壁畫を覆へる黑布をば、此聲とゝもに截りて落すなり。鬱陶しき時はけふ去りて、蘇生祭のうれしき月はあすよりぞ來るなる。その嬉しさはアヌンチヤタと媼とを祭見に誘ひ得たるにて、又一層を加へたり。

蘇生祭

祭の鐘は鳴りわたれり。僧官を載せたる彩車は聖ピエトロの寺に向ひて馳りゆく。車の後なる踏板には、式の服着たる僮僕あまた立てり。外國人の車馬、ところの子女の裙屐に、狹き巷の往來はむづかしき程になりぬ。神使の丘

の巓には、法皇の徽章、聖母の肖像を染めたる旗閃き動けり。ピエトロの辻には樂人の群あり。道の傍には露肆をしつらひて、もろ手さし伸べたる法皇授福の木板畫、念珠などを賣りたり、噴水の銀線は日にかゞやけり。柱弓の下には榻あまた置きたるに、家の人も賓客も居ならびたり。群衆は忽ち寺門より漲り出でたり。供養の儀式饗樂を見聞き、磔柱の鐵釘、長槍などありがたき寶物を拜み得しなるべし。廣き十字街は人の頭の波打ちて、車は相倚りて隙間なき列をなせり。偷父少童には石像の趺に攀ぢ上れるあり。全羅馬の生活の脈は今此辻に搏動するかと思はる。既にして法皇の行列寺門を出づ。藍色の衣を纏へる僧六人に舁かせたる、華美なる手輿に乘りたるは法皇なり。若僧二人大なる孔雀の羽もて作りたる長柄の翳を取りて後に隨ひ、香爐搖り動かす童子は前に列びてぞゆく。輿に引き添ひて歩めるは僧官達なり。行列の門を出づるや、樂隊は一齊に聲を揚ぐ。輿を大理石階の上に舁き上げて、法皇の姿廊の上に見ゆるを相圖として、廣き辻なる老若の群衆は跪けり。隊伍をなせる兵士もこれに倣へり。こゝかしこに立てる人の殘りしは、新教を奉ずる外國人なるべし。アヌンチヤタは停めたる車の内に跪きて、その美しき目を法皇の面に注けり。われは見るべからざる法雨のこの群の上に降り灑ぐを覺えき。廊の上より紙二ひら翻り落つ。一は罪障消滅の符、一は怨敵調伏の符なり。衆人はその片端を得むとてひしめきあへり。鐘の音再び響き、奏樂又起りぬ。われ等の乘れる車の此辻を離るゝとき、ベルナルドオが馬、側を過ぎたり。馬上の友はアヌンチヤタと媼とに禮して、我をば顧みざりき。姫は君が友の色の蒼さよ、病めるにあらずやとさゝやきぬ。われはたゞさることはあらざるべしと答へしが、我心は明に友の面色土の如くなりし所以を知りたり。而してわれは我決心の期到れるを覺えき。

わが姫を慕ふ情は甚だ深し。姫にしてわれを棄てずば、我は一生を此戀に委ぬとも可なり。われは嘗て我才の戲場に宜くして、我吭の喝采を博するに足るを驗し得たれば、一たび意を決して俳優の群に投ぜば、多少の發展を見むこと難からざるべし。ベルナルドオ畢竟何爲者ぞ。その年ごろ姫に近づかむとする心にして、公正なる情ならば、われ決してこれが妨碍をなさじ。友と我との間に擇ばむけ、一にアヌンチヤタが寸心に存ず。姫我を取らば友去れかし。友を取らば我退かむ。この日われは机に對ひて書を裁し、これをベルナルドオが許に寄せたり。筆を落すに臨みて舊情を喚び起せば、不覺の涙紙上に迸りぬ。發送せし後は心やゝ安きに似たれど、或は姫を失はむをりの苦痛を想ひ遣りて、プロメテウスの鷲の嘴に刺さるゝ如き念をなし、或は姫に許されて戲場を雙棲のところとなさむ日の樂、奈何なるべきと思ひ浮べて、獨り微笑を催すなど、ほと〳〵心亂れたる人に殊ならざりき。

燈籠、わが生涯の一轉機

夕の勤行の鐘響く頃、姫と媼とを伴ひて御寺の燈籠見に往きぬ。聖ピエトロの伽藍には中央なる大穹窿、左右の小穹窿、正面の簷端、悉く透き徹りたる紙もて製したる燈籠を懸け連ねたるが、その排置いと巧なれば、此莊嚴なる大厦は火焔の輪廓もて青空に畫き出されたるものゝ如くなり。人の群れ集へること、晝の祭の時にも增されるにや、車をば並足にのみ曳かせて、僅に進む事を得たり。神使の橋の上より、御寺の全景を眺むるに、燈の光は黄なるテエエル河の波を射て、遊び嬉む人の限を載せたる無數の舟を照し、爰に又一段の壯觀をな

せり。樂の聲、人の歡び呼ぶ聲の滿ちわたれるピエトロの廣こうぢに來りし時、火を換ふる相圖傳へられぬ。御寺の屋根々々に分ち上したる數百の人は、一齊に鐵盤中なる松脂環飾に火を點ず。小き燈のかず〳〵忽ち大火焔と化したる如く、この時聖ピエトロの寺は羅馬の大都を照すこと、いにしへベトレヘムの搖籃の上に照りし星にもたとへつべきさまなり。(原註。寺院もそのめぐりなる家屋も、皆石もて築き立てたるものなれば、この盤中の火は松脂の盡くるまで燃ゆれども、火災あるべきやうなし。)群衆の歡び呼ぶ聲はいよ〳〵盛になりぬ。アヌンチヤタこの活劇を眺めたるが、遽に我に向ひていふやう。かの大穹窿の上なる十字架に火皿を結び付くる役こそおそろしけれ。おもひ遣るに身の毛いよ竪つ心地す。われ。げに埃及の尖塔にも劣らぬ高さなり。かしこに攀ぢしむるには膽だましひ世の常ならぬ役夫を選むことにて、預め法皇の手より香油の禮を受くと聞けり。姫。さてはひと時の美觀のために、人の命をさへ賭するなりしか。われ。これも神德をかゞやかさむとての業なり。世には卑しき限の事に性命を危くする人さへ少からず。かく語るうち、車の列は動きはじめたり。人々はモンテ、ピンチヨオの頂にゆきて、遙かにかゞやく御寺と其光を浴むる市とを見むとす。われ重ねて。御寺に光を放たせて、都の上に照りわたらしむるは、いとめでたき意匠にてコルレジヨオが不死の夜の傑作も、これよりや落想しつるとおもはる。姫。さし出がましけれど、そのおん說は時代たがへり。彼圖は御寺に先だちて成りたり。作者は空に憑りて想ひ得しなるべく、又まことに空に憑りて想ひ得たりとせむかた、藍本ありとせむよりめでたからむ。モンテ、ピンチヨオは餘りに雜遝すべければ、やゝ遠きモンテ、マリヨへ往かばや。こゝより市門まではいと近ければといふ。われは馭者に命じて、柱廊の背後を廻らしめ、幾ほどもなく市外に出でたり。丘の半腹なる酒店の前に車を停めて見るに、穹窿の火の美しさ、前に見つるとはまた趣を殊にして、正面の簷こそは隱れたれ、星を聯ねたる火輪の光の海に漂へるかとおもはる。この景色は四邊のいと暗くして、大空なるまことの星の白かねの色をなして、高く隔たりたる處に散布せるによりて、いよ〳〵その美觀を添へ、人をして自然の大なるすら羅馬の蘇生祭には步を讓りたるを感ぜしむ。鐘の響、樂の聲はこゝまでも聞えたり。

われは車を下りて、些の稍事を買はゞやと酒店の中に入りぬ。店の前には狹き廊ありて、小龕に聖母を崇きまつり、さゝやかなる燈を懸けたり。わが店を出でむとて彼龕の前に來ぬるとき、忽ちベルナルドオが吾前に立ち塞がりたるを見き。その面の色は、むかし「ジエスヰタ」派の學校のこゝろみの日に、桂冠を受け戴きしをりに殊ならず。眼は熱を病める如くかゞやけり。物狂ほしく力を籠めて我臂を握り、あやしく抑へ鎭めたる聲して、アントニオ、われは卑しき兇行者たらむを嫌へり、然らずは直ちに此劍もて汝が僞多き胸を刺すならむ、汝は臆病ものなれば辭まむも知れねど、われは强ひて潔き決鬪を汝に求む、共に來れといふ。われは把られたる臂を引き放さむとすまひつゝ、ベルナルドオ、物にや狂へると問ふに、友は焦燥つ聲を抑へて、叫ばむとならば叫べ、男らしく立ち向ふ心なくば、人をも呼べ、この兩腕の縛らるゝ迄には、汝が息の根とめでは置かじ、兵はこゝにあり、我に恥ある殺人罪を犯させじとおもはゞ疾く來れといひつゝ、拳銃一つ我手にわたし、われを廊の外に拉き行かむとす。われは渡與されたる拳銃を持ちながら、猶身を脫せむとして爭へり。友。彼君は淺はかにも汝

に靡きしならむ。汝は誇らしくも、そを我に、そを羅馬の民に示さむとす。われを出し抜きしは猶忍ぶべし。いかなれば我に弔辭めきたる書を贈りて、重ねて我を辱めたる。われ。ベルナルドオ、そは皆病める人の詞なり。先づその手を弛めずや。われは力を極めて友の體を撥ね退けたり。

その時われは銃聲の耳邊に轟くを聞きたり。我右臂には衝動を感じたり。烟は廊道に滿ちたり。われは又叫ぶに似て叫ぶにあらざる一種の氣息を聞きたり。この氣息の響は我耳を襲ふよりは寧ろ我心を襲ひき。發したるは我手中の銃にして、黑く敷石を染めたる血に塗れて我前に横はれるは我友なり。われは喪心者の如く凝立して、拘攣せる五指の間に牢く拳銃を攫みたり。

わが此不慮此不幸の全範圍を感ぜしは、酒店の人の罵り噪ぎつゝ走り寄りアヌンチヤタと媼との我前に來るを見し時なりき。わがベルナルドオと叫びて、その軀に抱き付かむとするに先だちて、姫は早くもその傍に跪き、鮮血湧き出づる創口を押へたり。姫はかく我友をいたはりつゝ、血の色全く失せたる面を擧げて、我を凝視せり。媼は我臂を搖り動かして、疾く此場を去れと呼べり。

われは胸裂くるが如き苦痛を覺えき。われは叫び出せり。思ひ掛けぬ怪我なり。殺さむと欲せしは他なり。銃は他の我にわたしゝなり。われは身を脱せむとして撥條に觸れたり。アヌンチヤタ聞き給へ。我等二人は命に懸けて君を慕ひしなり。君がために血を流さむことは、われも厭はざるべきこと、我友と同じ。われはおん身が一言を聞きて去らむ。おん身は我友を愛し給ひしか、我を愛し給ひしか。

友の介抱に餘念なき姫は、詞のあやもしどろに、疾く往き給へといひて手を揮りたり。姫は往き給へと繰反したり。われは心もそらに再び、友なりしか我なりしかと叫びたり。

その時われはアヌンチヤタが友の上に俯して脣をその額に觸るゝを見、その聲を呑みて微かに泣くを聞きたり。

次第に集りたる衆人の中より、忽ち邏卒々々と呼ぶ聲を聞けり。われは目に見えぬ幾條の腕もて拉き去らるゝ心地して、此場を遁れたり。

基督の徒

愛せられしは友なり。この一條の毒箭は我渾身の血を濁して、人を殺せり友を殺せりといふ悔悟の情の頭を擡ぐるをさへ妨げむとす。灌木雜草を踏みしだき、棘に面を傷られ、梢に袖を裂かれつゝも、幾畝の葡萄畠を限れる低き石垣を乘り越え乘り越え、指すかたをも分かでモンテ、マリヨの丘を走り下るに、聖ピエトロの御寺の火は、昔カインの奔りしとき、同胞の軀を供へたる贄卓の火のゆくてを照しゝ如くなり。(譯者云。カインは亞當が第一の子にして、弟を殺して神に供へき。)この間幾時をか經たる、知らず。わが足を駐めしは、黃なるテエエルの流の前を遮るを見し時なりき。羅馬より下、地中海の荒波寄するあたりまで、この流には橋もなし、また索むとも舟もあらざるべし。この時我は我胸を噬む卑怯の蛆の、兩斷せらるゝを覺えしが、そは一瞬の間の事にて、蛆は忽又蘇りたり。われは復たいかなる決斷をもなすこと能はざりき。

われはふと首を回らしてあたりを見しに、我を距ること數步の處に、故墳の址あり。むかしドメニカが許に養はれし時、往きて遊びし家に比ぶれば、大さは倍して荒れたることも一入なり。頽れ墜ちたるついぢの石に、三頭の馬を繫ぎたるが、皆おの〳〵頸下に吊りたる一束の芻を嚙めり。

墓門より下ること二三級なる窪みに、燃え殘りたる焚火を圍める三個の人物あり。その火影の早く我目に映らざりしにても、我が慌てたるを知るに足るべし。火の左右に身を横へたる二人は、逞ましげに肥えたる農夫なるが、毛を表にしたる羊の裘を纏ひ、太き長靴を穿き、聖母の圖を貼けたる尖帽を戴き、短き烟管を銜みて對ひあへり。第三個は鼠色の大外套にくるまり、帽をまぶかに被りてついぢに靠りかかりたるが、その身材はやゝ小く、瓶を口にあてゝ酒飲み居たり。

わが渠等を認めしとき、渠等も亦我を認めき。肥えたる二人は齊しく銃を操りて立ち上りたり。客人は何の用ありてこゝに來しぞ。われ。舟をたづねて河をこさむとす。三人は目を合せたり。甲。むづかしきたづねものかな。挈げ持ちて旅するものは知らず、こゝ等には舟も筏もなし。乙。客人は路にや迷ひ給ひし。こゝは物騷なる土地なり。デ、チェザアリが夥伴は遠き處まで根を張れば、法皇はいかに鋤を揮り給ふとも、御腕の痛むのみなり。甲。客人はなどて何の器械をも持ち給はぬ。見られよ。この銃は三連發なり。爲損じたるときの用心には腰なる拳銃あり。丙。この小刀も馬鹿にはならぬ貨物なり。（かの身材小さき男は冰の如き短劍を拔き出だして手に持ちたり。）乙。早く鞘に納めよ。年若き客人は刃物は嫌ひなるべし。客人、われ等に逢ひ給ひしは爲合せなり。若し惡棍などに逢ひ給はゞ、素裸にせられ給はむ。金あらば我等にあづけ給へ。

われは今三人の何者なるかを知りたり。我五官は鈍りて、我性命は價なきものとなりぬ。諸君よ、わが持てる限の物をば、悉く贈るべし、されどおん身等を驚かしむるに足らざることそ氣の毒なれと答へて、われは進寄りつゝ、手を我衣兜にさし籠みたり。われは兜兒の中に猶盾銀二つありしを記したり。而るに我手に觸れたるは、重みある財布なりき。抽き出して見れば、手細の女ものなるが、その色は曾てアヌンチヤタが嫗の手にありしものに似たり。落人の心根こそやさしけれ。三人ひとしくさし伸ぶる手を待たで、われは財布の底を攫みて振ひしに、焚火に近き圓石の上に、こがねしろかね散り布けり。眞物ぞと呼びつゝ、人々拾ひ取りて、勿體なき事かな、盜人などに取られ給はゞいかにし給ふといふ。われ。貨物はそれ丈なり。疾く我命を取り給へ。生甲斐なき身なれば毫しも惜しとはおもはず。甲。思ひも寄らぬ事なり。我等はロッカ、デル、ハアパに住める正直なる百姓仲間なり。同じ教の人を敬ふ基督の徒なり。酒少し殘りたり。これを飲みて、かく怪しき旅し給ふ事のもとを明し給へ。われ。そはわが祕事なり。かく答へて我は彼瓶を受け、燥きたる咽を潤したり。

三人は何事をかさゝやきあひしが、小男は嘲み笑ふ如き面持して我に向ひ、煖き夕のかはりに寒き夜をも忍び給へといひて立ちぬ。渠は驅歩の蹄の音をカムパニアの廣野に響かせて去りぬ。甲。いざ客人、船を待ち給はむは望なき事なり。我馬の尾に縋りて泅がむこともたやすからねば、鞍の半を分けて參らすべし。渠は我を後ざまに馬の背に搔き載せて、おのれは前の方に跨り、水に墜さぬ用心なりとて、太き綱を我胸と肘とのめぐりに卷きて、背中合せにしかと負ひたり。我には手先を動かす餘地だになかりき。逞ましき馬は前脚もて搜りつゝ流に入りしが、水の脇腹に及ぶころほひより、巧に泳ぎて向ひの岸に着きぬ。渠は河ごしは濟みたりと笑ひて、綱を弛むる如くなりしが、こたびは我背を緊しく縛りて、その端を鞍に結びつけ、墜ちなば頸の骨をや

摧き給はむといひて、靴の踵を馬の脇に加ふれば、連なる男も同じく足をはたらかせたり。かくて二匹の馬三個の人は、弦を離れし矢の如く、カムパニアの原野を横ぎりたり。前なる男の長き髪は、風に亂れて我頰を拂へり。頽れたる家の傍、斷えたる水道の柱弓の畔を、夢心に過ぎゆけば、血の如く紅なる大月地平線より轘り出で、輕く白き霧騎者の首を繞りてひらめき飛べり。

山寨

友を殺し、女に別れ、國を去りて、兇賊の馬背に縛められ、カムパニアの廣野を馳す。一切の事、おもへば夢の如く、その夢は又怪しくも恐ろしからずや。あはれ此夢いつかは醒めむ、醒めてこの怖るべき形相は消え淪びなむ。心を鎭めて目を閉づれば、冷なる山おろしの風は我頰を繞りて吹けり。

山路にさしかゝると覺しき時、騎者は背後なる我を顧みて詞をかけたり。程なく大母の蔽膝の下に息らふべければ、客人も心安くおぼせよ。良き馬にあらずや。この頃聖アントニオの祓を受けたり。小童の絹の紐もて飾りて牽き往きしに、經を聽かせ水を灌せられぬれば、今年中はいかなる惡魔の障碍をも免るゝならむ。

岩間の細徑に踏み入る頃、東の天は白みわたりぬ。連なる騎者馬さし寄せて、夜は明けむとす、客人の目疾せられぬ用心に、涼傘さゝせ申さむと、大なる布を頭より被せ、頸のまはりに結びたれば、それより方角だに辨へられず。我身上は今や獵夫に獲られたる獸にも劣れり。されど憂に心昧みたる上なれば、苦しとも思はでせくゞまり居たり。馬の前足は大方仰ぐのみなれど、ともすれば又暫し坂道を降る心地す。茂りあひたる梢は頻りに我頰を掃てり。道なき處をや騎り行くらむ、覺束なし。

久しき後馬より卸して、我を推して進ましむ。かれこれ復た隻語を交へず。狹き門を過ぎて梯を降りぬ。心神定まらず、送迎忙はしき際の事とて、方角道程よくも辨へねど、山に入ること太だ深きにはあらずと思はれぬ。わがその何れの地なるを知りしは、年あまた過ぎての事なり。後には外國人も尋ね入り、畫工の筆にも上りぬ。こゝは古のツスクルムの地なり。栗の林、丈高き月桂の村立ある丘陵にて、今フラスカアチと呼ばるゝ處の背後にぞ、この古跡はあなる。「クラテエグス」、野薔薇などの枝生ひ茂りて、重圈をなせる柵列の石級を覆へり。山のところ〴〵には深き洞穴あり、石の穹窿あり。皆草叢に掩はれて、迫り視るにあらでは知れ難かるべし。谷のあなたに聳てるはアプルッチイの山にて、沼澤を限り、この邊の景に、物凄き色を添ふ。あはれ此山の容よ。この故址斷礎の間より望むばかり、人を動すことは、またあらぬなるべし。

騎者等の我を拉き往くは、とある洞窟の一つにて、その入口は石楠の枝といろ〳〵なる蔓艸とに隱されたり。我等は足を駐めつ。徐かに口笛吹く聲と共に、扉を開く響す。再び數級の石磴を下る。數人の亂れ語る聲我耳に入りし時、頭に纏へる布は取り除けられぬ。わが身は大穹窿の裏に在り。中央なる大卓の上に眞鍮の燈二つ据ゑて、許多の燈心に火を點じ、逞しげなる大漢數人の羊の裘着たるが、圍み坐して骨牌を弄べり。火光の照し出せる面ざしは、苦みばしりて落ち着きさるたまなり。人々は生面の客あるを見ても、絕て怪み訝ることなく、我に榻を與へて坐せしめ、我に盞を與へて飮ましめ、肴せむとて鹽肉團をさへ截りてくれたり。その相語るを聞くに、方言にて解すべか

らず。されど我上に關はざる如くなりき。
我は飢を覺えずして、たゞ燃ゆる如き渇を覺えしかば、酒を飲みつゝ四邊を見たり。隅々には脫ぎ棄てたる衣服と解き卸したる兵器とあるのみ。一角に竈の如く窪みたる處あり。その天井には半ば皮剝ぎたる兎二つ吊り下げたり。初め心付かざりしが、その窪みたる處には一人の坐せるあり。年老いたる媼の身うち痩せ細りたるが、却りて背直にすくやかげなる坐りざまして、あたりに心留めざる如く、手はゆるやかに糸車を廻せり。銀の如き髮の解けたるが、片頰に墜ちかゝりて、褐色なる頸のめぐりに垂るゝを見る。その墨の如き瞳は、とこしへに苧環の上に凝注せり。焚きさしたる炭の半ば紅なるが、媼の座の畔にちりぼひたるは、妖魔の身邊に引くといふ奇しき圈とも看做さるべし。まことに是れ一幅クロトの活畫像なり。（譯者云。古說に三女ありて人生運命の泰否を掌る。性命の絲を繰るをクロトと曰ひ、これを撮みたるをラヘシスと曰ひ、これを斷つをアトロポスと曰ふ。姉妹神なり。）
人々の我事にかゝづらはざりしは、久しからぬ程なりき。忽ち糾問は始まりぬ。職業は何ぞ、資産ありや否や、親戚ありや否や抔いふことなりき。我は徐かに答へき。わが帶び來たるところのものをば、最早君等に傾け贈りぬ。かくてこの身はやうなき貨となりぬ。縱ひ羅馬わたりに持ち往きて沽らむとし給ふとも、盾銀一つ出すものだにあらじ。廉ある生活の業をも知らず。頃日は拿破里に往きて、客に題をたまはりて、即座に歌作りて謠はむと志したり。斯く語るついでに、われはこたび身を以て遁れたる事のもとさへ、包み藏さずして告げぬ。唯ゞアヌンチヤタが上をば少しも言はざりき。さてわが物語の終は、この上殊なる望なければ、この身を官府に引き渡して、褒美にても受け給へといふことなりき。
一人の男のいはく。さりとては珍らしき望なるかな。想ふに羅馬市には、黃金の耳環を典して、客人を贖ひ取ることを吝まざる人あるならむ。拿破里の旅稼は、その後の事とし給はむも妨あらじ。さはあれ强ひて直ちに拿破里に往かむとならば、あぶなげなく疆を越させ申さむことも、亦我等の手中に在り。留りて此樂園に居らむとならば、それも好し。こゝに在るは善き人々なるをば、客人も夙く悟り給ひしならむ。されど此等の事思ひ定め給はむには、先づ快く一夜の勞を醫し給ふに若かず。こゝに住き牀あり。それのみならず、來歷ある好き衾をも借し參らせむ。哭風吹く頃の夕立をも、雪ふぶきをも凌ぎし衾ぞとて、壁よりはづして投げ掛くるは、褐色なる大外套なり。牀といふは卓の一端の地上に敷ける藁蓆なり。その男は何やらむ一座のものに言置き、「チ　センチイ、オオ、ミア、ベッチイナ」（降り來よ、やよ、我戀人）と俚歌口ずさみて出行きぬ。

血書

われは眠ることを期せずして、身を藁蓆の上に僵しゝに、前の日よりの恐ろしき經歷は魘夢の如く我心を壓し來りぬ。されど氣疲れ力衰へたればにや目瞼おのづから合ひ、いつとは知らず深き眠に入りて、終日復た覺むることなかりき。
醒めたる時は心地爽かになりて、前に心身を苦めつる事ども、唯ゞ是れ一場の夢かと思はるゝ程なりき。然はれそは一瞬の間にして、身の在るところを顧み、四邊なる男等の顰みたる顏付を見るに及びては、我魘夢の儼然として動すべからざる事實なるを認めざることを得ざりき。
一客あり。灰色の外套を偏肩に引掛け、腰に

拳銃を帶びたるが、馬に騎りたる如く長椅に跨りて、男等と語れり。穹窿の隅の方には、彼の雜種いろしたる老女の初の如く坐して繰車まはせるあり。黑地に畫ける像の如し。座のめぐりには、新き炭を添へて、その煖氣は室に滿ちたり。われは客の、彈は脇を擦過りたり、些の血を失ひつれど、一月の間には治すべしといふを聞き得たり。

わが頭を擡けしを見て、われを鞍に縛せし男のいふやう。客人醒め給ひしよ。十二時間の熟睡は好き保養なるべし。こゝなるグレゴリオは羅馬より好き信をもて來たり。そは、おん身の喜び給ふべき筋の事なり。手を下しゝはおん身に極つたり。時も所も符を合す如し。驕りたる評議廳の官人は、おん身がために、容赦なくその長裾を踏まれぬと見えたり。お身の大膽なる射撃に遭ひしは、評議官の從子なりき。これを聞きてわれは俄に、命にはさはらずやと問ふことを得き。グレゴリオの云はく。先づ死なで濟むべし。醫者は然云ひきとぞ。鶯の如き吭ありといふ、美しき外國婦人の夜を徹して護り居たるに、醫者は心を勞し給ふな、本復疑なしといひきとぞといふ。我を伴ひ來し男の云はく。われおもふに、君は男の身を錯り射給ひしのみにあらず。女の心をも亦錯り射給ひしなり。雌雄は今雙び飛ぶべし。君は唯ゝここに在せ。自由なる快活なる生計なり。君は小なる王者たることを得べし。而してその危さは決して世間の王位より甚しからず。酒は酌めども盡きざるべし。女は君を欺きし一人の代りに、幾人をも寵し給へ。同じく是れ生活なり、餘瀝を嘗むると、滿椀を引くと、唯ゝ君が選み給ふに任すと云ひき。

ベルナルドオは死せず。我は人を殺さず。この信は我がために起死の藥に侔しかりき。獨りアヌンチヤタを失ひつる憂に至りては、終に排するに由なきなり。われは猶豫することなく答へき。我身は只君等の處置するに任すべし。されどわが嘗て受けし敎と、現に懷ける見とは、俘囚たるにあらずして、君が間に伍すべきやうなし。これを聞きて、我を伴ひ來し男の顏は、忽ち嚴なる色を見せたり。盾銀六百枚は定まりたる身のしろなり。そを六日間に拂ひ給はば、君は自由の身なるべく、さらずば君が身は、生きながらか、殺してか、我物とせではおかじ。こは此處の掟なれば、君が紅顏も我丹心も、寛假の緣とはならぬなるべし。六百枚なくば、我等の義兄弟となりて生きむとも、彼處なる枯井の底にて、相擁して永く眠れる人々の義兄弟となりて終らむとも、二つに一つと思はれよ。身のしろ求むる書をば、友達に寄せ給はむか、又彼歌女に寄せ給はむか。おん身の一撃媒となりて、二人はその心を明しあひつれば、さばかりの報恩をば、喜びてなすなるべし。斯く語りつゝ、男は又から〱と笑ひて云ふ。廉き價なり。この宿の客人に、還錢のかく迄廉きことは、その例少からむ。都よりの馬のしろ、六日の旅籠を思ひ給へ。われ。我志をば既に述べたり。我はさる書をも作らざるべく、又君等が夥伴にも入らざるべし。男。さてさて強情なる人かな。されどその強情は憎くはあらず。我彈丸の汝が胸を貫かむまでも、その心をば讚めて進ずべし。命惜まぬ客人よ。生くといふには種々あり。少年の心は物に感じ易しといふに、吾黨がかく累なく障なき世渡するを見て、羨ましとは思はずや。そが上おん身は詩人にて、即興詩もて口を糊せむといふにあらずや。吾黨の自由不羈の境界を見て心を動かすことはなきか。客人試みに此境界を歌ひ給へ。題をば巖穴の間なる不撓の氣象とも曰ふべきならむ。客人若しこれを歌はゞ、彼生活といひ性命といふものゝ、樂む可く愛す可きを說かざ

ることを得ぬなるべし。その杯を傾けて、歌ひて我等に聽せ給へ。出來好くば六日の期を一日位は延ばすべしといふ。男は手をさし伸べて、壁上なる「キタルラ」を取りて我に授けつ。賊の群は立ちて我席を繞りたり。

われはそを把りて暫く首を傾けたり。課する所の題は巖穴山野にて、こは我が曾て經驗せざるところなり。前の夜こゝに來し時は、目を掩はれたれば甲斐なし。昔見しところを言はゞ、羅馬のボルゲエゼ、パムフイリの兩苑に些の松林ありしに過ぎず。まことの山とては、幼かりし程ドメニカが家の窓より望みしより外知らず。已むことなくば只ゞ一たび山を見き。ジエンツアノの花祭に往きし途すがらの事なり。ネミ湖畔の高原を歩みしに、道は暗く漸けき森林の間を通じたり。彼祭はわが爲には悲き祭なりければ、湖畔の道にて花束つくりしことをさへ、今猶忘れでありしなり。景は心目に上り來れり。今かく物語する時間の半をだに費さずして、景は情を生じ、情は景を生ずるほどに、我は絃を掻きたり。情景は言の葉となり、言の葉は波起り波伏す詩句となりぬ。且我が歌ひしところを聽け。深き湖あり。暗き林はそを環れり。湖の畔なる巖は聳ちて天を摩せむとす。こゝに暴鷲の巢あり。母鳥は雛等に教へて、穉き翼を振はしめ、またその目を鋭くせむために、日輪を睨ましめき。扨母鳥の云ひけるやう。汝達は諸鳥の王なるぞ。目は利く、拳は強し。いでや飛べ。飛びて母の側を去れ。我目は汝を送り、我情は彼の死に臨める大鵝の黄舌の如く汝が上を歌ふべし。その歌は不撓の氣力を題とせむといひき。雛等は巢立せり。一隻は翅を近き巖の頂に斂めて、晴れたる空の日を凝矚すること、其光のあらむ限を吸ひ取らむと欲する如くなりき。一隻は高く虛空に翔りて、大圏を畫し、林樾沼澤を下瞰するが如くなりき。岸に近き水面には緑樹の影を倒せるありて、その中央には碧空の光を蘸すを見る。時に大魚の浮べるあり。その背は覆へりたる舟の如し。忽ち彼雛鷲は電の撃つ勢もて、さと卸し來つ。刃の如き利爪は魚の背を攫みき。母鳥は喜、色に形れたり。然るに鳥と魚とは力相若くものなりければ、鳥は魚を舉ぐること能はず、魚は鳥を沈むること能はず、打ち込みたる爪の深かりしために、これを拔かむとするも、亦意の如くならず。こゝに生死の爭は始まりぬ。今まで靜なりける湖水の面は、これがために搖り動され、大圏をなせる波は相重りて岸に迫れり。既にして波上の鳥と波底の魚と、一齊に鎭まり、鷲の翼の水面を掩ふこと蓮葉の如くなりき。忽ち隻翼は又聳ち起り、竹を割く如き聲と共に、一翼はひたと水に着き、一翼は劇しく水を鞭ち沫飛ばすと見る間に、鳥も魚も沈みて痕なくなりぬ。母鳥は悲鳴して、巖角なる一隻の雛を顧みるに、こもいつか在らずなりて、首を仰いで高く望めば、只ゞ一黑斑の日に向ひて飛ぶを見き。母鳥は悲を轉じて喜となしたり。その胸は高く躍りて、その聲は折るれども撓まぬ力を歌ひぬ。我歌はこゝに終り、喝采の聲は座に滿ちぬ。獨り我は瞬きもせで、龕の前なる老女をまもり居たり。そは我が歌ひて半に至りし時、老女の絲繰る手やうやく緩く、はては全く歇みて、暗き瞳の光は我面を穿つ如く、こなたに注がれたればなり。又我が能く少時の夢を喚び起して、この詩中に入るゝことの、かくまで細かなることを得しは、この老女の振舞與りて力ありければなり。

媼は忽ち身を起し、健かなる歩みざまして我前に來て云ふやう。能くも歌ひて、身のしろを贏ち得つるよ。吭の響はやがて黄金の響ぞ。鳥と魚との水底に沈みし時にこそ、この嫗は汝が星の譃るところを見つれ。鷲よ。いで日に向

ひて飛べ。老いたる母は巣にありて、喜の日もてこそを見送らむとす。汝が翼をば、誰にも折らせじといふ。我に勸めて歌はせし男、恭しく媼の前に礑頭きて、さてはフルヰアの君は此わからうどを見給ひしことあるか、又その歌を聞き給ひしことあるかと問ひぬ。媼。そは汝の知らぬ事なり。われは早く幸運の兒の身の光と眼の星とを見き。兒はむかし花の環を作りぬ。後又愈々美しき花の環を作るならむ。その臂を縛むべきことかは。六日が程は巣にあれかし。背に爪打ち込みしにはあらず。六日立たば、汝この雛を放ち遣りて、日の邊へ飛ばしめよ。斯くつぶやきつゝ、媼は壁の前なる筐を探りて、紙と筆とを取り出でつ。あな、やくなし。墨は巖の如くなりぬ。コスモよ。人の上のみにはあらず。汝が腕の血を與れずやといふ。コスモと喚ばれし彼男は、一語をも出さで、刀を拔きて淺くその膚を減りたり。媼はその血に筆を染めて我にわたし、「往拿破里」と書して名を署せしめて云ふ。好し好し、法皇の封傳に劣らぬものぞとて、懷にをさめつ。傍なる一人の男、その紙何の用にか立つべきとつぶやきしに、媼目を見張りて、虹のもの言はむとするにや、大いなる足の蹂躙らむを避けよといふ。コスモは首を低れて不敢〱汝の命は神璽靈寶にも代へじといひき。人々と媼との物語はこれにて止み、卓を圍める一座の興趣は漸くに加はりて、瓶は手より手にと忙はしく遣り取りせらるゝこととなりぬ。さて食を供するに至りて、賊の中にはわが肩を敲きて、皿に肉塊を盛りて與るゝもありき。唯ゝ彼媼は故の如く、室隅に坐して、飲食の事には與らざりき。賊の一人は火をその座のめぐりに添へて、大母よ、汝は凍ゆるならむといひき。我は媼の詞につきて熟ゝおもふに、むかし母とマリウチアとに伴はれて、ネミ湖畔に花束作りし時、わが上を占ひしことあるは此媼なりしなるべし。我運命の此媼の手中にありと見ゆること、今更にあやしくこそ覺えらるれ。媼はわれに往拿破里と書かしめき。こは固より我が願ふところなり。されど封傳なくして、いかにして拿破里には往かるべきぞ。又縱令かしこに往き着かむも、識る人とては一人だに無き身の、誰に賴りてか活をなさむ。前にはわれ一たび即興詩もて世を渡らむとおもひき。されど羅馬にて人を傷けたりと知られむことおそろしければ、舞臺に出づべきこゝろもなし。されど方言をばよく知りたり、聖母のわれを見放ち給ふことだにあらずば、ともかくもして身を立てむと、强ひて安堵の念を起しつ。あはれ、あやしきものは人のこゝろにもあるかな。この時アヌンチヤタが我を卻けて人に從ひし悲痛は、却りて我心を抑し鎭むる媒となりぬ。我がこの時の心を物に譬へて言はゞ、商人のおのが舟の沈みし後、身一つを三版に助け載せられて、知らぬ島根に漕ぎゆかるゝが如しといふべき歟。

かくて一日二日と過ぎ行きぬ。新に來り加はる人もあり、又もとより居たる人の去りていづくにか往けるもあり。ある日彼媼さへ、ひねもす出でゝ歸らざりしかば、我は賊の一人とこの山寨の留守することゝなりぬ。この男は年二十の上を一つばかりも超えたるならむ。顏は卑しげなるものから、美しき髮長く肩に掛かり、その目なざしには、常にいと憂はしげなる色見えて、をり〳〵は又手負ひたる獸などの如きおそろしき氣色現るゝことあり。我と此男とは暫し對ひ坐して語を交ふることなく、男は手を額に加へて物案ずるさまなりしが、忽ち頭を擧げて面をまもりたり。

花ぬすびと

若者はふと思ひ付きたる如く。おん身は物讀

むことを能くし給ふならむ。此卷の中なる祈誓の歌一つ讀みて聞せ給へとて、懷より小き讃美歌集一卷取出でたり。われいと易き程の事なりとて、讀み初めしに、若者の黑き瞳子には、信心の色いと深く映りぬ。暫しありて若者我手を握りて云ふやう。いかなれば汝は復た此山を出でむとするか。人情の詐多きに、山里も都大路も異なることなけれど、山里は爽かに涼しき風吹きて、住む人の少きこそめでたけれ。汝はアリチアの婚禮とサエルリ侯との昔がたりを知るならむ。壻は卑しき農夫なりき。婦は貧しき家の子なから、美しき少女なりき。侯爵の殿は婚禮の筵には新婦が頭の相手となり、宵の間にしばし花園に出でよと誘ひ給へり。壻この約を婦に聞きて、婦の衣裳を纏ひ、婦の面紗を被りて出でぬ。好くこそ來つれと引き寄せ給ふ殿の胸には、匕首の刃深く刺されぬ。これは昔がたりなり。われも此の如き貴人を知りたり。そは某といふ伯爵の殿なりき。又此の如き壻を知りたり。唯々婦は此の如く打明けて物言ふ性ならねば、新枕の樂しさを殿に讓りて、おのれは新婦の通夜することゝなりぬ。刃の詐多き胸を貫きし時、膚は雪の如くかゞやきぬとぞ語りし。

わが心中には畏怖と憐愍と交々起りぬ。われは詞はなくて、若者の面を打まもりしに、若者又云ふやう。彼も一時なり。此も一時なり。われを女の肌知らぬものと思ひ給ふな。英吉利の老婦人ありて、年若き男女と共に、拿破里へ往かむとて、此山の麓を過ぎぬ。我等は此一隊を馬車より拔き卸したり。我等は三人を擒にして、財物を掠め取りつ。少女は若き男の許嫁の婦なりしならむ。顏ばせつやゝかに、目なざし涼しかりき。男をば木に括りたり。女は猶處子なりき。われはサエルリ侯に扮することを得たり。賤びの金屑きて、一群の山を下りし時、少女の顏は色褪せて、目は光鈍りたりき。深山は霧多きけにやあらむ。

この物語にわれは覺えず面をそむけしかば、若者は分疏らしく詞を添へて、されど新教の女なりき、惡魔の子なりきとつぶやきぬ。われ等二人はしばし詞なくして相對へり。若者は今一つ讀み給へと乞ひぬ。われは喜びて又尊き書を開きつ。

封傳

夕ぐれにフルキアの媼歸りて、われに一裹の文書を遞與して云ふやう。山々は濕衾を被きたるぞ。巢立するには、好き折なり。往方は遙なるに、禿けたる巖の面には刺包の木生ふることなし。疾く〳〵拵へよといふ。若者のかひ〳〵しく立ち働きて、忙しげに供ふる饌に、われは言はるゝ儘に飢を凌ぎつ。媼は古き外套を肩に被き、手を把りて暗き廊道を引き出でつゝ云ふやう。我雛鶯よ。汝を守る兵も汝が翼を遮ることとあるまじきぞ。その一裹は尊き神符にて、また打出の小槌なり。おのが資を掘り出さむまで、事闕くことはあらじ。黃金も出づべし、白銀も出づべしといふ。媼は瘦せたる臂さし伸べて、洞門を掩へる蔦蘿の帳の如くなるを推し開くに、外面は暗夜なりき。濕りたる濃き霧は四方の山嶽を繞れり。媼の道なき處を疾く奔るに、われはその外套の端を握りて、やうやう隨ひ行きぬ。木立草むらを左右に看過して、媼は魔神の如くわれを導き去りぬ。

數時の後深き山の峽に出でぬ。こゝに伊太利の澤池にめづらしからぬ蘆小屋一つあり。藤に蘆まぜて、棟より地まで葺き下せり。壁といふものなし。燈の光は低き戸の隙間漏りたり。媼は我を延きて進み入りぬ。小屋の裡は譬へば大なる蜂窩の如くにして、一方口より出で兼ねたる烟に、あたりの物を殘なく眞黑に染めた

り。梁柱はいふもさらなり。籐の一條だに漆の如く光らざるものなし。間の中央に、長さ二三尺、幅これに半ばしたる甎爐あり。炊ぐも煖むるも、皆こゝに火焚きてなすなるべし。炭と灰とはあたりに散りぼひたり。奥に孔ありて小さき間につゞきたるが、そのさま墳墓に小草の附きたる如し。その中には女子一人臥して、二三人の小兒はそのめぐりに横れり。隅の方に立てる驢は、頭を延べて客を見たり。主人なるべし、腰に山羊の皮を卷き、上半身は殆ど赤條々なる老夫は、起ちて媼の手に接吻し、一語を交へずして羊の皮をはふり、驢を門口に牽き出し、手まねして我に騎れと敎へぬ。媼は我に向ひて、カムハニアの馬に勝るべき足どりの駒なり、幸運の門出は今ぞとさゝやきぬ。われはその志の嬉しければ、媼の手に接吻せむとせしに、媼は肩に手を掛け、額髮おし上げて、冷なる脣を我額に當てたり。

老夫は鞭を驢に加へて、おのれもひたと引き添ひつゝ、嘶き徑を馳せ出せり。われは猶媼の一たび手もて揮くを見しが、その姿忽ち重る梢に隱れぬ。心細さに馬夫に物言ひ掛くれば、聞き分き難き聲立てゝ、指を脣に加へたり。さては瘖なるよと思ひぬ。いよ〳〵心もとなくて媼の授けし裹み引き出すに、種々の書ものありと覺ゆれど、夜暗うして一字だに見え分かず。兎角して曉がたになりぬ。路は山の背に出でゝ、裸なる巖には些許りなる蔓草纏ひ、灰色を帶びて綠なる亞爾鮮の葉は朝風に香を送りぬ。空には星猶輝けり。脚下には白霧の遠く漂へるを見る。是れ大澤の地なり。此澤はアルバノ山下に始まりて、北ヱルレトリより南テルラチナに至る。馬夫のしばし步を留めし時、われに仰いで青空の漸く紅に染まりゆきて、山々の色の靑天鵝絨の如くなるを視き。偶ゝ山腹に火を焚くものあり。その黃なる焰は晴天の星の如くなりき。われは覺えず驢背に合掌して、神の恵の大なるを謝したり。

われは漸くにして媼の賜を見ることを得き。その一通の文書は羅馬警察衙の封傳にして、拿破里公使の奥がきあり。旅人の欄には分明に我氏名を註したり。一通は又拿破里ファルコネットオ銀行に振り込みたる爲換金五百「スクヂイ」の劵なり。これに添へたる紙片に二三行の女文字あり。手負ひたる人の上をば、みこゝろ安く思されよ。遠からぬ程に癒ゆべしと申すことに侍り。されどしばらくは羅馬に歸り給はぬこそよろしく侍らめとあり。フルヰアは我を欺かざりき。わがためには、これに增す神符あらじとおもひぬ。

道は少し夷になりぬ。とみれば一群の牧者あり。草を藉きて朝餉たうべて居たり。我馬夫は兼て相識れるものと覺しく、進み寄りて手まねするに、牧者は我等にその食を分たむといふ。水牛の乾酪と麪包とにて飲ものには驢の乳あり。われは快く此の食事をしたゝめしに、馬夫は手まねして別を告げたり。さて牧者のいふやう。この徑を下りゆき給へ。只だ山を左に見て行き給はゞ、小河の流に逆ひ給はむ。そは山より街道に出づる水なり。霧晴れなば、そこより街樹の長く續けるを見給ふならむ。流に沿ひて街樹の方へ往き給はゞ、程なく街道の側なる廢寺の背後に出で給はむ。その寺今は「トルレ、デ、トレ、ポンテ」とて旅籠屋となりたり。日の暮れぬ内にテルラチナに着き給ふべしといひぬ。我は此人々に報せむとおもふに、拿破里にて受取るべき爲換の外には、身に附けたるものなし。されど財布をこそ人にやりつれ、さきに兜兒の裡に入れ置きし「スクヂイ」二つ猶在らば、人々に取らせむものをと、かい探ぐるにあらず。馬夫には領なる絹の紛帨解きて與へ、牧者等と握手して、ひとり徑を下りゆきぬ。

大澤、地中海、忙しき旅人

世の人はポンチネの大澤（パルウデ、ポンチネ）といふ名を聞きて、見わたす限りの曠野に泥まじりの死水をたゝへたる間を、旅客の心細くもたどり行くらむやうにおもひ做すなるべし。こはいたく違へり。その土地の豐饒なることは、北伊太利ロムバルヂアに比べて猶優りたりとも謂ふべく、茂りあふ草は肥えて勢旺なり。廣く平なる街道ありてこれを横斷せり。（耶蘇紀元前三百十二年アピウス、クラウデウスの築く所にして、今猶アピウス街道の名あり。）車にて行かば座席極めて安なるべく、菩提樹の街樹は鬱蒼として日を遮り、人に暑さを忘れしむ。路傍は高葦と水草と、かはる〴〵濃淡の緑を染め出せり。水は井字の溝洫に溢れて、處々の澱みには、丈高き蘆葦、葉濶き睡蓮（ニュムフェア）を長ず。羅馬の方より行けば左に山岳の空に聳ゆるあり。その半腹なる村落の白壁は、鼠いろなる岩石の間に亂點して、城郭かとあやまたる。左は海に向へる青野のあなたに、チルチェオの岬（プロモントリオ、チルチェオ）の隆く起れるあり。こは今こそ陸つゞきになりたれ、古のキルケが島にして、オヂッセウスが舟の着きしはこゝなり。（ホメロスの詩に徴するに、トロヤの戰果てゝ後、希臘イタカ王オヂッセウスこの島に漂流せしに、妖婦キルケ舟中の一行を變じて豕となす、オヂッセウス神傳の藥草にて其妖術を破りぬといふ。）

霧は步むに從ひて散ぜり。睡れる眸の如き溝渠、緑なる氈の如き草原の上なる薄ぎぬは、次第に褰げ去られたり。時はまだ二月末なれど、日はやゝ暑しと覺ゆる程に照りかゞやきぬ。水牛は高草の間に群れり。若駒の馳せ狂ひて、後脚もて水を蹴るときは、飛沫高く迸り上れり。その疾く捷き運動を、畫かく人に見せばやとぞ覺ゆる。左の方なる原中に一道の烟の大なる柱の如く騰れるあり。こはこの地の習にて牧者どものおのが小屋のめぐりなる野を燒きて、瘴氣を掃ふなるべし。

途にて農夫に逢ひぬ。その痩せたる姿、黄ばみし面は、あたりの草木のすくやかに生ひ立てると表裏にて、家を出でたる枯骨にも譬へつべし。驢に騎りて、手に長き槍めきたるものを執れるが、こは水牛を率て返るとき、そを驅り集むる具なりとぞ。げにこゝらの水牛の多きことその幾何といふことを知らず。草むらを見もてゆけば、斗らず黒く醜き頭と光る眼とを認め得て、こゝにも臥したるよと驚くこと間々あり。

道に沿ひて處々に郵亭を設けたり。その造りざま、小きながら三層四層ならぬはなし。こは瘴氣を懼るればなり。亭は皆日曝なれど、礎より簷端迄、緑いろなる薇蕨間なく生ひたり。人も家も、渾べて腐朽の色をあらはして、日暖に草緑なる四邊の景と相容れざるものゝ如し。わが病ある心はこれを見て、つく〴〵人生の艱みがたきを感じたり。

「アヱ、マリア」の鐘響くに先だつこと一時ばかりにして、澤地のはづれに出でぬ。山脈の黄なる巖は漸く迫り近づきて、南國の風光に富めるテルラチナの市は、忽ち我前に横はりぬ。五株の棕櫚樹高く道の傍に立てるが、その實は纍々として葉の間に垂れたり。山腹の果園は黄なる斑紋ある青氈に似たり。その斑紋は檸檬、柑子などの枝たわむ程みのりたるなり。一農家の前に熟し落ちたる檸檬を堆く積みたるを見るに、餘所にて栗など搖りおとして掃き寄するさまと殊なることなし。岩山のはざまよりは、青き迷迭香（ロスマリヌス）、赤き紫羅欄花などの生ひ上りたるが、その巓にはチウダレイクスが廢城の殘壁ありて、猶巍々として雲を

淩げり。（譯者云。東「ゴトネス」族の王なり。西暦四百八十九年東羅馬帝の命を奉じて敵を破り、伊太利を領す。）

我心は景色に撲たれて夢みる如くなりぬ。忽ち海の我前に横はるに逢ひぬ。われは始て海を見つるなり、始て地中海を見つるなり。水は天に連りて一色の琉璃をなせり。島嶼の碁布したるは、空に漂ふ雲に似たり。地平線に近きところに、一條の烟立ちのぼれるは、エズヰオの山（モンテ、エズヰオ）なるべし。沖の方は平なること鏡の如きに、岸邊には青く透きとほりたる波寄せたり。その岩に觸るゝや、鼓の如き音立てゝぞ碎くる。われは覺えず歩を駐めたり。わが滿身の鮮血は蕩け散りて氣となり、この天この水と同化し去らむと欲す。われは小兒の如く啼きて、涙は兩頰に垂れたり。市に大なる白堊の屋ありて、波はその礎を打てり。その下の一層は街に面したる大弓道をなして、その中には數輛の車を竝べ立てたり。こはテルラチナの驛舍にして、羅馬拿破里の間第一と稱へらる。

鞭聲の反響に、近き山の岩壁を動かして、駟馬の車を驛舍の前に駐むるものあり。車座の背後には、兵器を執りたる從卒數人乘りたり。車中の客を見れば、瘦せて色蒼き男の斑に染めたる寢衣を纏ひて、懶げに倚り坐せるなり。駁者は疾く下りて、又二たび三たび其鞭を鳴し、直ちに馬を續ぎ替へたり。さて護衞の士兵ありやと問へば、十五分間には揃ふべしと答へぬ。

こはゆくての山路に、フラア、ヂャヲロ、デ、チェザレの流を汲むものありとて、當時こゝを過ぐる旅客の雇ふものとぞ聞えし。（前者は伊太利大盜の名にして、同胞魔君の義なり。實の氏名をミケレ、ペッツアといふ。千七百九十九年夥伴を率ゐて拿破里王に屬し、佛兵と戰ひて功あり。官職を授けらる。後佛兵のために擒にせられて、千八百六年拿破里に斬首せらる。後者も亦名ある盜なり。）客は英吉利語に伊太利語まぜて、此國の人の心鈍く氣長き爲に、旅人の迷惑いかばかりぞと罵りしが、やうやく思ひあきらめたりと覺しく、大なる紛帨を結びて頭巾となし、兩の耳も隱るゝやうに被り、眼を閉ぢて默坐せり。駁者の語るを聞けば、この英人は伊太利に來てより十日あまりなるべし。北伊太利、中伊太利をばことごとく見果てつ。羅馬をば一日に看盡したり。此より拿破里にゆきて、エズヰオに登り、汽船にて馬耳塞に渡り、南佛蘭西を遊歷すべしとなり。士兵八騎はいかめしく物具して至れり。駁者は鞭を揮へり。馬も車も、忽ち黃なる岩壁にそひたる閭門を過ぎ去りぬ。

一　故人

客舍の前にはたけ矮く逞ましげなる男ありて、車の去るを見送りたるが、手に持てる鞭を揮ひて鳴らし、あたりの人に向ひていふやう。護衞はいかに嚴めしくとも、兵器の數はいかに多くとも、我客人となりて往くことの安穩なるには若かじ。英吉利人ほど心忙しきものはなし。馬はいつも駈歩なり。氣まぐれなる人柄かなと嘲み笑へり。われこれに聲かけて、おん身の車には既に幾位の客人をか得給ひしと問へば、隅ごとに眞心一つなれば、四人は早く備りたり、されど二輪車の中は未一人のみなり。ナポリへと志し給はゞ、明後日は旭日のまだサンテルモ城（ナポリ府を橫斷する丘陵あり、其巓の城を「カステル、サンテルモ」といふ）に刺さぬ間に送り屆け參らすべしと答ふ。爲換ありて現金なき我がためには、此勸めのいと嬉しく、談合は忽ちに纏まりぬ。（原註。伊太利の旅を知らぬ人のために註すべし。彼國の車主は例として前金を受けず、途中の旅籠一切をまかな

ひくれたる上、小使錢さへ、客に交付し、安着の後決算するなり。」

車主は客人も幾錢の御用あるべければとて、五「パオリ」の銀貨一枚摑み出して我に渡しつ。われ。さらば食卓の好き座席と臥床とを賴むなり。明日は滯なく車を出してよ。車主。勿論にこそ候へ。聖アントニオと我馬との思召だにくるはずば、正三時には出で立つべし。されど明日はむづかしき日にて候ふ。稅關の調べ二度、手形の改め三度あるべし。さらば、平かに聽はせ給へとて、車主は手を額に加へ、輕く頷きて去りぬ。

誘はれたる部屋は海に向へり。折しも風輕く起りて、窓の下には長き形したる波の寄せては又返すを見る。こゝの景色はカムハニアの景色とは全く殊なるに、いかなれば吾胸中には、少時の住家の事、ドメニカの媼の事など浮び出でけむ。世の中は廣けれど、眞ごゝろより我上を氣遣ひ呉るゝ人、彼媼の如きはあらじ。近きところに住みながら、屢ゝ往きて訪ふことだになかりしは、我と我身の怪まるゝばかりなり。彼フランチェスカの君の如きは、我を愛し給はざるにあらねど、凡そ恩をきるものと恩をきするものとの間には、未だ報恩の志を果さゞる限は、大なる溝渠ありて、縱ひ優しき情の蔓草の生ひまつはりて、これを掩ふことあらむも、能く全くこれを塡むることなし。漸くにして、ベルナルドオとアヌンチヤタとの上に想ひ及ぶとき、われは頰の邊の沾ふを覺えき。涙にやありし、又窓の下なる石垣に中りし波の碎け散りて面に濺ぎたるにやありし。

翌日は夜のまだ明けぬに、車に乘りてテルラチナを立ちぬ。領分境に至りて、手形改めあるべしとて、人々車を下りぬ。此の時始めて同行の人を熟視したるに、齡三十あまりと覺しく、髮の色明く瞳子青き男、我目にとまれり。何處にてか見たりけむ、心におぼえある顏なり。その詞を聞けば外國音なり。

手形は多く外國文もて認めたるに、境守る兵士は故里の語だによくは知らねば、檢閲は甚しく手間取りたり。瞳子青き男は帖一つ取出でゝ、あたりの景色を寫せり。げに街道に揷ゐたる圃の、上に二三の尖れる塔を戴きたる、その側なる天然の洞穴、遠景たるべき山腹の村落、皆好畫料とぞ思はるゝ。

わが背後よりさし覗きし時、畫工はわれを顧みて、あの大なる洞の中なる山羊の群のおもしろきを見給へと指ざし示せり。その詞未だ畢らざるに、洞の前に横へたる束藁は取り除けられたり。山羊は二頭づゝの列をなして洞より出で、山の上に登りゆけり。殿には一人の童子あり。尖りたる帽を紐もて結び、褐色の短き外套を纏ひ、足には汚れたる襪はきて、鞋を括り付けたり。童は洞の上なる巖頭に歩を停めて、我等の群を見下せり。

忽ち車主の一聲の咒業を叫びて、我等に馳せ近づくを見き。手形の中、不明なるもの一枚ありとの事なり。われはその一枚の必ず我劵なるべきを思ひて、滿面に紅を潮したり。畫工は劵の惡しきにはあらず、吏の讀まぬなるべしと笑ひぬ。

我等は車主の後につきて、役署の一つに上りゆき戶を排して一堂に入りて見るに、卓上に紙を伸べ、四五人の飼鷄ふ如くにその上に俯したるあり。この大官人中の大官人と覺しく、豪さうなる一人頭を擡げて、フレデリックとは誰ぞと糺問せり。畫工進み出でゝ、御免なされよ、それは小生の名にて、伊太利にていふフェデリゴなりと答ふ。吏。然らばフレデリック、シイズとはそこなるか。畫工。御免なされよ。それは劵の上の端に記されたる我國王の御名なるべし。吏。左樣か。(と聲咳一つして

ぐるやら。」「フレデリック、シイズ、パアル、ラ、グラアス、ド、チョオ、ロア、ド、ダンマルク、デ、ワンダル、デ、ゴオト。」さてはそこは「ワンダル」なるか。「ワンダル」とは近ごろ聞かぬ野蠻人の名ならずや。畫工。いかにも野蠻人なれば、こたび開化せむために伊太利には來たるなり。その下なるが我名にて、矢張王の名と同じきフレデリックなり、フェデリゴなり。(「ワンダル」は二千年前の日耳曼種の名なり。文に天祐に依りて璉馬の王、「ワンダル」、「ゴオツ」諸族の王などと記するは、彼國の舊例なり。)書記の一人語を插みて、英吉利人なりしよと云へば、外の一人冷笑ひて、君はいづれの國をも同じやうに視給ふか、券面にも北方より來しことを記せり。無論魯西亞領なりといふ。

フェデリゴ、璉馬、この數語はわが懷しき記念を喚び起したり。璉馬の畫工フェデリゴとは、むかし我母の家に宿り居たる人なり、我を窟墓に伴ひし人なり。我がために畫かき、我に銀錶を貽りし人なり。

關守る兵卒は手形に疑はしき廉なしと言渡しつ。この宣告の早かりしにはフェデリゴの私かに贈りし「パオロ」一枚の效驗もありしなるべし。塔を下るとき、われフェデリゴに名謁りしに、この人は想ふにたがはぬ舊相識にて、さては君は可哀き小アントニオなりしかと云ひて我手を握りたり。車に上るとき、人に請ひて席を換へ、われとフェデリゴとは膝を交へて坐し、再び手を握りて笑ひ興じたり。

われは相別れてより後の身の上をつゞまやかに物語りぬ。そはドメニカが家にありしこと、羅馬に返りて學校に入りしことなどにて、それより後をばすべて省きつるなり。われは詞を改めて、さてこれよりはナポリへ往かむとすと告げたり。

むかし畫工と最後に相見たるは、カムハニアの野にての事なりき。その時畫工は早晩一たび我を羅馬に迎へむと約したり。畫工は猶當時の言を記し居りて、我にその約を履まざりしを謝したり。君に別れて羅馬に歸りしに、故鄕の音信ありて、直ちに北國へ旅立つことゝなりぬ。その後數年の間は、故里にありしが、伊太利の戀しさは始終忘れがたく、このたびはいよ〳〵思ひ定めて再遊の途に上りぬ。こゝはわが心の故鄕なり。色彩あり、形相あるは、伊太利の山河のみなり。わが曾遊の地に來たる樂しさを、君もおもひ遣り給へといふ。

彼問ひ我答ふる間に、路程の幾何をか過ぎけむ。フォンデイの稅關の煩ひをも我心には覺えざりき。途上一微物に遭ふごとに、友はその詩趣を發揮して我心を慰めたり。この憂き旅の道づれには、フェデリゴこそげに願ひても無かるべき人物なりしなれ。

友は行手を指ざしていふやう。かしこなるが我が懷かしき穢きイトリの小都會なり。汝は故里の我が居る町をいかなる處とかおもへる。街衢の地割の井然たるは、幾何學の圖を披きたる如く軒は同じく出で、梯は同じく高く、家々の並びたるさまは、檢閲のために列をなしたる兵卒に異ならず。清潔なることはいかにも清潔なり。されどかくては復た何の趣をかなさむ。イトリに入りて灰色に汚れたる家々の壁を仰ぎ見よ。その窓には太だ高きあり、太だ低きあり。大なるあり、小なるあり。家によりては異様に高き梯の巓に門口を開けるなり。その內を望めば、纏車の前に坐せる老女あり。側なる石垣の上よりは黄に熟したる木の實の重げに生りたる枝さし出でたるべし。この參差錯落たる趣ありてこそ、好畫圖とはなるべきなれといふ。

車のイトリに入らむとするとき、同じく乘れる一客は、これフラア、ヂャヲロの故鄕なりと

叫びぬ。この小都會は削立千尺の大岩石の上にあり。これを貫ける街道は僅に一車を行るべし。こゝ等の家は、概ね皆平家に窓を穿つことなく、その代りには戸口を大いにしたり。戸の内なる泣く小兒、笑ふ女子は、皆襤褸を身に纏ひて、旅人の過ぐるごとに、手を伸べ錢を索む。馬の足掻の早きときは、窓より首を出すべからず。石垣に觸るゝ虞あればなり。時ありて出窓の下を過ぐるときは、隧道の中を行くが如し。唯ゞ黑烟の戸窓より溢れて、壁に沿ひて上るを見るのみ。

閭門を出づるに及びて、友は手を拍ちつゝ、美なる都會かなと叫びぬ。車主は顧みて否盜人の巢なり、警察の累絶ゆる間なければとて、一たび市民の半を山のあなたに徙し、その跡へは餘所より移住せしめしことあり、されどそれさへ雜草の叢に穀物の種を蒔きしに似て、何の利益もあらで止みぬ、兎角は貧の上の事にて、貧人の根絶やし出來ねば、無駄なるべしと、諭し顔に物語りぬ。

——げにも羅馬とナポリとの間ほど、劫掠に便よきところはあらざるべし。奥の知られぬ橄欖の蒼林、所々に開ける自然の洞窟より、昔がたりの一目の巨人が築きぬといふ長壁のなごりまで、いづれか身を隱し人を覗ふに宜しからざる。

友は蔦蘿の底に埋れたる一堆の石を指ざして、キケロの墓を見よといへり。是れ無慙なる刺客の劍の羅馬第一の辯士の舌を默せしめし處なりき。（キケロの別墅はこゝを距ること遠からざるフォルミエにあり。該撒殁後、アントニウス一派の刺客キケロを刺さむと欲す。キケロ身を以て逃れ、將にブルッスの陣に投ぜむとして、遂に刺客の及ぶところとなりぬ。時に西暦前四十三年十二月七日なり。）友は語をつぎて、車主はこたびもモラ、ヂ、ガエタ（即ち昔のフォルミエ）の別墅に車を停むるならむ、今は酒店となりて、眺望好きがために人に知らるといひぬ。

旅の貴婦人

山嶽は秀で、草木は茂れり。車は月桂の街樹を過ぎて客舍の門に抵りぬ。薦巾を肘にしたる房奴は客を迎へて、盆栽花卉もて飾れる濶き階の下に立てり。車を下る客の中に、稍ゝ肥えたる一夫人あるを見て進み近づき、扶けて下らしめ、ことさらに挨拶す。相識の客なればなるべし。夫人の顏色は太だ美し。その眸子の漆の如きにて、拿破里うまれの人なるを知りぬ。

われ等の衆人と共に、門口に近き食堂に入る時、夫人は房奴に語りぬ。こたびの道づれは婢一人のみ。例の男仲間は一人だになし。かく膽太く羅馬拿破里の間を往來する女はあらぬならむ、奈何などいへり。

夫人は食堂の長椅子に、はたと身を倚せ掛け、いたく倦じたる體にて、圓く肥えたる手もて頬を支へ、目を食單に注げり。「ブロデットオ、チポレッタ、ファジヲロ」とか。わが汁を嫌ふをば、こゝにても早く知れるならむ。否々、わが「アムボンポアン」の「カステロ、デ、ロヲオ」の如くならむは、堪へがたかるべし。「アニメルレ、ドオラテ」に、「フィノッキイ」此許あらば足りなむ。まことの晩餐をばサンタガタにてしたゝむべし。こゝは早く拿破里の風の吹くが快きなり。「ベルラ、ナポリ」と呼びつゝ、夫人は外套の紐を解き、苑に向へる廊の扉を開き、もろ手を擴けて呼吸したり。（此詞の中には食單の品目に見えたる料理の稱多し。「ブロデットオ」は卵の黄を入れたる稀き肉羹汁、「チポレッタ」は葱、「ファジヲロ」は豆、「カステロ、デ、ロヲオ」は卵もて製したる菓子、「アニメルレ、ドオラテ」は犢の臟腑の料理、「フィノッキイ」は香料な

り。「アムボンポアン」は肥胖、「ペルラ、ナポリ」は美しき拿破里といふ程の事なり。」

われは友を顧みて、拿破里は最早こゝより見ゆるかと問ひしに、友は笑ひて、まだ見えず、されどヘスペリアは見ゆるなり、アルミダの奇しき園は見ゆるなりと答へき。（譯者云。ヘスペリアは希臘語、晩國、西國の義なり、或は伊太利を斥して言ひ、或は西班牙を斥して言ふ。されどこゝには、希臘神話にヘスペリアといふ女神ありて、西方の林檎園を守れるを謂ふならむ。アルミダはタッソオが詩中の妖艶なる王女なり。基督教徒を惑はし、丈夫リナルドオをアンチオヒアの園に誘ひて、酒色に溺れしむ。フェデリゴが詞の意は、山水を問ふこと勿れ、彼美人を見よとなり。）

友と倶に出でゝ望むに、その景色の好きこと、想像の能く及ぶ所にあらず。脚の下には柑子、檸檬などの果樹の林あり。黄金いろしたる實の重きがために、枝は殆ど地に低れむとす。丈高き針葉樹の園を限りたるさまは、北伊太利の柳と相似たり。この木立の極めて黑きは、これに接したる末遙なる海原の極めて明ければなり。園の一邊の石垣の方を見れば、寄せ來る波は古の神祠温泉の址を打てり。白帆懸けたる大舟小舟は、徐かに高き家の軒を竝べたるガエタの灣に進み入る。（原註。ガエタはカエタより出でたる名なりといふ。是れキルギリウスが詩の主人公エネエアスが乳媼の名にして、此港を以て其埋骨の地となせるなり。）灣の背後に一山の聳ゆるありて、その嶺には古壘壁を見る。友は左の方を指してヱズキオの烟を見よといふ。眸を轉じて望めば、火山の輪廓は一抹の輕雲の如く、美しき靑海原の上に現れたり。われは小兒の情もて此景物を迎へ、心の裡に名狀すべからざる喜を覺えき。

われ等は相携へて果園に下りぬ。われは枝上の果に接吻して、又地に墜ちたるを拾ひ、毬の如くに玩びたり。友の云ふやう。げに伊太利はめでたき國なる哉。北方の故郷に在りし間、常に我懷に往來せしものはこの景なり、この情なり。嘗て夢裡に看みつる霞は、今うつゝに吸ふ霞なり。故郷の牧を望みては、此橄欖の林を思ひ、故郷の林檎を見ては、此柑子を思ひき。されど北海の綠なる波は、終に地中海の水の藍碧なるに似ず、北國の低き空は、終に伊太利の天の光彩あるに似ざりき。汝はわが伊太利を戀ひし情のいかに切なりしかを知るか。一たび淨土を去りたるものゝ不幸は、嘗て淨土を見ざりしものゝ不幸より甚し。我故郷なる嗹馬は美ならざるに非ず。山毛欅の林の鬱として空を限るあり。東海の水の潤くして天に連るあり。されど是れ皆猶人界の美のみ。伊太利は天國なり、淨土なり。かへすがへすも嬉しきは再び斯土に來しことぞと云ふ。友はわれと同じく枝なる果に接吻し、又目に喜の涙を浮べて、我項を抱き我額に接吻せり。

火は火を呼び、情は情を呼ぶ。われは最早此舊相識に對して、胸臆を開き緘默を破ることを禁じ得ざりき。われは我が羅馬に在りての遭遇を語りて、高くアヌンチヤタの名を唱へたり。人を傷けて亡命せしこと、身を賊寨に託せしことより、怪しき媼の我を救ひしことまで、一も忌み避くることなかりき。友の手は牢く我手を握りて、友の眼光は深く我眼底を照せり。

忽ち吸泣の聲の背後に起るあり。背後はキケロの温泉の入口にて、月桂、朱欒の枝繁りあひたれば、われは始より人あるべしとは思ひ掛けざりしなり。枝推し分けて見れば、彼温泉の入口なる石に踞して泣く女あり。そは前の拿破里の夫人なりき。

夫人は涙の顏を擧げて我に謝して云ふやう。我が無禮なるを恕し給へ。君等の歩み寄り給ひ

しときは、われ早くこゝに坐して涼を貪り居たり。御物語の祕事と覺しきには、後に心付きしが、せむすべなかりしなり。されど哀れ深き御物語を聞きつとこそ思ひまゐらすれ、人に告ぐべきにはあらねば、惡しく思ひ取り給ふなといふ。われは間の惡さを忍びて夫人に禮を施し、友と共に踵を旋したり。友は我を慰めて云ふやう。彼夫人の期せずして我等と物言ひしは、或は他日我等に利あらむも知るべからず。斯く言へば土耳格人めきたれど、われは運命論者なり。且汝の語りし所は國家の祕密などにはあらず。誰が心中の帳簿にも、此種の暗黑文字數葉なきことはあらざるべし。彼夫人の汝が言を聞きて泣きしは、或は他人の語中より自家の閱歷を聽き出し、他人の杯酒もて自家の磊塊に澆ぎしにはあらずや。涙は己れのために出で易く、人のために出で難きこと、なべての情なればといひき。

我等は再び車に乘り途に上りぬ。四邊の草木はいよ／＼茂れり。車に近き庭園、田圃の境には、多く蘆薈を栽ゑたるが、その高さ人の頭を凌げり。處々の垂楊の枝は低れて地に曳かむとせり。

日の夕にガリリヤノの河を渡りぬ。古のミンツルネエ（羅馬の殖民地）は此岸にありしなり。我好古の眼もて視るときは、是れ猶古のリリス河にして、其水は蘆荻叢間の黄濁流をなし、敗將マリウスが殘忍なるズルラに追躡せられて身を此岸に潛めしも、昨の猶くぞおもはるゝ。（紀元前八十八年ズルラ政柄を得つる時、マリウスこれと兵馬の權を爭ふ。所謂第一內訌是なり。マリウス敗れて此河岸に潛み、萬死を出で一生を得て、難を亞弗利加に避けしが、その翌年土を捲きて重ねて來るや、羅馬府を陷いれ、兵を縱ちて殺戮せしむること五日間なりき。）此よりサンタガタまでは、まだ若干の路程あるに、闇は漸く我等の車を罩まむとす。馭者は畜生を連呼して、鞭策亂下せり。拿破里の夫人は心もとながりて、頻りに車窓を覗き、賊の來りて、行李を括り付けたる索を截らむを恐るゝさまなり。われ等は纔に前面に火光あるを認めて、互に相慶したり。須臾にして車はサンタガタに抵りぬ。

晩餐の間、夫人は何事をか思ふさまにて、いとも靜なりき。さるをその目の斷えずわが方に注げるをば、われ心に訝りぬ。翌朝車の出づべき期に迫りて、われは一盞の珈琲を喫せむために、食堂に下りしに、堂には夫人只一人在りき。優しく我を迎へて詞を掛け、われを惡しく思ひ給ふな、總べて思ひ設けぬ事なりしなればと云ふ。われは夫人を慰めて、否、あしき人に聞かれたりとは思ひ候はず、言はであるべき事をば言ひ給ふべき方ならねばと答へき。夫人。さなり。おん身はまだ我をよくも識り給はず。或は我を識り給ふ期あらむも知るべからず。おん身は知らぬ大都會に往き給ふといへば、かしこにて一度我家におとづれ、我夫と相識になり給はんかた宜しからむ。交際は無くて協はぬものにて、又一たび誤りてあらぬ人と相結ぶときは、悔あるべきことなりといふ。われは深くその好意を謝して、善人は隨處にありといふ諺の虛しからぬを喜びぬ。夫人は我側に寄りて、兼ねても聞き給ふならむ、拿破里は少き人には危き地なりなど云ひ、猶何事をか告げむとせしに、フエデリゴも房より出でしかば、物語はこゝに絕えぬ。

我等は又車に乘りたり。今は車中の客も漸く互に打解けて、はかなき世語などしつゝ拿破里の市に近づきぬ。偶ゝ驢に騎りたる一群の過ぐるあり。我友はこれを見て、いたくめでたがりたり。紅の上衣を頂より被りて、一人の穉兒には乳房を啣ませ、一人の稍ゝ年たけ

たる子をば、腰の邊なる籠の中に睡らせたる女あり。又一家族を舉げて一驢の背に託したりと覺しく、眞中には男騎りて、背後なる妻は臂と頭とを夫の肩に倚せて眠り、子は父の膝の間に介まれて鞭を手まさぐり居たるあり。いづれもピニエルリが風俗畫の拔け出でたるかと怪まるゝばかりなり。

空氣は鼠色にて雨少し降れり。エズヰオの山もカプリの島も見えず。葡萄の纏ひ付きたる高き果樹と白楊との間には、麥の露けく緑なるあり。夫人我等を顧みて、見給へ、此野はさながらに饗應のむしろなり、麪包あり、葡萄酒あり、果あり、最早わが樂しき市と美しき海との見ゆるに程あらじといひぬ。

夕に拿破里に着きぬ。トレドの街の壯觀は我前に横はりぬ。（原註。羅馬及ミラノにては大街をコルソオと曰ひ、パレルモにてはカッサロと曰ひ、拿破里にてはトレドと曰ふ。）硝子燈と彩りたる燈籠とを點じたる店相竝びて、卓には柑子無花果など堆く積み上げたり。道の傍には又魚蠟を焚き列ねて、見渡す限、火の海かとあやまたる。兩邊の高き家には、窓ごとに床張り出したるが、男女の群のその上に立ち現れたるさまは、こゝは今も謝肉祭の最中にやとおもはるゝ程なり。馬車あまた火山の坑より熔け出でし石を敷きたる街を馳せ交ひて、間ゝ馬のその石面の滑なるがために躓くを見る。五六人これに乘りて、背後には襤褸着たる小兒をさへ載せ、又この重荷の小づけには、網床めくものを結び付けたる中に半ば裸なる賤夫のいと心安げにうまいしたるあり。挽くものは唯ゝ一馬なるが、その足は跛足なり。一軒の角屋敷の前には、焚火して、闊袴に扣鈕一つ掛けし中單着たる男一二人、對ひ居て骨牌を弄べり。風琴、「オルガノ」の響喧しく、女子のこれに和して歌ふあり。兵士、希臘人、土耳格人、あらゆる外國人の打ち雜りて、且叫び且走る、その熱鬧雜沓の狀、げに南國中の南國に是なるべし。この嬉笑怒罵の天地に比ぶれば、羅馬は寂寞谷のみ、墓田のみ。夫人は手を拍ち鳴して、拿破里々々々と呼べり。

車はラルゴ、デル、カステルロに曲り入りぬ。（原註。拿破里大街の一にして其末は海岸に達す。）同じ鬧熱、同じ喧囂は我等を迎へたり。劇場あり。輕技の家あり。その群の一家族高き棚の上に立ちて客を招けり。婦は叫び、夫は喇叭吹き、子は背後より長き鞭を揮ひて爺孃を亂打し、その脚下には小き馬の後脚にて立ちて、前に開ける簿册を讀む眞似したるあり。一人あり。水夫の環坐せる中央に立ちて、兩臂を振りて歌へり。是れ即興詩人なり。一翁あり。卷を開いて高く誦すれば、聽衆手を拍ちて賞讃す。是れ「オランドオ、フリオゾ」を讀めるなり。（譯者云。わが太平記よみの類なるべし。讀む所はアリオストオの詩なり。）

夫人は忽ちエズヰオと呼びぬ。げに〳〵廣こうぢの盡くる處に、彼の世界に名高き火山の半空に聳ゆるを見る。熔けたる巖の山腹を流れ下るさま、血の創より出づる如し。嶺の上に片雲あり。その火光を受けたる半面は殷紅なり。されど此偉觀の我眼に入りしは一瞬間なりき。

車は廣こうぢを横ぎりて、旅店　カアザ、テデスカ」の前に駐まりぬ。店の隣には、小さき傀儡場あり。一人ありてその前に立ち、道化役の偶人を踊らせ、且泣き且笑ひ、又可笑しき演說をなさしめたり。衆人は環り視て笑へり。向ひの家の石級には一僧あり。船頭らしき、肩幅濶き逞しげなる男に、基督の像を刻み附けたる十字架を捧げさせて說教せり。此方には聽衆いと少し。

僧は目を瞋らして傀儡師の方を見やりて云ふ

やう。斯くても精進日なるか。天主に仕ふる日なるか。反省して苦行する日なるか。汝達がためには、春の初より冬の終迄、日として謝肉祭ならぬはなし。斯く跳り狂ひ笑み戯れて、一歩一歩地獄に進み近づくなり。疾く奈落の底に往きて狂ひ戯れよといふ。僧の聲は漸く大に、我耳はこの拿破里訛を聞くこと、一篇の詩を聞く如くなりき。されど僧の叫ぶこと愈ゝ大なれば、偶人の跳ること愈ゝ忙しく、群衆は舊に依りて傀儡師に面し説教僧に背けり。僧は最早え堪へずして、石級を飛び下りさまに連なる男の手より聖像を奪ひ取り、そを高くかざして衆人の間に分け入りたり。見よ〳〵。これがまことの傀儡なり。汝達に眼あるは、これを觀むためなり。耳あるはこれの教を聽かむためなり。「キュリエ、エレイソン」(主よ、慈を垂れよの義にして、歌頌の首句)とぞ唱へける。聖像は流石人に敬を起さしめて、四圍の群衆忽ち跪けば、傀儡師も亦壇を下りて跪きぬ。

われは車の側に立ちてこれを見つゝ、心に神恩の深きと人心のやさしきとを思へり。フェデリゴは夫人のために辻の馬車を雇へり。夫人は友の手を握りて謝すと見えしが、その歎き兩臂は俄に我頸を卷きて、我唇の上には燃ゆる如き接吻を覺えき。

慰藉

友の眠に就きし後、われは猶寢ねで久しく出窓に坐して、外の方を眺め居たり。こゝよりは宵に廣こうぢの隈々迄見ゆるのみならず、かのエズキオの山さへ眞向に見えたり。夢の裡に移り來しにはあらずやと疑はるゝ此境の景色は、われをして容易く臥床に上ることを得ざらしめしなり。目の下なる街は漸く靜になりて、燈火の數も亦減ぜり。最早や夜中過ぎたるなるべし。

エズキオの山の姿は譬へば焔もて畫きたる松栢の大木の如し。直立せる火柱はその幹、火光を反射せる殷紅なる雲の一團はその木の巓、谿々を流れ下る熔巖はその濶く張りたる根とやいふべき。わがこれに對する情をば、いかなる詞もて寫し出すべきか、われは神と面相向へり。神の聲は彼火坑より發して直ちに我耳に響けり。神の威力、智慧、矜恤、愛憐は我胸に徹したり。その迅雷風烈を放ち出す手は、また一隻の雀をだに故なくして地に隕すことなきなり。わが久しき間の經歷は我前に現じて一瞬時の事蹟に同じく、神の扶掖誘導の縱は分明に辨識せられたり。われは敢て自家を以て否運の兒となさじ。神の禍を轉じて福となし給へる迹は掩ふ可からざるものあればなり。初めわれ不測の禍のために母上を喪ひまゐらせき。されど故とならぬ其罪を贖はむとてこそ、車上の貴人は我に字を識り書を讀むことを敎へしめ給ひしなれ。マリウチアとペッポとのわが身を爭ひて、わが全く寄邊なき身の上となりしは、寔に限なき不幸なりき。されど斯くてわれカムハニアの曠野に目を送ることなくば、かかる貴人の家でか我を認め得給はむ。此の如く因果の鎖を手繰りもて行くに、われは神の最大の矜恤、最大の愛憐を消受せしこと疑ふべからず。唯ゝ凡慮に測り知られぬは我とアヌンチヤタとの上なり。ベルナルドオが姫を得むと欲せしは卑陋なる色慾にして、縱ひ渠一たびその願の成らざるを憂ふとも、渠は月日を費すことなくして、その失望を慰めその遺憾を忘れしならむ。わが情はいと高くいと深くして、われ若し姫を獲たらむには、此世の中には最早何の欲望をも殘さゞりしならむ。さるを神は我を棄てゝ渠を取りたり。我黄金なす夢は一旦にして塵芥となり畢りぬ。こはそもいかなる故ぞや。此煩惱の闇、我は忽ち「キタルラ」の音の街上に

起るを聞く。見下せば肩に輕く一領の外套を纏ひて、手に樂器を把り、戀の歌の一曲を試みむとする男あり。未だ數彈ならざるに、對ひの家の扉は響なくして開き、男の姿は戸に隱れぬ。想ふに此人を待つものは、優しき接吻と懷抱となるべし。われは星斗のきらめける空を仰ぎ、又燈燭の影處々に紅を印したる青海原を見遣りたり。好し〳〵、我は我戀人を獲たり。我戀人は自然なり。自然よ。汝はわがためにその舞やかなる天を打明けて何の隱すところもなし。汝はそよ吹く風の優しきを送りて、我額我脣に觸るゝことを嫌はず。我は汝が美しさを歌はむ、汝が我心を動す所以を歌はむ。言ふこと莫れ、汝が心の痍は猶血を瀝らすと。針に貫かれたる蝶の猶その五彩の翼を揮ふを見ずや。落ちたぎつ瀧の水の沫と散りて猶麗しきを見ずや。これはこれ詩人の使命なり。この世は束の間の夢なり。あの世に到らむには、アヌンチヤタも我も淨き魂にて、淨き魂は必ず相愛し相憐み、手に手を取りて神のみまへに飛び行かむ。

氣力と希望とは再び我胸に入り來れり。わが此より即興詩人として世に立たむは、なかなかに樂しかるべき事ぞと思ひ返されぬ。只ゝ猶心に懸るは、恩人なる貴人の思ひ給はむ程奈何なるべきといふ事なり。彼人はわれ舊に依りて羅馬にありて書を讀めりとおもひ給ふならむ。彼人のわが都を逃れしさまと我新境界とを聞き知り給はむには、果して何とか言はるべき。われは今宵を過ごさで書を裁して、人々に我未來の事を認め許されむことを請ふことゝなしたり。我書には、予の母に言はむが如く、些の纏ふことなく有の儘に、我とアヌンチヤタとの中を語り、我が一たび絶望の境に陷りて後、今又慰藉を自然と藝術とに求むるに至れる顛末を敍して、さて人々の憐を垂れてわが即興詩人となることを許されむを願ひぬ。われはその答を得む日までは、敢て公衆のために歌はざるべしと誓へり。これを書く時、涙は紙上に墜ちて斑をなし、われは心の中に答書の至らむこと一月の間にあらむことを祈るのみなりき。書き畢りて、われは久し振にて心安く眠に就きぬ。

翌日フエデリゴはとある横町なる貸房に移り、己れは猶さきの獨逸宿屋なる、珍らしき山と海との眺ある一間に留まりぬ。われは聚珍館（ムゼオ、ボルボニイコ）、劇場、公苑など尋ねめぐりて、未だ三日ならぬに、早く此都會の風俗のおほかたを知ることを得たり。

考古學士の家

或日房奴は我に一封の書をわたしたり。披きて讀めば、博士マレツチイと夫人サンタとの案內狀にして、フエデリゴ君をも伴ひて來ませとあり。初めはわれこは宛先を誤りたる書ならずやと疑ひぬ。宿屋の人に博士はいかなる人ぞと問ふに、いと名高き學者にて、考古學とやらんに長け給ふと聞ゆ。その夫人近きころ羅馬より歸り給ひしなれば、客人は途上にて相識になり給ひしにはあらずやといふ。嗚呼、われこれを獲たり。これこそ前の拿破里の貴婦人ならめ。

夕暮にフエデリゴを誘ひて往きぬ。いと廣き間に客あまた集へり。滑なる大理石の床は、蠟燭の光を反射し、鐵の格子を繞らしたる火鉢（スカルデイノ）は、程好き煖さを一間の內に頒てり。

サンタと名告れる夫人は、嬉しげに我等二人を迎へて、一坐の客達に引合せ、又我等に、苟しも心をおかで家に在る如く振舞はむことを勸めたり。夫人は今宵空色の衣を着たるが、いと善く似合ひたり。我等は若し此人をして少し瘦せしめば、第一流の美人たるべきものをとさゝ

やきたり。我等は夫人に促されて坐せり。此時一少女ありて「ピアノ」に對ひ、短歌を唱ひ出せり。その曲は偶〻アヌンチヤタがチドに扮して唱ひしものと同じけれども、その力を用ゐる多少と人を動す深淺とは、固より日を同うして語るべきならず。われは只〻衆のなすところに倣ひて、共に拍手したるのみ。少女は又輕快なる舞の曲を彈じ出せり。男客の三人四人は、急に傍なる婦人を誘ひて舞ひはじめたり。われは避けて、とある窓龕に隱れたり。

初めわれは席に入りしとき、瘦せたる小男の眼鏡懸けたるが、忙しげに此間に出入するを見たり。この男わが窓龕にかくれしを見て、我前に立ち留まり、慇懃なる禮をなせり。われはその何人なるを知らねども、姑く共に語らばやとおもひて、エズヰオの山の噴火の事を說き、その熔巖の流れ下る狀など、外より來るものゝ目を驚かす由を云ひたり。小男の答ふるやう。否。今の噴火の景などは言ふに足らず。プリニウスの書に見えたる九十六年の破裂は奈何なりけむ。灰はコンスタンチノポリスにさへ降りしなり。近き年の破裂の時も、我等拿破里人は傘さして行きしが、均しく灰降るといふも、拿破里に降るとコンスタンチノポリスに降るとは殊なり。何事によらず、今の世は遠く古の希臘羅馬の世に及ばずと知り給へ。澆季の世は古に復さむよしもなしと、かこち顔なり。われ芝居話に轉ずれば、彼は遠くテスピスの車に遡りて、（世に傳ふ、テスピスは前五四〇年頃の雅典人にして、舞臺を車上にしつらひ、始て劇を演じたりと。）希臘俳優の被りぬといふ、悲壯劇の假面と滑稽劇の假面とを列擧せり。われ又近頃禁軍の檢閱ありしを聞きつと噂すれば、彼は希臘の兵制を論じて、マケドニア步兵の方陣の操練を細敍すること目擊の狀の如くなり。既にして彼は我に考古學又は美術史を研究し給ふやと問ひぬ。われ答へて、己れは專門の學をなさずと雖、凡そ宇宙の事は一として我研究の資料ならぬはなし、己れは詩人たらむと心掛くるなりと云へば、彼手を拍ちて喜び、ホラチウスが句を朗誦し、我琴を以てヨヰスの神の甲琴に比したり。

忽ちサンタ我前に來て云ふやう。さては終に生捕られ給ひしよ。おん身等の物語は、定めてセソストリス時代の事なるべし。（希臘傳說に見えたる埃及王の名なり。前十四五紀の間の名ある王二人の上を混じて說けり。）客人には現世の用事あり。かしこに少き貴婦人の舞手なくて寂しげなるあり。願はくは誘ひ出して舞の群に入り給へとなり。われ逡巡して、否われは舞ふこと能はず、曾て舞ひしことなしと答ふれば、サンタ重ねて、家のあるじたる我身おん身に請はゞ奈何といふ。われ。まことに濟まぬ事ながら、われ若し強ひて躍り出でば、おのれ一人跌き轉ぶのみならず、敵手の貴婦人をさへ拉き倒すならむ。夫人打ち笑ひて、そは好き見ものなるべしといひつゝ、フェデリゴの方に進み近づき、直ちに伴ひて舞の群に入りぬ。小男は我を顧みて、氣輕なる女なり、されど貌は醜からず、さは思ひ給はずやといふに、我はまことに仰の如く、めでたき姿なりと讚め稱へき。此よりいかなる話の運なりしか知らねど、我等二人は忽ち又古のエトルリヤ人（昔羅馬の北に住みし民）の遺しゝ陶器の事を論ぜざるべからざることゝなりぬ。彼は此地の聚珍館内なる瓶又は壺の數々を擧げて、これに畫きし畫工に說き及ぼし、次いでその畫工の技巧を辨明したり。此等の陶畫は、皆濕に乘じて筆を用ゐるものなれば、一點一畫と雖、漫然これを下すべきにあらずなど云へり。彼は猶其詳なるを敎へむために、不日我を聚珍館に連れ往かむと約せり。

夫人は再び我前に來て、さては論文はまだ結局とならぬにや、以下次號とし給へと呼び、急に我手を把りて拉き去りつゝ、聲を低うして云ふやう。おん身は餘りに人好きにはあらずや。我夫はいつも此の如くなれば、うるさき時は忍びて聽き給ふには及ばず。おん身の兎角沈み勝になり給ふは惡しき事なり。人々と共に樂み給へ。いざ我身おん相手となるべければ、何にても語り聞せ給へ、こゝに來給ひてより、何をか見給ひし、何をか聞き給ひし、何をか最もめでたしと思ひ給ひしといふ。われ。兼ておん身の告げ給ひしに違はず、拿破里はいとめでたき地なり。今日の午過ぎなりき。獨り歩みてポジリッポの巖窟に往きしに、葡萄の林の繁れる間に古寺の址あり。そこに貧しき人住めり。可哀げなる子供あまた連れたる母はなほ美しき女なりき。我は女の注ぎくれたる葡萄酒を飮みて、暫くそこに憩ひしが、その情その景、さながらに詩の如くなりきと語りぬ。夫人は示指を竪てゝ、笑みつゝ我顏を打守り、油斷のならぬ事かな、さるいちはやき風流をし給ふにこそ、否々、面をあかめ給ふことかは、君の齡にては、精進日の説法聞きて心を安じ給ふべきにはあらぬものをとさゝやきぬ。

夫婦の上にて、此夕わが知ることを得たるところは、いと少かりき。されどサンタが性の拿破里婦人の特色と覺しく、語を出すに輕快にして直截なる、人に接するに自然らしく情ありげなるは、深く我心に銘せり。その夫は博學の人と見えたり。共に聚珍館に遊ばむには、これに踰す人あるべからず。

われは次第に足近く彼家に出入するやうになりぬ。サンタの待遇は漸く厚く親しくなりて、われは早くも心の底を打明けて此婦人に語りぬ。後に思へば、われは世馴れぬ節多く、男女の間の事などに昧きは、赤子に異ならぬ程なれば、サンタの如き女に近づくことの多少の危險あるべきを知るに由なかりしなり。サンタが夫は卑しき饒舌家ならずして、まことに學殖ある人なりしこと、此往來の間に明になりぬ。

或日われはサンタに語るに、アヌンチヤタと別れし時の事を以てせり。サンタは我を慰めて、ベルナルドオの心ざまを難じ、又アヌンチヤタの性をさへ貶め言へり。そのベルナルドオを難ずる詞は、多少我創痍に灌ぐ薬油となりたれども、アヌンチヤタを貶むる詞は、わが容易く首肯し難きところなりき。

サンタのいふやう。彼女優をばわれも屢々見き。舞臺に上る身としては、丈餘りに低く、肌餘りに痩せたりき。拿破里にありても、若き人人の崇拜尋常ならざりしが、そは聲の好かりしためなり。アヌンチヤタが聲は人を空想界に誘ひ行く力ありき。而してその小く痩せたる身も亦空想界に屬するものゝ如くなりしなり。おん身若し我言を非へりとし給はゞ、そは猶肉身なくて此世に在らむを好しとし給ふごとくならむ。假令われ男に生るとも、抱かば折るべき女には懸想せざるべしといへり。われは覺えず失笑せり。想ふにサンタは話の現に墜つるを嫌ふ性なれば、始より我を失笑せしめむとて此説をなしゝならむか。奈何といふにサンタもアヌンチヤタが品性の高尙なると才藝の人に優れたるとをば一々認むといひたればなり。

或時われは詩稿を懷にして往きぬ。こは拿破里に來てよりの近業にて、獄中のタッソオ、托鉢僧など題せる短篇の外、無題一首ありき。われは愛情の犧牲なり。わが曾て敬し曾て愛しつる影像は、皆碎けて塵となり、わが寄邊なき靈魂は其間に漂へり。われはサンタに向ひ居て詩稿を讀み始めしに、未だ一篇を終らずして、情迫り心激し、われは嗚咽して聲を續ぐこと

を得ざりき。サンタは我手を握りて、我と共に泣きぬ。わがサンタに親むことは、此より舊に倍したり。

サンタの家は我第二の故郷となりぬ。われは日ごとにサンタと相見て、日ごとに又その相見ることの晩きを恨みつ。この婦人の家にあるさまを見るに、其戯謔も愛すべく其氣儘も愛すべし。これをアヌンチヤタの一種近づくべからず褻るべからざる所ありしに比ぶれば、固より及ぶべくもあらねど、かの捉へ難き過去の幻影には、最早この身近き現在の形相を斥くる力なかりしなり。

或時我は又サンタと對坐して語れり。夫人。近ごろポジリツポの眺好き家と顔好き女とを尋ね給ひしか。われ。否、前後二たび往きしのみ。夫人。女は最早餘程おん身になじみしならむ。子供は案内者に雇はれ、主人は漁に出でて在らざりしにはあらずや。用心し給へ、拿破里の海の底は、やがて地獄なりといへば。われ。否、我心を引くものは唯景色のみなり。かの賤女いかに美しとて、決して我を誘ひ寄すること能はざるべし。夫人。吾友よ、われは明におん身の心を知れり。曩にはその心に初戀の充牣したるため、些の餘地だになかりき。われは君が初戀を陋しとせざるべし。されどその敵手なる女の、君の直きが如く直からざりしは、爭ふべからざる事實なるべし。否、我話の腰を折り給ふな。さてその初戀の眞の價は兎まれ、角まれ、その君が心に充牣したるもの、今や無慙にも引き放ちて棄てられ、その跡は空虚になりぬ。この空虚は何物もて塡むべきか。君は昔こそ書を讀み空想に耽りて自ら足れりとし給ひけめ、彼女優の一たび君を現實世界に引き出したる上は、君も亦我等と同じく血あり肉ある人となり給ひて、その血その肉はその本來の權利を求めでは止まざるべし。少壯幾時かある。男兒何の敢てすべからざる事かあらむ。されば我に物隱さむとし給ふには及ばざるにあらずや。われ。おん說の前半は、げにさもあるべく思はれて、空虚の事などは首肯しても好し。されどそを塡めむ策をば未だ講ぜしことあらず。夫人。さらば君は猶我說を問はむとし給ふか。君の既に一たび空想を出でながら、猶再びこれに還りて、一個の空想人物とならむとし給ふが怪しきなり。アヌンチヤタは君が理想の女ならずや、高尚なる人物ならずや。それすら空想人物のアントニオの君を棄てゝ、人柄下りたるベルナルドオを取りしなり。アヌンチヤタも男欲しかりしなり。斯く言ひ掛けて、サンタは愛らしき聲して笑ひ、おん身の餘りに罪なき性なるため、我に女の口より言ひ難き事さへ言はしめ給ふこそ憎けれとて、指もて我頰を彈きたり。

旅店に還りて獨り思ふに、サンタの我を評する言は、昔ベルナルドオの我を評せし言と同じ。此頃又フエデリゴの話を聞きしに、その羅馬にありし日の經歷には、我の夢だに知らざるやうなることもありて、賤しきマリウチアさへその事に與れりといふ。世の人はわが厭ひおそるゝところのものを悅び樂むにや。アヌンチヤタの我を棄てゝベルナルドオを取りしなどは、現にもこれを證して餘あるが如くなり。果して然らばアヌンチヤタは我感情を愛して我意志を嫌ひしにやあらむ。あらず、わが意志の闕乏を嫌ひしにやあらむ、いと覺束なく心許なき事にこそ。

絶交書

拿破里に來てより既に一月を經ぬ。さるにアヌンチヤタとベルナルドオとの上に就きては、何の聞くところもあらず。或夕一封の書は到りぬ。何人のいかなる使するにかと、打ち返してこれを見るに、印はボルゲエゼ家の印にして、

筆は主公の筆なり。われは心に聖母を祈りつつ、開いてこれを讀みたり。其文に曰く。

御書狀拜讀仕候。素と拙者の貴君の御世話可致と決心候節、貴君の爲めに謀候は、當地に於いて正當なる教示を受けられ、社會に益ある一人物となられ候樣にと希望候儀に有之候。然處貴君の行跡全く此希望と相反候は、今更是非なき次第と諦念候より外無之候。當初御萱堂不幸之砌、存寄らざる儀とは申ながら、拙者の身上其禍因と連係候故、報謝の一端にもと志候御世話も、此の如く相終候上は、最早債を償ひ劵を折候と同じく、何の因讐も無之、一切事濟と看做候て宜かるべしと存候。然上は即興詩人と爲り藝人と爲りて公衆の前に出でられ候とも、拙者に於いて故障等可申には無之候。唯此際申入置度は、後日貴君の拙者一家に於ける從來の關係等、一切口外下さる間敷儀に御座候。生涯當家の恩義忘却致さずとは先年度々申聞けられ候處に有之候へども、拙者に報ずる所以の最大事件たる學問修行をば塵芥の如く棄てられ候て、今は其最小事件卽ち拙者を呼ぶに恩人を以てせられ候儀さへ、拙者の心に屑とせざるものと成果候段、歎息の外無之候。草々不宣。

　われは血の胸に迫るを覺えて、兩手は力なく膝の上に垂れたり。泣かば心鎭まるべけれども涙出でず、祈らば力着くべけれども詞出でず。我は悶絕せる人の如く、頭を卓上に支へて坐すること良ゝ久しかりしが、其間何の思ふところもあらざりき。われは痛苦をだに明には覺えざりしなり。只ゝ心の底には言ふべからざる寂しさを感じて、今は聖母さへ世の人と同じく我を見放し給ふかと疑ひおもへり。

　フェデリゴはこゝに來ぬ。進みて我手を握りて云ふやう。病めるか、アントニオ。獨り物思ふは惡しき事なり。汝はアヌンチヤタを失ひて不幸なりといへど、我は汝のアヌンチヤタを得て幸なるべかりしや否やを知らず。我經歷に徵するに、大抵わが遭逢せし所は、後に顧みるにわが最も宜しき所なりし也。然れども運命の人を引き廻すは、間ゝ頗る手荒きものにて、人は之を痛苦とし不幸とするなりといふ。我は詞なくて、卓上の書狀を指し、友のこれを讀む間、これに背きて涙を拂ひつ。友は我肩を撫でゝ、泣くが好し、泣かば心落着くべしと云へり。暫しありて友は我に、此書狀を見たる後、既に思ひ定むる所ありやと問ひたり。此時われは忽ち思ひ付くよしありて、友に向ひて語り出でぬ。聞け吾友、われは僧とならむとす。我は幼きより聖母に仕へたるが、今思へば淺からぬ緣ありしならむ。聖母の慈悲は廣大なれば、縱ひ一たび我を棄て給ふとも、いかでか我懺悔を聞き給はざることあらむ。われは空想人物にて、汝等と同じからず。世間に立ち交るとも、何の益かあるべき。若かじ、今の機到り緣熟せるを幸として、平和を寺院の中に求めむには。友。おろかなり、アントニオ。否運に遭ひて志を屈せずしてこそ人たる甲斐はあれ。汝の氣力あり技倆あるを、傲慢なる羅馬の貴人に見せよ、世間に見せよ。詩人は賤しき業にあらず。汝は才あり學あればこそ、詩人とならむとは思ひ立ちしなれ。汝が前途は多望なり。されどわれおもふに、わが斯く辭を費すはいたづら事にはあらずや。汝が僧とならむといふは、けふの黃昏の暗黑なる思案にて、あすは旭日の光に觸れて泡沫のごとく消え去るべきものにはあらずや。兎まれ角まれ、汝が病をばわが手ぬかりにて長じたりと覺し、汝は獨り籠り居て蟲をおこしたるならむ。あすは車一輛

倚ひて、エルコラノ、ポムペイに往き、それよりエズヰオの山に登るべし。先づ今宵は大路まで出で丶、面白く時を過さむ。世の中は駈歩して行く如し。而して人々おのが荷を負ひたり。鉛の重さなるもあり。翫具と一般なるもあり。友は斯く語りつ丶我を促し立て丶出で行かむとせり。嗚呼、我にも猶此の如く慰め呉る丶友あるこそ嬉しけれ。我は默して帽を戴き、友の後に跟きて出でぬ。

好機會

戸を出づれば小屋掛の小劇場より賑かなる音樂の聲聞ゆ。われ等二人は群集の間に立ちてその劇場の狀を看たり。夫婦と覺しき男女、表をのみ飾りたる衣を纏ひて板敷の上に立ちたるが、客を喚ぶことの忙しさに、聲は全く嗄れたり。色蒼ざめたる一童子「ピエロオ」（滑稽役）の服を着けて、悲しげに「ヰオリノ」彈けば、姉妹なるべし、少女二人のこれを繞りて踊るを見る。哀なるかな此人々。その運命のはかなきこと我と同じきなるべし。我は大息を抑へて友の肩に倚りたり。友は慰めて云ふやう。物思も好き程にせよ。暫くこの邊を漫　歩して、汝が目の赤きを風に吹き消させ、さて共にマレッチイ夫人の許に往かむ。夫人は汝と共に笑ひ共に泣きて、汝が厭ふをも知らぬなるべし。こは我が能くせざるところにして夫人の能くするところなり。いざ〳〵と勸めつ丶、友は我を拉きて街上を行き巡り、遂に博士の家に入りぬ。

夫人は出で迎へて、好くこそ來給ひたれ、君等の定の日を待たで來給はむは何時なるべきと、兼ねてより思ひ居たりといふ。友。わがアントニオは又例の物の哀といふものに襲はれ居れば、そを少し爽かなる方に向はせむは、おん宅ならではと思ひて參りしなり。明日は共にエルコラノとポムペイとに往きて、エズヰオの山にも登らむとす。折好く噴火の壯觀あれかしと願ふのみといふ。博士聞きて友に對ひて云ふやう。そはいと好き逍遙の法なり。われも暇あらば共にこそ往かまほしけれ。エズヰオに登らむは煩はしけれど、ポムペイの發掘の近狀を見むこと面白かるべし。われはかしこより彩色の硝子器數種を得たれば、この頃そを時代別にして小論文一篇を作りぬ。今君に見せて、彩色に關する二三の疑を質さばやと思ふなり。アントニオ君はしばし妻の許に居給へ。後には集りて一瓶の「ファレルノ」（ファレルナに產する葡萄酒）を傾け、ホラチウスが詩を歌はむと云ふ。

かくて主人は友を延いて入り、我をばサンタ夫人の許に留め置きぬ。

夫人。君は又新しき詩を作り給ひしならむ。君が面を見るにその經營慘憺とやらむいふことの痕深く刻まれたる如きを覺ゆるなり。さきにはタッソオの詩を誦して聞せ給ひしが、その句は今も我懷に往來して、時ありては獨り涙を墮すことあり。そはわが泣蟲なるためにはあらず。など少しく氣を霽やかにして我面を見て面白き事を語り聞せ給はざる。徒默して居給ふか。若し言ふべきことなくば、わがこの新しき衣をだに譽め給へ。好く似合ひたるにあらずや。體にひたと着きてめでたからずや。詩人はか丶る些細なる事をも心に留めでは叶はぬものなり。我姿のすらりと痩せて「ピニョロ」の木の如くなるを見給はずや。われ。そは直ちに心付き候ひぬ。夫人。おん身はまことに世辭好き人なり。我姿はいつもの通りなり。衣は緩く包みし袱の如し。否々、面を赤うし給ふことかは。おん身も年若き男達の癖をばえ逃れ給はずと思はる。今少し多く女子に交り給へ。われ等はおん身を教育すべし。おん身の友と我夫とは、今その考古學の深みに嵌まり居て、身動きだにせざるならむ。いざ共に「ファレルノ」を飲まむ。

後には人々と同じく改めて杯を把り給ひても好しといふ。夫人に斯く勸められて、われは急に酒飮むことを辭み、世の常の物語せばやと、一言二言いひ試みしが、胸の憂に詞淀みて、いかにも心苦しければ、夫人よ恕し給へ、われは今快からず、さるを强ひて物語せば、そは徒におん身を惱ますに近からむと云ひつゝ、起ちて帽を取らむとせしに、夫人は忽ち我手を把りて再び椅子に着かしめ、優しく我顏を目守りて云ふやう。今は歸し參らせじ。おん身は何事にか遭ひ給ひしならむ。心を隔て給ふことかは。わが氣輕なる詞つきは、おん身の心を傷つけたらむも計られねど、そは稟賦なれば、是非なし。われはまことにおん身の上を氣遣へり。何事にか遭ひ給ひしならば、包まずわれに語り給へ。故里の文をや得給ひし。ベルナルドオが劍のためにみまかりしにはあらずやと云ふ。初めわれは主公の書を得たることを此人に告げむ心なかりしが、斯く問はれて心弱く、有の儘に物語りぬ。さて詞を續ぎて、われは全く世に棄てられたり、世には一人の猶我を愛するものなしと欷歔して叫びし時、否、アントニオと云ふ聲耳に響きて、われは溫き掌の我額を撫で、忽又熱き脣の其上に觸るゝを覺えき。否、アントニオ猶おん身を愛する人あり。おん身は善き人なり、可哀き人なり。夫人はかく言ひつつ、もろ手もて我頭を抱き、その頰は我耳の邊に觸れたり。我血は湧き返りて、渾身震ひ氣息塞がりたり。此時人の足音して一間の扉は外より開かれ、主人はフェデリゴと共に入り來りぬ。サンタ夫人は徐に友を顧みて、好き處に來給ひたり、アントニオ君は熱を患へ給ふにやあらむ、心地惡しとのたまひつゝ、忽ち青くなり又赤くなり給ふ故、安き心はあらざりきなど云ひ、又我に向ひて、いかに、今は前の如くにはあらざるならむと云ふ。その面持すこしも常に殊ならず。われは心の底に、言ふべからざる羞と憤とを覺えて、口に一語をも出すこと能はざりき。博士は例の古語を引きて、客人、心地はいかなるにか、クピド(愛の神)の磨く箭にや中り給ひしなどいひつゝ、われ等に酒を勸めたり。夫人はわれと杯を打碰せて、意味ありげなる目を我面に注ぎ、これを乾さばや、好機會のためにと云ふに、我友點頭きてげに好機會は必ず來べきものぞ、屈せずして待つが丈夫の事なりと云ふ。この時博士も亦杯を擧げて、さらば我もその好機會のために飮まむと云ひぬ。夫人は高く笑ひて手もて我頰を撫でたり。

古市

翌朝フェデリゴは博士マレッチイと共に我客舍に來て促し立て、打ち連れて馬車に上りぬ。車は拿破里の入江を拖りて行くに、爽かなる朝風は海の面より吹き來れり。友は遙にヱズヰオの山を指さして、あの烟の渦卷き騰る狀を見よ、今宵は興ある遊となるべきぞと云ひしに、博士首を掉りて、かばかりの烟は物の數ならず、紀元七十九年の噴火の時を想ひ見給へと云ひぬ。拿破里の町はづれを過ぎて、程なくサンジョワンニイ、ポルチア、レジナの三市の相連れるを見る。そのさま一市をなせるが如し。レジナに至りて車を下れば、われ等の蹈める所の脚下は、早く是れ熔巖熱灰のために埋沒せられしエルコラノの古市なり。

博士に延かれて一家に入れば、その中庭に大なる枯井あるを見る。井の裏には螺旋梯を架したり。博士われ等を顧みて云ふやう。見給へ人人。これこそは紀元千七百二十年エルボヨフ公の掘らせし井なれ。穿つこと僅に數尺にして石人現れければ、その工事は遽に止められき。これより人の手を此井に觸れざること三十年。西班牙王カルロス此に來て猶深く掘らせしに、

見給へ、かしこの奥に見ゆる石階に掘り當てたりと云ふ。われ等はその井をさし覗くに、日光はエルコラノの市なる大劇場の石階の隅を照せり。案内者は燭を點して、われ等をして各これを手にせしめつ。降りて石階の上に立てば、誰か能く懷舊の情の胸間に叢り起るを覺えざらむ。是れ千七百載の昔、羅馬の民の集ひ來て、齊しく眸を舞臺の光景に凝し、共に笑ひ共に感動し共に喝采歡呼せし處なるにあらずや。側なる低く小さき戸を過ぐれば、濶き廊あり。われ等は舞庭に下りぬ。(舞臺と觀棚との間に在り。)樂人房、衣房、舞臺などを見めぐるに、其結構の宏壯なるは、深く我心を感ぜしめき。燭光の照すところは數步の外に出でざれども、われはその大さ「サンカルロ」座に踰ゆべしと想ひぬ。われ等の四邊は空虛幽暗寂寥にして、われ等の頭上には別に一箇の熱鬧世界あるなり。世には既に死したる人のわれ等の間に迷ひ來て相交ることありとおもへるもあり。われは今これに反して、獨り泉下に入りて身を古の羅馬人の精靈の間に寘きたりとおもひぬ。われは人々を促して梯を登りぬ。

右に轉じて一小巷に入れば、古市の一小部の發掘せられたるあり。數條の徑、小房多き數軒の家あり。その壁には丹青の色殘れり。エルコラノの市の天日に觸るゝ處は唯ゞこれのみなりといへば、工事の未だはかどらざることポムペイの比にあらずと覺し。

レジナを背にして車を馳すれば、目の及ばむ限、只ゞ大海の忽ち凝りて黑がねとなれるかと疑はるゝ平原を見るのみ。半ば埋れたる寺塔は寂しげに道の側に立てり。處々に新に造りたる人家と葡萄圃とあり。博士われ等を顧みて云ふやう。この境の慘狀をばわれ目のあたり見ることを得たり。われは猶幼かりき。この車轍の過ぐるところは、其時火燄の海をなし、その怖ろしき流は山岳の方より希臘塔市(トルレ、デル、グレコ)の方へ向ひたり。葡萄圃は多く熔巖に掩はれ、父とわれとの立てる側なる岩は其光を受けて殷紅なり。寺院の火海の中央に漂へるさまはノアの船に異ならず、その燈の未だ滅せざるが微かに靑く見えたり。われは生涯その時の事を忘れず。父の燃け殘りたる葡萄を摘みてわれに食せしは、今も猶昨のごとしと云ひぬ。

凡そ拿破里の入江の諸市は、譬へば葡萄の蔓の梢より梢にわたりて相連れるが如く、一市を行き盡せば一市又前に橫る。(希臘塔市の次は即トルレ、デル、アヌンチヤタの市なり。)道は此熔巖の平野に至るまで、都會の大街に異ならず。馬に乘る人、驢に騎る人、車を驅る人など絕えず往來して、その間には男女打ち雜りたる旅人の群の一しほの色彩を添ふるあり。

初めわれはエルコラノもポムペイも深く地の底に在りと思ひき。されど其實は然らず。古のポムペイは高處に築き起したるものにして、その民は葡萄圃のあなたに地中海を眺めしなり。われ等は漸く登りて、今暗黑なる燼餘の灰壘を打ち拔きたる洞穴の前に立てり。洞穴の周圍には灌木、草綿など少しく生ひ出でゝ、この寂しき景に些の生色あらせむと勉むるものゝ如し。われ等は番兵の前を過ぎて、ポムペイの市の口に入りぬ。

博士マレツチイは我等を顧みて、君等は古のタチツスをもプリニウスをも讀み給ひしならむ、凡そ此等の書の最も好き註脚は此市なりと云ひたり。われ等の進み入りたる道を墳墓街と名づく。許多の石碣竝び立てり。二碑の前に彫鏤したる榻あり。是れポムペイの士女の郊外に往反するときしばらく憩ひし處なるべし。想ふに當時この榻に坐するものは、碑碣のあなたなる林木郊野を見、往來織るが如き街道を

見、又波靜なる入江を見つるならむ、今は唯ゝ窓牖ある石屋の處々に立てるを望むのみ。屋は地震の初に受けたりと覺しき許多の創痕を留めて、その形枯髑髏の如く、窓は空しき眼窠かと疑はる。間ゝ當時普請の半ばなりし家ありて、彫りさしたる大理石塊、素燒の模型など、その傍に横れり。

われ等は漸くにして市の外垣に到りぬ。これに登るに幅廣き石級あり。古劇場の觀棚の如し。當面には細長き一條の街ありて通ず。熔巖の板を敷けること拿破里の街衢と異なることなし。蓋しこの板は遠く彼基督紀元七十九年の前にありて噴火せし時の遺物なるべし、今その面を見るに、深く車轍を印したればなり。家壁には時に戸主の姓氏を刻めるを見る。又招牌の遺れるあり。偶ゝその一を讀めば、石目細工の家と題したり。

家裏を窺ふに、多くは小房なり。門扇上若くは仰塵より光を採りたり。中庭の大さは大抵僅に一小花壇若くは噴水ある一水盤を容るゝに足り、柱廊ありてこれを繞れり。壁又床牀には石目もて方圓種々の飾文を作る。白青赤などの顏料もて畫ける壁を見るに、舞妓、神物の類猶頗る鮮明なり。博士とフェデリゴとはこの美麗にして久しきに耐ふる顏料の性狀を論ずと見えしが、いつかバヤルヂイが大著述の批評に言ひ及びて、身の何の處に在るかを忘るゝものゝ如くなりき。（バヤルヂイの著カタロオゴ「デリ、アンチイキイ、モヌメンチイ、デルコラノは大判紙十卷ありて千七百五十五年の刊行なり。）幸に我は平生多く書を讀まざりしかば、此物語に引き入れらるゝ虞なく、詩趣ゆたかなる四圍の光景は、十分に我心胸に徹して、平生の苦辛はこれによりて全く排せられ畢ぬ。

われ等はサルルストが故宅の前に立てり。博士帽を脱して云ふやう。縱ひ靈魂は逸し去らむも、吾豈その遺骸を拜せざらむやと。前壁には、ヂアナとアクテオンとの大圖を畫けり。（アクテオンは、希臘の男神の名なり、女神ヂアナを垣間見て、罰のために鹿に變ぜられ、畜ふ所の群犬に噬まる。）二個の「スフィンクス」（女首獅身の石像）を脚としたる大理石の巨卓あり。傳へいふ、初めこの皓潔玉の如き卓を發掘せしとき、工夫は驚喜の餘、覺えず聲を放ちて叫びぬと。されど我を動すことこれより深かりしは、色褪せたる人骨と灰に印せる美しき婦人の乳房となりき。

われ等は廣こうぢを過ぎて、ユピテルの祠の前に至りぬ。日は白き大理石の柱を照せり。其背後にはヱズヰオの山あり。巓よりは黑烟を吐き、半腹を流れ下る熔巖の上には濃き蒸氣簇れり。

われ等は劇場に入りて、磴級をなせる石榻に坐したり。舞臺を見るに、その柱の石障石扉、昔のまゝに殘りて、羅馬の俳優のこゝに演技せしは昨の如くぞおもはるゝ。されど今は音樂の響も聞えず、公衆の喝采に慣れたるロスチウスが聲も聞えず。わが觀るところの演劇は、綠肥えたる葡萄圃、行人絡繹たるサレルノ街道、其背後の暗碧なる山脈等を道具立書割として、自ら悲壯劇の舞臺となれるポムペイ市の死の天使の戚を歌へるなり。われは覿面に死の天使を見たり。その翼は黑き灰と流るゝ巖とにして、一たびこれを開張するときは、幾多の市村はこれがために埋めらるゝなり。

噴火山

熔巖は月あかりにて見るべきものぞとて、我等は暮に至りてヱズヰオに登りぬ。レジナにて驢を雇ひ、葡萄圃、貧しげなる農家など見つつ騎り行くに、漸くにして草木の勢衰へ、はては片端になりたる小灌木、半ば枯れたる草の

莖もあらずなりぬ。夜はいと明けれど、強く寒き風は忽ち起りぬ。將に沒せむとする日は熾なる火の如く、天をば黃金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なる群れる島嶼をば淡靑なる雲にまがはせたり。眞に是れ一の夢幻界なり。灣に沿へる拿破里の市は次第に暮色微茫の中に沒せり。眸を放ちて遠く望めば、雪を戴けるアルピイの山脈氷もて削り成せるが如し。

紅なる熔巖の流は、今や目睫に迫り來りぬ。道絕ゆるところに、黑き熔巖もて掩はれたる廣き面あり。驢馬は蹄を下すごとに、先づ探りて而る後に踏めり。既にして一の隆起したる處に逢ふ。その狀新に此熔巖の海に涌出せる孤島の如し。されど其草木は只だ丈低き灌木の疎に生ぜるを見るのみ。この處に山人の草寮あり。兵卒數人火を圍みて聖淚酒を呑めり。(「ラクリメ、クリスチイ」とて葡萄酒の名なり。)これは遊覽の客を護りて賊を防ぐものなりとぞ。われ等を望み見て身を起し、松明を點じて導かむとす。厲しき風に焰は横さまに吹き靡けられ、滅えむと欲して僅に燃ゆ。博士は疲れたりとて草寮に留まりぬ。我等の往手は巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の蹄に觸るゝもの多し。處々道の險しき谿に臨めるを見る。

既にして黑き灰もて盛り成したる山上の山ありて、我等の前に横はりぬ。我等は皆徒立となりて、驢をば口とりの童にあづけおきぬ。兵卒は松明振り翳して斜に道取りて進めり。灰は踝を沒し又膝を沒す。石片又は熔巖の塊ありて、歩ごとに滾り落つるが故に、縱に列びて登るに由なし。我等は雙脚に鉛を懸けたる如く、一歩を進みては又一歩を退き、只ゞ一つところに在るやうに覺えたり。兵卒は、巓近し、今一息に候と叫びて、我等を勵したり。されど仰ぎ視れば山の高きこと始に異ならず。一時許にして僅に巓に到りぬ。われは奇を好む心に驅られて、直に踵を兵卒に接したれば、先づ足を此山の巓に着けたり。

巓は大なる平地にして、大小いろ／＼なる熔巖の塊錯落として途に横る。平地の中央に圓錐形の灰の丘あり。是れ火坑の堤なり。火球の如き月は早く昇りて、此丘の上に懸れり。我等の來路に此月を見ざりしは、山のために遮られぬればなり。忽ちにして坑口黑烟を噴き、四邊闇夜の如く、山の核心と覺しき處に不斷の雷聲を聞く。地震ひ足危ければ、人々相倚りて支持す。忽ち又千百の巨礮を放てる如き聲あり。一道の火柱直上して天を衝き、迸り出でたる熱石は「ルビン」を嵌めたる如き觀をなせり。されど此等の石は或は再び坑中に沒し、或は灰の丘に沿ひて轉り下り、復た我等の頭上に落つることなし。われは心裡に神を念じて、屛息してこれを見たり。

兵卒は、客人達は山の機嫌好き日に來あはせ給ひぬとて、我等を麾きて進ましめたり。われは初めその何處に導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近づくべきにあらねばなり。導者は灰の丘を左にして進まむとす。忽ち見る。我等の往手に火の海の横れるありて、身幹數丈なる怪しき人影のその前にゆらめくを。これ我等に前だてる旅客の一群なり。我等は手足を動して熔岩の塊を避けつゝ進めり。色褪せたる月の光と松明の火とは、岩の隈々に濃き陰翳を形りて、深谷の看をなせり。忽ち又例の雷聲を聞きて、火柱は再び立てり。手もて探りて漸く進むに、石土の熱きを覺ゆるに至りぬ。巖罅よりは白き蒸氣騰上せり。既にして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔岩なり。風に觸るゝ表層こそは黑く凝りたれ、底は猶紅火なり。この一帶の彼方には又常の石原ありて、一群の旅客はその上に立てり。

導者は我等一行を引きて此火殼を踐ましめたるに、足跡灸ぶるが如く、我等の靴の黑き地に赤き痕を印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に斷文ありて、底なる火を透し見るべし。我等は凝息して行くほどに、一英人の導者と共に歸り來るに逢ひぬ。渠、汝等の間に英人ありやと問ふに、われ、無しと答ふれば、一聲畜生と叫びて過ぎぬ。

我等は彼旅客の群に近づきて、これと同じく一大石の上に登りぬ。此石の前には新しき熔岩流れ下れり。譬へば金の熔爐より出づる如し。其幅は極めて濶し。蒸氣の此流を被へるものは火に映じて殷紅なり。四圍は暗黑にして、空氣には硫黃の氣滿ちたり。われは地底の雷聲と天半の火柱と此流とを見聞して、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覺えたり。われは胸前に合掌して、神よ、詩人も亦汝の預言者なり、その聲は寺裏に法を說く僧侶より大なるべし、我に力あらせ給へ、我心の淸きを護り給へと念じたり。

われ等は歸途に就きたり。此時身邊なる熔岩の流に、爆然聲ありて、陷穽を生じ炎焰を吐くを見き。されどわれは復た戰き慄ふことなかりき。一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴て、且滑り且降るほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞苦をも覺えざりき。われもフエデリゴも心に此遊の徒事ならざりしを喜びあへり。驢に乘りて草寮に至れば、博士は踞坐して我等を待てり。促し立てゝ共に出づるに、風斂り月明かなり。拿破里灣に沿ひて行けば、熔岩の赤き影と明月の青き影と、波面に二條の長蛇を跳らしむ、聞說らく、昔はボッカチョオ涙をキルギリウスの墳に灑ぎて、譽を天下に馳せたりとぞ。われ非才、固よりこれに比すべきにあらねど、けふヱズヰオの山の我詩思を養ひしは、未だ必ずしもむかし詩人の墳のボッカチョオの天才を發せしに似ずばあらず。

博士はわれ等を誘ひて其家にかへりぬ。われは前度の別をおもひて、サンタ夫人との應對いかゞあらむと氣遣ひしに、夫人の優しく打解けたるさまは、毫も疇昔に異ならざりき。夫人はわが即興の手際を見むとて、こよひの登山を歌はせ、辭を窮めて我才を讚めたり。

囊家

サンタのわれに優しきことは昔に變らず。されど人なき處にてこれと相見むことの護影くて、若しフエデリゴの共に往かざるときは、必ず人の先づ集ひたらむ頃を待ちて、始ておとなふことゝなしつ。現にあやしきものは人の心なり。曾て心にだに留めざりし人と、ゆくりなく浮名立てらるゝときは、その人はそもいかなる人にかと疑ふより、これに心付くるやうになり、心付けて見るに隨ひて、美しくもおもはれ慕はしくもおもはるゝことありと聞く。我が夫人に於けるも亦これに似たるなるべし。前の事ありしより、我が夫人を見る目は昔に同じからで、その豐なる肌、媚ある振舞の胸騷の種となりそめしぞうたてき。

我がナポリに來てより早や二月とはなりぬ。次の日曜日はわが「サン、カルロ」の大劇場に出づべき期なり。其日の興行はセヰルラの剃手にて、その末折の終りてより、我即興詩は始まるべしとぞ掟てられし。番付には流石にわが實の苗字をしるさむことの恥かしくて、假にチエンチイと名告りたり。この運命の定まるべき日の、切に待たるゝと共に、あるときは其成功の覺束なき心地せられて、熱病む人の如くなることあり。けふも博士の家をおとづれたれど、人々の背後にかくれて物言ふことも稀なりき。フエデリゴは我が物思はしげなるを見ていふや

う。いかに心地や惡しき。われとても同じさまなり。こは火山の所爲にて、この郷の空氣の惡しくなれるならむ。エズヰオの噴火は次第に熾なり。熔巖の流は早く麓に到りて、トルレ、デル、アヌンチヤタの方へ向へりと聞く。今宵は激しき音の聞ゆるならむ。空氣には灰多く雜れり。山に近き處にては、木々の梢皆灰に掩はれたり。巓の上は黑雲覆ひ重りて、爆發の度ごとに青き燄その中に立ち昇れりといふ。サンタは色蒼く、瞳常ならず耀けるが、友の詞を聞きていふやう。われも熱に罹れりと覺ゆ。されど日曜日には病を力めて往くべし。友のためには命をさへ輕んずべし。その翌日熱に苦めらるゝこと前に倍すとも、そは顧みるべき事ならず。友は嬉しとおもふや、あらずや、そは知るべきならねどなど、心ありげに云へり。

　われは日ごとに公苑に往き戲園に入り、又心安からぬまゝに寺院を訪ねて、聖母の足の下に俯することあり。頰燃え胸跳るばかりなる怖ろしき誘惑に想ひ到れば、懺悔の念轉ゝ深く、志を遂げ功を成さむと欲する大いなる企圖を顧み思へば、祈禱の心愈ゝ切なり。されど我靈は我肉と鬪へり。わが心機の一轉すべき期は、想ふに日曜日にあるならむ。われは慰藉を得ずして、空しく聖母の膝下を走り出でぬ。

　一たび儕に嚢家（博奕場）に往かずや、いかなる境界をも詩人は知らざるべからずとは、吾友フェデリゴの曾て云ひしところなり。されど友は我を伴ひしことなく、我も亦獨り往かむ心を生ずることなかりき。こは見むことの願はしからざるにあらず、心の怯れたるなり。むかしベルナルドオの我にいひしことあり。汝はドメニカに育てられ、ジェスヰタ派の學校に人となりて、その血中には山羊の乳汁雜れり。されば汝は臆病なりといひき。當時われはその無禮を怒りしが、今思ふに此言は幾分の理なきにあらず。われまことに詩人となりて、善く社會の狀態を歌はむには、先づかゝる怯懦の心を棄てざるべからず。わが此念をなしゝは、夕ぐれに此市に聞えたる嚢家の門を過ぐる時なりき。これぞ我膽を試みるべき好き機會なるべき、自ら博奕せでもあるべし、後に相識れる人々に語るとも、必ず咎むるものはあらじなど、自ら問ひ自ら答へて、騷ぐ胸を押し鎭めつゝ門に入りぬ。こゝには嚴かなる裝したる門者立てり。兩邊に燈を點じたる石階を登れば、前房あり。僮僕あまた走り迎へて、我帽と杖とを受取り、我が爲めに正面なる扉を排開したり。

　戸内には燈明き室あまたあり。室ごとに大卓幾箇か据ゑたるを、男女打雜りたる客圍み坐せり。われは勇を鼓して先づ最も戸に近き一室を大股に歩み過ぎしに、諸人は顧みむとだにせざりき。卓の上には堆く金貨を積みたり。我目に留まりしは、十年前までは美しかりけむと思はるゝ、さたすぎたる婦人の服飾美しく面に紅粉を施せるが、痩せたる掌に骨牌緊しく握り持ちて、鷙鳥の如き眼を卓上の黃金に注ぎたるなり。若く美しき女子も二人三人見えたるが、その周匝には少年紳士群り立ちて、何事をか語るさまなりき。老若いづれはあれど、皆嘗て能く人の心を動しゝ人の、今は他の心文牌に目を注ぐやうになりしなるべし。

　稍ゝ狹き室に紅綠に染め分けたる一卓あり。客は柱文銀（「コロンナアトオ」といふ、その文樣に依りて名づく、我二圓十五錢許に當る）一塊若くは數塊を一色の上に置く。球ありて此卓上を走り、その留まる處の色は、賭者をして倍價の銀を贏ち得しむ。傍より覗ふに、その速なることは我脈搏と同じく、黃白の堆は忽ち卓に上り又忽ち卓を下る。われは覺えず兜兒を搜りて一塊の柱文銀を取り、漫然卓上に擲ちたるに、銀は紅色の上に駐まれ

り。監者は我面を注視して、其色の意に適へりや否やを問ふものゝ如し。われは又覺えず頷きたり。球は走り、我銀は二塊となりぬ。われはこれを收むるを愧ぢて、銀を其處に放置せり。運命は我に與するにやあらむ。銀の嵩は次第に大いになりて、金貨さへその間に輝けり。われは喉嚨の燃ゆるが如きを覺えたれば、葡萄酒一杯を買ひてこれに灌ぎつ。黄白の山はみるみる我前に聳えたり。忽ち球は我色に背きて、監者は冷かに我銀の山を撈ひ取りぬ。われは夢の醒めたる如くなりき。我がまことに失ひしは杜文銀一つのみと、獨り自ら慰めて次の室に入りぬ。

　こゝには數人の少女あり。中なる一人の姿貌は宛然たるアヌンチヤタなるが、只ゝ身幹高く稍ゝ肥えたるを異なりとす。われは暫くこれに注目せしに、少女は我前に歩み寄りて、傍なる小卓を指し、おん敵手にはなるまじけれどゝ耳語きたり。わが輕く辭みて數歩を退き去るを、少女は訝かしげに見送り居たり。奥の詰なる室には、少年紳士等打寄りて撞球戯をなせり。婦人も幾人か立ち雜りたるに、紳士中には上衣を脱ぎたるあり。われは初め此社會の風儀のかくまで亂れたるをば想ひ測らざりしなり。入口の戸に近く、此方に背を向けて撞杖を揮へる丈高き一男子あり。今の撞きざまや巧なりけむ、人々喝采せしに、前に我に骨牌を勸めし少女も彼男子の面を覗きて、笑みつゝ何事をかさゝやきたり。男は振り向きざまにその頬に接吻し、女は嬌嗔してその男を打てり。われは遙に彼男の横顔を望み見て慄慴せり。そはその餘りにベルナルドオに肖たるが爲めなり。われは進みてこれに近づくべき膽力なかりき。されどその眞のベルナルドオなりや否やを知らむことの願はしければ、傍にほの暗き室の戸の開きありたるを見て、我より窺ふべく彼より見るべからざらしめむために、壁に沿ひて徐に歩み、そとこれに進み入れり。天井には紅白の硝子燈を吊りたれど、わざと明闇相半して處々蔭多からしめたり。室は假の庭園なり。薄片鐵を塗りて葉となしたる蔓艸は、幾箇のさゝやかなる亭に纏ひ附きて、その間には巧に盆栽の橘柚等を排べたり。亭の前なる梢には剝製の鸚鵡の止まりたるあり。冷なる風は窓より入りて、自奏器の樂聲人の眠を催さむとす。

　わが此裝置を一瞥し畢りし時、彼のベルナルドオに肖たる男はこなたに向ひて足の運び輕げに歩み來たり。われは思慮を費すに遑あらずして、近き亭の内に潛みしに、男は面に笑を湛へて閾上に立ち留まりぬ。その面は恰も我方へ眞向になりたるが、われはそのまがふ方なきベルナルドオなることを認め得たり。渠は隣なる亭に歩み入り、長椅に身を投げ掛けて、微かに口笛を鳴し居たり。我胸裏には萬感叢起せり。ベルナルドオこゝに在り。我と他と咫尺す。われはかく思ふと共に、身うちの悉く震ひわなゝくを覺えて、力なく亭内なる長椅の上に坐したり。花卉の薫、幽かなる樂聲、暗き燈火、軟なる長椅は我を夢の世界に誘ひ去らむとす。現に夢の世界ならでは、この人に邂逅すべくもあらぬ心地ぞする。少焉ありて前のアヌンチヤタに似たる少女は此室に入り將に進みて我が居る亭に入らむとす。われは心にいたく驚きて、身内の血の湧き立つを覺えき。その時ベルナルドオは忽ち聲朗かに歌ひはじめたり。少女は聲をしるべに隣の亭に入りぬ。衣の戰ぎと共に接吻の我聲耳を襲へり。此聲は我心を焦し爛かせり。嗚呼アヌンチヤタは我を去りて此輕薄男子に就きしなり。この男子アヌンチヤタを獲てより幾時をか經し。而るに其唇は早く既にこの淤泥もて揑ね成したる妖姫の身に觸

るゝなり。われは此室を馳せ出で、此家を馳せ出でたり。我胸は怒と悲とのために裂けむとす。此夜は曉近うして纔にまどろむことを得たり。

我が「サン、カルロ」の劇場に登るべき日は明日となりぬ。これを待つ疑懼の情と、さきの夜戀の敵に出逢ひたる驚愕の念とは我をして暫くも安んずること能はざらしむ。わが聖母其他の諸聖を祈る心の切なりしこと此時に過ぐるはなかりき。われは寺院に往きて、彼の救世者流血の身に擬したる麪包を乞ひ受け、その奇しき力の我を清淨にし我を康強にせむことを禱りぬ。尊き麪包は果して我に多少の安堵を與へぬ。されどこゝに最も心にかゝる一事あり。そはアヌンチヤタの此地にあるにはあらずや、ベルナルドオはこれに隨ひて來たるにはあらずやといふ疑問なりき。既にしてフェデリゴは我が爲めに偵知して、アヌンチヤタのこゝにあらず、ベルナルドオの四日前に單身こゝに到りしを報ず。友は綿密に市の來賓簿を閲しくれたるなり。サンタの熱は未だ痊えず、されど明日の興行には必ず往かむと誓へり。エズヰオは火を噴き灰を雨らすること故の如し。而して我名を載せたる番附は早く通衢に貼り出されたり。

初舞臺

日暮れて劇場の馬車の我を載せ行きしは、樂劇の幕の既に開きたる後なりき。若し運命の女神にして、剪刀を手にして此車中に坐したらむには、恐らくは我は、いざ、截れと呼ぶことを得しならむ。われは只ゝ神を賴みて餘念なかりき。

場內の逍遙場には俳優と文士と打雜りたる群ありき。中には我と同業なる卽興詩人さへありて、其名をサンチイニイと云ふ。平素人に佛蘭西語を教ふ。われはその群に近づきたり。會話は甚だ輕く、交ふるに笑謔を以てす。セヰルラの剃手の曲の爲めに登場する俳優は、乍ち去り乍ち來り、演戲のその心を擾さゞること尋常の社交舞に異ならず。舞臺はその定住の地なればさもあるべし。

サンチイニイの云ふやう。吾等は君に難題を與ふべし。譬へば殼硬き胡桃の析き難きが如し。されど君は能く析き能く解き給ふならむ。われも猶初めて登場せし時の戰慄の狀を記せり。されど我智は我に祕訣を授けたり。そは閨情、懷古、伊太利風土の美、藝術、詩賦等、何物にも附會し易きものあるを用ゐ、又人の喝采を博すべき段をば先づ作りて諳んじ置くことを得る事なりと云ふ。われ絕て此種の準備なしと答へしに、サンチイニイ頭を掉りて、否、そは隱し給ふなり。要するに君の如き怜悧なる人には此業いと易しと耳語けり。

剃手の曲は終りて、われは獨り廣闊なる舞臺の上に立てり。座長は笑を帶びて我額を打ち、「斷頭臺は築かれたりと耳語きて、道具方に相圖せり。幕は開きたり。斯て此大劇場の觀棚に對して立てる時、わが視る所は譬へば黑洞々たる大坑に臨める如く、僅に伶人席の最前列と高き觀棚の左右の端となる人の頭を辨ずることを得るのみ。濃く溫なる空氣は漲り來りて我面を撲てり。われは我精神の此の如く安く夷なるべきをば期せざりき。その狀態は固より興奮せり。而れどもその諸機に振觸し易き性は十分に備はりたり。われは自家の精神作用の緊張を覺ゆると共に、又其明徹を覺えたり。猶晴れたる冬の日の空氣の極めて冷に兼ねて極めて明なるがごとくなるべし。

看客は片紙に題を記して出し、警吏これを檢して、その法律に牴觸せざるを認めたる後、われに交付す。われは數題中に就いて其一を簡み取る自由あり。初なる一紙には侍奉紳士と題せ

り。こは人妻に事ふる男を謂ふ。中世士風の一變したるものなるべし。されどわれは未だ深く心をこれに留めしことなし。（原註。「イル、カワリエル、セルエンテ」又「チチスベオ」。今侍奉紳士と飜す。此俗本とジェノワ府商賈より出づ。その行販して郷を離るゝもの婦を一友に託す。これを侍奉紳士といふ。初め僧に託するを常とせしが、後又俗士を擇む。侍奉紳士は婦の早起盥漱する時より、深更寢に就く時に至るまで、其身邊に在りて奉侍す。他婦を顧みることを容さず。聞く侍奉紳士中婚褻に及ばざるもの往々にして有り。嘗て一男子の歿するや、其誄辭中侍奉紳士となりて責を負ひ任を全うすといふ語ありきと。）われは此俗を歌ふ一曲の人口に膾炙するものあるを知れど、急にこれに依りて思を構ふること能はず、（曲とは「フェミナ、ヂ、コスツメ、ヂ、マニエレ」と題するものを謂ふ、「ソネットオ」なり、ミュルレルの羅馬と其士女との卷中に收めたり。）望を第二紙に屬してこれを開きたり。紙上にはカプリと書せり。是れ亦わが爲めの難題なり。われは拿破里よりその山脈の美しきを賞しつれども、未だ一たびも此島に航せしことあらず。若し二者中一を取らば、猶侍奉紳士をこそ辭を措き易しとせめ。われは第三紙を開きたり。題して拿破里の窟墓といふ。これも亦我未知の境なり。されど窟墓の一語は忽ち少時の怖ろしき經歴を想ひ起す媒となりぬ。フェデリゴとの漫歩より地下に路を失ひたる時の心の周章など、悉く目前に浮びぬ。われは直ちに絃を撥きて歌ひ出でぬ。章句は自らにして成りぬ。われは唯ゝ自家少時の經歴を語りしのみ、唯ゝ羅馬の地下窟を以て拿破里の地下窟となしゝのみ。即興詩の末解は、一たび失ひつる緒の端を再び探り得たる喜を敍したり。喝采はあまたゝび起りぬ。われは脈絡中に三鞭酒の循るが如き感をなしたり。

われは第二曲の題として蜃氣樓を得たり。こは拿破里又シチリヤの水濱にて屢ゝ見るゝものといへど、われは未だ嘗て見しことあらず。唯ゝ此重樓複閣の奧には、我に親しき神女棲み給ふ。これをファンタジア（空想）の君とはいふなり。われは唯ゝ平生夢裏に遊べる境界を歌はむのみ。その中には同じ神女の宮殿あり、苑囿あり。われは急に我資材を引纏めて、一の布局を定め、一の物語となしたり。歌ひ出づるに從ひて、新しき思想は多く來り加はりぬ。先づ敍したるは荒廢せる一寺なりき。景をポジリッポに取りて、わざと其名をば擧げざりき。簷傾き廊朽ちて、今や漁父の栖家となりぬ。聖像を燒き附けたる窓の下に床ありて、一童子臥したり。月あかくいと靜けき夜、美しき童女來りおとづれぬ。その美しさは譬へむに物なく、その身の輕きことそよ吹く風に殊ならず。兩の肩には五彩燦然たる翼生ひたり。二人は共に嬉み遊べり。少女は漁家の子を引きて、緑深き葡萄園に往き、又近きわたりの山に分け入るに、まだ見ぬ景色いと多く、殊に山腹の自ら闢けて、その中にめでたき壁畫と數多き贄卓とある寺院の見えたるなど、言へば世の常なり。或るときは共に舟に棹して青海原を渡り、烟立つエズヰオの山に漕ぎ寄せつるに、山は全く水晶より成れりと覺しく、巖の底なる洪爐中に、烟渦卷き火燃え上るさま掌に指すが如くなり。或るときは共に地下の古市に遊ぶに、廛衢屋舍悉く存じて、往來織るが如く、その殷富豐盛なること、書讀む人の遺跡を見て說き聞するところに增したり。少女は嘗て其羽を脫ぎ卸して、その童子の肩に結び、いざ共に空に翔らむといふ。おのれは風なす輕き身なれば、羽なきと羽あると殊ならずとなり。橘柚檸檬の林を見下し、高くは山巓の雲を踏み、低くは水草茂れる沼澤の上を

飛びしときは、終に茫漠たる平野の正中なる羅馬の都城に至りぬ。鏡の如き蒼海を脚下に見、カプリの島の外遠く翔りて、夕陽の雲の奧深く入りしときは、忽ち粉壁彫墻の前に橫はるを見て、これは何ぞと問ひしに、少女答へて、母君の築き給ひし城よと云ひぬ。少女は童子と樂しき日をこの城の内に送りしこと數〻なりき。童子の齡漸く長ずるに及びて、少女の訪ひ來ること漸く稀になり、はてはをり〳〵葡萄棚の葉の間又は柑子の樹の梢の隙より、美しき目もてそとさし覗くのみとなりぬ。童子はこれを見るごとに戀しく懷かしきこと限なく、人知らぬ愛に胸を苦めたりき。漁父は童子を伴ひて海に往き、艫を搖し帆を揚げ、暴風と爭ひ怒濤と鬪ふことを敎へつ。年長けて後、この少年の今は影だに見せぬ昔の友を懷ふ情は愈〻深くのみなりゆきぬ。月清く波靜なる夜半に、獨り舟中にあるときは、ともすれば艫を搖す手のおのづから休み、澄み渡りて底深く生ふる藻のゆらめくさへ見ゆる水にきと目を注けて、瞬もせず打目守ることとあり。かゝる時は昔の少女、その嬌眸を睜きて水底より覗き、或は頷き或は招けり。とある朝漁村の男女あまた岸邊に集ひぬ。そは旭日の波間より出でむとする時、一箇の奇しく珍らしき島國のカプリに近き處に湧き出でたればなり。飛簷傑閣隙間なく立ち竝びて、その翳なきこと珠玉の如く、その光あること金銀の如く、紫雲棚引き星月懸れり、現にこの一幅の畫圖の美しさは、譬へば長虹を截ちてこれを彩りたる如し。蜃氣樓よと漁父等は叫びて、相指して嬉み笑へり。彼の漁父の子のみは獨り笑はざりき。知らずや、かの樓閣はわが昔少女と共に遊び暮しゝ處なるを。懷舊の念しきりにして、戀慕の情止むことなく、雙眸淚に曇る時、島國は忽ち滅えたり。月ある宵の事なりき。島國は又湧き出でぬ。忽ち一隻の舟ありて、漁父等の立てる岬の下より、弦を離れし征箭の如く、波平かなる海原を漕ぎ出で、かの怪しき島國の方に隱れぬ。黑雲空を蔽ひて、海面には暗綠なる大波を起し、潮水倒立して一條の巨柱を成せり。須臾にして雲斂まり月清く、海面復た平かになりぬ。されど小舟は見えざりき。彼漁父の子も亦あらずなりぬ。歌ひ畢るとき、喝采の聲前に倍し、我膽力は漸く大に、我興會は漸く高し。

第三曲の題はタッソオなりき。われは一たびタッソオたりしことあり。レオノオレは即ちアヌンチヤタなり。我等はフェルララ宮中に相見たり。われは囹圄の苦を嘗め、懷裡に死を藏して又自由の身となり、波立てる海を隔てゝソルレントオより拿破里を望み、また聖オノフリイ寺の槲樹の下に坐し、戴冠式の鐘聲カピトリウム街頭に起るを聞けり。されど冥使早く至りて其冠をわれに授けつ。是れ不死不滅の冠なりき。思想の急流は我を漂し去りて、我心跳は常に倍せり。

最後の一曲はサッフォオの死を題とす。嫉妬の苦も亦我が自ら味ひたるところなり。アヌンチヤタが手負ひたるベルナルドオに否まざりし接吻は、今憶ふも猶胸焦がる。サッフォオの美はアヌンチヤタに似て、その戀情の苦は我に似たり。波濤はこの可憐なる佳人を覆ひ了んぬ。(十六世紀の伊太利詩人タッソオと前七世紀の希臘女詩人サッフォオとの傳は今煩を憚りて悉く註せず。)看客は皆泣けり。拍手の聲は狂瀾怒濤の如く、幕一たび墮ちて後、われは二たび幕の外に呼び出されぬ。

喜は身に滿ち兼ねて胸を壓せり。舞臺を下りて、人々の來り賀するに逢ひし時、われは痙攣のさましたる啼泣を發したり。此夕サンチニイ、フェデリゴ及二三の俳優は我が爲めに小筵を開けり。我心は嬉みたれど我舌は縺ぼれた

りき。フェデリゴ打興じて曰ふやう。此男は一の明珠なり。その一失は第二のヨゼツフたるにあり。(ヨゼツフは童貞女の夫にして耶蘇の義父なり。) 盍ぞ薔薇を摘まざる、その凋落せざるひまに。

夜更けて後客舎に歸り、聖母と救世主との我を棄て給はざりしを謝して、いと穩なる夢を結びつ。

人火天火

翌朝は心地爽かに生れ更りたる如くにて、われはフェデリゴに對して心のうちの喜を語ることを得たり。身の周圍なる事々物々、皆我を慰むるものに似たり。又我心は一夜の間に老成人となりたるを覺えぬ。そは喝采の雨露の我性命樹上に墜ちて、其果實を熟せしめたるにやあらむ。われは昨夜サンタの劇場にありしを知る。いでや往きて彼夫人をたづね、その讃詞をも受けてましと、足の運も常より輕く、マレツチイ博士の家に往きぬ。博士は繰り返しつゝよろこびを陳べて、さてその妻の劇場より歸りし後夜もすがら熱に惱みしを告げたり。又曰ふ、今は眠れり、眠醒めなば必ず快きに至るならむ、夕暮に再び訪ひ給へと。午餐にはフェデリゴ新に獲たる友だちと、我を誘ひ出して酒店に至り、初め白き基督涙號を傾け、次いで赤き「カラブリア」號を倒し、わが最早え飮まずと辭むに迨びて、さらば三鞭酒もて熱を下せなどいひ、歡を盡して別れぬ。街に歩み出づれば、大空は照りかゞやきぬ。そはヱズヰオの山の噴火一層の熾しさを加へて、熔巖の流愈ゝ濶く漲り遠く下ればなり。岸邊には早くそを看むとて、舟を買ひて漕ぎ出づるものあり。

「アエ、マリア」の鐘鳴り止む頃、再び博士の家に往きぬ。門に進みて婢に問へば、家にいますは夫人のみにて、目覺めて後は快くなれりとのたまへり。閒雜の客をばことわれと仰せられつれど、檀那は直ちに入り給ひても宜しからむとなり。美しくして晴れがましからず、心もおのづから靜まりぬべき室なり。窓の前には厚き質の幌を垂れたるが、長く床を拂へり。鐵研ぐ愛の神の童の大理石像あり。アルガント燈は人を迷はさむと欲する如き光もてこれを照し出せり。こはわが轉瞬の間に看出したる室内のさまなりき。夫人は輕げなる寢衣を着て、素絹の長椅の上に横はりたりしが、我が入るを見て半ば身を起し、左手もて被を身に纏ひ、右手を我にさし伸べたり。

アントニオの君よ、思の儘に捷ち給ひぬ、おん身も嬉しと思ひ給ふならむ、千萬人の心は渾て君に奪はれたり、君は初め我がいかに君のために胸を跳らせ、後君の成功の期するところに倍するに及びて、いかに君のために安心の息を嘘きたるかを知り給ふまじとは、夫人が我を迎ふる詞なりき。われはその病を問ひしに、否、はや瘥えむとす、君も生れ更り給へる如し、舞臺に立ち給ひしとき、君の姿は美しかりき、極めて美しかりき、興會に乘じて歌ひ給ふに及びては、この世の人とは覺えざりき、又その歌ひ給ふところは皆君が上なるやうに聞き做されたり、地下の窟に迷ひ入りし少年と畫工とは、君とフェデリゴの君とに外ならず思はれたりといふ。われ。いかにもそは宣ふところの如し、我が歌ひしは皆我閲歴なりしなり。夫人。しかなるべし。君は戀の喜をも知り給へり、戀の悲をも知り給へり。君は樂を享くべき福ある人なり。今よりその福を消受し給はむことをこそ祈れといふ。われ隨卽きのふより心爽かになりて、四邊のものごとの我を樂ましむる由を語りしに、夫人は我手を引き寄せて我と目と目を見合せたり。その目なざしは人の心の奧深く穿ち透すものゝ如くなりき。夫人は現に美し

き女なりき。又此時は常にも增して美しく見えたり。その頰は薄紅に匂へり。形好くつややかなる額際より、平に後ざまに櫛けづりたる黑髮は、ゆたかなる波打ちて背後に垂れたり。譬へば古のフィヂアスならではえ作るまじきユノの姿にも似たるなるべし。夫人。されば君は世のために生存へ給ふべき人なり、世の寶なり、幾百萬の人をか喜ばせ樂ませ給ふらむ。ゆめ一人の人になその尊き身を私せしめ給ひそ。世の中の人、誰かおん身を戀ひ慕はざらむ。おん身の才、おん身の藝は、いかなる頑なる人の心をも挫きつべし。斯く云ひつゝ、夫人は我を引きて、其長椅の緣に坐けさせ、さて詞を繼ぎて云ふやう。猶改めておん身に語るべき事こそあれ。曩昔の日おん身が物思はしげに打沈みてのみ居給ひしとき、拙き身のそを慰め參らせばやとおもひしことあり、その時より今日までは、まだしみ〴〵とおん物語せしことなし。いかに申し解き侍らむか。おん身は妾が心を解き誤り給ひしにはあらずやと思はれ侍りといふ。嗚呼、此詞は深く我を動したり。我もしばしば或は情厚き夫人の詞、夫人の振舞を誤り解したるにはあらずやと、自ら疑ひ自ら責めしことあり。われは唯ゝ、御身が情は餘りに厚し、我身はそを受くるにふさはしからずと答へて、夫人の手背に接吻し、自ら勵まし自ら戒めて、淨き心、淨き目もて夫人の面を仰ぎ視たり。夫人の美しく截れたる目の深黑なる瞳は、極めて靜かに極めて重く、我面を俯視す。若し人ありて、此時我等二人を窺ひたらむには、われその何の辭もてこれを評すべきを知らず。されどわれは聖母に誓ふことを得べし。我心は淸淨無垢にして、譬へば姉と弟との心を談じ情を話するが如くなりしなり。さるを夫人の目には常ならぬ光ありて、その乳房のあたりは高く波立てり。われはその自ら感動するを以爲へり。夫人は呼吸の安からざるを覺えけむ、領のめぐりなる紐一つ解きたり。夫人は、おん身にふさはしからざる情といふものあるべしや、おん身の才あり、おん身の貌ありてとさゝやきて、徐かに臂を我肩に纏ひ、きと目と目を見合せて、無際限の意味ありげなる、名狀すべからざる微笑を面に湛へ、猶其詞を繼いで云ふやう。いかなれば妾は初め君を知る明なくして、空想に耽り實世に疎き、偏僻なる人とは看做したりけむ。おん身は機微を知り給へり、機微を知るものは必ず能く勝を制す。妾が血を焚いて熱をなすものは何ぞ。妾を病ましむるものは何ぞ。妾は寤めて何をか思へる。妾は寐て何をか夢みたる。おん身の愛憐のみ。おん身の接吻のみ。アントニオよ。妾が身を生けむも殺さむも、唯ゞおん身の命のまゝなり。夫人はひしと我身を抱けり。一道の猛火は夫人の朱唇より出でゝ、我血に、我心に、我靈に燃えひろごりたり。彼時速し、此時遲し。はたと我頂を擊つものあり。嗚呼、功德無量なる聖母よ。こはおん身の像を寫せる小圖にして、偶ゞ壁頭より墮ち來りしなり。否ず、偶ゞ墮ち來りしに非ず。聖母は我が妖氛の波に沈み果てむを愍みて、ことさらに我を喚び醒し給ひしなり。否々と叫びて、我は起ち上りぬ。我渾身の血は涌き返る熔巖にも比べつべし。アントニオよ、妾を殺せ、妾を殺せ、只だ妾を棄てな去りそと、夫人は叫べり。其瞼、其眸、其瞻視・其形相、一として情慾に非ざるものなく、而も猶美しかりき。火もて書き成せる天人の像とや謂ふべき。我身の內なる千萬條の神經は一時に震動せり。我は一語を出すこと能はずして、室を出で階を下りぬ、怖ろしき物に逐はれたらむ如く。

戶の外の皆火なること、身の內の皆火なると同じかりき。薰赫の氣に先づ面を搏てり。エズ

キオの巓は炎焔霄を摩し、爆發の光遠く四境を照せり。涼を願ふ煩心は、我を驅りてモロの船橋を下り、汀灣に出でしめたり。我は身を浪打際にはたと僵しつ。我は自ら面の灼くが如く目の血走りたるを覺えて、巾を鹹水に漬して額の上に加へ、又水を渡り來る汐風の些しをも失はじと、衣の鈕を鬆開せり。されど到る處皆火なるを奈何せむ。山腹を流れ下る熔巖の色は海波に映じて、海もまた燃えむとす。眸を凝らして海を望めば、髣髴の間、サンタが姿のこの火焔の波を踏みて立ち、その燃ゆる如き目なざしもて我を責め我に訴ふるを視、耳邊忽ち又妾を殺せ、妾を殺せと叫ぶを聞く。われ眼を閉ぢ耳を掩ひ、心に聖母を念じて、又眶を開けば、怖るべき夫人の身は蹌踉きて後に踏れむとす。そのさま火焔の羽衣を燒くかとぞ見えし。あはれ、其罪を想ふだに、畏怖の念の此の如きあり。その罪を遂げたらむ後は、果して如何なるべき。

もゆる河

舟に召さずや、檀那、トルレ、デル、アヌンチヤタへ渡しまゐらせむと呼ぶ聲は、身のほとりより起りて、そのアヌンチヤタといふ語は、猶能く思に沈みし我を喚び起せり。頭を擡げて見れば、岸近く櫂を止めたる舟人あり。熔巖の流るゝこと一分時に三臂長なりといへり、（伊太利の尺の名）往きて看給はむとならば、半時間には渡しまゐらせむといふ。舟は我熱を冷すに宜しからむとおもへば乘りぬ。舟人は棹取りて岸邊を離れ、帆を揚げて風に任せたるに、さゝやかなる端艇の快く、紅の波を凌ぎ行く。汐[illegible]南の頬を吹きて、呼吸漸く鎭まり、彼方の岸に登りしときは、心も頗るおちゐたり。

我は心に誓ひけるやう。我は再び博士の閾を踰えじ。禁ぜられたる果を指ざし示す美しき蛇に近づきて、何にかはすべき。幾千の人か、猶これによりて我を嘲り我を侮るべけれど、猶良心に責められむには迥に優れり。壁の上なる聖母は、我を墮さじとてこそ自ら墮ち給ひけめ。斯く思ふにつけて、聖母の惠の袖に掩はれつゝ、水をも火をも避け得つべき喜は一身に溢れ、心の中に有りとあらゆる善なるもの正なるものは一齊に凱歌を奏し、我は復た心の上の小兒となりぬ。天に在す父よ、願はくは禍を轉じて福となし給へと唱へつゝ、身を終ふるまでの安樂の基を立てもしたらむ如く、足は心と共に輕く、この小都會を歩み過ぎて、田園間の街道に出でぬ。

人叫び、人笑ひ、人歌ひ、徒にて走るものあり、大小くさぐさの車を驅るものあり。その騷しさ言はむ方なし。熔巖の流は今しも山麓なる二三の村落を襲へるなり。一群の老若男女ありて、奔り逃れむとす。左に嬰兒を抱き、右に裹みを挾める村婦の、且泣き且走るあり。われは財嚢を傾けてこれに贈りぬ。われは山に向ふ看者の間に介まりて、推されながらも、白き石垣もて爲切りたる葡萄圃の中なる徑を登り行きぬ。衆人は先を爭ひて、熔巖の將に到らむとする部落の方へと進めり。われは數畝の葡萄圃を隔てて、始て熔巖を望み見たり。數間の高さなる火の海は墻を掩ひ屋を覆ひて漲り來れり。難に遭へるものは號泣し、壯觀に驚ける外國人は讙呼して、御者商人などは客を招き價を論ぜり。馬に跨れる人あり、車を驅れる人あり、燒酎鬻ぐ露肆を圍みて喧譟する農夫の群あり。凡そ此等の物總て火光に照し出されたれば、そのさま筆舌もて描き盡すべからず。熔巖は同じ嚮に流れ行くものなれば、好事のものは歩み近づきて迫り視ることを得べし。杖の尖又は貨幣などを插込みて、熔巖の凝りて着きたるを抜き出し、こを看たる記念にとて持ち

行くものあり。流れ下る熱質の一部、その高きが爲めに分れて迸り落つることありて、その奇觀は岸拍つ波に似たり。その落ちて地上に留まるや、猶暫くその火紅を存じて、銀河の側に輝く星を看る如し。既にして空氣は漸くその隅角と周緣とを冷却して黑變せしめ、そのさま黑き絲もて編める網に黃金を裹める如し。

熔巖の流れ行く先なる葡萄の幹に聖母の像を懸けたるものあり。こはその功德もて熔巖の炎を避けむとのこゝろしらひなるべし。されど熔巖はその方嚮を改めず。像を懸けたる一本の葡萄は、早く熱のために葉を焦し、その幹は傾きて、首を垂れ憐を乞ふ如くなり。衆人の中なる淳樸なる民等が眼は、その發落いかならむとの尊き神像に注げり。幹は愈〻曲り低れて、今や聖母のおほん裳裾と火の流との間數尺となりぬ。忽ち我が立てる側なるフランチスクス派の一僧ありて、もろ手高くさし上げて叫べり。聖母は火に燒かれ給はむとす。汝等を永劫不滅の火焔の中より救ひ給ふ聖母なるぞ。早や助け出さずやといふ。衆人は皆震慄して一歩退き、畏怖の眼を睜りて、次第に撓む梢頭の尊像を仰げり。一人の女房あり。口に聖母の御名を唱へつゝ、走りて火に赴きて死せむとす。爾時僅に數尺を剩したる烈火の壁面と女房との間に、馬を躍らして騎り入りたる一士官あり。手に白刃を拔き持ちてかの女房を逐ひ卻け、大音に呼びけるやう。物にや狂ふ、女子、聖母爭でか汝が援を求めむ。聖母は己拙く描き彩りたる、罪障深きものゝ手に穢されたる影像の、灰燼となりて滅せむことをこそ願ふなれといふ。その聲はベルナルドオが聲なり。その行は倏忽の間に一人の命を助けて、その言は俗僧の妄誕をいましめ得たるなり。われはこの昔の友を敬する念を禁ずること能はずして、運命の我等二人を遠隔けしを憾とせり。されど我胸は高く跳りて、今渠に對ひて名告り合ふことを欲せず、又能はざりき。

舊羈絆

アントニオならずやと呼ぶ聲あり。我に迫りて手を捻れり。初はわれベルナルドオの己れを認め得たるならむとおもひしが、その面を視るに及びて、そのファビアニ公子なるを知りぬ。公子はわが昔の恩人の壻にして、フランチエスカの君の夫なり。我を以て不義の人となし、我に訣絶の書を贈れる人の族なり。公子。こゝにて逢はむとは思ひ掛けざりき。夫人に語らば定めて喜ぶことならむ。されどいかなれば夙く我們を訪ねむとはせざりし。カステラマレに來てより既に八日になりぬ。われ。君達のこゝに在すべしとは、毫しも思ひ掛けざりき。そが上わが伺候を許し給はむや否やだに知らねば。公子。現にさることありき。おん身は昔にかはる男となりて、婦人のために人と決鬪し、脫走したりとの事なりき。そは我とても好しとは思はず。をぢ君のことば短なる物語にて、その概略を知りし時は、我等もいたく驚きたり。おん身はをぢ君の書を獲たるならむ。その書は優しき書にはあらざりしならむといふ。我はこれを聞きつゝも、むかしの羈絆の再び我身に纏るゝを覺えて、只ゝ恩人に見放されたる不幸なる身の上を侘ちぬ。公子は我を慰めがほに、又詞を繼いで云ふやう。否々、おん身を見放さむはをぢ君の志にあらず。我車に上りて共に來よ。今宵は妻のために思掛なき客を伴ひ還らむとす。カステラマレは遠くもあらず。旅宿は狹けれど、猶おん身が憩はむ程の房はあるべし。をぢ君の性急なるはおん身も兼ねて知れるならずや。この和睦をばわれ誓ひて成し遂ぐべしといふ。我は首を垂れてこの平ぎの覺束なかるべきを告げしに、公子は無造作に我詞を打消して、

我を延きて車の方に往きぬ。

車に乗りてより、公子は我に別後の事を語れと迫りぬ。わが賊寨に入りしことを語るに及びて、公子は面に笑を帶びて、そは卽興詩にはあらずや、記憶より出でずして空想より出づるにはあらずやといひ、又恩人の絶交書の事を語るに及びて、苛酷なり、太だ苛酷なり、されどそはおん身の改悛すべきを期してなり、おん身を愛してなり、おん身はよもや非を遂げて劇場に出でなどはせざりしならむといふ。われは直ちに、否、昨夜出でたりと答へき。公子。そは實に大膽なる事なりき。結果はいかなりしか。われ。望外なりき。喝采の聲止まずして、幕の外に出でゝ謝すること再びなりき。公子。御身にかゝる成功ありしか。そは責めてもの事なりき。此詞は我材能に疑を挾めるものなれば、われはそを聞きて快からずおもひぬ。されど恩惠の我口を塞げるを奈何せむ。われは夫人に會はむことの心苦しさを訴へしに、公子は唯ゞ戲に、そは說法なくては濟まぬならむ、されど說法を聽聞せむもおん身に害あらじと答へぬ。

兎角いふ程に、車は旅店の門に到りぬ。一少年の髮に燒塲當てゝ好き衣着たるが、門前に立てり。公子を迎へて云ふやう。ファビアニなるか。好くこそ歸り來たれ。細君は待兼ね給へり。かく云ひつゝ我を視て、扨は新顏の卽興詩人を伴ひ歸りしか、チェンチイといふなるべし、違へりやと云ふ。公子はチェンチイとはと我面を顧みたり。われ。そは我が番附に書かせし名なり。公子。然なりしか。そは責めてもの思案なりき。少年。ファビアニ、御身は此人のいかに戀愛を歌ひしを想ひ得るか。昨夜おん身が「サン、カルロ」座に往かざりしこそ遺憾なれ。めでたき才藝にこそとて、我と握手し、我と相見る喜びを述べ、又ファビアニに向ひて云ふ。今宵はおん身に晩餐の馳走を所望すべし。この好謳者をおん身等夫婦にて私せむとはせまじ。公子。問はるゝまでもなく、おん身は何時にても我方に歡迎せらるゝならずや。少年。さるにてもおん身は、何故に猶我等二人のために紹介の勞を取らずして、互にその名を知ることを得ざらしむるぞ。公子。そはいらぬ禮儀なり。われは熟く渠と相知れり。汝は我友なれば、渠は特らに紹介をば求めざるべし。渠は唯ゞおん身を知ることを得たるを喜ぶならむといふ。此挨拶は固より我心に慊ねど、われは又恩惠のために口を塞がれたり。少年は我方に向ひぬ。さらばわれ自ら我身を紹介すべし。おん身の何人たるは我既に知れり。我名はジェンナロなり。國王陛下の護衞たる一將校なり。(微笑みつゝ。)拿破里の名族にて、世の人は第一に位すとぞいふ。そは僞にもあらざるべし。就中わがをばは頗るこれに重きを置けり。おん身の如きを知るは、大いなる幸なり。おん身の才と云ひおん身の吭と云ひと、猶詞を繼がむとするを、ファビアニは押しとゞめて、止めよ〳〵、さる挨拶を受くることは猶不慣なるべし、紹介とやらむも最早濟みたるべければ、夫人の許に往かむ、かしこには又和議といふ難關あり、おん身仲裁の煩を避けずば、今の辯舌を殘し置きて其時の用に立てよと云ひつゝ、彼士官と我とを延きて、旅店の一間に進み入りぬ。われはこの生客の前にて、我身の上の大事を語らるゝを喜ばねど、二人は親しき友なるべければと自ら思ひのどめて、遲れ勝に跟ひ行きぬ。

やうやくにして歸り給ひしよと迎ふるは、久しく面を見ざりしフランチェスカの君なりき。公子。現にやうやくにして歸りぬ。されど二人の賓客を伴へり。夫人は一聲アントニオと云ひしが、忽ち又調子を更へてアントニオ君と云ひつゝ、その嚴かに落つきたる目を擧げて、夫と

我とを見くらべたり。われは身を傴めてその手に接吻せむとせしに、夫人は我を顧みず、手をジェンナロにさし伸べて、晩餐の友を得たる喜を述べ、夫に向ひて、エズヰオの爆發はいかなりし、熔巖はいづ方へ流れむとするなど問ひぬ。公子は略〻見しところを語りて、我等の邂逅の事に及び、今は客として伴ひたれば昔の事を責め給ふなと云へり。ジェンナロ。然なり。此人いかなる罪を犯しゝか知らず。されど天才には何事をも許さるべきならずや。夫人は纔に面を和げて我に會釋しつゝジェンナロに對ひて云ふやう。君のいつも面白げに見え給ふことよ。犯しゝ科もあらねば、免すべき何の事もなし。けふは何の新しき事を齎し給ふ。佛蘭西新聞には何の記事かありし。昨夜はいづくにてか時を過し給ひしと問ひぬ。ジェンナロ。新聞には珍らしき事も候はず。作夜は劇場にまゐりぬ。セヰルラの剃手の僅に末齣を餘したる頃なりき。ジョゼフィインはまことに天使の如く歌ひしが、一たびアヌンチヤタを聞きし耳には、猶飽かぬ節のみぞ多かりし。さはいへ我が往きしは彼曲のためにはあらず。即興詩を聞かむとてなりき。夫人。その即興詩人は君の心に協ひしか。ジェンナロ。わが期する所の上に出でたり。否、衆人の期せし所の上に出でたり。我は諛はむことを欲せず。又藝術は我等の批評もて輕重すべきものにあらず。されど我は夫人に告げむとす。夫人よ、渠の即興詩をいかなる者とか思ひ給ふ。謳者の人物はその詩中に活動して、滿場の客はこれが爲めに魅せらるる如くなりき。何等の情ぞ。何等の空想ぞ。題にはタッソオあり、サッフォオあり、地下窟ありき。篇々皆書卷に印して、不朽に垂るとも可なるやう思ひ候ひぬ。夫人。そは珍らしき才ある人なるべし。きのふ往きて聽かざりしこそ口惜しけれ。ジェンナロ。(我方を見て)夫人は其詩人の今宵の客なるをば、まだ知らでやおはせし。夫人。さてはアントニオなりとか。舞臺にまで上りて、即興詩を歌ひぬとか。ジェンナロ。然なり。その歌は舞臺の上にも珍らしき出來なりき。されど夫人は舊く相識り給ふことなれば、定めて屢〻その技倆を試み給ひしならん。夫人。(ほゝゑみつゝ。)まことに屢〻聞きたり。まだ童なりし頃より、アントニオが技倆をば讃め居りしなり。公子。その時われは早く桂の冠をさへ戴かせたり。夫人は處女なりしとき其即興詩の題となりぬ。されど今は食卓に就くべき時なり。ジェンナロ、おん身はフランチェスカを伴ひ往け。われは外に婦人なければ即興詩人を伴はむ。いざ、アントニオ君、手を携へて往かむと、戯れつゝ我を導けり。ジェンナロ。さるにても、ファビアニ、おん身は何故我に一たびもチェンチイの事を語らざりしぞ。公子。我家にてはアントニオと呼びならへり。その即興詩人となれるを夢にだに知らねばこそ、前の和睦の一段は生じたるなれ。アントニオは言はゞ我家の子なり。アントニオ、然にはあらずや。(我は公子を仰ぎ視て會釋せり。)アントニオは好き人物なり。唯〻物學ぶことを嫌へり。ジェンナロ。渠け既に萬物を師とする詩人なり。いかなれば强ひて書を讀ませむとはし給ひし。夫人。(戯の調子にて。)餘りに讃めちぎり給ふな。我等が渠の机に對ひて數學理學に思を罩むるを期せし時、渠は拿破里の女優に懸想してうはの空なりしなり。ジェンナロ。そは多情多恨なる證なるべし。女優とはいかなる美人なりしぞ。その名をば何とかいひし。夫人。アヌンチヤタとて人柄も技倆も共に優れし女なりき。ジェンナロ。(盃を擧げて。)アヌンチヤタは我も迷ひし一人なり。それは好趣味ありと謂ふべし。さらば、即興詩人の君、アヌンチヤタの健康を祝して一杯を傾けてむ。(我は苦痛

を忍びて盞を碰せたり。）夫人。そも一わたりの迷にあらず。議官の甥と鞘當して、敵手には疵を負はせつれど、不思議にその場を遁れ得たり。かくてこたび「サン、カルロ」座には出でしなり。アントニオをば舊く知りたれども、その大膽なることかくまでならむとは、我等も思ひ掛けざりき。ジェンナロ。その議官の甥と宣ふは、近頃こゝに來て禁軍の指揮官となりし男ならむ。我も前の夜出逢ひしが、才氣ある好男子と思はれたり。想ふに情夫先づ來りて、アヌンチヤタも繼いで至るにはあらずや。此推測にして差はずば、拿破里はアヌンチヤタが最後の興行とその合卺の禮とを見るならむ。夫人。禁軍の將校たるもの、爭でか歌妓を娶るべき。そは家を汚すに當るべければ。われ。震ふ聲をえも隱さで。）名士の妻を藝術界に求めて、幸福と名譽とを得たるは、その例ありとこそ思ひ候へ。夫人。幸福は或は有らむ。名譽は有るべきやうなし。ジェンナロ。否、おん身に忤ふには似たれど、己れなどはアヌンチヤタを得ば、名譽此上なしとおもへり。されば人も然ならむとおもふなり。そは兎まれ角まれ、アントニオの君、今宵の即興を聞せ給へ。夫人は君がために好き題を選み給ふべければ。夫人。そは選むまでもなし。ジェンナロの好むところにしてアントニオの能くするところといはゞ、題は戀愛と定まり居るならずや。ジェンナロ。善くこそ宣ひたれ。その戀愛とアヌンチヤタとを題とせむ。われ。又の日にはいかなる題をも辭まざるべし。今宵のみは免し給へ。心地も常ならぬやうなり。外套着ずして汐風を受け、直ちに火山の熱さに逢ひ、歸るさの車にて又涼風に觸れし故にや。公子。アントニオも早や技藝家の自重といふことを覺えたりと見えたり。今宵は免すべければ、明日は共にペスツムに往け。かしこには詩料あり。こも亦拿破里におん身が自重を示す手段なるべし。（我はえ辭まで會釋せり。）ジェンナロ。好し、渠を伴ひて行かむ。渠一たび希臘廢祠の中に立たば、神來の興、忽ち動きて、古のピンダロスを欺く詩を得るならむ。公子。明日より四日の旅路なり。歸るさにはアマルフィイとカプリとを見むとす。夫人。旅の事をば猶明朝かたらふべし。夫人先づ起ちて我等は卓を離れ、我は始て夫人の手に接吻することを得たり。公子は今夜書を作りてをぢに寄せ、我がために地をなさむと云ひぬ。ジェンナロは打ち戲れて、我はアヌンチヤタを夢にだに見む、夢なれば決鬪を求むる人はあらじと云ひて別れぬ。

我若しこの遊を辭みなば、我生涯の運命はこゝに一變したるならむ。後に思へば、此遊の四日は我少壯時代の六星霜を奪ひ去りたるなりき。誰か人間を自由なりと謂ふ。いかにも我は、目前に張りたる交錯せる綱を擇み引くことを得べし。されど我はその綱のいづれの處に結ばれたるを知るに由なし。我は恩人の勸に會ひて諾と曰ひたり。こは我生涯の未來の幾齣のために、舞臺の幕を緊しく閉づべき綱なりしを奈何せむ。已みぬるかな。

われは數行の書をフェデリゴに寄せて、この思掛なき邂逅と小旅行とを報ぜむとす。こを寫し畢りしとき、我胸には種々の情の群り起るを覺えき。さても此夕の事多かりしことよ。サンタが道ならぬ戀、ベルナルドオの再び逢ひて名乘り合はざる、恩人にめぐりあひての後の境遇、彼といひ此といひ、此身は風のまに〱弄ばるゝ一片の木葉にも譬へつべき心地ぞする。きのふは緣なくゆかりなき公衆の喝采を得て、けふは世に稀なるべき美人のわが優しき一言を希ひ求むるに逢ふも我なり。忽ち舊誼の綱に手繰り寄せられて、一餐の惠に頭を垂れ、再び素のカムパニアの孤となるも我なり。

恩人夫婦はわが昔の罪を宥して我を食卓に列らしめ、我を遊山に伴はむとす。豈慈愛に非ざらむや。唯〻富人の手に任せて輕く投畀するときは、その賚は貧人心上の重荷となるを奈何せむ。

苦言

伊太利風景の美は羅馬又はカムパニアの郊野に在らず。されば我が少しくこれを觀ることを得しは、曾てネミの湖畔に遊びし時と近ごろ拿破里に來し時とのみ。こたび尋ねし勝槪こそは、始めて我心を滿ち足らしめ、我をして平生夢寐する所の仙鄕に居る念をなさしめしものなれ。凡そ外國の人などの此境を來り訪ふものは、これをその曾て見し所の景に比べて、或は勝れりとし或は劣れりともするなるべし。足本國の外を踐まざる我徒に至りては、只〻その瑰偉珍奇なるがために魂を奪はれぬれば、今復たその形勝をだに語ることを得ざるならむ。

素とわれは山水の語ることを得べしや否やを疑ふものなり。山水の全景は一齊に人目を褰ふ。而るにこれを筆舌に上すときは、語を累ねて句を作し、句を積みて章を作し、一の零碎の景に接するに他の零碎の景を以てす。譬へば寄木細工の如し。いかなる能辯能文の士なりとも、その描寫遺憾なきことを得ざらむ。そが上に我が臚列する所の許多の小景は、われ自らこれを前後左右に排置して寄木の如くならしむるに由なし。その排置の如きは、一に聽者讀者の空想に委ぬ。是に於いてや、我が說く所の唯一の全景は、人々の心鏡に映じて千樣萬態窮極することなし。且人をして面貌を語らしめて聽け。目は此の如し、鼻は此の如しと云はむも、到底これに縁りて其眞相を想像するに由なからむ。唯〻君の識る所の某に似たりと云ふに至りて、僅にこれを彷彿すべきのみ。山水を談ずるも亦復是の如し。人ありて我にヘスペリアの好景を歌へと曰はゞ、我は此遊の見る所を以てこれに應ふるならむ。而して聽者のその空想の力を彈して自ら描出する所のものは、竟にわが目擊せし所の美に及ばざるなるべし。蓋し自然の空想圖は遙に人間の空想圖の上にあるものなればなり。

カステラマレを發せしは天氣めでたき日の朝なりき。これを憶へば嶮立つヱズヰオの巓、露けく綠深き葡萄の蔓の木々の梢より梢へと纏ひ懸れる美しき谿間、或は苔を被れる岩壁の上に顯れ或は濃き橄欖の林に遮られたる白堊の城砦など、皆猶目前に在る心地ぞする。穹窿あり大理石柱ある竈女の祠の、今や聖母の堂となりたる(マドンナ、サンタ、マリア)は、古を好む人の心を留むべき遺蹟なり。一壁崩壞して、枯髏殘骨の露呈せる處に、葡萄の蔓這ひ來りて、半ばそを覆ひたるは、心ありてこの悲慘の景を見せじとするにやとさへ思はれたり。

我目前には猶突兀たる山骨の立てるあり。物寂しく獨り聳えたる塔の尖に水鳥の群立ち來らむを候ひて網を張りたるあり。脚底の波打際を見おろせばサレルノの市の人家碁子の如く列れり。而して曾〻その街を過ぐる一行ありしがために、此一寰區は特に明かなる印象を我心裡に留むることを得たり。角極て長き二頭の白牛一車を輓けり。車上には山賊四人を縛して載せたるが、その眼は猛獸の如く、炯々として人を射る。膚黑く貌美しきカラブリア人あり。銃を負ひて、車の兩邊を騎行せり。

旅の初一日の宿をばサレルノと定めたり。この中古學問の淵叢たる市に近づくとき、ジェンナロのいふやう。繁華は黃變すべし。サレルノ騷壇のうはさは今既に滅せり。されど自然といふ大著述は歲ごとに鏤梓せらる。予はアントニオと同じく、師とするところ此に在りて彼に在らず

といふ。われ答へて、自然固より師とすべし、只ゝ書册も亦未だ棄つべからず、譬へば酒飯の並びに廢すべからざるが如しといひしに、フランチエスカの君は我言を是なりとし給ひぬ。

此寺ファビアニ公子傍より、アントニオよ、言ふは易く行ふは難きものぞ、羅馬に歸りての後は、その詞の僞ならぬを明にせよといふ。羅馬の一語は我が思ひ掛けざるところなりき。我は心の中に、復た羅馬には往かじと誓ひながら、詞に出して爭はむとはせざりき。

公子は更に語を繼ぎてさま〲の事をいひ出で、人々のこれに答へなどするひまに一行は早くサレルノに到りぬ。我等は先づ一寺院に入りたり。ジエンナロ進み出でゝいふやう。こゝにてはわれ案内者たることを得べし。これはサレルノにてみまかり給ひし法皇グレゴリヨ七世（獨帝と爭ひて位を逐はれ、千八十五年此に終りぬ）の遺骨を收めし龕なり。その大理石像はかしこなる贄卓の上に立てり。さてこの石棺は歷山大帝の遺骸を藏むといふ。公子。何とかいふ、歷山大帝の軀こゝにありとや。ジエンナロ。我が聞きしは然なりき、さにはあらずや、と寺僮を顧みれば、まことに仰の如しと答ふ。われつら〲棺を見て、否、そは誤なるべし、歷山大帝の軀こゝに在りといはむは、歷史を蔑にするに近し、この浮彫の圖樣は大帝凱旋の行列なれば、かゝる誤を傳へしにや、見給へ、かしこなる寺門に近き處にもこれに似たる石棺ありて、その圖樣は酒神の行列なり、彼棺は素とペスツムに在りしを、こゝに移してサレルノの一貴人の永眠の處となし、その石像をば傍に立てたり。此類の棺槨いと多し、大帝の事を圖したりとて其屍を藏むとは定め難しといふ。ジエンナロは唯ゝ冷かに、現にさることあらむも計られずとのみ答へしに、フランチエスカの君我耳に付きて、自ら怜悧がりて人を屈するは惡しき習ぞと宣ふ。我は頭を低れて人々の後に退きぬ。

晩鐘の鳴る頃、公子とジエンナロとは散步にとて出で、我は夫人に侍して客舍の軒に坐し居たり。海づらは乳の如き白色に見え、熔巖石を敷きたる街路より薔薇紅にかゞやける地平線のあたりまで、いと廣やかに晴れ渡り、波打際は藍色にきらめけり。かゝる色彩の配合は羅馬の無きところなり。われ、めでたき彩絢には候はずやと云へば、夫人、見よ、雲は今「フエリチツシイマ、ノッテ」（幸ある夜を祈る）を言ふ時ぞ、と山嶽の方を指ざし給ふ。橄欖の林に隱顯せる富人の別業の邊よりは迥に高く、二塔の巓を摩する古城よりは又迥に低く、一叢の雲は山腹に棚引きたり。われ。彼雲の中に棲みて、大海の潮の漲落を觀ばや。夫人。さなり。かしこに住みて卽興詩を吟ぜよ。唯ゝ聽くもののなきが恨なるべし。われ。のたまふ如く、其恨は思ひ棄て難し。詩人の喝采を受くるは草木の日光を受くると同じ。阿國のタッソオが身を害ひしは、獨り戀路の關を据ゑられしが爲めのみにあらず。その詩の爲めに知音を得ざるを恨みしが爲めなり。夫人。われは今おん身が上を語れり。タッソオが事を言はず。われ。タッソオは詩人なり。されば好き例と思ひて引き出でしまでに候ふ。夫人、アントニオよ、さてはおん身は自ら詩人なりと許す心あるにやあらむ。我上を語らむときは、不朽の業ある人の名をば呼ばぬぞ好き。おん身は物に感動し易き情ありて、又能くさる情を解するより、直ちに己れの詩人たるを信ぜむとするならむ。そは世間幾多の人の具ふる所にして、又能くする所なり。これに惑ひて徒らに思ひ上がりなどせば、生涯の不幸となるべきものぞといふ。われは面の火の如くなれるを覺えて、仰せはさる事ながら、わが自ら深く信ずるところをば包まで申すを聞き給

へ、「サン、カルロ」座なる數千の客は我に何の由縁もなきに、口を齊うして喝采したり、われは惠深き君の我喜を分ち給はむことを忖りしにと答へたり。夫人。おん身の友は多かるべし。されどまことにおん身の喜を分たむもの我が如きは少からむ。おん身の情に厚きこと、心ざまの卑からぬことは、我等よく知りたり。さればこそをぢ君の御腹立をも申解かばやとさへ思ふなれ。おん身には好き稟賦あり。學ばゞ一廉の人物ともなるならむ。されど今の儘にては、その才僅かに坐客の耳を悅ばしむるに足りて、未だ世に立ち名を成さむには遑あらざるべし。われ。才の拙く學の足らざるは、げにおん詞の如くなり。されどわが公衆に對せし時の成功をば、君の親しく視給はねば知らせ參らせむやうなし。只ゞ君の信ぜさせ給ふと覺しきジェンナロの君は彼夕劇場にありて、我技を賞し給ひきと申さば足りなむ。夫人。おん身はジェンナロを證人とせむとやいふ。ジェンナロは好き紳士なれど、われは其藝術上の批評には重きを置かず。劇場に集ひし一夜の公衆に至りては、いよ／＼信ずべからず。おん身若し彼夕もろひとに辱められむには、われ深く憾とすべし。その事なくして罷りしは、まことに自他の幸なり。おん身が場に上りしは唯ゞ一夜にして、假名をさへ用ゐぬれば、かゝる夢の如きよしなしごとの久しく人の記憶に殘らむ憂はあらじ。三日の後には我等又拿里破に在り。そのあくる日には羅馬へ旅立すべし。羅馬に往きて、おん身の耐忍と勉勵とを見せよ。御身に眞の事を告ぐるは我のみぞとのたまひぬ。

古祠、瞽女

ペスツムは宿るべき家もなく、こゝよりかしこへの道は賊などの出沒することもありと聞えければ、翌日まだ暗きに一行は車に上りぬ。騎馬の憲兵は護衞として車の傍に隨へり。

道の左右には柑子の林ありて、その鬱茂せる狀は深山の森にも似たるべし。セラの流を渡るときは、垂柳月桂の澄める水の面に影を倒せるを見き。荒蕪せる丘陵の間、時に穀の長ぜる田圃あり。道に沿ひて蘆薈覇王樹など野生したるが、皆ところ得がほに、延び育ちたり。

既にして一行は一古祠の前に立てり。卽ち二千年前の建立にして、その樣式希臘時代の粹と稱せらる。この祠、見苦しき酒店一軒、貧しげなる人家三棟、籐もて作れる小屋三つ四つ。是れ世界に名高きペスツムの村なり。いにしへは此村薔薇に名あり。見渡す限り紅の霞に掩はれたりし由物に見えたれども、今は一株をだに留めず。身邊渾て是れ綠にして、其色遙に山嶺に連れり。平地には菫花多く、薊その外の雜草の間に咲きひろごりたり。自然の力餘ありて人間の工を加へざる處なれば、草といふ草、木といふ木、おのがじし生ひ榮ゆるが中に、蘆薈、無花果、色紅なる「ピュレトルム、インヂクム」などの枝葉さしかはしたる、殊に目ざましくぞ覺えられし。

シチリアの自然、その豐饒の一面と荒蕪の一面とはこゝにあり。シチリアの希臘古祠はこゝにあり。而してシチリアの貧窶もまたこゝにあり。一行のめぐりには一群の乞丐來り集ひたり。その狀南海諸島の蕃人にも似たるべし。男子は長き羊の皮を、毛を表にして身に纏へり。暗褐色なる雙脚には靴を穿かず、剪らざる髮は黑き面の邊に翻り垂れたり。妬ましき迄に直に美しく生ひ立ちたる娘たちのこれに隨へるを見るに、そのさま半ば赤はだかなりといふべし。膝の上まで截り開きたる短衣は裂け綻び、鬆く肩に纏へる外套めきたる褐色の布は垢つきよごれ、長き黑髮をば項に束ね、美しき目よりは恐ろしき光を放てり。

此群に十二歳を踰えじと見ゆる、すぐれて麗しき娘あり。アヌンチヤタとなるべき姿にもあらず、さればとて又サンタとなるべき貌にもあらず。前にアヌンチヤタが物語に聞きつる、メヂチ家の愛憐神女の像は、かゝる面影あるにはあらずやと思はる。實に此少女の清き容は、人をして囘抱せむと欲せしむるものにあらで、却りて膜拜せむと欲せしむるものなり。

この少女は少し群を離れて立てり。褐色なる方巾は肩より垂れたるが、巾を纏はざる方の胸と臂とは悉く現はれたり。雙脚には何物をも着けざりき。かくはかなき身と生れても、流石に粧ひ飾る心をば持ちたるにや、髮半かに結ひ上げて、一束の菫花を插せるが、額の上に垂れ掛れり。われその容を窺ふに、羞慚あり、慧あり。而して別に一種言ふべからざる憂愁の色を帶びたる如くなりき。唯ゞその雙眸は恆に地上に注ぎて、人の面を見むことを恐るゝものゝ如し。

口々に物いふ中に、この少女のみは一言をだに發せざりき。ジェンナロ先づ進み寄りてこれに錢を與へ、手を頤の下に掛けて、此群には惜しき佳き兒ぞといふ。公子夫婦もまことに然なりといひぬ。われは少女の面の紅を潮するをみたり。少女は目を開けり。而してわれ始てその瞽なるを知りぬ。

われは同じくこれに物を贈らむと欲して敢てせざりき。既にして人々は乞丐の群に窘められて、酒店の軒に逃げたれば、獨り立ち後りて、盾錢一つ握らせたり。盲人の聰き習として、少女はその常の錢ならぬを知りたるなるべし。顏は燃ゆる如くなりて、その健かに美しき脣は我手背に觸れたり。われはその接吻の渾身の血に浸み渡る心地して、遽しく我手を引き退け、酒店の軒に馳せ入りぬ。

酒店は只だ一室ありて、大いなる竈殆どその全幅を占めたり。惜しげもなく投げ入れたる薪は盛に燃えあがりて、烟は岫を出づる雲の如く、騰りて黑みたる仰塵に至り、更に又出口を求めて室内をさまよへり。主人の蔭多き大柳樹の下にありて、誂へし朝餉の支度する間に、我等はこの烟煤の窟を逃れ、古祠を見に往くこととしたり。委它たる細徑は荊榛の間に通ぜり。公子とジェンナロとは手を組み合せて、フランチェスカはこれに腰掛けつゝ舁かれ行く。

漫步には似つかはしからぬ恐ろしき道かな、と夫人笑みつゝ云へば、案内者の一人、さのたまへど三とせの前迄は此道全く棘に塞がれたりき、又已れが幼き頃社の圓柱のめぐりに、砂土堆く積もり居しを記え居り候ふと答ふ。一行の案内者は皆この詞の謬らざるを證せり。一行の後にはさきの乞丐の群猶慕ひ來り、皆目を瞠りて我等を打目守れり。若しわれ等にしてふとその一人の面を見ることあるときは、その手は忽ち賜を受くるがために伸べられ、その口は忽ち「ミゼラビレ」（憐をこふ語）を唱へ出すなり。瞽女はいづち往きけむ見えず。われはあはれなる少女の、獨りいかなる道の邊に蹲り居るかを思ひ遣りぬ。

我等は一の劇場と一の平和神祠との迹なる斷礎の上を登り行きぬ。ジェンナロ人々を顧みて、あはれ平和と演劇との二つのもの、いかなればかく迄相親むことを得たるぞといふ。（劇場の徒の多く相嫉視するを諷するにや。）我等は海神祠の前に立てり。世にはこれを「バジリカ」とぞいふ。近き頃、彼ポムペイの古市と同じく、闇黑の裡より出でゝ人の遺忘を喚び醒したるものは、此祠と穀神祠となり。この祠の荊棘に鎖され、土石に埋められたること幾百年ぞ。幸に外國の一畫師ありてこゝを過ぎ、柱尖の僅に露出せるを見、その美を喜びて寫し歸りしより、世の人こゝに注目し、終に棘を

刈り土を掘りて、此の宏壯なる柱堂の、新に落せるものゝ如く、耽古者流の愛で翫ぶところとなるには至りしなり。圓柱は黄なるトラヱルチイノ石もて作られたり。(相對上新しき地層の石にして、石灰分ある温泉の鹽類の凝りて生ずる所なり。)無花果樹はその隙に枝さしかはし、野生の蒲萄は柱頭迄攀ぢ上り、石質の罅隙を生じたる處には、菫花の紫と「マチオラ」の紅とを見る。

我等は倒れたる一圓柱の趺の上に踞したり。ジェンナロの力に頼りて、乞兒の群を逐ひ拂ふことを得たりしかば、我等の心靜に四邊の風景を玩ぶには、復た何の妨もあらざりき。山の姿、海の色、この古神祠の頽敗の状など、一として我情を動かさゞるものなし。公子、今こそは我等がために一篇の即興詩を作すことを辭せざるならめ、と問ひ掛け給へば、夫人も頷きて同じ心を表し給ふ。われは柱を背にして立ち、少時記せしところの一歌謠の調を借りて、目前の景を歌ひ出せり。山水の美、古藝術のすぐれたる遺蹟を見るにつけ、哀なるはかの目しひたる少女の上にぞある。この自然の無盡藏は誰も受くべき賜なるに、少女はそをだに受くることを得ずといふ。これ我一曲の主なる着想なりき。歌闋る比ひには、われ聲淚共に下るを禁ずること能はざりき。ジェンナロは手を拍ちて激賞し、公子夫妻はわが多少の情あるを認諾せり。

人々は石級を下りぬ。われはこれに從はむと欲して、ふと頭を囘らしゝに、我が倚りたりし柱の背後に、身を薫高き「ミュルッス」の叢に埋めて、もろ手を項に組み合せたる人あるを見き。而してそはかの目しひたる少女なりき。われはこの哀むべき少女の我歌を聞きしを知りぬ、我がその限なき不幸を歌ふを聞きしを知りぬ。餘りの便なさに、身を傴めてさし覗けば、袖は稍に觸れてさや〳〵と鳴り、少女はさとくも頭を擡げつ。われは思做にや、その面の色のさきより蒼きを覺えたるが、少女を驚さむことのいとほしくて、身を動すことを敢てせざりき。少女は暫し耳を欹てゝアンジェロにやと呼びぬ。われは覺えず屛息せり。少女は又俯きて坐せり。前にアヌンチヤタの我に語りし希臘の神女も、石彫の像なれば瞻視をば闕きたるべし。今我が見るところは殆ど全くこれに契へりとやいふべき。少女は祠の礎に腰掛けて、身を無花果樹と「ミュルッス」との裡に埋め、手に一物を取りてこれを朱脣に宛て、面に微笑を湛へたり。何ぞ料らむ、その物は我が與へしところの盾銀ならむとは。

我情はこれに動かされて耐へ忍ぶべからざるに至りぬ。我は再び身を傴めて少女の額に接吻せり。少女はあなやと叫び、物に驚きたる牝鹿の如く、瞬く隙に馳せ去りぬ。その叫びし聲は我骨髓に徹し、その遽しく奔り去りし状は我心魂を奪ひ、われは身邊の柱楹草木悉く旋轉するを覺えて、何故ともなく馳せ出し、荊莽の上を踏みしだきつゝ徐かに歩める人々を追ひ越し行きぬ。

アントニオ、アントニオと呼ぶ公子の聲迴なる後に聞えて、我は始て我にかへりぬ。兎をや獵せむとする、否ずば天馬空を行くとかいふ詩想の象徴をや示さむとする、と公子語を繼いで云へば、ジェンナロ、否、われ等の跬歩に塞める處を、渠は能く飛行すと誇るなるべし、いざ我が濟勝の具の渠に劣らぬを證せむとて、我傍に引き傍うて走り出しぬ。公子後より、汝等は我が夫人の手を扶きて同じ戲をなすことを要むるにやといふとき、ジェンナロは直に歩を駐めたり。

酒店に歸り着きし後は、瞽女は影だに見えざりき。その叫びし聲の猶絶間なく耳に聞ゆる

を、怪しとおもひてつく〴〵聽けば、そは我心跳のかく閙做さるゝにぞありける。嗚呼卑むべきは我心にもあるかな。少女が胸中の苦を永言して、これをして深く生涯の不幸を感ぜしめ、終にはその額に接吻して驚かしたるは何事ぞや。そが上にかの接吻は我が婦女に與へたる第一の接吻なり。少女の貧しきを侮り、その目しひたるを奇貨として、我は我が未だ嘗て敢てせざりしところのものを敢てしたり。我はベルナルドオを輕佻なりとせり。而るに我が爲すところも亦此の如し。現に塵の世に生れたる人、誰か罪業なきことを得む。いかなれば我は自ら待つことの寬くして、人を責むることの酷なりしぞ。われ若し再び瞽女に逢はば唯ゝ地上に跪いてこれに謝せむ。

一行は車に上りてサレルノに歸らむとす。我は心に今一度瞽女を見むことを願ひしが、人に問ふことを憚りたり。忽ちジェンナロの案内者を顧みて、さるにても彼の目しひたる娘はいかにしたると問ふを聞く。案内者の一人答へてララが事にて候ふや。海神祠のほとりにやあるらむ。常に彼處にあることを好めばといふ。ジェンナロは「ベルラ、ヂキナ」(神々しきまで美しき子よとなり)と呼びて、手もて接吻の眞似したり。車は動き出しぬ。さては彼子の名をばララといふとこそ覺ゆれ。われは駁者と背中合せに乘りたれば、古祠の柱列のやうやく遠ざかりゆくを見やりつゝ、耳には猶少女の叫びし聲を聞きて、限なき心の苦しさを忍び居たり。

路傍に「チンガニイ」族の一群あり。火を溝渠の中に焚きて食を調へたり。手に小鼓を把りて、我等を要して卜筮せむとしつれど、駁者は馬に策ちて進み行きぬ。黑き瞳子の睒電の如き少女二人、暫し飛ぶが如くに車の迹を追ひ來りしが、ジェンナロはこれをも美しと愛で稱へき。されどララの氣高きには比ぶべうもあらざりき。

夕にサレルノに還りぬ。明日はアマルフィイに往きて、それよりカプリに廻りて還らむとなり。公子の宣給ふやう。拿破里に還らば、留まることは一日にして羅馬へ立たむとぞ思ふ。アントニオが準備も暇取ることはあらじと宣給ふ。われは羅馬に往くことを願はねど、例の恩誼に口を塞がれて、僅かに、老公のおほん憤の氣遣はれてとのみ云ひしに、そはわれ等申し解くべしと答へて我に詞を繼がしめ給はず。兎角する程に、賓客のおとづれ來て、會話はこゝに絕え、我不幸なる運命もまた定まりぬ。

夜襲

天氣好き日の朝舟出して、海より望めばサレルノの美しさは又一しほなるを覺えぬ。筋骨逞ましき男六人艣を搖せり。畫にしても見まほしき美少年一人柁の傍に蹲りたるが、名を問へばアルフォンソオと答ふ。水は綠いろにして透き徹り、硝子もて張りたる如し。右手なる岸の全景は、空想のセミラミスや築き起しゝ、唯ゝ是れ一大苑囿の波上に浮べる如くなり。その水に接する處には許多の洞窟あり。その狀柱列の迫持を戴けるに似て、波はその門に走り入り、その內にありて戲れ遊べり。突き出でたる巖端に城あり、城尖の邊には、一帶の雲ありて徐かに靡き過ぎむとす。我等は大島小島(マユウリイ、ミヌウリイ)を望みて、程なく彼マサニエルロとフラヰオ、ジョオヤとの故鄉の綠いろ濃き葡萄丘の間に隱見するを認め得たり。(マサニエルロは十七世紀の一揆の首領なり。オベエルが樂曲の主人公たるを以て人口に膾炙す。フラヰオ、ジョオヤは羅鍼盤を創作せし人なり。)

伊太利に名どころ多しと雖、このアマルフィイの右に出づるもの少かるべし。われは天下の

人のことごとくこれを賞することを得ざるを憾とす。此地は廣袤幾里の間、四時春なる芳園にして、其中央なる石級上にアマルフィイの市あり。西北の風絶て至ることなければ、寒さといふものを知らず。風は必ず東南より起り、棕櫚橘柚の氣を帶びて、淸波を渉り來るなり。

市の層疊して高く聳ゆる狀は、戲園の棧棚の如く、その白壁の人家は皆東國の制に從ひて平屋根なり。家ある處を踰えて上り、山腹に逼るものは葡萄丘なり。山上には堞壁もて繞らされたる古城ありて雲を撐ふる柱をなし、その傍には一株の「ピニヨロ」樹の碧空を摩して立てるあり。

舟の着く處は遠淺なれば、舟人は我等を負ひて岸に上らしめたり。岸には岩窟多くして、水に浸されたると否ざるとあり。小舟三つ四つ水なき處に引上げたるを、好き遊びどころにして、子供あまた集へり。身に挂けたるは、大抵襦袢一枚のみにて、唯ゝ稀に短き中單を襲ねたるが雜れり。「ラッツァロオネ」といふ賤民(立坊抔の類)の裸裎なるが煖き沙に身を埋めて午睡せるあり。その常に戴ける褐色の帽は耳を隱すまで深く引き下げられたり。寺院の鐘は鳴り渡れり。紫衣の若僧の一行あり。頌を唱へて過ぐ。捧ぐる所の礫像には、新に摘みたる花の環を懸けたり。

市の上なる山の左手に、深き洞穴に隣れる美しき大僧堂あり。今は外人の旅館となりて、凡そこゝに來らむ程のもの一人としてこれに投ぜざるはなし。夫人をば輿に載せて舁かせ、我等はこれに隨ひて深く巖に伐り込みたる徑を進みぬ。下には淸き蒼海を瞰る。一行は僧堂の前に留りぬ。內暗き洞穴は我等に向ひて其腭を開けり。穴の裏には十字架三基ありて、耶蘇と二賊との像これに懸り、巖上には彩衣を着て大いなる白き翼を負ひたる數人の天使跪けり。皆美術品などいふべき限のものにはあらず、木もて彫り斑にいろどりたるまでなり。されど信仰の溫き情は影を此拙作の上に留めて、おのづから美を現ぜり。

小き中庭を歩みて宿るべき部屋々々に登り着きぬ。我室の窓より見れば、烟波渺茫として、遠きシチリアのあたりまで只ゝ一目に見渡さる。地平線の際に、しろかね色したるものゝ點々數ふべきは舟なり。

ジェンナロは我を遊歩に誘はむとて來ぬ。いかに詩人よ。共に麓のかたに降り行きて、かしこの風景の美のこゝに殊なりや否やを見むとおもはずや。少くも女性の美は麓のかたの優れたること疑ふべからず。こゝの隣房なる英吉利人の色蒼ざめて心冷なるは、我が堪ふること能はざる所なり。おん身も女子を見ることをば嫌ひ給はぬならむ。恕し給へ、こは我ながらおろかなる問なりき。女子を見ることを嫌ひ給はねばこそ、君はこゝらわたりを彷徨ひて、我は又この邂逅の奇緣を結ぶことを得つるなれ。斯く戲れつゝ、ジェンナロは我を促し立てゝ石難を下り行けり。途すがら又いふやう。猶忘れ難きは彼の目しひたる娘の美しさなり。拿破里に歸りての後、カラブリア酒誂へむをりは、かの娘をも共に取寄せむとぞおもふ。我血を沸きたしむる功は此も彼に讓らざるべし。

我等は市街に歩み入りぬ。アマルフィイの市は裹める貨物をみだりに堆積したる狀をなせり。羅馬なる猶太街の狹きも、これに比べては尙通衢大路と稱するに足るならむ。こゝの街といふは、まことは家と家との間に通じ、又は家を貫きて通じたるろぢの類のみ。或るときは狹く長き步廊を行くが如く、左右に小き窓ありて、許多の暗黑なる房に連れり。或るときは巖壁と石垣との間に、二人並び歩むに堪へざるばかりの道を開けるが、暗くして曲り、濕りて穢れ、

級を從り級を降りて、その窮極するところを知らず。我等はをり／＼身の戸外に在るを忘れて、大いなる廢屋の内を彷徨ふ念をなせり。所所燈を懸けて闇を照すを見る。而して山上は日猶高かるべき時刻なりしなり。

既にして我等は稍〻開豁なる處に出でたり。一の石橋あり。こなたの巖端よりかなたの巖端に架したり。橋下の辻は市内第一の大逵なるべし。二少女ありて「サタレルロ」の舞を演ぜり。貌めでたく膚褐いろなる裸裎の一童子の、傍に立ちてこれを看るさま、愛の神童に彷彿たり。人の説くを聞くに、この境寒を知らず。數年前祁寒と稱せられしとき、寒暑針は猶八度を指したりといふ。（寒暑針はレオミユウル式ならむ。）

巖頭に小き塔ありて、美しき入江の景色の、遠く大小二島の邊まで見ゆる處より、蘆薈、「ミユルツス」の間を通ずる迂曲せる小みちあり。これを行けば、幾もあらぬに、穹窿の如く茂りあへる葡萄の下に出づ。我等は渴を覺えぬれば、葡萄棚のあなたに白き屋壁の緑樹の間より見ゆるを心あてに歩をそなたへ向けたり。蹊暖の空氣の中には草木の香みち／＼て、美しき甲蟲あまた我〻の身邊を飛びめぐれり。

到り着きて見れば、この小家のさまの畫趣多きこと言はむかたなし。壁には近き故墟より掘り出したる石柱頭と石碑石脚とを塗り籠めて飾とせり。屋上に土を盛りて園とし、柑子の樹又はくさ／＼の蔓草類を栽ゑたるが、その枝その蔓四方に垂れ下りて、緑の天鵞絨もて掩へる如し、戸前には薔薇叢ありて花盛に開けるが、殆と野生の狀をなせり。六つ七つばかりの美しき小娘二人その傍に遊び戲れ、花を摘みて環となす。されどそれより一際美きは、此家の門口に立ち迎へたる女子なり。髮をば白き紗布もて束ねたり。その瞻視の情ありげなる、睫毛の長く黑き、肢體の品高くすなほなる、我等をして覺えず恭しく帽を脱し禮を施さゞること能はざらしめたり。

ジエンナロ進み近づきて、さては此家あるじこそは、土地に匹儔なき美人なりしなれ。疲れたる旅人二人に、一杯の飲を惠み給はむやと云へば、いと易き程の御事なり、戸外に持ち出でてまゐらせむ、されど酒は只〻一種ならでは貯へ侍らずと笑ひつゝ答ふ。その眞白なる齒に、脣の紅はいよ／＼美さを增すを覺えき。

ジエンナロ。酒はいかなる酒にもあれ、君の酌みて給はらむに、旨からぬことやはある。美しき娘の酌める酒をば、われ平生嗜みて飲めり。

女主人。されどけふは美しき娘のあらねば、色香なき人妻の酌みてまゐらするを許し給へ。

ジエンナロ。さらば君ははや主ある花となり給ひしにや、そのうら若さにて。女主人。否、われははや年多くとりたり。この時傍聽したりしわれ、おん身の、紀いくばくぞと問ひぬ。想ふにこの女子まだ十五ばかりなるべけれど、丈伸びて恰好なれば、「ヘエベ」女神の像の粉本とせむも似つかはしかるべし。女主人はわが何の爲めに問ひしかを疑ふものゝ如く、我面を暫し守りて二十八歳と答へつ。ジエンナロ。そはまことに好き年紀にて、殊におん身には似あひたり。さるにても人の妻となりてより幾年をか經給ひし。女主人。最早十とせあまりになりぬ。かしこなる娘たちに問ひ試み給へかしといふ。この時先に門の口にて遊び居たりし二人の娘、我等が前に走り來りぬ。われは故意と娘等に向ひて、これは汝たちの母なりやと問ひしに、娘等はゑましげに主人を見て、さなり／＼と頷きつつ右ひだりより主人に倚り添ひたり。

女主人は酒もち來りて薦めたり。その味はいとめでたかりき。我等は杯を擧げてあるじの健康を祝したり。ジエンナロわれを指さし

て、この男は詩人なり、舞台に出で、卽興詩といふ者を歌ふを業とす、されば拿破里の婦人をばことごとく迷はしたれど、生來頑なること石の如く、世に謂ふ女嫌ひなどいふものにや、まだ婦人に接吻したることなしといへり、珍らしき人にあらずやといへば、主人、さる人は世に有りがたからむとて笑へり。ジェンナロ語を繼ぎてわれはそれとは裏なり、あらゆる美しき女を愛し、あらゆる美しき女に接吻し、あらゆる美しき女の身方となりて、到るところ人の心をやはらぐ、されば美しき女に接吻を求むるは我權利なり、我が受け納るべき租稅なり、これをばおん身も拂ひ給はざるべからずといひて、つとあるじの手を撈りたり。女主人。われは人の心やはらげ給ふといふおん惠に與らむことをも願はず、さればさる租稅をもえ納め侍らず。我租稅をば、我夫自ら來りて收め取る習なり。ジェンナロ。その夫はいづくにあるか。女主人。さまで遠からぬところにあり。ジェンナロ。われは拿破里に居れども、いまだかくまで美しき手を見つることあらず。此上に接吻一つせむといはゞ、價いくばくをか求め給ふ。女主人。盾銀一つにては貴かるべきか。ジェンナロ。さらば盾銀二つ出さば、脣をも任せ給ふべきか。女主人。否、そは千金にも換へ難し。そは吾夫の特權なり。この對話の間、女あるじは我等に酒を侑めて、ジェンナロの慣慣しきをも惡む色なく、倘暫く無邪氣なる應答をなし居たり。我等はあるじのまことは十四歲にて、去年同じ里の美少年某と結婚せしこと、その夫は今拿破里にありて明日歸り來るべきこと、二人の子どものあるじの妹にて夫の留守の間來り合れることなど、話の裏より聞き出せり。ジェンナロは二人の小娘に、查列斯銀一つ（伊太利名「カルリイノ」約十五錢五厘）與ふべければ薔薇の花束得させよといひて、そを遠ざけ、あるじに迫りて接吻せむとしたり。初めは詞もてさまぐ〜に誘ひたれどその驗なかりき。次には戲のやうにもてなして、搔き抱きたれど、女はいち早く擦り脫けたり。終には路易金一つ（「ルイドオル」と云ふ、約九圓七十八錢）取出し、指もて撮みて女の前にきらめかし、只だ一たびの接吻を許さば、これをおん身におくるべし、この金あらば、めでたき色紐あまた買はるべし、その黑き髮に映好きものを擇み試みむは、いかに樂かるべきぞなど、繰返して說き勸めつ。女は我を指して、あちらのおん方は、おん身に比ぶれば迥に善き人なりと云へり。われ女の手を取りて、努彼詞に耳傾けむとなし給ひそ、彼黃金の色に目を注がむとなし給ひそ、彼男は惡しき人なり、願はくは彼男にの面當に、われに接吻一つ許し給へといひぬ。女はきと我面を見たり。われ重ねて、さきに彼男の我上を語りし中に、唯ゞ一つの事實あり。われ未だ一たびも女の脣に觸れずといひしは是なり、我脣は淸淨なり、われに接吻し給ふは小兒に接吻し給ふと同じといひぬ。ジェンナロ。さて〳〵狡猾なる事を言ふものかな。女をくどく方便のみはわれ汝に優れりと覺えつるに、今は汝又我を凌がむとす。女主人。否々、御身は金をこそ持ち給へれ、心ざま善ならぬ人なり。我が黃金をも何ともおもはず、接吻をも何とも思はぬをおん身に見せむため、我はこの詩人の方に接吻すべし。斯く言ひ畢りて、女主人は雙手もて我頰を押へ、我脣に接吻して、家の內に走り入りぬ。

日の入り果てし頃、われは獨り山上なる寺院の一房に坐して、窓より海を眺め居たり。波頭の殘紅は薔薇色をなして、岸打つ潮に自然の節奏を聞く。舟人は漁舟を陸に曳き上げたり。暮色漸く至れば、新に點したる燈火その火を增して、水は碧色にかゞやけり。一時四隣は

寂として聲なかりき。忽ち歌曲の聲の岸より起るあり。こは漁父の妻子と共に歌ひ出せるにて、子どもらしき「ソプラノ」の音は低き「バッソオ」の音にまじりたり。一種の言ふべからざる情は我胸に溢れて、我心はこれがために震ひ動けり。一の流星あり。その疾きこと擊石火の如く、葡萄の林のあなたに隕ちぬとぞ見えし。けふ我に接吻せし氣輕なる新婦の家も亦彼林のあなたにあり。われは彼女主人の美かりしをおもひ出で、又彼海神祠の畔なる乞女の美しかりしをもおもひ出でしが、その背後には心と身と皆美しかりしアヌンチヤタありて、その一たび點したる火は今も猶我身を焦せり。我は餘りの堪へ難さに、口に聖母の御名を唱へて、瓶裡の薔薇一輪摘み、そを脣に押し當てつゝ心には猶アヌンチヤタが上を思へり。われは情に堪へずして、僧堂を出で、海の方へ降り行きぬ。即ち星輝を浴びたる波の岸に碎くる處、漁父の歌ふ處、涼風の面を撲つ處なり。歩みて晝間過ぎし所の石橋の上に至りぬ。この時一人の身に大外套を被り、忙しげに我傍を馳せ去りたるあり。われはその姿勢態度を見て、直ちにそのジェンナロなるを知りぬ。ジェンナロは驀地に走りて曾て憩ひし白壁の家に向へり。我は心ともなく、その後に跟ひ行きぬ。家の窓よりは燈火の影洩りたるが、彼の外套着たる姿は其光に照されて、窓の直下に浮び出でぬ。われは葡萄架の暗き處に躱れ、石に踞して其狀を覗ひ居たり。帷を引かざれば、室の內外の光景は明白に我眼に映ぜり。この家の裏の方、側廂に通ずる大なる梯の室內より見ゆる處に、別に又一つの窓あるをも、われは此時始て認め得たり。

室內には一小卓を安んじ、上に十字架を立てたるが、燈をばその前に點せるなり。二人の小娘は衣を脫して、白き汗衫を鬆やかに身に纏ひ、卓の下に跪きて讚美歌を歌へり。姉なる新婦も亦二人の間に坐せり。我目に映じたる此一幅の圖はラファエロの筆に成りたる聖母と二天使との圖と擇むことなかりき。新婦の漆黑なる瞳子は上に向ひて、その波紋をなせる髮は白き肩に亂れ落ち、もろ手は曲線美しき胸の上に組み合されたり。

われは屛息してこれを窺ひ居て、我脈搏の亢進するを覺えたり。既にして三人は立ちあがりぬ。新婦は二兒を延きて梯を上り、しばらくありて靜かに傍廂の戶を閉ぢ、獨り梯を下り來りぬ。さて窓に近きところを往來して、物取り片付けなどし、ふと何事をか思ひ出でしものゝ如く、簞笥の前に坐して、その抽箱より紅色の手帳一つ取り出だしつ。打ち返し見てほゝ笑み、開き見むとするさまなりしが、忽ち又首打ち掉りて、手快く抽箱の中に投じたり。そのさま密事して父母などに見られし小兒に似たりき。

暫くして裏の方なる窓を敲く音す。新婦は驚きて頭を擡げ、耳欹てゝ聞けり。敲く音は又響きて、何事をか戶外にて言ふ如くなれど、其詞は我が居るところには聞えず。新婦は忽ち聲高く呼べり。檀那は何とて斯く遲くこゝに來給ひしぞ。何の用のおはすにか。うしろめたき事には侍らずやといふ。戶外の人は又何やらむ言ひたり。新婦。さなり〳〵。おん詞はまことなり。おん身は手帳を忘れ置き給へり。さきに妹に持せて、麓なる宿屋まで遣りたれど、かしこにてはさる檀那は宿り給はずといひぬ。定めて山の上に宿り給ふならむ。つとめて又持たせ遣らむとこそ思ひ侍りしなれ。手帳は現にこゝに在り。斯く云ひて、新婦は抽箱よりさきの手帳を取出せり。戶外の人は何やらむ言へり。新婦は首を掉りて、否々、門の口をばえひらき侍らず、おん身のこゝに來給はむは宜しか

らずと云ひ、起ちてかなたの窓を開きつ。手帳をわたさむとして差し伸べたる新婦の手をば、外より捧りたりと覺しく、手帳ははたと音して窓の外に落ちたり。ジェンナロの頭は此響と共に窓の内に顯れたり。新婦は走りてこなたの窓のほとりに來つ。これより後我は明に二人の詞を聞することを得るに至りぬ。

ジェンナロ。さらば君はわが感謝のために君の手に接吻するをだに許し給はぬにや。物落しし人の拾ひ主に謝するは世の習ならずや。そが上に走りてこゝに來つれば、喉乾きて堪へ難し。我に一杯の酒を飮ませ給ふとも、誰かはそを惡しき事といはむ。何故に君は我がそこに入らむとするを拒み給ふぞ。新婦。否、かく夜ふけておん身と物言ひ交すだに影護き事なり。疾くおん身の手帳を取りて歸り給へ、我は窓を鎖すべきに。ジェンナロ。我はおん身の手を握らでは歸らず。おん身のけふ我に惜みて、彼馬鹿者に與へ給ひし接吻を取り返さでは歸らず。新婦は周章の間に一聲の笑を洩せり。否々。君は人の與へざる所のものを奪はむとし給ふにや。君強ひて奪はむとし給はば、われまた誓ひて與へざるべしといふ。ジェンナロは哀れげなる聲していふやう。我等の相見るはこれを限なると思ひ給ひそ。われは再び此地に來るものにあらず。さるを君は我が手を握らむといふをだに聽き納れたまはず。我胸には君に言ふべき事さはなれど、我が手を握らむの願の外は、われ敢て口に出さじ。聖母は我等に何とか教へ給ふぞ。人は兄弟姉妹の如く相愛せよとこそ宣給へ。われはおん身の兄弟なり。我黃金をおん身と分ちて、おん身の艷やかなる姿を飾る料となさむとこそ願へ。貴き飾を身に着け給はば、おん身の美しさ幾倍なるべきぞ。おん身の友だちは皆おん身を羨むべし。されど我とおん身との中をば世に一人として知るものなからむ。斯く云ひも果てず、ジェンナロは一躍して窓より入りぬ。新婦は高く聖母の名を叫べり。

われは表の窓に走り寄りて、力を極めて其扉を打ちたり。硝子はから〳〵と鳴りたり。我は目に見えぬ威力に驅らるゝものゝ如く、走りて裏口に至り、得物もがなと見廻す程に、葡萄架の横木引きちぎりつ。女はニコオロにやと叫べり。さなり、我なりと、われは假聲して答へたり。室内の燈消ゆると共に、ジェンナロは窓より跳り出で、いち足出しに逃げて行く。其外套は風に翻へれり。ニコオロよ、いかにしておん身は歸りし、これも聖母の御惠にこそといひつゝ、婦は窓に走り寄りぬ。その聲は猶慄けり。われは叱りて、恕し給へ君と叫びぬ。あなやと呼ぶ女の聲と共に、扉ははたと鎖され、われは茫然として獨り窓外に立てり。

暫しありて、我は新婦の靜かに歩み、戸を開き、戸を閉ぢ、錠を下す音を聞き、今は心安しとおもひて、そと歸途に就きぬ。われは心中に無量の喜を覺えたり。かくてこそわれは瞬間の接吻に償い得つるなれ。若し彼女主人にして我が守護の功を悟り知りたらむには、褒は猶一たび接吻することをも辭せざりしなるべし。

旅館に歸りしに恰も晩餐の時なり。人々は我が外に出でしを知らざるさまなり。食卓に就きて程經ぬるに、ジェンナロのみ來ざりければ、フランチェスカの君は心を勞し、公子はあまたたび人を馳せて、その歸るを候はせぬ。ジェンナロはやう〳〵にして來り、漫歩して岐に迷ひ、農夫に教へられて纔に歸ることを得つといふ。夫人その姿を見て、げにおん身の衣は綻びたりといへば、ジェンナロ手もてその破れたる處を摘み、この端の斷れたるは棘にかゝりて跡に殘りぬ、われは直ちに心附きぬれど、奈何ともすること能はざりき、このあたりにて

斯くまで道を失はむとは、流石に思掛けざりき、日暮の景色を弄ぶ中、俄に暗くなりしを見て、近道より歸らむとおもひしが事の原なりといふ。一座は此遊の可笑しき話柄を得たりとて打ち興じ、杯を擧げて、此迷失兒の健康を祝しつ。こゝの葡萄酒はいと旨きに、人々醉を帶び、歡を竭して分れぬ。

わが寢室に入りしとき、隣室なるジェンナロは上衣を脱ぎ襦袢一つとなりて進み來り、いとさかしげに笑ひつゝ、掌を我肩上に置きて、晝見つる美人の爲めに思を勞すること莫れといふ。われ。然か宣給へど、接吻をばわれ博し得たり。渠。そは固よりなり。されどわれを始終繼子たりしものとな思ひそ。われ。繼子たりしや否やは知らず。唯ゞ繼子らしかりしは事實なり。渠。われは未だ曾て繼子たりしことなし。おん身若し能く祕密を守らば、われは敢て告ぐるところあらむとす。われ。何事まれ語り給へ。われは誓ひて餘所に洩さゞるべし。渠。さらば句まず語るべし。われは歸るさに故意と手帳を遺れ置きぬ。そは日暮れて再び往かむ爲めなり。原と女といふものは、只二人向ひ居ては頑ならぬが多し。さて我は再び往きぬ。衣の綻びたるは、墻を踰え籬を穿ちし時の過なり。われ。さらば女はいかなりし。渠。晝見しよりも美しかりき。美しくして頑ならざりき。わが預め度りし如く、さし向ひとなりては何のむづかしき事もなかりき。おん身が得しは只一つの接吻なりしが、わが得しは千萬にて總て殘る隈なき爲合なりき。これよりはその時のさまを樂しき夢に見むとぞおもふ。便なきアントニオよと語りもあへず、ジェンナロはおのが臥房に跳り入りぬ。

たつまき

僧堂を辭し去る朝、大空は灰色の紗を被せたる如くなりき。岸には腕たしかなる漕手幾人か待ち受け居て、一行を舟に上らしめたり。纜を解きてカプリに向ふ程に、天を覆ひたりし紗は次第に斷れて輕雲となり、大氣は見渡す限澄み透りて、水面には一波の起るをだに認めず。美しきアマルフィイは巖のあなたに隱れぬ。ジェンナロは後を指ざして、かしこにてはわれ薔薇を摘み得たりと云ふ。われは頷きて、心の中にはこの男の強顔なることよ、まことは刺に觸れて自ら傷けしものをとおもひぬ。

舟のゆくては杳茫たる蒼海にして、その抵る所はシチリアの島なり、あらず、亞弗利加の岸なり。ゆん手の方は巖石屹立したる伊太利の西岸にして、所々に大なる洞穴あり。洞前に小村落あるものは、其幾個の人家、わざと洞中より這ひ出でゝ、背を日に曝すものゝ如く、洞の直ちに水に臨めるものゝ前には漁人の火を焚き食を調へ、又は小舟に爹兒を塗れるあり。

舷下の水は碧くして油の如し。試みに手をもて探れば、手も亦水と共に碧し。舟の影の水に落ちたるは極て濃き青色にして、艣の影は濃淡の紋理ある青蛇を畫けり。われは聲を放ちて叫びぬ。げに美しきは海なる哉。若し彼蒼の大いなるを除かば、何物か能く之と美を媲ぶべき。我は幼かりし時、地に仰臥して天を觀つるを思ひ出でぬ。今見る所の海は即ち當時見し所の天にして、譬へば夢の一變して現となれるが如し。

舟はイ、ガルリといふ巖より成れる三小嶼の傍を過ぎぬ。そのさま海底より石塔を築き上げて、その上に更に石塔を倒し掛けたる如し。青き波は緑なる石を洗へり。想ふに風雨一たび到らば、このわたりは群狗吠ゆてふ鳴門（スキルラ）の怪の栖なるべし。不毛にして石多きミネルワの岬は、眠るが如き潮これを繞れり。いにしへ妙音の女怪の住めりきといふはこゝなり。

而してカプリの風流天地はこれと相對せり。いにしへチベリウス帝が奢をきはめ情を縱にし、灣頭より眸を放ちて拿破里の岸を望みきといふはこゝなり。

舟人は帆を揚げたり。我等は風と波とに送られて、漸くカプリの島邊に近づきぬ。水のまことの清さ、まことの明さを知らむと欲せば、この海を見ざるべからず。舷に倚りて水を望めば、一塊の石、一叢の藻、歴々として數ふべく、晴れたる日の空氣といへども、恐らくはこの玲瓏透徹なからむとぞおもはるゝ。

カプリの島は唯ゝ一面の近づくべきあるのみ。その他は皆削り成せる斷崖にして、その地勢拿破里に向ひて級を下るが如く、葡萄圃と橘柚橄欖の林とは交る／＼これを覆へり。岸に沿へる處には、數軒の蜑戶と一簇の埠頭とを見る。稍ゝ高き林木の間に、屋瓦の叢を成せるはアンナア、カプリイの小都會なり。一橋一門ありてこれに通ず。一行は棕櫚の木立てるハガアニイが酒店の前に歩を留めつ。

我等はこゝに朝餐して、公子夫婦は午時まで休憩し、それより驢を傭ひてチベリウス帝の別墅の址を訪はむとす。われは聽はむこゝろなければ、ジェンナロと共に此島を一周し、南に突き出でたる大石門をも見ばやとて、漕手二人を呼び、輕なる舟に乘り遷りぬ。

風少し起りたれば、我等は行程の半ばばかり帆の力に頼ることを得べし。巖壁に近き處には、漁人の網を張りたるあれば、舟はこれを避けて沖の方に進みぬ。既にして奇景の人目を驚すに足るものを見る。灰色なる巨石の直立すること千丈なるあり。その頂は天を摩し、所々僅に一石塊を容るべき罅隙を存じて、蒼若くは紫羅襴これに生じたり。青き帽の如き波に洗はれたる低き岩礁には、紅枝の毛果族(クリノイデア)いと繁く着きたるが、その紅の色に水を被りて愈ゝ紅に、岩石の波に觸れて血を流せるかと疑はる。

既にして我等は海を右にし島を左にする處に至りぬ。水を呑吐する大小の竇許多ありて、中には波の至す毎に僅かに其天井を露すあり。これは彼妙音の女怪のすみかにして、草木繁茂せるカプリの島に唯ゝこれを蓄へる屋上たるに過ぎざるにやあらむ。

漕手の一人なる白髮の翁のいふやう。這裏には惡しきもの住めり。人若し過ちて此門に入るときは、多くは再びこれを出づることを得ず。その或は又出づるものは、痴なるが如く狂せるが如く、復た尋常人間の事を解せずといふ。されど若し行手のかたに稍ゝ大なる一窟あり。舟に棹さしてこれに入らむとせば、耳を聾し頭を眩するも、魂或は驚かむか。舵取りの年少き男のいふやう。これ魔窟なり。黄金珠玉その内にみち／＼たれど、これを探らむとするものは妖火のために身を焼かる。げにいふだに恐ろしき事なり。尊きルチアよ。(サンタ、ルチア)我を護り給へといふ。ジェンナロ。彼妙音の女怪の一人此舟の中に來ぬこそ殘惜しけれ。その容色はいと好しとぞ聞く。さるものを待遇せむは、わが徒の難んぜざるところぞ。われ。おほよそ女といふ女のおん身の言に從はぬはあらざるべければ、化しやうのものなりとも、其數には洩れぬなるべし。ジェンナロ。接吻し回抱するは、海潮の常態なれば、その上に浮べるものも之に傚ふべき筈ならずや。責ては彼アマルフィイの女房をなりとも、共に載せて來べかりしものを。げに得易からぬ女なり。然おもひ給はずや。おん身も一たびは彼唇の味を試み給ひぬ。われはその人前にておとなしぶりたるを憾しとおもふなり。憾むらくはおん身はその夜のさまを見給はざりき。その迸ふる情の熱さは我が送る情の熱きに讓らざりき。ジェンナロ

「此詞は遂に我をして耐へ忍ぶこと能はざらしむるに至りぬ。我はいと冷かに、されどわが彼夕見しところは、いたくおん詞と違へりといひぬ。ジェンナロは驚きたる面持して、暫し我顏を打ち守りつゝ、何とかいふ、おん身の詞は解し難しと問ひ返しつ。われ重ねて、おん身の女子にもてはやされ給ふべきをば、われ露ばかりも疑はねど、彼夕はわれもふと同じ處に落ち合ひてまことのさまを目擊したり、さればわれは始よりおん身の詞の戲言なるべきを知りぬといふ。ジェンナロは猶訝しげに我顏を見て一語をも出さゞりき。われ微笑みつゝジェンナロが前夜の口吻を眞似て、おん身のけふ我に惜みて彼馬鹿者に與へ給ひし接吻を取返さでは歸らずといひたり。ジェンナロの面は血色全く失せて、さてはおん身は立聞せしか、おん身は我を辱めたり、我と決鬪せよといふ。其聲極て冷に、極てあらゝかなりき。わが實を述べたる一語の、此の如く渠を激せむことは、わが預期せざる所なりき。われは徐かに、ジェンナロよ、そはよも眞面目なる詞にはあらじといひて、其手を握りしに、ジェンナロは手を引き面を背け、舟人に陸に着けよと命ぜり。老いたる方の漕手答へて、舟を停むべきところは、さきに漕ぎ出でしところの外絶て無ければ、是非とも島を一周せでは叶はずといひつゝ、櫓を採す手を急にしたり。舟は深碧の水もて繞されたる高き岩石に近づきぬ。ジェンナロは杖を揮ひて舷側の水を打てり。われは且怒り且悲みて、傍より其面を打ち目守りぬ。此時年少き漕手いと慌だしく、龍卷(ウナ、トロムバ)と叫べり。その瞠視たる方を見れば、ミネルワの岬より起りて、斜に空に向ひて聳立せる一道の黑雲あり。形は圓柱の如く、色は濃墨の如し。その周邊の水、恰も鍋中の湯の滾沸せるが如くなり。ジェンナロはいづかたに避くるかと問へり。少年は徐々といへり。われ。されば又全島を巡らむとするか。少年。風なき方の岩に沿うて漕がむ。龍卷は島を離れて走る如し。翁。此小舟の若し岩に觸れて碎けずば幸なり。詞未だ畢らず、龍卷の端は一轉せり。一轉して吾舟の方に進めり。その疾きこと飈風の如し。舟若し高く岸頭に吹き上げられずば、必ず岩根に傍ひて千尋の底に壓し沈めらるべし。われは翁と共に櫓を握りつ。ジェンナロも亦少年を扶けて働けり。されど風聲は早く我等の頭上に喚りて、狂瀾は既に我等の脚下に翻れり。二人の漕手は異口同音に、尊きルチア、助け給へと叫びつゝ、櫓を捨てゝ跪拜せり。ジェンナロ聲を勵して、たゞ櫓を捨つると叱すれども、二人は專心するものゝ如く、天を仰いで瞑坐す。われは忽ち乘る所の舟の、木葉の旋風に弄ばるゝ如きを覺え、暗黑なる物の左右に迫るを見、身は高く空に騰り行けり。飛瀑の如き水は我頭上に灑ぎ、身は非常なる氣壓の加はるところとなりて、眼中血を迸らしめむと欲するものゝ如く、五官の作用既に廢して、わが絶えざること縷の如き意識は唯々死々と念ずるのみ。われは終に昏絶せり。

夢幻境

わが再び眼を開きし時の光景は、今猶目に在ること、彼壯大なる火山の消畫の如く、又彼沈痛なるアヌンチャタの別離の記念の如し。我身を繞れるものは、八面皆暗碧色なる灝氣にして、俯仰の間物として此色を帶びざるはなかりき。試みに臂を擧ぐれば、忽ち無數の流星の身邊に飛ぶを見る。われは身の既に死して無際空間の氣海に漂へるを覺えたり。我身は將に昇りて天に在せる父の許に往かむとす。然るに一物の重く我頭上を壓するあり。是れ我罪障なるべし。此物はわが昇天を妨げ、我身を引いて地に向へり、而して冷なること溺水の如き

顥氣は我顱頂の上に注げり。

　われは心ともなく手を伸べて身邊を摸し、何物とも知られぬながら、堅き物の手に觸るゝを覺えて、しかとこれに取り付きたり。我疲勞は甚だしく、我身には復た血なく、我骨には復た髓なきに似たり。我魂は天上の法廷に招かれ、我骸は海底に横はれるにやあらむ。われは纔にアヌンチヤタと呼びて、又我眼を閉ぢたり。

　われはこの人事不省の境にあること久しかりしならむ。既にしてわれは己れの又呼吸するを覺え、我疲勞の稍〻恢復すると共に、我意識は稍〻分明なりき。我身は[illegible]にして堅き物の上に在り。こは一の巨巖の頭なるべし。而して此巖は高く天半に聳えたるものゝ如く、彼の光ある碧色の顥氣のこれを繞れる狀は、前に見しと殊なることなし。天は碧穹窿をなして我を覆ひ、怪しき圓錐形の雲ありてこれに浮べり。雲の色は天と同じく、[illegible]四邊寂として音なく、天地皆[illegible]現ず。われは寒氣の骨に徹するを覺えたり。われは徐かに頭を擡げたり。我衣は青き火の如く、我手は磨ける銀の如し。されどこの怪しき身の虚き影にあらずして、實なる形なるは固なりき。我は疲れたる腦髓に鞭ちて、強ひて思議せしめむとしたり。われは眞に既に死したるか、又或は猶生けるか。われは手を展べて身下の碧氣を探りしに、こは冷なる波なりき。されどその我手に觸れて火花を散らす狀は、酒精の火に殊ならず。我側には怪しき大圓柱あり。その形は小なれども、略〻前に見つる龍卷に似て、碧き光眼を射たり。こはわが未だ除かざる驚怖の幻出する所なるか、將た未だ滅えざる記念の化現する所なるか。暫しありて、われは手をもてこれを摸することを敢てしたるに、その堅くして冷なること石の如くなりき。摸して後邊に至れば、手は堅く[illegible]なる大壁に觸る。その色は暗碧なること夜の天色の如し。

　そも〱われは何處にか在る。前に身下に碧氣ありとおもひしは、燃ゆれども熱からざる水なりき。我四圍を照すものは、彼燃ゆる水なるか、さらずば彼穹窿と巖壁と皆自ら光を放つものなるか。こは幽冥の境なるか、わが不死の靈魂の宅なるか。われは現世に此の如き境ありとおもふこと能はず。凡そ身邊の物、一として[illegible]の碧光を放たざることなく、我身も亦内より碧火を發して、その光明は十方を照すものゝ如し。身に近き傍に大石級あり。琅玕もて削り成せるが如し。これに登らむと欲すれば、巖扉密に鎖して開くべからず。推するに、こは天堂に到る階級にして、其門扉は我が爲めに開かざるならむ。我は一人の怒を齎して地下に入りぬ。ジェンナロはいかにしたるぞ、又二人の舟人はいかにしたるぞ。

　われは獨り此境に在り。我母を喪ひ、ドメニカをおもひ、フランチェスカの[illegible]、我記憶の常に異ならざるを知りぬ。さればわが見る所のものは、必ず幻影に非ざるならむ。我は故の我なり。只〻在るところの境の幽明いづれに屬するかを辨ずること能はざるのみ。

　後邊の壁に罅隙ありて、一の大なる櫃を安んず。手もて摸すれば銅の櫃なり。その内には金銀貨を盛りて溢れむと欲す。われは此異境の異の愈〻甚しきを覺えたり。

　地平線に接する處に、我身を距ること甚だ遠からず、青光まばゆき一星ありて、その清淨なる影は波面に長き尾を曳けり。われは彼星の、譬へば日月の蝕の如く、其光を失ふを見たり。既にして黑き物の其前に現るゝあり。諦視すれば、一葉の舟の、海底より湧き出でもしたらむ如く、[illegible]る水の上を走り來るに

ぞありける。

その漸く近づくを候へば、靜かに櫓を搖すものは一人の老翁なり。櫓の一たび水を打つごとに、波は薔薇花紅を染め出せり。舟の舳に一人の蹲れるあり。その形女子に似たり。舟は漸く近づけども、二人は口に一語を發せず、その動かざること石人の如く、動くものは唯だ翁が手中の櫓のみ。忽ち聲ありて、一の長大息の如く、我耳に入り來りぬ。その聲は曾て一たび聞けるものゝ如くなりき。

舟は岸に近づきて圖を畫き、我が起ちて望める邊に漕ぎ寄せられたり。翁が手は櫓を放てり。女子はこの時もろ手高くさし上げて、哀れに悲しげなる聲を揚げ、神の母よ、我を見棄て給ふな。我は何を畏みてこゝに來たりと云へり。われは此聲を聞きて一聲ラヽと叫べり。舟中の女子は彼ペスツム古祠の畔なる瞽女なりしなり。

ラヽは我に對ひて起ち、聲振り絞りて、我に光明を授け給へ、我に神の造り給ひし世界の美しさを見ることを得させたまへ、と祈願したり。その聲音は尋常ならず。譬へば泉下の人の假に形を現して物言ふが如くなりき。我即興詩は漫りに混沌の竅を穿ちて、少女に宇宙の美を歎へき。今や少女は期せずして我前に來り、我に眼を開かむことを請へり。われは少女の聲の我心魂に徹するを覺えて、口一語を出すこと能はず、只ゝ手を少女の方にさし伸べたるのみ。少女は再び身を起して、我に光明を授け給へと唱へかけしが、張り詰めし氣や弛みけむ。小舟の中にはたと伏し、舷側なる水ははらはらと火花を飛しつ。

翁は暫く身を屈して、少女のさまを覗ひ居たるが、やをら岸に登りて、きと眼を我姿に注ぎ、空中に十字を畫し、彼大[illegible]鉢を抱いて舟中に移し、己も續いて乘りうつれり。われは思慮するに遑あらずして、同じく舟に上りしに、翁は我を迎へむともせず、さればとて又我を拒まむともせず、只ゝ目を瞬りて我を顧るのみ。翁は又櫓を搖りて、彼青き星に向ひて漕ぎ行けり。冷なる風は舟に向ひて吹き來れり。舟は巖窟の中に進み入りて、我等の頭は巖に觸れむとす。われは身をラヽの上に俯したり。忽にして舟は杳茫として涯なき大海の上に出でぬ。頭を回らせば、斷崖千尺、斧もて削り成せる如くにして、乘る所の舟は崖下の小洞穴より滑り出でしなり。

新月の光は怪しきまでに清澄なりき。斷崖の一隅に龕の形をなしたる低き岸あり。灌木叢に生じて、深紅の花の開ける草之に纏れり。岸邊には一隻の帆舟を繫げるを見る。翁は小舟を其傍に留めしに、少女は期する所ある如く、身を起して我に向へり。われはその手に觸るゝことをだに敢てせずして、心の裡に我が遇ふ所の夢に非ず、幻にも非ず、されば又現にも非ず、人も我も遊魂の陰界に相見るものたるべきを思ひぬ。少女は、いざ藥草を采りて給へと云ひて、右手を我にさし着けたり。われは鬼に役せらるるものゝ如く、岸に登りて彼香しき花を摘み、束ねて少女に遞與しつ。この時われは堪へ難き疲を覺えて、そのまゝ地上に僵れ臥したり。われは猶首を擡げて、翁が手快くラヽを彼帆船に抱き上げ、わが摘みし花束をも移し載せて、自らこれに乘りうつり、小舟を纜に結び付けて、帆を揚げて去るを見たり。されど我は身を起すこと能はず、又聲を出すこと能はずして、徒に身を悶え手を振るのみ。我は死の我心に迫りて、心の裂けむと欲するを覺えたり。

蘇生

かくては性命の慶はあらじとは、始めて我耳に入りし詞なりき。われは眼を開いてファビ

アニ公子と大人フランチェスカとを見たり。されど彼語を出しゝは、我手を握りて、眞面目なる思慮ありげなる目を我面に注ぎたる未知の男なりき。我は廣濶にして徹明なる一室に臥せり。時は白晝なりき。われは身の何の處にあるを知らずして、只ゞ熱の脈絡の内に發りたるを覺えき。わがいかにして救はれ、いかにしてこゝに來しを審にすることを得しは、時を經ての後なりき。

きのふジェンナロとわれとの歸り來ざりしとき、人々はいたく心を苦め給ひぬ。我等を載せて出でし舟人を尋ぬるに、こも行方知れずとの事なりき。さて島の南岸に沿ひて、龍卷ありしを聞き給ひしより、人々は早や我等の生きて還らざるべきを思ひぬ。搜索の爲めに出し遣られし二艘の舟は、一はこなたより漕ぎ往き、一はかなたより漕ぎ戻りて、末遂に一つところに落ち合ふやうに掟てられしに、その舟皆歸り來て、舟も人もその蹤跡を見ずといふ。フランチェスカの君は我がために涙を墮し給ひ、父ジェンナロと舟人との上をも惜み給ひぬと聞えぬ。

その時公子の宣給ふやう。かくて思ひ棄てむは、猶そのてだてを盡したりといふべからず。若し舟中の人にして、或は浪に打ち揚げられ、或は自ら漕ぎ着きて、巖のはざまなどにあらむには、人に知られで飢渴の苦艱を受けもやせむ。いでわれ親ら往いて求めむとて、朝まだきに力強き漕手四人を倩ひ、湊を舟出して、ここかしこの洞窟より巖のはざまゝで、名殘なく尋ね給ひぬ。されど彼魔窟といふところには、舟人辭みて行かじといふを、公子强ひて說き勸め、草木生ひたりと見ゆる岸邊をさして漕ぎ近づかせしに、程近くなるに從ひて、人の僵れ臥したりと覺しきを認め、さてこそ我を救ひ取り給ひしなれ。われは砌なる灌木の間に橫はり、我衣は濱風に吹かれて半ば乾きたりしなり。公子は舟人して我を舟に扶け載せしめ、おのれの外套もて被ひ、手の小胸のあたりなど擦り溫めつゝ、早く我呼吸の未だ絕え果てぬを見給ひぬといふ。われはかくてこゝに伴はれ、醫師の治療を受けつるなりけり。■

さればジェンナロと二人の舟人とは魚腹に葬られて、われのみ一人再び天日を見ることゝなりしなり。人々は我に當時の事を語らしめたり。われは光まばゆき洞窟の中に醒めしを始とし、目しひたる少女を載せ來し翁に遭へるに至るまで、そのおほよそを語りしに、人々笑ひて、そは熱ある人の寒き夜風に觸れ、半醒半夢の間にありて妄想せるならむといへり。げにわれさへ事の餘りに怪しければ、夢かと疑ふ心なきにしもあらねど、また熟ゝ思へばしかはあらじと思ひ返さゞることを得ず。かへすがへすも奇しく怪しきは、彼洞天の光景と舟中の人物となり。

我物語を傍聽せし醫師は公子に向ひ頭を傾けて、さては君の此人を搜し得給ひしは彼魔窟の畔なりけるよといひぬ。公子。さなり。さりとて君は世俗のいふ魔窟に、まことの魔ありとは、よも思ひ給はじ。醫師。そは輙く答へまつるべうもあらぬ御尋なり。自然は謎語の鈎鎖にして吾人は今その幾節をか解き得たる。

我心は次第に爽かになりぬ。抑ゝわが見し洞窟はいかなる處なりしぞ。舟人の物語に、この石門の奧に光りかゞやくところありといひしは、わが漂ひ着きし別天地を斥して言へるにはあらざるか。かの怪しき翁の舟の、狹き穴より潛り出しをば、われ明かに記憶せり。夢まぼろしにてはよもあらじ。さらば彼洞窟は幽魂の往來するところにして、我は一たび其境に陷り、聖母の惠によりて又現世に歸りしにや。われはかく思ひ惑ひつゝも、わが掌を組み合せて彼舟中の少女の上を懷ひぬ。まことに彼少

女は我を救へる天使なりき。年經て我夢の夢に非ざることは明かになりぬ。彼洞窟は今カプリ島の第一勝、否伊太利國の第一勝たる琅玕洞(グロツタ、アツウラ)にして、舟中の少女も亦實にかのペスツムの瞽女ララなりしなり。

歸途

公子夫婦は我を率て拿破里に歸らむために、猶カプリに留まること二日なりき。二人の我を待つ言動は、始の程こそ屢〻我感情を傷ふこともありつれ、遭難の後病弱の身となりては、親族にも稀なるべき人々の看護の難有さ身にしみて、羅馬へ伴ひ行かむと云はるゝが嬉しとおもはるゝやうになりぬ。そが上かの洞窟の内に遭遇せし怪異と、萬死を出でゝ一生を獲たる幸とは、いたくわが興奮したる腦髓を刺戟して、我をして無形の威力の人の運命を左右することの復た疑ふべからざるを思はしめぬれば、我は公子夫婦の羅馬へ往けと勸め給ふを聞きても、又直ちにその聲を以て運命の聲となさむとしたり。わが健康の漸く故に復らむとする頃、公子夫婦は又我床頭にありて、何くれとなく語り慰め給ひき。夫人。アントニオよ。おん身の行方まだ知れざりし程は、我等は屢〻おん身の爲めに泣きぬ。おん身の不思議に性命を全うせしは、聖母の御惠なりしならむ。今はおん身情強きも、よも再び拿破里に住みて、ベルナルドオと面をあはせむとは云はぬならむ。公子。そは勿論なるべし。われ等は只〻羅馬に伴ひ歸りて、曾て過ありしアントニオは地中海の底の藻屑となりぬ、今こゝに來たるはその昔幼く可哀ゆかりしアントニオなりと云はむ。夫人。さるにても便なきはジエンナロなり。才も人に優れ情も深かりしものを、いかなれば神は末猶遠き此人の命を助けむとはし給はざりけむ。惜みても餘あることならずやなど宣給へり。

醫師は屢〻病牀をおとづれて、數時間を我室に送れり。この人は拿破里に住みて、いまは用事ありて此カプリに來居たるなりといふ。第三日に至りて、醫師我を診して健康の全く故に復りたるを告げ、己れも我等の一行と共に歸途に就きぬ。醫師の我を健全なりといふは、形體上より言へるにて、若し精神上より言はゞ、われは自ら我心の健全ならざるを覺えき。わが少壯の心は、かの含羞草といふものゝ葉と同じく凋み巻きて、嚢に一たび死の境界に臨みてよりこのかた、死の天使の接吻の痕は、猶明かに我額の上に存せり。公子夫婦の我と醫師とを引き連れて舟に上り給ふとき、我は澄み渡れる海水を見下して、忽ち前日の事を憶ひ起し、激しく心を動したり。今日影のうらゝかに此積水の緑を照すを見るにつけても、我は永く此底に眠るべき身の、恙なくて又此天日の光に浴するを思ひ、涙の頰に流るゝを禁ずること能はざりき。人々は皆優しく我を慰めたり。フランチエスカの君は我才を稱へ、我を呼びて詩人となし、醫師に我が拿破里の劇場に上りて、卽興詩を歌ひしことを語り給ひしに、醫師驚きたる面持して、さてはかの謳者は此人なりしか、公衆の稱歎は尋常ならざりき、重ねて技を演じ給はゞ、世に名高き人ともなり給はむものをなどいへり。風の餘り好かりければ、初めソレントオより陸に上るべかりし航路を改め、直ちに拿破里の入江を指して進むことゝなりぬ。

われは拿破里の旅寓に入りて、三通の書信に接したり。その一は友人フエデリゴが手書なり。フエデリゴはきのふイスキアの島に遊び、三日の後ならでは還らずとの事なりき。明日の午頃には人々こゝを立たむと宣給へば、われは此唯〻一人なる友にだに、暇乞することを得

ざらむとす。そのにはわが宿を出でし次の日に來しものたる由、房奴われに語りぬ。これを讀むに唯ゞここに行の文あり、心誠なるものゝおん身の爲め好かれとおもへるありて、今宵おん身の來まさむことを願ふとのみ書きて、末に昔の友なる女と署し、合の家を指し示せり。其三はこれと同じ手して書けるものなり。その文左の如くなりき。

よしなき御疑念なし過し給はで、御出下されかしと、ひたすら御待申上候。御別申上候節は實に思ひ設けぬ事にて、胸騒ぎ魂消えて、申上ぐべき詞をもえ辨へ得ざりしかど今は御許にても、あわただしかりし當時の事を思ひ棄て給ひつらむと存じ候。御許にて思ひ違へ給ひしにはあらずやと思はるゝ節も候へども、そはすべて御目にかゝりたる上にて申解くべく候。只だ一刻も早く御目にかゝり度御待申上ぐるより外無御座候。かしこ。

末には又昔の友なる女と署したり。合の家は知らぬ巷に在れど、わが今更かゝる文書くべき婦人あるべうもあらず。われは今更彼婦人に逢ひて何とかすべきと思ひぬれば、御返事もやあると俟しに來し男を呼び入れて、詞短かにいひぬ。われは遽かに思ひ定むる事ありて、今夜拿破里を去らむとす。今までの厚き御恵は折りて忘れ侍らじ。御目に掛かりて御暇乞すべきなれど、あわたゞしき折なれば、唯ゞこの由御使に申すなりといひぬ。フエデリゴには數行の書を作りて遺し置きつ。その概略は今物書くべき心地もせねば、精しき事の顛末をば、羅馬に辿り着きて後にこそ告ぐべけれ、手を握らで別れ去ることの心苦しさを察せよといふ程の意なりき。

暇乞にとては、何處へも往かざりき。街上にてベルナルドオの面を見むことの影護く、又此地に來てより交を結びし人には、相見むことの願はしくもあらねば、われは旅寓の一室にたれこめて此日を暮さむとおもひ居たり。さるを公子の車を遣して置きたれば、共に醫師の家訪はむと言ひおこせたりなれば、辭びて行きぬ。小く心安げなる家にて、年長けたる女の家政を掌れるあり。質直なる性質眉目の間に顯はれて、むかしカムパニアの野邊にありける時、嫗育の恩を受けしドメニカに似たるところあり。されど此は教育ある人なれば、起居擧止のみやびやかなる、いろ〳〵なる藝能あるを、目を囘らして謝るべくもあらざるなるべし。

翌朝われは先づエズヰオの山を仰ぎ見て別を告けたり。嶺は深く煙霧の裏に隱れて、われに送別の意を表せむともせざる如し。是日海原はいと靜にして、又我をして洞窟と瞽女との夢を想はしむ。嗚呼、此拿破里の市も、今よりは同じ夢中の物となり了るならむ。

房奴はけふの拿破里日報（ヂアリオ、デ、ナポリ）を持て來りぬ。披きて見れば我假名あり。さきの日の初舞臺の批評なりき。いかなる事を書けるにかと、心忙しく讀みもて行くに、先づ空想の豐にして、章句の美しかりしを稱へ、恐らくは是れパンジエツチイの流を酌めるものにて、摸倣の稍ゝ甚しきを嫌ふと謂へり。パンジエツチイといふ人はわれ夢にだに見しことあらず。われは唯ゞ我天賦の情に本づきて歌ひしなり。想ふに彼批評家といふものは、おのれ常に摸擬の筆を用ゐるより、人の藝術も亦然ならむと思へるにやあらむ。末の方には例に依りて、奨勵の語を添へたり。いはく。此人終に名を成すべき望なきにあらず、今の見る所を以てするも、縱ひ其凡なる技能たることを失はざるべし、空想感情の諸性具備したりと見ゆればなりとあり。此評は惡しき方にはあらねど、

當日の公衆の喝采に比ぶるときは、その冷かなること著しとおもはる。われは此新聞紙を疊みて行李の中に蔵めたり。そは他年わが拿破里の遭遇の悉く夢ならぬを證せむ料にもとてなり。嗚呼、われ拿破里を見たり、拿破里の市を彷徨せり。わが得しところそも幾何ぞ、わが失ひしところはたそも幾何ぞ。知らず、フルヸアの預言は既に實現し盡せりや否や。

われ等は拿破里を出立ちたり。葡萄栽ゑたる丘陵は見る〳〵烟雲の間に沒せり。一行は羅馬に向ひて行くこと四日なりき。わが行くところの道は、二月の前にフェデリゴ、サンタの二人と與に行きし道なりき。モラの旅亭に來て見れば、柑子の林は今花の眞盛なり。われは再び我祕言をサンタに偸み聽かれし木陰に立寄りたり。人の離合聚散の測り難きこと、また今更に驚かれぬ。イトリの狹隘を過ぐる時、われはフェデリゴが上を憶ひ起しつ。旅劵を閲する國境には、けふも洞穴の中に山羊の群をなせるあり。されどフェデリゴが筆に上りし當時の牧童は見えざりき。

一行はテルラチナに宿りぬ。夜明くれば天氣晴朗なりき。あはれ、美しき海原よ。汝は我を懷抱し我をゆり動かして、我にめでたき夢を見させ、我をから〴〵しきララに逢はせき。今はわれ汝に別れむとぞする。水の天に接する處には、猶エズヰオの山の崔々しき姿見えて、立昇る烟の色は淡き藍色を成し、そのさま清明にして而も幽微に、譬へば霞を以て顔料となし、かゞやく空の面に畫ける如し。われは大息して呼べり。さらば〳〵、いで我は羅馬に入らむ。我墓穴は我を待つこと久し。

われは曾て怪しき嫗フルヸアとさまよひありきし山を望みき。われはジェンツァノ市を過ぎて、我母の車に觸れてみまかり給ひし廣こうぢを見き。路の傍なる乞兒は我衣服の華しからぬを見て、われを殿様と呼べり。むかし母に手を拉かれて祭を見し貧家の子幸ありといはむか、今ボルゲエゼ家の賓客となりて歸れる紳士幸ありといはむか、そは輙く答へ難き問なるべし。

一行はアルバノの山を踰えたり。カムハニアの曠野は我前に橫れり。道の傍なる、蔦蘿深く鎖せるアスカニウスの墟は先づ我眼に映ぜり。古墳あり、水道の殘礎あり、而して聖彼得寺の穹窿天に聳えたる羅馬の市は、既に目睫の中に在り。(アスカニウスは昔アルバ、ロンガの基を立てし人なり。是れ拉甸人の始めて市を成せる處にして、後の羅馬市はこれより生ぜりといふ。)

車の聖ジョワンニイの門(ポルタ、サン、ジョワンニイ)より入るとき、公子は我を顧みて、いかに樂しき景色にはあらずやと宣給へり。「ラテラノ」の寺、丈長き尖柱、「コリゼエオ」の大廈の址、トラヤヌスの廣こうぢ、いづれか我舊夢を喚び返す媒ならざる。

羅馬は拿破里の熱閙に似ず。コルソオの大路は長しと雖、繁華なるトレドの街と異なり。車の窓より道行く人を覗ふに、むかし見し人も少からず。老いたる教師ハッバス、ダアダアのボルゲエゼ家の車の章に心づきて、蹣跚たる歩を住め我等を禮したるは、おもはずなる心地せらる。コンドッチイ街、(キヤ、コンドッチイ)の角を過ぐれば、むかしながらのペッポが手に履まがひの木片を裝ひて、道の傍に坐せるを見る。

フランチェスカの君の、やう〳〵我家に歸り着きぬと宣給ふに答へて、まことにさなりと云ひつゝも、我は心の内に名狀し難き感情の迫り來るを覺えき。我は今曾て訣絕の書を賜ひし舊恩人を拜せざるべからず。その待遇は果していかなるべきか。我はこゝに至りて、復たこれ

を避けむと欲することなく、却りて二馬の足搔の猶太だ遲きを恨みき。譬へば死の宣告を受けたるもの丶、早く苦痛の境を過ぎて彼岸に達せむことを願ふが如くなるべし。

車はボルゲエゼの館の前に駐まりぬ。僮僕は我を誘ひて館の最高層に登り、相接せる二小房を指して、我行李を卸さしめき。

少選ありて食卓に呼ばれぬ。われは舊恩人たる老公の前に出で丶、身を僂めて拜せしに、アントニオが席をば我とフランチェスカとの間に設けよと宣給ふ。是れ我が久し振にて耳にせし最初の一語なりき。

會話の調子は輕快なりき。われは物語の昔日の過に及ばむことを慮りしに、この御館を遠ざかりたりしことをだに言ひ出づる人なく、老公は優しさ舊に倍して我を款待し給ひぬ。されどわれは此一家の復た我に厚きを喜ぶと共に、人の我を恕するは我を輕んずる所以なるを思ふことを禁じ得ざりき。

教育

ボルゲエゼ家の宮殿は今わが居處となりぬ。人々の我をもてなし給ふさまは、昔に比ぶれば優しく又親しかりき。時として我を輕んずるやうなる詞、我を侮るやうなる行なきにしもあらねど、そはわが爲め好かれとて言ひもし行ひもし給ふなれば、憎むべきにはあらざるなるべし。

夏は人々暑さを避けむとて餘所に遷り給へば、われ獨り留まりて大廈の中にあり。涼しき風吹き初むれば人々歸り給ふ。かくて我は漸く又此境遇に安んずることゝなりぬ。

我は最早カムパニアの野の童にはあらず。最早當時の如く人の詞といふ詞を信ずること、宗教に志篤き人の信條を奉ずると同じきこと能はず。我は最早「ジェズヰタ」派學校の生徒にはあらず。最早教育の名をもてするあらゆる束縛を甘んじ受くること能はず。さるを憾むらくは人々、猶我を視ることカムパニアの野の童、「ジェズヰタ」派學校の生徒たる日と異ならざりき。此間に處して、我は六とせを經たり。今よりしてその生活を顧みれば、波瀾層疊たる海面を望むが如し。好くも我はその波濤の底に埋沒し畢らざりしことよ。讀者よ、わが物語を聞くことを厭まざる讀者よ。願はくは一氣に此一段の文字を讀み去れ。われは唯ゝ省筆を用ゐて、その大概を敍して已みなむとす。

この六年の歷史はわが受けし精神上教育の歷史なり。この教育は人の師たるを好むもの丶ことさらに設けたる所にして、不便なる我はこれを身に受けざること能はざりしなり。人々は我を善人とし、我に棄て難き機根ありとして、競ひて自ら教育の任を負へり。恩人はその恩を以て我に臨みて我師たり。恩人ならぬ人はわが人好きに乘じて僭して我師となれり。我は忍びて無量の苦を受けたり。そは教育といふを以ての故なり。

主公はわが學の膚淺なるを責め給へり。我はいかに自ら勵まむも、わが一書を讀みたる後、何物か我胸中に殘れると問はゞ、そはたゞ其卷册の裡より我心に適へるものを抽き出し得たりといふのみにて、譬へば蜂の百花の上に翼を休めて、唯ゝ一味の蜜を採らむが如くなるべし。こは老公の喜び給ふところにあらざりしなり。家の常の賓客、その他われを愛すといふ人々には、おの〳〵その理想ありて、われを測るにその合理想の尺度をもてす。人々いかでかわが成績に甘んずることを得む。數學者はアントニオあまりに空想に富みて、冷靜の資なしと云ひ、儒者はアントニオの拉甸語に精しからざることよと云ひ、政治家は獨人の前にありて、ことさらに我に問ふにわが知らざるところの政治上の

事をもてし、われを責めて自ら得たりとし、遊戯をもて性命とせる貴公子は、また我と馬相を論じて、わが馬を愛することの己れの身を愛するごとくならざるを怪み、貴族にして毒舌ある一婦人の、まことは人に超えたる智あるにあらずして、漫りに批評に長ぜりと稱せられたるは、また我詩稿を刪潤せむと欲し、我に一枚づつ寫して呈せむことを求めたり。その外、ハッバス、ダアダアの如く、むかし有望の少年たりしわが、今や盡き想潤れたるを歎ずるものあり、舞踏を善くする某の如く、わが舞場に出でゝ姿勢の美を闕くを憾むものあり、文法に精しき某の如く、わが往々[illegible]に代ふるに何を以てするを難ずるものあり。就中フランチェスカの君は、もろ人の我を褒むるに過ぎて、わが慢心のこれがために長ずべきを惜むとて、毎に峻嚴と威儀とをもて我に臨まむとし給へり。おほよそ此等の毒は滴々我心上に落ち来りて、われは我心のこれが爲めに硬結すべきか、さらずば又これが爲めにその血を瀝らし盡すべきをおもひたりき。

我心は一物に逢ふごとに、その高尚と美妙との方面よりして強く刺戟せられ深く悦懌す。われは獨り閑室に坐するとき、首を回して彼の我師と稱するものを憶ふに、一種の奇異なる感の我を襲ひ来るに會ひぬ。世界は譬へば美しき少女の如し。その心その姿その粧は、わが目を注ぎ心を傾くるところなり。さるを靴工は、彼の穿ける靴を見よ、その身上第一の飾はこれぞと云ひ、縫匠は、否、彼の着たる衣を見よ、その裁ちざまの好きことよ、その色あひを吟味し、その縫際に心留むるにあらでは、少女の姿を論ずべからずと云ひ、理髪師は、否々、彼の美しき髪のいかに結ねられたるかを見ずやと云ひ、語學の師はその會話の妙をたゝへ、舞の師はその擧止のけだかさを讃む。彼の我師と稱するものは、この工匠等に異ならず。されどわれ若し憚ることなくして、人々よ、我も一々の美を見ざるにあらねど、我を動かすものは彼に在らずしてその全體の美に在り、是れ我職分なりと曰はゞ、人々は必ず陽に、げに我等の教ふるところは汝詩人の目の視るところより低かるべしと曰ひつゝ、陰に我愚を笑ふなるべし。

天地の間に生物多しと雖、その最も殘忍なるものは蓋し人なるべし。われ若し富人ならば、われ若し人の廡下に寄るものならずば、人々の旗色は忽ちにして變ずべきならむ。人々の聰明ぶり博識ぶりて、自ら處世の才に長けたりげに振舞ふは、皆我が食客たるをもてにあらずや。我は泣かまほしきに笑ひ、嚬せむと欲して却りて首を屈し、耳を傾けて俗士婦女の囈を嚼むが如き話説を聽かざるべからず。所謂教育は果して我に何物をか與へし。面從腹非、抑鬱不平、自暴自棄などの惡癖陋習の、我心の底に萌しゝより外、又何の效果も無かりしなり。

十の指は我があらゆる暗黒面を指し、却りて我をして我に一光明面なしや否やを思はしめ、我をして自ら己の長を覓め、自ら己の能を衒はしめたり。而して彼指は又この影を顧みて自ら喜ぶ情を指して、更に一の暗黒面を得たりとせり。

人々はわが我見の強くして固きを難せり。政治家のわが我見を責むるは、われ心を政況に委ねざればなり、馬を愛づる貴公子のわが我見を責むるは、われ馬を品し馬に乗りて居諸を送ること能はざればなり。曾て又一少年の審美學の書に耽るものありしが、其人に我にいかに思惟し、いかに吟味し、いかに批評すべきを教へ、一朝わがその授くる所の規矩に遵はざるを見るに及びては、忽又わが我執を責めたり。とはわが我執あるにはあらで、人々の我執あるに

はあらざるか。そを蹴りてわれ我執ありといふは、わが人の恩蔭を被りたる貧家の孤たるを以てにあらずや。

名よりして言はむか、我は貴族にあらず。されど心よりして觀むか、我豈賤人ならむや。されば我は人に侮蔑せらるゝごとに、必ず深き苦痛を忍べり。いかなれば我は赤心を捧げて人々に依賴せしに、人々は我をして鹽の柱と化すること彼ロオト(亞伯拉罕の甥)が妻の如くならしめしぞ。是に於いてや、悖戾の情は一時我心上に起り來りて自信自重の意識は緊縛をわが恒の心に加へ、此緊縛の中よりして、增上慢の鬼は昂然として頭を擡け、我をして平生我に師たる俗客を脚底に見下さしめ、我耳に附きて語りて曰はく。汝の名は千載の後に傳へらるべし。彼の汝に師たるものゝ名は、これに反して全く忘らるべし。縱令忘られざらむも、その僅に存ずるは汝が囹圄の桎梏として存じ、汝が性命の杯中に落ちたる毒藥として存ずるならむといふ。われはタッソオの上をおもへり。矜持せるレオノオレよ。驕傲なるフェルララの朝廷よ。その名は今タッソオによりて僅に存ずるにあらずや。當時の王者の宮殿は今瓦石の一堆のみ、その詩人を拘禁せし牢舍は今巡禮者の靈場たりなど、おもへり。此の如き心の卑むべきは、われ自ら知る。されど所謂教育は我をして此の如き心を生ぜしめざること能はず。われ若し彼教育を受けて、此心をだに生ぜざりせば、われは性命を保ちて今に到るに由なかりしなり。わが潔白なる心、敬愛の情は、一言の獎勵、一顧の恩惠を以て雨露となしゝに、人々は却りて毒水を灑ぎてこれを偏枯せしめしなり。

今の我は最早むかしの如き無邪氣の人ならず。さるを人々は猶無邪氣なるアントニオと呼べり。今の我は絶えず書を讀み、自然と人間とを觀察し、又自ら我心を顧みて己の長短利病を審にせむとせり。さるを人々は始終學びて止まぬアントニオと呼べり。この教育は六年の間續きたり、否、七年ともいふことを得べし、されど六とせ目の年の末には、聊か多少の風波の我生涯の海の面に噪ぎ立つを見たり。この教育の六年の間、猶書かまほしき事なきにあらねど、今より顧みれば、皆流れて毒水一滴となり了りぬ。こは門地なく金錢なき才子の常に仰ぎ常に服するところのものにして、此毒水は此類の才子の爲めには、人の呼吸するに慣れたる空氣に異ならずといふべきならむ。

われはアバテとなりぬ、われは卽興詩人として名を羅馬人の間に知られぬ。そは、チベリナ學士會院(アカデミア、チベリナ)の演壇の上に上りて詩篇を讀み、又卽興詩を吟ずることを許しゝがためなり。されどフランチェスカの君は、會院の吟誦には喝采を得ざるものなしといふをもて、わが自負の心を抑へ給へり。

ハッバス、ダアダアは會院中の最も名高き人なり。その名の最も高きは、その演說し著述することの最も多きがためなり。院内の人々一人としてハッバス、ダアダアの陋劣にして妄を探し、褒貶並に過ぐるを知らざるものなし。されど人々は猶この翁の籍を會院に揭ぐるを甘んじたりき。ハッバス、ダアダアは愈々意を得て、只管書きに書き說きに說けり。ある日我詩藻を閲し、評して水彩畫となし、ボルゲエゼ家の人々に語ふやう。アントニオに才藻の萌芽ありしをば、嘗て我生徒たりしとき認め得たりしに、惜いかな其芽は枯れて、今の作り出すところは時派の詩のみ。アントニオは古の名家の少時の作を世に公にせしもののあるを見て、或はおのれのをも梓行せむとすることあらむか。そは世の嘲を招くに過ぎず。願はくは人々彼を諫めて、さる無謀の企を思ひ留まらしめ給

へとぞいひける。
アヌンチヤタが上はつゆばかりも聞えざりき。アヌンチヤタは我が爲めには隔世の人たり。されどこの女子は死に臨みて、その冷なる手もて我胸を壓し、これをして事ごとに物ごとに苦痛を感ずることよの常ならざらしめしなり。ナポリの旅と當時の記憶とは、なつかしく美しきものながら、今はその美しさの彼メヅウザに逢ひて化石したるにはあらずやとおもはれたり。(メヅウザは希臘神話中の恐るべき處女神にして、之を視るものは忽ち石に化したりといふ。)煖き巽風の吹くごとに、われはペスツムの溫和なる空氣をおもひ出して意中にララが姿を畫き、ララによりて又その邂逅の處たる怪しき洞窟に想ひ及びぬ。われは彼物教へむとする賢き男女の人々の間に立ちて、上校の兒童の如くなるとき、心にはむかし賊寨にて博せし喝采と「サン、カルロ」座にて聞きつる讙呼の聲とを思ひ、又人々の我を遇すること極めて冷なるが爲めに、身を室隅に躱けたるとき、心にはむかしサンタがもろ手さし伸べて、我を棄てて去らむよりは寧ろ我を殺せと叫びしことをおもひぬ。六とせは此の如くに過ぎ去りて、我齡は二十六になりぬ。

小尼公

ファビアニ公子とフランチェスカ夫人との間に生れし姫君の名をばフラミニアといひぬ。されど搖籃の中にありて、早く神に許嫁せさせ給ひしより、人々小尼公とのみ稱ふることゝなりぬ。この小尼公には、むかし我手にかき抱きて、をかしき畫などかきて慰めまつりし頃より後、再び見ゆることを得ざりき。小尼公は教育の爲めにとて、四井街の尼寺にあづけられ給ひしより、早や六とせとなりぬ。境内を出で給ふことなく、母君なるフランチェスカの夫人ならでは往きて逢ふことを許されねば、父君すら一たびも面を合せ給ふことあらざりき。われ等は唯ゞ人傳に姫君の今は全く人となり給ひて、その學藝をさへ人並ならず善くし給ふを聞きしのみ。

寺の掟に依るに、凡そ尼となるものは、授戒に先だてる數月間親々の許に還り居て、浮世の歡を味ひ盡し、さて生涯の暇乞して俗緣を斷つことなり。この時となりて、再び寺に入るとそが儘我家に留まるとは、その女子の意志の自由に委ぬといへど、そは只ゞ掟の上の事のみにて、まことは幼きより尼の裝したる土偶を翫ばしめ、又寺に在る永き歲月の間世の中の罪深きを說きては威しすかし、寺院の靜かにして戒行の尊きを說きては勸め誘ひ、必ず寺に歸り入らしむる習なりとぞ。

是より先きわれは四井街の邊を過ぐるごとに、この尼寺の築泥の蔭にこそ、わが嘗て抱き慰めし姫君は居給ふなれ、今はいかなる姿にかなり給ひしと、心の內におもひ續けざることなかりき。一日われは尼寺に往きて、格子の奥にて尼達の讃美歌を歌ふを聽きしことあり。あの歌ふ人々の間に小尼公はおはさずやとおもひしかど、流石心に咎められて、教子として寺に宿れるものゝ、彼歌樂の群に加はるや否やを問ひあきらむることを果さゞりき。既にしてわれはこのもろ聲の中より、一人の聲の優れて高く又清く、一種言ふべからざる凄切の調をなせるものあるを聞き出しつ。その聲のアヌンチヤタが聲にいと好く似たりければ、把住し難き我空想は忽ちはかなき舊歡の影をおもひ浮べて、彼ボルゲエゼ家の少女の事を忘れぬ。

次の月曜日にはフラミニアこそ歸り來べけれと、老公宣給ひぬ。この詞はあやしく我情を動して、その人と成りしさまの見まほしさはよの常ならざりき。想ふに小尼公も亦我と同じき

籠中の鳥なり。こたび家に歸り給ふは、譬へば先づ絲もてその足を結びおき、暫し籠より出だして翺翔せしむるが如くなるべし。傷ましきことの極ならずや。

わが姫の面を見しは午餐の時なりき。げに人傳に聞きつる如くおとなびて見え給へど、世の人の美しとてもてはやす類の姿貌にはあらざるべし。面の色は稍ゝ蒼かりき。唯ゞ惠深く情厚きさまの、さながらに眉目の間に現れたるがめでたく覺えられぬ。

食卓に就きたるは近親の人々のみなり。されど一人の姫に我の誰なるを告ぐるものなく、姫も又我面を認め得ざるが如くなりき。さてわれは姫に對ひてかたばかりの詞を掛けしに、その答いと優しく、他の親族の人々と我との間に、何の軒輊するところもなき如し。これは此御館に來てより、始ての款待ともいひつべし。

人々は打解けてくさぐさの物語などし、姫は笑ひ給ふ。われは覺えず興に乘じて、その頃羅馬に行はれたりし一口話を語りぬ。姫はこれをも可笑しとて笑ひ給ふに、外の人々は遽かに色を正して、中にもかゝる味なき事を可笑しとするは何故ならむなどいふ人さへあり。われ。しか宣給へど、今語りしは近頃流行の一口話にて、都人士のをかしとするところなるを奈何せむ。夫人。否、おん身の話は掛詞の類のいと卑しきをさげとせり。人の腦髓のかくまで淺はかなる事を弄ぶことを嫌はざるは、げに怪しき限ならずや。嗚呼、我とても爭でかことさらに此の如き事のために、我腦髓を役せむや。我は唯ゞ世の人の多く語るところにして、我が爲めにもをかしとおもはるゝものなるからに、人々の一粲を博する料にもとおもひし迄なり。

日暮れて客あり。數人の外國人さへ雜りたり。われは晝間の譴責に懲りて、室の片隅に隱れ避け、一語をだに出ださゞりき。人々は圈の形をなして、ペリイニイといふものゝめぐりに集へり。この人の齡略ゞ我と同じくして、その家は貴族なり。心爽かにして頓智あり、會話も藝巧なれば、人皆その言ふところを樂み聽けり。忽ち人々の一齊に笑ふ聲して、老公の聲の特さらに高く聞えければ、われは何事ならむとおもひつゝ、少しく歩み近づきたり。然るに我は何事をか聞きし。晝間我が語りて人々の笑に逢ひし、彼一口話は今ペリイニイの口より出でて人々に喝采せらるゝなりき。ペリイニイは一句を添へず又一句を削らず、その口吻態度些の我に殊なることなくして、人々は此の如く笑ひしなり。語り畢る時、老公は掌を撫して、側に立ちて笑ひ居たる姫に向ひ、いかにをかしき話ならずやと宣給へり。姫、まことに仰せの如くに侍り、けふ午の食卓にて、アントニオが語りし時より然かおもひ侍りきと答へ給ふ。その語調はいと溫和にて、怨み憤る色もなく辨へ難ずる色もなし。われは心の内にて、この優しき小尼公の前に跪かむとしたり。この時フランチエスカの君も、げに〳〵をかしき物語なりきと宣給ふ。われは心の躍るを覺えて、そと人に遠ざかり、身を長き幌の蔭に隱して、窓の外なる涼しき空氣を呼吸したり。

この一口話の事をば、われ唯ゞ一の標として、かく詳にはしるしゝなり。これより後も、日としてこれに似たる辱を被らざることなかりき。唯ゞ小尼公のすゞしき目の我面を見上げて、衆人の罪惡の爲めに代りて我に謝するに似たるありて、われはその辱の昔よりも忍び易きを覺えたり。寔におもふに我にはまことに弱點あり。そを何ぞといふに、影を顧みて自ら喜ぶ性ありて、難きを見て屈せざる質なきこと是なり。そもこの弱點はいづれの處よりか生ぜし。生を微賤の家に稟けしにも因るべく、最初に受けし教育にも因るべく、又恒に人の廡

下に倚る境遇にも困るなるべし。我は胸に溢れ口に發せむと欲するところのものあるごとに、必ず先づ身邊の嘗て我に恩惠を施したる人々を顧みて、自ら我舌を結び、終に我不屈不撓の氣象を發展するに及ばずして止みぬ。若し自から辯護して評せばこも謙讓の一端なるべし。されどその弱點たることは到底掩ふべからざるを奈何せむ。

今の勢をもてすれば、その恩義の絆を斷たむことといとむづかし。人々は我にいかなる苦痛を與へ給はむも、我が受けたるところの恩義は飽くまで恩義なり。そは人々なかりせば、我は或は饑渇の爲めに苦められけむも計り難きが故なり。我が人々の爲めに身にふさはしき業して、恩義に酬いむとせしことは幾度ぞ。我は報恩の何の義なるかを知らざるにあらず、良心のいかなるものなるかを解せざるにあらず。いかなれば人々は此良心の發動、報恩の企圖を妨碍して、天才は俗事に用なしといひ、又思想多きに過ぎて世務に適せずといふぞ。若しまことに天才を視ること此の如く、思想を視ること此の如くならば、そは天才をも思想をも知らざるなり。

その頃我は大闘を題として長篇を作りぬ。この詩は字々皆我心血なりき。昔の不幸なる戀と拿破里客中の遭遇とは、常に胸裡に往來して、侯爵家の人々の所謂教育は斷えず骨髓を刺戟し、我を驅りて詩國に入らしめ、我心頭には時として我生涯の一篇の完璧をなして浮び出づることあり。その中にはいかなる瑣細なる事も、いかなる厭ふべく苦むべき事も、一として滿分の詩趣を具へざるはなかりき。我中情に此の如く詠歎の聲を迸り出して、我をしてダキットの故事の最も當時の感興を寓するに宜しきを覺えしめしなり。

詩成りて、我は復たその傑作たるを疑はざりき。而して我は神に謝する情の胸に溢るゝを見たり。そは我平生の習として、一詩句を得るごとに、未だ嘗て神の我靈魂を護りて、詩思を生ぜしめ給ふを謝せざることあらざればなり。此作は我心の精粹を聚すべき者なりき。我は自ら以爲へらく。人々若し我此作を讀まば、その我に苦痛を與ふることの非なるを悟りて、善く我を遇するに至るならむと。

詩成りて、作者より外、未だ一人の肉眼のこれに觸れたるものあらず。この塵を蒙らざる美の影圖は、その氣高きこと彼「ワチカアノ」なるアポルロンの神の像の如く、儼然として我前に立てり。嗚呼、この影圖よ。今これを知りたるものは、唯だ神と我とのみ。我は學士會院に往きてこれを朗讀すべき日を樂み待てり。

さるを一日ファビアニ公子とフランチェスカ夫人との優しさ常に倍するを覺えければ、我は此二恩人に對して心中の祕密を守ること能はざりき。こは小尼公の來給ひしより二三日の後なりきと覺ゆ。公子夫婦は聞きて、さらばその詩をば我等こそ最初に聽くべけれと宣給ふ。我は直ちに諾しつれど、心にはこの朗讀の發落いかにと氣遣はざること能はざりき。さて我詩を讀むべき夕には、老公も席に出で給ふ筈なりき。此日となりて久期せずしてハッバス、ダアダアの侯爵家を訪ふに會ひぬ。フランチェスカはこれを留めて、渠にも我が讀むべき詩を聽かしめむといひぬ。われは此翁の偏狹の念強くして人の才を嫉み、特に平生我を喜ばざるを知れり。公子夫婦の心、冷なる、既に好き聽衆とすべきならぬに、今又此毒舌の翁を獲つ。我が朗讀の前兆は太だ佳ならざるが如くなりき。

我胸の跳ることは、嘗て「サン、カルロ」座の舞臺に立ちし時より甚しかりき。若し我が期するところの效果にして十分ならば、人々はこれを聽きて、その常に我を遇する手段の正しからざるを悟り、未來に於いて自ら改むるに至

るならむ。是れ一種の精神上の治療法なり。われは明かに我が期するところの難きを知る。さるを猶これを敢てするものは、深く自ら「ダキット」の一篇の傑作なることを信じたればなり、又小尼公の優しき目の暗に我を鼓舞するに似たるあるに感じたればなり。

我詩は一として自家の閲歷に本づかざる者なし。此篇も亦然なり。首段は牧童たるダキットの事を敍す、卽ち我が穉かりし頃、ドメニカにはぐゝまれてカムパニアの茅屋に住めりし時の境界に外ならず。フランチェスカの君聞もあへず、そは汝が上にあらずや、汝がカムパニアの野にありし時の事に非ずやと叫び給へば、老公笑ひて、そは豫期すべき事なり、いかなる題に逢ひても、自家の感情をもてこれに附會することを得るはアントニオが長技ならずやと答へ給ふ。ハッバス、ダアダアは嗄れたる聲振り絞りていふやう。句々洗錬の足らざるが恨なり、ホラチウスの敎を知らずや、唯ゞ放置せよ、放置してその熟するを待てといへり、おん身の作も亦然なり。

人々は早く既に一槌をわが美しき彫像に加へしなり。我は猶二三章を讀みしかど、只ゞ冷澹にして輕浮なる評語の我耳に詣り入るあるのみ。人々は又我肺腑中より流れ出でたる句を聞きて、古人某の集より剽竊せるかと疑へり。嗚呼、初め我が人をして聳聽せしむべく、怡悅せしむべき句ぞとおもひしものは、今は人々の一顧にだに價せざらむとす。我は第二折の末に到りて、興全く盡きぬれば、人々に謝して讀むことを止めたり。此に至りて、自ら我手中の詩篇を顧みれば、復た前の綽約たる姿なくして、彼三王日の前夜フィレンチェ市を擔ひ行くなる「ベファアナ」といふ偶人の、面色極めて奇醜にして、目には硝子球を嵌めたるにも譬へつべきものとなりぬ。是れ聽衆の口々より噓きたる毒氣のわが美の影圖をして此の如く變化せしめしにぞありける。

おん身のダキットは市井の俗人をだに殺すことなからむ、とはハッバス、ダアダアが總評なりき。人々は又評して宣給ふやう。篇中往々好き處なきにあらず。そは情深きと無邪氣なるとの二つに本づけりとなり。我は頭を低れて口に一語を出さず、罪囚の刑の宣告を受くるやうなる心地にて、人々の前に凝立せり。ハッバス、ダアダアは再びホラチウスの敎を忘れ給ふなと繰返しつゝも、猶慇懃に我手を握りて、詩人よ、慰めよやと云ひぬ。我は室の一隅に退きたりしが、暫しありて同じハッバス、ダアダアが、耳疎き人の爲めとて、聲高くファビアニ公子にさゝやくを聞きつ。そは杜撰彼篇の如きは己れの未だ嘗て見ざるところぞとの事なりき。

人々は我詩を解せざらむとせり。又我を解せざらむとせり。こは我が忍ぶこと能はざるところなり。室の隣には、開爐に炭火を焚きたる廣間あり。われはこれに退き入り、手に詩藁を把りて、爪甲の掌を穿たむばかりに握りたり。嗚呼、我夢は一瞬の間に醒め、我希望は一瞬の間に破壞せられたり。我身は神の御姿の摸造ながら、自ら顧みれば苦窳の器に殊ならず。われは我鍾愛の物、我がしばしば接吻せし物、我が心血を灑きし物、我が性命ある活思想とも稱すべき物をもて、熾火の裡に擲ちたり。我詩卷は炎々として燃え上れり。忽ちアントニオと叫ぶ一聲我身邊より起りて、小尼公の優しき腕の爐中の詩卷を攫まむとせし時、事の慌忙しさに足踏みすべらしたるなるべし、この天使の如き少女はあと叫びて、横ざまに身を火焰の間に僵しつ。我は夢心地の間に姫を抱き起しつ。人人は何事やらむと馳せ集へり。

フランチェスカ夫人は聖母の御名を唱へつ。我手に抱き上げられたる姫は、眞蒼なる顏もて

母上を仰ぎ見つゝ、足すべりて爐の中に倒れ、手少し傷け侍り、アントニオなかりせば大いなる怪我をもすべかりしをと宣給ひぬ。われは激しき感情に襲はれて、口に一語を發すること能はず、只ゞ喪心せるものゝ如くなりき。

姫は右手を劇しく焼き給へり。一家の騒擾は一方ならず。彼問ひ此答ふる繁き詞の中にも、幸にして人の我詩卷を問ふ者なく、我も亦默ありければ、ダキットの詩篇の事は終に復た一人の口に上ることなかりき。あらず、後に至りてこれに言ひ及びし人唯一人あり。そは我が爲めに翼を焦しゝ天使なりき。嗚呼、小尼公なかりせば、われは全く厭世の淵に沈み果てしならむ。われをして人の心の猶賴むべきを覺えしめ、われをして少時の淨き心を喚び返さしめたるは、げにこのボルゲエゼ一家の守護神たる小尼公なりき。小尼公の手は癒むこと十四日の間なりき。我胸の癒むことも亦十四日の間なりき。

ある日われは獨り姫の病牀に侍することを得て、わが久しく言はむと欲するところを言ふことを得たり。われ。フラミニアの君よ。願はくは我罪を許し給へ。君は我が爲めに其苦痛を受け給へり。姫。否、その事をば再び口に出し給ふな。又ゆめ餘所に洩し給ふな。そが上に、さのたまふはおん身自ら欺き給ふにてこそあれ。我足のすべりしは事實なり。おん身若し扶け起し給はずば、わが怪我はいかなりけむ。されば我はおん身の恩を荷へり。父母も然か思ひて、御身のいちはやく救ひ給ひしを感じ給ひぬ。獨り此事のみにはあらず。父母の御身を愛し給ふ心のまことの深さをば、おん身は未だ全く知り給はぬごとし。われ。そは宣給ふまでもなし。わが今日あるは皆御家の賜なり。かくて一日ごとに我が受くるところの恩澤は加はりゆくなり。姫。否、さる筋の事をいふにはあらず。わが二親のおん身を遇し給ふさまをば、此幾日の間に我熟く知れり。二親はかくするが好しとおもひ給ふなれば、そは奈何ともし難けれど、總ておん身を惡しとおもひ給ひてにはあらず。殊に母上の我に對しておん身を譽め給ふ御詞をば、おん身に聞せまほしきやうなり。師の尼君の宣給ふに、おほよそ人と生れて過失なきものあらじとぞ。憚あることには侍れど、おん身にも總て過失なしとはいひ難くや侍らむ。例之ばおん身は、いかなれば一時怒に任せて、彼美しき詩を焚き給ひし。われ。そは世に殘すべき價なければなり。唯ゞ焚くことの遲かりしこそ恨なれ。姫。否々、われは世の人の心の險しきを憶得たり。靜かなる尼寺の垣の内にありて、優しき尼達に交らむことの願はしさよ。われ。げに君が淨き御心にては、しかおもひ給ふなるべし。我心は汚れたり。惠の泉の甘きをば忘れ易くして、一滴の毒水をば繰返して味ふこと、まことに罪深き業にこそ侍らめと答へぬ。

この館には一人として我を憎むものなし。されど尼寺の心安きには似ず。こは小尼公の獨り我に對し給ふとき、屢ゞ宣給ひし詞なり。われはこの姫をもて我感情の守護神、わが淸淨なる思想の守護神とし、漸くこれに心を傾けつ。想ふに姫の歸り來給ひしより、館の人々の我を遇し給ふさま、面色よりいはむも語氣よりいはむも著く温和に、著く優渥なるは、この優しき人の感化に因るなるべし。

姫は數ゞ我をして平生の好むところを語らしめ給ひぬ、詩を談ぜしめ給ひぬ。興に乘じて古人の事を談ずるときは、われは自ら我辯舌の暢達になれるに驚きぬ。姫はもろ手の指を組み合せて、我面を仰ぎ見給ふ。姫。おん身の如く詩をもて業とするは、まことに人生の幸福なるべし。されど神の豫言者たるべき詩人の、

神の德、天國の平和をば歌はで、人の業、現世の爭奪を歌ふは何故ぞ。おん身は世の人に福を授け給ふことも多かるべけれど、又禍を遺し給ふことも少からざるならむ。われ。否。詩人の人を歌ふは隨即神を歌ふなり。神は己れの德を表さむとて、人をば造り給ひしなり。姫。おん身の宣給ふところには、わが諾ひ難き節あれど、われは我心を明すべき詞を求め得ず。人の心にも世のたゝずまひにも、げに神の御心は顯れたるべし。さればそを指し示して、世の人をして神の懷に歸り入らしめむこそ、詩人の務とはいふべけれ。さるを却りて世の人を驅りて、おそろしき呑噬爭奪の境界に墮ちしめむとする如くなるは、好しとはおもはれず。そは兎まれ角まれ、おん身はいかにして卽興の詩を歌ひ給ふか。われ。題を得るときは思想は招かずして至るものなり。姫。さなり。其思想は神の賜ふ所なること人皆知る。されどそを何とし章とし、それに美しき姿しらべを賦し給ふは奈何。われ。君は尼寺に居給ふとき、「プサルモス」の歌を聽き、又古の聖の上を綴りたる譚語を學び給ひしならむ。さてある時端なく一の思想の浮び出づるに逢ひて、これと與に曾て聞ける歌、曾て聞ける譚語を憶ひ得給ひしことはあらずや。憾むらくは、おん身はかゝる機會を逸し給ひて、筆とりて其思想を寫さむことを試み給はざりしなり。おん身若しそを試み給ひしならば、思想の全き形の心頭に顯れたるものは凝りて散ぜず、句は句を生じ章は章を生じ、詩は無意識の間になりしならむ。こは唯ゞ我一人の經驗ながら、詩人の製作といふものはかくあらむとおもふなり。われは詩を作るごとに、我詩の前世の記憶の如く、前身の搖籃中にて聞きし歌の名殘の如きを感ず。われは創作すと感ぜず、われは復誦すと感ず。姫。その思想といふものも、いかなるが詩となすに宜しかるべきか知るよしなけれど、わが尼寺にありし時、ふと昔の懷かしき如き情、遠きに騁する如き情の胸に溢るゝことあり。その懷かしきは何ぞ、その騁するは何をあてぞといはゞ、われ自ら答ふるところを知らず。されど夢に吾夫たるべき耶蘇を見、又聖母を見るときは、我心はこれに慰められたり。かゝる情も詩となるべしや否や、覺束なし。館に歸りての後は、耶蘇聖母の夢に見え給ふこと稀にして、華やかなる浮世の事、罪深き人間の事のみ夢に入りぬ。されば唯ゞ尼寺に返らむことこそ願はしけれ。アントニオよ。おん身は親しき友なれば告ぐべし。われはこの頃漸く心の汚れむとするを覺ゆるなり。そは裝ひ飾らむとする願起りて、人の美しと褒むるが喜ばしくなれるにて知らる。尼寺の人々に知られなば、何とかいはれむ。われ。世に君の如く淨き心あるべしや。われは唯ゞ我心の君に似ざるを慚づるのみ。今我目もて見るときは、君の心の淨さは、昔稚くて此御館に居給ひし日に殊ならず。(われはかく言ひて姫の手に接吻せり。)姫。その頃おん身の我を抱き給ひしこと、我が爲めに畫かきて賜はりしことをば、まだ忘れ侍らず。われ。おん身の其畫を看畢りて、破り棄て給ひしをも、われは忘れず。姫。そを惜しとおもひ給ひしや。われ。世の人は我胸中なる美しき繪の限を破り棄てぬれど、われはそれすら惜むことなし。

わが小尼公に親む心は日にけに增さり行きぬ。われは世の人の皆我敵にして、唯ゞ小尼公のみ身方なるを覺えき。

落飾

暑き二箇月の間は、館の人々チヲリに遊び給ひぬ。わがその群に入ることを得つるは、恐らくは小尼公の緩頰に由れるなるべし。橄欖の茂き林、石走る瀧津瀬など、自然の豐かに美

しき景色の我心を動すことは、嘗てテルラチナに來て始て海を觀つる時と殊なることなかりき。この山のたゝずまひ、この風の清く涼しきに、我は復たナポリの夢を喚び起すことを得たり。我は羅馬の塵多き衢、焦げたるカムハニアの野、汗流るゝ午景を背にせしを喜びて、人々の我を伴ひ給ひしを謝したり。

　小尼公の侍女と共に驢に騎りてチヲリの谷間に遊び給ふときは、我はこれに隨ひ行くことを許されたり。姫は頗る自然を愛する情に富みて、我に些の寫生を試みしめ給ひぬ。荒漠たるカムパニアの野の盡くるところに、聖彼得寺の塔の涌出したる、橄欖の林、葡萄の圃の緑いろ濃く山腹を覆ひたる、瀑布幾條か漲り墮つる巖の上にチヲリの人家の簇りたるなど、皆かつ〴〵我筆に上りしなり。終の圖に筆を染むる時、姫の宣給ふやう。かく麓より眺むれば、この落ちたぎつ水の勢は、早晩巖石を穿ち碎き、押し流して、その上なる人家も底なき灘壺に陷らずやと怖しく思はると宣給ふ。われ。まことに宣給ふ如し。されどそを憂へずして、彼家々に栖める人の笑ひ樂みて日を送れるこそ神の惠ならめ。神は憫むべき人類のために、おそろしき地下のさまを掩ひ隱し給ふとおぼし。君は此水をすらおそろしと見給へども、ナポリの市の地下のさまはいかなるべきか。此は水なり、彼は火なり。かしこの民は、沸き返る熔巖の釜の上に生涯を送れるなりと答へぬ。我又語を繼ぎて、エズヰオの火山の形、わが其巓に登りし時の事、エルコラノとポムペイとの來歷など、姫に聞えまつりしに、姫は耳を傾け給ひて、館に還へりての後、猶大澤の彼方の珍らしき事どもを語り聞せよと宣給ひぬ。

　姫は海のいかなるものなるを想ひ見ること能はずと宣給ふ。そは親しく海と云者を觀給ひしは唯一たびにて、それさへ山の巓より、地平線を限れる一帶の銀色したる物を認め給ひしに過ぎざればなり。われは姫に告げて、まことの海原は我脚底に又一の碧空を觀る如しと云ひしに、姫は手を組み合せて、神の此世界を飾り給ひしことの極みなく奇しきをたゝへ給ひぬ。この時我は、その奇しく妙なる世界を背にして、狹き尼寺の垣の内に籠らむとし給ふ御心こそ知られねと云はむと欲せしが、姫の思ひ給はむ程のおぼつかなくて默しつ。ある日姫と我等とは、荒れたる神巫寺の傍に立ちて雲霧の如く漲り下る二條の大瀑を下瞰したり。一道の白き水烟は、小暗き林木を穿ちて迸立し、その末は青き空氣の中に散じ、日光はこれに觸れて彩虹を現じ出せり。側なる小瀑の上なる岩窟には、一群の鴿ありて巣を營みたり。その時ありて大いなる圖を畫きて、我等の脚下を飛ぶや、噴珠と共に亂れて、見る目まばゆき程なり。姫は歎賞することを久しうして、我に即興を求め給へり。われは平生夢寐の間に往來する所の情の、終に散じ終に銷すること此飛泉と同じきを想ひて、忽ち歌ひ起していはく。人生の急湍は須臾も留まることなし。太陽同じく照すといへど、一滴一沫よりして見れば、その光を仰ぎその温を被らざるあり。惟ゞ美妙の大光明は全景を覆ひ盡すのみと云ひぬ。姫は我歌を遮り留めて、止めよ、われは悲傷の詞を聞かむことを願はず、汝が心まことに樂しからずば、姑く我が爲めに歌ふことを休めよと宣給ひぬ。

　姫の我を信じ給ふことの厚きは、我が姫を信ずることの厚きに殊ならず。ある時姫の詞に、いかなる故とも知る由なけれど、館に往來する他の男子には語り難き事をも、おん身には語り易し、御身の親しきは父母に劣らざる心地すといはれしことあり。されば我もまた心を置かで、何くれとなく物語するやうになりぬ。幼か

りし日の事を語りて、地下の石窟に入りて路を失ひし話よりジェンツァノの花祭に老公の馬車の我母を轢殺せし話に至りしときは、姫の驚一方ならざりき。姫は我手を摻りて、我面を打目守り、その事をば館の人々まだ一たびも我に告げざりき、さては我族の御身に負ふ所はいと大いなりと宣給ひぬ。カムハニアの嫗ドメニカには、姫深き同情を寄せ給ひて、おん身は定めて今も怠らずおとづれ給ふなるべしと宣給ひぬ。われは少しく心に恥ぢながら、去年は唯ゞ二たび訪ひしのみなれど、彼方より尋ね來たるごとに、些の小づかひ錢をば分ち與ふるを例とすと答へぬ。

われは姫に促されて、我自傳を語りつゞけ、ベルナルドオの上に及び、又アヌンチヤタの上に及びぬ。されど我面に注ぎたる姫の涼しき目は、我をして縱に戀愛を說き嫉妬を說くこと能はざらしめき。われは話頭を轉じてナポリの紀行に入り、ララの事を語り、こたびは又サンタの事にさへ及びぬ。

最も姫の心に愜ひしはララなり。姫の宣給ふやう、アヌンチヤタは美しくもありしなるべく、賢しくもありしなるべし。されど面を公衆の前に曝すことを憚らず、浮薄なる貴公子を戀ひ慕へるなど、われはいかなる詞もて評すべきを知らぬながら、その人のおん身の妻とならざりしをば喜ぶなり。ララはこれに異にて、まことにおん身の爲めの守護神なるべし。おん身の靈の天上に在らむ時、先づ來りて相見むものはララならずして誰ぞやと宣給ひぬ。

サンタをば姫いたく怖れ給ひて、燃ゆる山、濶き海の景色はいかに美しからむも、かゝる怖ろしき人の住める地に往かむことは、わが願にあらず、おん身の恙なかりしは、聖母の御惠なりと宣給ふ。われは此詞を聞きて、さきに包み藏して告げざりしサンタとの最後の會見の事を憶ひ起しつ。現に我頭を擎ちて我夢を醒まししは、尊き聖母の御影なりき。姫若しわが當時の惑を知らば、猶我に許すに善人をもてすべしや否や。我肉身の弱きことは、よその男子に殊ならざりしなり。姫は又我に迫りて、嘗て即興詩人として劇場に上りし折の事を語らしめ給ひぬ。山深き賊寨にて歌はむは易く、大都の舞臺にて歌はむは難かるべしとは、姫の評なりき。われは行李を探りて、かの拿破里日報を出して姫に見せつ。姫は先づ當時の評語を讀みて、さて知らぬ都會の新聞紙のいかなる事を載せたるかを見ばやとて、あちこち飜し見給ひしが、忽ち我面を仰ぎ視て、おん身はアヌンチヤタの同じ時ナポリに在りしをば、まだ我に告げ給はざりきと宣給ふ。われはこの思ひ掛けぬ詞に、アヌンチヤタの事でかとつぶやきつゝ、彼新聞紙に目を注ぎつ。われは此一枚の紙を手にとりしこと幾度なるを知らねど、いつも評語をのみ讀みつれば、アヌンチヤタの事を書ける雜報あるには心付かざりしなり。姫の指ざし給ふ雜報には、アヌンチヤタ明日登場すべしとあり。その明日といへるは即ち我が拿破里を發せし日なり。われは姫と目を見合せて、暫くはものいふこと能はざりき。既にして我は纔に口を開き、さるにても我が再び面をあはせざりしは、せめてもの幸なりきといひぬ。姫。さは宣給へど、今其人に逢ひ給はゞいかに。定めて喜ばしと思ひ給ふならむ。われ。否、われは悲しと思ふべし。そを何故といふに、わが昔崇拜せしアヌンチヤタは今亡せたり、昔の理想の影は今消えぬ。わがこれを思ふは泉下の人を思ふ如し。さるを若しそのアヌンチヤタならぬアヌンチヤタ又出でゝ、冷なる眼もて我を見ば、癒えなむとする心の創は復た綻びて、却りてわれに限なき苦痛を感ぜしむるなるべし。

いと暑き日の午後、われは共同の廣間に出で

しに、緑なる蔓草の纏ひ付きたる窓櫺の下に、姫の假寢し給へるに會ひぬ。纎手もて頰を支へて眠りたるさま、只ゞ戲に目を閉ぢたるやうに見えたり。胸の波打つは夢見るにやあらむ。忽ち微笑の影浮びて、姫の眠は醒めぬ。アントニオそこにありや。われは料らずも眠りて、料らずも夢見たり。おん身はわが夢に見えしは何人の上なりとかおもふ。われ。ララにはあらずや。この答はわが姫の目を閉ぢたるを見し時、心に浮びし人を指して言へるのみなりしに、期せずして中りしなり。姫。さなり。われはララと共に飛行して、大海の上を渡りゆきぬ。海の中には一の島山ありき。その山の巓はいと高きに、われ等は猶おん身の物思はしげなる面持して石に踞して坐し給ふを見ることを得つ。ララは翼を振ひて上らむとす。われはこれに從はむとして、羽搏するごとに後れ、その距離千尋なるべく覺ゆるとき、忽ち又ララとおん身との我側にあるを見き。われ。そは死の境界なるべし。生きて千里を隔つるものも、死しては必ず相逢ふ。死は惠深きものにて、我に我が愛するところのものを與ふ。姫。われは遠からず尼寺に歸らむとす。これより後の我生涯は、おん身の爲めには死せると同じ。おん身は能く我を忘れずして、死後相見むことを期し給はむや。姫の此詞はいたく我心を動して、我をして輙ち答ふること能はざらしめき。

　ある日フランチェスカ夫人は姫を伴ひてキルラ、デステの園の中をそゞろありきし給へり。我も亦許されてその後に從ひぬ。園は高き絲杉あるをもて世に聞えたるところなり。一行の人工の噴泉ある長き並樹の間を歩むとき、路上に襤褸を纏ひたる貧人の群の草を拔くありき。われそが一人に「パオロ」銀一箇（我二十錢許）を與へしに、姫もまた微笑みつゝ一箇を與へ給ひぬ。草拔く人は、美しき姫君と婿君とに聖母の御惠あれかしと呼びたり。フランチェスカ夫人はこれを聞きて高く笑へり。われは熱血の身を焦すを覺えて、姫の面を覗ふことを敢てせざりき。われは今明に姫の我が爲めに離れ難き人となりしを悟りぬ。されど此情は嘗てアヌンチヤタの爲に發せしと迥に殊にて、又ララに對して生ぜしとも同じからず。アヌンチヤタの才と色とは殆ど我をして狂せしめ、ララの理想めきたる美は魔力を吾頭上に加へ、竝に皆我をしてその人を我物にせむ願を起さしめしなり。獨り小尼公に至りては、我友情を催すこと極めて深きに、われは却りて又我慾念のこれが爲めに抑へらるゝを覺えき。

　幾もあらぬに我等は又羅馬に歸りぬ。姫は二三週の後には尼寺に返り給ふべく、返り給ひては直ちに覆面の式を行はせらるべしと傳ふ。姫の長き髮はこれを截り、その身には生きながら肉衣を被らしめ、輓歌を歌ひ鐘音を鳴し、法の如く假に葬りて、さて天に許嫁せる人となりて蘇生せしむ。是れ式のあらましなり。姫は聞くに忍びずして、いかなれば君は自ら壙穴を穿ちて自ら下り入らむとはし給ふぞといひぬ。姫は色を正して、さる詞を人にな聞せそ、此塵の世に心牽かるゝことおん身の如くならむも拙し、少しは後の世の事をも思へかしと宣給ふ。その聲音さへ常ならぬに我はいたく驚きぬ。霎時ありて、姫は詞の過ぎたるを悔み給ひしにや、面に紅を潮して我手を取り、アントニオとても我心の平和を破り、我に要なき物思せさせむとにはあらざるべしと宣給ふ。我は詞なくて姫の金蓮の下に臥し轉びつ。

　別の舞踏會は御館にて催されぬ。われは姫の最後に色ある衣を着け給ふを見き。是れ人々の生贄の羔を飾れるなり。姫は我傍に步み寄りて、おん身も人々の歡を分ち給はずや、

われ若しおん身の憂はしき面を見て別れ去らば、尼寺に入りて後に屢〻御身の上を氣づかふならむ、かくてはおん身我に罪障を增させ給ふなりと宣給ふ。その聲は我が爲めに、瀕死の人の氣息を聞くが如くなりき。

出立ち給ふ前の日の夕となりぬ。姫は神色常の如く、父君と老公とに接吻して、あすの別の事を語り給ふ。其詞つきの、唯〻假初の旅路に出立ち給ふにかはらぬぞ、なか〳〵に哀なりける。アントニオに暇乞せずやといふは、ファビアニ公子の聲なり。座上にて、獨り此君のみは面に憂の色を帶び給へり。我は趨りて姫の前に出で、白く細き右手に接吻せり。姫はアントニオと我名を呼び掛け給ひしが、流石にしばし口籠りて、世に幸ある人となり給へ、さらばとて、我額に接吻し給ふ。われは夢心に其間を走り出でゝ、我室に泣きに入りぬ。

終にその日とはなりぬ。空は晴れ渡りて、日は麗かに照りぬ。我は父君母君の盛粧せる姫を贊卓の前に導き行き給ふを見、歌頌の聲を聞き、けふの式を拜まむとて來り集へる衆人の我四邊を圍めるを覺えき。されど僧徒の群に引かれてつくゑの前に跪き給へる、天使の如き姫君の、色白く優しげなる面のみは、我心の上に殊に明かなる印象を與へて、年經ての後も消ゆることなかりき。我は僧等の姫が頭上の紗を剝ぎて、雲の如き髮髮の亂れ墮ちて兩の肩を掩へるを見、これを斷つ剪刀の響を聞きつ。僧等は幾襲の美しき衣を脫がせて、姫を柩の上に臥させまつり、下に白き布を覆ひ、上に又髑髏の文樣ある黑き布を重ねたり、忽ち鐘の音聞えて、僧等の口は一齊に輓歌を唱へ出しつ。かくて姫は此世を隱れましゝなり。其時尼院に連る廊道の前なる黑漆の格子擧りて、式の白衣を着たる一群の尼達現れ、高く天使の歌を歌ふ。僧正は姫の手を取りて扶け起しつ。姫は早や天に許嫁し給ひて、御名さへエリザベッタと改まりぬ。我は姫の群衆の上に投じ給ふ最後の一瞥を望み見たり。一人の故參の尼は姫の手を引きて入りぬ。黑漆の格子は下りて、姫の姿、姫の裳裾は見えずなりぬ。

なきあと

ボルゲエゼ家の館は賀客絡繹たり。エリザベッタの天に許嫁せしを賀するなり。フランチェスカ夫人は面に微笑を湛へて、客に接し給へど、その良心のまことに平なるにあらざるをば、われ獨能くこれを知れり。

ファビアニ公子は我を招きて一包の金を賜ひぬ。汝は好き方人を失ひぬれば、氣色すぐれず見ゆるも理なきにあらず。姫は我に此金を殘しおきて、カムハニアの嫗に與へむことを頼み聞えぬ。想ふに姫はドメニカの上を汝に聞きて知りたりしならむ。持ち往きて與へよとなり。

死は蛇の如く我心を纏へり。我は自殺の念の一種の旨味あるを覺えて、心に又此念の生じ來れるを怖れたり。御館の廣き間ごと〳〵に、我はうらさびしき空虛を感ぜり。我はこゝを出でゝカムハニアの野に往かむことの樂しかるべきをおもひぬ。そは我搖籃のありつる處、ドメニカが子守歌の響きし處の、今更に懷しき心地したればなり。

カムハニアの廣き野は、この頃の暑さに焦げ爛れて、些の生氣をだに留めざりき。黃なるテヱエルの流の、層々の波を漾し去るは、そをして海に沒せしめむが爲めなるべし。われは又蔦蘿の壁にまとひ屋根にまとへる、小さなる石屋を見たり。門の戸は開けり。是れ實にわが少時の天地なりしなり。われは嫗の我を見て喜ぶべきを思ひて、胸に樂しく又哀なる一種の感を起しつ。先に此家をおとづれてより、早や一と

せを經ぬ。先に羅馬にて彼媼を見しより、早や八月を經ぬ。此間われは媼を忘れたりしならず、起臥ごとに思ひ出でゝ、小尼公にも語り聞せつ。されどチヲリの避暑、御館にかへりて後の心の憂などは、我を妨げてカムパニアに來させざりしなり。家の見え初めてより、われは媼の歡び迎ふる詞を想像しつゝ、歩を早めたりしが、家の門近くなりては、又跫音の疾く聞えむことを恐れて、ぬきあしゝつゝ進み寄りぬ。

門口より見るに、土間の中央に籐を折り加べて火を燃やし、大いなる鐵の銚を吊りたり。その下に火を吹く童ありて、こなたへ振り向くを見ればピエトロなり。昔はわれ此童の搖籃を護りしことありしに、此頃はいと逞しきものにぞなりぬる。聖ジュウゼッペ、旦那の來ましつるよ、さきに來ましゝより早や久しくなり候ふとて、立ち上りて迎へぬ。わがさし伸ばす手に、童の接吻せむとするを遮りつゝ、われ、無面目くも忘れしよとおもへるならむ。忘れたるにはあらずとことわりつ。童。否、母もさは思ひ候はざりき、生存へたらばいかに嬉しとおもふらむものを。われ。何とか言ふ。ドメニカは最早世にあらずとか。童。地の下に埋めてより、既に半年になりぬ。病みしは僅に二日ばかりなりしが、その間アントニオ、アントニオとのみ呼び續け候ひぬ。わがかく旦那の御名をいふを無禮しとおもひ給ふな。母は唯一目アントニオを見て死なむといひき。今宵はとおもはれし日の午過ぎて、われは羅馬の御館に參りしに、旦那はチヲリに往き給ひし後なりき。歸りて見れば、母は息絶えたり。言ひ畢りて、ピエトロは手もて面を掩ひぬ。

ピエトロが物語は、句ごとに言ごとに、我胸を刺す如くなりき。恩情母に等しきドメニカが、死に垂むとして我名を呼びしとき、我は避暑の遊をなして、心のどかに日を暮しつ。媼の餘命いくばくもあらぬをば、われ爭でか知らざらむ。何故に我はチヲリに往くに先だちて、一たび媼の許には來ざりしぞ。我はかくても猶自ら辯護して、我は善き人ぞといはむとするか。

われは彼金包を取りいで、我身邊に帶び來りし錢をも添へて、悉く童に與へつ、童は土間に跪きて、我を天使と呼べり。我が爲めには此詞の嘲謔の意あるが如く聞えて、我は此家の内にあるに堪へず、一つの憂をもて來し身の、今は二つの憂を懷きて、逃ぐるが如く馳せ去りぬ。

未錬

カムパニアの野より御館までは、いかにして歸り着きけむ知らず。われは限なき苦惱を覺えて、我臥床の上に僵れ臥しゝに、忽ち高熱を發して人事を知らざること三晝夜なりき。看病にはフェネルラとて、聾ひたる女を附けられしかば、幸に我譫語も人に怪まるゝことあらざりしならむ。されどファビアニ公子の屢ゝ病床に來給ひぬといふは、猶胸苦しき心地ぞする。

我恢復は頗る遲かりき。館の人に見舞はるるごとに、我は勉めて面を和げ快げにもてなせども、胸の中の苦しさは譬へむに物無かりき。此間人々は一たびも小尼公の名を我前に唱ふることなかりき。かくて小尼公の尼寺に入り給ひしより、六週の後となりし時、醫師は始めて我に戸外を逍遙することを許しつ。

我は期する所あるに非ずして、ポルタ、ピアの傍に立ち、目を四井街の方に注ぎつ。されど我は猶心に憚りて、尼寺の門に到ることを果さゞりき。二三日の後、我は新月の光を趁ひて、又同じところに來しに、こたびは自ら禁ずること能はずして、進みて灰色の寺壁の下に

に立ち、格子窓を仰ぎ視たり。我は自らことわりて、誰かわが此墳墓を展るを難ずることを得むと云ひぬ。これよりして、我足は日として四井街に向はざることなく、偶ゝ識る人に逢ふことあれば、散歩のゆくてはキルラ、アルバニなりと欺きつ。

我足の尼寺の築泥の外に通ふこと愈ゝ繁く、我情の迫ること愈ゝ切に、われはこの通路の行末いかになるべきかを危まざること能はざるに至りぬ。果せる哉、ある暗き夕我が尼寺の一窓の微に燈光を洩せるを仰ぎ見て、心に小尼公をおもふ時、忽ち傍よりアントニオと呼ぶもののあるを聞きつ。アントニオ、おん身はこゝに何をか爲せる。我は頭を回して公子の面を認め得たり。公子は直ちに我を促して共に歸りぬ。公子は途上復たわれと一語を交へざるに、われは心に公子の思はむ程の恥かしくて、その面を見ることを敢てせざりき。我室に入りて相對せる時、公子容を改めて宣給ふやう。アントニオよ。御身の病はまだ痊えずと覺し。少しく世の人に立ち交りて、氣鬱を散ぜむかた、身の爲めに宜しからむ。嚢にはおん身一たび翼を張りて飛ばむとせしを、われ强ひて抑留し、おん身をして久しく樊籠の中にあらしめき。そは我過にはあらざりしか。人各ゝ意志あり。行かむと欲するところに行き、住まらむと欲するところに住まりて、さて不幸に遭はゞ、そは自ら作せるなれば、悔ゆることもあらざるべし。おん身は最早童にあらねば、人の監督を受くることを喜ばざるべし。この頃醫師に謀りしに、これも轉地を勸めたり。拿破里の方をば既に見つれば、こたびは北伊太利を見に往けかし。一とせの間の費をば、われいかにともすべし。此館にありし間の我等の待遇には、おん身は或は慊ざりしならむ。されど又世間に出でゝは、誠の心もておん身を待つ人少きことを忘れ給ふな。われ等は未來一年の間のおん身の振舞を見て、過去の我等の待遇のおん身に利ありしか利あらざりしかを驗すべしといはれぬ。

公子は我答を待たずして室を出で給ひぬ。これは我に謀るにあらずして我に命ずるものなればなり、我に命ずるは我を逐ふものなればなり。世途は艱難ならむ。されどその我を毒することは今の生涯に孰與ぞ。今や公子はわれに自由を與へ給ふ。こは仙方なり、靈藥なり。われは只ゝその仙方靈藥の劇毒の如く我創痍を刺し、我に苦痛を與ふるを感ずるのみ。去らむかな、羅馬を去らむかな。いでや、記念の花の匂へる南國を出でゝ、アペンニノの山を踰え、雪深き北地に入らむ。アルピイおろしの寒威は、恰も好し、我が沸きかへる血を鎭むるならむ。いでや浮島のヱネチアに往かむ、わたつみの配てふヱネチアに往かむ。神よ、我をして復た羅馬に歸らしむること勿れ、我記念の墳墓を訪はしむること勿れ。さらば羅馬、さらば故鄕。

梟首

車は物寂びたるカムパニアの野を走りぬ。サン、ピエトロの寺塔は丘陵のあなたに隱れぬ。既にして我はモンテ、ソラクテの側を過ぎ、山を踰えて、ネピの市に入りぬ。明月は市の狹き巷を照せり。一僧の酒肆の前に立ちて說法するあり。群衆は活、聖マリアの聲に和しつゝ僧に隨ひて去れり。われはこれを避けて歩を轉ぜり。蔦蘿に包まれたる水道の址とこれを圍める橄欖の茂林とは、黯澹たる一幅の圖をなして、わが刻下の情に愜へり。われは又前に過ぎたる門を出でたり。門外に大廢屋あり。その城壘たりしと寺觀たりしとを知らず。今の街道はその廣間を貫きて通ぜり。側なる細徑を下れば、小房の蜂窠の如きありて、常春藤と石生長とは其壁を掩ひ盡せり。進みて一の廣間に入るに、

地に委ねたる石柱の頭と瓦石の堆とは高草の底に沒し、こゝかしこに色硝子の斷片を留めたる尖弧式の窓をば幅廣き葡萄の若葉物珍らしげにさし覗き、數丈の高さなる墻壁の上には荊棘叢り生ぜり。偶〻月光の一の壁面を照すを見れば、半ば剝蝕せられたる鮮畫は、箭に貫かれたる聖セバスチアノの像を物せり。此廣間は絶えず遠雷の如き響ありて、四壁に反響す。われその響を追ひて狹き戸を潛り出でしに、道は「ミュルッス」と葡萄との鬱茂せる間に窮まりて、脚底千仞の斷崖を形づくれり。一の瀑布ありてこれに懸る。月光其泡沫を射て、銀丸を擲つ如し。凡そ此等の景は、なべて世の好奇心あるものを動かすに足るものなるべし。されど當時の我の憂愁に沈める、或は等閑に看過しつらむも知るべからず。幸に我は此境に在りて、別に一事に遭ひたり。我は其事を我心上に血書して復た消滅すべからざらしめしが故に、亦併せて此景の詳なることを記し得たり。

崖に沿ひて一條の細徑あり。迂廻して初の街道に通ず。われは高萱を分け小草を踏みて行きしに、月は高き石垣の上を照して、三人の色蒼ざめたる首の、鐵格の背後より、我を覗ふを見たり。こは山賊を梟せるなりき。ネピの人の此壁上に梟首するは、羅馬の人のアンジェロ門(ポルタ、デル、アンジェロ)の上に梟首するに殊ならず。首を鐵籠中に置くことはた同じ。常の我ならば、遠く望みて走り去るべきに、此頃の痛苦は我に哲學思想を與へ、我をして冷眼もてこれを視ることを敢てせしめき。嗚呼、王侯の前に屈せざりし首よ、人を殺し火を放つ計を出しゝ首よ、深山の荒鷲に似たる男等の首よ、今は靜に身を籠中に託すること、人に馴れたる小鳥の如し。近づくこと一歩にして見れば、刎ねられてよりまだ日を經ざるものと覺しく、鬚眉猶生けるがごとし。既にして我は中央なる首級の少しく異なるものあるを認め得たり。こは分明に老女の首なりしなり。我はこの褐いろの顏、半ば開ける瞼、格子の外に洩れ出でゝ風に亂るゝ銀髮を凝視して、我脈膊の忽ち亢進するを覺えき。われは眼を壁に懸けたる石版に注げり。版には土地の習にて、梟せられたるものゝ氏名と其罪科とを彫りたり。果せるかな、中央に老女フルヰア、フラスカチの産と記せり。われはいたく感動して、覺えず歩み退くこと二三歩なりき。嗚呼、嘗て一たび我性命を救ひ、我に拿破里に至る盤纏を給せしフルヰアは、今此梟木の上より我と相見るなり。この藍色なる脣は、嘗て我額に觸れしことあり。この物言はざる口は、嘗て我に未來の運命を語りしことあり。汝は我福祉を預言したり。汝の猛き鷲は日邊に到らずして其翼を折けり、世のまがつみと戰ひてネミの湖に沈みたり。われは涙を灑いでフルヰアの名を呼び、蹣跚として閭門の外なる街道に歩み旋りぬ。

翌朝ネピを發してテルニイに抵りぬ。こは伊太利疆内にて最も美しく最も大なる瀑布ある處なり。われは案内者と共に、騎して市を出で、暗く茂れる橄欖の林に入りぬ。濕ひたる雲は山巓に棚引けり。我は羅馬以北の景を看て、その概ね皆陰鬱なるに驚きぬ。大澤の畔の如くならず、テルラチナなる橄欖の林の棕櫚を交へたるが如くならず。されど我は猶此感の我中情より出でたるにあらざるかを疑へり。

道は一苑を過ぎて、巖壁と激流との間なる街樾に入りぬ。その木は皆鬱蒼たる橄欖なり。これを行く間、われは早く水沫の雲の如く半空に騰上して、彩虹の其中に現ぜるを見き。蝦夷石南と「フュルッス」との路を塞げるを、押し分けつゝ攀ぢ登りて見れば、大瀑は山の絶巓より起り、削れる如き巖壁に沿ひて倒下す。側に一支流ありて、迂曲して落つ。其狀銀色の帶を展べ

たる如し。この細大二流は、わが立てる巖の前に至りて合し、幅濶き急流となり、乳色の渦卷を生じて底なき深谷に漲り落つ。雷の如き響は我胸を鼓盪して、我失望我苦心と相應じ、我をして前に小尼公の爲めにチヲリの瀧の前に立ちて、即興の詩を吟ぜし時の情を憶ひ起さしむ。げにや、碎け、消え、死するは自然の運命なること、獨り此瀑布のみにはあらず。

導者はわれを顧みていふやう。昨年英吉利人ひとり山賊に撃ち殺されしは、此巖の上にての事なりき。賊はサビノの山のものなりといへど、羅馬とテルニイとの間に出沒して、人その蹤蹟を審にすること能はず。警吏は直ちに來りて、そが夥伴なる三人を捕へき。われはその車上に縛せられて市に入るを見たり。市の門にはフルキアの老女立ち居たり。老女は天の下の奇しき事どもを多く知れるものにて、世には法皇の府の僧官達も及ばざること遠しとぞいふ。その時老女の車上の賊に向ひて語りしは、何事にかありけむ、例の怪しき詞なれば、傍聽せしものは辨へ知らむ由なかりき。さるを後には老女を彼賊の同類なりとし、ことし數人の賊と共に彼老女をさへ刎ねて、ネピの石垣の上に梟けたりと語りぬ。

妄想

自然と云ひ人事と云ひ、一として我心の憂を長ずる媒とならざるものなし。暗黑なる檄覺の林はいよ／＼濃き陰翳を我心の上に加へ、四邊の山々は來りて我頭を壓せむとす。われは飛ぶが如くに、里といふ里を走り過ぎて、早く海に到らむことを願へり。風吹く海に、下なる天の我を載すること上なる天の我を覆ふが如くなる處に。

我胸は愛を求むるか爲めに燃ゆ。是より先き此火は既に二たび點ぜられしなり。昔のアヌンチヤタは我が仰ぎ瞻しところ、我が新に醒めたる心の力もて攀ぢむと欲せしところなるに、憾むらくは我を棄てゝ人に往けり。今のフラミニアは我を眩せしめず、我を狂せしめずして、漸く我心と膠着すること、寶石のまばゆからざる光の、久しきを經て貴きことを覺えしむるが如くなりき。フラミニアは我手を握ること、妹の兄の手を握る如く、我にこれを接吻することを許すこと、妹の兄に許す如く、又我を說き慰め、我が爲めに祈りて世の穢を受けざらしめむとして、その度ごとに知らず識らず鐵を我心に沒せしめたり。我はこれを愛すること許嫁の婦を愛するが如くならず。されどその人の婦とならむをば、われまた冷に傍より看ること能はざりしならむ。今やフラミニアは死せり、現世の爲めには亡人の數に入りたり。世にはこれを抱き、その唇に觸るゝことを得るものなし。是れ我が責てもの慰藉也。

海に往かむ、往いて海の驚くべき景を觀む。是れ我が新なる境界なり。エネチアよ、水に泛べる都城よ、ハドリアの海の王女よ、願はくは我をして重れる山と黑き林とを過ぐることを須ゐず、空に翔り波を凌ぎて汝と會することを得しめよとは、我が當時の夢なりき。

初め我は先づフイレンチエに往き、かしこよりボロニア、フエルララを經て、エネチアに達せむと欲せしに、今は忽ち前の計畫を擲ち、スポレツトオより雇車を下り、暗夜身を郵便車に託して、アペンニノの嶺を踰え、ロレツトオの地をさへ、尊き御寺を拜まずして馳せ過ぎつ。

山道を登りて嶺に至りし時、我は早く地平線上一帶の銀色を認め得たり。是はハドリア海なり。脚下に大波の層疊せるを見るは、群巒の起伏せるなり。既にして碧波の上に、檣竿の林立せるを辨ず。種々なる旗章は其尖に翻へ

れり。光景は略ゝ拿破里に似たれど、ヱズヰオの山の黒烟を吐けるなく、又カプリの島の港口に横れるなし。此夜の夢に、我はフルヰアのおうなとフラミニアの君とに逢ひしに、二人皆面に微笑を湛へて、君が福祉の棕櫚は緑ならむとすと告げたり。

眠醒めしとき、日は旅店の窓よりさし入りたり。房奴來りていふやう、客人よ、ヱネチアに渡る舟は今帆を揚げむとす、猶留りてこのわたりの景色を觀むとやし給ふといふ。否、舟あるこそ幸なれ。さらば直ちにヱネチアに往かむと答へつ。我心は何故とも知る由なけれど、唯ゝ推され輓かるゝ如くなりき。われは埠頭におり立ちて、行李を搬び來らしめ、目を放ちて海原を望み見たり。さらば／＼我故郷。われは足の此土を離れむとするに臨みて、いよ／＼新なる世界の我が爲めに開くべきを感ぜり。北伊太利國の自然の全く相殊なるべきは始より疑ふべからず。就中ヱネチアは盛飾せる海の配偶にして、他の伊太利諸市と全く其趣を異にすべきこと明なり。我が乘るところの此舟は、即ちヱネチアの舟にして、翼ある獅子の旗は早く我が頭上に飜れり。帆は風に鼓きて舟は忽ち外海に駛り出で、我は舷板の上に坐して、藍碧なる波の起伏を眺め居たるに、傍に一少年の蹲れるありて、ヱネチアの俚謠を歌ふ。其歌は人生の短きと戀愛の幸あるとを言へり、こゝに大概を意譯せむか。其辭にいはく。朱の脣に觸れよ、誰か汝の明日猶在るを知らむ。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶熱き間に。白髮は死の花にして、その咲くや心の火は消え、血は氷とならむとす。來れ、彼輕舸の中に。二人はその蓋の下に隱れて、窓を塞ぎ戸を閉ぢ、人の來り覗ふことを許さゞらむ。少女よ、人は二人の戀の幸を覗はざるべし。二人は波の上に漂ひ、波は相推し相就き、二人も亦相推し相就くこと其波の如くならむ。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶熱き間に。汝の幸を知るものは、唯ゝ不言の夜あるのみ、唯ゝ起伏の波あるのみ。老は至らむとす、氷と雪ともて汝の心汝の血を殺さむ爲めに。少年は一節を唱ふごとに、其友の群を顧みて、互に相頷けり。友の群は劇場の舞群の如くこれに和せり。まことに此歌は其辭卑猥にして其意放縦なり。さるを我はこれを聞きて輓歌を聞く思ひをなせり。老は至らむとす。少壯の火は消えなむとす。我は尊き愛の膏油を地上に覆して、これを焚いて光を放ち熱を發せしむるに及ばざりき。こは濫用して人に禍せしならねど、遂に徒費して天に背きしことを免れず。そもそも我は誓約の良心を縛するあるにあらず、責任の云爲を妨ぐるあるにあらずして、何故に我前に湧ける愛の泉を汲まざりしぞ。かく思ひ續くれば、一種の言ふべからざる情は我胸に溢れたり。これに名づけて自ら慊ざる情ともいふべきか。こは我慾火の勢を得て、我智慧を燬くにやあらむ。

我がサンタを畏れて走り避けしは何故ぞ。聖母の像の壁上より落ちぬればなり。否々、銹びたる釘はいづれの時か折れざらむ。まことに我をして走り避けしめしものは、我脈絡中なる山羊の乳のみ、「ジェズヰタ」派學校の教育のみ。われはサンタの艷色を憶ひ起して、心目にその燃ゆる如き目なざしを見心耳にその渇せる如き聲音を聞き、我と我を嘲り我と我を卑めり。何故に我は世上の男子の如く、ベルナルドオの如くなることを得ざる。愛を求むるは我心にあらずや。我心は神の授け給ひし光明にあらずや。さらば愛を求むるは神にあらずや。此時我は此の如くに思議せり。此の如くに思議して、ヱネチアの繁華をおもひ、その女ありて雲の如くなるをおもひ、我血の猶熱せるをおもひ、忽

ち艫を放ちて我少年の歌に和したり。

嗚呼、是れ皆熱の爲めに發せし譫語のみ、苦痛の餘なる躁狂のみ。我に心の光明を授け給ひし神よ、我運命の柄を握り給ふ神よ。我は御身の我罪を問ひ給ふことの刻薄ならざるべきを知る。人の心中には舌頭に上すべからざる發作あり、爭鬪あり。是れ吾人の清廉なる守護神の膝を惡魔の前に屈する時なり。世の能く欲して能く遂ぐる人々は、我がいたづらに欲せしところに就いて、自在に評論せよ。されど汝等は裁決せざれ。さらば汝等は裁決せられざるならむ。汝等は呪詛せざれ。さらば汝等は呪詛せられざるべし。我は實に此の如く思議せり。

此の如く思議して、復た禱の詞を出すこと能はずして寝たり。舟は穩に我夢を載せて、北のかたヱネチアに向へり。

水の都

曉に起きて望めば、前面早く家々の壁と寺塔とを辨ずることを得たり。そのさま譬へば帆を揚げたる無數の舟の檣に列れるが如し。左のかたにはロムバルヂアの岸の平遠なる景を畫けるあり。遙に地平線に接してはアルピイの山脈の蒼靄に似たるあり。われにこれを望みて、彼蒼の廣大なるを感ぜり。天球の半は一時に影を我心鏡に映ずることを得たるなり。

爽涼なる朝風は我感情を冷却せり。我は心裡にヱネチアの歴史を繰り返して、その古の富、古の繁華、古の獨立、古の權勢乃至大海に配すといふ古の大統領の事を思ひぬ。(ヱネチア共和國に「ドオジェ」を置きしは、第八世紀より千七百九十七年に至る。)既にして舟は漸く進み、鹹澤(ラグウナ)の上なる個々の人家を見るに、その壁は黃を帶びたる灰色を呈し、古代の樣式にもあらず、又近時の設計にもあらねば、要するに好觀にあらざりき。名に聞えたるマルクスの塔は思ひしよりも高からず。舟は陸と鹹澤との間を進めり。後なるものは曲りたる堤の如く、海中に斗出したり。土地は全體極めて卑しとおぼしく、岸の水より高きこと僅に數寸なるが如し。偶〻數戶の小屋の群を成せるあれば、指さして市と云ふ。こゝかしこには一叢の木立あり。其他は渾て是れ平地なりき。

われはヱネチアの既に甚だ近きを覺えしに、今傍人に問へば猶一里ありと答ふ。而して此一里の間は、皆瀦留せる沼澤の水のみ。處々には泥土の島嶼の狀をなして頭を露せるあり。その上には一鳥の足を留むるなく、一莖の草の萌え出づるなし。沼澤の中に、深き渠を穿ちて、杭を立てゝ泥を支ふるあり。是れ舟を行る道なり。

われは始てゴンドラといふ小舟を見き。皆黑塗にして、その形狹く長く、波を截りて走ること弦を離れし箭に似たり。遍りて視れば、中央なる小亭にも黑き布を覆へり。水の上なる柩とやいふべき。拿破里の水は岸に近づきても猶藍いろなるに、こゝは漸く變じて汚れたる綠となれり。偶〻一島の傍を過ぐるに、その家々は或は直ちに水面より起れる如く、或は廢れたる舟の上に立てる如し。最も高き石壁の頂に、幼き耶蘇を抱ける聖母の畫像ありて、この荒涼なる天地を眺め居給ふ。水の淺きところは、別に一種の鴨綠色をなして、一面深き淵に接し、一面は黑き泥土の島に接す。日は明くヱネチアの市を照して、寺々の鐘は皆鳴り響けり。されど街衢は闃として人影なきに似たり。船渠を覗へば、只〻一舟の横れるありて、こゝにも人を見ざりき。

我は身を彼水上の柩に託して、水の衢に入りぬ。樓屋軒をならべて石階の裾は直ちに水面に達し、復た犬ばしり程の土だに着けず。家の穹窿門は水に架して橋梁の如く、中庭は大なる井の如し。この中庭には舟に帆掛けて入る

べけれど、轆轤を旋さむことは難かるべし。海水はその緑なる苔皮をして、高く石壁に攀ぢ登らしめ、巍々たる大理石の宮殿も、これが爲めに水中に沈まむと欲する狀をなし、人をして危殆の念を生ぜしむ。況や金箔半ば剝げたる大窓の閉らざる楼もて圍まれたるありて、大厦の一部まことに朽敗になんなむとしたるをや。既にして晩鐘は聲を斂めて、櫂の水を撃つ音より外、何の響をも聞かずなりぬ。われは猶未だ人影を見ずして、只ゝ美しきヱネチアの鴿の尸の如く波の上に浮べるを見るのみ。

舟は轉じて他の水路に入りぬ。その幅頗る狹くして石橋あまたかゝれり。こゝには人ありて、或は橋を渡りて家の間に隱れ、或は石壁の門を出入す。されど街と名づくべきものは、水路の外有ることなし。舟人の棹を留めたるとき、われは何處に往くべきぞと問ひぬ。舟人は家と家との間を通ずる、橋の側なる陜き巷を指ざし敎へつ。兩邊の家に住める人は、おの〱六層樓上の窓を開いて、互に手を握ることを得べく、この日光を受けざる巷は、僅に三人の並び行くことをゆるすなるべし。我舟は既に去りて、身邊また寂として人を見ず。

あはれヱネチアとは是か、海の配偶と云ひ、世界第一の富强者と云ひしヱネチアとは是か。

われは名に聞えたるマルクスの廣こうぢに入りぬ。こはヱネチアの心臟と稱すべき處にして、その所謂繁華は羅馬のコルソオに孰與ぞ、又拿破里の市に孰與ぞ。石の迫持の下なる長き廊道には、書肆あり珠玉店あり繪畫鋪あれども、足を其前に留むるもの多からず。唯ゝ骨喜店の前には、幾個の希臘人、土耳格人などの彩衣を纏ひて、口に長き烟管を啣み、默坐したるあるのみ。日は「マルクス」寺の屋根の鍍金せる尖と寺門の上なる大いなる銅馬とを照して、チュペルス、カンヂア、モレア等の舟の赤橋の上なる徽章ある旗は垂れて動かず。數千の鴿は廣こうぢを飛びかひて、甃石の上に集れり。

われは進みてポンテ、リアルトオに到りて、いよ〱斯土の風俗を知りぬ。ヱネチアは大いなる悲哀の鄕なり、我主觀の好き對象なり。而して此鄕の水の上に泛べること、古のノアの舟と同じ。われは小き舟を下りて、この大いなる舟に上りしなり。

日の夕となりて、模糊として力なき月光の全都を掩ひ、隨處に際立ちたる陰翳を生ぜしとき、われはいよ〱ヱネチアの眞味を領略することを得たり。死せる都府の陰森の氣は、光明に宜しからずして幽暗に宜しければなり。

われは客亭の窓を開いて立ち、黒き小舟の矢を射る如く黒き波を截り去るを望み、前の舟人の歌ひし戀の歌を憶ひ起せり。われは此時アヌンチヤタを恨みき。いかなれば彼佳人は我を棄ててベルナルドオに奔りしぞ。こは誠實を去りて輕薄に就きしにあらずや。われは此時フラミニアをさへ恨みき。いかなれば彼少女は我を棄てて尼寺に入りしぞ。こは情愛を去りて平和に就きしにあらずや。我胸は一種の言ふべからざる空虛を感じたり。我胸はあらゆる我を喜ばせしものとあらゆる我を慰めし者とを一掃して去らむと欲せり。然るにかく思議する間、終始我心目の前に往來するものは、可愛きララと罪深きサンタとの面影なりき。われは蹣跚として階を下り、舟を喚びて水の衢を逍遙せり。二人の柁手は相和して歌ふ。其歌は古の快復せられたるエルザレム(ジェルザレムノ、リベラアタ)の調にあらず、大統領の族絶えて、獅子の翼の外人に縛せられてより、ヱネチアの民はその歌謠の上の國粹をさへ失ひつるなり。われは獨語して、いでや人生の渦裏に投じて、人生の樂を受用し、醉ひて餘瀝なからしめむと云ふとき、

舟はもとの旅館の階下に留まりぬ。われは又蹣跚として階を上り、おぼつかなき孤客の夢を結びぬ。

颶風

羅馬より齎したる紹介狀は、我をして相識を得しめ、我をして所謂朋友あらしめたり。人々は我をアバテと喚べり。我音の善きをば人皆褒め、我才をば人皆稱せり。羅馬なる恩人は常に我に不快なる事を告げ、中にはことさらに我に快からざるべき事どもを探り覓めて、そを我に告ぐる如くなりしに、今はさる詞を耳にすることなし。羅馬にては常に長上にのみ交ることゝて、フラミニアの姫の情あるすら、我をして抑鬱の苦を忘れしむること能はざりしに、今は心にさる負荷を覺ゆることなし。苦言を聞かざるは、信ある友なきなりといへば、こゝには信ある友は絶て無きなるべし。

われは大統領の館の輪奐の美を討ねて、その華麗を極めたる空しき殿堂を經廻り、おそろしき活地獄の圖ある鞠問所を觀き。われは彼四面皆塞りたる橋の、小舟通ふ溝渠の上に架せられたるを渡りぬ。是れ館より牢獄に往く道にして、名づけて歎息橋と曰ふとぞ。橋に接する處は卽ち牢井なり。廊に點じたる燈火は僅かに暗き鐵格を穿ちて、最上層の獄を照し出せり。此層の如きは、これを下層に比するときは、猶ほ晴やかなる房と稱すべきならむ。濕ひて菌を生じたる床は、遙に溝渠の水面の下にあり。あはれ、此房の壁は幾何の人の歎息と叫喚とを聞きつる。われは慄然として肌膚の粟を生ずるを覺え、急に舟を呼んで薄赤いろなる古宮殿、獅子を刻める石柱の前を過ぎ、鹹澤の方に向ひぬ。舟の指すところは卽ち所謂岸區なりき。

われは岸區に近づくとき、何物をか見し。こゝには一の大いなる墓田ありき。外國人と新教徒とは、この水と水とに挾まれたる一帶の土の、殆ど時々刻々洗ひ去らるゝ狀をなせる處に埋めらるゝなり。白き人骨は沙の表に露れて、これが爲めに哭するものは、只だ浪の音あるのみ。

漁父の危きを冒して沖に出でたるとき、その妻そのいひなづけの妻などの、坐して夫の舟の歸るを待つは、此岸區なりといふ。颶風の勢少しく挫けたるとき、こゝに坐したる女子の、彼恢復せられたるエルザレム中の歌を歌ひ、耳を傾けて夫の聲のこれに應ずるや否やを聽きしこと幾度ぞ。さるをその懷かしき夫の聲の終に應ずることなく、可憐の女子の獨り不言の海に對して口は復た歌ふこと能はず、目は空しく沙上の髑髏を見、耳は徒らに岸打浪の音を聞きて、暮色の漸く死せる古都を掩ふを覺えしこと又幾度ぞ。

この凄涼たる畫圖は我心目に上りて消えず、我情調はこれに一層の悲慘の色を添へむとせり。わが對するところの自然は、無常と壓勢との感を惹き起すこと、一の寺院の如くなりき。フラミニアの姫の詞は、此時端なく憶ひ出されぬ。詩人は神の豫言者にあらずや。何故に詩人は神の徳を頌せむことを勉めざる。嗚呼、我は忽ち此詞の眞理なることを感得せり。不滅なる詩人の心は不滅なる神をこそ詩料とすべきなれ。目前の榮華は泡沫の五彩の色を現ずるに異ならずして、その生ずる時はやがてその滅する時なり。われは忽ち興到り氣奮ふを覺えしに、忽ち又興散じて氣衰ふるを覺え、悄然として舟に上り、大海に臨める岸區に着きぬ。

海はやゝ浪立てり。われは佇立してアマルフィイの灣を憶ひ起しつゝ、目を轉じて身邊を顧みれば、波のもて來し藻草と小石との間に坐して、草畫を作れる男あり。われは其姿に些の見おぼえあるをもて、徐にこれに近づくほどに

男は身を起して此方に向へり。こは我がエネチアに來てよりの新相識の一人なる貴族の少年にて名をポッジョといふものなりき。

ポッジョのいふやう。こゝにて君と相見むとは思ひ掛けざりき。この怒り易く恃み難きハドリアの海の、能く君を招き致したるは、唯ゞその紅波白浪の美あるがためか、そも〳〵別に美なるものありて、この岸區に住めるにはあらざるかといひぬ。我等は互に進み寄りて手を握りつ。

人の語るを聞くに、ポッジョは畫才ありて資力なき人なり。その人に對する言語動作は洒落にして、間ゝ放縱なるかとさへ疑はるゝ節あれども、まことはいみじき厭世家なり。言ふところはドン、ホアンを欺く蕩子なる如くにして、まことは聖アントニウスの誘惑を峻拒する氣概あり。無邪氣なること赤子の如く、胸中一事を包藏するに堪へざるものに似て、智を恃める士流は遂にその底蘊を窮むること能はず。こは深き憂に中れるが爲めなるべけれど、その憂は貧か戀か、そも〳〵別に尋常ならざる祕密あるか。これを知るもの絕て無しとぞ。われは人の若語るを聞きて、かねてよりポッジョに親まんことを願ひしかば、今ゆくりなくこれに逢ひて、心にこの邂逅を喜び、早く胸の雲霧のこれがために晴るゝを覺えき。

ポッジョは海を指ざしてかゝる青く波立てる大面積は羅馬の無き所なり、おほよそ地上の美なるもの海に若くはなかるべし、宜なり海はアフロヂテの母にしてと云ひさし、少し笑ひて、又エネチア歷代の大統領の未亡人なりといへり。われ。海を愛する心は、エネチアの人殊に深かるべき理あり。海は己れが母なるエネチアの母にして、己れを愛撫し己れを游嬉せしむる祖母なればなり。ポッジョ。その氣高かりし海の女の今は頭を低れたるぞ哀なる。われ。フランツ帝の下にありて幸ありとはいふべからざるか。ポッジョ。われは政治を解せず。エネチア人は今も不平を說くことを須ゐざるなるべし。されどわが解するところのものは美妙なり。陸上宮殿の柱像たらむは、海の女王たらむことの崇高なるには若かず。おもふに君の美妙を崇拜し給ふこと我に殊ならざるべければ、君はかしこより來る彼美の呼び迎ふるをも辭み給はぬならむ。こは識る所の酒亭の娘なり。共に往き給はずやといふ。われはポッジョと少女に誘はれて、海に枕める小家に入りぬ。酒は旨し。友は善く談ぜり。誰かポッジョが輕快なる辯と怡悅の色とを見て、その厭世の客たるを知り得む。我は共に坐すること二時間ばかりなりしに、舟人は急に我を呼びて歸途に就かむことを促せり。こは颶風の候ありて、岸區とエネチアとの間なる波は、最早小舟を危うするに足るが故なりと云へり。ポッジョは耳を欹てたり。何とか云ふ。颶風は我が久しく觀むことを願ひしところなり。「アバテ」も暫く我と共に留まり給へ。日の暮るゝまでには凪ぐべし。若凪がずは、枕をこの茅屋根の下に安くして、波の音を聞くこと、昔子もり歌を聞きしが如くせむといふ。我は舟人を顧みて、舟を要せば別に雇ふべければ、汝達は去留自在にせよといひて、暇を取らせつ。

須臾にして波濤洶々の音漸く高く、風力の衝突は頻りに全屋を撼せり。我とポッジョとは倶に戶外に出でゝ瞻望したり。時に夕陽は震怒したる海の暗綠なる水を射て、大波の起る處雪花亂れ飄れり。地平線に近き邊には、層雲堆を成して、稻妻の其間より閃發せるさま、幾箇の火山の噴坑を開けるに似たり。我等は忽ち二三の舟の紙上の黑點の如く彼雲に映ずるを見しが、忽ち又これを失へり。岸を嚙む水は、石に觸れて倒立し、鹹沫は飛んで二人の面を撲

てり。ポッジョの興は風浪の高きに從ひて高く、掌を拍ちて哄笑し、海に對して快哉を連呼せり。此興は我に感じ傳はりて、我は胸中の苦悶の天地の忿怒に壓倒せらるゝを覺え、亦ポッジョの聲に應じて叫びぬ。

暮色は急に襲ひ至りぬ。我等は亭に入りて、當壚の女をして良酒を供せしめ、續けざまに數杯を傾けて、此自然の活劇を翫べり。忽ちポッジョの聲を放ちて歌ふを聞きつ。其曲は嘗て此地に來りしとき舟中にありて聞きしと同じき戀の歌なり。われ杯を擧げて、エネチアの美人の健康のために飲まむと云へば、ポッジョ、さらば我は羅馬の美人のために飲まむと云ふ。若し相識らぬ人の、我等の狂態を見たらむには、定めて尋常時に及びて行樂する徒となすなるべし。ポッジョのいふやう。女子の美は羅馬に若くはなし。君はいかにおもひ給ふか。憚ることとなく答へ給へ。われ。そは我が首肯する所なり。ポッジョ。さもあるべし。されど伊太利第一の美人は此エネチアにこそあれ。憾むらくは君未だ市長の女を見給はず。清楚なること此の如きは、世の絕て無くして僅に有るところにして、これをや精神上の美とは云ふべき。若しカノワにして此女を識りたらましかば、その三美の像の最も少きをば、必ず此女の姿によりて摸し成ししならむ。(カノワは彫匠なり。ポッサニヨに生れエネチアに歿す。三美の像は獨逸ミュンヘンに在り。)われは嘗て晩餐式ありしとき、寺院にて見、又聖摩西の劇場にて一たび見たり。その高根の花に似て、仰ぎ看るだに容易からぬを恨むものは、獨り我のみにはあらず。おほよそエネチアの少年紳士にして同じ恨を抱かぬはあらざるならむ。只だ人々と我と相異なるは、彼は懸想し我は懸想せざるのみ。我俗眼もて見れば、彼人は餘りに天人めきたり。されど天人は崇拜の對象とすべきならむ。「アバテ」はいかに思ひ給ふといふ。われは此語を聞いて、フラミニアの事を思ひ出し、喜の色は我面より消え失せたり。ポッジョ。酒は好し。風波は我筵の爲めに歌舞す。いかなれば君愁の色を見せ給ふぞ。われ。市長は客を招き筵を張ることありや。ポッジョ。稀にそのことなきにあらず。されど招請を愼むこといと嚴なり。矧や彼人は物に怯るゝこと麑子の如く、同じ席に列るものもたやすく近づくこと能はざるを奈何せん。われは必ずしもかの人心より此の如しと說かず。そは人にめづらしがられむとてかく振舞ふ女も少からねばなり。そが上に彼人の身上には明白ならざる處なきにしもあらず。わが聞くところに依れば、市長に二人の妹ありて、皆久しく遠國に住めりき。その最も少き方の妹は希臘人に嫁ぎたりしに、その夫婦の間に彼の奇しき少女はまうけられぬといふ。今一人の妹は猶處子なり、しかも老いたる處子なり。四とせ前の頃彼の少女を伴ひて歸り來りしは、此の老處子に他ならざりき。

夜の如き闇黑は急に酒亭を覆ひて、ポッジョが話の腰を折りたり。あなやと驚く隙もあらず、赫然たる電光は身邊を繞り、次いで雷聲大に震ひ、我等二人をして覺えず首を低れて、十字を空に畫かしめつ。

酒亭の女主人色を變じて馳せ來りて云ふやう。氣の毒なることこそ出來り候ひぬれ。岸區の優れたる舟人六人未だ海より歸らずして、就中憐むべきアニエエゼは子供五人と共に岸に坐して待てり。いかになり行くことならむ。只ゝ聖母の御惠を祈らむより外術なしといひぬ。忽ち歌頌の聲はわれ等の耳に入れり。戶を出でて覗へば、彼の激浪倒立すること十丈なる岸頭に、一群の女子小兒の立てるあり。小兒等は十字架を捧げ持てり。群のうちに一人の年少き女の、地に坐して海上を凝視せるあり。この

女は赤子に乳房を銜ませたるに、別に年稍〻長ぜる一兒の膝に枕したるさへありき。忽ち一道の電火下り射ると共に、颶風は引さ去らむと欲する狀をなせり。地平線には小き稻妻亂れ起りて、暗碧なる浪の尖なる雪花はほの〴〵と白み來れり。彼女は俄に蹶起して、舟はかしこにと呼べり。われ等はその指す方に一の黑點あるを認め得たり。黑點は次第に鮮かになりぬ。時に一人の老漁ありて、褐いろなる無庇帽を戴き指を組み合せて立ちたりしに、不意にあなやと叫べり。聲未だ畢らざるに、我等は黑點の泡立てる巨濤の蔭に隱るゝを見たり。果せるかな老漁の目は我を欺かざりき。一群の人は周章の色を現せり。天の漸く明かに、海の漸く靜に、舟人遭難の事の漸く確實になりゆくと共に周章の色は加はり來れり。小兒は捧げ持ちたりし十字架を地に委ねて、泣き號びつゝ母に縋りぬ。その時老漁は十字架を地より拾ひて、救世主の足に接吻し、更に高くこれを擎げて口に聖母の御名を唱へき。

　半夜に至りて天に纖雲なく、皎月はヱネチアと岸區との間なる風なき水を照せり。われはポッジョと舟を倩ひて岸區を離れたり。そは留まりて彼の五子の母を慰藉し、又これを救恤するに由なかりしが爲めなり。

感動

　翌晩われはポッジョとヱネチア屈指の富人某の家に會せり。こはわが出納の事を託したる銀行の主人なり。會するものはいと多かりしかど、席上一の我が相識れる婦人なく、又一の我が相識らむことを欲する婦人なかりき。

　會話は昨夜の暴風の事に及べり。ポッジョは舟人の横死と遺族の窮乏とを語りて、些少なる棄捐のいかに大いなる功德をなすべきかを諷し試みたれども、人々は只〻そは笑止なることなるかなとて、肩を聳かして相視たるのみにて、眞面目にこれに應ふるものなく、會話は餘所の題目に移りぬ。

　頃くして席は遊藝を競ふところとなり、ポッジョは得意の舟歌（バルカルオラ）を歌へり。我は友の笑を帶びたる容貌の背後に、暗に富貴なる人々の卑吝を嘲る色を藏したるかを疑ひぬ。舟歌畢りしとき、主婦は我に對ひて、君は歌ひ給はずやと問ひぬ。われ、さらば即興の詩一つ試みばやと答へぬ。四邊には渠は即興詩人なりと耳語く聲す。婦人の群は優しき目もて我を促し、男子等は我を拚して請へり。われは「キタルラ」の琴を抱きて人々に題を求めつ。忽ち一少女の臆する色なく目を我面に注ぎてヱネチアと呼ぶあり。男子幾人か之に應じてヱネチア、ヱネチアと反復せり。そはかの少女の顏美なるが爲めなり。われは絃を理めて、先づヱネチア往古の豪華を說きたり。人々は歷史と空想とを編み交ぜたる我詞章に耳を傾けつゝ、彼過去の影をもて此現在の形となすにやあらむ、その眼光は皆耀けり。われは心中にララをおもひサンタをおもひつゝ、月明かなる夜、渠水に枕める出窓の上に、美人の獨りたゝずめる狀を敍したり。婦人等はこれを聞きて、謳ふものの直ちに己れを讚むとなすにやあらむ、纎手を拍ちて我に酬いぬ。わが席上の成功はスグリッチ（原註、知名の即興詩人）にも讓らざる如くなりき。

　ポッジョは我耳に附きて、市長の姪あり、此席にありとさゝやきしが、會〻婦人數人と老いたる貴族某との座客を代表して、我に再演を請ひたりしが爲めに、われは友と多く語を交ふること能はざりき。此請は我が預め期したるところなりき。われは好機會を得て、昨夜の暴風と難船との事を敍し、前に友の雄辯もて遂ぐること能はざりしところをも、詞章もて遂げむと

期したりしなり。

我はチチアノの賛といふ題を得たり。即興はおもふまゝなる喝采を博して、古名匠の賛はわが自賛となりぬ。されどチチアノは海を畫く人ならざりしが爲めに、われは此題を利用して我志を果すに由なかりき。

主婦は我に近づきていふやう。君の如く自家の伎藝もてかくあまたの人を樂ましめ感ぜしめむは、いかに快き事なるべきか。われ。詩人第一の快事は詩の成功なり。主婦。さらば能くその快きを題として歌ひ給はむや。君の辭を措き給ふことの容易げなるよりわれ等は、頻りに請ふことの無禮げなるをさへ忘れむとす。われ。こゝに一の奇術あり。そは人々皆詩人となりて、能く詩人の快を體驗することなり。われは此術を善くすれども、かゝる術の常として、報なくては演ずべきにあらず。わが此詞は果して坐客をして耳を欹てしめ、人々は爭ひ進みて、願はくはその奇術を見ることを得むと云へり。我は側なる卓を指ざして、報せむと思ふ方々は、金錢にもせよ珠玉首飾の類にもせよ、此上に出し給へと云ひぬ。婦人の一人は戯に、さらば我はこの黄金の鎖を置かむと云ひて、言ふところの品を卓上に擲てり。一男子は笑ひつゝ、さらば我は骨牌の爲めに帶び來れる此金殘らずを置かむと云ひて、その財嚢を擲てり。われ。人々よ、我詞は戯言にあらず、人々は再び其品を得給ふまじといふに、滿座の客は、さもあらばあれ君が奇術こそ見まほしけれと、金銀、指環、鎖の類を堆く卓上に積みたり。軍服着たる一老人、若しその奇術奇ならざるときは、われは我が「ヅカアチイ」二個（約三圓三十八錢）を取り返すことを得むかといひしに、ポッヂョは我に代りて、若し疑はしとおもひ給はゞ、夥伴に入り給はでもあるべきにと答へぬ。人々はこれを聞きて打笑ひ、只管我が演じいだす所のいかなるべきを俟ち居たり。

われは將に口を開かむとするに臨みて、神の我に光明を與へ給ふを覺えたり。先づエネチアの配偶なる、威力ある海を敍し、それより海の兒孫なる航海者に及び、性命を一葦に託する漁者に及べり。次に前夕の目撃せしところに就きて颶風を敍し、岸に臨みて翹望せる婦幼に及び、十字架を落す兒童とこれを拾ひて高く擎ぐる漁翁とに及べり。我は殆ど歌ふところのものゝ即ち神の御聲にして、我身の唯ゞ此聲を發する器具に過ぎざるを覺えき。時に廣座の間寂として人なきが如く、處々に巾もて涙を拭ふものあるを見る。われはこれより茅屋のうちなる寡婦孤兒の憐むべき生活を敍し、賑恤の必要と其效果とに及べり。われは人間の快さは取るに在らずして與ふるに在り、與ふる快さは即ち神の御心にして、此心あるものは誰か眞の詩人たらざらむと云へり。我聲の威力、その幅員は曲の末節に至りて強さと大さとを加へき。我曲は能く衆人を感動せしめき。我が卓上の物を取りてポッジョに交付し、これに救助の事を託せしときは、喝采の聲屋を撼したり。

爾時一の年わかき婦人ありて、我前に來り跪き、我手を握り、その涙に潤へる黑き瞳もて我面を見上げ、神の母の報は君が上にあれと呼びたり。われは婦人の黑き瞳を見て、曾て夢中に相逢ひたる如き念をなし、深くこれに動されぬ。婦人は此言をなし畢りて、纔におのれの擧動の矩を踰えたるを曉れりとおぼしく、臉に火の如き紅を上して席をすべり出でぬ。

座客は皆我傍に集ひて、わが博愛の心を稱へ、わが即興の作を讃む。ポッジョは我を擁して、幸ある友よ、人の仰ぎ視ることをだに敢てせざる美人は、膝を君が前に屈せしにあらずやとさゝやけり。われ。渠は何人なりしか。ポッジョ。エネチア第一の美人なり。市長の姪な

り。一の老婦人ありて我に歩み近づきて、君は最早我を忘れ給ひしか。そは理なきにあらず、唯ゞ一たび相見てより後、年あまた經ぬればと云ひつゝ、我に手をさし伸べたり。われ。一たび相見しことある御方とは知れど、何時何處にての事ともおもひ定め難しといふに、老婦人、我同胞は醫師にて拿破里に居たり、君はボルゲエぜ家の公子と共に兄を訪ひ給ひぬといふ。我。まことに宣給ふ如し。こゝにて逢ひまつらむとは思ひ掛けざりしなり。老婦人。拿破里の弟は妻なかりし故、われに家政をとりまかなはせしに、四とせ前にみまかりぬ。今はこゝなる兄の許に住めり。我姪はその惟人と殊なれば、一たび家に歸らむといひ出でゝは、思ひ留まるべくもあらず。又こそ御目にかゝらめとて、老婦人は出で去りぬ。ポッジョは再び我にさゝやくやう。かへす〲も幸ある友よ、市長の妹の君が相識にて、君と面會を約せしは願ひてもなき事ならずや。ヱネチアの少年紳士にして君を羨まぬものはあらじ。人々は遠距離にありてだに心に傷を負へるを、君は敵の陣地に入ることなれば、注意して自ら護り給へといふ。市長の姪の去りしには、座客氣付きぬれど、皆その心の優しきこと姿の美しきにかはらずとて、讃め稱へて已まざりき。善行は心に光明を與ふ。われは久しぶりに心の中の快活を感じて、ポッジョと杯を碰せ、此より兄弟の如くならむことを誓ひぬ。家に歸りしは夜半なりき。直ちに眠に就くべき心地ならねば、窓に坐して清風明月に對せり。渠水波なく、古宮空しく聳ゆる處、我が爲めには神話中の夢幻界を現じ來れり。我は兒童の如く合掌して祈禱したり。父よ、我諸惡を免せ。我に氣力を賦して善良の人たることを得しめよ、我をして些の羞慚の心なく、彼尼院中なるフラミニアを懷ふことを得しめよ。

翌朝は身極めて爽快なりき。我は舟人を喚びて市長の家に往くことを命ぜしに、舟人そのオテルロ宮(パラッツオ、ドテルロ)なるを告げたり。オテルロとは彼シエクスピイアの戲曲ヱネチアの黑人の主人公にして、市長の家は其舊館なれば、英吉利人は此地に來る毎に必ずこれを尋ぬること、マルクス寺又は武庫に殊ならずといふ。

市長の一家は歡びて我を迎へ、主人の妹なるロオザ夫人は、亡弟の記念と拿破里の繁華とを語りて、我に再遊の願の甚だ切なるを告げ、主人の姪なるマリアは我をして復たララの姿を見、フラミニアの才を見る心地せしめき。マリアとララとの相肖たるは驚くべき程なり。さるにても身に襤褸を纏ひて、髮に一束の菫花を插みし乞丐の女の、能くヱネチア第一の美人と美を媲ぶるこそ不思議なれ。是より我は頻りに此家に往來して、ロオザ夫人の爲めにダンテの神曲、アルフィエリ、ニコリイニイ(並に詩人の名)等の集を朗讀せり。ポッジョもわが紹介によりて市長の常の客となることを得たり。

即興詩人としての我名は漸くヱネチアの都に傳はり、美術會院(アカデミア、デル、アルテ)は一日我を招きて技を奏せしめき。われはダンドロのコンスタンチノポリス征服とマルクス寺の銅馬とを題として即興の詩を歌ひ、會員證を授與けられたり。(ダンドロはヱネチアの大統領なりき。千二百三年コンスタンチノポリスを征服す。即所謂第四次十字軍なり。)されどその頃我は別に一物の此會員證より貴きものを得つ。そは極めて細かなる貝を絹紐もて貫きたる瓔珞なり。岸區の漁者の遺族は我がために作りてポッジョに託し、ポッジョはマリアにあづけ置きぬ。ある日マリアは我が往きて訪ふを待ちて、美しく愛らしきものならずやと云ひつゝ我手にわたし、ロオザ夫人は傍より、

他日おん身の許嫁の妻に掛けさせ給ふべき品なり、作りし人もその心ありしなるべしと詞を添へつ。われは料らずも眉を蹙めて、我に許嫁の妻なし、未來にも亦さる人なからむと叫びぬ。そはこの贈を取次ぎて我を悅ばしめむことを期せしマリアの面には失望の色をあらはせり。われは手に瓔珞を捧げて、心にこれをマリアに與へむことを願ひぬ。マリアの顏の紅を潮せしは、我心を忖り得たるにやあらむ、覺束なし。

末路

とある夕わが爲換金を取扱ふ商家を尋ねしに、主人の妻のいふやう。近頃はおん身の來給ふこと稀になりぬ。そは市長の許に往き給ふことの頻なるが爲めなるべし。我家にはマリアの如き美しき人あるにあらねば、誰かおん身の足の彼方にのみ向くを理ならずとせむ。マリアは今エネチア第一の美人にして、御身はエネチア第一の才子におはすれば、彼此似つかはしきなるに、マリアが所有なりといふカラブリアの地面はいと廣しといへば、おん二人の生計さへ豐かなることを得べきならむ。御身若し早く心を決めて誓約をだになし給はゞ、エネチア全市の男子一人としておん身を羨まざるものなからむといふ。われ。いかなれば我をさまで利己心多きものとはし給ふぞ。わがマリアを尊むは、あらゆる美しきものを尊む情に外ならず。これをしも愛と謂はゞ、何人かマリアを愛せざらむ。縱ひわれマリアを愛せむも我心は又決してその財產に左右せらるゝことなかるべし。主人の妻。否、さてはおん身はつまさだめするものゝ先づ心得べき事あるを知り給はぬなるべし。粮廚に滿ち酒窖に滿ちて、始て夫婦の間の幸福は全きものぞ。古き諺にも、生活を先にし戀愛を後にすといへるにあらずやと云ひぬ。

人の我上をかくおもへる、既に我が忍ぶべきところならず。況や面りこれを語るをや。我は喜んで市長一家の人々と交れども、此の如き嫌疑を受くることを甘んじて、猶その家に出入すべくもあらず。今宵も市長の家を訪ふべかりし我は、步を轉じてエネチアの狹き巷をさまよひめぐりぬ。相向へる二列の家は、簷と簷と殆ど相觸れむとし、市店の燈を張ること多きが爲めに、火光は到らぬ隈もなく、士女の往來織るが如くなり。溝水を望めば、燈影長く垂れて、橋を負へる石弓の下に、「ゴンドラ」の舟の舳よりも疾く駛るを見る。忽ち歌聲の耳に入るあり。諦聽すれば、是れ戀愛と接吻との曲なり。迷路の最も邃き處に一軒の稍ゝ大なる家ありて、火の光よそよりも明かに、人多く入りゆくさまなり。こはエネチアの數多き小芝居の一にして、座の名をば聖ルカスと云へりとぞ。大抵樂劇の一組ありて、日ごとに二曲を興行すること、拿破里の「フェニチェ」座に同じ。初の一曲は午後四時に始まり六時頃には早く終り、次なる曲は夕の八時より始まる。素より精しき技藝、高き趣味をこゝに求むべきにはあらねど、些の音樂に耳を悅ばしめむとする下層の市民の願をばこれによりて遂げしむることを得べく、又旅人などの逍遙の爲めに來り觀るも少からざるべし。觀棚の料は甚だ廉く晝夜とも空席を留めぬを例とす。

招牌を仰げば、「ドンナ、カリテア、レジナ、ヂ、スパニア」「西班牙女王カリテア夫人」と大書し、作譜者の名をばメルカダンテと註せり。われ心の中におもふやう。かゝる時にこそ、我脈絡にカムパニアの野なる山羊の乳汁循らずして、溫き血環れるを人に示すべきなれ、我が世馴れたることのベルナルドオにもフェデリゴにも劣らぬを示すべきなれ。兎も角も一たび此場內

に入りて、美しき女優の面を見ばや。若し興なくば、曲の終るを待たで出でむも妨あらじとおもひぬ。入場券を買ふに、小き汚れたる牌を與へつ。我觀棚は極めて舞臺に近き處なりき。

此劇場には高下二列の觀棚あり。平間をばいと低く設けたり。されど舞臺の小なること、給仕盆の如しとも謂ふべし。あはれ、此舞臺にいくばくの人か登り得べきとおもふに、例の小芝居の習とて、中むかしの武弁の上をしくめる大樂劇の、行列の幕あり戰鬪の幕あるものをさへ興行するなるべし。觀棚は内壁の布張汚れ裂けて、天井は鬱悒きまで低し。少焉ありて、上衣を脱ぎ襯衣の袖を攘げたる男現れて、舞臺の前なる燭を點しつ。客は皆無遠慮に聲高く語りあへり。又少時ありて、樂人出でゝ奏樂席に就きぬ。これを視るに、只是れ四奏の一組なりき。彼と云ひ此と云ひ、今宵の受用の覺束なかるべき前兆ならぬものなければ、われは猶せめて第一折を觀むとおもひて、獨り觀棚に坐し居たり。

場内の女客に美しきはあらずやと左を顧み右を盼しかど、遂にさる者を認め得ざりき。忽ち隣席に就く人あり。こは嘗て某の筵にて相見しことある少年紳士なりき。紳士は笑みつゝ我手を握りて云ふやう。こゝにて君に逢はむとは思ひ掛けざりき。君はその邊の消息を知り給ふか知らねど、かゝる處にては、折々面白き女客と肩を竝ぶることあり。かくて薄暗き燈火は、これと親む媒となるものなりと云ひぬ。紳士の詞は未だ畢らぬに、傍より叱々と警むる聲す。そは開場の曲の始まれるが爲めなりき。

音樂は心細きまで微弱なりき。幕は開きたり。只ゝ見る、男子三人女子二人より成れる一群の唱和するを。その骨相を看れば、座主は俄に賊敵の間より登庸し來りて、これに武士の服を衣せしにはあらずやと疑はれぬ。隣席の紳士は我を顧みて、餘りに力を落し給ふな、單吟には稍ゝ觀る可きものなきにあらず、此組にも好き道化役あり、大劇場に出だしても恥かしからぬ男なりなど云ふ。この時今宵の曲の女王は、侍姫に扮せる二女優と共に場に上りぬ。紳士眉を顰めて、さては女王は渠なりしか、全曲は最早一錢の價だにあらざるべし、あはれジャンネッテならましかばとつぶやきぬ。

女王は身の丈甚だ高からず、面の輪廓鋭くして、黑き目は稍ゝ陷りたり。衣裳つきはいと惡し。無遠慮に評せば、擬人せる貧窶の妃嬪の裝束したるとやいふべき。さるを怪むべきは此女優の擧止のさま都雅にして、いたく他の二人と異なる事なり。われは心の中に、若し少き美しき娘に此行儀あらば奈何ならむとおもひぬ。既にして女王は進みて舞臺の緣に點し連ねたる燈火の處に到りぬ。此時我心は我目を疑ひ、我胸は劇しき動悸を感じたり。われは暫くの間、傍なる紳士に其名を問ふことを敢てせざりき。われ。此女優の名をば何とかいふ。紳士。アヌンチヤタといへり。歌ふことを善くせぬに、その顏ばせさへこれが償をなすに足らねば、顧みる人なきもことわりなり。此詞は句々腐蝕する藥の如く我心上に印せり。われは瞠目枯坐して心を喪ふものゝ如くなりき。

女王は歌ひはじめき。否、こはアヌンチヤタが聲ならず。微かにして恃なく、濁りて響かず。紳士。この喉には些の修行の痕あるに似たれど、氣の毒なるは聲に力なきことなり。われ。(騷ぐ胸を押し鎭めて。)さきには羅馬、拿破里に譽を馳せたる西班牙生れの少女ありしが、この女優は偶ゝ其名を同じうして、色も聲もこれに似ること能はざりしよ。紳士。否、この女優こそはその名譽あるアヌンチヤタがなれの果なれ。盛名一時に騷ぎしは七八年前のことなるべ

し。當時は年もまだ若くて、聲はマリブランの如くなりきとぞ。されど今はしも薄落ちたり。こはかゝる伎もて名を馳せし人の常なり。暫くは日の天に中するが如き位にありて、世の人の讃歎の聲に心惑ひ、おのが伎の時々刻々降りゆくを曉らず、若し此時に當り早く謀をなさゞるときは、公衆先づ其演奏の前に殊なるところあるを覺ゆべし、かゝるなりはひする女子の習として、財を殘すこと多しといへども、隨ひて得れば隨ひて散じ、暮年の計をおもはねば、その落魄もいと速なり。君のこの女優を見給ひぬといふは、羅馬にての事にやありけむ。われ。然り。其頭面を見ること二三度なりき。紳士。さらば變化の甚しきを覺え給ふならむ。人の噂には、四五年前に重き病に罹りてより、聲はたとつぶれぬといふ。その人の爲めにはいと笑止なる事ながら、聽衆の過去の美音を喝采せざるをば、奈何ともすべからず。いざ、昔のよしみに拍手し給へ。われも應援すべしとて、先づ激しく掌を打ち鳴しつ。平土間なる客二三人、何とかおもひけむ、これに和したるに、叱々と呼びて、この過當の褒美にあらがふもの少からず。女王はこの毀譽を心に介せざる如く、首を昂げて場を下りしに、紳士見送りて、我等はトロヤ人なりきとつぶやきぬ。（原語、フィムス、トロエス）は猶已矣と云はむが如し。）

代りて場に上りしは、此曲の女主人公にして、これに扮せるは二八ばかりの女子なりき。色好む男の一瞥して心を動すべき肉おき豐かに、目なざし燃ゆる如くなれば、喝采の聲は屋を撼せり。羅馬の市民のアヌンチヤタの爲めに狂せし状はいかなりしぞ。いにしへの帝王の凱旋の儀をまねびつる、アヌンチヤタが車のよそほひはいかなりしぞ。わが崇拜の念はいかなりしぞ。さるを今はこの尋常なる容色にすらけおされ果んぬ。あはれ、薄倖なるベルナルドオは身病み色衰ふるに及びて君を棄てしか。さらずば、君は始より眞成にベルナルドオを愛せざりしか。君が辱のベルナルドオの額に觸れしをば、われ猶記す。君爭でかベルナルドオを愛せざらむ。思ふにかの無情男子は君が色を愛して、君が心を愛せざりしなり。

アヌンチヤタは再び場に上りぬ。老いたるかな、衰へたるかな、只ゞ是れ屍の脂粉を傳けて行くものゝみ。われは覺えず膚に粟生ぜり。われもアヌンチヤタが色に迷ひし一人なれども、その才の高く情の優しかりしをば、わが戀愛に蔽はれたりし心すら、猶能く認め得たりき。縱令色は衰ふとも、才情はむかしのまゝなるべし。かへす〲も惡むべきはベルナルドオが忍びて彼才彼情を棄てつるなる哉。我心緒は此不幸なる女子を憐み、彼無情なる友を憎むが爲めに、亂るゝこと麻の如くなりき。傍なる紳士は、我面色の土の如くなるを見て、いかにし給ひしぞ、不快なるにはあらずやと問ひぬ。此棧敷の餘りに暑き故なるべしと答へつゝ、我は起ちて劇場の外に走り出でぬ。

胸中の苦悶は我を驅りて、狹きヱネチアの巷を、縱横に走り過ぎしめしに、ふと立ち留りて頭を擡ぐれば、われは又前の劇場の前に在り。時に一人の老僕ありて、入口に貼りたるけふの名題を剝ぎ取り、代ふるにあすのをもてせむとす。われは進みて此僕の耳に附き、アヌンチヤタの宿はいづくぞと問ひしに、僕は首を廻して我顏を打目もり、アヌンチヤタと宣給ふか、そはアウレリアの誤なるべし、けふもアウレリアが部屋をばおとづれ給ひし人達いと多かりき。宿に案内しまゐらするは易けれど、歸るにはまだ些の暇あるべしと答ふ。われ。否、アヌンチヤタなり。けふ女王の役を勤めし人な

りといふに、僕は暫し目を睜りて、訝しげに我を見居たるが、さてはあの痩骨を尋ね給ふか、檀那は別に御用ありての事なるべければ、案内しまゐらせむ、されどこれも歸らむは一時間の後なるべし、そが上に人に問はるゝことなき女なれば、出でゝ御目に掛かるべきか、覺束なしとつぶやきぬ。好し、さらば一時間の後の事にすべければ、こゝにて我が來むを待てと契り置きて我は岸邊に往き、舟を雇ひて、何處をあてともなく漕ぎ行かせつ。

我心緒はいよゝ亂れに亂れぬ。只ゞ心中に往來する切なる願は、今一たびアヌンチヤタと相見て、今一たびこれに詞をかはさむといふことのみ。嗚呼、アヌンチヤタはまことに不幸なりき。されど我はその不幸を救ひ得べき地位にあらざりしを奈何せむ。指す方もなき水上の逍遙ながら、痛苦に逐はるゝ我心は、猶船脚の太だ遲きを覺えぬ。

一時間の後、舟を初の岸に繋げば、老僕は早く劇場の前に立ちて待てり。引かるゝまゝに、いぶせき巷を縫ひ行きて、遂にとある敗屋の前に出でしとき、僕は屋根裏の小き窓に燈の影の微かなるを指ざしたり。僕は先に立ちて暗き梯を登りゆくに、我は詞もあらでその後に隨ひぬ。僕は戸外の鈴索を牽いたり。内より誰ぞやといふは女の聲なり。マルコオ、ルガノと名乘ると共に、戸はあきて、我等は暗黑なる一室の中に立てり。聖母を畫けりと覺しき小幅の前に捧げし燈明は既に滅えて、燈心の猶燻るさま、一點の血痕の如し。忽ち頭の上に戸の軋る音して、覺束なき火の光洩れ來しとき、我は側に小き梯あるを認めつ。御尋の女はあれにといふ老僕の手に、些の銀貨を握らすれば、あまたゝびぬかづき謝して、直ちに戸外に出で去りぬ。わが最後の梯を登りゆくとき、一人の女の小き絹の片にて髮を裹み、潤き暗色の上衣を着たるが入口に現れて、あすの名題や變りし、躓き給ふな、マルコオと云ひつゝ迎へぬ。我はつと室内に進みぬ。

我はアヌンチヤタと相對して立てり。あな、おん身は何人ぞ。何の爲に此には來ましゝと、驚きたる女主人は問ひぬ。我は一聲アヌンチヤタと叫べり。暫し我面を打まもりし主人は、再びあなやといひもあへず、もろ手もて顏を掩ひつ。何人にもあらず、昔の友の一人なり、むかしおん身の惠にて、あまたの樂しき時を過し、あまたの幸福ある日を送りしものなり、何の爲めにか來べき、唯だ今一たびの相見むの願ありて來つるのみといふ我聲は恥かしき迄震ひぬ。アヌンチヤタは靜に手を垂れて頭を擧げたり。肉落ちて血色なく、死人の如き面なれど、これのみは年も病もえ奪はざりけむ、暗黑にして、渡津海のそこひなきにも譬へつべき瞳は、磁石の鐵を吸ふ如く、我面に注がれたり。アントニオかくて御身と相見むとは、つゆ〳〵思ひ掛けざりき。同じ憂き世の山路なれど、おん身はそを登る人、われはそを降る身なれば、相見て又何をかいふべき。疾く行き給へと口には言へど、つれなき涙は瞼に餘りて、頰の上に墮ち來りぬ。われ。そは餘りに情なし。われはおん身の今不幸なるを知りぬ。むかし一言の内、一目の介もて、萬人に幸福を與へしおん身なるを。アヌンチヤタ。幸福は妙齡と美貌とに伴ふ者にて、才と情との如きは、その顧みるところにあらざるを奈何せむ。われ。おん身は病に臥し給ひきとは實か。アヌンチヤタ。病はいと重く、一とせの久しきにわたりしかど、死せしは我容色と我音聲とのみなりき。公衆は此二つの屍を併せ藏せる我身を棄てたり。醫師はこの死を假死なりとなし、我身は果敢なくもこれを信じたりき。我身は舊に依りて衣食を要するに、平生の蓄をば病の爲めに用ゐ盡しぬれば、彼死を祕

して、詐りて猶ほ生きたるものゝ如くし、又脂粉を塗りて場に上ることゝなりぬ。されど流石に人を驚さむことの心苦しくて、わざと燈燭の數少き、薄暗き小劇場に出づるにこそ。おん身の記憶に存じたるアヌンチヤタは早や死して、その遺像は只だかしこの壁にありといひぬ。われは此詞を聞きて、向ひの壁を仰ぎ看しに、一面の大畫幅あり。枠を飾れる黃金の光の、燦然として四邊を射るさま、室內貧窶の模樣と、全く相反せり。圖するところはヂドに扮したるアヌンチヤタが胸像なりき。氣高く麗しきその面輪、威ありて險しからざる其額際、皆我が平生の夢想するところに異ならず。我視線は覺えずすべりて、壁間の畫より座上の主人に移りぬ。アヌンチヤタは面を掩ひて、世の人の我を忘れし如く、おん身も今は我を忘れて、疾く往き給へといふ。われ。否、われ爭でか往くことを得む、爭でか此儘に往くことを得む。おん身は聖母の惠を忘れ給ふか。聖母はおん身を救ひ給はむ。我等を救ひ給はむ。アヌンチヤタ。おん身は衰運に乘じて人を辱めむとはし給はざるべし。むかし交らひ侍りし時より、おん身の心のさる殘忍なる心ならざるを知る。さらばおん身は何故に、世擧りて我を譽め我に諛ふ時我を棄てゝ去り、今ことさらに我が世に棄てられたる殘軀の色も香もなきを訪ひ給ふぞ。われ。情なき事をな宣給ひそ。我爭でかおん身を棄つべき。我を棄て給ひしは、我を逐ひて風塵の巷に奔らしめ給ひしは、おん身にこそあれ。かく言はゞ、おん身は我を自ら揣らざるものとやし給はむ、さらば只ゞ我を驅逐せしものは我運命なり、我因果なりとやいはむ。此詞纔に出でて、アヌンチヤタはその猶美しき目を睜り、ことばはなくて我面を凝視し、その色を失へる脣はものいはむと欲する如くに動きて又止み、深き息徐ろに洩れて、目は地上に注がるゝことしばらくなりき。アヌンチヤタは忽ち右手を擧げて、緩にその額を撫でたり。一の祕密の神とおのれとのみ知れるありて、此時心頭に浮び來りしにやあらむ。アヌンチヤタは再び口を開きぬ。我は君と再會せり。此世にて再會せり。再會していよ／＼君が情ある人なることを知る。されど薔薇は旣に凋れ、白鵠は復た歌はずなりぬ。おもふに君は聖母の恩澤に浴して、我に殊なる好き運命に逢ひ給ふなるべし。今はわれに唯ゞ一つの願あり。アントニオよ、能くそを愜へ給はむかといふ。われ手に接吻して、いかなるおん望にもあれ、身にかなふ事ならばといふに、アヌンチヤタ、さらばこよひの事を夢とおぼし棄て給ひて、いまより後いついづくにて相見むとも、おん身と我とは識らぬ人となりなむこと、是れわが唯ゞ一つの願ぞ、さらば、アントニオ、これより善き世界に生れ出でなば、また相見ることもあらむとて、我手を握りぬ。苦痛の重荷に押し据ゑられたる我は、アヌンチヤタが足の下に伏しまろびしに、アヌンチヤタ徐かに扶け起し、すかして戶外に伴ひ出でぬ。我は小兒の如くすかされて、小兒の如く泣きつゝ、又來むを許し給へ、許し給へと繰返しつ。戶は、さらばといふ最後の一こゑに鎖されて、われは空しく暗黑なる廊の中に立てり。街に出づれば、その暗黑は屋內に殊ならざりき。神よ。おん身の造り給ふところのものゝ中に、かゝる不幸もありけるよと、獨り泣きつゝ我は叫びぬ。此夜は家に返りて些の眠をだに得ずして止みぬ。

翌日はわれアヌンチヤタが爲めに百千の計畫を成就し、百千の計畫を破壞して、終には身の甲斐なさを歎くのみなりき。嗚呼、われは素とカムパニアの野の棄兒なり。羅馬の貴人は我を霑す雨露に似て、實は我を縛する繩索なりき。恃むところは單ゞ一の技藝にして、若し意を決

して、これによりて身を立てむとせば、成就の望なきにしもあらず。されども技藝の聲價、技藝の光榮は、縱令其極處に詣らむも、昔のアヌンチヤタが境遇の上に出づべくもあらず。而るにそのアヌンチヤタの末路は奈何なりしぞ。假に彩虹の色をやどしゝ飛泉の水の、末はポンチニの沼澤に沈み去るにも似たらずや。

思慮はたゞ一つところを馳せ廻るに似て、一日一夜は過ぎぬ。次の朝には、胸中僅かに今一たび相見むの願を存ずるのみなりき。われは再びさきの狹き巷に入り、晝猶暗き梯を上りぬ。鎖されたる戸をほと／＼と打叩けば、腰曲りたる老女入口に現れて、貸家見に來たまひしや、檀那がたの御用には立ち難くや候はむといふ。今まで住みし人はと問へば、きのふ立ち退き候ひぬ、何かは知らず、火急なる事ありと覺しくて、いとあわたゞしく見え候ひぬ。われ。行方をば知り給はぬか。老女。旅にとは申しゝが、いづくにかあらむ。パヅア、トリエステ、フエルララなどにや候はむと、答へもあへず戸を鎖したり。直ちに劇場に往きて見れば、これも鎖されたり。近隣の人に聞けば、きのふ打留なりきといふ。

アヌンチヤタはいづくにか之きし。ベルナルドオなかりせば、彼人は不幸に陷らで止みしならむ。否、彼人のみかは、我も或は生涯の願を遂げ、卽興詩人の名を成して、偕老の契を全うせしならむか。嗚呼、絕ゆる期なき恨なるかな。

友なるポツジヨおとづれ來ていふやう。何といふ顏色ぞ。恐しき巽風もぞ吹く。若しその熱き風胸より吹かば、中なる鳥の埃及人の火紅鳥ならぬが、焦がれ死するなるべし。野にゆきては茨のうちなる赤き實を啄み、窓に上りては盆栽の薔薇花に止まりてこそ、鳥は健かにてあるものなれ。わが胸の鳥の樂を血の中に歌ひ籠めて、我におもしろく世を渡らするを見ずや。殊に詩人たらむものは、庭の花をも茨の實をも知り、天上の灝氣にも下界の毒霧にも搏つ鳥を畜へでは協はずといふ。我。是の如く詩人を觀むは、卑きに過ぐるには非ずや。友。基督は地獄に下りて極惡の幽鬼をさへ見きと聞く。天の澄めると地の濁れると相觸れてこそ、大事業大制作は成就すべけれ。否、かくてはわれ汝が爲めに說法するにや似たらむ。われはさる說法のためにこゝに來しにはあらず。われは市長一家の使節なり。おん身の伺候を懈ること三日なりしは、ロオザに聞きつ。何といふ亡狀ぞや。疾く往きて荊を負ひて罪を謝せよ。但し懈怠の申譯もあらば聽くべし。われ。此二日三日は不快の爲めに門を出ざりき。友。そは拙き申譯なり。他人は知らず、我はそを諾はざるべし。さきの夜樂劇に往きしは何人なりけむ。しかも劇場は、かの頻りに一種の主人公たりしアウレリアが出づる劇場なりしならずや。されどおん身もかゝる路傍の花の爲めに頭を痛めしにはあらじ。兎まれ角まれ、けふの午餉にはおん身を市長の家に伴ひ行かでは、我責務の果し難きを奈何せむ。われ。今は包み隱さで告ぐべし。わが暫く市長を訪はざりしは、世のさかしらの厭はしければなり。市長の娘の美くて、カラブリアに廣き地所を持てるを、わが彼家に出入する目的物なるやうに言ひ做すものあればなり。友。其噂は珍らしからず。マリアが美しきは人も我も認むるところにて、おん身がその崇拜者の一人なるをば、われとても疑はざるものを。われ。崇拜とは過ぎたり。むかし我が愛せし盲の子に姿貌の似たればこそ、われはマリアに心を牽かれしなれ。友。マリアが目も拿破里なるをぢの治療にて、始て開きしものと聞けば、盲ひたる子に似たりといはむも、その由なきにあらねど、我には別に

に解釋あり。戀は固より盲なるものなり。その戀の神なるアモオルをこそ、むかしおん身は見つるならめ。今おん身の心のマリアに惹かるるは、戀の神の所爲なれば、人の疑は遁からず事實となりて現るゝならむ。われ。否、マリアはさて置き、何人をも我は終身娶らざるべし。友。そは又輙くは信じ難き豫言なり、おん身にふさはしからで我にふさはしかるべき豫言なり。好し、さらばわれ君と誓はむ。おん身若し我に先ちて妻を持たば、婚禮の日に三鞭酒二瓶を飲ませ給へ。われ。尤も好し。その酒をば君こそ我に飲ましめ給はめ。

友は我を拉いて市長の許に至りぬ。市長とロオザとは戲言まじりに我無精を譴め、おとなしきマリアは局外に立ちて主客の爭をまもり居たり。ロオザが杯を擧けて、我健康を祝せむとする時、友は急に遮りて、否々、凡そ婦人たるものは、決してアントニオが健康を祝すべからず、そは此男終身娶らずと誓ひぬればなりといふ。市長。そは「アバテ」の天才より產まれし思想中の最も惡しきものなり。されどそを吹聽せむも氣の毒なり。友。吾意見は御主人とは異なり。かゝる惡しき思想をば梟木に懸けて、その胸裏に根を張らざるに乘じて、枯らし盡さざるべからずといひぬ。佳殽美酒は我前に陳ぜられて、我をしてアヌンチヤタの或は饑渴に苦むべきを想はしめぬ、辭して出づるとき、ロオザは我に日ごとにおとづれて、シルキオ、ペリコの集を朗讀すべきことを契らしめき。

わが日ごとに市長の家に往くこと、はや一月となりぬ。此間我は絕てアヌンチヤタが消息を聞くこと能はざりき。ある夕例の如く市長がりおとづれしにマリアは思ふところありげにて、頰には深き憂の痕を印したり。朗讀畢りて、ロオザ席を起ちて去りぬ。我とマリアとの間席者なくて對坐するはこれを始とす。我は寞々の裡に、一の凶音の來り迫るを覺えながら、强ひて口を開きて、ペリコの政客たる生活の其詩に及ぼしゝ影響を說き出しつ。マリアは忽ち容を改めて、「アバテ」の君と呼び掛けたり。その聲調は、始て我をしてさきよりの月旦評の毫もマリアが耳に入らざりしを悟らしめき。「アバテ」の君、我はおん身に語るべきことあり、此會談は我が瀕死の人と結びし約束の履行なり、日ごろ繁からぬおん身に聞かせまつることながら、これを語る苦しさをば察し給へといふ。その面は色を失ひて、脣は打顫へり。我が、あな、何事のおはせしぞと驚き問ふ時、マリアは兜兒の中より、一封の書を取出て、さて語を續ぎていふやう。不可思議なる神の御手は、我を延きておん身の生涯の祕密の裡に立ち入らしめ給ひぬ。されど心安くおもひ給へ。われは沈默を死者に誓ひしが故に、ロオザにだに何事をも語らざりき。祕密の何物なるかは、此封を開かば明ならむ。これを我手に受けてより、はや二日を過ぎぬ。今おん身にわたしまゐらせて、我は約を果し侍りぬといふ。われ、その死者とは何人ぞ。此書は何人の手より出でしぞと問ふに、マリア、そは御身の祕密なるものをとて、起ちて一間を出でぬ。

家に歸りて封を啓けば、內より先づ二三枚の紙出たり。先づ取上げたる一枚は我手して鉛筆もてしるせる詩句なりき。紙の下端には墨汁もて十字三つを畫したるさま、何とやらん碑銘にまぎらはしくおぼゆ。此詩句は、わが初めてアヌンチヤタを見つるとき、舞臺より舞姬に投げしものなり。さては此一封をマリアに託しきといふはアヌンチヤタなりしか。死せしはアヌンチヤタなりしか。

紙の間には別に重封の書ありて、アントニオ樣へとは書せり。遽しく裂きて中なる書をとりいだすに、いと長き消息の、前半は墨濃く、筆

のはこびも慥なれど、後半は震ふ筆もて微かに覺束なくしるされたるを見る。其文に曰く。

文して戀しく懷かしきアントニオの君に申上まゐらせ候。今宵はゆくりなくも、おん目に掛り候ひぬ、再びおん目にかゝり候ひぬ。こは久しき程の願にて、又此願のかなはむ折をいと恐ろしくおもひしも、久しき程の事にて候。譬へば死をば幸を齎すものぞと知りつゝも、死の到來すべき瞬間をば、限なく恐ろしくおもふが如くなるべく候。この文認め候は、君に見えてより數時間の後に候へども、君のこれを讀ませ給はむは、數月の後なるべきか、或は又月を踰えざるべきかとも存ぜられ候。世の人の言に、われとわが姿に出で逢ひしものは、遠からずして死すと申候へば、わが常の心の願にて、我心と同じものになり居たる君に逢ひまゐらせたるは、我死期の近づきたるしるしなるべくやなど思ひつゞけまゐらせ候。いかなれば我心は君をえ忘れず、いかなれば君は我心と化し給ひて、幸ある時も、禍に逢へる時も、君は我心を離れ給はざりけむ。今より思ひ廻らし候へば、そは君が世に棄てられたるアヌンチヤタを棄て給はぬ唯一の恩人にましませばならむと存まゐらせ候。されど君の今に至りて猶我身を棄て給はざる御恩は、決して故なき人の上に施し給ひしには候はずと存まゐらせ候。私は世に亡き人なるべければ、今は憚ることなく申上候はむ。君は我戀人にておはしまし候ひぬ。我戀人は、昔世の人にもてはやされし日より、今またく世の人に棄て果てられたる日まで、君より外には絶て無かりしを、聖母は、現世にて君と我との一つにならむを許し給はで、二人を遠ざけ給ひしにて候。君の我身を愛し給ふをば、彼の不幸なる日の夕に、彈丸のベルナルドオを傷けし時、君が打明け給ひしに先だちて、私は疾く曉り居り候ひぬ。さるを君と我とを遠ざくべき大いなる不幸の、忽ち目前に現れたるを見て、我胸は塞がり我舌は結ぼれ、私は面を手負の衣に隱しゝ隙に、君は見えずなり給ひぬ。ベルナルドオの瘢は命を隕すに及ばざりしかば、私は其治不治生不生の君が身の上なるべきをおもひて、須臾もベルナルドオの側を離れ候はざりき。憶ふに、此時のわが振舞は君に疑はれまゐらせしことのもとにや候ふべき。私は久しく君の行方を知らず、人に問へども能く答ふるもの候はざりき。數月の後、怪しきおうな尋ね來て、一ひらの紙を我手にわたすを見れば、まがふ方なき君の手跡にて、拿破里に往くと認めあり、おうなの云ふに任せて、旅行券と路用の金とをわたし候ひぬ。旅行券はベルナルドオに仔細を語りて、をぢなる議官に求めさせしものに候。ベルナルドオは事のむつかしきを知りながら、我言を納れて、強ひてをぢに說き動しゝ趣に候。幾もあらぬに、ベルナルドオが瘢は名殘なく癒え候ひぬ。彼人も君の御上をば、いたく氣遣ひ居たれば必ず惡しき人と御思ひ做しなさるまじく候。ベルナルドオは瘢の痊えし後、我身を愛する由聞え候ひしかど、私はその僞ならぬを曉りながら、君をおもふ心よりうべなひ候はざりき。ベルナルドオは羅馬を去り候ひぬ。私は直ちに拿破里をさして旅立候ひしに、

君も知らせ給ひし友なるおうなの傍に病み臥しゝ爲め、モラ、チ、ガエタに留まること一月ばかりに候ひき。かくて拿破里に着きて聞けば、私の着せし前日の夜、チェンチイといふ少年の卽興詩人ありて、舞臺に出でたりと申す事に候。こは必ず君なるべしとおもひて、人に問ひ糺し候へば、果してまがふかたなき戀人にておはしましき。友なるおうなは消息して君を招き候ひぬ。こなたの名をばわざとしるさで、旅店の名のみしるしゝは、情ある君の何人の文なるをば推し給ふべしと信じ居たるが故に候ひき。おうなは再び文をおくり候ひぬ。されど君は來給はざりき、使の人の文をば讀み給ひぬといふに、君は來給はざりき。剩へ君は遽に物におそるゝ如きさまして、羅馬に還り給ひぬと聞き候ひぬ。當時君が振舞をば、何とか判じ候ふべき。私は君の誠ありげなる戀のいち早くさめ果てしに驚き候ひしのみ。私とても、世の人のめでくつがへるが儘に、多少驕慢の心をも生じ居たる事とて、思ひ切られぬ君を思ひ切りて、獨り胸をのみ傷め候ひぬ。

さる程に友なるおうなみまかり、その同胞も續きてあらずなり、私は形影相弔すとも申すべき身となり候ひぬ。されど年猶少く色未だ衰へずして、身には習ひおぼへし技藝あれば、舞臺に上るごとに、萬人の視線一身に萃まり、喝采の聲我心を醉はしめて、しばし心の憂さを忘れ候ひぬ。是れまことのアヌンチヤタが最終の一年に候ひき。私はボロニアに赴く旅路にて、ふと病に染まり候ひぬ。初こそは唯ゝかりそめの事とおもひ候ひつれ。君に棄てられまつりてよりの、人知れぬ苦痛は、我が病に抗すべき力を奪ひて、一とせが程は頭をだにえ擡げず候ひき。こゝに君に棄てられぬと書きしをば、許させ給へ。私はその頃、君の猶我身を忘れ給はで、世の人の皆我身を顧みざるに至りて、今一たび我手に接吻し給ふべきをば、夢にだに思得候はざりしなり。二とせの間、劇場にて貯へし金をば、藥餌の料に費し盡し候ひぬ。病は痊えぬれども、聲潰れたれば、身を助くべき藝もあらず、貧しきが上に貧しき境界に陷いり、空しく七年の月日を過して、料らずも君にめぐりあひ候ひぬ。君はこよひの舞臺にて、むかし羅馬の通衢を驅るに凱旋の車をもてせしアヌンチヤタがいかに賤客に嘲られ、口笛吹きて叱責せられたるかを見そなはし給ひしなるべし。私は運命の窮まりしと共に、胸狹くなりしを自ら覺え居候。扨見苦しき假住ひに御尋下され候時、我目を疑ひし面紗の忽ち落つるが如く、君の初より眞心もて我を愛し給ひしことを悟り候ひぬ。汝こそは我を風塵中に逐ひ出しつれとは、君の御詞なりしかど、私のいかに君を戀ひまゐらせ、いかに君の方へ手をさし伸べ居たりしをば、君のしろしめさゞりしを奈何せむ。私は再び君に見ゆることを得て、君の溫なる唇を我手背に受け候ひぬ。今や戶外に送りいだしまゐらせて、私は再び屋根裏の一室に獨坐し居り候。この室をば直ちに立退き申すべく、此ヱネチアをも直ちに立去り申すべく候。アントニオの君よ。願はくは我が爲めに徒に歎き悲み給ふな。私は世には棄てられ候へども、聖母は私を護り給ふこと、君を護り給ふに同

じかるべく候。アントニオの君よ、さきには我を思ひ棄て給へと申候へども、未錬ともおぼさばおぼせ　猶親しかりし人のみまかりしを思ひ給ふが如く、我を思ひ給はむことのみは望ましく存まゐらせ候。涙は讀むに隨ひて流れ、わが心の限の涙と化して融け去るを覺えたり。此より下は、かすかなる薄墨の痕新にして、數日前に寫されしものと知らる。

苦を受くる月日も最早些子を餘し候のみと存まゐらせ候。今まで受けつるあらゆる快樂の聖母の御惠なると等しく、今まで受けつるあらゆる苦痛も亦聖母の御惠と存まゐらせ候。死は既に我胸に迫り候。血は我胸より漲り流れ候。いま一回轉して漏刻の水は傾け盡され申すべく候。人の傳へ候ところに依れば、ヱネチア第一の美人は君がいひなづけの妻となり居候由に候。私の死に臨みての願は、御二人の永く幸福を享け給はむことのみに候。あはれ、此數行の文字を託すべき人は、その人ならで又誰か有るべき。その人の私の請を容れて、こゝに來給ふべきを、何故か知らねど、牢く信じ居まゐらせ候。生死の境に浮沈し居る此の身の、一杯の清き水を求むべき手は、その人の手ならではと存まゐらせ候。さらば〳〵、アントニオの君よ。私の此土に在りての最終の祈禱、彼土に往きての最初の祈禱は、君が御上と、私の徒らに願ひてえ果さず、その人の幸ありて成し遂げ給ふなる、君が偕老の契の上とに在るのみなることを、御承知下され度存まゐらせ候。今更繰言めき候へども、聖母の我等二人を一つにし給はざりしは、其故なからずやは。私は世人にもてはやされ讃め稱へられて、慢心を增長し居候ひぬれば、君にして當時私を娶り給ひなば、君の生涯は或は幸福を完うし給ふこと能はざりしにはあらずやと存まゐらせ候。さらば〳〵、アントニオの君よ。過ぎ去りしは苦痛、現然せるは安樂にして末期は今と存まゐらせ候。アントニオの君よ。又マリアの君よ。私の爲めに祈禱し給へかし。

アヌンチヤタ

悲歎の極には聲なく涙なし。我は茫然として涙に濡れたる遺書を瞠視すること久しかりき。暫しありて、猶封中より落ち散りたりし一ひら二ひらの紙を取り上げ見れば、一はわが拿破里に往くとしるして、フルヰアのおうなに渡しゝ筆の跡あり。又一はベルナルドオがアヌンチヤタに與へし文にして、負傷の爲めに床に臥したりし程の、懇なる看護の恩を謝し、今はよしなき望を絶ちて餘所の軍役に服せむとおもへば、最早羅馬にて相見ることはあらじと書せり。嗚呼、おもひの外の事どもなるかな。アヌンチヤタは初より我を戀ひたりしなり。我が拿破里に往くことを得しは、アヌンチヤタの惠なりしなり。拿破里の旅店より書を寄せて、相見むことを求めしはアヌンチヤタにしてサンタにはあらざりしなり。その恩情篤なきアヌンチヤタは今や亡き人となりしなり。さるにてもアヌンチヤタはマリアを病床に招き寄せて、いかなる事を物語りし。既にマリアをわがいひなづけの妻といへば、巷說は早くアヌンチヤタの病床に聞え居りて、マリアさへ其口より、さがなき人の言草を聞きつるなるべし。再びマリアの面を見むは影護き限なれども、アヌンチヤタの爲めにも我が爲めにも天使に等しきマリアに、一言の謝辭を述べずして止まむやうなし。舟を傭ひて市長の家に往きしに、ロオザとマリアとは一と間の中にありて手爲事に餘念なか

りき。我はしばし相對して物語しつれど、心に言はむと欲する事の、口に言ひ難ければ、問はるゝことあるごとに、あらぬ答をのみしたりき。ロオザは忽ち我手を把りて口を開きて云ふやう。おん身は深き憂に沈み居給ふとおぼし。われ等の君がまことの友たるを知り給はゞ、打開けて物語し給へと云ふ。われ。さなり。君は何事をも知り給ふならむ。ロオザ。否われは未だ何事をも知らず。マリアこそは聞きつることもあらめ。（マリアは鼻じろみて、その詞を遮らむとしたり。）われ。おん身二人には、われ又何事をか隱し候ふべき。初よりの事のもとすゑを打開けむも我が心やりなれば、煩はしけれど聞き給へとて、われは昔語をぞ始めける。よるべなき孤なりし生立より、羅馬にてアヌンチヤタと相識り、友なりけるベルナルドオを傷けて、拿破里に逃れ去りし慘劇まで、涙と共に語り出でしに、可憐なるマリアの掌を組合せて、我面を仰ぎ見るさま、我記憶の中に殘れるフラミニアが姿に髣髴たり。われはマリアが面前にありて、ララが事、瑯玕洞の事のみは、語ることを憚りたれば、直ちにヱネチアにての再會の段に移りて、アヌンチヤタの末路を敍し畢りぬ。ロオザ。おん身の上に、さる深き關繫あるべきをば、初め少しも知らざりき。さきの日尼寺の病室より、識らぬ女の文とゞきて、今生死の際に在るものなるが、マリアに逢ひて申し殘したき事ありといへば舟にてかしこに伴ひゆき、われは尼達の許に留まりて、マリアを病人の室に遣りぬ。マリア。かくてその人に逢ひ侍りぬ。記念の一封をばさきに渡しまゐらせつ。我。アヌンチヤタはその時何とか申し候ひし。マリア。人知れずこれをアントニオに渡し給へといひぬ。おん身の上をば、妹の兄の上を語らむやうに語りぬ。爾時アヌンチヤタが脣は血に染まり居たり。死は遽に襲ひ至りて、アヌンチヤタはわが面をまもりつゝこときれ侍りと、語りもあへず、マリアは泣き伏したり。われは詞はあらで、マリアの手を握りつ。

　われは寺院に往きてアヌンチヤタが爲めに祈禱し、又その墓に尋ね詣でつ。此地の塋域は、いと高き石垣もて水面より築き起されたるさま、いにしへのノアが舟の洪水の上に泛べる如し。草むらの中に黑き十字架あまた立てるあたりに歩み寄れば、わが尋ぬる墓こそあれ。只是一片の石に、アヌンチヤタと彫り付けたり。一基の十字架の上に、綠の色の猶鮮なる月桂の環を懸けたるは、ロオザとマリアとの手向なるべし。われは墓前に跪きて、亡人の俤をしのび、更に頭を回して情あるロオザとマリアとに謝したり。

流離

　その頃ファビアニ公子の書狀屆きしに、文中公子のわがヱネチアに留まること四月の久しきに至るを怪み、強ひてにはあらねど、我にミラノ若くはジェノワに遊ばむことを勸めたる一節あり。われつら〱念ふやう。わが猶此地に留まれるは、そも〱何の故ぞや。此地にはげに兄弟に等しきポッジョあり、姉妹に等しきロオザ、マリアあれど、是等の交は永遠なるべきものにあらず。中にも女友二人の如きは、相見るごとに我が悲哀の記憶を喚び醒すことを免れず。われは悲哀を懷いてヱネチアに來ぬ。而してヱネチアは更に我に悲哀を與へしなり。われは遽にヱネチアを去らむと欲する心を生じて、そを告けむために、市長の家をおとづれたり。

　月光始めて溝水に落つるころほひ、我は二女と市長の家の廣間なる、水に臨める出窓ある處に坐し居たり。マリアはすでに一たび燈火を呼びしかど、ロオザがこの月の明きにといふまゝ

に、主客三人は猶月光の中に相對せり。マリアはロオザに促されて、穴居洞の歌を歌ひぬ。聲と情との調和好き此一曲は、清く軟かなる少女の喉に上りて、聞くものをして積水千丈の底なる美の窟宅を想見せしむ。ロオザ。この曲には音節より外、別に一種の玲瓏たる精神ありとはおぼさずや。われ。洵に宣給ふごとし。若し精神といふもの形體を離れて現ぜば、應に此詩の如くなるべし。マリア。生れながらに目しひなる子の世界の美を想ふも亦是の如し。ロオザ。さらば目開きての後に、實世界に對せば、初の空想の非なることを知るならむ。マリア。實世界は空想の如く美ならず。されど又空想より美なるものなきにあらず。話頭は直ちにマリアが初め盲目なりし事に入りぬ。こはポッジョが早く我に語りしところなれども今はわれ二女の口より此物語を聞きつ。ロオザは兄の手術を讃め、マリアも亦その恩惠を稱へたり。マリアの云ふやう。目しひなりし時の心の取像ばかり奇しきは莫し。先づ身におぼゆるは日の暖さ、手に觸るゝは神祉の圓柱の大いなる、覇王樹の葉の濶き、耳に聞くはさまぐの人の聲音などなり。一の官能の闕くるものは、その有るところの官能もて無きところのものを補ふ。人の天青し、海青し、菫の花青しといふを聽きて、われは菫の花の香を聞き、そのめでたさを推し擴めて、天のめでたかるべきをも海のめでたかるべきをも思ひ遣りぬ。視根の光明闇きときは、意根の光明却りて明なるものにやといふ。これを聞く我は、ララが髪に插みし菫の花束と、ペスツム祠の圓柱とを憶ひ起すことを禁ずること能はざりき。話頭は轉じて自然の美に入り、ロオザは拿破里の山水の景の美はしさを説き出せり。われはこの好機會を得て、エネチアを去る意を洩しつ。そは思ひも掛けぬ事かなとロオザ訝れば、さては最早再び此地には來給ふまじきかとマリア氣遣ふさまなり。否々、ミラノまで往かば、又此地を經て羅馬に還らむとこそ思ひ候へと我は答へつれど、實はまだこゝを立ちていづ方に往かむと、おもひ定めざりしなり。

わがエネチアに別るゝ涙を見せしは、アヌンチヤタが墓とマリアが居間とのみなりき。墓に詣でゝは、石上に殘れる輪飾の一葉をみて、夾袋の中に藏めつ。われは此石の下に、唯々一團の塵を留むるのみなるを知る、アヌンチヤタが魂の聖母の御許に在りその影の我胸中に在りて、此石の下なる塵のわが執着すべき價あるものにあらざるを知る。されどわれは猶低徊して此方數尺の地を去ること能はざりき。市長の家に往きては一家の人々とポッジョとの餞宴を受けたり。市長は三鞭酒の盃を擧げて別を告げ、ポッジョはめぐる車の云々といふ旅の曲と、自由なる自然に遊ぶ云々といふ鳥の歌とを唱ひぬ。ロオザは、君若し妻を娶り給はゞ、偕に我家に來給へ、我は君が物語の中なる彼亡人を愛する如く、君の伴ひ來給はむ其人をも愛せむといひ、マリアは唯々健かに樂げにて、又我家をおとづれ給へといひぬ。

ポッジョは例の「ゴンドラ」の舟にて、フジナまで送らむとて、我と共に立出づれば、ロオザとマリアとは出窓に立ちて、紛帨を打振りぬ。別に臨みてポッジョは聲高く笑ひつゝ、許嫁の女子ならば、彼約束を忘るなといひぬ。われは、けふさる戯言いふことかはと戒めつゝも、心の中にその笑顔の涙を掩ふ假面なるをおもひて、竊に友の情誼に感じぬ。

車は情なくして走り、一帯の綠を成せるブレンタの側を過ぎ、垂楊の列と美しき別業とを見、又遠山の黛の如きを望みて、夕暮にパヅアに着きぬ。聖アントニウス寺の七穹窿は、恰も好し月光に耀けり。柱列の間には行人絡

繹として、そのさまいと樂しげなれども、われは獨り心の無聊に堪へざりき。

白晝となりてより、我無聊は愈々甚だしければ、又車を驅りてこゝを立ち、一の平原に入りぬ。綠草の鬱茂せるさまはポンチニイの大澤に讓らず。瀑布の如くなる大柳樹は古塚を掩ひ、所々に聖母の像を安じたる貴卓を見る。像の古りたるは色褪せて、これを圍める彩畫ある板壁さへ、半ば朽ちて地に委ねたれど、中には聖母兒の丹粉猶鮮かなるもなきにあらず。御者はその古きに逢ひては顧みだにせねど、その新なるを見るごとに、必ず脫帽して過ぐ。われはその何の心なるを知らずして、唯々聖母の貴きすら、色褪せては人に崇めらるゝことなきを歎じたり。ヰチエンツアを過ぎぬれど、パラヂオ(中興時代の名ある畫師)が美術も光明を我胸の闇に投ずること能はざりき。ヱロナは始て稍々我心を動したり。石級のコリゼエオに似たるありて、幸に兵燹を免れ、人をして小羅馬に入る感あらしむ。柱列の間なる廣き處は、今猶闊となり、演戲場の中央には、板を列ね幕を張りて、假に舞臺を補理ひ、旅役者の興行に供せり。夜に入りて我は試に往きて看つ。ヱロナの市人の石榻に坐せるさまは、猶古のごとくにて、演ずる所の曲をば、「ラ、ジエネレントオラ」と題せり。役者の群は、ヱネチアにて見しアヌンチヤタが組なりき。アウレリアはこよひも此樂曲の主人公に扮したり。一張の「コントルバス」に氣壓さるゝ若干の管絃なれど、聽衆は喝采の聲を惜まざりき。竟りて場を出づれば、月光遍く照して一塵動かず、古の劇場の石壁石柱は儼然として、今の破れ小屋のあなたに存じ、巨大なる黑影を地上に印せり。

我はカプレツチイ第を訪ひぬ。昔カプレツチイ、モンテキイの二豪族相爭ひて、少年少女の熱情を遮り斷ちしに、死は能くその合ふべからざるものを合せ得たり。シエクスピイアがものしつるロメオ、エンド、ジユリエツトの曲即ち是なり。此第はロメオが初てジユリエツトに來り見えて共に舞ひし所にして、今は一の旅館となりぬ。われはロメオの夜な／＼通ひけむ徑の間を蹈みて、曾て盛に音樂を奏りてヱロナの名流をつどへしことある大いなる舞臺に上りぬ。闊き窓の下鋪板に達するまでに切り開かれたる、丹青目を眩したりけむ壁畫の今猶微かに遺れるなど、昔の豪華の跡は思はるれど、壁の下には石灰の桶いくつともなく並べ据ゑられ、鋪板には芻秣、藁などちりぼひ、片隅には見苦しき馬具と農具との積み累ねられたるを見る。まことに榮枯盛衰のはかなきこと、夢まぼろしはものかは。さればこの假の世を、フラミニアの厭ひしも、アヌンチヤタの去りぬるも、なかなかに恕む方ありやといふべき。

月の末にミラノに着きぬ。新に交を求むる心なければ、人の情の紹介幾通かありしを、一としてその宛名の家にとゞくることなかりき。一夜「ラ、スカラ」座に入りて樂曲を聽きたり。帷を垂れたる六層の觀棚も、席あまりに大いにして客常に少ければ、却りて我をして一種の寂寥と沈鬱とを覺えしめき。奏する所の曲は「タッソオ」にして、主なる女優はトニチエッチイといふものなりき。一折畢るごとに、客の喝采してあまたゝび幕の外に呼び出すを、愛らしき笑がほして謝し居たり。わが厭世の眼は、この笑の底におそろしき未來の苦惱の潛めるを見て、あはれ此美人目前に死せよ、さらば世間もこれが爲めに泣くことなか／＼に少かるべく、美人も世を恨むことおのづから淺からむとおもひぬ。一「バレットオ」の舞には玉の如き嬢達打連れて踊りぬ。われはその美しさを見るにつけて、血を嘔くおもひをなしつゝ、悄然として場を出でたり。

ミラノの客舍に、[illegible]は日にけにまさり行きて、市長の家族も、親友と稱せしポッジョも我書に答ふることなかりき。われは或るときは蔭多き衢をそゞろありきし、或ときは一室に枯坐して新に戯曲の稿を起しつ。曲の主人公はレオナルドオ、ダ、キンチなりき。レオナルドオの住みしは此地なり。その不朽の名畫晩餐式はこゝに胚胎せしなり。その戀人の尼寺の垣内に隱れて、生涯相見ざりしは、わがフラミニアに於ける情と古今同揆なりとやいはまし。

われは日ごとにミラノの大寺院に往きぬ。此寺はカルララの大理石もて、人の力の削り成しゝ山ともいふべく、月あかき夜に仰ぎ見れば、皎潔雪を欺く上半の屋蓋は、高く碧空に聳えて、幾多の簷角、幾多の塔尖より石人の形の現れたるさま、この世に有るべきものともおもはれず。晝その堂内に入れば、採光の程度ほゞ羅馬の「サン、ピエトロ」寺に似て、五色の窓硝子より微かに洩るゝ日光は、一種の深祕世界を幻出し、人をして唯一の神こゝに在すかと觀ぜしむ。ミラノに來てより一月の後、我は始て此寺の屋上に登りぬ。日は石面を射て白光身を繞り、こゝの塔かしこの龕を見めぐらせば、宛然立ちて一の大遠に在るごとし。許多の聖者獻身者の像にして、下より望み見るべからざるものは、新に我目前に露呈し來れり。われは絕頂に到りぬ。ミラノ全都の人煙は螺紋の如く我脚底に畫かれたり。北には暗黑なるアルピイの山聳え、南には稍々低き藍色のアペンニノ横はりて、此間を塡むるものは、唯ゞ綠なる好原のみ。譬へばカムパニアの野を變じて一の花卉多き園囿となしたらむが如し。われは眦を決して東のかたヱネチアを望みたるに、一群の飛鳥ありて、列を成してかなたへ飛び行くさま、一片の帛の風に飜弄せらるるに似たり。われはマリアを憶ひ、ロオザを憶ひ、ポッジョを憶へり。昔幼かりし時、母とマリウチアとに伴はれて、ネミの湖に往きしかへるさ、アンジエリカが我に物語りし事こそあれ。その物語は今我空想に浮び來ぬ。オレワアノにテレザといふ少女ありき。戀人なるジュウゼッペが山を踰えて北の國に往きしより、戀慕の念止むことなく、日を經るに從ひて痩せ衰へぬ。フルキアの老媼はテレザの髮とその藏め居たりしジュウゼッペの髮とを銅銚に投じて、奇しき藥艸と共に煮ること數日なりき。ジュウゼッペは他郷に在りしが、我毛髮の彼銚中に入ると齊しく、今まで忘れ居つるテレザの慕はしくなりて、醒めては現に其聲を聞き、寢ねては夢に其姿を觀、そゞろに旅のやどりを立出でゝ、おうなが銚の下に歸りぬといふ。ヱネチアには我髮を烹る銚あるにあらねど、わがこれを憶ふ情は、恰も幻術の力の左右するところとなれるが如くなりき。われ若し山國の産ならば、此情はやがて世に謂ふ思郷病なるべし。（歐洲人は思郷病は山國の民多くこれを患ふとなせり。）されど又ヱネチアのわが故郷ならぬを奈何せむ。

われは悵然として此寺の屋上より降りぬ。客舍に歸れば、卓上に一封の書あるを見る。

こはポッジョが許より來れるなり。これを讀むに、袂を分ちてより第二の書を作る云々と書せり。さらば次の初の一書は我手に入るに及ばずして失はれしなるべし。ヱネチアには何の變りたる事もあらねど、マリアは病に臥したり、その病のさま一時は性命をさへ危くすべくおもはれぬれど、今は早や恢復に近し。猶戶外には出でずとなり。末文には、例の戯言多く物して、まだミラノの少女に擒にせられずや、三鞭酒をな忘れそなど云へり。われは讀み畢りて、ポッジョが滑稽の天性にして、世の人のそを假面と看做すことの謬れるを信ぜむとせり。さればこそ同じ無稽の巷說は、わがマリアを戀すること

ロオザを敬すると殊ならざるを見ながら、謬りて我をもてマリアに懸するものとなすなれ。

われは逍遥の爲めに市の外廓より出でゝ、拿破崙の凱旋塔の下に至りぬ。世のいはゆるセムピオオネの門(ポルタ、セムピオオネ)とは是なり。塔は猶未だ其工事を終らず、板がこひを繞らして、これに格子戸を裝ひたり。戸より入りて見れば、新に大理石もて彫り成せる大いなる馬二頭地上に据ゑられ、青艸はほしいまゝに長じて趺石を掩はむと欲す。四邊には既に刻める柱頭あり、粗ごなしゝたる石塊あり。許多の工人は織るが如くに來往せり。

時に一の旅人ありて我を距ること數歩の處に立ち、手簿を把りて導者の言を記せり。年の頃は三十ばかりなるべし。胸には拿破里の勳章二つを懸けたり。此旅人の迫持の石柱を仰ぎ見るに及びて、我はそのベルナルドオなるを識りぬ。彼方も亦直ちに我を認め得つとおぼしく、何の猶豫ふさまもなく、我側に歩み寄りて我胸を抱き、めづらしきかな、アントニオ、われ等の相別れし夕は賑やかなりき、われ等は祝砲をさへ放ちたり、されど想ふに我等の友情は舊の如くなるべしといひぬ。我は肌の粟を生ずる心地しつつ、纔に口を開きて、さてはベルナルドオなりしよ、圖らざりき、おん身と伊太利の北のはてにて相見むとはと答へつ。

我等は共に歩みて劇場の邊に往き、轉じて市の廓に入りぬ。ベルナルドオは道すがら語りていふやう。汝は此地を指してアルピイ山の麓といへり。われはまことのアルピイの巓に登りて世界の四極を見たり。曩に拿破里に在りし時、獨逸士官等の、瑞西の山水を說くを聞き、一たび往いて觀むことを願ふこと漸く切なるに、汽船もて達し易きジエノワを距ること遠くもあらぬを知れば意を決して往くことゝしつ。シヤムニイの谿をも渡りぬ。モンブランの頂にも、ユングフラウの頂にも登りぬ。現にユングフラウは、ベルラ、ラガッツァ一美少女なれど、かくまで冷かなる女子は復た有るべからず。これよりはジエノワに往きて、約束せし妻とその父母とを訪はむとす。もはや眞面目なる一家のあるじとならむも遠からぬ程なるべし。汝若し我が昔日の生涯を語らず、彼の馴るゝ小鳥の事、愛らしき歌妓の事などを祕せむと誓はゞ、われは汝を伴ひてジエノワに往くべし。いかに三日の後に我と共に發足せずやといひぬ。われ。否々、我は明日此地を立たむとす。ベルナルドオ。そは何處へ往くにか。われ。エネチアに往くなり。ベルナルドオ。汝が漫遊の日程は、よも變更を容さぬにはあらざるべし。枉げて我言に從はずや。われはベルナルドオにかく說き勸められて、反復しておのれのエネチアに往かざるべからざるを辯じ、果は自らこの漫然口を衝いて發せし語の、實にその故あるが如きを覺ゆるに至りぬ。

われは客舍に返りて、不可思議なる力に役せらるゝものゝ如く、倉皇我行李を整へ、あるじに明朝の發軔を告げたり。此夜は臥床に入れども、胸打ち騷ぎて熱を病むものゝ如く、眠をなさゞること久しかりき。翌朝ベルナルドオを訪ひて、我が爲めに善くその未來の妻に傳へむことを賴み聞え、忙はしく車を驅りてエネチアに向ひぬ、二月前に去りしエネチアに。

心疾身病

車はフジナに到りぬ。われは又此深き海、灰色の石垣、「マルクス」寺の塔を望むことを得たり。怪むべし、われは足一たびエネチアの地を踏むと齊しく、吾心の劇變せるを覺えき。今までエネチアへ、エネチアへと呼びし意欲は俄に迹を戢めて、一種の言ふべからざる羞慚の情生

じ、人の汝は何故に復た來れると問はゞ、辭の答ふべきなからむと氣遣ふやうになりぬ。

われは直ちに旅寓に入りて、衣服を改め、身の疲れたるをも顧みで、市長の家に往きぬ。歳の苦を被れる屋壁と高き窓とに近づくとき、怪しき映象は我胸に浮びぬ。そはわれ若しマリアが結婚の席に往きあはゞいかにといふことなりき。われは此念の頭を擡け來るを見て、又急にこれを抑へ、否、われは求婚の爲めに往くならねば、そも亦妨なしと云ひぬ。されど我心は遂に全く平なること能はざりき。

門を叩けば僕出で迎へて、あるじはおん身來まさば、案内することを須ゐざれと宣給ひぬといふ。そのさま吾が至るを期したるに似たり。廣間には幌を卸して、闃として物音を聞かず。われは、是れデスデモナが悲歎せし處なるべし、されどオテルロの苦痛はこれより甚しかりしならむとおもひぬ。わが此時恰も此念をなしゝも、亦頗るあやしき事なり。既にして導かれてロオザが房に入るに、こゝも幌を垂れて日光を遮りたれば、外より入るものはその暗きに驚かむとす。わがミラノにて覺えし奇しき情、我を驅りてヱネチアへ來させし奇しき情は、忽ち又起りて、その幻術に似たる力は一層の強さを加へ、我手足は震慄せり。われは手もて壁を支へて、僅に地に倒れざることを得たり。

主人は温顏もて我を迎へ、我身を回抱して、再見の喜を述べたり。われは二婦人の何處に在るを問ひぬ。彼等は親族と共にパヅアに往きたり、二三日の後ならでは歸り來ざるべしといふ。その面色その態度を察するに、何とやらん言を構へて我を欺く如くなり。されどわれは又此人の平生を顧みて、わが疑の邪推なるべきをおもへり。主人は我を留めて晩餐を供せり。卓に就きたる間、我は限なき寂寞を感じ、又主人の面の爽かならざるを覺えぬ。われはおそるおそるその不興の因由を問ひしに、主人頭を掉りて、否、益なき訴訟の事ありて、些の不安を感ずるに過ぎず、ポツジョは久しくおとづれず、おん身さへ健康すぐれ給はざる如し、兎も角も此一盃を傾け給へといひつゝ、我前なる杯に葡萄酒を注がむとせしに、忽ちその手を駐めて、おん身は心地惡しきにあらずやと叫びぬ。そは我面色の土の如く變じたればなるべし。われは室内の物の旋風の如く動搖するを覺えて、そのまゝはたと地に僵れぬ。

此より我は半醒半睡の間に在ること幾日なるを知らず。市長は時として我臥床の傍に坐して、われに心を安んじて全快を待たむことを勸め、ロオザの遠からず來りて病を瞻るべきを告げたり。或日家の内騷がしく、人の到着しつと覺しきさまなりしに、忽ちロオザは吾前に來ぬ。その面には憂の色を帶びたり。その日の暮つかた、われは家内の又さきにも增して物騷がしきを覺え、側なる奴婢に問はむとするに、一人として我に答ふるものなし。階下の室には人多くゆきゝする足音頻に、屋外の大渠には小舟の混音騷はしかりき。われは暫し目蕩みしに、ふとマリアの死せることを知り得たり。さきにはポツジョ我にマリアの病を告げて、その病は痊えぬと云へり。されど病は再發して、マリアは既に死し、家人は我に祕して、こよひそを葬るなり。われは明かにロオザの祈禱の聲を聞き、ロオザの美花もて飾れる棺は明かに心目の前にあらはれぬ。忽ち我は病の既に去りて力の既に復せるを感じ、蹶然として臥床より起ち、人の我側に在らざるに乘じて、壁に懸けたる外套を纏ひ、岸邊なる小舟を招きて、「デイ、フラアリイ」の寺に往かむことを命じつ。こは市長が累世の墓ある處にして、われは曾て一たび其窟墓を窺ひしことありき。夜は暗くして、「アヱ、マリア」の鐘と共に閉されたる門の前に

は人影早や絶えたり。われは扉をほと〳〵と敲きしに、寺僮は我が爲めに門を開きつ。そは曾てわが市長に伴はれて來ぬる時、我にチチヤノとカノワとの墓を指し敎へしことあれば、猶我面を見知り居たりしなり。寺僮は我心を計り得て、君は遺骸を見に來給ひしならむ、今は猶贄卓の前に置かれたれど、あすは龕に藏めらるべしとて、燭を點して我を導き、鑰匙取り出でゝ側たる小き戸を開きつ。寺僮と我との足音は、穹窿の間に寂しき反響を喚起せり。寺僮の柩はかしこにと指して、立ち留まるがまゝに、我はひとり長廊を進めり。聖母の御影の前に、一燈微かに燃え、カノワが棺のめぐりなる石人は朧氣なる輪廓を畫けり。贄卓に近づけば、卓前に三つの燈の點ぜられたるを見る。菫花のかをり高き邊、覆はざる柩の裏に、堆き花瓣の紫に埋もれたる屍こそあれ。長なる黒髮を額に縮ねて、これにも一束の菫花を插めり。是れ隕日せるマリアなりき、我が夢寐の間に忘るゝことなかりしララなりき。われは一聲、ララ、など我を棄てゝ去れると叫び、千行の涙を屍の上に灑ぎ、又聲ふりしぼりて、逝け、わが心の妻よ、われは誓ひて復た此世の女子を娶らじと呼び、我指に嵌めし環を抽きて、その屍の指に遷し、頭を俯して屍の額に接吻しつ。當時我血は氷の如く冷えて、五體戰ひをのゝき、夢とも現とも分かぬ間に、屍の指はしかと我手を捽り、屍の脣は徐かに開きつ。われは毛髮倒に竪ちて、卓と柩との皆獨樂の如く旋轉するを覺え、身邊忽ち常闇となりて、頭の內には只ゞ奇しく妙なる音樂の響を聞きつ。

忽ち溫なる掌の我顙を摩するを覺えて、再び目を開きしに、燈は明かに小き卓の上を照し、われは我枕邊の椅子に坐し、手を我頭に加へたるものゝロオザなるを認め得たり。又一人の我臥床の下に蹲まりて、もろ手もて顏を掩へるあり。ロオザの我に一匙の藥水を勸めつゝ熱は去れりと云ふ時、蹲れる人は徐かに起ちて室を出でむとす。われ。ララよ、暫し待ち給へ。われは夢におん身の死せしを見き。ロオザ。そは熱のなしゝ夢なるべし。われ。否、我夢は夢にして夢に非ず。若しこれをしも夢といはゞ、人世はやがて夢なるべし。マリアよ。われはおん身のララなるを知る。昔はおん身とペスツムに相見、カプリに相見き。今この短き生涯にありて、幸にまた相見ながら、爭でかくて名告りあはで止むべき。我はおん身を愛す。語り畢りて手をさし伸ばせば、マリアは跪きて我手を握り、我手背に接吻したり。

數日の後、我はマリアと柑子の花香しき出窓の前に對坐して、この可憐なる少女の清淨なる口の、その清淨なる情を語るを聞きつ。少女の語りけらく。わが幼かりし時は、唯ゞ日の暖きを知り、菫花の香しきを知るのみなりき。或時「チンガニイ」族のおうなありて、我目の必ず開く時あるべきを告けしが、その時期はいつなるべきか、絕て知るよしあらざりき。ペスツムの古祠の下にて、おん身の脣の暖きこと、日の暖きが如くなるを覺えし夕、彼おうな夢に見えて、汝のやしなひ親なるアンジェロとともに、カプリの島なる窟に往け、アンジェロは富貴を獲べく、汝はトビアスの如く、（舊約全書を見よ）光明を獲べしと云ひぬ。醒めて後アンジェロに語れば、これも同じ夜に同じ夢を見き。アンジェロは我を伴ひて島に渡りしに、天使はおん身に似たる聲して我名を呼び、我に藥艸を與へき。歸りて之を貪むとする時、ロオザが兄なる人我等の住める草寮に憩ひて、我目の開くべきを見窮め、我を拿破里に率て往きぬ。手術は功を奏せり。ロオザが兄なる醫師は、我を養ひて子となし、希臘にてみまかりし子の名を取りて、我をマリアと呼びぬ。ある日

アンジェロは、忽ち醫師のもとに來て、われは命の久しからざるべきを知りぬ。我が貯へし金を譲らむ人ララならではあらざるべし、先づこれをあづけまゐらせむとて、金あまた取出て逗留すること數日にして眠るが如くみまかりぬ。

われはさきの夜の席にて、おん身の舟人の不幸を歌ひ給ふを聞き、おん身の聲を聞き知りて、直ちにおん身の膝下に跪きぬ。アヌンチヤタが末期の詞に我に希望の光明を與へしと、おん身つれなき孤立の我を病に臥さしめしとは、おん身自ら推し給へといひぬ。

われはマリアと贊卓の前に手を握りぬ。おほよそ市長の家にゆきかふものは、皆歡喜の聲を發しつれど、其聲の最も大いなるはポッジョなりき。越ゆること二日にして、我等はロオザと俱に田舍の別墅に移りぬ。こはアンジェロが遺産もて買ひしものなりき。ポッジョは一書を我別墅に寄せて、飄然としてエネチアを去りぬ。その書には、唯ゞ左の數句あるのみなりき。日はく、我は汝と賭して贏ちたり、されど實に贏ちしは我に非ざりきと。憐むべし、ポッジョが意中の人は即ち亦我意中の人なりしなり。

ファビアニ公子とフランチェスカ夫人とは、わが好き妻を得しを喜び、かの腹黒きハッバス、ダアダアさへ皺ある面に笑を湛へて、我新婚を祝したり。わが昔の知人の僅に生き殘れるは、西班牙礎の下なるペッポのをぢのみにて、その「ボン、ジョオルノ」(好日)の語は猶久しく行人の耳に響くなるべし。

琅玕洞

千八百三十四年三月六日の事なりき。旅人あまたカプリ島なるハガニイが客舍の一室に集ひぬ。中にカラブリア産の一美人ありて、群客の目を驚せり。その美しき黑き瞳はこれに右手を借したる丈夫の面に注げり。是れララと我となり。吾等は夫婦たること既に三年、今エネチアに至る途上、再び此島に遊びて、昔日奇遇の蹟を問はむとするなり。室の一隅には、又一老婦のもろ手を幼女の肩に掛けたるあり。容貌魁偉なる一外人この幼女を愛する餘りに、覺束なき伊太利語もてその名を問ふに、幼女は遽に答ふべくもあらねば、老婦代りてアヌンチヤタと答へつ。こはララが生みし子に附けし名にて、そを外人に告げたるはロオザなり。われ進みて之と語を交へて、その嗹馬人なるを知りぬ。嗚呼、是れ畫工フェデリゴと彫匠トオルワルトゼンとの鄕人なり。フェデリゴは今故鄕に在り、トオルワルトゼンは猶羅馬に留れりと聞く。現に後者が技術上の命脈は斯土に在れば、その久しくこゝに居るもまた宜なるかな。

我等は群客と共に岸に下りて舟に上りぬ。舟はおの〳〵二客を舳と艫とに載せて、漕手は中央に坐せり。舟の行くこと箭の如く、ララと我との乘りたるは眞先に進みぬ。カプリ島の熱鬧をなせる葡萄圃と橄欖林とは忽ち跡を沒して、我等は矗立せる岩壁の天に聳ゆるを見る。綠波は石に觸れて碎け、紅花を開ける水草を洗へり。

忽ち岩壁に一小罅隙あるを見る。その大さは舟を行るに堪へざるものゝ如し。我は覺えず聲を放ちて魔穴と呼びしに、舟人打ち微笑みて、そは昔の名なり、三とせ前の事なりしが、獨逸の畫工二人ありて泅ぎて穴の内に入り、始てその景色の美を語りぬ。その畫工はフリイスとコオピッシュとの二人なりきと云ひぬ。

舟は石穴の口に當りぬ。舟人は櫓を棄てゝ、手もて水をかき、われ等は身を舟中に横へしに、ララは屛息して緊しく我手を握りつ。暫しありて、舟は大穹窿の内に入りぬ。穴は海面を拔くこと一伊尺に過ぎねど、下は百伊尺の深

さにて海底に達し、その門閾の幅も亦略ゝ百伊尺ありとぞいふなる。されば其の日光は積水の底より入りて、洞窟の内を照し、窟内の萬象は皆一種の碧色を帶び、艣の水を打ちて飛沫を見るごとに、紅薔薇の花瓣を散らす如くなるなれ。ララは合掌して思を凝らせり。その思ふところは必ずや我と同じく、曾て二人のこゝに會せしことを憶ひ起すに外ならざるべし。彼アンジェロの棲つる舍は、むかし人の此穴を怖れて、敢て近づくことなかりし時、海賊の匿しおきつるものなるべし。

巖穴の一點の光明は忽ち失せて、第二の舟は窟内に入り來りぬ。そのさま水底より浮び出づるが如くなりき。第三、第四の舟は相繼いで至りぬ。凡そこゝに集へる人々は、その奉ずる所の敎の新舊を問はず、一人として此自然の奇觀に逢ひて、天にいます神父の功德を稱へざるものなし。

舟人は俄に潮滿ち來と叫びて、忙はしく艣を搖かし始めつ。そは滿潮の巖穴を塞ぐを恐れてなりき。遊人の舟は相銜みて洞窟より出で、我等は前に渺茫たる大海を望み、後に琅玕洞の石門の漸く細りゆくを見たり。

オフェリヤの歌（「水沫集」の「於母影」より）

いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある
貝の冠とつく杖と
はける靴とぞしるしなる

かれは死にけり我ひめよ
渠はよみぢへ立ちにけり
かしらの方の苔を見よ
あしの方には石たてり

柩をおほふきぬの色は
高ねの雪と見まがひぬ
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ

花薔薇（同前）

わがうへにしもあらなくに
などかくおつるなみだぞも
ふみくだかれしはなさうび
よはなれのみのうきよかは

ミニヨンの歌（同前）

其一

「レモン」の木は花さきくらき林の中に
こがね色したる柑子は枝もたわゝにみのり
晴れて青き空よりしづやかに風吹き
「ミルテ」の木はしづかに「ラウレル」の木は高く
くもにそびえて立てる國をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其二

高きはしらの上にやすくすわれる屋根は
そらたかくそばだちひろき間もせまき間も
皆ひかりかゞやぎて人がたしたる石は
ゑみつゝ己れを見てあないとほしき子よと
なぐさむるなつかしき家をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其三

立ちわたる霧のうちに驢馬は道をたづねて
いなゝきつゝさまよひひろきほらの中には
もゝ年經たる龍の所えがほにすまひ
岩より岩をつたひしら波のゆきかへる
かのなつかしき山の道をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

うたかたの記

上

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バワリアの像は、先王ルウドヰヒ第一世が此凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウドヰヒ町を左に折れたる處に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリアの首府に名高き見ものなる美術學校なり。

校長ピロッチイが名は、をちこちに鳴りひゞきて、獨逸の國々はいふもさらなり、新希臘、伊太利、璉馬などよりも、こゝに來りつどへる彫工、畫工數を知らず。日課を畢へて後は、學校の向ひなる、「カッフェエ、ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲のみ、酒くみかはしなどして、おもひおもひの戲す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさゞめく聲聞ゆるをり、かどにきかゝりたる二人あり。

先に立ちたるは、かち色の髮のそゝけたるを厭はず、幅廣き襟飾斜に結びたるさま、誰が目にも、ところの美術諸生と見ゆるなるべし。立ち止りて、後なる色黒き小男に向ひ、「こゝなり」といひて、戸口をあけつ。

先づ二人が面を撲つはたばこの烟にて、遽に入りたる目には、中なる人をも見わきがたし。日は暮れたれど暑き頃なるに、窓悉くあけ放ちはせで、かゝる烟の中に居るも、習となりたるなるべし。

「エクステルならずや、いつの間にか歸りし。」「なほ死なでありつるよ。」など口々に呼ぶを聞けば、彼諸生はこの群にて、馴染あるものならむ。その間、あたりなる客は珍らしげに、後につきて入來れる男を見つめ居たり。見つめらるゝ人は、座客のなめなるを厭ひてか、暫し眉根に皺寄せたりしが、とばかり思ひかへしゝにや、僅に笑を帶びて、一座を見渡しぬ。

この人は今着きし汽車にてドレスデンより來にければ、茶店のさまの、かしこと殊なるに目を注ぎぬ。大理石の圓卓幾つかあるに、白布掛けたるは、夕餉畢りたる跡をまだかたづけざるならむ。裸なる卓に倚れる客の前に据ゑたる土やきの盃あり。盃は圓筒形にて、燗徳利四つ五つも併せたる大さなるに、弓なりのとつ手つけて、金蓋を蝶番に作りて覆ひたり。客なき卓に珈琲碗置いたるを見れば、みな倒に伏せて、糸底の上に砂糖、幾塊か盛れる小皿載せたるもをかし。

客はみなりも言葉もさまざまなれど、髮もけづらず、服も整へぬは一樣なり。されどあながち卑しくも見えぬは、流石理想世界に遊ぶやからなればならむ。中にも際立ちて賑しきは中央なる大卓を占めたる一群なり。餘所には男客のみなるに、獨こゝには少女あり。今エクステルに伴はれて來し人と目を合はせて、互に驚きたる如し。

來し人はこの群に珍らしき客なればにや。また少女の姿は、初めて逢ひし人を動かすに餘あらむ。前庇廣く飾なき帽を被りて、年は十七八ばかりと見ゆる顏ばせ、ヱヌスの古彫像を欺けり。そのふるまひには自ら氣高き處ありて、かいなでの人と覺えず。エクステルが隣の卓なる一人の肩を拍ちて、何事をか語居たるを呼びて、「こなたには面白き話一つする人なし。此樣子にては骨牌に遁れ球突に走るなど、只はし

き事を見むも知られず。おん連れの方と共に、こなたへ來たまはずや。」と笑みつゝ勸むる、その聲の清きに、いま來し客は耳傾けつ。

「マリイの君の居給ふ處へ、誰か行かざらむ。人々も聞け、けふ此「ミネルワ」の仲間に入れむとて伴ひたるは、巨勢君とて、遠きやまとの畫工なり。」とエクステルに紹介せられて、隨來ぬる男の近寄りて會釋するに、起ちて名乘りなどするは、外國人のみ。さらぬは坐したる儘にて答ふれど、侮りたるにもあらず、此仲間の癖なるべし。

エクステル、「わがドレスデンなる親族訪ねにゆきしは人々も知りたり。巨勢君にはかしこなる畫堂にて逢ひ、それより交を結びて、こたび巨勢君、こゝなる美術學校に、しばし足を駐めむとて、旅立ち玉ふをり、われも倶にかへり路に上りぬ。」人々は巨勢に向ひて、はるばる來ぬる人と相識れるよろこびを陳べ、さて「大學にはおん國人も、をりをり見ゆれど、美術學校に來たまふは、君がはじめなり。けふ着きたまひしことなれば、「ピナコテエク」、また美術會の畫堂なども、まだ見玉はじ。されど餘所にて見たまひし處にて、南獨逸の畫を何とか見たまふ。こたび來たまひし君が目的は奈何。」など口々に問ふ。マリイはおしとゞめて、「しばししばし、かく口を揃へて問はるゝ、巨勢君とやらむの迷惑、人々おもはずや。聞かむとならば、靜まりてこそ。」といふを、「さても女主人の嚴しさよ。」と人々笑ふ。巨勢は調子こそ異樣なれ、拙からぬ獨逸語にて語りいでぬ。

「わがミュンヘンに來しは、このたびを始とせず。六年前にこゝを過ぎて、索遜にゆきぬ。そのをりは「ピナコテエク」に懸けたる畫を見しのみにて、學校の人々などに、交を結ぶことを得ざりき。そは故郷を出でし時よりの目あてなるドレスデンの畫堂へ往かむと、心のみ急がれしゆゑなり。されど再びこゝに來て、君等がまとゐに入ることとなりし、その因縁をば、早く當時に結びぬ。」

「大人氣なしといひけたで聞き玉へ。謝肉の祭、はつる日の事なりき。「ピナコテエク」の館出でし時は、雪いま晴れて、街の中道なる並木の枝は、一つ一つ薄き氷にてつゝまれたるが、今點ぜし街燈に映じたり。いろいろの風したる衣を着て、白くまた黒き百眼掛けたる人、群をなして往來し、こゝかしこなる窓には毛氈垂れて、物見としたり。カルゝ辻なる「カッフェエ、ロリアン」に入りて見れば、おもひおもひの假裝色を爭ひ、中に雜れる常の衣もはえある心地す。みなこれ「コロッセウム」、「ヰクトリヤ」などいふ舞踏場のあくを待ちたるなるべし。」

かく語る處へ、胸あてにつゞけたる白前垂掛けし下女、麥酒の泡だてるを、ゆり越すばかり盛りたる例の大杯を、四つ五つづゝ、とつ手を寄せてもろ手に握りもち、「新しき樽よりと思ひて、遲うなりぬ。許したまへ。」とことわりて、前なる杯飲みほしたりし人々にわたすを、少女、「こゝへ、こゝへ」と呼びちかづけて、まだ杯持たぬ巨勢が前にも置かす。巨勢は一口飲みて語りつぎぬ。

「われも片隅なる一榻に腰掛けて、賑はしきさま打見るほどに、門の戸あけて入りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利栗うりにて、燒栗盛りたる紙筒を、堆く積みし箱かいこみ、「マロオニイ、セニョレ。」（栗めせ、君）と呼ぶ聲も勇ましき、後につきて入りしは、十二三と見ゆる女の子なりき。舊びたる鷹匠頭巾、ふかぶかと被り、凍えて赤うなりし兩手さしのべて、淺き目籠の縁を持ちたり。目籠には、常盤木の葉、敷きかさねて、その上に時ならぬ菫花の束を、愛らしく結びたるを載せたり。「ファイルヘン、ゲフエルリヒ」（すみれめせ）と、うなだれたる

首を擡げもあへでいひし聲の清さ、今に忘れず。この童と女の子と、道連れとは見えねば、童の入るを待ちて、これをしほに、女の子は來しならむとおもはれぬ。」

「この二人のさまの殊なるは、早くわが目を射き。人を人ともおもはぬ、殆ど憎げなる栗うり、やさしくいとほしげなるすみれうり、いづれも群居る人の間を分けて、座敷の眞中、帳場の前あたりまで來し頃、そこに休み居たる大學々生らしき男の連れたる、英吉利種の大狗、いままで腹這ひて居たりしが、身を起して、背をくぼめ、四足を伸ばし、栗箱に鼻さし入れつ。それと見て、童の拂ひのけむとするに、驚きたる狗、あとに跟きて來し女の子に突當れば、「あなや、」とおびえて、手に持ちし目籠とり落したり。莖に錫紙巻きたる、美しきすみれの花束、きら／＼と光りて、よもに散りぼふを、好き物得つと彼狗、踏みにじりては、銜へて引きちぎりなどす。ゆかに煖爐の温まりにて解けたる、靴の雪にぬれたれば、あたりの人々、かれ笑ひ、これ罵るひまに、落花狼藉、なごりなく泥土に委ねたり。栗うりの童は、逸足出して逃去り、學生らしき男は、欠しながら狗を叱し、女の子は呆れて打守りたり。この菫花うりの忍びて泣かぬは、うきになれて涙の泉涸れたりしか、さらずば驚き惑ひて、一日の生計、これがために止まむとまでは想到らざりしか。しばしありて、女の子は碎けのこりたる花束二つ三つ、力なげに拾はむとするとき、帳場の女の知らせに、こゝの主人出でぬ。赤がほにて、腹突きいだしたる男の、白き前垂したるなり。太き拳を腰にあてゝ、花賣りの子を暫し睨み、「わが店にては、暖簾師めいたるあきなひ、せさせぬが定なり。疾くゆきね。』とわめきぬ。女の子は唯言葉なく出でゆくを、滿堂の百眼、一點の涙なく見送りぬ。』

「われは珈琲代の白銅貨を、帳場の石板の上に擲げ、外套取つて馳出て見しに、花賣の子は、ひとりしく／＼と泣きてゆくを、呼べども顧みず。追付きて、『いかに、善き子、菫花のしろ取らせむ。』といふを聞きて、始めて仰見つ。そのおもての美しさ、濃き藍いろの目には、そこひ知らぬ憂ありて、一たび顧みるときは人の腸を斷たむとす。嚢中の『マルク』七つ八つありしを、から籠の木の葉の上に置きて與へ、驚きて何ともいはぬひまに、立去りしが、その面、その目、いつまでも目に付きて消えず。ドレスデンにゆきて、畫堂の額うつすべき許を得て、エヌス、レダ、マドンナ、ヘレナ、いづれの圖に向ひても、不思議や、すみれ賣のかほばせ霧の如く、われと畫額との間に立ちて障礙をなしつ。かくては所詮、我業の進まむこと覺束なしと、旅店の二階に籠もりて、長椅子の覆革に穴あけむとせし頃もありしが、一朝大勇猛心を奮ひおこして、わがあらむ限の力をこめて、此花賣の娘の姿を無窮に傳へむとおもひたちぬ。さりけれどわが見し花うりの目、春潮を眺むる喜の色あるにあらず、暮雲を送る夢見心あるにあらず、伊太利古跡の間に立たせて、あたりに一群の白鳩飛ばせむこと、ふさはしからず。我空想はかの少女をラインの岸の巖根に居らせて、手に一張の琴を把らせ、嗚咽の聲を出させむとおもひ定めにき。下なる流にはわれ一葉の舟を泛べて、かなたへむきてもろ手高く擧げ、面にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには數知られぬ、『ニックセン』、『ニュムフェン』などの形波間より出でゝ揶揄す。けふ此ミュンヘンの府に來て、しばし美術學校の『アトリエ』借らむとするも、行李の中、唯此一畫藁、これをおん身等師友の間に議りて、成しはてむと願ふのみ。」

巨勢はわれ知らず話しいりて、かくいひ畢り

し時は、モンゴリア形の狹き目も光るばかりなりき。「いしくも語りけるかな、」と呼ぶもの二人三人。エクステルは冷淡に笑ひて聞居たりしが、「汝たちも其下圖見にゆけ、一週が程には巨勢君のアトリエ」とゝのふべきに、」といひき。

マリイは物語の半より色をたがへて、目は巨勢が脣にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯さへ一たびは震ひたるやうなりき。巨勢は初此まとゐに入りし時、已に少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きほれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたず是なりと思はれぬ。こも僻の妄想のしわざなりや否や。

物語畢りしとき、少女は暫し巨勢を見やりて、「君はその後、再び花うりを見たまはざりしか、」と問ひぬ。巨勢は直ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが、「否、花賣を見し其夕の汽車にてドレスデンに立ちぬ。されどなめなる言葉を咎め給はずばきこえ侍らむ。我すみれうりの子にもわが『ロオレライ』の畫にも、をり〳〵たがはず見えたまふはおん身なり。」

この群は聲高く笑ひぬ。少女、「さては畫額ならぬ我姿と、君との間にも、その花うりの子立てりと覺えたり。我を誰とかおもひ玉ふ。」一起ちあがりて、眞面目なりとも戲なりとも、知られぬ樣なる聲にて、「われはその菫花うりなり。君が情の報はかくこそ。」少女は卓越しに伸びあがりて、俯きゐたる巨勢が頭を、ひら手にて抑へ、その額に接吻しつ。

この騷ぎに少女が前なりし酒は覆へりて、裳にかゝり、卓の上にこぼれたるは、蛇の如く這ひて、人々の前へ流れよらむとす。巨勢は熱き手掌を、兩耳の上におぼえ、驚く間もなく、またこれより熱き脣、額に觸れたり。　我友に目を廻させたまふな。」とエクステル呼びぬ。人々は半ば椅子より立ちて「いみじき戲かな、」と一人がいへば、「われらは継子なるぞくやしき、」と外の一人いひて笑ふを、餘所なる卓よりも、皆興ありげにうち守りぬ。

少女が側に坐りたりし一人は、「われをもすさめ玉はむや、」といひて、右手さしのべて少女が腰をかき抱きつ。少女は「さても禮儀知らずの継子どもかな、汝等にふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稻妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨みつ。巨勢は唯呆れに呆れて見居たりしが、この時の少女の姿は、すみれうりにも似ず、「ロオレライ」にも似ず、さながら凱旋門上のバワリアなりと思はれぬ。

少女は誰が飲みほしけむ珈琲碗に添へたりし「コップ」を取りて、中なる水を口に銜むと見えしが、唯一噀、「継子よ、継子よ、汝等誰か美術の継子ならざる。フィレンチェ派學ぶはミケランジェロ、ヰンチイが幽靈、和蘭派學ぶはルウベンス、ファン、ディクが幽靈、我國のアルブレヒト、ドュウレル學びたりとも、アルブレヒト、ドュウレルが幽靈ならぬは稀ならむ。會堂に掛けし「スッチイ」二つ三つ、直段好く賣れたる曉には、われらは七星われらは十傑、われらは十二「アポステル」と擬に見たてしてのわれぼめ。かゝるえり屑にミネルワの脣いかで觸れむや。わが冷たき接吻にて、滿足せよ。」とぞ叫びける。

噴きかけし霧の下なる此演說、巨勢は何事とも辨へねど、時の繪畫をいやしめたる、諷刺ならむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神バワリアに似たりとおもひし威嚴少しもくづれず、言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れしを取りて、大股にあゆみて出でゆかむとす。

皆すさまじげなる氣色して、「狂人」と一人いへば、「近きに報せでは止まじ、」と外の一人いふを、戸口にて振りかへりて、「遺恨に思ふべき

事かは、月影にすかして見よ、額に血の迹はとどめじ。吹きかけしは水なれば。」

中

あやしき少女の去りてより、程なく人々あらけぬ。歸り路にエクステルに問へば、「美術學校にて雛形となる少女の一人にて、「フロイライン」ハンスルといふものなり。見たまひし如く奇怪なる振舞するゆゑ、狂女なりともいひ、また外の雛形娘とちがひて、人に肌見せねば、かたわにやといふもあり。その履歴知るものなけれど、教ありて氣象よの常ならず、汙れたる行なければ、美術諸生の仲間には、喜びて友とするもの多し。善き首なることは見たまふ如し。」と答へぬ。巨勢、「我畫かくにもようあるべきものなり。「アトリエ」とゝのはむ日には、來よと傳へたまへ。」エクステル、「心得たり。されど十三の花賣娘にはあらず、裸體の研究、危しとはおもはずや。」巨勢、「裸體の雛形せぬ人と君もいひしが。」エクステル、「現にいはれたり。されど男と接吻したるも、けふ始めて見き。」

エクステルがこの言葉に、巨勢は赤うなりしが、街燈暗き「シルレル、モヌメント」のあたりなりしかば、友は見ざりけり。巨勢が「ホテル」の前にて、二人は袂を分ちぬ。

一週ほど後の事なりき、エクステルが周旋にて、美術學校の「アトリエ」一間を巨勢に借されぬ。南に廊下ありて、北面の壁は硝子の大窓に半を占められ、隣の間とのへだてには唯帆木綿の幌あるのみ。頃はみな月半ばなれば、旅立ちし諸生多く、隣に人もあらず、業妨ぐべき憂なきを喜びぬ。

巨勢は畫額の架の前に立ちて、今入りし少女に架の側なる下畫を指さししめして、「君に聞かれしはこれなり。面白げに笑ひたはぶれ玉ふときは、さしもおもはれねど、をり〳〵君がおもかげの、こゝにをらせむ人物にいとふさはしきときあり。」

少女は高く笑ひて、「物忘したまふな。おん身が「ロオレライ」の本の雛形、すみれ賣の子は我なりとは、先の夜も告げしものを。」かくいひしが俄に色を正して、「おん身は我を信じたまはず。げにそれも無理ならず。世の人は皆我を狂女なりといへば、さおもひたまふならむ。」この聲戲とは聞えず。

巨勢は半信半疑したりしが、忍びかねて少女にいふ。「餘りに久しくさいなめ玉ふな。今も我が額に燃ゆるは君の辱なり。はかなき戲とおもへば、しひて忘れむとせしこと、幾度か知らねど、迷は遂に晴れず。あはれ君がまことの身の上、苦しからずば聞かせ玉へ。」

窓の下なる小机に、いま行李より出したる舊き繪入新聞、遣ひさしたる油ゑの具の錫筒、粗末なる烟管にまだ卷烟草の端の殘れるなど載せたるその片端に、巨勢はつら杖つきたり。少女は前なる籐の椅子に腰かけて、語りいでぬ。

「まづ何事よりか申さむ。此學校にて雛形の鑑札受くるときも、ハンスルといふ名にて通しぬれど、そは我眞の名にあらず。父はスタインバハとて、今の國王に愛でられて、ひと時榮えし畫工なりき。わが十二の時、王宮の冬園に夜會ありて、二親みな招かれぬ。宴闌なる頃、國王見えざりければ、人々驚きて、移植ゑし熱帶艸木いやが上に茂れる、硝子屋根の下、そこかこゝかと搜しもとめつ。園の片隅にはタンダルヂニスが刻める、ファウストと少女との名高き石像あり。わが父のそのあたりに來し時、胸割くるやうなる聲して、『助けて〳〵、』と叫ぶものあり。聲をしるべに、黃金の穹窿おほひたる、「キオスク」(四阿屋)の戶口に立寄れば、周りに植ゑし棕櫚の葉に、瓦斯燈の光支へられた

るが、濃き五色にて畫きし、窓硝子を洩りてさしこみ、薄暗くあやしげなる影をなしたる裡に、一人の女の逃げむとすまふを、かゝへたるは王なり。その女のおもて見し時の、父の心はいかなりけむ。かれは我母なりき。父はあまりの事に、しばしたゆたひしが、「許したまへ、陛下」と叫びて、王を推倒しつ。そのひまに母は走りのきしが、不意を打たれて倒れし王は、起き上りて父に組付きぬ。肥えふとりて多力なる國王に、父はいかでか敵し得べき、組敷かれて、傍にありし如露にてしたゝか打たれぬ。この事知りて諫めし、内閣の秘書官チイグレルは、ノイシュワンスタインなる塔に押籠めらるべき筈なりしが、救ふ人ありて助けられき。われは其夜家にありて、二親の歸るを待ちしに、下女來て父母歸り玉ひぬといふ。喜びて出迎ふれば、父は舁かれて歸り、母は我を抱いて泣きぬ。」

少女は暫らく默しつ。けさより曇りたる空は、雨になりて、をり〳〵窓を打つ雫、はらはらと音す。巨勢いふ。「王の狂人となりて、スタルンベルヒの湖に近き、ベルヒといふ城に遷され玉ひしことは、きのふの新聞にて讀みしが、さては其頃よりかゝる事ありしか。」

少女は語を繼ぎて、「王の繁華の地を嫌ひて、田舍にのみ住み、晝寢ねて夜起きたまふは、久しき程の事なり。獨逸、佛蘭西の戰ありし時、加特力派の國會に打勝ちて、普魯西方につきし、王が中年のいさをは、次第に暴政の噂に掩はれて、公けにこそ言ふものなけれ、陸軍大臣メルリンゲル、大藏大臣リイデルなど、故なくして死罪に行はれむとしゐるを、其筋にて秘めたるは、誰知らぬものなし。王の晝寢し玉ふときは、近衆みな斥けられしが、囈語にマリイといふこと、あまたゝびいひたまふを聞きしものありといふ。我母の名もマリイといひき。望なき戀は、王の病を長ぜしにあらずや。母はかほばせ我に似たる處ありて、その美しさは宮の内にて類なかりきと聞きつ。」

「父は間もなく病みて死にき。交廣く、もの惜みせず、世事には極めて疎かりければ、家に遺財つゆばかりもなし。それよりダハハウエル街の北のはてに、裏屋の二階明きたりしを、借りて住みしが、そこに遷りてより、母も病みぬ。かゝる時にうつろふものは、人の心の花なり。數知らぬ苦しき事は、わが穉き心に、早く世の人を憎ましめき。明る年の一月、謝肉祭の頃なりき。家財衣類なども賣盡して、日々の烟も立てかぬるやうになりしかば、貧しき子供の群に入りてわれも菫花賣ることを覺えつ。母のみまかる前、三日四日の程を安く送りしは、おん身の賜なりき。」

「母のなきがら片付けなどするとき、世話せしは、一階高くすまひたる仕立屋なり。あはれなる孤ひとり置くべきにあらずとて、迎取られしを喜びしこと、今おもひ出しても口惜しき程なり。仕立屋には、娘二人ありて、いたく物ごのみして、みづから衒ふさまなるを見しが、迎取られてより伺へば、夜に入りて屢ゝ客あり。酒など飲みて、はては笑ひ罵り、歌うたひなどす。客は外國の人多く、おん國の學生なども見えしやうなりき。或る日主人われにも新しき衣着よといひしが、そのをり我を見て笑ひし顏、何となく怖ろしく、子供心にもうれしとはおもはざりき。午すぎし頃、四十ばかりなる知らぬ人來て、スタルンベルヒの湖水へ往かむといふを、主人も倶に勸めき。父の世に在りしとき、伴はれてゆきし嬉しさ、猶忘れざりしかば、しぶしぶ諾ひしを、「かくてこそ善き子なれ」とみな褒めつ。連れなる男は、途にてもやさしくのみ扱ひて、かしこにては「バワリア」といふ座敷船に乗り、食堂にゆきて物喫はせつ。酒もすゝめたれど、そは慣れぬものなれば、辭みて飲ま

ざりき。ゼエスハウプトに船はてしとき、その人はまた小舟を借り、これに乘りて遊ばむといふ。暮れゆくそらに心細くなりしわれは、早やかへらむといへど、聽かずして漕出で、岸邊に添ひてゆくほどに、人げ遠き葦間に來しが、男は舟をそこに停めつ。わが年はまだ十三にて、初は何事ともわきまへざりしが、後には男の面色もかはりておそろしく、われにもあらで、水に躍入りぬ。暫しありて我にかへりしときは、湖水の畔なる漁師の家にて、貧しげなる夫婦のものに、介抱せられて居たりき。歸るべき家なしと言張りて、一日二日と過す中に、漁師夫婦の質朴なるに馴染みて、不幸なる我身の上を打明けしに、あはれがりて娘として養ひぬ。ハンスルといふは、この漁師の名なり。」

「かくて漁師の娘とはなりたれど、弱き身には舟の櫂取ることもかなはず、レオニのあたりに、富める英吉利人の住めるに雇はれて、小間使になりぬ。加特力教信ずる養父母は、英吉利人に使はるゝを嫌ひたれど、わが物讀むことなど覺えしは、かの家なりし雇女教師の恵なり。女教師は四十餘の處女なりしが、家の娘のたかぶりたるよりは、我を愛すること深く、三年が程に多くもあらぬ教師の藏書、悉く讀みき。ひがよみはさこそ多かりけめ。又ふみの種類もまちまちなりき。クニッゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギヨオテ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキヨオニヒが通俗の文學史を繙き、あるはルウブル、ドレスデンの畫堂の寫眞繪繰りひろげて、テエヌが美術論の譯書をあさりぬ。」

「去年英吉利人一族を率ゐて國に歸りし後は、然るべき家に奉公せばやとおもひしが、身元善からねば、ところの貴族などには使はれず、この學校の或る教師に、端なくも見出されて、雛形勤めしが縁になりて、遂に鑑札受くることゝなりしが、われを名高きスタインバハが娘なりとは知る人なし。今は美術家の間に立ちまじりて、唯面白くのみ日を暮せり。されどグスタアフ、フライタハは流石そら言いひしにあらず。美術家ほど世に行儀惡きものなければ、獨立ちて交るには、しばしも油斷すべからず。寄らず、障はらぬやうにせばやとおもひて、計らず見玉ふ如き不思議の癖者になりぬ。をり／＼は我身、みづからも狂人にはあらずやと疑ふ程なり。これにはレオニにて讀みしふみも、少し祟をなすかとおもへど、若し然らば世に博士と呼ばるゝ人は、抑ゝいかなる狂人ならむ。われを狂人と罵る美術家等、おのれらが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂氣なくてかなはぬことは、ゼネカが論をも、シエクスピアが言をも待たず。見玉へ、我學問の博きを。狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見るその悲しさ。狂人にならでもよき國王は、狂人になりぬと聞く、それも悲し。悲しきことのみ多ければ、晝は蟬と共に泣き、夜は蛙と共に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情なくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心のゆくまゝに語るを咎め給ふな。嗚呼、かういふも狂氣か。」

下

定なき空に雨歇みて、學校の庭の木立のゆるげるのみ曇りし窓の硝子にすかして見ゆ。少女が話聞く間、巨勢が胸には、さま／＼の感情戰ひたり。或ときはむかし別れし妹に逢ひたる兄の心となり、或ときは廢園に僵れ伏たるヱヌスの石像に、獨り悩める彫工の心となり、或るときは又艶女に心動され、われは墮ちじと戒むる沙門の心ともなりしが、聞きをはりし時は、胸騷ぎ肉顫ひて、われにもあらで、少女が前に跪かむとしつ。少女はつと立ちて、「この部

屋の暑さよ。早や學校の門もさゝるゝ頃なるべきに、雨も晴れたり。おん身とならば、おそろしきこともなし。共にスタルンベルヒへ往き玉はずや。」と側なる帽取りて戴きつ。そのさま巨勢が共に行くべきを、つゆ疑はずと覺し。巨勢は唯母に引かるゝ穉子の如く從ひゆきぬ。

門前にて馬車雇ひて走らするに、程なく停車場に來ぬ。けふは日曜なれど、天氣惡しければにや、近郷より歸る人も多からで、こゝはいと靜なり。新聞の號外賣る婦人あり。買ひて見れば、國王ベルヒの城に遷りて、容體穩なれば、侍醫グッデンも護衞を弛めさせきとなり。汽車中には湖水の畔にあつさ避くる人の、物買ひに府に出でし歸るさなるが多し。王の噂いと喧し。「まだホオヘンシュワンガウの城に居たまひし時には似ず、王の心鎭まりたるやうなり。ベルヒに遷さるゝ途中、ゼエスハウプトにて水求めて飲みたまひしが、近きわたりなりし漁師等を見て、やさしく頷きなどしたまひぬ。」と訛みたることばにて語るは、かひもの籠手にさげたる老女なりき。

車走ること一時間、スタルンベルヒに着きしは夕の五時なり。かちより往きてやう〱一日路の處なれど、はやアルペン山の近さを、唯何となく覺えて、このくもらはしき空の氣色にも、胸開きて息せらる。車のあちこちと廻來し、丘陵の忽ち開けたる處に、ひろ〱と見ゆるは湖水なり。停車場は西南の隅に在りて、東岸なる林木、漁村はゆふ霧に包まれてほのかに認めらるれど、山に近き南の方は一望さはみなし。

案内知りたる少女に引かれて、巨勢は右手なる石段を上ぼりて見るに、こゝは「バワリア」の庭といふ「ホテル」の前にて、屋根なき所に石卓椅子など並べたるが、けふは雨後なればしめじめと人げ少し。給仕する僕の黒き上衣に、白の前掛したるが、何事をかつぶやきつゝも、卓に倒しかけたる椅子を、引起して拭ひゐたり。ふと見れば片側の軒にそひて、つた葛からませたる架ありて、その下なる圓卓を圍みたるひと群の客あり。こは此ホテルに宿りたる人々なるべし。男女打ちまじりたる中に、先の夜ミネルワにて見し人ありしかば、巨勢は往きてものいはむとせしに、少女おしとゞめて、「かしこなるは、君の近づきたまふべき群にあらず。われは年若き人と二人にて來たれど、憚るべきはかなたに在りて、こなたにあらず。彼はわれを知りたれば、見玉へ、久しく座にえ忍びあへで隱るべし。」とばかりありて、彼美術諸生は果して起ちて「ホテル」に入りぬ。少女は僕を呼びちかづけて、座敷船はまだ出づべしやと問ふに、僕は飛行く雲を指さして、この覺束なきそらあひなれば、最早出でざるべしといふ。さらば車にてレオニに行かばやと言付けぬ。

馬車來ぬれば、二人は乘移りぬ。停車場の傍より、東の岸邊を奔らす。この時アルペンおろしさと吹來て、湖水のかたに霧立ちこめ、今出でし邊をふりかへり見るに、次第々々に鼠色になりて、家の棟、木のいたゞきのみ一きは黒く見えたり。御者ふりかへりて、「雨なり。母衣掩ふべきか。」と問ふ。「否。」と應へし少女は巨勢に向ひて、「こゝちよの此遊や。むかし我命喪はむとせしも此湖の中なり。我命拾ひしもまた此湖の中なり。さればいかでとおもふおん身に、眞心打明けてきこえむもこゝにてこそと思へば、かくは誘ひまつりぬ。カッフェエ、ロリアンにて恥かしき目にあひけるとき、救ひたまはりし君をまた見むとおもふ心を命にて、幾歳をか經にけむ。先の夜ミネルワにておん身が物語聞きしときのうれしさ、日頃木のはしなどのやうにおもひし美術諸生の仲間なりければ、人あなづりして不敵の振舞せしを、はしたなしとや見玉ひけむ。されど人生いくばくもあらず。

うれしとおもふ一彈指の間に、口張りあけて笑はずば、後にくやしくおもふ日あらむ。」かくいひつゝ被りし帽を脱棄てゝ、こなたへふり向きたる顏は、大理石脈に熱血跳る如くにて、風に吹かるゝ金髮は、首打振りて長く嘶ゆる駿馬の鬣に似たりけり。「けふなり。けふなり。きのふありて何かせむ。あすも、あさても空しき名のみ、あだなる聲のみ。」

この時、二點三點、粒太き雨は車上の二人が衣を打ちしが、瞬くひまに繁くなりて、湖上より橫しぶき、あらゝかにおとづれ來て、紅を潮したる少女が片頬に打ちつくるを、さし覗く巨勢が心は、唯そらにのみやなりゆくらむ。少女は伸びあがりて、「御者、酒手は取らすべし。疾く驅れ。一策加へよ、今一策。」と叫びて、右手に巨勢が頸を抱き、己れは項をそらせて仰視たり。巨勢は架の如き少女が肩に、我頭持たせ、たゞ夢のこゝちして其の姿を見たりしが、彼凱旋門上の女神バワリアまた胸に浮びぬ。

國王の棲めりといふベルヒ城の下に來し頃は、雨獨り劇しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の竪縞おり出して、濃き處には雨白く、淡き處には風黑し。御者は車を停めて。「しばしが程なり。餘りに濡れて客人も風や引き玉はむ、又舊びたれども此車、いたく濡らさば、主人の嗔に逢はむ。」といひて、手早く母衣打掩ひ、又一鞭あてゝ急ぎぬ。

雨猶をやみなくふりて、神おどろ〳〵しく鳴りはじめぬ。路は林の間に入りて、この國の夏の日はまだ高かるべき頃なるに、木下道ほの暗うなりぬ。夏の日に蒸されたりし草木の、雨に濕ひたるかをり車の中に吹入るを、渇したる人の水飮むやうに、二人は吸ひたり。鳴神のおとの絶間には、おそろしき天氣に怯れたりとも見えぬ「ナハチガル」鳥の、玲瓏たる聲振りたてゝしばなけるは、淋しき路を獨ゆく人の、ことさらに歌うたふ類にや。この時マリイは諸手を巨勢が項に組合せて、身のおもりを持たせかけたりしが、木隙を漏る稻妻に照らされたる顏見合せて笑を含みつ。あはれ二人は我を忘れ、わが乘れる車を忘れ、車の外なる世界をも忘れたりけむ。

林を出でゝ、坂路を下るほどに、風村雲を拂ひさりて、雨も亦歇みぬ。湖の上なる霧は、重ねたる布を一重、二重と剝ぐ如く、束の間に晴れて、西岸なる人家も、また手にとるやうに見ゆ。唯こゝかしこなる木下蔭を過ぐるごとに、梢に殘る風に拂はれて落つる露を見るのみ。

レオニにて車を下りぬ。左に高く聳ちたるは、所謂ロットマンが岡にて、「湖上第一勝」と題したる石碑の建てる處なり。右に伶人レオニが開きぬといふ、水に臨める酒店あり。巨勢が腕にもろ手からみて、縋るやうにして歩みし少女は、この店の前に來て岡の方をふりかへりて、「わが雇はれし英吉利人の住みしは、此半腹の家なりき。老いたるハンスル夫婦が漁師小屋も、最早百歩が程なり。われはおん身をかしこへ、伴はむとおもひて來しが、胸騷ぎて堪へがたければ、此店にて憩はゞや。」巨勢は現にもと、店に入りて夕餉誂ふるに、「七時ならでは整はず、まだ三十分待ち玉はではかなはじ、」といふ。こゝは夏の間のみ客ある處にて、給仕する人も其年々に雇ふなれば、マリイを識れるもなかりき。

少女はつと立ちて、棧橋に繫ぎし舟を指ざし、「舟漕ぐことを知り玉ふか。」巨勢、「ドレスデンにありし時、公園のカロラ池にて舟漕ぎしことあり。善くすといふにあらねど、君獨りわたさむほどの事、いかで做得ざらむ。」少女、「庭なる椅子は濡れたり。屋根の下は、あまりに暑し。しばし我を載せて漕ぎ玉へ。」

巨勢は脱ぎたる夏外套を少女に被せて小舟に

乘らせ、われは艫取りて漕出でぬ。雨は歇みたれど、天猶曇りたるに、暮色は早く岸のあなたに來ぬ。さきの風に搖られたるなごりにや、舷、敲くほどの波は猶ありけり。岸に沿ひてベルヒの方へ漕ぎもどす程に、レオニの村落果つるあたりに來ぬ。岸邊の木立絶えたる處に、眞砂路の次第に低くなりて、波打際に長く[illegible]据ゑたる見ゆ。蘆の一叢舟に觸れて、さわ〳〵と音するをりから、岸邊に人の足音して、木の間を出づる姿あり。身の長六尺に近く、黑き外套を着て、手にしぼめたる蝙蝠傘を持ちたり。左手に少し引きさがりて隨ひたるは、鬚も髮も皆雪の如くなる翁なりき。前なる人は俯きて歩みきぬれば、縁廣き帽に顏隱れて見えざりしが、今木の間を出でゝ湖水の方に向ひ、しばし立ちとどまりて、片手に帽をぬぎ持ちて、打ち仰ぎたるを見れば、長き黑髮を、後ざまにかきて廣き額を露はし、面の色灰のごとく蒼きに、窪みたる目の光は人を射たり。舟にては巨勢が、外套を背に着て、蹲まり居たるマリイ、これも岸なる人を見居たりしが、この時俄に驚きたる如く、「彼は王なり、」と叫びて立ちあがりぬ。背なりし外套は落ちたり。帽はさきに脱ぎたるまゝ、酒店に置きて出でたれば、亂れたるこがね色の髮は、白き夏衣の肩にたを〳〵とかゝりたり。岸に立ちたるは、實に侍醫グッデンを引つれて、散步に出でたる國王なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は惚恍として少女が姿を見てありしが、忽ち一聲「マリイ」と叫び、持ちたる傘投棄てゝ、岸の淺瀨をわたり來ぬ。少女は「あ」と叫びしが、その儘氣を喪ひて、巨勢が扶くる手のまだ及ばぬ間に、傾れしが、傾く舟の一搖りゆらるゝと共に、うつ伏になりて水に墜ちぬ。湖水はこの處にて、次第々々に深くなりて、勾配ゆるやかなりければ、舟の停まりしあたりも、水は五尺に足らざるべし。されど岸邊の砂は、やう〳〵粘土まじりの泥となりたるに、王の足は深く陷いりて、あがき自由ならず。その隙に隨ひたりし翁は、これも傘投棄てゝ追ひすがり、老いても力や衰へざりけむ、水を蹴て二足三足、王の領首むづと握りて引戻さむとす。こなたは引かれじとするほどに、外套は上衣と共に翁が手に殘りぬ。翁はこれをかいやり棄てゝ、猶も王を引寄せむとするを、王はふりかへりて組付き、彼此たがひに聲だに立てず、暫し揉合ひたり。

是れ唯一瞬間の事なりき。巨勢は少女が墜つる時、僅に衣を握みしが、少女が蘆間隠れの杙に頭を打たれて、沈まむとするを、やうやうに引揚げ、汀の二人が爭ふを跡に見て、もと來し方へ漕ぎかへしつ。巨勢は唯奈何にもして少女が命助けむとおもふのみにて、外に及ぶに遑あらざりしなり。

レオニの酒店の前に來しが、こゝへは寄らず、是より百步が程なりと聞きし、漁師夫婦が苫屋をさして漕ぎゆくに、日もはや暮れて、岸には「アイヘン」、「エルレン」などの枝繁りあひ暗ごりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇にほの見えたり。舟には俯したる髮の泥水にまみれしに、藻屑かゝりて僵れふしたる少女の姿、たれかあはれと見ざらむ。をりしも漕來る舟に驚きてか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく螢あり。あはれ、こは少女が魂のぬけ出でたるにはあらずや。

しばしありて、今まで木影に隠れたる苫屋の燈見えたり。近寄りて、「ハンスルが家はこゝなりや、」とおとなへば、傾きし簷端の小窓開きて、白髮の嫗、舟をさしのぞきつ、「ことしも水の神の贄求めたるよ。主人はベルヒの城へきのふより驅りとられて、まだ歸らず。手當して見むとおもひ玉はば、こなたへ。」と落付きたる

聲にていひて、窓の戸さゝむとしたりしに、巨勢は聲ふりたてゝ、「水に墜ちたるはマリイなり、そなたのマリイなり、」といふ。老女は聞きも畢らず、窓の戸を明け放ちたるまゝにて、棧橋の畔に馳出で、泣く〳〵巨勢を扶けて、少女を抱きいれぬ。

入りて見れば、半は板敷にしたるひと間のみ。今火を點したりと見ゆる小「ランプ」一竈の上に微なり、四方の壁にゑがきたる粗末なる耶蘇一代記の彩色畫は、煤に包まれておぼろげなり。藁火焚きなどして介抱したれど、少女は蘇らず。巨勢は老女と屍の傍に夜をとほして、消えて迹なきうたかたのうたてき世を喞ちあかしつ。

時は耶蘇暦千八百八十六年八月十三日の夕の七時、バワリヤ王ルウドヰヒ第二世は、湖水に溺れて殂せられしに、年老いたる侍醫グッデンこれを救はむとて、共に命を殞し、顏に王の爪痕を留めて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌十四日ミュンヘン府の騒動はおほかたならず。街の角々には黒縁取りたる張紙に、此訃音を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞號外には、王の屍見出だしたるをりの模樣に、さま〴〵の臆說附けて賣るを、人々爭ひて買ふ。點呼に應ずる兵士の正服つけて、黒き毛植ゑしバワリア鍪戴きたる、警察吏の馬に騎り、または徒立にて馳せちがひたるなど、雜沓いはむかたなし。久しく民に面を見せたまはざりし國王なれど、流石にいたましがりて、憂を含みたる顏も街に見ゆ。美術學校にも此騒ぎにまぎれて、新に入りし巨勢がゆくへ知れぬを、心に掛くるものもなかりしが、エクステル一人は友の上を氣づかひ居たり。

六月十五日の朝、王の柩のベルヒ城より、眞夜中に府に遷されしを迎へて歸りし、美術學校の生徒が「カッフェエ、ミネルワ」に引上げし時、エクステルはもしやと思ひて、巨勢が「アトリエ」に入りて見しに、彼はこの三日が程に相貌變りて、著るく痩せたる如く、「ロオレライ」の畫架の下に跪きてぞ居たりける。

國王の横死の噂に掩はれて、レオニに近き漁師ハンスルが娘一人、おなじ時に溺れぬといふこと、問ふ人もなくて止みぬ。

わが星（「水沫集」の「於母影」より）

おもひをかけしわが星は
光をかくしいづこにて
たれのためにかかゞやける
心もそらに浮くもの
かゝるおもひをふきはらふ
この夕暮にかぜもがな
すゞしく茂る夏木立
なにをやさしくそよぐらむ
綠色こき大ぞらは
なにをやさしく見下せる
あるかひもなき世の中の
卯月しりてや天の戸を
鳴きてすぎゆくほとゝぎす
しでの山路のしるべせよ

野梅（前同）

めづる人なき山里は
うばらからたち生ひあるゝ
籬のもとに捨てられて
雨にうつろひ風にちり
世をわびげなる梅の花
あひみるにこそ悲しけれ

舞姫

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと靜にて、熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし、今宵は夜毎にこゝに集ひ來る骨牌仲間もホテルに宿りて、舟に殘りしは余一人のみなれば。

五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで來し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記したる紀行は日ごとに幾千言をかなしけむ、當時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、稚き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげにしるしゝを、心ある人はいかに見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、獨逸にて物學びせし間に、一種のニル、アドミラリイの氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに、東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、學問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ變り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感觸を、筆に寫して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ緣故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、ブリンヂイシイの港を出でゝより、はや二十日あまりを經ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ惱ましたればなり。此恨は初め一抹の雲の如く我心を掠めて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古蹟にも心を留めさせず、中ごろは世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいふべき慘痛をわれに負はせ、今は心の奧に凝り固まりて、一點の翳とのみなりたれど、文讀むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、聲に應ずる響の如く、限なき懷舊の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてか此恨を銷せむ。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によみし後は心地すが／＼しくもなりなむ。これのみは餘りに深く我心に彫りつけたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人も無し、房奴の來て電氣線の鍵を捩るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

余は幼き比より嚴しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、學問の荒み衰ふることなく、舊藩の學館にありし日も、東京に出でゝ豫備黌に通ひしときも、大學法學部に入りし後も、太田豐太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたるに、一人子のわれを力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には學士の稱を受けて、大學の立ちてよりその頃までにまたなき名譽なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故鄕なる母を都に呼び迎へ、樂しき年を送ること三とせばかり、官長の覺え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遙々と家を離れてベルリンの都に來ぬ。

余は模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉强力とを持ちて、忽ちこの歐羅巴の新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色澤ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と譯するときは、幽靜なる境なるべく思はるれど、この大道髮の如きウンテル、デン、リンデンに來て兩邊なる石だゝみの人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩聳えたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める窓に倚り玉ふ頃なりければ、樣々の色に飾り成したる禮裝をなしたる、妍き少女の巴里まねびの粧したる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろ〳〵の馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる處には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てゝ緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の女神の像、この許多の景物目睫の間に聚まりたれば、始めてこゝに來しものゝ應接に遑なきも宜なり。されど我胸には縱ひいかなる境に遊びても、あだなる美觀に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おほやけの紹介狀を出だして東來の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎へ、公使館よりの手つゞきだに事なく濟みたらましかば、何事にもあれ、教へもし傳へもせむと約しき。喜ばしきは、わが故里にて、獨逸、佛蘭西の語を學びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは學び得たると問はぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとには、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大學に入りて政治學を修めむと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも濟みて、取調も次第に捗りければ、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば寫し留めて、つひには幾卷をかなしけむ。大學のかたにては、穉き心に思ひ計りしが如く、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、此か彼かと心迷ひながらも、二三の法家の講筵に列ることにおもひ定めて、謝金を收め、往きて聽きつ。

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時來れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に從ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず學びし時より、官長の善き働き手を得たりと奬ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大學の風にあたりたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奧深く潛みたりしまことの我は、やうやく表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜しからず、また善く法典を諳じて獄を斷ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私におもふやう、我母は余を活きたる字書となさむとし、我長官は余を活きたる條例となさむとやしけむ。字書たらむは猶ほ堪ふべけれど、條例たらむは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、極めて丁寧にいらへしたる余が、この頃より官長に寄する書には連りに法制の細目に拘ふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらむには、紛々たる萬事は破竹の如くなるべしなどゝ廣言しぬ。又大學にては法科の講筵を餘所にして、歷史文學に心を寄せ、漸く蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らむとしたりけめ。獨立の思想を懷きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべ

き。危きは余が當時の地位なりけり。されどこれのみにては、猶ほ我地位を覆へすに足らざりけむを、日比伯林の留學生の中にて、或る勢力ある一群と余との間に、面白からぬ關係ありて、彼人々は余を猜疑し、又遂に余を讒誣するに至りぬ。されどこれとても其故なくてやは。

彼人々は余が倶に麥酒の杯をも擧げず、球突きの棒をも取らぬを、頑固なる心と慾を制する力とに歸して、且つは嘲り且つは嫉みたりけむ。されど是れ余を知らねばなり。嗚呼、この故よしは、我身だに知らざりしを、怎でか他人に知らるべき。我心はかの合歡といふ木の葉に似て、物觸れば縮みて避けむとす。我心は處女に似たり。余が幼き頃より長者の敎を守りて、學の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きたるにて、人のたどらせたる道を、唯だ一條にたどりしのみ。餘所に心の亂れざりしは、外物を棄てゝ顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、唯だ外物に恐れて自ら我手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有爲の人物なることを疑はず、又た我心の能く耐へむことをも深く信じたり。

嗚呼、彼も一時。舟の横濱を離るゝまでは、天晴豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしたるを我れ乍ら怪しと思ひしが、これぞなか〳〵に我本性なりける。此心は生れながらにやありけむ、又た早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけむ。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣を纏ひ、珈琲店に坐して客を延く女を見ては、往てこれに就かむ勇氣なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挾ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物いふ「レエベマン」を見ては、往てこれと遊ばむ勇氣なし。これらの勇氣なければ、彼活潑なる同鄕の人々と交らむやうもなし。この交際の疎きがために、彼人々は唯だ余を嘲り、余を嫉むのみならで、又た余を猜疑することゝなりぬ。これぞ余が寃罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し盡す媒なりける。

或る日の夕暮なりしが、余は獸苑を漫歩して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に歸らむと、クロステル巷の古寺の前に來ぬ。余は彼の燈火の海を渡り來て、この狹く薄暗き巷に入り、樓上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取入れぬ人家、頰髭長き猶太敎徒の翁が戶前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに樓に達し、他の梯は穴居の鍛冶が栖家に通じたる貸家などに向ひて、凹字の形に引籠みて立てる、此三百年前の遺跡を望む每に、心の恍惚となりて暫し佇みしことは幾度なるを知らず。

今この處を過ぎむとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、聲を呑みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを寫すべくもあらず。この靑く淸らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き歎きに遭ひて、前後を顧みる遑なく、こゝに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覺えず側に倚り、「何故に泣き玉ふか。ところに繫累なき外人は、却りて力を借し易きこともあらむ。」といひ掛けたるが、我ながらわが大膽なるに呆

れたり。
彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が眞率なる心や色に形はれたりけむ。「君は善き人なりと見ゆ。彼の如く酷くはあらじ。又た我母の如く。」暫し涸れたる涙の泉は又た溢れて愛らしき頬を流れ落つ。
「我を救ひ玉へ、君。わが恥なき人とならむを。母はわが彼の言葉に從はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは協はぬに、家に一錢の貯だになし。」
跡は欷歔の聲のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注ぎたり。
「君が家に送り行かむに、先づ心を鎭め玉へ。聲をな人に聞かせ玉ひそ。こゝは往來なるに。」彼は物語するうちに、覺えず我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、又始めてわれを見たるが如く、恥ぢて我側を飛びのきつ。
人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、缺け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潛るべき程の戸あり。少女は鏽びたる針金の先きを捩ぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中よりしはがれたる老媼の聲して、「誰ぞ」と問ふ。エリス歸りぬと答ふる間もなく、戸をあらゝかに引開けしは、半ば白みたる髮、惡しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老媼にて、古き獸綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。エリスの余に會釋して入るを、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇しくたて切りつ。
余は暫し茫然として立ちたりしが、ふと油燈の光に透して戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と註したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ爭ふごとき聲聞えしが、又た靜になりて戸は再び明きぬ。さきの老媼は慇懃におのが無禮の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は廚にて、右手の低き窓に、眞白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を掩ひし臥床あり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この處は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、厚紙にて張りたる下の、立たば頭の支ふべき處に臥床あり。中央なる机には美しき氈を掛けて、上には書物一二卷と寫眞帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似合はしからぬ價高き花束を生けたり。そが傍に少女は羞を帶びて立てり。
彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の纖く裊なるは、貧家の女に似ず。老媼の室を出でし跡にて、少女は少し訛りたる言葉にて云ふ。「許し玉へ。君をこゝまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシャウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさむ。彼は「ヰクトリヤ」座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早や二年なれば、事なく我等を助けむと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいひ掛けせむとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を析きて還し參らせむ。縱令我身は食はずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自らは知らぬにや。
我が隱しには二三マルクの銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急を凌ぎ玉へ。質屋の使のモンビシュウ街三番地にて太田と尋ね來む折には價を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辭別のために出したる手を脣にあてたるが、はら〱と落つる熱き涙を我手の背に濺ぎつ。

嗚呼、何等の惡因ぞ。この恩を謝せむとて、自ら我僑居に來し少女は、ショオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀坐する我讀書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。この時を始として、余と少女との交漸く繁くなりもて行きて、同鄕人にさへ知られければ、彼等は速了にも、余を以て色を舞姬の群に漁するものとしたり。われ等二人の間にはまだ痴騃なる歡樂のみ存したるを。

その名を斥さむは憚あれど、同鄕人の中に事を好む人ありて、余が屢〻芝居に出入して、女優と交るといふことを、官長の許に報じつ。さらぬだに余が頗る學問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、遂に旨を公使館に傳へて、我官を免じ、我職を解いたり。公使がこの命を傳ふる時余に謂ひしは、若し卽時に鄕に歸らば、路用を給すべけれど、若し猶こゝに在らむには、公の助をば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶豫を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我生涯にて尤も悲痛を覺えさせたる二通の書狀に接しぬ。この二通は殆ど同時に發したるものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をこゝに反覆するに堪へず、涙の迫り來て筆の運を妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時までは餘所目に見るより淸白なりき。彼は父の貧きがために、充分なる敎育を受けず、十五の時に舞の師のつのりに應じて、この恥づかしき業を敎へられ、「クルズス」果てゝ後、「ヰクトリヤ」座に出でゝ、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデルが當世の奴隷といひし如く、果なきは舞姬の身の上なり。薄き給金にて繫がれ、晝の溫習、夜の舞臺と緊しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をも纏へ、場外にてはひとり身の衣食も足らず勝ちなれば、親腹からを養ふものはその辛苦奈何ぞや。されば彼等の仲間にて、賤しき限りなる業に墮ちぬは稀なりとぞいふなる。エリスがこれを逭れしは、おとなしき性質と、剛氣ある父の守護とに依りてなり。彼は幼き時より物讀むことをば流石に好みしかど、手に入るは卑しきコルポルタアジユと唱ふる貸本屋の小說のみなりしを、余と相識る頃より、余が借したる書を讀みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ。かゝれば余等二人の間には先づ師弟の交りを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事に關りしを包み隱したれど、彼は余に向ひて母にはこれを祕め玉へと云ひぬ。こは母の余が學資を失ひしを知りて余を疎んぜむを恐れてなり。

嗚呼、委しく爰に寫し出さむも要なけれど、余が彼を愛づる心の俄に强くなりて、遂に離れ難き中となりしは此折なりけり。我一身の大事は前に橫りて、洵に危急存亡の秋なるに、この行ありしをあやしみ、又た誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬに、いま我數奇を憐み、又た別離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかゝりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる腦髓を射て、恍惚の間にこゝに及びしを奈何にせむ。

公使に約せし日も近づき、我命はせまりぬ。このまゝにて鄕にかへらば、學成らずして汚名を負ひたる身の浮ぶ瀨あらじ。さればとて留ま

らむには、學資を得べき手だてなし。
　此時余を助けしは今我同行の一人なる相澤謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編輯長に說きて、余を社の通信員となし、伯林に留まりて政治學藝の事などを報道せしむることゝなしつ。
　社の報酬はいふに足らぬほどなれど、棲家をもうつし、午餐に行く食店をもかへたらむには、微なる暮しは立つべし。兎角思案する程に、心の誠を顯はして、助の綱をわれに投げ掛けたるはエリスなりき。かれはいかに母を說き動かしけむ、余は彼等親子の家に寄寓することゝなり、エリスと余はいつの間にか、有るか無きかの財産を合せて、憂きがなかにも樂しき月日を送りぬ。
　朝の珈琲果つれば、彼は溫習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を讀み、鉛筆取り出でゝ彼此と材料を集む。この截り開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を偸みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷なる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て來る一盞の珈琲の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに插みしを、幾種となく掛け聯ねたるかたへの壁に、いく度となく往來する日本人を、知らぬ人は何とか見けむ。又一時近くなるほどに、溫習に往きたる日には返り路によぎりて、余と倶に店を立出づるこの常ならず輕き、掌上の舞をもなしえつべき少女を、怪み見送る人もありしなるべし。
　我學問は荒みぬ。屋根裏の一燈微に燃えて、エリスが劇場よりかへりて、椅に寄りて縫ものなどする側の机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔の法令條目の枯葉を紙上に搔寄せしとは殊にて、今は活潑々たる政界の運動、文學美術に係る新現象の批評など、彼此と結びあはせて、力の及ばむ限り、ビヨルネよりは寧ろハイネを學びて思を構へ、様々の文を作りし中にも、引續きて維廉一世と佛得力三世との崩殂ありて、新帝の即位、ビスマルク侯が進退如何などの事に就ては、故らに詳かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ藏書を繙き、舊業をたづぬることも難く、大學の籍はまだ刪られねど、謝金を收むることの難ければ、唯だ一つにしたる講筵だに往きて聽くことは稀なりき。
　我學問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、凡そ民間學の流布したることは、歐洲諸國の間にて獨逸に若くはなからむ。幾百種の新聞雜誌に散見する議論には、頗る高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、曾て大學に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、讀みては又讀み、寫しては又寫す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自ら綜括的になりて、同郷の留學生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間には獨逸新聞の社說をだに善くはえ讀まぬがあるに。
　明治廿一年の冬は來にけり。表街の人道にてこそ沙をも蒔け、鍤をも揮へ、クロステル街のあたりは凸凹坎坷の處は見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝に戶を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室を溫め、竈に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の綿を穿つ北歐羅巴の寒さは、なか〳〵に堪へがたかり。エリスは二三日前の夜、舞臺にて卒倒しきとて、人に扶けられて歸り來しが、それより心地あしとて休み、もの食ふごとに吐くを、惡阻と

いふものならむと始めて心づきしは母なりき。嗚呼、さらぬだに覺束なきは我身の行末なるに、若し眞なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は樂しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小さき鐵爐の畔に椅子さし寄せて言葉寡し。この時戸口に人の聲して、程なく庖廚にありしエリスが母は、郵便の書狀を持て來て余にわたしつ。見れば見覺えある相澤が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。訝りながら披きて讀めば、頓みの事にて豫め知らするに由なかりしが、昨夜こゝに着せられし天方大臣に附きてわれも來たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く來よ。汝が名譽を恢復するも此時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみいひ遣るとなり。讀み畢りて茫然たる面もちを見て、エリスは、「故鄕よりのふみなりや。惡しき便にてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に關する書狀と思ひしならむ。「否、心になな掛けそ。おん身も名を知る相澤が、大臣と倶にこゝに來てわれを呼ぶなり。急ぐといへば今よりこそ。」

かはゆき獨り子を出し遣る母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせむと思へばならむ、エリスは病をつとめて起ち、上襦袢も極めて白きを選び、丁寧にしまひ置きし「ゲエロック」といふ二列ぼたんの服を出して着せ、襟飾りさへ余が爲めに手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰れも得言はじ。我鏡に向きて見玉へ。何故にかく不興なる面もちを見せ玉ふか。われも諸共に行かまほしきを。」少し容をあらためて、「否、かく衣を更め玉ふを見れば、何となくわが豐太郎の君とは見えず。」又少し考へて、「縱令富貴になり玉ふ日はありとも、われをば見棄て玉はじ。我病は母の宣ふ如くならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑したり。「政治社會などに出でむの望みは絕ちしより幾年をか經ぬるを。大臣は見たくもなし。唯年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等「ドロシュケ」は、輪下にきしる雪道を窓の下まで來ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被ひて手をば通さず、帽を取りてエリスに接吻して樓を下りつ。彼は凍りし窓を明け、亂れし髮を朔風に吹かせて余が乘りし車を見送りぬ。

余が車を下りしは「カイゼルホオフ」の入口なり。門者に祕書官相澤が室の番號を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階を登り、中央の柱に「プリュッシュ」を被ひし「ゾファ」を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばこゝにて脫ぎ、廊をつたひて室の前まで往きしが、余は少し踟躕したり。同じく大學に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相澤が、けふは怎なる面もちして出迎ふらむ。室に入りて相對して見れば、形こそ舊に比ぶれば肥えて逞ましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するにも遑あらず、引かれて大臣に謁し、委託せられしは獨逸語にて記せる文書の急を要するを飜譯せよとの事なり。余が文書を受領して大臣の室を出でし時、相澤は跡より來て余と午餐を共にせむといひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路は概ね平滑なりしに、轗軻數奇なるは我身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歷を聞きて、かれは屢々驚きしが、なか／＼に余を譴めむとはせず、却りて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の畢りしとき、彼は色を正して諫むるやう、この一段の事は素と生れながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はむも

甲斐なし。とはいへ、學識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯も唯だ獨逸語を利用せむの心のみなり。おのれも亦伯が當時の免官の理由を知れるが故に、強て其成心を動かさむとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなんど思はれむは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦むるは先づ其能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。又彼少女との關係は、縱令彼に誠ありとも、縱令情交は深くなりきとて、人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり。意を決して斷てと。是れその言のあらましなりき。

大洋に舵を失ひしふな人が、遙なる山を望む如きは、相澤が余に示したる前途の方鍼なり。されどこの山は猶ほ重霧の間に在りて、いつ往きつかむも、否、果して往きつけばとて、我中心に滿足を與へむも定かならず。貧きが中にも樂しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛。わが弱き心には思ひ定めむよしなかりしが、姑く友の言に從ひて、この情緣を斷たむと約しき。余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に對して否とはえ對へぬが常なり。

別れて出づれば風は面を撲てり。二重のがらす窓を緊しく鎖して、大いなる陶爐に火を焚きたる「ホテル」の食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、膚粟立つと共に、余は心中に一種の寒さを覺えき。

飜譯は一夜になし果てつ。「カイゼルホオフ」へ通ふことはこれより漸く繁くなりもて行く程に、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近比故郷にてありしことなどを擧げて余が意見を問ひ、折に觸れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げて打笑ひ玉ひき。

一月ばかり過ぎて、或る日伯は突然われに向ひて、「余は明旦、魯西亞に向ひて出發すべし。隨ひて來べきか、」と問ふ。余は數日間、かの公務に遑なき相澤を見ざりしかば、此問は不意に余を驚かしつ。「いかで命に從はざらむ。」余は我恥を表はさむ。この答はいち早く決斷して言ひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範圍を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難きに心づきても、強て當時の心虛なりしを掩ひ隱し、耐忍してこれを實行すること屢々なり。

此日は飜譯の代に、旅費さへ添へて賜はりしを持て歸りて、飜譯の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亞より歸り來むまでの費をば支へつべし。彼は醫者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性なりしゆゑ、幾月か心づかでありけむ。座頭よりは休むことのあまりに久しければ籍を除いたりと言ひおこせつ。まだ一月ばかりなるに、かく嚴しきは故あればなるべし。旅立の事にはいたく心を惱ますとも見えず。僞りなき我心を厚く信じたれば。

鐵路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身にあはせて借りし黑き禮服、新に買ひ求めしゴタ板の魯廷の貴族譜、二三種の辭書などを、小「カバン」に入れしのみ。流石に心細きことのみ多き此頃なれば、出で行く跡に殘らむも物憂かるべく、又た停車場にて涙こぼしなどしたらむには影護かるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出しやりつ。余は旅裝整へて戸を鎖し、鍵をば入口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯國行につきては、何事をか叙すべき。わが舌人たる務めは忽地に余を載せ去りて、青雲の

上に堕したり。余が大臣の一行に隨ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を圍繞せしは、巴里絶頂の驕奢を、氷雪の裡に移したる王城の粧飾、故らに黄蠟の燭を幾つともなく點したるに、幾星の勳章、幾枝の「エポレット」が映射する光、彫鏤の工を盡したる「カミン」の火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇の閃きなどにて、この間佛蘭西語を最も圓滑に使ふものはわれなるがゆゑに、賓主の間に周旋して事を辨ずるものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく獨りにて燈火に向はむことの物憂さに、知る人の許にて夜に入るまでもの語りし、疲るゝを待ちて家に還り、直ちに寢ねつ。次の朝目醒めし時は、猶獨り跡に殘りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かゝる思ひをば、生計に苦みて、けふの日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書の略なり。

また程經てのふみは頗る思ひせまりて書きし如くなりき。文をば否といふ字にて起したり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。君は故里に頼もしき族なしとのたまへば、此地に善き世渡のたつきあらば、留り玉はぬことやはある。又我愛にて繋ぎ留めでは止まじ。それも協はで東に還り玉はむとならば、親と共に往かむは易けれど、か程に多き路用を何處よりか得む。怎なる業をしても此地に留りて、君が世に出で玉はむ日をこそ待ためと常には思ひしが、暫しの旅とて立出で玉ひしより此二十日ばかり、別離の思は日にけに茂りゆくのみ。袂を分つはたゞ一瞬の苦艱なりと思ひしは迷なりけり。我身の常ならぬが漸くにしるくなりし、それさへあるに、縱令如何なることありとも、我をば努な棄て玉ひそ。母とはいたく爭ひぬ。されど我身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。わが東に往かむ日には、ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せむとぞいふなる。書きおくり玉ひし如く、大臣の君に重く用ゐられ玉はゞ、我路用の金は兎も角もなりなむ。今は只管君がベルリンに還り玉はむ日を待つのみ。

嗚呼、余は此書を見て始めて我地位を明視し得たり。恥かしきはわが鈍き心なり。余は我身一つの進退につきても、又我身に係らぬ他人の事につきても、果斷ありと自ら心に誇りしが、此果斷は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との關係を照さむとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されどわが近眼は唯だおのれが盡したる職分をのみ見き。余はこれに未來の望を繋ぐことには、神も知るらむ、絶えて想到らざりき。されど今こゝに心づきて、我心は猶ほ冷然たりし歟。先に友の勸めしときは、大臣の信用は屋上の禽の如くなりしが、今は稍〻これを得たるかと思はるゝに、相澤がこの頃の言葉の端に、本國に歸りて後も倶にかくてあらば云々といひしは、大臣のかく宣ひしを、友ながらも公事なれば明には告げざりし歟。今更おもへば、余が輕卒にも彼に向ひてエリスとの關係を絶たむといひしを、早く大臣に告げやしけむ。

嗚呼、獨逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の絲は解くに由なし。曩にこれを繰つりしは、我某省の官長にて、今はこの絲、あなあはれ、天方伯の手中に在り。

余が大臣の一行と倶にベルリンに歸りしは、恰も是れ新年の旦なりき。停車場に別を告げ

て、我家をさして車を驅りつ。こゝにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習なれば、萬戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きら〳〵と輝けり。車はクロステル街に曲りて、家の入口に駐まりぬ。この時窓を開く音せしが、車よりは見えず。馭丁に、カバン持たせて梯を登らむとする程に、エリスの梯を駈け下るに逢ひぬ。彼が一聲叫びて我頸を抱きしを見て馭丁は呆れたる面もちにて、何やらむ髭の内にて云ひしが聞えず。

「善くぞ歸り來玉ひし。歸り來玉はずば我命は絶えなむを。」

我心はこの時までも定まらず、故郷を憶ふ念と榮達を求むる心とは、時として愛情を壓せむとせしが、唯だ此一刹那、低徊踟蹰の思は去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我肩に倚りて、彼が喜びの涙ははら〳〵と肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼の如く叫びし馭丁は、いち早く登りて梯の上に立てり。

戸の外に出迎へしエリスが母に、馭丁を勞ひ玉へと銀貨をわたして、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きたり、机の上には白き木綿、白き「レエス」などを堆く積み上げたりければ。

エリスは打笑みつゝこれを指して、「何とか見玉ふ、この心がまへを。」といひつゝ一つの木綿ぎれを取上げしを見れば襁褓なりき。「わが心の樂しさを思ひ玉へ。産まれむ子は君に似て黒き瞳子をや持ちたらむ。この瞳子。嗚呼、夢にのみ見しは君が黒き瞳子なり。産れたらむ日には君が正しき心にて、よもあだし名をばなのらせ玉はじ。」彼は頭を垂れたり。「穉しと笑ひ玉はむが、寺に入らむ日はいかに嬉しからまし。」見上げたる目には涙滿ちたり。

二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさむとて敢て訪らはず、家にのみ籠り居りしが、或る日の夕暮使して招かれぬ。往きて見れば待遇殊にめでたく、魯西亞行の勞を問ひ慰めて後、われと共に東に歸へる心はなきか、君が學問こそわが測り知る所ならね、語學のみにて世の用をばなすべし、滯留の餘りに久しければ、樣樣の係累もあらむと、相澤に問ひしに、さることなしと聞きて落居たりと宣ふ。その氣色辭むべくもあらず。あなやと思ひしが、流石に相澤の言を僞なりともいひ難きに、若しこの手にしも縋らずば、本國をも失ひ、名譽を挽きかへさむ道をも絶ち、身はこの廣漠たる歐洲大都の人の海に葬られむかと思ふ念、心頭を衝いて起れり。嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承はり侍り」と應へたるは。

黒がねの額はありとも、歸りてエリスに何とかいはむ。「ホテル」を出でしときの我心の錯亂は、譬へむに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思に沈みて行く程に、往きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。暫くして不圖あたりを見れば、獸苑の傍に出でたり。倒るゝ如くに路の邊の榻に倚りて、灼くが如く熱く、椎にて打たるゝ如く響く頭を榻の背に持たせ、死したる如きさまにて幾時をか過しけむ。劇しき寒さ骨に徹すと覺えて醒めし時は、夜に入りて雪は繁く降り、帽の庇、外套の肩には一寸許も積りたり。

最早十一時をや過ぎけむ、モハビット、カルル街通ひの鐵道馬車の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルヒ門の畔の瓦斯燈は淋しき光を放ちたり。立ち上がらむとするに足の凍えたれば、兩手にて擦りて、漸やく歩みうる程にはなりぬ。

足の運びの捗らねば、クロステル街まで來しときは、夜半をや過ぎたりけむ。こゝ迄來し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル、デン、リンデンの酒家、茶店は

猶ほ人の出入盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覺えず。我腦中には唯だ我は免すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ滿ち〳〵たりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寢ねずと覺ぼしく、烱然たる一星の光、暗き空にすかして明かに見ゆるが、降りしきる鷺の如き雪片に、乍ち掩はれ、乍ち又顯れて、風に弄ばるゝに似たり。戸口に入りしより疲を覺えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふ如くに梯を登りつ。庖廚を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に倚りて襁褓縫ひたりしエリスは振り返りて、「あつ」と叫びぬ。「いかにかし玉ひし。おん身の姿は。」

驚きしも宜なりけり。蒼然として死人に等しき我面色、帽をばいつの間にか失ひ、髮は蓬ろに亂れて、幾度か道にて跌き倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、處々は裂けたれば。

余は答へむとすれど聲出でず、膝の頻りに戰かれて立つに堪へねば、椅子を握まむとせしまでは覺えしが、その儘に地に倒れぬ。

人事を知る程になりしは數週の後なりき。熱劇しく譫語のみ言ひしを、エリスが慇にみとる程に、或日相澤は尋ね來て、余がかれに隱したる顚末を審らに知りて、大臣には病の事のみ告け、よきやうに繕ひ置きしなり。余は始めて病牀に侍するエリスを見て、その變りたる姿に驚きぬ。彼はこの數週の内にいたく痩せて、血走りし目は窪み、灰色の頬は落ちたり。相澤の助にて日々の生計には窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に殺したり。

後に聞けば彼は相澤に逢ひしとき、余が相澤に與へし約束を聞き、又かの夕べ大臣に聞え上げし一諾を知り、俄に座より躍り上がり、面色さながら土の如く、「我豐太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫び、その場に倒れぬ。相澤は母を呼びて共に扶けて床に臥させしに、暫くして醒めしときは、目は直視したるまゝにて傍の人をも見知らず、我名を呼びていたく罵り、髮をむしり、蒲團を噛みなどし、又遽に心づきたる樣にて物を探り討めたり。母の取りて與ふるものをば悉く抛ちしが、机の上なりし襁褓を與へたるとき、探りみて顏に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騷ぐことはなけれど、精神の作用は殆ど全く廢して、その癡なること赤兒の如くなり。醫に見せしに、過劇なる心勞にて急に起りし「パラノイア」といふ病なれば、治癒の見込なしといふ。ダルドルフの癲狂院に入れむとせしに、泣き叫びて聽かず、後にはかの襁褓一つを身につけて、幾度か出しては見、見ては歔欷す。余が病牀をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。たゞをり〳〵思ひ出したるやうに「藥を、藥を」といふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を濺ぎしは幾度ぞ。大臣に隨ひて歸東の途に上ぼりしときは、相澤と議りてエリスが母に微なる生計を營むに足るほどの資本を與へ、あはれなる狂女の胎内に遺しゝ子の生れむをりの事をも頼みおきぬ。

嗚呼、相澤謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我腦裡に一點の彼を憎むこゝろは今日までも殘れりけり。

わかれかね

わかれかね心はうちにのこるともしらでや
ひとの戸をばさすらむ

（水沫集の「於母影」より）

文づかひ

それがしの宮の催し玉ひし星が岡茶寮の獨逸會に、洋行がへりの將校次を逐うて身の上ばなしせし時のことなりしが、こよひはおん身が物語聞くべき筈なり、殿下も待かねておはすれば、と促されて、まだ大尉になりて程もあらじと見ゆる小林といふ少年士官、口に銜へし卷烟草取りて火鉢の中へ灰振り落し、徐に語り出でぬ。

わがザックセン軍團につけられて、秋の演習にゆきしをり、ラアゲキッツ村の邊にて、對抗は既に果てゝ、假設敵を攻むべき日とはなりぬ。小高き丘の上に、まばらに兵を排りて、敵と定めおき、地形の波面、木立、田舍家などを巧に楯に取りて、四方より攻寄するさま、めづらしき壯觀なりければ、近郷の民こゝにかしこに群をなし、中に雜りたる少女等が黑天鵝絨の胴當晴れがましう、小皿伏せたるやうなる縁狹き笠に岬花插したるもをかしと、携へし目がね忙はしくかなたこなたを見廻らす程に、向ひの岡なる一群きは立ちてゆかしう覺えぬ。

九月はじめの秋の空は、けふしもこゝに稀なるある色になりて、空氣透徹りたれば、殘る隈なくあざやかに見ゆるこの群の眞中に、馬車一輛停めさせて、年若き貴婦人いくたりか乘りたれば、さま〲の衣の色相映じて、花一叢、にしき一團、目もあやに、立ちたる人の腰帶、坐りたる人の帽の紐などを、風ひら〲と吹靡かしたり。その傍に馬立てたる白髮の翁は角扣紐どめにせし緑の獵人服に、うすき褐いろの帽を戴けるのみなれど、何となく由ありげに見ゆ。すこし引下がりて白き駒控へたる少女、わが目がねはしばしこれに留まりぬ。鋼鐵いろの馬のり衣裾長に着て、白き薄ぎぬ卷きたる黑帽子を被りし身の構けだかく、今かなたの森蔭より、むら〲と打出でたる獵兵のいさましさ見むとて、人々騒げどかへりみぬさま心憎し。「殊なるかたに心留めたまふものかな。」といひて輕く吾肩を拍ちし長き八字髭の明色なる少年士官は、おなじ大隊の本部につけられたる中尉にて、男爵フォン、メエルハイムといふ人なり。「かしこなるは我が識れるデウベンの城のぬしビュロウ伯が一族なり。本部のこよひの宿はかの城と定まりたれば、君も人々に交りたまふたつきあらむ。」と言畢る時獵兵やう〲わが左翼に迫るを見て、メエルハイムは馳去りぬ。この人と我が交りそめしは、まだ久しからぬ程なれど、善き性とおもはれぬ。

寄手丘の下まで進みて、けふの演習をはり、例の審判も果つるほどに、われはメエルハイムと倶に大隊長の後につきて、こよひの宿へいそぎゆくに、中高に造りし「ショッセエ」道美しく切株殘れる麥畑の間をうねりて、をり〲水音の耳に入るは、木立のあなたを流るゝムルデ河に近づきしなるべし。大隊長は四十の上を三つ四つも踰えたらむとおもはるゝ人にて、髮はまだふかき褐いろを失はねど、その赤き面を見れば、はや額の波いちじるし。質朴なれば言葉すくなきに、二言三言めには「われ一個人にとりては」とことわる癖あり。遽にメエルハイムのかたへ向きて、「君がいひなづけの妻の待ちてやあるらむ。」といひぬ。「許し玉へ、少佐の君。われにはまだ結髮の妻といふものなし。」「さなりや。我言をあしう思ひとり玉ふな。イヽダの君

を、われ一個人にとりては斯くおもひぬ。」かくて二人の物語する間に、道はデウベン城の前にいでぬ。園をかこめる低き鐵柵をみぎひだりに結ひし眞砂路一線に長く、その果つるところに舊りたる石門あり。入りて見れば、しろ木槿の花咲きみだれたる奥に、白堊塗りたる瓦葺の高どのあり。その南のかたに高き石の塔あるは埃及の尖塔にならひて造れりと覺ゆ。けふの泊のことを知りて出迎へしリフレエ着たる下部に引かれて、白石の階のぼりゆくとき、園の木立を漏るゆふ日朱の如く赤く、階の兩側に蹲りたる人首獅身の「スフィンクス」を照したり。わがはじめて入る獨逸貴族の城のさまいかならむ。さきに遠く望みし馬上の美人はいかなる人にか。これらも皆解きあへぬ謎なるべし。

四方の壁と穹窿とには、鬼神龍蛇さまざまの形を畫き、「トルウヘ」といふ長櫃めきたるものをところどころに据ゑ、柱には刻みたる獸の首、古代の楯、打物などを懸けつらねたる間、いくつか過ぎて、樓上に引かれぬ。

ビュロウ伯は常の服とおぼしき黒の上衣のいと寛きに着更へて、伯爵夫人とゝもにこゝに居り。かねて相識れる中なれば、大隊長と心よげに握手し、われをも引合はさせて、胸の底より出づるやうなる聲にてみづから名乘り、メエルハイムには「よくぞ來玉ひし、」と輕く會釋しぬ。夫人は伯よりおいたりと見ゆるほどに起居重けれど、こゝろの優しさ目の色に出でたり。メエルハイムを傍へ呼びて、何やらむしばしさゝやくほどに、伯、「けふの疲さぞあらむ。まかりて憩ひ玉へ。」と人して一部屋へ誘はせぬ。

われとメエルハイムとは一つ部屋にて東向なり。ムルデの河波は窓の直下のいしずゑを洗ひて、むかひの岸の草むらは緑まだあせず。そのうしろなる柏の林にゆふ靄かゝれり。流めての方にて折れ、こなたの陸際かしらの如く出でたるところに田舍家二三軒ありて、眞黒なる粉ひき車の輪中空に聳え、ゆん手には水に枕みてつき出したる高殿の一間あり。この「バルコン」めきたるところの窓、打見るほどに開きて、少女のかしら三つ四つ、をり重なりてこなたを覗きしが、白き馬に騎りたりし人はあらざりき。軍服ぬぎて盥卓の傍へ倚らむとせしメエルハイムは、「かしこには若き婦人がたの居間なり、無禮なれどその窓の戸疾くさしてよ、」とわれに請ひぬ。

日暮れて食堂に招かれ、メエルハイムと倶にゆくをり、「この家に若き婦達の多きことよ、」と問ひけるに、「もと六人ありしが、一人は吾友なるファブリイス伯に嫁ぎて、のこれるは五人なり」。「ファブリイスとは國務大臣の家ならずや」。「さなり、大臣の夫人はこゝのあるじの姉にて、吾友といふは大臣のよつぎの子なり。」

食卓に就きてみれば、五人の姫達みなおもひおもひの粧したる、その美しさいづれはあらぬに、上の一人の上衣も裳も黒きを着たるさま、めづらしと見れば、これなむさきに白き馬に騎りたりし人なりける。外の姫たちは日本人めづらしく、伯爵夫人のわが軍服をほめたまふ言葉の尾につきて、「黒き地に黒き紐つけたれば、ブラウンシュワイヒの士官に似たり、」と一人いへば、桃色の顔したる末の姫、「さにてもなし、」とまだいわけなくもいやしむ色え包までいふに、皆をかしさに堪へねば、あかめし顔を汁盛りし皿の上に低れたれど、黒き衣の姫は睫だに動さざりき。暫しありて若き姫、さきの罪贖はむとやおもひけむ、「されどかの君の軍服は上も下も黒ければ、イ、ダや好みたまはむ、」といふを聞きて、黒き衣の姫振向きて睨みぬ。この目は常にをち方にのみ迷ふやうなれど、一たび人の面に向ひては、言葉にも増して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑を帶びて叱りきと覺ゆ。われ

はこの末の姫の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメエルハイムのいひなづけの妻ならむといひしイヽダの君とは、この人のことなるを。かく心づきてみれば、メエルハイムが言葉も振舞も、この君をうやまひ愛づと見えぬはなし。さては此中はビュロウ伯夫婦もこゝろに許したまふなるべし。イヽダといふ姫は丈高く瘦肉にて、五人の若き貴婦人のうち、此君のみ髮黑し。かの善くものいふ目を餘所にしては、ほかの姫たちに立ちこえて美しとおもふところもなく、眉の間にはいつも皺少しあり。面のいろの蒼う見ゆるは、黑き衣のためにや。

食終りてつぎの間にいづれば、こゝはちひさき座敷めきたるところにて、軟き椅子、「ソファ」などの脚きはめて短きをおほく据ゑたり。こゝにて珈琲の饗應あり。給仕のをとこ小さき盃に燒酎のたぐひいくつか注いだるを持てく。あるじの外には誰も取らず、たゞ大隊長のみは、「われ一個人にとりてはシャルトリヨオズをこそ、」とて一息に飲みぬ。此時わが立ちし背のかたにて「一個人、一個人」とあやしき聲して呼ぶものあるに、おどろきて顧みれば、この間の隅にはおほいなる鐵がねの籠ありて、そが中なる鸚鵡が、かねて聞きしことある大隊長のこと葉をまねびしなりけり。姫達「あな生憎の鳥や」とつぶやけば、大隊長もみづからこわ高に笑ひぬ。

主人は大隊長と卷煙草喫みて、銃獵の話せばやと、小部屋のかたへゆく程に、われはさきよりこなたを打守りて、めづらしき日本人にものいひたげなる末の姫に向ひて「このさかしき鳥はおん身のにや、」とゑみつゝ問へば、「否、誰のとも定られねど、われも愛でたきものにこそ思ひ侍れ。さいつ頃までは、鳩あまた飼ひしが、あまりに馴れて身に纏はるものをば、イヽダいたく嫌へば、皆人に取らせつ。この鸚鵡のみは、いかにしてかあの姉君を憎めるがこぼれ幸にて、いまも飼はれ侍り。さならずや。」と鸚鵡のかたへ首さしいだしていふに、姉君憎むてふ鳥は、まがりたる嘴をひらきて、「さならずや、さならずや、」と繰返しぬ。

この隙にメエルハイムはイヽダひめの傍に居寄りて、なに事かこひ求むれど、澁りてうけひかざりしに、伯爵夫人も言葉を添へたまふと見しが、姫つと立ちて「ピアノ」にむかひぬ。下部いそがはしく燭をみぎひだりに立つれば、メエルハイムは「いづれの譜をかまゐらすべき、」と樂器のかたはらなる小卓にあゆみ寄らむとせしに、イヽダ姫「譜なくとも」と辭ひて、おもむろに下す指尖木端に觸れて起すや金石の響。しらべ繁くなりまさるにつれて、あさ霞の如き色、姫が臉際に顯れ來つ。ゆるらかに幾尺の水晶の念珠を繰るときは、ムルデの河もしばし流をとゞむべく、忽ち迫りて刀槍斉く鳴るときは、むかし行旅を脅しゝこの城の遠祖も百年の夢を破られやせむ。あはれ、この少女のこゝろは常に狹き胸の内に閉ぢられて、こと葉となりてあらはるゝ便なければ、その纎々たる指頭よりほとばしり出づるにやあらむ。唯覺ゆ、絲聲の波はこのデウベン城をたゞよはせて、人もわれも浮きつ沈みつ流れゆくを。曲正に闌になりて、この樂器のうちに潜みしさま〴〵の絃の鬼、ひとり〳〵に窮なき怨を訴へをはりて、いまや諸聲たてゝ泣響むやうなるとき、訝かしや、城外に笛の音起りて、たど〳〵しうも姫が、ピアノ」にあはせむとす。

彈じほれたるイヽダ姫は、暫く心附かでありしが、かの笛の音ふと耳に入りぬと覺しく、遽にしらべを亂りて、樂器の筐も碎くるやうなる音をせさせ、座を起ちたるおもては、常より蒼かりき。姫たち顔見合せて、「また例のをこなる業しけるよ、」とさゝやくほどに、外なる笛の

音絶えぬ。

主人の伯は小部屋より出でゝ、「物くるほしきイヽダが當座の曲は、いつものことにて珍らしからねど、君はさこそ驚きたまひけめ、」とわれに會釋しぬ。

絶えしものゝ音わが耳にはなほ聞えて、うつつごゝろならず部屋へ還りしが、こよひ見聞しことに心奪はれていもねられず。床をならべしメエルハイムを見れば、これもまだ醒めたり。問はまほしきことはさはなれど、流石に憚るところなきにあらねば、「さきの怪しき笛の音は誰が出しゝか知りてやおはする、」と僅にいふに、男爵こなたに向きて、「それにつきては一條のもの語あり、われもこよひは何ゆゑか寐られねば、起きてかたり聞かせむ、」と諾ひぬ。

我等はまだ煖まらぬ臥床を降りて、まどの下なる小机にゐむかひ、烟草燻らすほどに、さきの笛の音、また窓の外におこりて、乍ち斷えたちまち續き、ひな鶯のこゝろみに鳴く如し。メエルハイムは謦咳して語りいでぬ。

「十年ばかり前のことなるべし、こゝより遠からぬブリョオゼンといふ村にあはれなる孤ありけり。六つ七つのとき流行の時疫にふた親みななくなりしに、缺唇にていと醜かりければ、かへりみるものなくほと〳〵饑に迫りしが、ある日麪包の乾きしやあると、この城へもとめに來ぬ。その頃イヽダの君はとをばかりなりしが、あはれがりて物とらせつ。玩の笛ありしを與へて、『これ吹いて見よ、』といへど、缺唇なればえ啣まず。イヽダの君『あの見ぐるしき口なほして得させよ、』とむつかりて止まず。母なる夫人聞きて、幼きものゝ心やさしうかくいふなればとて、醫師して縫はせ玉ひぬ。」

「その時よりかの童は城にとゞまりて、羊飼となりしが、賜はりしもてあそびの笛を離さず、後にはみづから木を削りて笛を作り、ひたすら吹きならふほどに、たれ教ふるものなけれど、自然にかゝる音色を出すやうになりぬ。」

「一昨年の夏わが休暇たまはりてこゝに來たりし頃、城の一族とほ乗せむとて出でしが、イヽダの君が白き駒すぐれて疾く、われのみ續きゆくをり、狹き道のまがり角にて、かれ草うづ高く積みし荷車に逢ひぬ。馬はおびえて一躍し、姫は辛うじて鞍にこらへたり。わがすくひにゆかむとするを待たで、傍なる高草の裡にあと叫ぶ聲すと聞く間に、羊飼の童、飛ぶごとくに馳せ寄り、姫が馬の轡をば緊と握りておし鎮めぬ。この童が牧場のいとまだにあれば、見えがくれにわが跡慕ふを、姫これより知りて、人してものかづけなどはし玉ひしが、いかなる故にか、目通を許されず。童も姫がたま〳〵逢ひても、言葉かけたまはぬにて、おのれを嫌ひ玉ふと知り、はてはみづから避くるやうになりしが、いまも遠きわたりより守ることを忘れず、好みて姫が住める部屋の窓の下に小舟繋ぎて、夜も枯草の裡に眠れり。」

聞畢りて眠に就くころは、ひがし窓の硝子はやほの暗うなりて、笛の音も斷えたりしが、この夜イヽダ姫おも影に見えぬ。その騎りたる馬のみる〳〵黒くなるを、怪しとおもひて善く視れば、人の面にて缺唇なり。されど夢ごゝろには、姫がこれに騎りたるを、よのつねの事のやうに覺えて、しばしまた眺めたるに、姫とおもひしは「スフィンクス」の首にて、瞳なき目なかば開きたり。馬と見しは前足おとなしく並べたる獅子なり。さてこの「スフィンクス」の頭の上には、鸚鵡止まりて、わが面を見て笑ふさまいと憎し。

つとめて起き、窓おしあくれば、朝日の光對岸の林を染め、微風はムルデの河づらに細紋をゑがき、水に近き草原には、ひと群の羊あり。萌黄色の「キッテル」といふ衣短く、黒き臑を

あらはしたる童、身の丈きはめて低きが、おどろなす赤き髪ふり亂して、手に持ちし鞭面白げに鳴らしぬ。

この日は朝の珈琲を部屋にて飲み、午頃大隊長と倶にグリンマといふところの銃獵仲間の會堂にゆきて演習みに來たまひたる國王の宴にあづかるべき筈なれば、正服着て待つほどに、あるじの伯は馬車を借して階の上まで見送りぬ。われは外國士官といふをもて、將官、佐官をのみつどふるけふの會に招かれしが、メエルハイムは城に殘りき。田舍なれど會堂おもひの外に美しく、食卓の器は王宮よりはこび來ぬとて、純銀の皿、マイセン燒の陶ものなどあり。この國のやき物は東洋のを粉本にせしといへど、染いだしたる草花などの色は、我邦などのものに似もやらず。されどドレスデンの宮には、陶ものゝ間といふありて、支那日本の花甕の類おほかた備れりとぞいふなる。國王陛下にはいま始めて謁見す。すがた貌やさしき白髮の翁にて、ダンテの神曲譯したまひきといふヨハン王のおん裔なればにや、應接いと巧にて、「わがザックセンに日本の公使置かれむをりは、いまの好にて、おん身の來るを待たむ」など懇に聞えさせ玉ふ。わが邦にては舊きよしみある人をとて、御使選ばるゝやうなる例なく、かゝる任に當るには、別に履歴なうては協はぬことを、知ろしめさぬなるべし。こゝにつどひし將校百三十餘人の中にて、騎兵の服着たる老將官の貌きはめて魁偉なるは、國務大臣ファブリイス伯なりき。

夕暮に城にかへれば、少女等の笑ひさゞめく聲、石門の外まで聞ゆ。馬車停むるところへ、はや馴染みし末の姬走りきて、「姉君たち「クロケット」の遊したまへば、おん身も夥になりたまはずや」とわれに勸めぬ。大隊長、「姬君の棧敷損じたまふな。われ一個人にとりては、衣脫ぎかへて憩ふべし。」といふをあとに聞きなして隨ひ行くに、尖塔の下の園にて姬たちいま遊の最中なり。芝生のところどころに黑がねの弓伏せて植ゑおき、靴の尖もて押へし五色の球を、小槌揮ひて横ざまに打ち、かの弓の下をくゞらするに、巧なるは百に一つをも失はねど、拙きはあやまちて足杯撃ちぬとてあわてふためく。われも正服解いてこれに雜り、打てども打てども、球あらぬ方へのみ飛ぶぞ本意なき。姬たち聲を倂せて笑ふところへ、イヽダ姬メエルハイムが肘に指尖掛けてかへりしが、うち解けたりとおもふさまも見えず。

メエルハイムはわれに向ひて、「いかに、けふの宴おもしろかりしや」と問ひかけて答を待たず、「われをも組に入れたまへ」と群のかたへ步みよりぬ。姬達は顏見あはせて打笑ひ、「あそびには早倦みたり、姉ぎみと共にいづくへか往きたまひし」と問へば、「見晴らしよき岩角わたり迄ゆきしが、この尖塔には若かず、小林ぬしは明日わが隊とゝもにムッチェンのかたへ立ちたまふべければ、君たちの中にて一人塔の巓へ案內し、粉ひき車のあなたに、汽車の烟見ゆるところをも見せ玉はずや」といひぬ。

口疾きすゑの姬もまだ何とも答へぬ間に、「われこそ」といひしは、おもひも掛けぬイヽダ姬なり。物おほくいはぬ人の習とて、遽に出しゝこと葉と共に、顏さと赤めしが、はや先に立ちて誘ふに、われは訝りながら隨ひゆきぬ。あとにては姬達メエルハイムが周圍に集まりて、「夕餉までにおもしろき話一つ聞かせ玉へ」と迫りたりき。

この塔は園に向きたるかたに、窪みたる階をつくりてその巓を平にしたれば、階段をのぼりおりする人も、巓に立ちたる人も下より明に見ゆべければ、イヽダ姬が事もなくみづから案內せむといひしも、深く怪むに足らず。

姫はほと〳〵走るやうに塔の上口にゆきて、こなたを顧みたれば、われも急ぎて追付き、段の石をば先に立ちて踏みはじめぬ。ひと足遅れてのぼり來る姫の息促りて苦しげなれば、あまたたび休みて、漸う上にいたりて見るに、こゝはおもひの外に廣く、めぐりに低き鐵欄干をつくり、中央に大なる切石一つ据ゑたり。

今やわれ下界を離れたるこの塔の巓にて、きのふラアゲキッツの丘の上より遙に初對面せしときより、怪しくもこゝろを引かれて、いやしき物好にもあらず、いろなる心にもあらねど、夢に見、現におもふ少女と差向ひになりぬ。ここより望むべきザックセン平野のけしきはいかに美しくとも、茂れる林もあるべく、深き淵もあるべしとおもはるゝこの少女が心には、いかでか若かむ。

險しく高き石級をのぼり來て、臉にさしたる紅の色まだ褪めぬに、まばゆきほどなるゆふ日の光に照されて、苦しき胸を鎭めむためにや、この巓の眞中なる切石に腰うち掛け、かの物いふ瞳をきとわが面に注ぎしときは、常は見ばえせざりし姫なれど、さきに珍らしき空想の曲かなでし時にもまして美しきに、いかなればか、某の刻みし墓上の石像に似たりともおもはれぬ。

姫はこと葉忙しく、「われ君が心を知りての願あり。かくいはゞきのふはじめて相見て、こと葉もまだかはさぬにいかでと怪み玉はむ。されどわれはたやすく惑ふものにあらず。君演習濟みてドレスデンにゆき玉はゞ、王宮にも招かれ國務大臣の館にも迎へられ玉ふべし。」といひかけ、衣の間より封じたる文を取出でゝわれに渡し「これを人知れず大臣の夫人に屆け玉へ、人知れず。」と頼みぬ。大臣の夫人はこの君の伯母御にあたりて、姉君さへかの家にゆきておはすといふに、始て逢ひしこと國人の助を借らでものことなるべく、またこの城の人に知らせじとならば、ひそかに郵便に附しても善からむに、かく氣をかねて希有なる振舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやとおもはれぬ。されどこはたゞしばしの事なりき。

姫の目は能くものいふのみにあらず、人のいはぬことをも能く聞きたりけむ、分疏の樣に語を繼ぎて、「ファブリイス伯爵夫人のわが伯母なることは、聞きてやおはさむ。わが姉もかしこにあれど、それにも知られぬを願ひて、君が御助を借らむとこそおもひ侍れ。こゝの人への心づかひのみならば、郵便もあれど、それすら獨出づること稀なる身には、協ひがたきをおもひやり玉へ。」といふに、げに故あることならむとおもひて諾ひぬ。

入日は城門近き木立より虹の如く洩れたるに、河霧たち添ひて、おぼろけになる頃塔を下れば、姫たちメエルハイムが話きゝはてゝわれ等を待受け、うち連れて新にともし火をかゞやかしたる食堂に入りぬ。こよひはイヽダ姫きのふに變りて、樂しげにもてなせば、メエルハイムが面にも喜のいろ見えにき。

あくる朝ムッチェンのかたをこゝろざしてここを立ちぬ。

秋の演習はこれより五日ばかりにて終り、わが隊はドレスデンにかへりしかば、われはゼエ、ストラアセなる館をたづねて、さきにフォン、ビュロウ伯が娘イヽダ姫に誓ひしことを果さむとせしが、固よりところの習にては、冬になりて交際の時節來ぬ内、かゝる貴人に逢はむことたやすからず、隊附の士官などの常の訪問といふは、玄關の側なる一間に延かれて、名簿に筆染むることなればおもふのみにて止みぬ。

その年も隊務いそがはしき中に暮れて、エルべがは上流の雪消にはちす葉の如き氷塊、み

どりの波にたゞよふとき、王宮の新年はな〴〵しく、足元あやふき蠟磨きの寄木を踏み、國王のおん前近う進みて、正服うるはしき立姿を拜し、それよりふつか三日過ぎて、國務大臣フォン、ファブリイス伯の夜會に招かれ、墺太利、バワリア、北亞米利加などの公使の挨拶畢りて、人々こほり菓子に匙を下す隙を覗ひ、伯爵夫人の傍に歩寄り、事のもと手短に陳べて、首尾好くイヽダ姫が文をわたしぬ。

一月中旬に入りて昇進任命などにあひし士官とともに、奥のおん目見えをゆるされ、正服着て宮に參り、人々と輪なりに一間に立ちて臨御を待つほどに、ゆがみよろぼひたる式部官に案內せられて妃出でたまひ、式部官に名をいはせて、ひとり〴〵こと葉を掛け、手袋はづしたる右の手の甲に接吻せしめ玉ふ。妃は髮黑く丈低く、褐いろの御衣あまり見映せぬかはりには聲音いとやさしく、「おん身は佛蘭西の役に功ありしそれがしが族なりや、」など懇にものし玉へば、いづれも嬉しとおもふなるべし。したがひ來し式の女官は奥の入口の閾の上まで出で、右手に摺みたる扇を持ちたる儘に直立したる、その姿いと〴〵氣高く、鴨居柱を欄にしたる一面の油畫に似たりけり。われは心ともなくその面を見しに、この女官はイヽダ姫なりき。こゝにはそも〳〵奈何して。

王都の中央にてエルベ河を横ぎる鐵橋の上より望めば、シュロスガッセに跨りたる王宮の窓、こよひは殊更にひかりかゞやきたり。われも數には漏れで、けふの舞踏會にまねかれたれば、アウグスッスの廣こうぢに餘りて列をなしたる馬車の間をくゞり、いま玄關に橫づけにせし一輛より出でたる貴婦人、毛革の肩掛を隨身にわたして車箱の裡へかくさせ、美しくゆひ上げたるこがね色の髮と、まばゆきまで白き領とを露して、車の扉開きし劍佩びたる殿守をかへりみもせで入りし跡にて、その乘りたりし車はまだ動かず、次に待ちたる車もまだ寄せぬ間をはかり、槍取りて左右にならびたる熊毛鍪の近衞卒の前を過ぎ、赤き氈を一筋に敷きたる大理石の階をのぼりぬ。階の兩側のところ〴〵には黃羅紗にみどりと白との縁取したる「リフレエ」を着て、濃紫の袴を穿いたる男、項を屈めて瞬もせず立ちたり。むかしはこゝに立つ人おの〳〵手燭持つ習なりしが、いま廊下、階段に瓦斯燈用ゐることゝなりてそれは止みぬ。階の上なる廣間よりは、古風を存ぜし吊燭臺の黃蠟の火遠く光の波を漲らせ、數知れぬ勳章、肩じるし、女服の飾などを射て、祖先よゝの油畫の肖像の間に挾まれたる大鏡に照反へされたる、いへば尋常なり。

式部官が突く金總ついたる杖、「パルケット」の板に觸れてとう〳〵と鳴りひゞけば、天鵞絨ばりの扉一時に音もなくさとあきて、廣間のまなかに一條の道おのづから開け、こよひ六百人と聞えし客、みなくの字なりに身を曲げ、背の中程までも截りあけてみせたる貴婦人の頸、金絲の縫模樣ある軍人の襟、また明色の高髻などの間を王族の一行過りたまふ。眞先にはむかしながらの卷毛の大假髮をかぶりたる舍人二人、ひきつゞいて王妃兩陛下、ザックセン、マイニンゲンのよつぎの君夫婦、ワイマル、ショオンベルヒの兩公子、これにおもなる女官數人隨へり。ザックセン王宮の女官はみにくしといふ世の噂むなしからず、いづれも顏立よからぬに、人の世の春さへはや過ぎたるが多く、なかにはおい皺みて肋一つ〳〵に數ふべき胸を、式なればえも隱さで出したるなどを、額越しにうち見るほどに、心待せしその人は來ずして、一行はや果てなむとす。そのときまだ年若き宮女一人、殿めきてゆたかに歩みくるを、それかあらぬかと打仰げば、これなむわがイヽダ姫な

りける。

王族廣間の上のはてに往着きたまひて、國々の公使、またはその夫人などこれを圍むとき、かれて高廊の上に控へたる狙撃聯隊の樂人がひと聲鳴らす鼓とゝもに「ポロネエズ」といふ舞はじまりぬ。こはたゞおの〳〵右手にあひての婦人の指をつまみて、この間をひと周するなり。列のかしらは軍裝したる國王、紅衣のマイニンゲン夫人を延き、つゞいて黄絹の裾引衣を召したる妃にならびしはマイニンゲンの公子なりき。僅に五十對ばかりの列めぐりをはるとき、妃は冠のしるしつきたる椅子に倚りて、公使の夫人達を側に居らせたまへば、國王向ひの座敷なる骨牌卓のかたへうつり玉ひぬ。

この時まことの舞踏はじまりて、群客たちこめたる中央の狹きところを、いと巧にめぐりありくを見れば、おほくは少年士官の宮女達をあひ手にしたるなり。わがメエルハイムの見えぬはいかにとおもひしが、げに近衞ならぬ士官はおほむね招かれぬものをと悟りぬ。さてイヽダ姫の舞ふさまいかにと、芝居にて贔屓の俳優みるこゝちしてうち護りたるに、胸にさうびの自然花を襟のまゝに着けたるほかに、飾といふべきもの一つもあらぬ水色ぎぬの裳裾、狹き間をくゞりながら撓まぬ輪を畫きて、金剛石の露綴るゝあだし貴婦人の服のおもげなるを欺きぬ。

時遷るにつれて黄蠟の火は次第に炭の氣におかされて暗うなり、燭涙ながくしたゝりて、床の上には斷れたる紗、落ちたるはな片あり。前座敷の間食卓にかよふ足やう〳〵繁くなりたるをりしも、わが前をとほり過ぐるやうにして、小首かたぶけたる顔こなたへふり向け、なかば開けるまひ扇に頤のわたりを持たせて、「われをば早や見忘れやし玉ひつらむ、」といふはイイダ姫なり。「いかで、」といらへつゝ、二足三足跟きてゆけば、「かしこなる陶物の間見たまひしや、東洋産の花瓶に知らぬ草木鳥獸など染めつけたるを、われに釋きあかさむ人おん身の外になし、いざ、」といひて伴ひゆきぬ。

こゝは四方の壁に造付けたる白石の棚に、代代の君が工藝に志ありてあつめたまひたる國國のおほ花瓶、かぞふる指いとなきまで竝べたるが、乳の如く白き、琉璃の如く碧き、さては五色まばゆき蜀錦のいろなるなど、蔭になりたる壁より浮きいでゝ美はし。されどこの宮居に慣れたるまらうど達は、こよひこれに心留むべくもあらねば、前座敷にゆきかふ人のをり〳〵見ゆるのみにて、足をとゞむるものほと〳〵なかりき。

緋の淡き地におなじいろの濃きから草織出したる長椅子に、姫は水いろぎぬの裳のけだかきおほ襞の、舞の後ながらつゆ頽れぬを、身をひねりて横ざまに折りて腰掛け、斜に中の棚の花瓶を扇の尖もてゆびさしてわれに語りはじめぬ。

「はや去年のむかしとなりぬ。ゆくりなく君を文づかひにして、ゐや申すたつきを得ざりければ、わが身の事いかにおもひとり玉ひけむ。されど我を煩悶の闇路よりすくひいで玉ひし君、心の中には片時も忘れ侍らず。」

「近比日本の風俗書きしふみ一つ二つ買はせて讀みしに、おん國にては親の結ぶ緣ありて、まことの愛知らぬ夫婦多しと、こたびの旅人のいやしむやうに記したるありしが、こはまだよくも考へぬ言にて、かゝることはこの歐羅巴にもなからずやは。いひなづけするまでの交際久しく、かたみに心の底まで知りあふ甲斐は否とも諾ともいはるゝ中にこそあらめ、貴族々間にては早くより目上の人にきめられたる夫婦、こゝろ合はでも辭まむよしなきに、日々にあひ見て忌むこゝろ飽くまでつのりし時、これに添はす

る習、さりとてはことわりなの世や。」

「メエルハイムはおん身が友なり。惡しといはば辯護もやしたまはむ。否、われとてもその直なるこゝろを知り、貌にくからぬを見る目なきにあらねど、年頃つきあひしするゑ、わが胸にうづみ火ほどのあたゝまりも出來ず。たゞ厭ふにはゆるは彼方の親切にて、ふた親のゆるしゝ交際の表、かひな借さるゝこともあれど、唯二人になりたるときは、家も園もゆくかたもなういぶせく覺えて、こゝろともなく太き息せられても、かしら熱くなるまで忍びがたうなりぬ。何ゆゑと問ひたまふな。そを誰か知らむ。戀ふるも戀ふるゆゑに戀ふるとこそ聞け、嫌ふもまたさならむ。」

「あるとき父の機嫌好きを覗ひ得て、わがくるしさいひ出でむとせしに、氣色を見てなかば言はせず。『世に貴族と生れしものは、賤やまがつなどの如くわが儘なる振舞、おもひもよらぬことなり。血の權の贄は人の權なり。われ老たれど、人の情忘れたりなど、ゆめな思ひそ。向ひの壁に掛けたるわが母君の像を見よ。心もあの貌のやうに嚴しく、われにあだし心おこさせ玉はず、世のたのしみをば失ひたれど、幾百年の間いやしき血一滴まぜしことなき家の譽はすくひぬ。』といつも軍人ぶりのこと葉つきあら〳〵しきに似ぬやさしさに、兼ねてといはむかく答へむとおもひし略、胸にたゝみたるままにてえもめぐらさず、唯心のみ弱うなりてやみぬ。」

「固より父に向ひてはかへすこと葉知らぬ母に、わがこゝろ明して何にかせむ。されど貴族の子に生れたりとて、われも人なり。いま〳〵しき門閥、血統、迷信の土くれと看破りては、我胸の中に投入るべきところなし。いやしき戀にうき身窶さば、姫ごぜの恥ともならめど、この習慣の外にいでむとするを誰か支ふべき。『カトリック』教の國には尼になる人ありといへど、こゝ新教のザックセンにてはそれもえならず。そよや、かの羅馬教の寺にひとしく、禮知りてなさけ知らぬ宮の内こそわが家穴なれ。」

「わが家もこの國にて聞えし族なるに、いま勢ある國務大臣ファブリイス伯とはかさなる好あり。この事おもてより願はゞいと易からむとおもへど、それの愜はぬは父君の御心うごかし難きゆゑのみならず。われ性として人とゝもに歎き、人とゝもに笑ひ、愛憎二つの目もて久しく見らるゝことを嫌へば、かゝる望をかれに傳へ、これにいひ繼がれて、あるは勸められ、あるは諫められむ煩はしさに堪へず。況んやメエルハイムなどの如く心淺々しき人に、イヽダ姫われを嫌ひて避けむとすなど、おのれ一人にのみ係ることのやうにおもひ做されむこと口惜しからむ。われよりの願と人に知られで宮づかへする手立もがなとおもひ惱む程に、この國をしばしの宿にして、われ等を路傍の岩木などのやうに見もすべきおん身が、心の底にゆるぎなき誠をつゝみたまふと知りて、かねて我身いとほしみたまふファブリイス夫人への消息、ひそかに頼みまつりぬ。」

「されどこの一件のことはファブリイス夫人こゝろに祕めて族にだに知らせたまはず、女官の闕員あればしばしの務にとて呼寄せ、陛下のおん望もだしがたしとて遂にとゞめられぬ。」

「うき世の波にたゞよはされて泳ぐこと知らぬメエルハイムがごとき男は、わが身忘れむとてしら髮生やすこともなからむ。唯痛ましきはおん身のやどりたまひし夜、わが絲の手とゞめし童なり。わが立ちし後も、よな〳〵纜をわが窓の下に繫ぎて臥しゝが、ある朝羊小屋の扉あかぬにこゝろづきて、人々岸邊にゆきて見しに、波虛しき船を打ちて、殘れるはかれ草の上

なる一枝の笛のみなりきと聞きつ。」

かたりをはるとき午夜の時計ほがらかに鳴りて、はや舞踏の大休となり、妃はおほとのごもり玉ふべきをりなれば、イヽダ姫あわたゞしく座を起ちて、こなたへ差しのばしたる右手の指に、わが脣の觸るゝとき、隅の觀兵の間に設けし夕餉にいそぐまらうど、群立ちてこゝを過ぎぬ。姫の姿はその間にまじり、次第に遠ざかりゆきて、をり〳〵人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名殘なりける。

アテネ人の歌(SOHOTTELIUS)

死なめ、國と家のためにこそ、身は。國は汝が國、家は汝が家。いざや、うち立て、仇防ぐため。孫子護ると、笑みて棄つる身。進め、わかうどよ、しばしもためらはで。仇におぢめや背後見せめや。恥づべからずや、わかうどためらひて、勇む翁に手負ひ、死なせば。死ぬべきは、まだ波打てる黒髪に春花簪さん若き身。女子の愛でし匂殘りたらん、雄叫の迹消えぬ額にも。

(『沙羅の木』「譯詩」より)

一夜のやど(STRODTMANN)

はてにけり　せだんのいくさ
鷹と飛ぶ　帝王の御座
軍はなほ　進みてやまず
夜あらしの　ふきあるるごと

あるだんぬ　はやくも過ぎつ
寺名ある　市もよぎりぬ
喉かわき　足ならうは燃ゆ
山川も　ゆくてささへず

あつき日の　葡萄畠を
岩にそひ　のぼりてぞゆく
あな奇しき　さかひに來しよ
日かたぶき　宿かるところに

木立ある　月のいただき
城ありて　山の背に倚す
岩まより　おちたぎつ水
流れ入る　まるぬの川に

世はなれし　此仙境に
けがれ沓　いれんことをし
自然てふ　母のふところ
たひらぎの　夢をぞさそふ

山隈に　人のつくれる
樂園の　かりのやどりに
楡の葉の　そよぎを聞けば
たたかひを　しばしわすれつ

ひとりだに　音には立てねど
胸に滿つ　しじまの訴
問はまほし　人道の春
いつの日か　うつつに來べき

そのときは　妬も忌も
うき雲の　消えてあと無く
いくさせず　血しほながさず
國々は　むつびに生きん

うるはしき　仙境のゆめ
夜あくれば　やがてぞ醒めし
聯隊は　はやつくられぬ
いざ進め　あたの都へ

(『歌日記』の「隕石」より)

埋木

第一回

「アルフォンス、ド、ステルニイ氏は十一月にブルクセルに來て、自ら新曲惡魔の合奏を指揮すべし、」と白耳義獨立新聞の紙上に出でしとき、府民は目を側だてたり。

樂人は肩を聳かし、脣を嚙みてステルニイが音に通ずることの深からざるを刺り、又府民か郷上の樂人を蔑にして外をのみ求むる癖あるを憤りき。樂を知らざる府の富豪は、いつになくこれに應じて、ステルニイが噂をなすこと八日ばかりなりき。噂は大抵彼が情事に關る話にて、其伶人たる伎倆につきては、隻語をだに聞かざりき。かく評判ありしも秋の頃にて、語るべき事の少なかりければなるべし。

ステルニイはその頃伶人として名を博したりしのみかは、社交上にも獅子と仇名せられて、人を淩ぎたりき。名ある貴婦人の彼を戀慕ひしものあり。ジョルジ、サンが彼のために書きし稗史といふものさへ世に傳はれりき。今其書の名を何といひしやらむ、知る人なきのみ。又某侯の夫人はかれがために硫酸のみて死にき。

五年前なりしが、彼は忽然跡を潛めて合奏をもなさず、新曲を梓に上すこともせずなりぬ。今や新曲「惡魔」の名と倶に彼が名は萬人の口に上りて、世の人は訝り、伶人は笑ひぬ。

第二回

惡魔の曲の試を始めむと定めしは十一月五日のゆふべなりき。

「グラン、ダルモニイ」の樂堂には、早や人々集まりたり。常の試のをりには增して、瓦斯燈の數も多けれど、暗き客座と怪しげなる焰閃く指揮臺とのさま、何となく物すごく、瓦斯、ほこり、濕りたる布の臭、空氣の裡に滿ちて、鼠色なる霧は後に入りし人の衣の上に凝りて、潤ひたる光を放ちたり。堂內に坐しても、門外の天氣のあしさ思ひやらる。おどけたる謠ひての瓢簞なりに下ぶとりしたる顏にて、毛だらけなるが、美しく褐いろになりたる上「シャッ」を見せ、長靴の黃なる泥を敲き落し、裏返して捲き上げたる袴の下の端を伸ばして卸したる、髮おどろなす謠ひめの　心地あしといひあひて、懷中藥取りかはしたる、伶人どものしぶ〳〵に樂器をいぢりて、節を成さゞる「ヰオリン」の音の間にをり〳〵截れたる絲の耳を裂くやうなる響をせさせたるなど、見聞くもの皆何となくすさまじきさまなり。

人の世話にて仲間入りしたる素人二人あり。一人は獨逸うまれの「ピアノ」の師匠にて、將來の樂に醉ひたり。一人はところのものにて、人にロシニが友とあだなせらる。

調子は合ひたり。こゝかしこにて「ヰオリン」の一手二手、試みたる聞ゆ。瓦斯の焰はかすかに鳴りたり。謠女らは寒がりて足踏みならし、赤くなりたる手をすりあはせたり。ステルニイはまだ來ず。

ロシニが友は謠女らの側に寄りて相識りたる次高音謠ひに向ひて、「御身には氣の毒なり。ステルニイは將來の樂といふものにのみ耽りたる人なれば、彼が曲を歌はせむとするは、人の喉を苦むる最上の手段とやいふべからむ。彼が曲中の『アリイ』を歌ふは、今まで得たる音樂上の快樂の罪滅ぼしなるべし。」

次高音謠ひの婦人、「そは餘に酷ならむ。ロシニが女といはるゝ君なれば、將來の樂といふものを好みたまはぬは怪むべきにあらず。此度の曲の中にも、人の倦むべき處なきにあらねど、また面白き處もあり。」

ロシニが女は打聞きて、「將來の樂といふ派に、おもしろき處あらむとは、おのれは思ひかけず、」とつぶやきぬ。

「されど君もワグネル、ベリオスなどを、非凡の人なりとは思ひたまふべし。彼等は音樂の世界に一生面を開きしこと疑ふべきならねば。」

「君がのたまふ一生面は、鬼の假面かぶりて人を嚇す類なりとは知りたまはずや。ワグネル、ベリオスはげに凡人ならざるべし。唯これに附和する輩の心こそ知られね。世には『ミュジック、デクリプチイフ』といふ新發明の樂を說くものあり。何ぞと問へば、一揆おこしたらむやうに叫びあふ『キオリン』の響のみ。これに題して該撒が死と云ひ、ホラチエルとクリアチエルの鬪と云ひ、エズキオの噴出と云ふ。聞く人は何事にか感動すべき。徒に頭痛の種となるべきのみ。」

かくいひてロシニが女は高く笑ひ、さていふ。「ステルニイが曲には何事をか巧に寫しいだしたる。才なき人の心のさまにや。」

「惡魔には珠を含みたり。彼ペサロの水禽も、」と次高音うたひはいひかけしが、「見たまへ、ステルニイのはや來ると見ゆるを。たゞ離別の一ふしに心をつけ玉へ、」といふ。

樂長と親しき女の一群とに伴はれて、ステルニイは壇に上りぬ。獨逸うまれの「ピアノ」の師匠は、嬉しげに彼が面を見つめたるを、かゝることには慣れたるステルニイなれば、目にてこれに答へ、一同に輕く禮をなして、侍講臺の前に立ち、鷹の眼を睜きて、伶人の一隊を見わたすに、「キオリン」の組一人闕けたり。「闕けたるは誰ぞ、」と問ふ。

「キオリン」の組の人々は、顏見あはせて聞えぬやうにあらぬ男の名をいひ、「彼に猶豫みたりとて斷りいはせぬ、」とつぶやく。

樂長、「彼は病院を出でしより幾日か立ちたる。彼はをり〳〵試の席にはいでぬことあり。」

ステルニイは笑みつゝ、「それを君は咎めたまはぬにや、」といぶかりて問ふ。

樂長は惶ちたるさまなり。「彼は眞の席にて錯せぬものなれば、深くも責め候はざりしなれど、不都合なることはいふまでもあらねば、必ず罪を正し候はむ。」

ステルニイは肩を聳かして、「罪したまふはえうなし。されど次の試には闕けたる人のなからむこそ願はしけれ。」言畢りて架を敲きつ。

彼が指揮するさまは、エルヂイの花々しき、ヘクトル、ベリオスの物凄きには似ず、一種の醉目を具へたり。初のほどはたゞ靜にて、殆ど疲れたるやうなり。面は睫毛も動かざるごとく、見るまに目かゞやき、唇のほとり引きつけたるやうになり、胸に波打てり。曲の頂點に達すれば、次第に高く手を擧げて、鳥の翼を舒ばす如く、地を離れて飛ばむとし、忽然沈みたる面色を見せ、いたく疲れたる如くなるは其癖なり。命にや障らむと「ピアノ」の師匠は氣を揉み、ロシニが女はこけ威しなりとて憎みたり。

曲の初は果してわが思ひし如くなり、とロシニが女は刺れど、「ピアノ」の師匠はなだれの落ちたる如き音を聞きて、背に冷汗を流したりといふ。

この處をば一たび繰返して、溫習は猶次の日を期して止みつ。次高音うたひはこの時裳ぬぎすて、ロシニが女を一目見て立ちあがり、式の如くに笑を帶びて歌ひはじめぬ。辭は戲曲に

似たる「レシタチイフ」に起りて、泣く如き「メロヂイ」に入る。

嗚呼眞の「メロヂイ」なり。工を弄したる迹なくして、一往情深きさま、モツアルトにもをさをさ劣らじとおもはるゝに、少し沈鬱の氣象を含ませたり。ロシニが友はおもひかけずといふやうなる面持す。

をり〳〵に挾みたる粗大なる「インテルメツチイ」を除いては、惡魔の曲は歩ごとに其妙を加へて、人間界が天堂を失ひて泣くといふ心を寫したる離別の段に至りて其頂點に達したり。伶人ども皆一時に立ちて、覺えず喝采するに、ステルニイ涙を流して、「かゝる喜はけふ迄知らざりき。諸君の盡力は肝に銘じて忘れざるべし、」と謝す。「ピアノ」の師匠は狂せむとし、ロシニが友は、「剽竊なり。恐ろしき剽竊なり。されど何處よりか得たる。」とつぶやき〳〵愈々不平なる面持す。

この後にはいと醜き尾を附けたれど、今迄の美しき處を思ひて、人々咎めず。妬を帶びて敬禮す。されど人々怪しとおもふのみにて、其故を解せざりき。

ステルニイはこれより某伯の夫人の車に乘りて、モンタニユ、ド、ラ、クウルの街を上らせ、かしこにて貴人の優しき聲して譽むるを聞きて、豐なる饌に向はむとす。車の「惡魔」興行の赤き貼札の前を過ぐるとき、ステルニイは其前に立ちたる男を見たり。

そは敗れたる「フイルツ」の帽を耳まで被ぶりて、古く毛の截れたる衣を纏ひ、踵のすれたる靴を穿きたる肩廣き男なりき。

前なる車に支へられて、ステルニイが車のしばし止まりたるをり、彼はこの男の横顏をのぞきしに、不思議なり、ステルニイ色蒼ざめて青天鵝絨の車の蒲團の上に後ざまに倒れぬ。

立ちたる男は酒に耽りて、面のいたく變りたるを、ステルニイはその昔識りてやありし。

いかにとも知られねど、此男の姿は途ゆく人の目にも立ちて、何となく氣味惡し。流れ肩に力なげなる身の構、歩むさまさへ哀れげに見ゆるに、其風世の常ならず。燃えけむ焔の迹猶殘りて故ありげなり。少し厚きに過ぎたりと見ゆる赤き脣、大なる鼻、廣き額、目は半ば閉ぢて物を見るともなきさまなるが、日を懼るゝ猛獸の如く、又世を厭ひ果てゝおのれがゆくべき狹き路の外を見じと誓ひし人の如し。此面に表はれたるは舊き悲痛と新しき惑溺となり。

程なく道にゆるみのつきたれば、伯家の車は客を載せて馳去り、彼あやしき男は「バタ」店に入りて、燒酎賣る机の前に立ち、「ジユネウル」一杯と叫びぬ。

第三回

この人は誰ぞ。

おほ空のをり〳〵地に下して、解かせむとする謎語の一つなり。されど地は、この謎語のあまりに怪しきために、これをえ解かずして、そがまゝに葬らむとす。この人はもとブルクセルの市街にて生れぬ。母は「ド、ラ、モンネエ」といふ芝居のうたひめにて、父は匈牙利の樂人なり。匈牙利の樂人とのみにては、猶そのいかなるものなるかを知りがたからむ。かしこには「チゴイネル」だねの樂人ありて、隊を成して歐羅巴大小の都に往來し、乍ち來り、乍ち去り、野馬の生滅に似たる社會をなすなり。この人の父もさる類なりきといへり。

母の名をマルガレエタ、フアン、ザイレンといふ。その子の名は、はゝかたの祖父の匈牙利名にて、姓も外戚の姓をつぎたり。こはその子のまだ生れぬ間に、父の逃去りたりければなり。

このゲザ、フアン、ザイレンが稚きときは、黑き髮圓き顏を圍みて、瞳墨を點じたる如く、身の

何となく重たげなる、ひら地にて流れ多きふるさとのさまに似たる所ありき。その心ざまは夢みる如く穩にて、又燃えあがる如くはげしく、いづれとも定めがたかりき。

　この人のおひ立ちし街は、ルュウ、ラアエスタインとて、高く低く曲りて、臭きこと堪へがたきところなり。モンタニュ、ド、ラ、クウルのセント、グヂュウレに向ふかたの背にあたりたれど、世には殆どこを知るものなからむ。

　都の開明は、この街の隣までは來たれど、そこよりは入らず。貴人の車も、このあやしげなる街を驅りて過ぐることなし。白耳義は平遠の地なれど、その都は丘多し。この街の高く低く、定めなきも、それに依れるなれど、その幅の狹きに併せて、車の入るを防ぐに足れり。これが習となりて、この街の民は、多く其家を街の半ばまで、引きのばしたり。

　民のしわざと汚れたるさまとは、街にみなみの國の風情を與へたり。天然のおほ石を恣まゝに組みあはせたる道の上には、半ば腐りたる野菜の屑、南京兎の革、糊紙もて作りし花の濕れたる、ふりたる絹の手袋、灰などさま〳〵の塵あくたうづたかく、そのたゞ中をゆる〳〵と流るゝは黑き水なり。

ぬしなき犬あり。足きはめて長く、「ヒュエエネ」といふ獸めきて、背曲り、毛ちゞれたるが、食を求めて、塵芥の裡をさまよふさま、コンスタンチノポリスにて見たるに似たり。研ぎもの師、また其外のいやしき業に日を送るもの、時候によりて、日のあたり善き處にすまひ、又蔭をもとめて座を占めたり。ねまきのまゝにて、髮も蓬なす女ども、窓より首つき出して、はてもなき物語す。さらぬは紅く腫れたる兩の拳を、腰のあたりに推しあてゝ、門口にたゝずみ、目をしばだゝきて、時の運ひもてゆくを見やりたり。

　軒端揃はず、狹くして高きあれば太くして低きあり。その低きものは、上より壓されて、土中にめりこみたる如く、赤みどり色の、おそろしげなる屋根をいたゞきたり。かしこゝの窓には、小さき鉢植の木あり、また布を垂れて深く藏したるもあり。家なみのところ〴〵には、きたなげなる酒店あり。赤黑くぬりたる戸の上に、白く「ヒイル、フェルコオプト、メン、ドランク」（こゝにては酒を賣ると）題したり。

　これより裏の街々は、ゲザが若かりし頃、みな見ちがへ易きほど相似たりしが、尤も汚れたるはルュウ、ラアエスタインなりき。ねぶたげなる街の物おとを破りて、をり〳〵聞ゆるは棺つくる槌と石きざむ鑿との聲のみ。年を經て灰色になりし寺の後壁には、あやしげに大なる十字架倚りかゝりたり。これに縛りつけられて、濟度しがたき衆生を見おろしたる耶蘇基督の光明は、煤にて包まれたり。街を流るゝ水の、あまりに濁りたらぬ日には、色硝子張りたる、狹き寺の窓、これに映じたり。

　この間にてゲザはおひ立ちぬ。母はかの時の過ぐるを門口に立ちて見る女の一人なりき。美しき白耳義の女子なれば、身のたけ高く、少しおもたげなる處ありて、手足は白く肥えて力あり。おもての色は紅さしたる乳汁のやうなり。白き齒を見せて、輕く開きたる朱脣、まはりに薄くれなゐの色ある鼻翼、少し飛びいだしたるやうなる目、ルベンスが畫のマグダレナに似たる獅子色の髮の波打ちたる、これ其姿のあらましなり。芝居に出でぬとき、また門口に立たざるときは、屋根裏の一間なる蒲團の上に坐して絶えずもの讀みたり。そのふみは古道具店にて、何人か買來たりし數年前の畫人雜誌にて、中には多く俳優の事など書いたり。ラアエスタインの女はかはる〴〵これを讀みて、心の養となししなり。

ねぶたきまでに怠り、力なきまでに人好く、ゲザには甘き言葉のみかけて、いつの頃よりか、此家に迷ひきたりし灰色の大猫にも、やさしくのみしつ。唯束の間の快樂知りたるのみなれば、月の初には子に旨きもの食はせ、月の終には人に物借りて暮しぬ。

ゲザはいとけなき時より音樂を好みて、まだ物もえいはぬころ、母の抱きて小歌うたふを聞く毎に目をみひらきて、母の顏を打まもりぬ。始てこの子に「ヰオリン」を教へしは、マルガレエタが友某なり。ゲザが進歩は驚くべき程速なりき。その隙に母の困苦甚しうなりしかば、吾子の「ヰオリン」彈くを奇貨として、これに頼らむとする心起りぬ。まだ九歳なりしゲザは、幾程もなく、その頃「グラン、サブロン」に假小屋掛けたりし藝人仲間に雇はれて「ヰオリン」を彈くこととなりたり。この藝人仲間といふは、美男の輕わざ師一人、モラロとて極めて醜き矮人一人、驢馬一頭、猿四匹なり、驢馬には三本のあしにて行く藝ありといへど、恐らくは藝を須たずして、かく行くならむ。

この仲間に齡長く、胸いと狹き「スピネット」彈きあり。敗れたる器より、あやしげなる「ワルツァア」、「ポルカ」などの曲を打ち出だせり。ゲザが役は年老いたる笛ふきの女と共に、この男の業を助くるなり。あはれ、この男、生涯に一たび輓歌なりともかなでたしといへど、その望かなふべきか、いかに。

この仲間は、日ごとに午後一時より四時まで、技を奏するに、その小屋は常に空し。ゲザは樂屋の上に坐して、心ともなく「ヰオリン」彈きて、小屋の棧敷を見卸すに、輕わざ師は白粉つけて粧ひ、紅衣綠袴、頭にこがねの環をはめて、蜻蜓がへりし、また例に横木に懸りなどす。又矮人は半身黄に半身青き肉じゆばん着て、赤き毛の生えたる大頭ふりたて、卑猥なる戲したり。

喝采を得るは、いつも矮人なり。小猿は顫ひながら、覺えたる技をなせり。鋸屑、瓦斯、橙の皮、猿などの胸わるき臭絶えず來りて鼻に入れり。暫くしてえ堪へねばくさみす。また暫くしてねぶたくなりて、「ヰオリン」の弓動くことゆるし。この時、「いざ〳〵、いかにかしたる」と足ずりして責むるは、例の「スピネット」彈きなり。驚きて目を開けば、下棧敷の端に坐して、これもねぶたげなる母と、おもはず目を見あはせたり。ゲザは力づきて又彈く。母は芝居のひまあるごとに必ずこゝに來居たり。そをゲザは我「ヰオリン」聞きに來たりとのみおもひぬ。

ある日ゲザは、矮人モラロとものあらそひして、この仲間の雇を解かれぬ。されど母の小屋に入ることは猶止まざりけり。

さる程に、四月某の日の晝過ぎ、風劇くふきて、雨窓を打ち、いと寒きに、いまは業なくなりたるゲザは、あやしく倦きて、四脚よろめく机に兩臂つきて、兩手の拇指を耳の穴にあて、素と母の蓄びし古雜誌の怪談に讀耽りて、戸の外にて冬と春とのおそろしき戰するをも知らでありけり。そこへ遽しく入り來し母は、吃りながら、「晩食は調へておしいれの中にあり、わが歸は遲かるべければ待たでたらべよ」といひき。

母の遲くかへらむといふは常のことなれば、ゲザは「さらば」と答へしのみ、讀みかけたる書をすてゝ、母の顏見むともせず。

母は出でゝゆきしが、まだ五分もたゝぬに歸りぬ。

ゲザ、「物を忘れたまひしか。」母、「さなり。」母の顏はいと赤く、そこか、こゝかと物を搜すやうなりしが、忽ち身を屈めて童の頭を抱き、二たび三たび接吻し、又童の頭をわが胸におしあてゝ、「すこやかにてあれかし、」と口の

理にてつぶやきて出でぬ。ゲザは何心なく雜誌を讀みたりしが、さらでだに印刷善からぬ紙の上に、きら〳〵と光るものありて、字を掩ひたれば、摩りのけむとして見るに、こは母の涙なりき。

ゲザはいつもの如く戸口に跫をも掛けず、床に入りしが、朝目醒めて見れば、母の床は宵のまゝなり。驚きて一聲二聲、「母樣、母樣」と呼びぬ。

童ながらも、此聲の母に聞ゆべきにあらざるは、明に知りたれど、唯我胸の閉ぢたるを開かむためにかくは呼びぬ。さて獨起きて衣を着て、街に走りいでぬ。

いと寒き朝なりき。融けたる雪に、水かさ增したる街の溝は、朝風にさゞ波立ちたり。赤き旭日の光は、斜に寺の窓を射て、灰色なる壁の内より、悲しげなる「オルゲル」の音洩れきこゆ。ゲザは泣きいだして、「母樣、母樣」といよ〳〵聲高く呼びぬ。マルガレエタは常に子を愛することをば忘れざりければ、理なるべし。

童はかなた、こなたを見れど、物言ふべき人もなし。母に棄てられて、よるべなき身なりとは、此時悟りぬ。ルユウ、ラアエ・タインの子の物わかり早さよ。

この時瘦せて丈長き手にて、ゲザが肩を抑ふる人あり。見れば我側に立ちたるは知らぬ人にもあらず。マルガレエタが屋根裏借りたる家の二階に住める老人なりき。色の青さは、彼十字架にかけられたる基督の人形に殊ならず、面に悲を帶びたるさへ、かれに劣らず見えたり。

「ふびんさよの、母に棄てられて。」

ゲザは覺えず下唇を嚙みて、顏の色赤くなり、此人の手を振りおとしつ。人の憫を受くるつらさをこのをり始て覺えたるなるべし。老人は猶もやさしく童の頭を撫りて、「母を憎しとな思ひそ。戀はかゝるものなり。」ゲザはその額打守りて「戀とは何」と問ひぬ。

老人は咳嗽して、「一病なり。熱ある病なり。これを煩ふ人は美しき夢見て、きたなき業するものぞ。」

第四回

ガストン、デリレオと名乘れる此人をば、ルユウ、ラアエスタインにて誰も知りたれど、唯トロオキイゲル、ヘエル「哀しげなる君」とのみ呼びぬ。年は四十と五十との間なるべし。面は黄にて、ふるびたる象牙の彫物に似たるところあり。まだ黑き髮の長く、すなほなるを、額を掩ふやうにかきて、頰鬚生やしたり。暑き盛の外は必ず赤裏つけたる濃き紫色の外套きて街を歩みぬ。

こゝへ遷りしは七月許前なるべし。行逢ふ小兒の頭を摩り、女の前通りすぐるたびに禮をかゝねば、皆善き人なりといへど、誰も交るものなし。

マルガレエタは墮落する前に、子供の行末のこと、くれ〴〵も賴みたる文一通、此人の戸口の郵便箱に投入れおきつ。常には手紙の入りたることなきこの箱を、ことさらに撰びたるは、天晴人を識る才ありてのことならむ。デリレオが妻は世をさりて、跡に殘りし一人娘は、男世帶にてをしへ育てむこと難ければにや、佛蘭西へやりて、家にあらず。此人は情深き性なるに、生涯おもひの儘に人をも愛し、人にも愛せられしことなければ、今の淋しさ忘れたく、深く案じわづらふこともなくて、ゲザを迎へ取らむと思定めて、「朝食に來よ」とやさしくいひて、童の手を引き我家に伴ひいりぬ。

朝食果てゝ、デリレオは机に向ひぬ。總て世に慣れぬ人は、益なき事にもきおひ立する癖あるものなり。今この童のために教育の時間割りを作り、いまより十年が程に此童の用ゐるべき品

を考出して記すも、さる類ならむ。その隙に砥青染めの壁紙はりたる部屋を、あち、こちと見廻りたる童は、帝國時代の道具の角張りたると、ルイ、フィリップ時代の道具の曲りくねりたると、打交れる飾付のあはれげなるを、珍らしげに見つ。

壁に掛けたるは嘗て一たび名高かりし畫工の作れる圖にて、「ア、モン、セラミイ（贈我親友）云々と題したる縁の文字猶讀まる。その側には黒柵に挾みし詩人某某の自筆あり。眞中には早がきの肖像一つあり。稀なる美人の白き「アトラス」絹の衣きて、首に玉をつなぎし紐を結び、頭に小き冠を戴きたるなり。

ゲザ、「こは女王にや。」デリレオはまだ物書きてありしが、面をあげて、「そはガルチエリなり。」ゲザは「さなりや」と答へしが、心には何ともえわきまへざりき。

宜なり、まだ穉き身には、ガルチエリが當時、世に聞えたるうたひ女にて、妙妓の名に、無類の噂と共に高かりしことを知らざりしも。

しばしありてデリレオは語を繼ぎて、「かれも女王なりき。うたひ女の王なりき。」

ゲザは猶圖を打守りて、「おん身はその人を知り玉ひしや。」デリレオは徐に、「かれは吾妻なりき。」

ゲザ「さらば此女王はおん身をいたくかはゆがりしならむ。」こは主人をうれしがらせむとおもひていへるなり。

デリレオはこの言葉や胸につかへけむ、額打そむけつ。此肖像の前には大理石造の卓に載せたる青色の古花瓶ありて、絶えず新しき花束を插したり。

第五回

迎取りてより程もなきに、デリレオは童がうまれつき音樂を善くすべきものなるを看破りたれば、ブルクセルの音樂傳習所にて、評判好き「ヰオリン」弾き某といへる師を賴みて、其業を磨かせぬ。その他の教は、デリレオ自ら授けたり。この人の說にては、善き教ありといふは、假名づかひ正しく物書くことを覺え、廣く書籍讀むことなりき。

主人の骨折は一方ならねど、ゲザは兎角假名違へてかきぬ。これとはうらうへにて、著るく進みたるは讀書の方なり。デリレオが愛讀の書「エッセエ、ド、モンタニュ」ははや讀畢へて、その自作の小說「プロメトイス」に遷りぬ。此書は梓行の書肆に逢ざること十年、例の濃き藍色の外套と共に老いたるものにて、一種えならぬ臭ありて、通篇ふるびたる社會改良的思想を寫出したり。その發端は「メエルヘン」に似て、その結末は讃美歌なり。

夕ごとに此小說を讀みきかせらるゝを、ゲザは耳欹てゝ聞けど一言をもえ解かざりき。

げに二人は珍らしき一對なり。生涯に何一つしいだしたることもなく、つか穴に片足ふみこみたる翁の忙しさ、身によの常ならぬ才能ありと自ら信じて、行末きはみなきやうにおもふ少年の氣の閑けさ、彼は果敢なき今の世を厭ひて、斷えず三十年代の夢を喚びかへし、此は經驗なき心に將來の樂しさのみおもひぬ。二人は疑もなき空想家なり。されど最も氣の毒なるは主人デリレオの方なるべし。

憐むべし、デリレオ。彼は世に所謂萬能の人なりしが、生涯何事をも得遂げざりき。音樂、繪畫、文學、經濟、いづれも時の次第もなく究めつ。その頃社會改良論の盛に起りしを見て、彼は又いたくこれを信じ、サン、シモンが徒に從ひて、後にて結ぶ巾單を着け、我名書きし鉢卷をしめなどしたりき。

人の噂には初サン、シモンの徒が分業の手つゞきをなしゝとき、デリレオの受持ちしは・

人のために靴を磨き、又人に金を配ることとなりしといへり。げに彼はこの外に使ひかたなかりしならむ。後にマダム、スタエルが分派の母の位を辭せしとき、これに就くべき婦人を求めむとて出でし三百人の組にも、デリレオ居たりといひ傳ふ。かゝる由なき事にデリレオは家財を失ひ、平生の望は霧の如くに消えて、うしろめたきことのみ多かりければ、しばし身を浮世の外に置きて、人にわれを忘れられ、われも亦人を忘れむとおもひぬ。されど彼も猶一つの望をば懷きたり。そは例の小說を世に公にせむとおもふ果敢なき願なり。

いまの所にてデリレオが業といふは、樂譜寫して錢を獲るのみ。これも昔ルソオがせしなりはひなりと思へば、賤しと嫌ふべきにあらずと、自ら諦めたるなるべし。

二三年が程に、ゲザは美しき少年となりぬ。心さとく情深きことは、デリレオが教にて人竝に勝れたり。されどサン、シモンの殘黨を師としたのめば、男らしき性の闕けたるもことわりならむ。ゲザが傾のやう／＼醒めて夢みる如くなりて、思慮に整ひたるふしなきを見て、心あるものは行末覺束なしとおもひぬ。その仕事するを見るに、熱を病める如く勉强するときありき。又いたく倦みて一事だになさゞる時ありき。久しく忍びて、物をしとげむとする力は絕えてなかりき。教課の上にては、心にて悟ることと人に優れたれど、記憶などの力を頼みては、よの常の音樂傳習所生徒に一籌を輸すること多し。「ヰオリン」をしふる師は、これらの性質に心もとめず、只進步の早きをのみ見ていたく喜び、かしこ、こゝの好事家に引合せなどしつ。

ゲザが「ヰオリン」は、譜によりて巧に彈くのみならず、をりに觸れて當座の曲をなすに、凡人の及ばぬところありと師は褒めたゝへき。沈みたる性の人多きブルクセルにて、ゲザが破格の音樂は聽く人を驚かし、その「チゴイネル」種なりといふ噂高きと共に、色黑き美しき顏を愛づるもの少からず、絕頂のほめ詞は必ず「コム、セエ、チガン」の語なりき。

或る日ゲザは始めて音樂會に出で、公衆の前にて技を奏せむとするに、若き人の癖とて、自負心强く、時刻遲しとのみおもふを、デリレオ我事のやうに憂へて、食はず、寐ず、「もし仕損ずることありても、心になかけそ、」とうるさきまで諫めつ。

ゲザは此諫に腹立ちて、帽を額深く被ぶりて、走出で、足ぶみしてルュウ、ラアエスタインをゆきつ戻りつすれば、デリレオは胸のみ痛めて、部屋の內を歩廻りたり。場に上るときとなりては、デリレオが心配いよ／＼甚しく、いかに勸むれども座敷に入らず、樂屋の出口に立ちて息を凝らし、兩手にて耳を塞ぎて居たり。

忽ちおそろしき響、おさへし手を洩りて、デリレオが耳に入りぬ。驚きて手を放ちたる老人は、初火事起りしかと疑ひしが、あらず、此響は幾百人の喝采拍手の聲なりき。デリレオは夢の如く、樂屋に跳り入りてゲザを抱きぬ。藝人は皆手を拍りて祝し、前途の事さま／＼にいひて褒めそやすを、世間知らぬ少年なれば、おほやうに聞きたりしが、前なる戶の側にあきて、兩手さしのべ入り來たりし美男子の面を見て、流石のゲザも驚きぬ。その人はアルフォンス、ド、ステルニイなりき。

「今宵を過さで、おん身に近づきにならむとおもへば來ぬ。わがよろこびをも受けたまへ。」

ゲザは聞きて、今まで仰ぎしたりし項を垂れて、顫ひて冷たき手を、此名高き「ピアノ」彈きに握らせぬ。

第六回

アルフォンス、ド、ステルニイ。此名の響善

かりしことは、冷淡になりて、批評の眼に誇る今の人にはわからぬなるべし。當時の音樂世界にて、二三の「ピアノ」彈きの占めたる名譽は、神も若かざるべく、其首に居りし人はステルニイなりき。ステルニイに逆上せて狂人となるさまは、さながら時疫の如く、かれが技を奏する街々にはびこりぬ。後言するものは、此譽を藝よりは人品に依れりといひき。

ステルニイが人となり、所謂「ホム、ア、シエクセエ」にて、品格善しといはるゝほど身だしなみし、氣象高しといはるゝほど物に拘らず、才ありといはるゝほど口惡く、非凡なりといはるゝほど輕薄にて錢づかひ荒し。顏かたちは美しきに、髮を新様に斬らせて、額を掩ふやうにかき、衣は僅に過去りたる流行の形を用ゐて、毫も藝人の癖見ゆる異態を成さず。父は佛蘭西の外交官にて、財産は二萬五千「フラン」ありと人皆知れど、この財産はかへりて伊太利の某婦人のかたみなりといふことは、誰も知らざりき。

ステルニイが「ピアノ」は珠の雨を降す如く、花を鎖に編みたる如し。技藝の調和に深く心を用ゐて、手を下すに及びては、つとめて卑しからざらむことを求めたり。さればこれを聽くに、いつにても一毫の謬なければ、よの常の妄に指板を擊つものに似るべくもあらざりき。匈牙利生れの名高き「ピアノ」彈き某といへるは、嘗て之を誇りて、「ステルニイが技は貴女子の指より出づる如し」といひき。此言は早くもステルニイが耳に入りしが彼は僅に微笑したるのみにて、舊に依りて其「ピアノ」を撫づること、愛子を弄ぶやうなりき。當時世人の耳は實に樂器を虐使する者に倦みたれば、この優しきふるまひは、却りて人を動かすに足れりしなり。彼が交る所は最貴きわたりのみ。されど同業のものをも、常に引立つるやうにすと噂せられぬ。

ステルニイはまことに能なきに非ず。されどゲザが始て逢ひしときは俗慮胸に滿ちて、名利をのみ事とする人なりき。その人をも世をも欺くに至りしは、後の事なり。世俗に推されて、餘りに高き礎に上りし後の事なり。この位を守らむとするには、別にせむすべなかりしなるべし。思ふにステルニイならぬ人を、かほど力に踰えたる位に置かば必ず目くるめきて墮ちむ。人を引立つるは、ステルニイが得意のわざなれば、こたびもゲザが手を握りしのみにては、足れりとせず、「オテル、ド、フランドル」へ次の日の朝來なば、行末のことをも相談せむと契りおきて、さて他の藝人にもそれ〴〵に挨拶し、涙を頰に傳はせたるデリレオが手をも握り、つひには又ゲザが肩を叩きて去りぬ。

今日の會主が催しゝ晩餐の席にては、ゲザは一椀をも食はず、又一言ものいはず、顏の色蒼ざめて、目はきはみなき空をのみ見やりたり。この未來の空には、無垢世界湧出して、金葉珠果の樹茂りあひたるも見ゆべく、刺なき薔薇の花分けゆけば、美しき女神、冠を賜ひて、月桂の枝は唯おのづから我前に打靡くなるべし。かの光を怯るゝ猛獸に似たる目は當時なほ青空を飛ぶ鷲の眼にて、おそろしき夏の日をも憚らざりけむ。

第七回

能あれどまだ名を成さざる、若き藝人をもてなすことの厚きに、ゲザ深く感じぬ。二たび三たび引續きて朝食に招かれ、果はステルニイが「オテル」の置ものゝやうにせられぬ。或時は「ヰオリン」弾いて來させ、當座の曲にあはせて、我「ピアノ」彈き、こゝにてもステルニイは人の心を奪ふことの難からぬを知りぬ。或時は又其に語りて、童の言を可笑しとて高笑す。人に逢ふごとにいふ。「我「チガン」の童見しや。珍ら

しきものなり。當座の曲を善くすることはショペンにも劣らず。唯其途おなじからぬのみ。きのふはシェエクスピアの語を引き、今日は『マルサラ』を『トカイエル』に劣れりといひき。（竝に酒名。額は喰ひつきたき程美し。」

世の七不思議に、又一不思議添へたりといふ、少年の「キオリン」彈きの評判、早くブルクセルの貴族社會に高く、某の侯爵夫人はあるとき、ゲザがために夜會を開きしが、この折角の評判、今少しにて泥土に委ぬべかりきとぞ。

その夕暮には、ステルニイが世話至らざる所なく、兼ねて自ら誂へて與へし漆靴穿かせ、白き襟飾の端まで手づから引直しておのれが車に乘せ、侯家のやかたへ伴ひぬ。怜むべし、ゲザが自重の心は、早く彼古き兵器にて美しく飾り、珍しき黑色の鎧二領を据ゑつけたる玄關にて挫けぬ。公衆に對しては、獅子にも似たる勇氣を見せし少年、今は子供らしくもステルニイに寄りすがりて、僅に座に進むほどに、侯爵夫人はステルニイを出迎へて、「評判の世界の不思議とやらを連れて來玉ひしや。」

この夫人薄色の髮に、細き額を閉ませ、竝々ならず愛相好く、また極めて活潑なるに、劇しき度の近視なれば、「ロニエット」といふ柄つきの目鏡、片時も目より離すことなし。その世界の不思議とやらといひし聲の裏に、何となく可笑しとおもふ心を含みたるやうなるは、此社會の習にや。

「これこそ其人なれ。名はゲザ、ファン、ザイレン。いかにおもしろき名とは思召さずや。」とステルニイ答へき。さて言葉をつぎて、「この子はまだ人みしりする癖あれば、其心し玉ひてよ。」

夫人、「そはまことにや。そは面白し。總て藝人には自重の心あるこそ善けれ。其心は藝人に似合ふものなり。この子の目の美しさよ。」と例の目鏡にて見て、「侯爵もこの目をほめ玉ひぬ。殆まことの「チガン」種のやうなり。頃日シェエクスピアの語を引きぬとか、われもいたく笑ひぬ。」外の客來にければ、「ステルニイ、君はこゝを内のやうにしたまふことなれば、この子にも心おかせ玉ふな。」是れぞ夫人が人みしりする童を扱ふ仕方なりける。

ステルニイはしばし童を片隅に置きしが、程もなく又引出して、男女さま〴〵の客に引合せつ。ゲザは努めて人に臆せぬやうに見せたり。婦人は皆やさしくもてなし、何につけても此少年の持つやうに見ゆれど、さればとて言葉をかくるものもなし。一座はゲザが目の前にてゲザが事のみ語れど、物いふものなければ、彼人々はゲザを石像の如くおもひたるか、さらずば佛蘭西語解せぬ人とおもひ謬りしかと疑はる。ゲザは猶目の前に立ちたるに、人に向ひてこれを譽め、これをながめ、遂には外の人に向ひて外の話するを見るも心惡き限ならむ。

ゲザは薄き氷を踏む心地して、寒からぬに慄ひぬ。渾て身のめぐりのものを見るに、皆ひかり耀きて、又いと冷なり。上等社會に行はるゝ靜なる聲は、大に耳を痛むる如し。實に人々の言葉は、ゲザが燃ゆるやうなる頰を打つこと、輕けれど痛き雪片の如くなりき。

ゲザは泣かまほしう思ひぬ。世界の不思議と稱へられ、柄ある目鏡にて覗かれ、さま〴〵に評せらるれど、心ありて顧みる人なきに。

物語の中に、あの子はラアエスタイン街にて生れぬと云ふ人あり。婦人方口々に、ラアエスタインとはいづくの街にか、ラアエスタインとは何の事にかなどいへば、そを婦人の方々に聞えむは憚ありと答ふ。そは又實にや、されど善き育の見ゆるはいかに、げに卑しきものらしき處絶えてなし、唯「チガン」に似たるのみなりなど婦人いひあへり。これを聞くゲザは喉を緊めらるゝ心地しつ。

「今宵は君がみ聲を聞くこと出來ぬにや。」と婦人幾人かステルニイに迫りて問ふ。

「我聲をいかでか。我は今宵世話役の積なり。それさへあるに頭痛みて耐へがたし。」

今やゲザが技を奏すべき時來たりぬ。胸の動悸は劇しくなりて、頭のあたりまで響き、常の我をばいづくにか失ひて、指を絃上に加へしときは、唯是れ衆人の前に推出されて、遽に度を失ひし田舍人のやうなりき。

メンデルソンの「ゲ、モル」調の半ばにて、忽ち曲を忘れ、慌てゝ絶えし音を繼がむとして、聞きぐるしき過をなし、やう〳〵彈じはてぬ。ステルニイは失望の色を面にあらはし、ゲザは地の底にも入りたく思ひぬ。

拍手の聲かしこゝに聞えざるにあらねど、そは毫も聞かざりし人と、聞けど解せざりし人とのみにて、多くは唯肩を聳かして、「ステルニイの人に心醉する可笑しさよ。」といひき。

ステルニイはゲザが斯く拙き曲を聞かせしこと、前後に無きを明して、あはれなる少年のために無實の罪を雪がむとおもひしが、人々は唯、「我等はおん身を咎めむと思はず、おん身は人に心醉し玉ふ癖あれば、」とのみ云ひて取上げず。

一座ははかなき物語し、笑ひ、嘗むるともなしに酒茶を嘗めなどしたりしが、美しき貴婦人一、衆人の使に立ちて、ステルニイに一曲を求むるほどに、こなたは心よげに受引きて、勝を未然に知りたる面の色晴やかに、「ピアノ」に向ひぬ。

さて曲を終りて、ゲザが傍に歩寄り、「我兒よ、心を鎭めて、我が外に聞く人あるをしばし忘れ玉へ。さらば先に我に聞かせしことある當座の曲に似たるもの、出來ぬこともあらじ。こは汝が身の上にもかゝることなり、我も汝が譽めらるゝを聞きたきに。」

此言葉にゲザは自ら奮起して、「君が辱にならぬやうに、一曲を試みでは止まじ。」と口の裡につぶやきしが、面の色は眞蒼になりて、身うち慄ひ、手に「ヰオリン」取りし時、眼一たび輝きて、忽又黑き睫毛の背にかくれぬ。

その時童が目の前には、火の雨降るやうに見え胸の中には髣うづまき起りて、狂へる如く戀ふる如き物の音耳を衝きたり。

あはれ此曲、夢中にや成りし、さらずば、遠き父のふる里より木がらしや吹送りし、さらずば又、悲しげなる救世主の見卸し玉ふ、あやしき街の戸口にて、我兒を眠らせむと歌ひし母が、夫より傳はりたる節々を、また此童に傳へやしけむ。

唯聞く、ゲザが手中の「ヰオリン」は、乍ち歌ひ、乍ち泣けるを。匈牙利の「チガン」ならで、かゝる聲音を出し得るものあらむや。

人を醉はしむる節奏、溢るやうなる音の曲折、情と樂との亂狂へる風雨雷電。さて最後の一聲は虚空に向ひて放ちたる歡呼なりき。

ゲザは目をみはり、息を凝らして立てり。彼は自ら力限の技を奏せしを知りたり。彼は耳を欹てたり。されど公衆の前にて受けし如き喝采は、此上等社會に無きものにて、唯秋風枯葉を捲く如き聲座に滿ちて、遙か後の方より、面白し。珍らし。人の猶くならず。「チガン。」などゝいふ語聞ゆるのみ。

この有樣にゲザは頭を低れしが、忽黑雲目の前を飛ぶ如き心地しつ。ステルニイはさし寄りて、輕く肩を打ち、「好し、好し。それにて名譽は回復したり。」と慰め、笑を帶びて人々の方に向ひ、「これにても我を心醉したりとの玉ふや。」

ステルニイが此言葉はゲザには聞えず、ゲザは唯ステルニイが手に熱き脣をおし當てゝ涙をはら〳〵とこぼして泣きぬ、ステルニイは彼

がためには只神の如くなりき。ステルニイは大いなる幼兒、早や止めよ、と愼むるを、人々打見て、ゲザが技にも增して責みぬ。

或る日ゲザは「『シメエル』とは奈何なる物ぞ。」とステルニイに問ひかけぬ。

こは午前の事にて、佛人ボオドレエルが著したる『惡の花』といふ書を、解せぬながら誦へし居たるゲザが口より出でし問なりき。ステルニイは日本絹の黃なる寢衣を衣て、その樣大なる毛蕊花といふ草花めきたるが、書きかけたる手紙をおきて、伸をなしたるさま、顏の色の蒼ざめたるも際立ちて、十五年來一夜も穩に眠らぬ人と知られたり。

「『シメエル』とは奈何なる物ぞ、」とゲザ再び問ひぬ。

「なに、『シメエル』とか。そは猙ある女怪の名なり。」とふりかへりて答ふ。

「さなりや。」と瞼を低れて、暫し考ふるさまなりしが、又目を開きて、「さては劫を歷たる女怪なりと見ゆ。」

「まづ左樣のものならむ。」

ステルニイは足を溫めむとて、「カミン」爐の前に椅子を寄せつ。「堪へがたき寒さかな。そこなる『シャルトリヨオズ』を。それにて善し。修行を積みし女怪とおもふも可ならむ。常の女怪は人の腕を持ちたれば、それを枕に樂みて身を滅すものあり。『シメエル』の手にはおそろしき爪ありて、人の心を搔裂くことあり。常の女怪は人を沼に引入るれど、『シメエル』は人を天に招きのぼさむとす。天は達しがたきものなるに、沼に入り、泥の中にはまりては、なかなか樂しきことあるものなり、限なく樂しきことあるものなり。されどそは汝がまだ知らぬ境なり。」とゲザが耳をつまみて引きつ。

ゲザは呆れたる面持して聞居たりしが、ステルニイが講釋は半ば分らざりしなり。「されど我等の中、天に達するものなきにはあらざるべし、美術の天に、『ワルハルラ』(樂土)に、『パンテオン』(人を神に祟めたる祠)に。唯々早く途に上るをこそ善しとすべきならめ。」かく言ふは、多く讀みて少しく解したる若き人の口吻なるべし。

「さなり。天に達するものなきにしもあらず。」とステルニイは微笑しつ。「ミケランジェロ、ラファエロ、ベエトオフエン、」と童は數へつ。「シエエクスピア、ミルトン、モツアルト、レオナルド、ダ、キンチ。」とステルニイは高く笑ひながら言ひつぎたりしが、「されど天に達するには、非常の力なくては協はじ。又天にあらむとせば、その灝氣を吸ふために、一種の肺を備ふべきものならむ。」

ステルニイは斯くいひて輕く欠しつ。彼は嚴しく「シメエル」(不朽を謀らむとする妄想)を遠ざけて常の女怪と遊びたはぶれ、その女怪に心を奪はれざる一人なりき。

ゲザは猶心に落ちざる節ありと覺しく、「さて『シメエル』には皆猙あるものにや、」と問ふ。

「否、猙なきもいと多し。されどそは怖るゝに足らず。人を功名の道に誘ふなどは、そのえなさぬことにて、彼等は唯四足を泥に植ゑて、月に向ひて吠ゆるものぞ。」

「されど。」

猶問はむとするゲザが口を遮りて打笑ひ、「我學問は早やこれ迄なり。猶猜疑あらば、呼鈴鳴らして、會話辭書取りにやるべし。」

第八回

七年ばかりたちて、五月半ばに、ゲザ久し振にてブルクセルにかへり來ぬ。ステルニイが勢力にて、官費と貴人の醵金とを得たるゲザは巴里にゆきて、當時名高かりし師を訪ね、「キオリン」を學びぬ。巴里にては、學びもし、又遊び

もして、人に譽められ、又妒まれ、三鞭酒の杯擧ぐる手つきを覺え、禮を守らざる男を憎む婦人と、禮を守る男を憎む婦人とを見分くる術を得たり。

ゲザがはじめての旅かせぎには、名高き伊太利の歌姫と、それよりも名高きメエレンの座元とを同行としたりしが、途々にて桂冠を得たること幾度といふことを知らず。ニツツアに至りしとき、歌姫の身の上につきて、「キオロンセロ」弾きの男と爭ひ、遂にこれに決鬪を言込みて座元を辱めつ。

されど座元マリンスキイはかゝる瑣事を心に留めず、實利をのみ心掛くるものなりければ、二月後は巴里にて亞米利加ゆきの一行を募りし時、再び巨額の給金にてゲザを雇はむとせしに、ゲザは懷中に蓄へたる、前度の旅かせぎの利益金數千「フラン」を賴みて、技を賣らむよりは譜を作るこそ我本意なれ、と答へき。ゲザは當時二十四歲、この齡には已に不朽の業をなしゝ樂人も少からぬをゲザが公にせしものとては、十年ばかり前に印刷せしめし「レエウリイ」(夢曲)あるのみなりき。此曲は白人著作の習とて、美しく仕立て、首に少年作者の像を附けたる一册子にて、フオオブウル、サン、ジエルメンにて家ごとに購はれ、それより外へは出でざりき。

その後紙に上しゝものは少からねど、これを完うせしことなし。さるを猶自ら著作に富めるやうに思ひしはこれを完うせむと思立ちだにせば、直ちに成らむと信じければなり。曾て筆取りて紙に臨みしこと屢ばありしが、さま〴〵の意匠亂れおこりて捉ふるに由なかりき。唯餘閑だにあらば、事は成るべし。されど閑といふものは、巴里にて價貴き貨物なり、貴人ならでこれを得むこと難からむ。この時想起しゝはブルクセルなり。かの「ゴチック」風の寺院高く聳えて、隘き街は曲りくねり、加特力敎人を醉はしめ、草木繁り、生路塞がりたるブルクセルなり。ブルクセルなつかしと思ふ心止みがたくて、ゲザは途に上りぬ。

時は五月半ばなりき。こはブルクセルの美しき時節なり。日は雨と久しく戰ふことなく、唯折〳〵小ぜりあひをなして大氣を淨め、こがね色したる靄は虛空に滿ちて、遠方の見えずなりたる街道を夢物語のやうに包み、「セント、グヅウレ」寺の「ゴチック」風の石塔のめぐりに光まばゆき彩雲を起し、公園の青草に「ブロンド」なる面紗を被せたり。げに怪しきは此濕りたる澤、此金色の霧となりたる日影、此春ごとに灰白なるブルクセルを包める佛頭光なり、

園中の石像は今や藁の帽子を脫ぎすてたり。日光は彼六月初旬に失せぬべき春の薰を溢く心地よく吐きたる木々の若葉の間をすべりぬけ、中に横はれる枝の輪囷として色黑きあたりに白かね色の輪廓を作り、十圍もあるべき巨幹に澤ある大光斑を印し、おもしろげに露を帶びたる若葉の上に落ちて、透きとほりたる木の葉の影と捉迷藏の戲をなしたり。

オラニエン太子が家の前には、白きと薄紫なるといり雜りたる接骨木花、ゆたかに頭を掉り、御苑のわたりには菫花の如く碧き「ロドデンドロン」咲亂れて海をなしたり。この上を有るか無きかの溫き風、花の香に飽きて吹けば、これに觸るゝもの眠を催さむとす。是れ北國ながらの「シロッコ」風なるべし。

ゲザはガアル、ドユ、ミヂイよりブウルワアを横ぎりてラアエスタインに向ひ、すこやかに步をはこび來しが、物として面白からぬはなく、皆故人の如く、我を迎ふるやうなりき。暫し行きては立留りて、後を見かへり、獨り打ち笑み、又行き又住まり、殆ど世を忘れたる樣なりしが今モンタニユ、ドラ、クウルを曲りてラアエスタ

イン街に來ぬ。この時胸を緊めらるゝ如き心地して、何となく苦しく、踵を旋らさむかとおもふほどなりしが、却りて足は進み〳〵ぬ。遠見には濕ひたる金にかゞやきて、此中古建築法の痕を留めし街と、黑き寺院に倚りかゝりたる救世主とは、金地に畫きたる如し。「デリレオ君は居玉ふか。」と門口を洗ひゐたる（こゝには珍らしき暇つぶしならむ）婢に問ひぬ。フラミア語は久しく操はねば、唇を出づることいと難かりき。婢は驚きて面を擧げしが頷きぬ。

ゲザは胸を騷がして門口に入り、足音高く梯を登り、戸を敲けど答なし。入りて見れば、綠なる砒石の壁紙昔のまゝにて毒氣を吹く如し。されどゲザが養父と二人にて住みけるをりに比ぶれば、室内何處となく清らにて、媚を呈するやうに見えたり。人を醉はせ、人を眠らしめむとする香氣に襲はれて、向ひを見れば、ガルチェリが像の下なる、缺け損じたる花瓶に、美しき罌粟の花束をいけたり。こは「パヲオ、ド、ニイス」とて名高き大輪の花なり。

此間の戸はあきたるに、次の間の建添へ、硝子張の中に、圓き卓を前にさし向ひに坐りたるは、ガストン、デリレオとその娘となり。

ゲザはおどろきながら、娘の姿を見て、暫し我を忘れゐたり。かゝる輪廓正しき顏貌は、伊太利にてこそ見しこともあれ。頭は小き方なるが、希臘形の强き兩肩の上に据わりて、蒼白く變化少なき面に、黑く光れる目、燃ゆる如き唇、際立ちて附きたり。

この子はまだ十七なれど、北國の少女の常なる角張りたる態度なく、身うちすべて豐に、人を醉はしむる氣を吹きて何處となくませたり。一言にていへば伊太利の「モルビデッツァ」（肌の軟さ）を具へたり。

ゲザは少女の姿に見とれて立ちたるを、デリレオ頭を擡げて見しが、顏さし伸べて、日に向ひたるやうに瞬する有樣に、ゲザはほゝゑみて一歩進みぬ。

「ゲザならずや。」此聲未だ畢らぬに、悲しげなる君は養子を抱きて、彼も此も喜の涙を濺ぎつ。しばしありてデリレオは、ゲザを少し推しのけて、つく〴〵其姿を見、また引寄せて抱き、「いかに暫く又こゝに留まるべしや、」といふ、その聲は慄ひぬ。

ゲザ、「父上、おん身の許し玉ふ限、こゝに留まりて、靜に著述をなさむとおもひ侍り。されど我が居るべき場所も、はやあらじと見ゆれば、近きところに一間借るべし。」また娘の方を見て、「妹とはまだ近づきにならず。引合せ玉へ。」

デリレオ、「げに、さなり。アンネット、こはかねて噂せしゲザ、ファン、ザイレンなり。中善くせよ。ゲザ、おん身は妹に接吻一つせよ。」

夕飯果つる頃、灰色のかはたれ時は、ブルクセルの金光を鎖し盡し、僅に街燈の火ありて狹き紅を溝の水面に印し、又寺窓の色硝子を射るあるのみ。

ゲザは彼綠色の室にて、最軟なる椅子に倚り、デリレオに著述の見込を話しつ。アンネットは默して聞けり。獨りその大なる目は闇にかがやきたり。

ゲザが言は極なく長けれど、デリレオは謹みて聞き、唯をり〳〵そはいと面白からむといふのみ。遠き市の賑は、微なる子守歌のやうに此ラアエスタイン街に洩來り、夜に入りて罌粟の香氣次第に強くなり、時として冷き白石板の上に、枯れて落つる花瓣の音聞ゆ。

第九回

罌粟の花は溝に棄てられ、さま〴〵の花束ガルチェリが像の前にて枯れぬ。五月は六月になり、六月は七月になりぬ。ゲザはいまも猶夜な〳〵わが著作の見こみを養父にかたり「メ

ロヂイ」二つ三つ「キオリン」にて彈いて聞かせ、合歌のところの見こみはかうと「ピアノ」にてまね、その度ごとに面白からむといはせ、當座の曲多く作り、夢ごゝろにて精神のうちに響く怪しき聲を聞き、さて何一つ仕出さゞりき。

ゲザはガストンが家の向ひなる洗濯婆の住ひの一間を借りて、居どころと定めたれど、ほとほと朝より夕までガストンが家に來て、アンネットとゝもに面白き時をすごしつ。

ガストン、デリレオはいまおのがために役を見付けて、めづらしくもこれに名を署せしが、こは娘のためを思ひてならむか。役といふは芝居の書記にて、その外に或る新聞の雜錄を受持ちたり。それにて事足るほどの金をば贏けつ。いまこの家に入るものは、貧しさをば見で、みだりなる滿足のさまを見るなるべし。これラアエスタイン街の富なり。

このやり放しの中にてゲザは快く口を送りつ。かれがためには坐りごゝろよき椅子一つありて、その兩側の手すりに腕をもたせて、未來の望を語り、その背に頭をもたせて、「カポラル」烟草の煙のゆくへを見やるはおもしろく、又かれが臨む食卓の上には、いつも一罎の好き「ボルドオ」酒あるぞ嬉しき。

ゲザは何もなさゞるゆゑ、これを掩ふにたよりある長き食事を悦べり。珈琲飲むときには、アンネット向ひに坐りて、をり／＼一匙づゝ取りて飲むことあるを樂としたり。また日を銷するには、はや世の中にいひ傳ふる人なき樂譜を涉獵り、名のかくれたる詩人の作りしものを求めなどす。その中にて氣に入りたる句を得たるときは、誇大なること葉にこれを褒め、二たび三度、甚しきは二十度もアンネットに讀みて聞かす。彼は一語も佛蘭西語を解せざる門外の婢によみて聞かせても善きはずなり、されど門外の婢は、アンネットのやうなる美しき笑顔なきをいかにせむ。さて此句を新に譜に作りて、舊びたる「ピアノ」に上ぼして彈くに、この器は血氣の少年の作りし激しき曲を、慄ふ聲にて導くさま、老祖母の墓に片足ふみ入りて戀の歌をうたふ如し。

かゝるをりにはアンネットはその句を歌はせらるゝことあり。アンネットが聲はうるはしき「コントラルト」調なるに、ゲザよろこばせむとて、力を極めて歌ひぬ。ゲザは飽足らぬ面持して、いま少し樣子がありたし、いま少し氣を入れよ、といひ、指尖にて少女が胸の邊をさして、こゝに何をも感ぜざるか、と繰返して問ふ。少女は打笑みたりしが、忽ち赤くなりて面をそむけつ。

ガストンは始よりゲザと娘とを兄妹の扱にしたれば、何の面倒もなく、治りきはめて善かりき。父は娘がゲザのまはりにて立働き、かれがためにさま／＼の用を足して惡き癖をつけ、をり／＼大なる目にてかれを見るに心づかざりき。

ゲザがアンネットに對するさまは、初極めて冷淡にて、その優しさは兄の妹にやさしきに似たりしなり。七月の末には冷淡の度いつもよりも甚しく、ゲザは少しラアエスタイン街を忘れて、當時「ガレリイ、サント、ユベル」の芝居に居りて、ブルクセルに倦みたる巴里の女優に交りたりき。

アンネットはこのさまに、相貌變るまで妬みしが、ゲザは何ゆゑに少女の樣子の常ならぬか知らで過ぎぬ。

ある日ゲザは少女が瘦せたる頰の邊を優しく摩りて、「奈何せしか、何ゆゑに悲しげなる、街の空氣のあまりに惡しきためならむ。父上、この子をしばし海邊へやり玉はずや。」

ガストンは肩を聳かして、「殘念なれどわれはさる費を出すこと能はず。」と答へき。

ゲザは、「なに、費とや。われも已に久しうおん身等が恵にあづかりたれば、そればかりの事はいかにともせむ。」といひしが彼は女優マドモアセル」イルマに贈りし金の頗る多かりしを忘れたるにて、この時急ぎて我室にかへりて、銀行紙幣二三枚取出さむとおもひて見れば、嚢底唯二十「フラン」の貨幣一つのみなりき。暫しは呆れて頭を掻きしが、忽ち又打笑ひて空になりし財嚢を養父に持てきて見せ、「いまこそわが高慢らしき言を笑ひ玉へ。わが富はこれのみなり。さはいへ、暫しのことなり。我頭にも我手にも黄金の源はあるものを。唯仕事にかゝる興だに來ば。唯少しの熱だに起らば。おん身は我「オペラ」の卵黄のおきどころを知らずや。」

八月の末女優イルマ、ブルクセルを去りぬ。ゲザが心は鬱々として樂まず。この心は業に就く緒となりぬ。

彼はある朝例の著作の熱を得たりとて、譜を書くべき紙を陳べ、手にてこれを平にし、鵞「ペン」を濡し、屋根裏の一室に唯一つありし脚あやふき小机に肱をもたせ、一行かきては忽ち又消し、欠伸し、みづから苦しさに堪へぬやうなりしが、暫し散歩したる後にこそとて公苑に出で、時々精神にひゞく聲にきゝほれて歩を停め、また行人につき當り、物思はしげに椅子に腰掛けつ。彼は忽ち左右の顳顬のあたりを押へつ。此時一曲ありて心中を流來れり。

ゲザは急ぎて室に還り、只管書きに書いたり。

ガストンが役所よりかへりて、二度目の朝食をなす頃ははや過ぎて、次の食の時となりしが、ゲザはまだ頭を譜紙の上に低れて書けり。紙の散りたるは、二ひら三ひら床の上にあり。戸を叩く人あれど、知らねば答へず。ガストン入りて、「わが子、けふは何とてひねもす顔見せぬぞ。病めるにはあらずや。」

ゲザはあやしき夢を喚覺されたる如く、眼を睜りたりしが、「否、仕事するなり、」と答へき。

その面は眞蒼にて、その手は慄ひたり。デリレオは强ひてすゝめて、「一時なりとも業を停め、何にても少し食へ」といひき。ゲザは澁りながら引かれてゆき、食卓に向ひしが何一つ食はず、何一つ言はず、唯一ところを見詰めたるさま、怪しきものを視る人の如し。食後には此間の中を歩みて、聯絡なき曲をつぶやくやうに唱へ、をりをり古き「ピアノ」の木板を押へて、脣を堅く閉ぢたるまゝにて、音一つ發するは、ある大なる、「フィナアレ」の終るところなるべし。また「オルケステル」の譜を指揮するまねして、手を空中にふり動かし、遙に床を強く踏みて、旨し〳〵と叫びぬ。

デリレオはむかし詩人、樂人などと多く交りしことあれば、これを止めもせず。彼は狂人、不幸に陷りたる人、その外著作をなす人に對する心にて、ゲザをやさしく扱ひぬ。されどアンネットはゲザが心知らねば、いつも鄭重にもてなすには似ず、いま聲高く笑ひしを、ゲザ又いつになく腹立て、善く休み玉へ、と輕くいひて去りぬ。此夜はゲザ曉までその「オペラ」を作りき。

これより數日の間はゲザ食はず、眠らず、面色變はりて、餘所目には樂しからざるやうなりしが、みづからは言ふにいはれぬ愉快を覺えき。デリレオは、「あまりに働きて精神を傷ること勿れ、聲を失ふやうに空想をも失ふことありといはずや。唯程を守れかし。」と諫むれど、ゲザは美しき頭を打ち振りて、目をなかば閉ぢて笑ひぬ。おもふに養父がいひしことは耳に入らざりしならむ。

ある日ゲザは喜ばしげに聲を擧げ、第五齣を造畢りしが、第三第四の兩齣はまだ形もなきに、空想忽絶えぬ。天馬は蓋しかれを擲落したり。天馬はあまりに鞭打たるゝときはかく憤な

きものなりとぞ。彼は擯落されて下界にあり。さきに見し上天の境はいま烟の如し。

頭痛甚しく、沈鬱の症となりて見れば、さきに作りし曲迚に賑ふべきものなりし如く、いまは前に善きところのみ見し代りに惡きところのみ見て、これを古人の作に比べ、齒を切りて額を撃てり。

ゲザは今おのれが作りしものを渾て過激にて可笑しきやうに思ひて、唯極めて冷淡なる樂を弄び、好みてバハが「シャコンヌ」を彈き、ショペンが「ノッツルノ」は我神經を傷るといへり。彼が態度は重き病をわづらひて、今將に治に就かむとする人の如く、衣は緊りなく、膝はふらふらとゆらぎ、常に緑いろの部屋の最暗き隅に坐して、頭を手掌にもたせ、目を見詰めたるまゝ空しく時を過しつ。

あるときおのが作を「ヰオリン」にて試みしが慌たゞしく樂器を擲ちて、例の椅子に倒れかゝり、自ら爪を嚙み、忽ち痙攣のやうに泣きいだしぬ。アンネットはこれを見て恥かしげに近寄り、かれが頭を摩でゝ、「ゲザ、才ある人はかくまで悲しきものにや、」と問ひぬ。

ゲザは聞きて少女を我膝の上にかき抱き、髪に、目に、唇に接吻するを少女は、はじめ驚き、中ごろはうれしく、後にはまた恥かしくなりて避けむとす。ゲザは少女が身をばゆるしたれど、手を取りて放たず、やさしき聲して、「アンネット、おん身はわれを嫌ひ玉はぬにや。おん身は我妻となり玉ふべしや。今とはいはじ。わが名高き樂人となりたる上の事なり。われに力はなくとも、おん身を力にて名高くならむ。」少女は赤うなりて、「わが如きおろかなる少女を何とかし玉ふべき、」とさゝやくに、こなたは戲れて、「おろかなりとも、わが心に協ふを奈何せむ、」といふ。

少女は頭を垂れてゲザが手に接吻し、身をずらして、ゲザが椅子の下なる低き踏臺の上に坐りぬ。ガストンは還りてこのさまを見、二人がいひなづけを許しつ。

第十回

ゲザがアンネットを愛づる心は日にけに深くなりて、アンネットはいまゝでの恥しげなる樣子を棄て、戲れに抗抵する如き癖を見せたり。最早二人を兄嫦と看做すべきにあらねば、デリレオはゲザと少女との交際を夕のみとし、その外日に一たび共に散歩することを許しつ。樂しきはこの日ごとの散歩なり。アンネットは好みて人氣繁き街を歩み、飾店の前に立駐りては、「おん身名高き人になり玉はゞあの飾買うて玉はれ、」などいふ。その飾といふは美しき紐、こがね色の靴などなれば、ゲザは心にゑみて翌朝のぞみの品に短き文を添へてやりなどす。かゝる費はこの頃人に樂を教へて得らるゝなりけり。

ゲザはまた好みて少女を引きて、人けなく淋しき公園にゆき、霜月の風物淒く、木々の梢を鳴らすとき、浮世を忘れて、唯夢の如くならび行けり。をり〳〵道に大なる水たまりあるときはゲザあたりに人なきを幸に少女を抱いてわたす。少女はゲザが腕に身を寄掛けて、かれが餘り氣抜けしたるやうなるとき、手に力を入れて呼醒し、「何か少し話して聞かせ玉へ、」と請ふ。この時ゲザ濕ひたる目にて少女が面をみ、「おん身が愛らしきことよ、」とのみいひ、繼ぐべき言葉を知らず。

ゲザは戀に物みな忘れ、退屈極なき情人なりき。この頃彼はまた著作をはじめ、前のやうに奮ふことはなけれど、勉めて業を取りたり。「オペラ」のかたは暫く打ち置きて、今殆ど作りをはりしは、ダンテが地獄の段を「オラトリウム」やうの譜にせしものなりき。

第十一回

十一月の末つかたの事なりき、或る夕莫ゲザ忙はしげに緑いろの部屋に馳入りて、「父上、アンネット、」と呼びぬ。デリレオに何事ぞと問はれて、「ステルニイが手紙屆きしが、次の週にはブルクセルに來むと書いたり、」といふ。アンネットは望を失ひたる樣子にて、「あまり慌ただしくのたまふゆゑ、富の大籤引得たまひしか、さらずば月に五千『フラン』にておん身を雇ふもののありとの事ならむとおもひしに。」

ゲザが不平の色を見て取りし養父は優しく、「娘が心づきなき言葉をあしらうな聞きそ。ステルニイといふ人を奈何なる人とも辨へねば、おん身が喜をも解せざりしならむ。」其夕ゲザは少女にステルニイが上悉しく語り、おのれが十年以來の交際の事をも告げき。

第十二回

少女は解し得たり、ステルニイといふ樂人の聲價いかなるかといふことを。今はゲザも少女が客を迎ふるこゝろの冷ならむを憂へざるべし。それもことわりなり。今はブルクセルの府内、到る處ステルニイが名を聞かざることなきやうになりぬ。新製の菓子、新形の漆靴、又は手拭など、皆ステルニイが好といひ、小兒の遊にもステルニイが合奏のさまをのみ見つ。當時の小兒のかゝる遊をなしゝは、今の世にて「コンシュル」とマレンゴの役とを演ずるに同じかるべし。

アンネットはこの頃唱歌ならひに行けり。これもゲザが少女可哀がりての奢なり。アンネットと共に唱歌習ふ少女等は唯ステルニイが事のみ物語りぬ。

教子の一人は「モンネエ」の樂長を伯父に持ちたりしが、或日ステルニイが伯父の家に忘れおきたる手袋なりとて、稽古所へ持て來しを、人々微塵に引裂き、爭ひて守袋に收めつ。この鞣革のきれを二十年間頸に掛けたる少女もありきとぞ。

ステルニイが名譽は當時其極處に達したりき。その最後の魯西亞行は、いにしへの戰國の民が凱旋の王を迎ふる如く、オデッサに入りしときは祝砲轟き、モスクワに入りしときは大學の書生群をなしてその車を迎へ、はては車前の馬を脱して手づからこれを牽き、街の兩側の窓よりは、婦女の擲ちし花束、雨より繁く、ペエテルブルクに入りしときは某の大侯の夫人おのが宮居を明け渡して旅館にせしめ、贔屓の人々より贈りし裘、桂冠、金剛石嵌めたる環、「カヰア」盛りたる大樽など許多の外に、純金の「サモワル」（茶器）さへありきと聞えぬ。

ゲザはこれ等の噂を洩らすことなくアンネットに語りきかせしが、魯西亞の貴婦人が爭ひてステルニイを寵し、渠に卻けられしゲオルグ家の侯爵夫人は、興行の最中に短銃にて自殺せしことには及ばざりき。

ステルニイが着きしときは、ゲザもガル、ドユ、ノオルといふ停車場まで出迎へしが、ブルクセルの民の過半、場の内外に集りたれば、唯一握手を得たるのみ。その時ステルニイは「オテル、ド、フランドル」に投ずる積なれば明朝來よといひき。

翌朝「オテル」に往きて見しに、ステルニイは机に向ひて、左手額を支へ、右手筆を握りて、塗抹したる跡多き樂譜の稿をながめ居たり。額は鋭くなりたり。斷えず上流の人と交はりしためにや、神經質を帶びて際立ちたる動作、器械的に人を敬ふ癖など、渾て一種名狀しがたき容體を養ひ得たりと見ゆ。想ふにステルニイは今眼を開きたるまゝにて眠るやうになりしなるべし、兎の如く、又宮中に伺候する人々の如く。

ゲザが一間に入るを見て、こなたへ振向き、「恙なかりしや。又相見るこそ嬉しけれ。いつもおん身と目を合はするときは、若やぐやうなる心地す。おん身が餘りに久しくブルクセルに留まりたるを聞きて、思惑ふのみなりき。何事ありての滯留ぞ。今頃はマリンスキイと海山のあなたにあるべきに。」

ゲザは面を赤めて、吃りながら答へき。「彼約束をば破りたり。この身を縛られむも望ましからざりしゆゑ。」「彼約束をば破りて、怠惰ものにやなりたる。」ステルニイが我子に對するやうなる待遇は故の如くなりと知るべし。「さてもおん身の肥えたることよ。少年の技術家には似つかはしからぬことなり。われを見よ。骨と皮とのみ。今は何事をかなしたる。目的ありや、奈何。」ゲザ。「怠惰ものにはならず。人に樂を教へて、忙しき目を見る身なれば。」

ステルニイ。「なに、人に樂を教ふとか。不思議なることを聞くものかな。それよりはマリンスキイと亞米利加へ往きて、金を攫るかた遙に優りたらむに。『キオリン』ならふ少女に美しきは少きものを。おん身が業はそれのみにはあらじ。教授時間の外は何事をかなしたる。」

ゲザ、「譜を作るのみ。見ればおん身もおなじ業をなし玉ふやうなるが。」

ステルニイは、「否、我境界にては、譜を作らむこと思ひも寄らず、」と答へつゝ忙はしく草稿を疊紙の中へ收め、「明けても暮れても、汽車の一室、合奏の座敷。かゝる境界には早や厭果てたり。唯欲しきものは、四週間ばかりの休暇なり。馬鈴薯添へたる『ビフステエキ』、田舍の空氣、花畑と心おかれぬ友一人。」

この時戸を敲く音して、從者入り來り、何事かいはむとするを、ステルニイ遮りて、「われは不在なりといひしに。」

從者、「されど例の伯爵の君なれば。」

ステルニイ、「沒分曉漢かな。われは不在なりといはずや。客は何人にもあれ。」

從者の退くを待ちて、ステルニイ不興げに、「あのとほりなり。十五分の間には、十人の客に逢はねばならず。これ程五月蠅き生活は少かるべし。その上、いつも同じ戲して、いつも同じやうに喝采せらるゝも苦しき限ならずや。」

「いかに喝采の聲に厭きたまひぬとて、一たび口笛の音聞かむとは願ひたまはじ、」とゲザ笑みつゝいひしに、ステルニイ少し面色變はりて、先づ少年の顏をながめ、次に樂譜を收めたる疊紙を見つ。されど少年の顏は常の如く優しきに、ステルニイが疑忽ち晴れぬ。

暫しありてゲザ遠慮なく言出づるやう。「げにおん身が世わたりのあまりに忙しくて、譜を作る暇なきは惜むべきことなり。おん身の出しものは、今まで書更の外なかりき。何にても少し見せ玉はずや。」

ステルニイは顏に皺寄せて、「餘り他人には見せたくなし。公にせぬうちに匂失せなば、いと惜しかるべければ。」

ゲザが面は朱を灑ぎたるやうになりぬ。「餘り他人には、他人には。」

ステルニイは聲高く笑ひぬ。「昔の癖はまだ失せずや。おん身を怒らせむとはおもひ掛けざりき。あれはふと言ひ損ぜしなり。誰かおん身を他人扱にすべき。我著述といふべきもの出來たらば、最初に見すべきはおん身なり。されど此疊紙の中なるは、見るに足らぬものなり。おん身も知りたる某の侯爵夫人が、わざ〳〵維也納まで手紙を寄せての頼なれば、辭まむやうなく、責塞ぎに作りしものなり。所謂姫の「バレツト」、眞面目なる沙汰にはあらず。いかに、我心は分りつらむ。機嫌をなほして、そこの鈴を引いて呉れよ。早や朝食喫ふべき時なり。おん身が此地に留まりたる眞の理由は喫ひな

がら聞くべし。譜を作らむためのみとは思はれねば。」

食間ゲザはおのれが秘事をステルニイに告げしに、ステルニイ驚きたる面持して、「さてはかゝる事ありしか。おん身がためには、それより癡なるしぐさあらざるべし。若し苟且の戀の、あまり久く結ぼれたるならば、我力にて救出さむとおもひしが、結婚の約束したりと聞きては力及ばず。意外なる事かな。おん身が年にて妻を娶り、一家のあるじとならむは、これ身の破滅なり、これ自ら墓穴を掘るに同じ。かく言へばとて、おん身が軀を埋むる墓穴とな思ひそ。埋もるゝはおん身が藝ならむ。おん身が軀はよの常の交をなして、淺々しき德義のために縛せられ、これがために榮ゆるなるべし。おん身は『オヽルデルメン』のやうに肥ゆべし。洗禮は頻に行はるべし。よぢれ上りたる袴を穿きて、樂譜の册子を小脇に插み、街より街へと走りめぐりて、人に音樂を教へ、芝居に出でゝ『ヰオリン』『ひきの首座を占めむとおもふより外には、望なき身となるべし。若しその眞中に立ちて調整ふる杖を揮はむとおもはゞ、是れ望の絶頂ならむ。馬鹿らしさよ。おん身が背には旅仲間の勸進元の杖をこそ受くべきなれ。安樂なる家中の椅子の軟き摸倣入りの革に、まだうら若き才子の頭を据うべきことかは。況てや汝が頭を据ゑむとする張革の裏には、羽毛多からむともおもはれず。(姻家は貧しかるべし。)然しそはおん身が問はざるところならむ。藝に倦みて憩はむとするに、善き遁辭だにあらば、おん身はそれにて安堵するならむ。おもふに馬鈴薯盛りたる嚢も、汝がためには恰好の臥床なるべし。」

ゲザ聞きもあへず。「おん身が言は無宗旨の論に似たり。おん身は愛情の上の無神論者なり。」此答を聞きても、ゲザが夸張の癖まだ止まぬを知るべし。又語を續ぎて、「われとても明後日婚禮を擧げむとはいはず。位置定まりての後ならでは、夫婦にはならざる積なり。」「責めてもの事なり。對手は誰ぞ。教へ子の一人なるべし。胖大りたる市人の娘にて、『ブロンド』なる少女ならずや。」

「少女は我養父の娘なり。」

「さてはガルチエリが産みし子ならむ。それを御身は妻にせむとおもへるにや。妻に。」

ゲザ小聲になりて、「その愛らしさをおん身は想得ざるなるべし。」

ステルニイは、「ガルチエリが産みし子の美しく愛らしかるべきを、爭でか想得ざらむ、」といひて、日に夢みるごとく、戀ふるごとき色をあらはし、さて言葉を續ぎて、「されどそれを妻にせむとおもふこそ訝しけれ。おん身はガルチエリが性を知らぬなるべし」

ゲザは脣を嚙みて、「我養父はガルチエリを得てみづから幸なりとおもひき。」

「いかにも幸なりとは思ひしならむ。ガルチエリがために狂せしは、彼のみにはあらざりけり。彼はガルチエリが靴を磨きても、みづから幸なりとおもひしならむ。デリレオが夫婦の間の事をば、己れも善く知りたり。今は昔語になりたれど、藝人の仲間には猶これを傳ふるものあり。唯人の名をば早や錯りたり。われはデリレオといふ名を忘れざりき。彼はおん身が親類なれば。又彼はわれに初戀せさせし女の夫なれば。」

ゲザ驚きたるさまにて、言葉忙しく、「ガルチエリがおん身の初戀の女なりとか。」

ステルニイは掌にて額を按へて、苦々しく笑ひぬ。「さなり。わがガルチエリに逢ひしは『ダグウル』の座敷にての事なりき。我齡はまだ十八にならぬ程にて、容貌は女子の如くなりき。我戀はさこそをかしかりけめ。ガルチエリは只、

我を嘲笑ひしのみ。我戀は片思にて、遂に協ふ期なかりき。それより早や二十年を經たれど、ガルチェリといふ名我耳に入るときは、蒸熱き氣わが脈絡の中をめぐる如き心地す。さても彼の美しかりしことよ。其姿。其笑顔。其髮容。彼が髮は暗色なりしが、顳顬、項の邊に赤き光ありき。その光あるところは黄金の粉をふり掛けたる如くなりき。そが上にその立居振舞の大やうなりしこと。」

ステルニイは忽ち語路を斷ちて、空を見詰めたり。ガルチェリといふ記念は、此人の胸の瘡痍なり。ゲザは友人の面色變はりたるを見て、おのれも氣色妥ならずなりぬ。

ゲザ、「かくまで類稀なる美人のいかなれば我養父の妻にはなりけむ。」

ステルニイ、「いかなれば。いかなれば。ガルチェリは聲を潰され、戀人を失ひ、病身になりぬ。其齡は三十八なりき。デリレオは產ある家の子にて、嘗て慈善事業のために失ひし金は少からねど、猶殘りたるところ妻を養ふには餘ありき。デリレオは妻におもひの儘の奢をせさせしに、妻は娘一人を產みて半年ばかりの後、由緒あやしき波蘭人と驅落しつ。おん身が娶らむといふ少女は、そのとき跡に遺しゝ娘なるべし。程經て後、デリレオはとある屋根裏ずまひにて、病みおとろへたる妻に邂逅ひ、優しくもまた我家につれ歸りて、その終を見屆けつ。おもへば憫むべき男なりけり。ガルチェリを娶りしは、固より親戚の言葉に負き、朋友の諫を用ゐでの事なりき。今は財產もなくなりたれば、さてこそラアエスタイン街には遷りしなれ。デリレオが運命は果敢なかりき。されど一年半ばかりの間、ガルチェリが傍に居りしは、せめてもの事なるべし。」

言畢りてステルニイは暫し空を見詰めて物案じするさまなり。

ゲザは進寄りて輕く其臂を按へ、「おん身が斯くまで牢記して忘れたまはぬガルチェリが面影を傳へて、その罪障を傳へざる少女なれば、わがこれを娶らむとおもふも宜ならずや。」

ステルニイは少し苦味を帶びたる笑を漏しつ。「少女が年はいくつぞ。十六か十七か。」

ゲザ頷きて、「先づその位なり。」

ステルニイは、「その位にて性質の知られむ樣やある、」とつぶやき、指にて卓を敲きて、輓歌の節をなしたり。ゲザは面をあかくせしが、少焉ありて、「われは深くおん身を愛すれども、今のやうなる語氣にて物言はるゝときは、いかにも堪へがたければ、先づ兎も角も我結髮の妻に逢ひて、さてわが善く擇びしか、見誤りしかの判斷を聞かせよ。ラアエスタインの街をおそろしと思はずば、近きに我養父の家に招きて茶一つ薦むべし。」

ステルニイ、「いつにても善し。明日にても、明後日にても。おん身が家の人は早起ならむ。朝疾く出掛に寄るべし。」

數分時の後、ゲザ暇乞して歸るを、ステルニイ戸の外まで送りて、梯の欄越に、「さらば明後日の朝八時頃に往くべし。おん身が結髮の妻こそ見たけれ。」

第十三回

ラアエスタイン街の十番には、けふしもさも事ありげに見えたり。蒸したての菓子の香は、梯にも廊にもみち〳〵たり。アンネットはおもての色絶間なく變りて、道具のおき處、幾度となく革むるもかしこゝの損じたるを掩はむとてなるべし。手を收めて後、美しき目にて綠いろの壁を見て、「彼君はこのあばら家をいかにか見玉ふらむ、」とおそる〳〵いふを、ゲザほゝ笑みながら慰めて、額に接吻し、輕く頰のわたりを敲き、「心をな苦めそ。吾友は汝を見むとて

こそ來れ。この家を見むとてにはあらず。」

娘にも增して心を痛むるは、父のデリレオなり。黴ばみたる行李より舊き禮服を掘出し、その樟腦の臭を帶びて、襟の太きところは公民王の時の趣味を見せたるをも厭はず、これを身に着けて、彼室より此室へとさまよひありき、「ハンカチイフ」引出して壁に掛けたる畫の欄を拂ひ、半ば暗うなりたる鏡の前に立ちて、愧かしげに斜睨し、震ふ指尖にて大なる「アトラス」の襟飾を整へなどす。この襟飾は縫とりいと美しき「バチスト」の汗衫の黄ばみたると共に、ルイ、フイリツプが世に時めきしものと見えたり。

ゲザは一家の騷しきさまを見て、戯に嘲りたれど、心の中には大事の前なれば、さもあるべきことゝ思へるなるべし。

八時の時計響くときは、皆胸に波打たせ、八時を過ぐること五分になりしときは、デリレオ、「彼君は來ぬやらむ、」とつぶやき、十五分過ぎしときは、アンネット訝かしげに結髪の夫を見やりて「彼君は慥におん身に約し玉ひしか、」と問ひぬ。八時三十分になりしとき、外の廊のわたりに物音するを聞きて、失望に慣れたるデリレオは「斷の使にはあらずや」といひき。

「デリレオ君の住居はこゝなりや、」と梯の上にて問ふ聲はいとみやびたり。老いたる新聞記者デリレオは左手の拇と人さしゆびもて、おのが頬を擦り、强ひて鎭まりたるさまを見せむとしたり。アンネットは身を隱しつ。

二三秒にして扉開き、あやしき緑いろの座敷に入來りしは、氣高き明髪の男なり。着たる裘を戸の外にて脱がざりしため、しばしは度を失ひたるやうなりしが、そは眞に一瞬間の事にて、ゲザ馳寄りてこれを脱がするや否や、ゲザが引合せの禮をなさむとするを遮りて、デリレオが手を優しく握り、われらは舊識なるものをといふ。デリレオは輙くこれを受けば、無禮なるべしとおもひて、手を動かしてとゞめむとせしに、ステルニイ重ねて、「君はその昔ダグウル伯爵夫人の許にておち合ひし情癡の一少年を、はや忘れやし玉ひけむ。こなたにては、當時君がわれを憐み、われに友情を寄せたまひしことを忘れ侍らず。君が友情はまことに我を慰めき。當時は君と我と殆ど同病相憐むやうなるさまなりしが、後には君のみ福を稟けたまひき。」かくいひつゝステルニイは壁に掛けたるガルチェリが像を仰見たり。そのいち早き目には此油畫を見出すこと何の苦もなかりしなるべし。

デリレオはこのやさしき言葉を聞きて、目に泪を浮べ、親しく客の手を握りたり。

さてといひかけて、ステルニイは面白げにゲザが顏を見たり。君がわれに約し玉ひしは、この再會のみにはあらざりき。この外に猶生面の人に引合せ玉ふべき筈なりしが。

ゲザは後を見かへりて、「おろかなる子ならずや。恥かしとて隱れたりと覺ゆ。」言畢りて次の間に出でしが、かなたより優しく促す聲聞えたり。「いざ〳〵、子供らしき振舞して、人に笑はれ玉ふな。」ゲザが腕に依りて、面には羞を帶び、脣には熱を見せて出でたる少女は、氷の如く冷なる指尖をステルニイが掌の内におきたり。

心迷ひたる如くステルニイはしばし少女を見詰めて居たりしが、みづから抑へて輕く少女が手を執り、脣におし當てゝ、「かく慣々しきを怪み玉ふな。君が結髪の夫の爲には年久しき友にて、又君が母御のためには崇拜者の一人なりき。」さてデリレオに向ひて、「餘りに面影の似玉ひたれば、ほと〳〵おそろしき心地しつ。おもふに母御の再來にやおはすらむ。」

ラアエスタイン街にてステルニイが優しさはげに類なかるべし。されどこの優しさは、彼が

ためには何の苦をもなさゞりしなり。おのれが永く居らむことをおそるゝ處にも、しばしは遊びて興ありとおもふは、富貴の人の癖なり。ステルニイがこの家にての心は、斯の如くなりしのみ。

デリレオに向ひては、彼を敬しておのれを抑へ、ゲザに對しては、半ば朋友間の調子を取り、半ば父の子を遇する如き氣色を見せて、これに戲れたり。さて二碗の茶を喫みて、菓子の旨味を讚め、おのが飢に誇りたり。デリレオは其禮服とおなじ舊さの說にて、げに昔の趣味には善く協ひたりけむと思はるゝことゞもを語りいだしぬ。

面の色蒼ざめ、一たびも口を開かで、客に對坐したるガルチェリが娘は鼻白みて仰見むともせず。

さてありながら、少女は客の姿をも、その振舞をも洩らさず見たり。客はラアエスタイン街より外へ廻らむ心構に、集會に赴く時の服を着けたるが、この服はいとよく似合ひたり。少女がためには、客の白き襟飾、その「ジレエ、アン、キョオル」、その式の如くなる髮の形など、皆尊くのみ見ゆるなるべし。

ステルニイは優しく言葉を掛けしが、少女は唯ことば少くなに應ずるのみ。

會話のあまりにはえぬに、客はデリレオに向ひて、「娘御は音樂のおんたしなみあるべし、いかに。」

「唱歌少し學ばせしこと侍り。」

「み聲は定めて。」ステルニイはガルチェリに似たるべしといはむとせしが、語を畢へざりき。

ゲザ傍より、「何なりとも少し歌うて聞かせずや。强ひてはいはじ。されど賓人のために。」

「そはいかに嬉しからむ、」とステルニイ引取りていひき。少女は答をもなさで、夢の中にさまよひありく人の如き姿にて立上り、「スピネット」(樂器)の側にゆき、譜を倚譜架の上に載せたり。譜はマルチニの作にて名高き「戀の樂」と題したるものなりき。ステルニイいち早く彈き方にならむといひしに、少女は羞を含みて領きつ。少焉ありてこの貧しげなる綠いろの部屋に、不朽の戀の歌の中にて最不朽なる言葉、柔く哀なる聲に擔はれて漂ひたり。全歐羅巴の唱歌女生徒の力の猶未だ滅すこと能はざるは此曲なるべし。

Plaisir d'amour ne dure qu'un instant
Chagrin d'amour dure toute la vie—!
(戀の樂てふものは、唯ひと時のものなれど、戀の苦艱は絕えざらむ、人の命のつくるまで。)

少女は式の如く兩手を輕く疊ねたりしが、頭をば式にかゝはらで右の肩に傾けたるさま、その重さに堪へざる如く見えたり。その聲は微におそる〳〵胸より洩出でたり。聲の胸のうちにて顫ふさまは、抑へたる歔欷の如くなり。

少女が側に步寄りたるゲザは、客に向ひて、「おん身を恐れてなるべし。常には膽細き少女にあらねど。」とつぶやき、「ポオウル、プチイ、シャア」(あはれなる小猫といふことなり)といひて、アンネットが髮を撫でつ。

この罪なき戲も、見るに忍びざる如く、ステルニイは眉を蹙めて、デリレオの方に向ひ、「變らぬ聲なり。少しも變らぬ聲なり。善くも似たることよ。」さて少女に、「いま一つ歌うて聞かせたまはずや。吾願なれば。」

ゲザは積疊ねたる譜の中より手づから寫したる一枚を引出し、これを見臺に載せ、「心を措かで歌へ」とアンネットに說き勸め、自ら「スピネット」の上なりし「キオリン」を取り、「此曲は聲と『キオリン』とに作りたるなり。ステルニイ『ア』の聲を。」

ステルニイは賴まれて「ア」の聲を彈出しつ。

ゲザが見臺に載せしは、おのが作りし「ダンテが地獄」の曲の一段にて、「ネッソン、マジオル、ドロオレ」(Nessun maggior dolore)と題したるものなりき。この段は世に珍らしき結構にて、「ヰオリン」の絲聲嗟歎のかたみを喚起して、媚ぶるが如き調をなすとき、肉聲は低く柔なる夢寐中の調に始まりて、腸を斷つ苦惱の調に終るやうに作りたり。こはゲザが著作中にて最得意の一段なれば、少女が歌ひ畢りしとき、ゲザが頰は燃ゆる如くなりき。爾時ステルニイは覺えず手を木板の上より滑落させて、ゲザが面を屹と見詰め「こはおん身が作か。」

ゲザは頷きぬ。

「さらばおん身がために賀せむ。疑もなき傑作なり。」言畢りてステルニイはその少年の友を擁きたり。

十一時に垂とせし頃、ステルニイは用事ありとて辭し去りぬ。それ迄にはゲザに自作の曲の種々の節を彈かせ、いづれをも面白しと稱へき。

ゲザは客を送りてラアエスタイン街を出で、賑はしき處まで隨行きしが、ステルニイは何事をか思居たりけむ、言葉すくなにのみもてなしたり。ゲザ聲高く、「おん身が見たるところはいかに。」といひしに、ステルニイわれに返りし如く、「結果好きこと必定なり。」と答へき。

ゲザ笑ひて、「結果好しとは。我夫婦の間の結果にや。」この反問は意外に出でたりと覺しく、ステルニイは慌てたるさまにて、「なに、その事か。ガルチエリの後、はじめてかく美しき女を見たり。それさへあるに、聲のめでたさ。マリブランはものかは。」

「さて、」とゲザが問はむとせしとき、二人は恰もプラス、ロアイアルに來ぬ。ステルニイ急に友を顧みて、「かしこに車あり。最早無かるべきかと思ひて氣遣ひたりしに。さらば。明日は『地獄』を皆持て來よ。」

言畢りてステルニイは車を招き寄せ、これに飛乘りて去りぬ。

ラアエスタイン街にては此夕物語いと繁かりき。デリレオは頰紅きこと三鞭酒飲みし如くにて、常に増して能辯なり。ゲザは少女に向ひて、ステルニイが褒めし節々、おちなく語傳ふれど、少女は眠足らで喚起されし稚兒の如く、何事をもうるさがりたり。少女は唱歌のいつになく捗かりしを悔いて、遂らぬことをつぶやき、平生父の言葉多きを喜べるに似ず、けふはすこしも耳を借さず、果は眉を蹙めて、父上の部屋の中を彼方此方と歩み玉ふを見れば、目眩きて堪へがたしといへり。デリレオ聞いて、興を損で、椅子に倚りしに、少女は今更に氣の毒がり、許し玉へとかこちて、忽ち泣出でぬ。

ゲザは少女を膝の上に抱上げて、代りて淚を拭ひ、かにかくと言慰め、その頰を撫でつゝ父に向ひ、「この子はあまり引籠りてのみ世を送ればこそ、些細の事にもかく劇しく感動するならめ。この子の心慰めむ術もがな。」

父は苦々しきおも持して應へざりき。

ステルニイは夜の三時すぎに客舍の梯を上りぬ。けふも衆人のおのれを喝采せしことは常の如くなりしが、何故か心樂まず。

「路なる童も今は吾名を知り、掃除人足さへ振返りて、あれこそ名人のステルニイなれと指せり。されどわれ死なば、能く何物をか遺さむ。『ピアノ』の曲譜一つ二つはあれど、そは後人の笑を招くのみなるべければ。」かく獨言ちて思に沈める時、ゲザが歌は心の中に響きわたれり。寒からぬに膚栗立ちぬ。忽ち又美しきアンネットが事をおもひ出でゝ額を撫でつ。「家の中なる生活あまりに靜ならば、藝術の行末覺束なからむといひしが、彼がためにはその憂はなかりけり。彼少女は猶睡れり。されど母より

は熱情を傳へ、父よりは神經質を傳へたりと覺ゆ。その姿のめでたさ。」

第十四回

この頃ステルニイは心さわがしくなりて、名聞を好むことむかしに倍する如く見え、「ピアノ」弾く手も變りたり。强ひて非凡ならむと欲して、あやしき癖に陷り、指に任せて木板を敲きちらすを、聽衆は夢中にて譽め、批評家はいみじき發達なりと稱へたれどステルニイが胸はなか／＼に安からざりき。

ラアエスタイン街の溝は凝りて流れず、基督の像のもろ手よりは冰柱長く垂れ、みどり色の座敷の窓硝子には、この頃の凍に時ならぬ花咲き出でぬ。されどアンネットは脣いつも燃えて、掌いつも熱かりき。あるきざま足を曳く如く見えて、立振舞に夢心地ならずやと疑はるるところあり。目は遠きところをのみ見たる如し。今迄は結髪の夫に對して、子供らしき强情をありの儘に見せ、絶えて氣を兼ぬることなかりしに、近ごろはいづくよりか他人行儀出でて、ゲザが言葉をば一も二もなく守り、時ありては又故もなく怒を帶びて、そのいひつけに負くことあり。さてかくつれなくもてなすこと久うなりて後、俄におもひ立ちしやうに、また心を籠めてゲザに親み、淚を流して日頃の無禮を謝びなどす。ゲザはこの定なき振舞を見れどもあながち心にかけず、をり／＼面白からずおもはるゝ事あるをも、病ある子供の所爲のやうに、ただ知らず顏に看過しぬ。とあるゆふ暮、ゲザと父とは例の文學美術の話に深入して、あたりの事を打忘れたるをりしも、いま迄こと葉少く、思ふことありげに、馬尾滿たる剛き長椅子の片隅に倚り居たりしアンネットおきなほりて小き頭を擡げ、なにやらむ聞くやうなりき。

この時輕く扉を叩く人あり。ゲザもデリレオもまだ聞きつけぬ間に、アンネット忙しく入り玉へと呼びぬ。扉は開きぬ。「邪魔にはおぼさずや、」と優しきこわ音にて會釋し、此間に入るはアルフォンス、ド、ステルニイなり。

數日の後ゲザ外稽古を畢りて歸りしが、「こはいぶかし、アンネット、こゝには龍涎の香殘れり。ステルニイ來ざりしか、」と問ひぬ。「次の合奏の切符をもて來ぬ、」と答へし少女は面を擧げざりき。

障なくば明日來よ。語るべきことあり。ステルニイ。

この口上がきをばゲザある夕おのが室にて見出しつ。翌朝正直に「オテル、ド、フランドル」にゆきしに、ステルニイ出で迎へて、「金おほく儲くる心はなきか。」

ゲザ、「問はるゝ迄もなし。我が窮したるをば、御身も知らずや。例の曲を用ゐるべき機會ありとの事か。」

ステルニイ、「まだその口をば見出さねど、外に善きことあり。それがしが昨日得し電報を見ればキナンスキイが臂を折りたるために、マリンスキイは食はせて一萬『フラン』の月給にて、上等の『キオリン』ひきを雇はむといふ。おん身は雇はるゝ心なきか。」

ゲザは頭を低れて小ごゑになり、「幾月の旅ならむか、」と問ひかへしつ。

ステルニイほゝ笑みて、「六月、おそくとも八月をば越さじ。返事をば明日聞かむ。よもや船に醉ふことをおそるゝ男にはあらざるべし。」

ゲザ、「その事にはあらず。されど一應アンネットにも相談すべし。六月か八月かといへば、短き間にもあらず。道も隨分遠し。アンネットはおそらくは承知せざるべし。然しおん身が心入の程はありがたし。」

かく答ふるところへ下部來て、貴き客の刺を通じければ、ゲザは避けて歸りぬ。

マリンスキイが雇入の事を聞きしときのアンネットが喜は、ゲザがためには意表に出でにき。アンネットは、いさましく、「おん身がかゝる名家になりしをば、今までも知らざりき、」といひぬ。

「雇はれて行くべきか、」と問ふゲザが聲は震ひ、その眼には涙みちたり。アンネットは暫し驚き呆れたるさまにてゲザが面を打守りしが「おん身はことわらむとおもひ玉ひしか。富める人になりて、亞米利加より歸らむ時をおもひ玉はずや、」とつぶやきぬ。

ゲザは猶一たびといき吐きしが、頭を屈めてアンネットが額に接吻し、まことにおん身が言ふ如し。わが猶豫ひしは臆病なりき。」

ゲザはマリンスキイが黨に入りぬ。

數日の後ラアエスタイン街にめづらしく立派なる會食ありき。座につらなりたるゲザは日ごろ嗜むものをも皆その盤におきて食はず。デリレオは勉めて雜話をなし、哀しげなる一座の光景を掩ひ蔽さむとして、胡椒を果汁の上にふりかけ、最後に震ふ手もて杯を擧け、ゲザが歸鄕の早からむことを祈るといひぬ。

今までは興ありげにゲザが出發の日を數へしアンネットは、この時に至りて刻々別離の苦を覺ゆる如く、面の色變り、僕には手だに觸れず、また一言をも出さずなりぬ。その目の中には限なき苦痛見えたり。ゲザあはれがりて引き寄せ、血色なくなりたる頰を撫でしに、少女は咽び泣きてゲザが體にからみ付き、繰返して、「ひとり殘して往き玉ふな、」といひぬ。

この理なき言葉にはゲザ答へず、唯優しくもてなして賺し慰め、さて父に向ひて、「つとめて此子を慰め玉へ。折々は芝居にも伴ひゆき、時候好くならば、すぐに田舍へ引越し、興あるべき書を撰びて讀み聞かせ玉へ。我等二人に面白きやうなる書は惡し。此子に面白かるべきもあるべし。」

アンネットは涙の中より父に向ひて、「この人より善き人、世にあるべきか、」とかつ〴〵いふ。

この時婢入り來りて、「車はロアイアル廣こうぢに待ちて居り、ゲザ樣の荷物を取らむとて、會社の役人來ぬ、」といふ。ゲザは仰いで時計を見、「最早時刻なり。泣き歇め玉へ。」とアンネットをすかしつ。

アンネットは猶繰返して「ひとり殘してゆき玉ふな、」と泣きつゝいふ。

ゲザは少女の軟き腕をしひて引きほどき、言葉もなくデリレオが手を握り、走りて出でぬ。街に降り立ちしとき、樓の上に窓を推しひらく音して、アンネットが「かへり玉へ」と呼ぶこゑす。ゲザは仰ぎ見て「さらば」といひしのみ、足を速めてロアイアル廣こうぢに向ひぬ。

汽車の出でむとするとき、「ブロンド」にて脊高く、毛氈の外套を被たる人、車の踏板の邊に驅け付けたり。「ステルニイ」かと呼びしゲザが聲の中には感激の情みち〳〵たりき。

「わが來べきことをば知りつらむ。某の許に居りしが、いま一度あひて開運を祝せむとおもひて、人目をぬすんで來ぬ。」

車掌室の扉を開けばゲザは入りぬ。

ステルニイは再びよろこびをのべたり。

ゲザは車の窓より半身を出して、「おん身が親切はいつまでも忘れざるべし。嫌ならずば明日あれが樣子を見て呉れよ。」

「明日は必ずおとづれて、おん身が機嫌よく立ちしことを話さむ。」

車の動きはじむるとき、ステルニイは猶笑を含みてさしまねきたり。

別るゝときのステルニイが顏はやさしく、親切氣なる笑がほなりき。ゲザが念頭に殘りし友の顏もまたやさしく、親切氣なる笑顏なりき。

第十五回

南米諸國にブラジリアかけて黄熱盛に行はれければ、マリンスキイが一群は豫め定めし時を待たで歸鄕の途に就くことゝなりぬ。期に先だちて雇を解かれしために少し削られたる給金を受取り、誇張を極めたる批評ある新聞一束とアンネットがために買ひし紐育チファニイの飾二三種とを持ちて、ゲザは彼一群の人々を載せて歸るべき「アルカヂア」號の汽船に乘り遷りぬ。

アンネットをおもふゲザが心はいと切なりき。ブルクセルを立ちし時、少女が氣色あまりあしかりければ、別れたりし間のかなたの悲おもひ遣らるゝまゝに、復相見む折の喜もまた一入ならむとおもひぬ。ゲザは不意にかへりて少女を喜ばせばやとおもひぬ。その時の少女が目はいかならむ。船中に眠りても、忽ち歡の聲をあげ、アンネットと呼びて醒むること屢なりき。

ゲザが歸思矢の如き譯をば一行の人皆知りたり。ゲザはアンネットが事を人々に語りぬ、アンネットとステルニイとが事を。人々は皆ゲザを可哀がりて、アンネットが樣をおもひ遣り、無理ならぬゲザが歸思を慰むるうちにも、ステルニイを譽むるをば怪みけるが、ある低音うたひの翁は氣遣ひて、「あれはおそろしき人なれば、構へて心許し給ふな、」と諫めつ。

ゲザは其諫を惡く取りて怒の色をあらはし、低音うたひをきびしく責めしが、翁は唯ほゝゑみて相手にせざりき。

夥の中にジュセッピナといふ娘ありき。赤き髮ゆたかに生えて解きたるときは踵に達せり。色青く、黑き目圓く、鼻低く、口大なれば、その顏おのづから髑髏めきたり。されどこの娘にも女らしきところありて、微笑むときは愛敬あり。その絕間なくほゝゑむさまは、何事ありても喜ぶことなき人に似たり。ゲザはこの少女にアンネットが事を話すこと屢なりき。少女はいつも耳を傾けて聽き、時としては泣きぬ。少女はこの群の最高音うたひなり。中音うたひの男を夫にしたる次高音うたひは品行自慢にて嫉深ければ、ジュセッピナとは中善からず。

巴里にて夥を解かむとせしとき、ジュセッピナはゲザが頸を抱いて親嘴しつ。おなじ別離の式をば品行自慢の次高音うたひもせしが、ジュセッピナは小き黃金の十字架をわたし、小聲にて、「こはわが始めて尊き晚餐宗門の式に列りし時、母上に貰ひし物なれば、おん身が結髮の行末を祝きておくりまゐらす、我持物の中にておん身が結髮の人におくらむ程のもの此外にはあらじ、」といひぬ。藝人のうちには婚禮のをりよろこびに往くべしと契るもありき。

ゲザは人々にわかれて巴里を出でぬ。頃しも六月の末の半にて聖屍祭に當れりき。停車場ごとに白衣きたる娘幾人かありて、折々は加特力敎の法師の行列、遠きところに見え、その歌は世になき人の聲の如く、旅人の耳に震ひ響きぬ。

夕暮にブルクセルに着きて車を雇ひ、モンタニュ、ド、ラ、クウルの角へと命ずるに、この馭者の癖とて、さも面倒らしく、さもうるさげに高低不定の道をあゆませたり。北國の夏の常なる蒸す如き暑はこの市を掩へり。空氣の人を壓し、人の息を塞がむとするは、花卉をそだつる室の裡に入りたる如く、また餘りに爐火を熾にしたる部屋に居る如し。地上の物はつゆばかりも動かずして、唯本街の並樹の頂にすこしの戰を見る。きのふの雨の餘波なる路上の水溜は蒸氣を立たせたり。大空にはまたの雨催に雲やうやく聚れり。いづかたに向ひても、地平線のあたりに微なる雷の音を聞く。重く又哀に

雰圍氣の裡にみち／＼たるは、けふの祭の記念なる護摩の烟、蠟燭のゆえん、凋るゝ花のにほひなり。家々の壁には猶供物卓を倚せかけたるあり。卓のめぐりの木葉は萎び、花は枯れたり。ゆたかなる薔薇、やさしき向日草、おとなしき木犀草の花、皆敷石の上に落ちて、人に踏まれ泥にまみれたり。

ゲザがロアイアル廣こうぢにて車より下るゝとき、五色の縁とりたる帽を戴き、紅の「ショオル」を引掛けたる女ありて、道の上なる花を拾はむとあわたゞしく身を屈めつ。彼は法師の行列に逢ひては躱れ避くる女の一人なり。その家はラアエスタイン街にあれば、ゲザにおもてを知られたりき。ゲザはあはれに思ひて手を衣のかくしに入れ、二十「フラン」の貨幣一つ探り出して取らせしに女は首を擧げて、鋭く惡人の面を見、一禮して俄に紅粉を粧うたる顔をそむけつ。

ゲザはラアエスタイン街に來ぬ。溝よりは穢らはしき瓦斯立ち昇れり。蚊は雲の如く群りて四邊を闇うしたり。基督の像の姿はいつよりも悲しげなり。行違ふ人は多く會釋せり。「ヒュエエネ」といふものめきたる瘦狗どもは尾を掉りて近づき、中には冷なる鼻をゲザが手におし付くるあり。デリレオが家の平門にて青物あきなふ女に、「誰もうちには居らぬか」と問へば、「主人の君も孃樣も不在なり」といふ。便ながりて、「散歩に出でしにや」と問へば、「否、然にはあるざるべし、孃樣は寺にまゐられぬと覺ゆれば、最早歸り玉はむ。寺は鎖さるべき時なれば。若し「セント、グヅウレ」の寺に往きたまはば、出逢ひ玉ふべし。」

ゲザは寺の方へ馳去りぬ。その背後にはラアエスタイン街の女房共集りて彼を笑へり。

第十六回

大小さま／＼の街、車輻の如く集りたる凸凹ある辻に立てるは、「セント、グヅウレ」の寺なり。造作は輕くして看透すべく、勢はあたりを拂ひて、エグモント、オホンの魂のさまよふ市に聳ゆるはこの寺の塔なり。寺の壁の黒くなれるは神の名をかたりて罪惡をかさねし人々のために喪に居るかと疑はれ、寺の冷なる堂よりは墓穴に似たる陰森の氣出でゝ人の面を撲てり。

ゲザは進み入りぬ。堂の内はほの暗く、褐いろにして蝕みたる榻としらけたる藁の圓座とのあたりは、深き影に掩はれてよくも見えず。こゝに坐したる人數は最早いと少し。アンネットはいづくと尋ぬれど、たやすくは見出されざりき。

目に觸れたるは老女二三人の叩頭きたる、青き前垂したる子供の足をつまだてゝ聖瓶の水を掬ばむとしたる、二人の乞兒の門の傍に立ちたるのみ。式は早や果てゝ、高座には僧あらざりき、見るがうちに子供は外面に歩み出で、老女等もあらずなりぬ。

ゲザは又目を四方に放ちて覓めしが甲斐なかりき。やうやく高座に近きて祈ること葉一つ二つ陳べむとす。あやしげなる汎神教を奉ずるデリレオには育てられぬれど、徐加特力の祭に心引かるゝは、稚き折の母の躾殘りたるなるべし。

その時忽ち大息つく人ありと覺えて、影暗き方を見れば、わが足許に近く蹲踞りたるものあり。喜悦に溢れて、却りて胸苦うなりぬ。「アンネットにはあらずや、アンネット、」と繰返してさゝやきしに、うづくまりたる人は影の中より立ち現れぬ。アンネットはしばしゲザが面を打守りたりしが、一聲細く叫びて身をふるはせ、傍なる柱に倚りてわづかに自ら支へつ。

ゲザは餘りの迎へざまに驚き呆れ、怒を帶

びたる聲にて、「アンネット、いかにかせし。我面を見ておそるゝは何事ぞ。」

少女は頭を掉りぬ。その顏色の灰の如く見えたるは 薄闇き寺堂の内なればにや。「かく遽に來り玉はむとは、おもひかけざりければ。そが上に病身なれば。」

「病めりとか。さては無理ならざりき。わが俄に呼び掛けしを怪しきものゝやうにや思ひけむ。先觸なしに歸りて喜ばせむとおもひしは、誠におろかなる心なりき。」かく謝罪して、身の寺内にあるをも打忘れ、引寄せむとするを振り拂ひて、「こゝにては」と四邊を見廻はしぬ。さてアンネットはゲザが肘に身を持たせて寺を出でぬ。

空氣は濕りて鬱陶しげなり。雲は低く垂れたり。適ま燕一羽力なげに辻を横ぎりて飛び去りぬ。寺の内の薄闇きに比ぶれば外面は猶明かりき。

ゲザは熟しげに目を少女が面に注ぎつ。色は死人の如く青く、頰は昔より狹く、脣は昔より赤く、目は昔より大なり。昔の美しさは重味ありて、全くその形にありしに、いまは口鼻のめぐりに細なる線あらはれ、目のあたりに物おもはしげなる影生じて、その風情人を憫ませむとす。

「おん身がかくまで美しきをば早や忘れたりき、」といふゲザが聲は強き情に壓されて僅に洩れ出でたり。アンネットは笑みつゝ仰ぎ見しが、その笑は狂ほしげに怪しかりき。笑ふとき口のまはりの影の濃くなりしために、顏の美しさはいや增したり。

この時ゲザはアンネットが額の何物にか酷く肖たるをおもひ出しゝが、その物をばおもひ得ざりき。色褪めて凋れ掛り、よわ〳〵しき頭を街の敷石に持たせたりし薔薇の花にはあらじ。然らば何物なりけむか。然なり、いまこそ想得たれ、アンネットが今の面の少しジュセッピナに似たるを。

初に輕くゲザが肘に掛けたりし手は、今親しげに腕にからみ付きたり。ゲザがラファエスタイン街に曲らむとせしとき、少女は留めて、「すこし迂路なれど公園を歩みて歸らばや。おん身が好みて往き玉ひしところ〴〵を見て歸らむはいかに。」

「よくぞ心づきし、」と答ふる聲に喜はみち渡れり。

凋るゝ花の香は猶空氣の中に漲りて、其間には新しきアカシアの花のにほひ雜れり。

二人は公園に入りぬ。園の中には人氣なかりき。黑き木の頂を折々わたる風は震ひ戰く如くなり。

ゲザ、「おん身はまことに病身なりや。」

「然なり、」と答へしアンネットが聲は低く濁りて、やうやう抑へたる苦痛の叫の如くなりき。暫くしてアンネットは劇しく、「いかなれば我をひとり殘して往きたまひし、」

「我を出し遣り玉ひしは君ならずや、」とゲザは戲のやうに答へぬ。

「げにそは眞なり、」と少女は輕くいひぬ。

二人はしばし言葉なかりき。天は次第に暗くなりぬ。少女は遽に立ち留まりて、「秋の頃いつも水溜ありしはこゝなり。おん身はその時我を抱いて渡り玉ひしが、猶そを忘れ玉はずや。」

ゲザは笑みつゝ頷きぬ。又二足三足ゆきしところに大なる石盤ありて、夕日のしらけたる影は水の面に浮びたり。

アンネット、「こゝはおん身がニッツア(伊太利)の事を語り玉ひしところなり、神使の入江の事を。」

ゲザは又ほゝゑみぬ。とかくして或る石像の下に出でぬ。アンネット、「こゝはおん身が我にボルチゲラの莊をおくらむとのたまひし處な

り。縁覚えてやおはする、われ等二人が遊びしは蜃氣樓なりき、美しき蜃氣樓なりき。

木の頂の戰ぎは劇しくなりぬ。少女は身を反らせ、面を擧げて、夢見る如くゲザが顏を打守り、誰も見ねば親嘴して、とさゝやきぬ。この親嘴は長く、燃ゆるやうなりき。アンネットは微笑みて、かすかに今一度といひしが、其聲はなかば梢の戰に消されぬ。再び親嘴せし後、ゲザ、「浮世はいかにうれしく、めでたきものなるか、けふまでは知らざりき。」

喚ぶ如き聲は長く木々の上をわたりぬ。アンネットは我にかへりし如く、「夕立の來ぬ間に歸らばや、」といふ、其聲は忽ち鋭く聞えぬ。二人は踵を旋しつ。

第十七回

結婚の宴に、ジュセッピナが十字の簪を遣り與へしとき、ゲザはいひき。「これをおん身につけさせむとにはあらねど、せめては大事に藏めおき玉へ、こはジュセッピナがためには最も大切なるものなりしを讓り吳れたるなれば。」

ゲザはこの時かの歌女のあはれげなる姿にて、淚を含みて、優しくもかの簪をおくりしときの事をも物語りぬ。アンネットは家の闕にてゲザに別るゝとき、かの簪に接吻しつ、さて、「父は今宵夏中ならでは歸り玉はざるべし、さらば、」とさゝやく。ゲザは暫しアンネットが顏を打守りたりしが、さてあるべきにもあらねば、明日こそまた相見めとて別れぬ。

ゲザは歸りて、かの十番の家に向ひたる、昔の小部屋にあり、獨り坐してこよひの事を思ひつづけたり。嬉しくて、却りてまた物苦しきやうなる懊惱は、眠といふ眠を遠からしむ。アンネットが斯く人を迷はしむるやうに美しく見えしことは今日まであらざりき。又斯く心を攪るやうに親しく物言ひしことも今日まであらざりき。少女が優しき微笑、少女が大なる目の照りわたれりしなどおもひ出せば、そのまゝ猶我が胸のあたりを離れざる心地す。かの少女と夫婦になりたらむ折の樂はいかなるべきか。まことに思ひ遣るにも餘あるべし。

されど少女は病ありといひき。これを思ひ出せば、寒き風一陣、妙なる夢の中にぞ吹き入りたる。おもふに少女はまことに病あるならむ、いたく病めるならむ。その親しかりしは別に望みての親みにやありけむ。その美しかりしは。こゝまで思ひつゞくる程に、おそろしき憂ゲザを襲ひ來ぬ。

折しもあれ、戸の外を吹く風は俄に雷を伴ふなる、落す如き嵐なりき。枯れなむとする花の香は、觸るゝもの身に纏りて窓より入り來れり。

あまりに心に掛りければ、ゲザはアンネットが窓の方を見やりぬ。窓は開きたり。優しき頭は窓の外に差し伸べて、こなたを望めり、青き色を帶びたる月の光は、彼方なる古家の壁に落ちて、少女が優しき姿の影を眞黑に寫し出したり。

人氣絕えて、眠れる如き街を隔てゝ、ゲザは「アンネット、アンネット、」と呼びぬ。

少女のほゝゑめるは、かはたれ時の灰いろなる紗を隔てゝ見ゆ。少女は「安らけく臥させ玉へ、」と微にいひ、小きもろ手を脣にあてて、親嘴の形をなし、さて窓を鎖しつ。ラアエスタイン街は鉛の如く重くろしき沈默に掩はれたり。ゲザは幸に醉ひたり、心の底にアンネットが微笑を包みて、彼は眠りぬ。

まだ朝の五時にもならぬ頃、前なる街はあやしく騷はしうなりぬ。ゲザは醒めたり。外の面には物に激せられたるやうなる聲、忙はしき足音聞ゆ。火事を出しゝ家あるにや。さわがしさはいよいよ增りぬ。何事にかあらむ。ゲザはいそぎ衣を着て梯を下りぬ。

空氣はまだ濕りたり。朝日はまだ澤なきに、かすかなる紅の色雜りたり。屋根の上には雀の常にもまして躁しく啼けるあり。デリレオが家の前には人立したり。いかなる人にかと見れば、まだ夢のよくも醒めざるにや、指もて眶を擦りたる女の、髪はおどろなしたるあり、仕事にとて出で立ちたりと覺しき職人體の男あり。いづれも塵塚の腐りし肉をねらふ鴉の群なんどの如く、眼を光らせ、頭長くさし伸べて、近う寄らむとひしめいたり。中にて物言ふは野菜あきなふおうななり。その面には珍しきものを目のあたり見きといふ慢心あざやかにあらはれたり。ゲザはその言葉をかたへ聞せしが、はじめは何の事とも辨へざりき。されど暫しありて、やうやう事の情を曉りつ。おうなはいひき。「いま倖をくすりやへ遣りぬ。されど最早間にあはざりき、間にあはざりき。」

「デリレオの君が卒中にてもせしと言ふにや。」とゲザ問ひしに、「なに、デリレオの君のいかで、」と人々いへるが中に、女ばらの額打ち背けたるもありき。「死なれたるはアンネット嬢なり。」ゲザは目くるめきぬ。「何故ありて、アンネットが。」

魂も身に添はで、ゲザは梯を上りぬ。あわたゞしくアンネットが部屋の戸を開きつ。この部屋をばかれて熟く知りたり。こはゲザが稚かりし程、母と共に住みたりしところなり。唯だそのさま今は昔にかはりて美しく飾りたり。老いたるデリレオは小き臥床の縁に腰掛けて、あまりの事に涙も出でざる目を見張りて、白き布に掩はれたるものを打ち守りて居り。

「爺御よ、」とゲザは呼びぬ。

老人は此聲におどろかされて跳ね起きたり。身うち悉く震はせ、手を額に加へたるが、あはれに萎ばみたる顏には肉の顬見えたり。

「あはれと思へ、」と呼びし聲はきれぐ＼になりて、吃りて、僅に聞ゆるのみ。「あはれと思へ。娘は悴いたり。娘はみまかりぬ。」

ゲザは布を引き退けつ。白き床の上に臥したるアンネットは別の時の微笑をなほ唇のあたりに見せたり。臘の如くに色あせたれど、なかなかに美しさは變らざりき。

十四箇月の前、初めて相見し折の青き衣を身に着けて、ジュセッピナが十字形の飾をば頸に掛けたり。

世の中に歎あり。いかなる手も、これに觸れむには、優しさ足らざるべく、いかなる胸も、これを究めむには、強さ足らざるべし。これに向ふ人は、言葉はなくて、頭のみ俯かる。この歎をおもひ遣れば、畏きもの丶前に出でたるやうに、一種の敬おこるべし。

ゲザが心いかでかこれに向ひて怨ずることを得む。少女が身に着けたる青き衣は、その襞ごとに聲をなして、「許し玉へ、」といふに似たり。「許し玉へ。わが破りし愛には、われいかでか訴ふべき。われは優しく、嬉しかりける初の友誼に訴へむとす。結髮の妻には許されまじき事をも、妹と思はれし我には許し玉へ。」

ゲザがこゝろ爭でかこれに向ひて怨ずることを得む。ゆうべの親嘴は猶彼が唇の上に燃えたり。

結髮の襟の指環をば拔きて狀袋の中に收め、これを臥床の傍なる小卓の上においたり。狀袋の上には稚き手して、筆太に書いたる文字あり。「戀しき兄上にかへしまつる。神よ。兄上を護りませ。」

ゲザは指環を少女が冷なる指に戻して、その手に接吻したり。

生死のわかれ路はまことにあやしきものなり。生者は死者の屍を目の前に見る間は、その相隔りたることのいかばかり遠きを知らず。死せる身に對してする事も、なき人知るらむとお

もはれて、此迷は少しく生き殘りたる人を煩む。まことに死別の苦を知るは、なき人の遺骸を葬りたる後にあり。常の日の習、つねの日の需など我に迫り來りて、「いつ迄か汝は死と相戯れむとすらむ、われは我が權利を求む、」といふとき、まことの死別の苦ははじめて知らるるものなり。

あはれなるアンネットを墓田に送りて、父と共に歸りて見れば、緑いろなる室を取り片付けて、アンネットが日ごろ用ゐなれたる物を藏め匿し、食卓には二人前の食の準備整ひたり。ゲザが悲痛はこの時忍び難うなりぬ

今は若きヰオリン彈きと、老いたる新聞書きと相向ひて居り。二人は何をも食はざりき。ゲザは言葉なかりき。デリレオはゲザが手をさすりて、頻りに「あはれなる孩子、」とさゝやきぬ。

俄にゲザは眼を父が顏に注ぎ、聲をかすめて、「誰なりしか、父上、」と問ひぬ。デリレオは下の方を見て、膝の上なる巾をつまさぐり、「われは知らず、」と答へぬ。「父上よ、何とかの玉ふ、」とゲザはいきまきたり。

「われは始終の事を、つゆばかりも知らざりき。アンネットはわれには打ち明けざりき。わが嫌疑の心をおこしゝは、ついこの頃の事なり。」デリレオはこの言葉の中に、次第に情憤の色をあらはしたるのみ。

「さもあらばあれ、アンネットが誰にか心を寄するを、よも絶えて知り玉はぬことはあらざりしならむ、」といふゲザは、目に怒、頬に恥を見せたり。

「かれが迷はまことに鬼ありて魅するが如くなりき。」老人はかく語りて口を閉ぢ、おそろしき秘密あるが如く、復た一言をも出さゞりき。

一日々々と悲しくのみ暮しぬ。デリレオは勤あれば、また常の如く出入す。ゲザは緑いろなる部屋にありて、獨り物をおもへり。かれは再び旅立たむとせず。かれは故人に逢はむことを願はず、わが未來の幸を語り聞かせし故人に。かくはかなき中に、猶慕はしき人ひとりあり。そはステルニイなりき。

ステルニイの人の憂を解し、人の歎を慰むるさまは、めづらしく優しく、ほと〳〵婦人の如くなりき。そが上に、わが未來の幸の賴み難かるべきをば、かれその初にいひき。かれはわがこの歎に逢ひたるを怪みもせざるべし。

ゲザは人にステルニイが住處を尋ねしに、いま英吉利にありといへり。ゲザは書をおくりて、アンネットが俄にみまかりしことを告げ知らせ、さていはく、「また巴里に來むをりは我に知らせよ。われもかしこに引き越して、暫く汝が傍にて業を執るべし。この浮世にて、なほ我を慰むべきものは、唯だ汝が交のみ。」

この文には何の答もあらざりき。ゲザはデリレオが家に還りて、アンネットが居りし緑いろなる部屋に住みき。

ある日少女が用ゐ慣れたる机に向ひて、封筒やあると、引き出しの隅を搔い探るほどに、板の隙間に介まりて、ちぎれ殘れる小さき手紙の端あり。取りて見れば、まがふ方なきステルニイが筆の迹なり。

「うれしさいかばかりなるべき。リユウドラ、モンタニュにて、一時に逢ひまゐらせむ。君を戀ふるステルニイ。」

ゲザは再び讀み返し、鈍く、おろかなる目なざしして四邊を見まはしゝが、膽を剔抜かれたる人の如く、もろ手を高くさし伸ばし、氣を喪ひて鋪板の上に仆れぬ。

緩なる熱病に侵されて、ゲザは蓐に就きしが、僅に殘りたる力さへ、これにて斷たれたり。髮蓬になりたる病後の人となりて、一間の

うちを漸う歩きまはるやうになりしとき、ゲザは先づ紙と筆とをたづねき。書かむとするは、ステルニイに送るべき文なり。かれは日毎に稿を屬しては、また扯き裂いて抛け遣りつ。病める間、うみの母も及ばぬ看護せしデリレオは、おし止めて、「心をな苦めそ、」と繰り返していへど、ゲザは大息つきて、「これを出しやりて我心を輕うせむ、」といふ〳〵も、書いたる文をば出しやらざりき。ある日ゲザは忽ち悟るところある如く、「この事は文に書くべきにあらず。わが名譽をとり返さむには、まのあたり言ふに若かず、」といひしが、これよりは養生に心を用ゐて、また文かゝむとはせざりき。

ゲザは又ものおもひの中に日を送りぬ。その悲には燃ゆる如き恥ありたり。結髪の妻の事、むかしの友の事を問ふ人に逢ふこともやあらむと思ふごとに、血潮の顛にのぼり來て、家の内にはことなる人のなき時も、壁にのみぞ向はれける。

時ありて結髪の妻を欺き汚したる友の事をおもひ出せば、心を狂はしめむとする怒氣おこり來りて、總身戰けり。さてかの友のその昔われに竭しゝさま〴〵の情誼、その交際の優しさ、その聲音の誠ありげなりしなどにおもひ及びては、ゲザは顳顬のあたりを按へて太き息をつき、かゝる人のいかなればかゝる事をなし出だしけむと訝りぬ。

幾日か立ちぬれど、ゲザはステルニイを尋ねに出でむともせざりき。かれはいたく人を怯れて、晝の間はデリレオが家をしばしも離れねど、身漸う健になりたれば、今はとて夜に入りてより出で歩くやうになりぬ。ゲザは年尚若かりければ、興を買ひ自ら忘れむものをと、猥なる筵にも列ることあれど、かれは人々の戯れ覆るをりも、色蒼ざめ、目を遠きところに注ぎて、言葉もなく片隅に坐するのみ。

ゲザはこれをも面白からずとして程なく止めつ。後には憂を忘るゝ術を餘所に求めて、やうやう酒に耽るやうになりぬ。

音樂をば殆ど全く打ち棄てたり。そを何故ぞといふに、音として昔の記念を喚び起さぬはなかりければなり。縦令食を得むためにすとも、せめて樂を奏する業を棄て果つるに至らざらましかば、斯くまで衰ふることはあらざりけむ。惜むらくは、亞米利加より持ち歸りたる金ありて、かれの酔ひ癡れて世を渡るにさし支なかりき。

デリレオはわが愛で育てつる子のかく望を絶ちて悲痛にのみ沈み、そのめでたき材能も次第にいひがひなく廢れゆくを見るにえ堪へず、をりをり行末の事をばいかにかする、と問へど、ゲザは唯だあはれなる聲にて、「われもいつかは再び勤むるときあらむ、されど今はあまりに憂きに堪へねば、」と答ふるのみなりき。浮世に遠きラアエスタイン街の片蔭に、ゲザが身はやうやう沈み果てなむとす、むかし養父なるデリレオが沈み果てし如くに。

おほよそ大都會といふ大都會には、ラアエスタイン街に似たる街あるものなり。巴里にはかかるところいと多し。事の敗に逢ひ、心の苦を負へる人は、敵に嘲られむことをおそれ、友にはまたやさしき中に侮を包みたる憫の目にて見られむことを嫌ひて、かゝるところに遁れ入れり。この類の人も身を終ふるまで、かくまであやしき闇の世界にあらむとはおもはず。その初の心にては、しばしこゝに身を掩ひて、創の癒えむ時を待たむとするのみ。この類の人はその自ら設けたる隱所にて、さま〴〵の計畫をなし、再び世にあらはれて、會稽の恥を雪がむと、美しき夢を見るなり。されどこの夢や、絶えて眞になりしことなし。

その故奈何といふに、かゝる街は墳墓なり。年經てこの淋しき世界より出で來りし人は、身

のまはりに朽ち腐りたる土の臭を帶びて、早く廢れたる思想を懷きたれば、甦りたる屍の死したる語を操ふに似たり。

第十八回

白耳義獨立新聞には、「惡魔」は近き世にあらはされたる樂譜の上乘なりとあり。伶人等は「惡魔」の中には不朽なるべき節々いと多しといひあへり。「惡魔」は大喝采を博したり、と上等社會の人々は物語りす。

されば ラアエスタイン街までも、「惡魔」の噂聞えぬ。十とせあまり前にはパガニニにさへ比べられ、今は人知らぬモンネエの伶人の末に列なりたる、「衰へ果てし」ヰオリン彈きもこの噂を聞きつ。

デリレオが身まかりてより久しうなりぬれど、ゲザはなほおなじ古家に住めり。少しばかりなる財産の殘れりしをも、養父が老病の藥餌のしろにつかひ畢んぬ。今は唯だ僅に朝夕の烟を立つるのみ。

心は闇くなり、力は衰へたるに、酒にさへ耽りたれど、今も折々は何事にまれ爲さばやとおもふ念生せざるにあらず。されどいつも色に事ありてこれを妨ぐ。ステルニイが「惡魔」の曲の合奏を指揮すべしといふことを聞きしとき、かれが怒は極めて劇しかりき。いかなればステルニイは我に出逢ふべきことをおそれで、再びこのブルクセルには來むとすらむ。さてつぶやきていはく。否々、世の人の皆我を忘れたる如く、ステルニイも我が世にありといふことを、つゆ念頭におかざるならむ。さらずばステルニイは我を死せりとおもへるならむ。ゲザ若し世にあらば、その名聲の絶えて聞えずなるべきにあらねば。

ゲザは限なき苦惱を覺えき。この苦惱は結髮の妻の歿りしが故にもあらず、心を傾けたりける友の我を欺きしが故にもあらず。ゲザが前に立ち現れたるは、滅びたる技倆の鬼なりき。「惡魔は近き世にあらはされたる樂譜の上乘なりとか。利分もなきこと哉。譃の皮を。」ゲザはかくつぶやきぬ。

ステルニイが作譜の技倆をば、冷なる心もて早く測り知りたり。おもひ出せばステルニイが當座の曲、その剽竊して主意を失ひたる節こそ可笑しけれ。さいつ年ある貴婦人に頼まれて、「バレット」の曲を作らむとせしときも、ステルニイは徒に心のみ苦めて、日を累ぬれども稿を脫すること能はざりしを、當時交深かりければ、咄嗟の間に作りてやりぬ。かの「バレット」の曲のみは、その頃評判よかりきとぞ聞えし。さるを今ステルニイ大作譜家となりぬとか。

われが受持の譜の一段をば、ステルニイが手並いかにと、眼を鋭くして見渡せども、聞のみ多くてよしあしを知らむやうなし。

兎角するほどに二度目の試の日になりぬ。初度の折の如く、こたびも假病して休まむかともおもひしが、それも心ならず、何ともわかねど、引き寄むるやうなる感ありて、我身は「グラン、ダルモニイ」の樂堂へ引き寄せられき。こたび來しは、ピアノ教ふる女とロシニが友とのみにはあらず。ブルクセルにて名を知られたるしろうとの伶人は皆壇のめぐりに集ひぬ。樂を知りたる貴婦人は平間の前列を占めて壇に向ひて居り。一座の氣色は何となく改まりたり。心待する熱はありあふ人々の脈に漲りたり。中には評判きはめて高きものを迎ふる心には雜り易き疑念を懷けるもあれど、そは一座の少數のみ。嘗て忙はしき交際官なりしシルワ伯は、暇あるごとに「ヰオロンセル」を弄ぶ人なるが、しきりにけふの曲のすぐれたりといふ噂を說きて、貴婦人に聞かせたり。ステルニイが

作譜の力かほどならむとは、われもそのかみは思はざりきと伯もいへり。

「われもしか思はざりき、」とロシニが友もつぶやきぬ。「ステルニイはいかにしてかの曲を作りけむ。そはわが解せぬことなり。されどかの曲の傑作なることは爭はれず。何等の「メロディ」ぞ、人を醉はし、人の神經に偏み入り、人の血にしみ込まむとするは。まことに彼曲を奏づるときは、鬼物ありて聲波の間をさまよふ如し。」

某の侯のいはく。「大いなる器は晩く成り上がるものと聞く。婦人がたの中には、猶ほおぼえ玉ふもあるべし。ステルニイがあるとき『チゴイネル』の童を伴ひ來て、その業を誇り示しゝことあり。あれはいかになりぬらむ。世に神童といひはやされし童の、まことに天晴なるものになりしことは、昔よりなかるべし。」

「童とは紐付きたる衣を着たりし傴僂の子のことにや、」と一人の貴婦人いふ。

「否、さにあらず。紐付きたる衣を着たりしとは別なり。わがいふはラアエスタイン街より伴ひ來し子の事なり。」侯はかく分疏せしかど、貴婦人の群には、ひとりとしてゲザが事をおもひ出すものなかりき。「そはいかなる童にかありし、」と人々問ふに、侯、「させるものにはあらねど、神童のためしにとて引きつるなり。當座の曲の妙なること、かの童の如きは稀なりき。されど後にはいかに成りゆきけむ。」貴婦人等も聞きて、「げにさることもありけり。かの童のなりゆきこそ知らまほしけれ、」といふ。

この問答の間に一座の氣色動きぬ。壇に登れるはステルニイなり。掌を拍ちて迎ふるものあり。進み近づきて手を握るものあり。身を曲げて禮するものあり。

かれは倚譜架に歩み寄りて、伶人の群を見渡しつ。この群にはけふ闕けたる人なかりき。この時かれは忽ち色を失ひつ。打拍杖を取りたる手は、力なげに腋に垂れたり。されどかれを崇拜したる貴婦人の目は、光を帶びて彼がかたを仰ぎ見たり。かれは架を敲きつ。寂しくなれる廣間に響き渡るは、冗なる聲多き「惡魔」の曲の初段なり。

聽衆は望を失ひて肩を聳かしつ。ゲザは卑む色を見せて口角を引き下げたり。ゲザは初め俯きたりしが、今はやう〳〵頭を擡げ、後には膽太くなりて、むかしは我本尊ともあがめ、我世界とも頼みしステルニイが面に、眼を注ぎて苦笑せり。

暫くして、アルト謳ひの女最初の歌を謳ひつ。聽衆は電氣に撲たれたる如く震ひ、魂を喪ひたる如く耳を傾けたり。そが中に誰にも增して耳を欹てたるはゲザなりき。

ゲザが胸にはあやしき感おこりて、身うち悉く慄ひぬ。この感は啖なる少年の樂の如く、喜餘りて狂へるこゝろの如くなりき。この感はむかし彼歌をみづから書き卸しゝときの感なりき。我曲を續く樂は、我曲を偸まれたる怒を抑へて、その起るを妨げたり。ゲザは一たび喪ひたる魂を、人ありて再び贈りかへしやうなる心になりぬ。かれは唯だこれを聽きて餘念なかりき。

喝采はいよ〳〵高くなりぬ。ゲザは夢心地になりて、人と共に「ヰオリン」を弾いたり。ところどころにステルニイがみづから插みたる冗なる聲あるに逢ひて、ゲザはうるさげに眉を曲げたり。

「絕妙の處は今ぞ、」と聽衆のうちにさゝやく聲す。「これは棄てられたる人の對歌とて、不朽の價ある節なり。」

別るゝ人の聲は怨むが如く、訴ふるが如く、これに繼りたる神の使の童の歌は、やさしく、軟に、忽ち斷え、忽ち續きて、過ぎ去りし歡の夢を喚び起さしむ。

ゲザは唯だ聞きに聞きたりしが、その「キオリン」の弓は僅に動かずなりぬ。目の前に浮ぶには緑いろなる部屋の壁なり。ステルニイは微笑みて「スピネツト」に向ひたり。我側には愛らしき少女ありて、式の如く兩手を輕く疊ね、頭をば重さに堪へぬやうに右の肩に傾けたり。あゝ、これ「ネツソン、マジオル、ドロオレ」の段なり。

聽衆は物狂ほしく呼びぬ。伶人の群は立ちあがりて掌を拍てり。しろうと伶人は壇のめぐりに集りぬ。折しもあれ、こは何事ぞ。息もたえだえに、唇の上には泡沫を見せ、眼の裏には怒を輝かして壇の上なるステルニイが前に馳せ寄るは、「キオリン」ひきの一人なり。「盗人、人殺し、」と咳嗄れたる聲にて叫びつゝ、「キオリン」の弓振り翳して、ステルニイが面を打ち、氣を喪ひて鋪板の上に僵れたり。

ステルニイは徐に額を撫でたり。いかなる變に遭ひても度を失ふことなく、斷頭臺にのぼりても、猶餘勇を示しつべき、世慣れたる魂は、かゝる事には動ぜずとおぼしく、人々の氣を喪ひたる「キオリン」ひきを舁きて出づるを見送りつゝ、今しも進寄りたる「オルケステル」の長に向ひて「譫妄狂」といふものゝ興りしなるべし。さりながらわれをかゝる目にあはせ玉ひしはおん身が無念ならむ。」

人々は席に戻りて、試はまたはじまりぬ。ゲザは「キオリン」ひきをば舁かせて家にやりぬ。ゲザはわれに還りて、簞笥といふ簞笥、手筐といふ手筐を掻きさがしつれど、「地獄」の曲の原稿は一ひらもあらで、作りかけの「オペラ」の斷簡のみ、こゝかしこより出でぬ。

第十九回

「犯罪街」と渾名せらるゝ「ブウルリア、エクステリヨオル」とビユツト、モンマルトルとの間に一條の巷あり。世を離れたることは、ラアエスタイン街の如くならねど、貧しきことはかの街より甚しかるべし。ラアエスタイン街には、十字架に懸りたる基督の像ありて、我手だにかく釘づけにせられずば、汝達をこの胸に引き寄せて、煖めてもやるべけれど、かくせられては力なしといはむやうなれど、こゝにはこれだになし。ラアエスタイン街には彩りたる寺の窓より光漏れて、貧苦と罪惡とを照せども、こゝにはこれだになし。古き寺は既に潰えて、新きはいまだ立たず。

ビユツト、モンマルトルの假造りの塔にあやしげなる部落あり。職人の仕事場か、さらずば汽車の響にあるべき鐘のやうなる聲して、斷末魔とおぼしき加特力教少しばかりを興、醒めたる共和の民の敗宅にひゞかせ遣れり。

こゝには古本屋せきあひたり。おほくは尨犬に守らせたる木づくりの古道具店の、風にゆらぎたるもあり。

このモンマルトルの一區には珍らしき事一つあり。こゝにて賣るものは、必ず反古に包みたり。畫をかきたるあり。文を書きたるあり。譜を書きたるあり。人の面を吹くものは、滅びたる技藝の生活のなごりの塵なり、夢にのみ見つる蜃氣樓の焼け失せたるのこんの灰なり。

數かぎりなき貸部屋には、年若き藝人あまた住めり。こは世に何事をもえ成すまじきもの共なり。又年老いたる藝人あまたあり。こは世に何事をもえ成さゞりしもの共なり。恥を知らずして猥なる行するものと、憤を呑みて微溺に苦むものとに打ち雜りて、力ぬけて、疲れ果てたる空想家さまよへり。

ボオドレエルが作りし散文小詩といふものに、疲れ果てゝ倒れむとしたる二人の、おのおの背の上におそろしき「シメエル」(女怪)の形したる不朽を冀はむとする妄想」を負ひたるあり。「シメエル」は鋭き爪を人々の肩尖に立て

て、その肉を搔き破らむとしたり。このモンマルトルの區內に住める藝人もおの〳〵その「シメエル」を負ひたり。その疲極まりて仆れむとしつゝも倚ほ仆れざるは、未だ重荷を卸さゞればなり。その「シメエル」の消ゆるときは、即ちこれを負ひたる藝人の臨終の期日なり。この區のうちには、材能なきに材能ありとおもへる藝人群をなしたり。されどこの痴なる人の間には、をり〳〵まことの名人の老いて世に棄てられたるあり。かゝる人は最早影だになくなりたるむかしの譽を、取り返さばやとおもひまどひて、唯だ埃の上にのみ名を署するなり。

こゝの人は皆夢の中に日を送りて、魂はつねに本通りのかたに飛べり。かしこは僥倖の街なればなり。その息を屏め、耳を欹てゝ來ぬものを待つ心は、博奕する人の徒なる望に智を滅ぼし、髓を枯らすにや似たらむかし。

とある朝モンマルトル區なるステンケルク街といふところの最も卑しき貸部屋に還る人ありき。こは藝人のカリフォルニアと聞えたる巴里に迷ひ來ぬるゲザ、ファン、ザイレンなりき。かれはラアエスイタン街を住遷、おもひて佛蘭西には遷りしなるべし。

汽車の中にて邂逅ひし中音うたひの男、この貸部屋をばかれに敎へき。こゝはいと靜なるところにて、勉強して業を成すには究竟なりといへば、ゲザは喜びてその敎に從ひぬ。ゲザは今もなほ業をなして名を成さむとおもへるなり。

むかし或る貴族のおくりし上等の「ヰオリン」ありしを賣り拂ひて、かれは千「フラン」の金を懷にしたり。かの「ヰオリン」を千「フラン」に賣らむは、ほと〳〵途に投げ棄つるにおなじと思ひき。されど此巴里行は身を立つる基とおもへば、樂器一つは物かは、おのが脈のうちを流るゝ血を賣らむも容易かるべし。

遠からずして我新作を出さむをりは、喝采の聲雷の如くならむ。その時にはステルニイもわが前に俯して、頭をばえ擧けざるべし。悲憤の念は胸に逼りて、握り詰めたる指の爪は手背にも通るべき程なれど、ゲザは自ら抑へて、その氣色なか〳〵に落着いて見えたり。ステルニイが戴ける冠は原と是れ贓品なれば、まことの主なる我、いまより勉めてまた此の如き著作を出さば、かの冠をかれが頭上より拉き落さむこと、なんでふ事のあるべき。

いさゝかなる才を懷けるものにも、一生涯にひと度は凱歌をうたふ時あるものなり。いはむや我はよの常の才にあらず、我には天才あるものを。

巴里に還りてのはじめの日には、ゲザは心地すが〳〵しうおぼえぬ。中音うたひの男はゲザを促し立てゝ、まことの本通りをそゞろ歩せむといふ。まことの本通りとは、新オペラとマドレエヌとの間をいへるなり。ゲザは大都の人ごみのところを五月蠅しとおもひてこれを辭み、中音うたひが都に來たる田舍人の習とて、忙はしげに巴里の眞中さして行くを見送りつゝ、おのれは獨ビュット、モンマルトルのかたに足を運びつ。

とみれば草木疎なる小公園を、丘の上に開けるありて、あやしげなる木づくりの梯をかけたり。

シャン、ゼリゼエ、パルク、モンソオ抔にて遊ぶ華奢なる子供とは殊にて、身は瘦せ、顏は垢つき、破れたる衣を着たる小兒あまた、朱の如く赤き砂道の上につどひたり。園のあなたは、荒蕪にて、石灰の塵を帶びたる草ところ〴〵に生えたるが、向ひの破屋の檐下まで續きたり。巴里はこゝより幾里かあらむと疑はる。

ゲザは園の中に据ゑたる木の長椅子に腰懸けたり。ゆくすゑは職工になりて人を罵る聲なるか、さらずば卑しき女になりて妄りに笑ふ聲

なるかとおもはるゝ小兒のもろごゑは、耳に滿ちたり。かれはこの時に限なき疲を覺えき。
　若かりし程はブルクセルより巴里への旅をば旅ともおもはざりしを、いかなれば今日にかく疲れけむ。かれが頭はやうやく低れて胸につきたり。この假寐の夢にゲザはブルクセルの公園なる眠ぶたげに戰げる木の下を、アントットに肘をかしてそゞろあるきす。こゝには大いなる水たまりありて赤き罌粟のはな片二つ三つその上に浮び、青き空のいろはこれに映じたり。かれは少女に向ひて、我にはまことの天才あれば、ゆくすゑは大いなる業を成さむとさゝやきぬ。
　美しき少女の暖なる身、われに寄り添ふとおぼえて、ゲザはおどろきて醒めぬ。目の前には補つきたる青き前垂して、白き帽子を被りたる小娘ありて、冷き指を假寐したる人の手に觸れ、「閑は早や鎖さるゝに、醒め玉はずや」といふ。
　空には、「アンゲルス」の祈誓(神の使マリアが許に來ぬといふ祈誓)の鐘の聲響きわたれり。
　ゲザは立ちあがりて、丘を下りぬ。物のくさる濕氣の臭、丘のほとりより立ちのぼりて、きれぎれなる鐘は次第にモンマルトルの貧苦の境を罩めむとす
　ゲザは部屋に歸りて燈を點じ、身慄ひしつゝ一間の隅々に眼をくばりつ。こゝの壁をばもと柑子いろの地に青き文をおきたる紙にて張りしものなるが、單調なるよごれ色にぞ今はなりたる。一方には灰いろのカミン(爐)に鐵のおほひしたるありて、その爐板の上には素燒の賤なる人形二つ据わりたり。ステンケルク街の事に詳しく、おなじ家に部屋を借りたる、かの中音うたひの男の話に聞けば、こゝに据ゑたる人形はヲオドリヨイユといふ人の作なり。ヲオドリヨイユはいにしへのミケランジエロにも劣らざるべき彫工なりしが、情なき公衆はこの天才を顧みざりき。」と中音うたひ云ひき。「なに、天才ありきとか。」とゲザはこの厭ふべき人形を見て叫びぬ。「かゝるものを造りし男には、よの常の才だになかりけむものを。」ゲザは天才といふ言葉のかくまで濫に用ゐらるゝを歎きぬ。
「さなり、さなり。」と中音うたひ答へき。「一世に美術の妙を知らせむとて、かれは產を傾け、力を費して、『エクチエ、ホオモオ』(こゝにこそ其人はあれといふ拉甸語なり、かくいひて、ピラツスが基督を猶太人に引きあはするところ)を刻みき。されど大理石は價高きものなり。かれは鬱症になりて酒に耽り、つひにはかゝるものゝみ作るやうになりにき。」
　ゲザはこの言葉を聞きて身ぶるひしつ。「その人は今いかになりし。自殺をやしけつる。」
　中音うたひ、「否、かれは猶世にあれど、その業をば止めて、娘の世話になりたり。某八の娘いかなるものなるかは、君も知り玉はむ。昔は親子の緣を絕ちたりといひて、逐ひ出しゝ娘なれど、今はその世話になりて、何事をも忘れたる如し。かれはたゞ娘の上をのみ忘れしにあらず、世事をば總て忘れ果てたり。暖き部屋に居りて、をりをりはアブサント酒一杯飲み、球突の戯するを、かれはこよなき樂とせり。その宿はオテル、ド、ナンシイ(旅店)とてこの街の隅なり。往いて見むとおもひ玉はゞ明日伴ひまゐらせむ。若き藝人共はをりをりかれに馳走して、可笑しき藝術論を聞くことあり。」
　ゲザが部屋に歸りて先づおもひ出でたるは、「オテル、ド、ナンシイ」に住めりといふミケランジエロが事なり。ゲザは爐板の上なる人形をしばし打ち眺めてありしが、徐熱く見むものをと、その一つを取りおろして、ほの暗き「ラムプ」にさし付けたり。塑像を觀る眼をも、ゲザ流石に具へたれば、このあやしき人形にも、こゝかしこに名匠の手の冴殘りたるを見出しつ。
　ゲザは覺えず聲を放ちて泣きぬ。持ちたる手

のいたく震ひければ、人形は床の上にはたと墮ちて、そのまゝ微塵になりぬ。されど部屋の貸主は、直打あるものとおもはねば、償を求めむともせざりき。

ゲザは酒を絶ちしに、胸は緊めらるゝやうにて、目の前には紅の雲の團をなしてまろがりゆくあり。おそろしき疲に、身は痒えたる如くなりき。されど彼は復た飮まむともせで、作譜にとりかゝりぬ。初の程は例の「オペラ」の局を結ぶも遠からじとおもはれぬ。瞬く間に書き終りたる譜の紙、身のほとりに堆をなせり。勢づきて唯だ書きに書く程に、忽ち空想の絲絶えしかど、ゲザは深くも意に介せざりき。かく製作の力弛むことは、壯なる時にもありければなり。また興の動かむをりまでは、しばらく鋭を畜へて、今まで書いたるを删潤せばやとおもひて、こゝろみに翻し見るに、こはいかに、我ながら通曉しがたきまで妄なる節おほく、ところどころには拍子の全く脫ちたるあり、地は皆きれ〴〵なりき。中にはめざましく美しきところあれど、そはいと稀なれば、唯だ是れ灰燼のうちに殘りたる立派なる斷礎にぞ似たりける。心にかゝるはこれのみならず。樂譜に用ゐる符標のうちに忘れたるもの少からず。これをおもひ出さむとて、夜を通して藏書の中なる作譜論を閱し、あくる朝また始より書き改めなどすることありき。

造作もなき一小段をも書損なきやうに仕上ぐるは、堪へがたきまで難儀になりぬ。心を專にし、思を凝すやうなることは、最早及ばずなりぬと覺し。されどゲザは骨をば惜まざりき。唯だ堪へ忍びてなさば、いつかは出來上がる期あらむと、みづから志を勵ますものから、生憎に紙の上にたばしるものは淚なり。

ゲザは業の成らぬうちに、錢の盡きむことを恐れければ、節儉すること甚しく、今は柑子いろの部屋より屋根裏に引き遷りぬ。食事も日に一たびとしたり。

髮は白うなりぬ。物いはむとすれば口吶り、もの書かむとすれば手慄ふ。

夕暮に淸き空氣を吸はむとビュット、モンマルトルにゆくが習となりたれば、かしこに遊ぶ小兒は皆この翁の面を見識るやうになりぬ。ゲザが木の長椅子に坐して、手に鉛筆を持ち、膝の上に手帳をおき、空を睨みて何事やらむつぶやくとき、小兒等は近く寄り來て、やさしく挨拶す。嬉しければ愛らしき片頰を撫で、時によりては一人を抱きて膝の上に載するに、おそるゝ色もなし。昔がたりなどして聞かせば、さぞ喜ばむとおもへど言葉出でず。

ある日ゲザは「キオリン」を抱いて來ぬ。子供の心に協ふやうにと勉めて、短き踊の曲を奏づるに、酒を絶ちてより指俄に剛くなりて、手に持ちたる弓さへ震ふを、稚きものゝ手前も恥づかしとおもひぬ。されど子供のためには、この曲もおもしろきにや、さま〴〵の戲したりしを、皆打ち措きて、聽きに來ぬ。中には手を背後に組みて、頭を少し仰向け、心を籠めて聞くもありき。さらぬは興に乘じて、相抱きて舞ひ狂へり。

さて子供のために、當座の曲を奏でむとするほどに、指頭より漲り出づる聲の、何とやらむ耳慣れたるに心づきて、おもひ廻せばこれはこれ、三十年の昔「サブロン」なる曲馬小屋にてつねに彈きし節なりき。

ゲザはこれのみを樂にして、日ごとに「キオリン」を抱きてきたなき公園にゆきぬ。あはれなる子供の喝采もいまはかれが渴を醫すやうになりぬるなり。

中音うたひの男との交はやう〴〵深うなりぬ。この男は「オペラ」座にゆきて試驗を受けつるに、採用せられざりしかば、その試驗には依怙

の沙汰ありといひ、その座をば伶人ばらの亂行場にて、今にも滅ぶべきものなりといひ、人に向ひておのれがその群に入らざりしを物怪の幸なりと誇りぬ。モンマルトル區のうちなる踊茶屋に傭はれて、衣食に不自由なきほどの給料を受くるやうになりしは、この頃の事なり。

ゲザはこの男に著作中の「オペラ」の一節を聞かせよと所望せらるゝこと頻なれど、はじめは辭みて應ぜざりき。されどこの男の氣色にも、わが作譜の業をなすといふを、眞個いかにとあやぶむさま見ゆることの心苦しければ、今は我より求めて聞せむとするに至りぬ。形ばかりなる古き「ピアノ」に向ひて、時を吝まず彈いて聞かせ、をり〳〵はしは嗄れて空洞なる聲張りあげて、「アリイ」を歌ひぬ。今は「そは面白からむ」といふ人の誰なるを問はぬやうになりしなり。彈き果てゝゲザは興なき興に乘じ、眼をひからせ、もろ手打ち振て、「いかに、規模のおほいなるを見玉へ」と誇顏にいふさま、むかしの謙遜には似ずなりぬ。

とかくする程に錢竭きぬれば、鋏を賣り、書を賣りて、僅に自ら支へたり。されど中音うたひの男をば、今も後輩扱にするを、かの男氣の毒がりて狂人を看護るやうにいたはり慰めつ。

ある日ゲザ中音うたひの男の部屋をおとづれて、共に「カミン」爐の前に坐し、さま〴〵の物語せし折、かの男指もて縺れたる髮を掻き上げながら、「おん身が天才もおん身を養ふには足らじとおぼゆ。」といひき。

ゲザは眉を蹙めて敵手の面を見つめたり。

かの男はやさしく、「あしくな聞き玉ひそ。おん身が『オペラ』ほどの大作の興行せらるゝまでには、猶歳月の立つべきを、かく〳〵居玉はむは、あまりに謀なきに似たるべし。それ迄の繋とおもひてさるべき糊口の業をもなし玉はずや。」

ゲザはといきつきて、「短き譜を作らばいかに。『ロオマンス』のやうなるものを。」

中音うたひ、「そは錢にならざるべし。『ロオマンス』など作るものは、これを歌はすべき歌女、をんな役者などと相結びて、その歌を流行らするなり。おん身縦令かゝる因縁を求め得玉ひても、かゝるものを作らむとて、切角の力を碎き玉はむは益なかるべし。それよりは伶人の群に入りて、『キオリン』彈き玉はむかた、なか〳〵に優りたらむ。」

「さなり、座に出でむは一つの手段なるべし。」と答へしゲザはひそかに我指の鈍くなりたるを思ひて、身も震ふほどなれど、この恥を人に言ふべきならねば、「それもよけれど、座の勤はあまりに五月蠅かるべし。度々の試を奈何せむ。をり〳〵は夜に入ることもあらむ。」といひまぎらはしつ。

中音うたひ、「否、さる煩はしき業に御身には出來ざるべし。そは著作のためにいみじき妨ならむ。わが心當りはさるむづかしき位置にはあらず。試などいふことはなき處なり。」

ゲザは「そはいかなる處にか」と微なる聲して問ひぬ。

中音うたひ、「われこのごろ『オテル、ド、ナンシイ』にて、ある曲馬師の群なる茶利役とちかづきになりぬ。性の善き男なりき。興行の場所はブウルワア、ロシュシュアアルなりとぞ。最上等の曲馬にはあらねど、體裁わるき處にはあらず。おん身が上をかの茶利役に話しこゝろみしに、丁度『キオリン』ひき一人闕けたりといへば。」

中音うたひが言葉はいまだ畢らぬに、ゲザは跳り上りて、無禮なる友の部屋をのがれ出でぬ。ゲザはこれより後はかの男に物いふことなかりき。

ゲザが力は次第に衰へゆきぬ。脈の中をば、冷えかゝりたる膠の如き血、澱みながら流る。

目の前にはいつも塵舞へり。耳には蝴蝶の疲れて羽打つ如き音聞ゆ。食細なれば、養足らず、つひには蓐に就くやうになりぬ。

人善きゲザなれば、おなじ家に住めるもの一人として氣の毒がらぬはなし。部屋の貸主さへ酷くは扱ひ得ず。食をおくりて食はするものあり。臥床を整へて寐さするものあり。新聞紙もて來て貸すものあり。ゲザはかゝる恵を受くるごとに、恥づかしげに微笑み、遠方にのみ注ぎたる目にて禮を陳べ、人去れば、半醒半睡の境に入れり。

ある日の午過ぎの事なりき。夢とも現ともわかぬ間に、軟なる手にて我額を撫づるもののありと覺えて目を開きつ。臥床に居寄りて、項を屈め、我顔を覗き込みたるは、老いても綺麗しき女なりき。白くはなりぬれど、まだ豐なる髪は、やさしく老いたる面を圍みたり。嫗は口籠りながら「ゲザよ」と呼びぬ。その聲は遙なるところより聞ゆる如くなりき。

ゲザはおもひ掛けねばおどろきぬ。かく呼びし聲は我母の聲なりき。我臥床に居寄りて立てるは、相見ざること二十五年なる我母なりき。

ゲザが母はフェルナンドオといふ輕業師の妻になりてより久うなりぬ。中音うたひの男が話しゝブヮルソア―ロシュシュアアルの曲馬場の主はフェルナンドオ夫婦なるが、この頃は仕合せよく、世を安う渡れり。ゲザが母は上氣にこそありつれ、もとより惡しき人にはあらざりき。棄てゝ出でし後も、しばしば我子はいかになりしかと心に掛けて、人して搜らせしに養親に厚くもてなされて、上等社會の人に交れりと聞えたれば、心やゝ落居るものから、上等社會の人に交れりといふに膽を奪はれて、近づかむともせで止みぬ。されど遠くよりはゲザが姿を見て、心を慰むること屢なりき。とかくする程にゲザが名世の中に聞えずなりぬ。さるにこの頃相識りし中音うたひのアウグスチイが汽車にて道づれになりて、おなじ家に住めりといふ珍らしき友の事を語るをしばしば聞きしが、その名をばきのふ始めて知りぬ。

マルガレエタはこの顚末を涙ながらに物語りて、その間汚れたる枕を揺ゑ直し、衾おほひの皺になりたるを伸ばしなどす。ゲザはただするが儘になりて、をりをりは口の内にて禮をいひなどすれど、あまりに意外なる再會なれば、何事とも思ひ分かず。

母はゲザが應ぜぬに氣おくれして、聲をかすめて語りつぎていふやう。「おん身がヰオリンひきしを聞きしことあり。幾年前の事たりけむ。ところはニッツアなりき。わが子とおもへば、面目あることにおもひぬ。その時おん身の作りし譜を買ひ、今猶持てり。卷の首にはおん身が像ありき。美しき姿なりき」

ゲザはこゝまで聞きて、顔を衾の中に埋め、死に瀕みたる人の如く息たえだえになりき。この苦痛を見て、母は今までの遠慮を忘れ、「あはれなる子よ」と耳語きつゝ、ゲザが白うなりたる髪を撫りつゝ、むかし軟き縮髪をさすりしやうに。

母、「あまりに思ひな屈しそ。おん身に天才ありといふこと、おん身に世の人のつらかりしことを、われ皆知れり。これよりは看病怠なく、おん身が本復の日を待たむ。體だに健にならば、また何事か成らざらむ。わが家に引き移れかし。誰も邪魔はせじ。唯だ邪魔にならぬやうに世話してやらむ。人の來ぬやうなる小き部屋もあり。そこにて心任せに仕事せよ。」

ゲザは徐に面を擧げしが、劇しき咳に痩せ窪みたる胸はゆすられたり。母はゲザが骨立したる肩の下に手をやりて、少し擁へ上げ、疲れ果てたる頭を我胸に倚せかけて、呼吸のたやすく出來るやうにしつゝ、さて涙聲になりて、「いたくも痩せたることよ。この汗衫はいかに。最

早きれ〴〵にならむとす。あすは新しきをもて來べし。落着きたらば、少し食べよ。力づくやうに。」かく言ひて、手づから煖めたる汁を飲ませつ。

ゲザは物をもいはず、言ふが儘になりたり。汁もいつになく旨かりき。日ごろの苦痛、日ごろの恥辱をば、かくやさしく款待さるゝことの嬉しさに乍ち忘れて、眠ぶたきまでに心おち居ぬ。ゲザは言葉はあらで、母の手に接吻しつ。

母の目には喜の色見えたり。「一曲馬所の帳場をば六時に閉けば、今は往かでは協はず、八時頃にはまた來べし。それまで眠りて心をやすめよ。」

言畢りてゲザが顳顬に接吻して出でゆきぬ。

ゲザは眠りぬ。夢にはむかしの事浮びぬ。浮びしは歿りし結髪の妻の事にもあらず、我を欺きし女の事にもあらず。浮びしは苦痛なき記念なり。

ゲザは夢にラアエスタイン街にかへりぬ。人を醉はさむとする花の香は身を繞れり。目の前には色めでたき罌粟の花束あり。枯れたる花びらは大理石の板の上に墮ちて、かすかに聲をなせり。

ゲザが心臓は跳りて、いふにいはれぬ苦痛またた起りぬ。今これにて心滿ち足らば、我身は底なき淵に沈み果てむ。

ゲザは起き上りぬ。逃げ去るべきか。自殺すべきか。かれは脱ぎ棄てたる上衣を取りあげしが、上衣はあへなくも手より落ちて、身はまた臥床の上に仆れぬ。かれが魂は碎けて、懊惱にも苦痛にも堪へずなりぬ。四壁のみ立てる屋根裏の一間を、この時あやしき神ありて飛び過ぎぬ。こは絶望の神なりき。この神の手には一束の罌粟の花を取りたりき。

日は月と立ち、月は年と立ちぬ。その日暮しの藝人多きブウルワア、ロシュシェアアルとクリシイとの間にて、しば〳〵見らるゝ男あり。丈高く、翁びて、風に亂るゝ白髪は頬のあたりを打てり。これゲザ、ファニ、ザイレンがなれる果なり。

額はまだ美しけれど、心を喪ひたるやうに鈍く見ゆ。折々立ち留まりて頭を延べ、手を耳の後にあつるは、遠方の物の音を聞かむとするが如し。しばしありて頭を掉り、大息つきて又歩きはじむ。

かれは母の許に住めり。母も、繼父も、弟妹も、むかし名譽ありし人なりとて敬ひかしづけり。清き衣を着せられ、旨き食にて養はれ、何につけても善く扱はるれば、今は不幸の身なりとも思はず。待たるゝものは食事のみ、又一杯の「グログ」のみ。

かれは心やさしく、言葉寡く、人には親切にて、母に頼まれたる用をば嚴重に行へり。常には「カミン」爐の前なる腕木ある大椅子に倚りて、睡れる如く、醒めたる如し。

をり〳〵は心の狂ひたるやうなることあり。譜を書くべき紙に、忙はしげに何やらむ書きて、その反古身のほとりに堆をなせり。かゝる時は人々につらくあたり、怒り罵り、わが行末の業を見よといへり。されど人々は意に介することとなし。

かゝる族の作ることは漸く稀になり、又おこりてもその間短うなりぬ。

モンマルトルの「ラテエ」とてかれを知らぬ人なし。畫工はその横顔を戯畫に作り、路なる童はその通るを見るごとに、肘にて知らせあひて、癡なる翁のえらがるがをかしとて笑へり。

玉篋兩浦嶼

上ノ巻

上手高二重に朱欄干。御簾を垂る。中央より少し下手に寄せ井筒。桔槔。その上に桂の木。

第一節

赤女。十五六歳の女ノ童。赤鯛の冠。

口女。十歳許の女ノ童。樂器を持つ。鯔の冠。

女ノ童大勢。赤女と同じ年頃なるをば赤女率ゐ、口女と同じ年頃なるをば口女率ゐる。皆魚の冠。後の者は種種の樂器を持つ。

赤女等の群。（共に歌ふ。口女等の群樂器を弄ぶ。）

「きずなき玉と　すみわたる
みづのふかさは　いくちひろ。
いろなきものも　かさなれば、
あをあをとして　そこ見えず。」
「人は知らねど　そのそこの
雉　堞　とどのほり
照りかがやける　たかどのに
くしきをとめぞ　住みたまふ。」

（歌ひつつ入る。樂の群も共に入る。御簾を卷く。）

第二節

下手に唐櫃。錦の覆ひあり。鏡臺、櫛笥。

浦島太郎。几に倚りて假寐す。

乙姫。

口女。

乙姫。
おん目のさめて　候か。

太郎。
おもひもかけぬ　夢なりしよ。

乙姫。
みけしきすぐれず　見えたまふは、
悪しき夢にても　見たまひしか。

太郎。
よろこびありて　なげきなき
ここのみやゐに　年を經て
ひさしくわすれし　上國の
くるしきさまを　まのあたり。

乙姫。
さてはあの人間の　世のさまを。

太郎。
いかにもわれは　世にありし
むかしのごとく　ただひとり
かがみにまがふ　うなばらに
小ぶねをうけて　こぎいでたり。
鈎をおろせば　釣絲の
わづかにゆらぐ　そよかぜに
おもてをふかせ　ここちよく
ときのうつるを　知らずして、
ただ釣ろほどに　つるほどに、
松魚に鯛に　かずしれぬ
獲ものにこころを　うばはれて、
かへらんことをも　わすれゐたり。
かかるをりしも　わが舟の

次第につよく 舸ぐに
ふところづき おほぞらを
ふりさけみれば、こはいかに。
水とそらとの さかひより
車輪のごとき くろくもの
まろがりいでて、たちまちに
そらのなかばを おほはんとす。
うねりの波の おともせで
ちかづきよすと おもふまに、
風たち海わき 雨そそぎ
いかづちさへに なりいでぬ。
この時のれる わがふねは
風にもまるる 木葉に似て、
みなそこ深く かづき入り、
なみの上へたかく のせられつ。
櫓をおすわれは いきしにの
さかひは今と ならひえし
おす手ひく手の 陰陽
てだてをつくすと 見るほどに
女ノ童らの うたふこゑ
みみにひびきて 目さめたり。

乙姫。
そはおそろしき おんゆめを
おん身はごらん なされしよな。
くがに獸と たたかふも、
うみに波濤と あらそふも、
そは人間の 命ならん。
あめかぜしらぬ このくににて
わらはとともに くらすをば
おん身はうれしと おぼさぬか。

太郎。
いやとよ。思はぬ 夢といへど、
まことは日ごろ わがむねに
つつめることの いつしかに
こりてゆめとや なりぬらん。
渇して水を おもふごと
このとし月の 平和に倦み
いまは 事業の したはしく
なりぬるものか、おぼつかな。

乙姫。
さらばわらはが 恩愛の
なさけをあだに したまひても。

太郎。
おう。かくいはば つれなしとも
なさけなしとも おぼさんが、
さいつころより なにゆゑか
をりをりこころ たのしまず、
事もなきに 氣をいらち、
女ノ童らを しかりもし、
はてはやさしき おん身にさへ
つらきことばを きかせしを
さぞあやしまれし ことならん。
わが身ながらも けふまでは
そのゆゑさだか ならざりしに、
いまのゆめにて さとりえたり。
ここのみやゐの しづけさは
えだをならさん 風だになく、
ひでりもせねば あめもふらず、
いとめでたしとは おもへども、
たえまなく咲く 湯津桂の
はなのかをりに 息つきて、
冱てずぬるまぬ ゐのみづに
ひびにのんどを うるほさんは、
たひらかなるにも やすきにも
ほどもこそあれ。わがむねの
さばかり悶え もだえしは
この平和にこそ よりつらめ。
さきに風波を ゆめみしとき、
身うちの血汐 沸き返り
氣も晴晴と なるほどに、
ひごろのうたがひ やぶれしぞ。
色も香もある おことを棄て、

ここのみやゐを　たちさらんは、
こころぐるしき　かぎりなれど、
おことは自然、われは人、
おことは物の　おのづから
成るをよろこび、われはまた
ことさらに事を　爲さん　とすれば、
ふたりのこころは、合ひがたし。

乙姫。
ええ。(胸を押ふ。)げにわらはは　つみふかくも
異類のおんみを　などしたひし。
ひとたびここを　さりたまはば、
またあふことも　あるまじと
おもへば、かなしき　このわかれ。
(太郎に縋り泣く。涙まことの玉となりて、はらはらと落つ。)

太郎。(振り離して後向になり目を押ふ。)
われもおぼゆる　こひの咎。

乙姫。(俯して玉を見る。)
これが涙と　いふものか。
(口女唐櫃の上より錦の覆ひを取り、ゐざりより玉を包む。)

太郎。
よしなきちぎりに　鮫人の
なみだをここに　みるあはれさ。
とは云へ男兒の　こころざし、
おもひたちては　すてられず。
すなどりしたりし　そのむかし
わが着しきぬを　いだされよ。

乙姫。
はあい。(口女に。)口女よ。ここに來よ、
そなたはいにしへ　釣鉤に
のんどをきずつけ　瘖となりし
便なき身ながら　さかしとて、
赤女とふたり　身ぢかく召し
つかふもひさしき　ほどのこと。
赤女をばあね　そなたをいもとと
わが子のやうに　おもふぞや。
そなたもききしか、兄のきみは
われらをすてて、おそろしき
人間の世に　ゆきたまへば、
のこるわらはは　けふよりは
たれとともにか　ものいはん。
そなたとおなじ　くちなしの
色なく彩なく　くらすべし。
あのからびつの　みけしをこれへ。
(口女唐櫃より衣を出す。)

太郎。(衣を解く。)
われもおことと　さざめごとの
かたれどつきぬ　それならで、
いまよりのちは　口舌を
事業のあたと　おもひつつ
おなじく口を　つぐむべし。

乙姫。(衣を受け取り夫の後に立つ。)
みぐしのみだれて　候へば、
いでなでつけて　まゐらせん。
赤女はゐぬか。

第三節

前の人人。
赤女。

赤女。(出づ。)　召したまふは。

乙姫。
みぐしだらひを。

赤女。　はいはあい。(入る。)

乙姫。
吾兄のみぐしに　さはらんも
けふがなごりに　ならんかと
おもへばかなしや。

赤女。（衣を夫に着す。赤女盥を持ちて下手より出づ。井を汲む。銀の八角の釣瓶より水を盥にうつす。口女八稜鏡を掛けたる臺を出す。赤女二重に上り盥を進む。）

　　　いつにない
このお支度は。

乙姫。　兄のきみは
人間の世へ　かへらんとて
このおん支度。

赤女。（驚く。）　さてもわるい
おぼしたちにて　候よ。
あの人間と　いふものは
はがねをきたひて　鈎となし、
いとをむすんで　あみとなし、
うをといふうをを　とりこにし、
あまつさへその　かばねをば
あるは膾に　きりくだき
あるはかまいり　ひあぶりの
むごいしおきに　あはすとやら。
わらはも口女も　これからは
小海老や蟹を　あひてにして
いたづらごとは　せぬゆゑに、
おもひとどまり　たまはれかし。
（此中乙姫髪を撫で付く。）

太郎。（立つ。）
洞天仙境の　ゆめさめて、
またひとのよへ。さらばさらば。
（二重を下る。）

乙姫。（赤女口女と續きて下る。）
いまがわかれか。

太郎。（釣瓶竿に目を付く。）　このさをを
とどめおかんは　おことのため
やくなきうれへの　たねならん。
もとのうらわに　たちかへる
身のまもりにも　なりぬべし。
あれをはづして　とらせよとか。

乙姫。
きみとはじめて　あひみしとき
手にとりましし　あのさをは
のちのちまでの　おもひでにと
このゐにかけしを　はづせとか。
さ、あれをはづしてよ。

赤女。　　　はいはあい。
（口女と釣瓶を上げ置き竿を手繰り下し横木よりはづす。竿赤女の手に殘る。太郎乙姫井の側に寄る。乙姫井筒に手を掛け夫を仰ぎ見る。）

乙姫。いまさらいふも　おろかなれど、
ここにきましし　はじめのころ
あかぬあそびの　てずさみに
あのかつらのきの　えだを折り
髪にかざして　もろともに
このゐにうつす　みづかがみ
たがひにかげを　見くらべて
ゑみかはししも　きのふのやう。
ゐはかれねども　なさけの泉
いつか涸れたる。かなしさよ。

太郎。いざ、その竿を。

乙姫。　　　あ、これまをし。
ちとせかはらぬ　ちぎりぞと
いひしはむかし、いまはただ
しばしのわかれを　をしませて。（太郎留る。）

おう。おもひよりたる　ことこそあれ。
この不老のゐに　いくちとせ
うきしづみせし　この鋺の（釣瓶を取る）
覆せば返らぬ　みづにかへ、（水を傾く、口女に）――
あの澳の玉と　鏡をこれへ、（口女二重に上り二品を取り渡す）――
なみだとともに（珠を釣瓶に入る）心をこめ（息を嘘き込む）
しつらひなせる　たまくしげ、（鏡に蓋を掩ふ）
これをわが兄に　まゐらせん。（錦に包む。夫の方へ向く。）
またあふことの　あらんまで
このはこをゆめ　あけたまふな。
せめては可怜　小汀まで
きみを見おくり　まゐらせてん。
口女はくしげを（匣を渡す）赤女はあのおん釣竿を　持て。

赤女。
はあい。

（乙姫立つ。赤女口女それぞれ物を持ち後に續く。太郎下手へ往きかかる。道具幕。）

下ノ巻

曉近き朧夜。中央より上手へ海の書割。沖合に丹塗の大舟數艘。隊幟小幡を立つ。上手のはづれに龜甲の紋付の幕。下手奥松林。熊手四五本松に寄せ掛けあり。松林の下手はづれに端舟見ゆ。燎籠に篝火。

第四節

後ノ浦島太郎。上ノ巻の太郎と同年位。色黒く逞しき士。牀几。
鰭ノ狹五郎。五十歳位の郎黨。
漁師大勢。太刀弓箭。

後ノ太郎。
舟よそほひは　ととのへりとな。
もはやほどなく　のぼる日と
ともに扶桑の　地を離れ、
武運もひらく　あさびらき、
名を千載に　かがやかさん。

狹五郎。
ちちのみことも　おん身のごと
國をさまれば　すなどりし
あたおこる日は　たちはきて、
田村將軍の　はたしたに
えぞが千島の　はてまでも
武名を馳せさせ　たまひしが、
そはまだせまき　國内のこと。
こたびのきみの　くはだては
とほき化外の　地にわたり
一ケ國をも　切りしたがへ
ちちのみことの　みいさをにも
まさるいさをを　たてんため。
さればおいたる　身ながらも
この筒川の　むらびとと
なりはてんかと　なげきしに、
いきがひありて　このたびの
おんともにたつ　うれしさよ。

第一ノ漁師。（花道より出づ。狹五郎に。）
警固の地には　ただいままで
なにの異變も　候はず。

狹五郎。（頷く。後ノ太郎に。）
警固のものは　おきたれど、
ふなでの邪魔に　なるべきこと
もはやあらじと　おもはれ候。
われらのゆきて　かへらぬにも、

おんとほつおやに　ましましし
うらしまぬしの　ひとりにて
うせたまひける　むかしのごと、
海界とほく　鰹釣
鯛釣りほこり　ひをかさね
ゆくへもしれず　なりぬるかと
いふのみにして、ことなるまで
世のうたがひは　かかるまじ。
第二ノ漁師。（花道より出づ。）
ただいま警固の　道筋に
あやしきをとこ　ちかづくを
ささへとどめて　候へども、
わがいへざとに　わがかへるを
邪魔ばしすなと　ききいれず、
つかつかこれへ　まゐり　候。
あれあれかしこに。
（後ノ太郎始め一同花道に向く。）
狹五郎。　たんと申す。

第五節

前の人人。
太郎。

（第三ノ漁師前に立ち弓にて支へつつ後すざりに出づ。太郎左に包をかかへ右に釣竿を持ち、静かに歩み出づ。後より第四ノ漁師太刀を抜き出づ。睨み合ひて花道に留る。）
第三ノ漁師。
おしてとほらん　ものあらば、
いのちをたてと　きみのおほせ、
第四ノ漁師。
あやしきものと　存ずるゆゑ、
第三ノ漁師。
いんとすれども　矢もたたず、
第四ノ漁師。
きらんとすれど　きずつかず、
第三ノ漁師。
これまでおして　まゐり　候。
（太郎舞臺に進む。）
狹五郎。（立ち向ふ。）
しや推參なり　なにものぞ。（たじたじとなる。）
後ノ太郎。（立ち向ふ。）
奇怪のくせもの　ござんなれ。
そもそもなんぢが　よそほひは
われらとともに　いさなどり

海のなりはひ　するものと
見えはみゆれど、おぼろなる
よにもかがやく　にしきのつつみ
たばさみたるだに　あやしきに、
いれどいられず　きれどきれぬ
ふしぎを見せて　ちかづくは、
めでたきわれらの　かしまだちの
さまたげせんと　するにやあらん。
てなみをみせん。そこのけ。
太郎。　おう。
むかしにかはらず　いさましき
ふるさとびとの　こころかな。
そらにきらめく　いなづまの
赫たるいかり、おい木に風
いはほに波の　あらそひは、
いくもとせの　ひさしきま
わすれゐたれど、いまこそは
われもさめたれ。わがさとに
わがゆくみちの　さまたげすな。
後ノ太郎。
なにわが里とは　ことをかしや。
この筒川の　むらびとの
みしらぬなんぢ　そこのかずや。

いざ。

太郎。　いざ。

後ノ太郎。　いざ。（詰め寄る。二人縺れ竿半ばより折る。）

あやしきは
にしきのつゝみ。しさいあらん。（手を掛く。引き合ふ。錦ほぐる。匣と鏡と離れ落つ。匣より無量の眞珠こぼれ散り、その邊球を布きたる如くなる。白雲棚引き出づ。太郎よろよろと後に倒る。此間波の音聞ゆ。後ノ太郎後へさがり白雲を見上ぐ。太郎竿のをれを杖にし立つ。白髪になり居る。）

皆皆。ややややや。

後ノ太郎。（老人と見て敬ふ心持。）
つかのまに
かはりしさまの　いぶかしさよ。（太郎左に杖をつき右に鏡を拾ひ上げ顔を見る。）
そもそも　おん身は　なんぴとぞ。
かくいふわれは　としひさしく
この墨吉に　いさりする
海士の長にて　候が、
とほつおやより　よよおなじく
浦島太郎と　なのり候。

太郎。なに、浦島ノ　太郎とな。
さらばおんみの　とほつおやに
やへのしほぢに　こぎいりて
かへらぬひとの　ありときかずや。

後ノ太郎。げにげに。ことし　天長の
二年を距ること　三百年、
大泊瀬幼武ノ　天皇の
みよしろしめす　二十二年
月さやかなる　あきのよに
とほつおやなる　浦島は
ひとり小ぶねを　こぎいでしが、
いくひふれども　おほぞらに
雲なく、海に　なみなくして
ひともかへらず　ふねもかへらず、
たれいふとなく　わたつみの
かみのみやゐに　ゆきぬとて、
けふまでもよの　かたりぐさ。
それをおん身の　とひたまふは。

太郎。その浦島こそ　このおきな。
おんみはわが裔。ただならぬ
ふなよそほひは　なにゆゑぞ。

後ノ太郎。（下に居る）わが父なりし　浦島らの
とほきえみしを　うちしより、
平安城の　みよさかえ、
みつぎするもの　歸化するもの
ひきもきらねど　もののふの
こころは墮かず、ひのもとの
武名をなほも　あげんため、
わたつみこえて　とほつくにへ
わたらんとこそ　おもひ候へ。

太郎。おう。いさましや。わたつみの
かみのみやこを　わがいでしも
おなじこころよ。さりながら
おもふは先祖。

後ノ太郎。行ふは
子孫にこそあれ。

太郎。　齎しし

たまをば（地を指す）舟に　つみゆきて、
秋毫をだに　おかさざる
いくさのたすけに　せらるべし。

後ノ太郎。
げに糧こそは　こころして
たくはへたれど　金銀の
ことにはうとき　わがともがら
そのそなへをば　かきたるに、
ねがうてもなき　さいはひなり。
ものども、たまを　はきよせて

狹五郎。
ふねに舁きゆけ。

皆皆。
　　はッははあ。

第一ノ漁師。
さいはひなるかな。まつばかく（熊手を取る）

第二ノ漁師。
さとのわらはの　すておきし

第三ノ漁師。
げにもくまでの

第四ノ漁師。
　　ありけるよ。
（皆皆熊手を取る。その他の漁師幕をはづして玉を受く。幕を取れば向うに日の出。松林より鴉啼き立つ。）

後ノ太郎。
はや日の出。いで　うちたたん。（立つ。）

太郎。
事業をわかき　わがすゑに
つたへおこなふ　ことをうる、
これもひとつの　不老不死。
われはこれより　やまふかく
かたちをかくし、ひとのよの
なりゆくさまを　目守りてん。
さらばひとびと。

後ノ太郎。
　　さらばさらば。
相圖の角を　吹かしめよ。
（端舟の方へ步み寄る。狹五郎旗を振る。舞臺裏にて角を吹く。太郎杖に倚り見送る。幕。）

玉篋兩浦嶼自註

玉篋兩浦嶼。
　兩浦嶼の上に玉篋と置きたるは、はたらきなきに似たれど、俗に云ふ玉手箱なりと思はば、故なく冠辭を据ゑたるには優れりともいふべし。

井筒。桔槹、桂の木。
　日本紀神代の卷、彦火火出見尊の海神の宮にゆき給ひし條に、門の前に井あり、井の上に湯津杜樹ありと云へるに本づく。同じ書の雄略紀に、浦島子のゆきしは蓬萊山なれば、海神の宮にはあらず。されど蓬萊山の景物は、一つだに記されず。釋日本紀に引ける丹後國風土記にも、たゞ蓬山とあるのみなり。こゝには俗說に浦島太郎龍宮にゆきぬと云ふを取りて、神代の卷の海神の宮の景物を用ゐたり。

赤女。赤鯛の冠。口女。鯔の冠。
女童大勢。
　日本紀の本文には、赤女鉤を飲みて、口疾ありし由云へり。されど異本には、鉤を飲みしは赤女ならで、口女なりと云へり。赤女は鯛なり。口女は鯔なり。なよしとは今云ふいなたるべし。こゝには口女鉤を飲みてより瘖になりぬとしたり。女童大勢は風土記に、隣里幼女等、紅顏戲接。仙歌寥亮、神儛逶迤とあるを取れり。

瑇、璖ととのほり。　てりかゞやける

たかどのに。
日本紀、海神の宮のところに、雉堞整頓、臺宇玲瓏とあり。

浦島太郎。乙姫。
日本紀の水江浦島子、風土記の水江浦嶼子、萬葉集の水江之浦島兒を後の世に浦島太郎と云ふ。近松の浦島年代記には、浦島太郎久壽、爲永太郎兵衛の浦島太郎倭物語には、浦島太郎久富などとさへ記せり。日本紀に、浦島子の逢へるは、たゞ女とあり。風土記には、その婦人みづから天上仙家之人と名告れり。萬葉集には、海若神之女とあり。後の世に乙姫と云ふ。近松、爲永の淨瑠璃皆然なり。おとひめは次女にや。されど姉ありきとも聞えず。

舸ぐ。
舟の動搖するなり。

うねりの波。
大曲線を爲して、音立てず寄せ來る波。暴風の兆。

おす手ひく手の陰陽。
櫓を押し又引く強弱なり。

鮫人。
博物志、鮫人泣而出珠滿盤。謠曲の合浦は此故事を作れり。

鋺。
釣瓶なり。日本紀、美人、玉鋺をもて水を汲むとあり。

かへせばかへらぬ水。
太平廣記の太公と妻馬氏との話に、太公曰、若能離更合、覆水定難收。

しつらひなせる玉匣。
風土記に玉匣、多麻久志義、萬葉集に玉篋、筥、箱などとあり。玉手箱の名、古く物に見えぬ由は燕石雜志にも云へり。八角の篋を匣として用ゐしは新案なり。浦島太郎倭物語には、玉手箱を寶珠の名とさへ作りなせり。

錦に包む。
續浦島子傳記に、玉匣を送る、包むに五綵之錦繡を以てし、緘するに萬端の金玉を以てす。

ゆめあけたまふな。
風土記、慎莫開見、萬葉集、此篋開勿勤。

可怜小汀。
日本紀、彦火火出見尊無目籠に入りて、海底にいたり給ふ條に、可怜小汀にて、籠より出で、忽ちに海神の宮にいたり給ふ。

丹塗の大船。隊幡小幡。
丹塗の船は古へ朝鮮を討ちし時の船なり。幡幢は昔の軍に用ゐしもの。

燎籠。
鐵にて作り、舟軍に用ゐしもの。

後ノ浦島太郎。
浦島子の歸りて逢ふは、風土記にたゞ鄕人と書けり。故事談には、百七嫗に逢ふとあり。浦島年代記に、七世の孫久富と云ふを出せり。これは下禰宜長谷部國長と云ふもの浦島が系圖を讀みて、かく名告れるなり。浦島太郎倭物語には、六世の孫浦島六次太夫時久、時久の子千努毘羽之助清光、幼名龜若あり。

鰭ノ狹五郎。
日本紀異本、海神魚を召して鉤をたづぬるところに、鰭廣鰭狹とあるを戲に用ゐたり。

田村將軍。
田村麻呂の蝦夷を討ちしは、延曆十年なり。浦島太郎の歸りし年を天長二年としたれば、三十四年前なり。

筒川。
浦島子の故鄕は、日本紀に丹波國餘社郡筒川、風土記に與謝郡日置里筒川村とせり。

鰹釣り鯛釣りほこり。
萬葉集、堅魚釣鯛釣矜。

白雲。
萬葉集に、白雲之、自箱出而、常世邊、棚引去者とあり。後の書、例之ば故事談には、紫雲西に飛ぶなどあり。浦島子傳、續浦島子傳記皆同じ。元亨釋書には匣を紫雲篋と名づく。此等は續日本後紀の歌に、紫雲泛引弖とあるより出でたるなるべし。

白髮。
萬葉集に、黑有之、髮毛白斑奴

墨吉。
萬葉集、墨吉之、岸爾出居而。

天長二年。
浦島子の蓬萊山にゆきしは、雄略天皇二十二年秋七月なりと、雄略紀にあり。歸りし年はさだかならず。風土記に、三百餘載を經たりと云ひ、本朝神仙傳には、漸く百年を過ぐと云へり。いづれも浦島子が三年（萬葉集、三歲之間爾）と思ひて許多の年を經ぬるをいふ。さるを風土記の三百餘歲より推して、天長二年乙巳に歸りぬとすること、俗本日本後紀などや始なるべき。こゝにはこれに據る。浦島年代記には三百年を經ぬと云へば、天長元年となるべく、浦島倭物語には、天長三年二月上旬とせり。

平安城。
平安遷都は延曆十三年なれば、天長二年より三十一年前なり。

山深く形をかくし。
萬葉集には、由奈由奈波、氣左倍絕而、後遂、壽死祁流とあり。さるを釋日本紀に引ける天書に、神仙を得たりと云へり。續浦島子傳記には、後代地仙と號すと書けり。大日本史これに據りて辭を修め、後錄形顯神、棲息巖阿、不知所終と記せり。

角。
後の世の舟軍に一番貝、二番貝、三番貝などあり。古代の事なれば角を吹くこととす。

※

西瓜黃なる核は瑇瑁の黑斑かな
ほきと折る秋の膠や繪の支度
くしげあけし浦嶋が子や秋の蝶

（『歌日記』より）

過現未

われ走る
柳を疾風　拂ふごと
珀車に腋の　血にじむ
駒の鬣　戰ぐごと
丈なる髮ぞ　解け靡く

追ふは誰そ
にび色衣　見え隱れ
三人五人　あらず百千
骨立つ腕に　揮る鞭の
焰を發つ　えりんにす

われ駐る
旭にゐらぎの　齒かがやく
卻れ散けよ　えりんにす
昨日の影に　追ひすがり
今日に驚く　汝達は
え知らじ明日の　我姿

（『歌日記』の「無名草」より）

日蓮聖人辻説法

人物
日蓮　三十四歳
徒弟日朗　十一歳
比企大學三郎能本　五十餘歳
同　娘妙　十八歳
進士ノ太郎善春　二十餘歳
禪僧
放下
老若男女

場所
鎌倉小町ノ大路

時代
建長七年正月

（上手奥より斜に夷堂橋。正面名越切通方面丘陵林木の遠見。下手大路東側の築泥。午後曇天。貴賤の往來あり。傘を持ち、「雪にならねば好いが」などいふものあり。放下の筑子を弄ぶを童部等環り視る。）

放下。（歌ふ。）
面白の　里のさかえや。
鎌倉の　山のあらしに、
雪の下の　雪吹きちらし、
色深き　花やにほはん。
しだり柳は　風にもまるる、
ふくら雀は　竹にもまるる、
騎射の犬は　馬にもまるる、
茶臼は　挽木にもまるる、
げにまこと　忘れたりとよ、
こぎりこは　放下にもまるる、
こぎりこの　二つの竹の
よよを重ねて　をさまる御代や。

（日朗花道より油壺を持ちて出づ。）

第一の童部。（放下の技を見たりしが、花道の方を顧みて。）みんな見い〳〵。名越の小法師が來をるわ。

（童部等皆花道へ向く。放下下手に入り、日朗舞臺へ來る。）

第二の童部。ほんにさうぢや。師匠に飲ませる酒を買うて來たのぢやろ。

第一の童部。（立ち向ひて。）そりや何ぢや。酒か。

日朗。御庵室には酒といふものはおりない。

第二の童部。酒ぢやなうて般若湯とやらか。

日朗。お身達の知らぬ事。御佛前に上げる燈明の油ぢや。

第一の童部。そりや虛言ぢや。借せ。嗅いで見て呉れるわ。

（手を壺に掛く。日朗取らせじと爭ふを、强ひて奪ふとき、壺を墜して破る。妙塗笠を被り、橋を渡り來て、覗ふ。童部等馳せ去る。日朗顧みずして上手へ步む。）

妙。（笠を取り、呼び掛く。）日朗樣、日朗樣。
（日朗立ち留まり、顧みる。）まあ、物怪な事でござんしたなあ。それにしても器はこはれる、油は流れる。お前の跡をも見ずに行かしますは、何と思うての事でござんする。

日朗。こはれた器、流れた油が、見ればとて何となりませうぞ。

妙。（笑ふ。）ほんにさうでござんすなあ。おう、好い事がある。松葉ケ谷へ歸らせますには、大町は道筋ぢや程に、妾がさう申したと

いうて、内のを持つて行かしませ。

日朗。盗みて焚きし油にも、永劫身光の報あり。そんなら貰うて歸りませう。

妙。（笑ふ。）それは何のお經やら。早う寄つて取つて行かしませいなあ。

（日朗橋を渡りて去る。妙暫し見送りて、下手に行きかかる。）

善春。（日朗とすれ違へ橋を渡り來て。）妙殿。まだそれに居られたか。某は今年ゆくりなくも、御的始の交名に加へられ、今朝より由比ケ濱にて、おん試にあづかりしが、若しおん身が日參の、いつもの時刻に遲れんかと、事の果つるを待ちあへず、米町通りをひた走りに、御邸のほとり迄引き返し、お跡を慕うてまゐつてござる。

妙。（羞れたるこなし。）そのお志は、よう存じて居りますけれど、先頃父がお勸め申して、あなたもどうぞ聖人様へ、御歸依遊ばすやうにと、くれ〲申しましたのを、おん聽人がないのみか、聖人様を賣僧ぢやと、あなたが仰しやりましたとやら。それからといふものは、切角お尋遊ばしても、留守と申せと父のいひつけ、所詮願は協はぬものと、妾はもう諦念めて居りまする。（憂のこなし。）

善春。さてはさやうの譯でおりやるか。たとひ御父上は何と仰せられうとも、おん身の心が變らずば、此善春は引かぬ所存。必ず氣にばしかけられな。

妙。あなたに逢うて御親切な、そのお詞を聞くうちは、つい末賴もしいやうな心にもなりますれど、又お目にかゝる迄は、苦勞の絶間はござんせぬ。妾の心をよう知つた、母上の御病氣は、日に〲重り行くばかり。その御平癒の祈願ぢやとて、かうして一人參るのを、父が許せばあなたにも、人目のうるさい大路ながら、たま〲お目に掛られまする。二道かけた願ゆゑ、八幡様にも通らぬやら。どりや、遲くならぬうち、急いで行つてまゐりませう。

（花道へ入る。善春殘り、心配の思入。老若の群慌忙だしく橋を渡り來り、「又說教に來たのぢやろ、」「めでたい正月に忌ましい」などの白ありて、舞臺に留まる。）

善春。さては噂の日蓮が、けふも說法に出でたるよな。去年の夏より、名越なる往還に高座を補理ひ、諸宗を罵詈すと聞きながら、只だ係所事に思ひ居りしに、比企殿の惑深き爲め、我身の仇となつておぢやる。憎き法師の何事を說くやらん。

（群集又どよめき、「そりや來居つた」と叫ぶ。中には石瓦を拾ひ、橋に向ひて擲つものあり。）

日蓮。（檜笠にて面を掩ひ、橋を渡りて出で、舞臺に留まり、笠を右手に持ち。）やら、騒がしの人々や。國に教の地を拂ひ、目のあたりなる逸樂に、永劫盡せぬ苦艱を忘れ、あだに過ぎゆく月日を惜まで、そのをり〲の節物を、翫ふ心ぞおぞましき。たま〲信者と呼ばるゝものも、聲ばかりなる念佛して、殊勝顔なる笑止さよ。（群の中より一念佛がなんで笑止ぢや。）おう、法然がさかしらの、選擇集の毒に醉うては、その笑止さがわかるまいの。教の主なる釋迦佛を、もてあそびにするものさへあるを、帷子ノ里に行脚して、われまのあたりに見しことあり。念佛は無間地獄の業因。禪宗は天魔波旬の邪法。

禪僧。（上手より來かかり。）やよ、御僧。御身の尊む釋尊が、大迦葉に直傳せし、我宗門を邪法とは。

日蓮。御身等讀誦の經文たる、楞伽幷に金剛般若は、皆是れ未顯眞實にて、いはゆる教外

別傳は、佛說に乖背し因果を撥無す。これを邪法と申すのぢや。

禪僧。輕忽の事を聞くものかな。相州殿の歸依深き、建長寺の道隆禪師も、御身が目には邪法の人か。

日蓮。なか〳〵。御僧みづから言はれた。

禪僧。あな、無益。勇猛直前の志はおはさうが、一念の瞋恚は百萬の魔障、世間の豪傑は出世の丈夫にあらず。白刃頭に臨まんとき、ゆめ周章めさるなよ。(顧みずして下手へ入る。)

日蓮。ははは、たとひいかなる擅越ありとも、究竟邪法は邪法ぢやまで。まつた眞言は亡國の、大惡法と申すべし。(群の中より「說法ぢやなうて雜言ぢや」「打ち倒せ」などいふ。)律は國家の蠹毒。皆是れ墮獄の惡道ぢや。

(群騷ぎ立つ。中より賤しき男一人進み出で、「わぬしが地獄に墮ちぬ先に、ここで舌を拔いてやろ」と叫び、日蓮の笠に手を掛く。日蓮手を放つ。男よろめき善春に撞き當たる。)

善春。(撞き放す。男油に滑り、僵れて又立つ。)やあ、忝なくも三品中務卿ノ親王のおはします、大倉御所に程近き、此小町ノ大路にて、よし何事のあらうとも、喧嘩三昧尾籠ぢやぞ。(賤しき男笠を持ちたるまま下手に逃げ入る。善春日蓮に。)いやなに、御僧。某は北條殿の家の者、進士ノ太郎と申すものでおりやる。先の程より見てあれば、鎌倉山の風靜に、由比ケ濱邊の波騷がぬ、太平の世を敎なき濁世と罵り、剩へ、諸宗の立義を誹謗して、市びと等の怒を激し、忍辱の衣を石瓦に、何とて撲たしめらるるぞ。

日蓮。おう、その不審尤もなれど、昔不輕菩薩は、上慢の比丘等の杖にあたりて、一乘の行とし給ふ。法を說き敎を布くに、杖木瓦石をいとはうや。

善春。さらば御身の法とするは。

日蓮。わが法こそは大覺世尊が、靈山八年に說かせ給ひし、正直捨權の實乘なれ。此妙法蓮華經に比ぶれば、爾前四十餘年の權宗は、慈父の稚子に與へたる竹馬草鷄に殊ならず。

善春。その妙法とは。

日蓮。卽ち眞如。

善春。眞如は。

日蓮。やがて衆生當體。我性の眞如はありながら、煩惱の闇に迷ひ、佛性の蓮を持ちながら、無明の酒に醉ひ癡れたる、衆生の身こそ悲しけれ。

善春。さて其妙法蓮華の功德は。

日蓮。それ世間の蓮華は、夏開けども冬開かず。淤泥に生じて陸地に生ぜず。風にもまれ波に沈み、氷に閉ぢられ炎に萎む。わが妙法の蓮華は然らず。三世不變の花なれば、春夏秋冬ときはなり。遍一切處の蓮なれば、六趣三有に徧く咲けり。善惡一如の蓮なれば、惡業の厚薄を選まず。邪正不二の花なれば、煩惱の淤泥にも生じ、十惡の風にも壞られず、五逆の波にも沈まず、紅蓮の氷にも閉ぢられず、焦熱の炎にも萎むことなし。一たび妙法蓮華經と唱ふるときは、一切の佛、一切の法、一切の菩薩、一切の聲聞、一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天神地神、乃至地獄餓鬼畜生修羅、一切衆生の佛性を、只一言に喚び顯す。譬へば籠のうちの鳥啼けば、空飛ぶ鳥の來り集り、空飛ぶ鳥の集れば、籠の鳥の出でんと欲するが如し。我身の佛性顯るれば、梵天帝釋の佛性、來りて加護し給はんこと、何の疑候ふべき。

善春。さらばその妙法のみ正眞の敎にして、今行はるゝ宗門は邪敎なりとの證がおりやるか。

日蓮。いかでか證のおりやるまい。

（群を見て憚る思入。雪降り出づ。群衆の中より、「雪ぢや」、「どりや往から往かう」、「お武家、しつかりせられい」など呼ぶ。群衆次第に散り、上手下手に入る。日蓮捨石に腰を掛け、善春に。）

和殿はそれを聞かうとや。

善春。（日蓮の下手に跪き。）なかなか。御身の天魔と稱し給ふ、禪門の二祖すらも、膝を埋むる雪のうちに、立ちて教を聞きつとかや。御身の證とせらるるは。

日蓮。和殿も先より聞かれし如く、我說法は折伏を旨とし、邪を破し正を顯すに、忌み憚るところなけれど、國家の盛衰、政道の善惡は、むざと言ふべきではおりない。わが見るところを申さうぞなら、相州人となり聰明におはし、累世の積威大いにして、四方に靡かぬ草木なく、世は泰平と見ゆれども、貴賤の風俗日々に亂れ、上下歸依する宗門は、かたばかりなるものとなつて、三寶の跡斷滅せり。さあるに依つて此年頃、天災地妖荐に起り、破國の萌夙に現る。されど爰に將來の一大難あり。かの藥師經に說かせ給ふ、他國侵逼難とは是ぢや。國民早く迷を醒まして、捍ぎ過めん覺悟せずば、わが大八洲の山川國土も、胡馬の蹄に掛けられん。こは折を得て柳營に、勘文もて申さうと、兼て存ずる所なれど、和殿に愛でゝ告げ申すぢや。（此詞のうち雪强く降る。）

能本。（傘さして上手より出で、日蓮に。）こはおもひがけなや。聖人にはこれに居さしましたか。（日蓮に傘をさし掛く。）

善春。（能本に）珍らしや、比企殿。

（雪又踈に降る。能本空を仰ぎ見て傘をつぼむ。）

日蓮。（能本に。）さても進士殿とやらんは、和殿の知人にて候ひしよ。生得利根の人と存じて、さきより問答いたしておぢやる。

善春。（能本に。）げに聖人の御上をば、しばしば御許にて承りながら、某蒙昧にして玉石を辨たず、空しく月日を過ししに、縁ありてけふ値遇しまゐらせ、教を聽聞いたしておぢやる。只だ訝かしう存ずるは、邪宗橫行の報の爲め他國來りて我疆を、侵すとの御詞。武を三韓に耀かしゝ、我日本を何ものか、觸れ侵し申さうぞ。

能本。その敵國は蒙古でおりやる。某折々太宰府の牒狀を閱れ承るに、此國東方經營を志すこと三十餘年。わが脣齒の國たるべき、高麗の王微力なればその侵略の衝に當り、彼の勢を挫かんもの、我國ならで外におりない。そもそも蒙古のぬしの祖先は、北陲の曠野に居りて、鷹を手馴らし狩くらに、その日を送るものなりしが、水草を逐ひ居を移す、些の部落を剪り從へ、そが酋長となりしより、子孫漸く勢を得、北方の强國となつておぢやる。殊に國王の弟呼必賚は、大理を征して勳功高く、祖父鐵木眞の遺訓に基づき、宇內を併吞せんず志、片時も已むときなし。我國民の力を聚せ、奮ひ起つべき時ぞ此時。聖人の御詞を、これにて會得させられたい。

（此白のうち雪一しきり强く降る。妙花道より笠を被りて出で、人々を見て笠を取り、蹲る。）

善春。はは、忝なや。その御詞を承りて、迷の雲霧霽れておりやる。身不肖ながらこれよりは、聖人の御身方。

妙。そんならあなたも聖人樣に。

善春。何が扨、歸服せいで何といたさう。（空を仰ぎ。）どれ、其笠を。

（妙の笠を取り、日蓮に捧ぐ。日蓮笠を取

りて起つ。）

能本。（善春に。）さらば御身は日暮れぬ中、松葉ケ谷の御菴室へ、御供申してくれさしめ。

妙。（父の傍により。）からなるからは妾の願も。

能本。はて、忙しない。邸に歸つて言ふが好いてや。

（傘を開き、妙を傘の下へ入る。　幕。）

馬の影（明治三十七年六月二十二日於北大崗寨）

見わたせば　萬里一色　黄なる土
地に印す　こき紫の　馬の影
その影を　朝日照れれば　ゆん手に見
その影を　夕日照れれば　めてに見て
獲もの追ふ　さつをの如く　すすみゆく
生憎に　單于は遠く　遁れしよ

（『歌日記』より）

我馬痛めり

わが馬やめり
つねはすぐれて
足掻疾き馬
けふおくれたり

ひねもすゆきて
道はいく里ぞ
黄なる畑土
かぎりしられず

丈に滿たざる
高黍ごしに
つれなる馬の
とほざかる見ゆ

ゆきなやみつつ
わが馬斷ゆ
夕日うすつき
わが馬斷ゆ

（『歌日記』より）

馬賊

滿洲に　馬おほけれど
我ならで　誰かは騎らん
起てばゆく　人なき里を
血流れて　蹄をひたす
潛むとき　鬼神しらず
風死して　草に聲なし
わが項　誰にか曲げん
わが命は　人なべて聽く
怯れたる　ものは疾く去れ
去りてゆけ　官の馬隊に

※

埒の外に　野ぶし山だち　なほ住むと　いふまで廣き　くにはらゆかし
遲るること　千歳のなかば　野にはてん　うらもとなさに　泣く長はなしや
苅菰の　みだれ世しのぶ　わかき夢を　あはれ現に　なしし人はも

（『歌日記』より）

ヰタ・セクスアリス

金井湛君は哲學が職業である。

哲學者と云ふ概念には、何か書物を書いてゐると云ふことが伴ふ。金井君は哲學が職業である癖に、なんにも書物を書いてゐない。文科大學を卒業するときには、外道哲學とSokratesの前の希臘哲學との比較的研究とか云ふ題で、餘程へんなものを書いたさうだ。それからと云ふものは、なんにも書かない。

併し職業であるから講義はする。講座は哲學史を受け持つてゐて、近世哲學史の講義をしてゐる。學生の評判では、本を澤山書いてゐる先生方の講義よりは、金井先生の講義の方が面白いと云ふことである。講義は直觀的で、或物の上に強い光線を投げることがある。さう云ふときに、學生はいつまでも消えない印象を得るのである。殊に縁の遠い物、何の關係も無いやうな物を藉りて來て或物を説明して、聽く人がはつと思つて會得すると云ふやうな事が多い。Schopenhauerは新聞の雜報のやうな世間話を材料帳に留めて置いて、自己の哲學の材料にしたさうだが、金井君は何をでも哲學史の材料にする。眞面目な講義の中で、その頃青年の讀んでゐる小説なんぞを引いて説明するので、學生がびつくりすることがある。

小説は澤山讀む。新聞や雜誌を見るときは、議論なんぞは見ないで、小説を讀む。併し若し何と思つて讀むかと云ふことを作者が知つたら、作者は憤慨するだらう。藝術品として見るのでは無い。金井君は藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小説は此要求を充たすに足りない。金井君には、作者がどう云ふ心理的狀態で書いてゐるかと云ふことが面白いのである。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壯なとか云ふ積りで書いてゐるものが、極めて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽の積りで書いてゐるものが、卻て悲しかつたりする。

金井君も何か書いて見たいと云ふ考はをりをり起る。哲學は職業ではあるが、自己の哲學を建設しようなどとは思はないから、哲學を書く氣は無い。それよりは小説か脚本かを書いて見たいと思ふ。併し傑作の藝術品に對する要求が高いために、容易に取り附けないのである。

そのうちに夏目金之助君が小説を書き出した。金井君は非常な興味を以て讀んだ。そして技癢を感じた。さうすると夏目君の「我輩は猫である」に對して、「我輩も猫である」といふやうなものが出る。「我輩は犬である」と云ふやうなものが出る。金井君はそれを見て、つい嫌になつてなんにも書かずにしまつた。

そのうち自然主義と云ふことが始まつた。金井君は此流義の作品を見たときに、格別技癢をば感じなかつた。その癖面白がることは非常に面白がつた。面白がると同時に、金井君は妙な事を考へた。

金井君は自然派の小説を讀む度に、その作中の人物が、行住坐臥、造次顛沛、何に就けても性慾的寫象を伴ふのを見て、そして批評が、それを人生を寫し得たものとして認めてゐるのを見て、人生は果してそんなものであらうかと思ふと同時に、或は自分が人間一般の心理的狀態を外れて性慾に冷澹であるのでは無いか、特にfrigiditasとでも名づくべき異常な性癖を持つて生れたのではあるまいかと思つた。さう云

ふ想像は、Zolaの小説などを讀んだ時にも起らぬでは無かつた。併しそれはGerminalやなんぞで、勞働者の部落の人間が、困窮の極度に達した處を書いてあるとき、或る男女の逢引をしてゐるのを覗きに行く段などを見て、さう思つたのであるが、その時の疑は、なんで作者がさう云ふ處を、わざとらしく書いてゐるだらうと云ふのであつて、それが有りさうで無い事と思つたのでは無い。そんな事もあるだらうが、それを何故作者が書いたのだらうと疑ふに過ぎない。即ち作者其人の性欲的寫象が異常では無いかと思ふに過ぎない。小説家とか詩人とか云ふ人間には、性欲の上には異常があるかも知れない。此問題はLombrosoなんぞの説いてゐる天才問題とも關係を有してゐる。Möbius一派の人が、名のある詩人や哲學者を片端から攫まへて、精神病者として論じてゐるも、そこに根柢を有してゐる。併し近頃日本で起つた自然派と云ふものはそれとは違ふ。大勢の作者が一時に起つて同じやうな事を書く。批評がそれを人生だと認めてゐる。その人生と云ふものが、精神病學者に云はせると、一一の寫象に性欲的色調を帯びてゐるとでも云ひさうな風なのだから、金井君の疑惑は前より餘程深くなつて來たのである。

そのうちに出齒龜事件と云ふのが現はれた。出齒龜と云ふ職人が不斷女湯を覗く癖があつて、あるとき湯から歸る女の跡を附けて行つて、暴行を加へたのである。どこの國にも澤山ある、極めて普通な出來事である。西洋の新聞ならば、紙面の隅の方の二三行の記事になる位の事である。それが一時世間の大問題に膨脹する。所謂自然主義と聯絡を附けられる。出齒龜主義と云ふ自然主義の別名が出來る。出齒ると云ふ動詞が出來て流行する。金井君は、世間の人が皆色情狂になつたので無い限は、自分だけが人間の仲間はづれをしてゐるかと疑はざることを得ないことになつた。

その頃或日金井君は、教場で學生の一人がJerusalemの哲學入門と云ふ小さい本を持つてゐるのを見た。講義の濟んだとき、それを手に取つて見て、どんな本だと問うた。學生は、南江堂に來てゐたから、參考書になるかと思つて買つて來ました、まだ讀んで見ませんが、先生が御覽になるならお持下さいと云つた。金井君はそれを借りて歸つて、その晩丁度暇があつたので讀んで見た。讀んで行くうちに、審美論の處になつて、金井君は大いに驚いた。そこにかう云ふ事が書いてある。あらゆる藝術はLiebeswerbungである。口説くのである。性欲を公衆に向つて發揮するのであると論じてある。さうして見ると、月經の血が戸惑をして鼻から出ることもあるやうに、性欲が繪畫になつたり、彫刻になつたり、音樂になつたり、小說脚本になつたりすると云ふことになる。金井君は驚くと同時に、かう思つた。こいつはなかなか奇警だ。併し奇警ついでに、何故此説をも少し押し廣めて、人生のあらゆる出來事は皆性欲の發揮であると立てないのだらうと思つた。こんな論をする事なら、同じ論法で何もかも性欲の發揮にしてしまふことが出來よう。宗教などは性欲として説明することが最も容易である。基督を壻だと云ふのは普通である。聖者と崇められた尼なんぞには、實際性欲をPerversionの方角に發揮したに過ぎないのがいくらもある。獻身だなんぞと云ふ行をした人の中には、Sadistもゐれば Masochistもゐる。性欲の目金を掛けて見れば、人間のあらゆる出來事の發動機は、一として性欲ならざるは無しである。Cherchez la femmeはあらゆる人事世相に應用することが出來る。金井君は、若しこんな立場から見たら、自分は到底人間の仲間はづれたることを免

れないかも知れないと思つた。

そこで金井君の何か書いて見ようといふ、兼ての企望が、妙な方角に向いて動き出した。金井君はこんな事を思つた。一體性欲と云ふものが人の生涯にどんな順序で發現して來て、人の生涯にどれだけ關係してゐるかと云ふことを徴すべき文獻は甚だ少いやうだ。藝術に猥褻な繪などがあるやうに、pornographie はどの國にもある。婬書はある。併し其は眞面目なもので無い。總ての詩の領分に戀愛を書いたものはある。併し戀愛は、よしや性欲と密接な關係を有してゐるとしても、性欲と同一では無い。裁判の記録や、醫者の書いたものに、多少の材料はある。併しそれは多く、性欲の變態ばかりである。Rousseau の懺悔記は隨分思ひ切つて無遠慮に何でも書いたものだ。子供の時教へられた事を忘れると、牧師のお孃さんが攫まへてお尻を打つ。それが何とも云へない好い心持がするので、知つたこともわざと知らない振をして、間違つた事を云つたり何かして、お孃さんに打つて貰つた。所が、いつかお孃さんが意嚮を知つて打たなくなつたなどと云ふことが書いてある。これは性欲の早期の發動であつて、決して初戀では無い。その外、青年時代の記事には性欲の事もちよいちよい見えてゐる。併し性欲を主にして書いたものでは無いから飽き足らない。Casanova は生涯を性欲の犠牲に供したと云つても好い男だ。あの男の書いた回想記は一の大著述であつて、あの大部な書物の内容は、徹頭徹尾性欲で、戀愛などにまぎらはしい處は無い。併し拿破崙の名聞心が甚だしく常人に超越してゐるために、その自傳が名聞心を研究する材料になりにくいと同じ事で、性欲界の豪傑 Casanova の書いたものも、性欲を研究する材料にはなりにくい。譬へば Rhodes の Colossus や奈良の大佛が人體の形の研究には適せないやうなものである。おれは何か書いて見ようと思つてゐるのだが、前人の足跡を踏むやうな事はしたくない。丁度好いから、一つおれの性欲の歴史を書いて見ようか知らん。實はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう發展したか、つくづく考へて見たことが無い。一つ考へて書いて見ようか知らん。白い上に黒く、はつきり書いて見たら、自分が自分で分かるだらう。さうしたら或は自分の性欲的生活が normal だか anomalous だか分かるかも知れない。勿論書いて見ない内は、どんなものになるやら分らない。隨て人に見せられるやうなものになるやら、世に公にせられるやうなものになるやら分らない。とにかく暇なときにぼつぼつ書いて見ようと、こんな風な事を思つた。

そこへ獨逸から郵便物が屆いた。いつも書籍を送つてくれる書肆から屆いたのである。その中に性欲的教育の問題を或會で研究した報告があつた。性欲的と云ふのは妥でない。Sexuel は性的である。性欲的では無い。併し性と云ふ字があまり多義だから、不本意ながら欲の字を添へて置く。さて教育の範圍内で、性欲的教育をせねばならないものだらうか、せねばならないとした處で、果してそれが出來るだらうかと云ふのが問題である。或會で教育家を一人、宗教家を一人、醫學者を一人と云ふ工合に、おのおの其道の authority とすべき人物を選んで、意見を叩いたのが、此報告になつて出たのである。然るに三人の議論の道筋はそれぞれ別であるが、性欲的教育は必要であるか、然り、做し得らるゝであらうか、然りと云ふ答に歸著してゐる。家庭でするが好いといふ意見もある。學校でするが好いと云ふ意見もある。とにかく爲るが好い、出來ると決してゐる。教へる時期は固より物心が附いてからである。婚禮の前に繪を見せると云ふ話は獨逸にもあるが、それを

少し早めるのである。早めるのは、婚姻の直前まで待つては、其内に間違があると云ふのである。話は下級生物の繁殖から始めて、次第に人類に及ぼすと云ふのである。初に下級生物を話すとはいふが、唯植物の雌蕊雄蕊の話をして、動物も亦復是の如し、人類も亦復是の如しでは何の役にも立たない。人の性欲的生活をも詳しく説かねばならぬと云ふのである。

金井君はこれを讀んで、暫く腕組をして考へてゐた。金井君の長男は今年高等學校を卒業する。假に自分が息子に教へねばならないとなつたら、どう云つたら好からうと考へた。そして非常にむつかしい事だと思つた。具體的に考へて見れば見る程詞を措くに窮する。そこで前に書かうと思つてゐた、自分の性欲的生活の歴史の事を考へて、金井君は問題の解決を得たやうに思つた。あれを書いて見て、どんなものになるか見よう。書いたものが人に見せられるか、世に公にせられるかより先に、息子に見せられるかと云ふことを檢して見よう。金井君はかう思つて筆を取つた。

※

六つの時であつた。

中國の或る小さいお大名の御城下にゐた。廢藩置縣になつて、縣廳が隣國に置かれることになつたので、城下は俄に寂しくなつた。

お父様は殿様と御一しよに東京に出て入らつしやる。お母様が、僕も最う大分大きくなつたから、學校に遣る前から、少しづつ物を教へて置かねばならないと云ふので、每朝假名を教へたり、手習をさせたりして下さる。

お父様は藩の時徒士であつたが、それでも土塀を繞らした門構の家にだけは住んでをられた。門の前はお濠で、向うの岸はお藏である。

或日お稽古が濟むと、お母様は機を織つて入らつしやる。僕は遊んでまゐりますと云ふ一聲を殘して驅け出した。

此邊は屋敷町で、春になつても、柳も見えねば櫻も見えない。内の塀の上から眞赤な椿の花が見えて、お米藏の側の臭橘に薄緑の芽の吹いてゐるのが見えるばかりである。

西隣に空地がある。石瓦の散らばつてゐる間に、げんげや菫の花が吹いてゐる。僕はげんげを摘みはじめた。暫く摘んでゐるうちに、前の日に近所の子が、男の癖に花なんぞを摘んで可笑しいと云つたことを思ひ出して、急に身の周囲を見廻して花を棄てた。幸に誰も見てゐなかつた。僕はぼんやりして立つてゐた。晴れた麗かな日であつた。お母様の機を織つてお出なさる音が、きいとん、きいとんと聞える。

空地を隔てて小原と云ふ家がある。主人は亡くなつて四十ばかりの後家さんがゐるのである。僕はふいと其家へ往く氣になつて、表口へ廻つて驅け込んだ。

草履を脱ぎ散らして、障子をがらりと開けて飛び込んで見ると、をばさんはどこかの知らない娘と一しよに本を開けて見てゐた。娘は赤いものづくめの着物で、髪を島田に結つてゐる。僕は子供ながら、此娘は町の方のものだと思つた。をばさんも娘も、ひどく驚いたやうに顏を上げて僕を見た。二人の顏は眞赤であつた。僕は子供ながら、二人の樣子が當前で無いのが分つて、異樣に感じた。見れば開けてある本には、綺麗に彩色がしてある。

「をば樣。そりやあ何の繪本かなう。」

僕はつかつかと側へ往つた。娘は本を伏せて、をばさんの顏を見て笑つた。表紙にも彩色がしてあつて、見れば女の大きい顏が書いてあつた。

をばさんは娘の伏せた本を引つたくつて開け

て、僕の前に出して、繪の中の何物かを指ざして、から云つた。

「しづさあ。あんたはこれを何と思ひんさるかの。」

娘は一層聲を高くして笑つた。僕は覗いて見たが、人物の姿勢が非常に複雜になつてゐるので、どうもよく分らなかつた。

「足ぢやらうがの。」

をばさんも娘も一しよに大聲で笑つた。足では無かつたと見える。僕は非道く侮辱せられたやうな心持がした。

「をば樣、又來ます。」

僕はをばさんの待てと云ふのを聽かずに、走つて戸口を出た。

僕は二人の見てゐた繪の何物なるかを判斷する智識を有せなかつた。併し二人の言語擧動を非道く異樣に、しかも不愉快に感じた。そして何故か知らないが、此出來事をお母樣に問ふことを憚つた。

＊

七つになつた。

お父樣が東京からお歸になつた。僕は藩の學問所の址に出來た學校に通ふことになつた。

內から學校へ往くには、門の前のお壕の西のはづれにある木戸を通るのである。木戸の番所の址がまだ元の儘になつてゐて、五十ばかりのぢいさんが住んでゐる。女房も子供もある。子供は僕と同年位の男の子で、襤褸を著て、いつも二本棒を垂らしてゐる。その子が僕の通る度に、指を銜へて僕を見る。僕は厭惡と多少の畏怖とを以て此子を見て通るのであつた。

或日木戸を通るとき、いつも外に立つてゐる子が見えなかつた。おれはあの子はどうしたかと思ひながら、通り過ぎようとした。その時番所址の家の中で、ぢいさんの聲がした。

「こりい。それ持つてわやくなしちやあいけんちふのに」

僕はふいと立ち留つて聲のする方を見た。ぢいさんは胡坐をかいて草鞋を作つてゐる。今叱つたのは、子供が藁を打つ槌を持ち出さうとしたからである。子供は槌を措いておれの方を見た。ぢいさんもおれの方を見た。濃い褐色の皺の寄つた顔で、曲つた鼻が高く、頬がこけてゐる。目はぎよろつとしてゐて、白目の裡に赤い處や黄いろい處がある。ぢいさんが僕にかう云つた。

「坊樣。あんたあお父さまとおつかさまと夜何をするか知つてをりんさるかあ。あんたあ寐坊ぢやけえ知りんさるまあ。あはは。」

ぢいさんの笑ふ顔は實に恐ろしい顔である。子供も一しよになつて、顔をくしやくしやにして笑ふのである。

僕は返事をせずに、逃げるやうに通り過ぎた。跡にはまだぢいさんと子供との笑ふ聲がしてゐた。

道道ぢいさんの云つた事を考へた。男と女とが夫婦になつてゐれば、その間に子供が出來ると云ふことは知つてゐる。併しどうして出來るか分らない。ぢいさんの云つた事は其邊に關してゐるらしい。其邊になんだか祕密が伏在してゐるらしいと、こんな風に考へた。

祕密が知りたいと思つても、ぢいさんの云ふやうに、夜目を醒ましてゐて、お父樣やお母樣を監視せようなどとは思はない。ぢいさんがそんな事を言つたのは、子供の心にも、profanation である、褻瀆であると云ふやうに感ずる。お社の御簾の中へ土足で踏み込めといはれたと同じやうに感ずる。そしてそんな事を云つたぢいさんが非道く憎いのである。

こんな考はその後木戸を通る度に起つた。併し子供の意識に斷えず應接に遑あらざる程の

新事實に襲はれてゐるのであるから、長く續けてそんな事を考へてゐることは出來ない。內に歸つてゐる時なんぞは、大抵そんな事は忘れてゐるのであつた。

※

十になつた。

お父樣が少しづつ英語を敎へて下さることになつた。

內を東京へ引き越すやうになるかも知れないと云ふ話がをりをりある。そんな話のある時、聞耳を立てると、お母樣が餘所の人に云ふなと仰やる。お父樣は、若し東京へでも行くやうになると、餘計な物は持つて行かれないから、物を選り分けねばならないと云ふので、よく藏にはひつて何かして入らつしやる。藏は下の方には米がはひつてゐて、二階に長持や何かが入れてあつた。お父樣のこのお爲事も、客でもあると、すぐに止めておしまひになる。

何故人に云つては惡いのかと思つて、お母樣に問うて見た。お母樣は、東京へは皆行きたがつてゐるから、人に云ふのは好くないと仰やつた。

或日お父樣のお留守に藏の二階へ上つて見た。蓋を開けた儘にしてある長持がある、色色な物が取り散らしてある。もつと小さい時に、いつも床の間に飾つてあつた鎧櫃が、どうしたわけか、二階の眞中に引き出してあつた。甲冑と云ふものは、何でも五年も前に、長州征伐があつた時から、信用が地に墜ちたのであつた。お父樣が古かね屋にでも遣つておしまひなさるお積りで、疾うから藏にしまつてあつたのを、引き出してお置になつたのかも知れない。

僕は何の氣無しに鎧櫃の蓋を開けた。さうすると鎧の上に本が一冊載つてゐる。開けて見ると、綺麗に彩色のしてある繪である。そしてその繪にかいてある男と女とが異樣な姿勢をしてゐる。僕は、もつと小さい時に、小原のをばさんの內で見た本と同じ種類の本だと思つた。併しもう大分それを見せられた時よりは智識が加はつてゐるのだから、その時よりは熟く分つた。Michelangelo の壁畫の人物も、大膽な遠近法を使つてかいてあるとは云ふが、こんな繪の人物には、それとは違つて、隨分無理な姿勢が取らせてあるのだから、小さい子供に、どこに手があるやら足があるやら辨へにくかつたのも無理は無い。今度は手も足も好く分つた。そして兼て知りたく思つた祕密はこれだと思つた。

僕は面白く思つて、幾枚かの繪を繰り返して見た。併しここに注意して置かなければならない事がある。それはかう云ふ人間の振舞が、人間の欲望に關係を有してゐると云ふことは、その時少しも分らなかつた。Schopenhauer はかう云ふ事を云つてゐる。人間は容易に醒めた意識を以て子を得ようと謀るものでは無い。自分の種族の繁殖に手を著けるものでは無い。そこで自然がこれに愉快を伴はせる。これを欲望にする。この愉快、この欲望は、自然が人間に繁殖を謀らせる詭謀である、餌である。こんな餌を與へないでも、繁殖に差支の無いのは、下等な生物である。醒めた意識を有せない生物であると云つてゐる。僕には、此繪にあるやうな人間の振舞に、そんな餌が伴はせてあるといふことだけは、少しも分らなかつたのである。僕の面白がつて、繰り返して繪を見たのは、唯まだ知らないものを知るのが面白かつたに過ぎない。Neugierde に過ぎない。Wissbegierde に過ぎない。小原のをばさんに見せて貰つてゐた、嶋田髷の娘とは、全く別樣な眼で見たのである。

さて繰り返して見てゐるうちに、疑惑を生じた。それは或る體の部分が馬鹿に大きくかい

てあることである。もつと小さい時に、足で無いものを足だと思つたのも、無理は無いのである。一體から云ふ畫はどこの國にもあるが、或る體の部分をこんなに大きくかくと云ふことだけは、世界に類が無い。これは日本の浮世繪師の發明なのである。昔希臘の藝術家は、神の形を製作するのに、額を大きくして、顏の下の方を小さくした。額は靈魂の舍るところだから、それを引き立たせるために大きくした。顏の下の方、口のところ、咀嚼に使ふ上下の顎や齒なんぞは、卑しい體の部であるから小さくした。若しこつちの方を大きくすると、段段猿に似て來るのである。Camper の面角が段段小さくなつて來るのである。それから腹の割合に胸を大きくした。腹が顎や齒と同じ關係を有してゐると云ふことは、別段に說明することを要せない。飲食よりは呼吸の方が、上等な作用である。その上昔の人は胸に、詳しく言へば心の臟に、血の循行では無くて、精神の作用を持たせてゐたのである。その額や胸を大きくしたと同じ道理で、日本の浮世繪師は、こんな畫をかく時に、或る體の部分を大きくしたのである。

それがどうも僕には分らなかつた。

肉蒲團と云ふ、支那人の書いた、けしからん猥褻な本がある。お負に支那人の癖で、その物語の組立に善惡の應報をこじつけてゐる。實に馬鹿げた本である。その本に未央生と云ふ主人公が、自分の或る體の部分が小さいやうだと云ふので、人の小便するのを覗いて歩くことが書いてある。僕もその頃人が往來ばたで小便をしてゐると、覗いて見た。まだ御城下にも辻便所なぞは無いので、誰でも道ばたでしたのである。そして誰のも小さいので、畫にうそがかいてあると判斷して、大發見をしたやうな積りでゐたのである。

これが僕の可笑しな物を見てから實世界の觀察をした一つである。今一つの觀察は、少し書きにくいが、眞實のために强いて書く。僕は女の體の或る部分を目擊したことは無い。その頃御城下には湯屋なんぞは無い。內で湯を使はせてもらつても、親類の家に泊つて、餘所の人に湯を使はせてもらつても、自分だけが裸にせられて、使はせてくれる人は着物を着てゐる。女は往來で手水もしない。これには困窮した。

學校では、女の子は別な教場で教へることになつてゐて、一しよに遊ぶことも絕えて無い。若し物でも云ふと、すぐに友達仲間で嘲弄する。そこで女の友達といふものは無かつた。親類に娘の子もあつたが、何の法事だとか云ふので來ることがあつても、餘所行の着物を着て、お化粧をして來て、大人しく何か食べて歸るばかりであつた。心安いのは無い。內の裏に、藩の時に小人と云つたものの住んでゐて、その娘に同年位なのがゐた。名は勝と云つた。小さい蝶蝶髷を結つてをりをり內へ遊びに來る。色の白い頰つぺたの膨らんだ子で、性質が極素直であつた。この子が、氣の毒にも、僕の試驗の對象物にせられた。

五月雨の晴れた頃であつた。お母様は相變らず機を織つて入らつしやる。蒸暑い午過で、內へ針仕事に來て、臺所の手傳をしてゐる婆あさんは晝寢をしてゐる。お母様の機の音のみが、ひつそりしてゐる家に響き渡つてゐる。

僕は裏庭の藏の前で、蜻蛉の尻に絲を附けて飛ばせてゐた。花の一ぱい咲いてゐる百日紅の木に、蟬が來て鳴き出した。覗いて見たが、高い處なので取れさうに無い。そこへ勝が來た。誰も內のものが晝寢をしたので、寂しくなつて出掛けて來たのである。

「一しよに遊びませうやあ。」

これが挨拶である。僕は忽ち一計を案じ出した。

「うむ。あの縁から飛んで遊ばう。」
かう云つて草履を脱いで縁に上つた。勝も附いて來て、赤い緒の雪踏を脱いで上つた。僕は先づ跣足で庭の苔の上に飛び降りた。勝も飛び降りた。僕は又縁に上つて、尻を褰つた。
「かうして飛ばんと、著物が邪魔になつて行けん。」
僕は活潑に飛び降りた。見ると、勝はぐづぐづしてゐる。
「さあ。あんたも飛びんされえ。」
勝は暫く困つたらしい顏をしてゐたが、無邪氣な素直な子であつたので、とうとう尻を褰つて飛んだ。僕は目を圓くして覗いてゐたが、白い脚が二本白い腹に續いてゐて、なんにも無かつた。僕は大いに失望した。Pantalon で Ballet を踊る女の股の間を覗いて、羅の織り込んである金絲の光るのを見て、失望する紳士の事を思へば、罪のない話である。

※

その歳の秋であつた。
僕の國は盆踊の盛な國であつた。舊暦の盂蘭盆が近づいて來ると、今年は踊が禁ぜられるさうだと云ふ噂があつた。併し縣廳で他所產の知事さんが、僕の國のものに逆らふのは好くないと云ふので、默許すると云ふ事になつた。
內から二三町ばかり先は町である。そこに屋臺が掛かつてゐて、夕方になると、踊の囃子をするのが內へ聞える。
踊を見に往つても好いかと、お母樣に聞くと早く戻るなら、往つても好いと云ふことであつた。そこで草履を穿いて駈け出した。
これまでも度度見に往つたことがある。もつと小さい時にはお母樣が連れて行つて見せて下すつた。踊るものは、表向は町のものばかりと云ふのであるが、皆頭巾で顏を隱して踊るのであるから、侍の子が澤山踊りに行く。中には男で女裝したのもある。女で男裝したのもある。頭巾を著ないものは百眼と云ふものを掛けてゐる。西洋でする Carneval は一月で、季節は違ふが、人間は自然に同じやうな事を工夫し出すものである。西洋にも、收穫の時の踊は別にあるが、その方には假面を被ることは無いやうである。
大勢が輪になつて踊る。覆面をして踊りに來て、立つて見てゐるものもある。見てゐて、氣に入つた踊手のゐる處へ、いつでも割り込むことが出來るのである。
僕は踊を見てゐるうちに、覆面の連中の話をするのがふいと耳に入つた。識りあひの男二人と見える。
「あんたあゆうべ愛宕の山へ行きんさつたらうがの。」
「噓を云ひんさんな。」
「いいや。何でも行きんさつたちふ事ちや。」
かう云ふやうな問答をしてゐると、今一人の男が側から口を出した。
「あそこにやあ、朝行つて見ると、いろいろな物が落ちてをるげな。」
跡は笑聲になつた。僕は穢い物に障つたやうな心持がして、踊を見るのを止めて、內へ歸つた。

※

十一になつた。
お父樣が東京へ連れて出て下すつた。お母樣は跡に殘つてお出なすつた。いつも手傳に來る婆あさんが越して來て、一しよにゐるのである。少し立てば、跡から行くと云ふことであつた。多分家屋敷が賣れるまで殘つてお出なすつたのであらう。
舊藩の殿樣のお邸が向嶋にある。お父樣は

そこのお長屋のあいてゐるのにはひつて、婆あさんを一人雇つて、御飯を焚かせて暮らしてお出になる。

お父様は毎日出て、晩になつてお歸になる。僕の行く學校をも搜して下さると云ふことであつた。お父様がお出掛になると、二十ばかりの上さんが勝手口へ來て、前掛を膨らませて歸つて行く。これは婆あさんが米を盜んで、娘に持たせて遣るのであつた。後にお母様がお出になつて、此事が知れて、婆あさんは逐ひ出された。

僕は餘程ぼんやりした小僧であつた。

一しよに遊んでくれる子供も無い。家職のもの息子で、年が三つばかり下なのがゐたが、初めて逢つた日に、お邸の池の鯉を釣らうと云つたので、嫌になつて一しよに遊ばない事にした。家扶の娘の十二三になるのを頭にして、娘が二三人ゐたが、僕を見ると遠い處から指ざしなんぞをして、囁きあつて笑つたり何かする。これも嫌な女どもだと思つた。

御殿のお次に行つて見る。家從と云ふものが二三人控へてゐる。大抵烟草を飲んで雜談をしてゐる。おれがゐても、別に邪魔にもしない。そこで色色な事を聞いた。

最も屢、話の中に出て來るのは、吉原と云ふ地名と奥山と云ふ地名とである。吉原は彼等の常に夢みてゐる天國である。そしてその天國の莊嚴が、幾分かお邸の力で保たれてゐると云ふことである。家令はお邸の金を高い利で吉原のものに貸す。その緣故で彼等が行くと、特に優待せられるさうだ。そこで手ん手に吉原へ行つた話をする。聞いてゐても半分は分らない。又半分位分るやうであるが、それがちつとも面白くない。中にはこんな事を云ふ男がある。

「こんだあ、あんたを連れて行つて上げうかあ。綺麗な女郎が可哀がつてくれるぜえ。」

さう云ふ時にはみんなが笑ふ。

奥山の話は榛野と云ふ男の事に連繫して出るのが常になつてゐる。家從どもは大抵菊石であつたり、獅子鼻であつたり、反齒であつたり、滿足な顏はしてゐない。それと違つて榛野と云ふのは、色の白い、脊の高い男で、髮を長くして、油を附けて、項まで分けてゐた。此の男は何と云ふ役であつたか知らぬが、先づ家從どもの上席位の待遇を受けて、文書の立案と云ふやうな事をしてゐた。家從どもはこんな事を云ふ。

「榛野さあのやうに大事にして貰はれれば、こつちとも奥山へ行くけえど、錢う拂うて楊弓を引いても、ろくに話もしてくれんけえ、ほんつまらんいたう。」

榛野は此仲間の Adonis であつた。そして僕は程無く此の男のために Aphrodite たり、また Porsophone たる女子どもを見ることを得たのである。

お庭の蟬の聲の段段やかましうなる頃であつた。お父様の留守にぼんやりしてゐると、湼麻と云ふ家從が外から聲を掛けた。

「しづさあ。居りんさるかあ。今からお使に行くけえ、一しよに來んされえ。淺草の觀音様に連れて行つて上げう。」

觀音様へはお父様が一度連れて行つて下すつたことがある。僕は喜んで下駄を引つ掛けて出た。

吾妻橋を渡つて、並木へ出て買物をした。それから引き返して、中店をぶらぶら歩いた。龜の形をしたおもちやの絲で吊したのを、澤山持つて「器械の龜の子、選り取つた、選り取つた」などと云つてゐる男がある。龜の首や尾や四足がぶるぶると動いてゐる。湼麻は絵草紙屋の前に立ち留まつた。おれは西南戰爭の錦繪を見てゐると、湼麻は店前に出してある、帶封のしてある本を取り上げて、店番の年増にかう云ふのである。

「お上さん。これを騙されて買つて行く奴がまだありますか。はははは。」

「それでもちよいちよい賣れますよ。一向つまらない事が書いてあるのでございますが。おほほほ。」

「どうでせう。ほんとうのを賣つてくれませんかね。」

「御笑談を仰やいます。なかなか當節は警察がやかましうございまして。」

帶封の本には、表紙に女の顏が書いてあつて、その上に「笑ひ本」と大字で書いてある。これはその頃繪草紙屋にあつただまし物である。中には一口噺か何かを書いて、わざと祕密らしく帶封をして、かの可笑しな畫を欲しがるものに賣るのである。

僕は子供ではあつたが、問答の意味をおほよそ解した。併しその問答の意味よりは、涅麻の自在に東京詞を使ふのが、僕の注意を引いた。そして涅麻は何故これ程東京詞が使へるのに、お屋敷では國詞を使ふだらうかと云ふことを考へて見た。國もの同志で國詞を使ふのは、固より當然である。併し涅麻が二枚の舌を使ふのは、そのためばかりでは無いらしい。彼は上役の前で淳樸を妝ふために國詞を使ふのではあるまいか。僕はその頃からもうこんな事を考へた。僕はぼんやりしてゐるかと思ふと、又餘り無邪氣で無い處のある子であつた。

觀音堂に登る。僕の物を知りたがる欲は、僕の目を、唯眞黑な格子の奧の、蠟燭の光の覺束ない邊に注がせる。蹲んで、體を蝦のやうに曲げて、何かぐづぐづ云つて祈つてゐる爺さん婆あさん達の背後を、堂の東側へ折れて、をりをりかちやかちやと云ふ賽錢の音を聞き棄てて堂を降りる。

此邊には乞食が澤山ゐた。その間に、五色の沙で書畫をかいて見せる男がある。少し廣い處に、大勢の見物が輪を作つて取り卷いてゐるのは、居合ぬきである。涅麻と一しよに暫く立つて見てゐた。刀が段段に掛けてある。下の段になるだけ長いのである。色色な事を饒舌つてゐるが、なかなか拔かない。そのうち涅麻が、つと退くから、何か分からずに附いて退いた。振り返つて見れば、錢を集める男が、近處へ來てゐたのであつた。

楊弓店のある、狹い巷に出た。どの店にもお白いを附けた女のゐるのを、僕は珍らしく思つて見た。お父樣はここへは連れて來なかつたのである。僕は此女達の顏に就いて、不思議な觀察をした。彼等の顏は當前の人間の顏では無いのである。今まで見た、普通の女とは違つて、皆一種の stereotype な顏をしてゐる。僕の今の詞を以て云へば、此女達の顏は凝結した表情を示してゐるのである。僕はその顏を見てから思つた。何故皆揃つてあんな顏をしてゐるのであらう。子供に好い子をお爲と云ふと、變な顏をする。此女達は、皆その子供のやうに、變な顏をしてゐる。眉はなるたけ高く、甚だしきに髮の生際まで吊るし上げてある。目をなるたけ大きく瞠つてゐる。物を云つても笑つても、鼻から上を動かさないやうにしてゐる。どうして云ひ合はせたやうに、こんな顏をしてゐるだらうと思つた。僕には分からなかつたが、これは賣物の顏であつた。これは Prostitution の相貌であつた。

女はやかましい聲で客を呼ぶ。「ちよいと、檀那」と云ふのが尤も多い。「ちよいと」とはつきり聞えるのもあるが、多くは「ちいと」と聞える。「紺足袋の檀那」なんぞと云ふ奴もある。涅麻は紺足袋を穿いてゐた。

「あら、涅麻さん。」

一際鋭い呼聲がした。涅麻は其店にはひつて腰を掛けた。僕は呆れて立つて見てゐると、涅

麻が手眞似で掛けさせた。圓顏の女である。物を云ふと、薄い唇の間から、鐵漿を剝がした齒が見える。長い烟管に烟草を吸ひ附けて、吸口を袖で拭いて、己の鼻から上を動かさずに、涅麻に出す。

「何故拭くのだ。」

「だって失禮ですから。」

「榛野で無くっては、拭かないのは飲まして貰へないのだね。」

「あら、榛野さんにだっていつでも拭いて上げまさあ。」

「さうかね。拭いて上げるかね。」

こんな風な會話である。詞が二樣の意義を有してゐる。涅麻は僕がその第二の意義に對して、何等の想像をも畫き得るものとは認めてゐない。女は僕をば空氣の如くに取り扱ってゐる。併し僕には少しの不平も起らない。僕は此女は嫌であった。それだから物なんぞを云って貰ひたくは無かった。

涅麻が楊弓を引いて見ないかと云ったが、僕は嫌だと云った。

涅麻は間も無く楊弓店を出た。それから猿若町を通って、橋場の渡を渡って、向嶋のお邸に歸った。

同じ頃の事であった。家從達の仲間に、銀林と云ふ針醫がゐて、折折彼等の詰所に來て話してゐた。これはお上のお療治に來るので、お國もので無い。江戸兒である。家從は大抵三十代の男であるのに、此男は四十を越してゐた。僕は家從等に比べると、此男が餘程賢いと思ってゐた。

或る日銀林は銀座の方へ往くから、連れて行って遣らうと云った。その日には用を濟ませてから、銀林が京橋の側の寄席に這入った。

講釋であるから、餘り客が多くは無い。上品に見えるのは娘を連れた町家のお上さんなどで、その外多くは職人のやうな男であった。

高座には話家が出て饒舌ってゐる。徳三郎と云ふ息子が象棋をさしに出てゐた。夜が更けて歸って、閉出を食った。近所の娘が一人矢張同じやうに閉出を食ってゐる。娘は息子に話し掛ける。息子がをぢの内へ往って留めて貰ふより外は無いと云ふと、娘が一しよに連れて行ってくれろと頼む。息子は聽かずにずんずん行くが、娘は附いて來る。をぢは通物である。通物とは道義心の lax なる人物と云ふことと見える。息子が情人を連れて來たものと速斷する。息子が辯解するのを、恥かしいので言を左右に託してゐるのだと思ふ。息子に戀慕してゐる娘は、物怪の幸と思ってゐる。そこで二人はをぢに二階へ追ひ上げられる。夜具は一人前しか無い。解いた帶を、縦に、蒲團の眞中に置いて、跡から書くので[illegible]が anachronism になるが、褌太を兩分したやうにして、二人は寝る。さて一寐入して目が醒めて云云と云ふのである。僕の耳には、まだ東京の詞は慣れてゐないのに、話家はぺらぺらしやべる。僕は後に西洋人の講義を聞き始めた時と同じやうに、一しよう懸命に注意して聽いてゐると、銀林は僕の顏を見て笑ってゐる。

「どうです。分かりますかい。」

「うむ。大抵分かる。」

「大抵分かりやあ澤山だ。」

今までしやべってゐた話家が、起って腰を屈めて、高座の横から降りてしまふと、入り替って第二の話家が出て來る。「替りあひまして當り榮も致しません」と謙遜する。「殿方のお道樂はお女郎買でございます」と破題を置く。それから職人がうぶな男を連れて吉原へ行くと云ふ話をする。これは吉原入門とも云ふべき講義である。僕は、なる程東京と云ふ處は何の智識を獲得するにも便利な土地だ、と感歎して聽

いてゐる。僕は此時「おかんこを頂戴する」と云ふ奇妙な詞を覺えた。併し此詞には、僕は其後寄席以外では、どこでも遭遇しないから、これは僕の記憶に無用な負擔を賦課した詞の一つである。

※

同じ年の十月頃、僕は本郷壹岐坂にあつた、獨逸語を教へる私立學校にはひつた。これはお父樣が僕に鑛山學をさせようと思つてゐたからである。

向島からは遠くて通はれないと云ふので、その頃神田小川町に住まつてをられた、お父樣の先輩の東先生と云ふ方の内に置いて貰つて、そこから通つた。

東先生は洋行がへりで、攝生のやかましい人で、盛に肉食をせられる外には、別に贅澤はせられない。唯酒を隨分飲まれた。それも役所から歸つて、晩の十時か十一時まで飜譯なんぞをせられて、其跡で飲まれる。奥さんは女丈夫である。今から思へば、當時の大官であの位閨門のをさまつてゐた家は少なからう。お父樣は好い内に僕を置いて下すつたのである。

僕は東先生の内にゐる間、性欲上の刺戟を受けたことは少しも無い。強ひて記憶の絲を手繰つて見れば、或るときかう云ふ事があつた。僕の机を置いてゐるのは、應接室と臺所との間であつた。日が暮れて、まだ下女がランプを點けて來てくれない。僕はふいと立つて臺所に出た。そこでは書生と下女とが話をしてゐた。書生はかう云ふことを下女に說明してゐる。女の器械は何時でも用に立つ。男の器械は用立つ時と用立たない時とある。好だと思へば跳躍する。嫌だと思へば萎靡して振はないと云ふのである。下女は耳を眞赤にして聽いてゐた。僕は不愉快を感じて、自分の部屋に歸つた。

學校の課業はむつかしいとも思はなかつた。お父樣に英語を習つてゐたので、Adler とか云ふ人の字書を使つてゐた。獨英と英獨との二册になつてゐる。退屈した時には、membre と云ふ語を引いて Zeugungsglied と云ふ語を出したり、pudenda と云ふ語を引いて Scham といふ語を出したりして、ひとりで可笑しがつてゐたこともある。併しそれも性欲に支配せられて、そんな語を面白がつたのでは無い。人の口に上せない隱微の事として面白がつたのである。それだから同時に Furz と云ふ語を引いて Furz と云ふ語を出して見て記憶してゐた。或るとき獨逸人の教師が化學の初步を教へてゐて、硫化水素をこしらへて見せた。そして此瓦斯を含んでゐるものを知つてゐるかと問うた。一人の生徒が faule Eier と答へた。いかにも腐つた卵には同じ臭がある。まだ何かあるかと問うた。僕が起立して聲高く叫んだ。

「Furz！」

「Was? Bitte, noch einmal！」

「Furz！」

教師はやつと分かつたので顏を眞赤にして、そんな詞を使ふものでは無いと、懇切に教へてくれた。

學校には寄宿舍がある。學校が濟んでから、寄つて見た。ここで始めて男色と云ふことを聞いた。僕なんぞと同級で、毎日馬に乘つて通つて來る蔭小路と云ふ少年が、彼等寄宿生達の及に以戀の對象物である。蔭小路は餘り課業は好く出來ない。薄赤い頰つぺたがふつくりと膨らんでゐて、可哀らしい少年であつた。その少年と云ふ詞が、男色の受身と云ふ意味に用ゐられてゐるのも、僕のためには新智識であつた。僕に歸り掛に寄つて行けと云つた男も、僕を少年視してゐたのである。二三度寄るまでは、馳

走をしてくれて、親切らしい話をしてゐた。その頃書生の金平糖と云つた彈豆、書生の羊羹と云つた燒芋などを食はせられた。但しその親切は初から少し枡があるやうに感じて、嫌であつたが、年長者に禮を缺いてはならないと思ふので、忍んで交際してゐたのである。そのうちに手を握る。頰摩をする。うるさくてたまらない。僕にはUrningたる素質は無い。もう歸り掛に寄るのが嫌になつたが、それまでの交際の惰力で、つい寄らねばならないやうにせられる。或る日寄つて見ると床が取つてあつた。その男がいつもよりも一層うるさい擧動をする。血が頭に上つて顏が赤くなつてゐる。そしてとうとう僕にかう云つた。

「君、一寸だから此中へ這入つて一しよに寢給へ。」

「僕は嫌だ。」

「そんな事を云ふものぢやない。さあ。」

僕の手を取る。彼が熱して來れば來るほど、僕の厭惡と恐怖とは高まつて來る。

「嫌だ。僕は歸る。」

こんな押問答をしてゐるうちに、隣の部屋から聲を掛ける男がある。

「だめか。」

「うむ。」

「そんなら應援して遣る。」

隣室から廊下に飛び出す。僕のゐた部屋の破障子をがらりと開けて跳り込む。此男は粗暴な奴で、僕は初から交際しなかつたのである。此男は少くも見かけの通の奴で、僕を釣つた男は僞善者であつた。

「長者の云ふことを聽かなけりやあ、布團蒸にして懲して遣れ。」

手は詞と共に動いた。僕は布團を頭から被せられた。一しよう懸命になつて、跳ね返さうとする。上から押へる。どたばたするので、書生が二三人覗きに來た。「よせ、よせ」などと云ふ聲がする。上から押へる手が弛む。僕はやう／＼跳ね起きて逃げ出した。その時書物の包とインク壺とをさらつて來たのは、我ながら敏捷であつたと思つた。僕はそれからは寄宿舍へは往かなかつた。

その頃僕は土曜日ごとに東先生の内から、向島のお父樣の處へ泊りに行つて、日曜日の夕方に歸るのであつた。お父樣は或る省の判任官になつてをられた。僕はお父樣に寄宿舍の事を話した。定めてお父樣はびつくりなさるだらうと思ふと、少しもびつくりなさらない。

「うむ。そんな奴がをる。これからは氣を附けんと行かん。」

かう云つて平氣でをられる。そこで僕は、これも嘗めなければならない辛酸の一つであつたと云ふことを悟つた。

※

十三になつた。

去年お母樣がお國からお出になつた。

今年の初に、今まで學んでゐた獨逸語を廢めて、東京英語學校にはひつた。これは文部省の學制が代つたのと、僕が哲學を遣りたいと云ふので、お父樣にねだつたとのためである。東京へ出てから少しの間獨逸語を遣つたのを無駄骨を折つたやうに思つたが、後になつてから大分役に立つた。

僕は寄宿舍ずまひになつた。生徒は十六七位なのが極若いので、多くは二十代である。服裝は殆皆小倉の袴に紺足袋である。袖は肩の邊までたくし上げてゐないと、惰弱だと云はれる。

寄宿舍には貸本屋の出入が許してある。僕は貸本屋の常得意であつた。馬琴を讀む。京傳を讀む。人が春水を借りて讀んでゐるので、又

借をして讀むこともある。自分が梅暦の丹治郎のやうであつて、お蝶のやうな娘に慕はれたら、愉快だらうと云ふやうな心持が、始めて此頃萌した。それと同時に、同じ小倉袴紺足袋の仲間にも、色の白い目鼻立の好い生徒があるので、自分の醜男子なることを知つて、所詮女には好かれないだらうと思つた。此頃から後は、此考が永遠に僕の意識の底に潛伏してゐて、僕に十分の得意と云ふことを感ぜさせない。そこへ年齡の不足と云ふことが加勢して、何事をするにも、友達に暴力で壓せられるので、僕は陽に屈服して陰に反抗すると云ふ態度になつた。兵家のDéfensiveは受動的抵抗を弱國の態に取るべき手段だと云つて居る。僕は先天的失戀者で、そして境遇上の弱者であつた。

性欲的に觀察して見ると、その頃の生徒仲間には軟派と硬派とがあつた。軟派は例の可笑しな畫を看る連中である。その頃の貸本屋は本を竪に高く積み上げて、笈のやうにして背負つて歩いた。その荷の土臺になつて居る處が箱であつて抽斗が附いてゐる。此抽斗が例の可笑しな畫を入れて置く處に極まつてゐた。中には貸本屋に借る外に、藏書としてさう云ふ繪の本を持つてゐる人もあつた。硬派は可笑しな畫なんぞは見ない。平田三五郎と云ふ少年の事を書いた寫本があつて、それを引張り合つて讀むのである。鹿兒島の塾なんぞでは、これが毎年元旦に第一に讀む本になつてゐると云ふことである。三五郎と云ふ前髮と、其兄分の鬢奴との間の戀の歷史であつて、嫉妬がある。鞘當がある。末段には二人が相踵いで戰死することになつてゐたかと思ふ。これにも插畫があるが、左程見苦しい處はかいてないのである。

軟派は數に於いては優勢であつた。何故と云ふに、硬派は九州人を中心としてゐる。その頃の豫備門には鹿兒島の人は少ないので、九州人と云ふのは佐賀と熊本との人であつた。これに山口の人の一部が加はる。その外は中國一圓から東北まで、悉く軟派である。

その癖硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護い處があるやうに見えてゐた。紺足袋小倉袴は硬派の服裝であるのに、軟派も其眞似をしてゐる。唯軟派は同じ服裝をしてゐても、袖をまくることが少ない。肩を怒らすことが少ない。ステッキを持つてもステッキが細い。休日に外出する時なんぞは、そつと絹物を著て白足袋を穿いたり何かする。

そして其白足袋の足はどこへ向くか。芝、淺草の楊弓店、根津、吉原、品川などの惡所である。不斷紺足袋で外出しても、軟派は好く町湯に行つたものだ。湯屋に硬派だつて行くことが無いでは無いが、行つても二階へは登らない。軟派は二階を當にして行く。二階には必ず女がゐた。その頃の書生には、かう云ふ湯屋の女と夫婦約束をした人もあつた。下宿屋の娘なんぞよりは、無論一層下つた貨物なのである。

僕は硬派の犧牲であつた。何故と云ふのに、その頃の寄宿舍の中では、僕と埴生庄之助と云ふ生徒とが一番年が若かつた。埴生は江戸の目醫者の子である。色が白い。目がぱつちりしてゐて、脣は朱を點じたやうである。體はしなやかである。僕は色が黑くて、體が武骨で、その上田舍育である。それであるのに、意外にも硬派は埴生を附け廻さずに、僕を附け廻す。僕の想像では、埴生は生れながらの軟派であるので免れるのだと思つてゐたのである。

學校にはひつたのは一月である。寄宿舍では二階の部屋を割り當てられた。同室は鰐口弦と云ふ男である。此男は晩學の方であつて、級中で最年長者の一人であつた。白堊石の顏が長くて、前にしやくれた腮が尖つてゐる。痩せてゐて脊が高い。若し此男が硬派であつたら、僕

は到底見れないのであつたかと思ふ。

　一體に鰐口は硬派では無かつた。どちらかと云へば軟派で、女色の事は何でも心得てゐるらしい。さればとて普通の軟派でも無い。軟派の連中は女に好かれようとする。鰐口は固より好かれようとしたとて好かれもすまいが、女を土苴の如くに視てゐる。女は彼のために、唯性欲に滿足を與へる器械に過ぎない。彼は機會のある毎に其欲を遂ける。そして彼の飽くまで冷靜なる眼光は、蛇の蛙を覗ふやうに女を覗つてゐて、巧に乘ずべき機會に乘ずるのである。だから彼の醜を以てして、決して女に不自由をしない。そのいふところを聞けば、女は金で自由になる物だ。女に好かれるには及ばないと云つてゐる。

　鰐口は女を馬鹿にしてゐるばかりでは無い。あらゆる物を馬鹿にしてゐる。彼の目中には神聖なるものが絶待的に無い。折々僕のお父樣が寄宿舍に尋ねて來られる。お父樣が、倅は子供同樣であるから頼むと挨拶をなさると、鰐口は唯はあはあと云つて取り合はない。そして默つてお父樣の僕に訓戒をして下さるのを聞いてゐて、跡で穿いろを遣ふ。

　「一精出して勉強しんされえ。鰐口君でもどなたでも、長者の云ひんさることは、聽かにやあ行けんぜや。若し腑に落ちんことがあるなら、どう云ふわけでさう爲にやならんのか、分りませんちうて、教へて貰ひんされえ。わしはこれで歸る。土曜には待つとるから、來んされえ。あはははは。」

　それからはお父樣の事を、來んされえ、と云ふ。今日あたりは又來んされえの來る頃だ。又最中にありつけるだらうなんぞと云ふ。人の親を思ふ情だからつて、何だからつて、いたはつてくれると云ふことは無い。「あの來んされえが君のおつかさんと孳尾んで君を拵へたのだ、あはははははなどと云ふ。お國の木戸にゐたお爺さんと擇ぶこと無しである。

　鰐口は講堂での出來は中々いゝのである。獨逸人の教師に、答の出來ない生徒を塗板の前へ直立させて置く例になつてゐた。或るとき鰐口が答が出來ないので、教師がそこに立つてゐろと云つた。鰐口は塗板に背中を持たせて空を嘯いた。塗板はがたりと鳴つた。教師は火のやうになつて怒つて、とうとう幹事に云つて鰐口を禁足にした。併しそれからは教師も鰐口を憚つてゐた。

　教師が憚るくらゐであるから、級中鰐口を憚らないものは無い。鰐口は僕に保護を加へはしないが、鰐口のゐる處へ來て、僕に不都合な事をするものは無い。鰐口は外出するとき、僕にかう云つて出て行く。

　「おれがをらんと、又穴を覗ふ馬鹿ものが來るから、用心してをれ。」

　僕は用心してゐる。寄宿舍は長屋造である。出口は兩方にある。敵が右から來れば左へ逃げる。左から來れば右へ逃げる。それでも心配なので、あるとき向嶋の内から、短刀を一本そつと持つて來て、懷に隱してゐた。

　二月頃に久しく大風が續いた。毎日學課が濟むと、埴生と運動場へ出て遊ぶ。外の生徒は二人が埃砂の中で角力を取るのを見て、丸で狗兒のやうだと云つて冷かしてゐた。やあ、黑と白が喧嘩をしてゐる、白、負けるななどと聲を掛けて通るものもあつた。埴生と僕とはこんな風にして遊んでも、別に話はしない。僕は貸本をむやみに讀んで、子供らしい空想の世界に住してゐる。埴生は教場の外ではぢつとしてゐない性なので、本なぞは讀まない。一しよに遊ぶと云へば、角力を取る位のものであつた。

　或る寒さの強い日の事である。僕は埴生と運動場へ行つて、今日は寒いから角力にしようと

云ふので、駈競をして遊んで歸つて見ると、鰐口の處へ、同級の生徒が三四人寄つて相談をしてゐる。間食の相談である。大抵間食は彈豆か燒芋で、生徒は醵金をして、小使に二錢の使賃を遣つて、買つて來させるのである。今日はいつもと違つて、大いに奢ると云ふので、盲汁と云ふことをするのださうだ。てんでに出て何か買つて來て、それを一しよに鍋に叩き込んで食ふのである。一人の男が僕の方を見て、金井はどうしようと云つた。鰐口は僕を橫目に見て、かう云つた。

「芋を買ふ時とは違ふ。小僧なんぞは仲間に這入らなくても好い。」

僕は傍を向いて聞かない振をしてゐた。誰を仲間に入れるとか入れないとか云つて、暫く相談してゐたが、程無く皆出て行つた。

鰐口の性質は平生知つてゐる。彼は權威に屈服しない。人と苟も合ふと云ふ事が無い。そこまでは好い。併し彼が何物をも神聖と認めないために、傍のものが苦痛を感ずることがある。その頃僕は彼の性質を刻薄だと思つてゐた。それには、彼が漢學の素養があつて、いつも机の上に韓非子を置いてゐたのも、與つて力があつたのだらう。今思へば刻薄と云ふ評は黑星に中つてゐない。彼はcynicなのである。僕は後にTheodor Vischer の書いた Cynismus を讀んでゐる間、始終鰐口の事を思つて讀んでゐた。Cynic と云ふ語は希臘の Kyon 犬と云ふ語から出てゐる。犬學などと云ふ譯語があるからは、犬的と云つても好いかも知れない。犬が穢いものへ鼻を突込みたがる如く、犬的な人は何物をも穢くしなくては氣が濟まない。そこで神聖なるものは認められないのである。人は神聖なるものを多く有してゐるだけ、弱點が多い。苦痛が多い。犬的な人に逢つては叶はない。

鰐口は人に苦痛を覺えさせるのが常になつてゐる。そこで人の苦痛を何とも思はない。刻薄な處はここから生じて來る。强者が弱者を見れば可笑しい、可笑しいと面白い。犬的な人は人の苦痛を面白がるやうになる。

僕だつて人が大勢集つて贅食をするのを、ひとりぼんやりして見てゐるのは苦痛である。それを鰐口は知つてゐて、面白半分に仲間に入れないのである。

僕は皆が食ふ間外へ出てゐようかと思つた。併し出れば逃げるやうだ。自分の部屋であるのに、人に勝手な事をせられて逃げるのは殘念だと思つた。さればと云つて、口に唾の湧くのを呑み込んでゐたら彼等に笑はれるだらう。僕は外へ出て最中を十錢買つて來た。その頃は十錢最中を買ふと、大袋に一ぱいあつた。それを机の下に抛り込んで置いて、ランプを附けて本を見てゐた。

その中盲汁の仲間が段段歸つて來る。炭に石油を打つ掛けて火をおこす。食堂へ鍋を取りに行く。醬油を盜みに行く。買つて來た鰹節を搔く。汁が煮え立つ。てんでに買つて來たものを出して、鍋に入れる。一品鍋にはひる每に笑聲が起る。もう煮えたと云ふ。まだ煮えないと云ふ。鍋の中では箸の白兵戰が始まる。酒は其頃寄宿舍に賣つてゐた三ツ星と云ふのである。黑い瓶の肩の怒つたのに這入つてゐる燒酎である。直段が安いさうであつたから、定めて下等な酒であつたらう。

皆が折折僕の方を見る。僕は澄まして、机の下から最中を一つ宛出して食つてゐた。

酒が利いて來る。血が頭へ上る。話が下へ下つて來る。盲汁の仲間には硬派もゐれば軟派もゐる。軟派の宮實が硬派の逸見にからかつた。

「どうだい。逸見なんざあ、雪隱へはひつて下の方を覗いたら、僕なんぞが、股の間から緋縮

緬のちらつくのを見たときのやうな心持がするだらうなあ。」

逸見が怒るかと思ふと大違で、眞面目に返事をする。

「そりやあお情所から出たものぢやと思うて見ることもあるたい。」

「あははは。女なら話を極めるのに、手を握るのだが、少年はどうするのだい。」

「やつぱり手ぢやが、こぎやんして。」

と宮裏の手を掴まへて、手の平を指で押して、承諾するときは其指を握るので、嫌なときは握らないのだと說明する。

誰やら逸見に何か歌へと勸めた。逸見は歌ひ出した。

「雲のゆはやから鬼が穴う突ん出して縄で縛るよな屁をたれた。」

甚句を歌ふものがある。詩を吟ずるものがある。覗機關の口上を眞似る。聲色を遣ふ。そのうちに、鍋も皿も次第に虚になりさうになつた。軟派の一人が、何か近い處で好い物を發見したと云ふやうな事を云ふ。そんなら今から往からと云ふものがある。此間門限の五分前に出ようとして留められたが、まだ十五分あるから大丈夫出られる。出てさへしまへば、明日證人の證書を持つて歸れば好い。證書は、印の押してある紙を貰つて持つてゐるから、出來ると云ふやうな話になる。

盲汁仲間はがやがやわめきながら席を起つた。鰐口も一しよに出てしまつた。

僕は最中にも食ひ厭きて、本を見てゐると、梯子を忍足で上つて來るものがある。獵銃の音を聞き慣れた鳥は、獵人を近くは寄せない。僕はランプを吹き消して、窗を明けて屋根の上に出て、窗をそつと締めた。露か霜か知らぬが、瓦は薄じめりにしめつてゐる。戸袋の蔭にしやがんで、懐にしてゐる短刀の欛をしつかり握つた。

寄宿舎の窗は皆雨戸が締まつてゐて、小使部屋だけ障子に明がさしてゐる。足音は僕の部屋に這入つた。あちこち歩く樣子である。

「今までランプが付いてをつたが、どこへ往つたきやんの。」

逸見の聲である。僕は息を屛めてゐた。暫くして足音は部屋を出て、梯子を降りて行つた。短刀は幸に用立たずに濟んだ。

※

十五になつた。

日課は相變らず苦にもならない。暇さへあれば貸本を讀む。次第に早く讀めるやうになるので、馬琴や京傳のものは殆ど讀み盡した。それからよみ本と云ふものの中で、外の作者のものを讀んで見たが、どうも面白くない。人の借りてゐる人情本を讀む。何だか、男と女との關係が、美しい夢のやうに、心に浮ぶ。そして餘り深い印象をも與へないで過ぎ去つてしまふ。併しその印象を受ける度毎に、その美しい夢のやうなものは、容貌の立派な男女の享ける福で、自分なぞには企て及ばないと云ふやうな氣がする。それが僕には苦痛であつた。

埴生とは矢張一しよに遊ぶ。暮春の頃であつた。月曜日の午後埴生と散歩に出ると、埴生が好い處へ連れて行つて遣らうと云ふ。何處だと聞けば、近處の小料理屋なのである。僕はそれまで蕎麥屋や牛肉屋には行つたことがあるが、お父樣に連れられて、飯を食ひに王子の扇屋に這入つた外、御料理と云ふ看板の掛かつてゐる家へ這入つたことが無いのだから、非道く驚いた。

「そんな處へ君はひとりで行けるか。」

「ひとりぢやあない。君と行かうと云ふのだ。」

「そりやあ分かつてゐる。僕がひとりと云ふの

は、大きい人に連れられずに行けるかと云ふのだ。一體君はもう行つたことがあるのか。」

「うむ。ある。此間行つて見たのだ。」

埴生は頗る得意である。二人は暖簾を潛つた。「入らつしやい」と一人の女中が云つて、僕等を見て、今一人の女中と目引き袖引き笑つてゐる。僕は間が惡くて引き返したくなつたが、埴生がずんずん這入るので、しかた無しに附いて這入つた。

埴生は料理を誂へる。酒を誂へる。君は酒が飲めるかと云ふと、飲まなくても誂へるものだと云ふ。女中は物を運んで來る度に、暫く笑ひながら立つて見てゐる。僕は堅くなつて、口取か何かを食つてゐると、埴生がこんな話をし出した。

「昨日は實に愉快だつたよ。」

「何だ。」

「をぢの年賀に呼ばれて行つたのだ。さうすると、藝者やお酌が大勢來てゐて、まだ外のお客が集まらないので、遊んでゐた。そのうちのお酌が一人、僕に一しよに行つて庭を見せてくれろと云ふだらう。僕はそいつを連れて庭へ行つた。池の縁を廻つて築山の處へ行くと、默つて僕の手を握るのだ。それから手を引いて歩いた。愉快だつたよ。」

「さうか。」

僕は一語を讚することを得ない。そして僕の頭には例の夢のやうな美しい想像が浮んだ。なる程埴生なら、綺麗なお酌と手を引いて歩いても、好く似合ふだらうと思つた。埴生は美少年であるばかりでは無い。着物なぞも相應にさつぱりしたものを著てゐるのであつた。

かう思ふと共に、僕は其事が、いかにも自分には縁遠いやうに感じた。そして不思議にも、人情本なんぞを讀んで空想に耽つたときのやうに、それが苦痛を感じさせなかつた。僕は此事實に出くはして、却つてそれを當然の事のやうに思つた。

埴生は間も無く勘定をして料理屋を出た。察するに、埴生は女の手を握つたために祝宴を設けて、僕に馳走をしたのであつたらう。

僕は其頃の事を思つて見ると不思議だ。何故かと云ふに、人情本を見た時や、埴生がお酌と手を引いて歩いた話をした時浮んだ美しい想像は、無論戀愛の萌芽であらうと思ふのだが、それがどうも性欲その物と密接に關聯してゐなかつたのだ。性欲と云つては、此場合には適切で無いかも知れない。此戀愛の萌芽と Copulationstrieb とは、どうも別別になつてゐたやうなのである。

人情本を見れば、接吻が、西洋のなんぞと丸で違つた性質の接吻が敍してある。僕だつて、戀愛と性欲とが關係してゐることを、悟性の上から解せないことは無い。併し戀愛が懷かしく思はれる割合には、性欲の方面は發動しなかつたのである。

或る記憶に殘つてゐる事柄が、直接にそれを證明するやうに思ふ。僕は此頃惡い事を覺えた。これは甚だ書きにくい事だが、これを書かないやうでは、こんな物を書く甲斐が無いから書く。西洋の寄宿舍には、青年の生徒にこれをさせない用心に、兩手を被布團の上に出して寢ろと云ふ規則があつて、舍監が夜見廻るとき、その手に氣を附けることになつてゐる。どうしてそんな事を覺えたと云ふことは、はつきりとは分からない。あらゆる穢いことを好んで口にする鰐口が、いつも其話をしてゐたのは事實である。その外、少年の顏を見る度に、それをするかと云ひ、小娘の顏を見る度に、或る體の部分に毛が生えたかと云ふことを決して忘れない人は澤山ある。それが教育と云ふものを受けた事の無い卑賤な男なら是非が無い。紳士らしい

顏をしてゐる男にさう云ふ男が澤山ある。寄宿舍にゐる年長者にもさう云ふ男が多かつた。それが僕のやうな少年を揶揄ふ常套語であつたのだ。僕はそれを試みた。併し人に聞いたやうに愉快で無い。そして跡で非道く頭痛がする。强ひて彼の可笑しな畫なんぞを想像して、反復して見た。今度は頭痛ばかりでは無くて、動悸がする。僕はそれからはめつたにそんな事をしたことは無い。つまり僕は内から促されてしたので無くて、入智慧でしたのだ、附燒刃でしたのだから、だめであつたと見える。

或る日曜日に僕は向嶋の内へ歸つた。歸つて見ると、お父樣がいつもと違つて烟たい顏をして默つてをられる。お母樣も心配らしい樣子で、僕に優しい詞を掛けたいのを控へてお出なさるやうだ。元氣好く歸つて行つた僕は拍子抜がして、暫く二親の顏を見競べてゐた。

お父樣が、烟草を吞んでゐた烟管で、常よりひどく灰吹をはたいて、口を切られた。お父樣は卷烟草は上らない。いつも雲井と云ふ烟草を上るに極まつてゐたのである。さてお話を聞いて見ると、僕の罪惡とも思はなかつた罪惡が、お父樣の耳に入つたのである。それは彼の手に關係する事では無い。埴生との交際の事である。

同じ學校の上の級に沼波と云ふのがあつた。僕は顏も知らないが、先方では僕と埴生との狗兒のやうに遊んでゐるのを可笑しがつて見てゐたものと見える。この沼波の保證人が向嶋にゐて、お父樣の碁の友達であつた。そこでお父樣はかう云ふ事を聞かれたのである。

金井は寄宿舍ぢゆうで一番小さい。それに學課は好く出來るさうだ。その友達に埴生と云ふのがゐる。これも相應に出來る。併し二人の性質は丸で違ふ。金井は落著いた少年で、これからぐんぐん伸びる人だと思ふが、埴生は早熟した才子で、鋭敏過ぎてゐて、前途が覺束ない。二人はひどく仲を好くして、一しよに遊んでゐるやうだが、それは外に相手が無いから、小さい同志で遊ぶのであらう。ところが此頃になつて、金井のためには、埴生との交際が頗る危險になつたやうである。埴生は金井より二つ位年上であらう。それが江戶の町に育つたものだから、都會の惡影響を受けてゐる。近頃ひとりで料理屋に行つて、女中共におだてられるのを面白がつてゐるのを見たものがある。酒も吞み始めたらしい。尤も甚だしいのは、或る楊弓店の女に帶を買つて遣つたと云ふことである。どうぞ金井が一しよに墮落しないやうに、引き分けて遣りたいものだと云ふことを、沼波が保證人に話したのである。

お父樣は此話をして、何か埴生と一しよに惡い事をしはしないか。したなら、それを打明けて云ふが好い。打明けて云つて、これから先しなければ、それで好い。とにかく埴生と交際することは、これからは止めねば行かぬと仰やるのである。お母樣が側から沼波さんもお前が惡い事をしたと云つたのでは無いさうだ、お前は何もしたのではあるまい、これからその埴生と云ふ子と遊ばないやうにすれば好いのだと仰やる。

僕は恐れ入つた。そして正直に埴生に、料理屋へ連れて行かれた事を話した。併しそれが埴生の祝宴であつたと云ふことだけは、云ひにくいので云はなかつた。

埴生と絶交するのは、餘程むつかしからうと思つたが、實際殆ど自然に事が運んだ。埴生は間も無く落第する。退學する。僕は其形迹を失つてしまつた。

僕が洋行して歸つて妻を貰つてからであつた。或日の留守に、埴生庄之助と云ふ名刺を置いて行つた人があつた。株式の賣買をしてゐる

ものだと云ひ置いて歸つたさうだ。

※

同じ歳の夏休に向嶋に歸つてゐた。

その頃好い友達が出來た。それは和泉橋の東京醫學校の預科にはひつてゐる尾藤裔一と云ふ同年位の少年であつた。裔一のお父樣はお邸の會計で、文案を受け持つてゐる榛野なんぞと同じ待遇を受けてゐる。家もお長屋の鄰同志である。

僕のお父樣はお邸に近い處に、小さい地面附の家を買つて、少しばかりの畠にいろいろな物を作つて樂んでをられる。田圃を隔てて引舟の通が見える。裔一がそこへ遊びに來るか、僕がお長屋へ往くか、大抵離れることは無い。

裔一は平べつたい顏の黄いろ味を帶びた、しんねりむつつりした少年で、漢學が好く出來る。菊池三溪を贔屓にして居る。僕は裔一に借りて、晴雪樓詩鈔を讀む。本朝虞初新誌を讀む。それから三溪のものが出るからと云ふので、僕も淺草へ行つて、花月新誌を買つて來て讀む。二人で詩を作つて見る。漢文の小品を書いて見る。先づそんな事をして遊ぶのである。

裔一は小さい道徳家である。埴生と話をするには、僕は遣り放しで、少しも自分を拘束するやうなことは無かつたのだが、裔一と何か話してゐて、少しでも野卑な詞、猥褻な詞などが出ようものなら、彼はむきになつて怒るのである。彼の想像では、人は進士及第をして、先生のお孃樣か何かに思はれて、それを正妻に迎へるまでは、色事などをしてはならないのである。それから天下に名の聞えた名士になれば、東坡なんぞのやうに、藝者にも大事にせられるだらう。その時は絹のハンカチに詩でも書いて遣るのである。

裔一の處へ行くうちに、裔一が父親に連れられて出て、ゐない事がある。さう云ふ時に好く、長い髮を項まで分けた榛野に出くはす。榛野は、僕が外から裔一を呼ぶと、僕がはひらないうちに、内から障子を開けて出て、歸つてしまふ。裔一の母親があとから送つて出て、僕にあいそを云ふ。

裔一の母親は繼母である。ある時裔一と一しよに晴雪樓詩鈔を讀んでゐると、眞間の手古奈の事を詠じた詩があつた。僕は、ふいと思ひ出して、「君のお母樣はほんとうので無いさうだが、窘めはしないか」と問うた。「いいや、窘めはしない」と云つたが、彼は母親の事を話すのを嫌ふやうであつた。

或る日裔一の内へ往つた。八月の晴れた日の午後二時頃でもあつたらうか。お長屋には、どれにも竹垣を結び廻らした小庭が附いてゐる。尾藤の内の庭には、縁日で買つて來たやうな植木が四五本次第も無く植ゑてある。日が砂地にかつかつと照つてゐる。御殿のお庭の植込の茂みでやかましい程鳴く蟬の聲が聞える。障子をしめた尾藤の内はひつそりしてゐる。僕は竹垣の間の小さい柴折戸を開けて、いつものやうに聲を掛けた。

「裔一君。」

返事をしない。

「裔一君はゐませんか。」

障子が開く。例の髮を項まで分けた榛野が出る。色の白い、撫肩の、背の高い男で、純然たる東京詞を遣ふのである。

「裔一君は留守だ。ちつと僕の處へも遊びに來給へ。」

かう云つて長屋鄰の内へ歸つて行く。鳴海絞の浴衣の背後には、背中一ぱいある、派手な模樣がある。尾藤の奧さんが閾際にゐざり出る。水淺葱の手がらを掛けた丸髷の鬢を兩手でいぢりながら、僕に聲を掛ける。奧さんは東京へ出

たばかりださうだが、これも純然たる東京詞である。

「あら。金井さんですか。まあお上んなさいよ。」

「はい。併し斎一君がゐませんのなら。」

「お父さんが釣に行くと云ふので、附いて行つてしまひましたの、斎一がゐなくたつて好いではございませんか。まあ、ここへお掛なさいよ。」

「はい。」

僕はしぶしぶ縁側に腰を掛けた。奥さんは不精らしく又少しゐざり出て、片膝立てて、僕の側へ、體がひつ附くやうにすわつた。汗とお白いと髪の油との匂がする。僕は少し脇へ退いた。奥さんは何故だか笑つた。

「好くあなたは斎一のやうな子と遊んでおやんなさるのね。あんなぶあいさうな子つてありやしません。」

奥さんは目も鼻も口も馬鹿に大きい人である。そして口が四角のやうに僕は感じた。

「僕は斎一君が大好です。」

「わたくしはお嫌。」

奥さんは頬つぺたをおつ附けるやうにして、横から僕の顔を覗き込む。息が顔に掛かる。その息が妙に熱いやうな氣がする。それと同時に、僕は急に奥さんが女であるといふやうなことを思つて、何と無く恐ろしくなつた。多分僕は蒼くなつたであらう。

「僕は又來ます。」

「あら。好いぢやありませんか。」

僕は慌てたやうに起つて、三つ四つお辭儀をして驅け出した。御殿のお庭の植込の間から、お池の水が小さい堰塞を踰して流れ出る溝がある。その縁の、杉菜の生えてゐる砂地に、植込の高い木が、少し西へゐざつた影を落してゐる。僕はそこまで驅けて行つて、仰向に砂の上に寢轉んだ。すぐ上の處に、凌霄の燃えるやうな花が簇簇と咲いてゐる。蟬が盛んに鳴く。その外には何の音もしない。Pan の神はまだ目を醒まさない時刻である。僕はいろいろな想像をした。

それからは、僕は斎一と話をしても、斎一の母親の事は口に出さなかつた。

※

十五になつた。

去年の暮の試験に大淘汰があつて、どの級からも退學になつたものがあつた。そしてこの犠牲の候補者は過半軟派から出た。埴生なんぞのやうなちびさへ一しよに退治られたのである。逸見も退學した。併しこれはつい昨今急激な軟化をして、著物の袖を長くし、袴の裾を長くし、天を指してゐた棕櫚のやうな髪の毛に香油を塗つてゐたのであつた。

此頃僕に古賀と兒島との二人の親友が出來た。

古賀は顴骨の張つた、四角な、赭ら顔の大男である。安達と云ふ美少年に特別な保護を加へてゐる處から、服装から何から、誰が見ても硬派中の錚錚たるものである。それが去年の秋頃から僕に近づくやうに努める。僕は例の短刀の欛を握らざることを得なかつた。

然るに淘汰の跡で、寄宿舍の部屋割が極まつて見ると、僕は古賀と同室になつてゐた。鰐口は顔に嘲弄の色を浮べて、から云つた。

「さあ。あんたあ古賀さあの處へ往つて可哀がつて貰ひんされえか。あはははは。」

例のとほりお父樣の聲色である。此男は少しも僕を保護してはくれなんだ。併し僕は構はぬのが難有かつた。彼の cynic な言語擧動は始終僕に不愉快を感ぜしめるが、とにかく彼も一種の奇峭な性格である。同級の詩人が彼に贈

つた詩の結句は、竹窓夜靜にして韓非を讀むと云ふのであつた。人が彼を畏れ憚る。それが間接に、僕のためには保護になつてゐたのである。

僕はこの間接の保護を失はねばならない。そして頗る危險なる古賀の室へ引き越さねばならない。僕は覺えず慄然とした。

僕は獅子の窟に這入るやうな積りで引き越して行つた。埴生が、君の目は基線を上にした三角だと云つたが、その倒三角形の目がいよいよ稜立つてゐたであらう。古賀は本も何も載せて無い破机の前に、鼠色になつた古毛布を敷いて、その上に胡坐をかいて、ぢつと僕を見てゐる。大きな顏の割に、小さい、眞圓な目には、喜の色が溢れてゐる。

「僕をこはがつて逃げ廻つてゐた癖に、とうとう僕の處へ來たな。はははは。」

彼は破顏一笑した。彼の顏はおどけたやうな、威嚴のあるやうな、妙な顏である。どうも惡い奴らしくは無い。

「割り當てられたから爲方が無い。」

隨分無愛想な返事である。

「君は僕を邊見と同じやうに思つてゐるな。僕はそんな人間ぢやあない。」

僕は默つて自分の席を整頓し始めた。僕は子供の時から物を散らかして置くといふことが大嫌である。學校にはひつてからは、學科用のものと外のものとを選り分けてきちんとして置く。此頃になつては、僕のノオトブックの數は大變なもので、丁度外の人の倍はある。そのわけは一學科每に二册あつて、しかもそれを皆教場に持つて出て、重要な事と、唯參考になると思ふ事とを、聽きながら選り分けて、開いて疊ねてある二册へ、ペンで書く。その代り、外の生徒のやうに、寄宿舍に歸つてから淸書をすることは無い。寄宿舍では、其日の講義のうちにあつた術語だけを、希臘拉甸の語原を調べて、赤インキでペエジの縁に註して置く。教場の外での爲事は殆それ切である。人が術語が覺えにくくて困ると云ふと、僕は可笑しくて溜まらない。何故語原を調べずに、器械的に覺えようとするのだと云ひたくなる。僕はノオトブックと參考書とを同じ順序にシェルフに立てた。黑と赤とのインキを瓶のひつくり反らない用心に、菓子箱のあいたのに、並べて入れたのに、ペンを添へて、机の向うの方に置いた。大きい吸取紙を廣げて、机の前の方に置いた。其左に厚い表紙の附いてゐる手帖を二册累ねて置いた。一册は日記で、寢る前に日日の記事をきちんと締め切るのである。一册は學科に關係の無い事件の備忘錄で、表題には生利にも紺珠と云ふ二字がペンで篆書に書いてある。それから机の下に忍ばせたのは、貞丈雜記が十册ばかりであつた。その頃の貸本屋の持つてゐた最も高尙なものは、こんな風な隨筆類で、僕のやうに馬琴京傳の小說を卒業すると、隨筆讀になるより外無いのである。こんな物の中から何かしら見出だしては、例の紺珠に書き留めるのである。

古賀はにやりにやり笑つて僕のする事を見てゐたが、貞丈雜記を机の下に忍ばせるのを見て、かう云つた。

「それは何の本だ。」

「貞丈雜記だ。」

「何が書いてある。」

「此邊には裝束の事が書いてある。」

「そんな物を讀んで何にする。」

「何にもするのでは無い。」

「それでは詰まらんぢや無いか。」

「そんなら、僕なんぞがこんな學校にはひつて學問をするのもつまらんぢや無いか。官員になるためとか、教師になるためとか云ふわけでもあるまい。」

「君は卒業しても、官員や教師にはならんのかい。」

「そりやあ、なるかも知れない。併しそれになるために學問をするのでは無い。」

「それでは物を知るために學問をする、つまり學問をするために學問をすると云ふのだな。」

「うむ。まあ、さうだ。」

「ふむ。君は面白い小僧だ。」

僕は憤然とした。人と始めて話をして、おしまひに面白い小僧だは、結末が餘り振つてゐ過ぎる。僕は例の倒三角形の目で相手を睨んだ。古賀は平氣でにやりにやり笑つてゐる。僕は拍子拔けがして、この無邪氣な大男を憎むことを得なかつた。

その日の夕かたであつた。古賀が一しよに散步に出ろと云ふ。鰐口なんぞは、長い間同じ部屋にゐても、一しよに散步に出ようと云つたことは無い。とにかく附いて出て見ようと思つて、承諾した。

夏の初の氣持の好い夕かたである。神田の通りを步く。古本屋の前に來ると、僕は足を留めて覗く。古賀は一しよに覗く。其頃は、日本人の詩集なんぞは一冊五錢位で買はれたものだ。柳原の取附に廣場がある。ここに大きな傘を開いて立てて、その下で十二三位な綺麗な女の子にかつぽれを踊らせてゐる。僕は Victor Hugo の Notre Dame を讀んだとき、Esmeralda とか云ふ靑石のやうな名の附いた小娘の事を書いてあるのを見て、此女の子を思出して、あの傘の下でかつぽれを踊つたやうな奴だらうと思つた。古賀はかう云つた。

「何の子だか知らないが、非道い目に合はせてゐるなあ。」

「もつと非道いのは支那人だらう。赤子を四角な箱に入れて四角に太らせて見せ物にしたと云ふ話があるが、そんな事もしかねない。」

「どうしてそんな話を知つてゐる。」

「虞初新誌にある。」

「妙なものを讀んでゐるなあ。面白い小僧だ。」

こんな風に古賀は面白い小僧だを連發する。

柳原を兩國の方へ步いてゐるうちに、古賀は蒲燒の行燈の出てゐる家の前で足を留めた。

「君は鰻を食ふか。」

「食ふ。」

古賀は鰻屋へはひつた。大串を誂へる。酒が出ると、ひとりで面白さうに飮んでゐる。そのうちに咽に痰がひつ掛かる。かつと云ふと思ふと、椽の外の小庭を圍んでゐる竹垣を越して、痰が向うの路地に飛ぶ。僕はあつけに取られて見てゐる。鰻が出る。僕はお父様に連れられて鰻屋へ一度行つて、鰻飯を食つたことしか無い。古賀がいくらだけ燒けと金で誂へるのに先づ驚いたのであつたが、その食ひやうを見て更に驚いた。串を拔く。大きな切を箸で折り曲げて一口に頰張る。僕は口には出さないが、面白い奴だと思つて見てゐたのである。

その日は素直に寄宿舍に歸つた。寢るとき、明日の朝は起してくれえ、賴むぞと云つて、ぐうぐう寢てしまつた。

朝は四時頃から外があかるくなる。僕は六時に起きる。顏を洗つて來て本を見てゐる。七時に賄の拍子木が鳴る。古賀を起す。古賀は睡むさうに目を開く。

「何時だ。」

「まだ早い。」

「七時だ。」

「まだ早い。」

古賀はくるりと寢返りをして、ぐうぐう寢る。僕は飯を食つて來る。三十分になる。八時には日課が始まるのである。古賀を起す。

「何時だ。」

「七時三十分だ。」

「まだ早い。」

十五分前になる。僕は前晩に時間表を見て揃へて置いたノオトブックとインクとを持つて出掛けて、古賀を起す。

「何時だ。」

「十五分前だ。」

古賀は默つて跳ね起きる。紙と手拭とを持つて飛び出す。これから雪隱に往つて、顏を洗つて、飯を食つて、教場へ驅け附けるのである。

古賀鵠介の平常の生活はこんな風である。折折古賀の友達で、兒島十二郎と云ふのが遊びに來る。その頃繪草紙屋に吊るしてあつた、錦繪の源氏の君のやうな顏をしてゐる男である。體ぢゆうが青み掛かつて白い。綽號を青大將と云ふのだが、それを云ふと怒る。尤も此名は、兒嶋の體の或る部分を浴湯で見て附けた名ださうだから、怒るのも無理は無い。兒嶋は酒量が無い。言語も擧動も貴公子らしい。名高い洋學者で、勅任官になつてゐる人の弟である。十二人目の子なので、十二郎といふのださうだ。

どうして古賀と兒嶋とが親しくしてゐるだらうと、僕は先づ疑問を起した。さて段段觀察してゐると、觸接點がある。

古賀は父親をひどく大切にしてゐる。その癖父親は鵠介の弟の神童じみたのが夭折したのを惜んで、鵠介を不肖の子として扱つてゐるらしい。鵠介は自分が不肖の子として扱はれれば扱はれるだけ、父親の失つた子の穴塡をして、父親に安心させねばならないやうに思ふのである。兒嶋は父親が亡くなつて母親がある。母親は十何人と云ふ子を一人で生んだのである。これも十三人目の十三郎と云ふのが才子で、その方が可哀がられてゐるらしい。併し十三郎は才子である代りに、やや放縱で、或る新聞縱覽所の女に思はれたために騷動が起つて新聞の續物に出た。女はもと縱覽所を出してゐる男の雇女で、年の三十も違ふ主人に、脅迫せられて身を任せて、妾の樣になつてゐた。それが十三郎を慕ふので、主人が嫉妬から女を虐遇する。女は十三郎に泣き附く。その十三郎が勅任官の家の若殿だから、新聞の好材料になつたのである。そのために、十三郎は或る立派な家に養子に貰はれてゐたのが破談になる。母親は十三郎のために心痛する。十二郎は其母親の心を慰めようと、熱心に努めてゐるのである。

こんな事をだらだらと書くのは、僕の性欲的生活に何の關係も無いやうだが、實はさうで無い。これが重大な關係を有してゐる。

僕は古賀と次第に心安くなる。古賀を通じて兒嶋とも心安くなる。そこで三角同盟が成立した。

兒嶋は生息子である。彼の性欲的生活は零である。

古賀は不斷酒を飲んでぐらぐら寢てしまふ。併し月に一度位荒日がある。さう云ふ日には、己は今夜は暴れるから、君はおとなしくして寢ろと云ひ置いて、廊下を蹈み鳴らして出て行く。誰かの部屋の外から聲を掛けるのに、戶を締めて寢てゐると、拳骨で戶を打ち破ることもある。下の級の安達と云ふ美少年の處なぞへはひり込むのは、さういふ晩であらう。荒日には外泊することもある。翌日歸つて、しをしをとして、昨日は獸になつたと云つて悔んでゐる。

兒嶋の性欲の獸は眠つてゐる。古賀の獸は縛つてあるが、をりをり縛を解いて暴れるのである。併し古賀は、恰も今の紳士の一小部分が自分の家庭だけを清潔に保たうとしてゐる如くに、自分の部屋を神聖にしてゐる。僕は偶然此の神聖なる部屋を分つことになつたのである

古賀と兒嶋と僕との三人は、寄宿舍全體を白眼に見てゐる。暇さへあれば三人集まる。平生性欲の獸を放し飼にしてゐる生徒は、此 trim-

Veto の前では寸毫も假借せられない。中にも、土曜日の午後に白足袋を穿いて外出するやうな連中は、人間では無いやうに云はれる。僕の性欲的生活が繰延になつたのは、全く此三角同盟のおかげである。後になつて考へて見れば、若し此同盟に古賀がゐなかつたら、此同盟は陰氣な、貧血性な物になつたのかも知れない。幸に荒日を持つてゐる古賀が加はつてゐたので、互に制裁を加へてゐる中にも、活氣を失はないでゐることを得たのであらう。

或る土曜の事である。三人で吉原を見に行かうと云ふことになる。古賀が案内に立つ。三人共小倉袴に紺足袋で、朴歯の下駄をがらつかせて出る。上野の山から根岸を抜けて、通新町を右へ折れる。お歯黒溝の側を大門に廻る。吉原を縦横に濶歩する。軟派の生徒で出くはした奴は災難だ。白足袋がこそこそと横町に曲るのを見送つて、三人一度にどつと笑ふのである。僕は分れて、今戸の渡を向嶋へ渡つた。

※

同じ歳の夏休は、矢張去年どほりに、向嶋の親の家で暮らした。その頃はまだ、書生が暑中に温泉や海濱へ行くと云ふことは無かつた。親を歸省するのが精精であつた。僕のやうな、判任官の子なんぞは、親の處に歸つて遊んでゐるより上の愉快を想像することは出來なかつたのである。

相變らず尾藤裔一と遊ぶ。裔一の母親はもうゐない。惡い噂が立つたので、榛野は免職になつて國へ歸る。尾藤の母親も國の里方へ返されたのである。

裔一と漢文の作り競をする。それが困じて、是非ほんとうの漢文の先生に就いて遣つて見たいと云ふことになる。

その頃向嶋に文淵先生と云ふ方がをられた。二町程の田圃を隔てて隅田川の土手を望む處に宅を構へてをられる。二階建の母屋に、庭の池に臨んだ離座敷の書齋がある。土藏には唐本が一ぱいはひつてゐて、書生が一抱づつ抱へては出入をする。先生は年が四十二三でもあらうか。三十位の奥さんにお孃さんの可哀いのが二三人あつて、母屋に住んでをられる。先生は渡廊下で續いてゐる書齋にをられる。お役は編修官。月給は百圓。手車で出勤せられる。僕のお父様が羨ましがつて、あれが清福と云ふものぢやと云うてをられた。その頃は百圓の月給で清福を得られたのである。

僕はお父様に賴んで貰つて、文淵先生の内へ漢文を直して貰ひに行くことにした。書生が先生の書齋に案内する。どんな長い物を書いて持つて行つても、先生は「どれ」と云つて受け取る。朱筆を把る。片端から句讀を切りながら直して行く。讀んでしまふのと直してしまふのと同時である。それでも字眼なぞがあると、標を附けて行かれるから、照應を打ち壞されることなぞはめつたに無い。度度行くうちに、十六七の島田髷が先生のお給仕をしてゐるのに出くはした。歸つてからお母様に、今日は先生の内の一番大きいお孃さんを見たと話したら、それはお召使だと仰やつた。お召使と云ふには特別な意味があつたのである。

或日先生の机の下から唐本が覗いてゐるのを見ると、金瓶梅であつた。僕は馬琴の金瓶梅しか讀んだことは無いが、唐本の金瓶梅が大いに違つてゐると云ふことを知つてゐた。そして先生なかなか油斷がならないと思つた。

※

同じ歳の秋であつた。古賀の機嫌が惡い。病氣かと思へばさうでも無い。或日一しよに散歩に出て、池の端を歩いてゐると、古賀がかう云

つた。
「今日は根津へ探險に行くのだが、一しよに行くかい。」
「一しよに歸るなら、行つても好い。」
「そりやあ歸る。」
それから古賀が歩きながら探險の目的を話した。安達が根津の八幡樓と云ふ内のお職と大變な關係になつた。女が立て引いて呼ぶので、安達は殆ど學課を全廢した。女の處には安達の寢卷や何ぞが備へ附けてある。女の持物には、悉く自分の紋と安達の紋とが比翼にして附けてある。二三日安達の顏を見ないと癪を起す。古賀がどんなに引き留めても、女の磁石力が强くて、安達はふらふらと八幡樓へ引き寄せられて行く。古賀は淺草にゐる安達の親に denunciate した。安達と安達の母との間には、悲痛なる對話があつた。さて安達の寄宿舍に歸るのを待ち受けて、古賀が「どうだ」と問うた。安達は途方に暮れたといふ樣子で云つた。「今日は母に泣かれて困つた。母が泣きながら死んでしまふといふのを聞けば、氣の毒ではある。併し女も泣きながら死んでしまふと云ふから、爲方が無い」と云つたと云ふのである。
古賀は此話をしながら、憤慨して涙を翻した。僕は歩きながら此話を聞いて、「なる程非道い」と云つた。さうは云つたが、頭の中では憤慨はしない。戀愛と云ふものの美しい夢は、斷えず意識の奧の方に潛んでゐる。初めて梅暦を又借をして讀んだ頃から後、漢學者の友達が出來て、剪燈餘話を讀む。燕山外史を讀む。情史を讀む。かう云ふ本に書いてある、青年男女の romantic な戀愛がひどく羨ましい、妬ましい。そして自分が美男に生れて來なかつたために、この美しいものが手の屆かない理想になつてゐると云ふことを感じて、頭の奧には苦痛の絶える隙が無い。それだから安達はさぞ愉快だらう、縱令苦痛があつても、其苦痛は甘い苦痛で、自分の頭の奧に潛んでゐるやうな苦い苦痛ではあるまいと云ふ思遣をなすことを禁じ得ない。それと同時に僕はこんな事を思ふ。古賀の單純極まる性質は愛す可きである。併し彼が安達のために煩悶する源を考へて見れば、少しも同情に値しない。安達は寧ろ不自然の囘抱を脫して自然の懷に走つたのである。古賀が此話を兒嶋にしたら兒嶋は一しよに涙を翻したかも知れない。いかにも親孝行は此上も無い善い事である。親孝行のお蔭で、性欲を少しでも抑へて行かれるのは結構である。併しそれを爲し得ない人間がゐるのに不思議は無い。兒嶋は性欲を吹込の糞坑にしてゐる。古賀は性欲を折折掃除をさせる雪隱の瓶にしてゐる。此二人と同盟になつてゐる僕が、同じやうに性欲の滿足を求めずにゐるのは、果して僕の手柄であらうか。それは頗る疑はしい。僕が若し兒嶋のやうな美男に生れてゐたら、僕は兒嶋ではないかも知れ無い。僕は神聖なる同盟の祭壇の前で、こんな heretical な思議を費してゐたのである。
僕は古賀の跡に附いて、始めて藍染橋を渡つた。古賀は西側の小さい家にはひつて、店の者と話をする。僕は閾際に立つてゐる。此家は引手茶屋である。古賀は安達が何日と何日とに來たかと云ふやうな事を確めてゐる。店のものは不精不精に返辭をしてゐる。古賀は暫くしてしをしをとして出て來た。僕等は默つて歸途に就いた。
安達は程無く退學させられた。一年ばかり立つてから、淺草區に子守女や後家なぞに騷がれる美男の巡査がゐるといふ評判を聞いた。又數年の後、古賀が淺草の奧山で、唐棧づくめの頰のこけた凄い顏の男に逢つた。奧山に小屋掛けをして興行してゐる女の輕技師があつて、その情夫が安達の末路であつたさうだ。

※

十六になつた。

僕はその頃大學の豫備門になつてゐた英語學校を卒業して、大學の文學部にはひつた。

夏休から後は、僕は下宿生活をすることになつた。古賀や兒嶋と毎晩のやうに寄席に行く。一頃悪い癖が附いて寄席に行かないと寢附かれないやうになつたこともある。講釋に厭きて落語を聞く。落語に厭きて女義太夫をも聞く。寄席の歸りに腹が減つて蕎麥屋に這入ると、妓夫が夜鷹を大勢連れて來てゐて、僕等は其百鬼夜行の姿をランプの下に見て、覺えず戰慄したこともある。併し「仲までお安く」と云ふ車なぞにはとうとう乘らずにしまつた。

多分生息子で英語學校を出たものは、兒嶋と僕と位なものだらう。文學部にはひつてからも、三角同盟の制裁は依然としてゐて、兒嶋と僕とは舊阿蒙であつた。

是歳は別に書く程の事も無くて暮れた。

※

十七になつた。

是歳にお父樣が、世話をする人があつて、小菅の監獄署の役人になられた。某省の屬官をしてをられたが、頭が支へて進級が出來ない。監獄の役人の方は、官宅のやうなものが出來てゐて、それに住めば、向嶋の家から家賃があがる。月給も少し好い。そこで意を決して小菅へ越されたのである。僕は土曜日に小菅へ行つて、日曜日の晩に下宿に歸ることになつた。

僕は依然として三角同盟の制裁の下に立つてゐるのである。休日の前日が來て、小菅の内へ歸る度に通新町を通る。吉原の方へ曲る角の南側は石の玉垣のある小さい社で、北側は古道具屋である。此古道具屋はいつも障子が半分締めてある。其障子の片隅に長方形の紙が貼つてあつて、看板かきの書くやうな字で「秋貞」と書いてある。小菅へ行く度に、往にも反にも僕は此の障子の前を通るのを樂にしてゐた。そして此の障子の口に娘が立つてゐると、僕は一週間の間何となく滿足してゐる。娘がゐ無いと、僕は一週間の間何と無く物足らない感じをしてゐる。

此娘はそれ程稀な美人と云ふのでは無いかも知れない。唯薄紅の顏がつやつやと露が垂るやうで、ぱつちりした目に形容の出來ない愛敬がある。洗髮を嶋田に結つてゐて、赤い物なぞは掛けない。夏は派手な浴衣を著てゐる。冬はいつも半衿の掛かつた銘撰か何かを著てゐる。いつも新しい前掛をしてゐるのである。

僕は此頃から、ずつと後に大學を卒業するまで、いや、さうでは無い、それから二年目に洋行するまで、此娘を僕の美しい夢の主人公にしてゐたに相違無い。春のなまめかしい自然でも、秋の物寂しい自然でも、僕の情緒を動かすことがあると、ふいと秋貞と云ふ名が脣に上る。秋貞といふのは其店に折折見える、紺の前掛をした、瘦こけた爺さんの屋號と名前の頭字とに過ぎないのである。此娘は何と云ふ娘だと云ふことをも僕は知らないのである。併し不思議と云へば不思議である。僕が顏を覺えてから足掛五年の間、此娘は娘でゐる。僕の空想の中に娘でゐるのは不思議では無いが、此娘が實在の娘でゐるのは不思議である。僕は例の美しい夢の中で、若しや此娘は、僕が小菅へ往復する人力車を留めて、話をし掛けるのを待つてゐるのではあるまいかとさへ思つたこともある。併しまさか現の意識でそれを信ずる程の詩人にもなれなかつた。餘程年が立つてから、僕は偶然此娘の正體を聞いた。此娘はおきあの近所の寺

の仲職が爲送をしてゐたのであつた。

つまらない話の序に、も一つ同じやうなのを話さう。お父樣の住まつてお出になる、小菅の官舍の鄰に十三ばかりの娘がある。それが琴の稽古をしてゐる。師匠は下谷の杉勢と云ふのであるが、遠方の事だから、いつも代稽古の娘が來る。お母樣が聞いて入らつしやるに、鄰の娘が彈いても、代稽古に來る娘が彈いても、餘り好い音がしたことはない。それが或日丸で變つた音がした。言つて見れば、今までのが寢惚けた音なら、今度のは目の醒めた音である。お母樣が鄰の奧さんに其事を話すと、あれは琴を商賣にしてゐる人では無い。杉勢の弟子で、五軒町に住んでゐる娘である。代稽古に來る娘が病氣なので、好意で來てくれたと云ふことであつた。そのうちその琴の上手な娘が、お母樣に褒められたのを聞いて、それではいつか往つて彈いて聞かせようと云つた。

それから折折内に寄るので、僕が休日に歸つてゐて落ち合ふこともある。子供の時に Hydrocephalus でもあつたかといふやうな頭の娘で、髮がやや薄く、色が蒼くて、下瞼が紫色を帶びてゐる。性質は極勝氣である。琴はいかにも virtuoso の天賦を備へてゐる。それが若し琴を以て身を立てようとする人であつたら、師匠に破門せられて、別に一流を起すと云ふ質かも知れない。

此娘が段段お母樣と親密になつて、話の序に、遠廻しのやうで、實は頗る大膽に、僕の妻になりたいと云ふことをほのめかすのである。お母樣が、倅も卒業すれば、是非洋行をさせねばならないが、卒業試驗の點數次第で、官費で遣られるか、どうだか知れないと話すと、わたくしがお金を持つてゐれば、有るだけ出して學資にして戴きたうございますなどと云ふ。

お母樣にも此娘の怜悧なのが氣に入る。そこで身元などを問ひ合はせて見られる。このお麗さんと云ふ娘は可なりの役を勤めてゐた士族の娘で、父親に先立たれて、五軒町の借屋に母親と一しよに住んでゐる。併し妙なことには、其家にお兄いさんと云ふのがゐて、餘程お人好と見えて、お麗さんに家隷のやうに使はれてゐる。それが實は壻養子に來たものだと云ふことである。壻養子に來たのではあるが、お麗さんは其人の妻になりたくないから、家を其人に遣つて、自分はどこかへ嫁に行きたいと云つてゐる。そしてお麗さんの望は、少くも學士位な人を夫に持ちたいと云ふのださうだ。そこで僕が其選に中つたと云ふ訣である。

お母樣にはそのお兄いさんと云ふもののゐるのが氣に入らない。僕はこの怜悧で活潑な娘が嫌では無いが、早く妻を持たうと云ふ氣はないのだから、此話はどうなるとも無しに、水が砂地に吸ひ込まれるやうに、立消になつてしまつた。

これは性欲問題では勿論無い。そんなら云つて、戀愛問題とも云はれまい。云はば起り掛かつて止んだ緣談に過ぎないが、思ひ出したから書いて置く。お麗さんは望どほりに或る學士の奧さんになつて横濱あたりにゐると云ふことである。

※

十八になつた。

夏休の間の出來事である。卒業試驗が近くなるので、どこかいつもより靜かな處にゐて勉強したいと思つた。さいはひ向嶋の家が借手が無くて明いてゐる。そこへ書物を持つてはひる。お母樣が二三日來てゐて、世話をして下さる。併し材料さへ集めて置いて貰へば、僕が自炊をすると云ふのである。お母樣は覺束ないと仰やる。

此話を隣の植木屋が聞いた。お父樣が畠に物を作る相談をせられるので、心安くなつてゐた植木屋である。此植木屋のお上さんが、親切にもかういふ提議をした。植木屋にお蝶と云ふ十四になる娘がある。體は十六位かと見えるやうに大きいが、丸で子供である。煮炊もろくな事は出來ない。併し若旦那よりは上手であらう。これを貸してくれようと云ふのである。お母樣は同意なすつた。僕も初から女を置くと云ふことに反對してゐたが、鼻を垂らして赤ん坊を背負つてゐたのを知つてゐる、あのお蝶なら好からうと云ふので、同意した。

お蝶は朝來て夜歸る。むくむくと太つた娘で、大きな顏に小さな目鼻が附いてゐる。もう鼻は垂らさない。嶋田に結つてゐる。これは僕のお召使になると云ふので、自ら好んで結つて貰つたのださうだが、大きな顏の上に小さい嶋田髷が載つてゐる工合は隨分可笑しい。

飯の時にはお蝶がお給仕をする。僕はその樣子を見て、どうしても蝶では無くて蛾の方だなどと思つてゐる。見るとも無しに顏を見る。少し竪に向いて附いた眉の下に、水平な目があるので、內眦の處が妙にせせこましくなつてゐる。俯向いて其目で僕を見ると、滑稽を帶びた愛敬がある。

お蝶は好く働く。僕は飯の時に給仕をさせるだけで、跡は何をしてゐようと構はない。お茶は何にしませうと云つて來ると、何でも好いから、お前の內で拵へるやうな物を拵へろと云ふ。そんな風で二週間程立つた。

或日今年は親類の內に往つてゐると聞いてゐた尾藤裔一が來た。僕は學科の本に讀み厭きてゐたので、喜んで話しかけたが、裔一はひどく萎れてゐる。僕は不審に思つた。

「君どうかしてゐるやうぢや無いか。」

「僕は本科にはひることは廢めた。」

「どうして。」

「實は君には逢はずに國へ立つてしまはうと思つたのだ。ところが、親父に暇乞に來て聞けば、君がゐると云ふので、つい逢ひたくなつて遣つて來た。」

お蝶が茶を持つて出た。裔一は茶を一息に飲んで話を續けた。裔一の學資は父親の手から出てゐない。木挽町に店を出してゐる伯父が出してゐたのである。その伯父の所帶が左前になつたので、いよいよ廢學をしなくてはならないやうになつた。そこで國へ歸つて小學校の敎員でもしようかと思つてゐる。併し敎員になるにしても、その傍何か遣りたい。西洋の學問をするには、素養が不十分な上に、新しい本を買ふのは容易で無い。そこで一時の凌ぎにと云つて、伯父の出してくれた金の大部分は漢籍にしてしまつた。それを持つて國へ引込んで讀むと云ふのである。

僕は氣の毒でたまらなかつた。併し何とも云ひやうが無い。意味の無い慰めなんぞを云ふと、裔一は怒り兼ない。爲方無しに默つてゐた。

間も無く裔一は歸ると云つた。そして立ちさうにして立たずに、頗る唐突にこんな事を云ひ出した。

「僕の伯父の立ち行かなくなつたのは、元はをばの爲だ。」

「をばさんはどんな人なんだ。」

「伯父が一人でゐたときの女中だ。」

「ふむ。」

「それがどうしても離れないのだ。女房に內助なんと云ふことを要求するのは無理かも知れないが、訣の分らない奴が附いてゐて離れないと云ふものは、人生の一大不幸だなあ。左樣なら。」

裔一はふいと歸つて行つた。

僕はあつ氣に取られて跡を見送つた。戸口に

掛けてある簾を透して、冠木門を出て行く女の姿が見える。白地の浴衣に麥稈帽を被つた裔一は、午過の日のかつかつと照つてゐる、かなめ垣の邊に、黑い短い影を落しながら、遠ざかつて行く。

裔一は置土産に僕を諷諌したのである。僕は一寸腹が立つた。何も其位な事を人に聞かなくても好いと思ふ。それも人による。萬事に掛けて自分よりは鈍いやうに思つてゐた裔一には、出過ぎた話だと思ふ。その上お蝶が何だ。こつちは丸で女とも何とも思つてはゐないのでは無いか。人を識らないのだ。寃も亦甚だしいと思つたのである。

机に向いて讀み掛けてゐた本を開ける。どうも裔一の云つたことが氣になる。僕はお蝶を何とも思つてはゐない。併しお蝶はどうだらう。僕とお蝶とは殆ど話と云ふものをしないから、お蝶が何と云つたと云ふやうな記憶は無い、何か記憶に留まつた事は無いかと思ふと、ふいと今朝の事を思ひ出す。今朝散歩に出た、出るときお蝶は蚊屋を疊み掛けてゐた。三十分も歩いたと思つて歸つて見ると、お蝶は疊んだ蚊屋を前に置いて、目は空を見てぼんやりしてすわつてゐた。もう疾くに片付けてしまつてゐるだらうと思つたのに、意外であつた。その時僕は少し懶けて來たなと思つた。あの時お蝶は三十分が間も何を思つてゐたのだらう。かう思つて、僕は何物をか發見したやうな心持がした。

此時から僕はお蝶に注意するやうになつた。別な目でお蝶を見る。飯の給仕をしてくれる時に、彼の表情に注意する。注意して見ると、かう云ふ事がある。初の頃は俯向いてはゐたが、度度僕の顏を見ることがあつた。それが此頃は殆全く僕の顏を見ない。彼の態度は確に變つて來たのである。

僕は庭なぞを歩くとき、これまでは臺所の前を通つても、中でことこと云はせてゐるのを聞きながら、其方を見ずに通つたのが、今度は見て通る。物なんぞを洗ひ掛けて手を休めて、空を見て、ぢつとしてゐるのが目に附く。何か考へてゐるやうである。

又飯の給仕に來る。僕の觀察の目が次第に鋭くなる。彼は何も云はず、顏も上げずにゐるが、彼の神經の情態が僕に感應して來るやうな氣がする。彼の體が電氣か何かの蓄積してゐる物體ででもあるやうに感ぜられる。そして僕は次第に不安になつて來た。

僕は本を見てゐても、臺所の方で音がすれば、お蝶は何をしてゐるのかと思ふ。呼べば直に來る。來るのは當りまへではあるが、呼ぶのを待つてゐたなと思ふ。夕かたになると暇乞をして勝手の方へ行く。そして下駄を穿いて出て、戸を締める音がするまで、僕は耳を欹ててゐる。そして其間の時間が餘り長いやうに思ふ。彼は歸り掛けて、僕の呼び戻すのを待つてゐるのでは無いかと思ふ。僕の不安はいよいよ加はつて來たのである。

その頃僕はこんな事を思つた。尾藤裔一は鈍感な男では無い。併し彼は父親の處にゐる時も、伯父の處にゐる時も、僕の内とは違ふ雰圍氣の中に棲息してゐたのである。そこで一寸茶を持つて出ただけのお蝶の態度を見て、何物かを發見したのではあるまいかと思つた。

或日お母樣がお出なすつた。僕は、もう向嶋は嫌になつたから、小菅に歸らうと思ふと云つた。お母樣は、そんな事なら、何故葉書でもよこさなかつたかと仰やる。僕は、切角手紙を出さうと思つてゐた處だと云つた。實はお母樣のお出なすつたのを見て、急に思ひ附いたのである。僕はお母樣に、お蝶と植木屋のものとに跡を片附けさせて歸つて下さるやうに賴んで置いて、本を二三冊持つて、ついと出て、小菅へ歸

つた。

お蝶の精神か神經かの情態に、何か變つたことがあつたかどうだか、戀愛が芽ざしてゐたか、性欲が動いてゐたか、それとも僕の想像が蛇足も無い事を描き出したのであつたか、僕はとうとう知らずにしまつた。

＊

十九になつた。

七月に大學を卒業した。表向の年齢を見て、二十になつたばかりで學士になるとは珍らしいと人が云つた。實は二十にもなつてはゐなかつた。とうとう女と云ふものを知らずに卒業した。これは確に古賀と兒島とのお蔭である。そして兒島だけは、僕より年は上であつたが、矢張女を知らなかつたらしい。

その當座宴會がむやみにある。上野の松源と云ふ料理屋が其頃盛であつた。そこへ卒業生一同で教授を請待した。

數寄屋町、同朋町の藝者やお酌が大勢來た。宴會で藝者を見たのはこれが始である。

今でも學生が卒業する度に謝恩會と云ふことがある。併し今からあの時の事を思つて見ると、客も藝者も風が變つてゐる。

今は學士になると、別に優遇はせられないまでも、ひどく粗末にもせられないやうだ。あの頃は僕なんぞをば、藝者が丸で人間とは思つてゐなかつた。

あの晩の松源の宴會は、はつきりと僕の記憶に殘つてゐる。床の間の前に並んでゐる教授がたの處へ、卒業生が交る交るお杯を頂戴しに行く。教授の中には、わざと卒業生の前へ來て胡坐をかいて話をする人もある。席は大分入り亂れて來た。僕はぼんやりしてすわつてゐると、左の方から僕の鼻の先へ杯を出したものがある。

「あなた。」

藝者の聲である。

「うむ。」

僕は杯を取らうとした。杯を持つた藝者の手はひよいと引込んだ。

「あなたぢやあ有りませんよ。」

藝者は咎めるやうに、ちよいと僕を見て、僕の右前の方の人に杯を差した。笑談では無い。笑談を歌つてもゐない。右前にゐたのは某教授であつた。藝者の方には殆ど背中を向けて、右隣の人と話をしてをられた。僕の目には先生の絽の羽織の紋が見えてゐたのである。先生はやつと氣が附いて杯を受けられた。僕がいくらぼんやりしてゐても、人の前に出した杯を横から取らうとはしない。僕は羽織の紋に杯を差すものがあらうとは思ひ掛けなかつたのである。

僕は此時忽ち醒覺したやうな心持がした。譬へば今まで波の渦卷の中にゐたものが、岸の上に飛び上がつて、波の騷ぐのを眺めるやうなものである。宴會の一座が純客觀的に僕の目に映ずる。

教場でむつかしい顏ばかりしてゐた某教授が相好を崩して笑つてゐる。僕のすぐ隣の卒業生を捕まへて、一人の藝者が、「あなた私の名はボオルよ、忘れちやあ嫌よ」と云つてゐる。お玉とでも云ふのであらう。席にゐただけのお酌が皆立つて、笑談半分に踊つてゐる。誰も見るものは無い。杯を投げさせて受け取つてゐるものがある。お酌の間へ飛び込んで踊るものがある。置いてある三味線を踏まれさうになつて、慌てて退ける藝者がある。さつき僕にけんつくを食はせた藝者はねえさん株と見えて、頻りに大聲を出して駈け廻つて世話を燒いてゐる。

僕の左二三人目に兒島がすわつてゐる。彼はぼんやりしてゐる。僕の醒覺前の態度と餘り

變つてゐないやうだ。その前に一人の藝者がゐる。締つた體の權衡が整つてゐて、顏も美しい。若し眼窩の縁を際立たせたら、西洋の繪で見る Vénus のやうになるだらう。初め膳を持つて出て配つた時から、僕の注意を惹いた女である。傍輩に小幾さんと呼ばれたのまで、僕の耳に留まつたのである。その小幾が頻りに兒嶋に話し掛けてゐる。兒嶋は不精不精に返詞をしてゐる。聞くとも無しに對話が僕の耳にはひる。

「あなた何が一番お好き。」

「橘飩が旨い。」

眞面目な返詞である。生年二十三歳の堂堂たる美丈夫の返詞としては、不思議では無いか。今日の謝恩會に出る卒業生の中には、捜してもこんなのがゐないだけは慥である。頭が異樣に冷になつてゐた僕は、間の惡いやうな可笑しいやうな心持がした。

「さう。」

優しい聲を殘して小幾は席を立つた。僕は一種の興味を以て、此出來事の成行を見てゐる。

暫くして小幾は可なり大きな丼を持つて來て、兒嶋の前に置いた。それは橘飩であつた。

兒嶋は宴會の終るまで、橘飩を食ふ。小幾は其前にきちんとすわつて、橘飩の栗が一つ一つ兒嶋の美しい脣の奥に隱れて行くのを眺めてゐた。

僕は小幾がために、兒嶋のなるたけ多くの橘飩を、なるたけゆつくり食はんことを祈つて、默つて先へ歸つた。

後に聞けば、小幾は下谷第一の美人であつたさうだ。そして兒嶋は唯此美人の擎げ來つた橘飩を食つたばかりであつた。小幾は今某政黨の名高い政治家の令夫人である。

※

二十になつた。

新しい學士仲間は追追口を捜して、多くは地方へ教師になりに行く。僕は卒業したときの席順が好いので、官費で洋行させられることになりさうな噂がある。併しそれがなかなか極まらないので、お父樣は心配してお出なさる。僕は平氣で小菅の官舍の四疊半に寢轉んで、本を見てゐる。

遊びに來るものもめつたに無い。古賀は某省の參事官になつて、女房を持つて、女房の里に同居して、そこから役所へ通つてゐる。兒嶋はそれより前に、大阪の或會社の事務員になつて、東京を立つた。それを送りに新橋へ行つたとき、古賀が僕に囁いた。「僕のかかあになつてくれると云ふものがあるよ。妙ではないか。」これは謙遜したのでは無い。兒嶋に比べては、餘程世情に通じてゐる古賀も、流石三角同盟の一隅だけあつて、無邪氣なのである。僕は妙とも何とも思はなかつた。

僕にも縁談を持つて來るものがある。お母樣の考では、縦ひ洋行をさせられるにしても、妻は持つて置く方が好いと云ふのである。お父樣には別に議論は無い。そこでお母樣が僕にお勸なさるが、僕は生返詞をしてゐる。お母樣には僕の考が分らない。僕は又考はあつても云ひたくない。云ふにしても、頗る云ひにくいやうな氣がする。お母樣は根氣好くお尋なさる。僕は或日ついつい追ひ詰められて、こんな事を云つた。

妻と云ふものを、どうせいつか持つことになるだらう。持つには嫌な奴では困る。嫌か好かをこつちで極めるのは容易である。併し女だつて嫌な男を持つては困るだらう。生んで貰つた親に對して、から云ふのは、恩義に背くやうではあるが、女が僕の容貌を見て、好だと思ふと云ふことは、一寸想像しにくい。或は自知の

明のあるお多福が、僕を見て、あれで我慢をすると云ふやうなことは無いにも限るまい。併し我慢をしてくれるには及ばない。そんな事はこつちから辭退したい。そんなら僕の靈の側はどうだ。餘り結構な靈を持ち合はせてゐるとも思はないが、これまで色色な人に觸れて見たところが、僕の靈がさう氣恥かしくて、包み隱してばかりゐなければならないやうにも思はない。靈の試驗を受ける事になれば、僕だつて必ず落第するとも思はない。さて結婚の風俗を見るに、容貌の見合はあるが、靈の見合は無い。その容貌の見合でさへ、媒をするものの云ふのを聞けば、いつでも先方では見合を要せないと云つてゐると云ふことだ。女は好嫌を言はない。唯こつちが見て好嫌を云へば好いと云ふのだ。娘の親は賣手で、こつちが買手でもあるやうだ。娘は丸で物品扱を受けてゐる。羅馬法にでも書いたら、奴隷と同じやうに、res としてしまはねばならない。僕は綺麗なおもちやを買ひに行く氣は無い。

ざつとかう云ふやうな事を、なるたけお母樣に分るやうに說明して見た。お母樣は、僕が靈では落第しないが、容貌では落第しさうだと云ふのが、大不服である。「わたしはお前を片羽に産んだ覺えは無い」と、憤慨に堪へないやうな口氣で仰やる。これには僕もひどく恐縮せざることを得ない。それから男が女を擇ぶやうに、女も男を擇ぶのが正當な見合であると云ふことも、お母樣は認めて下さらない。お母樣の仰やるには、おほ方そんな事を言ふのは、男女同權とか云ふ話と同じ筋の話だらう。昔から町家の娘には、見合で壻をことわると云ふことがあつた。侍の娘は男の魂を見込んで娵に往くのだから、男の顏を見て彼此云ふ筈は無い。それが日本ばかりの事であつても、好い事なら好いでは無いか。併しお父樣のお話を聞いたうちに、西洋の王樣が家來を鄰國へ遣つて娵を見させると云ふ話があつた。さうして見れば、西洋でも王樣なんぞは日本流に娵を取られると見えると、かう仰やる。僕は、西洋の事なんぞは、なるたけ云はないやうにしてゐるのに、お母樣に西洋の例を引いて辯じ附けられて、僕は少し狼狽した。

僕の方にはまだ云ひたい事は澤山有つたが、此上反駁を試みるのも惡いと思つて、それ切にしてしまつた。

此話をして間も無く、お父樣の心安くして入らつしやる安中と云ふ醫者が來て、或る大名華族の末家の令孃を貰へと勸めた。令孃は番町の一條といふ書家の內にをられる。いつでも見せて遣ると云ふことである。お母樣は例に依つてお勸なさる。

僕はふと往つて見る氣になつた。それが可笑しい。そのお孃さんを見ようと思ふのでは無くて、見合といふものをして見ようと思ふのであつた。少し無責任な事をしたやうではあるが、僕はどんなお孃さんでも貰はないと極めてゐたわけでは無い。貰ふ氣になつたら貰はうとだけは思つてゐたのである。

三月頃でもあつたか。まだ寒かつた。僕は安中に連れられて、番町の一條の內へ行つた。黑い冠木門のある陰氣なやうな家であつた。主人の居間らしい八疊の間に通された。安中と火鉢を圍んで雜談をしてゐると、主人が出て逢はれた。五十ばかりの男で、磊落な態度である。畫の話なぞをする。暫くして奧さんが令孃を連れて出られた。

主人夫婦は色色な話をして座を持つてをられる。ゆつくり話して行け、酒を飲むなら酒を出さうかと云ふ。僕は酒は飲まないと云ふ。主人がそんなら何を御馳走しようかと云つて、首を傾ける。その頃僕は齲齒に惱まされてゐて、內

ではよく蕎麦掻を食つてゐた。そこで、御近所に蕎麦の看板があつたから、蕎麦掻を御馳走にならうと云つた。主人がこれは面白い御注文だと云つて笑ふ。奥さんが女中を呼んで云ひ付ける。

令嬢は此時まで奥さんの右の方に、大人しくすわつて、膝に手を置いてをられた。ふつくりした丸顔で、目尻が少し吊り上がつてゐる。俯向かないで、正面を向いてゐて、少しもわるびれた様子が無い。顔にはこれと云ふ表情も無かつた。それが蕎麦掻の注文を聞いて、思はずにつこり笑つた。

僕は蕎麦掻の注文をしてしまつて、兒嶋の橘飩にも譲らないと思つて、ひとりで可笑しがつた。暫くは蕎麦の話が榮える。主人も蕎麦掻は食べる。或る時病氣で、粒立つた物が食へないので、一月も蕎麦掻ばかり食つてゐたと云ふ。奥さんが、あの時はほんとに呆れたと云つて、氣が附いて僕にあやまる。

僕は蕎麦掻を御馳走になつて歸つた。主人夫婦に令嬢も附いて、玄關まで送られた。

歸道に安中が決答を促したが、僕は何とも云ふことが出來ない。それは自分でも分らないからである。僕はお嬢さんを非常な美人とは思はない。併し隨分立派なお孃さんだとは思つてゐる。品格はたしかに好い。性質は分らないが、どうもねぢくれた處なぞが有りさうには無い。素直らしい。そんなら貰ひたいかと云ふと、少しも貰ひたく無い。嫌では決して無い。若し自分の身の上に關係の無い人であつて、僕が評をしたら、好な娘だと云ふだらう。併しどうも貰ふ氣になられない。なる程立派なお孃さんだが、あんなお孃さんは外にもあらう。何故あれを特に貰はねばならないか分らないなどと思ふ。そんな事を考へては、嫁に貰ふ女は無くなるだらうと、自ら駁しても見る。併しどうも貰ふ氣になられない。僕は、こんな時に人はどうして決心をするかと疑つた。そして、或は人は性欲的刺戟を受けて決心するのではあるまいか。それが僕には闕けてゐるので、好いとは思つても貰ひたくならないのでは無いかと思つた。僕が何か案じてゐるのを安中は見て取つて、「いづれ改めて伺ひます」と云つて、九段の上で別れた。

内へ歸ると、お母樣が待ち受けて、どうであつたかとお問なさる。僕は猶豫する。

「まあ、どんな御樣子な方だい。」

「さうですねえ。容貌端正と云ふやうな孃さんです。目が少し吊り上がつてゐます。著物は僕には分らないが、黒いやうな色で、下に白襟を襲ねてゐました。帶に懷劍を插してゐても似合ひさうな人です。」

僕のふいと云つた形容が、お母樣にはひどくお氣に入つた。懷劍を持つてゐさうなと云ふのが、お母樣には賴もしげに思はれるのである。そこで隨分熱心に勸められる。安中も二三度返詞を聞きに來る。併し僕はつひつひ決答を與へずにしまつた。

程經て此お孃さんは、僕の識つてゐる宮内省の役人の奥さんになられたが、一年ばかりの後に病死せられた。

※

同じ年の冬の初であつた。

來年はいよいよ洋行が出來さうだと云ふ噂がある。相變らず小菅の内にぶらぶらしてゐる。

千住に詩會があつて、會員の宅で順番に月次會を開く。或日その會で三輪崎霽波と云ふ詩人と近附になつた。その霽波が云ふには、自分は自由新聞の詞藻欄を受け持つてゐるが、何でも好いから書いてくれないかと云ふ。僕はことわつた。併し霽波が立つて勸める。そんなら匿

名でも好いかと云ふと、好いと云ふ。僕は嚴重に祕密を守つて貰ふと云ふ條件で承知した。

　その晩歸つて何を書いたら好からうかと、寢ながら考へたが、これと云ふ思付も無い。翌日は忘れてゐた。その次の朝、内で鈴木田正雄時代から取つてゐる讀賣新聞を見ると、自分の名が出てゐる。哲學科を優等で卒業した金井湛氏は自由新聞に筆を取られる云云と書いてある。僕は驚いて、前前晩の事を思ひ出した。そしてから思つた。僕は祕密を守つて貰ふ約束で書かうと云つた。その祕密を先方が守らない以上は、書かなくても好いと思つた。

　さうすると霽波から催促の手紙が來る。僕は條件が破れたから書かないと返詞をする。とうとう霽波が遣つて來た。

「どうも讀賣の一條は實に濟まなかつた。どうかあの一條だけは勘辨して、書いてくれ給へ。さうで無いと、僕が社員に對して言を食むやうになるから。」

「ふむ。併し僕があれ程云つたのに、何だつて君は讀賣なんぞに吹聽するのだ。」

「僕が何で吹聽なんかをするものかね。」

「それではどうして出たのだ」

　そりやあかうだ。僕は社で話をした。勿論君に何も云はない前から、社で話をしてゐたのだ。僕が仙珠吟社へ請待せられて行つて、君に逢つたと云ふと、社長を始め、是非君に何か書かせてくれろと云ふ。僕は何とも思はずに受け合つた。そこで君に話して見ると、なかなか君がむつかしい事を云ふ。それを僕が蘇張の舌で口說き落したのだ。それだから社に歸つて、僕は得意で復命したのだ。讀賣へは誰か社のものが知らせたのだらう。それは僕には分らない。僕は荊を負ふことを辭せない。平蜘蛛になつてあやまる。どうぞ書いてくれ給へ。」

「好いよ。書くよ。併し僕には新聞社の人の考が分らない。僕がこれまでに無い一番若い學士だとか、優等で卒業したとか云ふので、新聞に名が出た。そいつにどんな物を書くか書かせて見ようと云ふやうな訣だらう。そこで僕の書くものが旨からうが、まづからうが、そんな事は構はない。Sensation は sensation だらう。併しさう云ふのは、新聞經營者として實に短見ではあるまいか。僕の利害は云はない。新聞社の利害を云ふのだ。それよりは默つて僕の匿名で書いたものを出してくれる。それがまづければそれなりに消滅してしまふ。いくらまづくても何故あんなものを出したかと、社が非難せられる程の事もあるまい。萬一僕の書いたものが旨かつたら、あれは誰だと云ふことになるだらう。その時になつて、君の社で僕を紹介してくれたつて好いでは無いか。そこで新聞社に具眼の人があつて、僕を發見したとなれば、社の名譽では無いか。僕はさう旨く行かうとは思はない。併し文學士何の某と云ふやうな名ばかりを振り廻すのが、社の働でもあるまいと思ふから云ふのだ。」

「いや。君の云ふことは一一尤だ。併しそんな話は、戰國の人君に禮樂を起せと云ふやうなものだねえ。」

「さうかねえ。新聞社なんと云ふものは存外分らない人が寄つてゐるものと見えるねえ。」

「いやはや。これは御挨拶だ。あははははは。」

　こんな話をして霽波は歸つた。僕は霽波が歸るとすぐに机に向つて、新聞の二段ばかりの物を書いて、郵便で出した。こんな物を書くに、推敲も何もいらないと云ふやうな高慢も、多少無いことは無かつた。

　翌日それを第一面に載せた新聞が屆く。夜になつて屆いた原稿であるから、餘程の繰合せをしてくれたものだと云ふことは、僕は後に聞いた。霽波の禮狀が添へてある。

此新聞は今でもどこかにしまつてある筈だが、今出して見ようと思つても、一寸見附からない。何でも餘程變なものを書いたやうに記憶してゐる。頭も尻尾も無いやうな物だつた。その頃は新聞に雜錄と云ふものがあつた。朝野新聞は成島柳北先生の雜錄で賣れたものだ。眞面目な考證に洒落が交る。論の奇拔を心掛ける。句の警束を覗ふ。どうかすると其警句が人口に膾炙したものだ。その頃僕は某教授に借りて、Eckstein の書いた feuilleton の歴史を讀んでゐたので、先づ雜錄の體裁で、西洋の feuilleton の趣味を加へたものと思つて書いて見たのだ。

　僕の書いたものは、多少の注意を引いた。二三の新聞に尻馬に乘つたやうな投書が出た。僕の書いたものは抒情的な處もあれば、小さい物語めいた處もあれば、考證らしい處もあつた。今ならば人が小說だと云つて評したのだらう。小說だと勝手に極めて、それから雜報にも劣つてゐると云つたのだらう。情熱と云ふ語はまだ無かつたが、有つたら情熱が無いとも云つたのだらう。衒學なんと云ふ語もまだ流行らなかつたが、流行つてゐたら此場合に使はれたのだらう。その外、自己辯護だなんぞと云ふ罪名もまだ無かつた。僕はどんな藝術品でも、自己辯護で無いものは無いやうに思ふ。それは人生が自己辯護であるからである。あらゆる生物の生活が自己辯護であるからである。木の葉に止まつてゐる雨蛙は靑くて、壁に止まつてゐるのは土色をしてゐる。草むらを出沒する蜥蜴は背に綠の筋を持つてゐる。沙漠の砂に住んでゐるのは砂の色をしてゐる。Mimicry は自己辯護である。文章の自己辯護であるのも、同じ道理である。僕は幸にそんな非難も受けなかつた。僕は幸に僕の書いた物の存在權をも疑はれずに濟んだ。それは存在權の最も覺束ない、智的にも情的にも、人に何物をも與へない批評と云ふものが、その頃はまだ發明せられてゐなかつたからである。

　一週間程立つて、或日の午後霽波が又遣つて來た。社主が先日書いて貰つたお禮に馳走をしたいと云ふのだから、今から一しよに來てくれろと云ふ。相客は原口安齋と云ふ詩人だけで、霽波が社主に代つて主人役をすると云ふのである。

　僕は車を雇つて、霽波の車に附いて行つた。神田明神の側の料理屋にはひつた。安齋は先へ來て待つてゐた。酒が出る。藝者が來る。ところが僕は酒が飮めない。安齋も飮めない。霽波が一人で飮んで一人で騷ぐ。三人の客は、壯士と書生との間の子と云ふ風で、最も壯士らしいのが霽波、最も普通の書生らしいのが安齋である。二人は紺飛白の綿入に同じ羽織を著てゐる。安齋は大人しいが氣の利いた男で、霽波と一しよには騷がないまでも、藝者と話もする。杯の取遣もする。

　僕は仲間はづれである。その頃僕は、お父樣の國で廉のある日にお著なすつた紋附の黑羽二重のあつたのを、お母樣に爲立て直して貰つて、それが丈夫で好いと云ふので、不斷著にしてゐた。それを著た儘で、霽波に連れられて出たのである。そして二尺ばかりの鐵の烟管を持つてゐる。これは例の短刀を持たなくても好くなつた頃、丁度烟草を呑み始めたので、護身用だと云つて、拵へさせたのである。それで燧袋のやうな烟草入から雲井を撮み出して呑んでゐる。酒も飮まない。口も利かない。

　併しその頃の講武所藝者は、隨分變な書生を相手にし附けてゐたのだから、格別驚きもしない。むやみに大聲を出して、霽波と一しよに騷いでゐる。

　十一時半頃になつた。女中がお車が揃ひまし

たと云つて來た。揃ひましたは變だとは思つたが、然程氣にも留めなかつた。霽波が先に立つて門口に出て車に乘る。安齋も僕も乘る。僕は「大千住の先の小菅だよ」と車夫に云つたが、車夫は返詞をせずに梶棒を上げた。

霽波の車が眞先に驅け出す。次が安齋、殿が僕と、三臺の車が續いて、飛ぶやうに駈ける。掛聲をして、提灯を振り廻して、御成道を上野へ向けて行く。兩側の店は大抵戸を締めてゐる。食物店の行燈や、蠟燭なんぞを賣る家の板戸に嵌めた小障子に移る明りが、をりをり見えて、それが逆に後へ走るかと思ふやうだ。往來の人は少ない。偶出逢ふ人は、云ひ合せたやうに、僕等の車を振り向いて見る。

車はどこへ行くのだらう。僕は自分の經驗は無いが、車夫がどこへ行くとき、こんな風に走るかと云ふことは知つてゐる。

廣小路を過ぎて、仲町へ曲る角の邊に來たとき、安齋が車の上から後に振り向いて、「逃げませう」と云つた。安齋の車は仲町へ曲つた。

安齋は遺傳の痼疾を持つてゐる。體が人並で無い。こんな車の行く處へは行かれないのである。

僕は車夫に、「今の車に附いて行け」と云つた。小菅に歸るには、仲町へ曲つてはだめであるが、とにかく霽波と別れさへすれば、跡はどうでもなると思つたのである。僕の車は猶豫しながら、仲町の方へ梶棒を向けた。

この時霽波の車は一旦三橋を北へ渡つたのが、跡へ引き返して來た。霽波は車の上から大聲にどなつた。

「おい。逃げては行けない。」

僕の車は霽波の車の跡に續いた。霽波は振り返り振り返りして、僕の車を監視してゐる。

僕は再び脫走を試みようとはしなかつた。僕が強ひて爭つたなら、霽波もまさか亂暴はしなかつたのだらう。併し極力僕を引張つて行かうとしたには違ひ無い。僕は上野の辻で、霽波と喧嘩をしたくは無い。その上僕には負けじ魂がある。僕は霽波に馬鹿にせられるのが不愉快なのである。此負けじ魂は人をいかなる罪惡の深みへも落しかねない。頗る危險なものである。僕も此負けじ魂のために、行きたくも無い處へ行くことになつたのである。それから僕を霽波に附いて行かせた今一つの factor のあるのを忘れてはならない。それは例の未知のものに引かれる Neugierde である。

二臺の車は大門に入つた。霽波の車夫が「お茶屋は」と云ふと、霽波が叱るやうに或る家の名をどなつた。何でも Armadill-族の皮の堅い動物の名である。

十二時を餘程過ぎてゐる。兩側の家は皆戸を締めてゐる。車は或る大きな家の、締まつた戸の前に止まつた。霽波が戸を叩くと、小さい潜戸を開けて、體の恐ろしく敏捷に伸屈をする男が出て、茶屋がどうのかうのと云つて、霽波と小聲で話し合つた。暫く押問答をした末に、二人を戸の内に案内した。

二階へ上ると、霽波はどこか行つてしまつた。一人の中年增が出て、僕を一間に連れ込んだ。

細長い間の狹い兩側は障子で、廊下に通じてゐる。廣い側の一方は、開き戸の附いた黑塗の簞笥に、眞鍮の金物を繁く打つたのを、押入れのやうな處に切り嵌めてある。朱塗の行燈の明りで、漆と眞鍮とがぴかぴか光つてゐる。廣い側の他の一方は、四枚の襖である。行燈は箱火鉢の傍に置いてあつて、箱火鉢には、文火に大きな土瓶が掛かつてゐる。

中年增は僕を此間に案内をして置いて、どこか行つてしまつた。僕は例の黑羽二重の萱草色になつたのを著て、鐵の長烟管を持つた儘で、箱火鉢の前の座布團の上に胡坐をかいた。

神田で嫌な酒を五六杯飲ませられたので、咽が乾く。土瓶に手を當てて見ると、好い加減に冷えてゐる。傍に湯呑のあつたのに注いで見れば、濃い番茶である。僕は一息にぐつと飲んだ。

その時僕の後にしてゐた襖がすうと開いて、女が出て、行燈の傍に立つた。芝居で見たおいらんのやうに、大きな髷を結つて、大きな櫛笄を插して、赤い處の澤山ある胴拔の裾を曳いてゐる。目鼻立の好い白い顔が小さく見える。例の中年増が附いて來て座布團を直すと、そこへすわつた。そして默つて笑顔をして僕を見てゐる。僕は默つて眞面目な顔をして女を見てゐる。

中年増は僕の茶を飲んだ茶碗に目を附けた。

「あなた此土瓶のをあがつたのですか。」

「うむ。飲んだ。」

「まあ。」

中年増は變な顔をして女を見ると、女が今度はあざやかに笑つた。白い細かい歯が、行燈の明りできらめいた。中年増が僕に問うた。

「どんな味がしましたか。」

「旨かつた。」

中年増と女とは二たび目を見合せた。女が二たびあざやかに笑つた。歯が二たび光つた。僕は土瓶の中のはお茶では無かつたと見える。何を飲んだのだか、今も知らない。何かの煎薬であつたのだらう。まさか外用藥ではなかつたのだらう。

中年増が女の櫛道具を取つて片附けた。それから立つて、黒塗の簞笥から袿を出して女に被せた。派手な竪縞のお召縮緬に紫繻子の襟が掛けてある。此中年増が所謂番新と云ふのであらう。女は默つて手を通す。珍らしく繊い白い手であつた。番新がかう云つた。

「あなたもう遲うございますから、ちとあちらへ。」

「寢るのか。」

「はい。」

「己は寢なくても好い。」

番新と女とは三たび目を見合せた。女が三たびあざやかに笑つた。歯が三たび光つた。番新がつと僕の傍に寄つた。

「あなたお足袋を。」

此奪衣婆が僕の紺足袋を脱がせた手際は實に驚くべきものであつた。そして僕を柔かに、しかも反抗の出來ないやうに、襖のあなたへ連れ込んだ。

八疊の間である。正面は床の間で、袋に入れた琴が立て掛けてある。黒塗に蒔繪のしてある衣桁が縦に一間を爲切つて、其一方に床が取つてある。婆あさんは柔かに、しかも反抗の出來ないやうに、僕を横にならせてしまつた。僕は白状する。番新の手腕はいかにも巧妙であつた。併しこれに反抗することは、絶待的不可能であつたのでは無い。僕の抗抵力を麻痺させたのは、慥に僕の性欲であつた。

僕は霽波に構はずに、車を云ひ附けて歸つた。小菅の内に歸つて見れば、戸が締まつて、内はひつそりしてゐる。戸を叩くと、すぐにお母様が出て開けて下すつた。

「大さう遲かつたね。」

「はい。非常に遲くなりました。」

お母様の顔には一種の表情がある。併し何とも仰やらない。僕にはその時のお母様の顔がいつまでも忘れられなかつた。僕は唯「お休なさい」と云つて、自分の部屋にはひつた。時計を見れば三時半であつた。僕はその儘床にもぐり込んでぐつすり寢た。

翌日朝飯を食ふとき、お父様が、三輪崎とか云ふ男は放縱な生活をしてゐるので、酒を飲めば、飲み明かさねば面白くないと云ふ風では

ないか、若しさうなら、その男とは餘り交際し無い方が好からうと仰やつた。お母樣は默つてお出なすつた。僕は、三輪崎とは氣象が合は無いから、親しくする積ではないと云つた。實際さう思つてゐたのである。

四疊半の部屋に歸つてから、昨日の事を想つて見る。あれが性欲の滿足であつたか。戀愛の成就はあんな事に到達するに過ぎないのであるか。馬鹿馬鹿しいと思ふ。それと同時に僕は意外にも悔といふ程のものを感じない。良心の呵責と云ふ程のものを覺えない。勿論あんな處へ行くのは、惡い事だと思ふ。あんな處へ行かうと預期して、自分の家の閾を越えて出掛けることがあらうとは思はない。併しあんな處へ行き當つたのは爲方が無いと思ふ。譬へて見れば、人と喧嘩をするのは惡い事だ。喧嘩をしようと志して、外へ出ることは無い。併し外へ出てゐて、喧嘩をしなければならないやうになるかも知れない。それと同じ事だと思ふ。それから或る不安のやうなものが心の底の方に潛んでゐる。それは若しや惡い病氣になりはすまいかと云ふことである。喧嘩をした跡でも、日が立つてから打身の痛み出すことがある。女から病氣を受けたら、それどころでは無い。子孫にまで禍を遺すかも知れないなどとも思つて見る。

先づ翌日になつて感じた心理上の變動は、こんなものであつて、思つたよりは微弱であつた。そのうへ、丁度空氣の受けた波動が、空間の隔たるに從つて微かになるやうに、此心理上の變動も、時間の立つに從つて薄らいだ。

それとは反對で、ここに僕の感情的生活に一つの變化が生じて來て、それが日にましはつきりして來た。何だと云ふと、僕はこれまでは、女に對すると、何となく尻籠をして、いく地無く顏が赤くなつたり、詞が縺れたりしたものだ。それが此時から直つたのである。こんな譬は、誰かが何處かで、とつくに云つてゐるだらうが、僕は騎士として dub を受けたのである。

此事があつてから、當分の間は、お母樣が常に無い注意を僕の上に加へられるやうであつた。察するに、世間で好く云ふ病附と云ふことがありはすまいかとお思なすつたのだらう。それは杞憂であつた。

僕が若し事實を書かないのなら、僕は吉原と云ふ處へ往つたのがこれ切だと云ひたい。併し少しも僞らずに書かうと云ふには、ここに書き添へて置かねばならない事がある。それはずつと後であつた。僕は一度妻を迎へて、その妻に亡くなられて、二度目の妻をまだ迎へずにゐた時であつた。或る秋の夕方、古賀が僕の内へ遊びに來た。歸り掛に上野邊まで一しよに行かうと云ふことになつた。さて門を出掛けると、三枝と云ふ男が來合せた。僕の緣家のもので、古賀をも知つてゐるから、一しよに來ようと云ふ。そこで三人は青石横町の伊豫紋で夕飯を食ふ。三枝は下情に通じてゐるのが自慢の男で、これから吉原の面白い處を見せてくれようと云ひ出す。これは僕が鰥だと云ふので、餘りお察しの好過ぎたのかも知れない。古賀が笑つて行かうと云ふ。僕は不精不精に同意した。

僕等は大門の外で車を下りる。三枝が先に立つてぶらぶら歩く。何町か知らないが、狹い横町に曲る。どの家の格子にも女が出てゐて、外に立つてゐる男と話をしてゐる。小格子といふのであらう。男は大抵絆纏著である。三枝は其一人を見て「好い男だなあ」と云つた。いなせとでも云ふやうな男である。三枝の理想の好男子は絆纏著のうちにあると見える。三枝は、「一寸失敬」と云ふかと思へば、小さい四辻に擔荷を卸して、豆を煎つてゐる爺さんの處へ行つて、彈豆を一袋買つて袂に入れる。それから少し歩くうちに、古賀と僕とを顧みて、「こ

こだ」と云つて、ついと或店にはひる。馴染の家と見える。

二階へ通る。三枝が、例の仲間の敏捷な男と、彈豆を撮んで食ひながら話をする。暫くして僕は鼻を衝くやうな狹い部屋に案內せられる。ランプと烟草盆とが置いてある。煎餅布團が布いてある。僕は座布團が無いから、爲方なしにその煎餅布團の眞中に胡坐をかく。紙卷烟草に火を附けて吞んでゐる。裏の方の障子が開く。女がはひる。色の眞蒼な、人の好ささうな年增である。笑ひながら女が云ふ。

「お休なさらないの。」

「己は寢ない積だ。」

「まあ。」

「お前はひどく血色が惡いでは無いか。どうかしたのかい。」

「ええ。胸膜炎で二三日前まで病院にゐましたの。」

「さうかい。それでゐて、客の處へ出るのはつらからうなあ。」

「いいえ。もう心持は何ともありませんの。」

「ふむ。」

暫く顏を見合せてゐる。女が矢張笑ひながら云ふ。

「あなた可笑しうございますわ。」

「何が。」

「かうしてゐては。」

「そんなら腕角力をしよう。」

「すぐ負けてしまふわ。」

「なに。己もあまり強くは無い。女の腕と云ふものは馬鹿にならないものださうだ。」

「あら旨い事を仰やるのね。」

「さあ來い。」

煎餅布團の上に肘を突いて、右の手を握り合つた。女は力も何もありはしない。いくら力を入れて見ろと云つてもだめである。僕は何の力をも費さずに押へ附けてしまつた。

障子の外から、古賀と三枝とが聲を掛けた。僕は二人と一しよに歸つた。これが僕の二度目の吉原通であつた。そして最後の吉原通である。序だから、ここに書き添へて置く。

※

二十一になつた。

洋行がいよいよ極まつた。併し辭令は貰はない。大學の都合で、夏の事になるだらうと云ふことである。

いろいろな緣談で、お母樣が頻に氣を揉んでお出なさる。

古賀が、後後のために好からうと云ふので、僕を某省の參事官の望月君と云ふ人に引き合せた。此人は某元老の壻さんである。下谷の大茂と云ふ待合で遊ばれる。心安くなるには、矢張その待合へも行くが好いと云ふことになる。折折行く。藝者を四五人呼んで、馬鹿話をして歸る。その頃は物價が安くて、割前が三四圓位であつた。僕は古賀の勤めてゐる役所の翻譯物を受け合つてしてゐたので、懷中が溫であつた。その頃は法律の翻譯なんぞは、一枚三圓位取れたのである。五十圓位の金はいつも持つてゐた。ところが、僕が一しよに行くと、望月君がきつと酒ばかり飮んで歸られる。古賀が云ふには「あれは君に遠慮してをられるのかも知れない、僕が遠慮の無いやうにして遣らう」と云つた。そして或晩古賀がお上に話をした。僕が此時古賀に抗抵しなかつたのも、藝者はどんな事をするものかと思ふ Neugierde があつたからだらう。

一月の末でもあつたか。寒い晩であつた。いつもの通三人で、下谷藝者の若くて綺麗なのを集めて、下らない事をしやべつてゐる。そこへお上がはひつて來る。望月君が妙な聲をする。

故意とするのである。

「湊あ。」

「なんですよ。あなた、嫌に顔がてらてらして來ましたよ。熱いお湯でお拭なさい。」

お上は女中に手拭を絞つて來させて、望月君に顔を拭かせる。苦味ばしつた立派な顔が、綺麗になる。僕なんぞの顔は拭いても拭き榮がしないから、お上も構はない。

「金井さん。ちよいと。」

お上が立つ。僕は附いて廊下へ出る。女中がそこに待つてゐて、僕を別間に連れて行く。見たことも無い藝者がゐる。座敷で呼ばせるのとは種が違ふと見える。少し書きにくい。僕は、衣帶を解かずとは、貞女が看病をする時の事に限らないと云ふことを、此時敎へられたのである。

今度は事實を曲げずに書かれる。その後も待合には行つたが、待合の待合たることを經驗したのは、これを始の終であつた。

數日の間、僕の不安が意識の奧の方にあつた。併し幸に何事も無かつた。

暖くなつてから、或日古賀と吹拔亭へ圓朝の話を聞きに行つた。すぐ傍に五十ばかりの太つた爺さんが藝者を連れて來てゐた。それが貞女の藝者であつた。彼と僕とはお互に空氣を見るが如くに見てゐた。

※

同じ年の六月七日に洋行の辭令を貰つた。行く先は獨逸である。獨逸人の處へ稽古に行く。壹岐坂時代の修行が大いに用立つ。

八月二十四日に横濱で舟に乘つた。とうとう妻を持たずに出立したのである。

※

金井君は或夜ここまで書いた。内ぢゆうが寢靜まつてゐる。雨戸の外は五月雨である。庭の植込に降る雨の、鈍い柔な音の間間に、亞鉛の樋を走る水のちやらちやらと云ふ音がする。西片町の通は往來が絶えて、傘を打つ點滴も聞えず、ぬかるみに踏み込む足駄も響かない。

金井君は腕組をして考へ込んでゐる。

先づ書き掛けた記錄の續きが、次第も無く心に浮ぶ。伯林の Unter den Linden を西へ曲つた處の小さい珈琲店を思ひ出す。Café Krebs である。日本の留學生の集る處で、蟹屋蟹屋と云つたものだ。何遍行つても女に手を出さずにゐると、或晩一番美しい女で、どうしても日本人と一しよには行かないと云ふのが、是非金井君と一しよに行くと云ふ。聽かない。女が癇癪を起して、mélange のコップを床に打ち附けて壞す。それから Karlstrasse の下宿屋を思ひ出す。家主の婆あさんの姪と云ふのが、毎晩肌襦袢一つになつて來て、金井君の寢てゐる寢臺の縁に腰を掛けて、三十分づつ話をする。「をばさんが起きて待つてゐるから、唯お話だけして來るのなら、構はないと云ひますの。好いでせう。お厭では無くつて。」肌の温まりが衾を隔てて傳はつて來る。金井君は貸借法の第何條かに依つて、三箇月分の宿料を拂つて逃げると、毎晩夢に見ると書いた手紙がいつまでも來たのである。Leipzig の戸口に赤い灯の附いてゐる家を思ひ出す。縮らせた明色の髮に金粉を傅けて、肩と腰とに言譯ばかりの赤い著物を著た女を、客が一人宛傍に引き寄せてゐる。金井君は、「己は病氣だぞ、傍に來るとうつるぞ」と叫んでゐる。維也納のホテルを思ひ出す。臨時に金井君を連れて歩いてゐた大官が手を引張つたのを怒つた女中がゐる。金井君は馬鹿氣た敵愾心を起して、出發する前日に、「今夜行くぞ」と云つた。「あの右の廊下の突き當りです

よ。沓を穿いて入らつしつては嫌。」響の物に應ずる如しである。咽せる様に香水を部屋に蒔いて、金井君が廊下をつたつて行く沓足袋の音を待つてゐた。München の珈琲店を思ひ出す。日本人の群がいつも行つてゐる處である。その常客に、やや無頼漢肌の土地の好男子の連れて來る、凄味掛かつた別品がゐる。日本人が皆其女を褒めちぎる。或晩その二人連がゐるとき、金井君が便所に立つた。跡から早足に便所にはひつて來るものがある。忽ち痩せた二本の臂が金井君の頸に絡み附く。金井君の脣は熱い接吻を覺える。金井君の手は名刺を一枚握らせられる。旋風のやうに身を回して去るのを見れば、例の凄味の女である。番地の附いてゐる名刺に「十一時三十分」と云ふ鉛筆書きがある。金井君は自分の下等な物に關係しないのを臆病のやうに云ふ同國人に、面當をしようと云ふ氣になる。そこで冒險にも此 Rendez-Vous に行く。腹の皮に妊娠した時の痕のある女であつた。此女は舞蹈に著て行く衣裳の質に入れてあるのを受けるために、こんな事をしたと云ふことが、跡から知れた。同國人は荒肝を拔かれた。金井君も隨分惡い事の限をしたのである。併し金井君は一度も自分から攻勢を取らねばならない程強く性欲に動かされたことはない。いつも陣地を守つてだけはゐて、穉い Neugierde と餘計な負けじ魂とのために、をりをり不必要な衝突をしたに過ぎない。

金井君は初め筆を取つたとき、結婚するまでの事を書く積であつた。金井君の西洋から歸つたのは二十五の年の秋であつた。すぐに貰つた初の細君は長男を生んで亡くなつた。それから暫く一人でゐて、三十二の年に十七になる今の細君を迎へた。そこで初は二十五までの事は是非書かうと思つてゐたのである。

さて一旦筆を置いて考へて見ると、彼の不必要な衝突の偶然に繰り返されるのを書くのが、無意味ではあるまいかと疑ふやうになつた。金井君の書いたものは、普通の意味で云ふ自傳では無い。それなら是非小説にしようと思つたかと云ふと、さうでも無い。そんな事はどうでも好いとしても、金井君だとて、藝術的價値の無いものに筆を著けたくは無い。金井君は Nietzsche の云ふ dionysos 的なものだけを藝術として視てはゐ無い。Apollon 的なものをも認めてゐる。併し戀愛を離れた性欲には、情熱のありやうがないし、その情熱の無いものが、奈何に自敍に適せないかと云ふことは、金井君も到底自覺せずにはゐられなかつたのである。

金井君は斷然筆を絶つことにした。

そしてつくづく考へた。世間の人は今の自分を見て、金井は年を取つて情熱が無くなつたと云ふ。併しこれは年を取つたためでは無い。自分は少年の時から、餘りに自分を知り拔いてゐたので、その悟性が情熱を萌芽のうちに枯らしてしまつたのである。それがふとつまらない動機に誤られて、受けなくても好い dub を受けた。これは餘計な事であつた。結婚をするまで dub を受けずにゐた方が好かつた。更に一歩を進めて考へて見れば、果して、結婚前に dub を受けたのを餘計だとするなら、或は結婚もしない方が好かつたのかも知れない。どうも自分は人並はづれの冷澹な男であるらしい。

金井君は一旦から考へたが、忽ち又考へ直した。なる程、「dub」を受けたのは餘計であらう。併し自分の悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけの事である。永遠の氷に掩はれてゐる地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。Michelangelo は青年の時友達と喧嘩をして、拳骨で鼻を叩き潰されて、望を戀愛に絶つたが、却て六十になつてから Vittoria Colonna に逢つて、珍らしい戀愛をし遂げた。自分は無

能力では無い。Impotentでは無い。世間の人は性慾の虎を放し飼にして、どうかすると其背に騎つて、滅亡の谷に墜ちる。自分は性慾の虎を馴らして抑へてゐる。羅漢に跋陀羅と云ふのがある。馴れた虎を傍に寢かして置いてゐる。童子がその虎を怖れてゐる。Bhadraとは賢者の義である。あの虎は性慾の象徴かも知れない。唯馴らしてあるだけで、虎の怖るべき威は衰へてはゐないのである。

金井君はかう思ひ直して、靜に卷の首から讀み返して見た。そして結末まで讀んだときには、夜はいよいよ更けて、雨はいつの間にか止んでゐた。樋の口から石に落ちる點滴が、長い間を置いて、磬を打つやうな響をさせてゐる。

さて讀んでしまつた處で、これが世間に出されようかと思つた。それはむつかしい。人の皆行ふことで人の皆云はぬことがある。Pruderyに支配せられてゐる敎育界に、自分も籍を置いてゐるからは、それはむつかしい。そんなら何氣なしに我子に讀ませることが出來ようか。それは讀ませて讀ませられないこともあるまい。併しこれを讀んだ子の心に現はれる效果は、豫め測り知ることが出來ない。若しこれを讀んだ子が父のやうになつたら、どうであらう。それが幸か不幸か。それも分らない。Dehmolが詩の句に、「彼に服從するな、彼に服從するな」と云ふのがある。我子にも讀ませたくはない。

金井君は筆を取つて、表紙に拉甸語で

VITA SEXUALIS

と大書した。そして文庫の中へばたりと投げ込んでしまつた。

(明治三十八年五月六日 劉王屯を發して裴家屯に至る)

春風や種蒔く器叩く人

杏あか李しろあとは綠なり

兵站や積荷阜なす桃の村

馬上十里黄なるてふてふ一つ見し

(明治三十八年六月十九日 於奉)

えりきらひ白き扇を買ひにけり

人前を脈脈として團扇かな

(『うた日記』より)

學校 (明治三十七年十月三十日 於十里河)

沙河ちかき　會戰はてて
おほやけの　事しげき日に
ふるさとの　わこが文來ぬ
なつかしと　よみもてゆけば
學校の　試驗のさまを
こまやかに　しるしおこせつ
そを見れば　寄宿舍ごもり
天翔る　鳥の翼を
うらやみし　昔しのばゆ
軍令は　おごそかなれど
身を捨つる　ますらたけをは
世のほまれ　もとむるならじ
あはれあはれ　學生の身は
師とたのむ　人の批判ぞ
生死の　關路なりける
おほやけの　事しげけれど
人言を　かへりみぬ我
人言に　ほださるる子を
哀とおもひぬ

戰の　場にもまして　まなごらが　學の
庭や　苦しかるらん

(『歌日記』より)

金毘羅

　冬の休暇に、四國へ心理學の講演に賴まれて出掛けた文學博士小野翼君は、高松市で講演を濟まして、一月十日に琴平まで來て、象頭山の入口にある琴平華壇にはひつた。

　博士を請待した有志者の一人で、中學教員をしてゐる小川光といふ、赭顏のでつぷり太つた男が、萬事世話を燒いてくれて、わざわざ此所まで送つて來た。

　琴平華壇には、一月頃に客は一人も無い。博士は中二階になつてゐる、十五疊敷の廣間に通された。參考書に着換を入れた小革包を大きい床の間に置かせて、その前に敷いてあつた座布團をずつと横の方にゐざらせて、霜降の洋服に寛く包まれてゐる、瘦せた體をその上に置いた博士は、閾を隔てて、次の間の風爐と茶道具との置いてある處に据わつてゐる小川に聲を掛けた。

「さあ。小川君こつちへおはひり下さい。」

「いや。さぞ御疲勞でございませう。」

「なあにわたくしなんぞよりか、君の方がどの位骨を折られたか知れません。講義なんといふものも、自分で新しく組み立てて、それに使ふ材料も選り拔いた上に、聽く人が退屈しないやうに、かういふ處で人に感動を與へようといふ箇所まで工夫して置いて爲るとなると、なかなか容易ではないでせう。わたくしなんぞは行きあたりばつたりで遣るのに、生れつきヰットは無いし、辯は惡いと來てゐるのだから、さぞ諸君がお困でしたらう。その代り、わたくしの方では、實は濟まない程骨を折つてゐないのです。幹事をしてお出になつたあなた方のお骨折と比べものになりはしません。さあ。どうぞこちらへ。」

　博士は火鉢の向側へ座布團を直して、小川をそこへ迎へるのである。小川は少し狹過ぎる黑の洋服に無理に詰め込んだやうな、太つた體を窮屈さうに廣間に持ち込んで、座布團より遙か手前に蹲つた。

「まだお食事までには大分時間がございますが、今日は丁度土地のものが澤山參詣をいたす日でございますから、先生も御參詣なさつてはいかがでございませう。山の景色を御覽になつても宜しいかと存じますが。」

「さうですなあ。まあ、それをお敷なすつて、どうかお樂に。わたくしは參詣よりか、湯にでもはひつて來ませう。」

「なる程。その方がお疲が戻つて宜しうございませう。いづれ後程伺ひます。」

　小川は廣間をゐざり出て、梯を下りて行つた。

　博士は近眼目金を脫して、ハンケチで拭いて、鞘に入れて、櫺子窓の處に据ゑてある机を持つて來て傍へ引き寄せて、目金を硯箱の脇に置いた。博士は自分の書齋でも、目金を同じ處に置くのである。教場で目金を脫した時は、極まつて白墨の箱の脇に置くのである。そこで四邊を一寸見ると、次の間から廊下に出る障子の開いてゐるのが氣になる。それを締めようか、次の間との間の襖を締めようかと考へて、襖の方を締めた。

　博士はこれで落着いたといふ樣子で、火箸を取つて炭の歪んでゐるのを直して、火箸をきちんと揃へて、火鉢の隅に立てた。火箸一つでも、立て樣が極まつてゐる。立てる場所も極まつてゐる。人と火鉢を圍んで話をしてゐる時なんぞ

は可笑しい。人が灰を掻き廻して、火箸を妙な處に歪めて置くと、博士はそれをいつもの場所にきちんと立てる。人に驚いて顏を見られて、はつと氣が付いて、獨で氣の毒がるのである。或時博士の內へ、新しい下女が來た。その下女が火鉢を持つて來ると、火箸を半分以上灰に埋めて寢かして持つて來る。博士は度々小言を言つて直させた。その下女は八王子のものであつた。それから餘程立つてから、博士が八王子へ講演に賴まれて行つたことがある。宿屋へ着いて見ると、火鉢に火箸が寢かしてある。灰に半分埋めてある。博士は釋然として、成程これだなと獨言を言つたのである。

博士は手を火鉢に翳して、こん度はゆつくり四邊を見廻した。すると新築の座敷であるのに、肘掛窓の障子に大きい穴が一つ開いてゐるのが目に附いた。直に張り潰させたいのであるが、小野博士は一夜泊の宿屋で障子を張り替へさせたなんといふ逸話を、新聞に書かれでもしては大變だと思つて熬へた。さて障子が氣になつたので、ついと立つてその障子を開けて見れば、相應に嶮しい山で、見上げると、松の大木が竝んで立つてゐる裾に、赤土が透いて見えてゐる。空が晴れて風が無いので、寒くはない。暫く眺めてゐる處へ、下女が來て、お風呂が宜しうございますと云つた。博士は革包から着替の綿入を出して、今まで着てゐた洋服と着替へて、又革包の處へ行つて、手拭やらシャボンやら出して、その跡へ時計と金いれとを入れて置いて、湯に降りて行つた。

湯から上つて來ると、賴んで置いた床屋が來てゐる。博士は宿屋で湯から上ると、いつでも濡手拭の置場に困る。けふも嫌なのを我慢して、廊下の手摺に掛けて置く。日本の宿屋にトアレットのないのは一大缺點だとは、餘り身綺麗にする方でもない博士のいつも言つてゐる事である。

博士は廊下に置いてある籐の椅子に腰を掛けて、顏を剃らせることにした。床屋が湯を貰ひにいつた間、博士は外を眺めてゐる。手摺の下は、幅一間ばかりの帶のやうな地面を殘して、崖になつてゐる。崖の縁には、芝生に小松がとびとびに植ゑてある。その下は人力車のやうやう摩れ違ふ位の道で、道に沿うて小川が流れてゐる。向岸には農家らしい、寂しい家の背戶が見える。その先には家の屋根や木立がところどころ見えて、その上に羅を張つたやうな靄が棚引いてゐるのである。

下の道には丸で人通がない。博士はふと東京の內の事を思ひ出した。今時分は細君が六つになる姉娘を連れて、弟の赤ん坊を女中に抱かせて、湯屋から歸つて來る頃だなと思つたのである。赤ん坊は、細君が男の子を欲しい欲しいと云つてゐるうちに生れたので、やうやう六箇月になつてゐる。それでも、もう博士の顏を見覺えて、博士が小さい、まだ自由にならない手を攫まへて何か言ふと、圓い目を半月形にして、脣の間から舌の尖を少し出して笑ふのである。博士の目には、この赤ん坊の顏が浮んだ。

床屋が湯を持つて來て、顏を剃り始めた。剃りながら、滑な大阪詞でいろいろな問はず語をする。年は五十を越してゐるらしい。若い時には男自慢であつたかと思はれるやうな、萎びた靑年とでも云ひたい男である。大阪かと云へば、「さやうだす」と答へるが、諸國に贅の江戶見があるやうに、四國九州には贅の大阪ものが多いから、眞僞は覺束ない。話は一月にはいつの年でも土地が寂しいといふことから、客の多い頃の繁榮に移つて、果は金毘羅樣の御利益といふことになる。こんな不思議があつた、こんな譃のやうな事實があつたと、どの客にも話すものと見えて、新聞の三面記事を讀み上げる

やうに、すらすら辯じ立てる。大抵舟乘が颶風に遭うて助かつたといふやうな筋であるが、中には病氣の直つた話もある。

博士は奇蹟といふことに就いては、多少考へて見たこともあるので、別に珍らしくも思はずに聞いてゐる。全歐羅巴の貴賤老若がLourdesの岩窟へ押し掛ける世であつて見れば、金毘羅を信ずるもののあるのに不思議はない。から思ふと同時に、博士は細君が金毘羅に詣ることのあるのを思出した。博士の細君は、今は熊本に隱居してゐる、一頃京橋邊にゐた人の娘で、華族女學校を卒業したのだから、ルビの附いてゐない新聞位讀める。算術も、此方に極不得手な博士よりは達者である。併し、物の道理を考へて見ることは敎へられなかつたものと見えて、理性の方面は頗る薄弱である。博士の處へ來てから同じ博士仲間で、隣同志になつてゐる高山敎授の奥さんと心安くなつて、子供が病氣なぞをすると、その奥さんに勸められて、虎の門の金毘羅へ祈禱を賴みに行く。それも念の入つた迷信をしてゐるのではない。隣の奥さんも行くから、自分も行くのである。考へて見て行くのではない。併し博士が金毘羅樣の本家の直傍まで來たと知つたら、お札でも受けて歸つて貰ひたく思ふかも知れない。博士は床屋の話を聞きながら、こんな事を思つた。

床屋が歸ると、直に夕飯の饌が出た。酒を一滴も飮まない人であるから、十五分も掛からないで食べる。食べながら、博士はこれからどうしようかと考へた。此家に着いたときは、一晩泊る積でゐたのである。泊る積といふよりは、泊らうとも泊るまいとも、はつきりは考へずに、いづれどうかしようと思つただけで、このどうかしようが自然泊ることになるだらうと思つたのである。それが、夕飯を食べながら考へて見るうちに、何の目的もなく、一晩ここに泊るのは無駄だといふ氣になつた。それには博士の吝な性分も手傳つてゐるかも知れない。博士は旅行をするのに、よく汽車に乘る。それは時間を節約するためであるのは無論である。併しその惜むものが時間だけであると云つては、博士の意中を十分に言ひ現はしてゐないのである。博士は慥に茶代を遣つて宿屋に泊るだけの金をも惜むに相違ない。それは著述家で或私立大學へ敎へに行つてゐる、收入の少ない博士の身に取つては、餘り非難すべきではないかも知れないが、兎に角吝だと云はれるのは爲方があるまい。唯その惜む金が溜まるのでないといふことを斷つて置いたら、博士に甚だしい寃を被せることにはならないだらう。そこで博士が琴平に泊ることに二の足を踏み出したのには、幾分か吝な處が手傳つてゐるのである。そんなら、目的なしに時間と金とを費すのが嫌だといふだけで、博士が泊ることを躊躇したかといふと、さうではない。今一つ其底に伏在してゐる動機がある。これは博士の名譽のために言つても好からう。博士は東京に殘して置いた妻子が戀しくなつたのである。

そこで博士は飯の給仕に來てゐる丸髷の女中に、舟の時刻を問うた。舟は晩の七時に出て、あくる日の午前五時に、大阪に着くといふのである。博士は直に女中に勘定と車を雇ふ事とを言ひ附けた。

女中が茶を取りに下りて行つて、中二階のお客が夜舟で立つといふのを、小川が聞き付けて、女中と一しよに上つて來た。まだ湯にもはひらなかつたと見えて、洋服の儘でゐた小川は、圓い膝を窮屈氣に曲げてすわつて、小さい目を無理に開けるやうにして、博士の顏を見て、かう云つた。

「先生。泊らずにお立なさいますさうでございますね。」

「別に用事もありませんし、丁度舟に間に合ひさうですから。」

「さやうでございますか。實は曾にはひつてゐる土地のものが二三人ございますので、今晩お泊になるなら、どちらかへお伴を致しまして、お話を伺ふ筈でございましたが、それでは致し方がございません。唯今も下へ一人參つてをりまして、お立の事を承つたものですから、大相殘念がつてをりました。」

「いや。そんな事があつたのですか。併し駄目ですよ。わたくしは會話が下手で。」

「いえ。どう致しまして。唯お出下さるばかりで、皆難有がるのでございます。」

博士は女中の持て來た茶を飲んで、飲んだ跡の茶碗に又茶を注いで、割箸を洗つて半紙で拭いて膳の上に置いた。食べてゐる間でも、膳に汁が翻れると、半紙を出して拭く。物を食べさして置くといふことが嫌で、丸で手を着けずに置くか、さうでなければ殘らず食べてしまふ。それで茶か何か遣つてゐるのかと思ふと、さうではないのである。

女中が膳を持つて起つと一しよに、博士はそこらに出してある物を革包に片付け始めた。小川は體を前に乘り出すやうにして云つた。

「ちよとお手傳を致しませうか。」

「いや。何も格別出てはをりません。」

實際格別何も出てはゐないのである。湯に行つたとき持つて行つたものをしまつて、不斷兜兒に入れてゐる物を出せば、跡は着てゐる綿入をしまふより外に、何の用事もないのである。博士は左の手で火鉢の縁を押へて、少し腰を浮かせた。

「一寸失敬して着換へませうか。」

「どうぞお構なく。」

小川は平氣で起たうともしない。兜兒から新しい朝日の包を出して、封を切つて一本吸ひ附けてゐる。博士は、着換をするときに傍にゐられるのが氣にはなるが、その氣になるのを相手に知らせたくないといふやうな風で、ホワイトシヤツの引掛けてある衣桁の傍に往つて、着換をし始めた。そんな事には氣が附かずに、煙草を呑みながら話し出した。

「先生。とうとう金毘羅にお出なさらずに、お立になりますなあ。」

詞が少しぞんざいになつてゐる。小川といふ男は人に逢つたときに、一應丁寧過ぎる程な挨拶をしてそれから段々家族的な詞を遣ふ。これが此男の交際家として重寶がられてゐる唯一の性質なのである、なる程これは人に近づく一つの手段には相違ない。小川は嘗て幾分か此性質のお蔭で成功して、縣の先輩に東京へ連れ出された事もある。併しどこか頭が鈍いところがあつて、人を觀察するといふことが出來ない。人にうるさがられても分らないことがある。それが此男の再び四國に舞ひ戻つた原因であるらしい。博士は此男のゐるのが氣になれば氣になる程、わざわざ念入に相手になつてゐるのである。博士は襟飾を結びながら云つた。

「はあ。何も意味があつて行かないのではないのです。又ゆつくり來たときに行くことにしますよ。」

「併し御參詣なさらずにお立になりますと、金毘羅は荒神だと申しますから、祟るかも知れません。今晩お泊りなさると、宴會にも御出が出來ますし、御參詣も出來ますのですが。はははは。」

「いや。諸君はわたくしを待つて下さつたのかも知れませんが、金毘羅樣はわたくしが參詣しようなぞとは豫期せられないと思ひます。」

「それでも山靈が待つなぞといふことを申しますから、何とも申されません。一體金毘羅に就いては、いろいろな傳說があるやうに承りま

すが、本當は何を祀つたものでございませう。」
「それはこん度高楠博士でも來られた時にお聞になるが好いでせう。原語はKumbhiraで夜叉神ださうです。同じ語が星座の名や鰐の事になつてゐるのは、直接に關係を有してゐないといふことですが、船頭なんぞに拜まれるところを見ますと、何だか星や鰐にも緣がありさうな心持がしますよ。
「へえ、先生はいづれ梵語も御研究になりましたのでございませう。」
「いや。一向遣りません。Devanagariの文字を覺えて字書が引ける位が精々です。」
小川は「はあ」と云つたが、何の事だか分からなかつた。そのうち博士は洋服を着てしまつて、着換を革包にしまつて、机の上に置いてあつた目金を掛けた。小川は見送りに行く支度に、下へ下りて行つた。

夕霧の漂つてゐる中で、あちこちの家に火が附き初める頃、二臺の車は廻船問屋に着いた。狹い家にどれが客やら内のものやら見分が附き兼ねる程、艀の出るのを待ち合はせる人が入り込んでゐる。あらゆる種類の小荷物が置き散らかしてあるので、足の踏み處もない土間から、きたない上草履の脱ぎ散らかしてある板の間に上がる。女中がまごまごしてゐるので、小川は我家のやうに前に立つて博士を案内して、好い加減な明間にはひつて、手を叩いたり、どなつたりして、やうやうの事で、焚落しを投げ込んだ火鉢に有り附く。博士が手を焙つてゐるうちに、小川は帳場に行つて世話を燒くのである。

火鉢の中の焚落しがいぶるのに、風がなくて寒さを覺えないので、博士は縁側に出る一間間口の障子を明けて据わつてゐる。廊下は絶えず人が通つてゐる。駈けて通るのは内の男や女中で、のろのろ通るのは便所に通ふ客である。客の中には大きな金毘羅のお札を背中に負つた儘で便所に往くのもある。博士はこれを見てゐて、病人らしいものが少いだけがLourdesより増だと思つた。

そのうち艀が出ると云つて知らせに來た。小川は博士と一しよに艀に乘つて、船まで送つた。博士のキャビンまで覗いて見て、暇乞する時の挨拶は、又改まつて恭しかつたのである。

上等に乘る客は幸に少なかつたので、博士はキャビンを一人で占領することが出來た。不得手な體操の眞似をして、高い處へ上つたり、人の寐がへりをしてきいきい云はせる下に寐てゐる必要はないと思つて、博士は一安心したのである。室内は寒くないので、博士は外套を脱いで鉤に掛けて、長椅子のやうにしてある處へ、革包を載せた。この長椅子のやうなものは、上等の客が込み合つた時には、三人目の客が寐るために拵へてあるのであらう。

そのうち船が動き出した。併し動くのが殆ど分からない程、海が穩である。金毘羅は祟らないらしい。

博士は長椅子に腰を掛けて、革包の中から日記を出して、萬年筆で書き始めた。先づ高松で講演をしてしまつたことを書く。それから小川光に送られて、琴平華壇へ寄つて、船に乘つたことを書く。皆で二三行である。博士の日記はいつも粗い箇書で、讀み返して見れば興味索然たるものである。形式があつて内容がない。或は博士の生活その物もその通りで、回顧すれば興味索然たるものではあるまいか。

博士はいつも自分の爲た事を跡から考へて見て、その瑕瑾を氣にする人である。講義なんぞをするときには紙切に、あの事から此事と順序を書き附けて、所々に字眼のやうなものさへ書き入れて持つて出るのであるが、さて講義をして見ると、それに性命を吹き入れるといふやうな事が出來た事がない。それが第一に氣にな

る。どうも總てが紙の上の辯舌になつたやうな氣がする。それから書いたときには論理が立派に整つてゐた積であつたのに、話してゐるうちに連續を失つて、慌てて順序を變へたり、別の事を入れたりしたのを思ひ出して、厭な心持になる。しまひには間違を言つて言ひ直した處、吃つた處、と切れた處まで思ひ出して氣にする。併しそれは皆形式ばかりの事だから、どうでも好いと、自ら辯護もして見る。そこで內容はどうかといふのに、講義をする前には、參考書は隨分廣く調べる。そしてそれを雜然と竝べて置くやうなことは決して爲ない。自分の立脚地から、相應な批評を加へる。跡で速記を讀んで見ても、智力の上から概念を洗つて見て、別に不都合な廉はない。それであるのに、ついぞ人を感動させた、人に强い印象を與へたと思つたことのないのが、氣に入らない。事に依ると思想までが紙の上の思想になつてしまつてゐるのではないかと思はれてならない。それに博士は、自分の判斷の標準になる立脚地といふものに滿足してゐない。

　博士は文科大學を一級の眞中位の席順で卒業して、籍を某私立大學に置いた處が、所謂頭の好い人なので、其學校の哲學科だけは殆ど自分の物のやうになつて、間もなく洋行させられることになつた。さて伯林に往つたのが、丁度 Nietzsche 全盛の時代であつた。當時の小野君は、Nietzsche を多少の興味を以て讀んだ。併し一部の青年輩と一しよになつて、其奇矯な說に心醉するには、小野君は既に老成過ぎてゐた。超人といふ輕氣球に乘つて、Décadence の淵から飛び上がることが出來なかつた。そんならごつごつと、自然科學に秋波を送つてゐる心理の研究なんぞに掛からうかと思ふと、Brunetière が科學の破產と名づけたやうな潮流が、踏み締めようとする足をすくつて轉ばせる。そこで下宿屋の二階に寢轉んで、其頃むやみに掘り出される「青い花」の文學に耽つた。Nietzsche の死に先だつこと一年にして歸朝した小野君が、羅曼底格の思想といふ論文を土產に持つて來たのは、かうしたわけである。

　小野君の歸朝土產は博士の學位を以て酬いられた。併し小野博士に堅牢な哲學上の立脚地のないことは、其博士論文の緣起から推して考へて見ても、別に不思議はないのである。

　日記を革包にしまつた博士は、午前に高松で終つた講演の事を考へて見た。初の約束が、一週間で心理學を講ずるといふ事になつてゐたので、博士は Wundt の小さい心理學に依つて日程を作つた。そこで最後の今日になつて、靈といふものを講ぜねばならないのだから、議論が形而上になつて來るに隨つて、博士の紙の上の辯舌は遺憾なく馬脚を露はしたのである。博士は[illegible]した目金を拭きながら、いつもより一層强い不愉快を感じた。

　博士は起つて甲板に出た。船の進行のために起る風は强いが、船體は殆ど動搖しない位である。灰色の靄に包まれた島々が船を逆つて又迎へる。暫く立つて見てゐたが寒くなつたので、便所に往つて歸つて、上衣を脫いで床にはひつた。

　一寐入すれば大阪に着くから、早く寐ようと思ふが、腦髓の上に疲勞が鈍い重りを加へてゐる割に寐附かれない。何だか自分の生活に內容が無いやうで、平生哲學者と名告つて、他人の思想の受賣をしてゐるのに慊ないやうな心持がする。船の機關ががたがた云ふのが耳に附く。自分の體も此船と同じことで、種々な思想を載せたり卸したり、がたがたと運轉してゐるが、それに何の意義もないやうに思ふ。妻や子供の事を思つて見る。世には夫婦の愛や、家庭の幸福といふやうな物を、人生の內容のやうに

云つてゐるものもある。併しそれも自分の空虚な處を充たすには足らない。妻も子供も、只因襲の朽ちた索で自分の機關に繋がれてゐるに過ぎない。あゝ、寂しい寂しいと思ひながら博士は寢た。

翌朝キャビンの外がさうざうしいので、博士は起きて上衣を着て、戸を開けて見ると、甲板には人が大勢出てゐる。河岸に竝んでゐる家が目の前に見えて、河岸と汽船との狹い間を漕いで行く傳馬では、船頭が罵りかはしてゐる。急いではひつて顏を洗つてゐるうちに船は止まつた。大阪に着いたのである。

博士は直に梅田停車場まで車で行つて、停車場の脇の茶店にはひつた。八時三十分の急行に乘る積で切符を買ふことを頼んで置いて、高松の小川の處へ出す葉書を書いた。「高松滯在中は種々御配慮に與り出發の際は態々琴平迄御見送を辱うし、感謝に堪へず候。幸に金毘羅の祟も無之事と相見え、海上平穩に大阪に着し、此より汽車にて歸京の途に就き候。諸君に宜しく御傳被下度候。」宛名を書いて小女に渡すと、直に走つて出しに行つた。

此店は急行に乘る客抔の休む處ではないのか、外に客もない。帳場に婆あさんが獨り据わつて烟草を呑んでゐる。土間の隅に据ゑてある圓卓の上に革包を置いて、その傍で立ちながら葉書を書いた博士は土間の眞中に切つてある爐の傍に來て、そこに置いてある籐の椅子に腰を掛けた。爐に入れた焚落しは眞白に灰を被つてゐるが、搔き起さねばならぬ程寒くもない。

帳場の婆あさんの處へは、職人體の男が來て話をしてゐる。雙方で知つてゐる家の噂話と見えて、固有名詞ばかり澤山出て、聞くともなしに聞いてゐる博士には、何の事か少しも分からない。郵便を出して來た小をんなは、何が珍らしいのか、少し隔たつた處に立つて博士を見てゐたが、婆あさんに叱られて土間續きの裏手の方へ引込んでしまつた。

博士は所在がないので、帳場の婆あさんにことわつて置いて、外へ出た。そして停車場の前の廣場に立つて、暫く見廻してゐたが、廣場そのものはがらんとしてゐて、をりをり停車場に乘り附ける人力車が冬の朝の灰色の靜けさを破るばかりである。梅田町の方に倚つて、阪神電車の通つてゐる通が一つあるが、その電車も客を待ち合せて止まつてゐる。曾根崎の方の繁華らしい、店の竝んでゐる通へ曲つて、少し歩いて見ても、梅鉢の紋の附いた暖簾を下げて、粟おこしを賣つてゐる店の外には、別に目に附くものもない。

博士はぶらぶらと元の茶店に戻つて來た。今まで見なかつた、絆纏を着た男がゐて、新橋行の二等の切符と急行券とを博士にわたして、もう時間が好いと云つた。博士が茶代を帳場に遣つて出掛けると、絆纏の男が革包を持つて先に立つた。

博士のはひつた二等室は可なり一ぱいであつた。神戸から乘つたにしても、まだ一時間しきや立たないに、もう何か盛んに食つてゐる連中がある。陳べるものは割合に少ない。相變らず隣席のものが小さくなつて居るのに、朝から長くなつてゐる男が二三人ある。その一人が膝を立てて、足を揃へて出してゐる處に、丸髷の女が下駄を脱いで、腰掛の上に窓の方へ向いて、きちんと据わつてゐたが、それは長くなつてゐる男のお上さんだといふことが後に分つた。

博士は近視の度が大分強いので、汽車の中で物を讀むことを好まない。白人會といふ俳諧の會にはひつてゐるので、汽車に乘ると俳句を考へることにしてゐるが、何時も出來たことがない。今日も同じ事である。京都を過ぎてからは、乘客が皆默つてしまつて、只貨物の如く

受動的に、汽車に運ばれて行くといふ風である。單調な動搖と音響とに誘はれて轉寐を始めるものもある。睡くなつてゐる連中は鼾をさへ搔き出す。博士はこんな時、いつも Zola の書いた Lourdes の中の汽車の段を思ひ出す。あの小說は人が退屈だと云つて非難するのであるが、博士はその退屈なのを面白く思つてゐる。汽車は進行を續けてゐる、網で吊り下げてある種々な形の手荷物がぶらぶらするといふやうな句を反復して使つてある處が、博士には强い印象を與へたのである。總て Zola の書いたものの退屈に感ぜられる位な、丁寧な處に、博士は敬意を表してゐるのである。

博士は頭の輕いやうな感じになる。汽車が速度を緩めて停車場にはひつて、停車場を出て又速度を出すのを、單に器械的に自分の體に感ずる。これに、自分の體が鎭靜せられてゐるやうな、多少不愉快な感じが交る。をりをり琵琶湖の死水が鈍い色に汽車の窓に映つたり、關が原前後で、緩い傾斜の赤土に低い松の竝んだ丘陵が、窄まつては又開いたりするのが、聞き馴染んだ俗謠の旋律のやうに、薄明の意識を襲つて、忽ち消えてしまふ。をりをり又何の寫象の連鎖に引かされてか、東京にゐる子供のことなぞを思ひ出す。想像力がはつきり子供の姿を目の前に結晶させて見せることさへある。姉娘を連れて銀座通りを歩いてゐる。Trottoir の石だたみを二三間走り拔けては振り返つて笑ふ。四辻になつてゐる處に來て、危いから廢せと云へば、一層早く走り拔けて、振り返つて笑ふのである。赤ん坊が女中に抱かれて門の外に立つてゐる。何か言つて顏を覗くと、目を細くして舌の尖を口から出して笑ふ。この笑ふのが只愉快で笑ふばかりではない。支那人は陪笑といふことを言ふ。あれはお世辭に笑ふのである。お附合に笑ふのである。赤ん坊は確に陪笑をする時がある。博士は赤ん坊の泣く時なんぞに、顏を覗いて何か言つて見る。赤ん坊はすぐにいつもの笑顏をして、それから急いで泣き續けるのである。

こんな想像の起る時には、博士はいつも殆ど無意識にこれを抑制しようとする。空想なんといふものは、放任して置くと、どれだけ我儘になるかも知れない。若し自分の顏の表情筋までが我儘になつて、にやにや笑ひながら道を歩くやうになつては大變だと思ふのである。

博士は名古屋あたりを通るとき食堂にはひつた。博士は長く汽車に乘つてゐると、煙草に醉ふと云つてゐる。これは自分が煙草を呑まないからさう思ふので、煙草のためばかりではあるまいが、頭痛がして來る。今日もそろそろ頭痛のして來る頃であつたので、食堂にはひると、心持が好くなつた。平野水を呑みながら何か食べた。博士は何か一品嫌な物に出くはすと、食事全體が嫌になるといふむづかしい人であるが、幸に嫌な物にも出くはさなかつたのである。

博士は午後になつてからは、目金を脫して隱しにしまつて、外套を緊く體に卷き附けて、腰掛の背に倚り掛かつて、目を瞑つたり開いたりしてゐた。同じ一時間でも次第に延びるやうな心持がする。それでも欠なぞは遠慮をして爲ない。側に遠慮をするのではない。善く人の云ふ自ら尊敬するだの、自ら欺くだのといふ語法で云へば、自分に遠慮をするといふやうなわけである。

日が暮れてから乘客全體が氣を揉み出す。頻りに時計を出して見て、汽車が停車場の灯の附いてゐる處を素通りをする度に、今のは平塚であつたとか、程が谷であつたとか云ふ。博士も時計を見たくなるのを、見たつて詰まらないとレフレクトして見ずにゐた。

汽車はやうやう、暗い處に疎に灯の附いてゐる、賑やかなやうで寂しい新橋停車場に着いた。博士は、特別に寂しいやうに思はれる夜の東京を、車で駒込へ歸つた。

四國から出した葉書を見て、内のものも大凡いつ頃歸るのだとは知つてゐたが、博士は無駄な事だといふので電報を打たないから、いよいよ何日何時に歸るか知らずにゐた。停車場の車が西片町の家へ着いた時、家はもうひつそりしてゐた。奥さんは自分の部屋のランプを主人の書齋へ持つて來る。女中は革包を受け取つて書齋へ運んで來る。奥さんはすぐに立つて着換を持つて來て、書齋のランプに火を點しながら云つた。

「もう大抵お歸になる頃だとは存じましたが、只今とは存じませんで、も少しで皆休んでしまふ處でございました。」

「子供はどうした。」

「二人とも好く休んでをります。姉さんが昨日から少し咳をいたしますので、なるだけ暖にいたして、お歸になるまでに直してしまひたいと存じてゐました。ほんのちよいちよいなのでございます。」

「さうか。」

博士は別に氣にも留めなかつた。奥さんが湯を沸かさせようかと云ふのを、博士は留めて、鐵瓶の湯を金盥に取らせて、手水だけ使つて寢た。

翌日は一月十二日で日曜日である。博士は留守中に來た郵便物を見てゐる。百合さんといふ、目の大きいお姉えさんは、お父樣がお歸になつたのが嬉しいといふので傍に纏つてゐる。奥さんが赤ん坊の顏を洗つて綺麗にして連れて來た。今朝目を醒まして牛乳を飲む時に、一つ二つ咳をしたやうであつたが、血色も好いし、元氣も惡くない。博士が小さい手を摑まへて、「半子樣、半子は好い子だなあ」と云つて、ぢつと顏を見ると、暫くお父樣の顏を眺めてゐて、目を細くして、口を乳を飲むときのやうに圓くして、舌の尖を少し見せて、につこり笑ふのである。

小野博士は子供に和洋共通の名を附けてゐる。姉娘を百合といふのに Lilie である。赤ん坊には Hans といふ名を附けて、半子と書かせた。これは博士が支那の詩話か何かを讀んだとき、聟を半子と曰ふといふことがあつたので、其字を取つたのである。百合さんはお伽話が好で、お父樣から獨逸のお伽話を傳つて、ハンスとグレエテとの話などを好く知つてゐるので、赤ちやんの名が半子といふのだと聞いた時は大そう喜んで、「それでは今にわたしと一しよに往つて魔女を退治て遣るわ」と云つた。

博士は奥さんに問うた。

「乳は好く飲むかい。」

「ええ。待ち兼ねるやうにいたして、ぐいぐい飲んでしまひまして、いつでも足りないといふので、むつかりますのでございます。もう少し量を増してはいかがかと存じまして、西田さんに伺ひましたが、丈夫な子は[illegible]立つても、量を欲がるのだから、規則通りより増しては好くないと仰やるのでございます。」

西田といふのは、大學の黄澤教授の助手で、小野博士の家では、いつも子供の事を相談してゐるのである。

午過には空が好く晴れてゐて暖いので、百合さんが庭で鞦韆をしてゐる。退紅色の友禪メリンスの被布を着て、美しいふさふさとした髮を靡かせて、鞦韆が水平になるまで揺るのを、博士は椽側に腰を掛けて、嬉しさうに見てゐた。

月曜日には博士は久し振に私立大學に出て見た。幾級も持つてゐて、下の級の爲めに語學を教へるのであるから、博士は毎日出勤するのである。休暇で歸省した生徒がまだ半分位は歸つて來ないのでクラスは頗る寂しい。博士に

の意に滿たない詫言をして、夕方に歸つた。

奥さんはやや不安らしい顔をして博士を待ち受けて、かう云つた。

「只今西田さんが入らつしやつて、丁度お歸りになつた處でございますが、赤さんの咳がどうも痙攣性の咳のやうだから、まだ確とは云はれないが、百合さんを一しよに置かないやうにするが好いと仰やるのでございます。」

「ふむ。それぢやあ百日咳かも知れないといふのだな。」

「多分百日咳ではあるまいが、用心はしなくてはならない。大學の病院にも大分本郷からはひつて來る子供があると仰やるのでございます。十分な事を云へば、赤さんを入院させるが好いのだがと仰やつて、考へて入らつしやるやうでございました。」

内氣な、色の蒼い奥さんは、百合さんと同じやうな大きな目を瞬つて、博士の顔を見て、力を附けて貰ひたいやうな樣子である。博士は醫者の事は分からないから、西田醫學士の判斷以上の判斷は出來ない。そこで自分も不安に襲はれさうになるのを、なるたけ奥さんに知らせないやうにと努めた。

博士の住ひは渡廊下で繋いだ二棟になつてゐるので、百合さんを書齋の方に置いて、奥さんが赤ん坊を連れて、廊下の向うに越して行くことになつた。そして博士はをりをり向うの離れへ覗きに行く。百合さんが附いて來さうにするのを、賺したり叱つたりして、獨で行くのである。そして牛子の樣子を見るのに、なる程をりをりする咳が、今日は四つ五つ續いて、その間にひいと云ふやうな聲をする。醫者が痙攣性だといふのはあれだなと思ふ。併し牛乳は相變らず盛んに飲んで、好いうんこをするといふことである。咳の外には何の變つた事もない。

こんな風で四五日立つた。博士は毎日子供の事を氣にしながら、學校で講義をして、夕方に歸る。赤ん坊の咳は次第に好くない。十度ばかりも續けてして、その跡でひどく泣くやうになつた。それでも博士が行つて見て、いつもの通りに「好い子、好い子」と云ふとお父樣の顔を見て、につこり笑ふ。笑つてしまふと又泣くのである。藥は始末が好い。牛乳を盛んに飲むので、其間に哺乳器の硝子管を藥の中に入れれば、なんでも平氣で飲む。粉藥は哺乳器の奶頭にまぶつて遣れば、これも平氣でしやぶつてしまふ。なんにしろ、この小さい體にも旺盛な生活の力が籠もつてゐるやうに思はれるのであつた。

百合さんは博士の留守の間、兎角お母樣の跡を追ふのを、無理に若い女中にお相手をさせて、博士の書齋に置く、といふことである。博士が歸るとひどく喜ぶ中にも、子供ながら不安な顔をしてゐる。赤さんのやうに咳をするやうになると行けないから、決して赤さんの傍へ行つてはならないと言つて聞せると、さういふ博士の顔をぢつと見て合點々々をするのである。

博士の内には女中は二人しかゐなかつた。御飯焚と年の若いのとである。年の若いのは赤ん坊の守をしてゐたのを、赤ん坊が病氣になつてから、百合さんのお相手にした。ところが此頃は奥さんが毎晩ろくろく寐られないので、手代りになる人を入れねばならないやうになつた。こんな時に博士の内で呼んで來るお榮さんといふ女がある。忍藩の士族の娘で、博士の世話で一度よめに行つたところが其壻が常にしてゐる[illegible]の[illegible]を受け損なつて、身を持ち崩したので、財産賠償のあらゆる權利を放棄して離別をして貰つて、寡婦になつたのである。もう三十七八になつてゐる、甲斐性のある女で、面長な白い顔をしてゐる。子供のおもちやに福笑ひといふものがある、お多福の顔の半分の中へ、子供

が目かくしをして目鼻を置く書紙である。お瑩さんの顏は可哀らしい顏だが、どうも少し目隱しをして目鼻を置いたやうな處があると、誰やらが云つたことがある。併しそれは若い時の事である。段々年を取るに連れて、才氣の優れた、意志の強い人の表情が、顏に凝結して、ちつとも可笑しいことはなくなつてゐる。此人が泊りに來ることになつて、奧さんと交る交る赤ん坊の處で夜番をすることになつた。

病人は赤ん坊でも、離れの病室はなかなか大事である。病氣でなくても、滅菌した牛乳を飮ませるにでも、複雜な哺乳器がいる。そこへ吸入器械を買つて來て、度々吸入をさせる。吸入をさせない間も、火鉢の上に金盥を掛けて、蒸氣を立たせる。胸部に濕布がしてあるのを、乾けば取り換へる。種々な藥を、牛乳を遣る時に、一しよに飮ませる。なかなか容易な事ではないのである。奧さんは一しよう懸命に遣つてゐるが、その代りを勤めるのは、並の看護婦にもむつかしい。これが出來るのはお瑩さんの外にはないのである。

兎角するうちに、一月二十日になつた。博士は學校から歸つて忌むべき新事實を聞いた。今日は百合さんが咳をするといふのである。稀に一つ二つするばかりだといふが、半子も初はさうであつた。博士は奧さんの心配らしい口氣を打消す勇氣がない。併し當人の百合さんが相變らず跳ね廻つて騷いでゐるのが、せめてもの心遣であつた。

夕飯が出た。赤ん坊をお瑩さんに任せて置いて、親子三人饌に向つた。百合さんは、「おや、キヤベツ卷」と云つて箸を取つた。何より好なお菜である。そして一口食べると咳が出た。咳の數は三つ四つであるが、どうしたことか、百合さんは電氣に撃たれたやうに、仰向に倒れて、兩手を固く拳に握つて、胸の處に押し附けて、わつと泣き出した。奧さんが、「どうしたのだい、どうしたのだい」と云つて抱き起したとき、咳はもう留まつてゐたが、百合さんは食べたくないと云つて、しくしく泣いてゐる。夫婦共飯を食ふ氣にもなれないので、すぐに百合さんを書齋に連れて行つて、床を取つてそこへ寢させた。

奧さんは牛乳を飮ませようと云つて、拵へに立つた。博士は娘の傍に附いてゐる。どうも樣子が惡い。いつも元氣の好い子が、永く煩つてでも居たやうに、くたりとなつて寢てゐる。奧さんは牛乳を拵へて來て、無理に百合さんに勸めてゐる。牛乳は餘り好かないのである。奧さんはどうせ明日は西田さんが來るのであるが、何か手當があるかも知れないから、すぐに近所の車夫を賴んで迎ひに遣つたと云つた。此話のうちに、百合さんはやつと牛乳を飮んでしまつてゐたが、又咳が出て、泣きながら今飮んだ牛乳を吐いてしまつた。先の通りに拳を胸に引き附けて泣くのである。博士は「おうおう、今に直る、今に直る」と云つて、娘を慰めようとしてゐる。心の中には丁度その反對の事を思つてゐるのである。

暮れてから西田學士が來た。診察をしてゐる間、赤ん坊はお瑩さんに任せ切で、夫婦共百合さんの傍に附いてゐる。胸部の打診や聽診をしてしまつて、體溫を測つてゐるとき、博士が口を出した。

「どうでせう。」

「さやうですね。」

と云つて考へてゐるうちに、百合さんが又咳をした。奧さんが背中をさすりさうにすると、百合さんが嫌だと云ふ。體に障られるのが苦しいと見える。奧さんは檢溫器の歪んだのを直して、そつと押へてゐる。西田は詞を續けた。

「百日咳です。」

「半子のより餘程急劇に來たやうですが、どう

いふものでせうね。」
「さあ。兎に角大分大きいお嬢さんですから、豫後が宜しいでせう。」
「さうです。大分大きくなつてゐるのですから、どんな處置でも出來ようといふものです。何か特別な手段はないものでせうか。」
「どうも對症療法しかありませんのです。百日咳には特功藥といふものが發見せられてゐないのですから、自然の經過を見て、對症療法を遣つてゐるのです。」
「新藥なんぞはないのでせうか。」
「えゝ。Pertussin だとか、Tussol だとかいふものもあるのですが、まだ信用が少いので、廣澤先生なんぞもお用になりません。」
「さうですか。半子だからつて、百合だからつて、別に厚薄はないのですが、百合はこんなに大きくなつてゐるのですから、どうぞ精一ぱい出來るだけの事をして見て下さい。新藥なんぞも、功能がはつきりしてゐなくても好いから、毒にさへならないものなら、なんでも飲ませて見て下さい。」
「えゝ。新藥も一つ聞き合せて見ませう。」
西田は檢溫器を抜いて見て、熱はないと云つた。それから半子にしたやうな處置を奥さんに話して、處方を三枚書いて渡して置いて、暫く考へて「いつそお二人とも入院をおさせなさつてはどうでせう」と云つた。博士は少し考へて看護婦でも雇つて、内で遣つて見たいと答へた。
西田は新藥を聞き合せて見るといふので、近處の電話のある内を問うて出て行つた。博士は車夫を傭つて藥を取りに遣る。奥さんは濕布の支度をする。半子の處から吸入器械を持つて來て、百合さんに吸入をさせる。そのうちに西田が歸つて來た。大學で不斷使はない新藥は、本郷附近の藥店にはない。やうやう資生堂に Pertussin があるのを衝き留めたといふのである。博士はすぐに銀座の資生堂へ使を出した。
西田が又明日來ると云つて歸つた跡で、博士は書齋の机を次の間へ出して、百合さんの處へ半子を連れて來させた。二人共百日咳と極まつて見れば、内中で一番廣い書齋へ一しよに置く方が手が省けて好いといふのである。百合さんは始終見たがつてゐた赤さんを傍に寢かしても、喜ぶ程の元氣もない。奥さんの拵へて來た粥を食べたのが、幸に居り合つたばかりである。
南向の書齋は丸で病院のやうになつた。博士の机を持ち出した北向の次の間の外に、廊下つづきの小さい間が東の方にある。そこへ病人の爲めに入用な、いろいろの物を置くことになつた。博士夫婦は子供の寢かしてある書齋と、机の置いてある北向の間とに、床を一つ宛敷かせて置いて、夫婦が代りあつて北向の間へ休みに行くことにした。書齋では、疲れて横になることがあつても、寢るといふやうには寢られないからである。
翌日博士が學校から歸つて見ると、看護婦が來てゐた。お鶯さんの知つてゐるもので、酒匂あたりの産だといふことである。餘りぎすぎすしなくて物わかりの好ささうな女であつた。名は藤江と云ふのである。お鶯さんはこれが來たので、得意先を見廻りに出た。尤もどの家へも博士の内の近所の電話番號が知らせてあつて、産の氣が附けば知らせる筈になつてゐるから、晩には歸つて來ると言ひ置いたのださうだ。
病人の樣子は別に變らない。只半子の方は咳をし出してからもう十二日目になつてゐるのに、瘦せもせず、むくむくと太つてゐて、泣聲にも力がある。牛乳も常のやうにぐいぐい飲んで、好いうんこをする。百合さんの方は昨日から咳をするのに、大病人のやうで、容貌まで變つてゐる。大小便も便器で濟ませて、少しも起

き上がらうとはしない。博士は半子の方を見ないやうにして、百合さんが咳をして苦むと、「今に直る、今に直る」と云つて慰めてゐる。奥さんが「あなたは何故ちつとも半子を見てお遣んなさらないのですか」と云ふと、「あれはまだ慰めやうがないから」と答へてゐるが、實は顔を見て物を言ふと苦みながらお附合に笑ふのを見るに忍びないのである。

夜お鶯さんが歸つて來た。藤江さんに今夜は任せて、離れへでも行つて寢ることにして、これからは代りあつて貰ひたいと、奥さんが云つたが、これ迄の爲來りもあるから、今夜だけは一しよにすると云つて、矢張病人の傍にゐた。

二十二日に、博士は心配しながら學校へ出て歸つて見たが、別に變つた事もなかつた。博士の考でも百合さんは固より、久しく惡い半子の方でも、まだ好くなつてゐるだらうと思ふわけには行かない。只惡くなつてゐなければ好いがと思ふばかりである。

奥さんがこんな事を言つた。「赤さんの方はもう十三日立ちますから、迹が九十日足らずでございます。百合さんはまだ丸で百日もありますから、可哀さうでございます。」博士は、なる程さう思ふのは無理もないが、百日咳といふのは只長い咳といふわけで、百日掛かると極まつたわけではないと答へた。これも慰めるやうに言ふ心持であつたが、そんな語氣にはならなかつた。

博士は二人の子供に被せてある布團の襟の處に、赤いフランネルの切が掛けてあるのが目に附いて、奥さんに問うた。

「あの赤い切はどうしたのか。」

奥さんは看護婦の顔をちよつと見て答へた。

「お叱りになるかと存じましたが、あれは金毘羅樣に御祈禱をして戴いた切なのでございます。」

かう口を切つて、奥さんは次の事を話した。隣の高山博士の奥さんがおない年のお玉さんの處へ、久しく百合さんが遊びに行かないので氣が附いて、昨日わざわざ見舞に來た。そして金毘羅樣へ祈禱をして貰ひに往けと勸めた。その時は朝のうちで、まだ藤江さんも來てゐなかつたので、手が放されないといふと、それでは代りに往つてくれようと、親切に云つてくれた。その御祈禱をして貰つた切が今日屆いたといふのである。

奥さんは叱られるかも知れないと冒頭に云つたが、博士はこんな時に叱つたことはない。博士は何かで、貧人の襤褸を奪つて、代りに與へる衣がないといふ譬喩を讀んだことがある。どんな迷信にもしろ、それを迷信だといふには、代りに遣る信仰がなくてはならない。それが自分にも無いと思つてゐるから叱つたことは無い。併しなる程さうかと同意しては、學者としての立場がなくなるやうな心持がするので、こんな時には笑つたり、揶揄つたりしたのである。奥さんが人に勸誘せられて、已むことを得ずにしたといふやうな語氣をするのは上邊であつて、實は半信半疑で、多少の望を此切に繋いでゐるのを察して見れば、氣の毒になつて、今日は笑ふことも揶揄ふことも出來ない。そこで博士は默つて聞いてゐた。

奥さんは此話の序に、「これも取留もない事ではございますが」とことわつて、こんな話をした。丁度赤さんが咳をし出した十日の晩に夢を見た。子供を二人連れて湯に行くと、どうした事か、二人とも湯の中へ落ちて溺れてしまつた。氣も狂ふばかりに驚いて、女中と二人して、ぐたりとなつてゐる二人の子供を抱へて、湯屋の直隣の太田といふお醫者の内へ往つた。このお醫者は、風なんぞを引いた時、ちよいちよい見て貰つたことのある人である。二人の子供を

受け取つて、少しお待なさいと云つて、奥へ抱いてはひつた。長い間待つてゐると、やうやうの事で唐紙が開いて、百合さんが出て來た。その跡からお醫者が板のやうに堅くなつた赤さんを兩手に載せるやうにして持つて出て、から云つた。「お姉さんの方は大きいから生き戻りましたが、赤さんの方は駄目です」と云つた。目が醒めてから考へて見れば、その日の午過に二人の子供を連れて湯に往つたとき、赤さんを洗つて遣る傍で、ひどく咳をしてゐる子があつた。それから內へ歸つて、赤さんが咳をし出したといふのである。奥さんは詞を續けてこんな事を云つた。

「つまらない事ではございますが、西田さんにも、お心安いもんですから、夢の話をいたしたのでございますよ。西田さんの仰やるには、どうもどちらがお亡くなりになつても行けないのですから、正夢だとも逆夢だとも申されませんねと、さう仰やるのでございます。」

博士は矢張默つて聞いてゐたが、心の中では妙な事を思つた。夢は時間や空間の拘束を受けないものであるから、どんな事をも見ることが出來るには相違ない。併し好くも古風な小說家が拵へたやうな夢を見られたものだ。一月十日には自分が高知から琴平へ着いて、象頭山の麓にある宿屋へはひつて、小川が一晩泊つて參詣しろと云ふのを、無理に參詣せずに立つたのである。丁度その日湯に入つた赤ん坊が咳をし出す。それは湯で風を引いたのであらうが、その時百日咳らしい子供に湯屋で逢つて、跡で赤ん坊が百日咳になる。お負にその晩に百合さんが同じ病氣になるのを豫言したやうな夢を細君が見る。それが溺れるといふ水難らしい夢にまでなつてゐる。今は小說にでもこんな事を書いたら、伏線が置いてあるに呆れるどころの騷ぎではない、百年も前の因果物語だと云つて、作者がひどい目に逢ふだらう。幸に細君は、本と云つては紅葉と天外との小說しか讀まない人で、學校を出てから歷史も地理も顧みないので、高知へ行つたものが琴平を通ることがあるやら、その琴平に金毘羅の本家があるやら知らないから好いやうなものだが、若し自分の金毘羅を冷遇したことが分かつたら、どんなにか氣にするだらう。兎に角、琴平での話はしない事だと思つたのである。

此晩には、晝間看護婦を寐させたので、お瑩さんが離れへ寢に行つた。百合さんは晩に食べた粥が好く收まつて、割合に咳をすることが少かつた。赤ん坊も變つた事がなくて濟んだ。

中一日置いて二十四日に博士が學校から歸つて見れば、內が沈んだやうな、騷がしいやうな、變つた樣子をしてゐる。いつもより低い聲で物を言ふ。それかと思ふと、又いつもより忙がしげに立ち騷いでゐる。博士は何か分からずに動悸を覺えた。子供の寢させてある處にはひつて見ると、百合さんがひどく苦しげに息をしてゐる。百合さんは二十日に夕飯を食べかけて倒れてから、可哀らしい顏に絕えず苦痛の表情が現れてゐる。苦痛が刻み附けられたとでも云ひたいやうである。これが一層甚しくなつてゐるのである。

博士はどうしたのかと問はうと思つたが、その問を發して答を聽くのを憚るやうな氣になつて、咽さへ引き締められるやうなので、默つて立つてゐる。奥さんがとうとう曇つた聲で、二人の子供の病況の變つたことを話し出した。今日は西田學士が百合さんの呼吸の工合が惡いといふので、精しく診察して見たところが少しカタル性肺炎の氣味がある。熱は三十八度で、肺炎にしては低い。それから赤さんをも精しく診察した。これも同じやうに肺炎らしい。これは熱が三十九度ある。藥は二人共變つて、其外

に百合さんは大きいからといふので胸に芥子泥を貼つた。今それを除けて濕布をした處である。いづれ廣澤先生に一度見せるが好い。西田自身は一應内へ歸つて、今夜は泊りに來るといふことである。

博士は赤ん坊を覗いて見たが、なる程少し息が忙しいやうではあるが、しろうと目には大した變もない。それから百合さんを覗いて見た。この方はいつも咳と咳との間は、當前の呼吸であつたのが、はつきり忙しくなつて、その上喘鳴が絶えず聞える。ずうずうといふやうな音である。これまでも苦痛が顏に現れてゐたのに、咳と咳との間にも樂に息が出來ないやうになつたのだから、さぞ苦しからうと思ふと、博士は熬へられないやうな心持がするのである。百合さんはうとうとしてゐたのが、博士がぢつと見てゐるうちに目を開いたので、博士は「今は苦しいのだが、すぐに直るから我慢してゐろ、我慢してゐろ」と云つた。百合さんは苦しさうな顏で合點々々をした。奥さんは「聞分が好いから可哀さうでございます」と云つたが、隱し切れない涙聲であつた。

此晩からは東側の次の間に床を取つて、西田に泊つて貰ふことになつた。西田といふ學士は瀟洒な男なので、「何か變つた事があつたらお起しなさいよ」と云つて、横になるかと思ふと、ぐらぐら寢てしまふ。それでも博士夫婦はひどく心丈夫に思ふのである。

あくる二十五日は土曜日なので、博士は午から歸つて、二十六日の日曜日に掛けて、二人の子供の樣子を絶えず見てゐた。赤ん坊は熱が四十度になつた。それでも容貌は殆ど變らない。牛乳を好く飮んで、うんと云つて兩足に力を入れて、締まつた大便をする。泣くにも張のある聲をして活潑に泣く。しろうと目には、これでも百日咳に肺炎を兼ねた重症かと、不思議に思はれる程である。それとは反對で、百合さんは病氣になつた日から、博士が苦痛を刻み附けたやうだと思ふ一種の表情をしてゐたのだが、今其の顏に腫が來て、竝はづれて大きかつた目が細くなつて、丸で同じ子ではないやうになつた。變つたのは顏ばかりではない。聲も全く變つてゐる。苦しい間に、をりをり一言づつ云ふ詞が、濁音勝で母音を長く引くので、突然聞いては何の事だか分からないが、別に珍らしい事も云はないから、度度聞けば分かる。それでも一度なんぞは聞違つて可哀さうな事があつた。土曜日の晩に博士が附いてゐるとき、百合さんが何か云つた。それを看護婦が「うんこ」と聞いて「はいはい」と云ひながら便器をさし入れた。さうすると平常辛抱強い百合さんも、病氣で根がなくなつてゐると見えて、さも悔やしさうに泣き出した。やうやう賺して問うて見れば「なんか」と云つたのであつた。「なんか」といふのは何か欲しいといふことで、こんな時には健康な時に好いてゐた、チョコレエトの中へクリイムを入れたのなんぞを遣る。さうすると食べて見て、旨くないのに失望して、半分食べて置くのである。

日曜日には、奥さんが熊本の母へ始て子供の病氣を知らせる手紙を書いてゐるとき、廣澤教授がちよつと來られた。西田に精しい話を聞いてゐると云つて、至極あつさり見て、何か西田學士に言ひ置いて歸られた。

これから一週間程といふものは、二人の病氣がその險惡な狀況を續けてゐて、病氣の經過を曲線に書いたなら、大抵上り詰めて、さて上つた儘に下らずに、ずつと留まつてゐるといふ工合であつた。此間にも二人共今日は右の胸が左の胸より惡いとか、今日は少し惡い處が廣くなつたとか狹くなつたとかいふやうな小波動のあるのを聞くのであるが、兎に角赤さんの午

後の體溫は四十度に極まつてゐて、百合さんは熱がさ程にないのに見るに忍びない苦痛を續けてゐる。二人とも咳は少しも輕くならない。二つの小さい體が精一ぱい病氣に抵抗してゐるやうに見えるのである。赤ん坊は牛乳を催促しなくなつたが、遣れば相變らず盛んに飲む。併しこれ迄飲み干すことになつてゐた瓶の底に、少しづつ牛乳が殘る。大便の工合は好い。百合さんには粥を少しづつ食べさせるのであるが、それを吐かせないやうにといふので、咳の出た跡を見計らつて食べさせる。その相間に餘り好かない牛乳とスウプとを種々に調味して、少しづつ飲ませるのである。顏は水氣で腫れるだけ腫れて、その腫が引かずにゐる。

一月が過ぎて二月一日になつた。此の日は土曜日で、博士が又早く學校から歸つて、翌日へ掛けて絕えず子供を見てゐることになつた。此頃になつて百合さんの目は、平生美しく大きかつたのが、小さくなつたばかりではない。目の中が血走つて來た。これは咳のひどいためだといふことである。咳はいかにもひどい。咳の出る時には、少し前から泣いてゐて、いよいよ咳になると、咳き入りながら、體中が痒いと云つて身を悶える。搔いたり撫つたりして遣らうにも、胸には濕布がしてあるから、思ふやうには出來ないのである。西田は赤さんを診察した跡でも、百合さんを診察した跡でも、不滿足らしい顏をして默つてゐる。赤さんの方にはこれ迄の藥の外に Digalen といふ藥を注入する事になつた。脈が少し惡くなつたからださうである。赤さんは注入の針をつと刺されると、いつもらんこをする時のやうに、兩足に力を入れて、うんと踏み伸ばして堪へる。その足が相變らずむくむくと太つてゐて可哀らしい。奥さんは西田が診察する度に、「どうでございませう、どちらか一人は助かりませうか」といふやうなことを繰返し繰返し問ふ。西田は餘程困るらしい樣子で、言を左右に託するといふやうな答をしてゐる。

此日曜日から中一日置いて、四日の朝であつて。お瑩さんが氣が附いて、赤さんに少し水氣が出ましたやうでございますと云つた。顏を洗ひ掛かつてゐた博士は、「どれ」と云つて起つて見に行つた。病氣になつてから、もう二十六日目になるのに、瘦せたと目に立つ程は瘦せない子の、むつくりした手を返して、手掌を見ると、いつも見えてゐた節が消えて平になつてゐる。それから足を見る。顏を見る。好く氣を附けて見れば、しろうとにも一體に薄く水氣が出てゐるのが分かるのである。赤ん坊はむくむくと太つた儘で、とうとう瘦せずに今日まで來て、腫が來るやうになつたのである。

博士は氣に掛けながら學校へ出て行つた。さて夕かたに歸つて、子供の寢させてある處にはひつて見れば、赤ん坊がゐない。はつと思ふとき、奥さんが「赤さんはあちらへ遣りました」と、いつも西田の寢る小部屋を指ざすのである。やつぱり死んでしまつたのかなと思つたが、さうではなかつた。死ぬるものと見極められたのであつた。それで病院の入棺の室で、見限つた病人を屛風で圍ふやうに、赤ん坊は隣の間へ遷されたのであつた。

博士は赤ん坊を見に行つた。西田は「もう痛い目に逢はせなくても好いのだが」と獨言を云つて Digalen を注射して置いて歸つたといふことを、お瑩さんは不平らしい聲で話しながら、牛乳を拵へてしまつて、赤ん坊に奶頭を含ませた。赤ん坊はいつもの通りに、ぐいぐいと音をさせて飲んで居る。腫れも昨日から增さないで、顏は常のやうに可哀らしい。目をはつきり開いてゐる。博士はこれで死の極印を打たれてゐるといふのは、譃ではないかと思はれてならぬの

である。博士がかう思つてゐるのが分かつたのか、「でもお乳を半分しか上がらないやうになりましたよ」とお榮が云つた。博士は突然赤ん坊に背中を向けて、百合さんのゐる方へ行つてしまつた。

その晩は西田をどこに寢かさうかと、奥さんが相談したので、博士は北向の間へ自分のと並べて床を取らせた。百合さんの方にも、赤ん坊の方にも、朝まで西田を起さねばならないやうな事はなかつた。

あくる五日はとうとう半子の死んだ日である。博士は强情に學校にだけは出て歸つた。留守の間に、西田が翔布兒を度々注入したり、内服させたりして置いて、「先生のお歸りになるまでは持ちます」と云つて歸つたさうである。今日も傍に附いてゐたお榮さんが、「赤さんが行けないやうでございます」と云つて、百合さんの方にゐた奥さんを呼んだのと、博士が玄關で靴を脱いだのと、同じ瞬間であつた。博士は、長らく小さい大きい苦痛を包んでゐた、縹色に白上がりで鶴龜の模樣のある掛布團の前に、帽を被り、目金を掛け、外套を着た儘で立つて、これ程おそろしい病も愛らしさを奪ふことの出來なかつた顏の、少し色の褪めたばかりの脣から、最後の呼氣の力なげに洩れ出るのを見たのである。

お榮さんは默つて俯向いてゐる。奥さんは「半子さんや半子さんや」と二聲呼んで、出さうになつた泣聲を隣の間に寢させてある百合さんに聞せたくないので、我慢して出さずにゐる。目からは涙がぼろぼろ落ちるのである。その時博士は兼てこの赤ん坊が死んだらどんなにか悲しからうと思つてゐた、自分の悲みの意外に淡く意外に輕いのに自ら驚いた。期待してゐた悲痛は殆ど起らないと云つても好い。博士は只心の空虛の寂しみを常より幾らか切に感じたばかりである。それと同時に、博士には此一間の光景が極端に客觀的に、憎むべき程明瞭に目に映じた。炭をくべる事を忘れたので、火の氣の弱つた火鉢に載せてある金盥の、煮え詰まつた濁水からは、絲を亂したやうな湯氣が、低く微かに立つてゐる。二三枚の盆には、いろいろの内服藥や注射藥やが載せてある。口を切つたばかりのボオルの箱にはひつてゐるDiuretinの瓶もある。今朝から哺乳器の奶頭を含まないやうになつたので、小さい茶碗に入れた牛乳を、お榮さんが晒しの切に吸はせて、口に入れて遣つた殘りもある。支那革包の上には、赤ん坊のおしめが何枚か疊ねて載せてある。健康で眠つてゐるやうに見える、むつくりした赤ん坊の顏を覗き込んでゐる、蒼い頰のお榮さん、泣いて赤くなつた顏の細君、それから立つてゐる自分までが、芝居の舞臺に出てゐる人物のやうに、よそよそしく而もはつきりと目に映じてゐるのである。そして博士には、自分がそんな風に傍觀者の位置に立つてゐるのが不愉快でたまらないのである。博士は奥さんにかう云つた。

「己は少し考があるから、赤さんを此儘そつくりして置け。」

博士は忙がしげに靴を穿いて出て行つた。行く先は西片町から坂を下りて、橋下の處に住んでゐる、博士と心安い石田といふ彫塑家の家である。夕飯の膳に向つて、晩酌の杯を手にしてゐた石田は、「これはお珍らしい」と笑顏をして迎へたが、博士の話を聞いて、忽ち容を改めた。どれ丈の悲痛が博士を驅つて自分の處へ來させたかと思つたからである。博士は石田に赤ん坊のマスクを取ることを頼んで、書生に石膏の罐と布とを持たせて出掛ける石田と一しよに歸つた。半子の顏は生きてゐるやうに見えるから、マスクもそんな風に出來るだらうと、博士は思つたが、後に出來上がつて來たのを見ると、口

に纏きつけてゐたので、脊が縮りよ、開いて、哀な姿になつてゐた。

赤さんは宮詣の時着た黒地に金の■模様のある縮緬の紋附に着せ換へられて、急いで縫つた白金巾の布團に寢かされた。取り敢へず枕許には燭臺と香爐とが置かれて、香爐からは線香の烟が立ち昇るのである。

あくる六日にも博士は學校に出た。受持の講義は、博士が自分で思ふ程、器械的なのが常になつてゐるためでもあるまいが、變つた事もなく濟んだ。昨日までは頭の奥に、心配があつた。今日は一人殘つてゐる百合さんに對する心配と、亡くなつた牡子に對する悲哀とがある筈であるが、意外にもさうではない。只頭ががらんとして、空虚になつてゐるやうに感じるだけで、昨日まであつた心配さへ、はつきりとは感ぜられなくなつてゐる。博士はこれ迄も學校で子供の病氣の事なんぞをちつとも人に話したことはないが、今日なんぞも博士の言語擧動に、常に變つた處があるとは、誰も認めるものはあるまいと、博士は獨りで思つてゐた。

博士はいつもの時刻にぼんやり内に歸つた。玄關から上つて赤さんの遺骸の置いてある間の前を通ると、障子の一枚開いてゐる處から、屏風の蔭の床が見える。博士の心安くしてゐる文科大學の學生が、袴を穿いて傍に坐わつて、雜誌をひつくり返して見てゐる。線香の烟の絶えないやうに番をしてゐてくれるのであらう。

北向の間に來たとき、百合さんの寢させてある書齋から、奥さんが青い顏をして出て來て、立ちながらかう云つた。

「あの葬儀屋の持つて參つたものを離れへ入れさせて置きました。牧野さんが晩にお出になつて、燒場へ連れて行つて下さるのでございます。」

牧野さんといふのは、博士が舊主人の邸で、家從を勤めてゐる老人である。博士は默つて頷いた。そして百合さんの處をちよつと覗いて見たが、別に變つた事もないらしかつた。

博士が茶の間に出て夕飯を食べてゐると、牧野の老人が來た。胡麻鹽頭の几帳面な爺さんである。牧野は離れにあつた道具を亡骸のある處へ持つて來て、白木の机に白木綿を掛け、赤さんの寫眞を奥さんに出させて眞中に飾つて、燭臺や香爐を其前の低い机に竝べた。それから小さい寢棺に赤ん坊を納れようとした。その時博士は、飯をそこそこにしまつて、奥さんと一しよに其場に立ち會つてゐたが、奥さんはさも悶の惡げに、夫と牧野とを見て、かう云つた。

「ちよつともう一度だつこいたして見たうございますが。」

「さあさあ、どうぞ。」

かう云つたのは牧野であつた。博士は默つて頷いた。奥さんは小娘のやうに含羞んで、そつと赤さんを抱き上げて、生きてゐた時のやうに横に胸に押し當てて、暫くぢつとしてゐたが、默つて元の寢床に置いた。部屋の隅に、此時まで見てゐた青年の學生は、なんと思つたか、突然「僕は失敬します」と云つて、走つて出て行つた。丁寧な博士は急いで玄關へ送りに出たが、もう間に合はなかつた。牧野の爺さんは、奥さんの膝に置いた赤ん坊の亡骸を、代つて抱き上げて寢棺の中に斂めたが、涙が皺の寄つた澁紙色の頰の上に光つた。

牧野が、連れて來た人足に寢棺を擔がせて出て行く。提燈の明りを、奥さんは北向の間の戸を開けて、火影の見えなくなるまで見送つてゐた。

七日に博士は學校に出てゐたが、その間は又百合さんがどうしたかといふ心配が頭の中を元のやうに往來してゐた。そんな心配が出來るだけ頭が恢復したのであらう。それから赤ん坊はどうしたか知らんと、ふと思つて、急にあれ

は亡くなつたのだつけと自ら打消して、物寂しい、不快な感に打たれた。

内へ歸つて、机の置いてある間にはひると、百合さんがこれ迄にない、一種異樣な低い聲で泣き續けてゐる。急いで外套を脱ぎ棄てて、帽を其上に投げて置いて、唐紙を開けてはひつて見ると、百合さんは二目と見られないやうな苦痛の顏をしてゐて、異樣な泣聲は、その四角に引張り開けたやうな口から、斷續して洩れてゐるのである。百合さんの今日の顏を見れば、これ迄苦痛の容貌だと思つたのは、まだ本當の苦痛の容貌ではなかつたのである。

傍に附いてゐた奧さんが、この時やうやう顏を上げた。奧さんの顏はいよいよ蒼く、目はいよいよ大きくなつてゐる。

「餘程居り合ひましたのでございます。先刻一番ひどかつた時には、わたくしの手をこんなに致しましたの。」

奧さんは袖をまくり上げて博士に見せた。二の腕は蚯蚓腫になつてゐる。百合さんが苦しさの餘りに引搔いたのである。

「西田君は何と云つたか。」

「尿毒症だとか仰やいましたやうでございます。兎に角餘程。」

と云ひ掛けて、奧さんは百合さんをちよつと見て默つてしまつた。目は涙ぐんでゐるのである。

二人の子供の病氣が、凡そ一月許の間、このか弱い女の胸に、包容し切れない程の苦勞を與へてゐる中に、「百合さんだけは大きいから助かる」といふことが、只一つの頼であつた。苦勞の淵に陷いつた身が、さう思ふばかりを浮木にして、一しよう懸命にそれを摑まへてゐた。それには例の怪しい夢も手傳つてゐたに違ない。今は此女の拘攣した細い指が、しぶしぶ浮木の枝を放さうとする刹那である。

博士が暫くぢつと見てゐるうちに、百合さんの泣聲は次第に切れ切れになつて、いつもの喘鳴を帶びた、忙しい呼吸に代つた。その時百合さんは目を少し開いて虚空を見詰めて、「あれ、蟲が來ます」と云つて、顏を蹙めて手で逐ひ除ける眞似をした。奧さんが呆れて「蟲なんかゐませんよ」と四邊を見廻してゐると、博士は手で物を拂ひ除ける眞似をして、「蟲を逐つて遣るぞ、そら逃げて行く」と云つた。博士は親戚の或る男が重い窒扶私になつたのを看病して、譫語といふものを見たことがある。併し其病人もこんな事は言はなかつた。何だか幻視とか錯視とか云ふものらしく思はれるので、自分にもそれが見える振をして、百合さんを慰めようとしたのである。

暮れてから西田が來たのを、博士は東側の次の間に呼んで、百合さんの事を問はうと思つた。線香の烟の棚引いてゐる机の上には、燒場から持つて歸つた遺骨の壺が、白金巾の切に包んで、寫眞と一しよに載せてある。部屋の隅に置いてある火鉢の火を搔き起しながら、博士は只「どうでせう」と云つて、相手の顏を見た。西田は暫く默つてゐて、愼重の語氣で、簡單に云つた。

「どうも行けますまい。」

「尿毒症ですか。」

「それは實ははつきりしてゐないのでございます。午後に大さうお苦みになつたのが、どうも頭痛ではないかといふやうに思はれました。それから其時少し上肢が痙攣した樣でございました。それで僕がつい、尿毒症かなと獨言を言つたのを、奧さんがお聞になりましたのでせう。尿毒症なら、本當の痙攣を起すとか、吐が留まらないとかいふ樣な事がある筈でございます。」

「そこで行けまいといふのは、どういふ處からさう思はれるのですか。熱でも出ましたか。」

「體溫は相變らず低うございます。今日も三十

八度二分しかありません。どうも炎症のある肺の部が狹くなりませんし、それに心臓が心配なのです。ヂキタリスももう大分長い間用ゐたり止めたりしてゐますから。」

「さうですか。兎に角行けない迄も何分願ひます。」

「はあ。明日は廣澤先生にもう一度來てお貰ひなさつてはいかがでございます。」

「君がさう思はれるなら、言つて上げませう。」

「いゝえ。僕が明日御出勤がけにお寄になるやうに申しますから、宜しうございます。面倒な禮儀はお嫌な方ですから。」

「それぢやあどうぞ。」

話はこれで濟んだ。

此晩は、博士のゐるとき濕布を取り換へたので、博士は久し振に百合さんの裸を見た。そして今更のやうにびつくりした。角張つた骨盤の骨が芋殼のやうな兩脚に續いてゐる處は、丸で毛をむしつた鷄のやうで、顏の水氣で膨んでゐるのが、別な人の首を接いだのではないかと思はれる位目に立つのである。永く濕布をしてゐるので、胸と背には赤い發疹がしてゐる。咳が出る度に、これが痒いのであらう。博士は見てゐられなくなつて脇へ向いた。

八日は土曜日であつた。今日は廣澤教授に見て貰ふ日なので、博士は午過に、どうなつたかと思ひながら歸つて來た。急いで百合さんのゐる間にはひつて見ると、奧さんが蒼い顏の目の縁だけを赤く腫れさせてゐる。博士は奧さんを机の置いてある間へ呼び出して、小聲で問うた。

「廣澤教授は何と云はれたか。」

奧さんの目からは涙がぼろぼろ翻れた。

「とても助からないさうでございます。もう一日持つか二日持つか分からないと仰やいますの。」

「ふむ。」

博士も言ふべき詞がない。奧さんは詞を續いだ。

「赤さんの方は可哀さうではございましても、まだ馴染が重なりませんせゐか、そんなにも存じませんが、百合さんが亡くなつてしまひましたら、どんなだらうと考へますと、堪りませんのでございます。來年は學校へ參るのでございますよ。鉛筆でこなひだ中書きました以呂波や畫なんぞを、跡になつてから見ましたら、どんなでございませう。それからいろんな時のことを覺えてゐるのを、思ひ出さないわけには參りますまい。去年展覽會へ連れてまゐりましたとき、ちよろちよろと先へ駈け抜けては、振り返つて笑ひましたのなんぞを、跡になつて思ひ出しましたら、どんなにかせつなからうと存じますと、どうもわたくしは。」

奧さんは噎せ入つてしまふのである。博士は何か思ひ付いたといふ樣子でかう云つた。

「そんな馬鹿な事を言つては行けないと云ひたいが、實は己も同じやうな心持がするのだ。なんにしろ赤ん坊と違つて、いろんな記念を殘してゐるのだからな。玄關には赤い緒の小さい草履や下駄がある。どの間にも人形があるとか、小さい着物があるとかいふやうに、何かしらあるのだ。いよいよ行けないと聞いてから、それを見ては堪らない。草履を見れば、もうあれを穿くことはないのだなと思ふ。人形を見れば、もう抱いて歩くことはないのだなと思ふ。其度に神經を刺戟するのだ。百合さんは生きてゐる間は、一時間でも一分間でも、飽くまで大切にして遣らねばならないが、あの方々に散らばつてゐる記念品丈は、ちつとも早く皆片附けてしまふが好い。何かに入れて目に觸れない處に隱してしまふが好い。」

博士は實際かう思つてから云つたのではあるが、それには些ばかりの策略も雜つてゐた。そ

れは奥さんに何か器械的な爲事を授けて、まぎらして遣らうといふことを考へたのである。

果して奥さんは直にそこらにある百合さんの物を片附けはじめた。そして勝手からお瑩さんを呼んで、百合さんの處へ遣つて置いて、自分は家中を歩いて博士の所謂記念品を片附けた。

博士は獨り茶の間へ出て、夕飯を食べてゐると、丁度又牧野の爺さんがお邸の用事を濟ませて來た。これは赤ん坊の葬儀の事をしてくれる積で來たのである。博士は少し考があるから、二三日後にすると云つて、牧野を歸した。二三日したら、百合さんも骨になるだらう。二人の子供を一しよに葬つて遣らうと思つたのである。

此晩は百合さんが珍らしくすやすや寢た。をりをり咳をして目を醒ましても、又すやすや寢るのである。博士はもう體が疲れ切つたのだなと思つた。

翌日の日曜日には、博士は朝から百合さんの傍を離れずに見てゐたが、思の外變つた樣子もない。朝看護婦が濕布をしようとするとき、百合さんはいつものやうに、さもせつなさうな顏をする。傍で見てゐた博士は、ちよつと考へて、「それは少しせずに置いて下さい」と云つた。看護婦の藤江は素直な性なので、「はい」と云つて手を引いた。奥さんは博士の顏をぢつと見た。頭のぼうとなつてゐる奥さんにも、博士がもう駄目だから、厭がる事はすまいと思ふのだなといふことだけは、直に分かつたのである。

その時百合さんが「爲てえ」と云つた。奥さんが「えゝ」と云ふと、「爲ないと直らないから」とはつきり云つた。博士夫婦ははつと思つた。そして隱して爲た惡事を人に知られたやうな恐しい思が、同時に二人の頭を掠めて過ぎた。百合さんは濕布が大嫌で、最初のうちいつも爲せまいとするので、爲ないと病氣が直らないからと言ひ聞せられてゐた。それで濕布を止めようとするのが分かつて、爲て貰ひたいと望んだのである。博士は看護婦に濕布をさせた。

西田學士は、教授の宣告を聞いた爲めでもあるまいが、午になつても來ない。朝牛乳だけであつた百合さんは、いつものやうに粥を少し食べた。そして食べてしまつてから、「なんか」と云つた。

「蜜柑を上げようね。」

奥さんがかう云つて、蜜柑の皮をむいて、筋を取つて遣ると、百合さんは細かい筋の殘つたのを、丁寧にむしつて取つてゐる。奥さんはその手附を指ざして、博士に言つた。

「あんなに氣分がしつかりしてゐます。」

奥さんは流石百合さんの性命の爲めに辯護するのである。博士も、しろうと了簡の身勝手かとは思ひながら、幾らか頼もしいやうな心持のするのを禁じ得なかつた。

午後になつて咳のあとで、泡のやうなものを澤山吐いた。奥さんが「おや」と云ふと、看護婦の藤江が「こんなに出ましたのは始めてでございますね」と云つて、ガアゼで拭き取つた。

夕方の事である。お瑩さんが小さい雪平に粥の支度をしたのを持つて來て、「あちらは火が塞がつてゐますから」と云つて、看護婦に渡すと、看護婦が受け取つて、蒸氣を立たせてある金盥を卸して、雪平を跡へ掛けた。その時百合さんが何か云つた。博士がちよつと聞き取り兼ねて、「えゝなんだい」と問ひ返すと、百合さんはじれつたさうに、又同じ事を繰り返した。看護婦が側から通譯をした。

「牛と葱と仰やるやうでございますね。」

博士の耳には「にゆうとねい」といふやうに聞えて分らなかつたのである。博士は百合さんの顏の處に覗いて問うた。

「牛と葱が食べたいのかい。」

百合さんは合點々々をした。博士は奥さんと目を見合せた。二人とも何となく驚異の念に打たれたのである。博士は暫くぢつと考へてゐたが、何か心の中に決する所がある様子で、から云つた。

「うむ。牛と葱を食べさせて遣らう。」

博士は急いで起つてパラダイスへ使を遣つた。上等のロオスを挽肉にして、ビフテキのやうに焼いて柔い葱をバタでいためたのを附け合せてくれるやうにと、口上書をして遣つたのである。博士は百合さんの被布團の上に掛けてある迷信の赤い切を信じない。そんなら醫者の口から出る、科學の食養生なら、絶對的に信ずるかといふと、さうでもない。養生や療治の事は、自分が知らないから、醫者の云ふとほりにしてゐる。併し絶對的に信じてゐるのではない。そこで今朝も濕布を止めさせようかと思つたのである。こん度は又始て水氣の出た頃から、小便の量が減つて、昨今尿毒症ではないかとさへ疑はれるまでになつても、始終大便には別に變つた事のない百合さんが、醫者に所詮助からないと見限られてから、食べて見たいといふ牛と葱であるのに、それを拒むのは杓子定木だと思つたのである。葱はどうかといふやうな顧慮もないではなかつたが、なに、食べたところで一口か二口だと打消してしまつたのである。

博士は座に返つて百合さんに、「今に買つて來るから、待つてゐろ」と云ふと、百合さんは又合點々々をした。奥さんは呆れて博士の爲る事を見てゐる。勿論、所詮死ぬるものだから、食べさせるといふのだらうといふだけのわけは分かつてゐる。それだけのことは分かつてゐながら、死なると云はれたものも、助かることがあるかも知れないのに、「そんな冒險をさせたくない」と、女性的に反對して見るだけの勇氣の[illegible]もない程、心が萎えてゐるのである。看護婦は不斷には相當ないが、大人しい女なので、博士に遠慮して默つて見てゐる。

そのうち牛と葱が來た。博士は勝手へ助けに出てゐたお瑩さんを呼んで、此一皿の西洋料理を温めることを言ひ附けた。その時さつき火鉢に掛けて置いた鍋が、雪平の蓋を吹き上げるので、看護婦が蓋を切つた。

お瑩さんが出て、西洋料理を添へて、粥を百合さんに勸めた。百合さんは牛とか葱とかお粥とか、一口ごとに注文をして、とうとうビフテキを三分一程食べて、粥も少し装つたのではあるがお代りをした。此頃になく食が進んだのである。

さて食べさせはしたものの、博士は跡の成行を多少氣遣つたが、咳が出ても吐きもせず、その儘好く居り合つてしまつた。暫くして西田が泊りに來たが、誰も牛と葱の話をするものはなかつた。

これが百合さんの病氣の好くなる初で、それから一日々々と様子が直つた。そこで赤ん坊の葬儀もこつそり濟まされた。とうとう三月十日には、一[illegible]に抜けたやうになつた百合さんが、床の上に起きて坐わつて、奥さんが柳行李に入れて匿したおもちやを、又出して貰つて、持つて遊んだ。

どんな名醫にも見損ふことはある。これに反して奥さんは、自分の夢の正夢であつたのを、隣の高山博士の奥さんと話し合つて、南家の奥ではいよいよ金毘羅様が信仰せられてゐる。哲學者たる小野博士までが金毘羅様の信者にならねば好いが。

生田川

人物

葦屋處女。

高く上げたる髮に白銀の釵子。黃楊の小櫛。時の花（紅梅）の插頭。淡紫の繝纈の表衣。紅染めの裙。白地に浪に鴛鴦の模樣ある薄き裳。錦の裙帶。紫綾の領巾。

腰機に懸かりゐるとき傍に梓、榺、苧筍を置く。

壁に懸け置く笠は、菅の市女笠。白栲の於須比を被りて戴く。

はひりに置く舄は丹舄。

處女の母。

背後に上げたる髮。細かき柞の櫛。釵子。朽葉色の衣。茜染めの裳。山藍摺の裙。倭文布の裙帶。織物の守袋に緂染めの紐附けたるを腋に懸く。珠數。

火桶は白木。

壁に懸けたる笠は白き苧の垂衣附けたる市女笠。

はひりに置く舄は秋二毛。

菟會壯士。

烏帽子。款冬色の衣、白き袴。淺縹の繝纈の襖。烏皮の淺沓。葛卷の小太刀。葛靫に交矧したる鹿矢二列に八目の鳴鏑矢一手を表指す。白檀の節木の反高なる弓。

茅渟壯士。

烏帽子。紺の纈の襖。白き衣。白布袴。鹿夏毛の行縢。毛沓。黑漆の刀子に織物の燧袋。白銀の目貫の太刀。黑葛靫に雁箆の矢を盛りたるに鏃矢一手を表指す。所々に樺纏したる梓の弓。

法師。

鈍色の衲衣。色々の裂を綴りたる糞掃衣。阿闍梨笠。麻鞋。左手に鉢。右手に白銅の五鈷鈴。

（衣裳考證　關　保之助）

攝津國菟原郡葦屋の里なる民家。左手犬黃楊の垣の間に門口。そこに沓。一間の正面の中程より右壁。笠二つ懸く。壁の前に機を立つ。中程より左の方窓。火桶柳筥やうの物。

葦屋處女、機を織りゐる。その母、手を火桶に翳しゐる。

母。もう春が近いと見えて、（窓の方を見る。）生田川の水がぬるんだと、髫髮どもが云つてゐた。わたしのやうな年寄でも、どうやら炭櫃が疎ましうなつた。（少し火桶を押し遣る。）

處女。（機の手を停む。）ほんにさうでございませう。此間の雷から時候が變つてまゐりました。どうしたわけか、わたくしはかう頭を押さへられるやうな心持が致してなりませんわ。

母。いや〳〵。それは時候のせゐばかりではあるまいよ。血の道も手傳つてゐるかも知れない。それに年寄つて同じ事ばかり云ふとお思ひかも知れないが、あの縁日のやうにお出になる二人の方に、いつも曖昧な事ばかし云つてお置きだもんだから、お前の氣の靜まる日はな

いのだよ。

處女。あゝ。その事だけは、おつ母さん、どうぞ云はないで置いて下さいね。その事だけは、わたくしは考へても見たくございませんし、申したくもございませんの。考へたり、申したり致すと、わたくしは頭痛が致してまゐりますから。

母。それ御覧な。お前の頭の痛いのは、春先のせゐばかりではないのだよ。お前の言ひたくないと云ふのを、何もわたしが無理に彼此云ふのぢやあないが、どうせ何時迄も此儘にして置かれるものではないからね。

(處女用を辨めたるが、忽ち又思ひ返したる如く、素直に機を下り、母と向き合ひて坐す。間。)

わたしも初めの内は、お前が面白半分に、二人の方を綾なしてお出なのかとも思つたのさ。だが、何事に附けても、輕薄がましい事の嫌なお前の事だから、まさかそんなわけでもあるまいと思つて、よく〳〵見てゐると、お前は飽くまで眞面目だらうぢやないか。わたしもねえ、かうなつて見ると、どうもお前の氣が知れなくなつてしまつたのだよ。それでお前の厭がるのを知つてゐながら、こんな事を云ひ出すのさ。一體お前はどうしようと云ふのだい。

處女。さうでございますね。

母。さうでございますねぢやあ、分からないね。お前だつて何とか思つてお出だから、頭痛もするのだらうぢやないか。一體どうしようと云ふのだい。

處女。それはねえ、おつ母さん、わたくしだつて思つてゐる事があるどころぢやございませんわ。思つてゐる事はございましても、どう致す事も出來ないのですもの。

母。變ぢやあないか。二人の内どちらかにお前が極めなくちやあ、治まりつこはないぢやないか。

處女。それはどうも極められませんの。

母。おや〳〵。それでは矢張極めないで置いて、二人であんなにおしのを、見てゐたいとお云ひのかい。

處女。なんの、わたくしが、それを見てゐたうございませう。わたくしはそれを見てゐるのが、つらくてならないのでございますわ。

母。(少し聲色を勵ます。)どうもそれでは分からないね。この津の國に、眼部の女子は澤山ゐても、お前の織つた絹の値が一番好いと云はれる程、何に附けても器用なお前が、二人の男に思はれたからと云つて、まさか意氣地がなくて極が附かないと云ふわけでもあるまいね。

處女。えゝ。おつ母さんがなんと仰やつても、どう思つて仰やるといふことが分かつてゐますから、わたくしは腹を立てたり拗ねたりは致しませんの。おつ母さんの仰やるとほり、わたくしにはあのお二人を釣つて置くの綾なして置くのといふ心持ちはございませんし、それかと申して、わたくしだつてあのお二人に彼此云はれるので、只途方に暮れて、ぼんやり致してゐるのでもございません。わたくしが極められないと申しますのは。

母。ふん。お前が極められないとお云ひのは。

處女。極められないと申しますのは、それはあの、(徐かに立つ、)人間の力に及ばない事ではございますまいかと、思ふからでございます。

(二人暫く無言。忽ち鵠鳥の羽音、窓のあなたに聞ゆ。處女窓の戸を開け、向うをぢつと見てゐる。)

母。なんだい。

處女。あの牢張の打つてあるあたりから、鴫が

立つたのでございます。(間。)

母。お前が極められないと云ふのは、どなたかにお前が極めたら、殘る一人の方が、その儘にはをられまいとお思ひなのだらうが、わたしはさうは思はないよ。(處女はぢつと外を見てゐる。)さうしたら、一人の方があきらめておしまひなさるだらうと思ふがね。(處女はぢつと外を見てゐる。)お前はさうはならないとお思ひかい。

處女。(こなたへ向く。)それは大變な事になりは致すまいかと思ひますの。

母。はてね。そんならお前が殺されるとか、お前の極めた方のかたが殺されるとか、お思ひかい。どうもお二人ともそんな氣の荒い方のやうではないのだがね。

處女。えゝ。そんな氣の荒い方々ではございませんとも。

母。それではお前に捨てられた方のかたが死んででもおしまひなさらうと云ふのかい。

處女。(又母と向き合ひて坐す。)それは死んでおしまひなさいますわ。

母。(微笑む。)まあ。矢つ張利發なやうでも世間見ずだね。

處女。いゝえ。きつと死んでおしまひなさいますわ。

母。そんなら、お前の大變な事になるだらうとお云ひのは、その事なのだね。

處女。いゝえ。

母。はてね。(暫く考ふ。)その方に死なれては、お前達が濟まないとお云ひのかい。

處女。えゝ。それは二人の間に、亡くなつた方の靈が立つて入らつしやるのですもの。

母。ふん。お前の考も大抵分かつたよ。わたしの考では、少しお前が思違しをしてお出のやうだが、わたしだつてきつとさうでないとも云はれないのさ。併しそれはお前が出し拔けにどなたかに極めると云つたなら、捨てられた方のかたが、あきらめにくいかも知れない。どうだね。お二人の間で極まつてしまふやうにしたら。

處女。そんな事は出來ませんわ。

母。(又微笑む。)何故。出來ないには限らないぢやないか。

(菟會壯士、茅渟壯士袖垣の外に現る。二人共人柄詞つき處女と母とよりは、稍時代なり。弓を持ち、鴨一羽づつを提ぐ。)

どなたかお出なされたやうだね。

處女。お二人ですわ。

菟會壯士。(一步下がりて、茅渟壯士に。)さあ。どうぞお先へ。

茅渟壯士。いえ。あなたこそ。

菟會。わたくしは此土地のもの、あなたは隣國のお客ではございませんか。どうぞ御遠慮なく。

茅渟。いつも同じやうな事を申すやうではございますが、さう仰やると、つい愚痴な事も申したくなります。何故わたくしは思ふ人と、同じ津の國には生れずに、和泉の國に生れましたやら。

菟會。これはお詞とも覺えません。道が遠ければ、お志の深さも知れるといふものではございませんか。

茅渟。志は劣らぬ積でございますが、思ふ人とまだ片生の昔から、お識合のあなたこそ、お羨ましうございます。

菟會。いや馴れては目にも止まらぬ習でございます。珍らしく來られたあなたがお羨ましうございます。かう申してゐては、果てしがございません。兎に角お先へ。

茅渟。そんならお許下さりませ。(柴の戸に手を掛く。)賴みます。

(處女靜かに戸口に歩み出で、戸を開く。)

（川　田　生）

（三人顏を見合せて思入あり。暫く無言。）
處女。どうぞおはひりなさいまし。
茅渟。御免下さい。
菟會。御免下さい。
（二人の壯士、處女の母に目禮し、各弓を傍に置きて坐す。母の位置と三角形になる。處女は戸口に近き處に突居る。）
母。これはお二人ともお揃で、好うこそお出下さいました。
茅渟。丁度こなたへまゐらうと存じまして、あの平張の打つてあるあたりまでまゐりますると。
菟會。和泉のお客と落ち合ひまして。
茅渟。鴨一羽づつ取りましたのを。
菟會。お土産に持つてまゐりました。
（二人鴨を母の前に出す。）
母。まあ、揃ひも揃つた立派な鳥でございますね。娘。厨へ持つて行つてお置。
處女。はい。
（鴨を取りて、右手へ入る。）
茅渟。（菟會に。）こなたの母刀自が、立派なと仰やつたので、あの鵠の事を思ひ出しました。
あれはまだあの儘浮いてをりませうかな。
菟會。きつとあの儘をりませう。何處から飛んでまゐつたものか、今朝見たときからあの通りにぢつとしてをりまする。
母。あの、鵠がゐると仰やいますか。
茅渟。さやうでござります。先程二人で鴨を射ますと、近くにゐた鴨の群は一度にぱつと立ちましたが、直その向うに鵠が一羽立たずに浮いてをりました。小舟を出して射た鴨を取つてまゐりました時も、鵠は靜かに波を切つて、二丈ばかり退いたばかりで、矢つ張立たずに浮いてゐました。
菟會。雪のやうに眞白な、大きな鵠でござります。
母。それはまあ、珍らしい。（少し間を置き、思案したる樣子にて、膝を進む。）かう申すと、なんとやら差出がましうございますが、あなた方お二人で、その鵠を射て御覽なさいませんか。二筋の矢に鳥は一羽。お中なすつたそのお方を娘の壻に致しませう。
茅渟。はつ。これは何よりの仰でござりまする。菟會のお方。いかがなものでござりませう。
菟會。なる程。御尤な母刀自の仰でござります。わたくしも異存ござりませぬ。
茅渟。かういふ内も心が急く。直にこれから。
菟會。さあ。
（二人弓を取りて立つ。處女右手より出で、立ちたる儘にて、ぢつとこなたを見る。二人の壯士、同時に處女の顏を見、さて同時に目を母の方に移す。）
茅渟。後程お目に掛ります。
菟會。後程お目に掛ります。
母。お待申してをりまする。
（二人の壯士。柴の戸を出で、左手に入る。）
處女。（二人の左手に入るまで、ぢつと立ちゐて、徐かに母の傍に進み、向き合ひて坐す。）又お出なさるのですつて。
母。こん度お出なさるのは、多分どなたかお一人で、そのお方がお壻さんだよ。
處女。何故なの。
母。（微笑む。）何故だか當てて御覽。
處女。分かりませんわ。
母。（又微笑む。）好い思附があつたのだよ。（間。）實はね、さつき二人で持つてお出の、あの鴨を射なすつたとき、大きな白い鵠が一羽、鴨が立つても舟が來ても、逃げずに浮いてゐたのだとさ。その話をわたしが聞いて、それ

を取つて來た方を塔にしようと云つたのさ。

處女。まあ。そんならおつ母さんは、今朝から川に浮いてゐる、あの鵠を取つて來いと、お二人に仰やつたの。

母。さうだよ。今朝から川に浮いてゐるとは、それをお前は知つてお出か。

處女。えゝ。ここから好く見えますわ。大きい白い鵠ですもの。

母。さうかい。

（間。處女心配らしき樣子。）

變な顏をお爲ではないか。又頭痛がして來たのかい。

處女。いゝえ。

母。ではどうしたといふのだえ。もしかわたしの云つたことがお前の氣に入らないのかい。

處女。いゝえ。

母。分からないねえ。そんならお前の出來ないと云つたことが不思議に出來て、今日一日に極まるのを、惡いとお思ではないのだね。

處女。いゝえ。それが惡くはございませんの。唯わたくしには久しい間、極まらないでゐた事が、そんなに急に極まるのが、恐ろしいやうでございますの。それにあの大きな鵠を、今朝ふいと見た時から、なんだか氣に掛かつてゐたのに、あれが射られて極まるといふのも、恐ろしいやうでございますの。

母。なんの詰まらない。さういふ内に、その鳥はもう射られたかも知れないのだよ。

處女。（獨語のやうに。）ほんに鵠はどうしたかしら。

（處女徐かに立ちて戸を開け、外を見る。間。）

母。見えるかい。

處女。（見返らずに。）えゝ。（語氣緩く。）綠に光る水の上に、圓めた綿かなんぞのやうに、眞つ白に見えてゐますわ。

母。二人の方はどうなすつたのだらうね。（間。）川はつい其所だけれど、道が曲がつて附いてゐるから、まだお出なされぬかも知れない。

處女。あら。

母。なんだい。

處女。白い鳥が大きくなりましたわ。（間。）羽を廣げたのでございませうか。（間。）又小さくなりましたわ。（間。）舟が出ますの。（間。）鳥が流れますわ。（間。）鳥の方へ舟がまゐりますわ。（間。）人が二人乘つてゐますわ。（稍長き間。）舟に鳥をいれますわ。（間。）こちらへ漕いでもどりますわ。（稍長き間。）鳥に矢が立つてゐますわ。矢が二本。

母。なんとお云だえ。矢が二本鳥に立つてゐるといふのかい。

處女。えゝ。（間。）舟が着きましたわ。

（母も處女も暫く無言。處女はぢつと窓の外を見てゐる。）

二人で鳥を中に置いて、動かずにお出なさいますの。

母。（心配らしき樣子。）まだ何か見えるかい。

處女。えゝ。（間。）いつ迄も動かずにお出なさいますの。

（長き間二人無言。處女はぢつと窓より見てゐる。鐘の音。窓の外次第に夕映にて赤くなる。此時僧墨染の衣、受糧器を持ちて登場し、戸の外に立つ。）

僧。煩惱貪瞋
癡慢疑惡見
隨煩惱忿
恨覆惱嫉慳

母。おや。托鉢の坊樣がお出なすつたね。いつも朝の内なのに、こんなに遲くなつて。

處女。（靜かに窓を離れて、懸けたる笠を取る。）あの、おつ母さん。わたくしは一寸行つて見て來ますわ。

僧。依止根本識　五識隨縁現　或倶或不倶　如濤波依水

母。本當にその鳥に、矢が二本共立つたのなら、お前が行つたつて極まりやあすまいぢやないか。

處女。(戸口に一沓を穿く。)いゝえ、おつ母さん。あの鵠が死にましたので、今日わたくしの身の上が、どうにか極まらなくてはならないやうに思はれますの。(語氣緩かに強く。)人間の小さい智慧で、どうしようの、かうしようのと、色々に思ひましたのも、夜が明けて見れば、燈火の小さい明りがあるかないか知れないやうなものですわ。

僧。現前立少物　謂是唯識性　以有所得故　非實住唯識

處女。おつ母さん、門に入らつしやる坊様にお上げなすつて下さいよ。

(處女母に會釋して、戸口にて意を決したる如く早足になり、左手に入る。窓の外薄暗くなる。母柳筥やうの物より鏡を取りて手に持ち出で、僧に贈る。僧受糧器にて受く。)

僧。爾時住唯識　離二取相故　無得不思議　是出世間智

(僧入る。鐘の音。)

母。おう。娘が門で云つたことは、どういふ心で云つたのやら。跡で思へば氣に掛かる。わたしもちよいと行つて見よう。(壁に懸けたる今一つの笠を取る。　幕)

蟋蟀

まどかなる　穴掘りて棲む
きりぎりす　おぢなき蟲よ
觸角を　長くさし伸べ
物來れば　しざりかくろふ
隱處の　睫長き子
人來れば　かくろへ入りて
我を待ち居り

(『歌日記』の「夢がたり」より)

わが墓

わが歩む　道のゆくてに
人あまた　穴ほりてをり
にひ泉　もとむるならじ
地の質　きはむるならじ
穴の上を　覆面の人
馳せめぐり　罵りはげます
たもとほり　見つつわれおもふ
穴は我　墓ならじかと
入らでやは　わが墓ならば
われ道に　倦むこと久し
罵る人よ　覆面とりて
いざ掘れ　感謝の右手を

(『歌日記』の「夢がたり」より)

あそび

木村は官吏である。

或日いつもの通りに、午前六時に目を醒ました。夏の初めである。もう外は明るくなつてゐるが、女中が遠慮してこの間だけは雨戸を開けずに置く。蚊幬の外に小さく燃えてゐるランプの光で、獨寢の閨が寂しく見えてゐる。

器械的に手が枕の側を探る。それは時計を搜すのである。遞信省で車掌に買つて渡す時計だとかで、頗る大きいニッケル時計なのである。針はいつもの通り、きちんと六時を指してゐる。

「おい。戸を開けんか。」

女中が手を拭き拭き出て來て、雨戸を繰り開ける。外は相變らず、灰色の空から細かい雨が降つてゐる。暑くはないが、じめじめとした空氣が顏に當る。

女中は湯帷子に襷を肉に食ひ入るやうに掛けて、戸を一枚一枚戸袋に繰り入れてゐる。額には汗がにじんで、それに亂れた髮の毛がこびり附いてゐる。

「ははあ、けふも運動すると暑くなる日だな」と思ふ。木村の借家から電車の停留場まで七八町ある。それを歩いて行くと、涼しいと思つて門口を出ても、行き着くまでに汗になる。その事を思つたのである。

緣側に出て顏を洗ひながら、今朝急いで課長に出す筈の書類のあることを思ひ出す。併し課長の出るのは八時三十分頃だから、八時までに役所へ行けば好いと思ふ。

そして頗る愉快げな、晴々とした顏をして、陰氣な灰色の空を眺めてゐる。木村を知らないものが見たら、何が面白くてあんな顏をしてゐるかと怪むことだらう。

顏を洗ひに出てゐる間に、女中が手早く蚊幬を疊んで床を上げてゐる。そこを通り拔けて、唐紙を開けると、居間である。

机が二つ九十度の角を形づくるやうに据ゑて、その前に座布團が鋪いてある。そこへ据わつて、マッチを擦つて、朝日を一本飮む。

木村は爲事をするのに、差當りしなくてはならない事と、暇のある度にする事とを別けてゐる。一つの机の上を綺麗に空虛にして置いて、その上へ、其折々の急ぐ爲事を持つて行く。そしてその急ぐ爲事が片付くと、すぐに今一つの机の上に載せてある物をそのあとへ持ち出す。この載せてある物はいつも多い。堆く積んであるそれは緩急によつて疊ねて、比較的急ぐものを上にして置くのである。

木村は座布團の側にある日出新聞を取り上げて、空虛にしてある机の上に廣げて、七面の處を開ける。文藝欄のある處である。

朝日の灰の翻れるのを、机の向うへ吹き落しながら讀む。顏は矢張晴々としてゐる。

唐紙のあつちからは、はたきと箒との音が劇しく聞える。女中が急いで寢間を掃除してゐるのである。はたきの音が殊に劇しいので、木村は度々小言を言つたが、一日位直つても、又元の通りになる。はたきに附けてある紙ではたかずに、柄の先きではたくのである。木村はこれを「本能的掃除」と名づけた。鳩の卵を抱いてゐるとき、卵と白墨の角を刻したのと取り換へて置くと、矢張其白墨を抱いてゐる。目的は餘所になつて、手段だけが實行せられる。塵を取る爲めとは思はずに、はたくためにはたくので

ある。

尤も此女中は、本能的掃除をしても、一舌の戰ぎ」をしても、活潑で間に合ふので、木村は滿足してゐる。舌の戰ぎといふのは、ロオマンチック時代の或小說家の云つた事で、女中が主人の出た迹で、近所をしやべり廻るのを謂ふのである。

　木村は何か讀んでしまつて、一寸顏を顰めた。大抵いつも新聞を置くときは、極 apathique な表情をするか、さうでなければ、顏を顰めるのである。書いてあるのは藥にも毒にもならないやうな事であるか、さうでなければ、木村が不公平だと感ずるやうな事であるからである。そんなら讀まなくても好ささうなものであるが、矢張讀む。讀んで氣のない顏をしたり、一寸顏を顰めたりして、すぐに又晴々とした顏に戻るのである。

　木村は文學者である。

　役所では人の手間取のやうな、精神のないやうな、附けたりのやうな爲事をしてゐて、もう頭が禿げ掛かつても、まだ一向幅が利かないのだが、文學者としては多少人に知られてゐる。ろくな物も書いてゐないのに、人に知られてゐる。啻に知られてゐるばかりではない。一旦人に知られてから、役の方が地方勤めになつたり何かして、死んだもののやうにせられて、頭が禿げ掛かつた後に東京へ戻されて、文學者として復活してゐる。手數の掛かつた履歷である。

　木村が文藝欄を讀んで不公平を感ずるのが、自利的であつて、毀られれば腹を立て、褒められれば喜ぶのだと云つたら、それは寃罪だらう。我が事、人の事と云はず、くだらない物が讚めてあつたり、面白い物がけなしてあつたりするのを見て、不公平を感ずるのである。勿論自分が引合に出されてゐる時には、一層切實に感ずるには違ない。

　ルウズエルトは「不公平と見たら、戰へ」と世界中を說法して步いてゐる。木村はなぜ戰はないだらうか。實は木村も前半世では盛んに戰つたのである。併し其頃から役人をしてゐるので、議論をすれば著作が出來なかつた。復活してからは、下手ながらに著作をしてゐるので、議論なんぞは出來ないのである。

　其日の文藝欄にはこんな事が書いてあつた。

「文藝には情調といふものがある。情調は situation の上に成り立つ。併し indéfinissable なものである。木村の關係してゐる雜誌に出てゐる作品には、どれにも情調がない。木村自己のものにも情調がないやうである。」

　約めて言へばこれだけである。そして反對に情調のある文藝といふものが例で示してあつたが、それが一々木村の感服してゐるものでもなかつた。中には木村が、立派な作者があんな物を書かなければ好いにと思つたものなんぞが擧げてあつた。

　一體書いてある事が、木村には善くは分からない。シチュアションの上に成り立つ情調なんぞと云ふ詞を讀んでも、何物をもはつきり考へることが出來ない。木村は隨分哲學の本も、藝術を論じた本も讀んでゐるが、こんな詞を讀んでは、何物をもはつきり考へることが出來ない。いかにも文藝には、アンデフィニッサアブルだとも云へば云はれさうな、面白い處があるだらう。それは考へられる。併しシチュアションとはなんだらう。昔からドラァムやなんぞで、人物を時と所とに配り附けた上に出來るものを言ふではないか。ヘルマン・バアルが舊い文藝の覗ひ處としてゐる、急劇で、豐富で、變化のある行爲の緊張なんといふものと、差別はないではないか。そんなものの上に限つて成り立つといふのが、木村には分からないのである。

　木村はさ程自信の強い男でもないが、その分

からないのを、自分の頭の惡いせゐだとは思はなかつた。實は反對に記者の爲めに氣の毒な、失敬な事を考へた。情調のある作品として擧げてある標本を見て、一層失敬な事を考へた。

木村の覺めた顏はすぐに晴々としてしまつた。そして一人者のなんでも整頓する癖で、新聞を丁寧に疊んで、居間の縁側の隅に出して置いた。かうして置けば、女中がランプの掃除に使つて、餘つて不用になると、屑屋に賣るのである。

これは長々とは書いたが、實際二三分間の出來事である。朝日を一本飲む間の出來事である。

朝日の吸殼を、灰皿に代用してゐる石決明貝に棄てると同時に、木村は何やら思ひ附いたといふ風で、獨笑をして、側の机に十冊ばかり積み上げてある manuscrits らしいものを一抱きに抱いて、それを用箪笥の上に運んだ。

それは日出新聞社から頼まれてゐる應募脚本であつた。

日出新聞社が懸賞で脚本を募つたとき、木村は選者になつた。木村は息も衝けない程用事を持つてゐる。應募脚本を讀んでゐる時間はない。そんな時間を拵へるとすれば、それは烟草休の間をそれに使ふ外はない。

烟草休には誰も不愉快な事をしたくはない。應募脚本なんぞには、面白いと思つて讀むやうなものは、十讀んで一つもあるかないかである。

それを讀まうと受け合つたのは、頼まれて不精不精に受け合つたのである。

木村は日出新聞の三面で、度々惡口を書かれてゐる。いつでも「木村先生一派の風俗壞亂」といふ詞が使つてある。中にも西洋の誰やらの脚本を或劇場で興行するのに、木村の譯本を使つた時に此お極りの惡口が書いてあつた。それがどんな脚本かと云ふと、Censure の可笑しい程嚴しいキインやベルリンで、書籍としての發行を許してゐるばかりではない、舞臺での興行を平氣でさせてゐる、頗る甘い脚本であつた。

併しそれは三面記者の書いた事である。木村は新聞社の事情には暗いが、新聞社の藝術上の意見が三面にまで行き渡つてゐないのを怪みはしない。

今讀んだのはそれとは違ふ。文藝欄に、縱令個人の署名はしてあつても、何のことわりがきもなしに載せてある説は、政治上の社説と同じやうなもので、社の藝術觀が出てゐるものと見て好からう。そこで木村の書くものにも情調がない、木村の選擇に與つてゐる雜誌の作品にも情調がないと云ふのは、木村に文藝が分からないと云ふのである。文藝の分からないものに、なんで脚本を選ばせるのだらう。情調のない脚本が當選したら、どうするだらう。そんな事をして、應募した作者に濟むか。作者にも濟むまいが、こつちへも濟むまいと、木村は思つた。

木村は惡い意味でヂレツタントだと云はれてゐるだけに、そんな日に逢つて、面白くもない物を讀まないでも、生活してゐられる。兎に角此一山を退治ることは當分御免を蒙りたいと思つて、用箪笥の上へ移したのである。

書いたら長くなつたが、これは一秒時間の事である。

隣の間では、本能的掃除の音が歇んで、唐紙が開いた。膳が出た。

木村は根芋のはひつてゐる味噌汁で朝飯を食つた。

食つてしまつて、茶を一杯飲むと、背中に汗がにじむ。矢張夏は夏だと、木村は思つた。

木村は洋服に着換へて、封を切らない朝日を一つ隱しに入れて玄關に出た。そこには辨當と蝙蝠傘とが置いてある。沓も磨いてある。

木村は傘をさして、てく〳〵出掛けた。停留場までの道は狹い町家續きで、通る時に主人の挨拶をする店は大抵極まつてゐる。そこは氣を附けて通るのである。近所には木村に好意を表してゐて、挨拶などをするものと、冷澹で知らない顏をしてゐるものとがある。敵對の感じを持つてゐるものはないらしい。

そこで木村はその挨拶をする人はどんな心持でゐるだらうかと推察して見る。先づ小說なぞを書くものは變人だとは確かに思つてゐる。變人と思ふと同時に、氣の毒な人だと感じて、Protégé にしてくれるといふ風である。それが挨拶をする表情に見えてゐる。木村はそれを煩がりもしないが、無論難有くも思つてゐない。

丁度近所の人の態度と同じで、木村といふ男は社交上にも餘り敵を持つてはゐない。矢張少し馬鹿にする氣味で、好意を表してゐてくれる人と、冷澹に構はずに置いてくれる人とがあるばかりである。

それに文壇では折々退治られる。

木村は只人が構はずに置いてくれれば好いと思ふ。構はずにといふが、著作だけはさせて貰ひたい。それを見當違に罵倒したりなんかせずに置いてくれれば好いと思ふのである。そして少數の人がどこかで讀んで、自分と同じやうな感じをしてくれるものがあつたら、僥倖だと、心のずつと奧の方で思つてゐるのである。

停留場迄の道を半分程歩いて來たとき、橫町から小川といふ男が出た。同じ役所に勤めてゐるので、三度に一度位は道連になる。

「けさは少し早いと思つて出たら、君に逢つた」と、小川に云つて、傘を傾けて、竝んで歩き出した。

「さうかね。」

「いつも君の方が先きへ出てゐるぢやあないか。何か考へ込んで歩いてゐたね。大作の趣向を立ててゐたのだらう。」

木村はかう云ふ事を聞く度に、くすぐられるやうな心持がする。それでも例の晴々とした顏をして默つてゐる。

「こなひだ太陽を見たら、君の役所での秩序的生活と藝術的生活とは矛盾してゐて、到底調和が出來ないと云つてあつたつけ。あれを見たかね。」

「見た。風俗を壞亂する藝術と官吏服務規則とは調和の出來やうがないと云ふのだらう。」

「なる程、風俗壞亂といふやうな字があつたね。僕はさうは取らなかつた。藝術と官吏といふだけに解したのだ。政治なんぞは先づ現狀の儘では一時の物で、藝術は永遠の物だ。政治は一國の物で、藝術は人類の物だ。」小川は省內での饒舌家で、木村はいつもうるさく思つてゐるが、そんな素振はしないやうに努めてゐる。先方は持病の起つたやうに、調子附いて來た。「併し君、ルウズエルトの方々で遣つてゐる演說を讀んでゐるだらうね。あの先生が口で言つてゐるやうに行けば、政治も一時だけの物ではない。一國ばかりの物ではない。あれを一層高尚にすれば、政治が大藝術になるねえ。君なんぞの理想と一致するだらうと思ふが、どうかねえ。」

木村は馬鹿馬鹿しいと思つて、一寸顏を蹙めたくなつたのをこらへてゐる。

そのうち停留場に來た。場末の常で、朝出て晩に歸れば、丁度滿員の車にばかり乘るやうになるのである。二人は赤い柱の下に、傘を竝べて立つてゐて、車を二臺も遣り過して、やつとの事で乘つた。

二人共吊革にぶら下がつた。小川はまだしや

べり足りないらしい。

「君。僕の藝術觀はどうだね。」

「僕はそんな事は考へない。」不精不精に木村が答へた。

「どう思つて遣つてゐるのだね。」

「どうも思はない。作りたいとき作る。まあ、食ひたいとき食ふやうなものだらう。」

「本能かね。」

「本能ぢやあない。」

「なぜ。」

「意識して遣つてゐる。」

「ふん」と云つて、小川は變な顏をして、なんと思つたか、それ切り電車を降りるまで默つてゐた。

小川に分かれて、木村は自分の部屋の前へ行つて、帽子掛に帽子を掛けて、傘を立てて置いた。まだ帽子は二つ三つしか掛かつてゐなかつた。

戸は開け放して、竹簾が垂れてある。お爲着せの白服を着た給仕の側を通つて、自分の机の處へ行く。先きへ出てゐるものも、まだ爲事には掛からずに、扇などを使つてゐる。「お早う」位を交換するものもある。默つて頭で會釋をするものもある。どの顏も蒼ざめた、元氣のない顏である。それも其筈である。一月に一度位づつ病氣をしないものはない。それをしないのは木村だけである。

木村は「非常持出」と書いた札の張つてある、煤色によごれた戸棚から、しめつぽい書類を出して來て、机の上へ二山に積んだ。低い方の山は、其日其日に處理して行くもので、その一番上に舌を出したやうに、赤札の張つてある一綴の書類がある。これが今朝課長に出さなくてはならない、急ぎの事件である。高い方の山は、相間相間にぼつぼつ遣れば好い爲事である。當り前の分擔事務の外に、字句の訂正を要する爲めに、餘所の局からも、木村の處へ來る書類がある。そんなのも急ぎでないのは此中にはひつてゐる。

書類を持ち出して置いて、椅子に掛けて、木村は例の車掌の時計を出して見た。まだ八時までに十分ある。課長の出勤するまでには四十分あるのである。

木村は高い山の一番上の書類を廣げて、讀んで見ては、小さい紙切れに糊板の上の糊を附けて張つて、それに何やら書き入れてゐる。紙切れは幾枚かを紙撚で繋いで、机の横側に掛けてあるのである。役所ではこれを附箋と云つてゐる。

木村はゆつくり構へて、絶えずごつごつと爲事をしてゐる。その間顏は始終晴々としてゐる。かういふ時の木村の心持は一寸說明しにくい。此男は何をするにも子供の遊んでゐるやうな氣になつてしてゐる。同じ「遊び」にも面白いのもあれば、詰まらないのもある。こんな爲事はその詰まらない遊びのやうに思つてゐる分である。役所の爲事は笑談ではない。政府の大機關の一小齒輪となつて、自分も廻轉してゐるのだといふことは、はつきり自覺してゐる。自覺してゐて、それを遣つてゐる心持が遊びのやうなのである。顏の晴々としてゐるのは、此心持が現れてゐるのである。

爲事が一つ片附くと、朝日を一本飲む。こんな時は木村の空想も惡戯をし出す事がある。分業といふものも、貧乏籤を引いたもののためには、隨分詰まらない事になるものだなどとも思ふ。併し不平は感じない。そんならと云つて、これが自分の運だと諦めてゐるといふ Fatalist らしい思想を持つてゐるのでもない。どうかすると、こんな事は罷めたらどうだらうなどとも思ふ。それから罷めた先きを考へて見る。今の身の上で、ランプの下で著作をするやうに、朝か

ら晩まで著作をすることになつたとして見る。此男は著作をするときも、子供が好きな遊びをするやうな心持になつてゐる。それは苦しい處がないといふ意味ではない。どんな sport をしたつて、障礙を凌ぐことはある。又藝術が笑談でないことを知らないのでもない。自分が手に持つてゐる道具も、眞の鉅匠大家の手に渡れば、世界を動かす作品をも造り出すものだとは自覺してゐる。自覺してゐながら、遊びの心持になつてゐるのである。ガンベッタの兵が、あるとき突撃をし掛けて鋒が鈍つた。ガンベッタが喇叭を吹けと云つた。そしたら進撃の譜は吹かないで、Réveil の譜を吹いた。イタリア人は生死の境に立つてゐても、遊びの心持がある。兎に角木村のためには何をするのも遊びである。そこで同じ遊びなら、好きな、面白い遊びの方が、詰まらない遊びより好いには違ひない。併しそれも朝から晩までしてゐたら、單調になつて厭きるだらう。今の詰まらない爲事にも、此單調を破るだけの功能はあるのである。

此爲事を罷めたあとで、著作生活の單調を破るにはどうしよう。それは社交もある、旅もある。併しそれには金がいる。人の魚を釣るのを見てゐるやうな態度で、交際社會に臨みたくはない。ゴルキイの樣な vagabondage をして愉快を感じるには、ロシア人のやうな遺傳でもなくては駄目らしい。矢張けちな役人の方が好いかも知れないと思つて見る。そしてさう思ふのが、別に絶望のやうな苦しい感じを伴ふわけでもないのである。

或時は空想が愈々放縱になつて、戰爭なんぞの夢も見る。喇叭は進撃の譜を奏する。高く擧げた旗を望んで驅歩をするのは、さぞ爽快だらうと思つて見る。木村は脚氣といふものをしたことがないが、小男で痩せてゐるので、徴兵に取られなかつた。それで戰爭に行つたことはない。併し人の話に、壯烈な進撃とは云つても、實は土嚢を推して匍匐して行くこともあると聞いてゐるのを思ひ出す。そして多少の興味を殺がれる。自分だつて其境に身を置いたら、土嚢を推して匍匐することは辭せない。併し壯烈だとか、爽快だとかいふ想像は薄らぐ。それから縱ひ戰爭に行くことが出來ても、輜重に編入せられて、運搬をさせられるかも知れないと思つて見る。自分だつて車の前に立たせられたら、挽きもしよう。後に立たせられたら、推しもしよう。併し壯烈や爽快とは一層縁遠くなると思ふのである。

或時は航海の夢も見る。屋の如き浪を凌いで、大洋を渡つたら、愉快だらう。地極の氷の上に國旗を立てるのも、愉快だらうと思つて見る。併しそれにも矢張分業があつて、蒸汽機關の火を焚かせられるかも知れないと思ふと、enthousiasme の夢が醒めてしまふ。

木村は爲事が一つ片附いたので、その一括の書類を机の向うに押し遣つて、高い山から又一括の書類を卸した。初のは半紙の罫紙であつたが、こん度のは紫板の西洋紙である。手の平にべたりと食つ附く。丁度物干竿と一しよに蛞蝓を攫んだやうな心持である。

此時までに五六人の同僚が次第に出て來て、いつか机が皆塞がつてゐた。八時の鐸が鳴つて暫くすると、課長が出た。

木村は課長がまだ腰を掛けないうちに、赤札の附いた書類を持つて行つて、少し隔たつた處に立つて、課長のゆつくり書類を portefeuille から出して、硯箱の蓋を取つて、墨を磨るのを見てゐる。墨を磨つてしまつて、偶然のやうにこつちへ向く。木村よりは三つ四つ歳の少い法學博士で、目附の緊まつた、餘地の少い、敏捷らしい顏に、金縁の目金を掛けてゐる。

「一昨日お命じの事件を」と云ひさして、書類を出

す。課長は受け取つて、ざつと讀んで見て、「これで好い」と云つた。

木村は重荷を卸したやうな心持をして、自分の席に歸つた。一度出して通過しない書類は、なかなか二度目位で滯りなく通過するものではない。三度も四度も直させられる。そのうちには向うでも種々に考へて見るので、最初云つた事とは多少違つて來る。とうとう手が附けられなくなつてしまふ。それで一度で通過するのを喜ぶのである。

席に歸つて見ると、茶が來てゐる。八時に出勤したとき一杯と、午後勤務のあるときは三時頃に一杯とは、默つてゐても、給仕が持つて來てくれる。色が附いてゐるだけで、味のない茶である。飲んでしまふと、茶碗の底に滓が澤山淀んでゐる。

木村は茶を飲んでしまふと、相變らずゆつくり構へて、絶間なくごつごつと爲事をする。低い方の山の書類の處理は、折々帳簿を出して照らし合せて見ることがあるばかりで、ぐんぐんはかが行く。三件も四件も煙草休なしに濟ましてしまふことがある。濟んだのは、檢印をして、給仕に持たせて、それぞれ廻す先きへ廻す。書類中には直ぐに課長の處へ持つて行くのもある。

その間には新しい書類が廻つて來る。赤札のは直ぐに取り扱ふ。その外はどの山かの下へ入れる。電報は大抵赤札と同じやうにするのである。

爲事をしてゐるうちに、急に暑くなつたので、ふいと、向うの窓を見ると、朝から灰色の空の見えてゐた處に、紫掛かつた暗色の雲がまろがつて居る。

同僚の顏を見れば、皆ひどく疲れた容貌をしてゐる。大抵下顎が弛んで垂れて、顏が心持長くなつてゐるのである。室内の濕つた空氣が濃くなつて、頭を壓すやうに感ぜられる。今のやうに特別に暑くなつた時でなくても、執務時間がやや進んでから、便所に行つた歸りに、廊下からはひると、惡い煙草の匂と汗の香とで噎せるやうな心持がする。それでも冬になつて、煖爐を焚いて、戸を締め切つてゐる時よりは、夏の此頃が遙かに増しである。

木村は同僚の顏を見て、一寸顏を蹙めたが、すぐに又晴々とした顏になつて、爲事に掛かつた。

暫くすると雷が鳴つて、大降りになつた。雨が窓にぶつ附かつて、恐ろしい音をさせる。部屋中のものが、皆爲事を置いて、窓の方を見る。木村の右隣の山田といふ男が云つた。

「むしむしすると思つたら、とうとう夕立が來ましたな。」

「さうですね」と云つて、晴々とした不斷の顏を右へ向けた。

山田は其顏を見て、急に思ひ附いたらしい樣子で、小聲になつて云つた。

「君はぐんぐん爲事を捗らせるが、どうもはたで見てゐると、笑談にしてゐるやうでならない。」

「そんな事はないよ」と、木村は恬然として答へた。

木村が人にこんな事を言はれるのは何遍だか知れない。此男の表情、言語、擧動は人にかういふ詞を催促してゐると云つても好い。役所でも先代の課長は不眞面目な男だと云つて、ひどく嫌つた。文壇では批評家が眞劒でないと云つて、けなしてゐる。一度妻を持つて、不幸にして別れたが、平生何かの機會で衝突する度に、「あなたはわたしを茶かしてばかし入らつしやる」と云ふのが、其細君の非難の主なるものであつた。

木村の心持には眞劒も木刀もないのである

が、あらゆる仕事に對する「遊び」の心持が、ノラでない細君にも、人形にせられ、おもちやにせられる不愉快を感じさせたのであらう。

　木村のためには、此の遊びの心持は「與へられたる事實」である。木村と往來してゐる或る青年文士は、「どうも先生には現代人の大事な性質が闕けてゐます、それは Nervosität です」と云つた。併し木村は格別それを不幸にも感じてゐないらしい。夕立のあとは又小降になつて餘り涼しくもならない。

　十一時半頃になると、遠い處に住まつてゐるものだけが、辨當を食ひに食堂へ立つ。木村は號砲が鳴るまでは仕事をしてゐて、それから一人で辨當を食ふことにしてゐる。

　二三人の同僚が食堂へ立つたとき、電話のベルが鳴つた。給仕が往つて暫く聞いてゐたが、「少々お待下さい」と云つて置いて、木村の處へ來た。

「日出新聞社のものですが、一寸電話口へお出下さいと申すことです。」

　木村が電話口に出た。

「もしもし。木村ですが、なんの御用ですか。」

「木村先生ですか。お呼立て申して済みません。あの應募脚本ですが、いつ頃御覽濟になりませうか。」

「さうですなあ。此頃忙しくて、まだ急には見られませんよ。」

「さやうですか。」なんと云はうかと、暫く考へてゐるらしい。「いづれ又伺ひます。何分宜しく。」

「さやうなら。」

「さやうなら。」

　微笑の影が木村の顔を掠めて過ぎた。そしてあの用箪笥の上から、當分脚本は降りないのだと、心の中で思つた。昔の木村なら、「あれはもう見ない事にしました」なんぞと云つて、電話で喧嘩を買つたのである。今は大分おとなしくなつてゐるが、彼の微笑の中には多少の Bosheit がある。併しこんな、けちな惡意では、ニイチエ主義の現代人にもなられまい。

　號砲が鳴つた。皆が時計を出して巻く。木村も例の車掌の時計を出して巻く。同僚はもうとつくに書類を片付けてゐて、どやどや退出する。木村は給仕と只二人になつて、ゆつくり書類を戸棚にしまつて、食堂へ行つて、ゆつくり辨當を食つて、それから汗臭い満員の電車に乘つた。

前口上 (KLABUND)

己は今机に向いて、
インキ壺にペンを衝つ込んで。
お祈を上げて、
詩を書いてゐる。

油のやうに滑に
前の句が後の句を生んで、句句互に相照す。
もつと魂が詩の中にあつたらなどと、
問うて見るのは、たまの事だ。

魂は己にちつとも苦痛を與へぬ。
魂は己とはまるで交渉なしでゐる。
我と我が尊さに安んじてゐる魂は、
襟で長椅子の上に寢てゐるのだ。

晩になると、己はボタンの穴に
ダリアの花を插して、魂を連れて散歩する。
己の名はスタニスラウスで、
魂の名はアマリイと云ふのだ。

（『沙羅の木』の「譯詩」より）

蛇

明け易い夏の夜に、なんだつてこんなさうざうしい家に泊り合はせたことかと思つて、己はうるさく頬のあたりに飛んで來る蚊を逐ひながら、二間の緣側から、せせこましく石を据ゑて、いろいろな木を植ゑ込んである奧の小庭を、ぼんやり眺めてゐる。

座布團の傍に蚊遣の土器が置いてあつて、青い烟が器に穿つてある穴から、絶えず立ち昇つて、風のない緣側で渦卷いて、身のまはりを繞つてゐるのに、蚊がうるさく顏へ來る。夕飯の饌に附けてあつた、厭な酒を二三杯飲んだので、息が酒の香がするからだらうかと思ふ。飲まなければ好かつたに、咽が乾いてゐたもんだから、つい飲んだのを後悔する。

ここまで案内をせられたとき、通つた間數を見ても、由緒のありげな、その割に人けの少な、大きな家の幾間かを隔てて、女ののべつにしやべつてゐる聲が、少しもと切れずに聞えてゐるのである。

恐ろしく早言で、詞は聞き取れない。土地の訛りの、にいと云ふ五通波が、珠數の數取りの珠のやうに、單調にしやべつてゐる詞の間々に、はつきりと聞える。東京でねえと云ふところである。ここは信州の山の中の或る驛である。

暫く耳を澄まして聞いてゐたが、相手の詞が少しも聞えない。女は一人でしやべつてゐるらしい。

挨拶に出た爺いさんが「病人がありまして、おやかましうございませう」と、あやまるやうに云つたが、まさか病人があんなにしやべり續けはすまい。

もしや狂人ではあるまいか。

詞は分からないが、語調で察して見れば、何事をか相手に哀願してゐるやうである。

遠いところでぼんぼん時計が鳴る。懷中時計を出して見れば、十時である。

月が小庭にさしてゐる。薄濁りのしたやうな、青白い月の光である。きのふ峠で逢つた雨は、日中の照りに乾いて、けふは道が好かつたに、小庭の苔はまだ濡れてゐる。「こちらが少しはお涼しうございませう」と云つて爺いさんに連れて來られた黃昏に、大きな蝦蟇が一疋いつまでも動かずに、をりをり口をぱくりと開けて、己の厭がる蚊を食つてゐたのを思ひ出して、手水鉢の向うを見たが、もうそこにはなんにもゐなかつた。

此緣側の附いてゐる八疊の間には、黑塗の太い床緣のある床の間があつて、黑ずんだ文人畫の山水が掛つてゐる。向うに締め切つてある襖には、杜少陵の詩が骨々しい大字で書いてある。何か物音がするやうに思つて、襖の方を見ると、丁度竹の筒を臺にした、薄暗いランプの附いてゐる向うの處で、「和氣日融々」と書いてある、襖が開いて、古帽子に袴を穿いた、さつきの爺いさんが出て來た。

「あちらへお床を延べました。いつでもお休みになりますなら。」

「さうさね。まだ寐られさうにないよ。お前詞が土地の人と違ふぢやないか。」

「へえ。若い時東京に奉公をいたしてをりましたから、いくらか違ひますのでございませう」と云つて、禿げた頭を掻いてゐる。

次第に家の内がしんとして來るので、例の女の聲が前よりもはつきり聞える。己は覺えず耳

を傾けると、爺いさんはその様子を見て、かう云つた。

「どうも誠に相済みません。さぞおやかましうございませう。」

爺いさんのかう云ふ様子が、只一通りの挨拶でなく、心から恐れ入つてゐるらしいので、己は却つて氣の毒に思つた。併しそれと同時に、聞けば聞く程怪しい物の言ひ振りなので、indiscret なやうだとは知りながら、どうした女だか聞いて見ようと決心した。

さうとは知らない爺いさんは、右の手尖だけを疊に衝いて、腰を浮かせた。そして己の顏を見て云つた。

「もう何も御用は。」

「さう。別になんにもないのだが、お前の方で忙しくないなら、少し聞いて見たいことがある。」

「いえ。どういたしまして。どうぞなんなりとも仰やつて下さいますやうに。」腰は又落ち着けられた。

「どうだい。ここいらでは夏でもそんなに遲くまで起きてはゐないのだらうが、かうしてお前を引き留めて、話をしてゐても好いかい。」

「へえ。こちらなぞでは、宿屋と違ひまして、割合ひに早く休みまするが、わたくしはどうせ今夜も通夜をいたしまするのでございます。」

「通夜をするといふのかね。それでは近い頃不幸か何かあつたのだね。」

「へえ。主人の母親が亡くなりましてから、明日で二七日になりますのでございます。」

「ふん。さつき聞けば病人があるさうだし、それに忌中では、さぞ宿なんぞを引き受けて、迷惑な事だらうね。實に氣の毒な事をした。併しもう御厄介になり序でだから爲方がない。縁側は少しは涼しいから、まあ、ちよつとこちらへ來て話したら好いだらう。」

「難有うございます。いえ。縣廳からお宿を仰せ付けられましたのは、此上もない名譽な事でございます。かういふところへお留め申しまして、さぞ御迷惑でございませうが、當家ではこれもお上へ對しまして、報恩の一つでございまするから。」

爺いさんはかう云ひながら、蚊遣の烟の斷え斷えになつたのを見て、袋戸棚から蚊遣香を出して取り換へて、その儘そこに据わつた。そして己が問ふ儘にぽつぽつこんな事を話した。

* * * * * *

この穗積といふ家は、素と驛で三軒と云はれた豪家の一つである。

亡くなつた先代の主人は多額納稅者で、貴族院議員になるところであつたが、病氣を申し立てて早く隱居してしまつた。佐久間象山先生を崇拜して、省諐錄を死ぬるまで傍に置いてゐた。爺いさんは、「なんとかいふ、歌を四角な字ばかりで書いてある本」だと云つた。

それでゐて佛法の信者であつた。なんでもこれからの人は西洋の事を知らなくては行けない。併し耶蘇教になつてはならない。耶蘇教の本を讀んで見たが、皆淺はかなもので、佛教の足元にも寄り附けないと云つてゐた。それで自分なぞにも、不斷佛教の難有い事を話して聞かせた。それは別にむづかしい事ではない。只四恩といふものを忘れずにゐれば、それで好いと云ふ事であつたと、爺いさんは云つた。なる程さつきも、國家の義務だとでもいふやうなところを、「報恩」だと云つたつけと、己は思ひ合せた。

先代の妻は實に優しい女で、夫の言ふことに何一つ背いた事がない。そして自分を始め、下下のものをいたはつて使つてくれた。あすで二七日になるといふのは、この女の事である。八十歳の長壽をして、こなひだ死ぬるまで、毎日

十人宛の乞食に二十五錢宛施すことになつてゐたので、近年は郡役所で貧窮のものを調べて、代り代り貰ひに來させることになつてゐた。若い奉公人の中には、「御隱居樣のお客樣」と云つて、蔭で笑ふものがあつたが、貰ひに來るものの感情を害するやうな事をしたものはない。

此夫婦の間にどうしたわけか子がないので、ひどく歎いてゐると、明治の初年に奥さんが四十になつて妊娠した。夫婦は大層喜んだが、長野から請待した産科のお醫者が、これまで四十の初産は手掛けたことがないと云つて、眉を顰めたさうである。

それでも無事に今の主人は生れた。小學校といふものが始めて出來た頃に、好く物が出來るといふので、縣廳までも知られてゐた。その頃自分は商人にならうと思つて、主人の取引をしてゐる、日本橋の問屋へ奉公に出た。小僧の時から奉公したのでなくては使はないといふのを、主人の保證で番頭の見習をさせて貰つた。

西南の戰爭の時、問屋が糧秣品を納めて、大分の利益を見てから、四五年立つた時であつた。いつか故參になつた自分は、女房を持たせて、暖簾を分けて貰ふことになつてゐると、先代の穗積の主人が卒中して、六十五歲で頓死した。聞き取りにくい詞で、「跡の事は淸吉に頼め」と云つたのが、御隱居さんにやつと分かつたといふことである。

自分は取るものも取りあへず、此土地へ歸つて來た。御隱居は五十を越してゐるのに、今の主人はやつと長野の中學校にはひつたばかりである。それからといふものは、穗積家一切の事を引き受けて、とうとう一生獨身で暮したのである。

好い子だと評判せられてゐた今の主人は、段段大きくなるに連れて、少し弱々しい靑年になつた。學校の成績は相變らず好い。是非學士にすると云つてゐた、先代の遺志を紹いで、御隱居が世話をしてゐられた。先代の心安くした住職のゐる或る寺に泊つて、中學に通つてゐる主人の、暑中休暇や暮の休暇に歸つて來るのを、御隱居は樂みにしてゐるのであつた。

その頃から今の主人はどうも體が惡い。少し無理な勉强をすると、眩暈がして卒倒する。講堂で卒倒して、同級のものに送られて寺へ歸ることなぞがあつた。

それでも中學は相應に卒業したが、東京へ出て、高等學校の試驗を受けることになつてから、度々落第して、次第に神經質になつた。無理な事をさせてはならないといふので、傍から勸めて早稻田に入れることにした。それからは諦めて餘り勉强をしない。

そのうち適齡になつたので、一年志願兵の試驗を受けたが、體格ではねられた。丁度日淸戰爭のある年に、早稻田の方が卒業になつて歸つた。

もう一人前の男になられたからと思つて、これまで形式的に御隱居に伺つてゐた穗積家の經營の事を、そろそろ相談し掛けて見ても、「淸吉、お前に任せるから、これまで通りに遣つてくれ」と云つて顧みようともしない。そんなら何か熱心にしてゐる事があるかと思つて、氣を附けて見ても、分からない。もう六十を越してゐた御隱居には優しくして、一家の事は自分に任せてゐるので、至極結構な御主人ではあるが、どうも張合のないやうな氣がして來た。

尤も不思議に思つたのは、東京から歸つた翌年、二十四歲で今の奥さんを迎へた時の事である。身代は穗積家より小さくても、同郡で舊家として知られてゐる家の娘に、これも東京に出て、高等女學校を卒業して歸つてゐるのがあつた。いつか越後の人が此娘を見て、自分の國は女の美しい國だが、お豐さんのやうに美しいの

は、見たことがないと云つたさうである。お豐さんの小さいとき、祭禮やなんぞで、穗積の今の主人と落ち合ふことがあると、穗積の千足さんとお豐さんとは好い夫婦だと、人が好く揶揄つたもので、兩家でなんの話もないのに、お豐さんが東京へ稽古に行けば、あれは千足さんの處に嫁入をするとき、負けてはならぬから行くのだなどといふ噂さへあつた。それが十八になつて、穗積の息子と前後して都から歸つたのである。そこで二人の結婚は殆ど周圍から餘儀なくせられたやうな有様であつた。今の主人は此相談を母にせられたとき、どうでも好いと云つた。母の方では、東京のやうな風儀の好くない土地にゐて、女の事に就いて何事もなかつた倅の、遠慮深い口から、どうでも好いといふのは、喜んで迎へる氣になつてゐるのだと思つて、直ぐに話を運ばせた。先方では待つてゐたらしかつた。殊に娘さん自身が待つてゐたらしいといふことさへ、媒人の口から穗積家へ傳へられた。見合ひの濟んだ頃には、珍らしい良緣だと、長野の新聞にまで出て、穗積の親類は勿論、知らぬ人まで讀めて、羨んで、妬んで、騷いでゐる中に、只清吉爺いさん一人は、若い主人の素振が腑に落ちないやうに思つた。それは自分に問屋の主人が女房を持たせると始めて云つた時の事に思ひ較べて見たからである。自分は其時もう三十五になつてゐた。それまで死に身になつて稼いだので、女と聞いて胸の轟く時は徒らに過ぎ去つて、心が落ち着いてゐた。それでも只女房を持たせられると聞いたばかりで、どこの誰といふ當てもないのに、二三日の間はそはそはして物が手に附かなかつた。主人のどうでも好いと云ふのが、隱居の思ふやうに、遠慮しての口上なら好いが、どうも素振まで、どうでも好ささうに見える。稼業の事もどうでも好い。女房の事もどうでも好い。そんな筈はないがと、自分だけは思つたのである。

婚禮は首尾好く濟んだ。翌朝の事である。朝飯の膳が並んだ。これまでは御隱居と若い主人とが上に据わる。自分は末座に連つて食べることになつてゐた。これは先代の主人が亡くなつた年からの慣來りである。御遺言もあり、並の奉公人でないからといふので、御隱居がかう極めたのである。後家の身の上ではあるが、もう六十になつてゐるから、遠慮はいるまいといふことであつた。親類には口のやかましい人もあつたが、かういふ事に非難も出なかつた。その朝は主人が眞中にゐて、兩側に御隱居と嫁さんとが据わつた。美しい嫁を貰つたのが嬉しいと見えて、御隱居が樂しげに主人に話し掛ける。主人が返事をする。嫁さんは下を向いて聞いてゐたが、ろくに物も食べずに、誰よりもさきに默つて席を立つてしまつた。自分は向ひで見てゐたが、多分極まりが惡いので立つたのであらうと思つた。御隱居も主人もさう思つたことであらう。

併し午も晩も同じやうに、嫁さんだけ早く席を起つた。その次の日からは、用事にかこつけて、嫁さんは遲れて食べに出る。主人がなぜかと思つて問ふと、どうもお母あ様のお話が嫌ひでならないと云ふ。これは穗積家に限つてある事で、食事の時は何か近郷であつた嘉言善行といふやうな事を話すことになつてゐる。先代の主人のした流義が殘つてゐるのである。丁度新聞紙の三面記事の反面のやうな話である。若しこれといふ出來事がないと、誰でも前日あたりに本か何かで讀んだとか、人に聞いたとかいふ話をする。そのために人の話を聞くにでも、本を讀むにでも、食事の時の話の種子になるやうな事柄に耳を留めて聞く、目を留めて見るといふことになつてゐるのである。

主人も不思議に思つた。嘉行善言なんぞとい

ふものは、人によつては聞いて面白くないといふこともあらう。併し別に聞くに堪へないといふわけのものではない。うるさくても辛抱してゐられない筈はない。なぜだらうと云ふので、嫁さんに問うて見た。さうすると、あんな儕輩の話は厭だと云つたさうである。

その事を聞いてから、御隠居は詞少なに、遠慮勝ちになつた。話されないとなると話して見たいやうに感ずるのが、人情の常である。それを我慢する。我慢するのが癖になつて、外の話のしたいのをも我慢する。

穂積家は沈黙の家になつた。

* * * * *

ここまで話を聞いた時、さつき清吉爺いさんの出て來た、一種和氣日融々と書いてある襖が、又すうと開いた。

見れば薩摩飛白に黒絽の羽織を着流した、四十恰好の品の好い男が出た。神經の興奮してゐるらしい顔で、かう云つた。

「わたくしは當家の主人で、穂積千足と申すものです。先生がお泊り下さいましたに、御挨拶にも出ずにゐて、突然お席に參つたのですから、定めて變なやつだと思召すでせうが、暫く二週間程前から氣分が優れませんで、休んでゐました。縣廳からの指圖で、町役場から通知のありました時も、忌中ではあるし、お斷り申さうかとも考へましたが、近來不爲合せな事が續きまして、この老人が大層心寂しく存じてゐる樣子でしたので、名高い學者の方に泊つてお貰ひ申したら、何か心得になるやうな事が伺はれるかも知れないと申すのです。それで御迷惑かとは存じながら、お宿をお引受け申しました。先刻から清吉が色々お話をいたした樣子ですが、わたくし共一家は實に悲慘な境遇に陷つてゐるのです。わたくしは今少し前に、お次まで參つてゐました。立聞きをしては惡いといふこと位は、わたくしも知つてゐます。併しお逢ひにも出ず、御挨拶にも出ずにゐて、突然伺ふのが、餘り不躾な樣ですから、躊躇してゐたのです。清吉ぢいの申す通り、わたくしは小さい時から母に苦勞を掛けてゐながら、母を寂しい家で死なせてしまひました。それは物質的な奉養は出來るだけ盡した積りです。併し母は晩年になつて、わたくし共夫婦のために、恐ろしく寂しい生活をしたのです。そんなら妻を離別したら好からうと、人は云ふでせうが、それがさう容易く行くものではありません。どう云ふわけか長い間子がなくてゐる夫婦ですから、それを離別する程容易な事はない樣です。併し民法もある世の中ですね。妻にこれと云つて際立つた惡いことはありません。母に優しくない。それだと云つて、別に手荒い事もしない。よしやわたくしが離別しようとしたつて、妻は勿論同意しません。妻の積りでは、かうして一日一日と過すうちに、いつかは樂しい生活に入る時が來るだらうと思つてゐたのです。妻がさう云ふ風で、合意が成り立たないのに、わたくしがどうしようと申したつて、里方の親類が承知しません。何をわたくしは理由にしませう。話をたんとしない。それが何の理由になりませう。無論法廷で爭ふ理由なんぞにはなりません。その上世間體といふものもあります。穂積といふ家は、信州では多少人も知つてゐる舊家です。その内輪を新聞に書かれたくはありません。さういふ次第で、とうとう十四五年といふものが立つてしまつたのです。清吉ぢいなんぞは、こんな律義な男で、それに非常に耐忍力が強いのですから、默つて内の事をしてゐてくれましたが、腹の中ではわたくしを意氣地がないやうに思つたり、妻に惑溺してゐるやうに思つたりしてゐるやうです。わたくしは

決して惑溺なぞはしてゐません。只薄志弱行だと云はれれば、それだけはいたし方がありません。それにはわたくしに極まつた人生觀が無いのが原因になつてゐます。わたくしは病身で大學にははひることが出來ませんでしたが、色色な學科を修めました。何かわたくしの生活の基礎になるやうな思想があつて、それを貫くためには、いかなるものをも犧牲にするといふ氣になられたならば、これまでにどうにか解決が附いたのでせう。世間の毀譽褒貶は顧みない。人が死んでも好い。自分が死んでも好いと云ふ事なら、解決が附いたのでせう。それが無いので、今にぐづぐづしてゐるのです。そして母はとうとう亡くなつてしまふ。妻もあんな風に氣が狂つてしまふ。わたくしもどうなるか知れません。」

主人の血走つた目は、ぢいつと己の顏に注がれてゐる。己はぞつとした。淸吉爺いさんは腕組をして俯向いてゐる。十一時の時計が鳴つた。

「そんなら、さつきまで聲のしてゐたのが奧さんですね」と、己は問うた。

「さうです。いつでも十一時前まではあの通りです。幻覺か何かがある樣子であんな工合にしやべり續けてゐて、草臥れ切るまでは寐ないのです。」

「なる程。淸吉さんの話では、奧さんが嘉言善行といふやうな話が嫌ひだと云つたのが、内輪の面白くなくなる初めだといふことでしたが、一體どういふわけだつたのですか。」

「實に馬鹿げ切つてゐるのです。妻の考では人間に眞の善人といふものは無い。若し有るとしても、廣い國に一人あるとか、千百年の間に一人出るとかいふもので、實際附き合つてゐる人の中には、そんなものの有りやうがない。善い事をしたり言つたりするといふのは、爲めにする所があるので、自分を利するのである。卑劣である。これに反して、惡い事は誰もしたい。併しそれを吹聽するには及ばないから、默つてゐる方が好い。よし又言ふにしても、惡い事の方なら、正直に言ふのであるから、虚僞でもなければ、卑劣でもないと云ふのです。わたくしは妻が優しい顏をして、美しい聲でそんな事を言ふのですから、馬鹿らしくもあり、不思議にも思つてゐました。そのうちに妙な事があつたのです。去年でしたか、東京にゐた頃、學校で心安くした友人が温泉へ來たといふので、わたくしの所へ寄りました。その男がかう云ふ事を言つたのです。妻を持つて子供が澤山出來た。ところが、其妻が authority といふものを一切認めぬ奴で、言ふ事を少しも聞かない。それでは親に濟むまいとか、お上に濟むまいとか、神樣に濟むまいとか、佛に濟むまいとか、天帝に濟むまいとか云はうとしても、どれも此女に摑まへさせる力草にはならない。どうも今の女學校を出た女は、皆無政府主義者で社會主義者を見たやうな思想を持つてゐるやうだと、さう云ふのです。其時はわたくしもこの男は隨分思ひ切つた事を云ふと思つて聞いてゐましたが、好く考へて見ると、わたくしの妻などもオソリチイは認めません。事によると、今の女は丸で動物のやうに、生存競爭の爲めには、あらゆるものと戰ふやうになつてゐるのではないでせうか。一體どうしてこんな風になつて來たのでせう。」

「打遣つて置けば、さうなるのです。赤ん坊は生れながらの egoist ですからね。」

「併しどうして男とは違ふのでせう。」

「それはなんと云つても、男の方は理性が勝つてゐるのでせう。君はさつき人生觀を持つてゐないと云はれたが、持つてゐないと云つても、社會に立つての利害關係は知つてゐる。利己

主義ばかりで推して行けば、自分の立場がなくなるといふことは知つてゐる。Dame は承認しない。切れ切れの教には服せない。併し利害の打算上から、むちやな事はしない。女だつて理性の勝つてゐる女は同じ事でせう。只そんな女は少いのです。人間は利害關係だけでも本當に分かつてゐれば、むちやな事は出來ない。基督の山の説教なんぞを高尚なやうに云ふが、あれも利害に愬へてゐるのですからねえ。」

「なる程さうです。赤ん坊は赤い物に目を刺戟せられれば、火をでも攫む。それと同じやうに、女は我慾を張り通して、自分が破滅するのですね。」

「まあ、そんな物でせう。だから、赤ん坊を泣かせて、火を攫ませないやうにする。赤ん坊を大人と一しよには扱はない。無政府主義者でも、社會主義者でも、下の下までの人間を理性のある人間と同一に扱はうとしてゐるから間違つてゐるのです。一般選擧權の問題でからがさうです。多數政治なんといふものも、將來これに代るべき、何等かの好い方法が立てば、棄てられてしまふかも知れません。詰まり égalité といふ思想が根本から間違つてゐるのですね。女だつて遠くが見えない爲めに、自分の破滅を招くやうな事をすれば、暴力で留めなくてはならないでせう。」

「先生はさうお思ひですか。獨逸では小學校の教師に鞭で生徒を打つことが許してある。それから夫たるものは妻を打つても好いことになつてゐるとか聞きましたが、先生のお考では、あれも差支がないのでせうか。」

己は覺えず微笑んだ。「わたしなんぞもそれ程まで踏み込んだ考を持つてゐるわけではありませんよ。先頃もフランスで誰やらが、英國の笞刑が好結果を奏してゐると新聞に書いた。すると、Bernard Shaw がわざわざ反駁書を出しました。兎に角打つなんといふことは非常手段ですから、教師だから打つても好い、夫だから打つても好いといふやうに、法則にして置くのは不都合でせう。」

「なる程さうでせう。兎に角わたくしも或る場合には打つても好いといふ位な、堅固な意志を持つてゐましたら、可哀相に妻をあんな物にはしませんでしたらう。ああ。亡くなつた母も氣の毒ですが、妻も實に氣の毒です。」

主人はぢつと考へ込んでゐる。

己は問うた。「一體氣の變になられたのは、どう云ふ動機からですか。」

腕組みをしてゐた清吉爺いさんが、手をほぐして膝を進めた。「實に申し上げにくい事でございますが、先生が理學博士で入らつしやると承りまして、お泊りを願ふことが出來ましたら、それを伺つて見たいと存じてをりましたのでございます。初七日の晩でございました。奧さんが線香を上げに、佛壇を覗かれますと、大きな蛇のとぐろを卷いてゐましたのが、鎌首を上げて、ぢつと奧さんのお顏を見たさうでございます。きやつと云つて倒れておしまひになりましたが、それから只今のやうにおなりになりました。わたくし共も驚きまして、若い者の中に好く蛇抔をいぢるものがございますので、攫まへさせまして、野原へ棄てに遣りました。主人は新しい學問もいたしてゐるものでございますから、なに、蛇といふものは氣壓なんぞを鋭敏に感ずるものだから、暴風雨の前なんぞには、馴れた棲家を出て、人家にはひり込むことがあるさうだ。佛壇にゐたのは全く偶然だと申してをりました。ところが、翌朝になつて佛壇を見ますると、蛇はちやんと歸つてゐるのでございます。わたくしも此度は前より一層驚きました。なんでもこんな事を下々に聞かせてはならない。旦那奧さんの御病氣になられたのでからが、御隱

居様を疎々しくなされた罰だなんぞと囁き合つてゐるらしい。こんな事を知つたら、なんといふか分からないと存じまするから、それからはお佛間には人を入れないやうにいたしてをります。實はこれにをられまする主人には、直ぐに相談いたしましたが、なに、あんなきたないものをいぢらなくともの事だ、いつか逃げてしまふだらうと申して取り合ひません。迷信とか申すものかと存じますので、誠に恥ぢ入りまする次第でございまするが、先生がお出でになりましたら、伺つて見たいと存じまして。」

主人は苦々しさうな顔をして、黙つてゐる。

「今でもゐるのか」と、己は爺いさんに問うた。

「はい。ぢつといたしてをります。」

「さうか」と云つて、己は話をする間飲んでゐた葉卷を棄てて立つた。「一寸わたしに見せて貰ひませう。」

爺いさんは先きに立つて案内する。佛間に入つて見れば、二間幅の立派な佛壇に、蝋燭が何本も立てて、大きい銅の香爐に線香が焚いてある。眞中にある白い位牌が新佛のであらう。香爐の向うを覗いて見ると、果して蛇がゐる。

大きな青大將である、ひどく營養が好いと見えて、肥滿してゐる。尾はづん切つたやうなのが、とぐろを卷いてゐる體の前の方へ五寸ばかり出てゐる。

己は佛壇の天井を仰いで見た。幅の廣い、立派な檜の板で張つてあるのが、いつか反り返つた儘に古びて、眞黒になつてゐる。

爺いさんは据わつて、口の内に佛名を唱へてゐる。主人は somnambule のやうな歩き付きをして、跡から附いて來たのか、己の背後にぼんやり立つてゐる。

己は爺いさんを顧みて云つた。「近い處に米のはひつた藏があるだらうね。」

「はい。直き一間先きに、戸前の廊下に續いてゐる藏がございます。」

「そこから出て來たのだ。動物は習慣に支配せられ易いもので、一度止まつた處には又止まる。外へ棄てても、元の棲家に歸る。何も不思議な事はないのですよ。兎に角此蛇はわたしが貰つて行かう。」

爺いさんは目を圓くした。「さやうなら、若い者を呼びまして。」

「いや。若い者なんぞに二度とは見せないといふ、お前さんの注意は至極好い。蛇位はわたしだつて摑まへる。毒のある蛇だと棒が一本いる。それで頸を押へて、項まで棒を轉がして行つて、頭の直ぐ根の處を摑むのです。これは俗に云ふ青大將だ。棒なんぞはいらない。わたしの荷物の置いてある處に、きのふ岩魚を入れて貰つた笊があります。あれを御苦勞ながら持つて來て下さい。」

爺いさんは直ぐに笊を持つて來た。

己は蛇の尾をしつかり攫んで、ずるずると引き出して、ちゆうに吊るした。蛇は頭を持ち上げて、自分の體を繩を綯つたやうに卷いたが、手までは屆かない。己は蛇を笊に入れて蓋をした。

丁度時計が十二時を打つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝立つ前に、己は主人の妻をどんな醫者が見てゐるかと思つて問うて見ると、長野から呼んだのも、精神病專門の人ではないと云つた。己はこれ程の大家の事であるから、是非東京から專門家を呼んで見せるが好いと勸告して置いた。

妄想

目前には廣々と海が横はつてゐる。

その海から打ち上げられた砂が、小山のやうに盛り上がつて、自然の堤防を形づくつてゐる。アイルランドとスコットランドとから起つて、ヨオロッパ一般に行はれるやうになつた dune といふ語は、かういふ處を斥して言ふのである。

その砂山の上に、ひよろひよろした赤松が簇がつて生えてゐる。餘り年を經た松ではない。

海を眺めてゐる白髪の主人は、此松の幾本かを切つて、松林の中へ嵌め込んだやうに立てた小家の一間に据わつてゐる。

主人が元と世に立ち交つてゐる頃に、別莊の眞似事のやうな心持で立てた此小家は、只二間と臺所とから成り立つてゐる。今据わつてゐるのは、東の方一面に海を見晴らした、六疊の居間である。

据わつてゐて見れば、砂山の岨が松の根に縱横に縫はれた、殆ど鉛直な、所々中窪に崩れた斷面になつてゐるので、只果もない波だけが見えてゐるが、此山と海との間には、一筋の河水と一帶の中洲とがある。

河は迂回して海に灌いでゐるので、岨の下では甘い水と鹹い水とが出合つてゐるのである。砂山の背後の低い處には、漁業と農業とを兼ねた民家が疎らに立つてゐるが、砂山の上には主人の家が只一軒あるばかりである。

いつやらの暴風に漁船が一艘跳ね上げられて、松林の松の梢に引つ懸つてゐたといふ話のある此砂山には、土地のものは恐れて住まない。

河は上總の夷灊川である。海は太平洋である。

秋が近くなつて、薄靄の掛かつてゐる松林の中の、清い砂を踏んで、主人はそこらを一廻りして來て、八十八といふ老僕の拵へた朝餉をしまつて、今自分の居間に据わつた處である。

あたりはひつそりしてゐて、人の物を言ふ聲も、犬の鳴く聲も聞えない。只朝風の浦の靜かな、鈍い、重くろしい波の音が、天地の脈搏のやうに聞えてゐるばかりである。

丁度徑一尺位に見える橙黄色の日輪が、眞向うの水と空と接した處から出た。水平線を基線にして見てゐるので、日はずんずん昇つて行くやうに感ぜられる。

それを見て、主人は時間といふことを考へる。生といふことを考へる。死といふことを考へる。

「死は哲學の爲めに、眞の氣息を嘘き込む神である」と Schopenhauer は云つた。主人は此語を思ひ出して、それはさう云つても好からうと思ふ。併し死といふものは、生といふものを考へずには考へられない。死を考へるといふのは生が無くなると考へるのである。

これまで種々の人の書いたものを見れば、大抵老が迫つて來るに連れて、死を考へるといふことが段々切實になると云つてゐる。主人は過去の經歷を考へて見るに、どうもさういふ人々とは少し違ふやうに思ふ。

* * * * *

自分がまだ二十代で、全く處女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出來事に反應して、内には嘗て挫折したことのない力を蓄へてゐた時の事であつた。自分は伯林にゐた。列強の均衡

を破つて、獨逸といふ野蠻な響の詞にどつしりした重みを持たせたヰルヘルム第一世がまだ位にをられた。今のヰルヘルム第二世のやうに、Daemonisch な威力を下に加へて、抑へて行かれるのではなくて、自然の重みの下に社會民政黨は喘ぎ悶えてゐたのである。劇場では Ernst von Wildenbruch が、あの Hohenzollern 家の祖先を主人公にした脚本を興行させて、學生仲間の青年の心を支配してゐた。

晝は講堂や Laboratorium で、生き生きした青年の間に立ち交つて働く。何事にも不器用で、癡重といふやうな處のある歐羅巴人を凌いで、輕捷に立ち働いて得意がるやうな心も起る。夜は芝居を見る。舞踏場にゆく。それから珈琲店に時刻を移して、歸り道には街燈だけが寂しい光を放つて、馬車を乘り廻す掃除人足が掃除をし始める頃にぶらぶら歸る。素直に歸らないこともある。

さて自分の住む宿に歸り着く。宿と云つても、幾竈もあるおほ家の入口の戸を、邪魔になる大鍵で開けて、三階か四階へ、蠟マッチを擦り擦り登つて行つて、やうやう chambre garnie の前に來るのである。

高机一つに椅子が二つ三つ。寢臺に箪笥に化粧棚。その外にはなんにもない。火を點して着物を脫いで、その火を消すと直ぐ、寢臺の上に横になる。

心の寂しさを感ずるのはかういふ時である。それでも神經の平穩な時は故鄕の家の樣子が俤に立つて來るに過ぎない。その幻を見ながら寢入る。Nostalgia は人生の苦痛の餘り深いものではない。

それがどうかすると寢附かれない。又起きて火を點して、爲事をして見る。爲事に興が乘つて來れば、餘念もなく夜を徹してしまふこともある。明方近く、外に物音がし出してから一寸寢ても、若い時の疲勞は直ぐ恢復することが出來る。

時としてはその爲事が手に附かない。神經が異樣に興奮して、心が澄み切つてゐるのに、書物を開けて、他人の思想の跡を辿つて行くのがもどかしくなる。自分の思想が自由行動を取つて來る。自然科學のうちで最も自然科學らしい醫學をしてゐて、exact な學問といふことを性命にしてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて來る。生といふものを考へる。自分のしてゐる事が、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思ふ。

生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ驅られてゐるやうに學問といふことに齷齪してゐる。これは自分に或る働きが出來るやうに、自分を爲上げるのだと思つてゐる。其目的は幾分か達せられるかも知れない。併し自分のしてゐる事は、役者が舞臺へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ驅られてばかりゐるために、その何物かが醒覺する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供から、勉強する學校生徒、勉強する官吏、勉強する留學生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顏をいつか洗つて、一寸舞臺から降りて、靜かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞臺監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め續けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が眞の生ではあるまいかと思はれる。併しその或る物は目を醒まさう醒まさうと思ひながら、又してはうとうとして眠つてしまふ。此頃折々切實に感ずる故鄕の戀しさなんぞも、浮草が波に搖られて遠い處へ行つて浮

いてゐるのに、どうかするとその搖れるのが根に響くやうな感じであるが、これは舞臺でしてゐる役の感じではない。併しそんな感じは、一寸頭を擧げるかと思ふと、直ぐに引つ込んでしまふ。

それとは違つて、夜寐られない時、こんな風に舞臺で勤めながら生涯を終るのかと思ふことがある。それからその生涯といふものも長いか短いか知れないと思ふ。丁度その頃留學生仲間が一人窒扶斯になつて入院して死んだ。講義のない時間に、Charité へ見舞に行くと、傳染病室の硝子越しに、寐てゐるところを見せて貰ふのであつた。熱が四十度を超過するので、毎日冷水浴をさせるといふことであつた。そこで自分は醫學生だつたので、どうも日本人には冷水浴は危險だと思つて、外のものにも相談して見たが、病院に入れて置きながら、その治療方鍼に容喙するのは不都合であらうし、よしや言つたところで採用せられはすまいといふので、傍觀してゐることになつた。そのうち或る日見舞に行くと昨夜死んだといふことであつた。その男の死顏を見たとき、自分はひどく感動して、自分もいつどんな病に感じて、こんな風に死ぬるかも知れないと、ふと思つた。それからは折々此儘伯林で死んだらどうだらうと思ふことがある。

さういふ時は、先づ故郷で待つてゐる二親がどんなに歎くだらうと思ふ。それから身近い種種の人の事を思ふ。中にも自分にひどく懷いてゐた、頭の毛のちぢれた弟の、故郷を立つとき、まだやつと歩いてゐたのが、毎日毎日兄いさんはいつ歸るかと問ふといふことを、手紙で言つてよこされてゐる。その弟が、若し兄いさんはもう歸らないと云はれたら、どんなにか歎くだらうと思ふ。

それから留學生になつてゐて、學業が成らずに死んでは濟まないと思ふ。併し抽象的にかう云ふ事を考へてゐるうちは、冷かな義務の感じのみであるが、一人一人具體的に自分の値遇の跡を尋ねて見ると、矢張身近い親戚のやうに、自分に Neigung からの苦痛、情の上の感じをさせるやうにもなる。

かういふやうに廣狹種々の social な繋累的思想が、次第もなく簇がり起つて來るが、それがとうとう individuell な自我の上に歸着してしまふ。死といふものはあらゆる方角から引つ張つてゐる絲の湊合してゐる、この自我といふものが無くなつてしまふのだと思ふ。

自分は小さい時から小説が好きなので、外國語を學んでからも、暇があれば外國の小説を讀んでゐる。どれを讀んで見てもこの自我が無くなるといふことは最も大いなる最も深い苦痛だと云つてある。ところが自分には單に我が無くなるといふことだけならば、苦痛とは思はれない。只刃物で死んだら、其刹那に肉體の痛みを覺えるだらうと思ひ、病や藥で死んだら、それぞれの病症藥性に相應して、窒息するとか痙攣するとかいふ苦みを覺えるだらうと思ふのである。自我が無くなる爲めの苦痛は無い。

西洋人は死を恐れないのは野蠻人の性質だと云つてゐる。自分は西洋人の謂ふ野蠻人といふものかも知れないと思ふ。さう思ふと同時に、小さい時二親が、侍の家に生れたのだから、切腹といふことが出來なくてはならないと度々諭したことを思ひ出す。その時も肉體の痛みがあるだらうと思つて、其痛みを忍ばなくてはなるまいと思つたことを思ひ出す。そしていよいよ所謂野蠻人かも知れないと思ふ。併しその西洋人の見解が尤もだと承服することは出來ない。

そんなら自我が無くなるといふことに就いて、平氣でゐるかといふに、さうではない。その自我といふものが有る間に、それをどんな物

だとはつきり考へても見ずに、知らずに、それを無くしてしまふのが口惜しい。殘念である。漢學者の謂ふ醉生夢死といふやうな生涯を送つてしまふのが殘念である。それを口惜しい、殘念だと思ふと同時に、痛切に心の空虚を感ずる。なんともかとも言はれない寂しさを覺える。

それが煩悶になる。それが苦痛になる。

自分は伯林の Garçon logis の寐られない夜なかに、幾度も此苦痛を嘗めた。さういふ時は自分の生れてから今までした事が、上邊の徒ら事のやうに思はれる。舞臺の上の役を勤めてゐるに過ぎなかつたといふことが、切實に感ぜられる。さういふ時にこれまで人に聞いたり本で讀んだりした佛教や基督教の思想の斷片が、次第もなく心に浮んで來ては、直ぐに消えてしまふ。なんの慰藉をも與へずに消えてしまふ。さういふ時にこれまで學んだ自然科學のあらゆる事實やあらゆる推理を繰り返して見て、どこかに慰藉になるやうな物はないかと搜す。併しこれも徒勞であつた。

或るかういふ夜の事であつた。哲學の本を讀んで見ようと思ひ立つて、夜の明けるのを待ち兼ねて、Hartmann の無意識哲學を買ひに行つた。これが哲學といふものを覗いて見た初で、なぜハルトマンにしたかといふと、その頃十九世紀は鐵道とハルトマンの哲學とを齎したと云つた位、最新の大系統として賛否の聲が喧しかつたからである。

自分に哲學の難有みを感ぜさせたのは錯迷の三期であつた。ハルトマンは幸福を人生の目的だとすることの不可能なのを證する爲めに、錯迷の三期を立ててゐる。第一期では人間が現世で福を得ようと思ふ。少壯、健康、友誼、戀愛、名譽といふやうに數へて、一々その錯迷を破つてゐる。戀なんぞも主に苦である。福は性欲の根を斷つに在る。人間は此福を犧牲にして、纔かに世界の進化を翼成してゐる。第二期では福を死後に求める。それには個人としての不滅を前提にしなくてはならない。ところが個人の意識は死と共に滅する。神經の幹はここに絶たれてしまふ。第三期では福を世界進程の未來に求める。これは世界の發展進化を前提とする。ところが世界はどんなに進化しても、老病困厄は絶えない。神經が鋭敏になるから、それを一層切實に感ずる。苦は進化と共に長ずる。初中後の三期を閲し盡しても、幸福は永遠に得られないのである。

ハルトマンの形而上學では、此世界は出來るだけ善く造られてゐる。併し有るが好いか無いが好いかと云へば、無いが好い。それを有らせる根元を無意識と名付ける。それだからと云つて、生を否定したつて、世界は依然としてゐるから駄目だ。現にある人類が首尾好く滅びても、又或る機會には次の人類が出來て、同じ事を繰り返すだらう。それよりか人間は生を肯定して、己を世界の過程に委ねて、甘んじて苦を受けて、世界の救拔を待つが好いと云ふのである。

自分は此結論を見て頭を掉つたが、錯迷打破には強く引き附けられた。Disillusion にはひどく同情した。そしてハルトマン自身が錯迷の三期を書いたのは、Max Stirner を讀んで考へた上の事であると自白してゐるのを見て、スチルネルを讀んだ。それから無意識哲學全體の淵源だといふので、溯つて、Schopenhauer を讀んだ。

スチルネルを讀んで見ると、ハルトマンが紳士の態度で言つてゐる事を、無頼漢の態度で言つてゐるやうに感ずる。そしてあらゆる錯迷を破つた跡に自我を殘してゐる。世界に恃むに足るものは自我の外には無い。それを先きから先きへと考へると、無政府主義に歸着しなくては已まない。

自分はぞつとした。

ショオペンハウエルを讀んで見れば、ハルトマン・ミスス・進化論であつた。世界は有るよりは無い方が好いばかりではない。出來るだけ惡く造られてゐる。世界の出來たのは失錯である。無の安さが誤まつて攪亂せられたに過ぎない。世界は認識によつて無の安さに歸るより外はない。一人一人の人は一箇一箇の失錯で、有るよりは無いが好いのである。個人の不滅を欲するのは失錯を無窮にしようとするのである。個人は滅びて人間といふ種類が殘る。この滅びないで殘るものを、滅びる寫象の反對に、廣義に、意志と名付ける。意志が有るから、無は絕對の無でなくて、相待の無である。意志が Kant の物その物である。個人が無に歸るには、自殺をしたつて種類が殘る。物その物が殘る。そこで死ぬるまで生きてゐなくてはならないといふのである。ハルトマンの無意識といふものは、この意志が一變して出來たのであつた。

自分はいよいよ頭を掉つた。

* * * * * *

兎角する内に留學三年の期間が過ぎた。自分はまだ均勢を得ない物體の動搖を心の中に感じてゐながら、何の師匠を求めるにも便りの好い、文化の國を去らなくてはならないことになつた。生きた師匠ばかりではない。相談相手になる書物も、遠く足を運ばずに大學の圖書館に行けば大抵間に合ふ。又買つて見るにも注文してから何箇月目に來るなどといふ面倒は無い。さういふ便利な國を去らなくてはならないことになつた。

故鄕は戀しい。美しい、懷かしい夢の國として故鄕は戀しい。併し自分の研究しなくてはならないことになつてゐる學術を眞に研究するには、その學術の新しい田地を開墾して行くには、まだ種々の要約の闕けてゐる國に歸るのは殘惜しい。敢て「まだ」と云ふ。日本に長くゐて日本を底から知り拔いたと云はれてゐる獨逸人某は、此要約は今闕けてゐるばかりでなくて、永遠に東洋の天地には生じて來ないと宣告した。東洋には自然科學を育てて行く雰圍氣は無いのだと宣告した。果してさうなら、帝國大學も、傳染病研究所も、永遠に歐羅巴の學術の結論丈を取り續ぐ場所たるに過ぎない筈である。かう云ふ判斷は、ロシアとの戰爭の後に、歐羅巴の當り狂言になつてゐた Taifun なんぞにも現れてゐる。併し自分は日本人を、さう絕望しなくてはならない程、無能な種族だとも思はないから、敢て「まだ」と云ふ。自分は日本で結んだ學術の果實を歐羅巴へ輸出する時もいつかは來るだらうと、其時から思つてゐたのである。

自分はこの自然科學を育てる雰圍氣のある、便利な國を跡に見て、夢の故鄕へ旅立つた。それは勿論立たなくてはならなかつたのではある。が、立たなくてはならないといふ義務のために立つたのではない。自分の願望の秤も、一方の皿に便利な國を載せて、一方の皿に夢の故鄕を載せたとき、便利の皿を吊つた緖をそつと引く、白い、優しい手があつたにも拘らず、慥かに夢の方へ傾いたのである。

シベリア鐵道はまだ全通してゐなかつたので、印度洋を經て歸るのであつた。一日行程の道を往復しても、往きは長く、復りは短く思はれるものであるが、四五十日の旅行をしても、さういふ感じがある。未知の世界へ希望を懷いて旅立つた昔に比べて寂しく又早く思はれた航海中、籐の寢椅子に身を橫へながら、自分は行李にどんなお土產を持つて歸るかといふことを考へた。

自然科學の分科の上では、自分は結論だけを持つて歸るのではない。將來發展すべき萌芽をも持つてゐる積りである。併し歸つて行く故郷には、その萌芽を育てる雰圍氣が無い。少くもまだ無い。その萌芽も徒らに枯れてしまひはすまいかと氣遣はれる。そして自分は fatalistisch な、鈍い、陰氣な感じに襲はれた。

そしてこの陰氣な闇を照破する光明のある哲學は、我行李の中には無かつた。その中に有るのは、ショオペンハウエル、ハルトマン系の厭世哲學である。現象世界を有るよりは無い方が好いとしてゐる哲學である。進化を認めないではない。併しそれは無に醒覺せんがための進化である。

自分は錫蘭で、赤い格子縞の布を、頭と腰とに巻き附けた男に、美しい、青い翼の鳥を買はせられた。籠を提げて舟に歸ると、フランス舟の乘組員が妙な手附きをして、「Il ne vivra」と云つた。美しい、青い鳥は、果して舟の横濱に着くまでに死んでしまつた。それも果敢ない土産であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

自分は失望を以て故郷の人に迎へられた。それに無理も無い。自分のやうな洋行歸りはこれまで例の無い事であつたからである。これまでの洋行歸りは、希望に輝く顏をして、行李の中から道具を出して、何か新しい手品を取り立てて御覽に入れることになつてゐた。自分は丁度その反對の事をしたのである。

東京では都會改造の議論が盛んになつてゐて、アメリカのAとかBとかの何號町かにある、獨逸人の謂ふ Wolkenkratzer のやうな家を建てたいと、ハイカラア連が云つてゐた。その時自分は「都會といふものは、狹い地面に多く人が住むだけ人死が多い、殊に子供が多く死ぬる、今まで横に並んでゐた家を、竪に積み累ねるよりは、上水や下水でも改良するが好からう」と云つた。又建築に制裁を加へようとする委員が出來てゐて、東京の家の軒の高さを一定して、整然たる外觀の美を成さうと云つてゐた。その時自分は、そんな兵隊の並んだやうな町は美しくは無い、強ひて西洋風にしたいなら、寧ろ反對に軒の高さどころか、あらゆる建築の樣式を一軒づつ別にさせて、ヱネチアの町のやうに參差錯落たる美觀を造るやうにでも心掛けたら好からう」と云つた。

食物改良の議論もあつた。米を食ふことを廢めて、澤山牛肉を食はせたいと云ふのであつた。その時自分は「米も魚もひどく消化の好いものだから、日本人の食物は昔の儘が好からう、尤も牧畜を盛んにして、牛肉も食べるやうにするのは勝手だ」と云つた。

假名遣改良の議論もあつて、コイスチヨーワガナツといふやうな事を書かせようとしてゐると、「いやいや、Orthographie はどこの國にもある、矢張コヒステフワガナハの方が宜しからう」と云つた。

そんな風に、人の改良しようとしてゐる、あらゆる方面に向つて、自分は本の杢阿彌説を唱へた。そして保守黨の仲間に逐ひ込まれた。洋行歸りの保守主義者は、後には別な動機で流行し出したが、元祖は自分であつたかも知れない。

そこで學んで來た自然科學はどうしたか。歸つた當座一年か二年は Laboratorium にはひつてゐて、ごつごつと馬鹿正直に働いて、本の杢阿彌説に根據を與へてゐた。正直に試驗して見れば、何千年といふ間滿足に發展して來た日本人が、そんなに反理性的生活をしてゐよう筈はない。初から知れ切つた事である。

さてそれから一歩進んで、新しい地盤の上に新しい Forschung を企てようといふ段にな

ると、地位と境遇とが自分を爲事場から撥ね出した。自然科學よ、さらばである。

勿論自然科學の方面では、自分なんぞより有力な友達が大勢あつて、跡に殘つて奮鬪してゐてくれるから、自分の撥ね出されたのは、國家のためにも、人類の爲めにもなんの損失にもならない。

只奮鬪してゐる友達には氣の毒である。依然として雰圍氣の無い處で、高壓の下に働く潛水夫のやうに喘ぎ苦んでゐる。雰圍氣の無い證據には、まだ Forschung といふ日本語も出來てゐない。そんな概念を明確に言ひ現す必要を、社會が感じてゐないのである。自慢でもなんでもないが、「業績」とか「學問の推挽」とか云ふやうな造語を、自分が自然科學界に置土產にして來たが、まだ Forschung といふ意味の簡短で明確な日本語は無い。研究なんといふぼんやりした語は、實際役に立たない。載籍調べも研究ではないか。

* * * * * *

かう云ふ閲歷をして來ても、未來の幻影を逐うて、現在の事實を蔑にする自分の心は、まだ元の儘である。人の生涯はもう下り坂になつて行くのに、逐うてゐるのはなんの影やら。

「奈何にして人は己を知ることを得べきか。省察を以てしては決して能はざらむ。されど行爲を以てしては或は能くせむ。汝の義務を果さむと試みよ。やがて汝の價値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。」これは Goethe の詞である。

日の要求を義務として、それを果して行く。これは丁度現在の事實を蔑にする反對である。自分はどうしてさう云ふ境地に身を置くことが出來ないだらう。

日の要求に應じて能事畢るとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出來ない。自分は永遠なる不平家である。どうしても自分のゐない筈の所に自分がゐるやうである。どうしても灰色の鳥を青い鳥に見ることが出來ないのである。道に迷つてゐるのである。夢を見てゐるのである。夢を見てゐて、青い鳥を夢の中に尋ねてゐるのである。なぜだと問うたところで、それに答へることは出來ない。これは只單純なる事實である。自分の意識の上の事實である。

自分は此儘で人生の下り坂を下つて行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知つて居る。

併しその死はこはくはない。人の說に、老年になるに從つて增長するといふ「死の恐怖」が、自分には無い。

若い時には、この死といふ目的地に達するまでに、自分の眼前に橫はつてゐる謎を解きたいと、痛切に感じたことがある。その感じが次第に痛切でなくなつた。次第に薄らいだ。解けずに橫はつてゐる謎が見えないのではない。見えてゐる謎を解くべきものだと思はないのでもない。それを解かうとしてあせらなくなつたのである。

その頃自分は Philipp Mainlaender が事を聞いて、その男の書いた救拔の哲學を讀んで見た。

此男は Hartmann の迷の三期を承認してゐる。ところであらゆる錯迷を打ち破つて置いて、生を肯定しろと云ふのは無理だと云ふのである。これは皆迷だが、死んだつて駄目だから、迷を追つ掛けて行けとは云はれない筈だと云ふのである。人は最初に遠く死を望み見て、恐怖して面を背ける。次いで死の廻りに大きい圈を畫いて、震慄しながら步いてゐる。その圈が漸く小くなつて、とうとう疲れた腕を死の項に

投げ掛けて、死と目と目を見合はす。そして死の目の中に平和を見出すのだと、マインレンデルは云つてゐる。

さう云つて置いて、マインレンデルは三十五歳で自殺したのである。

自分には死の恐怖が無いと同時にマインレンデルの「死の憧憬」も無い。

死を怖れもせず、死にあこがれもせずに、自分は人生の下り坂を下つて行く。

＊　＊　＊　＊　＊

謎は解けないと知つて、解からうとしてあせらないやうにはなつたが、自分はそれを打ち棄てて顧みずにはゐられない。宴會嫌ひで世に謂ふ道樂といふものがなく、碁も打たず、象棋も差さず、球も撞かない自分は、自然科學の爲事場を出て、手に試驗管を持たなくなつてから、稀に畫や彫刻を見たり、音樂を聽いたりする外には、境遇の與へる日の要求を果した間々に、本を讀むことを餘儀なくせられた。

ハルトマンは人間のあらゆる福を錯迷として打破して行く間に、こんな意味の事を言つてゐた。大抵人の幸福と思つてゐる物に、酒の二日醉をさせるやうに跡腹の病めないものは無い。それの無いのは、只藝術と學問との二つだけだと云ふのである。自分は丁度此二つの外にはする事がなくなつた。それは利害上に打算して、跡腹の病めない事をするのではない。跡腹の病める、あらゆる福を生得好かないのである。

本は隨分讀んだ。そしてその讀む本の種類は、爲事場を出てから、必然の結果でがらりと變つた。

西洋にゐた時から、Archive とか Jahresberichte とか云ふやうな、專門の學術雜誌を初巻から揃へて十五六種も取つてゐたところが、爲事場に出ないことになつて見れば、實驗の細かい記錄なんぞを調べる必要がなくなつた。元來かう云ふ雜誌は學校や圖書館で買ふもので、個人の買ふものではなかつたのを、政府がどれだけ雜誌に金を出してくれるやら分からないと思ふのと、自分がどこで爲事をするやうになるやら分からないと思ふのとで、數千巻買つて持つてゐたが、自分は其中で專門學科の沿革と進歩とを見るに最も便利な年報二三種を殘して置いて、跡は悉く官の學校に寄附してしまつた。

そしてその代りに哲學や文學の書物を買ふことにした。それを時間の得られる限り讀んだのである。

只その讀み方が、初めハルトマンを讀んだ時のやうに、饑ゑて食を貪るやうな讀み方ではなくなつた。昔世にもてはやされてゐた人、今世にもてはやされてゐる人は、どんな事を言つてゐるかと、譬へば道を行く人の顏を辻に立つて冷澹に見るやうに見たのである。

冷澹には見てゐたが、自分は辻に立つてゐて、度々帽を脫いだ。昔の人にも今の人にも、敬意を表すべき人が大勢あつたのである。

帽は脫いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかつた。多くの師には逢つたが、一人の主には逢はなかつたのである。

自分は度々此脫帽によつて誤解せられた。自然科學を修めて歸つた當座、食物の議論が出たので、當時の權威者たる Voit の標準で駁擊した時も、或る先輩が「そんならフォイトを信仰してゐるか」と云ふと、自分はそれに答へて、「必ずしもさうでは無い、姑くフォイトの壘に據つて敵に當るのだ」と云つて、ひどく先輩に冷かされた。自分は一時の權威者としてフォイトに脫帽したに過ぎないのである。それと丁度同じ事で、一頃藝術の批評に口を出して、ハルトマンの美學を根據にして論じてゐると、或る後進の英雄が云つた。「ハルトマンの美學はハルト

マンの無意識哲學から出てゐる。あの美學を根據にして論ずるには、先づ無意識哲學を信仰してゐなくてはならないと云つた。なる程ハルトマンは自家の美學を自家の世界觀に結び附けてはゐたが、姑くその連鎖を斷つてしまつたとして見ても、彼の美學は當時最も完備したものであつて、而も創見に富んでゐた。自分は美學の上で、矢張一時の權威者としてハルトマンに降伏したに過ぎないのである。ずつと後になつてから、ハルトマンの世界觀を離れて、彼の美學の存立してゐられる、立派な證據が提供せられた。ハルトマン以後に出た美學者の本をどれでも開けて見るが好い。きつと美の Modification と云ふものを說いてゐる。あれはハルトマンが始めたのでハルトマンの前には無かつた。それを誰も彼も說いてゐて、ハルトマンのハの字も言はずにゐる。默殺してゐるのである。

それは兎に角、辻に立つ人は多くの師に逢つて、一人の主にも逢はなかつた。そしてどんなに巧みに組み立てた形而上學でも、一篇の抒情詩に等しいものだと云ふことを知つた。

* * * * * *

形而上學と云ふ、和蘭寺院樂の譜律のやうな組立てに倦んだ自分の耳に、或時ぎれぎれの Aphorismen の旋律が聞えて來た。

生の意志を挫いて無に入らせようとするショオペンハウエルの Quietive に服從し兼ねてゐた自分の意識は、或時懵眠の中から鞭うち起された。

それは Nietzsche の超人哲學であつた。

併しこれも自分を養つてくれる食餌ではなくて、自分を醉はせる酒であつた。

過去の消極的な、利他的な道德を家畜の群の道德としたのは痛快である。同時に社會主義者の四海同胞觀を、あらゆる特權を排斥する、愚な、とんまな群の道德としたのも、無政府主義者の跋扈を、歐羅巴の街に犬が吠えてゐると罵つたのも面白い。併し理性の約束を棄てて、權威に向ふ意志を文化の根本に置いて、門閥のため、自我のために、毒藥と匕首とを用ゐることを憚らない Cesare Borgia を、君主の道德の典型としたのなんぞを、眞面目に受け取るわけには行かない。その上ハルトマンの細かい倫理說を見た目には、所謂評價の革新さへ幾分の新しみを殺がれてしまつたのである。

そこで死はどうであるか。「永遠なる再來」は慰藉にはならない。Zarathustra の末期に筆を下し兼ねた作者の情を、自分は憐んだ。

それから後にも Paulsen の流行などと云ふことも閱して來たが、自分は一切の折衷主義に同情を有せないので、そんな思潮には觸れずにしまつた。

* * * * * *

昔別莊の眞似事に立てた、膝を容れるばかりの小家には、佛者の百一物のやうになんの道具も只一つしか無い。

それに主人の翁は壁といふ壁を書架にして、棚といふ棚を皆書物にしてゐる。

そして世間と一切の交通を絕つてゐるらしい主人の翁に、西洋から書物の小包が來る。彼が生きてゐる間は、小さいながら財產の全部を保管してゐる Bank の手で、利足の大部分が西洋の書肆へ送られるのである。

主人は老いても黑人種のやうな視力を持つてゐて、世間の人が懷かしくなつた故人を訪ふやうに、古い本を讀む。世間の人が市に出て、新しい人を見るやうに新しい本を讀む。

倦めば砂の山を步いて松の木立を見る。砂の濱に下りて海の波瀾を見る。

僕八十八の勤める野菜の膳に向つて、飢を

凌ぐ。

　書物の外で、主人の翁の翫んでゐるのは、小さい Loupe である。砂の山から摘んで來た小さい草の花などを見る。その外 Zeiss の顯微鏡がある。海の雫の中にゐる小さい動物などを見る。Merz の望遠鏡がある。晴れた夜の空の星を見る。これは翁が自然科學の記憶を呼び返す、折々のすさびである。

　主人の翁はこの小家に來てからも幻影を追ふやうな昔の心持を無くしてしまふことは出來ない。そして既往を回顧してこんな事を思ふ。日の要求に安んぜない權利を持つてゐるものは、恐らくは只天才ばかりであらう。自然科學で大發明をするとか、哲學や藝術で大きい思想、大きい作品を生み出すとか云ふ境地に立つたら、自分も現在に滿足したのではあるまいか。自分にはそれが出來なかつた。それでから云ふ心持が附き纏つてゐるのだらうと思ふのである。

　少壯時代に心の田地に卸された種子は、容易に根を絕つことの出來ないものである。冷眼に哲學や文學の動搖を見てゐる主人の翁は、同時に重い石を一つ一つ積み疊ねて行くやうな科學者の勞作にも、餘所ながら目を附けてゐるのである。

Revue des Deux Mondes の主筆をしてゐた舊教徒 Brunetière が、科學の破產を說いてから、幾多の歲月を閱しても、科學はなかなか破產しない。凡ての人僞のものの無常の中で、最も大きい未來を有してゐるものの一つは、矢張科學であらう。

　主人の翁はそこで又こんな事を思ふ。人間の大厄難になつてゐる病は、科學の力で豫防もし治療もすることが出來る樣になつて來た。種痘で痘瘡を防ぐ。人工で培養した細菌やそれを種ゑた動物の血淸で、窒扶斯を防ぎ實扶的里を直すことが出來る。Pest のやうな猛烈な病も、病原菌が發見せられたばかりで、豫防の見當は附いてゐる。癩病も病原菌だけは知れてゐる。結核も、Tuberculin が豫期せられた功を奏せないでも、防ぐ手掛りが無いこともない。癌のやうな惡性腫瘍も、もう動物に移し植ゑることが出來て見れば、早晩豫防の手掛りを見出すかも知れない。近くは梅毒が Salvarsan で直るやうになつた。Elias Metschnikoff の樂天哲學が、未來に屬してゐる希望のやうに、人間の命をずつと延べることも、或は出來ないには限らないと思ふ。

　かくして最早幾何もなくなつてゐる生涯の殘餘を、見果てぬ夢の心持で、死を怖れず、死にあこがれずに、主人の翁は送つてゐる。

　その翁の過去の記憶が、稀に長い鎖のやうに、刹那の間に何十年かの跡を見渡させることがある。さう云ふ時は翁の炯々たる目が大きく睜られて、遠い遠い海と空とに注がれてゐる。

　これはそんな時ふと書き棄てた反古である。

夏の盛 (DEHMEL)

わが故鄕を日が染める、黃金色に。
高穗が熟してふくれる、パンの溫さに。
黃金色であつた子供時代と同じに。
大地よ。われ汝に謝す。

燕はわれを呼ぶ、瑠璃色の空へ。
白雲は光の上に光を積む塔の高さに。
瑠璃色であつた靑年時代と同じに。
太陽よ。われ汝に謝す。

(『沙羅の木』の「譯詩」より)

心中

お金がどの客にも一度はきつとする話であつた。どうかして間違つて二度話し掛けて、その客に「ひゆうひゆうと云ふのだらう」なんぞと、先を越して云はれようものなら、お金の悔やしがりやうは一通りではない。なぜと云ふに、あの女は一度來た客を忘れると云ふことはないと云つて、ひどく自分の記憶を恃んでゐたからである。

それを客の方から賴んで二度話して貰つたものは、恐らくは僕一人であらう。それは好く聞いて覺えて置いて、いつか書かうと思つたからである。

お金はあの頃いくつ位だつたかしら。「をばさん、今晩は」なんと云ふと、「まあ、あんまり可哀さうぢやありませんか」と眞面目に云つて、救を求めるやうに一座を見渡したものだ。「おい、萬年新造」と云ふと、「でも新造だけは難有いわねえ」と云つて、心から嬉しいのを隱し切れなかつたやうである。兎に角三十は慥かに越してゐた。

僕は思ひ出しても可笑しくなる。お金は妙な癖のある奴だつた。妙な癖だとは思ひながら、あいつのゐないところで、その癖をはつきり思ひ浮べて見ようとしても、どうも分からなかつた。併し度々見るうちに、僕はとうとう覺えてしまつた。お金を知つてゐる人は澤山あるが、こんな事をはつきり覺えてゐるのは、これも矢つ張僕一人かも知れない。癖と云ふのはかうである。

お金は客の前へ出ると、なんだか一寸坐わつても直ぐに又立たなくてはならないと云ふやうな、落ち着かない坐わりやうをする。それが隨分長く坐わつてゐる時でもさうである。そしてその客の親疎によつて、「あなた大層お見限りで」とか、「どうなすつたの、鼬の道はひどいわ」とか云ひながら、左の手で右の袂を撮んで前に投げ出す。その手を吭の下に持つて行つて襟を直す。直すかと思ふと、その手を下へ引くのだが、その引きやうが面白い。手が下まで下りて來る途中で、左の乳房を押へるやうな運動をする。さて下りたかと思ふと、その手が直ぐに又上がつて、手の甲が上になつて、鼻の下を右から左へ横に通り掛かつて、途中で留まつて、口を掩ふやうな恰好になる。手をかう云ふ位置に置いて、いつでも何かしやべり續けるのである。尤も乳房を押へるやうな運動は、折々右の手ですることもある。その時は押へられるのが右の乳房である。

僕はお金が話した儘をそつくりここに書かうと思ふ。頃日僕の書く物の總ては、神聖なる評論壇が、「上手な落語のやうだ」と云ふ紋切形の一言で褒めてくれることになつてゐるが、若し今度も同じマンション・オノレエルを頂戴したら、それをそつくりお金にお祝儀に遣れば好いことになる。

＊　＊　＊　＊　＊

話は川桝と云ふ料理店での出來事である。但し此料理店の名は遠慮して、わざと譃の名を書いたのだから、そのお積りに願ひたい。

そこで川桝には、此話のあつた頃、女中が十四五人ゐた。それが二十疊敷の二階に、目刺を竝べたやうに寢ることになつてゐた。まだ七十近い先代の主人が生きてゐて、隱居爲事にと云

ふわけでもあるまいが、毎朝五時が打つと二階へ上がつて來て、寢てゐる女中の布團を片端からまくつて歩いた。朝起は勤勉の第一要件である。お爺いさんのする事は至つて殊勝なやうであるが、女中達は一向敬服してゐなかつた。そればかりではない。女中達はお爺いさんを、蔭で助兵衞爺さんと呼んでゐた。これはお爺いさんが爲めにする所あつて布團をまくるのだと思つて附けた渾名である。そしてそれが全くの寃罪でもなかつたらしい。

暮に押し詰まつて、毎晩のやうに忘年會の大一座があつて、女中達は目の廻るやうに忙しい頃の事であつた。或る晩例の目刺の一疋になつて寢てゐるお金が、夜なかにふいと目を醒ました。外の女ならこんな時手水にでも起きるのだが、お金は小用の遠い性で、寒い晩でも十二時過ぎに手水に行つて寢ると、夜の明けるまで行かずに濟ますのである。お金はぼんやりして、廣間の眞中に吊るしてある電灯を見てゐた。女中達は皆好く寐てゐる樣子で、所々で齒ぎしりの音がする。

その晩は雪の夜であつた。寢る前に手水に行つた時には綿をちぎつたやうな、大きい雪が盛んに降つて手水鉢の向うの南天と竹柏の木とに大ぶ積つて、竹柏の木の方は飲み過ぎたお客のやうに、よろけて倒れさうになつてゐた。お金はまだ降つてゐるかしらと思つて、耳を澄まして聞いてゐるが、折々風がごうと鳴つて、庭木の枝に積もつた雪のなだれ落ちる音らしい音がする外には、只方々の戸がことこと震ふやうに鳴るばかりで、まだ降つてゐるのだか、もう歇んでゐるのだか分からない。

暫くすると、お金の右隣に寢てゐる女中が、むつくり銀杏返しの頭を擡げて、お金と目を見合せた。お松と云つて、痩せた、色の淺黑い、氣丈な女で、年は十九だと云つてゐるが、その頃二十五になつてゐたお金が、自分より精々二つ位しか若くはないと思つてゐたと云ふのである。

「あら。お金さん。目が醒めてゐるの。わたし大ぶ寐たやうだわ。もう何時。」

「さうさね。わたしも目が醒めてから、まだ時計は聞かないが、二時頃だらうと思ふわ。」

「さうでせうねえ。わたし一時間は慥かに寐たやうだから。寢る前程寒かないことね。」

「宵のうち寒かつたのは、雪が降り出す前だつたからだよ。降つてゐる間は寒かないのさ。」

「さうかしら。どれ憚りに行つて來よう。お金さん附き合はなくつて。」

「寒くないと云つたつて、矢つ張寢てゐる方が勝手だわ。」

「友達甲斐のない人ね。そんなら爲方がないから一人で行くわ。」

お松は夜着の中から滑り出て、緩んだ細帶を締め直しながら、梯子段の方へ歩き出した。二階の上がり口は長方形の間の、お松やお金の寢てゐる方角と反對の方角に附いてゐるので、二列に頭を衝き合せて寢てゐる大勢の間を、お松は通つて行かなくてはならない。

お松が電灯の下がつてゐる下の處まで歩いて行つたとき、風がごうと鳴つて、だだだあと云ふ音がした。雪のなだれ落ちた音である。多分庭の眞ん中の立石の傍にある大きい松の木の雪が落ちたのだらう。お松は覺えず一寸立ち留まつた。

此時突然お松の立つてゐる處と、上がり口との中途あたりで、「お松さん、待つて頂戴、一しよに行くから」と叫ぶやうに云つた女中がある。

さう云ふ聲と共に、むつくり島田髷を擡げたのは、新參のお花と云ふ、色の白い、髮の縮れた、おかめのやうな顏の、十六七の娘である。

「來るなら、早くおし。」お松は寢卷の前を掻き合せながら一足進んで、お花の方へ向いた。

「わたしこはいから我慢しようかと思つてゐたんだけれど、お松さんと一しよなら、矢つ張行つた方が好いわ。」から云ひながら、お花は半身起き上がつて、ぐづぐづしてゐる。

「早くおしよ。何をしてゐるの。」

「わたし脫いで寢た足袋を穿いてゐるの。」

「じれつたいねえ。」お松は足踏をした。

「もう穿けてよ。勘辨して頂戴、ね。」お花はしどけない風をして、お松に附いて梯子を降りて行つた。

便所は女中達の寢る二階からは、生憎遠い處にある。梯子を降りてから、長い、狹い廊下を通つて行く。その行き留まりにあるのである。廊下の横手には、お客を通す八疊の間が兩側に二つ宛竝んでゐてそのはづれの處と便所との間が、右の方は女竹が二三十本立つてゐる下に、小さい石燈籠の据ゑてある小庭になつてゐて、左の方が茶室賽ひの四疊半があるのである。

いつも夜なかに小用に行く女中は、竹のさらさらと摩れ合ふ音をこはがつたり、花崗石の石燈籠を、白い着物を着た人がしやがんでゐるやうに見えると云つてこはがつたりする。或る時又用を足してゐる間ぢゆう、四疊半の中で、女の泣いてゐる聲がしたので、歸りに障子を開けて見たが、人はゐなかつたと云つたものがある。これは友達をこはがらせる爲めに、造り事を言つたのであるが、その話を聞いてからは、便所の往き返りに、兎角四疊半が氣になつてならないのである。殊に可笑しいのは、その造り事を言つた當人が、それを言つてからは四疊半がこはくなつて、とうとう一度は四疊半の中で、本當に泣聲がしたやうに思つて、便所の歸りに大聲を出して人を呼んだことがあつたのである。

* * * * * *

お金は二人が小用に立つた跡で、今まで氣の附かなかつた事に氣が附いた。それはお花の空床の隣が矢張空床になつてゐることであつた。二つ竝んで明いてゐるので、目立つたのである。

そして、「ああお蝶さんがまだ寢てゐないが、どうしたのだらう」と思つた。お花の隣の空床の主はお蝶と云つて、今年の夏田舍から初奉公に出た、十七になる娘である。お蝶は下野の結城で機屋をして、困らずに暮してゐるものの一人娘であるが、壻を嫌つて逃げ出して來たと云ふことであつた。間もなく親元から連れ戾しに親類が出たが、強情を張つて歸らない。親類も川桝の店が、料理店ではあつても、堅い店だと云ふことを呑み込んで、とうとう娘の身の上を此内のお上さんに賴んで置いて歸つてしまつた。それが歸ると、又間もなく親類だと云つて、お蝶を尋ねて來た男がある。十八九ばかりの書生風の男で、浴帷子に小倉袴を穿いて、麥藁帽子を被つて來たのを、女中達が覗いて見て、高麗藏のした「魔風戀風」の東吾に似た書生さんだと云つて騷いだ。それから寄つてたかつてお蝶を揶揄つたところが、おとなしいことはおとなしくても、意氣地のある、張りの強いお蝶は、佐野と云ふその書生さんの身の上を、さつぱりと友達に打ち明けた。佐野さんは親が坊さんにすると云つて、例の殺生石の傳説で名高い、源翁禪師を開基としてゐる安穩寺に預けて置くと、お蝶が見初めて、いろいろにして近附いて、最初は容易に聽かなかつたのを納得させた。壻を嫌つたのは、佐野さんがあるからの事であつた。安穩寺の住職は東京で新しい教育を受けた、物分りの好い人なので、佐野さんの人柄

を見て、うるさく品行を非難するやうな事をせずに「君は僧侶になる柄の人ではないから、今のうちに廢し給へ」と云つて、寺を何がなしに逐ひ出してしまつた。そこで佐野さんは、内情を知らない親達が、住職の難癖を附けずに出家を止めるのを聞いて、げにもと思ふらしいのに勢を得て、お蝶より先きに東京に出て、或私立學校に這入つた。お蝶が東京に出たのは、佐野さんの跡を慕つて來たのであつた。

佐野さんはその後も、度々川桝へお蝶に逢ひに來て、一寸話しては歸つて行く。お客になつて來たことはない。お蝶の親元からも度々人が出て來る。婿取の話が矢張續いてゐるらしい。婿は機屋と取引上の關係のある男で、それをことわつては、機屋で困るやうな事情があるらしい。佐野さんは、初めはお蝶をなだめ賺すやうにしてあしらつてゐる樣子であつたが、段々深くお蝶に同情して來て、後にはお蝶と一しよになつて、機屋一家に對してどうしようか、かうしようかと相談をする立場になつたらしい。

かう云ふ入り組んだ事情のある女を、その儘使つてゐると云ふことは、川桝ではこれまでついぞなかつた。それを目をねむつて使つてゐるには、わけがある。一つはお蝶がひどくお上さんの氣に入つてゐる爲めである。田舍から出た娘のやうではなく、何事にも好く氣が附いて、好く立ち働くので、お蝶はお客の褒めものになつてゐる。國から來た親類には、隨分やかましい事を言はれる樣子で、お蝶はいつも神妙に俯向いて話を聞いてゐても、その人を歸した跡では、直ぐ何事もなかつたやうに彈力を囘復して、元氣よく立ち働く。そしてその口の周圍には微笑の影さへ漂つてゐる。一體お蝶は主人に間違つた事で小言を言はれても、友達に意地惡くいぢめられても、その時は困つたやうな樣子で、謹んで聞いてゐるが、直ぐ跡で機嫌を直して働く。そして例の微笑んでゐる。それが決して人を馬鹿にしたやうな微笑ではない。怜悧で何もかも分かつて、それで堪忍して、おこるの怨むのと云ふことはしないと云ふ微笑である。「あの、笑靨よりは、口の端の處に、竪にちよいとした皺が寄つて、それが本當に可哀うございましたの」と、お金が云つた。僕はその時リオナルドオ・ダア・ヰンチのかいたモンナ・リザの畫を思ひ出した。お客に褒められ、友達の折合も好い、愛敬のあるお蝶が、此内のお上さんに氣に入つてゐるのは無理もない。

今一つ川桝でお蝶に非難を言ふことの出來ないわけがある。それは外の女中がいろいろの口實を拵へて暇を貰ふのに、お蝶は一晩も外泊をしないばかりでなく、晝間も休んだことがない。佐野さんの來るのを傍輩が彼此云つても、これも几帳面に素話をして歸るに極まつてゐる。どんな約束をしてゐるか、どう云ふ中か分からないが、みだらな振舞をしないから、不行跡だと云ふことは出來ない。これもお蝶の信用を固うする本になつてゐるのである。

お金は宵に大分遲くなつてから、佐野さんが來たのを知つてゐる。外の女中も知つてゐる。こんな事はこれまでもあつたが、女中達が先きに寢て、暫く立つてから目が醒めて見れば、いつもお蝶はちやんと來て寢てゐたのである。それが今夜に二時を過ぎたかと思ふのに、まだ床に戻つてゐない。何と云ふ理由もなく、お金はそれが直ぐに氣になつた。どうも色になつてゐる二人が逢つて話をしてゐるのだと云ふ感じではなくて、何か變つた事でもありはしないかと氣遣はれるやうな感じがしたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

お花はお松に跡に附いて、「お松さん、そんな

に急がないで下さいよ」と云ひながら、一しよに梯子段を降りて、例の狹い、長い廊下に掛かつた。

二階から差してゐる明りは廊下へ曲る角までしか屆かない。それから先きは便所の前に、一燭ばかりの電灯が一つ附いてゐる丈である。それが遠い、遠い向うにちよんぼり見えてゐて、却てそれが見える爲めに、途中の暗黑が暗黑として感ぜられるやうである。心理學者が「闇その物が見える」と云ふ場合に似た感じである。

「こはいわねえ」とお花は自分の足の指が、先きに立つて歩いてゐるお松の踵に障るやうに、食つ附いて歩きながら云つた。

「笑談お言ひでない。」お松も實は餘り心丈夫でもなかつたが、半分は意地で强さうな返事をした。

二階では稀に一しきり强い風が吹き渡る時、その音が聞えるばかりであつたが、下に降りて見ると、その間にも絶えず庭の木立の戰ぐ音や、どこかの開き戸の蝶番の弛んだのが、風にあふられて鳴る音がする。その間に一種特別な、ひゆうひゆうと、微かに長く引くやうな音がする。どこかの戸の隙間から風が吹き込む音ででもあるだらうか。その斷えては續く工合が、譬へば人がゆつくり息をするやうである。

「お松さん。ちよいとお待ちよ。」お花はお松の袖を控へて、自分は足を止めた。

「なんだねえ。出し拔けに袖にぶら下がるのだもの。わたしびつくりしたわ。」お松もかうは云つたが、足を止めた。

「あの、ひゆうひゆうと云ふのはなんでせう。」

「さうさねえ。梯子を降りた時から聞えてるわねえ。どこかここいらの隙間から風が吹き込むのだわ。」

二人は暫く耳を欹てて聞いてゐた。そしてお松がかう云つた。「なんでもあんまり遠いとこぢやなくつてよ。それに板の隙間では、あんな音はしまいと思ふわ。なんでも障子の紙かなんかの破れた處から吹き込むやうだねえ。あの手水場の高い處にある小窓の障子かも知れないわ。表の手水場のは硝子戸だけれども、裏のは紙障子だわね。」

「さうでせうか。いやあねえ。わたしもう手水なんか我慢して、二階へ歸つて寢ようかしら。」

「馬鹿な事をお言ひでない。わたしそんなお附合ひなんか御免だわ。歸りたけりやあ、花ちやんひとりでお歸り。」

「ひとりではこはいから、そんなら一しよに行つてよ。」

二人は又歩き出した。一足歩くごとに、ひゆうひゆうと云ふ音が心持近くなるやうである。障子の穴に當たる風の音だらうとは、二人共思つてゐるが、なんとなく變な音だと云ふ感じが底にあつて、それがいつまでも消えない。

お花は息を屛めてお松の跡に附いて歩いてゐるが、頭に血が昇つて、自分の耳の中でいろいろな音がする。それでゐて、ひゆうひゆうと云ふ音丈は矢張際立つて聞えるのである。お松も餘り好い氣持はしない。お花が陽にお松を力にしてゐるやうに、お松も陰にはお花を力にしてゐるのである。

便所が段々近くなつて、電灯の小さい明りの照し出す範圍が段々廣くなつて來るのがせめてもの賴みである。

二人はとうとう四疊半の處まで來た。右手の壁は腰の邊から上が硝子戸になつてゐるので、始て外が見えた。石燈籠の笠には雪が五六寸もあらうかと思ふ程積もつてゐて、竹は何本か雪に撓んで地に着きさうになつてゐる。今立つてゐる竹は雪が墮ちた跡で、はね上がつたのであらう。雪はもう降つてゐなかつた。

二人は覺えず足を止めて、硝子戸の外を見て、

それから顔を見合せた。二人共相手の顔がひどく青いと思つた。電灯が小さいので、雪明りに負けてゐるからである。

ひゆうひゆうと云ふ音は、此時これまでになく近く聞えてゐる。

「それ御覧なさい。あの音は手水場でしてゐるのだわ。」お松はかう云つたが、自分の聲が不斷と變つてゐるのに氣が附いて、それと同時にぞつと寒けがした。

お花はこはくて物が言へないのか、默つて點合點をした。

二人は急いで用を足してしまつた。そして前に便所に這入る前に立ち留まつた處へ出て來ると、お松が又立ち留まつて、かう云つた。

「手水場の障子は破れてゐなかつたのねえ。」

「さう。わたし見なかつたわ。それどこぢやないのですもの。さあ、こんなところにゐないで、早く行きませう。」お花の聲は震へてゐる。

「まあ、ちよいとお待ちよ。どうも變だわ。あの音をお聞き。手水場の中よりか、矢つ張ここの方が近く聞えるわ。わたしきつとこの四疊半の中の障子だと思ふの。ちよつと開けて見ようぢやないか。」お松はこん度常の聲が出たので、自分ながら氣強く思つた。

「あら。およしなさいよ。」お花は慌てて、又お松の袖にしがみ附いた。

お松は袖を攫まへられながら、ぢつと耳を澄まして聞いてゐる。直き傍のやうに聞えるかと思ふと、又さうでないやうにもある。慥かに四疊半の中だと思はれる時もあるが、又どうかすると便所の方角のやうにも聞える。どうも聞き定めることが出來ない。

僕にお金が話す時、「どうしても方角がしつかり分からなかつたと云ふのが不思議ぢやありませんか」と云つたが、僕は格別不思議にも思はない。聽くと云ふことは空間的感覺ではないからである。それを強ひて空間的感覺にしようと思ふと、ミュンステルベルヒのやうに內耳の迷路で方角を聞き定めるなどと云ふ無理な議論も出るのである。

お松は少し依怙地になつたのと、內々はお花のゐるのを力にしてゐるのとで、表面丈は強さうに見せてゐる。「わたし開けてよ」と云ひさま、攫まへられた袖を拂つて、障子をさつと開けた。

廊下の硝子障子から差し込む雪明りで、微かではあるが、薄暗い廊下に慣れた目には、何もかも輪廓丈はつきり知れる。一目室內を見込むや否や、お松もお花も一しよに聲を立てた。

お花はその儘氣絶したのを、お松は棄てて置いて、廊下をばたばたと母屋の方へ駈け出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

川桝の內では一人も殘らず起きて、廊下の隅隅の電灯まで附けて、主人と隱居とが大勢のものの騷ぐのを制しながら、四疊半に來て見た。直ぐに使を出したので、醫師が來る、巡査が來る。續いて刑事係が來る。警察署長が來る。氣絶してゐるお花を隣の明間へ抱へて行く。狹い、長い廊下に人が押し合つて、がやがやと罵る。非常な混雜であつた。

四疊半には鋭利な刃物で、氣管を横に切られたお蝶が、まだ息が絶えずに倒れてゐた。ひゆうひゆうと云ふのは、切られた氣管の疵口から呼吸をする音であつた。お蝶の傍には、佐野さんが自分の頸を深く剜つた、白鞘の短刀の柄を握つて死んでゐた。頸動脈が斷たれて、血が夥しく出てゐる。火鉢の火には灰が掛けて埋めてある。電灯には血の痕が附いてゐる。佐野さんがお蝶の吭を切つてから、明りを消して置いて、自分が死んだのだらうと、刑事係が云つた。佐野さんの手で書いて連署した遺書が床の

間に置いてあつて、其上に佐野さんの銀時計が文鎭にしてあつた。お蝶の名丈はお蝶が自筆で書いてゐる。文面の概略はからである。「今年の暮に機屋一家は破産しさうである。それはお蝶が親の詞に背いた爲めである。お蝶が死んだら、債權者も過酷な手段は取るまい。佐野も東京には出て見たが、神經衰弱の爲めに、學業の成績は面白くなく、それに親戚から長く學資を給してくれる見込みもないから、お蝶が切に願ふに任せて、自分は甘んじて犧牲になる。」書いてある事は、ざつとこんな筋であつたさうだ。

川桝へ行く客には、お金が一人も殘さず話すのだから、此話を知つてゐる人は世間に澤山あるだらう。事によると、もう何かに書いて出した人があるかも知れない。

川は靜に流れ行く　（KLABUND）

川は靜に流れ行く。
同じ早さに、
波頭の
白きも見えず。

覗けば黑く、
渦卷く淵の險しさよ。
こはいかに。いづくゆか。
我を呼ぶ。

顧みてわれ
色を失ふ。
漂へるは
我骸ゆゑ。

（『沙羅の木』の「譯詩」より）

又　（KLABUND）

お前又忍んで來たね、
闇の夜に。
あるたけのお前の智慧が
向不見のお前の熱に負けたのだ。

そして又昔のやうにしろと
お前は己にねだる。
せつなかつたかい。
お前泣いてゐるね。

熱　（KLABUND）

折折道普請の人夫が來て、
石を小さく割つてゐる。
そいつが梯子を掛けて、
己の腦天に其石を敲き込む。

己の腦天はとうとう往來のやうに堅くなつて、
其上を電車が通る、五味車が通る、柩車が通る。

百物語

何か事情があつて、川開きが暑中を過ぎた後に延びた年の當日であつたかと思ふ。余程年も立つてゐるので、記憶が稍おぼろげになつてはゐるが、又却てそれがために、或る廉々がアクサンチュエエせられて、翳んだ、濁つた、しかも強い色に彩られて、古びた想像のしまつてある、僕の腦髓の物置の隅に轉がつてゐる。

勿論生れて始めての事であつたが、これから後も先づそんな事は無ささうだから、生涯に只一度の出來事に出くはしたのだと云つて好からう。それは僕が百物語の催しに行つた事である。

小說に說明をしてはならないのださうだが、自惚は誰にもあるもので、此話でも萬一ヨオロッパのどの國かの語に飜譯せられて、世界の文學の仲間入をするやうな事があつた時、餘所の讀者に分からないだらうかと、作者は途方もない考を出して、行きなり說明を以て此小說を書きはじめる。百物語とは多勢の人が集まつて、蠟燭を百本立てて置いて、一人が一つ宛化物の話をして、一本宛蠟燭を消して行くのださうだ。さうすると百本目の蠟燭が消された時、眞の化物が出ると云ふことである。事によつたら例のファキイルと云ふ奴がアルラア・アルラアを唱へて、頭を掉つてゐるうちに、神經に刺戟を加へて行つて、一時幻視幻聽を起すに至るのではあるまいか。

僕を此催しに誘ひ出したのは、寫眞を道樂にしてゐる蔀君と云ふ人であつた。いつも身綺麗にしてゐて、衣類や持物に、その時々の流行を趁つてゐる。或時僕が脚本の試みをしてゐるのを見てこんな事を言つた。「どうもあなたのお書きになるものは少し勝手が違つてゐます。ちよいちよい芝居を御覽になつたら好いでせう。」これは親切に言つてくれたのであるが、こつちが却つてその勝手を破壞しようと思つてゐるのだとは、全く氣が附いてゐなかつたらしい。僕の試みは試みで終つてしまつて、何等の成功をも見なかつたが、後繼者は段々勝手の違つた物を出し出しして、芝居の面目が今では大ぶ改まりさうになつて來てゐる。詰まり捩れた、時代を超絕したやうな考は持つてもゐず、解せようともしなかつたのが、蔀君の特色であつたらしい。さ程深くもなかつた交が絕えてから、もう久しくなつてゐるが、僕にあの人の飽くまで穩健な、目前に提供せられる受用を、程好く、享受してゐると云ふ風の生活を、今でも羨ましく思つてゐる。蔀君は下町の若旦那の中で、最も聰明な一人であつたと云つて好からう。

この蔀君が僕の內へ來たのは、川開きの前日の午過ぎであつた。あすの川開きに、兩國を跡に見て、川上へ上つて、寺島で百物語の催しをしようと云ふのだが、行つて見ぬかと云ふ。主人は誰だ。案內もないに、行つても好いのかと、僕は問うた。「なに。例の飾磨屋さんが催すのです。大ぶ大勢の積りだし、不參の人もありさうだから、飛入をしても構はないのですが、それでは德義上行かれぬなんぞと、あなたの事だから云ふかも知れない。併し二三日前に逢つた時、あなたにはわたくしから話をして見て、來られるやうなら、お連れ申すかも知れないと、勝兵衞さんにことわつてあります。わたくしが一しよに行くと好いが、外へ廻つて行かなくて

はならなかつたし、一見先き一部を[illegible]
との事であつた。
　時刻と集合の場所とを聞いて置いた僕は、丁度時間に間もないので、それ、こんな事をするも行つて見ようと云ふ位の好奇心を有して、新富の三時半頃に、新富の楽屋へ行つて見た。尤所にはまだ少し若[illegible]が、[illegible]いてあつて、[illegible]かつた。[illegible]は今は東の端にれた所で、丁度劇場の向側になつてゐた。多分帝國館であつたかと思ふ。
　さう云ふ日に目指の位置にある料理屋一軒を借切りにしたものと見えて、しかもその家は近所の運營よりも繁昌してゐる。階上階下とも、どの部屋にも客が一ぱい詰め掛けてゐる。僕は人の案内する儘に二階へ昇つて、一間を見渡したが、どれもどれも知らぬ顔の間ばかりの中に、幾つかの依田學海さんが、[illegible]し、に、座布團を引つ掛けて据わつてゐた。依田さんの隣には、大勢の若い者にしてゐる、[illegible]た[illegible]が、寂しげに据わつて、話をしてゐる。
　僕は依田さんに挨拶をして、少し隔たつた所に割り込んだ。簾越しに川風が吹き込んで、人の込み合つてゐる割に暑くはなかつた。
　僕は暫く依田さんと[illegible]との話を聞いてゐるうちに、その[illegible]と云ふことを云つた。[illegible]は依田さんに[illegible]てゐなくても、これからの俳優は書見をいたさなくてはなりませんな[illegible]と云つてゐる。そして[illegible]と云つてゐる[illegible]と、[illegible]と云ふものとは、[illegible]もない不[illegible]に思はれるので、僕は[illegible]中で聞いてゐて微笑せずにはゐられなかつた。同時に僕には書見と云ふ語が、[illegible]僕を呼び[illegible]した。それは[illegible]で俳優のした書物を見た時に、色[illegible]のやうな[illegible]をしてゐる役者が、[illegible]、書見をいたさうかと云つて、見臺を引き寄せた事であつた。なんでもそこへなまめいた娘が薄茶か何か持つて出ることになつてゐた。その若衆のしらじらしい、どうしても[illegible]が、書見と云ふ[illegible]にぴつたり[illegible]してゐたが、此書物を[illegible]で、今繰り返して見せられたやうに、僕は思つたのである。
　そのうち僕はかう云ふ事に氣が附いた。しらじらしいのは依田さんに對する壯士俳優の話ばかりではない。此二階に集まつた大勢の人は、一體に[illegible]で、それがたまたま[illegible]と、皆しらじらしい。同一の人が同一の場所へ請待した客でありながら、[illegible]の中で落ち合つた人と同じで、一人一人の間になんの共通點もない。ここかしこで互に何か言ふのは、時候の挨拶位に過ぎない。ぜんまいの戻つた時計を据ると、セコンドがちよつと動き出して、すぐに又止まるやうに、こんな會話は長くは持たない。忽ち元の沈默に返つてしまふのである。
　僕は依田さんに何か言はうかと思つたが、どうも矢張しらじらしい事しきや思ひ附かないので、言ひ出さずにしまつた。そしてそこ等の人の顔を眺めてゐた。どの顔もてんでに勝手な事を考へてゐるらしい。[illegible]と云ふものに呼ばれては來たものの、その[illegible]は皆もう[illegible]た僕の遺物である。遺物だと云つても、物はもう亡くなつて、只[illegible]が殘つてゐるに過ぎない。客觀的には元から幻影は幻影であつたのだが、[illegible]に無い內容を容れて、[illegible]さうにした主觀までが、今は消え失せてしまつてゐる。[illegible]たりと云ふものの全體が、イプセンの所謂幽靈になつてしまつてゐる。それだから人を引き附ける力がない。[illegible]てんでに勝手な事を考へるのを妨げる力がない。
　人も我もぼんやりしてゐる處へ、世話人らしい男が來て、皆へ案内をした。此料理屋の座敷はかりに[illegible]五六組着いてゐる。それ、階上

廊下から人が出て乗り込む。中には芸者の[illegible]い袖がちら附いて、「一しよに乗りたいわよ、こつちへお出でよ」と友を誘ふお酌の甲走つた聲がする。併し客は大抵顔馴染ばかりで、女は[illegible]てゐないらしい。皆乗り込んでしまふまで、僕は主人の飾磨屋がどこにゐるか知らずにしまつた。又[illegible]にも逢はなかつた。

船宿の二階は、戸は開け放してあつても、一ぱいに押し込んだ客の人いきれがしてゐたが、舟を漕ぎ出すと、すぐに涼しい心持になつた。まだ花火を見る舟は出ないので、川面は存外込み合つてゐない。僕の乗つた舟を漕いでゐる両人の船頭は、手拭によごれた[illegible]、[illegible]やうな體に、[illegible]真面目な表情を見せて、器械的に手足を動かして艪を操つてゐる。飾磨屋の事だから、定めて[illegible]もはずむのだらうに、[illegible]しさうには見えない。[illegible]。[illegible]は[illegible]さへ[illegible]いてゐれば済むのだと云ふことでも云ひたさうである。

僕は[illegible]の上に両肘を置いて、[illegible]を[illegible]いて、[illegible]を[illegible]きながら、[illegible]の人の[illegible]を見渡した。[illegible]を出て[illegible]るまでに、[illegible]の客が交つたと見えて、さつき見なかつた顔が大ぶある。依田さんは別の舟に乗つたと見えて、とうとう知つた顔の一人もなくなつた。そしてその知らない、[illegible]顔が、矢張二階で見た時のやうに、ぼんやりして、てんでに勝手な事を考へてゐるらしい。

舟には酒肴が出してあつたが、一々どの舟へも、[illegible]を配ると云ふやうな、細かい計畫はしてなかつたのか、世話を焼いて杯を侑めるものもない。かう云ふ時の習として、最初には一同遠慮をして酒肴に手を出さずに、只睨み合つてゐた。そのうち結城紬の單物に、縞絽の[illegible]を着た、[illegible]の男が、一ところ[illegible]、「皆さん、折角[illegible]出してあるものですから[illegible]」と云つて、杯を手に取ると、[illegible]手に[illegible]て、杯を取る。割箸を取る。盛んに飲食が始まつた。併し[illegible]位のものである。「どうです。[illegible]ではありませんか。」「[illegible]。」と云ふやうな事になるでせう。」「そいつあ[illegible]ませんぞ。[illegible]。」こんな對話である。

僕のゐる所からは、すぐ前を漕いで行く舟の[illegible]が見える。そこにはお酌が二人乗つてゐる。[illegible]を[illegible]にして、[illegible]の[illegible]に[illegible]を[illegible]いて、[illegible]を[illegible]いてゐる。[illegible]さうな[illegible]で、何やら言つてお[illegible]を[illegible]からしく、きやつきやつと云はせてゐる。

舟は両国橋の方へ行つて上つて行くので、[illegible]橋手前までは、お藏の水門の外を通る度に、さして來る潮に[illegible]水の面に、藁やら、[illegible]やら、傘の骨やら、お丸のこはれたのやらが浮いてゐて、その間に[illegible]にも[illegible]と云ふ風をして、[illegible]てゐた。[illegible]両岸のあたりから、舟が少し中流に出た。吾妻橋の上には、人が[illegible]して[illegible]を見[illegible]してゐたが、その中に書生[illegible]、[illegible]の乗つてゐる舟の[illegible]る時、大聲に「馬鹿」とどなつた。

舟の着いたのは、[illegible]であつたかと思ふ。[illegible]にはいつた[illegible]であつて、[illegible]に生えてゐる[illegible]が少し[illegible]。[illegible]と、[illegible]に[illegible]いた、[illegible]の[illegible]が、橋場の人家の[illegible]をぼかしてゐた。[illegible]から[illegible]まで、狭い一本道の附いてゐる處へ、かはるがはる舟を着けて、先づ[illegible]を陸へ揚げた。どの舟もどの舟も、載せられるだけ大勢の人を載せて來たので、お酌の小さい雪駄などは見附からなくても、客の多數の穿いて來た、[illegible]の[illegible]下駄は、[illegible]定が容易に附かない。真面目な人が[illegible]で下[illegible]て、あれかこれかと捜してゐるうちに、[illegible]人は[illegible]を穿いて行く。中には[illegible]で

新しさうなのを選つて穿く人もある。僕はしかたがないからなるべく跡まで待つてゐて、殘つた下駄を穿いたところが、齒の斜に踏み耗らされた、隨分歩きにくい下駄であつた。後に聞けば、飾磨屋が履物の間違つた話を聞いて、客一同に新しい駒下駄を贈つたが、僕なんぞには不粹だと云ふ遠慮から、此贈物をしなかつたさうである。

定めて最初に着いた舟に世話人がゐて案内をしたのだらう。一艘の舟が附くと、その一艘の人が、下駄を捜したりなんかして、まだ行つてしまはないうちに、もう次の舟の人が上陸する。そして狹い道を土手へ上がつて、土手の内の田圃を、寺島村の誰やらの別莊をさして行く。その客の群は切れたり續いたりはするが、切れた時でも前の人の後影を後の人が見失ふやうなことはない。僕も齒の歪んだ下駄を引き摩りながら、田の畔や生垣の間の道を歩いて、とうとう目的地に到着した。

ここまで來る道で、僕らも見たやうな、小さい屋敷である。高い生垣を繞らして、冠木門が立ててある。それをはひると、向うに煤けたやうな古家の玄關が見えてゐるが、そこまで行く間が、左右を外圍よりずつと低いかなめ垣で爲切つた道になつてゐて、長方形の花崗石が飛び飛びに敷いてある。僕に背中を見せて歩いてゐた、偶然の先導者はもう無事に玄關近くまで行つてゐる頃、門と、玄關との中程で、左側のかなめ垣がとぎれてゐる間から、お酌が二人手を引き合つて、「こはかつたわねえ」と、首を縮めて囁き合ひながら出て來た。僕は、何があるのだい」と云つたが、二人は同時に僕の顔を不遠慮に見て、なんだ、知りもしない奴の癖にとでも云ひたさうな、極く愛相のない表情をして、玄關の方へ行つてしまつた。僕はふいと馬鹿げた事を考へた。昔の名君は一顰一笑を惜んださうだが、こいつ等はもう只で笑はないだけの修行をしてゐるなと思つたのである。そんな事を考へながら、格別令女の子のこはがつた物の正體を確めたいと云ふ熱心もなく、垣のとぎれた所から、ちよつと横にはひつて見た。

そこには少し引つ込んだ所に、不斷は植木鉢や箒でも入れてありさうな、小さい物置があつた。もう物蔭は少し薄暗くなつてゐて、物置の奥がはつきり見えないのを、覗き込むやうにして見ると、髪を長く垂れた、等身大の幽靈の首に白い着物を着せたのが、萱か何かを束ねて立てた上に覗かせてあつた。その頃まで寄席に出る怪談師が、明りを消してから、客の間を持ち廻つて見せることになつてゐた、出來合の幽靈である。百物語のアリン・グウはこんな物かと、稍馬鹿にせられたやうな氣がして、僕は引き返した。

玄關に上がる時に見ると、上がつてすぐ突き當る三疊には、男が二人立つて何か忙がしさうに囁き合つてゐたら。「どうしやがつたのだなあ。」「それだからおいらが蠟燭は舟で來る人なんぞに持せて來ては行けないと云つたのだ。差當り燭臺に立ててあるのしきやないのだから」と云ふやうな事を言つてゐる。樂屋の方の世話も燒いてゐる人達であらう。二人は僕の立つてゐるのには構はずに、奥にはひつてしまふ。入り替つて、一人の男が覗いて見て、默つて又引つ込んでしまふ。

僕はどうしようかと思つて、暫く立ち竦んでゐたが、右の方の唐紙が明いてゐる、その先きに人聲がするので、その方へ行つて見た。そこは十四疊ばかりの座敷で、南側は古風に刈り込んだ松の木があつたり、雪見燈籠があつたり、泉水があつたりする庭を見晴してゐる。此座敷にもう二十人以上の客が詰め掛けてゐる。矢張船宿や舟の中と同じ樣に、餘り話ははずんで

ゐない。どの顔を見ても、物を期待してゐるとか好奇心を持つてゐるとか云ふやうな、緊張した表情をしてゐるものはない。

丁度僕がはひつた時、入口に近い所にゐる、髯の長い、紗の道行を着た中爺いさんが、「ひどい蚊ですなあ」と云ふと、隣の若い男が、「なに藪蚊ですから、明りを附ける頃にはゐなくなつてしまひます」と云ふその聲が耳馴れてゐるので、顔を見れば、蔀君であつた。蔀君も同時に僕を見附けた。

「やあ。お出なさいましたか。まだ飾磨屋さんを御存じないのでしたね。一寸御紹介をしませう。」

かう云つて蔀君は先きに立つて、「御免なさい、御免なさい」を繰り返しながら、平手で人を分けるやうにして、入口と反對の側の、格子窓のある方へ行く。僕は黙つて跡に附いて行つた。

蔀君のさして行く格子窓の下の所には、外の客と様子の變つた男がゐる。しかも隨分込み合つてゐる座敷なのに、その人の周圍は空席になつてゐるので、僕は入口に立つてゐた時、もうそれが目に附いたのであつた。年は三十位でもあらうか。色の蒼い、長い顔で、髪は刈つてから大ぶ日が立つてゐるらしい。地味な縞の、鈍い、薄青い色の勝つた何やらの單物に袴を着けて、少し前屈みになつて据わつてゐる。徹夜をした人の目のやうに、輕い充血の痕の見えてゐる目は、餘り周圍の物を見ようともせずに、大抵直前の方向を凝視してゐる。此男の傍には、少し背後へ下がつて、一人の女が附き添つてゐる。これも支度が極地味な好みで、その頃流行つた紋織お召の單物も、帶も、帶止も、只目立たないやうにと心掛けてゐるらしく、薄い鼠が根調をなしてゐて、二十になるかならぬ女の裝飾としては、殆ど異様に思はれる程である　中肉中背で、可哀らしい圓顔をしてゐる。銀杏返しに結つて、體中で外にない赤い色をしてゐる六分珠の金簪を插した、たつぷりある髪の、鬢のおくれ毛が、俯向いてゐる片頬に掛かつてゐる。好い女ではあるが、どこと云つて鋭い、際立つた線もなく、凄いやうな處もない。僕は一寸見た時から、此男の傍に此女のゐるのを、只何となく病人に看護婦が附いてゐるやうに感じたのである。

蔀君が僕を此男の前に連れて行つて、僕の名を言ふと、此男は僕を一寸見て、黙つて丁寧に辭儀をしただけであつた。蔀君はそこらにゐた誰やらと話をし出したので、僕はひとり縁側の方へ出て、いつの間にか薄い雲の掛かつた、暮方の空を見ながら、今見た飾磨屋と云ふ人の事を考へた。

今紀文だと評判せられて、あらゆる豪遊をすることが、新聞の三面に出るやうになつてから、もう大ぶ久しくなる。けふの百物語の催しなんぞでからが、いかにも思ひ切つて奇拔な、時代の風尚にも、社會の狀態にも頓着しない、大膽な所作だと云はなくてはなるまい。

原來百物語に人を呼んで、どんな事をするだらうかと云ふ、僕の好奇心には、さう云ふ事をする男は、どんな男だらうかと云ふ好奇心も多少手傳つてゐたのである。僕は慥かに空想で飾磨屋と云ふ男を畫き出してゐたには違ひないが、そんならどんな風をしてゐる男だと想像してゐたかと云ふと、僕もそれをはつきりとは言ふことが出來ない。併し不遠慮に言へば、百物語の催主が氣違染みた人物であつたなら、どつちかと云へば、必ず躁狂に近い間違方だらうとだけは思つてゐた。今實際に見たやうな沈鬱な人物であらうとは、決して思つてゐなかつた。此時よりずつと後になつて、僕はゴリキイのフォマ・ゴルヂエフを讀んだが、若しけふあのフォマのやうに、飾磨屋が客を攫まへて、隅

田川へ投げ込んだつて、僕は今見たその風采ほど意外には思はなかつたかも知れない。

飾磨屋は一體どう云ふ男だらう。錯雜した家族的關係やなんかが、新聞に出たこともあり、友達の噂話で耳に入つたこともあつたが、僕はそんな事に興味を感じないので格別心に留めずにしまつた。併し此人が何かの原因から煩悶した人若くは今もしてゐる人だと云ふことは疑がないらしい。大抵の人は煩悶して焼けになつて、豪遊をするとなると、きつと強烈な官能的受用を求めて、それに依つて意識をぼかしてゐようとするものである。さう云ふ人は躁狂に近い態度にならなくてはならない。飾磨屋はどうもそれとは違ふやうだ。一體あの沈鬱なやうな態度は何に根ざしてゐるだらう。あの目の血走つてゐるのも、事によつたら酒と色とに夜を更かした爲めではなくて、深い物思に夜を穩に眠ることの出來なかつたためではあるまいか。強ひて推察して見れば、この百物語の催しなんぞも、主人は馬鹿げた事だと云ふことを飽くまで知り抜いてゐて、そこへ寄つて來る客の、或は酒食を貪る念に驅られて來たり、或はまた迷信の霧に理性を鎖されてゐて、こはい物見たさの穉い好奇心に動かされて來たりするのを、あの血絲の通つてゐる、マリショオな、デモニックなやうにも見れば見られる目で、冷かに見てゐるのではあるまいか。こんな想像が一時浮んで消えた跡でも、僕は考へれば考へるほど、飾磨屋と云ふ男が面白い研究の對象になるやうに感じた。

僕はかう云ふ風に、飾磨屋と云ふ男の事を考へると同時に、どうも此男に附いてゐる女の事を考へずにはゐられなかつた。

飾磨屋の馴染は太郎だと云ふことは、もう全國に知れ渡つてゐる。併しそれよりも深く人心に銘記せられてゐるのは、太郎が東京で最も美しい藝者だと云ふ事であつた。尾崎紅葉君が頰杖を衝いた寫眞を寫した時、あれは太郎の眞似をしたのだと、みんなが云つたほど、太郎の寫眞は世間に廣まつてゐたのである。その紅葉君で思ひ出したが、僕は此藝者をけふ始めて見たのではない。

此時より二年程前かと思ふ。湖月に宴會があつて行つて見ると、紅葉君はじめ、硯友社の人達が、客の中で最多數を占めてゐた。床の間に梅と水仙の生けてある頃の寒い夜が、もう大ぶ更けてゐて、紅葉君は火鉢の傍へ、肱枕をして寐てしまつた。尤も紅葉君は折々狸寐入をする人であつたから、本當に寢てゐたかどうだか知らない。僕はふいと床の間の方を見ると、一座は大抵縞物を着てゐるのに、黑二重の紋付と云ふ異樣な出立をした長田秋濤君が床柱に倚り掛かつて、下太りの血色の好い顏をして、自分の前に据わつてゐる若い藝者と話をしてゐた。その藝者は少し體を屈めて据わつて、沈んだ調子の靜かな聲で、只の娘らしい話振をしてゐたが、島田に結つた髮の毛や、頰のふつくりした顏が、いかにも可哀らしいので、僕が傍の人に名を聞いて見たら、「君まだ太郎を知らないのですか」と、その人がさも驚いたやうな返事をした。

太郎が藝者らしくないと云ふ感じは、その時から僕にはあつたのだが、けふ見れば大ぶ變つてゐる。それでも矢張藝者らしくはない。先きの無邪氣な、娘らしい處はもうなくなつて、その時つつましい中にも始終見せてゐた笑顏が、今はめつたに見られさうにもなくなつてゐる。一體あんなに飽くまで身綺麗にして、巧者に着物を着こなしてゐるのに、なぜ藝者らしく見えないのだらう。そんならあの姿が意氣な奧樣らしいと云はうか。それも適當ではない。どうも僕には矢張さつきはひつた時の第一の印象が付き纏つてゐてならない。それはふと見て病人と看

蕩婦のやうだと思つた、あの刹那の印象である。

僕がぼんやりして縁側に立つてゐる間に、背後の座敷には燭臺が運ばれた。まだ電燈のない時代で、瓦斯も寺島村には引いてなかつたが、わざわざランプを廢めて蠟燭にしたのは、今宵の特別な趣向であつたのだらう。

燭臺が竝んだと思ふと、跡から大きな盥が運ばれた。中には鮓が盛つてある。道行觸のをぢさんが、「いや、これは御趣向」と云ふと、傍にゐた若い男が、「湯灌の盥と云ふ心持ですね」と注釋を加へた。すぐに跡から小形の手桶に柄杓を投げ入れたのを持つて出た。手桶からは湯氣が立つてゐる。先つきの若い男が、「や、閼伽桶」と叫んだ。所謂閼伽桶の中には、番茶が麁の袋に入れて漬けてあつたのである。

この時玄關で見掛けた、世話人らしい男の一人が、座敷の眞ん中に据わつて「一寸皆樣に申し上げます」と冒頭を置いて、口上めいた挨拶をした。段々準備が手おくれになつて濟まないが、鮓の飯の方を好む人は、もう折詰の支度もしてあるから、別間の方へ來て貰ひたいと云ふ事であつた。一同鮓を食つて茶を飲んだ。僕には蔀君が半紙に取り分けて、持つて來てくれたので、僕は敷居の上にしやがんで食つた。「お茶も今上げます。盥も手桶も皆新しいのです」と蔀君は言ひわけをするやうに云つて置いて、茶を取りに立つた。併しそんな言ひわけらしい事を聞かなくても、僕は飲食物の入物の形を氣にする程、細かく尖つた神經を持つてはゐないのであつた。

僕が主人夫婦、いや、夫婦にはまだなつてゐなかつた、いやいや、矢張夫婦と云ひたい、主人夫婦から目を離してゐたのは、座敷に背を向けて、暮れて行く庭の方を見ながら、物を考へてゐた間だけであつた。座敷を見てゐる間は、僕はどうしても二人から目を離すことが出來なかつた。客が皆飲食をしても、二人は動かずにぢつとしてゐる。袴の襞を崩さずに、前屈みになつて据わつた儘、主人は誰に話をするでもなく、正面を向いて目を据ゑてゐる。太郎は傍に引き添つて、退屈らしい顏もせず、何があつても笑ひもせずに、をりをり主人の顏を横から覗いて、機嫌を窺ふやうにしてゐる。

僕は障子のはづしてある柱に背を倚せ掛けて、敷居の上にしやがんで、海苔卷の鮓を頰張りながら、外を見てゐる振をして、實は絕えず飾磨屋の樣子を見てゐる。一體僕は稟賦と習慣との種々な關係から、どこに出ても傍觀者になり勝である。西洋にゐた時、一頃大そう心易く附き合つた爺いさんの學者があつた。その人は不治の病を持つてゐるので、生涯無妻で暮した人である。その位だから舞踏なんぞをしたことはない。或る時舞踏の話が出て、傍の一人が僕に舞踏の社交上必要なわけを說明して、是非稽古をしろと云ふと、今一人が舞踏を未開時代の遺俗だとしての觀察から、可笑しいアネクドオト交りに舞踏の弊害を列べ立てて攻擊をした。その時爺いさんは默つて聞いてしまつて、さてかう云つた。「わたくしは御存じの體ですから、舞踏なんぞをしたことはありません。自分の出來ない舞踏を、人のしてゐるのを見ます度に、なんだかそれをしてゐる人が人間ではないやうな、神のやうな心持がして、只目を睜つて視てゐるばかりでございますよ」と云つた。爺いさんのかう云ふ時、顏には微笑の淡い影が浮んでゐたが、それが決して冷刻な嘲の微笑ではなかつた。僕は生れながらの傍觀者と云ふことに就いて、深く、深く考へて見た。僕には不治の病はない。僕は生れながらの傍觀者である。子供に交つて遊んだ初から大人になつて社交上尊卑種種の集會に出て行くやうになつた後まで、どんなに感興の涌き立つた時も、僕はその渦卷に

身を投じて、心から樂んだことがない。僕は人生の活劇の舞臺にゐたことはあつても、役らしい役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞臺に上らない時は、魚が水に住むやうに、傍觀者が傍觀者の境に安んじてゐるのだから、僕はその時尤も其所を得てゐるのである。さう云ふ心持になつてゐて、今飾磨屋と云ふ男を見てゐるうちに、僕はなんだか他郷で故人に逢ふやうな心持がして來た。傍觀者が傍觀者を認めたやうな心持がして來た。

僕は飾磨屋の前生涯を知らない。あの男が少壯にして鉅萬の富を讓り受けた時、どう云ふ志望を懷いてゐたか、どう云ふ活動を試みたか、それは僕に語る人がなかつた。併し彼が藝人附合を盛んにし出して、今紀文と云はれるやうになつてから、もう餘程の年月が立つてゐる。察するに飾磨屋は僕のやうな、生れながらの傍觀者ではなかつただらう。それが今は慥かに傍觀者になつてゐる。併しどうしてなつたのだらうか。よもや西洋で僕の師友にしてゐた學者のやうな、オルガニックな缺陷が出來たのではあるまい。さうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痍を受けてそれが癒えずにゐる爲めに傍觀者になつたのではあるまいか。

若しさうだとすると、その飾磨屋がどうして今宵のやうな催しをするのだらう。世間にはもう飾磨屋の破產を云々するものもある。豪遊の名を一時に擅にしてから、もう大ぶ久しくなるのだから、內證は或はさうなつてゐるかも知れない。それでゐて、こんな催しをするのは、彼が忽ち富豪の主人になつて、人を凌ぎ世に傲つた前生活の惰力ではあるまいか。その惰力に任せて、彼は依然こんな事をして、丁度創作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見る樣に、過ぎ去つた榮華のなごりを、現在の傍觀者の態度で見てゐるのではあるまいか。

僕の考は又一轉して太郎の上に及んだ。あれは一體どんな女だらう。破產の噂が、殆ど別な世界に棲息してゐると云つて好い僕なんぞの耳にはひる位であるから、怜悧らしいあの女がそれに氣が附かずにゐる筈はない。なぜ死期の近い病人の體を蝨が離れるやうに、あの女は離れないだらう。それに今の飾磨屋の性質はどうだ。傍觀者ではないか。傍觀者は女の好んで擇ぶ相手ではない。なぜと云ふに、生活だの生活の喜だのと云ふものは、傍觀者の傍では求められないからである。そんなら一體どうしたと云ふのだらう。僕の頭には、又病人と看護婦と云ふ印象が浮んで來た。女の生涯に取つて、報酬を豫期しない看護婦になると云ふこと、しかもその看護を自己の生活の唯一の內容としてゐると云ふこと程、大いなる犧牲は又とあるまい。それも夫婦の義務の鎖に繫がれてゐてする、イブセンの謂ふ幽靈に祟られてゐてすると云ふなら、別問題であらう。この場合にそれはない。又戀愛の欲望の鞭でむちうたれてゐてすると云ふなら、それも別問題であらう。この場合に果してそれがあらうか、少くも疑を挾む餘地がある。さうして見ると、財產でもなく、生活の喜でもなく、義務でもなく、戀愛でもないとして考へて、僕はあの女の捧げる犧牲のいよいよ大きくなるのに驚かずにはゐられなかつたのである。

僕はこんな事を考へて、鮓を食つてしまつた跡に、生姜のへがしたのが殘つてゐる半紙を手に持つた儘、ぼんやりして矢張二人の方を見てゐた。その時一人の世話人らしい男が、飾磨屋の傍へ來て何か囁くと、これまで殆ど人形のやうに動かずにゐた飾磨屋が、つと起つて奧にはひつた。太郎もその跡に引添つてはひつた。

暫くすると郡君が僕のゐる所へ來て、緣側

にしやがんで云つた。「一寸あつちの座敷で辨當を上がつてゐなすつた依田先生が、もう怪談はお預けにして置いて歸ると云はれたので、飾磨屋さんは見送りに立つたのです。もう暫くはありませんから、これから障子を立てさせて、狹くても皆さんにこゝへ集まつて貰つて、怪談を始めさせるのださうです」と云つた。僕はさつき飾磨屋を始て見たとき、あの沈鬱なやうな表情に氣を附け、それからこの男の瞬きもせずに、ぢつとして据わつてゐるのを、稍久しく見て、始終なんだか人を馬鹿にしてゐるのではないかといふやうな感じを心の底に持つてゐた。此感じが鋭くなつて、一刹那あの目をデモニックだとさへ思つたのである。さうであるのに、この感じが、今依田さんを送りに立つたと云ふだけの事を、蔀君の話に聞いて、なんとなく少し和げられた。僕は蔀君には、只自分もそろそろ歸らうかと思つてゐると云ふことを告げた。

僕は最初に、百物語だと云つて、どんな事をするだらうかと思つた好奇心も、催主の飾磨屋がどんな人物だらうかと思つた好奇心も、今は大抵滿足させられてしまつて、此上雇はれた話家の口から、古い怪談を聞かうと云ふ希望は少しも無くなつてゐたからである。蔀君は留めようともしなかつた。

改まつて主人に暇乞をしなくてはならないやうな席でもなし、集まつた客の中には、外に知人もなかつたのを幸に、僕は默つて起つて、舟から出るとき取り換へられた、歯の斜に耗らされた古下駄を穿いて、ぶらりとこの怪物屋敷を出た。少し目の慣れるまで、歩き艱んだ夕闇の田圃道には、道端の草の蔭で　蛼が微かに鳴き出してゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

二三日立つてから蔀君に逢つたので、「あれからどうしました」と僕が聞いたら、蔀君がかう云つた。「あなたのお歸りになつたのは、丁度好い引上時でしたよ。暫く談を聞いてゐるうちに、飾磨屋さんがゐなくなつたので聞いて見ると、太郎を連れて二階へ上がつて、蚊屋を吊らせて寐たと云ふぢやありませんか。失敬な事をしても構はないと云ふやうな人ではないのですが、無頓着なので、そんな事をもするのですね」と云つた。

「傍觀者」と云ふものは、矢張多少人を馬鹿にしてゐるに極まつてゐはしないかと僕は思つた。

琥珀枕（一葉日記の無名草より）

琥珀のまくら　人夢に來ず
朝戸あくれば　苔に花ちる
明鏡の塵　拂ふものうく
鬢のみだれを　春の風ふく

ふみ（一葉日記の無名草より）

はじめて讀めば　ふみのうちゆ
みこゑさやかに　ひゞくなり
ただに相見る　こゝちして
われとゑまふを　人や見し
ふたたび三度　くりかへし
讀めばみ聲は　絶えにけり
いづくゆか吹く　秋の風
我夏痩の　肌に染む

雁

壹

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出來事だと云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覺えてゐるかと云ふと、其頃僕は東京大學の鐵門の眞向ひにあつた、上條と云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上條が明治十四年に自火で燒けた時、僕も燒け出された一人であつた。その火事のあつた前年の出來事だと云ふことを、僕は覺えてゐるからである。

上條に下宿してゐるものは大抵醫科大學の學生ばかりで、其外は大學の附屬病院に通ふ患者なんぞであつた。大抵どの下宿屋にも特別に幅を利かせてゐる客があるもので、さう云ふ客は第一金廻りが好く、小氣が利いてゐて、お上さんが箱火鉢を控へて据わつてゐる前の廊下を通るときは、きつと聲を掛ける。時々は其箱火鉢の向側にしやがんで、世間話の一つもする。部屋で酒盛をして、わざ〳〵肴を拵へさせたり何かして、お上さんに面倒を見させ、我儘をするやうでゐて、實は帳場に得の附くやうにする。先づざつとかう云ふ性の男が尊敬を受け、それに乘じて威福を擅にすると云ふのが常である。然るに上條で幅を利かせてゐる、僕の壁隣の男は頗る趣を殊にしてゐた。

此男は岡田と云ふ學生で、僕より一學年若いのだから、兎に角もう卒業に手が屆いてゐた。岡田がどんな男だと云ふことを說明するには、その手近な、際立つた性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云ふことである。色の蒼い、ひよろひよろした美男ではない。血色が好くて、體格ががつしりしてゐた。僕はあんな顏の男を見たことが殆ど無い。強ひて求めれば、大分あの頃から後になつて、僕は靑年時代の川上眉山と心安くなつた。あのとうとう窮境に陷つて悲慘の最期を遂げた文士の川上である。あれの靑年時代が一寸岡田に似てゐた。尤も當時競漕の選手になつてゐた岡田は、體格では遙かに川上なんぞに優つてゐたのである。

容貌は其持主を何人にも推薦する。併しそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出來ない。そこで性行はどうかと云ふと、僕は當時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少からうと思つてゐた。學期毎に試驗の點數を爭つて、特待生を狙ふ勉强家ではない。遣るだけの事をちやんと遣つて、級の中位より下には下らずに進んで來た。遊ぶ時間は極つて遊ぶ。夕食後に必ず散步に出て、十時前には間違なく歸る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、さうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐるとか、暑中休暇に故鄕に歸るとかの外は、壁隣の部屋に主人のゐる時刻と、留守になつてゐる時刻とが狂はない。誰でも時計を號砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問ひに行く。上條の帳場の時計も折々岡田の懷中時計に據つて匡されるのである。周圍の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信賴すべき男だと云ふ感じが强くなる。上條のお上さんがお世辭を言はない、破格な金遣ひをしない岡田を褒め始めたのは、此信賴に本づいてゐる。それには月々の勘定をきちんとすると云ふ事實が與かつて力あるの

は、ことわるまでもない。

「岡田さんを御覽なさい」と云ふ詞が、屢々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のやうなわけには行かないさ」と先を越して云ふ學生がある。此の如くにして岡田はいつとなく上條の標準的下宿人になつたのである。

岡田の日々の散歩は大抵道筋が極まつてゐた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお齒黑のやうな水の流れ込む不忍の池の北側を廻つて、上野の山をぶらつく。それから松源や雁鍋のある廣小路、狹い賑やかな仲町を通つて、湯島天神の社内に這入つて、陰氣な臭橘寺の角を曲がつて歸る。併し仲町を右へ折れて、無縁坂から歸ることもある。これが一つの道筋である。或る時は大學の中を拔けて赤門に出る。鐵門は早く鎖されるので、患者の出入する長屋門から這入つて拔けるのである。後に其頃の長屋門が取り拂はれたので、今春木町から衝き當る處にある、あの新しい黑い門が出來たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、粟餅の曲擣をしてゐる店の前を通つて、神田明神の社内に這入る。そのころまで目新しかつた目金橋へ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道へ戻つて、狹い西側の横町のどれかを穿つて、矢張臭橘寺の前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめつたに歩かない。

此散歩の途中で、岡田が何をするかと云ふと、ちよいちよい古本屋の店を覗いて歩く位のものであつた。上野廣小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒殘つてゐる。お成道にも當時の儘の店がある、柳原のは全く廢絶してしまつた。本郷通りのは殆ど皆場所も持主も代つてゐる。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめつたにないのは、一體森川町は町幅も狹く、窮屈な處であつたからでもあるが、當時古本屋が西側に一軒しかなかつたのも一つの理由であつた。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云へば、文學趣味があるからであつた。併しまだ新しい小説や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鐵幹の歌の生れぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雜誌を讀んで、槐南、夢香なんぞの香奩體の詩を最も氣の利いた物だと思ふ位の事であつた。僕も花月新誌の愛讀者であつたから、記憶してゐる。西洋小説の翻譯と云ふものは、あの雜誌が始て出したのである。なんでも西洋の或る大學の學生が、歸省する途中で殺される話で、それを談話體に譯した人は神田孝平さんであつたと思ふ。それが僕の西洋小説と云ふものを讀んだ始であつたやうだ。さう云ふ時代だから、岡田の文學趣味も漢學者が新しい世間の出來事を詩文に書いたのを、面白がつて讀む位に過ぎなかつたのである。

僕は人附合ひの餘り好くない性であつたから、學校の構内で好く逢ふ人にでも、用事がなくては話をしない。同じ下宿屋にゐる學生なんぞには、帽を脱いで禮をするやうなことも少かつた。それが岡田と少し心安くなつたのは、古本屋が媒をしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のやうに極まつてはゐなかつたが、脚が達者で縱横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて見る。さう云ふ時に、度々岡田と店先で落ち合ふ。「好く古本屋で出くはすぢやないか」と云ふやうな事を、どつちからか言ひ出したのが、親しげに物を言つた始である。

其頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鉤なりに縁臺を出して、古本を曝してゐる店があつた。そこで或る時僕が唐本の金瓶梅を見附けて、亭主に値を問ふと、七圓だと云つた。五圓に負けてくれと云ふと、「先刻岡田さんが六圓なら買

ふと仰やいましたが、おことわり申したのです」と云ふ。偶然僕は工面が好かつたので言値で買つた。二三日立つてから、岡田に逢ふと、向うからかう云ひ出した。

「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶梅を買つてしまつたぢやないか。」

「さうさう。君が値を附けて折り合はなかつたと、本屋が云つてゐたよ。君欲しいのなら讓つて上げよう。」

「なに。隣だから君の讀んだ跡を借して貰へば好いさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今迄長い間壁隣に住まひながら、交際せずにゐた岡田と僕とは、往つたり來たりするやうになつたのである。

貳

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であつたが、まだ今のやうな巍々たる土塀で圍つてはなかつた。きたない石垣が築いてあつて、苔蒸した石と石との間から、歯朶や杉菜が覗いてゐた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のやうにでもなつてゐるか、岩崎の邸の中に這入つて見たことのない僕は、今でも知らないが、兎に角當時は石垣の上の所に、雜木が生えたい程生えて、育ちたい程育つてゐるのが、往來から根まで見えてゐて、その根に茂つてゐる草もめつたに刈られることがなかつた。

坂の北側はけちな家が軒を並べてゐて、一番體裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいしもた屋、その外は手職をする男なんぞの住ひであつた。店は荒物屋に烟草屋位しかなかつた。中に往來の人の目に附くのは、裁縫を教へてゐる女の家で、晝間は格子窓の内に大勢の娘が集まつて爲事をしてゐた。時候が好くて、窓を明けてゐるときは、我々學生が通ると、いつもぺちやくちや盛んにしやべつてゐる娘共が、皆顏を擧げて往來の方を見る。そして又話をし續けたり、笑つたりする。その隣に一軒格子戸を綺麗に拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折々夕方に通つて見ると、打水のしてある家があつた。寒い時は障子が締めてある。暑い時は竹簾が卸してある。そして爲立物師の家の賑やかな爲めに、此家はいつも際立つてひつそりしてゐるやうに思はれた。

此話の出來事のあつた年の九月頃、岡田は郷里から歸つて間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、假に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶらぶら無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯歸りの女が彼爲立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候が大ぶ秋らしくなつて、人が涼みにも出ぬ頃なので、一時人通りの絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで歸つて、戸を明けようとしてゐた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返つて岡田と顏を見合せたのである。

紺縮の單物に、黒繻子と茶獻上との腹合せの帶を締めて、纖い左の手に手拭やら石鹸箱やら糠袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを懈げに持つて、右の手を格子に掛けた儘振り返つた女の姿が、岡田には別に深い印象をも與へなかつた。併し結ひ立ての銀杏返しの鬢が蟬の羽のやうに薄いのと、鼻の高い、細長い、稍寂しい顏が、どこの加減か額から頬に掛けて少し扁たいやうな感じをさせるのとが目に留まつた。岡田は只それ丈の刹那の知覺を閲歴したと云ふに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れてゐた。

併し二日ばかり立つてから、岡田は又無縁坂

の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の前近く來た時、先きの日の湯歸りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。竪に竹を打ち附けて、横に二段ばかり細く削つた木を渡して、それを蔓で卷いた肱掛窓がある。その窓の障子が一尺ばかり明いてゐて、卵の殻を伏せた萬年青の鉢が見えてゐる。こんな事を、幾分かの注意を拂つて見た爲めに、歩調が少し緩くなつて、家の眞ん前に來掛かるまでに、數秒時間の餘裕を生じた。

そして丁度眞ん前に來た時に、意外にも萬年青の鉢の上の、今まで鼠色の闇に鎖されてゐた背景から、白い顏が浮き出した。しかもその顏が岡田を見て微笑んでゐるのである。

それからは岡田が散歩に出て、此家の前を通る度に、女の顏を見ぬことは殆ど無い。岡田の空想の領分に折々此女が闖入して來て、次第に我物顏に立ち振舞ふやうになる。女は自分の通るのを待つてゐるのだらうか、それともなんの意味もなく外を見てゐるので、偶然自分と顏を合せることになるのだらうかと云ふ疑問が起る。そこで湯歸りの女を見た日より前に溯つて、あの家の窓から女が顏を出してゐたことがあつたか、どうかと思つて考へて見るが、無縁坂の片側町で一番騒がしい爲立物師の家の隣は、いつも綺麗に掃除のしてある、寂しい家であつたと云ふ記念の外には、何物も無い。どんな人が住んでゐるだらうかと疑つたことは慥かにあるやうだが、それさへなんとも解決が附かなかつた。どうしてもあの窓はいつも障子が締まつてゐたり、簾が降りてゐたりして、その奥はひつそりしてゐたやうである。さうして見ると、あの女は近頃外に氣を附けて、窓を開けて自分の通るのを待つてゐることになつたらしいと、岡田はとうとう判斷した。

通る度に顏を見合せて、その間々にはこんな事を思つてゐるうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなつて、二週間も立つた頃であつたか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで禮をした。其時微白い女の顏がさつと赤く染まつて、寂しい微笑の顏が華やかな笑顏になつた。それからは岡田は極まつて窓の女に禮をして通る。

參

岡田は虞初新誌が好きで、中にも大鐵椎傳は全文を暗誦することが出來る程であつた。それで餘程前から武藝がして見たいと云ふ願望を持つてゐたが、つい機會が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕をし始めてから、熱心になり、仲間に推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此一面の意志が發展したのであつた。

同じ虞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青傳であつた。あの傳に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を閾の外に待たせて置いて、徐かに脂粉の粧を凝すとでも云ふやうな、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであらう。女と云ふものは岡田の爲めには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬやうに感ぜられた。それには平生香奩體の詩を讀んだり、sentimental な、fatalistisch な明清の所謂才人の文章を讀んだりして、知らず識らずの間にその影響を受けてゐた爲めもあるだらう。

岡田は窓の女に會釋をするやうになつてから餘程久しくなつても、其女の身の上を探つて見ようともしなかつた。無論家の樣子や、女の身なりで、圍物だらうとは察した。併し別段それを不快にも思はない、名も知らぬが、強ひ

て知らうともしない。標札を見たら、名が分かるだらうと思つたこともあるが、窓に女のゐる時は女に遠慮をする。さうでない時は近所の人や、往來の人の人目を憚る。とうとう庇の蔭になつてゐる小さい木札に、どんな字が書いてあるか見ずにゐたのである。

肆

窓の女の種性は、實は岡田を主人公にしなくてはならぬ此話の事件が過去に屬してから聞いたのであるが、都合上ここでざつと話すことにする。

まだ大學醫學部が下谷にある時の事であつた。灰色の瓦を漆喰で塗り込んで、碁盤の目のやうにした壁の所々に、腕の太さの木を竪に竝べて嵌めた窓の明いてゐる、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舍になつてゐて、學生はその中で、ちと氣の毒な申分だが、野獸のやうな生活をしてゐた。勿論今はこんな窓を見ようと思つたつて、僅かに丸の内の櫓に殘つてゐる位のもので、上野の動物園で獅子や虎を飼つて置く檻の格子なんぞは、あれよりは遙かにきやしやに出來てゐる。

寄宿舍には小使がゐた。それを學生は外使に使ふことが出來た。白木綿の兵兒帶に、小倉袴を穿いた學生の買物は、大抵極まつてゐる。所謂「羊羹」と「金平糖」とである。羊羹と云ふのは焼芋、金平糖と云ふのははじけ豆であつたと云ふことも、文明史上の參考に書き殘して置く價値があるかも知れない。小使は一度の使賃として二錢貰ふことになつてゐた。

この小使の一人に末造と云ふのがゐた。外のは鬚の栗の殼のやうに伸びた中に、口があんごり開いてゐるのに、此男はいつも綺麗に剃つた鬚の痕の青い中に、脣が緊く結ばれてゐた。小倉服も外のは汚れてゐるに、此男のはさつぱりしてゐて、どうかすると唐棧か何かを着て前掛をしてゐるのを見ることがあつた。

僕にいつ誰が話したか知らぬが、金がない時は末造が立て替へてくれると云ふことを僕は聞いた。勿論五十錢とか一圓とかの金である。それが次第に五圓貸す十圓貸すと云ふやうになつて、借る人に證文を書かせる。期限をさせる。とうとう一人前の高利貸になつた。一體元手はどうしたのか。まさか二錢の使賃を貯蓄したのでもあるまいが、一匹の人間が持つてゐる丈の精力を一事に傾注すると、實際不可能な事はなくなるかも知れない。

兎に角學校が下谷から本郷に遷る頃には、もう末造は小使ではなかつた。併しその頃池の端へ越して來た末造の家へは、無分別な學生の出入が絶えなかつた。

末造は小使になつた時三十を越してゐたから、貧乏世帶ながら、妻もあれば子もあつたのである。それが高利貸で成功して、池の端へ越してから後に、醜い、口やかましい女房を慊く思ふやうになつた。

その時末造が或る女を思ひ出した。それは自分が練塀町の裏からせまい露地を拔けて大學へ通勤する時、折々見たことのある女である。どぶ板のいつもこはれてゐるあたりに、年中戸が半分締めてある、薄暗い家があつて、夜その前を通つて見れば、簷下に車の附いた屋臺が挽き込んであるので、さうでなくても狹い露地を、體を斜にして通らなくてはならない。最初末造の注意を惹いたのは、此家に稽古三味線の音することであつた。それからその三味線の音の主が、十六七の可哀らしい娘だと云ふことを知つた。貧しさうな家には似ず、此娘がいつも身綺麗にしてゐて、着物も小ざつぱりとした物を着てゐた。戸口にゐても、人が通るとすぐ薄暗い家の中へ引つ込んでしまふ。何事にも注意深

い性質の末造は、わざわざ探るともなしに、此娘が玉と云ふ子で、母親がなくて、親父と二人暮らしでゐると云ふ事、その親父は秋葉の原に飴細工の床店を出してゐると云ふ事などを知つた。そのうちに此裏店に革命的變動が起つた。側の簷下に引き入れてあつた屋臺が、夜通つて見てもなくなつた。いつもひつそりしてゐた家とその周圍とへ、當時の流行語で言ふと、開化と云ふものが襲つてでも來たのか、半分こはれて、半分はね返つてゐたどぶ板が張り替へられたり、入口の模様替が出來て、新しい格子戸が立てられたりした。或る時入口に靴の脱いであるのを見た。それから間もなく、此家の戸口に新しい標札が打たれたのを見ると、巡査何の何某と書いてあつた。末造は松永町から、仲徒町へ掛けて、色々な買物をして廻る間に、又探るともなしに、飴屋の爺いさんの内へ、婿入のあつた事を慥めた。標札にあつた巡査がその婿なのである。お玉を目の玉よりも大切にしてゐた爺いさんは、こはい顔のおまはりさんに娘を渡のを、天狗にでも攫はれるやうに思ひ、その婿殿が自分の内へ這入り込んで來るのを、此上もなく窮屈に思つて、平生心安くする誰彼に相談したが、一人もことわつてしまへとはつきり云つてくれるものがなかつた。それ見た事か。こつちとらが宜い所へ世話をしようと云ふのに、一人娘だから出されぬのなんのと、面倒な事を言つてゐて、とうとうそんなことわり憎い婿さんが來るやうになつたと云ふものもある。お前方の方で厭なのなら、遠い所へでも越すより外あるまいが、相手がおまはりさんで見ると、すぐにどこへ越したと云ふことを調べて、その先へ掛け合ふだらうから、どうも逃げ果せることは出來まいと、威すやうに云ふものもある。中にも一番物分かりの好いと云ふ評判のお上さんの話がかうだ。「あの子はあんな好い器量で、お師匠さんも藝が出來さうだと云つて褒めてお出だから、早く藝者の下地子にお出しと、わたしがさう云つたぢやありませんか。一人もののおまはりさんと來た日には、一軒一軒見て廻るのだから、子柄の好いのを内に置くと、いやおうなしに連つて行つてしまひなさる。どうもさう云ふ方に見込まれたのは、不運だとあきらめるより外爲方がないね」と云ふやうな事を言つたさうだ。末造が此話を聞いてから、やつと三月ばかりも立つた頃であつただらう。飴細工屋の爺いさんの家に、或る朝戸が締まつてゐて、戸に「貸家差配松永町西のはづれにあり」と書いて張つてあつた。そこで又近所の噂を、買物の序でに聞いて見ると、おまはりさんには國に女房も子供もあつたので、それが出し拔けに尋ねて來て、大騒ぎをして、お玉は井戸へ身を投げると云つて飛び出したのを、立聞をしてゐた隣の上さんがやうやう止めたと云ふことであつた。おまはりさんが婿に來ると云ふ時、爺いさんは色色の人に相談したが、その相談相手の中には一人も爺いさんの法律顧問になつてくれるものがなかつたので、爺いさんは戸籍がどうなつてゐるやら、どんな屆がしてあるやら、一切無頓着でゐたのである。巡査が髭を拈つて、手續は總て己がするから好いと云ふのを、少しも疑はなかつたのである。その頃松永町の北角と云ふ雜貨店に、色の白い圓顔で腮の短い娘がゐて、學生に「頤なし」と云つてゐた。この娘が末造にかう云つた。「本當にたあちやんは可哀さうでございますわねえ。正直な子だもんですから、全くのお婿さんだと思つてゐたのに、おまはりさんの方では、下宿したやうな積になつてゐたと云ふのですもの」と云つた。坊主頭の北角の親爺が傍から口を出した。「爺いさんも氣の毒ですよ。町内のお方にお恥かしくて、此儘にしてはゐられないと云つて、西鳥越の方へ越して

行きましたよ。それでも子供衆のお得意のある所でなくては、元の商賣が出來ないと云ふので、秋葉の原へは出てゐるさうです。屋臺も一度賣つてしまつて、佐久間町の古道具屋の店に出てゐたのを、わけを話して取り返したと云ふことです。そんな事やら、引越やらで、隨分掛かつた筈ですから、さぞ困つてゐますでせう。おまはりさんが國の女房や子供を干し上げて置いて、大きな顏をして酒を飲んで、上戸でもない爺いさんに相手をさせてゐた間、まあ、一寸樂隱居になつた夢を見たやうなものですな」と、頭をつるりと撫でて云つた。それから後、末造は飴屋のお玉さんの事を忘れてゐたのに、金が出來て段々自由が利くやうになつたので、ふいと又思ひ出したのである。

今では世間の廣くなつてゐる末造の事だから、手を廻して西鳥越の方を尋ねさせて見ると、柳盛座の裏の車屋の隣に、飴細工屋の爺いさんのゐるのを突き留めた。お玉も娘でゐた。そこで或る大きい商人が妾に欲しいと云ふがどうだと、人を以て掛け合ふと、最初は妾になるのはいやだと云つてゐたが、おとなしい女だけに、とうとう親の爲めだと云ふので、松源で檀那にお目見えをすると云ふ處まで話が運んだ。

伍

金の事より外、何一つ考へたことのない末造も、お玉のありかを突き留めるや否や、まだ先方が承知するかせぬか知れぬうちに、自分で近所の借家を搜して歩いた。何軒も見た中で、末造の氣に入つた店が二軒あつた。一つは同じ池の端で、自分の住まつてゐる福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かつた蕎麥屋の蓮玉庵との眞ん中位の處で、池の西南の隅から少し蓮玉庵の方へ寄つた、往來から少し引つ込めて立てた家である。四つ目垣の内に、高野槇が一本とちやぼ檜葉が二三本と植ゑてあつて、植木の間から、竹格子を打つた肘懸窓が見えてゐる。貸家の札が張つてあるので這入つて見ると、まだ人が住んでゐて、五十ばかりの婆あさんが案内をして中を見せてくれた。その婆あさんが問はずがたりに云ふには、主人は中國邊の或る大名の家老であつたが、廢藩になつてから、小使取りに大藏省の屬官を勤めてゐる。もう六十幾つとかになるが、綺麗好きで、東京中を歩いて、新築の借家を搜して借りるが、少し古びて來ると、すぐ引き越す。勿論子供は別になつてしまつてから久しくなるので、家を荒すやうな事はないが、どうせ住んでゐるうちに古くなるので、障子の張替もしなくてはならず、疊の表も換へなくてはならない。そんな面倒をなる丈せぬやうにして、さつさと引き越すのだと云ふのである。婆あさんはそれが厭でならぬので、知らぬ人にも夫の蔭訴訟をする。「この内なんぞもまだこんなに綺麗なのに、もう越すと申すのでございますよ」と云つて、内ぢゆうを細かに見せてくれた。どこからどこまで、可なり綺麗に掃除がしてある。末造は一寸好いと思つて、敷金と家賃と差配の名とを、手帳に書き留めて出た。

今一つは無縁坂の中程にある小家である。これは札も何も出てゐなかつたが、賣りに出たのを聞いて見に行つた。持主は湯島切通しの質屋で、そこの隱居がつい此間まで住んでゐたのが亡くなつたので、婆あさんは本店へ引き取られたと云ふのである。隣が裁縫の師匠をしてゐるので、少し騷がしいが、わざわざ隱居所に木なんぞを選んで立てたもののゆゑ、どことなく住心地が好ささうである。入口の格子戸から、花崗石を塗り込めた敲きの庭まで、小ざつぱりと奥床しげに出來てゐる。

末造は一晩床の上に寢轉んで、二つの中どれにしようかと考へた。傍には女房が子供を寢か

さうと思つて、自分も一しよに寐入つてしまつて、大きな口を開いて、女らしくない鼾をしてゐる。亭主が夜貸金の利廻しを考へて、いつまでも眠らずにゐるのは常の事なので、女房は何時まで亭主が目を開いてゐようが、少しも氣になんぞはせぬのである。末造は腹のうちで可笑しくて溜まらない。考へつつ女房の顔を見て、かう思つた。「まあ、同じ女でもこんな面をしてゐるのもある。あのお玉は大ぶ久しく見ないが、あの時はまだ子供上がりであつたのに、おとなしい中に意氣な處のある、震ひ附きたいやうな顔をしてゐた。さぞ此頃は女振を上げてゐるだらうな。顔を見るのが樂みだな。かかあ奴。平氣で寐てけつかる。己だつて、いつも金のことばかり考へてゐるのだと思ふと、大違ひだぞ。おや。もう蚊が出やがつた。下谷はこれだから厭だ。そろそろ蚊屋を吊らなくちやあ、かかあは好いが、子供が食はれるだらう。」こんな事を思つては、又家の事を考へて見る。どうか、かうか斷案に到着したらしく思つたのは、一時過ぎであつた。それはかうである。「あの池の端の家は、人は見晴しがあつて好いなんぞと云ふかも知れないが、見晴しは此家で澤山だ。家賃が安いが、借家となると何やかや手が掛かる。それになんとなく開け廣げたやうな場所で、人の目に着きさうだ。うつかり窓でもあけてゐて、子供を連れて仲町へ出掛けるかかあにでも見られようものなら面倒だ。無縁坂の方は陰氣なやうだが、學生が散歩に出て通る位より外に、人の餘り通らない處になつてゐる。一時に金を出して買ふのはおつくうなやうだが、木道具の好いのが使つてあるわりに安いから、保險でも附けて置けばいつ賣ることになつても元値は取れると思つて安心してゐられる。無縁坂にしよう、しよう。己が夕方にでもなつて、湯にでも行つて、氣の利いた支度をして、かかあに好い加減な事を言つて、だまくらかして出掛けるのだな。そしてあの格子戸を開けて、ずつと這入つて行つたら、どんな顔をするだらう。お玉の奴め。猫か何かを膝にのつけて、さびしがつて待つてゐやがるだらうなあ。勿論お作りをして待つてゐるのだ。着物なんぞはどうでもして遣る。待てよ。馬鹿な錢を使つてはならないぞ。質流れにだつて、立派なものがある。女一人に着物や頭の物の贅澤をさせるには、世間の奴のするやうな、馬鹿を盡さなくても好い。隣の福地さんなんぞは、己の内より大きな構をしてゐて、數寄屋町の藝者を連れて、池の端をぶら附いて、書生さんを羨ましがらせて、好い氣になつてゐなさるが、内證は火の車だ。學者が聞いてあきれらあ。筆尖で旨い事をすりやあ、お店ものだつてお拂箱にならあ。おう、さうさう。お玉は三味線が彈けたつけ。爪彈で心意氣でも聞せてくれるやうだと好いが、巡査の上さんになつたより外に世間を知らずにゐるのだから、駄目だらうなあ。お笑ひなさるからいやだわとか、なんとか云つて、彈けと云つても、なかなか彈かないだらうて。ほんになんに附けても、はにかみやあがるだらう。顔を赤くしてもぢもぢするに違ひない。己が始て行つた晩には、どうするだらう。」空想は縱横に馳騁して底止する所を知らない。彼此するうちに、想像が切れ切れになつて、白い肌がちらつく。囁きが聞える。末造は好い心持に寐入つてしまつた。傍に上さんは相變らず鼾をしてゐる。

陸

松源の目見えと云ふのは、末造が爲めには一の Fête であつた。一口に爪に火を點す抔とは云ふが、金を溜める人にはいろいろある。細かい所に氣を附けて、塵紙を二つに切つて置いて使つたり、用事を葉書で濟ますために、顯微鏡

がなくては讀まれぬやうな字を書いたりするのは、どの人にも共通してゐる性質だらうが、それを絶對的に自己の生活の全範圍に及ぼして、眞に爪に火を點す人と、どこかに一つ穴を開けて、息を拔くやうにしてゐる人とがある。これまで小說に書かれたり、芝居に仕組まれたりしてゐる守錢奴は、殆ど絶對的な奴ばかりのやうである。活きた、金を溜める男には、實際さうでないのが多い。吝な癖に、女には目がないとか、不思議に食奢だけはするとか云ふのがそれである。前にもちよつと話したやうであつたが、末造は小綺麗な身なりをするのが道樂で、まだ大學の小使をしてゐた時なんぞに、休日になると、お定まりの小倉の筒袖を脱ぎ棄てて、氣の利いた商人らしい着物に着換へるのであつた。そしてそれを一種の樂みにしてゐた。學生どもが稀に唐棧づくめの末造に邂逅して、びつくりすることのあつたのは、かうしたわけである。そこで末造には、此外にこれと云ふ道樂がない。藝娼妓なんぞに掛かり合つたこともなければ、料理屋を飲んで歩いたこともない。蓮玉で蕎麥を食ふ位が既に奢侈の一つになつてゐて、女房や子供は餘程前まで、かう云ふ時連れて行つて貰ふことが出來なかつた。それは女房の身なりを自分の支度に釣り合ふやうにはしてゐなかつたからである。女房が何かねだると、末造はいつも「馬鹿を言ふな、手前なんぞは己とは違ふ、己は附合があるから、爲方なしにしてゐるのだ」と云つて撥ね附けたのである。その後大ぶ金が子を生んでからは、末造も料理屋へ出這入することがあつたが、これはおほ勢の寄り合ふ時に限つてゐて、自分丈が客になつて行くのではなかつた。それがお玉に目見えをさせると云ふことになつて、ふいと晴がましい solennel な心持になつて目見えは松源にしようと云ひ出したのである。

さていよいよ目見えをさせようとなつた時、避くべからざる問題が出來た。それはお玉さんの支度である。お玉さんのばかりなら好いが、爺いさんの支度迄して遣らなくてはならないことになつた。これには中に立つて口を利いた婆あさんも頗る窮したが、爺いさんの云ふことは娘が一も二もなく同意するので、それを強ひて抑へようとすると、根本的に談判が破裂しないにも限らぬと云ふ狀況になつたから爲方がない。爺いさんの申分はざつとかうであつた。

「お玉はわたしの大事な一人娘で、それも餘所の一人娘とは違つて、わたしの身よりと云ふものは、あれより外には一人もない。わたしに亡くなつた女房一人をたよりにして、寂しい生涯を送つたものだが、其女房が三十を越しての初產でお玉を生んで置いて、とうとうそれが產褥で亡くなつた。貰乳をして育ててゐると、やつと四月ばかりになつた時、江戶中に流行つた麻疹になつて、お醫者が見切つてしまつたのを、わたしは商賣も何も投遣にして介抱して、やつと命を取り留めた。世間は物騷な最中で、井伊樣がお殺されなすつてから二年目、生麥で西洋人が斬られたと云ふ年であつた。それからと云ふものは、店も何もなくしてしまつたわたしが、何遍もいつその事死んでしまはうかと思つたのを、小さい手でわたしの胸をいぢつて、大きい目でわたしの顏を見て笑ふ、可哀いお玉を一しよに殺す氣になられないばつかりに、出來ない我慢をして一日一日と命を繋いでゐた。お玉が生れた時、わたしはもう四十五で、お負に苦勞をし續けて年より更けてゐたのだが、一人口は食へなくても二人口は食へるなどと云つて、小金を持つた後家さんの所へ、入壻に世話をしよう、子供は里にでも遣つてしまへと、親切に云つてくれた人もあつたが、わたしはお玉が可哀さに、そつけもなくことわつた。それまで

にして育てたお玉を、貧すれば鈍するとやら云ふわけで、飛んだ不實な男の慰物にせられたのが、悔やしくて悔やしくてならないのだ。爲合せな事には、好い娘だと人も云つて下さるあの子だから、どうか堅氣な人に遣りたいと思つても、わたしと云ふ親があるので、誰も貰はうと云つてくれぬ。それでも囲物や妾には、どんな事があつても出すまいと思つてゐたが、堅い檀那だと、お前さん方が仰やるから、お玉も來年は二十になるし、餘り薹の立たないうちに、どうかして遣りたさに、とうとうわたしは折れ合つたのだ。さうした大事なお玉を上げるのだから、是非わたしが一しよに出て、檀那にお目に掛からなくてはならぬ」と云ふのである。

此話を持ち込まれた時、末造は自分の思はくの少し違つて來たのを慊ず思つた。それはお玉を松源へ連れて來て貰つたら、世話をする婆あさんをなる丈早く歸してしまつて、お玉と差向ひになつて樂まうと思つたあてがはづれさうになつたからである。どうも父親が一しよに來るとなると、意外に晴がましい事になりさうである。末造自身も一種の晴がましい心持がしてゐるが、それはこれまで抑へ抑へて來た欲望の縛を解く第一歩を踏み出さうと云ふ、門出のよろこびの意味で、tête-à-tête はそれには第一要件になつてゐた。ところがそこへ親父が出て來るとなると、その晴がましさの性質が丸で變つて來る。婆あさんの話に聞けば、親子共物堅い人間で、最初は妾奉公は厭だと云つて、二人一しよになつてことわつたのを、婆あさんが或る日娘を外へ呼んで、もう段々稼がれなくなるお父つさんに樂がさせたくはないかと云つて、いろいろに說き勸めて、とうとう合點させて、その上で親父に納得させたと云ふことである。それを聞いた時は、そんな優しい、おとなしい娘を手に入れることが出來るのかと心中竊かに喜んだのだが、それ程物堅い親子が揃つて來るとなると、松源での初對面はなんとなく壻が舅に見參すると云ふ風になりさうなので、その方角の變つた晴がましさは、末造の熱した頭に一杓の冷水を浴せたのである。

併し末造は飽くまで立派な實業家だと云ふ觸込を實にしなくてはならぬと思つてゐるので、先方へはおほ様な處が見せたさに、とうとう二人の支度を引き受けた。それにはお玉を手に入れた上では、どうせ親父の身の上も棄てては置かれぬのだから、只後ですることが先になるに過ぎぬと云ふ諦めも手傳つて、末造に決心させたのである。

そこで當前なら支度料幾らと云つて、纏まつた金を先方へ渡すのであるが、末造はさうはしない。身なりを立派にする道樂のある末造は、自分丈の爲立物をさせる家があるので、そこへ事情を打ち明けて、似附かはしい二人の衣類を誂へた。只寸法丈を世話を賴んだ婆あさんの手でお玉さんに問はせたのである。氣の毒な事には、この油斷のない、吝な末造の處置を、お玉親子は大そう善意に解釋して、現金を手に渡されぬのを、自分達が尊敬せられてゐるからだと思つた。

漆

上野廣小路は火事の少い所で、松源の焼けたことは記憶にないから、今もその座鋪があるかも知れない。どこか靜かな、小さい一間をと誂へて置いたので、南向の玄關から上がつて、眞つ直に廊下を少し步いてから、左へ這入る六疊の間に、末造は案內せられた。

印絆纏を着た男が、澁紙の大きな日覆を卷いてゐる最中であつた。

「どうも暮れにしまひますまでは夕日が入れますので」と、案內をした女中が說明をして置いて

下がつた。眞僞の分からぬ肉筆の浮世繪の軸物を掛けて、一輪插に山梔の花を活けた床の間を背にして座を占めた末造は、鋭い目であたりを見廻した。

二階と違つて、その頃からずつと後に、殺風景にも競馬の埒にせられて、それから再び滄桑を閲して、自轉車の競走場になつた、あの池の縁の往來から見込まれぬやうにと、切角の不忍の池に向いた座敷の外は籠塀で圍んである。塀と家との間には、帶のやうに狹く長い地面がある切なので、固より庭と云ふ程の物は作られない。末造の据わつてゐる所からは、二三本寄せて植ゑた梧桐の、油雜巾で拭いたやうな幹が見えてゐる。それから春日燈籠が一つ見える。その外には飛び飛びに立つてゐる、小さい側栢があるばかりである。暫く照り續けて、廣小路は往來の人の足許から、白い土烟が立つのに、この塀の内は打水をした苔が青々としてゐる。

間もなく女中が蚊遣と茶を持つて來て、注文を聞いた。末造は連れが來てからにしようと云つて、女中を立たせて、ひとり烟草を呑んでゐた。初め据わつた時は少し熱いやうに思つたが、暫く立つと臺所や便所の邊を通つて、いろいろの物の香を、微かに帶びた風が、廊下の方から折折吹いて來て、傍に女中の置いて行つた、よごれた團扇を手に取るには及ばぬ位であつた。

末造は床の間の柱に寄り掛かつて、烟草の烟を輪に吹きつつ、空想に耽つた。好い娘だと思つて見て通つた頃のお玉は、なんと云つてもまだ子供であつた。どんな女になつただらう。どんな樣子をして來るだらう。兎に角爺いさんが附いて來ることになつたのは、奈何にもまづかつた。どうにかして爺いさんを早く歸してしまふことは出來ぬか知らんなんぞと思つてゐる。

二階では三味線の調子を合せはじめた。

廊下に二三人の足音がして、「お連樣が」と女中が先へ顏を出して云つた。「さあ、ずつとお這入なさいよ。檀那はさばけた方だから、遠慮なんぞなさらないが好い。」轡蟲の鳴くやうな調子でかう云ふのは、世話をしてくれた、例の婆あさんの聲である。

末造はつと席を起つた。そして廊下に出て見ると、腰を屈めて、曲角の壁際に躊躇してゐる爺いさんの背後に、怯れた樣子もなく、物珍らしさうにあたりを見て立つてゐるのがお玉であつた。ふつくりした圓顏の、可哀らしい子だと思つてゐたに、いつの間にか細面になつて、體も前よりはすらりとしてゐる。さつぱりとした銀杏返しに結つて、こんな場合に人のする厚化粧なんぞはせず、殆ど素顏と云つても好い。それが想像してゐたとは全く趣が變つてゐて、しかも一層美しい。末造はその姿を目に吸ひ込むやうに見て、心の内に非常な滿足を覺えた。お玉の方では、どうせ親の貧苦を救ふために自分を賣るのだから、買手はどんな人でも構はぬと、捨身の決心で來たのに、色の淺黑い、鋭い目に愛敬のある末造が、上品な、目立たぬ好みの支度をしてゐるのを見て、捨てた命を拾つたやうに思つて、これも刹那の滿足を覺えた。

末造は爺いさんに、「ずつとあつちへお通りなすつて下さい」と丁寧に云つて、座鋪の方を指さしながら、目をお玉さんの方へ移して、「さあ」と促した。そして二人を座鋪へ入れて置いて、世話をする婆あさんを片蔭へ呼んで、紙に包んだ物を手に握らせて、何やら囁いた。婆あさんはお歯黑を剝がした痕のきたない歯を見せて、恭しいやうな、人を馬鹿にしたやうな笑ひやうをして、頭を二三遍屈めて、その儘跡へ引き返して行つた。

座鋪に歸つて、親子のものの遠慮して這入口に一塊になつてゐるのを見て、末造は愛想好く席を進めさせて、待つてゐた女中に、料理の

注文をした。間もなく「おとし」を添へた酒が出たので、先づ爺いさんに盃を侑めて、物を言つて見ると、元は相應な暮しをしただけあつて、遽に身なりを拵へて座鋪へ通つた人のやうではなかつた。

最初は爺いさんを邪魔にして、苛々したやうな心持になつてゐた末造も、次第に感情を融和させられて、全く預想しなかつた、しんみりした話をすることになつた。そして末造は自分の持つてゐる限のあらゆる善良な性質を表へ出すことを努めながら、心の奥には、おとなしい氣立の、お玉に信頼する念を起さしめるには、此上もない、適當な機會が、偶然に生じて來たのを喜んだ。

料理が運ばれた頃には、一座はなんとなく一家のものが遊山にでも出て、料理屋に立ち寄つたかと思はれるやうな様子になつてゐた。平生妻子に對しては、「Juan」のやうな振舞をしてゐるので、妻からは或るときは反抗を以て、或るときは屈從を以て遇せられてゐる末造は、女中の立つた跡で、恥かしさに赤くした顏に、つつましやかな微笑を湛へて酌をするお玉を見て、これまで覺えたことのない淡い、地味な歡樂を覺えた。併し末造は此席で幻のやうに浮かんだ幸福の影を、無意識に直覺しつつも、なぜ自分の家庭生活にかう云ふ味が出ないかと反省したり、かう云ふ餘所行の感情を不斷に維持するには、どれ丈の要約がいるか、その要約が自分や妻に充たされるものか、充たされないものかと商量したりする程の、緻密な思慮は持つてゐなかつた。

突然塀の外に、かちかちと拍子木を打つ音がした。續いて「へい、何か一枚御贔屓様を」と云つた。二階にしてゐた三味線の音が止まつて、女中が手摺に掴まつて何か言つてゐる。下では、「い、い、さやうなら成田屋の河内山と音羽屋の直侍を一つ、最初は河内山」と云つて、聲色を使ひはじめた。

銚子を換へに來てゐた女中が、「おや、今晩のは本當のでございます」と云つた。末造には分からなかつた。「本當のだの、譃のだのと云つて、色々ありますかい。」

「いえ、近頃は大學の學生さんが遣つてお廻りになります。」

「矢つ張鳴物入で。」

「えゝ。支度から何から そつくりでございます。でもお聲で分かります。」

「そんなら極まつた人ですね。」

「えゝ、お一人しか、なさる方はございません。」女中は笑つてゐる。

「姉えさん、知つてゐるのだね。」

「こちらへもちよいちよいいらつしやつた方だもんですから。」

爺いさんが傍から云つた。「學生さんにも、御器用な方があるものですね。」

女中は黙つてゐた。

末造が妙に笑つた。「どうせそんなのは、學校では出來ない學生なのですよ。」かう云つて、心の中には自分の所へ、いつも來る學生共の事を考へてゐる。中には隨分職人の眞似をして、小店と云ふ所を冷かすのが面白いなどと云つて、不斷も職人のやうな詞遣をしてゐる人がある。併しまさか眞面目に、聲色を遣つて歩く人があらうとは、末造も思つてゐなかつたのである。

一座の話を黙つて聞いてゐるお玉を、末造がちよつと見て云つた。

「お玉さんは誰が贔屓ですか。」

「わたくし贔屓なんかございませんの。」

爺いさんが詞を添へた。「芝居へ一向まゐりませんのですから。柳盛座がぢき近所なので、町内の娘さん達がみんな先きにまゐりましても、お玉はちつともまゐりません。好きな娘さん達

は、あのどんちやんどんちやんが聞えてゐては内にちつとしてはゐられませんさうで。」

爺いさんの話は、つい娘自慢になりたがるのである。

捌

話が極まつて、お玉は無縁坂へ越して來ることになつた。

所が、末造がひどく簡單に考へてゐた、此引越にも多少の面倒が附き纏つた。それはお玉が父親をなる丈近い所に置いて、ちよいちよい尋ねて行つて、氣を附けて上げるやうにしたいと云ひ出したからである。最初からお玉は、自分が貰ふ給金の大部分を割いて親に遣つて、もう六十を越してゐる親に不自由のないやうに、小女の一人位附けて置かうと考へてゐた。さうするには、今まで住まつた鳥越の車屋と隣合せになつてゐる、見苦しい家に親を置かなくても好い。同じ事なら、もつと近い所へ越させたいと云ふことになつた。丁度見合ひに娘ばかり呼ぶ筈の所へ、親が來るやうになつたと同じわけで、末造は妾宅の支度をしてお玉を迎へさへすれば好いと思つてゐたのに、實際は親子二人の引越をさせなくてはならぬ事になつたのである。

勿論お玉は親の引越は自分が勝手にさせるのだから、一切檀那に迷惑を掛けないやうにしたいと云つてゐる。併しこれを聞せられて見れば、末造も丸で知らぬ顏をしてゐることは出來ない。見合ひをして一層氣に入つたお玉に、例の氣前を見せて遣りたい心持が手傳つて、とうとうお玉が無縁坂へ越すと同時に、兼て末造が見て置いた、今一軒の池の端の家へ親爺も越すといふことになつた。から相談相手になつて見れば、幾らお玉が自分の貰ふ給金の内で萬事濟ましたいと云つたと云つて、見す見す苦しい事をするのを知らぬ顏は出來ず、何かにつけて物入がある。それを末造が平氣で出すのに、世話を燒いてゐる婆あさんの目を瞠ることが度々であつた。

兩方の引越騷ぎが片附いたのは、七月の中頃でもあつたか。うひうひしい詞遣や立居振舞が、ひどく氣に入つたと見えて、金貸業の方で、あらゆる峻烈な性分を働かせてゐる末造が、お玉に對しては柔和な手段の限を盡して、毎晩のやうに無縁坂へ通つて來て、お玉の機嫌を取つてゐた。ここにはちよつと歴史家の好く云ふ英雄の半面と云つたやうな趣がある。

末造は一夜も泊つて行かない。併し毎晩のやうに來る。例の婆あさんが世話をして、梅と云ふ、十三になる小女を一人置いて、臺所で子供の飯事のやうな眞似をさせてゐる丈なので、お玉は次第に話相手のない退屈を感じて、夕方になれば、早く檀那が來てくれれば好いと待つ心になつて、それに氣が附いて、自分で自分を笑ふのである。鳥越にゐた時も、お父つさんが商賣に出た跡で、お玉は留守に獨りで、内職をしてゐたが、もうこれ丈爲上げれば幾らになる、さうしたらお父つさんが歸つて驚くだらうと勵んでゐたので、近所の娘達と親しくしないお玉も、退屈だと思つたことはなかつたのである。それが生活の上の苦勞がなくなると同時に、始て退屈と云ふことを知つた。

それでもお玉の退屈は、夕方になると、檀那が來て慰めてくれるから、まだ好い。可笑しいのは、池の端へ越した爺いさんの身の上で、これも渡世に追はれてゐたのが、急に樂になり過ぎて、自分も狐に撮まれたやうだと思つてゐる。そして小さいランプの下で、これまでお玉と世間話をして過した水入らずの晩が、過ぎ去つた、美しい夢のやうに戀しくてならない。そしてお玉が尋ねて來さうなものだと、絶えずそればかり待つてゐる。所がもう大分日が立つたのに、

お玉は一度も來ない。

　最初一日二日の間、爺いさんは綺麗な家に這入つた嬉しさに、田舍出の女中には、水汲や飯炊させて、自分で片附けたり、掃除をしたりして、ちよいちよい足らぬ物のあるのを思ひ出しては、女中を仲町へ走らせて、買つて來させた。それから夕方になると、女中が臺所でことこと音をさせてゐるのを聞きながら、肘掛窓の外の高野槇の植ゑてある所に打水をして、煙草を喫みながら、上野の山で鴉が騷ぎ出して、中島の辨天の森や、蓮の花の咲いた池の上に、次第に夕靄が漂つて來るのを見てゐた。爺いさんは難有い、結構だとは思つてゐた。併しその時からなんだか物足らぬやうな心持がし始めた。それは赤子の時から、自分一人の手で育てて、殆ど物を言はなくても、互に意志を通じ得られるやうになつてゐたお玉、何事につけても優しくしてくれたお玉、外から歸つて來れば待つてゐてくれたお玉がゐぬからである。　に据わつてゐて、池の景色を見る。往來の人を見る。今跳ねたのは大きな鯉であつた。今通つた西洋婦人の帽子には、鳥が一羽丸で附けてあつた。その度毎に、「お玉あれを見い」と云ひたい。それがゐないのが物足らぬのである。

　三日四日となつた頃には、次第に氣が苛々して來て、女中の傍へ來て何かするのが氣に障る。もう何十年か奉公人を使つたことがないのに、原來優しい性分だから、小言は言はない。只女中のする事が一々自分の意志に合はぬので、不平でならない。起居のおとなしい、何をしても物に柔に當るお玉と比べて見られるのだから、田舍から出たばかりの女中こそ好い迷惑である。とうとう四日目の朝飯の給事をさせてゐる時、汁椀の中へ拇指を突つ込んだのを見て、「もう給仕はしなくても好いから、あつちへ行つてゐておくれ」と云つてしまつた。

　食事をしまつて、窓から外を見てゐると、空は曇つてゐても、雨の降りさうな樣子もなく、却つて晴れた日よりは暑くなくて好ささうなので、氣を晴さうと思つて、外へ出た。それでも若し留守にお玉が來はすまいかと氣遣つて、我家の門口を折々振り返つて見つつ、池の傍を歩いてゐる。そのうち茅町と七軒町との間から、無縁坂の方へ行く角に、小さい橋の掛つてゐる處に來た。ちよつと娘の内へ行つて見ようかと思つたが、なんだか改まつたやうな氣がして、我ながら不思議な遠慮がある。これが女親であつたら、こんな隔てはどんな場合にも出來まいのに、不思議だ、不思議だと思ひながら、橋を渡らずに、矢張池の傍を歩いてゐる。ふと心附くと、丁度木造の家が溝の向うにある。これは口入の婆あさんが、こん度越して來た家の窓から、指さしをして敎へてくれたのである。見れば　なる程立派な構で、高い土塀の外廻に、殺竹が斜に打ち附けてある。福地さんと云ふ、えらい學者の家だと聞いた、隣の方は、廣いことは廣いが、建物も古く、こつちの家に比べると、けばけばしい所と嚴めしげな所とがない。暫く立ち留まつて、堅くも嚴重に締め切つてある、白木造の裏門の扉を見てゐたが、あの内へ這入つて見たいと思ふ心は起らなかつた。併し何をどう思ふでもなく、一種のはかない、寂しい感じに襲はれて、暫く茫然としてゐた。詞にあらはして言つたら、落ちぶれて娘を妾に出した親の感じとでも云ふより外あるまい。

　とうとう一週間立つても、まだ娘は來なかつた。戀しい、戀しいと思ふ念が、内攻するやうに奧深く潛んで、あいつ樂な身の上になつて、親の事を忘れたのではあるまいかと云ふ疑が頭を擡げて來る。この疑は假に故意に起して見て、それを弄んでゐるとでも云ふべき、極めて淡いもので、疑ひは疑ひながら、どうも娘を憎く思

はれない、丁度人に對して物を言ふ時に用ゐる反語のやうに、いつそ娘が憎くなつたら好からうと、心の上邊で思つて見るに過ぎない。
それでも爺いさんは此頃になつて、こんな事を思ふことがある。內にばかりゐると、いろんな事を思つてならないから、己はこれから外へ出るが、跡へ娘が來て、己に逢はれないのを殘念がるだらう。殘念がらないにしたところが、切角來たのが無駄になつたと丈は思ふに違ひない。その位な事は思はせて遣つても好い。こんな事を思つて出て行くやうになつたのである、
上野公園に行つて、丁度日蔭になつてゐる、ろは臺を尋ねて腰を休めて、公園を通り抜ける、母衣を掛けた人力車を見ながら、今頃留守へ娘が來て、まごまごしてゐはしないかと想像する。この時の感じは、好い氣味だと思つて見たいと云ふ、自分で自分を騙して見るやうな感じである。此頃は夜も吹拔亭へ、圓朝の話や、駒之助の義太夫を聞きに行くことがある。寄席にゐても、矢張娘が留守に來てゐるだらうかと云ふ想像をする。さうかと思ふと、又ふいと娘が此中に來てゐはせぬかと思つて、銀杏返しに結つてゐる、若い女を選り出すやうにして見ることなどがある。一度なんぞは、中入が濟んだ頃、その時代にまだ珍らしかつた、パナマ帽を目深に被つた、浴帷子掛の男に連れられて、背後の二階へ來て、手摺に攫まつて据わりしなに、下の客を見卸した、銀杏返しの女を、一刹那の間お玉だと思つたことがある。好く見れば、お玉よりは顏が闊くて脊が低い。それにパナマ帽の男は、その女ばかりではなく、背後にまだ三人ばかりの島田やら桃割やらを連れてゐた。皆藝者やお酌であつた。爺いさんの傍にゐた書生が、「や、吾曹先生が來た」と云つた。寄席がはねて歸る時に見ると、赤く「ふきぬき亭」と斜に書いた、大きい柄の長い提灯を一人の女が持つて、藝者やお酌がぞろぞろ附いて、パナマ帽の男を送つて行く。爺いさんは自分の內の前まで、此一行と跡になつたり、先になつたりして歸つた。

玖

お玉も小さい時から別れてゐたことのない父親が、どんな暮らしをしてゐるか、往つて見たいとは思つてゐる。併し檀那が每日のやうに來るので、若し留守を明けてゐて、機嫌を損じてはならないと云ふ心配から、一日一日と、思ひながら父親の所へ尋ねて行かずに過すのである。檀那は朝までゐることはない。早い時は十一時頃に歸つてしまふ。又けふは外へ行かなくてはならぬのだが、ちよいと寄つたと云つて、箱火鉢の向うに据わつて、煙草を呑んで歸ることもある。それでもけふは檀那がきつと來ないと見極めの附いた日といふのでないので、思ひ切つて出ることが出來ない。晝間出れば出られぬことはない筈だが、使つてゐる小女が子供と云つても好い位だから、何一つ任せて置かれない。それになんだか近所のものに顏を見られるやうな氣がして、晝間は外へ出たくない。初めのうちは坂下の湯に這入りに行くにも、今頃は透いてゐるか見て來ておくれと、小女に樣子を見て來させた上で、そつと行つた位である。
何事もなくても、こんな風に怯れがちなお玉の膽をとりひしいだ事が、越して來てから三日目にあつた。それは越した日に八百屋も、肴屋も通帳を持つて來て、出入を頼んだのに、その日には肴屋が來ぬので、小さい梅を坂下へ遣つて、何か切身でも買つて來させようとした時の事である。お玉は每日肴なんぞが食ひたくはない。酒を飲まぬ父が體に障らぬお數でさへあれば、なんでも好いと云ふ性だから、有り合せの物で御飯を食べる癖が附いてゐた。併し隣の近い貧乏所帶で、あの家では幾日立つても生腥

氣も食へぬと云はれた事があつたので、若し梅なんぞが不滿足に思つてはならぬ、それでは手厚くして下さる檀那に濟まぬといふやうな心から、わざわざ坂下の肴屋へ見せに遣つたのである。ところが、梅が泣顏をして歸つて來た。どうしたかと問ふと、から云ふのである。肴屋を見附けて這入つたら、その家はお內へ通を持つて來たのとは違つた家であつた。御亭主がゐないで、上さんが店にゐた。多分御亭主は河岸から歸つて、店に置く丈の物を置いて、得意先きを廻りに出たのであらう。店に新しさうな肴が澤山あつた。梅は小鰺の色の好いのが一山あるのに目を附けて、値を聞いて見た。すると上さんが、「お前さんは見附けない女中さんだが、どこから買ひにお出だ」と云つたので、これこれの內から來たと話した。上さんは急にひどく不機嫌な顏をして、「おやさう、お前さんお氣の毒だが歸つてね、さうお云ひ、ここの內には高利貸の妾なんぞに賣る肴はないのだから」と云つて、それ切り橫を向いて、烟草を吞んで構ひ附けない。梅は餘り悔やしいので、外の肴屋へ行く氣もなくなつて、駈けて歸つた。そして主人の前で、氣の毒さうに、肴屋の上さんの口上を、きれぎれに繰り返したのである。

お玉は聞いてゐるうちに、顏の色が脣まで蒼くなつた。そして良久しく默つてゐた。世馴れぬ娘の胸の中で、込み入つた種々の感情が、巴をなして、自分でもその織り交ぜられた絲をほぐして見ることは出來ぬが、その感情の入り亂れた儘の全體が、強い壓を賣られた無垢の處女の心の上に加へて、體ぢゆうの血を心の臟に流れ込ませ、顏は色を失ひ、背中には冷たい汗が出たのである。こんな時には、格別重大でない事が、最初に意識せられるものと見えて、お玉はこんな事があつては梅がもう此內にはゐられぬと云ふだらうかと先づ思つた。

梅はぢつと血色の亡くなつた主人の顏を見てゐて、主人がひどく困つてゐると云ふこと丈は曉つたが、何に困つてゐるのか分からない。つい腹が立つて歸つては來たが、午のお菜がまだないのに、此儘にしてゐては濟まぬと云ふことに氣が付いた。さつき貰つて出て行つたお足さへ、まだ帶の間に插んだ切りで出さずにゐるのであつた。「ほんとにあんな厭なお上さんてありやしないわ。あんな內のお肴を誰が買つて遣るものか。もつと先の、小さいお稻荷さんのある近所に、もう一軒ありますから、すぐに行つて買つて來ませうね。」慰めるやうにお玉の顏を見て起ち上がる。お玉は梅が自分の身方になつてくれた、刹那の嬉しさに動かされて、反射的に微笑んで頷く。梅はすぐばたばたと出て行つた。

お玉は跡にその儘動かずにゐる。氣の張が少し弛んで、次第に湧いて來る淚が溢れさうになるので、袂からハンカチイフを出して押へた。胸の內には只悔やしい、悔やしいと云ふ叫びが聞える。これが彼の混沌とした物の發する聲である。肴屋が賣つてくれぬのが憎いとか、賣つてくれぬやうな身の上だと知つて悔やしいとか、悲しいとか云ふのでないことは勿論である。身を任せることになつてゐる末造が高利貸であつたと分かつて、その末造を憎むとか、さう云ふ男に身を任せてゐるのが悔やしいとか、悲しいとか云ふのでもない。お玉も高利貸は厭なもの、こはいもの、世間の人に嫌はれるものとは、仄かに聞き知つてゐるが、父親が質屋の金しか借りたことがなく、それも借りたい金高を番頭が因業で貸してくれぬことがあつても、父親は只困ると云ふ丈で番頭を無理だと云つて怨んだこともない位だから、子供が鬼がこはい、お廻りさんがこはいのと同じやうに、高利貸と云ふ、こはいものの存在を教へられてゐても、別に痛切な感じは持つてゐない。そんなら何が

悔やしいのだらう。
一體お玉の持つてゐる悔やしいと云ふ概念には、世を怨み人を恨む意味が甚だ薄い。强ひて何物をか怨む意味があるとするなら、それは我身の運命を怨むのだとでも云はうか。自分が何の惡い事もしてゐぬのに、餘所から迫害を受けなくてはならぬやうになる。それを苦痛として感ずる。悔やしいとは此苦痛を斥すのである。自分が人に騙されて棄てられたと思つた時、お玉は始て悔やしいと云つた。それからたつた此間妾と云ふものにならなくてはならぬ事になつた時、又悔やしいを繰り返した。今はそれが只妾と云ふ丈でなくて、人の嫌ふ高利貸の妾でさへあつたと知つて、きのふけふ「時間」の齒で咬まれて角が刓れ、「あきらめ」の水で洗はれて色の褪めた「悔やしさ」が、再びはつきりした輪廓、强い色彩をして、お玉の心の目に現はれた。お玉が胸に鬱結してゐる物の本體は、强ひて條理を立てて見れば先づこんな物でもあらうか。
暫くするとお玉は起つて押入を開けて、象皮贋の鞄から、自分で縫つた白金巾の前掛を出して腰に結んで、深い溜息を衝いて臺所へ出た。同じ前掛でも、絹のは此女の爲めに、一種の晴着になつてゐて、臺所へ出る時には掛けぬことにしてある。かれは湯帷子にさへ領垢の附くのを厭つて、鬢や髱の障る襟の所へ、手拭を折り掛けて置く位である。
お玉は此時もう餘程落ち着いてゐた。あきらめは此女の最も多く經驗してゐる心的作用で、かれの精神は此方角へなら、油をさした機關のやうに、滑かに働く習慣になつてゐる。

拾

或る日の晩の事であつた。末造が來て箱火鉢の向うに据わつた。始ての晩からお玉はいつも末造の這入つて來るのを見ると、座布團を出して、箱火鉢の向うに敷く。末造はその上に胡坐を搔いて、烟草を飲みながら世間話をする。お玉は手持不沙汰なやうに、不斷自分のゐる所にゐて、火鉢の緣を撫でたり、火箸をいぢつたりしながら、恥かしげに、詞數少く受答をしてゐる。その樣子が火鉢から離れて据わらせたら、身の置所に困りはすまいかと思はれるやうである。火鉢と云ふ胸壁に據つて、僅かに敵に當つてゐると云つても好い位である。暫く話してゐるうちに、お玉はふと調子附いて長い話をする。それが大抵これまで父親と二人で暮してゐた、何年かの間に閲して來た、小さい喜怒哀樂に過ぎない。末造はその話の內容を聽くよりは、籠に飼つてある鈴蟲の鳴くのをでも聞くやうに、可哀らしい囀の聲を聞いて、覺えず微笑む。その時お玉はふいと自分の饒舌つてゐるのに氣が附いて、顏を赤くして、急に話を端折つて、元の詞數の少い對話に戾つてしまふ。その總ての言語擧動が、いかにも無邪氣で、或る向きには頗る鋭利な觀察をすることに慣れてゐる末造の目で見れば、澄み切つた水盤の水を見るやうに、隅々まで隱れる所もなく見渡すことが出來る。かう云ふ差向ひの味は、末造がためには、手足を働かせた跡で、加減の好い湯に這入つて、ぢつとして溫まつてゐるやうに愉快である。そして此味を味ふのが、末造がためには全く新しい經驗に屬するので、末造は此家に通ひ始めてから、猛獸が人に馴れるやうに、意識せずに一種の culture を受けてゐるのである。
それに三四日立つた頃から、自分が例の通りに箱火鉢の向うに胡坐を搔くと、お玉はこれと云ふ用もないに立ち働いたり何かして、兎角落ち着かぬやうになつたのに、末造は段々氣が附いて來た。はにかんで目を見合せぬやうにした

り、返事を手間取らせたりすることは最初にもあつたが、今晩なんぞの素振には何か特別な仔細がありさうである。

「おい、お前何か考へてゐるね」と、末造が烟管に烟草を詰めつつ云つた。

わざわざ片附けてあるやうな箱火鉢の抽斗を、半分拔いて、捜すものもないのに、中を見込んでゐたお玉は、「いいえ」と云つて、大きい目を末造の顔に注いだ。昔話の神秘は知らず、餘り大した秘密なんぞをしまつて置かれさうな目ではない。

末造は覺えず蹙めてゐた顔を、又覺えず晴やかにせずにはゐられなかつた。「いいえぢやあないぜ。困つちまふ、どうしよう、どうしようと、ちやんと顔に書いてあらあ。」

お玉の顔はすぐに眞つ赤になつた。そして姑く默つてゐる。どう言はうかと考へる。細かい器械の運轉が透き通つて見えるやうである。

「あの、父の所へ疾うから行つて見よう、行つて見ようと思つてゐながら、もう隨分長くなりましたもんですから。」

細かい器械がどう動くかは見えても、何をするかは見えない。常に自分より大きい、強い物の迫害を避けなくてはゐられぬ蟲は、mimicry を持つてゐる。女は譃を衝く。

末造は顔で笑つて、叱るやうな物の言様をした。「なんだ。つい鼻の先の池の端に越して來てゐるのに、まだ行つて見ないでゐたのか。向ひの岩崎の邸の事なんぞを思へば、同じ内にゐるやうなものだぜ。今からだつて、行かうと思へば行けるのだが、まあ、あすの朝にするが好い。」

お玉は火箸で灰をいぢりながら、偸むやうに末造の顔を見てゐる。

「でもいろいろと思つて見ますものですから。」

「笑談ぢやないぜ。その位な事を、どう思つて見やうもないぢやないか。いつまでねんねえでゐるのだい。」こん度は聲も優しかつた。

此話はこれ丈で濟んだ。とうとうしまひには末造が、そんなにおつくうがるやうなら、自分が朝出掛けて來て、四五町の道を連れて行つて遣らうかなどとも云つた。

お玉は此頃種々に思つて見た。檀那に逢つて、頼もしげな、氣の利いた、優しい様子を目の前に見て、此人がどうしてそんな、厭な商賣をするのかと、不思議に思つたり、なんとか話をして、堅氣な商賣になつて貰ふことは出來まいかと、無理な事を考へたりしてゐた。併しまだ厭な人だとは少しも思はなかつた。

末造はお玉の心の底に、何か隱してゐる物のあるのを微かに認めて、探りを入れて見たが、子供らしい、なんでもない事だと云ふのであつた。併し十一時過ぎに此家を出て、無縁坂をぶらぶら降りながら考へて見れば、どうもまだその奥に何物かが潜んでゐさうである。末造の物馴れた、鋭い觀察は、この何物かを丸で見遁してはをらぬのである。少くも或る氣まづい感情を起させるやうな事を、誰かがお玉に話したのではあるまいかとまで、末造は推測を逞うして見た。それでも誰が何を言つたかは、とうとう分からずにしまつた。

拾壹

翌朝お玉が、池の端の父親の家に來た時は、父親は丁度朝飯を食べてしまつた所であつた。化粧の手間を取らないお玉が、ちと早過ぎはせぬかと思ひながら、急いで來たのだが、早起の老人はもう門口を綺麗に掃いて、打水をして、それから手足を洗つて、新しい疊の上に上がつて、いつもの寂しい食事を濟ませた所であつた。

二三軒隔てては、近頃待合も出來てゐて、夕方になれば騒がしい時があるが、兩隣は同じ

やうに格子戸の締まつた家で、殊に朝のうちは、あたりがひつそりしてゐる。肱掛窓から外を見れば、高野槇の枝の間から、爽かな朝風に、微かに揺れてゐる柳の絲と、その向うの池一面に茂つてゐる蓮の葉とが見える。そしてその緑の中に、所々に薄い紅を點じたやうに、今朝開いた花も見えてゐる。北向の家で寒くはあるまいかと云ふ話はあつたが、夏は求めても住みたい所である。

お玉は物を辨へるやうになつてから、若し身に爲合せが向いて來たら、お父つさんをああもして上げたい、かうもして上げたいと、色々に思つても見たが、今目の前に見るやうに、こんな家にかうして住まはせて上げれば、平生の願が協つたのだと云つても好いと、嬉しく思はずにはゐられなかつた。併しその嬉しさには一滴の苦い物が交つてゐる。それがなくて、けさお父つさんに逢ふのだつたら、どんなにか嬉しからうと、つくづく世の中の儘ならぬを、じれつたくも思ふのである。

箸を置いて、湯呑に注いだ茶を飲んでゐた爺いさんは、まだつひぞ人のおとづれたことのない門の戸の開いた時、はつと思つて、湯呑を下に置いて、上り口の方を見た。二枚折の葭簀屏風にまだ姿の遮られてゐるうちに、「お父つさん」と呼んだお玉の聲が聞えた時は、すぐに起つて出迎へたいやうな氣がしたのを、ぢつとこらへて据わつてゐた。そしてなんと云つて遣らうかと、心の内にせはしい思案をした。「好くお父つさんの事を忘れずにゐたなあ」とでも云はうかと思つたが、そこへ急いで這入つて來て、懐かしげに傍に來た娘を見ては、どうもそんな詞は口に出されなくなつて、自分で自分を不滿足に思ひながら、默つて娘の顏を見てゐた。

まあ、なんと云ふ美しい子だらう。不斷から自慢に思つて、貧しい中にも荒い事をさせずに、身綺麗にさせて置いた積ではあつたが、十日ばかり見ずにゐるうちに、丸で生れ替つて來たやうである。どんな忙しい暮らしをしてゐても、本能のやうに、肌に垢の附くやうな事はしてゐなかつた娘ではあるが、意識して體を磨くやうになつてゐるきのふけふに比べて見れば、爺いさんの記憶にあるお玉の姿は、まだ璞の儘であつた。親が子を見ても、老人が若いものを見ても、美しいものは美しい。そして美しいものが人の心を和げる威力の下には、親だつて、老人だつて屈せずにはゐられない。

わざと默つてゐる爺いさんは、澁い顏をしてゐる積であつたが、不本意ながら、つい氣色を和げてしまつた。お玉も新らしい境遇に身を委ねた爲めに、これまで小さい時から一日も別れてゐたことのない父親を、逢ひたい逢ひたいと思ひながら、十日も見ずにゐたのだから、話さうと思つて來た事も、暫くは口に出すことが出來ずに、嬉しげに父親の顏を見てゐた。

「もうお膳を下げまして宜しうございませうか」と、女中が勝手から顏を出して、尻上がりの早言に云つた。馴染のないお玉には、なんと云つたか聞き取れない。髮を櫛卷にした小さい頭の下に太つた顏の附いてゐるのが、いかにも不釣合である。そしてその顏が不遠慮に、さも驚いたやうに、お玉を目守つてゐる。

「早くお膳を下げて、お茶を入れ替へて來るのだ。あの棚にある青い分のお茶だ。」爺いさんはかう云つて、膳を前へ衝き出した。女中は膳を持つて勝手へ這入つた。

「あら。好いお茶なんか戴かなくつても好いのだから。」

「馬鹿言へ。お茶受もあるのだ。」爺いさんは起つて、押入からブリキの鑵を出して、菓子鉢へ玉子煎餅を盛つてゐる。これは寶丹のぢき裏の内で拵へてゐるのだ。此邊は便利の好い所で、

その側の横町には如燕の佃煮もある。」

「まあ。あの柳原の寄席へ、お父つさんと聞きに行つた時、何か御馳走のお話をして、その旨いこと、己の店の佃煮の旨しと云つて、みんなを笑はせましたつけね。本當に飄々しいお爺いさんね。高座へ出ると、行きなりお尻をくるつとまくつて据わるのですもの。わたくし可笑しくつて。お父つさんもあんなにお太りなさるやうだと好いわ。」

「如燕のやうに太つて溜まるものか」と云ひながら、爺いさんは煎餅を娘の前へ出した。

そのうち茶が來たので、親子はきのふもおとつひも一しよにゐたもののやうに、取留のない話をしてゐた。爺いさんがふと何か言ひにくい事を言ふやうに、かう云つた。

「どうだい、工合は。檀那は折々お出になるかい。」

「ええ」とお玉は云つた切、ちよいと返事にまごついた。末造の來るのは折々どころではない。毎晩顔を出さないことはない。これがよめに往つたので、折合が好いかと問はれたのなら、大層好いから安心して下さいと、晴れ晴れと返事が出來るのだらう。それがかうした身の上で見れば、どうも檀那が毎晩お出になるとは、氣が咎めて言ひにくい。お玉は暫く考へて、「まあ、好い工合のやうですから、お父つさん、お案じなさらなくつても好ござんすわ」と云つた。

「そんなら好いが」と爺いさんは云つたが、娘の答にどこやら物足らぬ所のあるのを感じた。問ふ人も、答へる人も無意識に含糊の態をなして物を言ふやうになつたのである。これまで何事も打ち明け合つて、お互の間に秘密と云ふものを持つてゐたことのない二人が、厭でも秘密のあるらしい、他人行儀の挨拶をしなくてはならなくなつたのである。前に悪い壻を取つて騙された時なんぞは、近所の人に面目ないとは思つても、親子共胸の底には曲彼に在りと云ふ心持があつたので、互に話をし合ふには、少しも遠慮はしなかつた。その時とは違つて、親子は一旦決心して纏めた話が旨く纏まつて、不自由のない身の上になつてゐながら、今は親しい會話の上に、暗い影のさす、悲しい味を知つたのである。暫くして爺いさんは、何か娘の口から具體的な返事が聞きたいやうな氣がしたので、「一體どんな方だい」と、又新しい方角から問うて見た。

「さうね」と云つて、お玉は首を傾けてゐたが、獨語のやうな調子で言ひ足した。「どうも悪い人だとは思はれませんわ。まだ日も立たないのですけれども、荒い詞なんぞは掛けないのですもの。」

「ふん」と云つて、爺いさんは得心の行かぬやうな顔をした。「悪い人の筈はないぢやないか。」

お玉は父親と顔を見合せて、急に動悸のするのを覺えた。けふ話さうと思つて來た事を、話せば今が好い折だとは思ひながら、切角暮らしを樂にして、安心をさせようとしてゐる父親に、新しい苦痛を感ぜさせるのがつらいからである。さう思つたので、お玉は父親との隔たりの大きくなるやうな不快を忍んで、日蔭ものと云ふ秘密の奥に、今一つある秘密を、ここまで持つて來た儘蓋を開けずに、そつくり持つて歸らうと、際どい所で決心して、話を餘所に逸らしてしまつた。「だつて隨分いろいろな事をして、一代のうちに身上を拵へた人だと云ふのですから、わたくしどんな氣立の人だか分からないと思つて、心配してゐたのですわ。さうですね。なんと云つたら好いでせう。まあ、をとこ氣のある人と云ふ風でございますの。眞底からそんな人なのだか、それはなかなか分からないのですけれど、人にさう見せようと心掛けて何か言つたりしたりしてゐる人のやうね。ねえ、お父

つさん。心掛ばかりだつてそんなのは好いぢやございませんか。」から云つて、父親の顏を見上げた。女はどんな正直な女でも、その時心に持つてゐる事を隱して、外の事を云ふのを、男程苦にしはしない。そしてさう云ふ場合に詞數の多くなるのは、女としては餘程正直なのだと云つても好いかも知れない。

「さあ。それはそんな物かも知れないな。だが、なんだかお前、檀那を信用してゐないやうな、物の言ひやうをするぢやないか。」

お玉はにつこりした。「わたくしこれで段々えらくなつてよ。これからは人に馬鹿にせられてばかりはゐない積なの。豪氣でせう。」

父親はおとなしい一方の娘が、めづらしく鋒を自分に向けたやうに感じて、不安らしい顏をして娘を見た。「うん。己は隨分人に馬鹿にせられ通しに馬鹿にせられて、世の中を渡つたものだ。だがな、人を騙すよりは、人に騙されてゐる方が、氣が安い。なんの商賣をしても、人に不義理をしないやうに、恩になつた人を大事にするやうにしてゐなくてはならないぜ。」

「大丈夫よ。お父つさんがいつも、たあ坊は正直だからとさう云つたでせう。わたくし全く正直なの。ですけれど、この頃つくづくさう思つてよ。もう人に騙されることだけは、御免を蒙りたいわ。わたくし譃を衝いたり、人を騙したりなんかしない代には、人に騙されもしない積なの。」

「そこで檀那の言ふことも、うかとは信用しないと云ふのかい。」

「さうなの。あの方はわたくしを丸で赤ん坊のやうに思つてゐますの。それはあんな目から鼻へ抜けるやうな人ですから、さう思ふのも無理はないのですけれど、わたくしこれでもその人の思ふ程赤ん坊ではない積なの。」

「では何かい。何かこれまで檀那の仰やつた事に、本當でなかつた事でもあつたのを、お前が氣が附いたとでも云ふのかい。」

「それはあつてよ。あの婆あさんが度々さう云つたでせう。あの人は奥さんが子供を置いて亡くなつたのだから、あの人の世話になるのは、本妻ではなくつても、本妻と同じ事だ。只世間體があるから裏店にゐたものを内に入れることは出來ないのだと云つたのね。ところが奥さんがちやあんとあるの。自分で平氣でさう云ふのですもの。わたくしびつくりしてよ。」

爺いさんは目を大きくした。「さうかい。矢つ張媒人口だなあ。」

「ですから、わたくしの事を奥さんには極の内證にしてゐるのでせう。奥さんに譃を衝く位ですから、わたくしにだつて本當ばかし云つてゐやしませんわ。わたくし眉毛に唾を附けてゐなくつちやあ。」

爺いさんは飲んでしまつた烟草の吸殻をはたくのも忘れて、なんだか急にえらくなつたやうな娘の樣子をぼんやりと眺めてゐると、娘は急に思ひ出した樣に云つた。「わたくしけふはもう歸つてよ。かうして一度來て見れば、もうなんでもなくなつたから、これからはお父つさんとこへ毎日のやうに見に來て上げるわ。實はあの人が往けと云はないうちに來ては惡いかと思つて、遠慮してゐたの。とうとうゆうべさう云つてことわつて置いて、けさ來たのだわ。わたくしの所へ來た女中は、それは子供で、お午の支度だつて、わたくしが歸つて手傳つて遣らなくては出來ないの。」

「檀那にことわつて來たのなら、午もこつちで食べて行けば好い。」

「いいえ。不用心ですわ。またすぐ出掛けて來てよ。お父つさん。さやうなら。」

お玉が立ち上がるとたんに、女中が慌てて履物を直しに出た。氣が利かぬやうでも、女は女

に遭遇して觀察をせずには置かない。道で行き合つても、女は自己の競爭者として外の女を見ると、或る哲學者は云つた。汁椀の中へ親指を衝つ込む山出しの女でも、美しいお玉を氣にして、立聽をしてゐたものと見える。

「おやあ又來るが好い。檀那に宜しく言つてくれ。」爺いさんは据わつた儘から云つた。

お玉は小さい紙入を黑繻子の帶の間から出して、幾らか紙に撚つて女中に遣つて置いて、駒下駄を引つ掛けて、格子戸の外へ出た。

たよりに思ふ父親に、苦しい胸を訴へて、一しよに不幸を歎く積で這入つた門を、我ながら不思議な程、元氣好くお玉は出た。切角安心してゐる父親に、餘計な苦勞を掛けたくない。それよりは自分を強く、丈夫に見せて遣りたいと、努力して話をしてゐるうちに、これまで自分の胸の中に眠つてゐた或る物が醒覺したやうな、これまで人にたよつてゐた自分が、思ひ掛けず獨立したやうな氣になつて、お玉は不忍の池の畔を、晴やかな顏をして歩いてゐる。

もう上野の山を大ぶはづれた日が、くわつと照つて、中島の辨天の社を眞つ赤に染めてゐるのに、お玉は持つて來た、小さい蝙蝠をも插さずに歩いてゐるのである。

拾貳

或る晩末造が無縁坂から歸つて見ると、お上さんがもう子供を寢かして、自分丈起きてゐた。いつも子供が寢ると、自分も一しよに横になつてゐるのが、その晩は据わつて俯向加減になつてゐて、末造が蚊屋の中に這入つて來たのを知つてゐながら、振り向いても見ない。

末造の床は一番奥の壁際に、少し離して取つてある。その枕元には座布團が敷いて、烟草盆と茶道具とが置いてある。末造は座布團の上に据わつて、烟草を吸ひ附けながら、優しい聲で云つた。

「どうしたのだ。まだ寢ないでゐるね。」

お上さんは默つてゐる。

末造も再び讓歩しようとはしない。こつちから媾和を持ち出したに、彼が應ぜぬなら、それまでの事だと思つて、わざと平氣で烟草を呑んでゐる。

「あなた今までどこにゐたんです。」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。奉公人を置くやうになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向ひになると、ぞんざいになる。やうやう「あなた」丈が維持せられてゐる。

末造は鋭い目で一目女房を見たが、なんとも云はない。何等かの知識を女房が得たらしいとは認めても、その知識の範圍を測り知ることが出來ぬので、なんとも云ふことが出來ない。末造は妄りに語つて、相手に材料を供給するやうな男ではない。

「もう何もかも分かつてゐます。」鋭い聲である。そして末の方は泣聲になり掛かつてゐる。

「變な事を言ふなあ。何が分かつたのだい。」さも意外な事に遭遇したと云ふやうな調子で、聲はいたはるやうに優しい。

「ひどいぢやありませんか。好くそんなにしらばつくれてゐられる事ね。」夫の落ち着いてゐるのが、却つて強い刺戟のやうに利くので、上さんは聲が切れ切れになつて、湧いて來る涙を襦袢の袖でふいてゐる。

「困るなあ。まあ、なんだかさう云つて見ねえ。丸つ切り見當が附かない。」

「あら、そんな事を。今夜どこにゐたのだか、わたしにさう云つて下さいと云つてゐるのに。あなた好くそんな眞似が出來た事ね。わたしには商用があるのなんのと云つて置いて。圍物なんぞを拵へて。」鼻の低い赤ら顏が、涙で煠でたやうになつたのに、こはれた丸髷の鬢の毛が

一搾へばり附いてゐる。潤んだ細い目を、無理に大きく睜つて、末造の顏を見てゐたが、ずつと傍へゐざり寄つて、金天狗の燃えさしを摑んでゐた末造の手に、力一ぱいしがみ附いた。

「廢せ」と云つて、末造はその手を振り放して、疊の上に散つた烟草の燃えさしを揉み消した。

　お上さんはしやくり上げながら、又末造の手にしがみ附いた。「どこにだつて、あなたのやうな人があるでせうか。いくらお金が出來たつて、自分ばかり檀那顏をして、女房には着物一つ拵へてはくれずに、子供の世話をさせて置いて、好い氣になつて妾狂ひをするなんて」

「廢せと云へば。」末造は再び女房の手を振り放した。「子供が目を覺すぢやないか。それに女中部屋にも聞える。」窘めた聲に力を入れて云つたのである。

　末の子が寢返りをして、何か夢中で言つたので、お上さんも覺えず聲を低らして、「一體わたしどうすれば好いのでせう」と云つて、今度は末造の胸の所に顏を押し附けて、しくしく泣いてゐる。

「どうするにも及ばないのだ。お前が人が好いもんだから、人に焚き附けられたのだ。妾だの、圍物だのつて、誰がそんな事を言つたのだい。」

から云ひながら、末造はこはれた丸髷のぶるぶる震へてゐるのを見て、醜い女はなぜ似合はない丸髷を結ひたがるものだらうと、氣樂な問題を考へた。そして丸髷の震動が次第に細かに緩むやうになると同時に、どの子供にも十分の食料を供給した、大きい乳房が、懷爐を抱いたやうに水落の邊に押し附けられるのを末造は感じながら、「誰が言つたのだ」と繰り返した。

「誰だつて好いぢやありませんか。本當なんだから。」乳房の壓はいよいよ加はつて來る。

「本當でないから、誰でも好くはないのだ。誰だかさう云へ。」

「それは言つたつてかまひませんとも。魚金のお上さんなの。」

「なに丸で狸が物を言ふやうで、分かりやあしない。むにやむにやのむにやむにやさんなのとはなんだい。」

　お上さんは顏を末造の胸から離して、悔やしさうに笑つた。「魚金のお上さんだと、さう云つてゐるぢやありませんか。

「うん。あいつか。おほ方そんな事だらうと思つた。」末造は優しい目をして、女房の逆上したやうな顏を見ながら、徐かに金天狗に火を附けた。新聞屋なんかが好く社會の制裁だのなんのと云ふが、己はその社會の制裁と云ふ奴を見た事がねえ。どうかしたら、あの金棒引なんかが、その制裁と云ふ奴かも知れねえ。近所中のおせつかいをしやがる。あんな奴の言ふ事を眞に受けて溜まるものか。己が今本當の事を言つて聞かして遣るから、好く聞いてゐろ。」

　お上さんの頭は靄が掛かつたやうに、ぼうつとしてゐるが、もしや騙されるのではあるまいかと云ふ猜疑だけは醒めてゐる。それでも熱心に末造の顏を見て謹聽してゐる。今社會の制裁と云ふことを言はれた時もさうであるが、いつでも末造が新聞で讀んだ、むづかしい詞を使つて何か言ふと、お上さんは氣おくれがして、分からぬなりに屈服してしまふのである。

　末造は折々烟草を吞んで烟を吹きながら、矢張女房の顏を暗示するやうにぢつと見て、こんな事を言つてゐる。「それ、お前も知つてゐるだらう。まだ大學があつちにあつた頃、好く內に來た吉田さんと云ふのがゐたなあ。あの金緣目金を掛けて、ぞろぞろした着物を着てゐた人よ。あれが千葉の病院へ行つてゐるが、まだ己の方の勘定が二年や三年ぢやあ埒が明かねえんだ。あの吉田さんが寄宿舍にゐた時から出來てゐた女で、こなひだまで七曲りの店を借りて入れて

あつたのだ。最初は月々極まつて爲送りをしてゐたところが、今年になつてから手紙もよこさなけりや、金もよこさねえ。そこで女が先方へ掛け合つてくれろと云つて己に頼んだのだ。どうして己を知つてゐるかと思ふだらうが、吉田さんは度々己の内へ來る。人の目に附いて困るからと云つて、己を七曲の内へ呼んで書換の話なんぞをした事がある。その時から女が己を知つてゐたのだ。己も隨分迷惑な話だが、序だから掛け合つて遣つたよ。ところがなかなか埒は明かねえ。女はしつつこく頼む。己は飛んだ奴に引つ掛かつたと思つて持て扱つてゐるのだ。お負に小綺麗な所で店賃の安い處へ越したいから、世話をしてくれろと云ふので、切通しの質屋の隱居のゐた跡へ、面倒を見て越させて遣つた。それやこれやで、こなひだからちよいちよい寄つて、煙草を二三服呑んだ事があるもんだから、近所の奴等が彼此言やあがるのだらう。隣は女の子を集めて、爲立物の師匠をしてゐると云ふのだから、口はうるさいやな。あんな所に女を圍つて置く馬鹿があるものか。」こんな事を言つて、末造はさげすんだやうに笑つた。

　お上さんは小さい目を赫かして、熱心に聞いてゐたが、此時甘えたやうな調子でかう云つた。「それはお前さんの云ふ通りかも知れないけれど、そんな女の所へ度々行くうちには、どうなるか知れたものぢやありやしない。どうせお金で自由になるやうな女だもの。」お上さんはいつか「あなた」を忘れてゐる。

「馬鹿言へ。己がお前と云ふものがあるのに、外の女に手を出すやうな人間かい。これまでだつて、女をどうしたと云ふことが、只の一度でもあつたかい。もうお互に焼餅喧嘩をする年でもあるめえ。好い加減にしろ。」末造は存外容易に賺撫が功を奏したと思つて、心中に凱歌を歌つてゐる。

「だつてお前さんのやうにしてゐる人を、女は好くものだから、わたしやあ心配さ。」

「へん。あが佛尊しと云ふ奴だ。」

「どう云ふわけなの。」

「己のやうな男を好いてくれるのは、お前ばかりだと云ふことよ。なんだ。もう一時を過ぎてゐる。寢よう〳〵。」

拾參

　眞實と作爲とを綯交にした末造の言分けが、一時お上さんの嫉妬の火を消したやうでも、その效果は勿論 Palliatif なのだから、無縁坂上に實在してゐる物が、依然實在してゐる限は、蔭口やら壁訴訟やらの絶えることはない。それが女中の口から、「今日も何某が檀那樣の格子戸にお這入になるのを見たさうでございます」と云ふやうな詞になつて、お上さんの耳に届く。併し末造は言分けには窮せない。商用とやらが、さう極まつて晩方にあるものではあるまいと云へば、「金を借る相談を朝つぱらからする奴があるものか」と云ふ。なぜこれまでは今のやうでなかつたかと云へば、「それは商賣を手廣に遣り出さない前の事だ」と云ふ。末造は池の端へ越すまでは、何もかも一人でしてゐたのに、今は住まひの近所に事務所めいたものが置いてある外に、龍泉寺町にまで出張所とでも云ふやうな家があつて、學生が所謂金策のために、遠道を踏まなくても濟むやうにしてある。根津で金のいるものは事務所に驅け附ける。吉原でいるものは出張所に驅け附ける。後には吉原の西の宮と云ふ引手茶屋と、末造の出張所とは氣脈を通じてゐる。出張所で承知してゐれば、金がなくても遊ばれるやうになつてゐた。宛然たる遊蕩の兵站が編成せられてゐたのである。

　末造夫婦は新に不調和の階級を進める程の衝突をせずに、一月ばかりも暮してゐた。詰ま

りその間は末造の詭辯が功を奏してゐたのである。然るに或る日以外な邊から破綻が生じた。

さいはひ夫が内にゐるので、朝の涼しいうちに買物をして來ると云つて、お常は女中を連れて廣小路まで行つた。その歸りに仲町を通り掛かると、背後から女中が袂をそつと引く。「なんだい」と叱るやうに云つて、女中の顏を見る。女中は默つて左側の店に立つてゐる女を指さす。お常はしぶしぶその方を見て、覺えず足を駐める。そのとたんに女は振り返る。お常とその女とは顏を見合せたのである。

お常は最初藝者かと思つた。若し藝者なら、數寄屋町に此女程どこもかしこも揃つて美しいのは、外にあるまいと、せはしい暇に判斷した。併し次の瞬間には、此女が藝者の持つてゐる何物かを持つてゐないのに氣が附いた。その何物かはお常には名状することは出來ない。それを説明しようとすれば、態度の誇張とでも云はうか。藝者は着物を好い恰好に着る。その好い恰好は必ず幾分か誇張せられる。誇張せられるから、おとなしいと云ふ所が失はれる。お常の目に何物かが無いと感ぜられたのは、此誇張である。

店の前の女は、傍を通り過ぎる誰やらが足を駐めたのを、殆ど意識せずに感じて、振り返つて見たが、その通り過ぎる人の上に、なんの注意すべき點をも見出さなかつたので、蝙蝠傘を少し内廻轉をさせた膝の間に寄せ掛けて、帶の間から出して持つてゐた、小さい蝦蟇口の中を、項を屈めて覗き込んだ。小さい銀貨を捜してゐるのである。

店は仲町の南側の「たしがらや」であつた。「たしがらや倒さに讀めばやらかした」と、何者かの言ひ出した、珍らしい屋號の此店には、金字を印刷した、赤い紙袋に入れた、歯磨を賣つてゐた。まだ錬歯磨なんぞの舶來してゐなかつたその頃、上等のざら附かない製品は、牡丹の香のする、岸田の花王散と、このたしがらやの歯磨とであつた。店の前の女は別人でない。朝早く父親の所を訪ねた歸りに、歯磨を買ひに寄つたお玉であつた。

お常が四五歩通り過ぎた時、女中が囁いた。

「奧さん。あれですよ。無縁坂の女は。」

默つて頷いたお常には、此詞が格別の效果を與へないので、女中は意外に思つた。あの女は藝者ではないと思ふと同時に、お常は本能的に無縁坂の女だと云ふことを曉つてゐたのである。それには女中が只美しい女がゐると云ふ丈で、袖を引いて教へはしない筈だと云ふ判斷も手傳つてゐるが、今一つ意外な事が影響してゐた。それはお玉が膝の所に寄せ掛けてゐた蝙蝠傘である。

もう一月餘り前の事であつた。夫が或る日横濱から歸つて、みやげに蝙蝠の日傘を買つて來た。柄がひどく長くて、張つてある切れが割合に小さい。脊の高い西洋の女が手に持つておもちやにするには好からうが、ずんぐりむつくりしたお常が持つて見ると、極端に言へば、物干竿の尖へおむつを引つ掛けて持つたやうである。それでその儘差さずにしまつて置いた。その傘は白地に細かい辨慶縞のやうな形が、藍で染め出してあつた。たしがらやの店にゐた女の蝙蝠傘がそれと同じだと云ふことを、お常ははつきり認めた。

酒屋の角を池の方へ曲がる時、女中が機嫌を取るやうに云つた。

「ねえ、奧さん。そんなに好い女ぢやありませんでせう。顏が平べつたくて、いやに脊が高くて。」

「そんな事を言ふものぢやないよ」と云つた切、相手にならずにずんずん歩く。女中は當がはづれて、不平らしい顏をして附いて行く。

お常は只胸の中が湧き返るやうで、何事をもはつきり考へることが出來ない。夫に對してどうしよう、なんと云はうと云ふ思案も無い。その癖早く夫に打つ附かつて、なんとか云はなくてはゐられぬやうな氣がする。そしてこんな事を思ふ。あの蝙蝠傘を買つて來て貰つた時、わたしはどんなにか喜んだだらう。これ迄こつちから賴まぬのに、物なんぞ買つて來てくれたことはない。どうして今度に限つて、みやげを買つて來てくれたのだらうと、不思議には思つたが、その不思議と云ふのも、どうして夫が急に親切になつたかと思つたのであつた。今考へれば、おほ方あの女が賴んで買つて貰つた時、ついでにわたしのを買つたのだらう。きつとさうに違ひない。さうとは知らずに、わたしは難有く思つたのだ。わたしには差されもしない、あんな傘を貰つて、難有く思つたのだ。傘ばかりでは無い。あの女の着物や髮の物も、内で買つて遣つたのかも知れない。丁度わたしの差してゐる、毛繻子張の此の傘と、あの舶來の蝙蝠とが違ふやうに、わたしとあの女とは、身に着けてゐる程の物が皆違つてゐる。それにわたしばかりではない。子供に着物を着せたいと思つても、なかなか拵へてくれはしない。男の子には筒つぽが一枚あれば好いものだと云ふ。女の子だと小さいうちに着物を拵へるのは損だと云ふ。何萬と云ふ金を持つた人の女房や子供に、わたし達親子のやうななりをしてゐるものがあるだらうか。今から思つて見れば、あの女がゐたお蔭で、わたし達に構つてくれなかつたかも知れない。吉田さんの持物だつたなんと云ふのも、本當だかどうだか當にはならない。七曲りとかにゐた時分から、内で圍つて置いたかも知れない。いや。きつとさうに違ない。金廻りが好くなつて、自分の着物や持物に贅澤をするやうになつたのを、附合があるからだのなんのと云つたが、あの女がゐたからだらう。わたしをどこへでも連れて行かずに、あの女を連れて行つたに違ない。ええ、悔やしい。こんな事を思つてゐると、突然女中が叫んだ。

「あら、奧さん。どこへ入らつしやるのです。」

お常はびつくりして立ち留まつた。下を向いてずんずん歩いてゐて、我家の門を通り過ぎようとしたのである。

女中が無遠慮に笑つた。

拾肆

朝の食事の跡始末をして置いて、お常が買物に出掛ける時、末造は烟草を呑みつつ新聞を讀んでゐたが、歸つて見れば、もう留守になつてゐた。若し内にゐたら、なんと云つて好いかは知らぬが、兎に角打つ附かつて、むしやぶり附いて、なんとでも云つて遣りたいやうな心持で歸つたお常は、拍子拔けがした。午食の支度もしなくてはならない。もう間もなく入用になる子供の袷の縫ひ掛けてあるのも縫はなくてはならない。お常は器械的に、いつものやうに働いてゐるうちに、夫に打つ附からうと思つた鋭鋒は次第に挫けて來た。これまでもひどい勢で、石垣に頭を打ち附ける積りで、夫に衝突したことは、度々ある。併しいつも頭にあらがふ筈の石垣が、腕を避ける暖簾であるのに驚かされる。そして夫が滑かな舌で、道理らしい事を言ふのを聞いてゐると、いつかその道理に服するのではなくて、只何がなしに萎やされてしまふのである。けふはなんだか、その第一の襲撃も旨く出來さうには思はれなくなつて來る。お常は子供を相手に午食を食べる。喧嘩をする子供の裁判をする。袷を縫ふ。又夕食の支度をする。子供に行水を遣はせて、自分も使ふ。蚊遣をしながら夕食を食べる。食後に遊びに出た子供が遊び草臥れて歸る。女中が勝手から出

て來て、極まつた所に床を取つたり、蚊帳を吊つたりする。手水をさせて子供を寢かす。夫の夕食の時に蠅帳を被せて、火鉢に鐵瓶を掛けて、次の間に置く。夫が夕食に歸らなかつた時は、いつでもかうして置くのである。

お常はこれ丈の事を器械的にしてしまつた。そして團扇を一本持つて蚊屋の中へ這入つて据わつた。その時けさ途で逢つた、あの女の所に、今時分夫が往つてゐるだらうと云ふことが、今更のやうにはつきりと想像せられた。どうも體を落ち着けて、据わつてはゐられぬやうな氣持がする。どうしよう、どうしようと思ふうちに、ふらふらと無縁坂の家の所まで往つて見たくなる。いつか茅町へ、子供の一番好きな田舎饅頭を買ひに往つた時、したて物の師匠の内の隣と云ふのは此家だなと思つて、見て通つたので、それらしい格子戸の家に分かつてゐる。ついあそこまで往つて見たい 火影が外へ差してゐるか。話聲が微かにでも聞えてゐるか。それ丈でも見て來たい。いやいや、そんな事は出來ない。外へ出るには女中部屋の傍の廊下を通らぬわけには行かない。この頃はあの廊下の所の障子がはづしてある。松はまだ起きて縫物をしてゐる筈である。今時分どこへ往くのだと聞かれた時、なんとも返事のしやうがない。何か買ひに出ると云つたら、松が自分で行かうと云ふだらう。して見れば、どんなに往つて見たくても、そつと往つて見ることは出來ない。ええ、どうしたら好からう。けさ内へ歸る時は、ちつとも早くあの人に逢ひたいと思つたが、あの時逢つたら、わたしはなんと云つただらう。逢つたら、わたしの事だから、取留のない事ばかり言つたに違ひない。さうしたらあの人が又好い加減の事を言つて、わたしを騙してしまつただらう。あんな利口な人だから、どうせ喧嘩をしては適はない。いつそ默つてゐようか。併し默つてゐてどうなるだらうか。あんな女が附いてゐては、わたしなんぞはどうなつても構はぬ氣になつてゐるだらう。どうしよう。どうしよう。

こんな事を繰り返し繰り返し思つては、何遍か思想が初の發足點に跡戻をする。そのうちに頭がぼんやりして來て、何がなんだか分からなくなる。併し兎に角烈しく夫に打つ附かつて駄目だから、よさうと云ふこと丈は極めることが出來た。

そこへ末造が這入つて來た。お常はわざとらしく取り上げた團扇の柄をいぢつて默つてゐる。

「おや。又變な樣子をしてゐるな。どうしたのだい。」上さんがいつもする「お歸なさい」と云ふ挨拶をしないでゐても、別に腹は立てない。機嫌が好いからである。

お常は默つてゐる。衝突を避けようとは思つたが、夫の歸つたのを見ると、悔やしさが込み上げて來て、まるで反抗せずにはゐられさうになくなつた。

「又何か下だらない事を考へてゐるな。よせよせ。」上さんの肩の所に手を掛けて、二三遍ゆさぶつて置いて、自分の床に据わつた。

「わたしどうしようかと思つてゐますの。歸らうと云つたつて、歸る内は無し、子供もあるし。」

「なんだと。どうしようかと思つてゐる。どうもしなくたつて好いぢやないか。天下は太平無事だ。」

「それはあなたは太平樂を言つてゐられますでせう。わたしさへどうにかなつてしまへば好いのだから。」

「をかしいなあ。どうにかなるなんて。どうなるにも及ばない。その儘でゐれば好い。」

「たんと茶にしてお出なさい。ゐてもゐなくつ

ても好い人間だから、相手にはならないでせう。ゐないさうね。ゐてもゐなくつてもぢやない。ゐない方が好いに極まつてゐるのだつけ。」

「いやにひねくれた物の言ひやうをするなあ。ゐない方が好いのだつて。大違だ。ゐなくては困る。子供の面倒を見て貰ふばかりでも、大役だからな。」

「それは跡へ綺麗なおつ母さんが來て、面倒を見てくれますでせう。繼子になるのだけど。」

「分からねえ。二親揃つて附いてゐるから、繼子なんぞにはならない筈だ。」

「さう。きつとさうなの。まあ、好い氣な物ね。ではいつまでも今のやうにしてゐる積なのね。」

「知れた事よ。」

「さう。別品とおたふくとに、お揃の蝙蝠を差させて。」

「おや。なんだい、それは。お茶番の趣向見たいな事を言つてゐるぢやないか。」

「ええ。どうせわたしなんぞは眞面目な狂言には出られませんからね。」

「狂言より話が少し眞面目にして貰ひたいなあ。一體その蝙蝠てえのはなんだい。」

「分かつてゐるでせう。」

「分かるものか。まるつ切り見當が附かねえ。」

「そんなら言ひませう。あの、いつか横濱から蝙蝠を買つて來たでせう。」

「それがどうした。」

「あれはわたしばかしに買つて下すつたのぢやなかつたのね。」

「お前ばかしでなくて、誰に買つて遣るものかい。」

「いいえ。さうぢやないでせう。あれは無縁坂の女のを買つた序に、ふいと思ひ附いて、わたしのをも買つて來たのでせう。」さつきから蝙蝠の話はしてゐても、かう具體的に云ふと同時に、お常は悔やしさが込み上げて來るやうに感ずるのである。

「お手の筋」だとでも云ひたい程適中したので、末造はぎくりとしたが、反對に呆れたやうな顔をして見せた。「べらぼうな話だなあ。何かい。その、お前に買つた傘と同じ傘を、吉田さんの女が持つてゐるとでも云ふわけかい。」

「それは同じのを買つて遣つたのだから、同じのを持つてゐるに極まつてゐます。」聲が際立つて鋭くなつてゐる。

「なんの事だ。呆れたものだぜ。好い加減にしろい。なる程お前に横濱で買つて遣つた時は、サンプルで來たのだと云ふことだつたが、もう今頃は銀座邊でざらに賣つてゐるに違ない。芝居なんぞに好くある奴で、これがほんとの無實の罪と云ふのだ。そして何かい。お前、あの吉田さんの女に、どこかで逢つたとでも云ふのかい。好く分かつたなあ。」

「それは分かりますとも。ここいらで知らないものはないのです。別品だから。」にくにくしい聲である。これまでは末造がしらばつくれると、ついさうかと思つてしまつたが、今度は餘り強烈な直覺をして、その出來事を目前に見たやうに感じてゐるので、末造の詞を、なる程さうでもあらうかとは、どうしても思はれなかつた。

末造はどうして逢つたか、話でもしたのかと、種々に考へてゐながら、此場合に根掘り葉掘り問ふのは不利だと思つて、わざと追窮しない。「別品だつて。あんなのが別品と云ふのかなあ。妙に顔の平べつたいやうな女だが。」

お常は默つてゐた。併し憎い女の顔に難癖を附けた夫の詞に幾分か感情を融和させられた。

此晩にも物を言ひ合つて興奮した跡の夫婦の中直りがあつた。併しお常の心には、刺されたとげの抜けないやうな痛みが殘つてゐた。

拾伍

末造の家の空氣は次第に沈んだ、重くろしい方へ傾いて來た。お常は折々只ぼうつとして空を見てゐて、何事も手に附かぬことがある。そんな時には子供の世話も何も出來なくなつて、子供が何か欲しいと云へば、すぐにあらあらしく叱る。叱つて置いて氣が附いて、子供にあやまつたり、獨りで泣いたりする。女中が飯の菜を何にしようかと問うても、返事をしなかつたり、「お前の好いやうにおし」と云つたりする。末造の子供は學校では、高利貸の子だと云つて、女達に擯斥せられても、末造が綺麗好で、女房に世話をさせるので、目立つて清潔になつてゐたのが、今は五味だらけの頭をして、綻びた儘の着物を着て往來で遊んでゐることがあるやうになつた。下女はお上さんがあんなでは困ると、口小言を言ひながら、下手の乘つてゐる馬がなまけて道草を食ふやうに、物事を投遣にして、鼠入らずの中で肴が腐つたり、野菜が干物になつたりする。

家の中の事を生帳面にしたがる末造には、こんな不始末を見てゐるのが苦痛でならない。併しかうなつた元は分かつてゐて、自分が惡いのだと思ふので、小言を言ふわけにも行かない。それに末造は平生小言を言ふ場合にも、笑談のやうに手輕に言つて、相手に反省させるのを得意としてゐるのに、その笑談らしい態度が却つて女房の機嫌を損ずるやうに見える。

末造は默つて女房を觀察し出した。そして意外な事を發見した。それはお常の變な素振が、亭主の内にゐる時殊に甚しくて、留守になると、却つて醒覺したやうになつて働いてゐることが多いと云ふ事である。子供や下女の話を聞いて、此關係を知つた時、末造は最初は驚いたが、怜悧な頭で色々に考へて見た。これはする事の氣に食はぬ己の顏を見てゐる間、此頃の病氣を出すのだ。己は女房にどうかして夫が冷澹だと思はせまい、疎まれるやうに感ぜさせまいとしてゐるのに、却つて己が内にゐる時の方が不機嫌だとすると、丁度藥を飲ませて病氣を惡くするやうなものである。こんな詰まらぬ事はない。これからは一つ反對にして見ようと末造は思つた。

末造はいつもより早く内を出たり、いつもより遲く内へ歸つたりするやうになつた。併しその結果は非常に惡かつた。早く出た時は、女房が最初は只驚いて默つて見てゐた。遲く歸つた時は、最初の度にいつもの拗ねて見せる消極的手段と違つて、もう我慢がし切れない、堪忍袋の緒が切れたと云ふ風で、「あなた今までどこにゐましたの」と詰め寄つて來た。そして爆發的に泣き出した。その次の度からは早く出ようとすると、「あなた今からどこへ行くのです」と云つて、無理に留めようとする。行先を言へば譃だと云ふ。構はずに出ようとすると、是非聞きたい事があるから、ちよいとでも好い、待つて貰ひたいと云ふ。着物を掴まへて放さなかつたり、玄關に立ち塞がつたり、女中の見る目も厭はずに、出て行くのを妨げようとする。末造は氣に食はぬ事をも笑談のやうにして荒立てずに濟ます流義なのに、むしやぶり附くのを振り放す、女房が倒れると云ふ不體裁を女中に見られた事もある。そんな時に末造がおとなしく留められて内にゐて、さあ、用事を聞かうと云ふと、「あなた、わたしをどうしてくれる氣なの」とか、「かうしてゐて、わたしの行末はどうなるでせう」とか、なかなか一朝一夕に解決の出來ぬ難問題を提出する。要するに末造が女房の病氣に試みた早出遲歸の對症療法は全く功を奏せなかつたのである。

末造は又考へて見た。女房は己の内にゐる

時の方が機嫌が惡い。そこで內にゐまいとすれば、强ひて內にゐさせようとする。さうして見れば、求めて己を內にゐさせて、求めて自分の機嫌を惡くしてゐるのである。それに就いて思ひ出した事がある。和泉橋時代に金を貸して遣つた學生に猪飼と云ふのがゐた。身なりに少しも構はないと云ふ風をして、素足に足駄を穿いて、左の肩を二三寸高くして步いてゐた。そいつがどうしても金を返さず、書換もせずに逃げ廻つてゐたのに、或日靑石橫町の角で出くはした。「どこへ行くのです」と云ふと、「ぢきそこの柔術の先生の所へ行くのだよ。」例のはいづれそのうち」と云つて摩り拔けて行つた。己はその儘別れて步き出す眞似をして、そつと跡へ戾つて、角に立つて見てゐた。猪飼は伊豫紋に這入つた。己はそれを突き留めて置いて、廣小路で用を達して、暫く立つてから伊豫紋へ押し掛けて行つた。猪飼奴流石に驚いたが、持前の豪傑氣取で、藝者を二人呼んで馬鹿騷ぎをしてゐる席へ、己を無理に引き摩り上げて、野暮を言はずにけふは一杯飮んでくれ」と云つて、己に酒を飮ませやがつた。あの時己は始て藝者と云ふものを座敷で見たが、その中に凄いやうな意氣な女がゐた。おしゆんと云つたつけ。そいつが醉つ拂つて猪飼の前に据わつて、何が癪に障つてゐたのだか、毒づき始めた。その時の詞を、己は默つて聞いてゐたが、いまだに忘れない。「猪飼さん。あなたきつさうな風をしてゐても、まるでいく地のない方ね。あなたに言つて聞せて置くのですが、女と云ふものは時々ぶんなぐつてくれる男にでなくつては惚れませんよ。好く覺えて入らつしやい」と云つたつけ。藝者には限らない、女と云ふものはさうしたものかも知れない。此頃のお常奴は、己を傍に引き附けて置いてふくれ面をして抗つてばかしゐようとしやがる。己にどうかして貰ひたいと云ふ樣子が見えてゐる。打たれたいのだ。さうだ。打たれたいのだ。それに相違ない。お常奴は己がこれまで食ふ物もろくに食はせないで、牛馬のやうに働かせてゐたものだから、獸のやうになつてゐて、女らしい性質が出ずにゐたのだ。それが今の家に引き越した頃から、女中を使つて、奧さんと云はれて、大ぶ人間らしい暮らしをして、少し世間並の女になり掛かつて來たのだ。そこでおしゆんの云つたやうにぶんなぐつて貰ひたくなつたのだ。

　そこで己はどうだ。金の出來るまでは、人になんと云はれても構はない。乳臭い靑二才にも、旦那と云つてお辭儀をする。踏まれても蹴られても、損さへしなければ好いと云ふ氣になつて、世間を渡つて來た。每日每日どこへ往つても、誰の前でも、平蜘蛛のやうになつて遣ひつくばつて通つた。世間の奴等に附き合つて見るに、目上に腰の低い奴は、目下にはつらく當つて、弱いものいぢめをする。醉つて女や子供をなぐる。己には目上も目下もない。己に金を儲けさせてくれるものゝ前には這ひつくばふ。さうでない奴は、誰でも彼でも一切ゐるもゐないも同じ事だ。てんで相手にならない。打ち遣つて置く。なぐるなんと云ふ餘計な手數は掛けない。そんな無駄をする程なら、己は利足の勘定でもする。女房をもその扱ひにしてゐたのだ。

　お常奴己になぐつて貰ひたくなつたのだ。當人には氣の毒だが、これぱかりはお生憎樣だ。債務者の脂を柚子なら苦い汁が出るまで絞ることは己に出來る。誰をも打つことは出來ない。

末造はこんな事を考へたのである。

拾陸

　無緣坂の人通りが繁くなつた。九月になつて、大學の課程が始まるので、國々へ歸つてゐた學生が、一時に本郷界隈の下宿屋に戾つたの

である。

朝晩はもう涼しくても、晝中はまだ暑い日がある。お玉の家では、越して來た時掛け替へた靑簾の、色の褪める隙のないのが、肱掛窓の竹格子の内側を、上から下迄透間なく深く鎖してゐる。無聊に苦んでゐるお玉は、その窓の内で、曉齋や是眞の畫のある團扇を幾つも插した團扇插しの下の柱にもたれて、ぼんやり往來を眺めてゐる。三時が過ぎると、學生が三四人づつの群をなして通る。その度毎に、隣の裁縫の師匠の家で、小雀の囀るやうな娘達の聲が一際喧しくなる。それに促されてお玉もどんな人が通るかと、覺えず氣を附けて見ることがある。

その頃の學生は、七八分通りは後に言ふ壯士肌で、稀に紳士風なのがあると、それは卒業直前の人達であつた。色の白い、目鼻立の好い男は、兎角輕薄らしく、利いた風で、懷かしくない。さうでないのは、學問の出來る人が其中にあるのかは知れぬが、女の目には荒々しく見えて厭である。それでもお玉は毎日見るともなしに、窓の外を通る學生を見てゐる。そして或る日自分の胸に何物かが芽ざして來てゐるらしく感じて、はつと驚いた。意識の閾の下で胎を結んで、形が出來てから、突然躍り出したやうな想像の塊に驚かされたのである。

お玉は父親を幸福にしようと云ふ目的以外に、何の目的も有してゐなかつたので、無理に堅い父親を口說き落すやうにして人の妾になつた。そしてそれを墮落せられるだけ墮落するのだと見て、その利他的行爲の中に一種の安心を求めてゐた。併しその檀那と頼んだ人が、人もあらうに高利貸であつたと知つた時は、餘りの事に途方に暮れた。そこでどうも自分一人で胸のうやもやを排し去ることが出來なくなつて、その心持を父親に打ち明けて、一しよに苦み悶えて貰はうと思つた。さうは思つたものの、池の端の父親を尋ねてその平穩な生活を目のあたり見ては、どうも老人の手にしてゐる杯の裡に、一滴の毒を注ぐに忍びない。よしやせつない思をしても、その思を我胸一つに疊んで置かうと決心した。そして此決心と同時に、これまで人にたよることしか知らなかつたお玉が、始て獨立したやうな心持になつた。

此時からお玉は自分で自分の言つたり爲たりする事を窃に觀察するやうになつて、末造が來てもこれまでのやうに蟠まりのない直情で接せずに、意識してもてなすやうになつた。その間別に本心があつて、體を離れて傍へ退いて見てゐる。そしてその本心は末造をも、末造の自由になつてゐる自分をも嘲つてゐる。お玉はそれに始て氣が附いた時ぞつとした。併し時が立つと共に、お玉は慣れて、自分の心はさうなくてはならぬもののやうに感じて來た。

それからお玉が末造を遇することは愈厚くなつて、お玉の心は愈末造に疎くなつた。そして末造に世話になつてゐるのが難有くもなく、自分が末造の爲向けてくれる事を恩に被ないでも、それを末造に對して氣の毒がるには及ばぬやうに感ずる。それと同時に又なんの躾をも受けてゐない藝なしの自分ではあるが、その自分が末造の持物になつて果てるのは惜しいやうに思ふ。とう／＼往來を通る學生を見てゐて、あの中に若し賴もしい人がゐて、自分を今の境界から救つてくれるやうにはなるまいかとまで考へた。そしてさう云ふ想像に耽る自分を、忽然意識した時、はつと驚いたのである。

此時お玉と顏を識り合つたのが岡田であつた。お玉のためには岡田も只窓の外を通る學生の一人に過ぎない。併し際立つて立派な紅顏の美少年でありながら、己惚らしい、氣障な態度がないのにお玉は氣が附いて、何とはなしに懷

かしい人柄だと思ひ初めた。それから毎日窓から外を見てゐるにも、又あの人が通りはしないかと待つやうになつた。

まだ名前も知らず、どこに住まつてゐる人か知らぬうちに、度々顔を見合はすので、お玉はいつか自然に親しい心持になつた。そしてふと自分の方から笑ひ掛けたが、それは氣の弛んだ、抑制作用の痲痺した刹那の出來事で、おとなしい質のお玉にはこちらから戀をし掛けようと、はつきり意識して、故意にそんな事をする心はなかつた。

岡田が始て帽子を取つて會釋した時、お玉は胸を躍らせて、自分で自分の顔の赤くなるのを感じた。女は直覺が鋭い。お玉には岡田の帽子を取つたのが發作的行爲で、故意にしたのでないことが明白に知れてゐた。そこで窓の格子を隔てた覺束ない不言の交際が爰に新しいEpoqueに入つたのを、此上もなく嬉しく思つて、幾度も繰り返しては、その時の岡田の様子を想像に畫いて見るのであつた。

妾も壇那の家にゐると、世間並の保護の下に立つてゐるが、圍物には人の知らぬ苦勞がある。お玉の内へも或る日印絆纏を裏返して着た三十前後の男が來て、下總のもので國へ歸るのだが、足を傷めて歩かれぬから、合力をしてくれと云つた。十錢銀貨を紙に包んで、梅に持たせて出すと紙を明けて見て、「十錢ですかい」と云つて、にやりと笑つて、「おほ方間違だらうから、聞いて見てくんねえ」と云ひつつ投げ出した。梅が眞つ赤になつて、それを拾つて這入る跡から、男は無遠慮に上がつて來て、お玉の炭をついでゐる箱火鉢の向うに据わつた。なんだか色色な事を言ふが、取り留めた話ではない。監獄にゐた時どうだとか云ふことを幾度も云つて、息張るかと思へば、泣言を言つてゐる。酒の匂が胸の惡い程するのである。

お玉はこはくて泣き出したいのを我慢して、その頃通用してゐた骨牌のやうな形の青い五十錢札を二枚、見てゐる前で出して紙に包んで、默つて男の手に渡した。男は存外造作なく滿足して、「半助でも二枚ありやあ結構だ、姉えさん、お前さんは分りの好い人だ、きつと出世しますよ」と云つて、覺束ない足を踏み締めて歸つた。

こんな出來事があつたので、お玉は心細くてならぬ所から、「隣を買ふ」と云ふことをも覺えて、變つた菜でも拵へた時は、一人暮らしでゐる右隣の裁縫のお師匠さんの所へ、梅に持たせて遣るやうになつた。

師匠はお貞と云つて、四十を越してゐるのに、まだどこやら若く見える所のある、色の白い女である。前田家の奥で、三十になるまで勤めて、夫を持つたが間もなく死なれてしまつたと云ふ。詞遣が上品で、お家流の手を好く書く。お玉が手習がしたいと云つた時、手本などを貸してくれた。

或る日の朝お貞が裏口から、前日にお玉の遣つた何やらの禮を言ひに來た。暫く立話をしてゐるうちに、お貞が「あなた岡田さんがお近づきですね」と云つた。

お玉はまだ岡田と云ふ名を知らない。それでゐて、お師匠さんの云ふのはあの學生さんの事だと云ふこと、かう聞かれるのは自分に辭儀をした處を見られたのだと云ふこと、此場合では厭でも知つた振をしなくてはならぬと云ふことなどが、稻妻のやうに心頭を掠めて過ぎた。そして遲疑した跡をお貞が認め得ぬ程速かに、「ええ」と答へた。

「あんなお立派な方でゐて、大層品行が好くてお出なさるのですつてね」とお貞が云つた。

「あなた好く御存じね」と大膽にお玉が云つた。

「上條のお上さんも、大勢學生さん達が下宿してゐなすつても、あんな方は外にないと云つてゐますの。」かう云つて置いて、お貞は歸つた。

お玉は自分が褒められたやうな氣がした。そして「上條、岡田」と口の内で繰り返した。

拾漆

お玉の所へ末造の來る度數は、時の立つに連れて少くはならないで、却つて多くなつた。それはこれまでのやうに極まつて晩に來る外に、不規則な時間にちよいちよい來るやうになつたのである。なぜさうなつたかと云ふに、女房のお常がうるさく附き纏つて、どうかしてくれ、どうかしてくれと云ふので、ふいと逃げ出して無縁坂へ來るからである。いつも末造がそんな時、どうもすることはない、これまで通りにしてゐれば好いのだと云ふと、どうにかしなくてはゐられぬと云つて、里へ歸られぬ事や、子供の手放されぬ事や、自分の年を取つた事や、詰まり生活狀態の變更に對するあらゆる障碍を竝べて口說き立てる。それでも末造はどうもすることはない、どうもしなくても好いと繰り返す。そのうちにお常は次第に腹を立てて來て、手が附けられぬやうになる。そこで飛び出すことになつてゐる。何事も理窟つぽく、數學的に物を考へる末造が爲めには、お常の言つてゐる事が不思議でならない。丁度一方が開け放されて、三方が壁で塞がれてゐる間の、その開け放された戸口を背にして立つてゐて、どちらへも往かれぬと云つて、悶え苦む人を見るやうな氣がする。戸口は開け放されてゐるではないか。なぜ振り返つて見ないのだと云ふより外に、その人に對して言ふべき詞はない。お常の身の上はこれまでより樂にこそなつてゐるが、少しも壓制だの窘迫だの掣肘だのを受けてはゐない。なるほど無縁坂と云ふものが新に出來たには相違ない。併し世間の男のやうに、自分はその爲めに、女房に冷澹になつたとか、苛酷になつたとか云ふことはない。寧ろこれまでよりは親切に、寛大に取り扱つてゐる。戸口は依然として開け放されてゐるではないかと思ふのである。

無論末造のかう云ふ考には、身勝手が交つてゐる。なぜと云ふに、物質的に女房に爲向ける事がこれ迄と變らぬにしても、又自分が女房に對する詞や態度が變らぬにしても、お玉と云ふものがゐる今を、ゐなかつた昔と同じやうに思へと云ふのは、無理な要求である。お常がために目の内の刺になつてゐるお玉ではないか。それを拔いて安心させて遣らうと云ふ意志が自分には無いではないか。固よりお常は物事に筋道を立てて考へるやうな女ではないから、そんな事をはつきり意識してはゐぬが、末造の謂ふ戸口が依然として開け放されてはゐない。お常が現在の安心や未來の希望を覗く戸口には、重くろしい、黑い影が落ちてゐるのである。

或る日末造は喧嘩をして、内をひよいと飛び出した。時刻は午前十時過ぎでもあつたらう。直ぐに無縁坂へ往かうかとも思つたが、生憎女中が小さい子を連れて、七軒町の通にゐたので、わざと切通の方へ拔けて、どこへ往くと云ふ氣もなしに、天神町から五軒町へと、忙がしさうに歩いて行つた。折々「畜生、畜生」などと云ふ、いかがはしい單語を口の内でつぶやいてゐるのである。昌平橋に掛かる時、向うから藝者が來た。どこかお玉に似てゐると思つて、傍を摩れ違ふのを好く見れば、顏は雀斑だらけであつた。矢つ張お玉の方が別品だなと思ふと同時に、心に愉快と滿足とを覺えて、暫く足を橋の上に駐めて、藝者の後影を見送つた。多分買物にでも出たのだらう、藝者は講武所の横町へ姿を隱してしまつた。

その頃まだ珍らしい見物になつてゐた眼鏡橋

の袂を、柳原の方へ向いてぶらぶら歩いて行く。川岸の柳の下に大きい傘を張つて、其下で十二三の娘にかつぽれを踊らせてゐる男がある。その周圍にはいつものやうに人が集まつて見てゐる。末造がちよいと足を駐めて踊を見てゐると、印半纏を着た男が打つ附かりさうにして、避けて行つた。目ざとく振り返つた末造と、その男は目を見合せて直ぐに背中を向けて通り過ぎた。「なんだ、目先の見えねえ」とつぶやきながら、末造は袂に入れてゐた手で懷中を搜つた。無論何も取られてはゐなかつた。この攫徒は實際目先が見えぬのであつた。なぜと云ふに、末造は夫婦喧嘩をした日には、神經が緊張してゐて、不斷氣の附かぬ程の事にも氣が附く。鋭敏な感覺が一層鋭敏になつてゐる。攫徒の方ですらうと云ふ意志が生ずるに先だつて、末造はそれを感ずる位である。こんな時には自己を抑制することの出來るのを誇つてゐる末造も、多少その抑制力が弛んでゐる。併し大抵の人にはそれが分からない。若し非常に感覺の鋭敏な人がゐて、細かに末造を觀察したら、彼が常より稍能辯になつてゐるのに氣が附くだらう。そして彼の人の世話を燒いたり、人に親切らしい事を言つたりする言語擧動の間に、どこか慌ただしいやうな、稍不自然な處のあるのを認めるだらう。

もう内を飛び出してから餘程時間が立つたやうに思つて、川岸を跡へ引き返しつつ懷時計を出して見た。まだやつと十一時である。内を出てから三十分も立つてはゐぬのである。

末造は又どこを當ともなしに、淡路町から神保町へ、何か急な用事でもありさうな樣子をして歩いて行く。今川小路の少し手前にお茶漬と云ふ看板を出した家が其頃あつた。二十錢ばかりでお膳を据ゑて、香の物に茶まで出す。末造は此家を知つてゐるので、午を食べに寄らうかと思つたが、それにはまだ少し早かつた。そこを通り過ぎると、右へ廻つて、俎橋の手前の廣い町に出る。此町は今のやうに駿河臺の下まで廣々と開いてゐたのではない。殆ど袋町のやうに、今末造の來た方角へ曲がる處で終つて、それから醫學生が蟲様突起と名づけた狹い横町が、あの山岡鐵舟の字を柱に掘り附けた社の前を通つてゐた。これは袋町めいた、俎橋の手前の廣い町を盲腸に譬へたものである。

末造は俎橋を渡つた。右側に飼鳥を賣る店があつて、いろいろな鳥の賑やかな囀りが聞える。末造は今でも殘つてゐる此店の前に立ち留まつて、檐に高く吊つてある鸚鵡や秦吉了の籠、下に置き並べてある白鳩や朝鮮鳩の籠杯を眺めて、それから奧の方に幾段にも積み疊ねてある小鳥の籠に目を移した。鳴くにも飛び廻るにも、この小さい連中が最も聲高で最も活潑であるが、中にも目立つて籠の數が多く、賑やかなのは、明るい黄いろな外國種のカナリア共であつた。併し猶好く見てゐるうちに、沈んだ強い色で小さい體を彩られてゐる紅雀が末造の目を引いた。末造はふいとあれを買つて持つて往つて、お玉に飼はせて置いたら、さぞふさはしからうと感じた。そこで餘り賣りたがりもしなささうな樣子をしてゐる爺いさんに價を問うて、一つがひの紅雀を買つた。代を拂つてしまつた時、爺いさんはどうして持つて行くかと問うた。籠に入れて賣るのではないかと云へば、さうでないと云ふ。やうやう籠を一つ賴むやうにして賣つて貰つて、それに紅雀を入れさせた。幾羽もゐる籠へ、萎びた手をあらあらしく差し込んで、二羽摑み出して、空籠に移し入れるのである。それで雌雄が分かるかと云へば、しぶしぶ「へえ」と返事をした。

末造は紅雀の籠を提げて俎橋の方へ引き返した。こん度は歩き方が緩やかになつて、折々

籠を持ち上げては、中の鳥を覗いて見た。喧嘩をして内を飛び出した氣分が、拭ひ去つたやうに消えてしまつて、不斷此男のどこかに潛んでゐる、優しい心が表面に浮び出てゐる。籠の中の鳥は、籠の搖れるのに慣れてか、止まり木をしつかり攫んで、翅をすぼめるやうにして、身動きもしない。末造は覗いて見る度に、早く無縁坂の家に持つて往つて、窓の所に吊るして遣りたいと思つた。

今川小路を通る時、末造は茶漬屋に寄つて午食をした。女中の据ゑた黒塗の膳の向うに、紅雀の籠を置いて、目に可哀らしい小鳥を見、心に可哀らしいお玉の事を思ひつつ、末造は餘り御馳走でもない茶漬屋の飯を旨さうに食つた。

拾捌

末造がお玉に買つて遣つた紅雀は、圖らずもお玉と岡田とが詞を交す媒となつた。

此話をし掛けたので、僕はあの年の氣候の事を思ひ出した。あの頃は亡くなつた父が秋草を北千住の家の裏庭に作つてゐたので、土曜日に上條から父の所へ歸つて見ると、もう二百十日が近いからと云つて、篠竹を澤山買つて來て、女郎花やら藤袴やらに一本一本それを立て副へて縛つてゐた。併し二百十日は無事に過ぎてしまつた。それから二百二十日があぶないと云つてゐたが、それも無事に過ぎた。併しその頃から毎日毎日雲のたたずまひが不穩になつて、暴模樣が見える。折々又夏に戻つたかと思ふやうな蒸暑いことがある。巽から吹く風が強くなりさうになつては又歇む。父は二百十日が「なしくづし」になつたのだと云つてゐた。

僕は或る日曜日の夕方に、北千住から上條へ歸つて來た。書生は皆外へ出てゐて、下宿屋はひつそりしてゐた。自分の部屋へ這入つて、暫くぼんやりしてゐると、今まで誰もゐないと思つてゐた隣の部屋でマッチを磨る音がする。僕は寂しく思つてゐた時だから、直ぐに聲を掛けた。

「岡田君。ゐたのか。」

「うん。」返事だか、なんだか分からぬやうな聲である。僕と岡田とは隨分心安くなつて、他人行儀はしなくなつてゐたが、それにしても此時の返事はいつもとは違つてゐた。

僕は腹の中で思つた。こつちもぼんやりしてゐたが、岡田も矢つ張ぼんやりしてゐたやうだ。何か考へ込んでゐたのではあるまいか。かう思ふと同時に、岡田がどんな顏をしてゐるか見たいやうな氣がした。そこで重ねて聲を掛けて見た。「君、邪魔をしに往つても好いかい。」

「好いどころぢやない。實はさつき歸つてからぼんやりしてゐた所へ、君が隣へ歸つて來てがたがた云はせたので、奮つて明りでも附けようと云ふ氣になつたのだ。」こん度は聲がはつきりしてゐる。

僕は廊下に出て、岡田の部屋の障子を開けた。岡田は丁度鐵門の眞向ひになつてゐる窓を開けて、机に肘を衝いて、暗い外の方を見てゐる。竪に鐵の棒を打ち附けた窓で、その外には犬走りに植ゑた側柏が二三本埃を浴びて立つてゐるのである。

岡田は僕の方へ振り向いて云つた。「けふも又妙にむしむしするぢやないか。僕の所には蚊が二三疋ゐてうるさくてしやうがない。」

僕は岡田の机の横の方に胡坐を掻いた。「さうだねえ。僕の親父は二百十日のなし崩しと稱してゐる。」

「ふん。二百十日のなし崩しとは面白いねえ。なる程さうかも知れないよ。僕は空が曇つたり晴れたりしてゐるもんだから、出ようかどうしようかと思つて、とうとう午前の間中寢轉んで、君に借りた金瓶梅を讀んでゐたのだ。それ

から頭がぼうつとして來たので、午飯を食つてからぶらぶら出掛けると、妙な事に出逢つてねえ。」岡田は僕の顏を見ずに、窓の方へ向いてから云つた。

「どんな事だい。」

「蛇退治を遣つたのだ。」岡田は僕の方へ顏を向けた。

「美人をでも助けたのぢやないか。」

「いや。助けたのは鳥だがね、美人にも關係してゐるのだよ。」

「それは面白い。話して聞かせ給へ。」

拾玖

岡田はこんな話をした。

雲が慌ただしく飛んで、物狂ほしい風が一吹二吹衝突的に起つて、街の塵を捲き上げては又息む午過ぎに、半日讀んだ支那小說に頭を痛めた岡田は、どこへ往くと云ふ當てもなしに、上條の家を出て、習慣に任せて無緣坂の方へ曲がつた。頭はぼんやりしてゐた。一體支那小說はどれでもさうだが、中にも金瓶梅は平穩な敍事が十枚か二十枚かあると思ふと、約束したやうに怪しからん事が書いてある。「あんな本を讀んだ跡だからねえ、僕はさぞ馬鹿げた顏をして歩いてゐただらうと思ふよ」と、岡田は云つた。

暫くして右側が岩崎の屋敷の石垣になつて、道が爪先下りになつた頃、左側に人立ちのしてゐるのに氣が附いた。それが丁度いつも自分の殊更に見て通る家の前であつたが、その事丈は岡田が話す時打ち明けずにしまつた。集まつてゐるのは女ばかりで、十人ばかりもゐただらう。大抵は小娘だから、小鳥の囀るやうに何やら言つて噪いでゐる。岡田は何事も辨へず、又それを知らうと云ふ好奇心を起す暇もなく、今まで道の眞ん中を歩いてゐた足を二三歩その方へ向けた。

大勢の女の目が只一つの物に集注してゐるので、岡田はその視線を辿つてこの騷ぎの元を見附けた。それはそこの家の格子窓の上に吊るしてある鳥籠である。女共の騷ぐのも無理は無い。岡田もその籠の中の樣子を見て驚いた。鳥はばたばた羽ばたきをして、啼きながら狹い籠の中を飛び廻つてゐる。何物が鳥に不安を與へてゐるのかと思つて好く見れば、大きい青大將が首を籠の中に入れてゐるのである。頭を楔のやうに細い竹と竹との間に押し込んだものと見えて、籠は一寸見た所では破れてはゐない。蛇は自分の體の大さ丈入口を開けて首を入れたのである。岡田は好く見ようと思つて二三歩進んだ。小娘共の肩を並べてゐる背後に立つやうになつたのである。小娘共は言ひ合せたやうに岡田を救助者として迎へる氣になつたらしく、道を開いて岡田を前へ出した。岡田は此時又新しい事實を發見した。それは鳥が一羽ではないと云ふ事である。羽ばたきをして逃げ廻つてゐる鳥の外に、同じ羽色の鳥が今一羽もう蛇に銜へられてゐる。片方の羽の全部を口に含まれてゐるに過ぎないのに、恐怖のためか死んだやうになつて、一方の羽をぐたりと垂れて、體が綿のやうになつてゐる。

此時家の主人らしい稍年上の女が、慌ただしげに、しかも遠慮らしく岡田に物を言つた。蛇をどうかしてくれるわけには行くまいかと云ふのである。「お隣へお爲事のお稽古に來て入らつしやる皆さんが、すぐに大勢で入らつしやつて下すつたのですが、どうも女の手ではどうする事も出來ませんでございます」と女は言ひ足した。小娘の中の一人が、「この方が鳥の騷ぐのを聞いて、障子を開けて見て、蛇を見附けなすつた時、きやつと聲を立てなすつたもんですから、わたし共はお爲事を置いて、皆出て來ましたが、本當にどうもいたすことが出來ません

の、お師匠さんはお留守ですが、入らつしやつたつてお婆あさんの方ですから駄目ですわ」と云つた。師匠は日曜日に休まずに一六に休むので、弟子が集まつてゐたのである。

此話をする時岡田は、「その主人の女と云ふのがなかなか別品なのだよ」と云つた。併し顔から顔を見知つてゐて、通る度に挨拶をする女だとは云はなかつた。

岡田は返辭をするより先きに、籠の下へ近寄つて蛇の様子を見た。籠は隣の裁縫の師匠の家の方に寄せて、窓に吊るしてあつて、蛇は此家と隣家との間から、庇の下をつたつて籠にねらひ寄つて首を插し込んだのである。蛇の體は纏を掛けたやうに、庇の腕木を横切つてゐて、尾はまだ隣の柱のさきに隠れてゐる。随分長い蛇である。いづれ草木の茂つた加賀屋敷のどこかに住んでゐたのが此頃の氣候の變調を感じてさまよひ出て、途中で此雛の鳥を見附けたものだらう。岡田もどうしようかとちよいと迷つた。女達がどうもすることの出來なかつたのは無理も無いのである。

「何か刃物はありませんか」と岡田は云つた。

主人の女が一人の小娘に、「あの臺所にある出刃を持つてお出で」と言ひ附けた。その娘は女中だつたと見えて、稽古に通へ來てゐると云ふ外の娘達と同じやうな湯帷子を着た上に、紫のメリンスでくけた襷を掛けてゐた。肴を切る庖丁で蛇を切られては困るとでも思つたか、娘は抗議をするやうな目附きをして主人の顔を見た。「好いよ、お前の使ふのは新らしく買つて遣るから」と主人が言つた。娘は合點が行つたと見えて、駈けて内へ這入つて出刃庖丁を取つて來た。

岡田は待ち兼ねたやうにそれを受け取つて、穿いてゐた下駄を脱ぎ棄てて、肱掛窓へ片足を掛けた。體操は彼の長技である。左の手はもう庇の腕木を握つてゐる。岡田は庖刀が新しくはあつても餘り鋭利でないことを知つてゐたので、初から一撃に切らうとはしない。庖刀で蛇の體を腕木に押し附けるやうにして、ぐりぐりと刃を二三度前後に動かした。蛇の鱗の切れる時、硝子を碎くやうな手ごたへがした。此時蛇はもう雛を銜へてゐた鳥の頭を頬のうちに手繰り込んでゐたが、體に重傷を負つて、波の起伏のやうな運動をしながら、獲物を口から吐かうともせず、首を籠から抜かうともしなかつた。岡田は手を弛めずに庖丁を五六度も前後に動かしたかと思ふ時、鋭くもない刃がとうとう蛇を組上の肉の如くに兩斷した。絶えず體に波を打たせてゐた蛇の下半身が、先づばたりと麥門冬の植ゑてある雨垂落の上に落ちた。續いて上半身が這つてゐた窓の鴨居の上をはづれて、首を籠に插し込んだ儘ぶらりと下がつた。鳥を半分銜へてふくらんだ頭が、弓なりに撓められて折れずにゐた籠の竹に支へて抜けずにゐるので、上半身の重みが籠に加はつて、籠は四十五度位に傾いた。その中では生き殘つた一羽の鳥が、不思議に精力を消耗し盡さずに、まだ羽ばたきをして飛び廻つてゐるのである。

岡田は腕木に攫んでゐた手を放して飛び降りた。女達は此時まで一同息を屏めて見てゐたが、二三人はここまで見て裁縫の師匠の家に這入つた。「あの籠を卸して蛇の首を取らなくては」と云つて、岡田は女主人の顔を見た。併し蛇の半身がぶらりと下がつて、切口から黒ずんだ血がぽたぽた窓板の上に垂れてゐるので、主人も女中も内に這入つて吊るしてある麻糸をはづす勇氣がなかつた。

その時「籠を卸して上げませうか」と、とんきやうな聲で云つたものがある。集まてゐる一同の目はその聲の方に向いた。聲の主は酒屋の小僧であつた。岡田が蛇退治をしてゐる間、寂し

い日曜日の午後に無縁坂を通るものはなかつたが、此小僧がひとり通り掛かつて、括縄で縛つた徳利と通帳とをぶら下げた儘、蛇退治を見物してゐた。そのうち蛇の下半身が麥門冬の上に落ちたので小僧は徳利も帳面も棄てて置いて、すぐに小石を拾つて蛇の傷口を叩いて、叩く度に蛇はまだ死に切らない下半身が波を打つやうに動くのを眺めてゐたのである。

「そんなら小僧さん濟みませんが」と女主人が頼んだ。小さい女中が格子戸から小僧を連れて内へ這入つた。間もなく窓に現れた小僧は萬年青の鉢の置いてある窓板の上に登つて、一しよう懸命に伸びをして籠を吊るしてある麻糸を釘からはづした。そして女中が受け取つてくれぬので、小僧は籠を持つた儘窓板から降りて、戸口に廻つて外へ出た。

小僧は一しよに附いて出た女中に、「籠はわたしが持つてゐるから、あの血を掃除しなくちや行けませんぜ、疊にも落ちましたからね」と、高慢らしく忠告した。「本當に早く血をふいておしまひよ」と、女主人が云つた。女中は格子戸の中へ引き返した。

岡田は小僧の持つて出た籠をのぞいて見た。一羽の鳥は止まり木に止まつて、ぶるぶる顫へてゐる。蛇に銜へられた鳥の體は半分以上口の中に這入つてゐる。蛇は體を斬られつつも、最期の瞬間まで鳥を呑まうとしてゐたのである。

小僧は岡田の顏を見て、「蛇を取りませうか」と云つた。「うん、取るのは好いが、首を籠の眞ん中の所まで持ち上げて抜くやうにしないと、まだ折れてゐない竹が折れるよ」と、岡田は笑ひながら云つた。小僧は旨く首を抜き出して、指尖で鳥の屍を引つ張つて見て、「死んでも放しやあがらない」と云つた。

此時まで殘つてゐた裁縫の弟子達は、もう見る物が無いと思つたか、揃つて隣の家の格子戸の内に這入つた。

「さあ僕もそろそろお暇をしませう」と云つて、岡田があたりを見廻した。

女主人はうつとりと何か物を考へてゐるらしく見えてゐたが、此詞を聞いて、岡田の方を見た。そして何か言ひさうにして躊躇して、目を脇へそらした。それと同時に女は岡田の手に少し血の附いてゐるのを見附けた。「あら、あなたお手がよごれてゐますわ」と云つて、女中を呼んで上り口へ手水盥を持つて來させた。岡田は此話をする時女の態度を細かには言はなかつたが、「ほんの少しばかり小指の所に血の附いてゐたのを、よく女が見附けたと、僕は思つたよ」と云つた。

岡田が手を洗つてゐる最中に、それまで蛇の吭から鳥の死骸を引き出さうとしてゐた小僧が、「やあ大變」と叫んだ。

新しい手拭の疊んだのを持つて、岡田の側に立つてゐる女主人が開けた儘にしてある格子戸に片手を掛けて外を覗いて、「小僧さん、何」と云つた。

小僧は手をひろげて鳥籠を押さへてゐながら、「もう少しで蛇が首を入れた穴から、生きてゐる分の鳥が逃げる所でした」と云つた。

岡田は手を洗つてしまつて、女のわたした手拭でふきつつ、「その手を放さずにゐるのだぞ」と小僧に言つた。そして何かしつかりした絲のやうな物があるなら貰ひたい、鳥が籠の穴から出ないやうにするのだと云つた。

女はちよつと考へて、「あの元結ではいかがでございませう」と云つた。

「結構です」と岡田が云つた。

女主人は女中に言ひ附けて、鏡臺の抽斗から元結を出して來させた。岡田はそれを受け取つて、籠の竹の折れた跡に縦横に結び附けた。

「先づ僕の爲事は此位でおしまひでせうね」と

云つて、岡田は戸口を出た。

女主人は「どうもまことに」と、さも詞に窮したやうに云つて、跡から附いて出た。

岡田は小僧に聲を掛けた。「小僧さん。御苦勞序にその蛇を棄ててくれないか。」

「ええ。坂下のどぶの深い處へ棄てませう。どこかに縄は無いかなあ。」かう云つて小僧はあたりを見廻した。

「縄はあるから上げますよ。それにちよつと待つてゐて下さいな。」女主人は女中に何か言ひ附けてゐる。

その隙に岡田は「さやうなら」と云つて、跡を見ずに坂を降りた。

ここまで話してしまつた岡田は僕の顔を見て、「ねえ、君、美人の爲めとは云ひながら、僕は隨分働いただらう」と云つた。

「うん。女のために蛇を殺すと云ふのは、神話めいてゐて面白いが、どうもその話はそれぎりでは濟みさうにないね。」僕は正直に心に思ふ通りを言つた。

「馬鹿を言ひ給へ、未完の物なら、發表しはしないよ。」岡田がかう云つたのも、矯飾して言つたわけではなかつたらしい。併し假にそれ切りで濟む物として、幾らか殘惜しく思ふ位の事はあつたのだらう。

僕は岡田の話を聞いて、單に神話らしいと云つたが、實は今一つすぐに胸に浮んだ事のあるのを隱してゐた。それは金瓶梅を讀みさして出た岡田が、金蓮に逢つたのではないかと思つたのである。

大學の小使上がりで今金貸しをしてゐる末造の名は、學生中に知らぬものが無い。金を借りぬまでも、名丈は知つてゐる。併し無緣坂の女が末造の妾だと云ふことは、知らぬ人もあつた。岡田はその一人である。僕は其頃まだ女の種性を好くも知らなかつたが、それを裁縫の師匠の隣に囲つて置くのが末造だと云ふこと丈は知つてゐた。僕の智識には岡田に比べて一日の長があつた。

貳拾

岡田に蛇を殺して貰つた日の事である。お玉はこれまで目で會釋をした事しか無い岡田と親しく話をした爲めに、自分の心持が、我ながら驚く程急劇に變化して來たのを感じた。女には欲しいとは思ひつつも買はうとまでは思はぬ品物がある。さう云ふ時計だとか指環だとかが、硝子窓の裏に飾つてある店を、女はそこを通る度に覗いて行く。わざわざその店の前に往からとまではしない。何か外の用事でそこの前を通り過ぎることになると、きつと覗いて見るのである。欲しいと云ふ望みと、それを買ふことは所詮企て及ばぬと云ふ諦めとが一つになつて、或る痛切で無い、微かな、甘い哀傷的情緒が生じてゐる。女はそれを味ふことを樂みにしてゐる。それとは違つて、女が買はうと思ふ品物は其女に強烈な苦痛を感ぜさせる。女は落ち着いてゐられぬ程その品物に惱まされる。縦ひ幾日か待てば容易く手に入ると知つても、それを待つ餘裕が無い。女は暑さをも寒さをも夜闇をも雨雪をも厭はずに、衝動的に思ひ立つて、それを買ひに往くことがある。萬引なんと云ふことをする女も、別に變つた木で刻まれたものでは無い。只この欲しい物と買ひたい物との境界がぼやけてしまつた女たるに過ぎない。岡田はお玉のためには、これまで只欲しい物であつたが、今や忽ち變じて買ひたい物になつたのである。

お玉は小鳥を助けて貰つたのを緣に、どうにかして岡田に近寄りたいと思つた。最初に考へたのは、何か品物を梅に持たせて禮に遣らうか

と云ふ事である。さて品物は何にしようか、藤村の田舎饅頭でも買つて遣らうか。それでは餘り智慧が無さ過ぎる。世間並の事、誰でもしさうな事になつてしまふ。そんならと云つて、小切れで肘衝でも縫つて上げたら、岡田さんにおぼこ娘の態のやうで可笑しいと思はれよう。どうも好い思附きが無い。さて品物は何か工夫が附いたとして、それをつい梅に持たせて遣つたものだらうか。名刺はこなひだ仲町で拵へさせたのがあるが、それを添へた丈では、物足らない。ちよつと一筆書いて遣りたい。さあ困つた。學校は尋常科が濟むと下がつてしまつて、それからは手習をする暇も無かつたので、自分には滿足な手紙は書けない。無論あの御殿奉公をしたと云ふお隣のお師匠さんに頼めばわけは無い。併しそれは厭だ。手紙には何も人に言はれぬやうな事を書く積りではないが、兎に角岡田さんに手紙を遣ると云ふことを、誰にも知らせたくない。まあ、どうしたものだらう。

　丁度同じ道を往つたり來たりするやうに、お玉はこれ丈の事を順に考へ逆に考へ、お化粧や臺所の指圖に一旦まぎれて忘れては又思ひ出してゐた。そのうち末造が來た。お玉は酌をしつつも思ひ出して「何をそんなに考へ込んでゐるのだい」と咎められた。「あら、わたくしなんにも考へてなんぞゐはしませんわ」と、意味の無い笑顔をして見せて、私かに胸をどき附かせた。併し此頃は大ぶ修行が詰んで來たので、何物かを隱してゐると云ふことを、鋭い末造の目にも、容易に見抜かれるやうな事は無かつた。末造が歸つた跡で見た夢に、お玉はとうとう菓子折を買つて來て、急いで梅に持たせて出した。その跡で名刺も添へず手紙も附けずに遣つたのに氣が附いて、はつと思ふと、夢が醒めた。

　翌日になつた。此日は岡田が散歩に出なかつたか、それともこつちで見はづしたか、お玉は戀しい顔を見ることが出來なかつた。その次の日は岡田が又いつものやうに窓の外を通つた。窓の方をちよいと見て通り過ぎたが、内が暗いのでお玉と顔を見合せることは出來なかつた。その又次の日は、いつも岡田の通る時刻になると、お玉が草帚を持ち出して、格別五味も無い格子戸の内を丁寧に掃除して、自分の穿いてゐる雪踏の外、只一足しか出して無い駒下駄を、右に置いたり、左に置いたりしてゐた。「あら、わたくしが掃きますわ」と云つて、臺所から出た梅を、「好いよ、お前は煮物を見てゐておくれ、わたし用が無いからしてゐるのだよ」と云つて追ひ返した。そこへ丁度岡田が通り掛かつて、帽を脱いで會釋をした。お玉は帚を持つた儘顔を眞つ赤にして棒立に立つてゐたが、何も言ふことが出來ずに、岡田を行き過ぎさせてしまつた。お玉は手を燒いた火箸をはふり出すやうに帚を棄てて、雪踏を脱いで急いで上がつた。

　お玉は箱火鉢の傍へすわつて、火をいぢりながら思つた。まあ、私はなんと云ふ馬鹿だらう。けふのやうな涼しい日には、もう窓を開けて覗いてゐては可笑しいと思つて、餘計な掃除の眞似なんぞをして、切角待つてゐた癖に、いざと云ふ場になると、なんにも言ふことが出來なかつた。檀那の前では間の惡いやうな風はしてゐても、言はうとさへ思へば、どんな事でも言はれぬことは無い。それに岡田さんにはなぜ聲が掛けられなかつたのだらう。あんなにお世話になつたのだから、お禮を言ふのは當前だ。それがけふ言はれぬやうでは、あの方に物を言ふ折は無くなつてしまふかも知れない。梅を使にして何か持たせて上げようと思つても、それは出來ず、お目に掛かつても、物を言ふことが出來なくては、どうにも爲様がなくなつてしまふ。一體わたしはあの時なぜ聲が出なかつたのだらう。さう、さう。あの時わたしは慥かに物を言

はうとした。唯何と云つて好いか分からなかつたのだ。「岡田さん」と馴々しく呼び掛けることは出來ない。そんならと云つて、顏を見合せて「もしもし」とも云ひにくい。ほんにかう思つて見ると、あの時まごまごしたのも無理はない。かうしてゆつくり考へて見てさへ、なんと云つて好いか分からないのだもの。いやいや。こんな事を思ふのは矢つ張わたしが馬鹿なのだ。聲なんぞを掛けるには及ばない。すぐに外へ驅け出せば好かつたのだ。さうしたら岡田さんが足を駐めたに違ひない。足さへ駐めて貰へば、「あの、こなひだは飛んだ事でお世話様になりまして」とでも、なんとでも云ふことが出來たのだ。お玉はこんな事を考へて火をいぢつてゐるうちに、鐵瓶の蓋が跳り出したので、湯氣を洩らすやうに蓋を切つた。

それからはお玉は自分で物を言はうか、使を遣らうかと二樣に工夫を凝らしはじめた。そのうち夕方は次第に涼しくなつて、窓の障子は開けてゐにくい。庭の掃除はこれまで朝一度に極まつてゐたのに、こなひだの事があつてからは、梅が朝晩に掃除をするので、これも手が出しにくい。お玉は湯に往く時刻を遲くして、途中で岡田に逢はうとしたが、坂下の湯屋までの道は餘り近いので、なかなか逢ふことが出來なかつた。又使を遣ると云ふことも、日數が立てば立つ程出來にくくなつた。

そこでお玉は一時こんな事を思つて、無理に諦めを附けてゐた。わたしはあれ切り岡田さんにお禮を言はないでゐる。言はなくては濟まぬお禮が言はずにあつて見れば、わたしは岡田さんのしてくれた事を恩に被てゐる。このわたしが恩に被てゐると云ふことは岡田さんには分かつてゐる筈である。かうなつてゐるのが、却つて下手にお禮をしてしまつたより好いかも知れぬと思つたのである。

併しお玉はその恩に被てゐると云ふことを端緒にして、一刻も早く岡田に近づいて見たい。唯その方法手段が得られぬので、日々人知れず腐心してゐる。

お玉は氣の勝つた女で、末造に圍はれることになつてから、短い月日の間に、周圍から陽に貶められ、陰に羨まれる妾と云ふものの苦しさを味つて、そのお蔭で一種の世間を馬鹿にしたやうな氣象を養成してはゐるが、根が善人で、まだ人に揉まれてゐぬので、下宿屋に住まつてゐる書生の岡田に近づくのをひどくおつくうに思つてゐたのである。

そのうち秋日和に窓を開けてゐて、又岡田と會釋を交す日があつても、切角親しく物を言つて、手拭を手渡ししたのが、少しも接近の階段を形づくらずにしまつて、それ程の事のあつた後が、何事もなかつた前と、なんの異なる所もなくなつてゐた。お玉はそれをひどくじれつたく思つた。

末造が來てゐても、箱火鉢を中に置いて、向き合つて話をしてゐる間に、これが岡田さんだつたらと思ふ。最初はさう思ふ度に、自分で自分の横着を責めてゐたが、次第に平氣で岡田の事ばかり思ひつつも、話の調子を合せてゐるやうになつた。それから末造の自由になつてゐて、目を瞑つて岡田の事を思ふやうになつた。折々は夢の中で岡田と一しよになる。煩はしい順序も運びもなく一しよになる。そして「ああ、嬉しい」と思ふとたんに、相手が岡田ではなくて末造になつてゐる。はつと驚いて目を醒まして、それから神經が興奮して寐られぬので、じれて泣くこともある。

いつの間にか十一月になつた。小春日和が續いて、窓を開けて置いても目立たぬので、お玉は又岡田の顏を毎日のやうに見ることが出來た。

これまで薄ら寒い雨の日などが續いて、二三日も岡田の顏の見られぬことがあると、お玉は塞いでゐた。それでも飽くまで素直な性なので、梅に無理を言つて迷惑させるやうな事はない。ましてや末造に不機嫌な顏を見せなんぞはしない。唯そんな時は箱火鉢の縁に肘を衝いて、ぼんやりして默つてゐるので、梅が「どこかお惡いのですか」と云つたことがある丈である。それが岡田の顏が此頃續いて見られるので、珍らしく浮き浮きして來て、或る朝いつもよりも氣輕に内を出て、池の端の父親の所へ遊びに往つた。

お玉は父親を一週間に一度宛位はきつと尋ねることにしてゐるが、まだ一度も一時間以上腰を落ち着けてゐたことは無い。それは父親が許さぬからである。父親は往く度に優しくしてくれる。何か旨い物でもあると、それを出して茶を飮ませる。併しそれ丈の事をしてしまふと、すぐに歸れと云ふ。これは老人の氣の短い爲めばかりでは無い。奉公に出したからには、勝手に自分の所に引き留めて置いては濟まぬと思ふのである。お玉が二度目か三度目に父親の所に來た時、午前のうちは檀那の見えることは決して無いから、少しはゆつくりしてゐても好いと云つたことがある。父親は承知しなかつた。「なる程これまではお出がなかつたかも知れない。それでもいつ何の御用事があつてお出なさるかも知れぬではないか。檀那に申し上げておひまを戴いた日は別だが、お前のやうに買物に出て寄つて、ゆつくりしてゐてはならない。それではどこをうろついてゐるかと、檀那がお思なされても爲方が無い」と云ふのであつた。

若し父親が末造の職業を聞いて心持を惡くしはすまいかと、お玉は始終心配して、尋ねて往く度に樣子を見るが、父親は全く知らずにゐるらしい。それはその筈である。父親は池の端に越して來てから、暫く立つうちに貸本を讀むことを始めて、晝間はいつも眼鏡を掛けて貸本を讀んでゐる。それも實錄物とか講談物とか云ふ「書き本」に限つてゐる。此頃讀んでゐるのは三河後風土記である。これは大ぶ册數が多いから、當分此本丈で樂めると云つてゐる。貸本屋が「讀み本」を見せて勸めると、それは譃の書いてある本だらうと云つて、手に取つて見ようともしない。夜は目が草臥れると云つて本を讀まずに、寄せへ往く。寄せで聞くものなら、本當か譃かなどとは云はずに、落語も聞けば義太夫も聽く。主に講釋ばかり掛かる廣小路の席へは、餘程氣に入つた人が出なくては往かぬのである。道樂は只それ丈で、人と無駄話をすると云ふことが無いから、友達も出來ない。そこで末造の身の上なぞを聞き出す因縁は生じて來ぬのである。

それでも近所には、あの隱居の内へ尋ねて來る好い女はなんだらうと穿鑿して、とうとう高利貸の妾ださうだと突き留めたものもある。若し兩隣に口のうるさい人でもゐると、爺いさんがどんなに心安立をせずにゐても、無理にも厭な噂を聞せられるのだが、爲合せな事には一方の隣が博物館の屬官で、法帖なんぞをいぢつて手習ばかりしてゐる男、一方の隣がもう珍らしいものになつてゐる板木師で、篆刻なんぞには手を出さぬ男だから、どちらも爺いさんの心の平和を破るやうな虞はない。まだ並んでゐる家の中で、店を開けて商賣をしてゐるのは蕎麥屋の蓮玉庵と煎餅屋と、その先きのもう廣小路の角に近い處の十三屋と云ふ櫛屋との外には無かつた時代である。

爺いさんは格子戸を開けて這入る人のけはひ、輕げな駒下駄の音丈で、まだ優しい聲のおとなひを聞かぬうちに、もうお玉が來たのだと云ふことを知つて、讀みさしの後風土記を下に置いて待つてゐる。掛けてゐた目金を脫して、

可哀い娘の顔を見る日は、爺いさんのためには祭日である。娘が來れば、きつと目金を外す。目金で見た方が好く見える筈だが、どうしても目金越しでは隔てがあるやうで氣が濟まぬのである。娘に話したい事はいつも溜まつてゐて、その一部分を忘れて殘したのに、いつも娘の歸つた跡で氣が附く。併し「檀那は御機嫌好くてお出になるかい」と末造の安否を問ふこと丈は忘れない。

お玉はけふ機嫌の好い父親の顔を見て、阿茶の局の話を聞せて貰ひ、廣小路に出來た大千住の出店で買つたと云ふ、一尺四方もある輕燒の馳走になつた。そして父親が「まだ歸らなくても好いかい」と度々聞くのに、「大丈夫よ」と笑ひながら云つて、とうとう正午近くまで遊んでゐた。そして此頃のやうに末造が不意に來ることのあるのを父親に話したら、あの歸らなくても好いかと云ふ催促が一層劇しくなるだらうと、心の中で思つた。自分はいつか横着になつて、末造に留守の間に來られてはならぬと云ふやうな心遣をせぬやうになつてゐるのである。

貳拾壹

時候が次第に寒くなつて、お玉の家の流しの前に、下駄で踏む處丈板が土に填めてある、其板の上には朝霜が眞つ白に置く。深い井戸の長い吊瓶繩が冷たいから、梅に氣の毒だと云つて、お玉は手袋を買つて遣つたが、それを一々嵌めたり脱いだりして、臺所の用が出來るものでは無いと思つた梅は、貰つた手袋を大切にしまつて置いて、矢張素手で水を汲む。洗物をさせるにも、雜巾掛をさせるにも、湯を涌かして使はせるのに、梅の手がそろそろ荒れて來る。お玉はそれを氣にして、こんな事を言つた。「なんでも手を濡らした跡を其儘にして置くのが惡いのだよ。水から手を出したら、すぐに好く拭いて乾かしてお置。用が片附いたら、忘れないでシヤボンで手を洗ふのだよ。」かう云つてシヤボンまで買つて渡した。それでも梅の手が次第に荒れるのを、お玉は氣の毒がつてゐる。そしてあの位の事は自分もしたが、梅のやうに手の荒れたことは無かつたのにと、不思議にも思ふのである。

朝目を醒まして起きずにはゐられなかつたお玉も、此頃は梅が、「けさは流しに氷が張つてゐます、も少しお休になつて入らつしやいまし」なぞと云ふと、つい布團にくるまつてゐる様になつた。教育家は妄想を起させぬために青年に床に入つてから寐附かずにゐるな、目が醒めてから起きずにゐるなと戒める。少壯な身を煖い衾の裡に置けば、毒草の花を火の中に咲かせたやうな寫象が萌すからである。お玉の想像もこんな時には隨分放恣になつて來ることがある。さう云ふ時には目に一種の光が生じて、酒に醉つたやうに瞼から頰に掛けて紅が漲るのである。

前晩に空が晴れ渡つて、星がきらめいて、暁に霜の置いた或る日の事であつた。お玉は大ぶ久しく布團の中で、近頃覺えた不精をしてゐて、梅が疾つくに雨戸を繰り開けた表の窓から、朝日のさし入るのを見て、やつと起きた。そして細帶一つでねんねこ半纏を羽織つて、縁側に出て楊枝を使つてゐた。すると格子戸をがらりと開ける音がする。「入らつしやいまし」と愛想好く云ふ梅の聲がする。其儘上がつて來る足音がする。

「やあ。寐坊だなあ。」かう云つて箱火鉢の前に据わつたのは末造である。

「おや。御免なさいましよ。大そうお早いぢやございませんか。」銜へてゐた楊枝を急いで出して、唾をバケツの中に吐いてから云つたお玉の、少しのぼせたやうな笑顔が、末造の目には

これまでになく美しく見えた。一體お玉は無縁坂に越して來てから、一日一日と美しくなるばかりである。最初は娘らしい可哀さが氣に入つてゐたのだが、此頃はそれが一種の人を魅するやうな態度に變じて來た。末造は此變化を見て、お玉に情愛が分かつて來たのだ、自分が分からせて遣つたのだと思つて、得意になつてゐる。併しこれは何事をも鋭く看破する末造の目が、笑止にも愛する女の精神狀態を錯り認めてゐるのである。お玉は最初主人大事に奉公をする女であつたのが、急劇な身の上の變化のために、煩悶して見たり省察して見たりした擧句、横着と云つても好いやうな自覺に到達して、世間の女が多くの男に觸れた後に纔かに贏ち得る冷澹な心と同じやうな心になつた。此心に翻弄せられるのを、末造は愉快な刺戟として感ずるのである。それにお玉は横着になると共に、次第に少しづつじだらくになる。末造はこのじだらくに情慾を煽られて、一層お玉に引き附けられるやうに感ずる。この一切の變化が末造には分からない。魅せられるやうな感じはそこから生れるのである。

お玉はしやがんで金盥を引き寄せながら云つた。「あなた一寸あちらへ向いてゐて下さいまし。」

「なぜ」と云ひつつ、末造は金天狗に火を附けた。

「だつて顏を洗はなくちや。」

「好いぢやないか。さつさと洗へ。」

「だつて見て入らつしやつちや、洗へませんわ。」

「むづかしいなあ。これで好いか。」末造は烟を吹きつつ縁側に背中を向けた。そして心中になんと云ふあどけない奴だらうと思つた。

お玉は肌も脫がずに、只領だけくつろげて、忙がしげに顏を洗ふ。いつもより餘程手を拔いてはゐるが、化粧の秘密を藉りて、疵を蔽ひ美を粧ふと云ふ弱點も無いので、別に見られてゐて困ることは無い。

末造は最初背中を向けてゐたが、暫くするとお玉の方へ向き直つた。顏を洗ふ間末造に背中を向けてゐたお玉はこれを知らずにゐたが、洗つてしまつて鏡臺を引き寄せると、それに末造の紙卷を銜へた顏がうつつた。

「あら、ひどい方ね」とお玉は云つたが、その儘髮を撫で附けてゐる。くつろげた領の下に項から背へ掛けて三角形に見える白い肌、手を高く擧げてゐるので、肘の上二三寸の所まで見えるふつくりした臂が、末造のためにはいつまでも厭きない見ものである。そこで自分が默つて待つてゐたら、お玉が無理に急ぐかも知れぬと思つて、わざと氣樂げにゆつくりした調子で話し出した。

「おい急ぐには及ばないよ。何も用があつてこんなに早く出掛けて來たのではないのだ。實はこなひだお前に聞かれて、今晩あたり來るやうに云つて置いたが、ちよいと千葉へ往かなくてはならない事になつたのだ。話が旨く運べば、あすのうちに歸つて來られるのだが、どうかするとあさつてになるかも知れない。」

櫛をふいてゐたお玉は「あら」と云つて振り返つた。顏に不安らしい表情が見えた。

「おとなしくして待つてゐるのだよ」と、末造は冗談らしく云つて、卷烟草入をしまつた。そしてついと立つて戸口へ出た。

「まあお茶も上げないうちに」と云ひさして、投げるやうに櫛を櫛箱に入れたお玉が、見送りに起つて出た時には、末造はもう格子戸を開けてゐた。

朝飯の膳を臺所から運んで來た梅が、膳を下に置いて、「どうも濟みません」と云つて手を衝

いた。
箱火鉢の傍に据わつて、火の上に被さつた灰を火箸で掻き落してゐたお玉は、「おや、何をあやまるのだい」と云つて、につこりした。
「でもついお茶を上げるのが遲くなりまして。」
「ああ。その事かい。あれはわたしが御挨拶に云つたのだよ。檀那はなんとも思つてはお出なさらないよ。」かう云つて、お玉は箸を取つた。
けさ御膳を食べてゐる主人の顏を梅が見ると、めつたに機嫌を惡くせぬ性分ではあるが、特別に嬉しさうに見える。さつき「何をあやまるのだい」と云つて笑つた時から、ほんのりと赤く匂つた頰のあたりをまだ微笑の影が去らずにゐる。なぜだらうかと云ふ問題が梅の頭にも生ぜずには濟まなかつたが、飽くまで單純な梅の頭にはそれが根を卸しもしない。只好い氣持が傳染して、自分も好い氣持になつた丈である。
お玉はぢつと梅の顏を見て、機嫌の好い顏を一層機嫌を好くして云つた。「あの、お前お內へ往きたかなくつて。」
梅は怪訝の目を睜つた。まだ明治十何年と云ふ頃には江戸の町家の習慣律が惰力を持つてゐたので、市中から市中へ奉公に上がつてゐても、藪入の日の外には容易に內へは歸られぬことに極まつてゐた。
「あの今晩は檀那樣が入らつしやらないだらうと思ふから、お前內へ往つて泊つて來たけりやあ泊つて來ても好いよ。」お玉は重ねてかう云つた。
「あの本當でございますの。」梅は疑つて問ひ返したのでは無い。過分の恩惠だと感じて、此詞を發したのである。
「譃なんぞ言ふものかね。わたしはそんな罪な事をして、お前をからかつたり何かしやしないわ。御飯の跡は片附けなくつても好いから、すぐに往つても好いよ。そしてけふはゆつくり遊んで、晩には泊つてお出。その代りあしたは早く歸るのだよ。」
「はい」と云つてお梅は嬉しさに顏を眞つ赤にしてゐる。そして父が車夫をしてゐるので、車の二三臺竝べてある入口の土間や、簞笥と箱火鉢との間に、やつと座布團が一枚布かれる樣になつてゐて、そこに爲事に出ない間は父親が据わつてをり、留守には母親の据わつてゐる所や、鬢の毛がいつも片頰に垂れ掛かつてゐて、肩から襷を脫したことのめつたに無い母親の姿などが、非常な速度を以て入り替りつつ、小さい頭の中に影繪のやうに浮かんで來るのである。
食事が濟んだので、お梅は膳を下げた。片附けなくても好いとは云はれても、洗ふ物丈は洗つて置かなくてはと思つて、小桶に湯を取つて茶碗や皿をちやら／＼言はせてゐると、そこへお玉は紙に包んだ物を持つて出て來た。「あら、矢つ張り片附けてゐるのね。それんばかりの物を洗ふのはわけは無いから、わたしがするよ。お前髮はゆうべ結つたのだからそれで好いわね。早く着物をお着替よ。そしてなんにもお土產が無いから、これを持つてお出。」かう云つて紙包をわたした。中には例の骨牌のやうな恰好をした半圓の青い札がはひつてゐたのである。

梅をせき立てゝ出して置いて、お玉は甲斐甲斐しく襷を掛け褄を端折つて臺所に出た。そしてさも面白い事をするやうに、梅が洗ひ掛けて置いた茶碗や皿を洗ひ始めた。こんな爲事は昔取つた杵柄で、梅なんぞが企て及ばぬ程迅速に、しかも周密に出來る筈のお玉が、けふは子供がおもちやを持つて遊ぶより手ぬるい洗ひやうをしてゐる。取り上げた皿一枚が五分間も手を離れない。そしてお玉の顏は活氣のある淡紅色に赫いて、目は空を見てゐる。
そしてその頭の中には、極めて樂觀的な寫

象が往來してゐる。一體女は何事によらず決心するまでには氣の毒な程迷つて、とつおいつする癖に、既に決心したとなると、男のやうに左顧右眄しないで、oeillères を裝はれた馬のやうに、向うばかり見て猛進するものである。思慮のある男には疑懼を懷かしむる程の障礙物が前途に横はつてゐても、女はそれを屑ともしない。それでどうかすると男の敢てせぬ事を敢てして、おもひの外に成功することもある。お玉は岡田に接近しようとするのに、若し第三者がゐて觀察したら、もどかしさに堪へまいと思はれる程、逡巡してゐたが、けさ末造が千葉へ立つと云つて暇乞に來てから、追手を帆に孕ませた舟のやうに、志す岸に向つて走る氣になつた。それで梅をせき立てて、親許に返して遣つたのである。邪魔になる末造は千葉へ往つて泊る。女中の梅も親の家に歸つて泊る。これからあすの朝までは、誰にも掣肘せられることの無い身の上だと感ずるのが、お玉のためには先づ愉快で溜まらない。そしてかうとんとん拍子に事が運んで行くのが、終局の目的の容易に達せられる前兆でなくてはならぬやうに思はれる。けふに限つて岡田さんが内の前をお通なさらぬことは決して無い。往反に二度お通なさる日もあるのだから、どうかして一度逢はれずにしまふにしても、二度共見のがすやうなことは無い。けふはどんな犧牲を拂つても物を言ひ掛けずには置かない。思ひ切つて物を言ひ掛けるからは、あの方の足が留められぬ筈が無い。わたしは卑しい妾に身を墮してゐる。しかも高利貸の妾になつてゐる。だけれど生娘でゐた時より美しくはなつても、醜くはなつてゐない。その上どうしたのが男に氣に入ると云ふことは、不爲合な目に逢つた物怪の幸に、次第に分かつて來てゐるのである。して見れば、まさか岡田さんに一も二もなく厭な女だと思はれることはあるまい。いや。そんな事は確かに無い。若し厭な女だと思つてお出なら、顏を見合せる度に會釋をして下さる筈が無い。いつか蛇を殺して下すつたのだつてさうだ。あれがどこの内の出來事でも、きつと手を藉して下すつたのだと云ふわけではあるまい。若しわたしの内でなかつたら、知らぬ顏をして通り過ぎておしまひなすつたかも知れない。それにこつちでこれ丈思つてゐるのだから、皆までとは行かぬにしても、此心が幾らか向うに通つてゐないことはない筈だ。なに。案じるよりは生むが易いかも知れない。こんな事を思ひ續けてゐるうちに、小桶の湯がすつかり冷えてしまつたのを、お玉はつめたいとも思はずにゐた。

膳を膳棚にしまつて箱火鉢の所に歸つて据わつたお玉は、なんだか氣がそはそはしてぢつとしてはゐられぬと云ふ樣子をしてゐた。そしてけさ梅が綺麗に篩つた灰を、火箸で二三度掻き廻したかと思ふと、つと立つて着物を着換へはじめた。同朋町の女髮結の所へ往くのである。これは不斷來る髮結が人の好い女で、餘所行の時に結ひに往けと云つて、紹介して置いてくれたのに、これまでまだ一度も往かなかつた内なのである。

貳拾貳

西洋の子供の讀む本に、釘一本と云ふ話がある。僕は好くは記憶してゐぬが、なんでも車の輪の釘が一本拔けてゐたために、それに乘つて出た百姓の息子が種々の難儀に出會ふと云ふ筋であつた。僕のし掛けた此話では、青魚の未醤が丁度釘一本と同じ效果をなすのである。

僕は下宿屋や學校の寄宿舍のまかなひに饑を凌いでゐるうちに、身の毛の彌立つ程厭な菜が出來た。どんな風通しの好い座敷で、どんな清潔な膳の上に載せて出されようとも、僕の目

が一たび其菜を見ると、僕の鼻は名狀すべからざる寄宿舍の食堂の臭氣を嗅ぐ。煮肴に羊栖菜や相良麩が附けてあると、もうそろそろ此嗅覺の hallucination が起り掛かる。そしてそれが青魚の未醬煮に至つて窮極の程度に達する。

然るにその青魚の未醬煮が或日上條の晩飯の膳に上つた。いつも膳が出ると直ぐに箸を取る僕が躊躇してゐるので、女中が僕の顔を見て云つた。

「あなた青魚お嫌。」

「さあ青魚は嫌ぢやない。燒いたのなら隨分食ふが、未醬煮は閉口だ。」

「まあ。お上さんが存じませんもんですから。なんなら玉子でも持つてまゐりませうか。」かう云つて立ちさうにした。

「待て」と僕は云つた。「實はまだ腹も透いてゐないから、散步をして來よう。お上さんにはなんとでも云つて置いてくれ。菜が氣に入らなかつたなんて云ふなよ。餘計な心配をさせなくても好いから。」

「それでもなんだかお氣の毒樣で。」

「馬鹿を言へ。」

僕が立つて袴を穿き掛けたので、女中は膳を持つて廊下へ出た。

僕は隣の部屋へ聲を掛けた。

「おい。岡田君ゐるか。」

「ゐる。何か用かい。」岡田ははつきりした聲で答へた。

「用ではないがね、散步に出て、歸りに豐國屋へでも往かうかと思ふのだ。一しよに來ないか。」

「行かう。丁度君に話したい事もあるのだ。」

僕は釘に掛けてあつた帽を取つて被つて、岡田と一しよに上條を出た。午後四時過であつたかと思ふ。どこへ往かうと云ふ相談もせずに上條の格子戶を出たのだが、二人は門口から右へ曲つた。

無緣坂を降り掛かる時、僕は「おい、ゐるぜ」と云つて、肘で岡田を衝いた。

「何が」と口には云つたが、岡田は僕の詞の意味を解してゐたので、左側の格子戶のある家を見た。

家の前にはお玉が立つてゐた。お玉は窶れてゐても美しい女であつた。しかし若い健康な美人の常として、粧映もした。僕の目には、いつも見た時と、どこがどう變つてゐるか、わからなかつたが、兎に角いつもと丸で違つた美しさであつた。女の顔が照り赫いてゐるやうなので、僕は一種の羞明さを感じた。

お玉の目はうつとりとしたやうに、岡田の顔に注がれてゐた。岡田は慌てたやうに帽を取つて禮をして、無意識に足の運を早めた。

僕は第三者に有勝な無遠慮を以て、度々背後を振り向いて見たが、お玉の注視は頗る長く繼續せられてゐた。

岡田は俯向き加減になつて、早めた足の運を緩めずに坂を降りる。僕も默つて附いて降りる。僕の胸の中では種々の感情が戰つてゐた。此感情には自分を岡田の地位に置きたいと云ふことが根調をなしてゐる。しかし僕の意識はそれを認識することを嫌つてゐる。僕は心の內で、「なに、己がそんな卑劣な男なものか」と叫んで、それを打ち消さうとしてゐる、そして此抑制が功を奏せぬのを、僕は憤つてゐる。自分を岡田の地位に置きたいと云ふのは、彼女の誘惑に身を任せたいと思ふのではない。只岡田のやうに、あんな美しい女に慕はれたら、さぞ愉快だらうと思ふに過ぎない。そんなら慕はれてどうするか、僕はそこに意志の自由を保留して置きたい。僕は岡田のやうに逃げはしない。僕は逢つて話をする。自分の清潔な身は汚さぬが、逢つて話だけはする。そして彼女を妹の如くに愛する。彼女の力になつて遣る。彼女を

淤泥の中から救抜する。僕の想像はこんな取留のない處に歸着してしまつた。

　坂下の四辻まで岡田と僕とは默つて歩いた。眞つ直に巡査派出所の前を通り過ぎる時、僕はやうやう物を言ふことが出來た。「おい、凄い狀況になつてゐるぢやないか。」

「ええ。何が。」

「何がも何も無いぢやないか。君だつてさつきからあの女の事を思つて歩いてゐたに違ない。僕は度々振り返つて見たが、あの女はいつまでも君の後影を見てゐた。おほかたまだこつちの方角を見て立つてゐるだらう。あの左傳の、目迎へて而してこれを送ると云ふ文句だねえ。あれをあべこべに女の方で遣つてゐるのだ。」

「其話はもうよしてくれ給へ。君にだけは顚末を打ち明けて話してあるのだから、此上僕をいぢめなくても好いぢやないか。」

　かう云つてゐるうちに、池の縁に出たので、二人共ちよいと足を停めた。

「あつちを廻らうか」と、岡田が池の北の方を指ざした。

「うん」と云つて、僕は左へ池に沿うて曲つた。そして十歩ばかりも歩いた時、僕は左手に並んでゐる二階造の家を見て、「ここが櫻痴先生と末造君との第宅だ」と獨語のやうに云つた。

「妙な對照のやうだが、櫻癡居士も餘り廉潔ぢやないと云ふぢやないか」と、岡田が云つた。

　僕は別に思慮もなく、辯駁らしい事を言つた。「そりやあ政治家になると、どんなにしてゐたつて、難癖を附けられるさ。」恐らくは福地さんと末造との距離を、なる丈大きく考へたかつたのであらう。

　福地の邸の板塀のはづれから、北へ二三軒目の小家に、つい此頃「川魚」と云ふ看板を掛けたのがある。僕はそれを見て云つた。「此看板を見ると、なんだか不忍の池の肴を食はせさうに見えるなあ。」

「僕もさう思つた。しかしまさか梁山泊の豪傑が店を出したと云ふわけでもあるまい。」

　こんな話をして、池の北の方へ往く小橋を渡つた。すると、岸の上に立つて何か見てゐる學生らしい青年がゐた。それが二人の近づくのを見て、「やあ」と聲を掛けた。柔術に凝つてゐて、學科の外の本は一切讀まぬと云ふ性だから、岡田も僕も親しくはせぬが、さうかと云つて嫌つてもゐぬ石原と云ふ男である。

「こんな所に立つて何を見てゐたのだ」と、僕が問うた。

　石原は默つて池の方を指ざした。岡田も僕も、灰色に濁つた夕の空氣を透かして、指ざす方角を見た。其頃は根津に通ずる小溝から、今三人の立つてゐる汀まで、一面に葦が茂つてゐた。其葦の枯葉が池の中心に向つて次第に疎になつて、只枯蓮の襤褸のやうな葉、海綿のやうな房が碁布せられ、葉や房の莖は、種々の高さに折れて、それが鋭角に聳えて、景物に荒涼な趣を添へてゐる。此のBitume色の莖の間を縫つて、黒ずんだ上に鈍い反射を見せてゐる水の面を、十羽ばかりの鳥が緩やかに往來してゐる。中には停止して動かぬのもある。

「あれまで石が屆くか」と、石原が岡田の顔を見て云つた。

「屆くことは屆くが、中るか中らぬかが疑問だ」と、岡田は答へた。

「遣つて見給へ。」

　岡田は躊躇した。「あれはもう寢るのだらう。石を投げ附けるのは可哀さうだ。」

　石原は笑つた。「さう物の哀を知り過ぎては困るなあ。君が投げんと云ふなら、僕が投げる。」

　岡田は不精らしく石を拾つた。「そんなら僕が逃がして遣る。」つぶてはひゆうと云ふ微かな音をさせて飛んだ。僕が其行方をぢつと見て

ゐると、一羽の雁が擡げてゐた頸をぐたりと垂れた。それと同時に二三羽の雁が鳴きつゝ羽たたきをして、水面を滑つて散つた。しかし飛び起ちはしなかつた。頸を垂れた雁は動かずに故の所にゐる。

「中つた」と、石原が云つた。そして暫く池の面を見てゐて、詞を繼いだ。「あの雁は僕が取つて來るから、其時は君達も少し手傳つてくれ給へ。」

「どうして取る」と岡田が問うた。僕も覺えず耳を欹てた。

「先づ今は時が惡い。もう三十分立つと暗くなる。暗くさへなれば、僕がわけなく取つて見せる。君達は手を出してくれなくても好いが、其時居合せて、僕の頼むことを聽いてくれ給へ。獲物は御馳走するから」と、石原が云つた。

「面白いな」と、岡田が云つた。「しかし三十分立つまでどうしてゐるのかい。」

「僕は此邊をぶらついてゐる。君達はどこへでも往つて來給へ。三人ここにゐると目立つから。」

僕は岡田に言つた。「そんなら二人で池を一周して來ようか。」

「好からう」と云つて岡田はすぐに歩き出した。

貳拾參

僕は岡田と一しよに花園町の端を横切つて、東照宮の石段の方へ往つた。二人の間には暫く詞が絶えてゐる。「不しあはせな雁もあるものだ」と、岡田が獨言の樣に云ふ。僕の寫象には、何の論理的連繫もなく、無縁坂の女が浮ぶ。「僕は只雁のゐる所を狙つて投げたのだがなあ」と、今度は僕に對して岡田が云ふ。「うん」と云ひつつも、僕は矢張女の事を思つてゐる。「でも石原のあれを取りに往くのが見たいよ」と、僕が暫く立つてから云ふ。「うん」と云つて、岡田が何やら考へつつ歩いてゐる。多分雁が氣になつてゐるのであらう。

石段の下を南へ、辨天の方へ向いて歩く二人の心には、兎に角雁の死が暗い影を印してゐて、話はきれぎれになり勝であつた。辨天の鳥居の前を通る時、岡田は強いて思想を他の方角に轉ぜようとするらしく、「僕は君に話す事があるのだつた」と言ひ出した。そして僕は全く思ひも掛けぬ事を聞せられた。

其話はかうである。岡田は今夜己の部屋へ來て話さうと思つてゐたが、丁度己にさそはれたので、一しよに外へ出た。出てからは、食事をする時話さうと思つてゐたが、それもどうやら駄目になりさうである。そこで歩きながら掻い摘まんで話すことにする。岡田は卒業の期を待たずに洋行することに極まつて、もう外務省から旅行券を受け取り、大學へ退學屆を出してしまつた。それは東洋の風土病を研究しに來たドイツの Professor W. が、往復旅費四千マルク、月給二百マルクを給して岡田を傭つたからである。ドイツ語を話す學生の中で、漢文を樂に讀むものと云ふ註文を受けて、Baelz 教授が岡田を紹介した。岡田は築地にWさんを尋ねて、試驗を受けた。素問と難經とを二三行づつ、傷寒論と病源候論とを五六行づつ譯させられたのである。難經は生憎「三焦」の一節が出て、何と譯して好いかとまごついたが、これは chiao と音譯して濟ませた。兎に角試驗に合格して、即座に契約が出來た。Wさんは Baelz さんの現に籍を置いてゐるライプチヒ大學の教授だから、岡田をライプチヒへ連れて往つて、ドクトルの試驗はWさんの手で引き受けてさせる。卒業論文にはWさんのために譯した東洋の文獻を使用しても好いと云ふことである。岡田はあす上條を出て、築地のWさんの所へ越して往つて、Wさんが支那と日本とで買ひ集めた書物の

荷造をする。それからWさんに附いて九州を視察して、九州からすぐに Messageries Maritimes 會社の船に乘るのである。

僕は折々立ち留まつて、「驚いたね」とか、「君は果報だよ」とか云つて、隨分ゆるゆる歩きつつ此話を聞いた積であつた。しかし聞いてしまつて時計を見れば、石原に分れてからまだ十分しか立たない。それにもう池の周圍の殆ど三分の二を通り過ぎて、仲町裏の池の端をはづれ掛かつてゐる。

「此儘往つては早過ぎるね」と、僕は云つた。

「蓮玉へ寄つて蕎麥を一杯食つて行かうか」と、岡田が提議した。

僕はすぐに同意して、一しよに蓮玉庵へ引き返した。其頃下谷から本鄕へ掛けて一番名高かつた蕎麥屋である。

蕎麥を食ひつつ岡田は云つた。「切角今まで遣つて來て、卒業しないのは殘念だが、所詮官費留學生になれない僕が此機會を失すると、ヨオロツパが見られないからね。」

「さうだとも。機逸すべからずだ。卒業がなんだ。向うでドクトルになれば同じ事だし、又其ドクトルをしなくたつて、それも憂ふるに足りないぢやないか。」

「僕もさう思ふ。只資格を拵へると云ふだけだ。俗に隨つて聊復爾りだ。」

「支度はどうだい。隨分慌ただしい旅立になりさうだが。」

「なに。僕は此儘で往く。Wさんの云ふには、日本で洋服を拵へて行つたつて、向うでは着られないさうだ。」

「さうかなあ。いつか花月新誌で讀んだが、成島柳北も橫濱でふいと思ひ立つて、卽坐に決心して船に乘つたと云ふことだつた。」

「うん。僕も讀んだ。柳北は內へ手紙も出さずに立つたさうだが、僕は內の方へは精しく言つて遣つた。」

「さうか。羨ましいな。Wさんに附いて行くのだから、途中でまごつくことはあるまいが、旅行はどんな樣子だらう。僕には想像も出來ない。」

「僕もどんな物だか分からないが、きのふ柴田承桂さんに逢つて、これまで世話になつた人だから、今度の一件を話したら、先生の書いた洋行案內をくれたよ。」

「はあ、そんな本があるかねえ。」

「うん。非賣品だ。椋島連中に配るのださうだ。」

こんな話をしてゐるうちに、時計を見れば、もう三十分までに五分しかなかつた。僕は岡田と急いで蓮玉庵を出て、石原の待つてゐる所へ往つた。もう池は闇に鎖されて、辨天の朱塗の祠が模糊として靄の中に見える頃であつた。

待ち受けてゐた石原は、岡田と僕とを引つ張つて、池の緣に出て云つた。「時刻は丁度好い。達者な奴は皆塒を變へてしまつた。僕はすぐに爲事に掛かる。それには君達がここにゐて、號令を掛けてくれなくてはならないのだ。見給へ。そこの三間ばかり前の所に蓮の莖の右へ折れたのがある。其延線に少し低い莖の左へ折れたのがある。僕はあの延線を前へ前へと行かなくてはならないのだ。そこで僕がそれをはづれさうになつたら、君達がここから右とか左とか云つて修正してくれるのだ。」

「なる程。Parallaxe のやうな理窟だな。しかし深くはないだらうか。」と、岡田が云つた。

「なに、首の立たない氣遣はない。」かう云つて、石原は素早く裸になつた。

石原の踏み込んだ處を見ると、泥は膝の上までしか無い。鷺のやうに足を擧げては踏み込んで、ごぼりごぼりと遣つて行く。少し深くなるかと思ふと、又淺くなる。見る見る二本の蓮の莖より前に出た。暫くすると、岡田が「右」と云つた。石原は右へ寄つて步く。岡田が又「左」と

云つた。石原が餘り右へ寄り過ぎたのである。

忽ち石原は足を停めて身を屈めた。そしてすぐに跡へ引き返して來た。遠い方の蓮の葉の邊を過ぎた頃には、もう右の手に提げてゐる獲ものが見えた。

石原は太股を半分泥に汚しただけで、岸に着いた。獲ものは思ひ掛けぬ大さの雁であつた。石原はざつと足を洗つて、着物を着た。此邊は其頃まだ人の往來が少くて、石原が池に這入つてから又上がつて來るまで、一人も通り掛かつたものが無かつた。

「どうして持つて行かう」と僕が云ふと、石原が袴を穿きつつ云つた。

「岡田君の外套が一番大きいから、あの下に入れて持つて貰ふのだ。料理は僕の所でさせる。」

石原は素人家の一間を借りてゐた。主人の婆あさんは、餘り人の好くないのが取柄で、獲ものを分けて遣れば、口を噤ませることも出來さうである。其家は湯島切通しから、岩崎邸の裏手へ出る横町で、曲りくねつた奥にある。石原はそこへ雁を持ち込む道筋を手短に說明した。

先づここから石原の所へ往くには、由るべき道が二條ある。即ち南から切通しを經る道と、北から無緣坂を經る道とで、此二條は岩崎邸の内に中心を有した圏を畫いてゐる。遠近の差は少い。又此場合に問ふ所でも無い。障礙物は巡査派出所だが、これはどちらにも一箇所づつある。そこで利害を比較すれば、只賑かな切通しを避けて、寂しい無緣坂を取ると云ふことに歸着する。雁は岡田に、外套の下に入れて持たせ、跡の二人が左右に竝んで、岡田の體を隱蔽して行くが最良の策だと云ふのである。

岡田は苦笑しつつも雁を持つた。どんなにして持つて見ても、外套の裾から下へ、羽が一二寸出る。其上外套の裾が不恰好に擴がつて、岡田の姿は圓錐形に見える。石原と僕とは、それを目立たせぬやうにしなくてはならぬのである。

貳拾肆

「さあ、かう云ふ風にして歩くのだ」と云つて、石原は僕と二人で、岡田を中に挾んで歩き出した。三人で初から氣に掛けてゐるのは、無緣坂下の四辻にある交番である。そこを通り拔ける時の心得だと云つて、石原が盛んな講釋をし出した。なんでも、僕の聽き取つた所では、心が動いてはならぬ、動けば隙を生ずる、隙を生ずれば乘ぜられると云ふやうな事であつた。石原は虎が醉人を噉はぬと云ふ譬を引いた。多分此講釋は柔術の先生に聞いた事を其儘繰り返したものかと思はれた。

「して見ると、巡査が虎で、我々三人が醉人だね」と、岡田が冷かした。

「Silentium!」と石原が叫んだ。もう無緣坂の方角へ曲る角に近くなつたからである。

角を曲れば、茅町の町家と池に沿うた屋敷とが背中合せになつた横町で、其頃は南側に人力車やなにかが置いてあつた。四辻に立つてゐる巡査の姿は、もう角から見えてゐた。

突然岡田の左に引き添つて歩いてゐた石原が、岡田に云つた。「君圓錐の立方積を出す公式を知つてゐるか。なに。知らない。あれは造做はないさ。基底面に高さを乘じたものの三分の一だから、若し基底面が圓になつてゐれば、$\frac{1}{3}\pi r^2 h$ が立方積だ。$\pi=3.1416$ だと云ふことを記憶してゐれば、わけなく出來るのだ。僕は π を小數點下八位まで記憶してゐる。$\pi=3.14159265$ になるのだ。實際それ以上の數は不必要だよ。」

かう云つてゐるうちに、三人は四辻を通り過ぎた。巡査は我々の通る横町の左側、交番の前に立つて、茅町を根津の方へ走る人力車を見てゐたが、我々には只無意味な一瞥を投じたに過ぎなかつた。

「なんだつて圓錐の立方積なんぞを計算し出したのだ」と、僕は石原に言つたが、それと同時に僕の目は坂の中程に立つて、こつちを見てゐる女の姿を認めて、僕の心は一種異様な激動を感じた。僕は池の北の端から引き返す途すがら、交番の巡査の事を思ふよりは、此女の事を思つてゐた。なぜだか知らぬが、僕には此女が岡田を待ち受けてゐさうに思はれたのである。果して僕の想像は僕を欺かなかつた。女は自分の家より二三軒先へ出迎へてゐた。

僕は石原の目を掠めるやうに、女の顔と岡田の顔とを見較べた。いつも薄紅に匂つてゐる岡田の顔は、確に一入赤く染まつた。そして彼は偶然帽を動かすらしく装つて、帽の庇に手を掛けた。女の顔は石のやうに凝つてゐた。そして美しく睜つた目の底には、無限の殘惜しさが含まれてゐるやうであつた。

此時石原の僕に言つた詞は、其音が耳に入つただけで、其意は心に通ぜなかつた。多分岡田の外套が下ぶくれになつてゐて、圓錐形に見える處から思ひ附いて、圓錐の立方積と云ふことを言ひ出したのだと、辯明したのであらう。

石原も女を見ることは見たが、只美しい女だと思つただけで意に介せずにしまつたらしかつた。石原はまだ饒舌り續けてゐる。「僕は君達に不動の祕訣を說いて聞かせたが、君達は修養が無いから、急場に臨んでそれを實行することが出來さうでなかつた。そこで僕は君達の心を外へ轉ぜさせる工夫をしたのだ。問題は何を出しても好かつたのだが、今云つたやうなわけで圓錐の公式が出たのさ。兎に角僕の工夫は好かつたね。君達は圓錐の公式のお蔭で、unbefangen な態度を保つて巡査の前を通過することが出來たのだ」

三人は岩崎邸に附いて東へ曲る處に來た。一人乘の人力車が行き違ふことの出來ぬ横町に這入るのだから、危險はもう全く無いと云つても好い。石原は岡田の側を離れて、案内者のやうに前に立つた。僕は今一度振り返つて見たが、もう女の姿は見えなかつた。

僕と岡田とは、其夜石原の所に夜の更けるまでゐた。雁を肴に酒を飲む石原の相伴をしたと云つても好い。岡田が洋行の事を噯氣にも出さぬので、僕は色々話したい事のあるのをこらへて、石原と岡田との間に交換せられる漕艇の經驗談などに耳を傾けてゐた。

上條へ歸つた時は、僕は草臥と酒の醉とのために、岡田と話すことも出來ずに、別れて寢た。翌日大學から歸つて見れば、もう岡田はゐなかつた。

一本の釘から大事件が生ずるやうに、青魚の煮肴が上條の夕食の膳に上つたために、岡田とお玉とは永遠に相見ることを得ずにしまつた。そればかりでは無い。しかしそれより以上の事は雁と云ふ物語の範圍外にある。

僕は今此物語を書いてしまつて、指を折つて數へて見ると、もう其時から三十五年を經過してゐる。物語の一半は、親しく岡田に交つてゐて見たのだが、他の一半は岡田が去つた後に、圖らずもお玉と相識になつて聞いたのである。譬へば實體鏡の下にある左右二枚の圖を、一の影像として視るやうに、前に見た事と後に聞いた事とを、照らし合せて作つたのが此物語である。讀者は僕に問ふかも知れない。「お玉とはどうして相識になつて、どんな場合にそれを聞いたか」と問ふかも知れない。しかしこれに對する答も、前に云つた通り、物語の範圍外にある。只僕にお玉の情人になる要約の備はつてゐぬことは論を須たぬから、讀者に無用の臆測をせぬが好い。

高瀬舟

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗をするために、人を殺し火を放つたと云ふやうな、獰惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために、想はぬ科を犯した人であつた。有り觸れた例を擧げて見れば、當時相對死と云つた情死を謀つて、相手の女を殺して、自分だけ活き殘つた男と云ふやうな類である。

さう云ふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つつ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。此舟の中で、罪人と其親類の者とは夜どほし身の上を語り合ふ。いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た。所詮町奉行の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を讀んだりする役人の夢にも窺ふことの出來ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、種々の性質があるから、此時只うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引き受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲慘な境遇に陷つた罪人と其親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、其同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃ででもあつただらう。智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼び出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乘り込んだ同心羽田庄兵衛は、只喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から桟橋まで連れて來る間、この痩肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に、細かい注意をしてゐた。

其日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やうやう近寄つて來る夏の温さが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立ち昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、加茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寢ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで、默つてゐる。其額は晴やかで目には微かなかがやきがある。

庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返してゐる。それは喜助の顏が縱から見ても、横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の内に思つた。これまで此高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに此男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い痩男が、その人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此男はどうしたのだらう。庄兵衞がためには喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衞はこらへ切れなくなつて呼び掛けた。「喜助。お前何を思つてゐるのか。」

「はい」と云つてあたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衞の氣色を伺つた。

庄兵衞は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める分疏をしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろいろな身の上の人だつたが、どれもどれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て、一しよに舟に乘る親類のものと、夜どほし泣くに極まつてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。「御親切に仰やつて下すつて、難有うございます。なる程島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。其心持はわたくしにも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして參つたやうな苦みは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。わたくしはこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませんでした。こん度お上で島にゐろと仰やつて下さいます。そのゐろと仰やる所に落ち著いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも難有い事でございます。それにわたくしはこんなにかよわい

體ではございますが、つひぞ病氣をいたしたことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい爲事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それからこの度島へお遣下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをここに持つてをります。」から云つて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百銅を遣すと云ふのは、當時の掟であつた。

喜助は語を續いだ。「お恥かしい事を申し上げなくてはなりませぬが、わたくしは今日まで二百文と云ふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで爲事に取り附きたいと思つて、爲事を尋ねて歩きまして、それが見附かり次第、骨を惜まずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、爲事をせずに食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此二百文は戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな爲事が出來るかわかりませんが、わたくしは此二百文を島でする爲事の本手にしようと樂んでをります。」から云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衞は「うん、さうかい」とは云つたが、聞く事每に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出來ずに、考へ込んで默つてゐた。

庄兵衞は彼此初老に手の屆く年になつてゐて、もう女房に子供を四人生ませてゐる。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれる程の、儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕な家に可哀がられて育つた癖があるので、夫が滿足する程手元を引き締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は五節句だと云つては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては、好い顏はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衞は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引き比べて見た。喜助は爲事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して亡くしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の難有がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのは

に無理はない。其心持はこつちから察して遣ることが出來る。しかしいかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で爲事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさへすれば、骨を惜まずに働いて、やうやう口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衞はいかに桁を違へて考へて見ても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに滿足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奧には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようと云ふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取り出して來て穴填をしたことなどがわかると、此疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體此懸隔はどうして生じて來るだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと云つてしまへばそれまでである。しかしそれは譃である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衞は思つた。

庄兵衞は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此病がなかつたらと思ふ。其日其日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考て見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出來るものやら分からない。それを今目の前で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だと、庄兵衞は氣が附いた。

庄兵衞は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此時庄兵衞は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。

庄兵衞は喜助の顏をまもりつつ又、「喜助さん」と呼び掛けた。今度は「さん」と云つたが、これは十分の意識を以て稱呼を改めたわけではない。其聲が我口から出て我耳に入るや否や、庄兵衞は此稱呼の不穩當なのに氣が附いたが、今さら既に出た詞を取り返すことも出來なかつた。

「はい」と答へた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思ふらしく、おそるおそる庄兵衞の氣色を覗つた。

庄兵衞は少し間の惡いのをこらへて云つた。「色々の事を聞くやうだが、お前は今度島へ遣られるのは、人をあやめたからだと云ふ事だ。己に序にそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入つた樣子で、「かしこまりました」と云つて、小聲で話し出した。「どうも飛んだ心得違で、恐ろしい事をいたしまして、なんとも申し上げやうがございません。跡で思つて見ますと、どうしてあんな事が出來たかと、自分ながら不思議でなりません。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時に二親が時疫で亡くなりまして、弟と二人跡に殘りました。初は丁度軒下に生れた狗の子にふびんを掛けるやうに町内の人達がお惠下さいますので、近所中の走

使などをいたして、飢ゑ凍えもせずに、育ちました。次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるたけ二人が離れないやうにいたして、一しよにゐて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟と一しよに、西陣の織場に這入りまして、空引と云ふことをいたすことになりました。そのうち弟が病氣で働けなくなつたのでございます。其頃わたくし共は北山の掘立小屋同樣の所に寢起をいたして、紙屋川の橋を渡つて織場へ通つてをりましたが、わたくしが暮れてから、食物などを買つて歸ると、弟は待ち受けてゐて、わたくしを一人で稼がせては濟まない濟まないと申してをりました。或る日いつものやうに何心なく歸つて見ますと、弟は布團の上に突つ伏してゐまして、周圍は血だらけなのでございます。わたくしはびつくりいたして、手に持つてゐた竹の皮包や何かを、そこへおつぽり出して、傍へ往つて「どうしたどうした」と申しました。すると弟は眞蒼な顔の、兩方の頬から腮へ掛けて血に染つたのを擧げて、わたくしを見ましたが、物を言ふことが出來ませぬ。息をいたす度に、創口でひゆうひゆうと云ふ音がいたすだけでございます。わたくしにはどうも樣子がわかりませんので、「どうしたのだい、血を吐いたのかい」と云つて、傍へ寄らうといたすと、弟は右の手を床に衝いて、少し體を起しました。左の手はしつかり腮の下の所を押へてゐますが、其指の間から黒血の固まりがはみ出してゐます。弟は目でわたくしの傍へ寄るのを留めるやうにして口を利きました。やうやう物が言へるやうになつたのでございます。「濟まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなほりさうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに樂がさせたいと思つたのだ。笛を切つたら、すぐ死ねるだらうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思つて、力一ぱい押し込むと、横へすべつてしまつた。刃は飜れはしなかつたやうだ。これを旨く拔いてくれたら己は死ねるだらうと思つてゐる。物を言ふのがせつなくつて可けない。どうぞ手を借して拔いてくれ」と云ふのでございます。弟が左の手を弛めるとそこから又息が漏ります。わたくしはなんと云はうにも、聲が出ませんので、默つて弟の喉の創を覗いて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持つて、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、其儘剃刀を、刳るやうに深く突つ込んだものと見えます。柄がやつと二寸ばかり創口から出てゐます。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようと云ふ思案も附かずに、弟の顔を見ました。弟はぢつとわたくしを見詰めてゐます。わたくしはやつとの事で、「待つてゐてくれ、お醫者を呼んで來るから」と申しました弟は怨めしさうな目附をいたしましたが、又左の手で喉をしつかり押へて、「醫者がなんになる、あゝ苦しい、早く拔いてくれ、頼むと云ふのでございます。わたくしは途方に暮れたやうな心持になつて、只弟の顔ばかり見てをります。こんな時は、不思議なもので、目が物を言ひます。弟の目は「早くしろ、早くしろ」と云つて、さも怨めしさうにわたくしを見てゐます。わたくしの頭の中では、なんだかかう車の輪のやうな物がぐるぐる廻つてゐるやうでございましたが、弟の目は恐ろしい催促を罷めません。それに其目の怨めしさうなのが段々險しくなつて來て、とうとう敵の顔をでも睨むやうな、憎々しい目になつてしまひます。それを見てゐて、わたくしはとうとう、これは弟の言つた通にして遣らなくてはならないと思ひました。わたくしは「しかたがない、拔いて遣るぞ」と申しました。すると弟の目の色がからりと變つて、晴やかに、さも嬉しさうになりました。わたく

しはなんでも一と思にしなくてはと思つて膝を撞くやうにして體を前へ乘り出しました。弟は衝いてゐた右の手を放して、今まで喉を押へてゐた手の肘を床に衝いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしつかり握つて、ずつと引きました。此時わたくしの内から締めて置いた表口の戸をあけて、近所の婆あさんが這入つて來ました。留守の間、弟に藥を飮ませたり何かしてくれるやうに、わたくしの頼んで置いた婆あさんなのでございます。もう大ぶ内のなかが暗くなつてゐましたから、わたくしには婆あさんがどれだけの事を見たのだかわかりませんでしたが、婆あさんはあつと云つた切、表口をあけ放しにして置いて驅け出してしまひました。わたくしは剃刀を拔く時、手早く拔かう、眞直に拔かうと云ふだけの用心はいたしましたが、どうも拔いた時の手應は、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました。刃が外の方へ向いてゐましたから、外の方が切れたのでございませう。わたくしは剃刀を握つた儘、婆あさんの這入つて來て又驅け出して行つたのを、ぼんやりして見てをりました。婆あさんが行つてしまつてから、氣が附いて弟を見ますと、弟はもう息が切れてをりました。創口からは大そうな血が出てをりました。それから年寄衆がお出になつて、役場へ連れて行かれますまで、わたくしは剃刀を傍に置いて、目を半分あいた儘死んでゐる弟の顏を見詰めてゐたのでございます。」

少し俯向き加減になつて庄兵衞の顏を下から見上げて話してゐた喜助は、かう云つてしまつて視線を膝の上に落した。

喜助の話は好く條理が立つてゐる。殆ど條理が立ち過ぎてゐると云つても好い位である。これは半年程の間、當時の事を幾度も思ひ浮べて見たのと、役場で問はれ、町奉行所で調べられる其度毎に、注意に注意を加へて浚つて見させられたのとのためである。

庄兵衞は其場の樣子を目のあたり見るやうな思ひをして聞いてゐたが、これが果して弟殺しと云ふものだらうか、人殺しと云ふものだらうかと云ふ疑が、話を半分聞いた時から起つて來て、聞いてしまつても、其疑を解くことが出來なかつた。弟は剃刀を拔いてくれたら死なれるだらうから、拔いてくれと云つた。それを拔いて遣つて死なせたのだ、殺したのだとは云はれる。しかし其儘にして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へなかつたからである。喜助は其苦を見てゐるに忍びなかつた。苦から救つて遣らうと思つて命を絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救ふためであつたと思ふと、そこに疑が生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衞の心の中には、いろいろに考へて見た末に、自分より上のものの判斷に任す外ないと云ふ念、オオトリテエに從ふ外ないと云ふ念が生じた。庄兵衞はお奉行樣の判斷を、其儘自分の判斷にしようと思つたのである。さうは思つても、庄兵衞はまだどこやらに腑に落ちぬものが殘つてゐるので、なんだかお奉行樣に聞いて見たくてならなかつた。

次第に更けて行く朧夜に、沈默の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。

附　高瀬舟縁起

京都の高瀬川は、五條から南は天正十五年に、二條から五條までは慶長十七年に、角倉了以が掘つたものださうである。そこ

を通ふ舟は曳舟である。原來たかせは舟の名で、其舟の通ふ川を高瀨川と云ふのだから、同名の川は諸國にある。しかし舟は曳舟には限らぬので、和名鈔には艇の字をたかせに當ててある。竹柏園文庫の和漢船用集を借覽するに、「おもて高く、とも、よこともにて、低く平なるものなり」と云つてある。そして圖には篙で行く舟がかいてある。

德川時代には京都の罪人が遠島を言ひ渡されると、高瀨舟で大阪へ廻されたさうである。それを護送して行く京都町奉行附の同心が悲しい話ばかり聞せられる。或るとき此舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがつてゐなかつた。其仔細を尋ねると、これまで食を得ることに困つてゐたのに、遠島を言ひ渡された時、銅錢二百文を貰つたが、錢を使はずに持つてゐるのは始てだと答へた。又人殺しの科はどうして犯したかと問へば、兄弟で西陣に傭はれて、空引と云ふことをしてゐたが、給料が少くて暮しが立ち兼ねた、其內同胞が自殺を謀つたが、死に切れなかつた、そこで同胞が所詮助からぬから殺してくれと賴むので、殺して遣つたと云つた。

此話は翁草に出てゐる。池邊義象さんの校訂した活字本で一ペエジ餘に書いてある。私はこれを讀んで、其中に二つの大きい問題が含まれてゐると思つた。一つは財產と云ふものの觀念である。錢を持つたことのない人の錢を持つた喜は、錢の多少には關せない。人の欲には限がないから、錢を持つて見るといくらあればよいと云ふ限界は見出されないのである。二百文を財產として喜んだのが面白い。今一つは死に掛かつてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣ると云ふ事である。人を死なせて遣れば、即ち殺すと云ふことになる。どんな場合にも人を殺してはならない。翁草にも、敎のない民だから、惡意がないのに人殺しになつたと云ふやうな、批評の詞があつたやうに記憶する。しかしこれはさう容易に杓子定木で決してしまはれる問題ではない。こゝに病人があつて死に瀕して苦んでゐる。それを救ふ手段は全くない。傍からその苦むのを見てゐる人はどう思ふであらうか。縱令敎のある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦みを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと云ふ情は必ず起る。こゝに麻醉藥を與へて好いか惡いかと云ふ疑が生ずるのである。其藥は致死量でないにしても、藥を與へれば、多少死期を早くするかも知れない。それゆゑ遣らずに置いて苦ませてゐなくてはならない。從來の道德は苦ませて置けと命じてゐる。しかし醫學社會には、これを非とする論がある。即ち死に瀕して苦むものがあつたら、樂に死なせて、其苦を救つて遣るが好いと云ふのである。これをユウタナジイといふ。樂に死なせると云ふ意味である。高瀨舟の罪人は、丁度それと同じ場合にゐたやうに思はれる。私にはそれがひどく面白い。

かう思つて私は「高瀨舟」と云ふ話を書いた。中央公論で公にしたのがそれである。

阿部一族

従四位下左近衛少將兼越中守細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、餘所よりは早く咲く領地肥後國の花を見棄てて、五十四萬石の大名の晴々しい行列に前後を圍ませ、南より北へ歩みを運ぶ春と倶に、江戸を志して參勤の途に上らうとしてゐるうち、圖らず病に罹つて、典醫の方劑も功を奏せず、日に増し重くなるばかりなので、江戸へは出發の日延の飛脚が立つ。徳川將軍は名君の譽の高い三代目の家光で、島原一揆の時賊將天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の身の上を氣遣ひ、三月二十日には松平伊豆守、阿部豐後守、阿部對島守の連名の沙汰書を作らせ、針醫以策と云ふものを、京都から下向させる。續いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、曾我又左衛門と云ふ侍を上使に遣す。大名に對する將軍家の取扱としては、鄭重を極めたものであつた。島原征伐が此年から三年前寛永十五年の春平定してから後、江戸の邸に添地を賜はつたり、鷹狩の鶴を下されたり、不斷慇懃を盡してゐた將軍家の事であるから、此度の大病を聞いて、先例の許す限の慰問をさせたのも尤である。

　將軍家がかう云ふ手續をする前に、熊本花畑の館では忠利の病が革かになつて、とうとう三月十七日申の刻に五十六歳で亡くなつた。奥方は小笠原兵部大輔秀政の娘を將軍が養女にして妻せた人で、今年四十五歳になつてゐる。名をお千の方と云ふ。嫡子六丸は六年前に元服して將軍家から光の字を賜はり、光貞と名告つて、從四位下侍從兼肥後守にせられてゐる。今年十七歳である。江戸參勤中で遠江國濱松まで歸つたが、訃音を聞いて引き返した。光貞は後名を光尚と改めた。二男鶴千代は小さい時から立田山の泰勝寺に遣つてある。京都妙心寺出身の大淵和尚の弟子になつて宗玄と云つてゐる。三男松之助は細川家に舊縁のある長岡氏に養はれてゐる。四男勝千代は家臣南條大膳の養子になつてゐる。女子は二人ある。長女藤姫は松平周防守忠弘の奥方になつてゐる。二女竹姫は後に有吉頼母英長の妻になる人である。弟には忠利が三齋の三男に生れたので、四男中務大輔立孝、五男刑部興孝、六男長岡式部寄之の三人がある。妹には稲葉一通に嫁した多羅姫、烏丸中納言光賢に嫁した萬姫がある。此萬姫の腹に生れた禰々姫が忠利の嫡子光尚の奥方になつて來るのである。目上には長岡氏を名告る兄が二人、前野長岡兩家に嫁した姉が二人ある。隱居三齋宗立もまだ存命で、七十九歳になつてゐる。此中には嫡子光貞のやうに江戸にゐたり、又京都、其外遠國にゐる人達もあるが、それが後に知らせを受けて歎いたのと違つて、熊本の館にゐた限の人達の歎きは、分けて痛切なものであつた。江戸への注進には六島少吉、津田六左衛門の二人が立つた。

　三月二十四日には初七日の營みがあつた。四月二十八日にはそれまで館の居間の床板を引き放つて、土中に置いてあつた棺を舁き上げて、江戸からの指圖に依つて、飽田郡春日村岫雲院で遺骸を荼毘にして、高麗門の外の山に葬つた。此靈屋の下に、翌年の冬になつて、護國山妙解寺が建立せられて、江戸品川東海寺から澤庵和尚の同門の啓室和尚が來て住持になり、それが寺内の臨流庵に隱居してから、忠利の二

男で出家してゐた宗玄が、天岸和尚と號して跡續になるのである。忠利の法號は妙解院殿臺雲宗伍大居士と附けられた。

岫雲院で荼毘になつたのは、忠利の遺言によつたのである。いつの事であつたか、忠利が方目狩に出て、此岫雲院で休んで茶を飲んだことがある。その時忠利はふと腮鬚の伸びてゐるのに氣が附いて住持に剃刀は無いかと云つた。住持は盥に水を取つて、剃刀を添へて出した。忠利は機嫌好く兒小姓に髯を剃らせながら、住持に云つた。「どうぢやな。此剃刀では亡者の頭を幾つ剃つたであらうな」と云つた。住持はなんと返事をして好いか分からぬので、ひどく困つた。此時から忠利は岫雲院の住持と心安くなつてゐたので、荼毘所を此寺に極めたのである。丁度荼毘の最中であつた。柩の供をして來てゐた家臣達の群に、「あれ、お鷹がお鷹が」と云ふ聲がした。境内の杉の木立に限られて、鈍い青色をしてゐる空の下、圓形の石の井筒の上に笠のやうに垂れ掛かつてゐる葉櫻の上の方に、二羽の鷹が輪をかいて飛んでゐたのである。人々が不思議がつて見てゐるうちに、二羽が尾と嘴と觸れるやうに跡先に續いて、さつと落して來て、櫻の下の井の中に這入つた。寺の門前で暫く何かを言ひ爭つてゐた五六人の中から、二人の男が駈け出して、井の端に來て、石の井筒に手を掛けて中を覗いた。その時鷹は水底深く沈んでしまつて、齒朶の茂みの中に鏡のやうに光つてゐる水面は、もう元の通りに平らになつてゐた。二人の男は鷹匠衆であつた。井の底にくぐり入つて死んだのは、忠利が愛してゐた有明、明石と云ふ二羽の鷹であつた。その事が分かつた時、人々の間に、「それではお鷹も殉死したのか」と囁く聲が聞えた。それは殿樣がお隱れになつた當日から一昨日までに殉死した家臣が十餘人あつて、中にも一昨日は八人一時に切腹し、昨日も一人切腹したので、家中誰一人殉死の事を思はずにゐるものは無かつたからである。二羽の鷹はどういふ手ぬかりで鷹匠衆の手を離れたか、どうして目に見えぬ獲物を追ふやうに、井戸の中に飛び込んだか知らぬが、それを穿鑿しようなどと思ふものは一人も無い。鷹は殿樣の御寵愛なされたもので、それが荼毘の當日に、しかもお荼毘所の岫雲院の井戸に這入つて死んだと云ふ丈の事實を見て、鷹が殉死したのだと云ふ判斷をするには十分であつた。それを疑つて別に原因を尋ねようとする餘地は無かつたのである。

中陰の四十九日が五月五日に濟んだ。これまでは宗玄を始として、既西堂、金両堂、天授庵、聽松院、不二庵等の僧侶が勤行をしてゐたのである。扨五月六日になつたが、まだ殉死する人がぽつ〳〵ある。殉死する本人や親兄弟妻子は言ふまでもなく、なんの由縁も無いものでも、京都から來るお針醫と江戸から下る御上使との接待の用意なんぞはうはの空でしてゐて、只殉死の事ばかり思つてゐる。例年簷に葺く端午の菖蒲も摘まず、ましてや初幟の祝をする子のある家も、その子の生れたことを忘れたやうにして、靜まり返つてゐる。

殉死にはいつどうして極まつたともなく、自然に掟が出來てゐる。どれ程殿樣を大切に思へばと云つて、誰でも勝手に殉死が出來るものでは無い。泰平の世の江戸參勤のお供、いざ戰爭と云ふ時の陣中へのお供と同じ事で、死天の山三途の川のお供をするにも是非殿樣のお許を得なくてはならない。その許もないのに死んでは、それは犬死である。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。敵陣に飛び込んで討死をするのは立派ではあるが、軍令に背いて拔駈をし

て死んでは功にはならない。それが犬死である。お許も無いに殉死しては、これも犬死である。偶にさう云ふ人で犬死にならないのは、値遇を得た君臣の間に黙契があつて、お許はなくてもお許があつたのと變らぬのである。佛涅槃の後に起つた大乘の教は、佛のお許はなかつたが、過現未を通じて知らぬ事の無い佛は、さう云ふ教が出て來るものだと知つて懸許して置いたものだとしてある。お許が無いのに殉死の出來るのは、金口で説かれると同じやうに、大乘の教を説くやうなものであらう。

　そんならどうしてお許を得るかと云ふと、此度殉死した人々の中の内藤長十郎元續が願つた手段などが好い例である。長十郎は平生忠利の机廻りの用を勤めて、格別の御懇意を蒙つたもので、病牀を離れずに介抱をしてゐた。最早本復は覺束ないと、忠利が悟つた時、長十郎に「末期が近うなつたら、あの不二と書いてある大文字の懸物を枕許に懸けてくれ」と言ひ附けて置いた。三月十七日に容態が次第に重くなつて、忠利が「あの懸物を懸けえ」と云つた。長十郎はそれを懸けた。忠利はそれを一目見て、暫く瞑目してゐた。それから忠利が「足がだるい」と云つた。長十郎は掻卷の裾を徐かにまくつて、忠利の足をさすりながら、忠利の顔をぢつと見ると、忠利もぢつと見返した。

「長十郎お願がござりまする。」

「なんぢや。」

「御病氣はいかにも御重體のやうにはお見受申しまするが、神佛の加護、良藥の功驗で、一日も早う御全快遊ばすやうにと、祈願いたしてをりまする。それでも萬一と申すことがござりまする。若しもの事がござりましたら、どうぞ長十郎奴にお供を仰せ附けられますやうに。」

　かう云ひながら長十郎は忠利の足をそつと持ち上げて、自分の額に押し當てて戴いた。目には涙が一ぱい浮かんでゐた。

「それはいかんぞよ。」かう云つて忠利は今まで長十郎と顔を見合せてゐたのに、半分寢返りをするやうに脇を向いた。

「どうぞさう仰やらずに。」長十郎は又忠利の足を戴いた。

「いかんいかん。」顔を背向けた儘で云つた。

　列座の者の中から、「弱輩の身を以て推參ぢや、控へたら好からう」と云つたものがある。長十郎は當年十七歳である。

「どうぞ。」咽に支へたやうな聲で云つて、長十郎は三度目に戴いた足をいつまでも額に當てて放さずにゐた。

「情の剛い奴ぢやな。」聲はおこつて叱るやうであつたが、忠利は此詞と倶に二度頷いた。

　長十郎は「はつ」と云つて、兩手で忠利の足を抱へた儘、床の背後に俯伏して、暫く動かずにゐた。その時長十郎が心の中には、非常な難所を通つて往き着かなくてはならぬ所へ往き着いたやうな、力の弛みと心の落着きとが滿ち溢れて、その外の事は何も意識に上らず、備後疊の上に涙の零れるのも知らなかつた。

　長十郎はまだ弱輩で何一つ際立つた功績もなかつたが、忠利は始終目を掛けて側近く使つてゐた。酒が好きで、別人なら無禮のお咎もありさうな失錯をしたことがあるのに、忠利は「あれは長十郎がしたのでは無い、酒がしたのぢや」と云つて笑つてゐた。それでその恩に報いなくてはならぬ、その過を償はなくてはならぬと思ひ込んでゐた長十郎は、忠利の病氣が重つてからは、その報謝と賠償との道は殉死の外無いと牢く信ずるやうになつた。併し細かに此男の心中に立ち入つて見ると、自分の發意で殉死しなくてはならぬと云ふ心持の旁、人が自分を殉死する筈のものだと思つてゐるに違ひないから、自分は殉死を餘儀なくせられてゐ

ると、人にすがつて死の方向へ進んで行くやうな心持が、殆んど同じ強さに存在してゐた。反面から云ふと、若し自分が殉死せずにゐたら、恐ろしい屈辱を受けるに違ひないと心配してゐたのである。かう云ふ弱みのある長十郎ではあるが、死を怖れる念は微塵も無い。それだからどうぞ殿様に殉死を許して戴かうと云ふ願望は、何物の障礙をも被らずに此男の意志の全幅を領してゐたのである。

　暫くして長十郎は兩手で持つてゐる殿様の足に力が這入つて少し踏み伸ばされるやうに感じた。これは又だるくおなりになつたのだと思つたので、又最初のやうに徐かにさすり始めた。此時長十郎の心頭には老母と妻との事が浮かんだ。そして殉死者の遺族が主家の優待を受けると云ふことを考へて、それで己は家族を安穩な地位に置いて、安んじて死ぬることが出來ると思つた。それと同時に長十郎の顏は晴々した氣色になつた。

　四月十七日の朝、長十郎は衣服を改めて母の前に出て、始て殉死の事を明かして暇乞をした。母は少しも驚かなかつた。それは互に口に出しては言はぬが、けふは倅が切腹する日だと、母も疾うから思つてゐたからである。若し切腹しないとでも云つたら、母はさぞ驚いたことであらう。

　母はまだ貰つたばかりのよめが勝手にゐたのを其席へ呼んで只支度が出來たかと問うた。よめはすぐに起つて、勝手から兼ねて用意してあつた杯盤を自身に運んで出た。よめも母と同じやうに、夫がけふ切腹すると云ふことを疾うから知つてゐた。髪を綺麗に撫で附けて、好い分の不斷着に着換へてゐる。母もよめも改まつた、眞面目な顏をしてゐるのは同じ事であるが、只よめの目の縁が赤くなつてゐるので、勝手にゐた時泣いたことが分かる。杯盤が出ると、長十郎は弟左平次を呼んだ。

　四人は默つて杯を取り交した。杯が一順した時母が云つた。

「長十郎や。お前の好きな酒ぢや。少し過してはどうぢやな。」

「ほんにさうでござりまするな」と云つて、長十郎は微笑を含んで、心地好げに杯を重ねた。

　暫くして長十郎が母に言つた。「好い心持に醉ひました。先日から彼此と心遣を致しましたせゐか、いつもより酒が利いたやうでござります。御免を蒙つてちよつと一休みいたしませう。」

　かう云つて長十郎は起つて居間に這入つたが、すぐに部屋の眞ん中に轉がつて、鼾をかき出した。女房が跡からそつと這入つて枕を出して當てさせた時、長十郎は「ううん」とうなつて寢返りをした丈で、又鼾をかき續けてゐる。女房はぢつと夫の顏を見てゐたが、忽ち慌てたやうに起つて部屋へ往つた。泣いてはならぬと思つたのである。

　家はひつそりとしてゐる。丁度主人の決心を母と妻とが言はずに知つてゐたやうに、家來も女中も知つてゐたので、勝手からも厩の方からも笑聲なぞは聞えない。

　母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、ぢつと物を思つてゐる。主人は居間で鼾をかいて寢てゐる。開け放つてある居間の窓には、下に風鈴を附けた吊葱が吊つてある。その風鈴が折々思ひ出したやうに微かに鳴る。その下には丈の高い石の頂を掘り凹めた手水鉢がある。その上に伏せてある捲物の柄杓に、やんまが一疋止まつて、羽を山形に垂れて動かずにゐる。

　一時立つ。二時立つ。もう午を過ぎた。食事

の支度は女中に言ひ附けてあるが、姑が食べると云はれるか、どうだか分からぬと思つて、よめは聞きに行かうと思ひながらためらつてゐた。若し自分丈が食事の事などを思ふやうに取られはすまいかとためらつてゐたのである。

その時兼て介錯を頼まれてゐた關小平次が来た。姑はよめを呼んだ。よめが默つて手を衝いて機嫌を伺つてゐると、姑が云つた。

「長十郎はちよつと一休みすると云うたが、いかい時が立つやうな。丁度關殿も来られた。もう起して遣つてはどうぢやらうの。」

「ほんにさうでございます。餘り遲くなりません方が。」よめはかう云つて、すぐに起つて夫を起しに往つた。

夫の居間に来た女房は、先に枕をさせた時と同じやうに、又おつと夫の顔を見てゐた。死なせに起すのだと思ふので、暫くは詞を掛け兼ねてゐたのである。

熟睡してゐても、庭からさす晝の明りがまばゆかつたと見えて、夫は窓の方を背にして、顔をこつちへ向けてゐる。

「もし、あなた」と女房は呼んだ。

長十郎は目を醒まさない。

女房がすり寄つて、聳えてゐる肩に手を掛けると、長十郎は「あ、あゝ」と云つて臂を伸ばして、兩眼を開いて、むつくり起きた。

「大そう好くお休みになりました。お袋様が餘り遲くなりはせぬかと仰やりますから、お起し申しました。それに關様がお出になりました。」

「さうか。それでは午になつたと見える。少しの間だと思つたが、醉つたのと疲れがあつたのとで、時の立つのを知らずにゐた。その代りひどく氣分が好くなつた。茶漬でも食べて、そろそろ東光院へ往かずばなるまい。お母あ様にも申し上げてくれ。」

武士はいざと云ふ時には飽食はしない。併し又空腹で大切な事に取り掛かることも無い。長十郎は實際ちよつと寐ようと思つたのだが、覺えず氣持好く寐過し、午になつたと聞いたので、食事をしようと云つたのである。これから形ばかりではあるが、一家四人のものが不斷のやうに膳に向かつて、午の食事をした。

長十郎は心靜かに支度をして、關を連れて菩提所東光院へ腹を切りに往つた。

長十郎が忠利の足を戴いて願つたやうに、平生恩顧を受けてゐた家臣の中で、これと前後して思ひ思ひに殉死の願をして許されたものが、長十郎を加へて十八人あつた。いづれも忠利の深く信頼してゐた侍共である。だから忠利の心では、此人々を子息光尚の保護のために殘して置きたいことは山々であつた。又此人々を自分と一しよに死なせるのが殘酷だとは十分感じてゐた。併し彼等一人一人に「許す」と云ふ一言を、身を割くやうに思ひながら與へたのには、勢已むことを得なかつたのである。

自分の親しく使つてゐた彼等が、命を惜まぬものであるとは、忠利は信じてゐる。隨つて殉死を苦痛とせぬことも知つてゐる。これに反して若し自分が殉死を許さずに置いて、彼等が生きながらへてゐたら、どうであらうか。家中一同は彼等を死ぬべき時に死なぬものとし、恩知らずとし、卑怯者として共に齒せぬであらう。それ丈ならば、彼等も或は忍んで命を光尚に捧げる時の來るのを待つかも知れない。併しその恩知らず、その卑怯者をそれと知らずに、先代の主人が使つてゐたのだと云ふものがあつたら、それは彼等の忍び得ぬ事であらう。彼等はどんなにか口惜しい思をするであらう。かう思つて見ると、忠利は「許す」と云はずにはゐられない。そこで病苦にも増したせつない思をし

ながら、忠利は「許す」と云つたのである。

　殉死を許した家臣の數が十八人になつた時、五十餘年の久しい間治亂の中に身を處して、人情世故に飽くまで通じてゐた忠利は病苦の中にも、つくづく自分の死と十八人の侍の死とに就いて考へた。生あるものは必ず滅する。老木の朽枯れる傍で、若木は茂り榮えて行く。嫡子光尚の周圍にゐる少壯者共から見れば、自分の任用してゐる老成人等は、もうゐなくて好いのである。邪魔にもなるのである。自分は彼等を生きながらへさせて、自分にしたと同じ奉公を光尚にさせたいと思ふが、其奉公を光尚にするものは、もう幾人も出來てゐて、手ぐすね引いて待つてゐるかも知れない。自分の任用したものは、年來それぞれの職分を盡して來るうちに、人の怨をも買つてゐよう。少くも娼嫉の的になつてゐるには違ひない。さうして見れば、強ひて彼等にながらへてゐろと云ふのは、通達した考ではないかも知れない。殉死を許して遣つたのは慈悲であつたかも知れない。から思つて忠利は多少の慰藉を得たやうな心持になつた。

　殉死を願つて許された十八人は寺本八左衞門直次、大塚喜兵衞種次、内藤長十郎元續、太田小十郎正信、原田十次郎之直、宗像加兵衞景定、同吉太夫景好、橋谷市藏重次、井原十三郎吉正、田中意德、本庄喜助重正、伊藤太左衞門方高、右田因幡統安、野田喜兵衞重綱、津崎五助長季、小林理右衞門行秀、林與左衞門正定、宮永勝左衞門宗祐の人々である。

　寺本が先祖は尾張國寺本に住んでゐた寺本太郎と云ふものであつた。太郎の子内膳正は今川家に仕へた。内膳正の子が左兵衞、左兵衞の子が右衞門佐、右衞門佐の子が與左衞門で、與左衞門は朝鮮征伐の時、加藤嘉明に屬して功があつた。與左衞門の子が八左衞門で、大阪籠城の時、後藤基次の下で働いた事がある。細川家に召抱られてから、千石取つて、鐵砲五十挺の頭になつてゐた。四月二十九日に安養寺で切腹した。五十三歳である。藤本猪左衞門が介錯した。大塚は百五十石取の横目役である。介錯は池田八左衞門であつた。四月二十六日に切腹した。内藤が事は前に言つた。太田は祖父傳左衞門が加藤淸正に仕へてゐた。忠廣が封を除かれた時、傳左衞門と其子の源左衞門とが流浪した。小十郎は源左衞門の二男で兒小姓に召し出された者である。百五十石取つてゐた。殉死の先登は此人で、三月十七日に春日寺で切腹した。十八歳である。介錯は門司源兵衞がした。原田は百五十石取で、お側に勤めてゐた。四月二十六日に切腹した。介錯は鎌田源太夫がした。宗像加兵衞、同吉太夫の兄弟は、宗像中納言氏貞の後裔で、親淸兵衞景延の代に召し出された。兄弟いづれも二百石取である。五月二日に兄は流長院、弟は蓮政寺で切腹した。兄の介錯は高田十兵衞、弟のは村上市右衞門がした。橋谷は出雲國の人で、尼子の末流である。十四歳の時忠利に召し出されて、知行百石の側役を勤め、食事の毒味をしてゐた。忠利は病が重くなつてから、橋谷の膝を枕にして寢たこともある。四月二十六日に西岸寺で切腹した。丁度腹を切らうとすると、城の太鼓が微かに聞えた。橋谷は附いて來てゐた家隷に、外へ出て何時か聞いて來いと云つた。家隷は歸つて「しまひの四つ丈は聞きましたが、總體の桴數は分りません」と云つた。橋谷を始として、一座の者が微笑んだ。橋谷は「最期に好う笑はせてくれた」と云つて、家隷に羽織を取らせて切腹した。吉村甚太夫が介錯した。井原は切米三人扶持十石を取つてゐた。切腹した時阿部彌一右衞門の家隷林左兵衞が介錯した。田中は阿

菊物語を世に殘したお菊が孫で、忠利が愛宕山へ學問に往つた時の幼友達であつた。忠利が其頃出家しようとしたのを、竊かに諫めたことがある。後に知行二百石の側役を勤め、算術が達者で用に立つた。老年になつてからは、君前で頭巾を被つた儘安座することを免されてゐた。當代に追腹を願つても許されぬので、六月十九日に小脇差を腹に突き立ててから願書を出して、とうとう許された。加藤安太夫が介錯した。本庄は丹後國の者で、流浪してゐたのを三齋公の部屋附本庄久右衛門が召使つてゐた。仲津で狼藉者を取り押さへて、五人扶持十五石の切米取にせられた。本庄を名告つたのもその時からである。四月二十六日に切腹した。伊藤は奧納戸役を勤めた切米取である。四月二十六日に切腹した。介錯は河喜多八助がした。右田は大伴家の浪人で、忠利に知行百石で召し抱へられた。四月二十七日に自宅で切腹した。六十四歳である。松野右京の家隷田原勘兵衛が介錯した。野田は天草の家老野田美濃の倅で、切米取に召し出された。四月二十六日に源覺寺で切腹した。介錯は惠良半衛門がした。津崎の事は別に書く。小林は二人扶持十石の切米取である。切腹の時、高野勘右衛門が介錯した。林は南郷下田村の百姓であつたのを、忠利が十人扶持十五石に召し出して、花畑の館の庭方にした。四月二十六日に佛巖寺で切腹した。介錯は仲光半助がした。宮永は二人扶持十石の臺所役人で、先代に殉死を願つた最初の男であつた。四月二十六日に淨照寺で切腹した。介錯は吉村甚右衛門がした。此人々の中にはそれぞれの家の菩提所に葬られたのもあるが、又高麗門外の山中にある靈屋の側に葬られたのもある。

　切米取の殉死者はわりに多人數であつたが、中にも津崎五助の事蹟は、際立つて面白いから別に書くことにする。

　五助は二人扶持六石の切米取で、忠利の犬牽である。いつも鷹狩の供をして野方で忠利の氣に入つてゐた。主君にねだるやうにして、殉死のお許は受けたが、家老達は皆云つた。「外の方は高祿を賜はつて、榮耀をしたのに、そちは殿樣のお犬牽ではないか。そちが志は殊勝で、殿樣のお許が出たのは、此上も無い譽ぢや。もうそれで好い。どうぞ死ぬることは思ひ止まつて、御當主に御奉公してくれい」と云つた。

　五助はどうしても聽かずに、五月七日にいつも牽いてお供をした犬を連れて、追廻田畑の高琳寺へ出掛けた。女房は戸口迄見送りに出て、「お前も男ぢや、お歷々の衆に負けぬ樣におしなされい」と云つた。

　津崎の家では往生院を菩提所にしてゐたが、往生院は上の御由緒のあるお寺だといふので、憚つて、高琳寺を死所と極めたのである。五助が墓地に這入つて見ると、兼て介錯を頼んで置いた松野縫殿助が先に來て待つてゐた。五助は肩に掛けた淺葱の嚢を卸してその中から飯行李を出した。蓋を開けると握飯が二つ這入つてゐる。それを犬の前に置いた。犬はすぐに食はうともせず、尾を掉つて五助の顏を見てゐた。五助は人間に言ふやうに犬に言つた。

「おぬしは畜生ぢやから、知らずにをるかも知れぬが、お主の頭をさすつて下されたことのある殿樣は、もうお亡くなり遊ばされた。それで御恩になつてゐなされたお歷々は皆けふ腹を切つてお供をなさる。己は下司ではあるが、御扶持を戴いて繋いだ命はお歷々と變つたことはない。殿樣に可哀がつて戴いた有難さも同じ事ぢや。それで己は今腹を切つて死ぬるのぢや。己が死んでしまうたら、おぬしは今から野ら犬になるのぢや。己はそれが可哀さうでならん。殿樣のお供をした鷹は岫雲院で井戸に飛び込んで死んだ。どうぢや。おぬしも己と一しよに死

なうとは思はんかい。若し野ら犬になつても、生きてゐたいと思うたら、此握飯を食つてくれい。死にたいと思ふなら、食ふなよ。」

かう云つて犬の顏を見てゐたが、犬は五助の顏ばかりを見てゐて、握飯を食はうとはしない。

「それならおぬしも死ぬるか」と云つて、五助は犬をきつと見詰めた。

犬は一聲鳴いて尾を掉つた。

「好い。そんなら不便ぢやが死んでくれい。」かう云つて五助は犬を抱き寄せて、脇差を拔いて一刀に刺した。

五助は犬の死骸を傍へ置いた。そして懷中から一枚の書き物を出して、それを前にひろげて、小石を重りにして置いた。誰やらの邸で歌の會のあつた時見覺えた通りに半紙を横に二つに折つて、「家老衆はとまれとまれと仰あれどとめてとまらぬ此五助哉」と、常の詠草のやうに書いてある。署名はして無い。歌の中に五助としてあるから、二重に名を書かなくても好いと、すなほに考へたのが、自然に故實に愜つてゐた。

もうこれで何も手落は無いと思つた五助は、「松野樣、お頼申します」と云つて、安坐して肌をくつろげた。そして犬の血の附いた儘の脇差を逆手に持つて、「お鷹匠衆はどうなさりましたな、お犬牽は只今參りますぞ」と高聲に云つて、一刀に腹を十文字に切つた。松野が背後から首を打つた。

五助は身分の輕いものではあるが、後に殉死者の遺族の受けた程の手當は、跡に殘つた後家が受けた。男子一人は小さい時出家してゐたからである。後家は五人扶持を貰ひ、新に家屋敷を貰つて、忠利の三十三回忌の時まで存命してゐた。五助の甥の子が二代の五助になつて、それからは代々觸組で奉公してゐた。

忠利の許を得て殉死した十八人の外に、阿部彌一右衛門通信と云ふものがあつた。初は明石氏で、幼名を猪之助と云つた。夙くから忠利の側近く仕へて、千百石餘の身分になつてゐる。島原征伐の時、子供五人の内三人まで軍功によつて新知二百石づつを貰つた。この彌一右衛門は家中でも殉死する筈のやうに思ひ、當人も亦忠利の夜伽に出る順番が來る度に、殉死したいと云つて願つた。併しどうしても忠利が許さない。

「そちが志は滿足に思ふが、それよりは生きてゐて光尚に奉公してくれい」と、何度願つても、同じ事を繰り返して云ふのである。

一體忠利は彌一右衛門の言ふことを聽かぬ癖が附いてゐる。これは餘程古くからの事で、まだ猪之助と云つて小姓を勤めてゐた頃も、猪之助が「御膳を差し上げませうか」と伺ふと、「まだ空腹にはならぬ」と云ふ。外の小姓が申し上げると、「好い、出させい」と云ふ。忠利は此男の顏を見ると、反對したくなるのである。そんなら叱られるかと云ふと、さうでも無い。此男程精勤をするものは無く、萬事に氣が附いて、手ぬかりが無いから、叱らうと云つても叱りやうが無い。

彌一右衛門は外の人の言ひ附けられてする事を、言ひ附けられずにする。外の人の申し上げてする事を申し上げずにする。併しする事はいつも肯綮に中つてゐて、間然すべき所が無い。彌一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初なんとも思はずに、只此男の顏を見ると、反對したくなつたのだが、後には此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。憎いと思ひながら、聰明な忠利はなぜ彌一右衛門がさうなつたかと囘想して見て、それは自分が爲向けたのだと云ふことに氣が附いた。そして自分の反對する癖を改めようと思つてゐ

ながら、月が累り年が累るに從つて、それが次第に改めにくくなつた。

人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭だかと穿鑿して見ると、どうかすると捕捉する程の據りどころが無い。忠利が彌一右衞門を好かぬのも、そんなわけである。併し彌一右衞門と云ふ男はどこかに人と親み難い處を持つてゐるに違ひ無い。それは親しい友達の少いので分かる。誰でも立派な侍として尊敬はする。併し容易く近づかうと試みるものが無い。稀に物數奇に近づかうと試みるものがあつても、暫くするうちに根氣が續かなくなつて遠ざかつてしまふ。まだ猪之助と云つて、前髮のあつた時、度々話をし掛けたり、何かに手を借して遣つたりしてゐた年上の男が、「どうも阿部には附け入る隙が無い」と云つて我を折つた。そこらを考へて見ると、忠利が自分の癖を改めたく思ひながら改めることの出來なかつたのも怪むに足りない。

兎に角彌一右衞門は何度願つても殉死の許を得ないでゐるうちに、忠利は亡くなつた。亡くなる少し前に、「彌一右衞門奴はお願と申すことを申したことはござりません、これが生涯唯一のお願でござります」と云つて、ぢつと忠利の顏を見てゐたが、忠利もぢつと顏を見返して、「いや、どうぞ光尙に奉公してくれい」と言ひ放つた。

彌一右衞門はつくづく考へて決心した。自分の身分で、此場合に殉死せずに生き殘つて、家中のものに顏を合せてゐると云ふことは、百人が百人所詮出來ぬ事と思ふだらう。犬死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかの外、爲方があるまい。だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い。から思つて一日一日と例の如くに勤めてゐた。

そのうちに五月六日が來て、十八人のものが皆殉死した。熊本中只その噂ばかりである。誰はなんと云つて死んだ、誰の死樣が誰よりも見事であつたと云ふ話の外には、なんの話も無い。彌一右衞門は以前から人に用事の外の話をし掛けられたことは少かつたが、五月七日からこつちは、御殿の詰所に出てゐて見ても、一層寂しい。それに相役が自分の顏を見ぬやうにして見るのが分かる。そつと横から見たり、背後から見たりするのが分かる。不快で溜らない。それでも己は命が惜しくて生きてゐるのでは無い、己をどれ程惡く思ふ人でも、命を惜む男だとはまさかに云ふことが出來まい、たつた今でも死んで好いのなら死んで見せると思ふので、昂然と項を反らして詰所へ出て、昂然と項を反らして詰所から引いてゐた。

二三日立つと、彌一右衞門が耳に怪しからん噂が聞え出して來た。誰が言ひ出した事か知らぬが、「阿部はお許の無いを幸に生きてゐると見える、お許は無うても追腹は切られぬ筈が無い、阿部の腹の皮は人とは違ふと見える、瓢簞に油でも塗つて切れば好いに」と云ふのである。彌一右衞門は聞いて思ひの外の事に思つた。惡口が言ひたくばなんとも云ふが好い。併し此彌一右衞門を竪から見ても横から見ても、命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。げに言へば言はれたものかな、好いわ。そんなら此腹の皮を瓢簞に油を塗つて切つて見せう。

彌一右衞門は其日詰所を引くと、急使を以て別家してゐる弟二人を山崎の邸に呼び寄せた。居間と客間との間の建具を外させ、嫡子權兵衞、二男彌五右衞門、次にまだ前髮のある五男七之丞の三人を傍にをらせて、主人は威儀を正して待ち受けてゐる。權兵衞は幼名權十郎と云つて、島原征伐に立派な働きをして、新知二百石を貰つてゐる。父に劣らぬ若者である。此度の事に就いては、只一度父に「お許は出ま

せなんだか」と問うた。父は「うん、出んぞ」と云つた。その外二人の間にはなんの詞も交されなかつた。親子は心の底まで知り抜いてゐるので、何も言ふには及ばぬのであつた。

間もなく二張の提燈が門の内に這入つた。三男市太夫、四男五太夫の二人が殆ど同時に玄關に來て、雨具を脱いで座敷に通つた。中陰の翌日からじめじめとした雨になつて、五月闇の空が晴れずにゐるのである。

障子は開け放してあつても、蒸し暑くて風がない。その癖燭臺の火はゆらめいてゐる。螢が一匹庭の木立を縫つて通り過ぎた。

一座を見渡した主人が口を開いた。「夜陰に呼びに遣つたのに、皆好う來て呉れた。家中一般の噂ぢやと云ふから、おぬし達も聞いたに違ひない。此彌一右衛門が腹は瓢箪に油を塗つて切る腹ぢやさうな。それぢやによつて、己は今瓢箪に油を塗つて切らうと思ふ。どうぞ皆で見屆けてくれい。」

市太夫も五太夫も島原の軍功で新知二百石を貰つて別家してゐるが、中にも市太夫は早くから若殿附になつてゐたので、御代替りになつて人に羨まれる一人である。市太夫が膝を進めた。「なる程 好う分かりました。實は傍輩が言ふには、彌一右衛門殿は御先代の御遺言で續いて御奉公なさるさうな。親子兄弟相變らず揃うてお勤めなさる、めでたい事ぢやと云ふのでござります。其詞が何か意味ありげで齒痒うござりました。」

父彌一右衛門は笑つた。「さうであらう。目の先ばかり見える近眼共を相手にするな。そこでその死なぬ筈の己が死んだら、お許の無かつた己の子ぢやと云うて、おぬし達を侮るものもあらう。己の子に生れたのは運ぢや。せう事が無い。恥を受ける時は一しよに受けい。兄弟喧嘩をするなよ。さあ、瓢箪で腹を切るのを好う見て置け。」

から言つて置いて、彌一右衛門は子供等の面前で切腹して、自分で首筋を左から右へ刺し貫いて死んだ。父の心を測り兼ねてゐた五人の子供等は、此時悲しくはあつたが、それと同時にこれまでの不安心な境界を一歩離れて、重荷の一つを卸したやうに感じた。•

「兄き」と二男彌五兵衛が嫡子に言つた。「兄弟喧嘩をするなと、お父つさんは言ひ置いた。それには誰も異存はあるまい。己は島原で持場が惡うて、知行も貰はずにゐるから、これからはおぬしが厄介になるぢやらう。ぢやが何事があつても、おぬしが手に慥かな槍一本はあると云ふものぢや。さう思うてゐてくれい。」

「知れた事ぢや。どうなる事か知れぬが、己が貰ふ知行はおぬしが貰ふも同じぢや。」から云つた切り權兵衛は腕組をして顔を蹙めた。

「さうぢや。どうなる事か知れぬ。追腹はお許の出た殉死とは違ふなぞと云ふ奴があらうて。」

かう云つたのは四男の五太夫である。

「それは目に見えてをる。どう云ふ目に逢うても。」かう言ひさして三男市太夫は權兵衛の顔を見た。「どう云ふ目に逢うても、兄弟離れ離れに相手にならずに、固まつて行かうぞ。」

「うん」と權兵衛は云つたが、打ち解けた樣子も無い。權兵衛は弟共を心にいたはつてはゐるが、やさしく物を言はれぬ男である。それに何事も一人で考へて、一人でしたがる。相談と云ふものをめつたにしない。それで彌五右衛門も市太夫も念を押したのである。

「兄い樣方が揃うてお出なさるから、お父つさんの惡口は、うかと言はれますまい。」これは前髪の七之丞が口から出た。女のやうな聲ではあつたが、それに強い信念が籠つてゐたので、一座のものの胸を、暗黑な前途を照らす光明のやうに照らした。

「どりや、おつ母さんに言うて、女子達に暇乞をさせうか。」から云つて權兵衞が席を起つた。

從四位下侍從兼肥後守光尙の家督相續が濟んだ。家臣にはそれぞれ新知、加增、役替などがあつた。中にも殉死の侍十八人の家々は、嫡子にその儘父の跡を繼がせられた。嫡子のある限りは、いかに幼少でもその數には漏れない。未亡人、老父母には扶持が與へられる。家屋敷を拜領して、作事までも上から爲向けられる。先代が格別入懇にせられた家柄で、死天の旅の御供にさへ立つたのだから、家中のものが羨みはしても妬みはしない。

然るに一種變つた跡目の處分を受けたのは、阿部彌一右衞門の遺族である。嫡子權兵衞は父の跡をその儘繼ぐことが出來ずに、彌一右衞門が千五百石の知行は細かに割いて弟達へも配分せられた。一族の知行を合せて見れば、前に變つたことは無いが、本家を繼いだ權兵衞は、小身ものになつたのである。權兵衞の肩幅の狹くなつたことは言ふまでも無い。弟共も一人一人の知行は殖えながら、これまで千石以上の本家によつて、大木の蔭に立つてゐるやうに思つてゐたのが、今は橡栗の背競になつて、有難いやうで迷惑な思をした。

政道は地道である限は、咎の歸する所を問ふものは無い。一旦常に變つた處置があると、誰の捌きかと云ふ詮議が起る。當主の御覺めでたく、御側去らずに勤めて居る大目附役に、林外記と云ふものがある。小才覺があるので、若殿樣時代のお伽には相應してゐたが、物の大體を見る事に於ては及ばぬ所があつて、兎角苛察に傾きたがる男であつた。阿部彌一右衞門は故殿樣のお許を得ずに死んだのだから、眞の殉死者と彌一右衞門との間には境界を附けなくてはならぬと考へた。そこで阿部家の俸祿分割の策を獻じた。光尙も思慮ある大名ではあつたが、まだ物馴れぬ時の事で、彌一右衞門や嫡子權兵衞と懇意でないために、思遣が無く、自分の手元に使つて馴染のある市太夫がために加增になると云ふ處に目を附けて、外記の言を用ゐたのである。

十八人の侍が殉死した時には、彌一右衞門は御側に奉公してゐたのに殉死しないと云つて、家中のものが卑んだ。さて僅かに二三日を隔てて彌一右衞門は立派に切腹したが、事の當否は措いて、一旦受けた侮辱は容易に消え難く、誰も彌一右衞門を褒めるものが無い。上では彌一右衞門の遺骸を靈屋の側に葬ることを許したのであるから、跡目相續の上にも強いて境界を立てずに置いて、殉死者一同と同じ扱をして好かつたのである。さうしたなら阿部一族は面目を施して、擧つて忠勤を勵んだのであらう。然るに上で一段下つた扱をしたので、家中のものの阿部家侮蔑の念が公に認められた形になつた。權兵衞兄弟は次第に傍輩に疎んぜられて、怏々として日を送つた。

寬永十九年三月七日になつた。先代の殿樣の一周忌である。靈屋の傍にはまだ妙解寺は出來てゐぬが、向陽院と云ふ堂宇が立つて、そこに妙解院殿の位牌が安置せられ、鏡首座と云ふ僧が住持してゐる。忌日に先だつて、紫野大德寺の天祐和尙が京都から下向する。年忌の營みは晴々しいものになるらしく、一箇月ばかり前から、熊本の城下は準備に忙しかつた。

いよいよ當日になつた。麗かな日和で、靈屋の傍は櫻の盛りである。向陽院の周圍には幕を引き廻はして、步卒が警固して居る。當主が自ら臨場して、先づ先代の位牌に燒香し、次いで殉死者十九人の位牌に燒香する。それから殉死者遺族が許されて燒香する。同時に御紋附上下、同時服を拜領する。馬廻以上は長上下、徒士は半

上下である。下々の者は御香奠を拜領する。
儀式は滯なく濟んだが、その間に只一つの珍事が出來した。それは阿部權兵衞が殉死者遺族の一人として、席順によつて妙解院殿の位牌の前に進んだ時、燒香をして退きしなに、脇差の小柄を拔き取つて髻を押し切つて、位牌の前に供へたことである。この場に詰めてゐた侍共も、不意の出來事に驚き呆れて、茫然として見てゐたが、權兵衞が何事も無いやうに、自若として五六步退いた時、一人の侍がやうやう我に返つて「阿部殿、お待なされい」と呼び掛けながら、追ひ縋つて押し止めた。續いて二三人立ち掛つて、權兵衞を別間に連れて這入つた。
權兵衞が詰衆に尋ねられて答へた所はかうである。貴殿等は某を亂心者のやうに思はれるであらうが、全く左樣なわけでは無い。父彌一右衞門は一生瑕瑾の無い御奉公をいたしたればこそ、故殿樣のお許を得ずに切腹しても、殉死者の列に加へられ、遺族たる某さへ他人に先だつて御位牌に御燒香いたすことが出來たのである。併し某は不肖にして父同樣の御奉公が成り難いのを、上にも御承知と見えて、知行を割いて弟共に御遣なされた。某は故殿樣にも御當主にも亡き父にも一族の者共にも傍輩にも面目が無い。かやうに存じてゐるうち、今日御位牌に御燒香いたす場合になり、咄嗟の間、感慨胸に迫り、いつその事武士を棄てようと決心いたした。お場所柄を顧みざるお咎は甘んじて受ける。亂心などはいたさぬと云ふのである。
權兵衞の答を光尚は聞いて、不快に思つた。第一に權兵衞が自分に面當がましい所行をしたのが不快である。次に自分が外記の策を納れて、しなくても好い事をしたのが不快である。まだ二十四歲の血氣の殿樣で、情を抑へ欲を制することが足りない。恩を以て怨に報いる寬大の心持に乏しい。卽座に權兵衞をおし籠めさせた。それを聞いた彌五兵衞以下一族のものは、門を閉ぢて上の御沙汰を待つことにして、夜陰に一同寄り合つては、窃に一族の前途のために評議を凝らした。
阿部一族は評議の末、此度先代一週忌の法會のために下向して、まだ逗留してゐる天祐和尙に縋ることにした　市太夫は和尙の旅館に往つて一部始終を話して、權兵衞に對する上の處置を輕減して貰ふやうに賴んだ。和尙はつくづく聞いて云つた。承れば御一家のお成行氣の毒千萬である。併し上の御政道に對して彼此云ふことは出來ない。只權兵衞殿に死を賜はるとなつたら、きつと御助命を願つて進ぜよう。殊に權兵衞殿は既に髻を拂はれて見れば、桑門同樣の身の上である。御助命丈はいかやうにも申して見ようと云つた。市太夫は賴もしく思つて歸つた。一族のものは市太夫の復命を聞いて、一條の活路を得たやうな氣がした。そのうち日が立つて、天祐和尙の歸京の時が次第に近づいて來た。和尙は殿樣に逢つて話をする度に、阿部權兵衞が助命の事を折があつたら言上しようと思つたが、どうしても折が無い。それは其筈である。光尚はかう思つたのである。天祐和尙の逗留中に權兵衞の事を沙汰したら、きつと助命を請はれるに違ひ無い。大寺の和尙の詞で見れば、等閑に聞き棄てることはなるまい。和尙の立つのを待つて處置しようと思つたのである。とうとう和尙は空しく熊本を立つてしまつた。
天祐和尙が熊本を立つや否や、光尚はすぐに阿部權兵衞を井手の口に引き出して縛首にさせた。先代の御位牌に對して不敬な事を敢てした、上を恐れぬ所行として處置せられたのである。
彌五兵衞以下一同のものは寄り集つて評議

した。權兵衛の所行に不埒には違ひ無い。併し亡父彌一右衛門は兎に角殉死者の中に數へられてゐる。その相續人たる權兵衛で見れば、死を賜ふことは是非も無い。武士らしく切腹仰せ付けられれば異存はない。それに何事ぞ、奸盗かなんぞのやうに、白晝に縛首にせられた。此の樣子で推すれば、一族のものも安穩には差し置かれまい。縱ひ別に御沙汰が無いにしても、縛首にせられたものの一族が、何の面目あつて、傍輩に立ち交つて御奉公をしよう。此上は是非に及ばない。何事があらうとも、兄弟分かれ分かれになるなと、彌一右衛門殿の言ひ置かれたのは此時の事である。一族討手を引き受けて、共に死ぬる外は無いと、一人の異議を稱へるものも無く決した。

阿部一族は妻子を引き纏めて、權兵衛が山崎の屋敷に立て籠つた。

穩ならぬ一族の樣子が上に聞えた。横目が偵察に出て來た。山崎の屋敷では門を嚴重に鎖して靜まり返つてゐた。市太夫や五太夫の宅は空屋になつてゐた。

討手の手配が定められた。表門は側者頭竹内數馬長政が指揮役をして、それに小頭添島九兵衛、同野村庄兵衛が隨つてゐる。數馬は千百五十石で鐵砲組三十挺の頭である。譜第の乙名島徳右衛門が供をする。添島、野村は當時百石のものである。裏門の指揮役は知行五百石の側者頭高見權右衛門重政で、これも鐵砲組三十挺の頭である。それに目附畑十太夫と竹内數馬の小頭で當時百石の千場作兵衛とが隨つてゐる。

討手は四月二十一日に差し向けられることになつた。前晩に山崎の屋敷の周圍には夜廻が附けられた。夜が更けてから侍分のものが一人覆面して、塀を内から乘り越えて出たが、廻役の佐分利嘉左衛門が組の足輕丸山三之丞が討ち取つた。その後夜明まで何事もなかつた。

兼て近隣のものには沙汰があつた。縱ひ當番たりとも在宿して火の用心を怠らぬやうにいたせといふのが一つ。討手でないのに、阿部が屋敷に入り込んで手出しをすることは嚴禁である。併し落人は勝手に討ち取れといふのが二つであつた。

阿部一族は討手の向ふ日を其前日に聞き知つて、先づ邸内を隈なく掃除し、見苦しい物は悉く焼き棄てた。それから老若打寄つて酒宴をした。それから老人や女は自殺し、幼いものは手ん手に刺し殺した。それから庭に大きい穴を掘つて死骸を埋めた。跡に殘つたのは究竟の若者ばかりである。彌五兵衛、市太夫、五太夫、七之丞の四人が指圖して、障子襖を取り拂つた廣間に家來を集めて、鉦太鼓を鳴らさせ、高聲に念佛をさせて夜の明けるのを待つた。これは老人や妻子を弔ふためだとは云つたが、實は下人共に臆病の念を起させぬ用心であつた。

阿部一族の立て籠つた山崎の屋敷は、後に齋藤勘助の住んだ所で、向ひは山中又左衛門、左右兩隣は柄本又七郎、平山三郎の住ひであつた。

此中で柄本が家は、もと天草郡を三分して領してゐた柄本、天草、志岐の三家の一つである。小西行長が肥後半國を治めてゐた時、天草、志岐は罪を犯して誅せられ、柄本だけが殘つてゐて、細川家に仕へた。

又七郎は平生阿部彌一右衛門が一家と心安くして、主人同志は勿論、妻女までも互に往來してゐた。中にも彌一右衛門の二男彌五兵衛は鎗が得意で、又七郎も同じ技を嗜む所から、親しい中で廣言をし合つて、「お手前が上手でも某には叶ふまい」、「いや某がなんでお手前に負けようぞ」と云つてゐた。

そこで先代の殿樣の病中に、彌一右衞門が殉死を願つて許されぬと聞いた時から、又七郎は彌一右衞門の胸中を察して氣の毒がつた。それから彌一右衞門の追腹、家督相續人權兵衞の向陽院での振舞、それが基になつての死刑、彌五兵衞以下一族の立籠と云ふ順序に、阿部家が段々否運に傾いて來たので、又七郎は親身のものにも劣らぬ心痛をした。

或る日又七郎が女房に言ひ附けて、夜更けてから阿部の屋敷へ見舞に遣つた。阿部一族は上に叛いて籠城めいた事をしてゐるから、男同士は交通することが出來ない。然るに最初からの行掛かりを知つてゐて見れば、一族のものを惡人として憎むことは出來ない。ましてや年來懇意にした間柄である。婦女の身として密かに見舞ふのは、よしや後日に發覺したとて申譯の立たぬ事でもあるまいと云ふ考で、見舞には遣つたのである。女房は夫の詞を聞いて、喜んで心盡しの品を取揃へて、夜更けて隣へおとづれた。これもなかなか氣丈な女で、若し後日に發覺したら、罪を自身に引き受けて、夫に迷惑は掛けまいと思つたのである。

阿部一族の喜は非常であつた。世間は花咲き鳥歌ふ春であるのに、不幸にして神佛にも人間にも見放されて、かく籠居してゐる我々である。それを見舞うて遣れと云ふ夫も夫、その言附けを守つて來てくれる妻も妻、實に難有い心掛だと、心から感じた。女達は涙を流して、かうなり果てて死ぬるからは、世の中に誰一人菩提を弔うてくれるものもあるまい、どうぞ思ひ出したら、一遍の回向をして貰ひたいと頼んだ。子供達は門外へ一足も出されぬので、不斷優しくしてくれた柄本の女房を見て、右左から取り縋つて、容易く放して歸さなかつた。

阿部の屋敷へ討手の向ふ前晩になつた。柄本又七郎はつくづく考へた。阿部一家は自分とは親しい間柄である。それで後日の咎もあらうかとは思ひながら、女房を見舞ひにまで遣つた。併しいよいよ明朝は上の討手が阿部家へ來る。これは逆賊を征伐せられるお上の軍も同じ事である。御沙汰には火の用心をせい、手出しをするなと云つてあるが、武士たるものが此場合に懷手をして見てゐられたものでは無い。情は情、義は義である。己にはせんやうが有ると考へた。そこで更闌けて拔足をして、後口から薄暗い庭へ出て、阿部家との境の竹垣の結縄を悉く切つて置いた。それから歸つて身支度をして、長押に懸けた手槍を卸し、鷹の羽の紋の附いた鞘を拂つて、夜の明けるのを待つてゐた。

討手として阿部の屋敷の表門に向ふことになつた竹内數馬は、武道の譽ある家に生れたものである。先祖は細川高國の手に屬して、强弓の名を得た島村彈正貴則である。享祿四年に高國が攝津國尼崎に敗れた時、彈正は敵二人を兩腋に挾んで海に飛び込んで死んだ。彈正の子市兵衞は河内の八隅家に仕へて一時八隅と稱したが、竹内越を領することになつて、竹内と改めた。竹内市兵衞の子吉兵衞は小西行長に仕へて、紀伊國太田の城を水攻にした時の功で、豐臣太閤に白練に朱の日の丸の陣羽織を貰つた。朝鮮征伐の時には小西家の人質として、李王宮に三年押し籠められてゐた。小西家が滅びてから、加藤淸正に千石で召し出されてゐたが、主君と物爭をして白晝に熊本城下を立ち退いた。加藤家の討手に備へるために、鐵砲に玉を籠め、火繩に火を附けて持たせて退いた。それを三齋が豐前で千石に召し抱へた。此吉兵衞に五人の男子があつた。長男は矢張吉兵衞と名告つたが、後剃髮して八隅見山と云つた。二男は七郎右衞門、三男は次郎太夫、四男は八

兵衛、五男が即ち數馬である。

數馬は忠利の兒小姓を勤めて、島原征伐の時殿樣の側にゐた。寛永十五年二月二十五日細川の手のものが城を乘り取らうとした時、數馬が「どうぞお先手へお遣し下されい」と忠利に願つた。忠利は聽かなかつた。押し返してねだるやうに願ふと、忠利が立腹して、「小伜、勝手にうせをれ」と叫んだ。數馬は其時十六歳である。「あつ」と云ひさま駈け出すのを見送つて、忠利が「怪我をするなよ」と聲を掛けた。乙名島徳右衞門、草履取一人、槍持一人が跡から續いた。主從四人である。城から打ち出す鐵砲が烈しいので、島が數馬の着てゐた猩々緋の陣羽織の裾を攫んで跡へ引いた。數馬は振り切つて城の石垣に攀ぢ登る。島も是非なく附いて登る。とうとう城内に這入つて働いて、數馬は手を負つた。同じ場所から攻め入つた柳川の立花飛彈守宗茂は七十二歳の古武者で、此時の働振を見てゐたが、渡邊新彌、仲光内膳と數馬との三人が天晴であつたと云つて、三人へ連名の感狀を遣つた。落城の後、忠利は數馬に關兼光の脇差を遣つて、祿を千百五十石に加增した。脇差は一尺八寸、直燒無銘、横鑢、銀の九曜の三並の目貫、赤銅縁金拵である。目貫の穴は二つあつて、一つは鉛で塡めてあつた。忠利は此脇差を祕藏してゐたので、數馬に遣つてからも、登城の時などには、「數馬あの脇差を貸せ」と云つて、借りて差したことも度々ある。

光尚に阿部の討手を言ひ附けられて、數馬が喜んで詰所へ下がると、傍輩の一人が囁いた。

「奸物にも取柄はある。おぬしに表門の采配を振らせるとは、林殿にしては好く出來た。」

數馬は耳を欹てた。「なに此度のお役目は外記が申し上げて仰せ附けられたのか。」

「さうぢや。外記殿が殿樣に言はれた。數馬は御先代が出格のお取立をなされたものぢや。御恩報じにあれをお遣りなされいと云はれた。物怪の幸ではないか。」

「ふん」と云つた數馬の眉間には、深い皺が刻まれた。「好いわ。討死するまでの事ぢや。」かう言ひ放つて、數馬はついと起つて館を下がつた。

此時の數馬の樣子を忠利が聞いて、竹内の屋敷へ使を遣つて、「怪我をせぬやうに、首尾好くいたして參れ」と云はせた。數馬は「難有いお詞を慥かに承つたと申し上げて下されい」と云つた。

數馬は傍輩の口から、外記が自分を推して此度の役に當らせたのだと聞くや否や、即時に討死をしようと決心した。それがどうしても動かすことの出來ぬ程堅固な決心であつた。外記は御恩報じをさせると云つたと云ふことである。此詞は圖らず聞いたのであるが、實は聞くまでも無い、外記が薦めるには、さう云つて薦めるに極まつてゐる。かう思ふと、數馬は立つても据わつてもゐられぬやうな氣がする。自分は御先代の引立を蒙つたには違ひない。併し元服をしてから後の自分は、謂はば大勢の近習の中の一人で、別に出色のお扱を受けてはゐない。御恩には誰も浴してゐる。御恩報じを自分に限つてしなくてはならぬと言ふのは、どう云ふ意味か。言ふまでも無い、自分は殉死する筈であつたのに、殉死しなかつたから、命掛の場所に遣ると云ふのである。命は何時でも喜んで棄てるが、前にしおくれた殉死の代りに死なうとは思はない。今命を惜まぬ自分が、なんで御先代の中陰の果の日に命を惜んだであらう。謂はれの無い事である。畢竟どれ丈の御入懇になつた人が殉死すると云ふ、はつきりした境は無い。同じやうに勤めてゐた御近習の若侍の中に殉死の沙汰が無いので、自分もながらへてゐた。殉死して好い事なら、自分は誰よりも先にする。それ程の事は誰の目にも見えてゐるやうに思つ

てゐた。それに疾うにする筈の殉死をせずにゐた人間として極印を打たれたのは、かへすがへすも口惜しい。自分は雪ぐことの出來ぬ汚れを身に受けた。それ程の辱を人に加へる事は、あの外記でなくては出來まい。外記としてはさもあるべき事である。併し殿樣がなぜそれをお聽納になつたか。外記に辱められたのは忍ぶことも出來よう。殿樣に棄てられたのは忍ぶことが出來ない。島原で城に乘り入らうとした時、御先代がお呼止なされた。それはお馬廻りのものがわざと先手に加はるのをお止めなされたのである。此度御當主の怪我をするなと仰やるのは、それとは違ふ。惜しい命をいたはれと仰やるのである。それがなんの難有からう。古い創の上を新に鞭うたれるやうなものである。只一刻も早く死にたい。死んで雪がれる汚れではないが、死にたい、犬死でも好いから、死にたい。

數馬はかう思ふと、矢も楯も溜まらない。そこで妻子には阿部の討手を仰せ附けられたとだけ、手短に言ひ聞せて、一人ひたすら支度を急いだ。殉死した人達は皆安堵して死に就くと云ふ心持でゐたのに、數馬が心持は苦痛を逃れるために死を急ぐのである。乙名島徳右衛門が事情を察して、主人と同じ決心をした外には、一家のうちに數馬の心底を汲み知つたものが無い。今年二十一歳になる數馬の所へ、去年來たばかりのまだ娘らしい女房は、當歳の女の子を抱いてうろうろしてゐるばかりである。

あすは討入と云ふ四月二十日の夜、數馬は行水を使つて、月題を剃つて、髪には忠利に拜領した名香初音を焚き込めた。白無垢に白襷、白鉢巻をして、肩に合印の角取紙を附けた。腰に帶びた刀は二尺四寸五分の正盛で、先祖島村彈正が尼崎で討死した時、故郷に送つた記念である。それに初陣の時拜領した兼光を差し添へた。門口には馬が嘶いてゐる。

手槍を取つて庭に降り立つ時、數馬は草鞋の緒を男結にして、餘つた緒を小刀で切つて捨てた。

阿部の屋敷の裏門に向ふことになつた高見權右衛門は本と和田氏で、近江國和田に住んだ和田但馬守の裔である。初は蒲生賢秀に隨つてゐたが、和田庄五郎の代に細川家に仕へた。庄五郎は岐阜、關原の戰に功のあつたものである。忠利の兄與一郎忠隆の下に附いてゐたので、忠隆が慶長五年大阪で妻前田氏の早く落ち延びたために父の勘氣を受け、入道休無となつて流浪した時、高野山や京都まで供をした。それを三齋が小倉へ呼び寄せて、高見氏を名告らせ、番頭にした。知行五百石であつた。庄五郎の子が權右衛門である。島原の戰に功があつたが、軍令に背いた廉で、一旦役を召し上げられた。それが暫くしてから歸參して側者頭になつてゐたのである。權右衛門は討入の支度の時黑羽二重の紋附を着て、兼て秘藏してゐた備前長船の刀を取り出して帶びた。そして十文字の槍を持つて出た。

竹内數馬の手に島徳右衛門があるやうに、高見權右衛門は一人の小姓を連れてゐる。阿部一族の事のあつた二三年前の夏の日に、此小姓は非番で部屋に晝寝をしてゐた。そこへ相役の一人が供先から歸つて眞裸になつて、手桶を提げて井戸へ水を汲みに行き掛けたが、ふと此小姓の寢てゐるのを見て、「己がお供から歸つたに、水も汲んでくれずに寢てをるかい」と云ひざまに枕を蹴つた。小姓は跳ね起きた。

「なる程目が醒めてをつたら、水も汲んで遣らう。ぢやが枕を足蹴にすると云ふことがあるか。此儘には濟まんぞ。」かう云つて抜打に相役を大袈裟に切つた。

小姓は靜かに相役の胸の上に跨がつて止めを刺して、乙名小屋へ往つて仔細を話した。「即座に死ぬる筈でござりましたが、御不審もあらうかと存じまして」と、刀を拭いで切腹しようとした。乙名が「先づ待て」と云つて權右衛門に告げた。權右衛門はまだ役所から下がつて、衣服も改めずにゐたので、其儘館へ出て忠利に申し上げた。忠利は「尤の事ぢや、切腹には及ばぬ」と云つた。此時から小姓は權右衛門に命を捧げて奉公してゐるのである。

小姓は籙を負ひ半弓を取つて、主の傍に引き添つた。

寛文十九年四月二十一日は麥秋に好くある薄曇の日であつた。

阿部一族の立て籠つてゐる山崎の屋敷に討ち入らうとして、竹内數馬の手のものは拂曉に表門の前に來た。夜通し鉦太鼓を鳴らしてゐた屋敷の内が、今はひつそりとして空屋かと思はれる程である。門の扉は鎖してある。板塀の上に二三尺伸びてゐる夾竹桃の木末には、蜘のいが掛かつてゐて、それに夜露が眞珠のやうに光つてゐる。燕が一羽どこからか飛んで來て、つと塀の内に入つた。

數馬は馬を乘り放つて降り立つて、暫く樣子を見てゐたが、「門を開けい」と云つた。足輕が二人塀を乘り越して内に這入つた。門の扉には敵は一人もゐないので、錠前を打ちこはして貫の木を拔いた。

隣家の柄本又七郎は數馬の手のものが門を開ける物音を聞いて、前夜結び繩を切つて置いた竹垣を踏み破つて、駈け込んだ。毎日のやうに往來して、隅々まで案内を知つてゐる家である。手槍を構へて臺所の口から、つと這入つた。座敷の戸を締め切つて、踏み入る討手のものを一人一人討ち取らうとして控へてゐた一族の中で、裏口に人のけはひのするのに、先づ氣の附いたのは彌五兵衛である。これも手槍を提げて臺所へ見に出た。

二人は槍の穗先と穗先とが觸れ合ふ程に相對した。「や、又七郎か」と、彌五兵衛が聲を掛けた。

「おう。兼ての廣言がある。おぬしが槍の手並を見に來た。」

「好うわせた。さあ。」

二人は一歩しざつて槍を交へた。暫く戰つたが、槍術は又七郎の方が優れてゐたので、彌五兵衛の胸板をしたたかに衝き拔いた。彌五兵衛は槍をからりと棄てて、座敷の方へ引かうとした。

「卑怯ぢや。引くな。」又七郎が叫んだ。

「いや逃げはせぬ。腹を切るのぢや。」言ひ棄てて座敷に這入つた。

その刹那に「をぢ樣、お相手」と叫んで、前髪の七之丞が電光の如くに飛んで出て、又七郎の太股を衝いた。入懇の彌五兵衛に深手を負はせて、覺えず氣が弛んでゐたので、手練の又七郎も少年の手に掛かつたのである。又七郎は槍を棄てて其場に倒れた。

數馬は門内に入つて人數を屋敷の隅々に配つた。さて眞つ先に玄關に進んで見ると、正面の板戸が細目に開けてある。數馬が其戸に手を掛けようとすると、島德右衛門が押し隔てて、詞せはしく囁いた。

「お待なさりませ。殿は今日の總大將ぢや。某がお先をいたします。」

德右衛門は戸をがらりと開けて飛び込んだ。待ち構へてゐた市太夫の槍に、德右衛門は右の目を衝かれてよろよろと數馬に倒れ掛かつた。「邪魔ぢや。」數馬は德右衛門を押し退けて進んだ。市太夫、五太夫の槍が左右のひはらを衝き拔いた。

添島九兵衞、野村庄兵衞が續いて驅け込んだ。徳右衞門も痛手に屈せず取つて返した。

此時裏門を押し破つて這入つた高見權右衞門は十文字槍を揮つて、阿部の家隷共を衝きまくつて座敷に來た。千場作兵衞も續いて籠み入つた。

裏表二手のもの共が入り違へて、をめき叫んで衝いて來る。障子襖は取り拂つてあつても、三十疊に足らぬ座敷である。市街戰の慘状が野戰より甚だしいと同じ道理で、皿に盛られた百蟲の相啖ふにも譬へつべく、目も當てられぬ有樣である。

市太夫、五太夫は相手嫌はず槍を交へてゐるうち、全身に數へられぬ程の創を受けた。それでも屈せずに、槍を棄てて刀を拔いて切り廻つてゐる。七之丞はいつの間にか倒れてゐる。

太股を衝かれた柄本又七郎が臺所に伏してゐると、高見の手のものが見て、「手をお負なされたな、お見事ぢや、早うお引きなされい」と云つて、奥へ通り拔けた。

「引く足があれば、わしも奥へ這入るが」と、又七郎は苦々しげに云つて齒咬をした。そこへ主の跡を慕つて入り込んだ家隷の一人が驅け附けて、肩に掛けて退いた。

今一人の柄本家の被官天草平九郎と云ふものは、主の退口を守つて、半弓を以て目に掛かる敵を射てゐたが、其場で討死した。

竹内數馬の手では島徳右衞門が先づ死んで、次いで小頭添島九兵衞が死んだ。

高見權右衞門が十文字槍を揮つて働く間、半弓を持つた小姓はいつも槍脇を詰めて敵を射てゐたが、後には刀を拔いて切つて廻つた。ふと見れば鐵砲で權右衞門をねらつてゐるものがある。

「あの丸はわたくしが受け止めます」と云つて、小姓が權右衞門の前に立つと、丸が來て中つた。小姓は即死した。竹内の組から拔いて高見に附けられた小頭千場作兵衞は重手を負つて臺所に出て、水瓶の水を呑んだが、其儘そこにへたばつてゐた。

阿部一族は最初に彌五兵衞が切腹して、市太夫、五太夫、七之丞はとうとう皆深手に息が切れた。家隷も多くは討死した。

高見權右衞門は裏表の人數を集めて、阿部が屋敷の裏手にあつた物置小屋を崩させて、それに火を掛けた。風のない日の薄曇の空に、烟が眞つ直に升つて、遠方から見えた。それから火を踏み消して、跡を水でしめして引き上げた。臺所にゐた千場作兵衞、其外重手を負つたものは家隷や傍輩が肩に掛けて續いた。時刻は丁度未の刻であつた。

光尚は度々家中の主立つたものの家へ遊びに往くことがあつたが、阿部一族を討ちに遣つた二十一日の日には、松野左京の屋敷へ払曉から出掛けた。

館のあるお花畠からは、山崎はすぐ向うになつてゐるので、光尚が館を出る時、阿部の屋敷の方角に人聲物音がするのが聞えた。

「今討入つたな」と云つて、光尚は駕籠に乘つた。

駕籠がやうやう一町ばかり行つた時、注進があつた。竹内數馬が討死をしたことは、此時分かつた。

高見權右衞門は討手の總勢を率ゐて、光尚のゐる松野の屋敷の前まで引き上げて、阿部の一族を殘らず討ち取つたことを執奏して貰つた。光尚はぢきに逢はうと云つて、權右衞門を書院の庭に廻らせた。

丁度卯の花の眞つ白に咲いてゐる垣の間に、小さい枝折戸のあるのを開けて這入つて、權右衞門は芝生の上に突居た。光尚が見て「手を負つたな、一段骨折であつた」と聲を掛けた。

黑羽二重の衣服が血みどれになつて、それに引上の時小屋の火を踏み消した時飛び散つた炭や灰がまだらに附いてゐたのである。

「いえ。かすり創でござりまする。」權右衛門は何者かに水落をしたたかに衝かれたが、懐中してゐた鏡に中つて穂先がそれた。創は僅かに血を鼻紙ににじませた丈である。

權右衛門は討入の時の銘々の働きを精しく言上して、第一の功を單身で彌五兵衛に深手を負はせた隣家の柄本又七郎に讓つた。

「數馬はどうぢやつた。」

「表門から一足先に駈け込みましたので見届けません。」

「さやうか。皆のものに庭へ這入れと云へ。」

權右衛門が一同を呼び入れた。重手で自宅へ舁いて行かれた人達の外は、皆芝生に平伏した。働いたものは血によごれてゐる。小屋を焼く手傳ばかりしたものは、灰ばかりあびてゐる。その灰ばかりあびた中に、畑十太夫がゐた。光尚が聲を掛けた。

「十太夫。そちの働きはどうぢやつた。」

「はつ」と云つたきり黙つて伏してゐた。十太夫は大兵の臆病者で、阿部が屋敷の外をうろついてゐて、引上の前に小屋に火を掛けた時、やつとおづおづ這入つたのである。最初討手を仰せ附けられた時に、お次へ出る所を鎗術者新免武藏が見て、「冥加至極の事ぢや、隨分お手柄をなされい」と云つて背中をぽんと打つた。十太夫は色を失つて、弛んでゐた袴の紐を締め直さうとしたが、手が震へて締まらなかつたさうである。

光尚は座を起つ時云つた。「皆出精であつたぞ。歸つて休息いたせ。」

竹内數馬の幼い娘には養子をさせて家督相續を許されたが、此家は後に絶えた。高見權右衛門は三百石、千場作兵衛、野村庄兵衛は各五十石の加増を受けた。柄本又七郎へは米田監物が承つて組頭谷内藏之允を使者に遣つて、賞詞があつた。親戚朋友がよろこびを言ひに來ると、又七郎は笑つて、「元龜天正の頃は、城攻野合せが朝夕の飯同様であつた、阿部一族討取りなぞは茶の子の茶の子の朝茶の子ぢや」と云つた。二年立つて、正保元年の夏、又七郎は創が癒えて光尚に拜謁した。光尚は鐵砲十挺を預けて「創が根治するやうに湯治がしたくばいたせ、又府外に別莊地を遣すから、場所を望め」と云つた。又七郎は益城小池村に屋敷地を貰つた。その背後が藪山である。「藪山も遣さうか」と、光尚が云はせた。又七郎はそれを辭退した。竹は平日も御用に立つ。戰争でもあると、竹束が澤山いる。それを私に拜領しては、氣が濟まぬと云ふのである。そこで藪山は、永代御預けと云ふことになつた。

畑十太夫は追放せられた。竹内數馬の兄八兵衛は私に討手に加はりながら、弟の討死の場所に居合せなかつたので、閉門を仰せ附けられた。又馬廻の子で近習を勤めて居た某は、阿部の屋敷に近く住まつてゐたので、「火の用心をいたせ」と云つて當番を免され、父と一しょに屋根に上つて火の子を消してゐた。後に切角當番を免された思召に背いたと心附いてお暇を願つたが、光尚は「それは臆病では無い、以後は少し氣を附けるが好いぞ」と云つて、其儘勤めさせた。此近習は光尚の亡くなつた時殉死した。

阿部一族の死骸は井出の口に引き出して、吟味せられた。白川で一人一人の創を洗つて見た時、柄本又七郎の槍に胸板を衝き抜かれた彌五兵衛の創は、誰の受けた創よりも立派であつたので、又七郎はいよいよ面目を施した。

山椒大夫

越後の春日を經て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、「もうぢきにお宿にお著なさいます」と云つて勵まして歩かせようとする。二人の中で、姉娘は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも氣が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに彈力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐甲斐しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の斷えたり續いたりする間を通つてゐる。砂や小石は多いが、秋日和に好く乾いて、しかも粘土が雜つてゐるために、好く固まつてゐて、海の傍のやうに踝を埋めて人を惱ますことはない。

藁葺の家が何軒も立ち竝んだ一構が柞の林に圍まれて、それに夕日がかつと差してゐる處に通り掛かつた。

「まああの美しい紅葉を御覽」と、先に立つてゐた母が指さして子供に言つた。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも云はぬので、女中が云つた。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね。」

姉娘が突然弟を顧みて云つた。「早くお父う樣の入らつしやる處へ往きたいわね。」

「姉えさん。まだなかなか往かれはしないよ。」弟は賢しげに答へた。

母が諭すやうに云つた。「さうですとも。今まで越して來たやうな山を澤山越して、河や海をお船で度々渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出して大人しく歩かなくては。」

「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は云つた。

一群は暫く默つて歩いた。

向うから空桶を擔いで來る女がある。濱から歸る潮汲女である。

それに女中が聲を掛けた。「申し申し。此邊に旅の宿をする家はありませんか。」

潮汲女は足を駐めて、主從四人の群を見渡した。そしてかう云つた。「まあ、お氣の毒な。生憎な所で日が暮れますね。此土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません。」

女中が云つた。「それは本當ですか。どうしてそんなに人氣が惡いのでせう。」

二人の子供は、はづんで來る對話の調子を氣にして、潮汲女の傍へ寄つたので、女中と三人で女を取り卷いた形になつた。

潮汲女は云つた。「いゝえ。信者が多くて人氣の好い土地ですが、國守の掟だから爲方がありません。もうあそこに」と言ひさして、女は今來た道を指さした。「もうあそこに見えてゐますが、あの橋までお出でなさると、高札が立つてゐます。それに精しく書いてあるさうですが、近頃惡い人買が此邊を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお咎があります。あたり七軒卷添になるさうです。」

「それは困りますね。子供衆もお出なさるし、

もうさう遠くまでは行かれません。どうにか爲様はありますまいか。」

「さうですね。わたしの通ふ鹽濱のあるあたりまで、あなた方がお出なさると、夜になつてしまひませう。どうもそこらで好い所を見附けて、野宿をなさるより外、爲方がありますまい。わたしの思案では、あそこの橋の下にお休なさるが好いでせう。岸の石垣にぴつたり寄せて、河原に大きい材木が澤山立ててあります。荒川の上から流して來た材木です。晝間は其下で子供が遊んでゐますが、奥の方には日も差さず、暗くなつてゐる所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはかうして毎日通ふ鹽濱の持主の所にゐます。ついそこの柞の森の中です。夜になつたら、藁や薦を持つて往つてあげませう。」

子供等の母は一人離れて立つて、此話を聞いてゐたが、此時潮波女の傍に進み寄つて云つた。「好い方に出逢ひましたのは、わたし共の爲合せでございます。そこへ往つて休みませう。どうぞ藁や薦をお借申したうございます。せめて子供達にでも敷かせたり被せたりいたしたうございます。」

潮波女は受け合つて、柞の林の方へ歸つて行く。主從四人は橋のある方へ急いだ。

荒川に掛け渡した應化橋の袂に一群は來た。潮波女の云つた通に、新しい高札が立つてゐる。書いてある國守の掟も、女の詞に違はない。

人買が立ち廻るなら、其人買の詮議をしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷はせるやうな掟を、國守はなぜ定めたものか。不束な世話の焼きやうである。併し昔の人の目には掟である。子供等の母は只さう云ふ掟のある土地に來合せた運命を歎くだけで、掟の善惡は思はない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通ふ道がある。そこから一群は河原に降りた。なる程大層な材木が石垣に立て掛けてある。一群は石垣に沿うて材木の下へ潛つて這入つた。男の子は面白がつて、先に立つて勇んで這入つた。

奥深く潛つて這入ると、洞穴のやうになつた所がある。下には大きい材木が横になつてゐるので、床を張つたやうである。

男の子が先に立つて、横になつてゐる材木の上に乘つて、一番隅へ這入つて、「姉えさん、早くお出なさい」と呼ぶ。

姉娘はおそるおそる弟の傍へ往つた。

「まあ、お待遊ばせ」と女中が云つて、背に負つてゐた包を卸した。そして着換の衣類を出して、子供を脇へ寄らせて、隅の處に敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が左右から縋り附いた。岩代の信夫郡の住家を出て、親子はここまで來るうちに、家の中ではあつても、此材木の蔭より外らしい所に寢たことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさ程苦にはしない。

女中の包から出したのは衣類ばかりではない。用心に持つてゐる食物もある。女中はそれを親子の前に出して置いて云つた。「ここでは焚火をいたすことは出來ません。若し惡い人に見附けられてはならぬからでございます。あの鹽濱の持主とやらの家まで往つて、お湯を貰つてまゐりませう。そして藁や薦の事も頼んでまゐりませう。」

女中はまめまめしく出て行つた。子供は樂しげに粔籹やら、乾した果やらを食べはじめた。

暫くすると、此材木の蔭へ人の這入つて來る足音がした。「姥竹かい」と母親が聲を掛けた。

併し心の内には、柞の森まで往つて來たにしては、餘り早いと疑つた。姥竹と云ふのは女中の名である。

這入つて來たのは四十歳ばかりの男である。骨組の逞しい、筋肉が一つ一つ肌の上から數へられる程、脂肪の少い人で、牙彫の人形のやうな顏に笑を湛へて、手に數珠を持つてゐる。我家を歩くやうな、慣れた歩附をして、親子の潛んでゐる處へ進み寄つた。そして親子の座席にしてゐる材木の端に腰を掛けた。

親子は只驚いて見てゐる。仇をしさうな樣子も見えぬので、恐ろしいとも思はぬのである。

男はこんな事を言ふ。「わしは山岡大夫と云ふ船乘ぢや。此頃此土地を人買が立ち廻ると云ふので、國守が旅人に宿を貸すことを差し止めた。人買を摑まへることは、國守の手に合はぬと見える。氣の毒なは旅人ぢや。そこでわしは旅人を救うて遣らうと思ひ立つた。さいはひわしが家は街道を離れてゐるので、こつそり人を留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人の野宿をしさうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これまで大勢の人を連れて歸つた。見れば子供衆が菓子を食べてゐなさるが、そんな物は腹の足しにはならいで、齒に障る。わしが所ではさしたる饗應はせぬが、芋粥でも進ぜませう。どうぞ遠慮せずに來て下されい。」男は强ひて誘ふでもなく、獨言のやうに言つたのである。

子供の母はつくづく聞いてゐたが、世間の掟に背いてまでも人を救はうと云ふ難有い志に感ぜずにはゐられなかつた。そこでかう云つた。「承はれば殊勝なお心掛と存じます。貸すなと云ふ掟のある宿を借りて、ひよつと宿主に難儀を掛けようかと、それが氣掛かりではございますが、わたくしは兎も角も、子供等に溫い粥でも食べさせて、屋根の下に休ませることとが出來ましたら、其御恩は後の世までも忘れますまい。」

山岡大夫は頷いた。「さてさて好う物のわかる御婦人ぢや。そんならすぐに案内をして進ぜませう。」かう云つて立ちさうにした。

母親は氣の毒さうに云つた。「どうぞ少しお待下さいませ。わたくし共三人がお世話になるさへ心苦しうございますのに、こんな事を申すのはいかがと存じますが、實は今一人連がございます。」

山岡大夫は耳を欹てた。「連がおありなさる。それは男か女子か。」

「子供達の世話をさせに連れて出た女中でございます。湯を貰ふと申して、街道を三四町跡へ引き返してまゐりました。もう程なく歸つてまゐりませう。」

「お女中かな。そんなら待つて進ぜませう。」山岡大夫の落ち著いた、底の知れぬやうな顏に、なぜか喜の影が見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ米山の背後に隱れてゐた、紺青のやうな海の上には薄い靄が掛かつてゐる。

一群の客を舟に載せて纜を解いてゐる船頭がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊つた主從四人の旅人である。

應化橋の下で山岡大夫に出逢つた母親と子供二人とは、女中姥竹が缺け損じた瓶子に湯を貰つて歸るのを待ち受けて、大夫に連れられて宿を借りに往つた。姥竹は不安らしい顏をしながら附いて行つた。大夫は街道を南へ這入つた松林の中の草の家に四人を留めて、芋粥を進めた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。草臥れた子供等を先へ寢させて、母は宿の主人に身の上のおほよそを、微かな燈火の下で話した。

自分は岩代のものである。夫が筑紫へ往つて歸らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生れた時から守をしてくれた女中で、身寄のないものゆゑ、遠い、覺束ない旅の伴をすることになつたと話したのである。

さてここまでは來たが、筑紫の果へ往くことを思へば、まだ家を出たばかりと云つても好い。これから陸を行つたものであらうか。又は船路を行つたものであらうか。主人は船乘であつて見れば、定めて遠國の事も知つてゐるだらう。どうぞ教へて貰ひたいと、子供等の母が賴んだ。

大夫は知れ切つた事を問はれたやうに、少しもためらはずに船路を行くことを勸めた。陸を行けば、ぢき隣の越中の國に入る界にさへ、親不知子不知の難所がある。削り立てたやうな巖石の裾には荒浪が打ち寄せる。旅人は横穴に這入つて、波の引くのを待つてゐて、狭い巖石の下の道を走り拔ける。其時は親は子を顧みることが出來ず子も親を顧みることが出來ない。それは海邊の難所である。又山を越えると、踏まへた石が一つ搖げば、千尋の谷底に落ちるやうな、あぶない山道もある。西國へ往くまでにはどれ程の難所があるか知れない。それとは違つて、船路は安全なものである。慥な船頭にさへ賴めば、ゐながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西國まで往くことは出來ぬが、諸國の船頭を知つてゐるから、船に載せて出て、西國へ往く舟に乘り換へさせることが出來る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに云つた。

夜が明け掛かると、大夫は主從四人をせき立てて家を出た。其時子供等の母は小さい嚢から金を出して、宿賃を拂はうとした。大夫は留めて、宿賃は貰はぬ、併し金の入れてある大切な嚢は預つて置かうと云つた。なんでも大切な品は、宿に着けば宿の主人に、舟に乘れば舟の主に預けるものだと云ふのである。

子供等の母は最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言ふ事を聽かなくてはならぬやうな勢になつた。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを、難有くは思つても、何事によらず言ふが儘になる程、大夫を信じてはゐない。かう云ふ勢になつたのは、大夫の詞に人を押し附ける強みがあつて、母親はそれに抗ふことが出來ぬからである。その抗ふことの出來ぬのは、どこか恐ろしい處があるからである。併し母親は自分が大夫を恐れてゐるとは思つてゐない。自分の心がはつきりわかつてゐない。

母親は餘儀ない事をするやうな心持で舟に乘つた。子供等は凪いだ海の、青い氈を敷いたやうな面を見て、物珍しさに胸を跳らせて乘つた。只姥竹が顔には、きのふ橋の下を立ち去つた時から、今舟に乘る時まで、不安の色が消え失せなかつた。

山岡大夫は纜を解いた。篙で岸を一押押すと、舟は搖めきつつ浮び出た。

山岡大夫は暫く岸に沿うて南へ、越中境の方角へ漕いで行く。靄は見る見る消えて、波が日に赫く。

人家のない岩蔭に、波が砂を洗つて、海松や荒布を打ち上げてゐる處があつた。そこに舟が二艘止まつてゐる。船頭が大夫を見て呼び掛けた。

「どうぢや。あるか。」

大夫は右の手を擧げて、大拇を折つて見せた。そして自分もそこへ舟を舫つた。大拇だけ折つたのは、四人あると云ふ相圖である。

前からゐた船頭の一人は宮崎の三郎と云つて、越中宮崎のものである。左の手の拳を開

いて見せた。右の手が貨の相圖になるやうに、左の手は錢の相圖になる。これは五貫文に附けたのである。

「氣張るぞ」と今一人の船頭が云つて、左の臂をつと伸べて、一度拳を開いて見せ、次いで示指を竪てて見せた。此男は佐渡の二郎で六貫文に附けたのである。

「横着者奴」と宮崎が叫んで立ち掛かれば、「出し拔かうとしたのはおぬしぢや」と佐渡が身構をする。二艘の舟がかしいで、舷が水を笞つた。

大夫は二人の船頭の顏を冷かに見較べた。「慌てるな。どつちも空手では還さぬ。お客様が御窮屈でないやうに、お二人づつ分けて進ぜる。賃錢は跡で附けた値段の割ぢや。」から云つて置いて、大夫は客を顧みた「さあ、お二人づつあの舟へお乘なされ。どれも西國への便船ぢや。舟足と云ふものは、重過ぎては走りが惡い。」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手を執つて乘り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾緡かの錢を握らせたのである。

「あの、主人にお預けなされた嚢は」と、姥竹が主の袖を引く時、山岡大夫は空舟をつと押し出した。

「わしはこれでお暇をする。慥かな手から慥かな手へ渡すまでがわしの役ぢや。御機嫌好うお越しなされ。」

艪の音が忙しく響いて、山岡大夫の舟は見る見る遠ざかつて行く。

母親は佐渡に云つた。「同じ道を漕いで行つて、同じ港に着くのでございませうね。」

佐渡と宮崎とは顏を見合せて、聲を立てて笑つた。そして佐渡が云つた。「乘る舟は弘誓の舟、著くは同じ彼岸と、蓮華峰寺の和尚が云うたげな。」

二人の船頭はそれ切り默つて舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼びかはす親子主從は、只遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂ほしげに舷に手を掛けて伸び上がつた。「もう爲方がない。これが別だよ。安壽は守本尊の地藏樣を大切におし。厨子王はお父樣の下さつた護刀を大切におし。どうぞ二人が離れぬやうに。」安壽は姉娘、厨子王は弟の名である。

子供は只「お母あ樣、お母あ樣」と呼ぶばかりである。

舟と舟とは次第に遠ざかる。後には餌を待つ雛のやうに、二人の子供が開いた口が見えてゐて、もう聲は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「申し船頭さん、申し申し」と聲を掛けてゐたが、佐渡は構はぬので、とうとう赤松の幹のやうな脚に縋つた。「船頭さん。これはどうした事でございます。あのお孃樣、若樣に別れて、生きてどこへ往かれませう。奥樣も同じ事でございます。これから何をたよりにお暮らしなさいませう。どうぞあの舟の往く方へ漕いで行つて下さいまし。後生でございます。」

「うるさい」と佐渡は後樣に蹴つた。姥竹は舟笭に倒れた。髮は亂れて舷に掛かつた。

姥竹は身を起した。「ええ。これまでぢや。奥樣、御免下さいまし。」から云つて眞つ逆樣に海に飛び込んだ。

「こら」と云つて船頭は臂を差し伸ばしたが、間に合はなかつた。

母親は袿を脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございますが、お世話になつたお禮に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します。」から云つて舷に手を掛けた。

「たはけが」と、佐渡は髮を攫んで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事な貨ぢや。」

佐渡の二郎は楽綾を引き出して、母親をくるくる卷にして轉がした。そして北へ北へと漕いで行つた。

「お母あ樣お母あ樣」と呼び續けてゐる姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走つて行く。

「もう呼ぶな」と宮崎が叱つた。「水の底の鱗介には聞えても、あの女子には聞えぬ。女子共は佐渡へ渡つて粟の鳥でも逐はせられることぢやらう。」

姉の安壽と弟の厨子王とは抱き合つて泣いてゐる。故郷を離れるも、遠い旅をするも母と一しよにすることだと思つてゐたのに、今料らずも引き分けられて、二人はどうして好いかわからない。只悲しさばかりが胸に溢れて、此別が自分達の身の上をどれだけ變らせるか、其程さへ辨へられぬのである。

午になつて宮崎は餅を出して食つた。そして安壽と厨子王とにも一つ宛くれた。二人は餅を手に持つて食べようともせず、目を見合せて泣いた。夜は宮崎が被せた苫の下で、泣きながら寐入つた。

かうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越中、能登、越前、若狹の津々浦々を賣り歩いたのである。

併し二人が穉いのに、體もか弱く見えるので、なかなか買はうと云ふものがない。たまに買手があつても、値段の相談が調はない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまでも泣くか」と二人を打つやうになつた。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良の港に來た。ここには石浦と云ふ處に大きい邸を構へて、田畑に米麥を植ゑさせ、山では獵をさせ、海では漁をさせ、蠶飼をさせ、機織をさせ、金物、陶物、木の器、何から何まで、それぞれの職人を使つて造らせる山椒大夫と云ふ分限者がゐて、人なら幾らでも買ふ。宮崎はこれまでも、餘所に買手のない貨があると、山椒大夫の所へ持つて來ることになつてゐた。

港に出張つてゐた大夫の奴頭は、安壽、厨子王をすぐに七貫文に買つた。

「やれやれ、餓鬼共を片附けて身が輕うなつた」と云つて、宮崎の三郎は受け取つた錢を懷に入れた。そして波止場の酒店に這入つた。

一抱に餘る柱を立て竝べて造つた大廈の奧深い廣間に一間四方の爐を切らせて、炭火がおこしてある。其向に茵を三枚疊ねて敷いて、山椒大夫は几に靠れてゐる。左右には二郎、三郎の二人の息子が狛犬のやうに列んでゐる。もと大夫には三人の男子があつたが、太郎は十六歲の時、逃亡を企てて捕へられた奴に、父が手づから烙印をするのをぢつと見てゐて、一言も物を言はずに、ふいと家を出て行方が知れなくなつた。今から十九年前の事である。

奴頭が安壽、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辭儀をせいと云つた。

二人の子供は奴頭の詞が耳に入らぬらしく、只目を睜つて大夫を見てゐる。今年六十歲になる大夫の、朱を塗つたやうな顏は、額が廣く腭が張つて、髮も鬚も銀色に光つてゐる。子供等は恐ろしいよりは不思議がつて、ぢつと其顏を見てゐるのである。

大夫は云つた。「買うて來た子供はそれか。いつも買ふ奴と違うて、何に使うて好いかわからぬ、珍らしい子供ぢやと云ふから、わざわざ

連れて來させて見れば、色の蒼ざめた、か細い童共ぢや。何に使うて好いかは、わしにもわからぬ。」

傍から三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十になつてゐる。「いやお父つさん。さつきから見てゐれば、辭儀をせいと云はれても辭儀もせぬ。外の奴のやうに名告もせぬ。弱々しう見えてもしぶとい者共ぢや。奉公初は男が柴刈、女が潮汲と極まつてゐる。其通にさせなされい。」

「仰やるとほり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が云つた。

大夫は嘲笑つた。「愚者と見える。名はわしが附けて遣る。姉はいたつきを垣衣、弟は我名を萱草ぢや。垣衣は濱へ往つて、日に三荷の潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を刈れ。弱々しい體に免じて、荷を輕うして取らせる。」

三郎が云つた。「過分のいたはり樣ぢや。こりや、奴頭。早く連れて下がつて道具を渡して遣れ。」

奴頭は二人の子供を新參小屋に連れて往つて、安壽には桶と杓、廚子王には鎌と籠を渡した。どちらにも午餉を入れる樏子が添へてある。新參小屋は外の奴婢の居所とは別になつてゐるのである。

奴頭が出て行く頃には、もうあたりが暗くなつた。此家には燈火もない。

翌日の朝はひどく寒かつた。ゆうべは小屋に備へてある衾が餘りきたないので、廚子王が薦を探して來て、舟で苫をかづいたやうに、二人でかづいて寢たのである。

きのふ奴頭に教へられたやうに、廚子王は樏子を持つて廚へ餉を受け取りに往つた。屋根の上、地にちらばつた藁の上には霜が降つてゐる。廚は大きい土間で、もう大勢の奴婢が來て待つてゐる。男と女とは受け取る場所が違ふのに、廚子王は姉のと自分のと貰はうとするので、一度は叱られたが、あすからは銘々が貰ひに來ると誓つて、やうやう樏子の外に、面桶に入れた饘と、木の椀に入れた湯との二人前をも受け取つた。饘は鹽を入れて炊いである。

姉と弟とは朝餉を食べながら、もうかうした身の上になつては、運命の下に項を屈めるより外はないと、けなげにも相談した。そして姉は濱邊へ、弟は山路をさして行くのである。大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を一しよに出て、二人は霜を履んで、見返り勝に左右へ別れた。

廚子王が登る山は由良が嶽の裾で、石浦からは少し南へ行つて登るのである。柴を刈る所は、麓から遠くはない。所々紫色の岩の露れてゐる所を通つて、稍廣い平地に出る。そこに雜木が茂つてゐるのである。

廚子王は雜木林の中に立つてあたりを見廻した。併し柴はどうして刈るものかと、暫くは手を着け兼ねて、朝日に霜の融け掛かる、茵のやうな落葉の上に、ぼんやりすわつて時を過した。やうやう氣を取り直して、一枝二枝刈るうちに、廚子王は指を傷めた。そこで又落葉の上にすわつて、山でさへこんなに寒い。濱邊に往つた姉樣は、さぞ潮風が寒からうと、ひとり涙をこぼしてゐた。

日が餘程昇つてから、柴を背負つて麓へ降りる、外の樵が通り掛かつて、「お前も大夫の所の奴か、柴は日に何荷刈るのか」と問うた。

「日に三荷刈る筈の柴を、まだ少しも刈りませぬ」と廚子王は正直に云つた。

「日に三荷の柴ならば、午までに二荷刈るが好い。柴はかうして刈るものぢや。」樵は我荷を

卸して置いて、すぐに一荷刈つてくれた。

厨子王は氣を取り直して、やうやう午までに一荷刈り、午から又一荷刈つた。

濱邊に往く姉の安壽は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立つたが、これも潮の汲みやうを知らない。心で心を勵まして、やうやう杓を卸すや否や、波が杓を取つて行つた。

隣で汲んでゐる女子が、手早く杓を拾つて戻した。そしてから云つた。「潮はそれでは汲まれません。どれ汲みやうを敎へて上げよう。右手の杓でかう汲んで、左手の桶でかう受ける。」とうとう一荷汲んでくれた。

「難有うございます。汲みやうが、あなたのお蔭で、わかつたやうでございます。自分で少し汲んで見ませう。」安壽は潮を汲み覺えた。

隣で汲んでゐる女子に、無邪氣な安壽が氣に入つた。二人は午餉を食べながら、身の上を打ち明けて、姉妹の誓をした。これは伊勢の小萩と云つて、二見が浦から買はれて來た女子である。

最初の日はこんな工合に、姉が言ひ附けられた三荷の潮も、弟が言ひ附けられた三荷の柴も、一荷づつの勸進を受けて、日の暮までに首尾好く調つた。

姉は潮を汲み、弟は柴を刈つて、一日一日と暮らして行つた。姉は濱で弟を思ひ、弟は山で姉を思ひ、日の暮を待つて小屋に歸れば、二人は手を取り合つて、筑紫にゐる父が戀しい、佐渡にゐる母が戀しいと、言つては泣き、泣いては言ふ。

兎角するうちに十日立つた。そして新參小屋を明けなくてはならぬ時が來た。小屋を明ければ、奴は奴、婢は婢の組に入るのである。

二人は死んでも別れぬと云つた。奴頭が大夫に訴へた。

大夫は云つた。「たはけた話ぢや。奴は奴の組へ引き摩つて往け。婢は婢の組へ引き摩つて往け。」

奴頭が承つて起たうとした時、二郎が傍から呼び止めた。そして父に言つた。

「仰やる通に童共を引き分けさせても宜うございますが、童共は死んでも別れぬと申すさうでございます。愚なものゆゑ、死ぬるかも知れません。刈る柴はわづかでも、汲む潮はいささかでも、人手を耗すのは損でございます。わたくしが好いやうに計らつて遣りませう。」

「それもさうか。損になる事はわしも嫌ぢや。どうにでも勝手にして置け。」大夫はかう云つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、姉と弟とを一しよに置いた。

或日の暮に二人の子供は、いつものやうに父母の事を言つてゐた。それを二郎が通り掛かつて聞いた。二郎は邸を見廻つて、強い奴が弱い奴を虐げたり、諍をしたり、盗をしたりするのを取り締まつてゐるのである。

二郎は小屋に這入つて二人に言つた。「父母は戀しうても佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢ひたいなら、大きうなる日を待つが好い。」かう云つて出て行つた。

程經て又或日の暮に、二人の子供は父母の事を言つてゐた。それを今度は三郎が通り掛かつて聞いた。三郎は寢鳥を取ることが好きで、邸の内の木立木立を、手に弓矢を持つて見廻るのである。

二人は父母の事を言ふ度に、どうしようか、かうしようかと、逢ひたさの餘に、あらゆる手立を話し合つて、夢のやうな相談をもする。け

ふは姉がかう云つた。「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出來ないと云ふのは、それは當り前の事よ。わたし達はその出來ない事がしたいのだわ。だがわたし好く思つて見ると、どうしても二人一しよにここを逃げ出しては駄目なの。わたしには構はないで、お前一人で逃げなくては。そして先へ筑紫の方へ往つて、お父樣にお目に掛かつて、どうしたら好いか伺ふのだね。それから佐渡へお母樣のお迎に往くが好いわ。」三郎が立聞をしたのは、生憎この安壽の詞であつた。

三郎は弓矢を持つて、つと小屋の内に這入つた。「こら。お主達は逃げる談合をしてをるな。逃亡の企をしたものには烙印をする。それが此邸の掟ぢや。赤うなつた鐵は熱いぞよ。」

二人の子供は眞つ蒼になつた。安壽は三郎が前に進み出て云つた。「あれは譃でございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、どこまで往かれませう。餘り親に逢ひたいので、あんな事を申しました。こなひだも、弟と一しよに、鳥になつて飛んで往かうと申したこともございます。出放題でございます。」

厨子王は云つた。「姉えさんの云ふ通りです。いつでも二人で今のやうな、出來ない事ばかし言つて、父母の戀しいのを紛らしてゐるのです。」

三郎は二人の顏を見較べて、暫くの間默つてゐた。「ふん。譃なら譃でも好い。お主達が一しよになつて、なんの話をすると云ふことを、おれが慥に聞いて置いたぞ。」かう云つて三郎は出て行つた。

其晩は二人が氣味惡く思ひながら寢た。それからどれ丈寐たかわからない。二人はふと物音を聞き附けて目を醒ました。今の小屋に來てからは、燈火を置くことが許されてゐる。その微かな明りで見れば、枕元に三郎が立つてゐる。三郎は、つと寄つて、兩手で二人の手を攫まへる。そして引き立てゝ戸口を出る。蒼ざめた月を仰ぎながら、二人は目見えの時に通つた、廣い馬道を引かれて行く。階を三段登る。廊を通る。廻り廻つて前の日に見た廣間に這入る。そこには大勢の人が默つて竝んでゐる。三郎は二人を炭火の眞つ赤におこつた爐の前まで引き摩つて出る。二人は小屋で引き立てられた時から、只「御免なさい御免なさい」と云つてゐたが、三郎は默つて引き摩つて行くので、しまひには二人も默つてしまつた。爐の向側には茵三枚を疊ねて敷いて、山椒大夫がすわつてゐる。大夫の赤顏が、座の右左に焚いてある炬火を照り反して、燃えるやうである。三郎は炭火の中から、赤く燒けてゐる火筯を拔き出す。それを手に持つて、暫く見てゐる。初め透き通るやうに赤くなつてゐた鐵が、次第に黑ずんで來る。そこで三郎は安壽を引き寄せて、火筯を顏に當てようとする。厨子王は其肘に絡み附く。三郎はそれを蹴倒して右の膝に敷く。とうとう火筯を安壽の額に十文字に當てる。安壽の悲鳴が一座の沈默を破つて響き渡る。三郎は安壽を衝き放して、膝の下の厨子王を引き起し、其額にも火筯を十文字に當てる。新に響く厨子王の泣聲が、稍微かになつた姉の聲に交る。三郎は火筯を棄てゝ、初め二人を此廣間へ連れて來た時のやうに、又二人の手を攫まへる。そして一座を見渡した後、廣い母屋を廻つて、二人を三段の階の所まで引き出し、凍つた土の上に衝き落す。二人の子供は創の痛と心の恐とに氣を失ひさうになるのを、やうやう堪へ忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家に歸る。臥所の上に倒れた二人は、暫く死骸のやうに動かずにゐたが、忽ち厨子王が「姉えさん、早くお地藏樣を」と叫んだ。安壽はすぐに起き直つて、肌の守袋を取り出した。わななく手に

紐を解いて、袋から出した佛像を枕元に据ゑた。二人は右左にぬかづいた。其時齒をくひしばつてもこらへられぬ額の痛が、掻き消すやうに失せた。掌で額を撫でて見れば、創は痕もなくなつた。はつと思つて、二人は目を醒ました。

二人の子供は起き直つて夢の話をした。同じ夢を同じ時に見たのである。安壽は守本尊を取り出して、夢で据ゑたと同じやうに、枕元に据ゑた。二人はそれを伏し拜んで、微かな燈火の明りにすかして、地藏尊の額を見た。白毫の右左に、鏨で彫つたやうな十文字の疵があざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞せられて、其晩恐ろしい夢を見た時から、安壽の樣子がひどく變つて來た。顏には引き締まつたやうな表情があつて、眉の根には皺が寄り、目は遙に遠い處を見詰めてゐる。そして物を言はない。日の暮に濱から歸ると、これまでは弟の山から歸るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんな時にも詞少にしてゐる。厨子王が心配して「姉えさんどうしたのです」と云ふと、「どうもしないの、大丈夫よ」と云つて、わざとらしく笑ふ。

安壽の前と變つたのは只これだけで、言ふ事が間違つてもをらず、爲る事も平生の通である。併し厨子王は互に慰めもし、慰められもした一人の姉が、變つた樣子をするのを見て、際限なくつらく思ふ心を、誰に打ち明けて話すことも出來ない。二人の子供の境界は、前より一層寂しくなつたのである。

雪が降つたり歇んだりして、年が暮れ掛かつた。奴も婢も外に出る爲事を止めて、家の中で働くことになつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。藁を擣つのは修行はいらぬが、絲を紡ぐのはむづかしい。それを夜になると伊勢の小萩が來て、手傳つたり教へたりする。安壽は弟に對する樣子が變つたばかりでなく、小萩に對しても詞少になつて、動もすると不愛想をする。併し小萩は機嫌を損ぜずに、いたはるやうにして附き合つてゐる。

山椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。併しここの年の始めは何の晴れがましい事もなく、又族の女子達は奧深く住んでゐて、出入することが稀なので、賑はしい事もない。只上も下も酒を飲んで、奴の小屋には諍が起るだけである。常は諍をすると、嚴しく罰せられるのに、から云ふ時は奴頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顏をしてゐることがある。どうかすると、殺されたものがあつても構はぬのである。

寂しい三の木戸の小屋へは、折々小萩が遊びに來た。婢の小屋の賑はしさを持つて來たかと思ふやうに、小萩が話してゐる間は、陰氣な小屋も春めいて、此頃樣子の變つてゐる安壽の顏にさへ、めつたに見えぬ微笑の影が浮ぶ。

三日立つと、又家の中の爲事が始まつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。もう夜になつて小萩が來ても、手傳ふに及ばぬ程、安壽は紡錘を廻すことに慣れた。樣子は變つてゐても、こんな靜かな、同じ事を繰り返すやうな爲事をするには差支なく、又爲事が却つて一向になつた心を散らし、落著を與へるらしく見えた。姉と前のやうに話をすることの出來ぬ厨子王は、紡いでゐる姉に、小萩がゐて物を言つてくれるのが、何よりも心強く思はれた。

水が温み、草が萌える頃になつた。あすからは外の爲事が始まると云ふ日に、二郎が邸を見

廻る序に、三の木戸の小屋に來た。「どうぢやな。あす爲事に出られるかな。大勢の人の中には病氣でをるものもある。奴頭の話を聞いたばかりではわからぬから、けふは小屋小屋を皆見て廻つたのぢや。」

藁を擣つてゐた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、此頃の樣子にも似ず、安壽が絲を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それに就いてお願がございます。わたくしは弟と同じ所で爲事がいたしたうございます。どうか一しよに山へ遣つて下さるやうに、お取計らひなすつて下さいまし。」蒼ざめた顏に紅が差して、目が赫いてゐる。

厨子王は姉の樣子が二度目に變つたらしく見えるのに驚き、又自分になんの相談もせずにゐて、突然柴刈に往きたいと云ふのをも訝しがつて、只目を瞠つて姉をまもつてゐる。

二郎は物を言はずに、安壽の樣子をぢつと見てゐる。安壽は「外にない、只一つのお願でございます、どうぞ山へお遣なすつて」と繰り返して言つてゐる。

暫くして二郎は口を開いた。「此邸では奴婢のなにがしになんの爲事をさせると云ふことは、重い事にしてあつて、父がみづから極める。併し垣衣、お前の願はよくよく思ひ込んでの事と見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ往かれるやうにして遣る。安心してゐるが好い。まあ、二人の穉いものが無事に冬を過して好かつた。」かう云つて小屋を出た。

厨子王は杵を措いて姉の側に寄つた。「姉えさん。どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ來て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出し拔に頼んだのです。なぜわたしに相談しません。」

姉の顏は喜に赫いてゐる。「ほんにさうお思ひのは尤もだが、わたしだつてあの人の顏を見るまで、頼まうとは思つてゐなかつたの。ふいと思ひ附いたのだもの。」

「さうですか。變ですなあ。」厨子王は珍らしい物を見るやうに姉の顏を眺めてゐる。

奴頭が籠と鎌とを持つて這入つて來た。「垣衣さん。お前に潮汲をよさせて、柴を刈りに遣るのださうで、わしは道具を持つて來た。代りに桶と杓を貰つて往かう。」

「これはどうもお手數でございました。」安壽は身輕に立つて、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取つたが、まだ歸りさうにはしない。顏には一種の苦笑のやうな表情が現れてゐる。此男は山椒大夫一家のものの言附を、神の託宣を聽くやうに聽く。そこで隨分情ない、苛酷な事をもためらはずにする。併し生得、人の悶え苦んだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事が穩かに運んで、そんな事を見ずに濟めば、其方が勝手である。今の苦笑のやうな表情は人に難儀を掛けずには濟まぬとあきらめて、何か言つたり、したりする時に、此男の顏に現れるのである。

奴頭は安壽に向いて云つた。「さて今一つ用事がある。實はお前さんを柴刈に遣る事は、二郎樣が大夫樣に申し上げて拵へなさつたのぢや。すると其座に三郎樣がをられて、そんなら垣衣を大童にして山へ遣れと仰つた。大夫樣は、好い思附ぢやとお笑なされた。そこでわしはお前さんの髮を貰うて往かねばならぬ。」

傍で聞いてゐる厨子王は、此詞を胸を刺されるやうな思をして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安壽の顏からは喜の色が消えなかつた。「ほんにさうぢや。柴刈に往くからは、わたしも男ぢや。どうぞ此鎌で切つて下さいまし。」安壽は奴頭の前に項を伸ばした。

光澤のある、長い安壽の髮が、鋭い鎌の一掻

にさつくり切れた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始である。

厨子王は姉の心を忖り兼ねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に胸が一ぱいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つた跡で、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまつた。

山の麓に來た時、厨子王はこらへ兼ねて云つた。「姉えさん。わたしはかうして久し振で一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見ることが出來ません。姉えさん。あなたはわたしに隱して、何か考へてゐますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を赫かしてゐる。併し弟の詞には答へない。只引き合つてゐる手に力を入れただけである。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縱横に亂れてゐるが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのである。

丁度岩の面に朝日が一面に差してゐる。安壽は畳なり合つた岩の、風化した間に根を卸して、小さい菫の咲いてゐるのを見附けた。そしてそれを指さして厨子王に見せて云つた。「御覧。もう春になるのね。」

厨子王は默つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので、兎角受應が出來ずに、話は水が砂に沁み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を刈つた木立の邊に來たので、厨子王は足を駐めた。「ねえさん。ここらで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」安壽は先に立つてずんずん登つて行く。厨子王は訝りながら附いて行く。暫くして雜木林よりは餘程高い、外山の頂とも云ふべき所に來た。

安壽はそこに立つて、南の方をぢつと見てゐる。目は、石浦を經て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止まつた。そして「厨子王や」と弟を呼び掛けた。「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつもの樣に話をしないのを、變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞。小萩は伊勢から賣られて來たので、故郷から此土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母あ様と御一しよに岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登つておくれ。神佛のお導で、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父う様のお身の上も知れよう。佐渡へお母あ様のお迎に往くことも出來よう。籠や鎌は棄て

て置いて、樏だけ持つて往くのだよ。」厨子王は默つて聞いてゐたが、涙が頰を傳つて流れて來た。「そして、姉えさん、あなたはどうしようと云ふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積でしておくれ。お父う樣にもお目に掛かり、お母あ樣をも島からお連申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でもわたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」厨子王が心には烙印をせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それは意地めるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢をあの人達は殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」かう云つて安壽は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思ひ定め兼ねて、ぼんやりして附いて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑かれたやうに、聰く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こん度逢ふまでお前に預けます。此地藏樣をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも姉えさんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと討手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひ附かれるに極まつてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ所まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、討手が歸つて來た跡で、寺を逃げてお出。」

「でもお寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運驗しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隱してくれませう。」

「さうですね。姉えさんのけふ仰やる事は、まるで神樣か佛樣が仰やるやうです。わたしは考を極めました。なんでも姉えさんの仰やる通にします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隱してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。お父う樣やお母あ樣にも逢はれます。姉えさんのお迎にも來られます。」厨子王の目が姉と同じ樣に赫いて來た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出。」

二人は急いで山を降りた。足の運も前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は樏に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かう云つて一口飲んで弟に差した。

弟は椀を飲み干した。「そんなら姉えさん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

厨子王は十歩ばかり殘つてゐた坂道を、一走

りに驅け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隱れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふは此方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、此坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたのは、石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が、此山に逃げ込んだのを、慥に認めたものがある。隱れ場は寺内より外にはない。すぐにここへ出して貰はう。」附いて來た大勢が、「さあ、出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其石の上には、今手に手に松明を持つた、三郎が手のものが押し合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も殘らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騷いだ時、内陣からも、庫裡からも、何事が起つたかと、怪んで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら、亂暴をせられはすまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今三郎が大聲で、逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりとしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のものの中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やうやうの事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明を背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖疊な體と、眉のまだ黑い廉張つた顏とが、搖めく火に照らし出された。律師はまだ五十歲を越したばかりである。

律師は徐に口を開いた。騷がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで默つたので、聲は隅隅まで聞えた。「逃げた下人を搜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押し寄せて參られ、三門を開けと云はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて、三門を開けさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。ここで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを好う思うて見て、早う引き取られたが好からう。惡い事は言はぬ。お身達のためぢや。」かう云つて律師は徐かに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のもの共は只風に木葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたと云ふのは十二三の小わつぱぢやあらう。それ

ならわしが知つてをる。」
三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此寺の鐘樓守である。
親爺は詞を續いで云つた。「そのわつぱはな、わしが午頃鐘樓から見てをると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわい代には身が輕い。もう大分の道を行つたぢやろ。」
「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け」と云つて三郎は取つて返した。
松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落ち著いて寢ようとした鴉が二三羽又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引き返した事を聞いて來た。
中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて三衣を著た厨子王が附いて行く。
二人は眞晝に街道を步いて、夜は所々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大切にして往け、父母の消息はきつと知れる」と言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ𦬇様だと、厨子王は思つた。
都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。
籠堂に寢て、あくる朝目が醒めると、直衣に烏帽子を着て指貫を穿いた老人が、枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己に見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべここに參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寢てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいと云ふ事ぢや。けさ左の格子に來て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」
厨子王は云つた。「わたくしは陸奥掾正氏と云ふものの子でございます。父は十二年前に筑紫の安樂寺へ往つた切り、歸らぬさうでございます。母は其年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうちわたくしが大ぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つてゐる守本尊は此地藏樣でございます。」から云つて守本尊を出して見せた。
師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打ち返し打ち返し、丁寧に見て云つた。「これは兼ねて聞き及んだ、尊い放光王地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしてお出なされた。これを持ち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一しよに館へ來い。」

關白師實の娘と云つたのは、仙洞に傅いてゐる養女で、實は妻の姪である。此后は久しい間病氣でゐられたのに、厨子王の守本尊を借りて

拜むと、すぐに拭ふやうに本復せられた。

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免狀を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併し此使が往つた時、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる厨子王は、身の窶れる程歎いた。

其年の秋の除目に正道は丹後の國守にせられた。これは遙授の官で、任國には自分で往かずに、掾を置いて治めさせるのである。併し國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のやうに思つたが、此時から農作も工匠の業も前に増して盛になつて、一族はいよいよ富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、國守の姉をいたはつた小萩は故郷へ還された。安壽が亡き迹は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太と云ふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道に掛かつた。空は好く晴れて日があかあかと照つてゐる。正道は心の中に、「どうしてお母あ様の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神佛が憎んで逢はせて下さらないのではあるまいか」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎な生垣の内が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、其上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取つた粟の穗が干してある。その眞ん中に、襤褸を著た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、此女に心が牽かれて、立ち止まつて覗いた。女の亂れた髮は塵に塗れてゐる。顏を見れば盲である。正道はひどく哀れに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。それと同時に正道は瘧病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかう云ふ詞を繰り返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。
厨子王戀しや、ほうやれほ。
鳥も生あるものなれば、
疾う疾う逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此詞に聞き惚れた。そのうち臟腑が煮え返るやうになつて、獸めいた叫が口から出ようとするのを、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駆け込んだ。そして足には粟の穗を踏み散らしつつ、女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押し當ててゐた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でぢつと前を見た。其時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人はぴつたり抱き合つた。

細木香以

一

細木香以は津藤である。攝津國屋藤次郎である。わたくしが始めて津藤の名を聞いたのは、香以の事には關してゐなかつた。香以の父龍池の事に關してゐた。攝津國屋藤次郎の稱は二代續いてゐるのである。

わたくしは少年の時、貸本屋の本を耽讀した。貸本屋が笈の如くに積み畳ねた本を背負つて歩く時代の事である。其本は讀本、書本、人情本の三種を主としてゐた。讀本は京傳、馬琴の諸作、人情本は春水、金水の諸作の類で、書本は今謂ふ講釋種である。さう云ふ本を讀み盡して、さて貸本屋に「何かまだ讀まない本は無いか」と問ふと、貸本屋は隨筆類を推薦する。これを讀んで伊勢貞丈の故實の書等に及べば、大抵貸本文學卒業と云ふことになる。わたくしは此卒業者になつた。

わたくしは初め馬琴に心醉して、次で馬琴よりは京傳を好くやうになり、又春水、金水を讀み比べては、初から春水を好いた。丁度後にドイツの本を讀むことになつてからズウデルマンよりはハウプトマンが好だと云ふと同じ心持で、さう云ふ愛憎をしたのである。

春水の人情本には、デウス・エクス・マキナアとして、所々に津藤さんと云ふ人物が出る。情知で金持で、相愛する二人を困厄の中から救ひ出す。大抵津藤さんは人の對話の内に潜んでゐて形を現さない。それがめづらしく形を現したのは、梅曆の千藤である。千葉の藤兵衛である。

當時小倉袴仲間の通人がわたくしを教へて云つた。「あれは攝津國屋藤次郎と云ふ實在の人物ださうだよ」と。モデルと云ふ語はから云ふ意味にはまだ使はれてゐなかつた。

此津藤セニョオルは新橋山城町の酒屋の主人であつた。その居る處から山城河岸の檀那とも呼ばれ、又單に河岸の檀那とも呼ばれた。姓は源、氏は細木、定紋は柊であるが、店の暖簾には一文字の下に三角の鱗形を染めさせるので、一鱗堂と號し、書を作るときは龍池と署し、俳句を吟じては仙塢と云ひ、狂歌を詠じては桃江園又鶴の門鱗龜、後に源僊と云つた。

龍池は父を伊兵衛と云つた。伊兵衛は龍池が祖父の番頭であつたのを、祖父が人物を見込んで養子にした。攝津國屋の店を藏造にしたのは此伊兵衛である。奥藏を建て増し、地所を買ひ添へて、山城河岸を代表する富家にしたのは此伊兵衛である。

伊兵衛は七十歳近くなつて、龍池に店を讓つて隱居し、山城河岸の家の奥二階に住んでゐた。隱居した後も、道を行きつゝ古草鞋を拾つて歸り、水に洗ひ日に曝して自ら剉み、出入の左官に與へなどした。しかし伊兵衛は鄙吝では無かつた。某年に芝泉岳寺赤穗四十七士の年忌が營まれた時、綿服の老人が墓に詣でて、納所に金百兩を寄附し、氏名を告げずして去つた。寺僧が怪んで人に尾行させると、老人は山城河岸攝津國屋の暖簾の中に入つた。

二

龍池は家を繼いでから酒店を閉ぢて、二三の諸侯の用達を家業とした。これは祖先以來の出入先で、本郷五丁目の加賀中將家、櫻田堀

通の上杉侍従家、櫻田霞が關の松平少將家の三家がその主なるものであつた。加賀の前田は金澤、上杉は米澤、淺野松平は廣島の城主である。

文政の初年には龍池が家に、父伊兵衞夫婦が存命してゐて、そこへ子婿某氏が來てゐた、龍池は金兵衞以下數人の手代を諸家へ用聞に遣り、三日式日には自身も邸々を挨拶に廻つた。加賀家は肥前守齊廣卿の代が齊泰卿の代に改まる直前である。上杉家は彈正大弼齊定、淺野家は安藝守齊賢の代である。

父伊兵衞は恐らくは帳簿と書出とにしか文字を書いたことはあるまい。然るに龍池は秦星池を師として手習をした。狂歌は初代彌生庵雛麿の門人で雛亀と稱し、晩年には桃の本鶴廬又源仙と云つた。又俳諧をもして仙塢と號した。

父伊兵衞は恐らくは遊所に足を入れなかつたであらう。然るに龍池は劇場に往き、妓樓に往つた。龍池は中村、市村、森田の三座に見物に往く每に、名題役者を茶屋に呼んで杯を取らせた。妓樓は深川、吉原を始とし、品川へも内藤新宿へも往つた。深川での相手は山本の勝八と云ふ老妓であつた。吉原では久喜萬字屋の明石と云ふお職であつた。

龍池が遊ぶ時の取卷は深川の遊民であつた。櫻川由次郎、鳥羽屋小三次、十寸見和十、乾坤坊良齋、岩窪北溪、尾の丸小鶴、竹内、三竿、喜齋等がその主なるものである。由次郎は後に吉原に遷つて二代目善孝と云つた。和十は河東節の太夫、良齋は落語家、北溪は狩野家から出て北齋門に入つた浮世繪師、竹内は醫師、三竿喜齋は按摩である。

龍池は祝儀の金を奉書に裹み、水引を掛けて、大三方に堆く積み上げて出させた。

龍池は涓滴の量だになかつた。杯は手に取つても、飲むまねをするに過ぎなかつた。又未だ曾て妓樓に宿泊したことがなかつた。

爲永春水はまだ三鷺と云ひ、楚滿人と云つた時代から龍池と相識になつて此遊の供をした。龍池が人情本中に名を留むるに至つたのは此に本づいてゐる。

龍池は我名の此の如くに傳播せらるゝを忌まなかつた。啻にそれのみではない。龍池は自ら津國名所と題する小冊子を著して印刷せしめ、これを知友に頒つた。これは自分の遊の取卷供を名所に見立てたもので、北溪の畫が插んであつた。

文政五年に龍池の妻が男子を生んだ。これが攝津國屋の嗣子で、小字を子之助と云つた。文政五年は午であるので、俗習に循つて、それから七つ目の子を以て名となしたのである。二代目津藤として出藍の譽をいかがはしい境に馳せた香以散人は此子之助である。

三

わたくしが香以の名を聞いたのは、彼人情本によつて津藤の名を聞いたのと、餘り遲速は無かつたらしい。否或は同時であつたかも知れない。其後には此名のわたくしの耳目に觸れたことが幾度であつたか知れぬが、わたくしは始終深く心に留めずに、忽ち聞き忽ち忘れてゐた。そして其間龍池香以の父子を混同してゐた。

それから或時香以と云ふ名が、わたくしの記憶に常住することとなつた。それは今住んでゐる團子坂の家に入つた時からの事である。

此家は香以に縁故のある家で、それを見出したのは當時存命してゐたわたくしの父である。父は千住で醫業をしてゐたが、それを廢めてわたくしと同居しようとおもつた。そして日々家を搜して歩いた。その時此家は眺望の好い家として父の目に止まつた。

團子坂上から南して根津權現の裏門に出る岨

道に似た小徑がある。これを藪下の道と云ふ。そして所謂藪下の人家は、當時根津の社に近く、此道の東側のみを占めてゐた。これに反して團子坂に近い處には、道の東側に人家が無く、道は崖の上を横切つてゐた。此家の前身は小徑を隔てて其崖に臨んだ板葺の小家であつた。

崖の上は向岡から王子に連る丘陵である。そして崖の下の畠や水田を隔てて、上野の山と相對してゐる。彼小家の前に立つて望めば、右手に上野の山の端が見え、此の端と忍岡との間が豁然として開けて、そこは遠く地平線に接する人家の海である。今のわたくしの家の樓上から、濱離宮の木立の上を走る品川沖の白帆の見えるのは、此方角である。

父は此小家に目を著けて、度々崖の上へ見に往つた。小家には崖に面する窓があつて、窓の裡にはいつも圓頂の嫗がゐた。綺麗な比丘尼と父は云つた。

父は切繪圖を調べて、綺麗な比丘尼の家が、本世尊院の境内であつたことを知つた。世尊院は今舊境内の過半を失つて、西の隅に片寄つてゐる。

父はわたくしを誘つて崖の上へ見せに往つた。わたくしは此崖をも此小家をも兼て知つてゐたが、まだ父程に心を留めては見なかつたのである。眺望は好い。家は市隱の居處とも謂ふべき家である。そして窓の竹格子の裡には綺麗な比丘尼がゐた。比丘尼はもう五十を越してゐたであらう。若し嫗をも美人と稱することが出來るなら、此比丘尼は美人であつたと云ひたい。

父はわたくしの同意を得てから、此家を買はうとして、家の持主の誰なるかを問ふことにした。團子坂の下に當時千樹園と云ふ植木屋があつた。父は千樹園の主人を識つてゐたので、比丘尼の家の事を問うた。

千樹園はかう云つた。崖の上の小家は今住んでゐる嫗の所有である。嫗は高木ぎんと云つて、小倉と云ふものの身寄である。小倉は本質屋で、隱居してから香以散人の取卷をしてゐたが、あの家で世を去つた。嫗は多分あの家を賣ることを惜まぬであらうと云つた。

四

千樹園が世話をして、崖の上の小家を買ふ相談は、意外に容易く纏まつた。高木ぎんの地所は本稍廣い一地面であつたのを、角だけ先づ賣つたので、跡は崖に面した小家のある方から、團子坂上の街に面した方へ鉤形に殘つてゐる。その街に面した處に小さい町家が二軒ある。一つは地所も家も高木のもので、貸店になつて居り、一つは高木の地所に鳶頭の石田が家を建てて住んでゐる。ぎんは取引が濟んで此貸店に移つた。

父は千住の大きい家を疊んで、崖の上の小家に越して來た。千住の家は徳川將軍が鷹野に出る時、小休所にしたと云ふ岡田氏の家で、これに殆ど小さい病院のやうな設備がしてあつたのである。父は小家に入つて一身輕になつたやうだと云つた。そこへわたくしは太田の原の借家から來て一しよになつた。

小家は三間に臺所が附いてゐる。三間は六疊に、三疊に、四疊半で、四疊半は茶室造である。後に此茶室が父の終焉の所となつた。茶室の隣の三疊に反古張の襖が二枚立ててある。反古は俳文の紀行で、文字と插畫とが相半してゐる。草書ではあるが、圓顏の胖大漢だと云ふことだけは看取せられる。

崖の上の小家は父の歿後に敗屋となつて、補緝し難いために毀たれた。反古張の襖も剝落し盡してゐた。今にして思へばこれは安政六年の

夏に、香以が三十八歳で江の島、鎌倉を廻つた紀行の草稿であつたらしい。
　崖の上の小家の址は、今は過半空地になつてゐる。大正四年に母が七十の賀をする代に、部屋を建てて貰ひたいと云つたので、わたくしは母の指圖に從つて四疊半の見積を大工に命じた。そのうち母が大病になつた。わたくしは母の存命中に部屋を落成させようとして工事を急いだ。五年三月に部屋は出來て、壁の中塗だけ濟んだ。母はこれに臥所を徙して喜んだが、間もなく世を去つた。今わたくしが書齋にしてゐるのが此部屋で、壁は中塗のまゝである。昔崖の上の小家の臺所であつた邊が、此部屋の敷地である。
　父母と共に崖の上の小家に移つた時から、わたくしは香以の名を牢記してゐる。既にわたくしは此家の舊主人小倉が後に名を是阿彌と云つたことを知つた。香以は相模國高座郡藤澤の清淨光寺の遊行上人から、許多の阿彌號を受けて、自ら壽阿彌と稱し、次でこれを河竹其水に讓つて梅阿彌と稱し、其後又方阿彌と改め、其他の阿彌號は取卷の人々に分與した。是阿彌は其一つださうである。
　香以は明治三年九月十日に歿した。翌四年の一周忌を九月十日に親戚が修した。後に取卷の人人は十月十日を期して、小倉是阿彌の家に集まつて佛事を營み、それから駒込願行寺の香以が墓に詣でた。此法要の場所は即ち崖の上の小家であつたのである。

五

　香以の子之助は少年の時經を北静廬に學び、筆札を松本董齋に學んだ。静廬は子之助が十四歳の時、既に七十に達して、竹川町西ヶ町に隱居してゐた。子之助は纔に字を識るに及んで、主に老莊の道を問うたさうである。董齋は董其昌風の書を以つて名を得た人で、本石町鹽河岸に住んでゐた。
　子之助が生れてから人と成るまでの間には、年月を詳にすべき事實が甚だ少い。文政六年には父龍池の師秦星池が六十一歳で歿した。子之助が甫て二歳の時である。八年七月二十九日には祖父伊兵衛の妻が歿した。法諡を臨照院稍譽迎月大姉と云ふ。子之助が四歳の時である。十一年には父の友楚満人が狂訓亭春水と號した。子之助が七歳の時である。
　父龍池が此頃の友には、春水、良齋、北溪よりして外、[illegible]勝田諸持があつた。諸持は諏訪町の狂歌師千種庵川口[illegible]翁の後を襲いで、二世千種庵と云ふ。一中節の名は都一閑齋である。後に別號を立てて宇治紫文と更め、池の端に住んだのが此人である。龍池は當時北溪に席畫を作らせ、諸持に狂歌の判をさせ、春水、良齋等を引き連れて花柳の巷に遊んでゐた。
　子之助は天保九年に十七歳になつた頃から、料理屋、船宿に出入し、藝者に馴染が出來、次で内藤新宿、品川の妓樓に遊んだ。
　天保十二年の頃には龍池、香以の父子が相踵いでクリジスに遭つたらしい。子之助と其姉とを生んだ龍池の妻は此頃離縁になつた。子之助の姉は外櫻田堀通の上、彈正大弼[illegible]の奧に仕へてゐた。龍池は尋で三十間堀住の十人衆三村清左衛門の分家、竹川町の鳥羽屋三村清吉の姉すみを納れて後妻とし、同時に山王町に別宅を構へて妾を置いた。
　未だ幾ならぬに、龍池は將に刑辟に觸れんとして纔に免れた。これは女郎買案内を作つて上梓し、知友の間に頒つた事が町奉行の耳に入つたのである。幸に加賀の名主田中平四郎がこれを知つて、密に龍池に告げた。龍池は急に諸役人に金を配つて彌縫し、妾に暇を遣し、別宅を賣り、遊所通を止めた。内山町の

育人百島勾當の家を遊所として諸持等を此に集へることになつたのは當時の事である。

子之助は此年十二月下旬に繼母の里方鳥羽屋に預けられた。これは新宿、品川二箇所の引手茶屋に借財を生じたためである。子之助時に二十歳であつた。

然るに龍池の遊所通は罷んでも、子之助のは罷まなかつた。天保十三年三月の頃から五分月題の子之助は丁稚兼吉を連れて、鳥羽屋を出で、手習の師匠松本、狂歌の宗匠梅屋鶴壽等を訪ふことになつたが、其歸途には兼吉を先に還らせて、自分は劇場妓樓に立ち寄つた。兼吉は綽號を鳥羽繪小僧と云つた。想ふに鳥羽屋の小僧で、容貌が奇怪であつたからの名であらう。即ち後の假名垣魯文である。

劇場は木挽町の河原崎座であつた。贔屓の俳優は八代目團十郎である。作者勝諺藏をば部屋に訪うて交を結んだ。諺藏は後の河竹新七である。

妓樓は主に品川の島崎湊屋、土藏相模で、引手茶屋は大野屋萬治方であつた。湊屋のお染は尤も久しい馴染であつた。

取卷は河原崎座の作者岩井紫玉、同座附茶屋の主人武田屋馬平、品川の幇間富本登名太夫、同關斗太夫、櫻川善二坊、其他俳諧師敦乙芽、力士勢藤吾等であつた。紫玉は後の正傳節家元春富士、乙芽は後の冬映である。

六

龍池の水引を掛けた祝儀は壯觀ではあつても、費す所は甚だ多きに至らなかつた。これに反して子之助は、人に畀ふる物に種々の趣向を凝らし、其價の高下を問はなかつた。丸利、丸上、山田屋等の袋物店に拂ふ紙入、煙草入の代は莫大であつた。既にして更衣の節となつた。子之助は單羽織と袷とを遊所に持て來させて著更へ、脱ぎ棄てた古渡唐棧の袷羽織、綸織の綿入、琉球紬の下著、縮緬の胴著等を籤引で幇間藝妓に與へた。

龍池は子之助の遊蕩が愈募つて、三村氏が放任して顧みぬことを聞き知り、自ら手を下してこれを制せようとした。六月中旬の事である。子之助が品川の湊屋にゐると、龍池は四手を飛ばして大野屋に來た。そして子之助に急用があるから來いと言つて遣つた。

子之助は父を畏れて、湊屋の下座敷から庭に飛び下り、海岸の淺瀨を渉つて逃げようとしたが、使のものに見附けられて捉へられた。

龍池は子之助を拉して歸り、幸町の持地面に置いてある差配人佐兵衛に預けた。そして勘當の手續をしようとした。しかし手代等の扱によつて、子之助は山城河岸に歸り、父の監督を受けることとなつた。

幸に龍池は僞善を以て子を抑制しようとはしなかつた。自分の地味な遊には子之助を侍せしめて、これに教ふるに酒色の筵にあつても品位を墜さぬ心掛を以てした。子之助の態度は此に一變した。これが子之助の二十一歳になつた時の事である。

龍池の贔屓にした七代目團十郎は、此年六月二十二日に江戸を追放せられ、龍池の親しい友爲永春水は此年七月十三日に牢死した。これも間接に山城河岸の父子をして忌諱を知らしむる媒となつたであらう。

これから安政三年に至るまでの間には記すべき事が少い。姑く二三の消息を注すれば、先づ天保十四年に河原崎座が、先に移つた中村、市村兩座と共に猿若町に移つて、勝諺藏が立作者柴晉作となつた。芝宇田川町にゐたからである。河竹新七の名は暫らく立つてから、三代目櫻田治助の勸に依つて襲いだ。嘉永元年六月二十七日に、子之助の祖父伊兵衛が七十餘歳

で歿した。法謚は紫學寶壽徳円善士である。墓は願行寺先塋の中にある。龍池の師、靜廬も此年八十三歳で歿した。壽阿彌曇奝の歿したのも同年である。壽阿彌と龍池父子とは相識ではあつただらうが、其交の奈何を詳にしない。

しかし後に子之助は清淨光寺から壽阿彌號を受けて、間接に眞志屋の阿彌號を襲いだのである。三年に龍池の友諸持が都派を脱して宇治紫文と稱した。安政元年に龍池父子の贔屓にした八代目團十郎が自刄した。二年は地震の年である。江戸遊所の不景氣は未曾有で、幇間は露肆に天麩羅を賣り、町藝妓は葭簀張におでん燗酒を鬻いださうである。山城河岸の雨露はこれを霑し盡すことが出來なかつたであらう。

安政三年の夏龍池は病に臥した。次で九月廿日に世を去つた。法謚は白雲外龍池善士と云ふ。亦願行寺に葬られた。手代等は若檀那子之助の前途を氣遣つて、大坂町に書肆を開いてゐる子之助の姉壻攝津國屋伊三郎を迎へて、家督相續をさせようとした。子之助の姉は上杉家の奥を下つて壻を取り、分家を立ててゐたのである。然るに子之助の繼母三村氏すみは、義理ある子之助を廢嫡の否運に逢はせては、自分の庇護が至らぬやうに世間の目から見られようと云つて、手代等の議を拒んだ。子之助は遂に山城河岸の本家を嗣いだ。時に年三十五である。序に云ふ、龍池の狂歌の師初代彌生庵雛麿は龍池と同年同月に歿した。

七

父龍池の後を繼いで二世藤次郎となつた子之助は、繼母三村氏すみ其他の親族、最故參の金兵衞以下大勢の手代の手前があるので、暫らくは謹愼を守つてゐたが、四十九日の配物が濟んだ頃から遊所に通ひはじめ、漸く馴れては傍人の思はくをも顧みぬやうになつた。女房はまだ部屋住でゐた時に迎へて、もう子供が二人ある。里方は深川木場の遠州屋太右衞門である。しかし女房も岳父も只手を束ねて傍看する外無かつた。

王侯貴人が往々文藝の士を羅致して、聲威を張り儀容を飾る具となすやうに、藤次郎は俳諧師、狂歌師、狂言作者、書家、彫工、畫工と交つて、その多數を待つこと殆ど幇間と擇ぶことが無かつた。父龍池は毎に狂歌を弄んだが、藤次郎はこれに反して主に俳諧に遊んだ。その友を集へた席は、長谷川町の梅の家、萬町の柏木亭等であつた

藤次郎は子之助時代に鯉角と號し、一に李蠖とも署してゐたが、家を繼いだ後、爲山から梅の本の稱を受け、更に晋永機に晋の字を貰ひ、自ら香以と號し、又好以、交以、孝以とも署した。偶狂歌を作るときは何廼屋と署した。

劇場では香以は河原崎權十郎を贔屓にした。香以は贔屓の連中を組織して、荒磯連と名け、其掟文と云ふものを勝田諸持に書かせた。九代目の他日の成功は半香以の庇蔭に因つたのである。又八代目が自刄した後、權十郎の實父七代目團十郎の壽海老人が江戸に還つてゐたので、香以はこれをも贔屓にした。此父子の他、俳優にして香以の雨露に浴したものには、猿市川小團次、中村鴻藏、市川米五郎、松本國五郎等がある。

香以の通つた妓樓は初め吉原江戸町一丁目玉屋山三郎方で、後角町稻本樓である。玉屋には濃紫、稻本には二世小稻がゐた。引手茶屋は玉屋に通つた時、初め近江屋半四郎、後大坂屋忠兵衞、稻本に通つた時仲の町の鶴彦であつた。

香以が取卷は殆ど數へ盡されぬ程あつた。中にはこれを取卷に數ふるは或は酷に失するかも知れぬと思はれる人もある。しかし區別して論ずることも亦容易でない。

俳諧師には既に擧げた爲山、永機の外、鳥越等栽、原田梅年、牧冬映、野村守一がある。梅年は後六世雪中庵と稱した。嵐雪、吏登、蓼太、完來、對山、梅年と云ふ順序ださうである。守一、通稱は新藏、鶴歩庵と云つた。

狂歌師には勝田諸持と其子福太郎と、室田鶴壽、石橋眞國がある。福太郎は綽號を油徳利と云つた。後に一中節に於いて父の名を襲ぎ、二世紫文となつた人である。鶴壽は梅屋と云つた。通稱は又兵衛、長谷川町の待合茶屋である。眞國は通稱七兵衛である。

狂言作者には河竹新七、次で瀬川如皐がある。新七は元の柴晉助である。

彫工には石黒某がある。畫家には取卷に算すべからざる人もあるが、松本交山、狩野晏川、月岡芳年、柴田是眞、鳥居清満、辻花雪、福島隣春、四方梅彥がある。能書家には宮城玄魚がある。

商人若くは商家の隱居には先づ小倉阿猿がある。團子坂の質屋の隱居で、後に是阿彌と云つた。阿心庵是佛がある。谷中の河屋の主人である。大津屋古朴がある。船宿の隱居である。金屋仙之助の笠仙がある。竹川町の競吳服商である。

醫師に石川市淳がある。外科專門であつた。俳諧の號を雁伍と云つた。

落語家には乾坤坊良齋、五明樓玉輔、春風亭柳枝、入船米藏がある。玉輔は馬生の後の名である。講談師には二代目文車、桃川燕國、松林伯圓がある。燕國は後の如燕である。

八

專業の幇間で、當時山城河岸の家に出入してゐたものは、櫻川善孝、荻江千代作、都千國、菅野のん子等である。千國は初の名が荻江露助、後に千中と云ふ。玄冶店に住んでゐた。又吉原に往つた時に呼ばれたものは都有中、同權平、同米八、清元千蔵、同仲助、櫻川忠六、花柳鳴助等である。中にも有中は香以が其頓才を稱して、常に傍に侍せしめた。

吉原の女藝者は見番大黑屋庄六方から、きわ、ぎん、春、鶴等が招かれた。きわは後花柳壽輔の妻になつた。春は當時既に都權平の妻になつてゐた。駿河屋の鶴は間もなく香以の圍物にせられた。

香以は暫く吉原に通つてゐるうちに、玉屋の濃紫を根引した。其時濃紫が書いたのだと云つて「紫の初元結に結込めし契は千代のかためなりけり」と云ふ短册が玉屋に殘つてゐた。本妻は濃紫との折合が惡いと云つて木場へ還された。濃紫は女房くみとなり、次でふさと改めた。これは仲の町の引手茶屋駿河屋とくの抱鶴が引かせられたより前の事である。

家にゐての香以の生活は餘り贅澤ではなかつた。料理は不斷南鍋町の伊勢勘から取つた。特に人に馳走をする時などは、大抵數寄屋町の島村半七方へ往つた。香以を得意の檀那としてゐた駕籠屋は銀座の横町にある方角と云ふ家で、郵便のない當時の文使に毎日二人宛の輿丁が攝津國屋に詰めてゐた。

濃紫が家に來た後も、香以の吉原通は息まなかつた。遊に慣れたものは燈燭を列ねた筵席の趣味を忘るゝことを得ない。次の相手は同じ玉屋の若紫であつた。

或日香以は松本交山を深川富が岡八幡宮の境内に訪うて、交山が松竹を一雙の金屏風に畫いたのを見た。これは某が江戸町一丁目和泉屋平左衛門の抱泉州に贈らむがために畫かせたものであつた。

香以は此屏風を横領して、交山には竹川町點心堂の舗に、銀二十五兩を切餅として添へて

遣つた當時二十五兩包を切餅と稱したからである。交山は下戸であつた。

香以は屏風卷上始末を書いて惡摺に摺らせ、知友の間に頒つた。そして屏風を玉屋山三郎に遣つた。しかし山三郎には此屏風は女郎の床には立てぬと云ふ一札を入れさせたのである。

安政四年になつて銀鎖の煙草入が流行つた。香以は丸利に誂へて數十箇を作らせ、取卷一同に與へた。古渡唐棧の羽織を揃に爲立てさせて、一同に畀へたのも此頃である。

此年の春竹川町の三村氏が香以に應挙の鯉一幅を贈つた。香以はこれを獲て應挙の鯉三十六幅を集めようと思ひ立つた。書畫骨董商は京阪地方をまで搜して幅數を揃へた。しかし交山、柴田是眞等に示すに、其大半は贋物であつた。香以は憤つて更に現存の畫家三十六人を選んで鯉を畫かせた。そして十一月に永機を招いて鯉の聯句を興行した。此時配つた半歌仙には鳥居清滿が鯉の表紙畫をかき、香以が暫のつらねに擬した序を作つた。其末段はかうである。

「一點ならござれ即點に、素襖の柿のへたながら、太刀の切字や手爾遠波を、正して點をかけ烏帽子、惡く謗らば片つぱし、棒を背負つた樂句の果、此世の名殘執筆の荒事、筆のそつ首引つこ抜き、硯の海へはふり込むと、ほゝ敬つて白す。」

此年の秋猿若町市村座で、竹河新七作網模様燈籠菊桐が興行せられた。享保中の遊女玉菊の事に網打七五郎の事を併せて作つたものである。香以は河原崎權十郎、市川小團次の二人に引幕一張宛を贈り、藝者おさんに扮した市川米五郎と櫻川善孝に扮した中村鴻藏との衣裳持物を寄附した。これは皆權十郎を引き立てるためであつた。

香以が淺草日輪寺で遊行上人に謁し、阿彌號許多を貰ひ受けたのも此頃の事である。香以自己は壽阿彌と號し、幾くもなくこれを河竹新七に讓つて、梅阿彌と更めた。此年香以は三十六歳であつた。

九

安政五年の三月市村座に、江戸櫻清水清玄と云ふ狂言が演ぜられた。場面は仲の町引手茶屋の前である。源之助の番頭新造が吉六の俳諧師東榮の胸倉を取つてゐる。これは東榮が所謂性惡をして、新造花川に負いたために、曲輪の法で眉を剃り落されさうになつてゐるところである。鳴藏竹助の妓夫が東榮を引き立てゝ暖簾の奥に入る。次で國五郎、米五郎、小團次、三太郎、鳥藏の侍等が花道を出て、妓夫に案内せられて奥に入る。三十郎の遊女揚卷父押上村新兵衞が白酒賣となつて出る。侍等が出て白酒を飲んで價を償はずに花道へ入る。小團次の黒手組助六が一人の侍の手を捩ぢ上げて花道から出て侍等を懲す。侍等は花道を逃げ入る。此時權十郎の紀伊國屋文左衞門が暖簾を搴げて出る。其拵は唐棧の羽織を著、脇差を差し駒下駄を穿いてゐる。背後には東榮が蛇の目傘を持つて附いてゐる。合方は一中節を奏する。文左衞門は助六を呼んで戒飭する。舞妓が廻ると、揚卷の座敷である。文左衞門が揚卷の身受をして助六に妻せる。揚卷は初め榮三郎、後梅幸であつた。

狂言の文左衞門は、此頃遊所で香以を今紀文と稱へ出したに因んで、此名を藉りて香以を寫したものである。東榮は牧冬映である。二人の衣裳持物は都て香以の贈で文左衞門の銀裝の脇差は香以の常に佩びた物である。此狂言の作者は香以の取卷の一人河竹新七であつた。吉六は東榮に扮した後、華生東鯉と號したが、東鯉は東榮の役を記念したので、鯉は香以の鯉角か

ら取つたのである。
　此年八月二十六日に市川權十郎は藝道を勵み、贔屓に負かぬと云ふ誓文を書き、父七代目團十郎の壽海老人に奥書をさせて香以に贈つた。
　香以の此頃往つた妓樓は稻本、相方は二代目小稻であつた。所謂お側去らずの取卷は冬映、最も愛せられてゐた幇間は都有中であつた。有中は素更紗染屋の出身で、遊藝には通じてゐても文字を識らなかつた。そこで貸本に由つて智識を求め、最も三國志を喜んだ。香以は有中が口を開けば孔明を稱するのを面白がつて、金を出して遣つて孔明祭を修せしめた。今の富豪が乃木祭を行ふ類である。それからは有中に陣太鼓の綽號が附けられた。
　香以は此年三十七歳であつた。恐らくは其盛名の絶頂に達した時であつたゞらう。取卷の一人勝田諸持は、此年二月二十二日に六十八歳で歿した。彼學者の澁江抽齋、書家の市川米庵、乃至狂歌師仲間の六条園荒井雅重、家元仲間の三世清元延壽太夫等と同じく、虎列拉に冒されたのかも知れない。諸持は即ち初代宇治紫文である。
　安政六年には香以の身代が稍傾きはじめたらしい。前田家、上杉家等の貸附は略取り立ててしまひ、家に貯へた古金銀は概ね沽却せられたさうである。しかし香以の豪遊は未だ衰へなかつた。
　香以は此年江の島、鎌倉、金澤を遊覽した。同行したものは狂山、等栽、永機、笠仙等であつた。小倉是阿彌の茶室の襖張になつてゐた紀行が果して此遊を敍したものであつたなら、一行には女も二三人加はつてゐた筈である。有中は供に立つ約束をして置きながら、出發の間に合はなかつたので、三枚肩の早打で神奈川臺へ驅け附け、小判五枚の褒美を貰ひ、駕籠舁も二枚貰つた。
　香以は途次藤澤の清淨寺に詣で、更に九つの阿彌號を遊行上人から受けて人に與へた。

十

　香以は旅から歸つた後、例に依つて稻本に通つてゐた。相方は小稻であつた。然るに此頃同じ家に花鳥と云ふ華魁がゐた。花鳥は恐るべき經歷を有してゐた。或時は人の圍ひものとなつてゐて情夫と密會し、暇を取る日に及んで、手切金を強請した。或時は支度金を取つて諸侯の妾に住み込み、故意に臥所に溺して暇になつた。そして其姿態は妖艶であつた。
　花鳥は廊下で香以に逢ふごとに秋波を送つた。或夕小稻が名代床へ往つて、香以が獨無聊に苦んでゐると、花鳥の使に禿が來た。香以はうつかり花鳥の術中に陷つた。
　數日の後であつた。大引過の夜は寂としてゐた。香以は約を履んで花鳥の屏風の中に入つた。忽ち屏風をあらゝかに引き退けて飛び込んだものがある。それは小稻の番新豐花であつた。
　香以は豐花に拉いて往かれて座敷に坐つた。巽育の豐花が鶴彦は急使を以て迎へられた。甲走つた聲に誘はれて、無遠慮な男女は廊下に集まり、次の間の障子は所々濡らした指尖で穿たれた。
　此時留女として現はれたのは藝者きわである。豐花と鶴彦とを次の間に連れて往つて、小稻花鳥へ百兩宛の内濟金を出すことに話を附け、それを香以に取り次いだ。しかし香以の懷には即金二百兩の持合せがなかつた。
　きわは豐花を待たせて置いて、稻本を馳せ出で、嘗て香以の恩を受けた有中、米八、權平等を座敷座敷に歷訪して、財布の底をはたかせたが、其金は合計五十兩には足らなかつた。きわは高利の金を借りて不足を補つた。

香以は闇に紛れて茶屋へ引き取り、きれには禮を盡して謝し、金は店からすぐ届けると云ひ畢つて四手に乘り、山城河岸へ急がせた。

これは香以が三十八歳の時の事であつた。此年三月二十三日に、最屓役者七代目團十郎の壽海老人が、猿若町一丁目の家に歿した。香以は鶴壽と謀つて追善の摺物を配つた。畫は蓮生坊に扮した肖像で、豐國がかいた。香以の追悼の句の中に、「かへりみる春の姿や海老の殻」と云ふのがあつた。

文久元年の夏深川に假宅のある時であつた。香以は舊交を溫ねて玄魚、魯文の二人を數寄屋町の島村半七方に招いた。取持には有中、米八が來た。宴を撤してから舟を鞘町河岸に艤し、松井町の松本に往つた。小稲、花鳥はもうゐなかつた。三代目小稲と稱してゐたのは前の小稲の突出右近である。香以は玄魚と魯文との相方を極めさせ、自分は有中、米八を連れて歸し去つた。

此年香以は四十歳であつた。香以は舊に依つて讌遊を事としながら、漸く自己の運命を知るに至つた。「年四十露に氣の附く花野哉。」山城河岸の酒席に森枳園が人を叱したと云ふ話も、此頃の事であつたらしい。

文久二年は山城河岸沒落の年である。香以は店を番頭に渡し、自分は隱居して店から爲込を受けることとし、妾鶴には暇を遣り、妻ふさと倅慶次郎とを連れて、淺草馬道の猿寺境内に移つた。蕭條たる草の庵の門には梅阿彌の標札が掛かつてゐた。

十一

猿寺の侘住ひに遷つた香以は、山城河岸の店から受ける爲込の補足を賣文の一途に求めた。河竹新七の紹介に由つて、市村座の作者になり、番附に梅阿彌の名を列する。梅の本の名を以て俳諧の判をする。何廼家の名を以てして狂歌の判をする。註文に依つて咄開の散しを書く。此等は固より此時に始まつたのではない。文淵堂所藏の「狂歌本朝二十四孝」「狂歌習字箭」等は早く嘉永六年に印刷せられたものである。只それが職業となつたのである。しかし此鬻筆は幾何の利益をも齎さなかつた。

これに反して所謂庵室は昔馴染の幇間等の遊所となつた。俳優中では市川新車、同市藏、同九藏、坂東家橘等が常の客であつた。新車は後の團之助、家橘は後の五代目菊五郎である。

香以は今幇間等と對等の交際をする身の上になつて、祝儀と云ふものは出さぬが、これに饗する酒飯の價は聊の賣文錢の能く償ふ所ではなかつた。何時頃からの事か知らぬが、香以の家の客には必ず膳が据ゑられ、菜は醬辛抔一二品に過ぎぬが、膳の一隅には必ず小い紙包が置いてあつた。それには二分金がはひつてゐたさうである。香以は又負債に困められて、猿寺の收容陣地から更に退却しなくてはならなくなつた。これが香以の四十一歳になつた年である。

文久三年の春であつた。親戚某が世話をして、香以は下總國千葉郡寒川の白旗八幡前に退隱した。寒川は漁村である。文字を識つて俳諧の心得などのあるものは、僅に二三人に過ぎない。香以は濱の砂地に土俵を作らせ、村の子供を集めて相撲を取らせて、勝つたものには天保錢一枚の饅頭を遣りなどした。

しかし寒川と日本橋との間をば魚介を運ぶ舟が往來する。それに託して河竹新七、永機、笠伸等は書を寄せて香以を慰めた。又偶には便船して自ら訪ふこともあつた。當時此人々は濃紫のおふさが木綿著物に襷を掛けて、かひがひしく立ち働くのを見て感心したさうである。「針持つて遊女老いけり雨の月」は香以が實境の句であつた。

或日天氣が好くて海が穩なので、香以は濱邊に出てゐた。そこへ一隻の舟が著いて中から江戸の相撲が大勢出た。香以が物めづらしさに顏を見ると、小結以上の知人もゐた。相撲は香以を認むるや否や頷き合つて進み寄つて、砂の上に平伏した。「これはこれは、河岸の檀那、御機嫌宜しう、こちらに御逗留でございますか。どうぞ初日には御見物を。」相撲を迎へに出た土地の人達は、皆驚いて目を睜つた。「攝津國屋の隱居はえらい人だと見えて、關取衆が土下座をさつしやる」と囁き合つたさうである。香以は交肴一籠を相撲等に贈つて、これがために一月餘の節儉をした。

香以は文久三年から慶應二年まで、足掛四年寒川に住んでゐた。四十一歳から四十五歳に至る間である。此間元治元年には梅屋鶴壽が歿した。慶應元年には汁花雪が歿した。花雪は狂歌合と云ふことを始めた人である。

慶應二年に香以は山城河岸に歸つた。今は家業の振はぬ店の隱居で、昔の友にも往來するものが少かつた。此頃新堀に後藤進一と云ふものがあつて、新堀小僧の綽名を花柳の巷に歌はれ、頗豪遊に誇つてゐた。後藤は香以の歸郷を聞いて、先輩としてこれを饗せむと思ひ立ち、木場の岡田龍吟と云ふものに諮り、香以が昔の取巻、芳年、梅年、紫玉、笠仙等を駈り集め、香以を新橋の料理屋に招いた。香以は「倒されたる大いなるもの」として、此席に面を曝すことを喜ばなかつたが、忍んで後藤等の請を容れた。

十二

主人側の後藤等は此宴會の興を添へむために、當時流行の幇間松迺家花山を呼んだ。花山は裸踊を以て名を博した男である。犢鼻褌をだに著けずに眞裸になつて踊つた。しかのみならず裸の儘で筆にし難い事をもした。主人側のこれを呼んだのは、固より流に隨つて波を揚げたのであるが、其中で紫玉一人は兼て花山の所爲を惡んでゐたので、若し我目前で尾籠の振舞をしたら、懲して遣らうと待ち構へてゐた。

芳年が紫玉の意を忖つて、これを花山に告げた。花山は援を茶弘に求めた。茶弘は新橋界隈に幅を利かせてゐた俠客で、花山が親分として戴いてゐたのである。

茶弘は花山の請を容れた。筵會の場所は自分の繩張の内である。單身これに赴いて將に屈辱を受けんとしてゐるものは自分の子分である。此請を容れぬわけには行かない。しかし何の手段を以てこれを救はうか。茶弘はかう考へて、最も簡易な買收の法を取つた。後藤の取巻一同には茶弘の祝儀包が配られた。

紫玉は包を座上に拋つて茶弘を罵つた。後藤が折角の催も此殺風景のために興を破られて、客は程なく散じた。

香以は累を後藤に及さんことを恐れて、翌日紫玉を家に呼んで諭した。紫玉をして罪を茶弘に謝せしめようとしたのである。しかし紫玉は聽かなかつた。材能技藝を以て奉承するは男藝者の職分である。廉恥を棄てゝ金錢を貪るものと歯するは、その敢てせざる所である。紫玉が花山を排したのは曲が花山にあつたのである。紫玉が祝儀を卻けたのは曲が茶弘にあつたのである。紫玉は堅く此說を持して動かなかつた。

香以は已むことを得ぬので、人に託して後藤と茶弘との和解を謀つた。二人は久保町の賣茶亭に會見して、所謂手打をしたさうである。これは香以が四十五歳の時の事である。後藤は後に名を庄吉と改めて米の仲買を業としてゐた。

慶應三年に汁花雪三回忌の影畫合「くまなきかげ」が刊行せられて、香以は自らこれに序し

た。巻中の香以の影畫には上に引いた「針持つて」の句の短冊が貼してある。わたくしの看た此書は文淵堂の所藏である。

明治元年に山城河岸の居は鎖された。當時香以の姉夫は細木伊三郎と稱して、山王町に書肆を開いてゐた。山王町は今の宗十郎町である。香以はふさと慶次郎とを連れて、此伊三郎方に同居した。時に年四十七であつた。

明治三年九月に香以は病に臥して、十日に瞑目した。年四十九。法諡は梅餘香以居士。遺骸は願行寺なる父祖の塋域に葬られた。遺稿の中に。

冬枯れてゐたは貴様か梅の花
紅梅に雪も好けれど加減もの
只遊ぶ萍も經る月日かな
つごもりや由なき芥子の花あかり
盜まれむ慾も作りて後の月
待事のありげに殘る蛩かな
値の高い水に砂吐く蜆かな
地に落かぬ中ぞ長閑けき舞ふ木葉

自像
花に賣る一本物や江戸鰹

自傚
霧晴て皆こちら向く山のなり

寒川
鯵切の鈍くも光る寒さかな

所思
わびぬれば河豚を見棄てゝ菜大根

絶筆
己れにも厭きての上か破芭蕉

明治四年十月十日の事である。親戚の營むべき一周忌にわざと一月遅れて、昔香以の恩義を被つた人々が、團子坂の小倉是阿彌の家に集まつて舊を話し、打連れて墓に詣でた。諸持、鶴寿、花笑、文山は死して既に久しく、書家董齋の如きは、香以と同じ年の四月に死んでゐる。狩野晏川、河竹新七、其角堂永機、竺仙、紫玉、善孝等は此群の中にゐた。

此墓の落葉むかしの小判哉　永機

香以歿後に凋落して行く遊仲間のさまを示さんがために、此に二三の人の歿年を列記する。爲山は明治十一年、玄魚は十三年、隣春は十五年、等栽は二十三年、是眞は二十四年、晏川と清滿とは二十五年、永機は三十七年である。

香以の履歴は主に資料を假名垣魯文の「再來紀文廓花街」に仰いだ。今紀文曲輪の花道と訓むのださうである。鈴木春浦さんが小說の種にもと云つて貸してくれた本を、遺忘のために手抄して置いたのである。

其他根本吐芳さんの「大通人香以」の如きも、わたくしは參照した。しかし根本氏と雖、わたくしと同じく魯文の文に據つたことであらう。鈴木氏の筆記に係る益田香遠、久保田米僊二家の談話、弟潤三郎の藏儲に係る竺仙事橋本素行の刊本「恩」はわたくしのために有益であつた。

十三

本郷の追分を第一高等學校の木柵に沿うて東へ折れ、更に北へ曲る角が西敎寺と云ふ寺である。西敎寺の門前を過ぎて右に桐の花の咲く寄宿舍の横手を見つゝ行けば、三四軒の店が並んでゐて、又一の寺がある。これが願行寺である。

願行寺は門が露次の奥に南向に附いてゐて、道を隔てゝ寄宿舍と對してゐるのは墓地の外圍である。此外圍が本は疎な生垣で、大小高低さまざまの墓石が、道行人の目に觸れてゐた。今は西敎寺も願行寺も修築せられ、願行寺の生垣は一變して堅固な石塀となつた。唯空に聳えて鬱蒼たる古木の兩三株が其上を蔽うてゐるだけが、昔の姿を存してゐるのである。

わたくしは或日香以が一家の墓を訪はうと思つて、願行寺の門を入つた。門内の杉の木立の中に、紺飛白の浴衣を著た壯漢が鐵唖鈴を振つてゐて、人の來たのを顧みだにしない。本堂の東側から北裏へ掛けて竝び立つてゐる墓石を一つ一つ見て歩いた。日はもう傾きかゝつて來るに、尋ぬる墓表は見附からなかつた。

忽ち穉子の笑ふ聲がしたので、わたくしは振り向いて見た。顔容の美しい女が子を抱いてたゝずんで、わたくしの墓表の文字を讀んで歩くのを見てゐた。

わたくしは捜索を中止して、「あなたはお寺の方ですか」と問うた。

「はい。どなたのお墓をお尋なさいますのです。」女の聲音は顔色と共にはればれとしてゐて、陰鬱なる周圍の光景には調和してゐなかつた。

「攝津國屋と云ふものです。苗字はさいきでせうか。」魯文の記事には「さいき」とも「ほそき」とも傍訓がしてあるが、わたくしは「さいき」が正しい訓であるのを、僞植字者が「ほそき」と誤つたものかと思つてゐたのである。

「では細いと云ふ字を書くのでせう。」此女は文字を識つてゐた。

「さうです。御存じでせうか。」

「えゝ、存じてゐます。あの衝當にあるのが攝津國屋の墓でございます。」抱かれてゐる穉子はわたくしを見て、頻に笑つて跳り上がつた。

わたくしは女に謝して墓に詣つた。わたくしはなんだか新教の牧師の妻とでも話したやうな感じがした。

本堂の東側の中程に、眞直に石塀に向つて通じてゐる小徑があつて、其衝當に塀を背にし西に面して立つてゐるのが、香以が一家の墓である。

向つて左側には石燈籠が立てゝあつて、それに「津國屋」と刻してある。

墓は正方形に近く、稍横の廣い面の石に、上下二段に許多の戒名が彫り附けてあつて、下には各命日が註してある。

十四

攝津國屋の墓石には、遠く祖先に溯つて戒名が列記してあるので、香以の祖父から香以自身までの法諡は下列の左の隅に竝んでゐる。

詣で畢つて歸る時、わたくしは父子を抱いた女の側を通らなくてはならなかつた。わたくしは女に問うた。

「親類の人が參詣しますか。」

「えゝ、餘所へおよめに往つた方が一人殘つてゐなすつて、忌日には來られます。芝の炭屋さんださうで、たしか新原元三郎と云ふ人のお上さんだと存じます。住職は好く存じてゐますが、只今留守でございます。なんなら西教寺とこちらとの間に花屋が住つてゐますから、聞いて御覽なさいまし。」

わたくしは再び女に謝して寺を出た。そして往來に立ち止つて花屋を物色した。

西教寺と願行寺との間の町家は皆新築の小さい店になつてゐる。其間に挾まれて、殆ど家とは云ひ難い程の小家の古びたのが一軒あつて、葭簀が立て廻してある。わたくしはそれを見て、曾つて其前に樒のあるのを見たことを想起した。

わたくしは葭簀の中に這入つた。家の内はもう殆ど眞暗である。瞳を定めて見れば老いさらぼうた老嫗が蹲つてゐる。家も人も偶然開化の舌に舐め殘されたかと感ぜられる。又お伽話の空氣が闇の裡に浮動してゐるかとも感ぜられる。

「もしもし」と云ふと、翁が立つて出迎へた。嫗は蹲つたままでゐた。

一願行寺にある攝津國屋の墓を知つてゐるでせうね」と、わたくしは問うた。しかし翁も嫗も耳が遠いので、わたくしは次第に聲を大くして二三度繰り返さなくてはならなかつた。

奥にゐる嫗が先にわたくしの詞を聞き分けて、「あのほそきさんですか」と云つた。わたくしは此に依つて一度香以の苗字を「ほそき」と訓むこととして、此稿を排印に付した。しかし後香以と親しかつた竺仙が「さいき」と書するを見て、猶「さいき」の正しかるべきを思つた。

わたくしは香以の裔の芝にゐる女の名を問ひ、其夫の名をもたしかめようと思つたが、二人共何一つ知らなかつた。

只嫗がこんな事を言つた。「大そうお金持だつたさうでございますね。あの時本の少しばかりで好いから、お金が殘して置いて貰はれたらと、いつもさう仰やいます。」

わたくしは翁の手に小銀貨をわたして、樒を香以が墓に供することを頼んだ。

「承知いたしました。もう暮れましたから明朝の事にいたしませう」と、翁は答へた。

わたくしは其後願行寺の住職を訪はうともせずにゐて、遂に香以の裔の事を詳にせぬままに、此稿を終つてしまつた。頃日高橋邦太郎さんに聞けば、文士芥川龍之介さんは香以の親戚ださうである。若し芥川氏の手に藉つて此稿の謬を匡すことを得ば幸であらう。

十五

曩昔の日わたくしは鹿島屋清兵衛さんの逸事に本づいて、「百物語」を著した。文中わたくしの鹿島屋を斥す詞に、稍譏謗に類するものがあつた時、一の批評家がわたくしの僭越を責めた。その詳なることは今わたくしの記憶に存せぬが、彼批評家には必ずや文集があるべく、これを繙いたら、「百物語評」を検出することも亦容易であらう。

鹿島屋は大盡である。寒生のわたくしが其境界を窺ひ知ることを得ぬのは、乞兒が帝王の襟度を忖度することを得ぬと同じである。是に於てや僭越の誚が生ずる。

人生の評價は千殊萬別である。父が北千住に居つた時、家に一婢があつた。肥内にして愛想好く、擧止も亦都雅であつた。然るに此婢の言ふ所は、一々わたくし共兄弟姉妹の耳を驚かした。

婢は幼くして吉原の大籬に事へ、忠實を以て稱せられてゐた。その千住の親里に歸つたのは、年二十を踰えた後である。

婢は「おいらん」を以て人間の最尊貴なるものとしてゐる。公侯伯子男の華族さんも、大臣次官の官員さんも婢がためには皆野暮なお客である。貸座敷の青樓大廈と其中にある婢藏役とは、おいらんを奉承し裝飾する所以の具で、貸座敷の主人はいかに色を壯にし威を振ふとも此等の雜輩に長たるものに過ぎない。

婢の思量感懷は悉くおいらんを中心として發動してゐる。婢の目を以て視れば、吉原は文、吉原以外は野、吉原は華、吉原以外は夷である。それは吉原がおいらんのいますレジダンスだからである。

「よしや、何かお話をしておくれ」と弟が云ふ。よしは婢の名であつた。

「さあ、入らつしやい。お話をいたしませう。」

よしは臺所の板の間におとなしくすわつて、弟を聞く堆い膝の上に招き寄せる。聲は清く朗である。「昔おいらんがございました。其おいらんは目つかちでございました。そこへお客がまゐりました。其お客はあばたでございました。朝お客が歸る時、おいらんが送つて出て、柚子來なますえと申しました。そら、あばたの顔は柚子見たいでございませう。するとお

客が、日つかち四つかち時分には來ようよと申しましたとさ。」よしのお伽話にはおいらんとお客とのみが人物として出るのである。

人生の評價は千殊萬別である。佛も王とすべく、魔も王とすべきである。大盡王香以、清兵衞を立つるときは、微塵數のパルヴニュウは皆守錢奴となつて懺悔し、おいらん王を立つるときは、貞婦烈女も賢妻良母も皆わけしらずのおぼことなつて首を俛るるであらう。

名僧智識の宗教家王たるべきが如く、小說家王たるべきものもあらう。碩學大儒の哲學者王たるべきが如く、批評家王たるべきものもあらう。出版業者王たるべきものもあらう。新聞經營者王たるべきものもあらう。人生の評價は千殊萬別である。

わたくしは伊澤蘭軒、澁江抽齋を傳した後、偶來つて此細木香以を傳した。幹才わたくしの如きものが敢て文を作れば、その選ぶ所の對象の何たるを問はず、又努て論評に渉ることを避くるに拘らず、僭越は免れざる所である。

右の細木香以傳は匆卒に稿を起したので、多少の誤謬を免れなかつた。わたくしは此にこれを訂正して置きたい。

香以傳の末にわたくしは芥川龍之介さんが、香以の族人だと云ふことを附記した。幸に芥川氏はわたくしに書を寄せ、又わたくしを來訪してくれた。是は本初對面の客ではない。打絶えてゐただけの事である。

芥川氏のいはく。香以には姉があつた。其壻が山王町の書肆伊三郎である。そして香以は晩年を此夫婦の家に送つた。

伊三郎の女を儔と云つた。儔は芥川氏に適いた。龍之介さんは儔の生んだ子である。龍之介さんの著した小說集「羅生門」中に「孤獨地獄」の一篇がある。其材料は龍之介さんが母に聞いたものださうである。此事は龍之介さんがわたくしを訪ふに先だつて小島政二郎さんがわたくしに報じてくれた。

わたくしは又香以傳に願行寺の香以の墓に詣る老女のあることを書いた。そして其老女が新原元三郎といふ人の妻だと云つた。芥川氏に聞けば、老女は名をえいと云ふ。香以の嫡子が慶三郎で、慶三郎の女が此えいである。えいの夫の名は誤つてゐなかつた。

わたくしはえいが墓參の事を言ふ序に附記したい。それは願行寺の樒賣の翁媼の事である。えいの事をわたくしの問うた此翁媼は今や亡き人である。先日わたくしは第一高等學校の北裏を歩いて、ふと樒屋の店の鎖されてゐるのに氣が付いたので、近隣の古本屋をおとづれて、翁媼の消息を聞いた。翁は四月頃に先つ死し、まだ百箇日の過ぎぬ間に、媼も踵いで死したさうである。わたくしは多少心を動さざることを得なかつた。これを記してゐる處へ、丁度宮崎虎之助さんの葉書が來た。「一合掌禮拜。森君よ。ずつと向うに見えて居るのは何でせう。あれは死ですね。最も賢き人は死を確と認めて居ますね。十二月七日。祈禱。」

次にわたくしは芥川氏に聞いた二三の雜事をしるして置く。香以の氏細木は、正しくは「さいき」と訓むのださうである。併し「ほそき」と呼ぶ人も多いので、細木氏自らも「ほそき」と稱したことがあるさうである。

芥川氏は香以の辭世の句をわたくしに告げた。わたくしは魯文の記する所に從つて「絕筆、おのれにもあきての上か破芭蕉」の句を擧げて置いた。併し眞の辭世の句は「梅が香やちよつと出直す垣隣」ださうである。梅が香の句は灑脫の趣があつて、此方が好い。

芥川氏の所藏に香以の父龍池が鎌倉、江の島、神奈川を歷遊した紀行一卷がある。上木し

得るまでに淨寫した美麗な卷で、一勇齋國芳の門人國友の插畫數十枚が入つてゐる。

此游は安政二年乙卯四月六日に家を發し、五日間の旅をして歸つたものである。卷首に「きのとの卯といへるとし、同じ月始の六日」と云つてある。又卷末に添へられた六山寅の七古の狂詩に、「四海安政乙卯年」「袷衣四月每日樂」「往來五日道中穩」等の句がある。乙卯は冬大地震のあつた年である。

卷中に名を列してゐる一行は洒落翁、國朝、仙鶴、宗理、仙盧（晴閑齋）、繆榮、小三次（卜羽）、國友、吝常、仙窩、料虎、按堂（按摩幸助）、以上十二人である。洒落翁は龍池であらう。此中に伊三郎がゐたさうであるが、その號を詳にしない。香以は「親爺の供をしては幅が利かぬから御免だ」と云つて往かなかつたさうである。

一行が歸るとき迎へに出た人々は、香以、嘯伍（石川市淳）、余紅、以白、集雨、玄々眞人以上五人である。

「巢へもどる親まつ鳩のもろ音哉。香以。」

跋文は香以が自ら草してゐる。其他數人の歌俳及古今獨狂詩が添へてある。

按ずるに乙卯は龍池の歿する前年で、香以は三十四歲になつてゐた。わたくしの芥川氏に聞いた事は略此に盡きてゐる。

わたくしに香以の事を語つた人は、獨り芥川氏のみではない。一知人はかう云ふ事を言つた。「明治の初年に今戸橋の傍に湊屋といふ藝者屋があつた。主人は河野と云つて脊の低い胖大漢であつた。その妻は吉原の引手茶屋湊屋の女みなといふもので、常にみいちやんと呼ばれてゐた。藝者屋の港屋と號するも、吉原の湊屋の號より取つたものであつた。明治四年二月の頃、此家の抱へは貫六、萬吉、留八の三人であつた。此河野は香以の息だと聞いた。」此話は正確を保し難い。且未だ芥川氏にも尋ねて見ない。併し河野が果して香以の息であつたならば、即慶三郎のなれの果ではなからうか。

香以の交遊諸人に關しても、わたくしは二三の報を得た。尾道の古怪庵加藤氏は云ふ。「香以傳に香以の友晋永機を出し、その歿年を明治三十七年としたのは誤であらう。今の機一君の父も永機、祖父も永機であつた。香以の友は祖父の方であらう。そして明治三十七年に歿したと云ふは父の方であらう。」わたくしは其角堂の世系を詳にせぬから、或は此の如き誤をなしたかも知れない。そこで淺草の文淵堂主人に問ひ合せた。文淵堂の答書はかうである。

「香以の友であつた永機は又九代目市川團十郎、五代目尾上菊五郎とも交が深かつた。團十郎の筆蹟は永機そつくりであつた。此永機は明治初年の頃に向島の三圍社内の其角堂に住み、後芝圓山邊に家を移して歿した。歿した日は明治三十七年一月十日で、行年八十二歲であつた。寺は其角と同じく二本榎上行寺である。」文淵堂の言に從へば、わたくしの記事には誤がなかつたらしい。猶考ふべきである。

香以の其他の友に關して、近隣の梅本高節さんは語つた。「香以の友阿心庵是佛が谷中三河屋の主人なることは傳に見えてゐた。是佛の俗稱は齋藤權右衛門であつた」と云ふのである。

わたくしはこれを聞いて始て是佛の狩谷矩之の生父なることを知つた。齋藤權右衛門には三子があつた。長を權之助といふ。是が四世清元延壽太夫である。諸書に此人の俗稱を源之助と書してあるが、或は後に改めたものか。仲は狩谷三平懷之、掖齋望之の嗣子の養子三右衛門矩之である。季が父の稱を襲いで權右衛門と云ひ、質店の主人となつたと云ふ。

梅本氏は又香以の今一人の友小倉是阿彌の事を語つた。「是阿彌は高木氏で、小倉は其屋號であつた。その團子坂上の質商であつたことは傳

に云ふが如くである。是阿彌の妻をぎんと云つて、其子を佐平と云つた。又佐平に息眞太郎、女壻があつた。然るに佐平も其子女も先づ死して、未亡人ぎんが殘つた。是が崖上の家の女主人であつた。」わたくしは此に由つて、父が今の家を是阿彌の未亡人の手から買ひ取つたと云ふことを知つた。

香以の他の友人二人の事は文淵堂主人が語つた。石橋眞國と柴田是眞との事である。―石橋眞國は語學に關する著述未刊のもの數百卷を遺した。今松井簡治さんの藏儲に歸してゐる。所謂やはらかものには「隱里の記」といふのがある。これは岡場所の沿革を考證したものである。眞國は唐様の手を見事に書いた。職業は奉行所の腰掛茶屋の主人であつた。柴田是眞は氣概のある人であつた。香以とは極めて親しく、香以の摺物には此人の畫のあるものが多い。是眞の逸事にかう云ふ事がある。或時是眞は息と多勢の門人とを連れて吉原に往き、俄を見せた。席上には酒肴を取り寄せ、門人等に馳走した。然るに門人中坐容を崩すものがあつたのを見て、大喝して叱した。遊所に足を容るゝことを嫌はず、物に拘らぬ人で、其中に謹嚴な處があつた。」

京はわが先づ車よりおり立ちて古本あさり日をくらす街

識れりける文屋のあるじ氣狂ひて電車のみ見てあれば甲斐無し

夕靄は宇治をつつみぬ兒あまた竝居る如き茶の木を消して

木津過ぎて網棚の物おろしつつ窗より覗く奈良のともし火

奈良山の常盤木はよし秋の風木の間木の間を縫ひて吹くなり

奈良人は秋の寂しさ見せじとや社も寺も丹塗にはせし

蔦かづら絡む築泥の崩口の土もかわきていさぎよき奈良

（「奈良五十首」より）

庭

露おもき花のしづえに片袖をはらはれて入る庭のしをり戸

葉がくれのかくれ蓑さへぬるるまでさみだれつづく青桐のには

いたはりし花庭なれどうなゐ子に野分のあとはまかせはててん

あさまだきおきわかれゆく風流士が指貫そぼつ庭のしらつゆ

をしねほす賤が小庭に枝たわみ柚の實柿の實色づきにけり

畑に出でて人なきしづが前庭におち穗ひろひて庭鳥あそぶ

松の雪なだるる音にまどあけてはじめて庭を見いでつるかな

うららと小春日和ののどけさに雀むれあそぶ庭の山茶花

木つつきのうつぼをつつく響して夕日かげろふ山ずみのには

われもまたいつしか慣れて庭の松に風ふかぬ日はさびしかりけり

とりどりに一ふしあれとわが庭にうゑて樂む竹のひとむら

（「常盤會詠草」より）

古い手帳から

Platon

Platon は何故に共産主義者とせられてゐるか。此人は人の心を植物性、動物性、精神性の三つに分つた。植物性は營養、動物性は感情、精神性は智慧である。此人は又これと併行して社會を勞動者、防禦者、思惟者の三つに分つた。勞動者は農、工、商である。防禦者(φυλακες)は兵である、軍人である。思惟者は哲學者で、同時に政治家である。さて上の思惟者と中の防禦者とのために金錢と婦女とを私畜することを禁ぜようとした。上中の二階級のために共産主義を要求したのである。

昔は支那でも宰相が死んで葬をする錢のないのを譽とした。又軍人が錢を愛するのは惡いとした。女色に溺れてはならぬのは上にあるものの務であつた。又印度でも僧尼は獨身者で、乞食は淨行であつた。基督教の無配偶者(coelebs)乞食者(mendicans)もこれに似てゐた。Platon は社會上中の二階級のためにこれを制度化して、妻孥財寶の繋縛を脫せしめ、全力を擧げて國家のために盡させようとしたのである。

國家のために盡すとはどうするのか。國民をして公正(δικαιοσυνη)を得しむるの謂で、これは稟賦各相殊なるものをして適材の適處に居るに至らしむるに外ならぬのである。國家の幸福はこれより生じて來る。即富國強兵策である。

そして下の階級たる農工商は總て問題外に置かれてゐる。これが狹義の人民(δημος)で、Platon はこれを敵視すると明言して憚らない。啻にそれのみではない。其下には又奴隷が必要の一團として存在せしめてある。

此下の階級の中に今相對峙してゐる資本家と勞動者とが打して一丸をなして入れてあるのが可笑しい。營々役々として錙銖の利を爭つて、成功して資本家となつてゐるものも、これを羨望しつつ勞動者となつてゐるものも、Platon の目から見れば等しく賤業者(ο βαναυσος)である。此に個人主義と民政主義との否定がある。

Platon の理想國は上中二階級のためには共産主義、下一階級のためには非個人主義、非民政主義を以て組織せられてゐる。概括して言へば Platon は貴族主義者である、非平等主義者である。

Aristoteles

Platon は人生の幸福を、絕て自己の利害を顧みずに國家のために盡瘁する中に求めた。これに反して Aristoteles の政論は人生の幸福を、我が有となすものがあつて始て成立すべきものとなした。彼は純利他である。此は自利があつた上の利他である。ここに Platon の國家集産主義に對する Aristoteles の個人主義がある。

この自利があつた上の利他は何處から出て來るか。Aristoteles はこれを人間天賦の仁(φιλια)に求めた。仁は社會的感情である。そして此感情は人間の平等を待つて始て生ずるものではない。相異なる人と人との間にも亦能く生ずる。そして自利の心はこれに由つて調節せられる。此調節を制度の目的となして、ここに有機物たる國家が成り立つ。

Platon の國家は上二階級をして全く自利の心を棄てさせようとしたものである。此の如き器械的國家は成り立たない。よしやそれが成り立つたとしても望ましくない。何故といふに、若し自利の心がないときは人の事業に勵みがない。緊張がない。緊張がなくては發展がない。文化が滅びる。

國家は私產を認め、結婚を認めて、此勵み、此緊張を助成しなくてはならない。ここに共產主義が否定せられる。

私產を認め、結婚を認めると、貧富幸不幸が生ずる。國家の制度は此懸隔が大きくならぬやうに調節して行くべきである。(Politik VII.)

ここに Aristoteles の社會政策がある。

Platon の理想國は上二階級が人人皆君子でなくては成り立たない。Aristoteles の國家は凡俗の團體である。しかし凡俗をして小人より遠ざかり、君子に近づかしめようとしてゐる此向上の動機が即仁である。仁は個人の存續(自利)を抑へて、人類の存續(利他)を揚げようとする自然の手段である。國家は凡俗の國家であるから、凡俗をして政に參せしめなくてはならない。此時に當つて、君子に近い凡俗は政のために有利で、まだ小人より遠ざからない凡俗は政のために不利である。是は已むことを得ない。國家は少數の君子(貴族)に特權を與へず、自恣を敢てせしめないで、同時に又多數の小人をして橫暴ならしめざることを努めなくてはならない。珍物(君子)をもありふれた物(小人)をも併せ用ゐて料理の獻立は出來るのである。(Politik III.)

Aristoteles は此政治上公平をして經濟上公平と併行せしめようとした。國家は多數をして適度の富を有せしめなくてはならない。(Politik VII.) 國家は個人の需要を超過する蓄財を抑制し、黃金を以て人生の最貴重物とするが如き射利を禁遏すべきである。(Politik I.)

Stoa 派

Stoa 派も亦人間が自己を存續せむと欲する心、自利の心を人生觀の發足點とする。自利は人の第一策勵(πρώτη ὁρμή)である。(Seneca.) 人に此心を賦して其種屬を存續せしむるのは自然の詭謀である。(Aulus Gellius.) それゆゑに自然は又人にこれを調節すべき共同生活の策勵を與へた。種屬の利害は主にして、個々の利害は從である。(Cicero.) 人間は自利から發足して利他に到著せざることを得ない。

此人生觀は此派の汎神敎と關聯してゐる。萬有を支配する唯一の理性は、個々の人にも行きわたつてゐる筈である。哲人は自利のために隱遁しないで、やはり衆人と伍する。小人が利他に入ることが出來なくて、自利を以て終始するのは惡の極である。(Cicero.)

Aristoteles の仁は此派に至つて非常に發展した。これに溫みが加はつて愛になり (Panaetius)、基督敎の基礎を据ゑた。又これに廣さが加はつて世界を覆ふに至つた。

前には希臘人の目中に只希臘人があつた。印度人が印度人をのみ人(arja)としたと同じである。支那人が版圖外の人を夷狄としたと同じである。然るに歷山大帝の遠征の後に、東方の異民族が希臘に流れ込んで來た。そしてそれが學問藝術の上に異能を發揮した。Stoa 派の鼻祖 Zeno は來歷不明の人であるが、とにかく東方から來た。希臘人は始て希臘人でない人も亦人だと曉つた。そして人を品評するには民族を以て高下すべからず、德性を以て高下すべし(Eratosthenes) と云つた。仁は世界の愛となつて、ここに國際主義が萌芽した。

しかし精神的貴族(Seneca)を唯一の貴族なり

とし、人間の多數を只形のみ獸に異なりとする(Kleanthes)が如き此派は民政主義に向つては進まなかつた。啻に然るのみではない。その理想とする哲人の國は、Platon のそれと同じく、財產と婦女とを私有せしめない國である。貨幣をだに造らない國である。此國には敵は無い。民族の限界が撤廢せられて、四海同胞であるからである。(Diogenes Laertius.) ここに Platon の高等共產主義が再現した。そしてその中に新に人權 (jus generis humani) の思想が頭を擡げた。

世界の愛の國際主義と哲人の國の精神的貴族主義との間には、永遠に塡むることの出來ない溝壑がある。

Epikuros

Epikuros の自利は自己の快適を以て人生の唯一目的とするに在る。しかし共同生活に待つことあるが故に利他を棄てはしない。只其利他は人類を愛する故の行でもなく、人類の存續を欲する故の行でもなく、畢竟自己の快適を得むがための打算である。國法は個々の人民をして快適を得しめむがための契約で、亦復打算である。それゆゑに Epikuros の社會は功利の社會に外ならない。

此より後希臘には哲學上に社會を視ることが疎んぜられて、Plotinos は政を論ずるは學者の務でないとさへ云つた。

希臘及羅馬時代

社會方面から觀れば、希臘時代は威力を以て勞動者を抑壓してゐた時代だといふことは、奴隸の存在を以て證せられる。只思想上に哲學的共產主義が有つたのである。

民政方面から觀れば、これに反して希臘には、思想上に Aristoteles の凡俗政治が說かれ、これと共に事實上に民政國が有つた。

最初の民政は農夫と牧人との立てたものである。憲法上には今の瑞西の民政に似てゐる。これは奴隸を除外して云ふものなることは勿論である。雅典市の民政には三期を劃することが出來る。第一期には男女公民の間に正當に生れた人に參政權があつた。しかし實際は生計に餘裕のあるものが此權を行使した。第二期には奴隸に非るものが皆有權者となつた。生計に餘裕のあるものが此權を行使したことは上に同じである。第一期を Solon (594 a. Chr.) から Kleisthenes(508) まで、第二期を Kleisthenes から Aristeides (482) までと算する。此間に波斯戰がある。農業が衰へる。商工業が盛になる。勞動者(奴隸を除く)が公民になる。そこで民政が第三期に入つて Perikles は民會に出るものに始て手當を給した。(403) そしてこれまで民會の決議は立法であつたのに、今はすぐに行政になつた。其迹は專制に類する。Aristoteles はこれを無憲法だと評してゐる。(Politik IV.) 此時始て職業的政治家(δημαγωγος)が出て、嘗て佞臣が暴君に媚びたやうに、人民に媚びた。(Politik V.)

羅馬時代に入つた後も、まだ社會上には奴隸があつて、威力の抑壓がこれに加へられてゐた。しかし奴隸がもはやこれに安んじてゐない。Sicilia の奴隸一揆(142 a. Chr.)は希臘、Makedonia から小亞細亞までも波及した。羅馬は全力を鎭壓に費して二萬人を磔刑に處した。(132) 尋いで Aristonikos が Pergamon に起つて、あらゆる階級の撤廢を唱へた。羅馬は此一揆を滅すために手段を選ぶに遑あらず、非

を毒するに至つた。其手段は毒瓦斯よりも酷である。尋いで Sicilia の一揆が再擧を謀つて、内訌は五年に亙つた。(101) 尋いで伊太利本土に力士一揆が起つた。Padua の武藝指南所で遊戲に供する力士を奴隷の中から養成してゐたのが一揆の源になつて、智略ある Spartakus を首領に戴いたのである。羅馬がこれを平定したとき、羅馬から Padua に通ずる本街道だけに磔柱六百を數へたさうである。(71)

羅馬時代には事實としての民政は無かつた。所謂羅馬の共和政は只一面より命ぜられた名で (Polybius) 實は貴族政であり、君主政であつた。(Niese)

Essaioi

希臘人の Essaioi 又 Essenoi と稱する徒黨が猶太にあつた。此名の由來する所は不明である。Hebraioi 語から出たとすると、chasidim 信者を語源としなくてはなるまい。Chaldaioi 語から出たとすると、asa 療する、asayâ 醫師を語源とすることとなるであらう。

此黨の籍に入るものは私産を擧げて黨の金庫に納める。戰爭を忌んで、兵器を造ることを肯ぜない。都會は罪惡の淵藪なるが故に住まない。商業は貪婪の本なるが故に從事しない。人は人に使役せらるべきものでないとするが故に首領を戴かない。奴隷制度を以て人道に背くものとする。勞動を以て人生の義務とする。標識に前垂と柄杓とを選んだ所以である。今の語を以て言へば、此黨は一種の生産組合である。又類例を以て云へば、天香西田氏詰の唱道する所が、種種の點に於てこれに近似してゐる。

然れば Essaioi は共産主義者である。しかし希臘哲學の共産が善 (καλοκαγαθία) を成さむとする道德上の手段に過ぎなかつたと同じく、此黨の共産は神に仕へむがための宗教上の手段に過ぎない。只希臘人は口に共産を説いたのみであるのに、此黨は身にこれを行つた。彼も此も共産を以て人生の目的とする今の共産主義とは別である。

Essaioi の思想は源を何所に發したかを知らない。或るひとは希臘最古の Pythagoras の説が希臘に再興せられて、それが此思想を生んだといふ。「朋友は一切の物を共有する」(κοινὰ τὰ τῶν φίλων) と Pythagoras は云つたのである。或るひとは Stoa 派の四海同胞國の共産から出たといふ。又或るひとは佛教から來たといふ。若し佛教から來たとすると、西田氏の思想と同源だといふことに歸著するだらう。

Essaioi は Jerusalem より死海の沿岸に及び、Syria に及び、Palaestina の全土に瀰漫し、五千餘人を算した。基督前百五十年より起つて、基督誕生後に至つても其跡を絕たなかつた。基督が啻に希臘哲學の影響を受けたのみでなく、亦此の黨の思想 (Essenismus) に影響せられたことは疑を容れない。

猶太希臘の古田制

古代民族の間に貧富の懸隔を生じたのは、主に權家が田地を兼併するがためであつた。

猶太の地には初め武力を以てこれを占有した小土豪が割據してゐた。其間に民業は次第に遊牧より稼穡に移つて、葡萄橄欖が栽培せられた。織紝、鍛冶、木匠、陶工等は只家庭の需要に應ずるに過ぎなかつた。既にして商業が Kenaan より傳へられて、權家がこれに手を下し、富を致した。そこで金銀は國に滿ちて、(舊約全書 Jesajah II 7) 富者は貧者を蹂躙した。(同上 Amos IV 1.)

農民は負債した。先づ收穫を人手にわたし、

次に田地を質入し、又手放した。大地主が出來た。(同上 Jesajah V 8.) 賄賂が法廷を腐敗せしめた。(同上 Amos VI 12; 王第二書 IV 1; Amos II 6; Jesajah I 23, V 7, X 1)

貧者の叫は豫言者 Jesajah の口を藉りて發せられた。聖王を待つ聲は少壯なる Josia 王を動かして、Deuteronomion の制が敷かれた。第七日の休暇は今の勞働者の要求に似た制限である。第三年の收穫は擧げて貧人に與へられる。第七年には田地が故主に還され、奴隷が解放せられる。法廷は生計に必須なる物品を差押ふることを得ない。(621 a. Chr.) 法はまことに美である。しかしこれを實施せむことは難かつた。そこで後には第七年の田地還主、奴隷解放が第五十年に改められた。所謂 Jobel 年制(Hebraios語 jobel 金鼓)である。

希臘は早く開けた國で、古來田地は私有であつた。そして親が子に分つ慣習のために個人所有地の面積は次第に小さくなる傾向を有してゐた。又人口增多の結果(前八、七世紀)、地中海沿岸の殖民を見るに至つた。(前六世紀)

海上貿易の開けたのは、穀物を輸入せむがためである。富豪が頭を擡げて、田地を兼併した。農民が負債して、奴隷にせられた。金相場の升降は活潑で、金利は一八%であつた。田地を失つて小作人になつた小農に ἑκτημόροι の名があつたのは六分農の義である。收穫の六分の五は地主が取つた。

此時初め君主政の行はれた Attike (Athen) は貴族政に一變してゐて、實權は大地主の手にあつた。人民の要求する所は田地の割換(班田收授)である。Drakon の法は頗る富人をして讓步せしめた。(623 a. Chr.) Solon は中裁者 (διαλλακτής) と稱せられたが、中裁(居中調停、勞資協商)とは階級鬪爭の中裁を謂つたものである。奴隷を解放する。貨幣を小にする。輸出を禁ずる。(油は此限に在らず。)是が社會政策であつた。(594 a. Chr.) Athen は是より民政の初中後三期に入つた。初期は此より Kleisthenes に至り、(—508) 中期は Aristeides に至り、(—412) 後期は Perikles に至る。(—403)

中裁者 Solon は一切の時、一切の所の中裁者の否運を代表してゐる。上流はその兼併してゐる田地の債券石標を拔き去られたのを憤つた。下流は田地の割換を求めて得ないのを怨んだ。中流は新制度が下流をして我利圏を侵さしめるのを惡んだ。そして新制度が血を流す革命を防いだことを首肯するものは絕て無かつた。Solon は悄然として亡命した。

Solon 去後の Athen は機に投じて私を營む策士の手に墮ちた。當時上流を平野人 (πεδιακοί) と云つた。主として大地主より成る。中流を沿海人 (πάραλοι) と云つた。商工より成る。下流を山居人 (διάκριοι) と云つた。農より成る。此下流を使嗾して Peisistratos は起つた。陽に貧人の身方富人の敵と稱して Solon の法の輪廓を保存しつつ、專制の政を行つたのである。(560 a. Chr.) Kleisthenes は此人の死後に選擧權を擴張して民政主義の步を進めた。(初中期の限界。) 後 Perikles (後期末) に至つて、民政主義は盛を極めた。Platon の理想國は民政の下に疲れた智識階級の夢である。

Perikles の後六十五年 Athen は Chaironeia の戰に敗れ、(338) 後又十六年 Antipater の下に選擧資格を定むるに資產額を以てし、議員の手當を廢し、民政は此に滅びた。

支那の班田は猶太の七年還主制に先だつこと五百年以上(基督前十二世紀以上)である。

(周禮、孟子)しかし當時田地の割換が行はれたと云ふのは、(何休公羊傳註、三年一換主易居の類)後人の說である。田地の割換は希臘に於て要求せられたが、(前七世紀)行はれなかつた。これを行つたのは此より後千二百餘年の日本である。(大化二年の第六年班田收授)

基督

基督は資產家の身方ではなかつた。例之ばこんな語がある。「爾欲完全、往售所有、以濟貧、則必有財於天、且來從我。我誠告爾、富人入天國、難矣哉、我又語爾、駝穿針孔、較富人入神之國、尤易也。」(新約、馬太、XIX 21,23,24)「恃財者入神之國、難矣哉。駝穿針孔、較富入者神之國、尤易也。」(馬可、X 23,24,25)又こんな語がある。貧者福矣、以神之國乃爾所有也。爾今饑者福矣、以爾將得飽也。爾今哭者福矣、以爾將得笑也。」(路加、VI 20,21.)

貧は道を助長し、富は道を妨礙する。基督は富の厭離すべきを言つた。しかし富の廢滅すべきを言はなかつた。そして貧者を慰藉するに彼岸に於ける代償を以てした。

基督は富人の貧人を虐待する世に生れた。そして猶太人の旣に神の民たる思想を狹しとし、希臘人羅馬人の旣に其鄉國主義を小なりとするを見た。是が基督の其宗教を世界的平等觀の上に建立した所以である。

基督が社會思想史上に重要なる地位を占めてゐることは明かである。しかしその富に對する反抗は手段であつて目的ではない。又基督が共產主義を說いたといふ證據は一も存在しない。

使徒及師父

共產主義の文は使徒行傳に二箇所あつて人の皆知る所である。其一はからである。「信者皆會同、公用諸物、凡鬻產業、依各人之所乏、而分與之。(II 44,45)信者とは Petrus 會下の以色列人である。其二はからである。「信者之衆、一心一志、無有私己財者、乃公用諸物。使徒以大能、證主耶之蘇復生、皆獲大恩焉。其中無窮乏者、蓋有田宅者、售而挈其金、置使徒足前、依各人所需而分之、有利末族人。生於居比路、名約西。使徒稱之爲巴拿巴、譯卽勸慰子也。有田售之、挈其金、置使徒足前。」IV 32—37)利末族は Levites, 居比路は Kypros, 約西は Jones, 巴拿巴は Barnabus である。前世紀に北米 Oneida 河畔に占居した John Humphrey Noyes の共產宗團は此文を實現せむと欲したものである。

使徒より降つて師父 patres ecclesiae に至れば言論の激烈なるものが頗多い。Hieronymus は云つた。「過剩財產は社會の物を盜んだものである。若し現在の持主が盜まなかつたら、其祖先が盜んだのである。」Clemens は云つた。「若し世間が正しかつたら私有財產は無からう。一切の人に屬するであらう。私有財產は不平等の本である。」Basilius は云つた。「富人は賊徒である。」Chrysostomus は云つた。「富人は盜である。富人の物を取つて貧人に與へ、或程度の資產の均一を得る方法がありさうなものである。最善の法が共產なることは論を待たない。」Nyssa の Gregor は云つた。「我等は血統と天賦との緣によつて兄弟たるものであるから、若し資產を均一にすることを得たら、それは今より善く又今より正しいであらう。」Ambrosius は云つた。「自然の命ずる所は共

産である。私有財産は横奪である。」記載は此の如くであるが、使徒行傳の文には旁證が無い。若し共産團があつたとしても、それは範圍の狹い、繼續の短いものではなかつたか。師父等の言論は唯主張のみなることが語氣の間に見れてゐる。

Renan一派が基督と使徒とを共産主義の宣傳者兼實行者であつたとするのは、歴史上の根據に乏しい。

Karpokrates

基督教の師父に一人の奇癖なるものがあつた。それは Alexandria 生れの人で、第二世紀の前半に Kephallenia の寺院に住んだ Karpokrates である。

素と宗教を説くに理を以てせむとする gno-tien の流派に屬してゐたが、推理上より、「基督は人である、未來世に於ては基督より大なる人があつて出て來るかも知れない」と云ふに至つた。又「靈魂が肉體と結合するのは快樂を得むがためである」とも云つた。

Karpokrates は此の如き思索の傾向から進んで、遂に財産と婦女との共有を主張した。概ね基督教の師父は財産の共有を以て望ましい事としてゐたが、婦女の共有を以て不徳なりとし、これを勸説した Platon を排斥するを例としてゐた。然るに今婚姻を廢すること、私有財産を廢することが師父の口から唱へ出されたのである。

Karpokrates は口にこれを説くに止まらず、これを實世間に適用しようとして、一の祕密社を創立した。後に其子 Epiphanes が社長になつた。入社するには財産をも妻をも共有にしなくてはならなかつた。男女の信徒が夜間燈を滅して會合したと云ふ記錄(Clemens Alexandrinus III, 2)があるが、眞僞不明である。

Karpokrates は基督教界に於ける殆唯一の旗幟鮮明なる共産主義者で、其思想は共産的無政府主義を以て目すべきである。しかし此人は此の如き思想を有すると同時に、基督教の圈外に逸出して、破戒無慙の人として教界の齒せざる所となつた。

此より後歐洲の基督教國は久しく「神の國」と云ふ想像の下に項を屈してゐた。羅馬の帝王主義が滅びて、猶太の神政(Theokratie)が基督教中に復活し來つたのである。「神の國」が理想境であると共に、現實世界は初より惡魔の所生であるから、其間には社會方面に對する哲學を容るべき餘地が無い。

Augustinus

中世の神の國と云ふ思想は四五世紀の間に出た Aurelius Augustinus の書 De civitate Dei (libri XXII)をして代表せしめることが出來る。

人間の住してゐる世俗の國 civitas terrena は人欲の私に本づいて立てられてゐる。即ち罪惡の造る所である。(後に法皇 Gregor VII の如きは一歩を進めて惡魔の造る所と云つた。)其中にあつて聲望のある人は「光ある罪」(世間の徳)の人である。此の如き國は必然滅亡しなくてはならない。

社會問題は資本家も勞動者も皆人欲を主張するより起る。世俗の國の尋常の顯象として視るべきである。要するに皆無用の爭である。

世俗の國を超越して神の國 civitas Dei が存在する。此國は神の愛に本づいてゐる。然らば神の國は全く世俗の國と交渉がないかといふに、さうではない。人類の善良なる心は神の

國に向ひ近づかむことを希ふ。Augustinus はこれを徒勞でないと考へた。人類は累世の發展（excursus）を以て神の國に接近する。是は人類の進化を承認したもので、近世に至つて歴史哲學の萌芽として著目せられた。

Karl der Grosse

神の國の思想は實用方面に於て羅馬寺院の權威の由つて立つ所となつた。法皇の「基督共和國」（republica christiana）は神の國を目前に現ずるものと視られるのである。そして現在の國家は只其存在を認容せられる。有るが故に有らしめる。始より無きには若かない。羅馬の目より見れば、國家は惡人を制馭するために設けてある牢獄の如くである。

これに反抗して起つたのが Karl 大帝の世界の王國である。國王はさながらに司祭である。（聖彼得寺戴冠式）國民の宗教行爲は法令の中に編入せられた。是は宗教の力を王權の下に屈せむと謀つたものである。

宗教的共産主義者の小さい集團は四世紀に北阿弗利加に孤立してゐたが、（Donatismus）加特力教の成立と倶に衰亡した。

未來に「千年の神の國」が實現せられるといふ思想（Chiliasmus）は、若干の小集團があつて久しくこれを護持してゐた。そして宗教的共産主義者が去つてこれに投じた。しかし寺院は所謂「千年の神の國」は聖書の基督復活を以て實現したものだとした。（約翰傳 XX.）未來を過去に移したのである。此等の小集團も漸く衰亡した。

上からの聲 (DEHMEL)

不思議な印が新に神の手から受けたいなら、
働け。
不思議無しに昔の神に似たいなら、
活きよ。
神らしい物が少しも欲しく無いなら、
やけになれ。

（『沙羅の木』の「譯詩」より）

靜物 (DEHMEL)（『沙羅の木』の「譯詩」より）

春になる。霞み初める。
村の沼で
或る晩、ころ、
初蛙。
ころころ和すら蛙。
さて追追と數が殖え、
ころころころころころころと鳴く。
上には
日がけぶる。
ゆらめく青い蝶一つ。
めでたや。

野薔薇 (GOETHE)（『沙羅の木』より）

ひとり咲ける野薔薇、あはれ飽かぬ色を
誰か捨てん。野薔薇、紅き野薔薇。
如何で一枝折りて行かん、されど折らば
手をや刺さん、野薔薇、野薔薇、紅き野薔薇。
ひとり咲ける野薔薇、あはれ手をば刺せど
終に折りぬ。野薔薇、野薔薇、紅き野薔薇。

長宗我部信親（敍事詩）

上　戸次川

頃は天正十四年
しはす十二日の朝まだき、
筑紫のはても冬闌けて、
靈山おろし吹きすさむ
戸次の川の岸ちかく、
仙石權兵衞ノ尉が家の子
三好田宮が率ゐたる
一千餘騎のつはものども
先を爭ひ押し寄せたり。
岸のあなたに控へたる
島津中務ノ大輔家久は
二萬騎あまりに將として、
去ぬる九月のころほひより
大友勢を駈け惱まし、
しきりに勝に乘じつつ、
上方よりの後詰たる
太閤麾下の長宗我部
仙石とやらん疾く來よかし、
目にもの見せてくれんずと、
用意おろそかならざりけり。
かかればけふの戰は
門出の砌太閤が
わが大軍の至らんまで
ゆめゆめ卒爾のいくさすなと
戒め給ひし旨に乖けり。
しかのみならず向ひなる
岸邊は木立連なりて、
伏兵あらんも計られず。
川を渡らば渡り來る
なかばを撃ててふ兵法の
をしへを知らぬ敵ならず。
さすが思慮ある長宗我部は
軍議の席に仙石を
しきりに諫めたりしかど、
無謀の仙石聲勵まし、
心おくれし土佐武士ども
攻めじとならば我ひとり
手勢を以て攻めんずと
うけひかざれば、長宗我部も
是非なくいくさを出だしけり。
さる程に三好田宮等が
馬を揃へて眞つ先に
川のなかばに騎り入るよと
思ふ間あらせず向ひなる
木立のうちよりつるべかけ
打ち出だす玉の雨霰に
十五六騎のつはものは
打たれて水にぞ沈みける。
あなや敵には伏兵あり、
引けやと叫ぶ聲と共に、
馬に鞭うち引き返す。
その時島津の先手なる
伊集院右衞門が五千餘騎
竹中の小瀬を打ち渡り、
驚き騒ぐ仙石が
本陣目がけて切り入つたり。
續いて大將島津家久
八千餘騎の旗もともて
勢たけく攻めかかれば、
仙石勢と並び進みし
大友左兵衞が手のものども

一たまりもたまりえで、
龍王が城をこころざし
われ先にとぞ逃れける。
仙石勢は程遠き
豊前の國なる小倉まで
夢路をたどる心地して
ひた走りにこそ馳せ去りけれ。
そも長宗我部信親は
身のたけ六尺一寸ありて、
いとおとなびては見えけれども、
年まだ二十二歳にて
こたびの後詰にえらばれしを、
父元親は故郷にて
聞くより心やすからず、
西の空のみ打ち眺め
はるばる物をおもはんより、
我子の陣に赴きて、
うしろ見せばやと決定し、
去ぬる霜月の末つかた
舟路をいそぎ渡り來ぬ。
かかればけふのいくさには
親子鑣を並べつつ、
仙石勢の敗るるをば、
かねて期したる事なれば、

手勢三千を引きしめて
脇津留村の片ほとりに
わざとさがりて陣を取り、
酢漿の紋染めさせたる
旗一ながれ押し立てて、
しづまりかへつて控へたり。
その時島津が二陣なる
新納武藏の守忠元は
これも精兵三千騎を
一手にまとめて馳せ向ひ、
心憎き敵の擧動よた、
逃げ行く身方に目もくれで
待ち受けたるこそしをらしけれ、
薩摩隼人の鋒を
受けても見よやとまつしぐらに
討つてかかれば、わたりあひ
新納が手のもの二百人
またたく隙に討ち取りぬ。
流石にたけき薩摩勢も
しばしためらふその隙に、
元親親子は山崎の
岬の方へ落ちて行く。
新納ふたたび追ひすがれば、
こなたも同じく引きかへし

しのぎを削る折しもあれ、
島津が率ゐる三の陣
本多主税が二千の兵
佐古の口よりまはり來て
親子が陣の横合より
鋒鋭く切り込んだり。
身方は左右に敵を受け
二手にわかれて戰ふうち、
父元親は料らずも
我子の影を見うしなひ
且戰ひ且退きぬ。
信親は又勇なる
石谷兵部を始として、
吉良細川等ともろ共に
二十餘丁を引き退き、
中津留川原に疎なる
士卒をまとめて折敷かせ、
追ひ來る敵を待たんとす。
その時桑名太郎左衞門
主の馬前に跪き、
戰もはやこれ迄なり、
父上待たせ給ふらん、
おん供せんとぞ申しける。
信親答へて云ひけるやう。

身方は多く討たれぬれど、
此場を切り拔け逃れんこと
さほど難くはよもあらじ。
されどもけふの戰は、
仙石殿の指圖ながら、
太閤殿下の御旨には
初よりして背きたり。
縱ひ軍議のむしろにて
諫めとどめしことありとも、
かく見苦しき敗北を
いかにして申解くべきぞ。
生き存へて父上に
仕へんとおもふ者共は
こころを置かで落ち延びよ。
われは此場を去らずして
討死せんとぞ申しける。
石谷はじめ古つはもの等、
げにいしくも宣給ひしよ、
承ればもののふの
本意はさこそ候はめ、
物數ならねど某等も
死出のおん供仕らんと
詞涼しくいらへつつ、
敵追ひ來べき道筋を
睨まへてこそ立つたりけれ。

中　中津留川原

島津が二陣を率ゐたる
新納武藏の守忠元は
場數を積みしつはものにて、
打痍槍痍七十餘箇處、
世におぼえあるものなるに、
はからずけふの戰に、
郎黨あまた失ひし
むくいをせでやあるべきと
落ち行く敵を逐ひ慕ひ、
中津留川原に近づきぬ。
待ち設けたる土佐勢は
追ひ來る敵をきつと見て、
さては新納はわが方に
みづから向ふとおぼえたり、
敵に取りては不足無し、
最期のいくさは今ぞとて
主從たがひにはげましあひ、
百騎に足らぬ殘兵も
決を死してはわろびれず、
目に餘る敵を引き受けて
ここをせんどと戰うたり。
中にも大將信親は、
唐綾縅の甲を着、
蛇皮の冑を戴きて
馬を縱横に馳せめぐらし、
四尺三寸の長刀を
閃く稻妻石擊つ火と
見まがふ迄に打ち揮ひ、
敵八人を切り伏せつ。
乘りたる愛馬内記黑も
數箇處のいたでに倒れければ、
徒立となり、長刀棄て、
太刀拔き放つて戰ひぬ。
そも此太刀は信親が
元服のをり引出物に
總見院殿の賜はりし
二尺七寸の左文字なるを、
けふしもおもふよしありて
日ごろ佩きたる兼光の
太刀に代へてぞ帶びたりける。
刄はわざ物手は冴えたり、
向ふに前なきありさまを、
新納忠元きつと見て、
あれこそ敵の大將ならめ、

いで打取らんと馳せ寄れば、
郎黨どもは押し隔て、
主に代りて死なんとす。
信親は又敵六人
またたくひまに討ち取りぬ。
近寄るもののなきを見て
腹掻き切らんとするところに
島津がたの軍奉行
鈴木大膳馳せ寄りて、
おん大將に見參と、
隙間もなくぞ切りかくる。
信親につこと打ち笑みて、
殊勝の敵よ土佐武士の
最期を見よとわたりあひ、
思ふ儘に太刀打して、
二十二歳を一期とし、
地にもたまらぬ暖國の
雪より先きに消えにけり。
郎黨石谷本山等は
主に先だちはや討たれぬ。
細川源左はけなげにも
大將新納と槍を合せ、
敵のゆん手を突き破り、
槍さへ地上におとさせしが、

主の危急に馳せつけし
伊勢兵部にぞ討たれける。
その外名ある家の子等
三十餘人を始とし、
物數ならぬ雜兵まで
ひとりも殘らず討死して、
中津留川原の石原を
韓紅に染めなししは
あはれなりける事どもなり。

下　日振の島

宮内の少輔元親は、
我子の上の氣遣はしく、
新納が一手のものどもに
追はれながらも幾度か
引き返しては槍を合せ、
わざと時刻を移しつつ
一歩一歩と退きて、
後詰の爲めにさいつ頃
新に繩張させたりし
上原の城郭に
一まづ手勢を繰り入れて、
胸安からぬ夜をあかしつつ。

翌十三日の曉に
物見のものを出だし遣り、
軍のあとをたづぬれば、
中津留川原の血戰に
子息信親主從が
一騎ものこらず失せしこと
もはやかくれはなかりけり。
あはれなるかな、元親は
五十路に近き老の身の
君命あるにもあらずして
九州の地に押し渡り、
戈を枕に陣營の
霜夜の夢を結びあへず
明し暮すも信親が
上を氣遣ふゆゑなりしに、
きのふひと日の戰に
屍を曝しし身方の兵
七百人のその中に
わが愛子をさへ數へんとは
思ひがけ無き事かなと
不覺の涙に暮れにけり。
されども流石名を惜む
大將なれば、この儘に
ふるさと土佐へ歸らんこと

おもぶせなりとやおもひけん、
討ち殘されし家の子を
數艘の舟に分ち載せ、
伊豫の岸より遠からぬ
日振の島にぞ退きける。
元親島にいたり着き、
谷忠兵衞ノ尉忠澄を
假屋に召して云ひけるやう。
汝が主は年老いて
心つたなくなりたるぞ。
おくれ先だつ世の習は
今更の事ならねども、
中津留川原に討死せし
子息信親が上こそは
未練ながらも忘られね。
せめては亡骸のみなりとも
迎へ取らんとおもふなり。
汝はいまより使者として、
さいはひこたびも在陣せる
惠日寺もろとも、豐後なる
島津が陣に赴きて
事の次第を聞えよと、
面をそむけていひつけたり。
忠澄返さん詞も無く

舟路をいそぎ惠日寺と
島津がもとに渡りゆき、
しかじかとこそ傳へけれ。
家久聞きて涙を流し、
げに尤なる仰よな、
御使なくともこなたより
送りとどけまゐらすべきを、
事のまぎれに怠りしは
面目なくこそ候へと、
人して使者を信親が
遺骸のところに案内させつ。
忠澄惠日寺兩人は、
年頃親みまゐらせし
これが若殿なりけるよと、
一目見るよりはふり落つる
涙の雨をせきかねて、
霞のおくにさく花の
色みえわかぬおもひせり。
しばらくありて惠日寺は
涙を拂ひて申すやう。
いかに谷殿聞き給へ。
近頃館のおんさまを
つらつら伺ひ奉るに、
愛子におくれ給ひしより、

恩愛の絆斷ち難く
煩惱の闇に迷ひ給ひて
寢食をだに安んぜられず。
今若しわれ等若殿の
生けるが如きおん骸の
おん供申して歸りなば、
館の迷を增すのみにて、
御國の爲め臣下の爲め
臍を噬む悔なからずやは。
たとひ一時のおん怒に
御勘氣うくることありとも、
ここにて茶毗しまゐらせて、
御遺骨をば首に掛け
歸らんとこそおもひ候へ。
御思案いかにと申しければ、
忠澄げにもとうけがひて
おん亡骸をとり斂め、
茶毗所に舁かせ行きにけり。
さて焚燒にさきだちて、
おん柩をば一間に据ゑ、
香華を供養しまゐらせつ。
威儀おごそかに惠日寺は
拂子を揮ひて立ち向ひ、
咄 聲 叱二窮 鬼一ヲ

赤脚走二刀山一
好通二一線路一
脱却三界闘 と
辟高らかに引導し、
紅顏綠鬢痕も無く、
烟とこそはなしたりけれ。
壺にをさめし遺骨に
天甫常舜居士といふ
一紙の戒名を取り添へて、
日振の島に持ち歸る
僧俗二人の使者と共に、
島津とぶらひのつかひを遣れば、
これを聞きたる新納さへ
いと懇に消息して、
最後のいくさに信親が
身に着けたりしかたみなる
甲冑をおくりけり。
異國のむかし Troja にて
愛子 Hector が 屍 を
敵の陣所に乞ひ得たる
Primos 王が恨にも
まさる恨は日振なる
假屋の軒に元親が
最愛の子の亡骸を
あだに待ちける恨なり。

長宗我部信親自註

長宗我部信親　此小敍事詩は、弘田長君の囑に依り、薩摩琵琶歌として作れるなり。 長宗我部氏の祖先は、仲哀天皇の頃歸化せし支那人にて、秦ノ始皇の裔と稱しき。衞府に列りて秦氏を賜ふ。用明天皇の時、土佐ノ國長岡の郡宗我部の鄕に居て、長宗我部を氏とす。その支族の香美ノ郡に住めるを、香宗我部と云ふ。後秦ノ元秀土佐ノ一條家に仕へ、一條兼定の豐後ノ國に遷るに及びて、元秀の孫元親土佐ノ七郡を領す。彌三郎信親は元親の子なり。　此篇は全く事實に據りて結撰す。一の虛構だに無し。而して其事實は主に谷子の所藏寫本土佐國編年紀事略を取れり。此原書は南海治亂記、土佐軍記、元親記、鶴ヶ城合戰記、十河談、其他古文書數種を參酌して、戸次川の戰を敍したり。

戸次川　豐後ノ國の川にて、直入の郡三宅ノ鄕より發し、東流して大野郡犬飼に至り、大野川又犬飼川と名づけらる。それより北折して大分郡戸次に入る。これを戸次川と云ふ。此古戰場の地理を考ふるに宜しき書は、先づ指を唐橋世濟の豐後國志に屈すべし。此書は一たび活字本として頒たれしことあれど、多く坊間に存ぜず。予は豐前ノ國小倉に在りし時、當時の出板人に就いて、僅かに一本を求め得たり。されど此活字本は豐後ノ國全圖一葉を載するのみにて、諸郡の截圖を缺きたり。截圖は帝國圖書館に藏せり。唯だ紙幅太だ大にして、披閱に便ならざるを憾とす。　截圖の此古戰場を圍める部分には、軍記に見えたる地名の過半を逸せり。大日本地名辭書などにも亦多くこれを載せず。其地を實踐せし人あらば、問ひたださんとおもひしかど、脫稿に至るまで其人を得ずして已みぬ。

靈山おろし吹き荒む　靈山は古戰場の西に在り。豐後國志に、「推古帝季年、天竺僧那伽者、登此山、愕然歎曰、我鷲峰、何年飛來于此、遂留錫營寺」云云とあり。　戸次川の戰は、天正十四年十二月十二日なるに、是日の天候詳ならず。唯だ豐薩軍記に、「插もの馬じるしを西風に吹き靡かせ」とあり。　靈山といふ地名もめでたければ、靈山おろしと書きぬ。

島津中務ノ大輔家久は二萬騎あまりに將として　島津の兵數は、編年紀事略一萬餘に作る。されど南海通記には二萬五千人とせり。豐薩軍記に據れば、當時の陣立兵數左の如し。

一番　伊集院美作守　五千人　二番　新納大膳正　三千餘人　三番　本莊主税助　二千餘人　本陣　島津中務大輔　八千餘人

此篇の陣立は紀事略に從ひ、其兵數は豐薩軍記を參取したり。右の諸書には本陣を修理ノ太夫義久としたれど、薩摩の國人加藤雄吉氏の考證によりて、家久と改む。以下倣之。

流石思慮ある長宗我部は軍議の席に仙石をしきりに諫めたりしかど　此長宗我部は元親なり。されど信親異議あるべくもあらねば、ことさらに元親ぞとことわることを要せざるべしとおもひて、かくは物しつ。

仙石勢は程遠き豐前の國なる小倉まで夢路をたどる心地してひた走りにこそ馳せ去りけれ。紀事略に從ふ。豐薩軍記には豐前に奔りしを大友勢とし、仙石は長宗我部と共に伊豫に奔ることとせり。恐らくは誤ならん。

親子鑣を竝べつつ(中略)手勢三千を引きしめて　紀事略の註には、長宗我部と仙石の兵數合せて六千餘人とする說と、八千餘人とする說とを併せ載せたり。南海通記に據れば、長宗我部仙石の兩軍合せて六千餘人にて、長宗我部が三千の兵は、左の如く部署せられたりき。

桑名太郎左衞門　千人　彌三郎信親　千人
宮內少輔元親旗下　千人

酢漿の紋染めさせたる旗一ながれ押し立てて　長宗我部譜に、「家紋鳩酢漿」とあり。寫本聚樂武鑑に、「家紋鳩酢漿、黑餠」として圖を出だせり。鳩酢漿といふ紋は紋帳などに無し。姑く酢漿とす。眞書太閤記に、秦ノ能俊枝手大門雨鄕三千貫文を知行し、京都の大番を勤めし時、一日天盃を賜はりしに、盃の中に酢漿の葉浮びたるをもて、定紋となしぬと云へり。長原止水君のカタバミを初板の表紙の裝飾に用ゐ給ひしも、これに本づけるなり。

本多主税が二千の兵佐古の口よりまはり來て　佐古の口は豐薩軍記に「迫ノ口」に作り、セコノクチと傍訓せり。

中にも大將信親は唐綾縅の甲を着蛇皮の冑を戴きて　戸次川の戰には、信親いかなる裝したりしか、諸書に見えず。新納が後に元親に贈りぬと云ふ甲冑もいかなる製作なりしを知らず。本文は眞書太閤記太閤四國攻の條を取る。其文に云はく。「長宗我部彌三郎元親旗本勢を三段に分ち鳥雲の陣を張て待掛たり信親其日の出立は唐綾縅の鎧に蛇皮の甲を着し栗毛の馬の疾鬼と名付て九寸に餘る逸物に金覆輪の鞍を置き朽葉の厚總掛け金の折敷の前立物前傾きに指し四尺の大太刀を眞向に差翳し云云。此時の太刀は備前長義の新身なりきと下文に見えたり。

そも此太刀は信親が元服の折引出物に總見院殿の賜はりし　信親の信ノ字は織田信長に受けしなり。

日振ノ島　伊豫ノ國北宇和郡に屬す。三浦半嶋の西、戸島の南に位せり。承平以後海賊の巢窟たりき。元親はここに退きて、太閤の九州攻を待ちしなり。

あはれなるかな元親は五十路に近き老の身の　元親は天文八年己亥の誕生なれば、天正十四年には四十八歲なり。後慶長四年己亥五月十九日(一に三月五日に作る)六十一歲にてみまかりぬ。室は齋藤內藏ノ助利三の女なりき。

異國のむかし Troja にて　Homeros が Ilias の中に出でたり。

沙羅の木

沙羅の木

褐色の根府川石に
白き花はたと落ちたり、
ありとしも青葉がくれに
見えざりし沙羅の木の花。

日下部

汽車待つ間木枕借りて
横になる竹縁の足
漬す水ちよろちよろ流る。
懈き目に見つつ眠りし
水いつか枕をぬけて
耳の根をちよろちよろ流る。

朝の町

朝あけ大路しめやかに
立ち竝ぶ店まだ醒めず。
けはひひろびろ。
搏風檐壁をいろどるや
塗繪廣告繪看板
露にぞ映ゆる。
刹那ちりぼふひと群の
素足わらうづ破帽子、
新聞くばり。

雫

寒き雨電車を篭めつ。
ゆきかひに線きしろへば
迸る青き火二つ。
人いきれ曇るガラスを
まじろかで暫まもりぬ。
窗面の雫小紋の
二つ三つ寄りては流る。
わが思そこはかと無く
浮び來るやがてぞ消ゆる。
鐸は鳴る神田須田町。

都鳥

初夏の日暮。みどりの
ただ中に夕ばえ煉瓦
邀かざるまらうどと立つ。
高鳴るや嘲る汽笛。
機關の不斷の鞭に
むちうたれはためき過ぐる

塗舟に經をゆづりて、
川の緯漕ぐわたし船。
房州と人呼ぶ聞きし
牙彫めくをぢ櫂とりて
中流のゆふあげ潮を
皺みたる腕にしのぐ。

はや近しさんや棧橋。
水棹には芥まつはり、
浮木觸れ、水底草の
乞兒ぎぬ千斷れ靡けり。

にび色の川淀水の
渦卷に、雌雄か、白鳥
竝ぶ。こやさすらひ人の
ふりし日の風流の記念。

舟人よ。あの鳥を見よ。
「はあ。ありやあかごめでがさあ。」
氣ぢかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」

三枚一錢

足早き角の怪、電車
さやぎつつ來てはとどまる
かねやすが門邊の逵。

降る乘る蜉蝣の群に
聳り立つ麥稈帽子。
何か爲る。汝、壯漢。

籠のうちゆとり出でて呼ぶ。
「昨日の新聞三枚一錢。」
さやぎつつ電車過ぎ行く。
「昨日の新聞三枚一錢。」

旗ふり

戀人は辻の旗ふり。
物買ひに通ふゆきずり、
顏見れば君が手にふる
赤旗の色にぞ出づる
わが丹の頰。さはれいそしき
目の前を、線鳴りひびき、
ゆきかへる百の車を
留むる赤、放ち遣る青、
軍行る時をはかりて
鼓うち金うつに似て、
あからめは暫しもえせぬ
君なれば、かへりみぞせぬ。
あたらしや使はるる身の
口わるきわが內ぎみの
目をぬすみ、しつる妝
いたづらになれど、わが戀
赤旗のとまるとおもふな。
横町にはやくも立名。

火事

目に見えぬ箒うちふり
四辻のマカダム道を
夜の風橫ざまに掃く。
店窗に電燈照れど
見かへらで行く靴尖に

触れて舞ふ新聞反故。
鐘をちこち。馳する提燈。
馳する影。そよや忙しき
鈴鐸の聲耳もとに。

地轟く。人は蜘手に
馳せちがふ。おどろおどろし、
ぽんぷ遣る眞赤の車。

Modèle

なりはひにまだ慣れぬ身の
みじろかでよくぞ在りしと
手にわたす黄金に、四つの
少女の日異しう笑まひぬ。

まゐらする此花束は
名無しびとふたりがしつる
なりはひの始のやがて
果に得し黄金のむくい。

後影

眞晝時。うち見るきはみ
青黍を刈りし畑土。
畦道を驅り過ぐる民
閑卻す手の中の鞭。

目鏡持つ人呼ぶ、腮の
髯黄なり、敵と口疾に。
火閃く。伸長驅歩の
後影黍畑横に。

かるわざ

立見寒く幕を卸しし
薄あかり。むかしの都處の
畜か。子を竿にのぼらす。
しだり葉の蛙とすがり、
鳥と羽根のし、蝙蝠と
さがり垂る。見る人はやす。

立見寒く幕を卸しし
薄あかり。僻目か。あらず。
見よ。子落つ、劍の上に。
さるをなぞ。泣きいざちこそ
聞え來ね。奥津城無言。
鈍き目に衆人見やる。

立見寒く幕を卸しし
薄あかり。肩ぎぬの人
おごそかに汝もと呼びぬ。
第二の子のぼりぬ。落ちぬ。
然あるべき戲のごと
鈍き目にもろ人見やる。

立見寒く幕を卸しし
薄あかり。登りて落つる
子いくたり。鳴のはやにへ。
獺は魚をぞ祭る。
幕の闇とはに贄呼ぶ、
人鈍き目に見る前に。

空洞

うつろなる家こそ立てれ、

つねに行く丘のつかさに。
道のおと夜晝絶えず、
月をだに踰えぬあひだに、
天そそり立つ杉むらと
肩並むる家ぞ出できし。
湖の、見はるかしつる
上みれば、晴れたるに虹、
かけわたす長橋。これも
束の間のいささめづくり。
石まがひ白くかがやき、
その影は水にも映り、
中島の赭塗祠。
つねよりも小く見えぬ。
見よ、家は空洞なる家。
薄板を重ねだにせぬ
壁打たば、琴の槽のごと
鳴りなまし。見よ、長橋も
ぬり色の一重のさかえ。
人踏まば、日の照す霜。
かがやける色は消ぬべし。
しかはあれどここに寄り來る
千萬の寶の船を
列ねんと、家をぞ作る
その寶見に來ん人の
便にと妻問します
彥星のためならなくに、
鵲の橋をもわたす。
疑の心抑へて、
塵泥と崩えん日に逢ふ
うつろなる法を遺しし
いにしへの聖をぞおもふ。

人形

うなゐ子に人の贈りし
豆ほどの人がたいくつ、
たひらけき折敷の上に
立てなんとすれば倒るる。
立て難きこの人形に
さも似たる「論」いく條、
あるみ行く舟の卓に
索張りて皿置くがごと、
手づつにも立つとする間に、
咀はれし手まづ疲れて
いきの緒やがて絶ゆべし、
「系統」は Torso なして。

海のをみな

海の邊に立てり。
身赤裸なり。
足元に伏せる
黒ずめる岩に
かかれる綠の
藻なせるわが髪
風にぞ亂るる。
廣き、廣き濱、
紺青の水を
湛ふる海原。
弓なし曲れる
一筋の白き
小小緣は碎け散る
波の水沫。
ここたの女子
皆裸なるが
沙に伏すもあり、
波かづくもあり。
眞白き肉むら
あるは黄なる日を
射返しかがよひ、

あるは水の面に
隠れて、しばらく
青魚の背なす
匂をぞ見する。
女子の顔は
いづれもいづれも
笑まひを帶ぶれど、
目差ただならず
憎き嘲の
色に照り映えぬ。
あなや。そがひとり
馳せ來と見るまに、
右手わが左手に
緊しくからみぬ。
振り放たんとす。
離れず。かなたへ
ただ引きにぞ引く、
美しき口を
方に見ゆるまで
開きて笑へり。
目石決明の貝を
返したる如く
きらきらと照れり。
鱗光る
蛇のひしと
纏はれたるにや譬へん。
わが髪は空ざまに
立ち、肌粟立つ。
わが右手には利き
劍を持ちたり。
さはれ切りつべき
心は起らず。
兵率ふ
人の轡引に
取る劍のごと、
ただ鐔をひしと
握り持ちてあり。
われは女子を
見、目をめぐらして
持たる刃を見、
引かれじとのみぞ
すまふ。ふと見れば、
海なる陸なる
女子の限
知らぬ詞もて
囀りかはして、
われ等のめぐりに
輪を作り集ふ。
魚市の如き
腥き臭
我鼻を撲てり。
輪はせばまり來ぬ。
わが左手取れる
女の體と
輪をなす女の
體と相觸る。
左手引く力
加はり加はる。
波打際へぞ
やうやう引かるる。
わが右手には利き
劍を持ちたり。
輪をなす女も
身にはえぞ觸れぬ。
あな、我は斯くて
海のいづくへか
引かれて行くらん。

直言

金緣目がね、バイシクル。

留守を使へど、まのあたり
歸るを見つと、上がり來る。
「是非高作の掲載を
こたびは許し給はりて
添へん次號の光彩を。」
「生憎何も出來合ひて
あらず、鼬や道切りし、
インスピレエション無沙汰して。」
「そこを押してぞわれ願ふ。
たとひ詰まらぬ作にても
お名前あれば人は買ふ。」
金緣目がね、バイシクル
人は見掛によらぬもの、
此直言を敢てする。

燈

とはにをぐらき奥の間の
しきみに近く立つ汝が
手にともしびぞ微かなる。

このおくの間にともすれば
あやしき姿見ゆといふ、
こもともし火を手にとりて。

あやしきものの消え失せし
あとにのこりてうち見やる
閾のうへに灰零し。

あやしきもののともしびの
くしき油を一しづく
など承けざりし、なが皿に。

小犬

ゆきかひ繁きよつ辻に
なれて伏したる小犬あり。
前あし長くさしのべて、
ひる過ぐる日のまばゆきに、
たゆき瞼を垂れんとす。
垂れるは誰そや、さし引の
うるしかがやく人力車、
あなや、小犬の足一つ
ひき碎きつつ過ぎゆきぬ。
高く叫びて立ちあがり
狂ふ小犬は、鼎なす
三つのあしぶみ危くも、
大路をよきて今ゆ後
なれぬちまたに迷ふらん。
あはれ此世の兎狩、
烹られしむかしならねども、
けはしき道につまづきし
あしなえ犬こそ多からめ。
われは歌はん行路難、
むれ見る子等よ、な笑ひそ。

閑居

風のむた都大路のとよみをも聞けど長聞き
すみかなりけり

とひもせじとはれもせじのかたくなをいさ
めん友もあらずなりにき

こもりゐて見る空黄なる都邊の塵の中には
入らじとぞおもふ

（『常磐會詠草』より）

我百首

斑駒の骸をはたと抛ちぬ（lympha なる神
のまとゐに
もろ神のゑらぎ遊ぶに釣り込まれ白き歯見
せつ Nazareth の子も
天の華石の上に降る陣痛の斷えては續く獸
めく聲
小き釋迦摩掲陀の國に惡を作す人あるごと
に青き糞する
我は唯だこの菴沒羅菓に於いてのみ自在を
得ると丸呑にする
年禮の山なす文を見てゆけど麻姑のせらそ
こ終にあらざる
憶ひ起す天に昇る日籠の內にけたたましく
も孔雀の鳴きし
此星に來て栖みしよりさいはひに新聞記者
もおとづれぬかな
或る朝け翼を伸べて日にあまる穢を掩ふ
大き白鳥
雪のあと東京と云ふ大沼の上に雨ふる鼠
色の日

突き立ちて御濠の岸の霧ごめに枯柳切る絆
纏の人
大池の鴨のむら鳥朝日さす岸に上りて一列
にゐる
日の反射店の陶物、看板の金字、車のめぐ
る輻にあり
惑星は軌道を走る我生きてひとり欠し伸せ
んために
重き言やうやう出でぬ吊橋を渡らんとして
卸すがごとく
空中に放ちし征箭の黑星に中りしゆゑに神
を畏るる
脈のすぢ汝達喘ぐ老人に同じと藥師云へど
信ぜず
「友ひとり敢ておん身に紹介す。」「かかる樂
器に觸れん我手か」
綴ぶみに金の薄してあらぬ名を貼したる如
く或人見れば
寡欲なり火鉢の緣に立ておきて煖まりたる
紙卷をのむ

おのがじし靡ける花を切り揃へ束に作りぬ
兵卒のごと
一夜をば石の上にも寢ざらんやいで世の人
の讀む書を讀まん
默あるに若かずとおもへど批評家の求ゑん
を恐れたまさかに書く
あまりにも五風十雨の序ある國に生れし人
とおもひぬ
伽羅は來て伽羅の香、檀は檀の香を立つべ
きわれは一星の火ぞ
すきとほり眞赤に強くさて甘き Nissioroo
の酒二人が中は
今來ぬと呼べばくるりとこち向きぬ回轉椅
子に掛けたるままに
うまいより呼び醒まされし人のごと圓き目
をあき我を見つむる
何事ぞあたら「若さ」の黃金を無緣の民に投
げて過ぎ行く
君に問ふその脣の紅はわが眉間なる皺
を熨す火か
いにしへゆもてはやす徑寸と云ふ珠二つま
で君持たり日に
舟ばたに首を俯して掌の大さの海を見る
がごとき目

彼人はわが日のうちに身を投げて死に給ひけん來まさずなりぬ

君が胸の火元あやふし刻刻に拍子木打つて廻らせ給へ

我と云ふ大海の波汝と云ふ動かぬ岸を打てども打てども

接吻の指より口へ傳へて三とせになりぬ吝なりき

掻い撫でば火花散るべき黑髪の綱に我身は縛られてあり

散歩着の搭鈕の孔に插す料に摘ませ給はん花か我身は

顏の火はいよよ燃ゆなり花束の中に埋みて冷やすとすれど

護謨をもて消したるままの文くるるむくつけ人と返ししてけり

爪を嵌む「何の曲をか彈き給ふ」「あらず汝が目を引き掻かんとす」

み心はいまだ落ちゐず蜂去りてコスモスの莖ゆらめく如く

まゐらするおん古里の雛棚にこの Thüringen の人形一つ

籠のうちに汝幸ありや鶯よ戀の牢に我は幸あり

わが魂は人に逢はんと拔け出でて壁の間をくねりて入りぬ

善惡の岸をうしろに神通の帆掛けて走る戀の海原

好し我を心ゆくまで責め給へ打たるるための木魚の如く

厭かれんが早きか厭くが早きかと爭ふ隙や戀と云ふもの

頰の尖の黶子一つひろごりて面に滿ちぬ戀のさめ際

うまいするやがて逃げ出づ美しき女なれども齒ぎしりすれば

Messalina に似たる女に憐を乞はせなばさぞ快からん

利き爪に汝が膚こそ破れぬれ鎖取る我が力弛みて

氷なすわが目の光泣き泣きていねし女の項を穿つ

貌花のしをれんときに人を引くくさはひにとて學び給ふや

美しき限集ひし宴會の女獅子なりける君か斯くても

心の目しひたるを選れ汝まこと金剛不壞の戀を求めば

汝が笑顏いよいよ匂ひ我胸の悔の腫ものいよいようづく

此戀を猶續けんは大詰の後なる幕を書かんが如し

彼人を娶らんよりは寧我日和も雨も無き國にあらん

慰めの詞も人の骨を刺す日とは知らずや默あり給へ

富む人の病のゆゑに白がねの匙をぬすみて行くに似る戀

鬪はぬ女夫こそなけれ舌もてし拳をもてし靈をもてする

處女はげにきよらなるものまだ售れぬ荒物店の箒のごとく

觸れざりし人の皮もて飮まざりし酒を盛るべき嚢を縫はん

黑檀の脊の紅蓮の掌に銀盤擎げ酒を侑むる

「時」の外の御座にいます大君の謦咳に耳傾けてをり

註文すわが心臟を盛る料に焰に堪へん白金の壺

拙なしや課役する人寐酒飮むおなじくはわん朝から飮まん

怯れたる男子なりけり Al sintho したたか
飲みて挙銃を取る
ことわりをのみぞ説きける金乞へば貸さで
戀ふると云へば靡かで
世の中の金の限を皆遣りてやぶさか人の驚
く顏見ん
大多數まが事にのみ起立する會議の場に唯
列び居り
をりをりは四大假合の六尺を眞直に竪てて
譴責を受く
勳章は時時の恐怖に代へたると日日の消化
に代へたるとあり
とこしへに餓ゑてあるなり千人の乞兒に米
を施しつつも
輕忽のわざをぎ人よ己がために我が書かざ
りし役を勤むる
「愚」の壇に犧牲ささげ過分なる報を得つと
喜びてあり
火の消えし灰の窪みにすべり落ちて一寸法
師目を睜りをり
寫眞とる。一つ目小僧こはしちふ。鳩など
出だす。いよよ怖しちふ
まじの符を、あなや、そこには貼さざりき
櫺子を覗く女の化妝

書の上に寸ばかりなる女來てわが讀みて行
く字の上にゐる
夢なるを知りたるゆゑに其夢の醒めんを恐
れ胸さわぎする
かかる日をなどうなだれて行き給ふ櫻は土
に咲きてはあらず
仰ぎ見て思ふところあり蹇の春に向ひて
開ける窗を
何一つよくは見ざりき生を踏むわが足あま
り健なれば
世の中を駈けめぐり尋ね逢ひぬれど喘止ま
ねば物の言はれぬ
十字鍬買ひて歸りぬいづくにか埋もれてあ
らん寶を掘ると
狂ほしき考浮ぶ夜の町にふと燃え出づる
火事のごとくに
魔女われを老人にして髯長き侏儒のまとゐ
の眞中に落す
一曲の胸に響きて門を出で猛火のうちを大
股に行く
死なんことはいと易かれど我はただ冥府の
門守る犬を怖るる
防波堤を踏みて踵を旋さず早や足蹠は石に
觸れねど

省みて恥ぢずや汝詩を作る胸をふたげる穢
除くと
我詩皆怪しき贜物ならざるは無しと人云ふ
或は然らん　（明治四十二年五月一日）
我足の跡かとぞ思ふ世世を歷て踏み窪めた
る石のきざはし
圓塚の凝りたる波と見ゆる野に夢に生れて
夢に死ぬる民
舟は遠く遠く走れどマトロスは唯爐一つを
めぐりてありき
をさな子の片手して彈くピアノをも聞きて
いささか樂む我は
Wagner はめでたき作者ささやきの人に聞
えぬ曲を作りぬ
彈じつつ頭を掉れば立てる髮箒の如く天
井を掃く

年譜

文久二年（一歳）
正月十九日石見國鹿足郡津和野町横堀に生る。父は靜男、母は峰子、家代々藩主龜井家の典醫たり。

慶應二年（五歳）
藩儒米原綱善に就て四書五經の素讀を受く。

慶應四年（七歳）
藩黌養老館に入る。

明治二年（八歳）
版籍奉還によつて養老館廢せらる。その以後は父に就て蘭學を修め、又藩醫室良悦に蘭文典を學ぶ。

明治五年（十一歳）
父に伴はれて東京に赴き、十月本郷壹岐殿坂進文學舍に入りて獨逸語を學ぶ。神田小川町西周氏の邸に寓して通學す。

明治七年（十三歳）
下谷藤堂邸跡の東京醫學校豫科に入學。後本郷元富士町に移りて東京大學豫備門と改稱の時、その寄宿舍に入る。

明治九年（十五歳）
官費生徒となる。

明治十年（十六歳）
東京大學醫學部と改稱せらるゝと共に本科生となる。

明治十四年（二十歳）
七月四日卒業。九月十七日「讀賣新聞」に「河津金泉君に質す」を出す。知友の談によれば、新聞に初出の文なりと云ふ。十二月十六日任陸軍軍醫副、東京陸軍病院課僚被仰付。

明治十五年（二十一歳）
二月十七日敍從七位。五月十一日免本職陸軍軍醫本部課僚被仰付。主として普魯西の陸軍衞生制度の取調に從事す。

明治十七年（二十三歳）
三月プラーゲルの「陸軍衞生制度書」を基礎として『醫政全書稿本』十二卷を編し、この日之を官に納む。六月七日獨逸國留學被仰付。八月二十三日出發。十月十二日伯林着、ライプチッヒ大學に入る。

明治十八年（二十四歳）
五月二十七日任陸軍一等軍醫、七月二十五日敍正七位。十月ドレスデンの軍醫講習會に列す。

明治十九年（二十五歳）
五月ミュンヘン大學に入り、翌年「ビールの利尿作用に就て」、「石竹科種子の解毒に就て」及び『日本兵士の食餌に就て』の三業績を「衞生學寶函」に發表す。

明治二十年（二十六歳）
四月伯林大學に入り業績『伯林市水道に於ける病的細菌に就て』を「衞生學雜誌」に發表す。

明治二十一年（二十七歳）
七月『日本住家の人種學的衞生學的研究』を「人類學會論文集」に發表す。七月三日伯林を發し、英佛を經由し、九月八日東京に着す。同日補軍醫學舍教官。十二月十三日自費を以て『非日本食論將失其根據』を出版す。この月軍醫學舍を軍醫學校と改稱。二十八日補軍醫學校教官兼陸軍大學教官。

明治二十二年（二十八歳）
三月雜誌「衞生新誌」を創刊す。六月軍醫學校より『陸軍衞生教程』を出版す。七月五日

兵食試驗委員被仰付。二十四日東京美術學校專修科美術解剖學講師囑託。八月「國民の友」第五十八號に『於母影』を發表す。十月五日免本職竝兼職軍醫學校二等軍醫正教官心得被仰付。十月二十五日、雜誌「しがらみ草紙」を創刊す。この年獨逸文雜誌「東漸」に『決闘論』を掲ぐ。

明治二十三年（二十九歲）

一月「國民の友」第六十九號に創作『舞姬』を出す、伯林を話說の地とす、後の『うたかたの記』、『文つかひ』と共に留學中の記念なり。この月、雜誌「醫事新論」を創刊す。六月六日任陸軍二等軍醫正、補軍醫學校教官、三十日兼補陸軍衞生會議議員。八月「柵草紙」第十一號に『うたかたの記』を出す、ミュンヘンを話說の地とす。九月「衞生新誌」、「醫事新論」を合して「衞生療病誌」とす。この年『ふた夜』、『惡因緣』、『うきよの波』、『埋木』等を譯出す。

明治二十四年（三十歲）

一月『新著百種』第十二號『文つかひ』を出す。ドレスデンを話說の地とす。二月二十八日陸軍兵衣試驗委員被仰付。八月二十四日醫學博士を授けらる。十二月二十八日敍從六位。

明治二十五年（三十一歲）

七月『水沫集』を春陽堂より出版。十一月「柵草紙」に『卽興詩人』を譯載す。三十四年二月、九星霜を以て完結す。

明治二十六年（三十二歲）

三月軍醫學校より『軍醫學校業府之部第一』を出版し、小池正直と共著『壁濕檢定報告』を載す。七月七日免本職軍醫學校長心得被仰付。十一月十四日任陸軍一等軍醫正、補軍醫學校長。十二月十六日敍正六位。

明治二十七年（三十三歲）

日清戰役起り、八月二十四日中路兵站軍醫部長被仰付。十月一日第二軍兵站軍醫部長被仰付。十一月二十四日敍勳六等授瑞寶章。「柵草紙」、「衞生療病誌」廢刊す。

明治二十八年（三十四歲）

四月二十一日任陸軍軍醫監。六月滿洲より臺灣に轉征、八月第二軍兵站軍醫部長被免、臺灣總督府陸軍軍醫部長被仰付。九月二日東京に凱旋、軍醫學校長事務取扱被仰付。二十日敍功四級授金鵄勳章及單光旭日章。十月三十一日補軍醫學校長。十一月十五日敍從五位。

明治二十九年（三十五歲）

一月雜誌「めざまし草」を創刊す。四月四日父靜男歿す。十一月二十五日敍勳五等授瑞寶章。十二月論文及び雜錄に三木竹二の劇評を附したる『月草』を春陽堂より出版す。

明治三十年（三十六歲）

一月「公衆醫事」を創刊す。三月二十三日陸軍武官官等表改正せられ、陸軍軍醫監は陸軍一等軍醫正と改稱。五月翻譯及び隨筆に小金井喜美子の作品を添へて『かげぐさ』と題し春陽堂より出版。六月小池正直と共著『衞生新篇』を出す。後永く陸軍の參考書となり、屢版を重ねたり。

明治三十一年（三十七歲）

十月一日免本職補近衞師團軍醫部長兼軍醫學校長。十一月『西周傳』成り、男爵西紳六郎之を刊行す。十二月畫報社より久米、岩村、大村三氏と合著『洋畫手引草』を出版す。

明治三十二年（三十八歲）

六月八日任陸軍軍醫監、補第十二師團軍醫部長。二十九日春陽堂より『審美綱領』を出版す。七月十日敍正五位。九月十六日『我をして九州の富人たらしめば』を稿し、「福岡日

日新聞」第六千號記念號に投ず。富人の死財を散ずるを戒め、有益なる事業に投資せんことを勸告せしものなり。

明治三十三年（三十九歳）

一月一日「福岡日日新聞」に『鷗外漁史とは誰ぞ』を掲ぐ。二月弟篤次郎雜誌「歌舞伎」を創刊す。三月春陽堂より『審美新說』を出版す。此年北清事件起り、第十二師團にも出征命令下らんとする形勢ありしを以て九月二十日『戰時糧餉談』を講ず。

明治三十四年（四十歳）

一月一日「福岡日日新聞」に『倫理學說の岐路』及び『小倉安國寺の記』を載す。十二月二十三日小倉偕行社に於て『北淸事件の一面の觀察』を講演す。

明治三十五年（四十一歳）

一月一日「福岡日日新聞」に『卽非年譜』を、「門司新報」に『和氣淸麿と足立山』を載す。二月春陽堂より『審美極致論』を出版す。二十五日「めざまし草」第五十六號を以て廢刊す。三月十四日免本職補第一師團軍醫部長。二十四日小倉偕行社に於て『洋學の盛衰を論ず』を講ず。四月竹柏會大會に於て『マアテルリンクの脚本』を講ず。六月二十五日上田敏博士の「藝苑」と合同して雜誌「藝文」を創刊す。八月第二號刊行後出版書肆と衝突し、十月同人資を捐て「萬年草」を創刊す。九月『卽興詩人』を春陽堂より出版す。十二月「歌舞伎」の號外として脚本『玉篋兩浦嶋』を出す、後『我一幕物』に收む。

明治三十六年（四十二歳）

一月伊井蓉峰一座市村座に『兩浦嶋』を演ず。二月畫報社より久米桂一郎と同撰『藝用解剖學（骨論之部）』を出版す。六月六日東京高等師範學校國語漢文學會に於て『ゴビノオの人種哲學梗概』を講ず。（十月春陽堂より出版す。）九月十五日國光社より筑前琵琶歌『長宗我部信親』を出版す。弘田醫學博士の囑による。十一月五日軍事教育會よりクラウゼギッツ著『大戰學理』卷一卷二の譯本を出版す。原著頗る難解を以て聞ゆ、曩に小倉に於て之を講じ、獨逸原本の題號『ユウベル・デン・クリイヒ』に從ひて『戰論』と題し、第十二師團石印を以て印行す。今年陸軍士官學校卷三以下を佛譯本を以て譯出し、佛譯本に依て『大戰學理』と題し、合本して印刷に附せしなり。二十八日早稻田大學課外講義としてサムソン・ヒンメルスチルナの『黃禍論梗概』を講演す。（翌年五月春陽堂より出版す。）日露間の風雲切迫せるを以て、十二月二日軍醫學會に於て『一八一二年拿破崙第一世露國侵入時の軍隊病類』を講ず。

明治三十七年（四十三歳）

露國に對して宣戰布告せられ、二月第二軍軍醫部長被仰付。「萬年草」廢刊す。三月「歌舞伎」臨時號に脚本『日蓮上人辻說法』を發表す。（後『我一幕物』に收む。）四月八百藏、羽左衞門、梅幸等歌舞伎座に於て辻說法を演ず。九月十三日敍從四位。十一月二十九日敍勳三等授瑞寶章。

明治三十九年（四十五歳）

一月元旦昌圖出發。七日宇品着、十二日東京に凱旋す。四月一日敍功三級授金鵄勳章及勳二等旭日重光章。八日竹柏會大會に於て『ゲルハルト・ハウプトマン』を講ず。七月十二日祖母淸子歿す。八月十日軍醫學校長事務取扱被仰付。

明治四十年（四十六歳）

七月博文館より『衞生學大意』を出版す。八月十三日美術審查員被仰付。九月春陽堂より『歌日記』を出版す。十一月十三日任陸軍軍醫總監、補陸軍省醫務局長。次で

敍正四位。

明治四十一年（四十七歳）

一月十日弟篤次郎歿す。五月三十日臨時脚氣豫防調査會長被仰付。六月獨逸コッホ博士來朝す、十六日當局之を歌舞伎座に招待して觀劇會を催す、これに先つこと數日、囑によりてその筋書を獨譯す。二十六日文部大臣の官邸に開會の臨時假名遣調査委員會に於て、陸軍を代表して現在の假名遣に對する意見を述ぶ。二十九日榮陰會の名を以て編纂したる『能久親王事蹟』を春陽堂より出版す。九月二十六日教科用圖書調査委員會委員被仰付。

明治四十二年（四十八歳）

一月一日雜誌『昴』創刊され、第一號に脚本『プルムウラ』を發表し、以後再び文壇に活躍を開始せり。同月春陽堂より『阿育王事蹟』を出版す。六月飜譯脚本集『一幕物』を易風社より出版す。七月一日『スバル』第七號に『キタ・セクスアリス』を載せ、發賣を禁止せらる。二十四日文學博士の學位を受く。八月十日自ら立案せし『東京方眼圖』を春陽堂より出版す。十月『スバル』第十號に小說『金毘羅』を載す。『國民新聞』に『ジョン・カブリエル・ボルクマン』を連載し、後畫報社より出版す。次で自由劇場によりて公演せらる。

明治四十三年（四十九歳）

一月易風社より『續一幕物』を、春陽堂より飜譯集『黄金杯』を出版す。四月一日『中央公論』第二十四年第四號に脚本『生田川』を載す。（後に『我一幕物』に收む。）五月二十八、九の兩日自由劇場有樂座に於て『生田川』を演ず。七月新潮社より創作集『涓滴』を出版す。八月一日『三田文學』第一卷第四號に『あそび』を揭ぐ。十月大倉書店より飜譯集『現代小品』を出版す。この月文部省美術展覽會審査委員被仰付。是より每年例となる。十二月日本橋檜物町割烹店藏多家主人のために引き札の文を作る。

明治四十四年（五十歳）

一月一日『中央公論』第二十六年第一號に『蛇』を揭ぐ。この月春陽堂より飜譯劇集『人の一生』、『飛行機』を、二月創作集『烟塵』を出版す。三月『三田文學』第二卷第三號に『妄想』を揭ぐ。（後創作集『分身』に收む。）五月十六日文藝委員會官制公布せられ、十七日同委員被仰付。七月金尾文淵堂よりハウプトマンの戲曲を譯せし『寂しき人々』を出版す。八月『中央公論』第二十六年第八號に『心中』を揭ぐ。九月一日『スバル』第三年第九號より『雁』を揭げ始め、斷續して大正二年二月第五年第五號に至る。この月春陽堂より『かげぐさ』改訂版を出版す。十月『中央公論』第二十六年第十號に『百物語』を揭ぐ。『蛇』『心中』『百物語』は後に創作集『走馬燈』に收む。この月二十六、七兩日自由劇場『寂しき人々』を帝國劇場に演ず。十二月金華堂よりイプセンの戲曲を譯せし『幽靈』を出版す。

明治四十五年　大正元年（五十一歳）

四月春陽堂より大村西崖と共著『希臘羅馬諸神傳』を出版す。七月籾山書店よりシュニッツレルの飜譯『みれん』を出版す。この月土曜劇場『飛行機』を有樂座に演ず。八月籾山書店より創作集『我一幕物』を出版す。九月籾山書店より『一幕物』正續篇を合冊して出版す。

大正二年（五十二歳）

文藝委員會委員として譯せし『ファウスト』第一部を冨山房より出版す。二月現代社『近代脚本叢書』第一編として、シュニッツレルの戲曲『戀愛三昧』を、籾山書店より創作『青年』を出版す。三月二十二日冨山房より『ファウ

スト』第二部を、同月籾山書店より飜譯戯曲集『新一幕物』を出版す。この月二十七日より五日間、近代劇協會『ファウスト』を帝國劇場に演ず。五月實業之日本社より飜譯集『十人十話』を、六月籾山書店より創作史實小說集『意地』を、七月創作集『走馬燈』及び『分身』を、警醒社よりシェエクスピアの『マクベス』を、十一月イブセンの戯曲『ノラ』を、富山房より『ファウスト』の別册として『ファウスト考』と『ギョオテ傳』とを陸續出版す。

大正三年（五十三歲）

一月「中央公論」に『大鹽平八郎』を出す。元年十月の同誌に『興津彌五右衞門の遺書』を出せしより、二年一月の『阿部一族』四月の『佐橋甚五郎』等、德川時代の史實に立脚せる小說を書き始めつ。四月籾山書店より創作集『かのやうに』を、五月鳳鳴社より創作『天保物語』を、現代社よりホフマンスタールの戯曲『謎』を、九月春陽堂より縮刷『卽興詩人』を、十月鈴木三重吉編『現代名作集』第二編として創作『堺事件』を出版す。十一月十日敍從三位。

大正四年（五十四歲）

一月雜誌「心の花」に『歷史其儘と歷史離れ』を出し、前年來の執筆の傾向に就て記す所あり。「中央公論」に『山椒大夫』を出す。同月國民文庫刊行會「泰西名著文庫」の一として飜譯集『諸國物語』を、二月至誠堂より「大正名著文庫」第十四編として評論及び隨筆集『妄人妄語』を出版す。四月二十四日敍勳一等授瑞寶章。五月　陛下より詩作を徵され、五言律を謹書して獻上す。同月籾山書店より創作『雁』を、九月詩歌集『沙羅の木』を、十月通一舍より「千朶山房叢書」として、飜譯戯曲『稻妻』を出版す。十一月八日大禮參列のため京都に赴き、十八日歸京す。「東京日日」「大阪每日」兩新聞に『盛儀私記』を掲げ、後自費出版して知人に配布せり。十二月千章館より創作集『塵泥』を出版す。

大正五年（五十五歲）

一月一日より八日まで「東京日日」「大阪每日」に『椙原品』を十三日より五月十七日まで『澁江抽齋』を掲ぐ。三月二十八日母峰子歿す。四月十二日免本職依願豫備役被仰付。軍醫務局長在職中の功績としては、第一、軍隊に腸チブス豫防接種を斷行せし事、第二、脚氣豫防調査會を設置せし事、第三、陸軍軍醫團を設置し、軍醫の學術向上を奬勵せし事を重なるものとす。五月十八日より六月二十四日まで前記兩新聞に『壽阿彌の手紙』、六月二十五日より『伊澤蘭軒』を續出す。七月二十二日、四年十一月七日附を以て日獨戰役の功に依り旭日大綬章及び從軍記章を賜ふ。八月十三日『水沫集』縮刷本を出す。

大正六年（五十六歲）

一月一日より七日まで「東京日日」「大阪每日」に『都甲太兵衞』を掲ぐ。七月春陽堂より『涓滴』を『還魂錄』と改題し、「名家傑作集」第十二編として出版す。九月五日『伊澤蘭軒』完結し、六日より十八日まで『鈴木藤吉郎』を、十九日より十月十三日まで『細木香以』を、十月十四日より二十八日まで『小島寶素』を、三十日より『北條霞亭』を掲げ、十二月二十六日に至りて新聞と關係を絕つ、こはその前日二十五日任帝室博物館總長兼圖書頭の辭令を受けたるを以てなり。十一月富山房より『ファウスト』の縮刷本を出版す。

大正七年（五十七歲）

二月帝國文學に『北條霞亭』の續稿を載す。九月春陽堂より創作集『高瀨舟』を出版す。十一月正倉院曝涼のため奈良に赴く、これより每年なり。

大正八年（五十八歳）

五月玄文社「三田文選」の別册として飜譯集『蛙』を出版す。九月五日帝國美術院規程公布せられ、八日帝國美術院長被仰付。十二月春陽堂より新聞所載創作集『山房札記』を出版す。

大正九年（五十九歳）

一月「帝國文學」廢刊し、『北條霞亭』再び中絶す。十月雜誌「アラヽギ」に續稿『霞亭生涯の末一年』を載せ十年十一月を以て完結す。金鈴社より『天保物語』を出版す。

大正十年（六十歳）

一月雜誌「明星」創刊され、『古い手帳より』を掲げ始む。三月圖書寮に於て撰述せし『帝謚考』成り、百部を印刷配布す。次で『元號考』の著述に從ひしも完成に至らざりき。六月二十五日臨時國語調査會會長被仰付。七月善文社「脚本名著選集」第一編として、ストリンドベルヒの戯曲『ペリカン』を出版す。十月春陽堂より「森林太郎譯文集」卷一として『獨逸新戯曲篇』を出版す。十一月一日『霞亭生涯の末一年』完結す。この頃より時々下肢に浮腫あり、營養も幾分衰へ、腎臟病の徴を現はす。

大正十一年（六十一歳）

六月に至り病大に進み、二十日臥床、二十八日額田醫學博士の診察によりて萎縮腎と確定、七月七日　兩陛下より葡萄酒下賜、八日攝政宮殿下より御見舞品下賜、此日特旨を以て位一級被進敍從二位。九日午前七時薨去。

わたくしは家兄薨去直後より年譜の編輯に着手し、辭令書、著書、原稿、親戚知友の談話及び自己の見聞によりて組織して見たが、古い所は記憶してゐる人も無い。大學卒業前後「改進新聞」（「ヰタ・セクスアリス」には「自由新聞」とあるが、實は「改進」と聞いたと思ふ）に投書したのを見たいと思ふが、同新聞は帝國圖書館にも無く、まだ手に入らぬ。家兄は以前新聞切拔を貼込んだ帳を澤山持つてゐたが、日露戰爭前頃餘り蟲喰が甚しいため廢棄したのは、今考へると非常に惜しい。左樣なわけで年譜も未だ完成しないが、改造社からの請求により、稿本の中から拔萃し、所々に説明を加へて責を塞ぐ事とした。この表中雜誌に掲げた分は同社の『森鷗外集』に收めると聞いたもの丶外は、或一部に止め、『沙羅の木』はどれだけ抄出されるか分らぬので、たゞ刊行された年月のみを記し、著作の劇に演ぜられたのは初演だけを擧げて置いたが、それも本略譜に掲げた分だけに止めた。單行本は出版毎に大概、家兄から贈られたので、それに依つて第一版發行の年月の所に記入した。しかしわたくしは江戸時代史を專攻してゐるから、史傳方面の記載は注意もし、家兄も『大鹽平八郎』の如き史實小説が出ると、雜誌の誤植を朱で訂正して直ぐに送つて來る樣な次第で比較的正確と思ふが、他の創作小説や、殊に飜譯物の方面は全く門外漢であるから、洩れたものが多少ありはしないかと恐れてゐる。

昭和二年十一月二十一日　　森　潤　三　郎

昭和二年十二月二十五日印刷
昭和三年一月一日發行

現代日本文學全集 第三篇

著者 森林太郎



發行者 山本美
東京市麹町區内幸町一丁目三番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市麹町區内幸町一丁目三番地
幸ビルディング壹階
改造社
振替 東京八四〇二番
電話 銀座一七三三番
銀座四五五八番
銀座五〇四六番

株式會社 秀英舍印刷

改造社